
英雄達の悼詩

本倉 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄達の悼詩

【Nコード】

N4926M

【作者名】

本倉 悠

【あらすじ】

テレジア大陸を治めていた皇帝の死を契機に、300年振りに勃発した大戦役。その渦に巻き込まれた小国エアリアの軍に所属している双子の兄妹、そして帝国に身を置きながらも己の在り方に苦悩する青年将校は、世界の成り立ちを垣間見、歴史の裏と表を併走する。（裏、表の二パート視点です）

世界設定（前書き）

年表＋地図です。見なくても支障はありませんが、地名が多々出てくるので触りだけでも確認していただけるとわかりやすいかも知れません。

2011年2月15日、プロローグ～其の十（裏）まで修正。

世界設定

> i 9 9 0 6 — 1 4 4 3 <

イアニス暦零年。イアニス教、アルマダⅡイアニスを教主として発足する。

イアニス暦22年。マダスカルタ山脈に邪鬼カタロフ降臨。

イアニス暦26年。オールドⅡグレイブ聖戦争勃発。邪鬼カタロフ封印さる。

イアニス暦35年。テレジア帝国滅亡。

イアニス暦37年。カタロフが呼び出した魔獣達から身を守るべく、国軍とは別に民達から依頼を受けて任務を遂行する？傭兵？と呼ばれる者達が現れ、幾多の組織を作る。後のギルドの原形とされる。

イアニス暦63年。学者のポルネスⅡマドウークによって、全て

の生物に内在する未知なる力の存在が確認され、魔力と名付けられる。

イアニス暦102年。カナン王国建国。後に、カタルス^{のち}スタ魔道王国に改名。

イアニス暦115年。テレジア帝国の流れを汲む、テルネシア帝国建国。クルート、フリーユージェル辺りの領土を確保する。

イアニス暦137年。二代目皇帝カレルヴォ^オテレジアにより、イアニス教がテルネシア帝国の国教に認定される。

イアニス暦143年。カナン王国の学者、ジグムンド^ゴゴルディックが、一般の者でも使える基礎魔法法式を確立する。以降、魔法は平民たちに広まっていく。

イアニス暦159年。テルネシア帝国、カナン王国と同盟を結ぶ。同年、ボードンをベステイ平原で撃破、魔法が初めて実戦投入される。翌年、弱体化したボードンよりアテライデが独立。

イアニス暦198年。バルサ連邦瓦解。以後国同士での内乱が続く。

イアニス暦225年。コルトパが大陸中央よりやや南東、翼人とエルフの国セクレトバードに侵攻し、翌年226年には勝利を収め、同国を支配下に置く。

イアニス暦244年。コルトパがテルネシア帝国に併呑される。コルトパの王族たちはテルネシアの貴族として遇され、そのまま領土の維持を任される。

イアニス暦254年。メルトラノス戦役勃発。獣人を中心とした亜人連合軍が結成され、セクレトバード、ブラーヴァを支配下に置く。

イアニス暦259年。メルトラノス戦役終結。亜人連合軍はテルネシア帝国に無条件降伏。メルトラノスの東半分を亜人達の自治区として残し、残り西半分は帝国領となる。

イアニス暦271年。獄将ジキール、エル・クレスに降臨。

イアニス暦272年。テルネシア帝国軍、第一次アルスフェル聖戦争にてジキールに敗北。僅か三夜にして未帰還者14万人を数える。

イアニス暦275年。カナン王国の学者アルフェローラ・スコールド等の手によって、召喚魔法が初めて成功する。

イアニス暦278年。クルートにて召喚魔法の大規模実験が失敗、述べ八千を超える周辺住民が消失。

イアニス暦282年。テルネシア帝国が打ち出したゴルフレッド憲章に周辺諸国が同意。連合を組んでジキールに相対する構えを見せる。

イアニス暦285年。各国連合軍、第二次アルスフェル聖戦争にて勝利。ジキールを討ち取る。

イアニス暦312年。ゴルフレッド憲章を破棄する国が続出、翌年憲章無効化。コルトパが弱体化したテルネシア帝国から独立する。

イアニス暦314年。各国間で戦争が勃発。以後250年余、群雄割拠の時代に。

イアニス暦414年。ケルヴィンⅡテレジアがテレジア大陸中部から北部にかけて平定を成し遂げる。

イアニス暦576年。レネシスⅡテレジアがコルトパ・シャビア連合軍に勝利。南部平定により大陸の約8割を帝国領とする。以降、テルネシアの黎明期れいめいきとなる。

主要登場人物

主要登場人物

エアリア

リージェス（推定一八歳）

173cm / 60kg

エアリア軍に所属している青髪の若き戦士。兵隊長のウィルにその力を見込まれている。女性に見紛う程に端正な顔立ちをしているが、粗雑でどこか達観した口の利き方をする。高い身体能力と冷静な判断力を持ち合せている。

リーシェ（推定十八歳）

162cm / 48kg

リージェスの双子の妹。同じくエアリア軍に所属している。その顔は黒髪である事を除いてリージェスとそっくりだが、女性である分体格は小柄である。気が強く、口は少々悪いが根は素直。剣術、体術において高い戦闘力を発揮する。

キール＝ミッドロウ（二十歳）

177cm / 65kg

一年前にエアリア軍のウィル隊に希望入隊した新人のエルフ。碧髪で思慮深い顔立ちをした美男子だが、性格は意外とお茶目。かなりの皮肉屋だが仲間思い。魔法においてはエアリア屈指のウィル隊の中でも右に出る者がいない。

ネフェリイ＝リグレット（十七歳）

158cm / 46kg

エアリアを治めている領主で血筋はテルネシア皇家の分家に当たる。大陸でも名を知られた美しき姫君。先帝アルイールの妹の娘である。奔放な性格をしていて、およそ皇族らしからぬ思考の持ち主だが芯は強い。エアリアの民から圧倒的な支持を受けている。

ミシエル＝ハーレー（二十六歳）

164cm / 54kg

幼い頃からネフェリイに仕えるメイド。やや茶がかった黒髪で、お下げをしている。物腰が柔らかで慎み深い美人。家事全般をオールマイティにこなし、ネフェリイの性格、扱い方を心得ている貴重な人材。怒らせると非常に怖いという談あり。

シルド＝バルソラ（三十五歳）

168cm / 61kg

ミシエルと同じく、幼い頃からの養育係として傍に仕えるチヨビ髭眼鏡の紳士。穏やかな性格であると同時に非常に博識。常識人だが、自分の得意分野になると話し出したら中々止まらないのが玉に瑕。最近頭のとっぺんの髪が薄くなってきたため、常に帽子を被っている。

テルネシア帝国

アステイスⅡフロイデ（二十四歳）

181cm / 74kg

若くしてテルネシアの一軍を任される有能な軍人。一般階級の出
自ではあるが先帝アルイールにその才を見出され、頭角を現す。知
勇共に秀でており、人を思いやる心も持ち合わせているため、部下
達の信望も厚い。帝国の現状を憂いている。

メリツサⅡウランダール（二十五歳）

167cm / 52kg

テルネシアの名門貴族の娘でアステイスの副官。戦いにも同行は
するが、どちらかといえばその文才を活かして秘書的な役割を担っ
ている。慎み深い女性で、一歩引いた所で陰からアステイスを支え
る。

ブラーヂウスⅡテレジア（二十三歳）

174cm / 65kg

先帝アルイールの三男で、後継者争いを制した男。歪んだ性格を
しているが、父からの文武の才能も幾ばくか受け継いでいる。謀略
や奸智に長け、残忍で人が苦しむ様を見る事を何より好む。その圧
倒的な軍事力を以って、テレジア大陸全土を混乱に陥れる。

コステイ＝ブラムス（四十六歳）

165cm / 98kg

ブラージウスに取り入って参謀に収まったテルネシアの貴族階級の軍人。將軍の位についている。一般階級の者なら味方であっても死に至らしめる事を厭わない冷酷な男。自分の立ち位置に敏感で、その地位を脅かす者には容赦しない。

ガツシュ＝エウゲン（四十二歳）

179cm / 75kg

テルネシアの貴族階級の軍人。ブラージウスの側近の一人で、先帝アルイールの代から將軍を続けている男。各所を上手く立ち回る世渡り上手な所があり、ブラムスと同じく、アステイスを敵視している節がある。

アルイール＝テレジア（四十四歳）（故人）

184cm / 80kg

テルネシアの前皇帝。文武両道を地で行く人物であり、歴代屈指と言われるカリスマ性をも持ち合わせている傑物。魔物討伐や内政にその力をいかななく発揮し、多くの部下や民に慕われていた。若くして病に倒れ、急逝する。

イアニス教団

グルツセル＝イアニス（四十五歳）

170cm / 64kg

テルネシア帝国の国教であるイアニス教の法王。慈悲深く、信者達は当然の事、大陸中の民達から広く信望を集める。権力を傘に著る偽政者ではなく、自らも奉仕活動に従事する為政者である。

二章からの主要登場人物

テルネシア帝国

ジルバート＝ミレン（二十七歳）

182cm / 77kg

帝国第七軍大隊長にして將軍の位を持つ軍人。名門貴族の出自でありながら人望に厚く、剣の腕に優れ、知略にも長ける帝国屈指の將。アステイスの良き理解者であり、軍学校時代の先輩、後輩の間柄でもある。元副官のグレイスと結婚している。

ライエン＝ベルガモット（五十五歳）

180cm / 81kg

帝国第四軍大隊長で古参の將軍。豪放磊落な人柄であるが、人の

機微を捉える繊細な面も併せ持つ。槍術に長ける豪傑で部下達の信頼も非常に厚い。最年長の將軍だが、未だその武は衰えを知らない。

イヴァンス^{II} ??? (二十七歳)

175 cm / 68 kg

ブライジウスの私設部隊、三重^{トリニティ・ワン}の頂を統括する。強力な魔法を駆使するが、剣術の腕にも自信を覗かせる。性格破綻者であり、破壊衝動を抑えられぬためにカタルスタを飛び出してブライジウスの下へと奔った。

ヘッドリイ (??? 歳)

204 cm / 121 kg

巫人の中でも希少な鬼人種の戦士で、イヴァンスと同じくブライジウスの下に身を寄せている三重^{トリニティ・ワン}の頂のNo.2。2mを超える身長と鋼の肉体を兼ね備え、その戦闘能力は計り知れない。

イアニス教団

エルウ^{II}ノブリス (二十九歳)

189 cm / 87 kg

イアニス教団に所属する修道僧^{モンク}。ダークブラウンの短髪で体格に恵まれており、その体軀を生かした体術のエキスパート。戦士らしかぬ優しい性格をしているがいざとなった時の力は凄まじいの一言

に尽きる。

魔道王国カタルスタ

ユーヴェル^{ウイズ} ュ^{ウイズ} ュ^{ウイズ} アグストウラ（三十歳）

172cm / 66kg

魔道王国カタルスタの賢王で、年は若い将来を囑望されている。やや妄想癖があるが基本的には好人物。大勢をありのままに見据えられる器の持ち主。

マスクール^{セントレイド}（三十五歳）

168cm / 60kg

魔道王国カタルスタの宮廷魔術師。数少ない常識人だが、それ故に周りに振り回されがちな苦勞人。母国を想う気持ちは確かで、強力な魔法を扱う事も出来る。

エステル^{シャトル}（二十五歳）

163cm / ???kg

魔道王国カタルスタの宮廷魔術師。少々抜けている所があるが、それを苦にしない前向きな女性。現在は上層部の腐敗臭に嫌気が差し、公務を放り出して魔法学院にて講師を務めている。

ミュール(???歳)

138cm / 31kg

魔道王国カタルスタの宮廷魔術師筆頭。見た目は子供のエルフだが頭脳は円熟の域にある。聡明だが短気、老人のような言葉遣いをするが、実は相応な年齢であるらしい。甘い物に目がない。

アテライデ

レナード(二十五歳)

173cm / 65kg

アテライデに本社を置くドウブオーニユ社に所属する会社員。一部の狭い領域に通じるアングラなネタを数多く持っている。同期のシーナ「ヒズキ」に尻に敷かれている哀愁漂う人物。

シーナ「ヒツキ」(二十五歳)

157cm / 49kg

アテライデに本社を置くドウブオーニユ社に所属する会社員。動物と心を通わせる力を持っている。見た目にはお淑やかで物腰も丁寧だが、酒癖が非常に悪い。

三章からの主要登場人物

テルネシア帝国

ゴードン＝ベントニックス（四十八歳）

183cm / 67kg

ブラージュウスに招聘されたテルネシア帝国第二軍大隊長。嘗ては文官であったが政敵のコステイ＝ブラームスによって南の地に追いやられた。流れに逆らわず、ただゆらゆらと漂う浮き草のような人物である。

アテライデ

タクロー＝ヒツキ（四十歳）

177cm / 75kg

アテライデ経済流通開発機構（通称は経通）の十一人理事の一人。大陸に跨る服飾店を経営する大富豪であり、剣の達人でもあるらしい（ルガル談）。大雑把なところがあるが、快活で先見の明もある。シーナ＝ヒツキは姪に当たる。

ルガルル＝ハイメリン（二十六歳）

178cm / 70kg

タクロー＝ヒツキの護衛を任されている獣人^{ライカン}。暗い過去を持つがそれを感じさせない明るい人物。近接武器の扱いに長け、その実力はアステイスを凌ぐほどである。

シャナエ＝ドウブオーニユ（二十九歳）

166cm / 47kg

タクロー＝ヒツキと同じく、経通の十一人理事の一人。伝統ある貿易会社、ドウブオーニユ社の若き女社長で、その卓越した経営手腕は誰もが認めるところである。自他共に厳しい人物だが社員想い。

バイロン＝テレジア（七十五歳）

162cm / 60kg

経通の十一人理事の一人で先帝アルイールの叔父。東西戦争の折、アンドレイ側に味方していたアテライデを独立させてブラージュウスに肩入れした人物。己の利益の追求を第一に考えており、裏では後ろ暗い噂も絶えない。

アクア・ティ・アラ

オルフィ＝カストレン（二十三歳）

175 cm / 57 kg

グリーンにある傭兵ギルド、アクア・ティ・アラの幹部にして紅一点の獣人^{ライカン}。美人でスタイルも抜群だが、歯に衣着せぬ物言いをするのが玉に瑕。体術に関しては大陸でも比肩出来る者は殆どいない。

ノス・トゥリ^{II}ホルマ（三十八歳）

167 cm / 49 kg

傭兵ギルド、アクア・ティ・アラの幹部で、数少ない翼人^{バーティアル}。短剣と弓の扱いに秀でている。非常に博識で思慮深い人物であり、グリーン^{II}の貧民街に住まう孤児の教師役である。

プロローグ く幼き日の約束（裏）く

幼い少年と少女が手を繋ぎ、馬車道脇の歩道を寄り添うように歩いていた。既に夕方よりは夜に近く、もう子供たちが遊ぶには遅い時間である。大半は家に帰って夕餉ゆづけの催促をしているか、湯浴みをしているかのどちらかだろう。帰宅途中の大人たちは擦れ違いざまに二人を一瞥しては、訝るような所作を見せる。

それから間もなくして、空に薄く塗られた紅を塗り潰し、色を濃くする闇に呼応するように、家々の灯ともが点ついていく。等間隔に設置された街灯の光に魅かれるのは、火を恐れながらもその身を焦がす羽虫たち。その燐火がゆらゆらと、宙を彷徨う。通行人たちはその下を、家族が待っているであろう自宅へ急ぎ足で向かう。

そんな中、何かに気が付いたように少女が立ち止まった。黒髪を肩ほどまで伸ばした、齢よわいが十にも満たぬであろう少女は、茂みの脇に歩み寄り、見知らぬ家の中の様子をそつと伺う。

その背丈よりもうんと高い鉄柵と、大きなガラス戸を隔へだて、ベージュ色のカーテンの隙間から見えるのは、ある一家族の団欒だんらんの有様であった。家の中が明るく見えるのは、照明のせいだけではなさそうである。時折楽しそうに笑う者達を、少女は身動みじろぎもせず、黒く大きい瞳で見つめていた。外壁と窓を突き抜けて、笑声が微かに漏れ聞こえてくる。

その後ろには、やはり幼い青髪の少年が、少女を見守る様に佇たたずんでいた。髪の色以外、少女と瓜二つに近い容姿を持つ少年は、その表情に躊躇ためらいを含みながらも、少女に声をかける。

「リーシエ。そろそろ行こう」

年の頃に似合わぬ、落ち着きのある声に反応して、リーシエと呼ばれた少女はゆっくりと振り返る。もう見慣れた顔がそこにあるのを確認し、たおやかに微笑む。

「うん。お兄ちゃん」

リーシエは掴んでいた柵から小さな手を離し、一、二、三步開いている少年との距離を跳ぶようにして一気に詰めた。

二人は再び小さな手を握り合い、おうとつがある石畳の歩道をとととと進んでいく。偶たまに大きな荷馬車が隣の馬車道を、二人の後方から前方へ猛然と走り去ってゆく。そのたびに突風が生じ、二人の横顔を舐めるように吹き抜けていった。

青髪の少年は、リーシエがあ家族をくいるように見つめている、先ほどの様子を思い浮かべていた。彼女の心にあるのは、やはり普通の家庭への憧れなのだろうか。そんな疑問が胸を過ぎる。

少年は歩みを止めずに、隣にあるリーシエの横顔をチラッと窺う。

「……あのさ。やっぱり、お前は院に入った方が良いんじゃない」

「嫌いやだつ。絶対ついてく」

あつさりと言葉を遮さえぎられた少年は、小さく溜息を付く。

少年の言った院とは、イアニス教という大陸全土に浸透している宗教団体が各地で運営している孤児院の事であった。美麗字句をつらつらと並べ立てながら寄付を募る。そんなインチキ宗教が跋扈はくごする世間において、ちゃんとした孤児院を運営しているイアニス教は善良の部類に入るだろう。二人には保護者と呼べる大人が存在しな

かったので、この街のイアニス教会を訪ねて関係者に一言入れてくれ、と頼めば、入れる可能性は十二分にあつたのである。

「でもさ」

言いかけた少年は、リーシエの表情が先ほどよりも明らかに曇っていることに気づき、慌てて押し黙った。

「……もう、……一人は嫌だよ」

立ち止まったリーシエは震えるような声でそう言い、俯うつむいた。少年の手を握っていた小さな手に力が籠こもるのがわかる。経験上、リーシエが泣き出す一歩手前の兆候であつた。

二歩ほど先んじていた少年は、頭を掻きながらも口を開く。

「わ、わかつた。変なこと言つて悪かつたよ。……じゃあ、一つだけ約束な」

俯うついていたリーシエが上目遣いに少年の顔色を伺う。その瞳には若干の不安と、相反する期待とがないまぜになり、複雑な色合いが見て取れた。

少年は、人差し指を立てて口を開く。

「何があつても俺から離れないこと。あとそれから　　そうだな、自分勝手に行動しないこと」

少年を見て、リーシエは人懐っこい笑みを零した。

「お兄ちゃん。一つだけ言つたのに」

「こ、言葉のあやだ」

慌あわてて誤魔化す少年に、しかしリーシエは首を傾げた。

「……あやつて何？」

少年の使つた言葉は、リーシエには聊ちよか難がたしかったようであつた。少年は少し考える素振りを見せてから、困こまつたように笑つた。

「わからない」

「え、ええ？」

今度はリーシエが困った顔をする。

「いや、意味はわかるんだけど。リーシエにどうやって納得させればいいのかわからないんだ」

「……お兄ちゃん。もしかして私のこと、馬鹿にしてない？」

「してないよ、全然」

そう言うや否や少年は、少し膨れていたリーシエの頭上に、ふわりと小さな手を乗せる。

リーシエはその瞬間が何より大好きだった。柔らかな黒髪をゆつくりと鋤く様に、少年はリーシエの頭を撫でる。その心地良さに身を委ねたリーシエはうっとりとした表情を浮かべていた。

リーシエを優しげな眼差しで見つめながら、少年は諭すように念を押す。

「とにかく、だ。旅は危険が一杯なんだから、それくらいは守れないと駄目。約束……出来るか？」

リーシエは少年に撫でられながら、こくりと頷く。

「うんっ、約束っ」

ふと気が付けば、黒い軍服を着た者達が街燈の火を消す作業に追われていた。街の明るさがやや淡くなり、それから暫くして、家々の光が徐々に消えてゆく。それに付き従うように、光に形作られた影も段々と闇に還っていく。人々の就寝の時間が近いのだろう。

そんな中、二人の兄妹は人気を失った夜道を再び歩き始めた。辺り一帯で最後まで残っていた灯火が消えると、二つの小さな影は音も立てずに、巨大な闇の中へスツと溶けていった。

其の一　青髪の剣士（裏）

883年3月27日、テルネシア帝国皇帝ブラージウスにエアリア攻略の命を受けたブラームス將軍は、テレジア大陸中西部の大都市マビアより約三万の軍勢を率い、北西に進軍開始。二週間後の883年4月11日明朝、縦列に並んだ帝国軍の先遣隊がエアリアの城を見据えていた。

その日の夕方には帝国軍の本隊も姿を見せ、エアリアの城下町の外壁を隙間なく取り囲んでいた。大軍を目にすれば臆病風に吹かれて大人しく城を明け渡すのではという見方もあったが、エアリアの城門は尚も固く閉ざされ、徹底抗戦の構えを貫いていた。

883年　4月12日

降伏する様子が見受けられないエアリア軍に対し、テルネシア帝国軍は到着の翌日、夜明けを待たずしてエアリアの東城門を急襲。破城槌を用いてこじ開け、城下町に攻め入った。

漆黒の軍服と鎧に身を包んだ帝国軍は城下町を制圧するべく、辺りに散開していたエアリア兵たちを追い立ててゆく。その軍服の右胸の部分にはテルネシア皇家の紋を象る白ワシが小さく刺繍されていた。

入り組んだ街の中を、怒声を放つ黒き荒波が勢いよく埋め尽くしていった。やがてそれは四方へと広がり、細い通路にも滲み出し始める。帝国兵達は各所に点在するエアリア兵を目視するも勢いを殺さず、そのまま一気に呑みこんでゆく。町のあちらこちらでは鋼を打ち合わせる調が響き渡り、間を置かずして悲鳴と怒号が飛び交い始めた。

戦闘開始から一時間足らずで、既に勝敗は決したかのように見えた。エアリア兵の死体が血溜まりと共に町の随所に横たわっているが、帝国兵の死体は殆ど見当たらない。常識的に考えて、十五倍の数は如何ともし難いのがあった。たとえ一人を囲めるのがせいぜい五人ほどだとしても、技量に差がなければ片方が一回攻撃する間にもう片方は五回攻撃できるのだ。致命傷さえ避ければ、後は他の誰かが相手に止めを刺してくれる。当然、少数側は少しでも早く人数を減らしたいため必然的に急所を狙いがちになるが、攻撃される場所が予測できていれば対処はそれほど難しくくない。

あらゆる要素において、帝国軍はエアリア軍を凌駕りょうがしていた。劣勢を悟ったエアリア兵は、体勢を立て直すべく後退を始める。逃げる彼らを嬉々として帝国兵が追い立てる。戦いは追走劇に移行していた。

一人の年若いエアリア兵が両側を住居に囲まれた、幅の狭い街路を西に向かつて必死に走っていた。左肩には矢が突き刺さっており、血が滲み出ている。その部分を右手で庇うようにしている。

その後方からは十人ほどの帝国兵が、獵犬の如く彼を追い回していた。その距離は徐々にだが縮まってきている。腕の振りがなければ、走る速度は随分落ちる。追いつかれた後に待っているのは確実な死。

男は帝国兵に追い付かれた時のことを、或いは前方に回り込まれた時のことを考え、それを振り捨てるように首を振った。生き残るためには逃げ切るしかなかった。街角を曲がり、細い路地に入り、再び街路に出る。その間に立て掛けてあった木材を押し倒し、軒先に置かれていた植木鉢を二つ蹴飛ばし、そのうちの一つを粉々に砕いていたが、そんなことに心を痛めている余裕はない。後ろからの

嘲るあざけような声が段々と音量を増し、男の心を焦燥感で満たしていたからだ。

段々と大きくなってくる負傷したエアリア兵の背中を見て、帝国兵たちは思わず笑いを噛み殺す。兵卒の首にそれほどの価値は無いが、彼が着用している金属鎧や剣はそれなりの値段で売れる。部隊の人数で均等に割ったとしても、三日ほどは豪勢な食事でありつき、美味しい酒を飲み、それなりの女と寝ることができだろう。そろそろ追い付けると判断した帝国兵たちが、腰に下げたある剣の柄に次々に手を添えた。

敵兵に追いつくあと一歩の所だった。先頭を走っていた帝国兵がはたと立ち止まる。逃げるエアリア兵とすれ違う様に、腰に剣を下げた青く長い髪の少年が、悠々と帝国兵の方に歩いてきた。

「あ、あんたウィルさんのところ……」

左肩に矢が刺さったままのエアリア兵はチラリと少年の方を振り向いて立ち止まり、戸惑いとも安堵とも取れる表情をしていた。少年は斜め後ろの兵に振り向く事はせず、背中越しに言葉をかける。

「馬鹿將軍が殺されたんで、ウィル隊長が指揮権を引き継いだ。散開している全兵は王宮城門まで後退せよ、だつてさ。ここは任せて早く行きな」

「……恩に着るっ」

エアリア兵は礼を言うと、痛みをおして通路の奥へと消えていく。一人残された少年と帝国兵たちはおよそ十歩の距離をとって対峙たいじした。

帝国兵は改めて少年を一瞥する。男にしてはやや高い声色、青い長髪を左側だけ、前で三つ編みにしている。何より目を引いたのが少女と見紛う線の細い顔だ。容姿だけならどこぞの貴族の子女と言っても通じるだろう。兎にも角にも、エアリア王家を象る盾の紋章が刻まれた、青い軽鎧を身に付けているため、敵兵である事だけは疑いようがない。

「へえ。美少年か、それとも男装の美少女さんか。少しは腕に自信がありそうだが、まさか一人でこの人数と戦う気か？」

帝国兵の誰かが投げ掛けたその言葉に、少年はさも驚いたように細い眉を上げる。

「……へえ、たつたそれだけの人数で俺と戦う気なの？」

「俺」と言ったからには、やはり性別は男かと思われるが、世間一般には「僕っ子」と呼ばれる稀有な女も存在しているから断定までは出来なかった。帝国兵たちはそんな代名詞よりも先に、聞き捨てならない台詞の方に反応し、少年に殺気を向け始める。

「そういうからには、随分と腕が立つんだろうな」

軍服に、周りの兵たちよりも階級章を一つ多く付けた男が、ずいと兵たちの最前列に出ようとしたり。しかし、それを遮るかのように、部下と思われる男たちが二、三人前に進み出る。

「モンチ隊長、俺たちにやらせて下さい。こういう奴ほど大したことないんですって。隊長の出る幕なんてありませんぜ」

大したことないって言う割には俺達にかよ、と少年はほくそ笑む。こういう奴は割に長生きするタイプのようにも思えるが、この場で

それが当て嵌まるかは定かではなかった。

「いや、俺がやる。もし女だったら、その後たっぷり楽しませて貰うけどな」

一人死亡確定か。少年はいやらしい笑みを浮かべているのっぽの男を「逃げてても確実に殺す対象」に登録する。見逃しても世のためにならないことだけは間違いない。

モンチ隊長と呼ばれた、がっしりした体格の男が不快そうな顔を露わにして部下を嗜める。

「……貴様、確か今回から新しく配属された新兵だったな。先に言っておくが、我が隊で狼藉を働いたらこの俺が許さんぞ」

言動から察するに隊長は一応常識人らしいが「我が隊で」って辺りがどこか身の程を弁えて^{わかま}ている。まだ三十台に見えるが、既に小市民根性が染み付いているのだろ。どうせなら「我が軍で」とか大きいことを言っ^てて欲しかった。少年は肩を竦めるばかりだった。

目の前で手前^{てまえ}勝手に繰り広げられている三文芝居に、青髪の少年は退屈そうに欠伸^{あくび}を噛み殺し、目じりを撫でた。

「あのさあ……かかって来る気がないなら回れ右してとっとと帰ってくれない？ こう見えて俺も暇じゃないんだよね」

少年の挑発に反応し、男たちは口々に唸るような怒声を上げた。

「大の大人が寄り集まって少年一人を威嚇^{いかく}するその様は、さながら檻の中に入れられた哀れなブルドックのようであった」

本の朗読でもしているかのよう^に、そう少年は呟いた。

火に油を注がれた男たちの顔が赤く染まり、悲鳴を上げているやかんの様に上気した。

「……上等だ。隊長、俺が行きますよ。いいですね」

短髪の帝国兵が剣を鞘から抜き、齒軋りしながらずいと前に進み出た。

「……わかったわかった、好きにしる」
ただ一人冷静だったモンチは、やれやれと溜息を吐く。

中肉中背の短髪男は少年と向き合い、剣を縦に構える。対して青髪の少年は気だるそうに腕を下ろし、剣も鞘に収めたままだ。温度差のある二人のその様子は、傍から見ているとどこか滑稽であった。「へっへ。帝国の稲妻いなづまと謳うたわれた俺の実力、とくと味わえ」

どちら様？ おい誰か、フォローしてやってくれよ。聞いた事あざなないぞ。大体、字あざなが付く程の奴が兵卒あざなって、そりゃあないだろ。少年は目の前の男の恥ずかしい台詞に閉口する。男は剣の切っ先を一見無防備な少年に向け、間を置かずあざなに駆け出した。足の速さは中の上、剣の切っ先は俺の喉元を狙っていて、筋肉の付き具合からして右利き。少年は迫る男に対し、一瞬にしてそれだけ分析すると、剣が喉元に届く刹那、左に半身ずらし、男の顔が突っ込んで来る辺りに右手を置く。

ズブツ

刺さった。男の剣ではなく、少年の二本の指が。

「ギ、ギアアアアー……」
少年はもんどりうって顔を押しさえている男を平然と眺めている。彼の二本の指は血と体液の混合液で濡れ、ポタポタと路面したたに滴したたっていた。男の両眼を潰したのである。正確には、男が自分から勢い良く突っ込んで潰されに來たのだが。

その様子を見ていた帝国兵たちは啞然とし、次の瞬間には正気に戻って少年に向かって次々に剣を抜き払った。その間も、視界を奪われた男は叫びながら見当違いの方向に剣を振り回している。

「て、手前よくも うわっ」
少年に斬りかかるうとした別の男が、目を潰された男の振り回している剣に飛び退いた。

「おいつ、落ち付けっ」

周りの男達は何とか止めようとするが、目を潰された男は激昂げっこうしていて聞く耳を持たない。体の一部分を失った事に対する喪失感はその簡単に払拭できるものではないようだ。

「くそっ、くそっ。どこだあっ、どこにいやがるっ」

男は叫びながらも行き当たりばったりに剣を振り回す。少年はその哀れな様子を見て初めて、目を潰してしまった事に僅かばかりの良心の呵責かしゃくを覚えた。

「何だか、その、色々ごめん。帝国の……えーっ……新妻にいづまさん、だっけか」

瞬間、男の剣を振る速度と喚く声の音量が上がったが、それ以外には何の効果ももたらさなかった。どうやら少年の謝意は兵の心には届かなかったようだ。

そんなに道幅が広くない路地のため、男の振り回す剣が危なっかしくて少年に近寄れない。ついに、堪りかねた一人の帝国兵が目の潰れた男に近づき、剣を振り翳した。

「がひゅっ」

目の潰れた男の首元に深く刃が食い込み、そこから血が小さな噴水のように拭き出す。首を斬られた男は地面に倒れ伏すと僅かに痙攣けいれんを繰り返して、直ぐに事切れた。

帝国兵達は少しばつの悪い表情を浮かべて顔を背けながらも？仕方がない？という諦めにも似た感情を呼び起こす。その刹那だった。

場の空気が緩んだのを見計らい、青髪の少年が強かに地を蹴る。10m程の距離を三步で詰め、間髪入れず斬り込んで来た。少年は一番手前にいた兵の首元を狙って右手で素早く剣を抜く。鞘走りの摩擦音が一瞬間こえた。次いで兵の身体はゆらりと揺れ、支えを失った人形のように崩れ落ちた。

「なっ、がっ」

何か言おうとした兵も同様に、武器を抜く間もなく少年の剣の餌食になる。一瞬にして喉を突き通され、ヒューヒューと空気が掠れる音が聞こえた。少年が喉に刺さった剣を素早く抜き去ると、ガクンと前に膝を付いてそのまま地べたに接吻キスをした。

先程の味方殺しの光景は、帝国兵達に格好の隙を作ってしまった。動揺していた兵達が更に意表を突かれては、少年の迅過はやぎる動きに対応できるはずもない。剣を振り下ろすも少年を捉えられず、その次には自分の身体に刃が突き立てられている。帝国兵達は次々に倒され、崩れ落ちていった。

「おのれっ」

モンチは少年の首を目掛け、鋭い剣閃を水平に放った。しかし少年は屈んで易々とそれを躲かわし

ゴッ

「う……がっ……」

斜め下から剣を持っていない左手の甲でモンチの顔を強かに打ち据える。鼻の穴から血が垂れ、モンチは堪たまらず後ろにたたらを踏む。体勢が崩れたのを立て直す暇も与えず、少年は流れるような動きで振り返り様、左手で右手に持っている剣の柄を押すようにしてモンチの喉に剣を突き立てた。

素晴らしい。舞う様な少年の動きに、何より称賛の言葉が先に浮かんだモンチの意識は、急速にその身体から離脱を始める。ドサツと音を立てたのを最後に、街の一角に沈黙が訪れた。

青髪の少年がブンツと勢いよく剣を振ると、石畳の床に赤い点線が出現する。彼は剣を鞘に戻し、帝国兵達の死体を一瞥すると、血の匂いが漂い始めたその場を後にした。

「あつ、いたいた。リージェスツ」

来た道を引き返していた少年は路地の十字路で名を呼び止められる。声の方に向き直ると、黒く長い髪を持つ美しい少女と波打った碧髪の二枚目の男が少年の方へと走ってきた。男の方は耳が尖っているため、容易にエルフであると推察できた。

リージェスは二人の姿を見止めて微かに安堵の息を漏らす。

「よう、そっちはどうだった」

「ほぼ全滅。そろそろこの辺りを離れないと、俺たちもやばくなるぜ」

エルフの男はリージェスの前で立ち止まると、力無く首を振った。彼の名はキール＝ミッドロウ。リージェスと同じ隊に所属しているエアリア兵である。背丈はリージェスより少し高く、切れ長の目を持つ中々の美男子だ。

エルフは人間に比べて高い魔力を持ち、その代わりに体力がない、というのが一般的な見識なのだが、キールにはそれが当て嵌まらない。どんな厳しい任務に就いても息を殆ど乱さないのだ。大方特殊な鍛錬をしていたのだろう。

「うん、さつき危うく囲まれかけたから。何とか切り抜けたけどね」
黒髪の少女はリージェスの双子の妹、リーシエだ。背丈と髪の色こそ兄と差はあれ、その顔はリージェスと非常に良く似ている。髪の色と髪型を同じにすれば、初見では区別が付き難いだろう。もう一つ違いを挙げるなら、リージェスの少し眠たそうな目に対して、リーシエのそれはパツチリとしていて活力に溢れている。

リージェスがチラッと二人の衣服を見ると、自分のと同じ様に返り血で染まっていた。先程まで青かったキールのローブは、所々紫に変色している。囲まれたと言う割には、布地にも肌にも傷は見当たらない。

「二人とも怪我はなさそうだな」

二人の体をザツと見回してから、リージェスは笑みを浮かべる。

「私一人じゃちょっと危なかったけど、キールがいたから何とか、ね」

リーシエはポリポリと頭を掻く。

「いやいや、当然の事だ。リーシエのためならたとえ火の中の中」

「……あんだ、水の中は無理でしょうに。ちよつと褒めると直ぐ調子に乗るんだから」

キールの軽口にリーシエは溜息混じりに呆れている。そういえばキールはカナツチだったな。腰くらの浅い川で溺れかけている姿を、リージェスは昨日のことのように思い出した。

不意に東側で雄叫びが轟いた。三人の会話がピタリと止まる。耳を敏くすると少しずつざわめきが近づいてきていた。どうやら、敵軍の本隊が大分こちらに接近しているらしい。

負け戦、か。

リージェスは胸の内では呟いた。見れば他の二人も似たような事を考えているのか、顔をしかめている。

「潮時だな。……引き返そう」

リージェスの声に二人は頷き、三人ほぼ同時に西へと向き直ると、城門へと走り始めた。

其の二（師弟愛（裏））

日が傾き始めている最中、後退の指示を受けたエアリア兵達は帝国兵の追撃から逃れるべく、西にある王宮への城門を目指して走っていく。城門前には城下町に散らばっていた兵達が大分集結していた。

その中心では、眼光鋭い切れ長の目をした、無精髭を生やした三十半ば程と思われる男が木の台座に立ち、手際よく指示を出している。左の頬に刀傷のある男の体は、手足が長く、筋肉質でありながらも体が重そうな印象は全くない。

剣を振れぬ者は城内の救護室で手当てを受ける。

重装兵達は先に城門の内側に入れ、敵が来てからでは間に合わん。矢を片っ端から掻き集める、予備の分もだ。

弓兵たちは左右の塔に均等に分かれるように隊を組み直せ。

淀みのない男の指示に従い、集まった兵たちは流れるように動いている。

多くの隊長たちの意見を退け、城下町での戦いを命じていたラムード將軍は開戦早々に首を取られていた。あつさりと指揮官を失い、散り散りに逃げ始めた兵達を一箇所に纏めるべく、中隊長のウィルは腕の立つ部隊員に伝令兵を務めさせた。彼らの指示に従い、約千二百名の兵が王宮城門へ集っていた。無茶な作戦に殉じたエアリア軍は僅か半日で、三分の一近くの兵を失っていた。

再編成をしている中、はたと人垣が割れ、無数の傷を負った男を

背負う兵が現れた。背負われている男はどうやら意識がないようでピクリとも動かない。

「申し訳ありません、ウィル隊長。避難誘導をしている時に襲われて、こいつだけ逃げ遅れて……」

背負っている男は同じ部隊の仲間なのだろう。悲痛な面持ちで、慎重に血塗れの男を仰向けに横たえた。

ウィルは、地面に下ろされた血塗れの男の傷を一目見て、胸の刺し傷が肺にまで達している事に気づき、ゆっくり首を振る。

「もう助からん。……楽にしてやれ」

背負ってきた男は呆然とし、周囲に沈痛な空気が流れる。動けぬ男の代わりに、ウィルの後ろに控えていた兵が短刀を持って血塗れの男に近づき、屈み込む。

「……すまん」

その咳きと共に、喉に刃が突き立てられた。その手が血に濡れ、男の弱々しかったその呼吸が、数秒で止まる。背負って来た男の目からは涙が一粒、二粒と零れた。

「全員、五秒間黙祷」

ウィルの低い言葉が、辺りに傳さを以って響いた。兵たちは瞑目し、任務に殉じた男に祈りを捧げる。

暫くして、軍の編成を再開していたウィルに一人の伝令兵が駆け寄っていく。

「ウィル隊長。キール、リージェス、リーシエの三名、只今戻りました」

ウィルはゆっくりと顔を上げ、無事だったか、と内心安堵する。「わかった。ここへ来るように伝えてくれ」

頷いた伝令兵が姿を消すと、少しして三人がウィルの元に駆け寄

つて来た。ウイルは三人の姿を見て、人知れず微笑む。

「キール、よく戻ってくれた。怪我はないようだな」

言葉を発した時には、ウイルは微笑みを消していた。彼の労いの言葉に、キールは軽口を返す。

「そりゃ、こんな所で死ぬ予定はありませんからね」

ウイルはキールと視線を合わせる。キールは、その射抜くような視線を受けとめながらへらっと笑い返す。一番の新参者だということに、本当に態度がでかい。周りにいた兵たちは苦笑いを隠さなかった。

しかし、ウイルはそれを咎めるような素振りは見せず、リージェスとリーシェにそのまま視線を移す。笑みは消えたままだが、その表情は若干柔らかくなっていた。

「お前たちも、よく無事でいてくれた」

ウイルの言葉にリージェスは敬礼を返す。

「はっ、ウイル隊長のご指導の賜物たまものと心得ます」

馬鹿丁寧な言葉を口にする違和感ありありのリージェスに、リーシェとキールは一瞬吹き出しそうになった。常日頃は鷹揚おつような口の利き方をするリージェスだったが、剣の師であるウイルに対してだけは敬意を払って接していた。ウイルはリージェスの事を、さぞ真面目くさった部隊員だと評価しているのだろうな、とリーシェとキールは顔を見合わせ苦笑する。

「ご苦労だったな、暫く城内の休憩室で休んでこい。予想通り、籠城戦になりそうだ」

リーシェはその言葉に内心ホツとした。今日は朝から日が傾きかけている今に至るまで、ずっと走り通しだったのである。負傷している他の兵たちの手前、顔には出さなかったものの、両足の脹脛あしづねが

攣りそうなくらいに痛かった。

「畏まりました。　　ウイル隊長。　　後ほどお話があるのですが、宜しいですか」

リージェスの言葉にウイルは一瞬眉根を寄せたが、直ぐに頷いた。「わかった。だが、今はまだ忙しい。おそらく帝国が攻城に取り掛かるのは明日だろうから、今夜部屋に來い」

「はっ。ありがとうございます」

リージェスは深々と頭を下げた。

日が暮れる頃には軍の再編成も滞りなく終了し、城門に見張りの兵を残してエアリア軍は城内へと引き返していた。夜も更けると、何かと騒がしかった城内もようやく静けさを取り戻した。兵達は思い思いの場所で一息ついている。明日からの戦いの厳しさをわかっているのか、普段は喧しい兵達もどこか寡黙であった。

隊長にのみ宛がわれている個室で、ウイルは椅子に座り、一人グラスを燻らせていた。中には白く濁った果実酒が入っている。ウイルの好きな桃酒だ。背もたれに寄りかかり、それを一口飲む。甘さと辛さが舌の上で絡み合い、次いで喉に微熱を残していった。

リージェス、か。その姿を思い浮かべるだけで、自然と口に笑みが浮かぶ。二十年以上に亘って剣を振ってきたウイルには理解っていた。少女の美貌を持つ少年の裡に秘められた、戦士としての恐るべき才能を。

もう少し……もう少し早く出会いたかったものだ。

そうすれば、彼の才能が昇華される様を見届ける事が出来たかもしれない。たった一年半しか行動を共にしなかったが、それでもリージェスは著しい成長を遂げた。今やエアリア軍でも指折りの使い手となっている。多分自分は、この戦いで死ぬだろう。出来る事ならその前に、自分の持てる全てを伝えたかった。それだけが心残りだった。

弟子などついぞ持った事がなかったウイルだったが、リージェスと出会い、己が身に付けた戦闘術を教え始めるとその楽しさに没頭した。教え子の成長する様がありありと見て取れる、それがこれ程に愉快な事だとは思いついしなかった。

また、リージェスには及ばないまでも、双子の妹であるリーシェにもやはり優れた才があつた。女性にしてあれ程の天分に恵まれる者は殆どいない。ここ一年半の間に、二人は競い合うようにその力を高めていった。その様子を、ウイルは半ば師の様な、半ば親の様な心持で見守っていた。家族を持ったことのないウイルに、彼らはその温かさを与えていた。

目を閉じ、グラスに口を付ける。仄かな甘さと香り、それをひきたてる辛さが口の中に、喉の奥に広がって行く。明日からは飲む暇もないだろう。ともすれば、これが最後の酒になるかも知れない。よくよく、味わっておかねばと、ウイルは酒を口に含み、舌を絡ませた。

と、控え目なノックの音が聞こえ、自然とドアにウイルの意識が向く。

「ウイル隊長、リージェスです」

「鍵は開いている、入れ」

ゆっくりとドアが開き、リージェスが姿を見せる。既に鎧を脱い

でいたリージェスは、幾分涼しそうな格好をしている。どうやら疲れも殆どなさそうだ。重い金属製の鎧を着て昼間の日差しを浴びようものなら、如何な体力自慢とて相当きついはずだが、それを苦にしないのは弛まぬ鍛錬をしている何よりの証拠であった。

「夜分に申し訳ありません。どうしてもお話しておきたい事があります」

ドアをそつと閉めた後、リージェスはそう言って敬礼する。

「硬いな、少し楽にしる。休憩中はプライベートな時間だ。ほれ、そこに座れ」

ウィルはテーブルの向かいにある椅子を指し示す。

「はっ、わかりました。では失礼します」

規則正しく、リージェスはゆっくりと椅子に座り、背筋をピンと伸ばす。全つ然わかっていないじゃないか、とウィルは苦笑した。

置いてある空のグラスに、ウィルはボトルを傾ける。とくとくと音を立てて、酒が注ぎ込まれる。半分くらい入れてボトルの口を上に向ける。

「頂きます」

リージェスはあくまで丁寧な、グラスをそつと自分に寄せ、一口飲む。

「で、話とは何だ」

リージェスはやや躊躇いがちに口を開く。

「その前にお訊きしたい事がございます。この戦い、ウィル隊長は勝てると思っていらいっしやいますか？」

単刀直入なのはいいが、その訊き方は負けると思っている者の訊き方だぞ。ウィルは内心で呟いた。リージェスから視線を外し、窓の外を見据える。深い闇の中に、野営を張って城を包囲している帝国軍の煌々としたかがり火が見えた。まるで昼間のような明かりを放つ大軍勢。それを眺めながら、ウィルはゆっくりと口を開いた。

「無理だろうな。十中八九、ゴルフレッドからの援軍が間に合わない」

ゴルフレッドはエアリアの北にある中立国である。人口はエアリアよりも多く、兵もそれなりの数を有している。今回の帝国侵攻の際に援軍を募り、相手も金銭を前払いすることを条件に了承したのであるが、それなりに距離が離れているため援軍が間に合うかは微妙な情勢であった。

はつきりとそう言った自分に、こいつは一体どんな反応をするだろうか、とウィルは再びリージェスを興味深そうに見つめる。

しかし、リージェスの目には動揺も、絶望も、そして希望も見受けられなかった。ウィルは溜息を付いた。この落ち着きっぷりは感心するのを通り越して呆れてしまう。

「わかってた、って顔だな」

リージェスはグラスから手を離すと両手で椅子を引き直し、少しテーブルに身を近づける。

「何となく、ですけれど。少なくとも、元々ウィル隊の人は皆勘付いていると思いますが」

ウィル隊に所属している者は古参が多い。それは言い換えれば、ウィルが優れた隊長であるが故に、部隊員の死亡や離脱が少ない事を如実に顕している。修羅場を何度か潜り抜けていけば、一目でどんな戦場が危険なのか自然とわかる。長らく戦争がなかったため、ここで言う修羅場は盗賊団の掃討や魔獣討伐が主になるのだが、命のやり取りをすることに変わりはない。そういった場所に身を置いていけば少なからず勘が養われる。

今回の戦争にしても、仮に援軍が間に合ったところで、少なくとも勝つ事はできない。兵糧が尽きるまで粘り、敵の退却を待つというのが良いところだろう。ゴルフレッドからの援軍は多くても三千を下回る、というのが大方の予想であった。三万の敵軍を撃ち破るには、やはり足りな過ぎるのである。

ふう、と息を継ぎ、酒のせいかやや頬に赤みの差したリージエスは、視線を真っ直ぐにウィルに向けてその言葉を紡ぐ。

「リーシエを、今のうちに逃がしてやりたいんですけど」

決然とした物言いにウィルは目を細める。リージエスが双子の妹を大切に思っているのをウィルはよく知っていた。リージエスの言葉や行動の端々から、時折心地良い涼やかさを伴ってそれを感じ取る事が出来るのだ。エアリアの部隊に入隊するまでは、ずっと二人で旅をしていたということも聞いていた。幼い子供の時分からの二人旅。並々ならぬ気苦労があつたのは疑いようがない。

そして、リーシエも気は強いが根は優しく、類稀な兄思いでもある。この兄をして、あの妹ありきなのだな、とウィルは実感していた。

ウィルは僅かに表情を硬くする。

「リーシエだけか？ お前はどうする」

リージエスは曖昧に笑う。

「俺は、ここでお世話になるうって口走ってアイツを巻き添えにした言いだしっぺですから。勿論、方々に散らばられて命令があつたら必死に逃げてみせますが」

ウィルは肘をテーブルに乗せ、手の甲に顎を乗せて考える。リージエスは依怙^{えこひいき}鼻^な足^{あし}される事を嫌う性分である。それにも拘^{かか}わらず、リーシエの無事を嘆願した彼には、おそらく相当な葛藤^{かつとう}があつたは

ずだった。

リーシエを逃がす、という事に関しては、ウィルは全く異存がなかった。むしろ、言われるまでもなく初めからそのつもりだった。

帝国兵の中には、女性兵士だけを狙って捕らえ、執拗に甚振り、辱めるような外道も数多くいる。それは東西戦争の折りに新聞の紙面にて知る事が出来たし、酒場に赴けば、より生々しい話を聞かされることもあった。彼女の容貌ようぼうからして、捕まったらどうなるのかはウィルにも容易に想像が付いたし、リージエスの心情も痛いほど理解できた。

リーシエは、ウィル隊初の女性部隊員だった。そして、おそらくは最後の。

ウィルが悩んでいたのはリーシエのことではなく、リージエスのことだった。リーシエを逃がすのは確定として、そのおまけにリージエスを付けるにはどうするか。

リーシエの逃亡とうぼう幫助ぼうじを自分から申し出た手前、お前も一緒に逃げろと言われてリージエスが大人しく首を縦に振るとは思えなかった。だが、彼をそのまま死地に留まらせるには情が移り過ぎてもある。

ウィルは策を練り始めた。このリージエスという、曲がりなりにも自分が手掛けた未完成の作品を、世に残す為の策を。そう、師にとっての弟子は、自分が後の世に残す一つの作品でもあるのだ。

ややあって、ウィルは視線をリージエスに戻した。

「……安心しろ、リーシエのことに關しては心配しなくていい。実はこの城の王の間に抜け道がある。いざとなったら、あいつにはネフェリイ様と共にそこから脱出して貰うつもりだ」

その言葉を聞いて、リージエスの目に初めて感情の色が浮かぶ。

ネフェリイは、エアリアの先王の一人娘の名前だ。銀髪の麗しき

姫君として旧帝国でもその名は知れ渡っていた。彼女と一緒に脱出するならば護衛もそれなりに付くはずだ。そう悪い事にはならないだろう。

「ありがとうございます。御恩は一生忘れません」

リージェスは僅かに顔を綻ばせ、深々と礼をする。そして、グラスの酒をグイツと飲み干す。

「美味しかったです。ご馳走様でした」

リージェスは膝に手を付いてゆっくりと立ち上がり、部屋の出口に向かう。

「ああ、それと」

背中越しにウィルに呼び掛けられ、再びリージェスはウィルの方に向き直る。

「すまんが、キールの奴にここへ来るよう伝えて貰えるか」

リージェスは首を傾げる。

「キール……ですか？ でもあいつ、もうぐうぐう寝ていますよ」

「起こして構わん。目覚めないようなら耳に息を吹きかけろ」

ウィルはきつぱりと言い放った。

「わ、わかりました」

リージェスは戸惑いつつもそう答えた。

リージェスが部屋を後にして少しすると、再び部屋にノックの音が響く。但し、その音は深夜にも拘らずかなり大きい。

「……キール、入ります」

寝ていたのを無理矢理起こされたからか、不機嫌そうな声が響く。ウィルが了承の言葉を口にするより先に、無遠慮にガチャリとノブを回す音が耳に入る。

キール、お前少しはリージェスの奴を見習った方がいいぞ。普段のリージェスを知らないウィルは、寝ぼけ眼まなこのキールを視界に捉え、はたと心の中で思うのだった。

其三　　今生の別れ（裏）

883年　4月17日

エアリア城、城門前

「射ていつ」

ウィルの合図と共に、門を潜ろうと身を縮めて突進してくる帝国兵の一団に向かって左右の塔の窓から一斉に矢が放たれた。一瞬にしてハリネズミのようになった敵兵たちは全身を真っ赤に染め上げ、その場で折り重なるように倒れていく。二つの塔からの射線が重なる場所には、帝国兵の死体の山が出来上がっていた。

運良く軽傷で矢の雨を潜り抜けてきた敵兵たちも、城門を潜り抜けた先で待ち構えていた重装兵の壁に喰い止められ、槍で弾き飛ばされている。弾き飛ばされた後に待っているのは、再び降り注ぐ矢の雨だ。この布陣を突破するのは如何な勇猛な戦士とて容易ではなかった。

突如として地面に二つの丸い影が現れ、咄嗟にエアリア兵は上を見上げる。

「……隊長っ、上からっ」

いつの間に外壁をよじ登ったのだろうか。黒い薄手の服に身を包んだ帝国兵が二人、飛び降りてきた。兵に指示を飛ばしていたウィルを指揮官と目星を付けたのだらう。明らかに彼一人に狙いを定め、短剣を片手に襲い掛かる。

しかし、当のウィルは頭上に視線を移すことなく、やおら膝を屈めて頭を下げる。まるで示し合わせたかのようなタイミングで、ウィルの後方から彼の頭上へと強烈な突風が駆け抜けた。キールが咄嗟に放った風の魔法だった。

「ぐっ」

「うわっ」

思わぬ方向からの突風をまともに受けた二人の刺客は空中で体勢を崩し、着地すらままならず背中を地面に強かに打ちつけた。

「く……そっ」

何とか起き上がろうと、刺客たちが片膝を付いて立ち上がりかける。その刹那、彼らの視界に銀の刃が一瞬煌く。遅れて、刺客たちが地面にどすと音を立てて横たわった。

「全く、命が危ないって時にも相変わらず人任せなんだから」

戦闘を護衛に任せっきりのウィル隊長に対して、刺客にとどめを刺した部隊員が苦笑した。それでも、いざとなったら隊長は相当な実力を発揮する。そういう事態に陥ることが数えるくらいしかないだけだ。

「そこ、^{なぐ}煩いぞっ。無駄口を叩くなっ」

いつの間にウィルは立ち上がり、防衛線の指揮に戻っていた。そのふてぶてしくも頼もしい背中に、数の少ない兵たちは安心感を持って戦えていた。

「あと二日もすれば援軍が来る、それまでの辛抱だ」

門の守備を指揮するウィルが兵達を鼓舞し、氣勢を上げる。六日間に及ぶ敵軍の間断ない攻撃に兵達の疲労はピークに達していたが、それを誤魔化すための苦肉の策だ。

他の主だったエリアの将や隊長は、初日の市街戦でその殆どが

戦死していた。開戦初日で二人いた將軍はあっさり戦死し、八人いた隊長はウィルを含めて三人になった。指揮官を失って分散しかけた兵たちを、ウィルは部隊員を駆使して手際良く一つにまとめた。少数でも対応できる箇所にて防衛線を張ったウィル隊は、後退を余儀なくされながらも敵方の大軍をよく持ちこたえていた。

今のところ、事前の予想よりも味方の損耗数は少なく、このまま持ちこたえられれば活路を見出せる可能性が高い。

ところが、兵達が希望を見出し始めたその矢先に塔に入っていた見張りの兵が叫び声を上げた。一瞬、飛び道具で殺られたのかと思っただ、再び震える声が響く。

「み、皆っ。敵軍の左陣を見ろっ」

見張りの兵が示した方角を見、その場にいた全員が一瞬たじろぐ。「な、何だ、あれは……」

城門を死守していた兵達は、ウィルも含めてこちらへと近づいてくる巨大な骸骨に愕然とする。おどろおどろしい威容を放つ骸骨は、一步一步確実に、城壁の方へ歩み寄ってくる。そして、おもむろに骸骨が立ち止まった。そのままゆっくりと、紫煙を纏った剣を振り被る。その姿がエアリア兵達の網膜に焼きついた。

「いかん、退避せよっ」

ウィルが咄嗟に兵たちに指示するが、少し遅かった。骸骨の巨大な剣が水平に振るわれた。

ギャリリリッ

耳障りな石壁の粉碎音と共に、城門の左右に建っている塔に一瞬にして横に裂け目が入り、そこから砕けた石積がパラパラと零れ落

ちる。そして次の瞬間、左右の塔はほぼ同時に、ズズズと横にずれてバランスを失い、一気に倒壊を始めた。

「う、うわあああっ」

塔に立て籠もっていた弓兵達の悲鳴が木霊し、彼等は逃げる間もなく、ポツキリと折れた建物と共に運命を共にする。城門の上に折れた左側の塔が直撃し、その下にいたエアリアの重装兵は無情にも食い止めていた敵兵と一緒に頭上から降って来る瓦礫がれきの下敷きとなってしまう。

こちらの建物が崩壊したのを見計らうように、巨大な骸骨は霞かすみのように姿を消した。瓦礫の端々からは、鎧每身体をグシャグシャに潰された兵達の血が流れ始めていた。

優位に進めていた戦場が一瞬にして、敵味方双方の呻き声が混濁する阿鼻叫喚へと一変する。周囲は建物の倒壊による大量の粉塵で視界を遮られ、近くににいる兵士の顔を確認する事も困難な状況だ。

「何という事を……」

おそらくは、業を煮やした連中が我々に対処させる間を与えぬために、味方ごと攻撃を加えたのだろう。多くの仲間の死を厭わないその非人道的な戦法に対して、ウィルは怒りを露あらわにした。

だが、感傷に浸る暇はそれほどなかった。巻き起こっていた粉塵ふんじんが風が吹く度に少しずつ掃われている。こちらの被害状況を確認し終われば、間違いなく一斉攻撃を仕掛けてくるだろう。

ここまでだな。

ウィルは即断し、後方に控えていた新兵たちを呼び付けるよう指示をする。程なくして、リージェス、リーシエ、キールの三人が駆

けつけると、塵が舞う中、ウィルに向かって敬礼した。

「召集につき、馳せ参じました」

三人は声を揃え、隊長のウィルに敬礼する。顔にはまだ幼さが残っているものの、その風格は三人とも一流の戦士の佇まいだ。ウィルは三人の顔を端からゆつくりと目に焼き付けてから、口を開く。

「ネフェリイ様に伝えよ。敵の召喚魔法により城門は崩壊。防衛線も間もなく突破される。至急城から脱出を、と。お前達はそのまま姫の護衛の任に付け。指示は……そうだな、リージェス、貴様がやれ。逃走経路は事前に打ち合わせた通りだ」

リージェスは指名された事に一瞬戸惑いを見せるが、次には力強く頷く。

「わかりました。でも、ウィル隊長たちは」

「早く行け、時間がない」

リージェスの言葉を遮り、ウィルは語気を強める。

「……で、ですがっ」

逡巡しているリージェスの腕を、キールが掴む。リージェスはキールを見て、再びウィルの顔に視線を戻す。師と愛弟子の視線が一瞬交錯する。その眼差しは決然とした拒絶の意、そして隠し切れぬ憂いを帯びていた。

「わかりました。御武運を」

リージェスは唇を噛みながらもウィルから視線を外す事なく、やっとそう言っで一歩下がる。それを機に三人は振り返り、王宮へと続く階段の方に走っていった。

ウィルと周りの兵達は、誰一人、何の言葉も発する事なく、彼らの後ろ姿をただ見送っている。これが彼らとの今生の別れであることを、それとなく理解していた。

「……すまないな。お前等まで逃がしてやれなくて」
三人の姿を見失ってから、ウィルが周りの兵達に詫びた。しかし、
彼等から返ってきたのは暗さをみじんも感じさせない言葉だった。
「何言つてんすか、兵士になったその日から死ぬ覚悟は出来てます
って」

「その通りだ。ウィル隊長、一人で背負わないでくれよ」
「数だけの連中にひと泡吹かせてやりましょう」

死を目前にしても、兵たちは皆笑っていた。ウィルが優秀な指揮
官として、兵達に心から慕われている証だった。兵の信頼に、その
覚悟に、ウィルは目頭が熱くなつたが、ぐつと堪えて言葉を紡ぐ。
「そうだな、戦の勝敗は決したが、あいつ等を無事に逃がす勝負ま
で譲るわけにはいかん。剣に生きた我らの最期、我らの手による勝
利で添えるぞっ」
ウィルの激励に部下たちが各々の武器を掲げ、雄叫びを以って応
えた。

粉塵が風に吹き消されて視界が開けるや否や、敵軍の後方に控え
ていた騎馬隊が巨大な土煙を上げて、こちらに突撃してくるのが見
えた。

ただでは殺らせん。

「敵騎兵を階段で迎え撃つ！ 全軍後退するぞ！」
ウィル隊長以下数十人は指示に従い、リージェスたちの上がつて
行った王宮へと続く階段まで移動する。彼らは長い階段の途中に陣
取り、悲壮な覚悟を胸に、味方の数十倍もの敵兵たちを待ち受ける
のだった。

其の四　　エアリアの姫君（裏）

王宮に入ったりリージェスたちは、正面にある二階への階段を駆け上がる。走っているリージェスたちの視界を、銀であしらった馬の彫刻が施されている扉が席卷してくる。そのままの勢いで門を開こうとするキールの前に、エアリア軍の鎧を着た兵が両側から中央に寄るように立ちはだかった。

「待てっ、所属部隊を名乗り、要件を言えっ」

門前で近衛兵に呼び止められたキールはすかさず近衛に言い放つ。「ウィル隊所属、キール」ミッドロウだ。ウィル隊長にネフェリイ様を脱出させるようにと命じられた。至急お伝えねばならない」

近衛たちの顔が即座に色を失う。

「な、何だと。では他の兵達は」

「帝国軍が繰り出した得体の知れない巨大な骸骨のせいで、ほぼ全滅よ」

続くリーシェの言葉に、近衛は愕然とする。持ち堪えられそうな手応えを昨晩の作戦会議で掴んでいただけに、信じられないといった表情だ。もつとも、先程の帝国軍の骸骨を生で見ているれば納得もするのだろうか。

「……ウィル隊長達が少しでも食い止めようと残ってくれているが、いくらなんでも数が足りな過ぎる。わかったら急いで扉を開けろっ」
唾を飛ばしながら喋るキールの迫力に押されて、近衛たちは急いで門を開く。三人は頷き合つと、大広間の中へ颯爽さつそうと駆け込んで行った。

規則正しく両側に一列に並ぶ白く滑らかな円柱。それらが後ろへと流れて行くのを尻目に、大きな足音を気にする様子もなく王の間に走り込んで来た三人を、王の間に集まっている者達が見咎めた。そしてやはり数人の近衛が三人の行く手を塞ぐ。こんな時にまでお役所仕事か、と三人は苛立ちを募らせた。

「待てっ、所属部隊を」

「うるせえよ。緊急時に面倒な行程を踏んでいる暇はねえっ」

邪魔な近衛を肩で押しつけ、リージェスは正面の立派な椅子に座っている銀髪の美しい少女の5m程手前までつかつかと歩み寄ると、そつと傳かすいた。

「お初にお目にかかります、ネフェリイ様。ウィル隊に所属しているリージェスと申します。ウィル隊長により、ネフェリイ様の脱出をお助けせよ、と仰おほせつかりました」

ネフェリイはリージェスの言に目を瞠り、王座からすくつと立ち上がる。薄い桃色のドレスに身を包んだその姿は、可憐さと相俟あいまつて微かな威厳を内包している。

「ウィル隊長がそんな事を？ ……他の兵たちはどうなったのです」
戸惑いを隠しきれぬ少女の蒼い瞳を見て、リージェスは微かに唇を噛む。

「今日まで生き残っていたエアリア兵は……ほぼ全滅しました」
ネフェリイはリージェスの言葉に息を呑んだ。周りにいる姫の側近と思しき者たちも動揺を隠し切れない様子だ。それに気を留める間もなく、尚もリージェスは早口でまくし立てる。

「残念ながら帝国軍の、おそらくは召喚魔法によって城門一帯の建築物が破壊されました。大軍を食い止められる唯一の場を失ったのです。……それでもウィル隊長達が残ってくれていますが、奴らがここに辿り着くのも時間の問題です。どうか賢明なご判断を」

ネフェリイは顔を蒼白にし、立ち尽くす。僅か十七歳にして体験するこの修羅場は心中察するに余りあるが、それでも急がないとま
ずい事になる。

「ひ、姫様。早く抜け道へと向かいましょう」

小太りの大臣らしき男が慌てふためいてそう言った。今まで戦場にいた三人はそのうろたえっぷりを冷ややかに眺めるが、再びネフェリイに視線を向ける。

「姫様。急がないと」

「行かないわ」

昂然と、ネフェリイがそう言い放つのを聞いて、ウィル隊三人を含む周りの者たちは目を見開く。

「ひ、姫様。何を仰っているのです。今この時にも獣の様な帝国兵がここに迫って来ているのですぞ」

わなわなと身体を震わせて大臣はそう言った。

「逃げるなんて嫌よ。死してこの国を守ってくれた兵たちに申し訳が立たないわ。未熟であろうと、私はこの国の最高権力者。国が滅ぶと言つのならば、運命を共にするのが当たり前よ」

それを聞いた大臣は、もはや忌々しげにネフェリイを睨んでいる。額にしわが何重にも浮き、もはや威厳の欠片も見受けられなかった。「ならば勝手になされよ。僕は行くぞ」

「……ご自由に」

大臣はその場に唾を吐き捨てると憤然と王座の横に向かい、そこに立つと屈んで敷石を外す。その瞬間、王座の斜め後ろにあったキヤビネットが横にずれ、ぽっかりと暗い通路への入り口が姿を現した。ウィルの言っていた抜け道だろう。

大臣は急いでその中に入って行く。それに釣られて、何人かの者

達が後ろめたそうな表情をしながらも何も言わずに後に続いていた。

「……醜いのね、人って」

ネフェリイの呟きが、周りの者たちの耳に届く。人は誰しも差し迫った状況に陥ると、その本性が自ずと明らかになるものである。別れの挨拶すら交えぬ彼らの対応は醜く映ったかもしれない。だが、命の危険を敏感に感じ取った彼らを一概に責めるのも、また憚はばかられた。

ネフェリイもそれをある程度わかっていたのだろう。俯いて息を吐き出した後、彼女は周りの者達を見渡すと、努めて明るく振る舞った。

「今まで尽くしてくれて本当に感謝しているわ。さ、貴方たちもあそこから脱出なさい」

ネフェリイがそう言うのを聞いて、今度は傍らに控えていた女中が口を出す。ネフェリイよりやや背が高く、黒褐色という表現がしっくりくる艶やつやかな髪がピンで纏まとめられている。

「僭越ながら、姫様を置いて行くわけには参りません。姫様がどうしても残ると仰おつるならば、私もお供させて頂きますわ」

今度はネフェリイが目を見開いた。

「ミシエル、何を言ってるのっ」

「幼少の頃からお勤めさせて頂いているのです。それくらいのがままは聞き届けて頂きます」

微笑んでそう言うミシエルに、ネフェリイは端正な顔を僅かに歪めた。

「あの、さ」

今まで黙っていたリージェスが口を開く。彼と長らく行動を共に

していたリーシェには、その表情に何かしらの決意が伺えた。

「何だかおかしな方向に話が進んでいるけど、やめてくれないかな。そういう、無駄に格好付けるの」

無駄、と断じられたネフェリイは眉をびくりと動かし、次いでミシェルからリージェスへと視線を転じる。

「初対面なのに随分な口の利き方ね。リージェス……だったかしら」
リージェスはネフェリイの視線を真つ向から受け止める。

「あなたの考え方なんかどうだって良い。それよりも先に俺たちにあんたの護衛を命じたウィル隊長本人が身体を張っている意味を
考える」

それを聞いて、ネフェリイは僅かに気まずそうな表情をする。しかし、再び口を開く。

「……兵の中にも、大切な家族がいる人だっている。……それなのに国の為に、私たちの為に戦ってくれたのよ。その犠牲に報いないでどうすると言うの？」

「……考え方の相違だな。……逆に訊くがあなたが死んで誰が報われる？ あなた一人の死如きで死んだ者たちが浮かばれるとでも？

思い上がりも甚だしいぜ、お姫様」

控えていたリーシェとキールの顔色が変わる。流石にそれは言い過ぎと思われた。周りを見ればネフェリイに辛辣な言葉を浴びせかけたリージェスに対し、近衛達が剣を抜こうとしているのが見える。一瞬二人は修羅場を覚悟した。場合によっては、兵達を始末してもこの場を切り抜けなければならない。

しかし、その雰囲気は即座に削がれた。ネフェリイは顔を紅潮させ、口を真一文字に結びながら段差の低い幅広の階段を下りる。そのまま、つかつかとリージェスに歩み寄っていく。長いスカートの裾が引き摺られていることにも構わずに。

彼女は三人の目と鼻の先で立ち止まった。
「あんだ、もう一度言ってみなさ」

ドスッ

ネフェリイは最後まで言い終える事が出来ず、いつの間にか立ち上がっていたリージエスの腕にぐらりと寄りかかった。その場に居合わせた者たちはポカンと口を半開きになっている。何が起きたのが直ぐには理解できなかったようだ。リージエスはあるうことか、ネフェリイの鳩尾みそおちを殴りつけていた。

其の五　　〜王城脱出（裏）〜

ネフェリイ姫の護衛についたリージェスら三人は（一つ例外を除いて）ウイルの指示通り、姫と姫の僅かな供を引き連れて城の抜け道を進んでいた。

幸いにもウイルたちが時間を稼いでくれたおかげで、帝国兵が王の間に辿り着く前には姿を消すことが出来ていた。敷石の下にある仕掛けに気付くまでにはそれなりの時間を要することが予想されたため、追手が放たれるまでには、今少しの時間的猶予があると思われた。

二人並ぶのがやつとくらのいの、螺旋状の下り階段が続いている。

下っているうちに段々と方向感覚を失ってくる。やつと階段が途切れ、続いては真っ直ぐなトンネルが姿を現す。相当奥行きがあるのか、視界の先には闇しか見えない。

リージェスたち一行は、追っ手が迫っていないか、チラチラと後ろを気にしながら歩いていく。ある程度の距離を進むと、途中で人工的な石造りの壁が途切れ、土壁に変化した。塗り固められた土壁で出来た洞窟はかなり湿り気を帯びていて少し黴臭い。文字の彫られた楕円形の石が一定の間隔で土壁に埋め込んである。それらが薄らと青白い光を放っているため、歩くのに困らない程度の視野は確保できている。

リージェスの背にはネフェリイ姫が背負われている。彼が歩を進める度に、銀色のウェーブがかかった長い髪が時計の振り子のよう揺れる。主張の過ぎぬ程度に高い鼻、今は閉じられている瞳の色は蒼く深い。その美貌は大陸にも広く知れ渡っており、どこぞの雑

誌社が独断と偏見で勝手に決めた「美姫十選」にも名を連ねている。姫をおぶって歩いているリージェスを見ながらリーシエは、先程のリージェスの啖呵たんかを思い出していた。あろう事か姫に暴力を働き、気絶させて担ぎ上げたリージェスを、周りの殆どの者は口汚く罵った。それをさして気に留めた様子もなく、リージェスは気を失った姫を背負うと、途端に表情を険しくして一喝した。

『御身（おんみの盾）となった兵達の犠牲と覚悟を踏み躪にじる気ならば、たとえ姫だろうと許さん。その上で、まだ命を無駄にしたいという者がいるならば止めはしない。ここに残って勝手にくたばるがいい』

こつとも言われれば、周りの者たちも黙り込み、付き従うしかなかった。結局のところ、リージェスの無礼は「姫に生きて欲しい」という思いの裏返しなのだ。

リージェスは、普段滅多なことでは大声を出さない。しかしてその迫力は、リージェスの一番の理解者であるリーシエですら震え上がらせるものであった。同時に、そんな彼を少し誇らしくも思えたのだが、リーシエ自身おぶって貰った記憶が殆どないため幾分複雑な胸中でもあった。

一方のリージェスは鼻息を荒げて真つ先に道を進んでいたが、内心では、姫に狼藉ろうじやくを働いたとして、後で死刑を宣告されるかもしれない、などと気を揉んでいた。それでも、自分のした事に後悔はしていない。もしあのまま残って姫が捕らえられるような事があれば、残忍な性格で悪名高いブラージュウスにどんな酷い目に合わされるか、容易に想像が付いた。それこそ、残ったウィルたちが浮かばれない。

「リージェス、また扉だよ」

「だな、同じように門かぬまをかけてくれ」

そう言われるや否や、リーシエは立ち止まり、最後の者が通つたのを確認して、分厚い鋼鉄の扉を思い切り引つ張る。すると、少しずつ扉が閉まつていく。こういつた扉が、ここに至るまでにも何箇所かあった。最悪の事態をも想定した脱出経路は、敵の追跡を振り切るために徹底した作りになっていた。リージエスは、その工夫を見て感心しきりだった。敵がここに至るまでには、少なくとも我々の使つた時間の倍を要するだろう。

リーシエは扉を引つ張りながら、自分が必死に引つ張らないと動かないくらい扉が重くて助かつたな、と安堵していた。真つ先に逃げたあの者たちなら、少しでも助かる率を上げるために、自分たちが動かせる扉なら閉めたのでは、と考えられたからである。

更に先に進むと、大空洞に出た。壁に埋め込められた石からの光が、高い天井から垂れ下がる鍾乳石に乱反射している。光の当たる角度、或いは光量の増減によって淡くも様々な色彩に変化していた。周りの者達は「ほう」と感嘆の息をついた。こんな状況でなければ、暫くこの場に留まつて、この幻想的な光景をゆるりと眺めたい、そう思わせる光景だ。

少し名残惜しむかのように天を仰ぐと、リージエスは再び皆を先導する。

更に一時間ほど歩いただろうか。慣れない緊張感と疲労で姫の使用人達が息を切らし始める頃、奥に人工的な石階段が見えた。上に向かつて広がる様に螺旋を描く階段を、一行は肩で息をしながらゆっくりと登つていく。程なく一筋の光が差し込んでいるのが見え、外が近いのだとわかる。安堵か、それとも疲労によるものか。誰かの大きな溜息が、リージエスの鼓膜を震わせた。

じめじめした洞窟から外に出た一行は、茂みの中から周りに帝国兵の姿がないことを確認する。久方振りの外光が目には焼きつくようであった。太陽は西に座し、空には仄かな赤みが差している。草を掻き分けて開けた場所に出ると、彼らは思い思いに身体を伸ばし、或いは深呼吸をして体を解きほぐしていった。

どうやらそこは、王城の北に位置する、山を一つ隔てた小川のほとりのようであった。川のせせらぎが耳に優しい。向こう岸の奥に見える草原には、菜の花が所狭しと咲き誇っている。

「それで、これからどうするのだ」

共に脱出した、大柄な近衛兵の一人がリージェスに訊ねた。

「どつて言われてもね。もうエアリア城下は敵の支配下だし、とんずらするしかないだろ。一先ずは北のゴルフレッドに行く。ウィル隊長にも、そう指示されている」

その名前を口にした途端、無精髭のウィルの顔が脳裏を過ぎる。

リーシェとキールも同様だったのか、僅かに俯いた。

リージェスとしては少なからず複雑な心境だった。本来、自分がここにいるはずはなかった。当初の予定ではリーシェさえ逃がせれば、ウィルたちと運命を共にするつもりだったのである。それが出来なかった後ろめたさ故に、リージェスは普段よりも苛立っていた。ネフェリイに対する数々の無礼にも、或いはそれが根っこにあったのかも知れなかった。

結局、あれが遺言になっちまったな、とリージェス目を瞑り、次いで頭を振ってその姿をかき消した。自分たちはまだ安全圏にいるわけではなかった。

「どこかを頼るのならば、テルネシア帝国に敵対する東側の国の方

が
「別の近衛兵が口を挟んでくるが、今度はキールが首を振る。
「あの猛威はそう簡単には止まらない。連中と対等に戦える勢力は今のところ存在しないんだ。それに、東に行くには帝国の支配下にある領土を通らなきゃならない。足手まといがいなけりゃ、まあ行けるんだろつが」

そう言葉を切つて、キールは姫と側近たちに視線を移す。その態度が癪しやくに障さわつたのか、近衛兵数人がキールを睨にらむ。

「何だどつ、姫様をお荷物呼びわりするとは、いくら我方の兵とはいえ許さんぞつ」

キールはいきり立つ近衛に視線を移すと、やれやれと溜息を付く。「何言っているんだか。お荷物の中にはお前らもしつかり」

瞬間、リーシエがキールの脇腹を肘で軽く小突き、キールは二の句を継げずに腹を両手で押さえて崩れ落ちる。

「は、ぐおう……」

「ややこしくなるから、あんたは黙つててっ」

リーシエは、膝を付いて産卵中の亀よろしく悶絶もんぜつしているキールに辛辣しんせつな言葉を吐き捨てた。

お気の毒に。リージェスは安らかに眠れとばかりに、キールに向かって冥福を祈る印を小さく切る。彼の潤んだ目だけが「勝手に殺すな」と言っているようにも思えたが、多分気のせいだ。

「まあ、でもさ。正直言つて、非戦闘員の姫様達を連れながら監視の目を掻い潜ひそつて東の諸国に落ち延びるってのは、非現実的だと思わない？」

リーシエは近衛に向き直るとそう言い、彼らは沈黙する。

「それに、初めからブラージウスと戦っていた東側が、中立を保つ

ていたエリアの俺達を快く保護してくれるとも思えないぜ？ 見ようによっては日和見で優勢な方に付こうと伺っていた、と疑われなくても仕方がないからな」

リージェスが付け加える。

「……で、では、皆の敵討ちは、国の再興はどうするのだっ」

搾り出すような大柄の近衛兵の言葉を、リージェスはあっさり斬り捨てる。

「敵討ちとか、国の再興とかってお前、簡単に言っけどな。そのお題目を背負うのはこの細っこい姫様なんだぜ。こうなっちまった以上、再興とかよりも普通に生活出来る様取り計らった方が、彼女の幸せのためじゃないか。それが本当の忠臣って奴だと思わないか」

そう言っつて、木陰に座っているミシエルの膝枕で、寝息を立てているネフェリイ姫を顎で示す。近衛たちはリージェスに信じられないといった表情を向ける。

「……まさか、諦めると言っつのか」

諦めるとは人聞きが悪い。でもまあ、諦めが肝心な事は人生往々にしてあるが。リージェスはその本音を隠し、彼らを慰める言葉を口にする。

「そうは言っていない。今は安全を最優先して動くべきだ、と言っている」

近衛兵の眼光が揺らいだ。

「……どうやら、いつまで立っても平行線なようだな」

大柄な近衛兵は、腰の剣を抜き放つ。周りの四人の近衛兵は一瞬戸惑ったものの、それに続いて剣を抜く。磨き上げられた刀身に夕日が映る。リーシェは険しい顔をして近衛兵達に向かって構えるが、

リージェスはどく吹く風、のんきに欠伸あくびなどをしている。
キールは　　まだ産卵中のようだ。使えない奴、とリーシェは密かに呟く。

「ふああ、何のつもりでござんすか」

欠伸と共に浮かんできた涙をパチパチと瞬まはたきして馴染ませながら、リージェスはどこかのんきに近衛に話しかける。

「お前たちは消える。姫は我々がお連れする」

リージェスはハンと鼻で笑う。

「どこに連れて行くって？ お前らの頭の構造じゃ、あの世に行くのがせいぜいだ」

リージェスは近衛たちに構わずミシエルの方へ歩み寄り、寝ているネフェリイの脇に手を差し入れ、そっと抱える。屈んだ状態から膝を伸ばして「よっこいせっ」と再び背におぶる。

「さ、とつとと行くぞ」

そう言って歩き出すリージェスを見て、近衛の一人が声を荒げる。

「おい、貴様、まだ話は終わって」

リージェスが得意気に振り返る。その口元には何故か笑みが浮かんでいた。

「何だ、お前ら姫様に向かって剣を向けるつもりか」

ほれほれ、と身体を揺らしてリージェスは挑発した。おぶわれている姫の体も右へ左へ揺れる。

「な……っ、貴様、卑怯だぞっ」

焦った近衛たちが語気を荒げる。

「ちよつと、リージェス。あんま揺らしたらお姫様起きちゃうよ？」

リーシェも少しばかり非難の目を向ける。

「あん？　姫様を戦争の道具に担ぎ出すお前等は卑怯じゃないのか」

リーシエの忠告を無視し、身体をふらふらと揺らしながらリージエスと言う。

「……ぐっ、せ、正義の為には時として犠牲が伴うものだった」
近衛の言い分に、救えない、といった感じでリージエスは目を瞑り、首を大きく振る。

あつ、と誰かの眩きが聞こえた気がした。

「お前ら、頭冷やして良く考えて見る。お前らの主張するせい……ぎゃああああああつ」

突如リージエスが悲鳴を上げる。周りの者は目を見開いてリージエスを見る。

「……っ、貴様らっ、リージエスをよくもっ」

リーシエは殺気立ち、近衛兵に向かつて剣を抜く構えを見せる。

「ま、待てっ、まだ我々は何もしてないぞっ」

今にも飛び掛ってきそうなリーシエに、近衛たちは慌てて両の掌をリーシエに向けながら弁明する。

「……見え透いた嘘をっ」

唸るように威嚇するリーシエの眼光が冷たく光る。カチャリと音がした。剣柄が鞘から僅かに浮いている。

「……おい、リーシエ」

やっとリーシエの一撃から立ち直ったキールが、リーシエの肩を指先で突っつく。

「何よっ、ぼけっとしてないでこいつら殺んのに手え貸しなさいっ」
ち、血の気が多いなあ……。

リーシエの剣幕にたじろぎつつも、キールは言葉を続ける。

「いやさ、そうじゃなくて、あれ……」

「何よもっっ」

リーシエが訝しげにキールの指差した方角を見ると

いつの間にか目を覚ましていたネフェリイが、その小さな口を一杯開けて、リージエスの首筋に噛み付いているのが見えた。

其の六 く新しい暮らし(裏)く

冬の間、深い雪に覆われるゴルフレッド。そこは先帝アルイール所縁ゆかりの町でもある。彼は正妻の子ではなく妾の子であり、長男というわけでもなかった。そのため、彼が皇帝の座に就くと思っていた者は殆どいなかった。幼少期を雪国で伸びやかに過ごした彼は十一才の頃、母の病死と共に父皇帝ディファール・テレジアの側近に引き取られることになった。そこで初めて、文武双方に非凡な才を見出されたのである。

彼には兄が二人おり、それぞれに優秀であったが、ディファールはアルイールの恐るべき才能を愛した。彼は弱冠十七才で、どんな猛将にも引けを取らぬ程の強さを身に付けており、深い洞察力をも垣間見せた。

父皇帝の寵愛こあいを一身に受けていたアルイールだったが、二人の兄はそれを妬む素振りは見せなかった。或いは、衆目を気にしたというのも少しはあるのかも知れない。アルイールを後継者に、という声は日増しに高まっており、序列を盾に皇帝に居座ろうとも、人心を掌握できないのは目に見えて明らかであった。ある日、兄たちは二人揃って父皇帝にアルイールを後継者にしよう申し出で、父皇帝はその意を汲み取った。

かくして、アルイールは弱冠二十一歳にして父から皇帝の座を譲り受け、亡くなるまでの二十三年間、その手腕を振るうことになったのである。

883年 5月3日

エアリアの城が落とされてから二週間ほどして、リージェス達は

エアリアより300km程北方の都市、ゴルフフレッドの街に落ち延びていた。ウイルの判断は正しかったようで、ブラージュウスは自軍領土に程近い中立都市よりも、アンドレイ側に付いた大陸東側の各地方都市を潰すのに躍起やっきになっていた。

その一方で、近衛兵達とは脱出したその場で袂たもとを分かっていた。目覚めたネフェリイが東国へ亡命するという彼らの提案をきっぱりと否定したのだ。わざわざ自分という争いの火種を他国に持ち込むのを、彼女は由としなかったのである。

彼らと別れる間際、彼女は自分の手にはめていた指輪を路銀代わりと言って渡そうとしたが、それを見てようやく彼らも自分達の過ちに気づいたらしい。その指輪はネフェリイの母の形見だった。彼らはただ頭を下げ「お気持ちだけ受け取っておきます」と言ってその場を立ち去った。

リージェスを含む元ウイル隊の三人とエアリアの姫であるネフェリイ、彼女の側仕えのミシエル、そして専属家庭教師のシルドは、密告を警戒して地方領主に協力を求める事はせず、街の中心から少し離れた場所に空きのある広めの一般家屋を買い取ってそこに仮住まいすることにした。

協力を求められなかった理由わけは、ゴルフフレッドからの援軍が、エアリアの城が陥落する以前に引き返していたらしい事が、街の者との会話でわかったためであった。信用ならぬ者に己の身柄を預けるほど愚かしい事はない、というわけだ。

何はともあれ落ち着き先が見つかり、六人での共同生活が始まった。庶民の暮らしをするに当たり一番大きな懸念であった「王宮暮らしをしていたネフェリイが適応できるか」という問題はあっさりと解消した。

「美味しい。リーシェって料理上手なのね、私も見習わなくちゃ」
ネフェリイは、リーシェの作った素朴な料理をこの上なく満喫していた。意外にも彼女は供の二人よりも早く新生活に順応していたくらいだった。

ネフェリイの母は彼女を産んで直ぐに、エアリアを治めていた父も数年前に他界していた。そのため早くに自立心が養われたのか、彼女は身の回りの事を一通りこなせている。エアリアではネフェリイの父が領主になった頃から質素儉約に努めていた。王宮にいる時も贅沢と言える贅沢はしておらず、舞踏会や調度品に充てられていた税金は、民たちの生活を改善するための費用に向けられていた。その甲斐あって、エアリアの兵や民達の信望は殊更厚かったようだ。だがその代わりに、おそらく上の者たちからは反感を買っていたのだらうとも推測できた。我先にと脱出した、王の間にいた連中の忠誠心を鑑みれば、察することは容易だった。

「こ、光栄です。 姫様」

照れ笑いを浮かべるリーシェに、ネフェリイは畳み掛ける。

「姫様、だなんて他人行儀過ぎない？ とうかほら、もう私は姫でも何でもなし。ネフェリイって呼び捨てにしてくれて構わないわよ。ね、そうしましょうよ」

「は、はあ……」

「最後まで姫様のお供に」と付いて来た、出来るメイドのミシエルと、専属教師のシルドは、ここに来た当初こそ渋い顔をしていたが、あまりに奔放な彼女の様子を見て「もうこのままでもいいか」と半ば諦め、半ば納得している風でもあった。

「仮にも、姫様はテルネシア帝国の正統な血を引いておられるお方です。呼び捨てにするなど」

向かいの席に座っているリージェスが口を開くや否や、ネフェリイは普段の可憐な顔からは想像もできない眼力めちからで、リージェスをギロツと睨む。

「貴方には言っていないせんっ」

怖っ、ていうかまだ根に持っているのかよ。

怒鳴られたリージェスはがっくりと項垂うなだれる。首の後ろには、二週間以上前に噛まれた姫の歯型が未だに薄っすらと残っていた。

何も説明せずに、否いや、「今から貴方の鳩尾をぶん殴いって気絶させます」という説明を納得してくれたとも到底思えないのだが、いつの間にか気絶させられ、気が付いたら城からかなり離れた場所までおんぶされていた、というのは気の強いネフェリイにとってかなり屈辱の出来事だったらしい。意外と根に持つ性格らしく、今も尚、その怒りは燻くすぶっているようだった。

「姫様、リージェスの事そろそろ許してやってくれませんか？　こいつが無礼を働いたのは確かですが、あの時は本当、ああするより他が無かつたんですよ」

助け船を出したのはキールだった。碧色の柔らかそうな長髪で、眼鏡をかけている思慮深そうな二枚目だが、真面目そうなのは外見だけだ。女好きで酒好き、風来坊を絵に描いたエルフ、のようであるが、実は相当に腹黒い。それが彼に対するリージェスの評価であった。キールは、配属期間と見た目の若さから位置付けでは新兵であったが、魔法の実力に関してはウィル隊でも断トツだった。あからさまに素性が怪しい彼だが、リージェス達も人の事を言えたものではなかった。敢えて詮索はしていない。

「優しいのね、キール。その優しさがこれーっぽっちでもこいつに

あつたら、私も許してあげられるのだけど」

ネフェリイは親指と人差し指で作った輪っかに、見えるか見えな
いかわからないくらい隙間を加えた。ついに彼女にまでこいつ呼
ばわりされたリージェスだが、彼自身、何故こうまで嫌われている
のか腑に落ちぬ様子だった。

「姫様。もしかしてまだ、殴られた鳩尾みそめちが痛いんですか？」

リージェスが訊ねた。

「別に……そんな事は、ないわよ」

ネフェリイはぶっきらぼうに返事をした。

「なら、何でそんなに怒っているんです。殴った事は再三お詫びし
たじゃないですか」

「殴った事に対してじゃないわよ。……問題なのはその後」

あれ、前ではなく後？ 前なら色々失礼な事も言った気がする
だけど。

リージェスは記憶の糸を辿っていくが、何が嫌われる要因になっ
たのか全く心当たりがない。おんぶして運んだだけのような気がする。

「うーん、やっぱり心当たりがないな」

リージェスはそう言って、暫くの間、額に拳を当てて考える仕草
をしていたが、ネフェリイはその様子を見て、わなわなと拳を震わ
せていた。

「わ、私をおぶったでしょうっ」

堪えかねたのか、突然ネフェリイは叫んだ。リーシェとキールは
顔を見合わせている。

「え、ええ」

確かにおぶりしましたがそれが何か、とリージェスは怪訝な顔をす
る。

「ええ、じゃないわよつ。私のお尻触って、足も触ってっ」

顔を微かに紅潮させているネフェリイの言い分を聞いて、リージエスはやっとな得する。どうやら奥ゆかしい姫君は、自分の体に見知らぬ男の手が触れた事がお気に召さぬようであった。原因がわかったことでリージエスはやっとな堵し、やおら破顔する。

「ああ、なんだ。おんぶした事を怒っていたんですね。そりゃ気付かなかった、すんません」

サラリとそう言い放った双子の兄に対し、リーシエは？バカ兄貴？とでも言いたげな伶俐な目を向ける。キールも右に同じだった。

助け舟にお前自ら穴を開けてどうするんだ、というような表情をしている。そして、ネフェリイが席を立った。

「ま、別に減るもんでもなし。そんなに気にす」

パーン

小気味良い音がリビングに響く。

「……へ？」

いつの間にか右を向かされていたリージエスは面食らう。左の頬が段々とひりひりしてくるのがわかった。

言葉の代わりに、リージエスの頬に張り手を見舞ったネフェリイは、ぶるぶると全身を震わしながら口をキュツと結び、わざとらしく大きな足音を立てながら部屋を出ると、一つ目巨人の威容でズシン、ズシン、と階段を上がっていく。歩く度に屋敷が振動する。少しして、ドアを閉める大きな音が屋敷中に響き渡り、その音に皆が顔をしかめた。

「……なあ、謝ったのに、何でまだ怒ってるんだ？」

叩かれた頬を抑え、茫然ぼうぜんとしているリージエスの問いに、しかし答える者はいなかった。

其の七　く有能なるメイド（裏）く

883年　6月11日

リージェス達がゴルフレッドに来て一ヶ月半余りが経っていた。彼らはすっかりこの家屋に慣れ親しみ、ゴルフレッドの街にもたびたび外出するようになった。

今日は一人家に残ったミシエルが庭に出て、皆の洗濯物を物干し竿に干している。短く均等に刈り揃えられた見事な芝生と丸い庭木は、キールが風魔法を使ってやったものだ。それを一目見て、ミシエルはメイド技術向上の為にだけに魔法を学ぼうかと、今も真剣に悩んでいた。

梅雨の季節柄、この所は生憎の天気が続いていたが、久方振りの見事な五月晴れにミシエルは目の上に手を翳す。数秒ほどで手の平が熱を帯びる。もう日差しの強さは夏のそれだ。庭の日当たりのよい所にこしらえた花壇には桃色の薔薇が何本も咲いている。

茎が伸び過ぎてしまう前に植え替えた方が良いか。いや、その前に昼食を作る方が先か。仕事の段取りを頭の中で組み立てながら、レース付きの白いエプロンを身に纏ったミシエルは編み籠から濡れた衣服を取り出していく。後ろで結わえられている茶褐色のおさげ髪が、彼女の拳動に合わせて宙に文字を描く。

（あら、新しい下着。可愛いわね。この前出かけた時に買ったのかしら。リーシェさんって意外と着痩せするタイプなのよね、羨ま

しいわ。あー、これは姫様のね……うーん、もう少しでCに届くのだけど)

ミシエルは淡々と洗濯物を干していく。庭にある二つの物干し竿は木の柱の先端をU字に削り、それを二本土に打ちつけて丈夫な編み縄を通したただけの簡素な物だ。だからといって、別段使い勝手に問題はない。

ん、これは……いつけないっ。

キールのジャケットの内ポケットに何やら入っていたのに気づく。洗う前のチエックが甘かったか、と舌打ちをし、慌ててミシエルはゴソゴソと細い手を入れる。指の先端に何かが触れた。人差し指と中指で挟み、慎重に取り出す。

出てきたのが小銭だったことにホッと胸を撫で下ろす。もしこれが装飾品の類だったら、汚れをこすり落とす時に壊してしまっていたかもしれない。ミシエルは自分のこめかみの辺りをコツンと叩く。普通に考えれば、六人分の服ともなると洗濯するのも一苦勞であるのだが、そこは宮仕えをしていたミシエルである。姫だけではない、何十人分もの給仕の服も洗濯したことがあつたくらいだから苦にはならない。手際良く、手前側に下着を、奥側に上着やズボンを選び分けて干していった。

ふいに、庭にある茂みの奥がカサツと鳴ったのが聞こえた。辺りを見回してみると枝葉が靡なびいていないのを見ると風ではないようだ。ミシエルはゆっくりと音の鳴った方へに近づく。

膝を曲げて屈むと、ミシエルの腰の高さほどの茂みの下には、灰色の小さい仔猫が目を妖しく光らせていた。それを発見したミシエルの目も輝き出す。

「あー、可愛い猫ちゃんね。どこから迷い込んだのかしら」

ミシエルはおいで、と手招きを試みる。仔猫は警戒しているのか前足を突っ張るように後ずさり、一向に近づいてこない。

「いらつしゃい、怖くないですよー」

赤ん坊をあやすかのように、ミシエルは優しい目を仔猫に向けてる。しかし、やはり反応がない。

「ニャ、ニャアー」

ミシエルは猫の鳴き真似を試みる。すると、仔猫が僅かに反応した……気がした。

「ニャアー……ナオー……ナオーウ」

穏やかに、しかし少しでも本物に似るように、ミシエルは鳴き真似を続ける。すると、伏せていた仔猫がすくつと立ち上がった。

よしよし、もう少し。

段々と、その鳴き声の頻度が多くなってくる。ミシエルは様々な鳴き声で仔猫を呼ぶ。

「ニャーオ、ニャオーン、フニャーゴ、ニャフーン」

五月の日差しはその間もミシエルの背中に照りつけている。徐々に額に浮かんできた汗にも気を留めず、ミシエル猫は猫の気を引こうと鳴いている。情にほだされたのか、仔猫はついにこちらへ歩み寄ってきた。

「ニャオーン、ニャーオン、ニャーニャー、ニャンニャンニャッフーン」

鳴きながら両手を差し出すミシエル猫。しかし、仔猫はミシエル猫の手を通り過ぎ

「あの、ミシエル、さん？」

ビクツと身を震わしてミシエルが振り返る。するとそこには、いつの間にかリージェスが立っていた。左手には買物籠をぶら下げている。

「あ、あらいやだ、リ、リージェスさん……お、お早いですね。一体いつからそこに？」

しどろもどろになりながらも、ミシエルは何とか尋ねる。未だ心臓が早鐘を打っている。

「え、つと。……たった今ですけれど」

たった今でも、鳴き真似を聞かれていたのは間違いない。己の痴態を見られた気恥ずかしさと背中にジリジリと照りつけていた暑さが蘇ったので、ミシエルの体は一気に熱を帯びていく。ふと見ると、先程の仔猫はリージェスの足元にすり寄り、ひっくり返ってお腹を見せている。熱が体中に広がるのと反比例して、心中を寒々しい敗北感が埋め尽くしていった。

こ、こんなに頑張ったのに。

体が脱力し、感じている暑さが更に増す。

「ど、どうかしたんですか？」

「……な、何でもありません」

心配そうに気遣うリージェスに、ミシエルは小さな嘘を口にした。

二人は縁側に戻り、仔猫を板の間に乗せる。ミシエルが両手でわしゃわしゃと仔猫の腹を弄もよほると、仔猫は体を少しくねらせながらも降参のポーズを取り続ける。されるがままだ。

「ミシエルさんも、猫好きなんですね」

すっかり機嫌を取り戻したミシエルの様子に、リージェスは少し安心する。

ここですかー、ここが気持ちいいんですかー、と言いなながら、ミ

シエルは仔猫を揉みほぐすのに没頭していた。

「そりゃもう、大好きですよー。流石に王宮じゃ飼えませんでしたが、これどねー。この子、野良かしら。だったらここで飼っちゃうんですけれど」

そう言いながらも揉む手を緩めることはない。ゆっくりと緩急をつけて、ミシエルは指先をまるでピアノを弾くかのように滑らかに動かす。猫はもはや恍惚とした表情を浮かべている。そんなにマツサージ上手いのかな、とリージェスは少し猫が羨ましくなってくる。「リージェスさんも猫好きなんですか？」

リージェスは照れ臭そうに頭を掻きながらも頷いた。

「まあ、好きですね。何か見てると落ち着くっていうか、癒されます」

即座に、わかります、とミシエルが力強く同意する。

「前から気になっていたんですけれど、リージェスさんは、何故私とシルドさんにだけ敬語を使うんですか？ 姫様にすら普通に話しかけるのに」

ミシエルは不思議そうな目をしながら、そう言った。

あまり意識した事がなかったのか、リージェスは暫く考え込んだ。「うーん、多分年上である事と、逆らっちゃいけない雰囲気か何かがあるんじゃないでしょうか」

それを聞いてミシエルは意地悪く微笑む。

「可愛い顔して意外と、この口は失礼なことを言いますねー」

ミシエルは猫を両手で掲げ、リージェスの顔にずい、と近づける。脱力した猫がニャーと鳴く。

「す、すいません。勘弁してください」

この通り、と拝むように手を合わせるリージェスを見て、ミシエルはさも可笑しそうに笑い、リージェスも釣られて笑った。

午後になると涼やかな風が吹き始め、太陽に薄くかかった雲が日差しを幾分和らげていく。すると暫くして、猫が眠たそうに縁側にごろりと寝転がる。目は瞑っているものの、そのピンク色の鼻は白いヒゲと共にひくひくと動いている。

リージエスは庭に目を移し、刈り揃えられている庭木と芝生を見て、唐突に思い浮かぶ。ミシエルが冷たい麦茶を入れて戻ってくるのと、リージエスはミシエルに話しかける。

「そう言えば、ネフェリーの髪切ったのってミシエルさんなんですよ。俺も今度頼んでいいですか？ 今度のネフェリーの髪型、凄く可愛かったです」

帝国関係者の一目に付かないよう、初めは屋敷の中に匿かくまわれていたネフェリーだったが、流石にいつまで閉じ込めておくわけにもいかず、本人の希望もあって、つい先日、ミシエルがネフェリーの長い髪の毛をバツサリと切った。

前は腰にも届きそうだったネフェリーの髪であったが、今は肩甲骨の辺りにまで落ち着いている。深層の令嬢という雰囲気だけはあったネフェリーが、縦に巻くような髪型になっただけで、随分と親しみやすくなっただけがしていた。

「勿論良いですよ。可愛く切って差し上げますわ」

随分と真つ直ぐに褒めたけれど、私だけでなく姫様にも言っただけならばきつと喜ぶのに、とミシエルは苦笑する。何分、父親が厳格な方であったため、同年代の男の子と話す機会は、ネフェリーにはそんなになかった。近隣で開かれている舞踏会にも、節約の為だ、と言っただけ出席しなかったのだ。

そんな境遇もあって、ネフェリーは年の近そうなりージエスの事を、良くも悪くも強く意識している。ただ、本人がそれに気付いて

いるのかどうかはわからない。今のところは、まだ若干悪い印象に傾いているようだが、出会いが会いだっただけに致し方ない部分もあるだろう。ミシエルの目から見ても彼の性格は相当良い方だ。正義感が強いし人を思いやる心も持ち合わせている。顔は言わずもがな、そのうちに仲直りは出来ると確信していた。

「か、可愛くはちょっと。出来れば格好良く、お願いします」
困ったようにそう笑って、リージェスは麦茶を一口飲む。

ミシエルは真剣な目でリージェスを見つめる。その目は仕事モードに戻っている。

この娘、じゃなかった。美少年を格好良く、か。

ちゃんと考えると意外と難問かもしれない。今は自己流で右側の髪を三つ綱にしているようだが、それでも美人系だ。

「髪は短くしても大丈夫ですか？」

そうすれば、いくらでも幅が広がる。しかし、ミシエルの問いにリージェスはうーんと考え込む。

「出来れば長いままの方がいいかな。いずれ旅を再開した時に、ちよつと役に立つんです」

ミシエルは眉を上げる。

「長い髪が旅に役立つんですか？」

訊ねながら、ミシエルも白地にピンクのハートが描かれているコップを口に運んだ。彼女の意見としては、旅をするならば長髪は邪魔にしかならないと思うのである。

「あー、んー、……正確に言うんですけどね」

リージェスは歯切れが悪いが、ゆっくりと口にする。

「女装出来るから」

瞬間、ミシエルは飲んでいた茶を全部噴き出した。やっぱりか、

とリージェスは頂垂れた。

「ゲホッ、ゴホッ、す、すみません。つい……」

咽^{むせ}たミシエルは謝りながらも、床に散った茶をハンカチで丁寧に拭きとっていく。

リージェスも釣られて下に視線を移すと、床には殆ど埃が落ちていない。毎日のように家事を完璧にこなすミシエルの仕事振りにリージェスは改めて感服した。

零した茶を一滴も残さず吹き取ると、ミシエルは改めてリージェスの顔を見る。彼のように鮮やかな青髪を持つ者は殆どいない。それだけで気品を醸^{かも}しだしている。まつ毛はやや長めで真ん中に居座る瞳は黒に近い藍色。眉は長細く、何より表情が柔らかい。

なるほど、これなら楽勝ですね。

確かに、リージェスなら女性に化けるのは容易である。体系もそこまで筋肉質には見えないし、髪を下ろしてスカートを履けば、リージェスを大分見慣れたミシエルでも街中では気づくことができるかは怪しいところだ。胸に詰め物でもされてしまえばまず見破れない。

ミシエルはリージェスから僅かに視線を逸らしつつ、認める言を口にする。

「ま、まあ確かに趣味は色々あっても」

「しゅ、趣味じゃありませんってっ」

慌ててリージェスは弁解した。

「実を言うと、四年くらい前までは短くしていたんですよ。ただ……例えばですが、酒場なんかだと情報を集めるの、リーシエの独壇場だったんですが……」

ああ、なるほど、とミシエルは納得する。確かに、むさ苦しい男達に情報を聞き出したりするのは若くて綺麗な女性の方がすんなりいくのだろう。その分、危険も増すだろうが。

「リーシエ本人はもう気にしてないって言うてるけど、結構危ない目に遭った事もあるから。まあ、それは剣術をちゃんと習う前でしたけどね」

声のトーンが低いのを考えると、リージェスはそのことになりに自責の念を感じているようだった。ミシエルは深く頷く。

「つまりはリーシエさんの危険を代わりに被りたい、と言うことですな？」

リージェスはきまり悪そうに頷く。

「リーシエの奴には黙っといってください。いちいち気にするかもしれないんで」

普段、リージェスはあまり物事を深く考えていないように見えるが、意外と繊細に物事を捉えているのだと知って、ミシエルは半ば感心し、半ば微笑ましかった。

「わかりました。エリアにそのメイド在りと言われたミシエル」
「ハーレーの名にかけまして、長い髪で格好良く、して差し上げますわ」

ミシエルは太鼓判を押し、次いで片目を瞑る。リージェスの口元に再び笑みが戻った。

其の八　酒の席にて（裏）

リージェスたちが住んでいる屋敷から少し北に位置する雑居。小さな酒場の前に立っていたキールはドアノブを握り、軽く力を込めた。

「いらつしやいませ」

バーテンダーの落ち着いた声が耳に届く。中に入るとまず目に入るのがバーカウンターだ。分厚いオーク板に鑪やすりをかけただけの素朴な物だが、実際に手を置いてみると中々悪くない。後ろの酒棚には各国から取り寄せたと思われる様々な酒瓶がズラリと並んでいる。ボトルの形一つとっても色々あり、中には船や動物などをモチーフにした物も存在する。

入り口から一番遠い端つこの、トイレに近い席がお気に入りだったのだが、生憎と今夜は埋まっていた。人はそんな些細なことでも意外と落胆する。例えば食料品売り場で、どちらの列の会計が速いかを迷い、並んだ後で期待が裏切られる。例えば、残り一つの商品と思って買った物が補充すくされている。そんなくだらないことで。

キールは僅かに肩を竦すくめると、ほぼ真ん中の空き椅子に腰かけた。少しして、氷水の入ったグラスと数種類のナッツが入れられた小皿が運ばれてきた。

此処の酒場は印刷工場が近いらしく、通常朝に配られる新聞が、日付が変わって一時間もすると届く。周りにも、それを目当てで来ている客たちが何人かいるようだ。中には、明らかに堅気でなさそうな連中もいる。

「お世話になってます。斜陽新聞です」

縁起でもない社名を口にしながら、新聞配達の可愛らしい少年がそそくさと酒場の中に入ってきた。ボックス席に座っていた、露出

の多い服を来た若い女性が、少年に向かって投げキッスする。それを見て、少年は思わず顔を赤くした。からかわれた少年は、俯きながら入り口に程近い籠に十束ほどの新聞を突っ込み、失礼しました、と言つて慌てて退散する。いい社会経験しているな、という嘲笑ちやうにも似た野次がキールの耳に入った。

キールは立ち上がると他の客と同じように、籠に入れられた新聞を掴む。キールは第一面に視線を走らせ、直ぐに顔をしかめた。

早い、もうネルガルが……。

ネルガル陥落

一騎当千と名高き帝国の元将、モートン＝エルゲートを擁するネルガルも、エアリアに続き、ブラージュス皇帝率いる帝国軍に僅か3日で屈した。

6月22日明朝から開始された市街戦では、怒涛のように押し寄せる帝国兵達がネルガルの城下町に攻め入り、逃げ惑う一般人も多く殺害された。城下町の建物の4割近くが一日目にして焼きつくされ、一般人の死者は少なくとも三千人を超えると推定される。貴重な文化財も被害を受けているようで、今現在、荒らされた街内には盗人も多く出現しているようだ。

以下は、ネルガルの南街に住んでいたAさんによる談話である。

夜明けを待たず、一瞬雷のような音が鳴り響いて目が覚めた。二階の窓から恐る恐る外を覗いてみると、何百という騎兵の集団が眼下を通り過ぎていくのが見えた。

私は慌てて家内と息子を連れて、家の地下室に逃げ込み、鍵をか

けた。その三分後くらいに、ドアを荒っぽく叩く音が聞こえた。おそらくは、大きなハンマーか何かでこじ開けようとしていたのだろう。ドーン、ドーンという凄まじい音が何度も地下室に響き渡った。私達三人は耳を塞ぎ、震えながらそれをやり過ぎた。帝国兵達は家の中を荒らしまわっていったようだったが、幸い地下室の入り口には気づかれなかった。奪う物を奪って家を出ていった。恐怖で時間間隔が失われていたかもしれないが、それから1時間ほどだったと思う。出ようと鉄梯子に足をかけた矢先のことだった。再び複数の人間が入り込んでくる音がした。心臓が喉仏まで跳ね上がった。危うく梯子はしから足を滑らせ、物音を立ててしまう所だった。もしそうなっていれば、こんな取材を受けることはなかっただろう。

結局その後は全く出る事が出来ず、家族と共に地下室に置いてあった非常食を口にするのが精一杯だった。昼も夜もわからなかったが、酸素が足りなくなってきたのだろうか。段々と息苦しくなってきた。背に腹は代えられず、やむなく私は地下室の扉を恐る恐る開けた。外には誰もいなくて、真っ暗だった。絨毯には黒ずんだ靴跡が無数にあった。家中のタンスが開けっ放しで、上り階段のようになつていった。玄関のドアは跡形もなかった。辛うじて、蝶番に木の破片がこびり付いていた。本に挟んであった妻のヘソクリをポケットに詰め込み、私達は外に出た。帝国兵の殆どは北の王宮に向かつていたようだった。人気がなくなったのを確認して、私は家族を伴って町の南門に向かった。そこに辿り着くまでには死体が幾つも散乱していた。少なくとも百以上はあったと思う。もしかしたら知人友人もいたかも知れないが、弔うらなうこともできないので、顔は確認しなかった。不幸中の幸い、門付近には誰もいなかったので逃げ出す事が出来た。

24日にはブラージウス皇帝が自ら王城の制圧を指揮した、という情報が飛び交っているが、確認には至っていない。ある消息筋で

はエルゲートの一家が大陸北東部ミードとの国境付近で無残な状態で発見されたとの情報も入っている。

大陸の東側には、未だ帝国軍に反抗の意思を示す国々も多いが、女子供も含めて一般人の大量殺戮を行った今回の帝国軍のやり口は、周辺諸国を心胆寒からしめる効果があったのと同時に、帝国に対して今まで以上に不信感を抱かせた恰好だ。

イアニス教の法王グルツセルも遺憾の意を表明しており、目に余る非道に帝国内部でもブラーシウスのやり方を批判する者が出ているようで、波紋を呼んでいる。(N記者)

席に戻ったキールは新聞の内容をザツと確認すると舌打ちした。

帝国軍の侵攻は想像していたよりも遙かに早く、今の所は付け入る隙も見当たらない。東国にはエルフたちがひっそりと住んでいる集落がいくつもある。このままでは戦火に巻き込まれる可能性が非常に高かった。キールは片手で頬杖を付きながら、赤紫色の果実酒の入ったグラスを傾けて口に含む。

ネルガルをもあっさり落としたか。この分だと、グリトリーに至るまで半年もかからないかも知れないな。

「考え事か」

突然声をかけられ、ビクツと震えたキールの持っているグラスから酒が少々跳ねた。キールがグラスを持ったまま隣を見ると、いつの間にもやら見知った顔があった。

「何だ、リージエスかよ。脅かしやがって。にしても、お前が酒場に来るなんて珍しいな」

「何だとはご挨拶だな。お気楽なお前が普段から深刻そうな顔しているなんて、滅多にないからちよっぴり心配してきてやったんだぞ」

悪態をつきながらもリージェスは隣の小さな丸椅子に腰掛けた。

「いらつしやいませ、ご注文は」

赤い蝶ネクタイをつけた三十前後のダンディなバーテンダーがリージェスに気づき、声をかける。

「何か軽いものを。オリジナルがあればそれを頼む」

「畏まりました」

バーテンダーは丁寧に一礼して一步下がる。

そろそろ朝に近い時間帯である。にもかかわらず、リージェスが店に入った時には、薄暗い店内を見回すと周りの席はカウンターを含めて殆ど埋まっていた。確かに、飲まなきゃやってられないって奴も多いのだろう。

「そんな顔、していたか」

平静を装っていたつもりだったが、とキールは首を傾げる。

「バレバレだ、と言いたるところだが確証はなかった。ただ、リージェも同じ事気にしていたからさ。？何かキール元気がない？？つて昼間に訊かれたんでな。これは間違いないかと思っただ」

双子の以心伝心って奴か、中々厄介だな。キールはぼりぼりと頭を掻いた。

「それで、何考えてたんだ」

率直なリージェスの質問に、キールは苦笑いを浮かべる。

「何、たいしたことじゃない。ブラージュスが次にどう動くか、考えていたのさ」

その言葉に眉根を潜めながらも、リージェスはキールが差し出した新聞を受け取る。記事を流し読みするリージェスの眉間に、しわが一本、また一本と刻まれていく。

「……文字だけでも十二分に惨状が伝わるなあ。多少尾ひれが付い

ているにしても酷い話ばかりだ」

キールは、むしろ尾ひれが足りないくらいかも知れない、そう思った。所詮、紙面で表現できる事には限界がある。

新聞の一面から三面まで、各地での非道な虐殺の有様が、ただ淡々と書かれている。頁を捲る度に、リージェスが辟易へきえきしているのが感じ取れる。最後に、ネルガルの領主モートン＝エルゲートの首が町の中央で晒されている様子も描かれていた。

耳を澄ませば、周りの客達の会話の中にも、ブラージウスという単語がちらほら聞き取れる。勿論、それに付随ふすいして聞くに堪えない悪口も。どうやら、ここに居る者たちの心境は一様のようなのだ。

「お待たせいたしました」

重たい空気を切り裂いて颯爽と現れたバーテンダーが、口が広くて底の浅いグラスをカウンターに置く。リージェスはやおら持っていた新聞をキールの胸にぐしゃつと押し付け、そちらの方に興味を注ぐ。

ウィル隊長が嘆くぞ、とキールは深く溜息をついた。

「へえ、シャーベットドリンクか」

リージェスは苦々しげだった表情を、いつもの物に戻す。柑橘系の果物のシャーベットに何かの酒がかかっているようだ。太いストローが二本も付いているのは氷が詰まった時のためか。はたまた恋人同士で飲むためか。リージェスはキールをチラツと見たが、浮かんだその考えを一笑に付した。折角涼めそうな物がきたのにそれはない。

「ええ、暑くて眠れない夜にはぴったりですよ。では、ごゆっくり

お楽しみください」

バーテンダーはニッコリと笑うと、すぐさま他の客の注文に取り掛かる。もう店仕舞いの時間は過ぎていているのに大繁盛だ。主人の気持ちとしては如何なものなのか、キールは判断が付かなかった。

「いただきます。……おお、こりや新しい発見だ。あの兄さん腕いいな」

リージェスはストローでチューチューと音を立てて飲む。

「相変わらず切り替え早いなあ。お前は」

ご満悦な様子のリージェスに、キールは半ば呆れながらも笑みが零れる。

「むっつり顔していたって状況が変わるわけでもないし」

それもそうだ、とキールは立ち上がり、読み終わった新聞を戻しに行く。

少しアルコールが入って饒舌じょうじになったキールとリージェスは、対帝国の談義に花を咲かせていた。その内容を思えば咲く花は白百合か彼岸花というところだろうか。

「帝国の支配下に入った街では、相当に高い税金がかけられていると聞いている。エアリアも例外じゃないぜ。このままでは一年としないうちに何十万人という民達が飢死にすることになる」

リージェスは首を捻る。

「帝国の将軍にまともな奴っていないのか。軍内部で波紋、つてどのクラスの話だろう」

キールは笑って首を振る。

「そもそも、ブラージウスに付いた奴にまともな将軍がいるとも思えないぜ。それより、気になるのは自暴自棄になった民衆の方だな」

なるほど、もつともない分だ、とリージェスは納得する。キールの言う通り、既にその兆候は出始めていた。住処を追われた者達が徒党を組んで夜盗紛いの事をしている、という情報はちらほらと

飛び交っている。弱い者が更に弱い者を狙う悪循環は、戦争に限らずどんな社会でもしばしば起こりうるのだ。

「じゃあ……カタルスタに期待するっていうのはどうかな？ 連中が動き出せば、或いは何とかかなりそうなものだが」

ストローで吸いきれない、もう殆ど味のしないシャーベットをスプーンで口に運びながら、リージェスは言った。

カタルスタはテルネシア帝国の西北西に位置する永世中立国だ。別名魔道王国とも言われ、世俗を離れた魔法使い、賢者の聖地と言われている。また、王族でなくとも王になれる可能性がある希少な国でもある。名高い賢者や僧侶が所属する評議会に選出された者が国の最高責任者となるのだ。王に選ばれた者は、敬意と畏怖を込めて賢王と呼ばれる。賢王に付き従う宮廷魔術師達の実力も未知数だ。

だが、リージェスの言葉にキールは肩を竦める。

「連中の日和見主義は今に始まった事じゃない。自分達の知識の向上と、飽くなき探究心の充足だけを考えている連中だ。期待するだけ損だぜ」

果実酒の残りを全て飲み干し、空のグラスをカウンターに置く。

「チェイサー」

キールの声にバーテンダーは頷き、手が空くと氷水の入ったグラスをキールの空のグラスと素早く入れ替える。

「でも、ブラージュウスって人間は何をやらかすかわからん。つまりは馬鹿ってことなんだけど。帝国は既に解体された、と言って同盟を反故にする可能性だって十二分にあるだろ？」

「そりゃまあ、そうだが」

リージェスの主張に、キールは曖昧に頷いた。

「連中の恐怖心を煽れば、力を借りられるかもしれないぜ」

そこまで聞いて、キールはリージェスのただならぬ雰囲気にはやつと気づく。その口に笑みは浮かんでいるものの、目は至って真剣だ。酒に酔っている、と言う程飲んでもいない。彼は意外と酒に強い。

「まさか、ブラージュウスと戦うつもりか。何のために」

リージェスは肩を竦める。

「つもりじゃなくなつて、いつかは向こうから仕掛けてくるんだろ。ネフェリイのことだつていつまで隠し通せるかわからないしさ」

「それにしたつて、お前が戦う理由はないだろ」

「理由ならあるさ。ウィル隊の仇討ちだ」

語気に怒りを含んでいるリージェスに、キールは一瞬口を嚙む。

身近な者を殺された恨みは薄れることはあっても消えることはない。何かしらの形で生涯引き摺ってゆくことになる。そのことはキールとてわかつていた。

「……だが、お前が死んだらリーシェはどうなる」

キールは僅かに声を荒げた。

「お前は何かつて言うと言くと直ぐリーシェだな。そして、さり気なく俺が死ぬ前提で話を進めんな」

リージェスは心外だ、と口をへの字に曲げた。

「す、好きなんだからしょうがないだろ。男は好きな女を泣かせたくないもんだ」

やや顔を赤くしながらそう言うキールに、リージェスはプラプラと手を振る。

「そういう恥ずかしい台詞は本人の前で言ってくれよ。……それに、俺だつていつまでもあいつと一緒にいられるわけじゃない」

キールはリージェスの顔をまじまじと見る。やはり酔っているのか、と疑っているように。

「……あのさ」

振り向いたリージェスに、キールは喉の上まで出かけた言葉を呑み込んだ。

「……いや、なんでもない」

リージェスに、ふと頭に浮かんだ疑問を、果たしてぶつけてみるべきだったのだろうか。キールにはわからなかった。

そんなキールの様子をリージェスは不思議そうに見ていたが、気を取り直して話を元に戻す。

「どちらにせよ、だ。今のままじゃギリ貧には違いない。カタルスタに行けば、力は借りられなくとも、自分ももっと強くなるきっかけを見つけられるかもしれないからな」

「……ここを発つつもりか？」

リージェスは軽く頷く。

「良かったらキールも一緒に行こうぜ。ミシエルさんもシルドさんもいるし、ネフェリイは暫く放って置いてても大丈夫だろ。小さい頃から旅をしていたせい^{ちゃん}か、一所にじっとしているのがどうも苦手なんだよ。カタルスタにはまだ行ったことがないし、丁度いい機会だ」

リージェスのその申し出は、幾分キールの心を揺さぶるものがあった。しかし、カタルスタはエアリアよりも更にずっと西、大陸の西端だ。今から急いで行ったとして最低一カ月はかかるだろう。それに

「……考えておくけど、今は無理だな」

キールはそう言い、氷水を口に含んだ。カタルスタに行くにはエアリアから西に伸びている街道を道なりに進むのが一番簡単だが、現在エアリアには大勢の帝国兵が駐在している。かといって、カタルスタの国土を囲う山脈地帯には、凶悪な魔物が数多く棲んでいる

ため、ゴルフレッドから直接西に道なき道を進むのは危険すぎる。

「勿論、今少しの間は様子見になる。でも、帝国の戦線がもうちよ
い東に奥まったら、エアリア領内を巡回している監視兵の数も自然
と減るだろ？」

リージェスは平然そう言ったものの、キールとしては東にあまり
早く侵攻して欲しくはなかったので複雑な気持ちだった。

「そういえば、リーシェはどうする。一緒に連れて行くのか」

話題を変えてキールが訊ねた。

「ああ、一応聞くだけ聞いてみる。黙って行方をくらませたら後が
怖いし」

一瞬、リージェスが身震いするのをキールは見逃さなかった。

「怖いって……何かあったのか？ というか、お前がリーシェを置
いて黙って行方をくらませるっていうのが想像付かないが」

ウィル隊で出会った頃から、リージェスが常々リーシェの身を案
じているのをキールは良く理解していた。一方のリーシェも、影の
ようにリージェスに付いて行くイメージがある。その仲の良さには、
兄妹の度を過ぎることもあるように思えるが、その見方にはキール
の軽い嫉妬も含まれていたかもしれない。

「……ああ。『黙って』っていうのは言葉のあやだ。それに、お前
がこの話聞くと後悔するかも知れないし、ちょっと口にするには気
が引ける」

キールはその忠告に、逆に好奇心を駆り立てられる。聞かない方
がいい、進まない方がいい、そう言われると逆の事をしたくなるの
が人情だ。

「お前、そこまで言っておいてそりゃないぜ。言いかけたんだから
最後まで言え」

挑みかかるようなキールの物言いに、リージエスは眉を潜める。そして、ゆっくりと語り出す。

「……つたく、忠告はしたからな。以前東端のアビシマって港町から船で大陸南部に向かうとした事があってさ。乗船チケットを買ったあと、急に便所に行きたくなったんだ。慌ててリーシエに乗船チケットを渡して『先にあの船に乗っていてくれ』って言ったんだが……。俺が時間を勘違いしていたのか、トイレに入って用を足している時に船の出航を知らせる汽笛音が鳴ったんだ。その時、財布は俺が持っていた……」

キールは啞然とした。つまりはリーシエを一文無しの状態で、遠い南の地に向かう船に乗せたのである。

「……お前、それはいくらなんでも酷過ぎるだろ。リーシエの奴怒つただろうな」

非難されたリージエスは少々拗すねながら、頼杖を付いたまま話を続ける。

「慌てて乗船所に戻った時は、既に船はだいぶ先に進んじまっていた。甲板にリーシエの姿が微かに見えたんだけど、もう追いつけないから直ぐに次の船に乗ろうと思った。そしたら、受付に話しかけた途端、突然船の方から悲鳴が聞こえたんだよ。その後に『子供が落ちたぞー』って聞こえてさ。まさかと思ってゆれる水面に目を凝らしたら、やっぱりリーシエだったんだ。これは後でリーシエに聞いた話だが、俺の姿が未だ港にあるのに愕然がくぜんとして、気付いたら甲板から飛び降りていたらしい。まだあの時は十二、三歳くらいだったのにな」

首筋を冷や汗が伝っていく。自分がカナヅチであるためか、水難の話を読まれると大抵気分が悪くなる。

「こつちも慌てて荷物を放り出し、直ぐに飛び込んでリーシェの方に泳いでいった。泳ぎは上手だったけど、服も着ていたからな。もしかしたら溺れているんじゃないかって気が気じゃなかった。でも、リーシェがこちらに向かって泳いでいるのが見えて。ああ、これで一安心だと思った。その時は。もしも、これが劇場の芝居とかならさぞかし感動的な再会になっただろうな。……だけどさ、もう何となくわかるだろ？ 海で溺れた子供を助けるのって、実は大人でも相当大変だ。しかも相手は、俺に騙されて島流しにされたと勘違いし、憤慨している、10m上の甲板の高さから海に落ちたのにもかわらず、元気一杯のリーシェさんだ……」

キールは与えられた条件から微笑ましい場面を何とか想像しようと試みるも失敗に終わった。どう曲解しても、全ての道は修羅場に通ず、だ。

「ほら、十二、三歳くらいの子供って男の子より女の子の方が成長早いじゃないか。ちょうどあの頃、一時的に身長も抜かれてたんだよ。そんなわけで結論だが、俺は海の上でリーシェにぼっこぼこにされた」

「……ぼっこぼこ」

キールが繰り返した。

「ああ、ぼっこぼこだ。半狂乱……というかトランスっていうのかな、ああいうの。助けに来た俺の顔を両手でガシッと鷲掴みにしたかと思うと、あるうことか腕を掴んだ俺の頭ごと力任せにぶんぶん振り回したんだ。馬鹿だの人でなしだのってうわんうわん泣きながらだぜ。そりゃ俺だって自分が明らかに悪いのがわかっていたからさ。何も抵抗できずに『待ってっ、やめてっ』って叫ぶのが精一杯。当然、そんなのは右から左だったけど……」

開いた口が塞がらないとはこの事だろうか。キールはリージェスの話を聞いていて、妻に尻に敷かれていた夫の浮気が発覚した場面

を想像した。

「危うく溺れかけた俺たち……というか俺だけだが。直ぐに港の人が小舟に乗って助けに来てくれたんで事無きを得た。もう俺の顔は引っかき傷と痣だらけでさ……。傷は海水が沁みて蚯蚓腫れみみずはになるし、水もかなり飲んでいたっばくて。二週間くらいかな、人生初の入院。余談だが、リーシエの奴は一日で退院した。あんなのはもうこりこりだぜ」

しみりとそう言って、リージエスは話を結ぶ。

気付けば背中に汗をびっしょりかいていた。水にまつわる話を聞く時はいつもこうなるのだ。いや、今回ばかりはそれだけが原因じゃないけれども。

折角涼みにきたのに台無しじゃないか、そんな話聞くんじゃないか。そう思う傍ら、ちよっとその光景を生で見てみたかったな、とほくそ笑むキールだった。

其の九 く意外な才能（裏）く

ネルガルを支配下に治め、そのまま一挙に進むと思われていた帝国軍だったが、今までがかなりの強行軍だった事に加え、酷暑とも言える程の気候によつて兵達の疲労が重なったのか、侵攻の勢いを弱めていた。キールの危惧は、一先ずは杞憂に終わっていた。

その間、ブラージュウス皇帝と軍上層部に不満を募らせる兵たちが絶えることはなかったが、それを予見していたブラージュウスは、予め設置していた皇帝直属の諜報機関に命じ、叛意ありと見なした者達をすぐさま特定すると共に処断していた。

時を同じくして、イニアス教の法王グルツセルが、帝国に戦争を中止するように嘆願書を送っている旨が、しばしば新聞で報じられるようになった。

883年 8月3日

「で、あるからして」

ネフェリイの専属教師、シルドは年代記を片手に立ちながら、ボードにスラスラと年表を書いていく。机に座っていたネフェリイは、たまに質疑応答を交えながらそれをノートに書き止めていく。

屋敷内の客室を利用して、ネフェリイはシルドに歴史の講義を受けていた。シルドは十年以上前からエアリアの町で学校教師を務めていたが、その後、教え方が上手いという話を聞き付けた王の側近から宮仕えの誘いを受けた。全教科の科目を教える資格を持ってお

り、五年ほど前からはネフェリイの専属家庭教師も兼任している。余談だが、薄毛を隠す帽子を被り始めたのは二年くらい前からのようだ。

「143年にはジグムンドⅡゴルディックの手により、基礎魔法の方式が確立されました。具体的な魔法の効果が確認されたのはその16年後、ベステイ平原の戦いにおいてです。テルネシア帝国はカナン王国、……うーん、あとで混乱するのでこれは先に言っておきましょうか。今のカタルスタ魔道王国の事ですが、彼等と同盟を結んで東に版図はんとを広げていた大国、ボードンを破りました。騎兵を主戦力としていたボードンは、カナン王国の魔法使用による炎や雷の魔法により、馬が怯えてまともに陣形も組めず、大混乱に陥ったと伝えられています。ここまでは宜しいですか」

ネフェリイは頷き、再度シルドに質問する。

「七百年以上も前に魔法の法式が確立されたのはわかったけれど、そんな便利な技術が今に至るまで一般に浸透しなかったのは何故かしら。今の帝国においても、使える人は限られているわよね」

その質問を待っていた、とばかりにシルドは強く頷く。

「そう、そこなのです。実は三世紀を過ぎた辺りから、平民も当たり前のように魔法を使い始めていたのです。といっても、それは料理の火を起こしたり、氷を出して夏場に涼んだり、といった生活に密着した使い方が主でした。ただやはり、万人が使える技術ではなかったのです。その頃は、ですけどね。そのうちに魔法技術はどんどん発達して威力を増し、いつしか魔法を間違った方向に利用する者が現れ始めます。力を見せ付け、行使するその姿に、人々は魔法使いを羨望せんぼうと恐怖が入り混じった目で見られるようになります。……そしてある時期を境に、魔法使い達は迫害されていく事になります。

生憎あいにくこの年代記には載っていませんが、260年代後半には魔法が使えるという疑いがあるだけで、何万人という罪のない者達が、魔道士狩りの名の下に虐殺されました。老若男女関係なく、です。残念ながら、当時のテルネシア帝国もそれに加担したとされています」

ネフェリイは耳を疑った。そんな大虐殺があったなんて今まで聞いたこともなかった。

「……酷い」

その光景を想像し、顔を苦痛に歪めるネフェリイにシルドも顔を伏せる。

「私もそう思います。おそらくそのような人間たちに罰はちが当たったのでしよう。それから間もない271年」

「ジキールね」

その言葉を口にしただけで、ネフェリイは身体が一瞬震え、脳が痺れるような錯覚に陥る。この世のありとあらゆる恐怖の象徴、破壊の権化、獄將と謳われしジキールの逸話は数多く残されている。

「有名な話ですから、姫様もある程度は存じておられるでしょう。エル・クレスの地に降臨したとされるジキールは、頭には四本の角を、手足には鋭い鉤爪を持ち、六枚の黄金色に輝く翼を背負っていたと伝えられています。もともと、真偽の程は定かではありません。実際に彼を見て生き残った者は数えるほどでしょうからね。ただ、常軌を逸した力を発揮したのは確かなようです。人類に対して敵意を剥き出しにし、手を振り翳かざすだけで大地が裂け、大気が戦慄わなないたと言われています」

ネフェリイはジキールの姿を想像する。黄金の翼、それはどちらかと言えば悪魔よりも神の姿を連想させる。シルドも罰が当たった、という言い方をしていたから、私と同じように考えているのかも知

れない。

ジキールの正体に対しては諸説ある。書かれた物語については数知れず、当時の記録に關しても学者達の見解の不一致が多く、これと言つて特定できるものではない。一番多いのは誰かが地獄から呼び出した悪魔、という説だ。でもそれは、神が人を断罪する事があつてはならない、という思い込みに似た傲慢さとも取れるのではないか。ネフェリイはそう考えている。

「……そんな化け物を相手にして、どうやって勝つたんですか？」

ネフェリイの問いに、何故かシルドは苦笑いした。

「……運です」

またまたネフェリイは耳を疑う。

「運………つて、そんなのでどうやって勝てるんですか。雷が落ちたとか、火山が噴火して巻き込まれたとかですか？」

「いやいや、流石にその程度でやられてはくれなかつたでしょう。」

……でも、あながち外れともいえませんね。それから誤解を恐れず言えば、決して勝てたわけではないのです」

勿体つけた様子で、シルドはしんみりと言つた。ネフェリイが何か言おうとしたが、それを遮るようにドアがノックされる音が二人の耳に入ってきた。

「勉強中ごめんね。二人とも、そろそろお昼ご飯だつて」

ドアの外からリーシェの声が聞こえた。

「おっと、もうそんな時間ですか。少し飛ばし過ぎて他の所を端折はしよつてしまいましたね。この辺りの事を説明する時つていつもこうなんですよ。姫様、今日はここまでに致しましょう。明日は少し戻つて、バルサ連邦の瓦解から始めますね」

シルドはそう言つてボードの文字をかき消し、パタンと本を閉じ

た。

階段の踊り場の窓から外に見える青々とした芝生には、霧のような雨が降り注いでいる。この所降っていないかったから、きつと花達も喜んでいられるだろう。そんな事を考えながら、ネフェリイは赤い絨毯の敷かれた階段を下りる。

「あら？」

リビングに向かう途中、廊下で良い匂いが漂ってきているのに気付く。ミシエルがリーシェが昼ご飯を作っているのかもしれない。少しウキウキしながら厨房に顔を出すと、そこには意外な人物がいた。

「えっ、リージェス。……こんな所で何やっているの？」

啞然としているネフェリイに、リージェスは手元から目を離さずに言う。

「何って、見りゃわかるだろ」

おもむろにリージェスは左手でトマトを宙に投げ、右手に持つ包丁で空を切る。その動きはぶれてまともに見えない。いつの間にもトマトは8等分にされ、落ちてきたそれを左手に持った皿で、潰れないうようにふわりと受け止める。その流れるような作業はさながら曲芸師のようだ。

「あら、姫様」

リージェスの隣には、火にかけた鍋を見ているミシエルがいたが、彼女も横目でその華麗な包丁捌きを見て驚きを隠せない様子だった。「今日の昼食はリージェスさんが手伝ってくださいと仰いまして」

ミシエルがそう言っている三秒程の間に、まな板の上では玉ねぎ

の微塵^{みじん}切りが出来上がっていた。切り刻む音の間隔が狭すぎて二つに繋がって聞こえ、何だか違和感がある。

「いつも作ってもらってばかりだとあれだし、たまには、な」
リージェスはあっけらかんと言った。

市場で買ってきたと思われる新鮮な卵を網から掴み取り、片手で割ってボールに入れる。ゆらめく炭火の上でフライパンを熱し、ラードを入れ、冷ましてあつた米を素早く入れて炒める。米が馴染んだら卵を入れてざつと混ぜ、慣れた手付きでフライパンをしながら、卵黄に包まれた米が何度も宙を舞う。刻んだ玉ねぎ、自家製ベーコン、香辛料、合わせ調味料が手際よく入れられ、リージェスが再び炒め始めると、香ばしい匂いがネフェリイ達の鼻腔^{びこう}を擦^{くすく}った。その一挙一動に見とれている二人の前で、リージェスは素早く人数分の皿に料理を盛り付けていく。

「アテライデ風ピラフ一丁上がり。先にテーブルに並べて置かせ。じゃあミシエルさん、スープの方宜しくお願いします」

出来たばかりの料理を二枚のトレイに乗せ、リージェスは両手でそれを持つと、その場をあとにする。その背中を見送り、ネフェリイとミシエルは顔を見合わせ、目を瞬^{しばた}くばかりだった。

「ウマッ」

熱々のピラフを口の中にそつと放り込み、舌に沁み込む美味にネフェリイは感激する。絶妙な塩加減、程よく効いているスパイス、そして噛むたびに口の中に解ける旨み。

「姫様、そのようなはしたない言葉遣いは……あらっ、あらっ」

先程の光景に対する期待感に違わぬ、いや、それ以上の味に二人

は舌鼓したしつこみを打つ。

「どうだ。東の料理も中々悪くないだろ」

リージェスは軽く言いながらも、自分で作ったピラフを口に運ぶ。

「おいひーい」

隣にいるリーシェも、勢いよく頬張っているところを見ると「満悦の様子。」

「お前は……口に物を入れたまま喋るなど何度言えば」

リージェスはやれやれと頭を抱える。一応ちゃんとお兄ちゃんしてるのね、と思いながらもネフェリイはスプーンを動かし続ける。

「いや、でもこれ本当に美味しいですよ」

シルドの言葉にキールも頷く。

「東国に一時期いた時こういう料理何度か食べたけれど、ここまで美味くはなかったぞ」

慣れていない褒め殺しに、リージェスは照れ笑いを浮かべる。

「ま、喜んでもらえれば何よりだ。念のため多めに作っておいたから足りなかつたら遠慮なく言ってくれ」

一同、同時にこっくりと頷く。

食事が終わって皆が一息ついている時、リージェスとミシエルは厨房で分担しながら洗い物に取り掛かっていた。ミシエルはこれくらいの量は一人でやると言っていたが、リージェスは片付けも料理のうちだ、と付いて行った。

「それにしても、意外な才能ね。ちょっとだけ見直したわ」

皿に米一粒残さず綺麗に平らげた後、食後の紅茶を楽しみながら、ネフェリイはリーシェと向かい合って談笑していた。ネフェリイに

対して他人行儀だったリーシェの口振りも、幾分自然な物になっている。

「私達、小さい頃からずっと旅してたからさ。自然と料理が身に付いちゃったんだ」

頷きながらネフェリイは二人が幼い頃の事に興味を持ったが、年端も行かない子供が二人旅をしていたという状況から察するに、立ち入った話を自分から聞くのは何だか躊躇ためらわれた。

「ちょっと悔しいけど、料理の腕前はリージェスの方がまだまだ上なの。昔は、私も良く料理を教えてもらってた。それなりに上手くなったのは間違いなくリージェスの指導のおかげね」

ネフェリイはそうなんだ、と相槌を打つ。本人はそれなりと言ったが、リーシェの料理の腕前もプロ顔負けだ。そのリーシェに料理を教えたのだから、リージェスがどれだけ凄いのかはネフェリイにもわかる。実際に料理を食べた後だから尚更だ。ミシエルにもう少し小さい頃から、ちゃんと料理教わっておけば良かったかな、とネフェリイは少々後悔する。

「お二人は、東国の出身なんですか？」

二人の会話を傍らで聞いていたシルドが口を挟んだ。

「ううん、うる覚えだけど南の方に住んでいた、と思う」

珍しく、彼女にしては曖昧あいまいな返答だったが、幼い頃の記憶だし致し方ないのかも知れない。そろそろ話題を変えた方が良いかな、とネフェリイが考えていると、タイミング良くミシエル達が戻ってくる。

「雨、中々止みませんねー」

「この分だと、今日一杯は降り続きそうだなあ。あれ、キールはどこいった」

リージェスに言われて周りを見回すと、確かに彼の姿が見えない。「ああ、キールさんなら先程用があると言って部屋を出ていかれましたよ」

シルドが言った。

「あ、そうですか。それならいいです」

あれ、気のせいかしら。

ネフェリイの目にはシルドに返したリージェスの笑顔が、どこか嘘っぽく映っていた。

其の十　〜双子との出会い（裏）〜

883年　9月29日

月の美しい夜は散歩に限る。今宵は半月だ。木々に茂る葉は既に紅に色付き始めているが、淡い月の光が当たると、その色合いの妙が何とも風情を感じさせる。

屋敷から少し西に行った所にある、人気のない森林公園のベンチにキールは腰掛けた。尻は相当に冷たかったが、眠気を少し覚ますには丁度良い塩梅だ。息を吐く度に白い靄が闇に呑み込まれていく。眼下には街の明かりが一つ、また一つと消えていくのが見える。もうすぐ日付が変わる頃だ。

本当に、あの連中と一緒にいると退屈しない。リージェスたちと共に行動するようになってから、キールは知らず知らずのうちにその生活を楽しんでいた。以前に比べて良く笑うようになったと自覚してもいた。あの二人はいつでも自然体だった。何も見上げないし、何も見下さない。ネフェレイも、幾らかそれに救われているはずだ。この差別蔓延る世の中において、彼らはあの若さにしてその領域から逸脱しているのだ。

過去から現在に至るまで、亜人はひらすら人間に差別されてきた。尖った耳以外、見た目が殆ど変わらないエルフとて例外ではなかった。幼い頃から周りの人間達に白い目で見られてきたキールにとっ

ては、彼らの存在自体が衝撃だった。

キールはエアリアに来た直後の事を思い出す。とある仕事でウィル隊に入った初日の事であった。

一年半くらい前のある日、キールはエアリアの軍の訓練場で、ウィル隊長から部隊員に紹介された。

「今日から新しく我が部隊に入隊したキール」ミッドロウだ。同じ釜の飯を食うもの同士、皆宜しく頼むぞ」
「はいっ」

部隊員はウィルに敬礼しながらも、やはりキールの耳に注目した者が多かった。それでも、ウィル隊に所属していた者達は、キールの第一印象からすればかなり評価は上の方だ。100満点でいえば75点くらいだろう。中にはエルフっただけで露骨に睨んでくるものや舌打ちをする者だっている。少なくとも変に構ってこないだけ気が楽だった。

その日は午前中で訓練が終わっていたようで、夕方から自由行動という事になった。キールは一人、エアリアの街を当てもなく歩いていた。

人の通行が多い商店街を通ると、嫌でも聞きなれた陰口が耳に入ってくる。エルフ、亜人、耳が変、そして嘲笑。断片的な言葉が聞こえる度に、僅かずつにでもキールの苛々は蓄積されていく。自分の耳の良さがこの時ばかりは恨めしかった。

暫くすると小腹が空いてきたので、キールは食事を取ろうと表通りのある店に入ろうとした。しかし入店して早々、ガタイのいい店主が露骨に顔をしかめてこう言った。

「うちには人様に食わせる飯しかねえよっ、わかつたらとっと帰れっ」

こういう人間はどこにでもいる。いちいち相手にしていたらキリが無い。それを頭では理解しているものの、虫の居所が悪かったキールは店主をももの凄い形相で睨んだ。まだ幼い同胞たちはこんな奴らに卑下されながらこの先を過ごすのか。こんな思いを噛み締めながら生きて行かなければならないのか。やりきれない思いが彼の心を満たしていた。

「な、何だ手前。その目はっ」

店主の目に怯えが走る。それを擁護するように店に入っていた客達の、キールを嘲る声（あざわら）が聞こえる。おそらくはこの店の常連客なのだろう。

「やだ、あの人怖い」

「はは、馬鹿だな。人じゃないよ、エルフだよ。だから程度が低いんだ」

まるでいちやもんを付けているチンピラ扱いであった。そう思いながらもキールは歯を食いしばり、拳を震わせながらも黙って店を出て行くとした。

ところが、店主の次に口にした台詞がそれに待ったをかける。

「ついでに命の価値もだろ」

無造作に禁句に触れられ、キールの周囲に風の刃が巻き起こった。

もうどうにも抑えが効かなかった。

「な、何だっ」

慌てた店主が後ろにのけぞり、転倒する。

「きゃああああーッ」

客の悲鳴を無視して、キールの繰り出した風は店内を縦横無尽に駆け回り、調度品や食器類を切り裂いていく。テーブルが風圧で力タカタと揺れ動く。荒れ狂うその猛威に、店内は一瞬にして大混乱に陥った。

「……こつちが我慢していりゃあ好き放題抜かしやがって。手前、何様のつもりだ？ ……いいだろう。そんなに死にたけりゃそうしてやるよ」

キールは手を翳し、店主目掛けて風の刃を放つ はずだった。

「やめとけ」

突然肩をポンツと叩かれ、驚いて振り返ると、そこには青髪の少年が立っていた。キールの周りを取り巻いている風の刃を踏み越え、キールを止めたのだ。そうしている間にも、風が少年の身体を浅く切り裂いている。頬に、腕に、裂傷が浮かび、血が滲み始める。

「な、何やってんだお前っ」

おもむろに正気に戻り、反射的にキールは叫んだ。

「そりゃこつちの台詞だ。お前、初日にいきなり仲間に剣を向けさせる気が」

仲間だと。

キールは呆気に取られながら少年をまじまじと見る。

「お前じゃなくて、キールさんでしょ」

少年の後ろから長い黒髪の少女がひよこつと顔を出した。その可憐な容姿は、青髪の少年と重なるものがあった。少年の言葉に意表

を衝かれ、少女に己の名を呼ばれ、キールはその体から急速に毒気を失っていく。いつの間にか風は止んでいた。

「ここで騒ぎを起こされたら、対処するのは当然エアリアの兵隊。つまり、私たちということになるわ」

少女は細い腰の左右に両手を当てながら言う。その言葉には若干の怒気が籠っている。

「まあそれはいいや。それより一緒に飯行こうぜ。こんな所よりもっと美味しい飯屋知っているからさ」

さり気なく営業妨害的な一言を口にして、少年はキールの腕を外へとぐいぐい引っ張っていく。キールはされるがままだった。

「ちょ、ちょっと待てっ」

店主が我に返り、身体を震わせながら大声を上げた。そのせいか、声にまで震えが伝染した。

「て、手前等、俺の店の中こんな滅茶苦茶にしておきながらとんずらこくつもりかっ。ふざけるなっ。このことは軍本部に」

「すぐさま黒髪の少女が言葉を返す。

「アンタこそふざけんじやないわよ。ああまで人を罵っておきながら、いざ被害に合ったら弁償しろですって？ お門違いもいとこるね。恨むなら自分の足りない脳味噌をまず恨んだらどうなのっ」

少女の啖呵たんかに店主はたじたととなる。

「な……、そ、そいつは人なんかじゃ」

店主がやっと搾り出した言葉は、少年の冷気を帯びた言葉にまたも遮られる。

「生憎こいつは同僚、つまりお仲間。それと、俺たち南部で暮らしていた関係で亜人の知り合い多いからさ。あまり舐めた口利くと、多分こいつの前に俺がキレるからやめとけ」

店主は呻く様に黙り込んだ。少年の纏う雰囲気を感じ、脅しじゃないと理解したようだった。

「それじゃ、お騒がせしました。皆様、良いディナータイムを」

痛快な皮肉と共に、二人はキールを両脇に抱え、連行するようにして店を後にする。

何なんだ、こいつら。

キールは先程まで抱いていた怒りを、全部店に置き忘れていた。足が宙に浮いていたことにも気付かなかった。

表通りから路地裏に入り、暫く進むとこじんまりした店が姿を現した。案内された店に入ると、食事前に二人はキールに簡易的な自己紹介をした。少年の方がリージェス、少女の方がリーシエ。そして二人は双子の兄妹らしい。勿論、二人の顔を見た時にそうじゃないか、とキールは目星をつけていたが、目星と言うほどたいしたものでもない。十中八九は気付くはず。そう思わせるほどに二人は良く似ていた。

料理が運ばれてくると、二人は待つてましたとばかりにかぶりつく。どうやら、キールが部隊員に紹介される前、ウィル隊長に起こかれて相当腹が減っていたらしい。リージェスという少年の言った様に、確かにその料理は美味かった。

少し豪華な夕食を堪能した三人は、城にある兵舎に戻っていた。薄暗い廊下を歩きながら、割り振られた部屋の方へと進んでいく。

「美味かっただろ、あの店のタンドリーチキン」

「……ああ」

キールは曖昧に頷く。

「あんなに大きいのに中まで火が通ってるのよねー」

「石で包んで焼いてるのがポイントっばいんだよね」

二人とも軍兵のくせに、料理の手法等で盛り上がるのが、キールにはどこか胡散臭さを感じさせた。もつとも、それは自分が言えた義理でもないのだが。

キールは適当に相槌を打ちながら二人の会話をやり過ごした。今日起きた出来事を、頭の中で整理するだけで精一杯だった。そんなキールに構わず、内から外から、この双子は遠慮なく入ってきた。

王宮から程近い場所にある軍の寮内に足を踏み入れる。ロビーを左手に進み、廊下を右に曲がると階段があった。二階分上がり、階段正面の部屋でリージェスが足を止めた。

「じゃ、俺はこの部屋だから。二人共お休み」

「……ああ、おやすみ」

「おやすみなさい、リージェス。ちゃんと薬塗っておきなさいよ」

「へいへい」

リージェスが自分の部屋に姿を消し、キールとリーシェが残される。

「キールさんの部屋はこっちね。ついて来て」

リーシェが歩き出した後を、キールはゆっくりと続く。10m程先にあつた角を曲がると、扉の開いている部屋が見えてきた。

「あそこの部屋よ。はい、これが部屋の鍵。そんなに広くないけれど、ベッドの寝心地は悪くないわ」

「……ああ、ありがとう」

キールはぼんやりと、部屋の鍵を受け取ると、リーシェは引き返していき

「ああ、そうそう忘れるところだったわ」

何かを思い出したようにリーシェが立ち止まる。不思議そうな顔

をしたキールを尻目に、彼女はキールの方に向き直り、つかつかと戻ってくる、一瞬キールをキツと睨み

バシッ

キールの左頬を強かに叩いた。キールは目をぱちくりとし、続いて声を上げかけた。

「なっ、何しやが」

「うんっ、すつきりした。リージェスに怪我させた分はこれでチャラにしてあげる。んじゃキールさん、また明日ねっ」

はたと女神のような微笑を浮かべ、リーシェは小さく手を振ってキールの前から立ち去った。遅れて、左頬の痛みを伴った熱さがやっとなんと頭とリンクする。

本当、何なんだ。思いつきり引つ叩かれた後なのに、しかも結構痛いのに、何故か俺の口は勝手に笑ってやがる。何なんだ、これは。しばしの間、キールは先ほどまでリーシェのいた場所を見つめ、叩かれた頬を抑えながらその場に佇んでいた。

其の十一　　く変局の兆し（裏）く

やっと見つけた。その声に反応し、物思いに捉われていた思考が現実に戻された。いつの間にか、キールの座っているベンチの背後にある木の裏に一つの気配があった。声の調子から察するに女の子だった。

「いきなり行方をくらまして一年近く、一体何をやってた」

そのハスキーな声には僅かに叱責の念が含まれていた。相手が誰かを察したのだろうか。キールは全身に入れた力を再び抜いた。

「……何を、って。マスターの命令通りにエアリアを張っていたんじゃないか」

悪びれた様子が見受けられぬキールに、女は腕を組み、傍にあつた木に寄りかかった。

「それならエアリアが減じた時点で、一度ギルドに報告しに戻って来るのが筋なのではないか？」

背中越しに聞こえるその声に、キールはもつともだと言わんばかりに頷く。

「一理ある。しかしながら、こちらにも抜き差しならぬ事情という物があつてね」

「どうせ、また誰かに厄介事でも押し付けられたのだろう」

流石に鋭い、と苦笑したキールを見て、女は溜息をついた。その言動から察するに、これまでも何度か同じようなことがあつたようだった。

「それで、報告書にあつた幹部候補は？　確かウィルとかいう」

「残念ながら、亡くなつたよ」

キールは言葉に憂いを含めて呟いた。

とある有力ギルドに所属していたキールは、エアリアの動向を監視する任務を与えられていた。一口に監視といっても様々だ。城に入った有力者をチエックしたり、町の人々の暮らしぶりを観察したり、酒場で情報を集めたりする。

但し、幹部に名を連ねる彼はもう一つ、重要な仕事を常時任されていた。優秀な戦士を見出し、自分たちのギルドに勧誘すること。つまりは引き抜きである。

キールはエアリアを張っている時にウィルの勇名を聞き付け、その実力を見極めんとエアリア軍に潜り込んだ。首尾よく入り込めたまでは良かったがタイミングの悪い事に、その直後にアルイル皇帝が亡くなった。ついには彼の息子達が戦争を始めてしまい、その結果、動向が落ち着くまでは部下を置いていけぬ、とウィルに交渉を先延ばしにされたのだ。そしてエアリアが陥落した日、契約は彼の死によって破談となってしまったのである。

戦いのどさくさに紛れてネフェリイ姫のお守りまで押しつけられたのは聊か誤算だった。もっとも、ウィルが案じたのはネフェリイ姫だけではなかったのだろう。だから、わざわざ自分を護衛の中に紛れ込ませたのだと、キールはそう確信していた。本来なら引き抜きの任務が失敗した時点で行方を暗ましても良かったはずのだが、気の合う双子と別れるのも忍びなかった。そのうち呼び出しが来るだろう、ということ、それまでは生活を満喫しようと思ったのである。

「……何だと？」

思いがけぬ返答に女の声色が変わった。

「エアリアの攻城戦で、ネフェリイ姫が脱出させる時間を稼ぐため

に最後まで奴は城に残ったんだ。……十中八九、帝国軍に殺された」
会話が途切れる。キールの言葉の意図を考えているのだろう。

「じゃあ、何故こんなところで油を売っているっ」

間が空いて、女が投げ掛けた声は一層荒っぽくなったが、キールは軽く肩を竦めるに留まった。

「そういきり立つなって。実はもう一人勧誘候補がいる。ウィルが殊更目をかけていた奴で、今はそいつを張っているってわけ」

しかも、マスター候補にすらなれる逸材が。

ふいに口頭まで上ってきた余計な言葉を、キールは呑み干した。そんなのは、実際にギルドに引つ張り込んでから言っても遅くはないし、未だ勧誘する事にすら二の足を踏んでいる状況だ。気を持たせるような事を口にするのは得策でないだろう。

「本当か？」

若干訝いぶかるような口の利き方だったが、長期にわたって報告なしで通してきたのも確かなので仕方ない部分もあった。

「ああ。花開けば確実に、歴史に名を残すだろうよ」

女は暫く考えているようだったが、おもむろに言った。

「なるほど、わかった。マスターにはそう報告しておく」

「そうしてくれると助かる。……あと出来れば、皆にはもう少しの間、俺がここにいる事は伏せておいて欲しい」

「……善処しよう。ただし、年内には戻れよ」

あと3ヶ月、か。

まあ、見つかったものは仕方ない。もう少し、この生活を楽しみたかった気もするが。キールは立ち上がると、闇夜にぽっかりと浮かぶ白い半月を仰ぎ、約束する、そう呟いた。

キールから確認事項を聴取し終えた女は、直ぐに立ち去る素振りを見せ、何かを思い出したようにはたと立ち止まる。

「ん、どうした」

それに気付いたキールは、月から再び女の方に視線を移す。

「肝心な事を一つ言い忘れていた」

キールは女にどういふことが尋ね返した。

「そろそろこの戦争に一波乱あるかもしれない」

一波乱……この戦況で、か？

キールは低い可能性を脳内で模索し始めた。聞く体勢に入った彼を見て、女は腕を組みなおしながら先程の樹に寄りかかった。

「……イアニス教の法王グルツセルを知っているな」

「そりゃ当然。ああ、そういえばエルウの奴も教団内に張ってるんだっけ」

女の口から出たその名は、知っている者の方が多いであろう有名な人であった。大陸中に影響力を持つイアニス教団の最高権力者でありながら、自ら奉仕活動に従事する聖人君子である。

「ああ。もつとも、エルウは今回の件とは関係ないが」

キールは眉を潜める。

「おいおい、あんまし焦らすなよ」

焦らすというよりは、女は使う言葉を選んでるようだった。ゆつくりとその口を開く。

「これは帝国内部の者からの情報だが、先立ってブラージウスとグルツセルが会見を行った」

それを聞いてキールは暫し思考する。

「……なるほど？ 慈悲深い法王様としてはこの現状に心を痛められ、奴に一言物申したかった、というわけだ」

「そのようだな。……まあ、結果はお前にも察しが付くだろう」

キールは肩をすくめる。

「お前にも、つていうか馬鹿でも判るさ。体よく断られたんだらう」
「……その斜め上だな。帝国の将が法王の眼前で、法王の側近を斬り殺したらしい。しかも、よりにもよって会見中に、だ」

予想をあつさり突き抜けられ、キールは表情を変えた。

「……何考えてるんだ。連中本気かよ」

「全くだ、近しい者を殺されてまで聖人君子を気取れる奴は、いない」

女の深々と吐いた溜息が、キールの耳に届く。

むしろ、そこまでやられても怒らなかつたら反つて人望を失ってしまう。キールはそう思った。

「つまりは、近々帝国に立ち向かえるだけの勢力が出来るというわけか」

大陸に浸透している世界最大の宗教、イアニス教団。その信者数はテレジア大陸中に何百万人という。女子供、それに老人は省いたとしても、残りが帝国に敵対するとなれば、それなりの勢力にはなるだろう。

女は頷く気配を見せる。

「少なくとも、帝国軍に所属しているイアニス教徒は板挟みになるな。皇帝に付けば敬愛する法王に剣を向ける事になるし、法王に付けば自分の家族の命が危ない」

「……可哀想に。だが、……面白くはなりそうだな」

帝国内のイアニス教徒には少々気の毒だが、これで一方的な戦局が少なからず変化する可能性が出てきたのは確かであった。

「だが、事はそう簡単ではないだろう。信者数がそのまま戦力になるわけじゃないからな。すぐさま戦える兵力は2万から3万が良い

所だと思う。これはエルウの見解だが」

女の意見に、キールは考えを巡らせる。

「対する帝国兵は今や30万強、か。ブラージウスの事だから、イアニス教徒を前線に送って法王の勢力と戦わせるかもしれないな。教徒たちの家族を人質に取った上で」

「……それは中々にえぐい発想だな。私にはそこまでは思いつかなかったぞ。流石はキールだ。汚い、実に汚い」

感心しているのか、貶しているのか。……絶対後者だな。キールはじと目で女を見る。

「つまり、帝国にいるイアニス教徒の兵達の家族を、どこかに上手く逃がせば良い訳だ」

話していた二人はほぼ同時に、声の聞こえた方角を見る。

いつの間にか、二人の目と鼻の先に、リージェスが立っていた。

「よっ」

リージェスは軽く手を翳して二人に挨拶する。あまりに自然なその所作に、反射的にキールは手を翳しそうになるが

「消す」

その眩きとともに、女の影が動いた。

「ちよっ、待てっ」

リージェスに疾走しかけた女は、両手を横に広げて素早く割り込んだキールに行く手を遮られる。二人の、まるで豹の様な動きを見て、リージェスは、ヒュウ、と口笛を吹いた。

暗闇から飛び出した女の体が、白い月の光に晒される。声を荒げ

る長身の若い女は、非常にしなやかにして鍛えられた筋肉を持っていた。肌は光に照らされても尚影を帯びていることから白くはないようだ。そして、それより目を引くのが、ポニーテールの髪の毛がらびよこつと飛び出しているふさふさの三角耳。キールの旧知と思われる女は獣人ライカンであつた。布地の少ない服を身に纏っているようだが、この闇のおかげであまり意識する必要もなさそうであつた。

「キール、何のつもりだつ」

「こいつは俺の友人だ。手を出さないでくれ」

いきり立つ女に、キールはあくまで穏やかに言った。

「すげえなお前。俺達にそんな素早い動き、今まで見せたことなかつただろ」

友人と言つ言葉に多少気を良くしながらも、リージェスはキールを賞賛する。

「脳ある鷹は　つて言うだろ？　お前と同じおんな」

キールが軽口を叩く。

「ふふん、そいつはどうも。それよりちょっと嬉しかったぜキール。お前も俺を友だと思つてくれていたんだな」

芝居じみた恥ずかしい台詞に、キールは微かに頬を赤らめる。

「んな事はどうでもいい。つたく、お前と話していると調子狂うぜ」
リージェスは笑いながら請合う。

「はは、そう言うお前は相変わらず照れ屋だなあ。感情を素直に表に出せるつてのは良い事なんだぜ」

本当に口の減らない奴。キールは溜息を付いた。

「キール、こいつは……男……いや、女か」

女は怪訝そうにリージェスを見る。

言われてみれば確かに、薄暗い夜にリージェスを一目で男だと判断するのは難しい。男にしては声も高いから尚更であった。

「正解は男。こんな容貌だから初対面じゃ判別できなくても無理はないけど。リージェスっていつて、エアリアにいた時に俺と一緒に部隊に所属していた兵士だ」

キールの言い分に、リージェスは口を窄める。

「こんな……って随分な言い草だな。ま、俺とキールとは同じ釜の飯を食った同僚ってところだ。そんでキール、このお嬢さんは？」

「おじよつ」

「俺の、本当の同僚だ」

何か言いかけた女を遮ってキールが返答する。

「……オルフィだ」

一瞬キールに視線を向け、ぶつきらばうに名乗った女は再びリージェスを睨む。背丈はリージェスとほぼ同じくらいだ。真直ぐにリージェスの目を見据えている。

「そつか、宜しくな。こんな北で獣人ライカンに会えるとは思わなかったぜ」

「……つ」

リージェスの挨拶に、しかしオルフィは苦々しそうに口を嚙み、視線を逸らす。

キールには、リージェスの言葉に他意がないのはわかっていたが、それでも今の言葉はオルフィに多少なりとも不快感を与えていた。そもそも獣人ライカンが北部で見受けられない理由は、多くの人間達に染み付いている亜人に対しての差別意識によるものである。

「……お前、どこから聞いていた」

オルフィは再び探るような目付きでリージェスを見ている。リー

ジエスは普段と変わらぬ顔で、その視線を受け止めながら返答する。

「お嬢さんが？言い忘れていたが？つて言ったところ」

「その呼び方は止めるっ」

オルフィは顔を赤らめながら叱咤した。

多分、慣れていなくて戸惑っているだけだろう。リージエスは人間だから尚更だな、とキールは苦笑した。亜人を対等に見てくれる人間は思いのほか少ない。よって、呼び方もそれに準じたものとなるのだ。

「あ、わりい。えっと、オルフィ、でいいんだよな。少しずつ読めてきた。お前達はどこかのギルドの諜報員つてわけだ。大方、各勢力の動向の監視、及び人材の確保を目的としたエージェントつてところ？」

「少しずつ言いながら、しっかり聞いていたようだ。もう誤魔化しようがないだろう。」

「……そうだ」

「キールっ」

あつさり認めたキールに、オルフィが食って掛かる。

「べらべらと喋るなっ。こいつは人間なんだぞっ」

「あ、その言動でもう一個わかった。お前らアクア・ティ・アラの連中だろ。多分だけど」

リージエスの言葉にオルフィは目を見開き、キールはやれやれ、と頭を抱える。

「種族分け隔てなく勧誘しているギルドつて意外と少ないからな。」

「あ、実は俺にもアクア・ティ・アラに二人ばかり飲み仲間がいるんだぜ。今度紹介」

「……下の者達への緘口令は一体どうなっているっ」

オルフィは拳を握り締め、忌々しげに地団太を踏んだ。

「……俺に聞かれても困る」

キールが呟いた。八つ当たりだけはとかく御免被る、という表情をして。

今のやり取りで、俺達が上級団員だって事もばれたな。それにしても少し面白いぞ、今日のオルフィ。決して口には出せないが。

普段見せぬ一面を曝け出したオルフィに、キールは夜の闇の中にやにや笑いを浮かべていた。

其の十二　く夢の中で（裏）く

883年10月4日

目の光を失った人々は、まるで歩く事を覚えたばかりの赤子のよう
に拙い足取りで、ゆっくりと近づいてくる。左に、右に、身体を
揺らしながら、一步一步。

私はただ玉座に座り、それを呆然と見つめている。直ぐに視線を
逸らして、あの抜け道から逃げ出したいのに、身体も、顔の向きす
らも動かせない。

助けて……。

誰かの呻き声が耳に障り、脇から背筋にかけて痺れが走る。

（やだ……）

助けて……。置いていかないで……。

ゆっくりと、こちらに近づいてくる彼らの全身が、ゆっくりと紅
に染まっていく。身体に、動くよう何度も命じるが徒勞に終わる。
この身体は震えるばかりで、もはや自分の意思と隔たれてしまった
様だ。

（いやよ、こんな……）

見慣れた広い空間が、突如火に包まれる。パチパチと音を立てて、彼等は炎に包まれ、激しく動き出した。そして、たどたどしかった歩調が突如速度を増し、私に両手を差し出して、どんどん迫ってくる。そのおどろおどろしい光景に目が見開かれ、呼吸が止まる。

ああああ……。痛い……。苦しい……。熱い……。

逃げることも出来ず、耳を塞ぐ事もできず、目を瞑るところか瞬きすら出来ず、虚ろな表情をして両手をこちらに向けて近づいて来る彼らに、彼らが投げ掛ける苦痛の呻きに、私は無防備にその身を晒す。

彼等の手はもう直ぐ目の前にある。焼け爛れたその手が迫り、私の身体を誰とも知れぬ手が弄り始める。服を着ているはずなのに、裸身を弄られるような感触が肌を刺し、私の心を苛む。彼等を突き飛ばす事も、身をよじって手から逃れる事も出来ずに、私はその手の成すがままになる。

(だ、だれかつ)

私はひたすらに助けを乞い、見開かれた両の目から涙が溢れる。そして、誰かの顔が頭に浮かんだ刹那に、潤んだ視界の中で、彼らの姿は黒い灰となって崩れ落ちた。

朝日が顔を出す少し前、ネフェリイはベッドから跳ね起きた。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ」

シーツをギュツと掴んだまま、ネフェリイは辺りを見回す。目に飛び込んできたのは薄い水色のカーテン、その脇に置いてある勉強机。そしてハンガーにかけてあるキャスケット帽。先程の風景とは似ても似つかない、見覚えのある部屋だ。

「ハア、ハア、……ゆ、夢……かあ」

短く浅い呼吸が徐々に落ち着いてくる。寝巻きの背の部分に触ってみると、手がぐっしり濡れた。布地の外側に滲み出すほど汗をかいている。寝ていたシーツを探ってみると、やはり相当に湿っていた。ふと、涙が薄っすらと浮かんでいるのに気づき、ネフェリイは慌てて袖で目を擦った。

夢の中で聞いた声はまだ耳に残っている。何百、何千という人間の声が、虫のように頭の中で蠢いていた。

とてとて、とネフェリイは階段を下りる。とりあえず、誰かと顔を合わせたかった。先ほどの悪夢を忘れるためだ。だが、早朝だというのに何故か人の気配がない。それでも、下にいけば絶対誰かいるだろう。ネフェリイは不安な心を押し隠して、階段を降りた先から一番近いリビングに入る。が、やはり誰もいない。

まさか、何事があったのだろうか。再び先程の夢を克明に思い出し、その華奢な身体をブルリと振るわせる。不安と焦りで呼吸が早くなってくる。皆どこに行ったのだろうか、と早足で部屋を後にしようとしたその時

「 姫様」

「 きゃあっ」

突如、耳元で聞こえた声にネフェリイはびくつと飛び上がる。恐る恐る後ろを振り向くと

「 ミシエルっ、脅かさないでよっ」

くつくと笑いを噛み殺すメイドの姿に、ネフェリイは安堵の息を漏らし、続いては腹を立てる。悪夢を見た直後だけに、彼女としては笑えない冗談であった。

「 も、申し訳ありません、珍しくお早いお目覚めですね」

言葉では謝っているが、明らかに目が笑っている。思い出し笑いを堪えているのか、ぷくつぷくつと膨張収縮を繰り返すくぼがこの上なく憎たらしい。恨み事の一つでも言ってやりたくなかったが、感情ばかりが先行し、一向に思い付かない。それがまた腹立たしい。「〜もういいっ。それより、リージェス達はどうしたのよ。こんなに朝早くなのに」

怪訝な顔を浮かべたネフェリイに、ミシエルは姿勢を正す。

「 修行、だそうです」

ミシエルは先程の微笑ましい光景を反芻しながらも、聞かれたことには律儀に答える。主人を愛でながらも従順に仕事をこなす。これぞメイドの心意気である。

修行、とネフェリイは繰り返し、ミシエルは頷く。

「 なんでも勘が鈍らぬよう模擬戦闘をしているとか。週に三回くらいはされていますよ」

澄み渡る赤と青の狭間の空に見降ろされ、二つの影が次々と弧を描き、時に一つに重なり、収斂し、再び二つに戻る。

カツ

ときたま響く、木と木が奏でる交錯音が、朝露を求めて羽虫飛び交うススキ野原に吸われていく。

「おっと」

顎に当たる寸前で、リージェスはリーシェの斬撃を仰け反って避ける。

「まだまだっ」

リーシェは追撃を仕掛けんと、振り上げた剣をそのまま振り下ろした。

次々と、俊敏な動作から繰り出されるリーシェの木剣を、しかしリージェスは紙一重のところかわで躲し、或いは受け流す。凄まじい速さで怒涛の如く迫る剣撃を、リージェスは完全に見切っていた。

埒があかないと判断したのか、リーシェは斬撃と見せかけ、突きに転じると共に、軸足に体重をかけて一気にリージェスとの間合いを詰める。

ドスッ

「けほっ」

渾身の突きはリージェスの頬を僅かに掠めて赤い線を引くが、リーシェはカウンターの一撃を腹にまともに受けてしまう。拳を突き出す、というよりは置く、という方が相応しいだろうか。リージェ

スの腰の辺りに待ち構えていた拳に、リーシエは勢いよく腹から突っ込み、たたらを踏み、軽く咳き込んだ。

リーシエの身体から重心が失われたのを見逃さず、身をかがめながらも木剣を握っているリーシエの手首をリージェスが掴み、上に向かって捻り上げる。

「いたたたたつ、ま、まいったつ」

リーシエは顔をしかめながら降参を宣言する。リージェスはニツと笑い、手を離れた。

「腹、大丈夫か？」

リージェスは、先程の手ごたえが強すぎたと感じたのが、リーシエを氣遣う。

「これくらい平気。ちゃんと鍛えてるから」

リーシエは軽く請け合った。

リーシエはそういうものの、正直あの一撃には堪^{こた}えていた。ダメージが大きかったというわけではなく、リージェスがあの一瞬、明らかに手加減していた事がショックだったのである。本気で拳を突き通されていたら、自分は無様に地面でのたうって、胃液を吐き散らしていたに違いない。勿論、リージェス達の前でそんなみっともない姿を見せなくて済んだ事にはホツとしていたのだが。

リーシエが唯一勝っていた体術においても、最近ではリージェスに通用しなくなってきた。自分が弱くなったという自覚はリーシエにも全くなかったが、そう思わせてしまう程に、リージェスは異常とも言える速度で実力を伸ばしていたのである。

リージェスの天分、秘められた力は、人の手の届かぬ所にあるか

もしれない。以前、ウィルが度々（たびたび）言っていた言葉をリーシェは思い出していた。リージェスは厳しかったウィルに、そこまで言わせたのだ。

「力が余ってるなら、今度は俺が相手になるぜ」
本気でな、とキールが軽口を叩く。

彼も元々、魔法においては相当な実力者だが、何故かこの所、更に強くなった気がする。短日の内に強くなった理由はわからないが、戦ってみると動きからして違う。距離を詰める事すら困難窮まるのだ。

最近とみに、リーシェは二人に置いてきぼりを食らったような寂しさを感じていた。

「あー、そうだな。んじゃあ、一丁やってみるか」

リージェスは再び立ち上がり、キールと20m程離れて相對する。

「おいおい、魔道士の俺相手にそんなに離れていいのかよ」
肩を竦めるキールに、リージェスは頭を搔く。

「実戦で、そんなに近寄ってくれる魔道士はいねえだろ？」

うんうん、と二人は同時に二回頷く。

「あ、その代わりに」

「ん、何だ」

キールは首を傾げた。

「火の魔法だけはやめてくれな」

周りのススキ野原を見渡しながら、リージェスは冷ややかに言った。

「も、勿論だ」

キールの詰まった声に、リーシェはクスリと笑みを零した。数週間前、訓練中に貴重な保護植林を火の海に変え、そそくさとその場から退散したという苦い思い出を、三人は揃って頭の中に浮かべていた。

朝日が屋根よりも高くなった頃、三人は訓練を終えて屋敷に戻ってきた。洗面所で手を洗い、リビングに行く、既に食事の支度が整えられていた。朝食のメニューはオムレツにトマトサラダに麦パン、それに空のカップが置いてある。漂ってくる匂いから察するに、コンソメスープのようだ。

「おー、美味そうだな」

キールの言葉にリーシェも頷く。

「良い匂い」

スープの香りを嗅ぎながらリーシェが言った。

「今日は私が作ったのよ、腕によりをかけて」

台所の方から聞こえたネフェリイの一言に、リージェスとキールは固まり、錆びた玩具おもちゃの様にギギギと動いて顔を見合わせる。

「な、何よその反応は」

居間に戻ってきたネフェリイがそんな二人を見て少しふてくされる。

「い、いや、ついこの間の武勇伝を思い出してな」

リージェスが気まずそうに言った。

一月程前、料理としては比較的簡単なカレーを、ネフェリイが作りたいと言い出した。おそらく、この前リージェスが作った見事な料理に触発されたのだろう。リーシェとミシエルが監督して作る様を見ていたらしいが、ひたすらフォローに終始したらしい。玉ネギを炒める時間だとか、ルーを入れるタイミングとかも結構重要なのだが、それはこの際どうでも良い。何とか完成しかけたカレーに、思ったより肉が足りないからと、生肉を入れそうになった。それを聞いてリージェスは背筋が寒くなった。

「ぶゆ……って失礼ねっ、ちゃんと作ったわよっ。そりゃ、少しはミシエルに手伝ってもらったけど」

そう言っただけでチラッとメイドの方を見る。ミシエルはにっこりして請け合う。

「お二人とも御安心ください。姫様も少しずつですが、料理の腕は日々上達されています。エアリアにそのメイドあり、と言われた私の名に懸けまして、味は保証致しますわ」

男二人の顔がぱあっと明るくなる。

「ミシエルさんのお墨付きなら安心だな」

「ああ、そうだな」

そう言っただけで二人は、目の前の席に付く。ネフェリイは、何か納得いかない、という表情を浮かべている。

皆一斉に、いただきます、と言って食べ始めるが、少しするとリーシェが何か思い出したかのように椅子から立ち上がった。

「やっぱ私、先にお風呂入ってくる」

リーシェは、運動して汗臭くなっていないかを気にしているよう

だった。

「おいおい、食事くらい皆で一緒に食べようぜ」

空気を読めないリージェスの一言に、リーシエは口を尖らす。

「あんたの辞書にはデリカシーって言葉が抜け落ちてんの」

リーシエは冷ややかに言うと、部屋を出て浴室の方へ向かった。

「なんだあいつ、今頃反抗期かな」

隣の空いた席を見つめながらそう言ったリージェスに、向かいに座っているネフェリイは眉をひそめ、呆れた様に言った。

「そんなわけないでしょう。常に清潔でいるのは女としての身嗜みみだしな、常識じゃない」

「そうですね、リーシエさんも年頃の女性ですもの。そういった事を気にされるのはごく自然な事だと思いますよ」

ネフェリイとミシエルは、リーシエの擁護に回る。こういった時の女同士の結束ほど厄介な物はない。

「女としての身嗜みみだしな、ねえ」

コンソメスープを啜りながらリージェスは考える。小さな頃からずっと一緒にいるから、どうもピンとこない。二人で一人、比翼の鳥、併せ鏡、リーシエは彼にとってそんな存在であった。

「まあ、安心しろ。リーシエは俺が貰ってやる」

キールは爽やかな顔でそう言った。そういう台詞をさらりと口にできるのが、こいつの凄いところであり、そして駄目なところでもある。

「まあ、あんなはねつかえり、貰ってくれらしたらお前くらいしかいないわな」

リージェスは笑ってそう言ったが、途端にその場が静まり返る。

「ん、どうした」

「リーシエさんは、同性の私から見ても相当魅力的な女性ですよ、

年頃の女の子が着るような服装で街を歩けば、若い男性なら誰もが振り向くと思います」

ミシエルは、真顔でそう言った。なるほど、ミシエルのお墨付きならば信憑性は高いかもしれない、とリージェスは考えを改める。

「ふーん、なら嫁の行き先は心配しないで良さそうだな」

リージェスはそう言って、オムレツを口に運ぶ。

「本当に良かった、彼女があんたと結ばれる可能性だけはゼロで。可哀想だもん」

皮肉たつぷりなネフェリイに、余計なお世話だ、とリージェスが口を尖らす。

ふと、ネフェリイは憎まれ口を叩いているうちに気付いた。先程のおぞましい悪夢の印象が、薄れていることに。

軽く洗面器で湯浴みをし、汗を洗い流した後、ゆつくりと足先から湯船に浸かる。少し熱かったものの我慢できない程ではない。ゆつくりと時間をかけて、肩まで湯に浸かる。

「ふう」

リーシェは大きく息を吐いた。漆黒の長く美しい髪がゆらゆらと湯の中を漂う。お風呂に入るといふ事は何よりの安らぎ。彼女は先人の知恵に感謝する。

「つつ」

先程リージェスに捻られた手首が少し痛み、次いで彼の顔が思い浮かぶ。

そつえば、小さい頃は良く一緒にお風呂に入ってたっけ。いつか

ら一緒に入らなくなつたんだらう。栓なき事を思い浮かべながら、リーシエは湯船に身体を預け、体の力を抜いた。

小さい頃から二人きり。私達は互いに肩寄せ合つて生きてきた。でもそれは、涙ぐましい、と見知らぬ他人から同情されるほど不幸なものでは決してなかった。一緒にいれば、それだけで幸せを感じられた。リージエスはどんな時でも底抜けに明るかった。それはおよそ、子供の振る舞いとして相応しくはなかったが、そんな彼を見て私はいつも安心できた。少なくとも、彼が泣いている姿を見た記憶は一度もない。

お腹がすいた、と私が言う前に、リージエスは甘い果物や、川魚を焼いた物を食べさせてくれた。取ってきた食料がいつもより少ない時には、彼は決まって「ごめん、お腹すいてたから先に食べちゃった」と言うのだ。今にして思えば、それは明らか痩せ我慢だったのだらうが、その無理矢理な嘘を私に信じさせてしまうほどに、彼の態度は力強く、大らかだった。

いつしか住んでいた村を離れ、二人で各地を旅し始めた。見た事のない風景、食べた事のない料理、聴いた事のない音楽、嗅いだ事のない花の香り。色々な場所を巡り、様々な体験をした。隣には私の手を握ってくれるリージエスが、当たり前のようにいた。幼い子供の二人旅、危険な目に遭う事もあつたけれど、そこから学ぶように彼はその小さな手に武器を持ち、私もそれに倣う様に武器を

持った。

時には小さなギルドで依頼を受け、小銭を稼ぎながら何年もの間旅を続けた。追いつ剥ぎや盗賊が私達を襲ってきた時はあっさり返り討ちにし、そいつ等の身ぐるみを剥ぎ、金を奪った。その後は決まって、良い宿に泊まって美味しい物を食べた。でも、私はたまになら野宿も嫌いじゃなかった。一つの大きな毛布に二人一緒に包まって窮屈きつこくに寝るのは、どこか幼い頃を思い出させてほっとする気持ちになった。

「おーい、大丈夫か」

浴室に反響した、聞き慣れた声に反応してパチツと目が覚める。どうやら湯に浸かったまま転寝うたたねしていたらしい。ふと顔を起こすと曇りガラスのドアの先に人影が見えた。中々私が戻って来ないから、リージェスが心配して様子を見に来たのだらう。遅れて、先程より湯が相当温くなっているのにようやく気付く。

「う、ごめん。気持ち良くて、いつの間にか寝ちゃってたみたい」
懐かしい夢だった。胸の辺りを暖かいものが満たしていくのを感じた。

リージェスはホツとしたのか、声に落ち着きを取り戻した。
「そっか、一時間近く戻って来ないから心配になってな。溺れてないなら良かった」

「お、お風呂なんかで溺れないよっ」

慌てて反論し、その後で、子供じゃないんだし、と付け加える。
「……そうだな。俺達ももう、大人になったんだよな」

大人、という言葉に一抹いちまつの不安がリーシェの心を過ぎる。私達は
一体いつまで一緒にいられるのだろう。双子の兄妹という名の絆は、
いつまで繋がっているのだろう。

「湯冷めしないうちに早く出るよ。スープ温め直しておくから」
リージェスの気遣いに、再び心が温まる。

「うん、わかった」

リーシェの返事を聞くと、リージェスの足音は風呂場から徐々に
遠ざかっていく。湧いて出た不安を吹き消すように息を大きく吐き
出し、リーシェは湯船から身体を起こすのだった。

第一章 END

(一)〜(二)幕間　〜帝国将校の乱心(裏)〜

883年　10月9日

雪国では一足早く若葉が紅に染まり、その果実に種を宿して地に落ちる。市場の棚には網籠に入れられた栗や銀杏等が並び、空高きに座する鰯雲は早々に冬の予感を告げて去ってゆく。

テレジア大陸北西の地、ゴルフフレッドに潜伏しながらも、カタルスタに行く機会を窺っていたリージェスは、リーシエ、キールを伴ってゴルフフレッドの街へ食料品の買い出しに来ていた。屋敷から街までは森林公園の中を抜けて長い階段を下り、エアリアとゴルフフレッドを結ぶ街道に出て北へ、大人の足でおおよそ四十分くらいの道のりだ。決して短い道ではないが、普段から鍛えている三人にとってはさほどの負担にもならなかった。

リーシエは魚屋の店主に包んで貰ったばかりの大きな舌平目と砂抜き済みのアサリを受け取り、満面の笑顔を見せる。

「おまけしてくれてありがとう、お兄さんっ」

三十路に届くか届かぬかくらいの妙齡の男は、リーシエの愛層に照れながらも手を振った。

「またこいよ、お嬢さんっ」

リーシエが戻ってきたのを確認して、再び三人は活気のある商店街をゆつくりと歩き出す。ミシエルに頼まれた買い物のメモを見ながら、キールは頷く。

「よし、これであらかた必要なものは買い揃えたな」

今朝はネフェリイが朝から体調が悪そうだったため、三人はミシエルに看病を任せて代理で買い物に回っていた。ネフェリイは、久しぶりの外出だから楽しみにしてたのに、と愚痴を零す元気はあったが、朝食の時にリージェスが見た限りでは、顔色は明らかに良くなかったので、少々心配していた。

いろいろ回っているうちに、お昼時だから三人でどこかの店に入るつか、という話が出た折、リーシエは目を細め、やおら通りの奥の方を指差した。リージェスとキールが知られてそちらに目をやると、通りの真ん中に何やら人だかりが出来ていた。三人は顔を見合わせて、そちらの方に近づいて行く。

「号外号外つ、大ニュースだよっ」

三人が人垣の隙間から覗き見ると、道の真ん中で男がそうやって大声で叫びながら新聞を配っている。既に新聞を受け取った周りの者達は、一心に新聞の紙面に目を躍らせ、顔色を変え、息を呑んでいる。何か事件でもあったのか、とリージェスが思っや否や、キールが人垣に強引に割り込み、数十秒後、それを一枚受け取って戻ってきた。

そして、手にした新聞を開き、視界に飛び込んで来た見出しにキールは他の者達と同じように顔色を変えた。

「どうしたの、キール。そんなに怖い顔して」

キールは一通り目を通した後、黙って二人に紙面を広げて見せた。二人も表題の太字を目にした途端に驚愕する。

「っ、帝国将校が乱心ですって？」

883年10月7日、アステイス＝フロイデ准将、クルー
トにて乱心

正に、青天霹靂せいてんのへきれきである。帝国民の信頼厚く、若くして先帝の懐刀と謳われていた新生テルネシア帝国の第六軍大隊長、アステイス＝フロイデ准将は、10月7日の正午前、クルートのコステイ＝ブラームス將軍の別邸に、突如多くの手勢を率いて乗り込み、屋敷にいた者達を女子供問わず皆殺しにし、挙句の果てに屋敷に火を放つて全焼させた、と帝国情報部が翌8日に報じた。

仮にも、軍を預かる者が行ったこの暴挙に対して、ブラージウス皇帝とその側近達はすぐさま会見を開き、亡くなった罪なき同胞達に哀悼の意を示すと共に、行方をくらました逆賊、アステイス＝フロイデの准將軍職と権限を即座に解き、その首に対して20億ギラの賞金をかける事を決定した、と伝えた。

アステイス＝フロイデ准将とコステイ＝ブラームス將軍の不仲は、以前より軍内部でもしばしば取り沙汰されていたとの事だ。折しも、上層部では近々フロイデ准将の権限を剥奪する事を決定していたよう、どこからかその話がフロイデに漏れ、それを逆恨んでの犯行に及んだのではないか、と目されている。

尚、被害者の中には、コステイ＝ブラームス將軍の二男、ダーモン＝ブラームスも含まれているとの事で、ゆくゆくは將校に、と將來を囑望じゆくぼんされていた彼の身に突如降りかかったこの不幸に、関係者

の多くが心を痛めると共にやるせない怒りを露にしている。アステイス＝フロイデの残虐非道とも言えるこの行為に対し、実の息子を失ったコステイ＝ブラームス將軍は涙を交えながらも、以下の様に声明を発表している。

関係者の皆様並びに各位の皆様にはご心配をおかけしております。この度の息子の不幸に、家族一同、身を引き裂かれる思いであります。父として、あの子には教えたい事がまだ山ほどありましたが、このような経緯に至り、誠に残念であります。この上は一刻も早く、殺された息子の仇を打つべく、私も全身全霊を持ってフロイデ元准将の捜索に力を尽くしたいと思っております。

アステイス＝フロイデ准将と言えばアルイル皇帝の御代から要職に付き、秘書文官として力を振るってきた事で知られている。けれども、最近では会議でも他者への批判ばかりが目立ち、準將軍を拝命していながら東国との戦場でも戦績を全くと言ってよいほど上げておらず、人望と自らの居場所を失いつつあったようだ。恐れ多くもブラージュウス皇帝に反抗的な態度を取った事もあり、多くの者達から、特に貴族階級からは鬻蹙ひんしゆくを買っていたらしい。日頃からのそうした鬱積が貯まったところに、今回の権限剥奪の話が重なり、怒りに我を忘れて蛮行へと駆り立てられたのだらう、と関係者は見ている。

彼が准将として指揮下に置いていた第六軍は即刻解体され、小隊長クラスより上の者達は上官の謀反を見抜けなかったとして降格、或いは減給等の処分がされる見通しだ。准将の配下だった者達は今回の蛮行を聞いて一様に「信じられません、そんな事をする人じゃ

なかったのに」と驚きを隠せない様子である。

現在、新生テルネシア帝国は東国各国の他にイアニス教団とも事を構えており、一丸となつて事を構えねばならない状況にある。そんな中で起きた今回の上級将官の反逆は、帝国軍が決して一枚岩ではない事を周辺諸国に知らしめた形となり、帝国内で似たような反乱を誘発してしまうのではないか、と一部の専門家達に危惧されている。(O記者)

帝国将校にもブラージウスに逆らうような奴がいたんだな、と流石に驚きを禁じえなかったリージェスは、このまま立ち話をしても往來の邪魔だからまずどこかに腰を下ろそう、と二人を伴って目に付いた喫茶店に入った。

「いらつしゃいませ、三名様ですか？」

「ええ」

「二階の席が空いておりますのでどうぞ」

男性の店員はそう言つてカウンターの隣の階段を指差した。

三人は角の席に腰を下ろし、空いたスペースに買った物を乗せると全員でつまめるミックスサンドイッチセットと紅茶を頼んだ。

注文を待っている間、再び紙面を見ている二人に、キールが訝りながらも訊く。

「……どう思つ」

リージェスは顔を上げる。出しているのが帝国とツーカーの三日新聞社だという事を考慮すれば、何となく大まかな点は察する事が

出来る。

続いてリーシエも顔を上げると、二人の顔を比べる様に見て肩を
竦める。

「日付見た？ これ、つい一昨日の話よ。こんなに早く発表した事
自体、何か怪しすぎるよね」

キールは我が意を得たり、と頷く。

「同感だな。ただでさえ、イアニス教団がベールを乗っ取って間も
ないのに、各国に知らせたくない内輪揉めをわざわざ晒そうとは思
わない筈だ」

リーシエは腕を組んで言う。

「乱心が嘘だとするならプロパガンダで済むんだけど、可能性は低
そうね。こんなに大々的に報じているんだし」

キールは頷く。

「少なくとも、フロイデ准将が反逆した事は事実なんだろうな。こ
んな多額の賞金まで掛けているんだ。殺されてた後で、勘違いでし
た、で済む問題じゃない」

リージエスが首を捻る。

「うーん。となると、何故直ぐに発表したかだよな。キール、この
フロイデ卿っていうのは、一体どういう人物なんだ」

キールはリージエスを見返す。

「……何故俺に訊く」

「だって、お前アクア もごもご」

いきなりキールに口を塞がれ、リージエスはその先を言う事が出
来なかった。

《リーシエには秘密にしとけてあげほど言っただろっ》

キールは眉をしかめながらも顔を近づけて注意した。

《あ、ああすまん。そうだったな》

リージエスがオルフィと初めて出会った日に、リーシエにはアク

ア・テイ・アラの事については話さぬよう、キールにきつく口止めされていた事を思い出す。

小声でこそ話している二人をじと目で見て、腰に手を当ててリーシェは言う。

「何よ、二人して隠し事？ 私に言えないような事なの？」

不服そうにそう言うリーシェを、キールは慌てて宥める。^{なだ}

「いや、そんな事ないって。ほら、俺よく酒場に行ってるから情報通ってどうか」

リージェスもこくこくと頷く。

「そうそう。それでキール」

「ああ、わかってる。あくまで人伝の話だけ」^{ひきつて}

何か言いたそうなリーシェに二の句を継がせまい、とキールは早口で話し出した。

キールの話では、アステイス・フロイデという男は帝国の将の中でも相当マシな人材、という事だった。平民の出自ながらも運良く先帝アルイールに認められ、十八の頃には秘書文官を任され、先帝アルイールを陰から良く助けていた。帝国民内でも権威を笠に着ない数少ない将校という事で評判が良く、ブラージウスを除いた9つの軍を率いる将校達の中では人望、統率力共に一、二を争うという事だ。

「もう一人、帝国屈指のジルバート・ミレンって有名な将軍がいるが、先帝の御代の頃、フロイデ准将はそいつに匹敵するって言われていたらしいな。蛇足だが、そのミレンとフロイデは友人の間柄でもあるらしい」

キールは話の合間にテーブルに置かれたミックスサンドを摘まみ

ながら言った。

「なるほど、合点がいったわ。帝国にとっては、そんな有能な将が敵対国に所属したらまずいってわけね。それでそんな法外な賞金をかけたんだ」

リーシエが納得したように頷いた。自分達がフロイデを明らかに敵視している、と周囲に公表した事によって、敵対国がフロイデに近寄り難くなる、という効果を期待したとリーシエは考えていたのだろう。

リージエスもほぼ同じ考えだった。帝国は、もしアステイスIIフロイデを組み入れた勢力があつたら真つ先に潰すぞ、という脅しをかけたわけである。内密に困い込んだとしても、今度は20億ギラという莫大な賞金が力を発揮する。人の口に戸は立てられぬし、金に目が眩んで通報してくる者がいる可能性も高い。

「多分そんなところだな。あと、もう一つ気になったのがフロイデの行動だ」

キールが不思議そうな顔をしてリージエスを見る。

「行動？」

この紅茶かなり苦味が出てるな、と少し舌を出し、リージエスは紅茶のカップを口元から下ろして頷く。

「そもそも、反逆だって言うなら何でブラージウスじゃなくてブラームスって奴の、しかもよりによって別邸宅を狙ったんだ。確執があつたって書いてあるが、本当にそれが原因なら、まず本邸宅を狙うのが筋だろ。少なくとも俺がやるならそうする。まあ皇帝に関しては、ガードが堅かったから諦めた、って可能性は多分にあるだろうけど」

リーシエもその意見に賛同する。

「……確かにそうね。権限を剥奪する事が決定したとも書いてあつたし。それをブラームスが唆そそかしたのだとしたら……」

キールは腕を組む。

「仕組まれていた。そう言いたいわけか」

リーシエは不思議そうに首を捻る。

「でもさ。そんなに有能だった人をわざわざ反逆させる意味ってあるのかな。それに時期が時期だし、波風立てるならもっと他の時期を選ぶと思うけれど」

少し間が空いて、リージエスが言う。

「若くして有能、それだからこそやつかみもあつたんじゃないかな。そもそも、評判から察するに？乱心？つてタイプでもなさそうだしとなると、敢えて別邸宅に行かざるを得ない理由があつたのかもしれない」

「例えば？」

リーシエがテーブルに乗り出して訊いた。

「わからん。まだ判断材料が足りないし、こればかりは、な」

リージエスが首を振った。

暫くすると、顎に手を添えていたキールが言う。

「フロイデがブラームスって奴の別邸宅に呼び出されたと考えたらどうだ？」

リージエスは少々納得がいかない、というふうに関論する。

「キールだつてさつき言っていただろ。彼は帝国の中ではまともな方だったつて。いくら呼び出されたからつて、敵対している奴の屋敷にのこのこいくとも思えないぜ」

「……だよな」

キールは首を捻った。

すると、リーシエが自信なさ気にリージエスの顔を窺う。

「ん、どうした？」

「……これはあくまで私の想像なんだけど、もしかしたら弱みを握

られていたんじゃないかな」

リージェスとキールはお互いの顔を見合わせる。

「弱み……か」

「そう、例えば税金を横領していたとか。或いは、何かしら知られちゃまずい事を隠蔽工作していたとか。それを口実にブラームスって奴がフロイデを別邸に上手く呼び出したは良いけれど、返り討ちにあっちゃった、ってとこ」

リーシェの推測を聞いて、キールは含み笑いを漏らす。

「……案外、いい線いつてる気がする。これなら、有能な将を反逆させる理由っていうのも一応説明付くし。人望が厚く、しかもブラージュウスに反抗的な態度を見せたフロイデを上層部が危険視し、フロイデと折り合いの悪かったブラームスと共謀して殺そうとした、が見事に逃げられた。だから仕方なく反逆者扱いにした」

「まあ、なくはなさそうだな。でもそれなら、ブラージュウスの部下が直接やると思うんだけど」

「汚れ仕事をやりたくなかったんじゃないの。仮にも人気将校だったみたいだし」

リーシェの台詞にリージェスは笑う。

「自分から進んで生ゴミの中に身を投げる奴が、今更汚れ仕事から逃げるかな」

「……う、ごもつとも」

確かに、ブラージュウスの元々の評判を鑑みれば、それにケチの一つ付いたところで大勢はないな、とリーシェは考え直す。

キールは未だ唸っていたが、再び紙面から手を離す。

「ま、この記事だけで全体像を判断するのは難しいな。今はフロイデが捕まらない事を祈ろう」

反帝国の者はいくら増えても足りないと言う事はないからな。そう言っただけでキールは言葉を切った。

だが、リージェスは考えていた。仮にも先帝の懐刀とまで言われた人物が、このような汚名を着せられて、大人しく雲隠れしていられるわけではない、と。

其の十三 く触れ合う心(裏)

883年 10月9日

ゴルフレッドの街からの帰り道、三人は食料を一杯詰め込んだ袋を両手に抱えながら森林公園を歩いていった。横幅3m程の土道には、赤や黄色の鮮やかな落葉で出来た絨毯が敷かれている。ふと上を見れば、美味しそうな熟れた柿の実がなっている。リージェスは近いうちに取りにこようか、と空を仰ぎながらぼんやりと考えていた。

ふと、珍しい橙色の鳥が視界を横切った。咄嗟にそれを目で追うと、鳥はそのまま南西への方角へと飛び去っていった。はたと、リージェスはある事を思い出す。

「そういや、リーシェに言い忘れていた事があつたな」

リーシェは歩きながらリージェスに視線を送る。

「ん、なに？」

「実はさ。俺、もう少ししたらカタルスタへ行こうと思ってるんだ」

少し間があつて、リーシェは柳眉を上げる。

「えー、何でいきなり？ どうして？」

「たいしたことじゃないんだけど、ちょっと思い立った事があつてな」

キールはそれを聞いて苦笑する。帝国の皇帝たるブラージウスと戦いたいって事がたいしたことじゃないなら、一体他の何がたいしたことなんだ、と。

リーシエは俯いて暫く考えていたようだが、顔を上げて言う。

「それで、いつ頃いくつもりなの？」

リージェスは即答する。

「もう少し帝国の戦線が奥まったら、直ぐにでも」

「ふーん、わかった。旅行の用意しとくね」

意外と軽いリーシエの物言いに、リージェスとキールは少なからず驚く。

「そういえば、キールはどうするの？」

急に矛先を振られ、意表を突かれたキールは返事に窮する。

「あ、ああ。まだ検討中だな」

珍しく齒切れの悪いキールに、リーシエは不思議そうな顔をした。

「……そう。この事、ネフェリイ達には？」

リージェスは小さく首を振る。

「まだ話してない。勿論行く前には話すし、またここに戻って来るつもりだけだな」

見慣れた屋敷が姿を現すと、リージェスはそういえば、と今朝ネフェリイの具合が悪そうだった事を思い出す。少しは元気になっていると良いのだが、そう思いながら首に下げていた鍵を差し込み口に入れ、捻ってからドアのノブを引っ張る。

靴を脱ぎ、三人がリビングにいくと、ミシエルとシルドが慌しく水を錐きりで砕くだいていた。傍らには氷こ囊のう用の袋ふくろが置いてある。もしか、とリージェスは険しい顔をする。

「二人とも。どうかしたんですか？」

リーシェが躊躇ためらいがちに声をかけると、ミシエルは俯く。

「……姫様が高熱を出して突然倒れられました。……御存知の通り、朝から少し具合が悪そうだったんですが」

それを聞いて三人は顔色を変える。

「……相当悪いのか？」

キールが心配そうに訊くと、シルドは難しい顔をする。

「相当熱が出ていますので楽観はできません。おそらくは気疲れだと思えますが……新しい環境になってから、私達に迷惑をかけまいと、今までずっと気を張っていたのかもしれないですね」

「」

リージェスはそれを聞いて口を嚙くむ。今まで弱音一つ吐かなかつたネフェリイだったが、やはりどこか無理をしていたのかもしれない。こうなる前に自分が気付いていれば、と思った矢先、ミシエルは口惜しそうに言う。

「……すみません。私がもう少し早く気づいていれば良かったのですが」

かなり落ち込んでいる様子のミシエルを、リーシェが慰める。

「ミシエルさんのせいじゃないです。私も何か手伝います」

リージェスもやっと頷く。

「俺も手伝います。ネフェリイは部屋にいますか？」

「ええ、ベッドで寝ていらっしやいます。じゃあ早速ですが……リージェスさん、申し訳ありませんが氷囊を取り替えて来て下さいますか？ リーシェさんとキールさんは洗濯物の方を取り込んでくだ

さい」

三人は快く頷いた。

リージェスは渡された新しい氷嚢こふちを手に持ち、急いで階段を上っていく。袋の外側からでも、手にひんやりとした冷気が伝わってくる。ネフェリイの部屋の前に立ち、遠慮がちにドアを二回ノックする。

「ネフェリイ、大丈夫か？」

返事がない。まだ寝ているのかもしれない。

「悪いけれど、勝手に入るぞ」

リージェスはそう言うなり、ドアノブに手をかけた。

部屋の中に入ると蒸すように熱かった。ドアの左側にある小さなストーブの上に水の入った金属製のたらいが置いてあり、部屋を加湿しているのだと気付く。きつとミシエルが置いたのだろう。

数回しか入った事がなかったネフェリイの部屋だが、リージェスの視点は直ぐにベッドの上で寝ているネフェリイに向く。その顔は深紅に染まっており、かなり苦しそうに息をしている。

リージェスはベッドの前まで進み、ネフェリイの額に乗っている氷嚢をそつと外す。中の氷は既に溶けていて温い、というよりやや熱くなっていた。少しは熱が引いたのかを確認する為に、手の平を額に乗せると、指先を触れただけでも判る程、明らかに熱かった。おそらくは39度を越えている。リージェスはそれを確認した後、持ってきた新しい氷嚢こふちを吊り下げ、ネフェリイの額に再び合わせた。

布団がずれていたので少し覆いかぶさるようにしてかけ直そうとすると、油汗でべつとりと濡れた寝巻が目が付いた。汗の量が量だ

けに、寝巻きが透けて純白のブラが薄らと見えた。

（後で着替えさせた方が良さそうだな。リーシェかミシエルさんに頼んでおこう）

そう思いながら布団をかけ直すと、微かに寝言が聞こえてくる。

「……て」

「え？」

リージェスは思わず訊き返す。再びネフェリイは言う。

「……誰か、……助けて」

悪夢でも見ているのだろうか。リージェスは何とかしてやりたい衝動に駆られたが、現状、自分にできる事は特にないように思われた。

（まいったな。起こすわけにもいかないし……）

ふと、頼りなさ気に、ネフェリイの手が空を掻くのが見えた。リージェスは半ば反射的に、その手を掴む。

小さな手をそっと握りながら、リージェスは優しく、寝ているネフェリイの耳元でそっと囁く。

《大丈夫。ここにいろよ》

その声が届いたのだろうか。ネフェリイの表情は徐々に穏やかになり、荒かった息も落ち着きを取り戻してくる。

まだ熱は高いままだったが、ネフェリイが安らかな寝息を立て始めたのを見届けると、安堵したリージェスはそっとネフェリイの手を離し、部屋を後にした。

リージェスが居間に戻ってきたのを見とめて、ミシエルが話しか

ける。

「姫様、どうでしたか？ まだうなされていましたか？」

「熱はまだ高いですね。……かなり頻繁にうなされているんですか？」

「ミシエルは俯いた。」

「六時間くらい前から、ずっとなんです」

それを聞いてリージェスは頭を掻く。

「やっぱ、悪夢でも見ているのかな。一応治まったみたいだけどその言葉に、ミシエルは顔を上げる。」

「あらっ、治まったんですね。良かった……」

心底嬉しそうな表情だった。おそらくミシエルは、主君であるという以上に実の妹の様に、ネフェリイを大切に想っているのだろう。リーシェという妹がいるリージェスにも、それは何かしら共感できるものがあった。

キールとリーシェが洗濯物を持ってきたのを見計らって、リージェスは思い出したように言う。

「あ、そうそう。ミシエルさん、リーシェと一緒にネフェリイの服、着替えさせられます？ 汗びっしょりかいていたので。もし良ければ、そのまま看病して頂ければ」

途端にミシエルは、うつかりしていた、という顔をした。

「忘れてました。……でも、皆さんの夕飯が」

「んー、夕飯は俺が作りますよ、俺が着替えさせたら今度は本当に殺されかねないし。あいつも傍に誰かいた方が安心出来ると思いますから」

朗らかにそう言うリージェスに、ミシエルはクスツと笑い、顔を向けて礼をする。

「わかりました、ありがとうございます。それではお言葉に甘えさ

せていただきますね。リーシェさん、お願いできますか？」

「もつちろん。じゃあリージェス。夕飯、期待してるからね」

しっかりと釘を刺して、リーシェはミシエルと部屋を出て行った。

リージェスは台所に向かいながら、今夜の献立を考えていた。

(さて、何を作るかねえ)

病人がいる分、レパトリーはかなり限られる。消化が良くて温まるものなら問題ないが。別々に作ると時間がかかるし、普通の人も美味しく食べられる病人食を作ろう、と決める。

買って来たばかりの、体長40cm程の舌平目を洗い、胸びれだけ先に落として鱗をスプーンを使ってこそげ落とし、出刃包丁で切り込みを入れてエラと腸を取り出し、水洗いしてから頭を落として五枚おろしにする。中心に切り込みを入れて骨に這わせるように両側を切り出し、皮を引いて一口大の大きさに切った後、臭みを消すために沸騰した薬湯でさつと湯搔いてざるに上げておく。

土鍋に研いだ米、米の上に細く切った人参、皮付き鳥の細切れ、油揚げを入れ、適量の醤油と酒、鰹節で取った出汁を加え、最後に水を加えて炊き込みご飯を作る。

土鍋を火にかけている間、白髪ネギを5cm間隔で刻み、少量の生姜を微塵切りにすると、先程網に上げておいた白身魚と軽く和え、オリーブ油を数滴。

別の鍋でも湯を沸かし、こちらは岩塩、鳥の骨、梅干しで出汁を取る。沸騰して暫くしたら火を止め、骨と出洩らしになった梅干しを取りだし、少量の片栗粉を入れて微かにとろみを付ける。

炊き上がったご飯に白身魚の和えものを上に乗せ、更になら別の鍋で作ったダシをかけ、刻み海苔を上にかけて出来上がり。

「　　なんだけど。お味の方は」

『美味っ』

斉唱。リージェスは密かにテーブルの下で拳を軽く握る。

寝巻を着替えさせたにもかかわらず、まだネフェリイの意識が戻っていなかったため、ミシエルとリーシエは遅い夕食を食べに一旦下に降りてきていた。一同は、リージェスの作った南部の郷土料理、ブラーヴァ粥を堪能していた。

リーシエはがつつくようにハイペースで食べている。

「ふー、ふー、熱っ、旨っ」

それを横目に、リージェスは溜息をつく。

「……おまえ、頼むから火傷だけはするなよ」

シルドが匙でダシを掬っている。

「このダシの味がまた泣かせるねえ。この絶妙な酸味は梅干しですか」

「南部の方は熱いから、果物は腐らない様に何でも直ぐ漬けたり干したりするんだ。お酢にも食欲増進の効果があるけど、病人の口には少しきついから」

ミシエルは満足気に頷く。

「シヨウガは身体を温めますし、ネギも喉にいいですし。梅干しは言わずもがな。姫様もこれなら喜んで食べられますわ」

キールも感心したように言う。

「シヨウガは苦手なんだけどこれは普通に問題ない。お前、いつそ料理屋でも始めたらどうだ。この腕ならどこでだって食っていけるぞ」

「もうちよい齡食ったら、まあそれでも良いんだけどな。今はこん

な情勢だし」

リージェスは苦笑した。

暫くして、ミシエルが動かしていた匙を止める。

「……やはり姫様。半年前の事を気に病んでいるのかもしれませんが寝言を聞いている限りではそんな気がするんです」

リーシエは首を傾げる。

「もしかして、エアリアの防衛戦の事？ 気に病むべきは一方的に侵略した帝国兵の方よ。ネフェリイが気にする必要は全くないわ」

シルドが頷く。

「全くその通りです。さりとて、姫様はお父上に似て責任感の強い御方ですから、心のどこかで自分を責めているのかも」

シルドの言葉を聞いたリージェスは、粥を食べながら考えていた。きつとネフェリイがそういう人物だからこそ、ウィル隊長達は命をかけて守る事ができたのだと、そう信じていた。

夕食後、ミシエルとリージェスはネフェリイの部屋に赴いていた。初めは少し渋ったのだが、夕飯を作ったのはリージェスなのだからとミシエルに何だかよくわからない説得をされ、言われるがままに付いて来ていた。ミシエルの体から発せられる、この？逆らっちゃいけないオーラ？は如何ともし難いな、とリージェスは苦笑いを浮かべる。

ミシエルはネフェリイの部屋をノックする。

「姫様、ミシエルです。まだ寝ていらっしやいますか」

先程と同じように返事がない。

「まだ寝ているのかしら。もう十時間くらい目を覚まさないから、

ちょっと心配になってきたわ」

「とりあえず入りましょう。あまり酷いなら、危険を承知で医者に見せるしか」

ミシエルは頷いた。

二人はドアを開けた途端、目を瞠った。ネフェリイはいつの間にかベッドから転げ落ちており、床にうつぶせになって苦しそうに絨毯に爪を立てていた。

「姫様っ」

「ネフェリイッ」

慌てて二人が近寄り、未だ意識がない事を確認する。

「……て」

再び声が聞こえる。

「……う、……いや」

「酷くうなされているわ。……頭打たなかったかしら」

「……そんなに高さはないし、うつ伏せになってましたから、多分大丈夫です。まずは、一旦ベッドに上げますね」

リージェスがネフェリイの身体を軽々と抱き抱え、ベッドにそつと横たえる。

その直後、ネフェリイの^{まぶた}瞼が緩慢に動いた。

「……ん、……あ……れ」

「姫様っ、気付かれました？」

「おいおい、びっくりさせるなよ。心配させやがって」

長い睫毛を何度か重ね、ネフェリイはまだ虚ろな目で二人の姿を確認する。二人は顔を見合わせ、ホッと胸を撫で下ろした。

「……ミシエル、……リ……ジェス？」

「そうですよ、姫様。ちょっと失礼しますね」
そう言って、ミシエルはネフェリーの額に手を当てた。

「……床に落ちて身体が冷えたからでしょうか。少し振り返したみたいですよ」

「そうですか、まあ大事に至らなくて何よりです。……ネフェリー、飯食えるか？」

「……ん、少し……なら」

喉が痛むのか、ネフェリーは弱々しい声を返した。

「姫様。今日の晩御飯、姫様のためだけにリージェスさんが作ってくれたんですよ」

ネフェリーがそれを聞いて、僅かに眉を上げる。

「……え、……ほんとに？」

別にネフェリーのためだけではなかったが、何故かミシエルの目がねめついているように思えたので黙っている事にした。ネフェリーが食べられる料理を、と違ってメニューを決めたのは確かだし、あながち嘘とも言い切れまい。

「ま、そんなようなもんだ。そんなかし、口に合うかは一切保証しないぜ？」

リージェスの軽口に、それでもネフェリーは微笑んだ。

「……ううん、……凄く……嬉しい」

(あら、意外とすんなり御礼を……)

病気になるかと素直になれるのかしら。そんな事を思いながらも顔には出さず、ミシエルは匙で粥を掬うと、ふー、ふーと息を吹きかけて少し冷まし、慎重にネフェリーの口元に近付ける。

「姫様、あーん」

「……あ、あーん」

リージェスの顔をチラツと見て、少し恥ずかしそうにしながら、ネフェリイは小さな口をめいっぱい開ける。ゆっくりときこちなく咀嚼そしゃくした後、ネフェリイは二人に微笑む。

「……美味しい」

リージェスは満足そうに微笑みを返し、おもむろに声の調子を低くする。

「光栄の至りです。 姫様」

ネフェリイとミシエルはきよとんとお互いの顔を見合わせ、クスクスと笑い出す。

「……すっごい違和感」

「ほんと、似合わないですね」

「ええー、二人ともそりゃないぜ」

口を尖らして滑稽な顔を披露するリージェスに、二人の笑い声が更に大きくなる。

暫くの間、ミシエルはネフェリイの口に、雛鳥に餌を運ぶ親鳥よろしく、粥を与えていたが、ふいにこんな事を言い出す。

「いつけない。洗い物をするのを忘れていました」

「あ、じゃあそれは俺が」

口を挟む間もなく立ち上がり、ミシエルはリージェスに匙を押しつけるようにして手渡し、慌ててドアに向かう。

「すみません、リージェスさん。 姫様にご飯あげていてください、直ぐに戻ります」

「あ の っ」

ボタンッ

早口で捲し立てられ、扉が閉まる。

「……いつちやったね」

「ああ、まあいつか」

気を取り直して、匙で粥を掬う。湯気の出を見る限りでは、もう息を吹きかける必要はなさそうだった。零さぬよう慎重に、ネフェリーの口に匙を運ぶ。

「はい、あーん」

「……あ、あーん」

再びネフェリーは咀嚼そしゃくを始める。心なしか顔はまだ赤いが、さつきよりは幾分色が引いていた。リージェスはネフェリーに繰り返し粥を与え、気付いた時には深皿は見事に綺麗になっていた。

「……ご馳走様でした」

ネフェリーはリージェスに軽く礼をする。

「はい、お粗末さまでした。これだけ食欲あるなら、大丈夫そうだな」

リージェスも礼を返す。

「……何だか、身体がポカポカしてきちゃった。……凄い汗かいてる」

大分、呂律がまともになってきたネフェリーを見て、リージェスは胸の内でホツと息を撫でおろす。

「ああ。生姜には発汗作用があるらしいから、そのせいかな」

暫くして、ネフェリーはゆっくりと視線を落とし、呟く。

「……ごめんね」

「あん、何が？」

「……皆に迷惑かけちゃって。……私、駄目だ」

いつになく弱気なネフェリーに、リージェスは明るく言う。

「いいさ、たまには迷惑かけてくれよ」

ネフェリイは顔を上げてリージェスを真っ直ぐに見る。それに氣付いたリージェスは、微笑んで視線を返す。瞬間、ネフェリイの両の手がピクツとこちらの方に動いた氣がしたが、その手は掛け布団の上に戻された。

「……時々、夢に出るの」
「夢？」

訊ねた後で、リージェスはネフェリイのうわ言を思い出す。

「……その中には、ここにいる皆は誰もいなくて。……その代わりに、黒い人達が一杯いるの」

「黒い人達……」

「……うん。……多分、その人達は、エアリアで死んだ人達だと思
う」

リージェスは目を瞑る。

「……血に濡れた身体で、口々に私に言うの。……助けて、……お願い、……痛い、……苦しいって」

ネフェリイはそう言っただけで身震いし、身体を竦める。

「……きつとあの人たちは、……私を怒っているんだわ。……何であいつ一人だけ逃げのびて、……幸せに暮らしているんだ、って……怒っているの。……私、卑怯者なの」

リージェスは予想もつかなかった事を吐露され、首を傾げる。

「卑怯？ お前は最後まで残ろうとしただろ。なのにどうして？」

「……だって、私、ホツとしちゃったんだもん。……リージェスに氣絶させられて、どこかの山で目覚めた時、ゴルフレッドに着いた時も、帝国兵に囚われてなくて安心しちゃったの。……助かったのは、決して自分の意思じゃないんだって。……貴方に無理やり連れ出されたんだから、しょうがなかったんだって。……心のどこかで

自分が逃げた責任を貴方に押し付けながら、……私はここでのこの
うと暮らしていたの」

ネフェリイは寒気と悪夢による恐怖からだろうか、カタカタと震
えていた。病のせいもあるのだろうが、その姿は普段の彼女からは
想像もつかない程に、儚くて、脆くて、痛々しかった。ミシエルの
言う通り、平穩な暮らしをしている中でも、自責の念が^{おじ}澱の様に、
少しずつ溜まって来ていたのかもしれない。

聞き役に徹していたリージェスはからりと言う。

「別にいいじゃん」

「そうよ　　って、えっ？」

ネフェリイは目を丸くする。

「だーからー、そのどこが行けないんだつつつの」

「……だ、だから私は卑怯者で」

予想外の返答だったのか、しどろもどろになるネフェリイに、リ
ージェスはわざとらしく溜息を吐いてみせる。

「あのなー、お前どこまで^{バカ}純粋なの？　　心で折り合いつけてない人
間なんて絶対にいないぜ」

「……折り合い」

バカ呼ばわりされ、ネフェリイが怒るか少し期待したリージェ
スだったが、ネフェリイは小さく呟くだけだった。

張り合いのなさに苦笑するリージェスは、少し考えてから言葉を
紡ぎ始める。

「例えば、だ。……そう、一人の名医がいたとしようか。その先生
が階段から落ちて運悪く利き手を骨折してしまった時、先生の下に
死にかけてた患者が連れ込まれた。わかるか？」

「う、うん……」

る。殴つちまったのは、まあ、その、どうかと思っけれど」

リージェスはばつが悪そうに、そう言って苦笑いした。ネフェリイはリージェスの顔をじつと見つめながら、二の句が継がれるのを待つ。

「万が一、あの時ネフェリイが捕まっていたら、俺の心に一生影を落としていただろうな。勿論、ウィル隊長の最後の命令だって事もあつたけれど、何より、リーシェとそんなに齢も変わらない様な女の子が、帝国兵なんかにいよいよに弄ばれたら、と思うとどうしても遣りきれなくてさ。詰まる所、単なる俺の我儘何だけど、な」

「……っ」

リージェスの心の内を初めて聞き、ネフェリイは俯いて口を噤んだ。リージェスが自分の身を心から案じていたのだという事に抑えがたい喜びを感じ、同時に意地を張って反抗的な態度を取っていた事をどうしようもなく恥じた。視界が滲み、必死に涙を堪えようとしたが、リージェスが放った次の言葉が彼女に止めを刺す。

「お前は卑怯者なんかじゃない、高潔なる者だ。何年も旅をして、幾多の人となりを見て来た俺が言っているんだから間違いないよ。だから、自分を責めるな。どうしても責めたくなくなったなら、その時は連れ出した俺を責めればいいさ」

リージェスは微笑みを湛えながら立ち上がると、ネフェリイの背中を手で支えながら、ゆつくりとベットに横たえようとした。

しかし、ネフェリイの頬を涙が伝っている事に気付き、リージェスは慌てる。リージェスの揺るぎない言葉は、ネフェリイの心に刺さった棘をゆつくりと、確実に溶かしていく。

「ど、どうしたっ。どこか痛むのかっ」

「あ……」

ネフェリイは慌てて袖で頬を拭い、心配そうに自分の顔を窺うリ
ージェスに、はにかんだ表情を見せる。

「……何でもない、ほんとよ」

「そ、そっか。ならいいけれど」

安堵のため息を吐いたリージェスは、ネフェリイを横たえ、潤む
目を自分に向けているネフェリイの額の汗をハンカチでスツと拭い、
吊るされた氷嚢を、再びネフェリイの額に当てる。

「さ、今日はもう寝とけ。明日には元気になれるように」

「……うん」

小さく頷いたネフェリイを見て、リージェスはドアへと歩き出す。
その背中を、ネフェリイは反射的に目で追う。

「おやすみ。良い夢を、な」

そう言い残して、リージェスはドアをそつと閉めた。

ネフェリイは胸に募る熱をそつと吐き出すように、ありがと、と
小さく呟き、そつと瞳を閉じる。虫のように蠢く闇くらみはもう襲っては
こない。何だか、本当に良い夢が見れそうな予感がした。

其の十四　くそれぞれの旅立ち（裏）く

アステイスⅡフロイデの反逆から二か月近くが過ぎ、帝国軍はベールへの牽制としてエル・クレスの要塞にジルバートⅡミレン、ライエンⅡベルガモット両將軍を残し、再び東へ進撃を開始する。

しかしながら、イアニス教団と敵対したという事実は、上層部が危惧していた以上に、信者である兵達の心に大きく陰を落とし、その頃から兵卒を中心に軍を離脱する者が相次いで出始める。帝国の各都市では人員が足りなくなる所も増え、前線に近い都市の兵数を増員すべく、マビアビやエアリア、クルート等から兵達が次々に東へ送られるようになった。

その間、東部諸国はブラージュウスに対抗すべく、グリトリの領主にしてブラージュウスの弟、イヴァールⅡテレジアと、シャンターの領主、ヨーゼフⅡヘンケルの二人を軸として結集を図る。

また、一方ではベールで独立したイアニス教団が後方の憂いを無くすため、手始めにベールの南に位置する帝国領、港町コルトパを攻略すべく兵を召集していた。

その混乱に乗じて、キールはギルドへ戻るため一足早くゴルフレッドの街を後にし、年が明けると、リージェスとリーシエはキールを追うように、カタルスタへ赴くために旅支度を始める。

884年 1月3日

屋敷の居間にいたリージエスは、壁にもたれながら腕を組み、それとなしに急かす。

「まだ時間かかりそうか」

リーシエは床に座りながらゴルフレッドの大型雑貨店で買った新しい革袋に着替えや小物等を選別し、詰め込んでいる。その隣ではネフェリイも、リーシエの荷造りの手伝いをしていた。

「もうちょっと。リージエスはもういいの？」

「勿論、直ぐにでも出発でき……あ、いけね。銀行から金出してくる。面倒だから外で待ち合せよう」

そういうと、リージエスは慌てて部屋を後にする。

「もう、しつかりしてよね」

リーシエが呟いた隣では、ネフェリイがその長い睫を瞬かせ、憂いのある表情を浮かべている。

「本当に、二人だけで大丈夫？」

その言葉には気遣いが滲み出ている。カタルスタへの旅路が決して安全とは言えないだけに、彼女なりに身を案じてくれているのだろう。

リーシエはネフェリイの方を向き、なるべく安心させられるよう心がけて微笑む。

「平気だよ、小さい頃からずっと二人旅してきたんだもん。私達そんじよそこらの奴には負けないし」

「それは知ってるけれど、帝国兵に絡まれたら多勢に無勢じゃない。しかも貴方は女なのよ、捕まったら何をされるか……」

わかつたもんじゃない。いや逆か。リーシエのような美人相手にケダモノの様な男達がやろうとする事なんてわかりきっている。

「ちよつとちよつと、縁起でもない事言わないで」

流石に、続く言葉の意図は察したようでリーシエも眉を潜める。

「あ、ごめんなさい。でもとにかく、用心に越した事は無いんだからね。それだけは忘れないでね」

「うん、わかつてる。ありがとね」

相槌を打ちながらも、リーシエはパチンと革袋の留め金を留めた。

正に澄み渡る青空だった。昨日まで降っていた雪は暖かさを感じさせる日差しに晒されていたが、雑草が顔を出さない程度には残っていて、日の光を所構わず乱反射させている。足元の雪を見ると眩しくて目も開けていられないほどだ。時折屋根から落ちる垂り雪しずがぼたぼたと、硬い雪に穴を穿つ。

リーシエとネフェリイが外に出ると、既にミシエルとシルドも見送りに来ていた。

「おう、遅かったな」

リージエスの声に反応し、ネフェリイはミシエルの横に視線を移動させる。

「つて、リージエスもう行ってきたの？」

ネフェリイは目を丸くする。

「ああ、走って来たからな」

リージエスは事も無げに言ったが、最寄の銀行はそんなに近くない。走る速度が馬並みでないと戻って来れない筈だ。

健脚というにも程があるでしょ、とネフェリイは半ば呆れ、半ば感心した。リージエスとネフェリイの間にあつた険悪さはいつしか消え失せていた。

「あっそ、その足でリーシエを置いて逃げないでよ」

「軽口を叩いてみたが、軽口で返される。」

「んな事するくらいなら、死んだ方がマシだ」

リージェスは何気なく言ったのだろうが、その言葉は有無を言わせぬ力強さに溢れていた。ネフェリイがチラツとリーシエの方を盗み見ると顔は平静を装っていたが、先程と感情の色合いが変わっている気がした。この二人の絆は、自分が思っているよりも遥かに強いのもかもしれない。

「それより、ネフェリイ達こそ用心しろよ。いつブラージウス達がこちらに来るとも限らないんだからな」

今度はシルドが口を挟む。

「彼らか今こちらに来る余裕は、あるんでしょうか」

シルドが言ったのは、決して楽観的な意見と言っわけではない。

確かに、帝国はイアニス教に宣戦布告され、つい最近では軍を預かる将校の一人が反逆したとも聞く。だが、それは決して来ない、という理由にはならない。

「隊長は低い可能性こそを常に恐れよ、って言っていたからな。少なくとも諜報員くらいは放っていると思うべきだ」

その言葉に、リーシエも頷く。

「良く、ウィル隊長は起きつる事象の全てを想像しろって言ったの。可能性が少なからうと、警戒するに越した事は無いから」

「なるほど、傾聴に値する言葉ですね。わかりました、肝に銘じておきます」

シルドは頷いた。

「じゃあ、行くか」

「うん、じつとしてると体冷えちゃうしね」

リージェスとリーシエは二人顔を見合わせて頷き合い、南西の方に歩き出した。

「お二人とも、身体に気を付けてくださいね」

メイドのミシエルの声に振り替わり、二人とも同時に頷く。

「ああ、皆も元気で。なるべく早く戻って来るからな」

「ミシエルさん、シルドさん、ネフェリイをお願いします」

リーシエの言葉に、二人は笑って頷いた。

「リージェスっ」

再び歩きかけたリージェスをネフェリイは咄嗟に呼び止める。しかし

「あー、えっと……」

何かを言おうとしたはずだが、忘れてしまっていた。ミシエルとシルドは、ネフェリイに視線を送る。

「ん、何だ？」

振り向き、不思議そうな顔をして尋ねるリージェスに、ネフェリイは困った顔をしている。

「ええっと、その、うん、リーシエをちゃんと守ってあげてね。二人とも、無事に帰ってきなさいよ」

何とか当たり障りのない言葉を取り繕ったネフェリイに、リージェスは穏やかな微笑を浮かべながら頷いた。普段あまり自分に見せた事のないリージェスの表情に、ネフェリイは心が波立つのを感じた。

屋敷を出て、少し先の森林公園を抜ければエアリアへ向かう街道が見えてくる。まだ年が明けて間もないせいか人通りは殆ど無く、雪で覆われた舗装路にも足跡が疎まばらにあるだけだ。二人はキュッキュと新雪を踏む感触を楽しみながら、ひんやりとした空気に包まれた森林公園をゆつくりと進んでいく。辺りには針葉樹独特の嫌味が無く、でもどこか鼻を突く香りが満ちている。

「二人きりっていうのも久し振りだね」

リーシエはそう言って腕を組み、伸びをしながら空を仰いだ。生い茂る木々の尖った葉の隙間から所々に陽光が零れ落ちている。

「そうだなあ、エアリアに来る前はずっとそうだったのに、何だか懐かしいな」

リージェスも同意した。ウィル隊に所属してからまだ二年と少ししか経っていないのに、周囲の状況は著しく変わっていた。帝国が二つに割れ、ウィルが殺されてしまい、大陸中が戦乱に巻き込まれるとは、二年前には想像もなかった事だ。

「ネフェリイ達、大丈夫かな」

リーシエは少々声量を落としてリージェスに問いかけた。万が一にもその名前を、道行く者達に気取けとられるわけにはいかなかった。

「あの二人がお目付け役だし、大丈夫」

リージェスは、確信を持っているようだった。

「うん、そうだね」

そう言って、リーシエはリージェスの横顔を見る。いつも通りの顔だった。

「カタルスタか、どんな国だろうね」

リーシエが声を弾ませながら言った。どんな街並でどんな人が住んでいるのだろうか、二人は想像力を膨らませる。

「行く機会無かったもんな、イメージ的には、レンガ作りの古い閑散とした町並みで、図書館や風車が多いとか」

「街中に運河が流れていて、道行く人が三角帽を被ってたりね」

お互いに顔を見合せて吹き出す。リーシエはリージェスと想像に殆ど誤差がない事が嬉しかった。

白と黒に限りなく近い緑、二人は美しいモノクロの世界を堪能しながら森の中を歩く。坂を下ったところで、眼下にエアリアへの街道が見えてくる。

「階段だ、滑るから足元に気をつけるよ」

リージェスはリーシエを気遣う。狭い階段で踏み固められた雪は大いに滑るのだ。

「大丈夫だよ」

子ども扱いされたと感じたのか、リーシエは口を尖らせる。

リージェスは苦笑しながら、階段を慎重に下りていく。下から吹き上げてくる冷たい風が、少し汗ばんだ身体に心地良かった。

一月ほど前、珍しくキールの方から例の酒場に誘いを受けたリージェスは、店に入るとそれらしき男を探していた。程なくボックス席に、緑色の長髪とんがり耳を見つけ、相変わらずわかりやすくて助かるな、と少々失礼な事を思いつつ、そちらの方へと歩み寄り、軽く手を翳す。

「おう、待たせたな」

キールは僅かに振り向き、目だけをリージェスに向ける。

「来たか。まあ、とりあえず掛けてくれ」

頷き、リージェスは向かいの席に腰を下ろす。

「ご注文は？」

暫くすると、若い女性従業員が注文を取りに来た。

「ジンベースで何か貰えるか」

「じゃあ俺は、スープカクテルで何か」

「畏まりました」

注文を取り終えて女性は足早に戻っていく。相変わらず、この店は繁盛していた。値段は他の店と比べても決して安くはないが、バーテンダーの腕は良いし、店員の対応もテキパキしている。どこよりも早い新聞が見れるし、店のシックな雰囲気も悪くない。

「それで、話つて言うのは？」

「明日の早朝、ゴルフレッドを発つことにした。一旦ギルドに戻ろうと思う」

リージェスはキールの言葉に眉を上げる。リージェスがキールをカタルスタへ一緒に、と誘った時、キールがまんざらでもなさそうな顔をしていたので、多分行くものと思っていたのだ。

「随分急だな。てつきり一緒に来てくれるかと思ってたのに」

キールは申し訳なさそうに自分のこめかみの辺りを弄る。

「本当にすまん。実はお前がオルフィにあった日、彼女と年内に戻

るって約束を交わしていてな。ついつい、言い出すタイミングを逸していたんだ」

リージェスは記憶を探るように視線を宙に向ける。

「ああ、あの獣人ライカンのお嬢さんか」

リージェスの言い返しに、キールは思い出し笑いをする。オルフイの事をそう呼んでいるのは世界広しといえどもリージェスだけだろう。

「流石に色々と情勢も変わって来ているし、戻るなら帝国内がフロイデ卿の件でゴタゴタしている今がチャンスだと思ってる。ところで、お前はいつ頃発とうと考えているんだ？」

「うーん、本当は年内に、って思っていたんだが、下手をすると年明け、かな。エアリアの駐在兵が予想以上に数が多いらしくて。最近ゴルフレックはこつち側にも来やがるから、ネフェリイが見つかるんじゃないかって気が気じゃないし」

「ああ、なるほど。フロイデ卿の余波がきてるんだな」

アステイスIIフロイデがコステイIIブラームスの別邸を焼き打ちにした後、エアリアに滞在していたフロイデ卿の部下達は、もしかや上官の居場所を隠しているのではないかと真つ先に疑われ、第9軍大隊長ラフオムIIアツガート准将による詰問を受けている、等と報じられていた。その影響もあって、エアリア周辺ではアステイスIIフロイデ卿を探す兵達が数多く滞在し、下手に動くのは危険と思われたのである。

「多分、年明けには出れると思うんだけど」

「そうだなあ……お、来た来た」

会話が一段落ついたところで、先程の従業員が注文した酒を運んで来る。

「じゃ、乾杯するか」

「そうだな、ではお互いの無事を祈って」

『乾杯』

カチン、と甲高い吃音きつおんを立ててから、グラスとカップが離れる。

意外と強い酒だったのだろうか、暫くするとリージェスは落ち着きなく、片足を宙にゆらゆらと遊ばせ始める。

「しっかし、戦争って始まると中々終わらないもんだな。てつきり、もう少し早く片付くかと思っていたけれど。」

エアリアが陥落してから8ヶ月が経つものの、未だに戦乱は終息しないどころか拡大の一途を辿っている。経済は混乱し、戦いに巻き込まれ、家族や家を失った者達が徒党を組み、各地で盗賊紛いの事をしている。今現在の情勢としては、大陸東部でアテライデが独立。南部でエアニス教団がベールー帯を呑み込み、やはり独立。大陸西部の大部分、南部と東部の一部を領土する新生テルネシア帝国は、更に版図はんとを広げようと点在する街や村を攻撃し、虐殺に近い事が世界各地でまかり通っている。

キールは燭台に灯ともされている小さな火を見つめながら頷く。

「この戦乱は生半可な事じゃ終わらないさ。ブラージウスの暴走を食い止められるような、新たな英雄が現れでもしない限り」

「それは……今表に出てきている連中じゃ役不足だつて言うのか？」
キールはテーブルに肘を寄せ、手を組みながらゆつくりと話す。
「話題に上っているイヴァール」テレジアは僅か14歳。ヨーゼフ
「ヘンケル元准将は脂の乗っている齡で武名も高いが、ネルガルで
あつさりやられたエルゲート元將軍を超えるほどではない。万が一、
ミレン將軍辺りが反旗を翻せば状況は一変するだろうが、彼の姉は
ブラーヂウスの妃だしな」

お先真つ暗じゃないか、とリージエスは肩を竦める。

「それじゃあ無理か。……なら、イアニス教団は？」

キールは首を捻る。

「魔法使いはそれなりに粒が揃っているだろうが、大軍を統率出来るやつが果たしているかどうかだな。イアニスに帰順する帝国兵は、せいぜい小隊長止まりだつて聞いているし。グルツセル法王一人じゃどうにも……決定打に欠ける」

「そうか、難しいもんだな。アクア・ティ・アラにはいないのか？」

そういう奴」

「……マスターなら出来ない事もないと思うけれど、表立って動くのを嫌う方だからな」

リージエスはマスターの風貌を思い浮かべてみる。キールみたいな癖のある連中を統率しているんだからさぞかし厳つい御仁か、絶世の美女かどちらかだろうな、と栓なき事に思いを馳せる。

リージエスは背もたれに寄りかかるのをやめ、前のめりになる。

「あと一つ確認したいんだけどさ。アクア・ティ・アラの方針は、どの方向に傾いてるんだ」

キールは相変わらぬストレートな物言いに苦笑する。

「残念ながら、部外者には話せない。悪いな」

その返事に、リージェスは口を窄める。

「部外者？ それはちよつと心外だなあ。俺とお前の仲はそんなモノじゃないだろ。あれほど激しくやりあった仲じゃないか」

リージェスの声がほろ酔い気分でやや大きくなっていったためか、それに反応して周囲の客達が二人に視線を送った。この薄闇の中ではリージェスは女に見えるかもしれないが、そんな事はお構いなしにキールは声を荒げる。

「ひ、人聞きの悪い事を言うなつ。単に手合わせした、と言えば良いのに、何でお前にかかるかという物言いになるんだつ」

燭台の炎がキールの吐く息に揺れる。リージェスは笑って唇の真ん中に人指し指を立てる。

「誰も聞いていない冗談だろ。そんな大声を出したら、他のお客さんに迷惑だぜ」

「こ、こいつは……」

キールは呆れ果てて言葉を失う。リージェスは構わず言葉を続ける。

「まあそれはそれとして、いずれわかることなんだし少しくらいいいだろ。どうするんだよ。ベールにでも付くのか」

「お生憎さま。エルフってのは宗教が嫌いなんだ」

キールは気を取り直し、ニヤつと笑った。

自然信仰を旨としてきたエルフにとって、唯物神や平等などを由とし、偶像崇拜する宗教は相容れない存在らしい。なるほど、自然の原理は弱肉強食であり、ある種平等とは程遠い概念だから納得はいく。循環は、その強弱のバランスによって保たれているに過ぎない。

それ故にか、考え方で人間と相容れない部分があるのは無理からぬことと言えなくもない。それを言い訳に差別するというのはもっ

てのほかであるのだが。

「へえ、なるほどね。覚えておこう」

リージェスは情報を頭にインプットする。

「暫くはギルドで情報を集めて、盟主と仰ぐに相応しい者を探してみようと思っている。お前達の事はちよつと心配だけだな」

そう言つて、キールはリージェスから視線を外す。

「今気付いたけど、？早朝？つて事は皆に黙つていく気なのか」

「会つと辛くなるだけだ」

「……リーシエの奴、きつと怒るだろうな」

外れていた視線が再び戻つて来ると、キールの顔が少し引きつっている。それを確認してリージェスはほくそ笑む。

「……見える、見えるぞ。俺には見える。キールが怒れるリーシエさんに足を掴まれて暗い水面の底に沈んでいく」

「ええい、やめいっ」

本気で怯えているカナヅチのキールを見て、リージェスはほんの少し心が痛んだ。所詮はほんの少しだったが。

「……ま、まあいずれまたどこかで会えるさ。皆にはお前から……特にリーシエには宜しく伝えてくれ。絶対だぞ、絶対だからな」

余程怖いのか、必死すぎると思わせる程に念を押してからキールは立ち上がり、席を立つ。

「わかつたわかつた、あまり無茶はすんなよ。それから」

苦笑するリージェスの言葉に、キールは僅かにこちらを見る。

「英雄とやらが見つからなかったら戻つてこい。そんなときや仕方ない、リージェス様が代わりをやつてやんよ」

平然とした表情で大言壮語を口にするリージェスに、それでもキ

ールは小さく頷き、店を後にした。残された空のグラスを見て、リージェスはカップの中身を一飲みにし、一人呟く。

「また会おう、親友^{キール}」

「リージェス、危ないっ」

リーシェは咄嗟にリージェスに手を伸ばした。

「へっ？」

リーシェの言葉に思考が遮られ、視界が意識の外から大急ぎで戻ってくる。リージェスは固まった雪に足を滑らせ、後頭部から地面にひっくり返ろうとしていた。

「な、なんのこれしきっ」

立て直せない咄嗟に判断したリージェスは、頭と足に勢いを付けてくるりと一回転し、見事に着地する。

「えっ」

「へへん、どうだこの」

素晴らしい運動神経、そう言おうとした矢先、何とか体勢を立て直したリージェスの目の前を横切っていくのは、兄を助けるべく服を掴もうとして健気に手を伸ばし、その予想外の動きにバランスを崩したリーシェの姿だった。

「ちよっ、あぶねっ」

リージェスは慌てて持っていた荷物を放り投げ、前のめりになって落ちかけていたリーシェの身体を両腕でむんずと掴む。流石に勢い余って踵を滑らせ、二、三段下に滑り落ちたものの、何とか階下

の街道まで直行する事は避けられた。リーシェを地面から庇ったり
ージェスの尻は雪解け水でぐっしょりと濡れていた。

大事に至らずホツとしながらージェスはほぼ無意識に口を出す。
「ててて 。 お前なあ、足元気をつけるとあれほど 」

瞬間、リーシェがその物言いに待ったをかける。

「えっ、えええっ、何それっ。信じらんないっ、何で私が悪い事にな
ってるのよっ。馬鹿じゃないのっ」

やれやれといったージェスの態度に触発され、ージェスの上
に乗ったままリーシェは心外だ、と言わんばかりに顔を真っ赤
にして猛反撃し、ージェスはその剣幕に呆気に取られながらも、
出先からこれでは先行きが危ぶまれるな、と人ごとの様に思うのだ
った。

其の十五　く不機嫌な理由（裏）く

いきなり出鼻を挫かれたものの、二人は何とか階段を降りきってエアリアとゴルフレッドを結ぶ街道に出た。新年になって間もないのに人通りは多く、通行人たちの表情は一樣に疲れ切った表情をしている。年明けからそんなに辛気臭い顔をしてどうするんだと思いつながら、リージェスはいつの間にか南の方にとつとこ歩き出していたリーシェに急ぎ足で付いていく。

リーシェに追いつき、リージェスが彼女と歩調を合わせると、リーシェはチラツと横目でリージェスを見、「ふんっ」と鼻息を荒げた。リージェスは、気のせいだといいな、と切実に願いながら、すたすたと歩くリーシェを見て溜息をついた。

上には青々とした空。下には一面の雪景色。遠くには美しい冠雪を伴った山々。近くにはいたくご機嫌斜めのリーシェ。

どうしてこうなった。

「あー、リーシェ？」

「……」

返事が無い。

「リーシェさん？」

「……」

ただの

「……ただの、何ですって？」

「い、いや、何でもない……です」

どうやら、考えている事が口に出ていたらしい。あぶないあぶない。

取り付く島も無い、とはこのような事を言うのだろう。いや、島は目の前にあるのだが謎の離岸流によって近づく事すらままならない。別に辛辣な言葉で詰なられてはいるわけではないが、リーシエから発される負のベクトルが自分の身体を見境無くチクチクチクチクと刺しているのはわかる。大抵の事なら直ぐに機嫌を直すリーシエなのだが、今は？触らぬ神に祟りなし？といった状況である。先程のどこにそこまで怒る要因があったのだろうか、とリージエは思い返してみる。

　　転びそうになった俺が華麗に着地　気が付いたらリーシエが転び
　　そうに　咄とつ嗟さに俺がリーシエを庇う　リーシエが怒る。

（駄目だ、全然わからん）

　　転倒しそうだったのを助けたのだから感謝されるなら分かるが、
　　と思いつつリージエはすぐさま匙さじを投げる。

　　まあ、どこかで昼飯でも食べれば少しは機嫌が治るだろう、とリージエは楽観的に考えることにした。

　　しかし、三時間ほど経って、リージエは自分の考えが大甘だった事を思い知らされる。

　　街道の脇にあった料理屋を見つけると、リージエは状況を打破
　　するべく半ば強引にリーシエを伴って店に入る。

「いらっしゃいませ」

　　二人と同一年くらいのウェイトレスが微笑しながら深々とお辞儀

をした。店内は北国だけあって暖房が効いており、防寒具を着ていた二人は一気に身体が熱せられる。マントとマフラーを脱ぎながら、リージェスは店内をチラツと見回す。こじんまりとしているものの、客は満員に近い状態だ。室内は窓から床までピカピカに磨き上げられており、清潔な店内に好感が持てた。

そのままウエイトレスに案内され、二人は窓際の席に着く。メニュー表を二組渡すと、店員は「後ほど伺いますね」と言ってその場を後にする。チラツとこちらを何度か伺う素振りが見て取れた。双子が珍しかったのかも知れない。

メニューを決めるべく、リージェスはメニュー表をパラパラと捲る。

「うーんと、お、このシチューは美味そうだな、これにしよう。リーシェは何頼む？」

「……………」
相変わらずの無反応。

(……………う、少し甘く見過ぎたか)
背中を冷や汗がツウーと伝っていくのがわかった。

少なからずショックを受けているリージェスの傍に、こちらはやや年配のダンディーなウエイターが注文を確認しに来る。長袖のベストに蝶ネクタイと、大都市の酒場でも通用しそうな洒落た格好をしている。

「ご注文はお決まりでしょうか」

リージェスはリーシェをチラリと見る。

「あ、えーとまだ連れのメニューが……………」

「この鶏肉のドリアと、コーンポタージュスープください」

メニュー表に指差すリーシェの淀み無い声が耳に届いた。

「畏まりました、お客様の方はお決まりでしょうか」

ウェイターはリージェスに視線を移す。

「あ、いや、その、えーと。……何だったかなー」

数秒後、忘れかけていたシチューの注文を終え、リーシエは手を組んでテーブルをじっと睨んでいた。リージェスは注文の品が運ばれてくるまでリーシエと視線を合わせる事すらできず、仕方なく窓の外を見ていた。街道にはエアリアの方からゴルフレッドに向かう旅人が度々（たびたび）見受けられた。

「ありがとうございます、またお越しくださいます」

勘定を終え、二人は黙って店を出る。味はそれなりに美味しかった、と思う。どうやら、とことん気まずい空気では味覚も比例して鈍くなるようだ。

再び二人は並んで南へと歩き始める。そのうちにそのうちに、と考えていたリージェスだったが、いつの間にか空はすっかり赤みを帯びてきた。流石にギスギスした空気に耐えられなくなったリージェスは観念する。

「ごめん、リーシエ。俺が悪かった」

「……」

頬つぺたを膨らませたままのリーシエは、横目でリージェスの顔を睨む。

「お前が理由無く怒るわけは無いから、俺に至らない事は絶対あったと思う。だから、秋口のリスよろしく膨れっ面するのは勘弁してくれ。もう冬眠の」

ギリツと齒軋りする音が聞こえ、リージェスは慌てて口を抑える。
「反省してない」

リーシェはやっと表情を緩めながらもきっぱりとそう言い、口を尖らせる。態度を軟化させたのは自分でも少し大人気なかった、と思ってくれているからかもしれない。

「……大体、あんな所で考え事をしながら歩くってどうなの。私が声をかけなかったら本当に危なかったんだよ。わかってる？」

リーシェの責めの言葉を聞いて、リージェスはそういう事か、とやっと納得した。リーシェが怒っていたのは、本当にリージェスの身の心配をしていたからなのだ。うる覚えだが、確かにリーシェが注意を促す声をかけてくれたような気もしないでもない。見当違いの事を考えていたリージェスは、リーシェに対しての申し訳無さで頭が一杯になった。

リーシェは俯きながらも話を続ける。

「……キールも私に何も言わないでどっかに行っちゃうしさ。その上、リージェスにまで万が一の事があつたら私はどうすれば良いのよ」

リージェスは唇を噛む。確かに、キールはリーシェには何も告げずに出て行ったのだ。リージェスは一応皆に説明はしたのだが、少なからず、彼女の心に言い知れぬ不安があつたとしても不思議ではなかった。配慮が足りなかったと言われても仕方ない。

「……返す言葉も無い。本当にごめん」

そう言つて、リージェスはリーシェの頭を撫でる。道行く旅行者の男性が擦れ違い様、チラリとこちらの方を見た。

「な、いきなり何してるのよ。見られてるじゃない」

リーシェは耳まで赤くして言う。リージェスはリーシェの頭から手を離し、尚も続ける。

「この通りだ、許してくれ」

今度はしっかりと、リージェスはリーシエに頭を下げる。

「ちょ、止めてよっ、そんなのリージェスらしくない。もういいっ、怒ってないから早く顔上げて」

人目を気にしながらそう促すリーシエに、リージェスはゆっくり顔を上げた。

二人は再び並行して歩き出すが、まだ少し雰囲気はぎくしゃくしている。ある程度、角は取れた様子のリーシエは時折チラツとリージェスの様子を伺うものの、自分から声をかけることはなかった。

一方のリージェスは、これから帝国兵が蠢く領土へ向かおうとしているのにもかかわらず、緊張感が欠けていた点について深く反省していた。己の油断で自分だけならいざ知らず、リーシエまでもが酷い目に合う可能性があるのだ、と気を引き締める。

「あのさ……」

沈黙を破ったリージェスにリーシエは振り返り、リージェスと視線を絡める。瞬間、憂いを帯びた目に少しドキッとす。リージェスは暫く言葉を置いていたが、再び話し出す。

「先に言っておくけど、万が一敵に囲まれてどうにもならなくなっ
た場合は、俺が足止めしている間にその場から逃げてくれ。絶対に」
リーシエはその言葉に耳を疑う。

「な、何よそれ。そんなの」
出来るわけないじゃない、喉まで出かかったその言葉は、リージェスが続けた言葉に遮られる。

「約束してくれ。そうじゃないと俺はお前をこの旅に連れて行けない」

リージェスの言葉にリーシエは気圧された。

3百年もの長き間、このテレジア大陸は曲がりなりにも安寧を保っていた。それが崩れた今となつては、不測の事態が起きてもおかしくはなかった。幼い時から二人が旅してきた世界とは全く状況が違う。盗賊が蔓延り、理性ではなく本能のままに行動する帝国兵がそこかしこに湧いて出るのだ。もし、二人が幼い頃に戦争が始まっていたら、リージェスは迷いなく二人で院に入る事を選んだだろう。如何に二人が強くとも、やはり限界はある。千の兵に囲まれても何とか出来る、と思つている程向こう見ずではない。

リージェスは、道行く人を見ていて確信していた。この街道にいても、エアリアの方からは大勢の人が来るのにゴルフレッド側からエアリアに向かう旅人は皆無に等しい。エアリアを含む帝国領が相当悲惨な状況になつているのは明らかではないかと。

「お前も綺麗になつたし、男達が邪な情欲を抱いて襲つてきても全く不思議じゃない。強さとか、そういつたことに関係なく、男の俺よりも女のお前の方が狙われる頻度が高い。お前にだってわかるだろ？」

リーシェは、今朝のネフェリイとの会話を思い出していた。貴方は女なのよ、と彼女はリーシェに釘を差した。

「喻え逸れても、俺の能力ならお前を見つけ出す事は出来る。だから、お前は身の安全を最優先に行動してくれ」

リーシェとしては、全面的に承服できるとは言い難いリージェスの言葉だったが、断れば彼は本気で自分を置いて行きかねない。それだけは絶対に御免だった。

「わかった、そうするから付いてく」

リーシェは渋々了承の言葉を口にする。

「そうか、ならいいんだ。急に变な事言つて本当にごめんな。じゃあ、折角の旅だし楽しもうぜ」

表情を崩してリージェスは微笑み、二人は再び歩き出す。

リーシェはリージェスの言葉を反芻^{はんすう}する。俺が足止めしている間にその場から逃げる。身の安全を最優先に行動しろ。そしてもう一つ。

リーシェはリージェスから顔を背け、革袋の紐をキュツと握る。

「綺麗になった」という、普段なら絶対自分に言わないであろうリージェスの言葉を、リーシェはじっくりと噛み締めていた。

其の十六 く装いも新たに(裏)

884年 1月14日

「リージェス、暑い……」

少し息を切らしながらリーシェは力なく言った。その額には大粒の汗が滲んでいる。

「暑いつて言うな、益々暑くなるぞ……」

リージェスは力なく言い返す。その額には、やはり大量の汗が滲んでいる。

「リージェス、今自分で二回も言った……」

「揚げ足を取るな……。くそ、今って本当に一月なのか……」

汗だくになった二人はがっくりと肩を落としながらも、日差しが照りつける街道をのたり、のたりと進んでいく。二人が通った道には、汗の雫がポタポタと垂れ、その足跡を示している。

リージェス達がゴルフレッドを出てから十日程が過ぎようとしていた。完全雪国仕様の服装をしていた二人だったが、南下するにつれて段々とその暑さに耐えられなくなっていた。しかも、この日は季節外れの強い熱風が南から吹き荒れ、道行く人々も重いコートを抱えてひいひい言っている有様だった。気温を計れば、おそらくは20度近くまで上昇しているだろう。

「うっ、汗で下着が張り付いて気持ち悪い……」

リーシェが泣き言を漏らす。

「……それより上着だ。まいったぜ、下着以外に代わりの服なんて

持ってきてなかったもんな」

リージェスが言った。

「……私は流石にそんな事はないけど。……っ」

汗が眼に入ったのか、リーシエは顔をしかめて片目を瞑っている。

「……服が売っている店あったら寄っていいこう。ちよっとこれは耐えられん」

少なくとも下着だけでも替えたい。リージェスが今着ている服はコートを含めれば四枚重ね。下着にコットンの長袖シャツ、ウールのセーター、毛皮のコート。ついでにマフラーという苦行。

「……異議なし」

リーシエはふらふらと右手を上げた。

言葉少なになった二人は、歩きながらもどこかに服飾店がないかと目を皿の様にして辺りを見回す。街道から少し離れた森の中には針葉樹は姿を消し、代わりに広葉樹が広がっている。雪は芝生の上には微かに残っているが、舗装された道では溶けて見受けられなかった。森の奥からは、少し気が早い鶯うぐいすの鳴く声が聴こえている。

それから三十分程して、ようやくリージェスは路傍ろぼうに一軒の店を見つける。二人は、顔を見合わせてどちらからという事もなく、そちらの店の方へと歩く方角を変え、丸太で作られている簡素な階段を下りていく。

ログハウスの軒先まで来ると、しっかりとやすりが掛けられた板の手すりとつてと階段がつけてある。ドアの取手には「開店中」と書かれている小さな紐付きの看板がぶら下げられていた。

チリーン

ドアを開けると同時に、軒に吊り下げられていた鈴が鳴った。何故か、その澄みきった音は気だるい暑さを少し緩和した気がしたように思えた。そして、店の奥からぬつと二人を出迎えてくれたのは五十前後の少し背の低い、恰幅の良い男だった。

「いらつしゃい」

手慣れた手付きで洋服をハンガーに通しながらも、店主と思しき男は二人を見て朗らかに挨拶した。二人は軽く会釈を返し、店の中にずりりと進んでいく。木造の店内は日差しを遮っている分過ごし易く、小窓から入ってくる風も幾分快適に感じた。

こじんまりとした店の割に、品揃えはしっかりとしている。流行物もきちん取り揃えられており、どこぞの日用品を適当に集めた雑貨店といったような乱雑さはなく、売り場作りも丁寧だった。

リーシエは竹で編まれた籠を持つと、適当に目に入った物を片っ端からその中に入れていく。あつという間に、大きめの籠は洋服で一杯になった。

「試着室は、その階段の脇にあるからね」

こちらから聞く前に、店主はにっこりと笑ってそう言った。

「ありがとう」

リーシエは一言礼を言っつて早速試着室に入っつていく。

「なるべく動きやすいのにしろよ、後、絶対に胸当てを付けられるのを選ぶ」

「わかつてるー」

リーシエの返事を確認すると、リージェスは売り場を見回す。もう少し軽い服装に替えてみるか、とリージェスは季節物、取り分け春物のコーナーを物色し始める。悩みに悩んでいる様子のリージェ

スを見て、店主は一枚のコートをハンガーラックから取り外して話しかけた。

「お兄さん、これなんかどうだい」

リージェスが振り返ると、店主は手に持っているコートを差し出した。手渡されたコートの色合いは菜の花を思わせる黄色で如何にも春物という趣おもむきだった。見た目に反して持つてみると軽い素材で出来ているようで、旅の普段着としては中々悪くない様に思えた。

「物としては良さそうだけれど……色がちょっと目立ちすぎるかな」
リージェスは言った。

これから帝国領に入れば、なるべく目の付かぬ夜中に移動する事も増えるだろう。その時にこのような目立つ色のコートを着ていては身を隠す時に妨げになる。

「なるほど、似たようなのでもう少し地味な奴があるけれどそれも持つて来るかい？」

その言葉にリージェスは数秒思考して、頷いた。

「わかった。少し時間がかかるから、それまで別の物でも見といってくれ」

店主はそう言つて店の奥に姿を消した。

リージェスはその間、茶色い革のベルトと黒いメッシュのシャツを選び、籠に入れていく。五分ほどして店主が戻つて来ると、その手にはやはり同じ風合いのコートを持つていた。色はやや野暮ったいグレーだが、デザインがスタイリッシュなのでリージェスは一目で気に入った。まだ売り場に出ていなかった商品なのだろう、値札が付いていなかったので店主に聞いてみると、やはりそれなりの数字が返つてきた。

「まとめ買いするから負けてくんない？」

リージェスは両手を合わせて店主に拝み、片目を瞑る。

「そうだな。彼女の買い物次第で勉強させてもらおうよ」

店主は快活に笑った。

買う物が決まったところで再び試着室の方に行くと、リーシェは未だに試着室と売り場を往復していた。気に入ったものがないのか、それとも気に入ったものばかりなのか、リーシェは試着室の中でうんうんと、唸っては外に出、再び籠を手に売り場へ戻っていく。

「おーい、程ほどにしるよ」

「わ、わかってるってば」

再びリーシェが試着室の前に現れた時、リージェスは釘を差しておく。

「お兄さん。良かったら待っている間、二階の客間で一休みするかい？ 幸い、君達の他にもお客さんも来てないようだし」

店主の有り難い申し出にリージェスは二つ返事をした。

二階は一階と違って、休憩室の様相になっていた。かなり東国の家具を取り揃えているようで、リージェスは部屋を見回している時にアテライデを訪れた時の旅館を思い出した。

大きい一つの部屋がゴザの仕切りで小さく区切られているところなんか、正にそうだ。

背もたれのない、丸い切り株のような椅子に座っているリージェスの所に、店主が飲み物を二つ、盆に乗せて戻って来る。

「ごちそうさまです。あいつの買い物、前はあんなに時間掛からな

「かつたんだけどなあ」

「そう言ってリージェスが首を捻ると、店主は笑顔を零す。」

「年頃の女性の買い物つてのは長いもんだ。気にしないで良いよ、何年も店やってるから慣れてるさ」

「そう言いながら店主は苺ミルクを置き、リージェスの向かいに自分も座ると、一口飲んでからリージェスに質問をする。」

「お二人はどちらまで行くんだい？ 服の選び方からすると南だと思っただけど」

「わかる？ エアリア経由でカタルスタまで行く予定なんだ」

「その言葉に、店主は神妙な面持ちをした。」

「そうか。……もしかしたら知らないかもしれないから言っておくけど、最近エアリアは非常に治安悪いよ」

店主の話では、エアリアに居座っている何某なにがしという帝国の貴族がとんでもない悪政を敷いているらしく、民達は苦しい生活を強いられているらしい。反逆者となったアステイスⅡフロイデ卿の後任として、マビアビからエアリアに来たその男は、配下の帝国兵を率いて近隣の村々で盗賊紛いの事をさせているようだ。フロイデ卿の頃は税率も我慢できない程ではなかったらしいが、その男が来た途端に一気に上がったらしい。

レジスタンスも結成されているようだ、未だにエアリアに居座っている帝国兵達の数が多く、実力行使に移れないのが現状だとの事だった。

「何だ、まだ結構な人数の帝国兵が残ってるのか」

「少々当てが外れたな、とリージェスは舌打ちをした。」

「そのおかげで、税金が高くなってるんだ。滞在費が余分にかかるからってそれをエアリアの税金で賄おうっていうなんて、まったく」

酷い話じゃないか」

店主は声を荒げ、飲み物を一口飲むと、尚も続ける。

「エアリアの街を我が物顔の様にして好き勝手やっってるって話だ。若い女の子なんてちよつと目を離れたら直ぐ攫われちまうぜ。兄さんも彼女が大事なら気を付けてやる事だ」

リージェスは苦笑いをした。

「あいつは彼女じゃないよ、妹だ。顔が似てるからわかるかと思っただけど」

そうそう攫われるタマでもないしな、とリージェスはほくそ笑む。「おや、それは失礼した。うーん、私の目も鈍ったかな。でも、どつちにしたって大切な女性だろう」

「まあね」

リージェスは短く言い、コップに口を付ける。

待ちに待って更に一時間ほどが経過し、ようやく下からリーシェの呼ぶ声が聞こえた。それでも階段を降りて行くと、リーシェは除外したはずの服を見てどこか名残惜しそうな顔をしている。

「今度また来れば良いだろ。それでも十分可愛いつて」

リージェスは半ば呆れながらも抱えている服を持って試着室に消える。

「ううー、やっぱりピンクのニット帽の方が良かったかな……」

リーシェの煮え切らない呟きがカーテンの奥から聞こえた。リージェスは、どっちだっていいじゃないか、という言葉を何とか呑み込んだ。

それから暫くして、リージェスが試着室から出てくる。可愛いポ

「いちに気を取られていたリーシェはリージェスの方に振り返り、ぽかんと口を開ける。

「どう？変じゃないか？」

リージェスの問いに、リーシェは黙ってふるふると首を振って一言、格好良い、と言った。

リージェスは脇にいる店主の方に向き直る。

「じゃあ店主さん、これで」

「あいよ、じゃあこれとこれだから」

二人の買い物を確認して、店主は算盤を弾き始める。暫くして、店主の提示した額を見てリージェスは眉を潜める。

「うーん、もうちょいまかない？」

その言葉をきっかけとして、リージェスと店主が繰り広げる価格交渉は二十分近くに及んだ。

「そこをなんとか」

数字をはじき出す。

「ここはゆずれぬ」

店主は首を振る。

「ではこれで」

それに幾分妥協した数字を出す。

「ふむ、ならこちらをば」

店主は小物を付ける。

「なるほどそうきたか」

むむむ、と唸る。

「さらにこれもつけよう」

店主は更に装飾品を加える。

「じゃあ、そのおまけ分の金額負けてくれ、商品いらなから」

「いやいやいやいや」
ほぼ最初に戻る。

リーシエは自分の腿に肘を突き、手に顎を乗せてその様子をつまらなそうにぼーっと眺めている。

店を後にし、少ししてからリーシエが言う。

「……リージェスってば粘り過ぎ」

声の調子にやや非難の含みがあるリーシエに、リージェスは歩きながらも言い返す。

「路銀だって限りがある。少しは節約していかなきゃ駄目だ。或いは、時間の事を指してるんだったら、リーシエは俺をどれくらい待たせたっけか？」

痛いところを突かれ、途端にリーシエは弱腰になる。

「う……。そ、それにしたってさ、店主のおじさん相当困ってたよ」

リーシエの言葉にリージェスはチツチツと指を振る。

「困った振りをするのは訓練された店員だ。泣き事を漏らすまでは、接客員相手に手を抜くべからず、覚えておけ。それより」

リージェスはリーシエの新しい服装に視線を移す。

革の胸当てと腰に下げている剣が多少無骨な感じがするのはしょうがないとして、スリット入りの鮮やかな青いロングスカートと黒いニット帽がそれらを上手く緩和し、女性らしさを醸し出していた。

「うん、似合ってる。良いんじゃないか」

リージェスは納得したように頷き、それを聞いてリーシエは顔を赤くし、帽子を深くかぶり直す。

「あ、ありがとう」

小さい声でボソッとそう言ったのが聞こえた。

道端みちばたの雪は見受けられず、雪国の名残なごりはもうどこにもない。辺りでは鳥達の囀りなげが聴こえ、道行く人の耳を優しくくすくす撫っている。新しい装いに身も心も晴れ晴れとした二人は一路南へと歩みを進め、白く小さな花が咲き乱れる梅林に差しかかる。少し早い春の訪れを感じながら、時折吹く風に合わせて深呼吸すると、胸まで爽やかな香りが一気に駆け下りてゆく。

ところが、梅林を抜けて一時間もすると、楽しい旅気分は突如として終焉を迎える。

（ん、何だこの感じ）

リージェスは後ろの髪の毛がざわついているのを感じた。

「リージェス、あれ……」

何かに気付いたリーシェが南の方を指差し、リージェスはそちらの方角を見る。

「……ああ」

見ると、遠く南の空に何筋もの黒い煙が立ち昇っている。戦闘状況か、それとも焼き打ちか。二人は顔を見合わせて頷き合つと、再びエアリアの方へ歩き出す。

リージェスは歩を進めながらも、自分達がこれからより深い悪意の渦の中に飛び込もうとしているのを肌で感じ取っていた。

其の十七　　踏み躪られる者達（裏）

小高い禿げ山を登りきつたところで、山の裏側を見下ろしたリージェスは無意識に舌打ちをする。

「……これは酷いな」

リーシェもあまりの惨状に口に手を当てて頷いた。

山を登りきつた二人の視界に映ったのは、何者かに荒らし尽くされた村の姿だった。まだ相当に距離が離れているため人の姿までは確認できないが、建物が原型を留めないほど破壊されているのは遠目からでも見て取れた。その一帯からは黒煙が何本も立ち上り、ほぼ壊滅に近い状態だというのは察する事が出来る。

リージェスはこのまま村に直進するか、迂回して避けるべきなのか一瞬迷ったが、この先の状況を知るためにも寄るべきだと判断し、リージェスはリーシェの手を掴んで再び歩き始める。リーシェはリージェスの手に引かれるままに、後ろから付いていく。

辿り着いた小さな村には、いや、村だった場所には、建物の残骸と村人達の死体が散乱していた。死体の至る所には裂傷、有体に言えれば刀傷が見受けられるため一目で殺されたのだとわかる。老若男女お構いなしだ。女性に至っては、無残にも裸同然で放置されている者もいる。既に大分日が経過しているのだろうか、腐敗臭が辺りに立ち込め、損傷の少ない死体を選んでカラス達が群れて死肉を啄んでいる。

山の様に積みまれた死骸には何者かによって火が付けられており、

やはり醜悪な匂いを撒き散らしている有様だ。長い間旅をしてきた二人も、疫病の蔓延する村等を目にした事くらいはあるが、流石にここまで酷い光景に出くわした事はなかった。

リージェスは両の拳を握り締め、怒りを露にする。

「皆殺しか……、ふざけやがって」

「うん……。ぐう……」

腐乱死体の匂いと光景に吐き気が込み上げてきたのか、リージェスは俯いて口に手を当てる。

「……これ使つとけ」

リージェスは付けていた布地の薄いマフラーを外してリーシェに渡す。

「……ごめん、ありがとう」

リーシェはリージェスに礼を言うと、直接臭気を吸いこまないようにリージェスのマフラーで鼻と口を覆う。リージェスはそれを確認してから、なるべく息を吸わない様に意識しつつ、ゆっくりと歩き出した。

廃墟の中、二人が敵の存在を警戒しながら進んでいくと、崩れかけた家の前で呆然と立ち尽くしている男を見つけた。生存者だろうか、二人は顔を見合わせてからゆっくりと男に近づいていく。

「あなた、もしかしてこの人か？ 一体この有様はなんだ」

リージェスに訊かれた男は、顔を二人の方に向ける気力もないのか、そのまま力なく呟く。

「……村に課せられた税を支払えなかった、と言う事で見せしめに殺されたらしい。私はたまたま、他の街に出稼ぎに行つてたから助かってしまった」

？助かってしまった？。それは己を責める言葉のようにも受け取

れた。

「……たったそれだけで皆殺しに？」

そう言うリーシェに村人は俯いた。

「ここだけじゃない、帝国に侵略された国々では日常茶飯事に起きている事だ。今にして思えば、悪評ばかりが際立ったフロイデ卿は全然マシな人物だったな」

宙へ注がれるその男の視線に、リージェスは思わず齒噛みする。諦めの言葉と虚ろな視線が彼の心を苛立たせていた。

「先頃、ベールの軍がエル・クレスに攻め入ったらしいが、ベルガモットとジルバート率いる帝国軍に敗退したらしい。頼みの綱もこの様だ。もう……」

終わりだ。そう言うて男はがっくりと両膝を付き、おそらくは家族の名前なのだろう、その名を繰り返して泣き崩れる。二人は、掛ける言葉も見つからなかった。

その場を後にした二人が村の南にある壊れかけた門まで来た時、リーシェがボソツと呟いた。

「あのおじさん、これからどうするんだらう……」

リージェスは先ほどの男の姿を思い浮かべる。はたと、二通りの行く末が浮かんだが口にはしなかった。どちらにしても、未来と呼べる代物ではなかったからだ。

村を出て更に一時間程歩き、日も暮れ掛けた頃、二人はエアリアの城下町への門に着いた。門前まで来るとリージェス達は門番達に武器を没収された。これはある程度予想していた事だったので、特に文句も言わなかった。剣を奪われた所で二人はそこまで困ってはいなかった。体術にも相当自信を持っていたからだ。

もしかしたら門番に襲われるか、と気を揉んでいたリージェスだったが、幸い武器を奪った後はすんなりと通してくれた。

日が沈んで街に明かりが灯される頃、二人は以前エアリア軍に所属していた時に何度か泊まった事のある宿屋を探していた。少しして見覚えのある通りになると、二人はなるべく帝国兵達から身を隠しつつ、周囲を警戒しながらするりと目的の建物に入り込んだ。

おそらくは近所の者だろう。痩せた年配の女性と雑談していた女将がこちらに視線を向けた。

「いらつしや……あれっ、あんた達っ、生きていたのかいっ」

双子ということで印象に残っていたのだろう。玄関に出てきた宿の女将は目を丸くし、次には諸手を挙げて二人を出迎えてくれた。

「何とかね、こっちはあまり大丈夫そうじゃないけど」

リーシェがやや声のトーンを落としたが、それでも女将は晴れやかに笑っていた。

「じゃあ、私はこれで」

「ああ、すまなかつたね」

仕事の邪魔になると思っただのだろうか、痩せた女性は二人と擦れ違い様に目礼を交わし、外へ出て行った。話の腰を折ってしまったかな、と二人は少し申し訳なく思ったが、そんな事を意に介さず、女将は快活に話しかけた。

「良かったよお、あんた達みたいな可愛い子が帝国兵に捕まったら大変だからね」

眉を上げたリージェスは自分も含まれているのか、と指を差して確認する。

「そうだよお、男だから安心だとも思ってるのかいっ。舐めちゃいけないよっ、質たちの悪い軍人の中にはのんけだって喰っちまう奴が

いるんだから。美少年は特に注意しなきゃ。カマ掘られなくなかつたらね」

女将の言葉に何故か隣にいたリーシエが顔を赤らめた。一体何を想像したのだろうかとリージエスは訝る。

その話題に、文字通りそれ以上突っ込む気にも突っ込まれる気にもなれなかったので、リージエスは即座に話題を変えろ。

「それより、部屋は空いてる？」

「ガラガラだよ、今日は四組だけ。どこでも空いている部屋に泊まっつていきな」

女将は頭を掻きながら言った。

「……集団暴行……ね」

食事が終わった後、リーシエが風呂に行っている間、リージエスは女将と話していた。口にするだけでも忌々しい言葉に辟易する。

「ああ、気を付けた方がよいよ。逸れの帝国兵達があちこちでやらかしているって話だ。連中は目を付けた女に何のかんのと難癖付けて手籠めにしちまうのさ。私ももう少し若かつたら危なかつたねえ。酷い話だよ全く」

見た目五十を過ぎている、横幅がやたらと広い女将が本当に危なかつたかはともかく、いよいよリーシエの心配はしなくてはいけない、とリージエスは眉間に皺を寄せる。

「北の門通った時は普通に平気だったけれどな」

「兵達の節度なんて部隊長に寄りけりだよ。運が良かったんだ」

リージエスは訊く。

「逸れって、軍を追い出されているって事か？」

女将は首を振った。

「そうとも言い切れないね。ただ、上の連中がそういう犯罪を統率しきれなくなっているのは確かだろうけど」

(そもそも、上の連中にしたって褒められた人間じゃないからなあ。付近の村を所構わず襲っているくらいだし)
リージェスは苦々しげな顔をする。

気を取り直して、リージェスはもう一つ気になっていた事を尋ねてみる。

「女将さん、この街にレジスタンスって本当にいるのかな。何か知ってる?」

その言葉に女将は眉を潜めた。

「あらやだ、誰に聞いたんだいそんな事」

「通りすがりにね。……街の様子を見る限りでは、偽情報の可能性が限りなく高く思えてきたけれど」

女将は感心したように目を細める。

「へえー、あんた中々勘が鋭いね。お察しの通り、レジスタンスの話は反帝国勢力を燻り出すためのプロバガンダらしいよ。先週うちで酔っ払っていた帝国兵がそう言ってたからね」

リージェスはやっぱり、とカップを指先で弄ぶ^{せてあそ}一方少々がっかりしていた。もしレジスタンスの話が本当であれば、接触してみようという気はあったのだ。まあそれならそれで仕方ない。予定通りカタルスタに行くだけだ。

「話は変わるけどさ、暫く見ないうちに綺麗になっちゃったね。妹さん」

女将は頬に手の甲を添えてひそひそと話す。その所作を見ながら、そついう話し方する人って実はあまりいないよな、とリージェスはどうでも良い事を考える。

「あれくらいの器量良しはそついないよ。ふふ、私の若い頃を思い出すよお」

サラリと不安にさせるような事を言いなさんな、とリージェスは心の中で呟く。

「どうだい、いい人はいるのかい？何なら私の息子なんかどうだい。今はアテライデに住んでいるんだけどさ」

一人盛り上がる女将の？いい人？という言葉に、リージェスは何故かキールの顔が思い浮かんだ。

「んー、その辺りは本人の自主性に任せているからな。それでも、それなりの奴は少なくとも一人、心当たりがある」

それを聞くと女将は少々残念そうだったが直ぐに気を取り直す。

「じゃあ、もし気が変わったら遠慮なく言っておくれ」

しっかりと最後に釘を差して置く辺り、中々手強い。リージェスは舌を巻いた。

三階の部屋に入るとリージェスは真つ先に窓を開け、外の建物と位置取りを確認する。

(よし、屋根からでも逃げれそうだな)

角の建物の街灯を伝って下りれば問題なさそうだが、いざとなったら手荷物を捨てて行くしかないな、等と考えながら、リージェスは部屋と窓の鍵をしっかりと閉めたのを確認するとリーシェを窓際の布団へ追いやった。

「別にいいけど、どうしたの？」

「万が一、押し入りが来たらこっちの方が都合が良い」

リーシェは心配そうな顔をした。

「……そんなにこの街、やばくなってるの？」

「あくまで念のためだ。1%の可能性でも、やっておくにこした事はない。さあ、明日は早いんだからもう寝ようぜ」

いつになく警戒感を漲らせるリージェスに、リーシェは不安そう

に頷いた。

翌朝四時、先に目覚めたリージェスはリーシエを起こしてから布団をそつと畳み、素早く身支度をする。いつものように髪を三つ網にせず、下ろしたままのリージェスに、リーシエは不思議そうな顔をしている。

階段を下りてロビーに出てから財布を取り出して宿泊分の金額を宿のカウンターに置き、その上に書いておいた自分の名前とメモ書きを、更にその上に鉛筆立てを置く。

二人が勝手口から外に出るとまだ空は真つ暗だったが、リージェスは、^{ひとけ} 人氣がなくて夜番の巡回兵達が早く朝が来ないかと気を抜いているこの時間帯こそが一番リスクが少ないと判断した。この時間に細い路地を張っている酔狂な見張りはいると、二人は勝手知ったるエアリアの街をすいすいと西に向かって疾走する。

そして三十分程で西門のかなり近くまで来たところで、急にリーシエが立ち止まる。

「なんだ、どうかしたのか」

後ろを振り向いたリージェスを、リーシエは何故か上目遣いで見ている。

「……トイレか？」

「違うわよっ」

声を潜めながらもリーシエは激しい口調で否定する。

「この子……」

リーシエが指差すその先には

「……猫だな」

「うん、猫」

リーシエの弾んだその声に、リージェスは少々嫌な予感がした。

薄い茶色のふわふわの毛に覆われた手の平に乗りそうなくらいの大きさの仔猫が、木蓋付きの大きなゴミ箱の片隅で、リーシエの方を見てニャーニャー泣いている。毛並みがまだ綺麗なことから、そいつはもしかするとつい最近まで飼い猫だったのかもしれない、と推測する。こんな街ではもう暮らしてゆけぬ、と飼い主一家揃って新天地を求めたのだろうか。

リーシエは白い息を繰り返し吐きながら、細く甲高い声で健気に鳴く仔猫を熱い眼差しで見つめていた。おもむろにリーシエの視線がリージェスの方へくるりと移動し、リージェスは来たか、と一瞬身構える。

「うー、リージェス」

「駄目、旅しているのに世話なんてできないだろ」

反論の余地を与えぬよう、リージェスは要点を簡潔にピシヤリと言いつつ放った。勿論その間も、人の言葉を解せぬ仔猫はやはりニャーニャー鳴いている。リージェスが視線を少し動かすと仔猫の姿が視界に入り、首を傾げた様に見えた。もしかして、僕を拾ってくれるの？ とでも言いたげな、期待に満ちた円つぶらな瞳で真っ直ぐに見つめてくる。

(ぐっ、……手強いっ)

人に媚びるといふ能力に置いてこいつ等に勝る生き物はいない。リージェスは思わず視線を逸らす。そんなリージェスの葛藤を露知らず、リーシエはポツリと言う。

「でも、ニャーニャー鳴いてるよ……」

何が？でも？か。

余程未練があるのだろう。リーシエは一縷の望みを抱きながら、

未だにリージェスに視線を送っている。リージェスにしたって、別に動物が嫌いというわけではない。むしろ、無類の動物好きだと豪語している。

しているが、それとこれとは話が別だ。捨てなきゃいけないような状況に追い込まれる可能性が高いなら、端から拾うべきではないのだ。リージェスはそう自分に言い聞かせて、リーシェに視線を合わせないようにした。その姿をリーシェは少し恨めしげに見つめていた。

「行くぞ」

しゃがんでいるリーシェに、背中越しに立つように促す。

「……ごめんね」

リーシェは仔猫を抱き上げながら、囁くように言った。リージェスは、目の潤んだリーシェの姿をチラリと見て、後ろ髪を引かれる思いだった。

はぁ、と溜息をついて、リージェスは振り返ると首に巻いていたマフラーを外し、リーシェが抱き上げている仔猫を包くんでやる。せめて寒くない様に、とやったただの自己満足だったが、それでもリーシェは納得してくれたようで、仔猫を降ろすと立ち上がった。

「……こんなに可愛いんだから、きつと誰か拾ってくれるよね」

リーシェの言葉にリージェスは頷いた。

「そう願うしかない」

リージェスは再び路地を歩き始める。「じゃあね、ミルク」という、か細い声が後ろから聞こえた。リーシェの奴、名前まで決めていたのかよ、とリージェスは半ば呆れ、半ばいたたまれない気持ちになった。

空は徐々に明るくなっていた。二人はなるべく細い路地を選び、

周囲を警戒しながら南西へと進んでいく。どうしても大通りを通らなければならぬ時は、物陰に隠れて警備兵をやり過ごした。そうやって二人は、二、三組の警備兵達をやり過ごし、ついに南西門の近くまで到着した。

門の両脇には、例によって門番らしき男が四人いる。だが、リージェスはここにたどり着いた時点である事に気付いていた。こんな早朝にもかかわらず、何者かが多数潜んでいる気配があったのだ。

宿屋の女将が言っていた事を思い出したリージェスは、リーシェに声を掛ける。

「大方敵兵だと思うが、周囲の建物にかなり隠れていそうだな。一先ず俺一人で行って来る。ちょっとここで待ってる」

「ええっ、そんなの駄目だよ。私も一緒に……」

「エリアに来る前に俺が話した事、忘れたのか」
「う……」

でもあれは、囲まれた時とか緊急時の話で、と言い訳がましい事を口にするリーシェに、リージェスは再び念を押す。

「一先ず、って言ってるだろ。こっちが合図するまで樽の裏に隠れていてくれ。どうしようもなさそうだったら、すらさらさつさと逃げからせ」

「……本当に大丈夫？」

「余裕さ。まあ見てなつて」

安心させるよう、最後に一言そう言つて、リージェスは一人、西門の門番達に近づいていった。

其の十八 弱肉強食（裏）

宵闇と黎明の狭間、長く青い髪を下ろしたままのリージェスはゆつくりと歩いて行く。四人の門番達はリージェスの姿を見咎めるとヒューと口笛を吹いた。長い髪を下ろしたままのリージェスは、男装の麗人、といった様相だった。

「おはようございます。ここつてもう通れますか？」

少し距離を置いてリージェスは落ち着いた声で話しかける。まだ薄闇だったためか、少し距離を開けていればお互いの顔ははっきりとは見えない。

「いや、六時まで通すわけにはいかないなあ、規則だしね」

体格の良いちよびヒゲの帝国兵はリージェスを下から上へ舐めるように見つめ、薄ら笑いを浮かべながらそう言った。心なしか、徐々に前の方ににじり寄っている気がする。

「そうですか」

「まあ後三十分くらいだし、もう少し待ってくれよ」

隣にいたのつぼの兵士が請け負った。

「わかりました、それじゃあ」

リージェスはリーシェのいた場所に帰ろうとくるりと振り向き、歩き出そうとする。ふいに、その左肩に太い手が伸びてきて、ぐいっと強制的に体の向きを兵士達の方へと戻される。といっても、リージェスに堪えるつもりがなかっただけの事だが。

リージェスは顔色を変えずに睨み付ける。

「……何のつもりですか。放してください」

「そんな怖い声を出さないでくれよ、お嬢ちゃん。おじさん達を脅

かすなんて、全くいけない子だな」

気色悪い台詞を口にするヒゲ男の息が微かに顔にかかり、リージェスは顔をしかめる。

（やれやれ、同じ人間の吐く息とは思えん）

こいつは歯を磨く、ということを知らないのだろうか。リージェスは顔を近づけてきた兵士のあまりの口臭に胸が悪くなった。

「いけない子で結構ですから、それじゃ」

肩にあつた男の手を振り払って、リージェスは再び引き返そうとし、目を細めて立ち止まる。

（やつぱりか……）

途端に周囲からゾロゾロと、大勢の人影が現れる。あまりの多さに、そんなに隠れる場所あつたかなあ、とリージェスはもう一度辺りを見回してみる。

おそらくは、カタルスタを目指す旅人達はかなり多いのだろう。門の開く時間帯を狙って急いで出ようとする旅人達をこいつらは食い物にしている、というわけだ。段々とリージェスの胸に嫌悪感が渦巻いてきた。

チラツとリーシェのいた辺りを見ると、飛び出そうかと逡巡しているリーシェが見えた。視線で来るなよ、と制止する。通じたのか、リーシェは渋々と物陰に戻って行く。

「気が強いねえ、興奮しちゃうよ。でも逃げようとしたって無駄だぜ、この人数だ。何、大人しくしていれば殺しはしねえ。俺は優しいからなあ」

先程のヒゲ男が猫なで声で言った。ねっとりとしたその口調に、リージェスは生理的嫌悪感を覚えた。既にカチャカチャとベルトを緩め、ズボンを下ろし始めている先走つた阿呆までいる。ヒゲとお

前は真つ先に死なす、とリージェスは腹を決める。

「とはいえ、この人数でやったらガバガバにはなっちまうか」

リージェスの心理状況を察する事無く、ヒゲ男の下品なジョークに周りの兵士達は下品な笑い声で応える。

ややあつて、リージェスにはっこり笑って跪き、ヒゲ男のズボンに近づく。

「おお？ 自分からやるってか、お嬢ちゃん。そういうのも嫌いじゃないぜ」

再び兵士達の下品な笑い声が閑静な街に木霊す。そんな事を意に介さず、リージェスは左手でゆっくりと、ズボンのファスナーを下ろしていき、右手をベルトの方へと伸ばす。

(な、何やってるのよリージェスっ)

身を隠していたリーシェの角度からは、リージェスが男の股間を弄っているようにしか見え、リーシェは思わず顔を背けるが、視点は彼等の方角にピツタリと貼り付いたままになっていた。

兵士達はニヤニヤとリージェスを見降ろしている。そして、右手に慣れた手触りのそれが触れた瞬間、リージェスはそれを瞬時に引き抜いた。

ヒゲ男の体が一瞬ビクン、と揺れる。周りの帝国兵達は性的衝動によるものだと勘違いしたのだろう。未だ異常に気付いていない。

リージェスは右手に掴んだ剣の柄を握り締めたまま、左手の平で剣の峰をぐつと押し込んだ。ふいに、煌く刃が意外と筋肉質な腹にスツと埋もれてゆき、ブチツブチツと腸を切断する音がリージェスの耳に届いた。突如訪れた激しい痛み、ヒゲ男はようやくくさげない悲鳴を上げる。

何人かの帝国兵の顔に緊張が走ったその時、リージェスは剣を持って大きく跳躍し、ズボンを下ろしかけていた無防備の兵に狙いを定め、その左胸に奪ったばかりの剣を深々と突き刺す。そのままの勢いで、慌てて剣を抜きかけていた隣の兵士に突き刺した兵士をぶつけるようにして、力任せに横に切り裂いた。

突き刺されていた兵士は、胸から左の部分をはっきりと掻っ捌かれ、その隣にいた兵士は腹の前半分を切り裂かれる。驚愕と激痛に襲われている兵士の腰から、リージェスは左手でもう一本、鞘ごと剣を失敬する。抜き取るとほぼ同時に、兵士達は力なく地面に膝を付き、突っ伏した。

「な、何だこいつっ」

辺りに血の匂いが充満し始め、こうなれば最後まで演じきつてやるろう、と腹を決めていたリージェスは右手にべっとりついた血を指先で頬に塗り、クスツと笑う。その妖艶ようえんともいえる笑みに、兵士達は興奮とも恐怖とも付かない感情に襲われる。

「か、囲めっ」

誰かのその声で正気に戻った兵士達はリージェスを囲もうとするが、リージェスは剣先と視線だけでそれを制する。兵士達の目に宿る恐れはまだ消えていなかった。彼等が動揺しているのを見計らって、リージェスはふいに叫ぶ。

「リーシェッ」

その声に即座に反応し、大樽の後ろに隠れていたリーシェが道に飛び出すようにして直角に方向転換し、こちらへと疾走してくる。リージェスは兵士達の頭越しに鞘の付いた方の剣を放り投げ、リーシェはそれを両手でキャッチするとそのまま鞘を抜き払う。抜かれた刀身の長さをチラリと一瞥すると、リーシェはそのままリージェスと帝国兵達の方に走ってくる。

「な、もう一人っ？」

兵達の視線が泳いだ瞬間を見逃さず、リージェスとリーシエは一瞬視線を交錯させると、二人で三十人程の帝国兵を挟撃する。

リーシエは先頭にいた兵の縦の斬撃を半身左にずらしてあっさり避け、斜め下から上へ、喉に引掛けるように剣を振り上げる。確かな手応えを右手に感じながら、後ろにいた兵が咄嗟に繰り出した突きを今度は右横を向くようにして避け、飛び出た腕を狙って振り上げていた剣を振り下ろす。兵の腕は握っていた剣毎ゆっくりと回転しながら宙を舞い、その刹那リーシエは右足を軸にして半回転するように、左膝を男のわき腹に叩き込む。

「ぐはっ」

腕を切られた男がリーシエの強烈な膝蹴りで崩れ落ちるのとはほぼ同時に、リーシエは後ろにいた兵達が迫ってくるのを見て素早く地を蹴り、後ろに低く跳躍して体勢を立て直した。

一方のリージェスも、囲まれぬように端にいた敵を優先的に狙う。突きを繰り出す敵には突きを、斬り払う敵には斬り払いを。ゆらりと敵の射程圏内に踏み出して敵の先攻を誘い、難なく避けてからの後の先で敵の数を確実に減らしていく。動揺していた帝国兵達の攻撃は非常に単調で読みやすく、リージェスにとっては赤子の手を捻るようなものだった。

鋭い剣閃が幾度となく縦横無尽に繰り出される。辺りには血飛沫でできた鮮やかな花が次々と咲き乱れ、帝国兵達の悲鳴だけが飛び交う。殆ど無抵抗な獲物を嬉々として狩っていたツケだろうが、帝国兵達はまともな抵抗も出来ずに次々と倒れていく。半分以上も倒

したところで、残った兵士達は蜘蛛の子を散らすように逃亡を始めた。

兵士達がいなくなったのを確認すると、リーシエとリージェスは血の付いた剣を投げ捨て、代わりに血煙ちけむりの付いていない剣を選別してそれを腰に下げる。何気なくそれを手に取ったリージェスは差した剣の軽さに少し驚き、もしや柄のみではないかと思って鞘からそれを抜き払ってみる。

ちゃんと刀身のあったそれは鉄や鋼の剣等と比べても非常に軽かったが、決して悪い金属が使われているわけではなさそうだった。試しに一振りすると、振り心地も悪くない。おそらくは、希少金属で出来たシロモノだろう。

「意外と良い剣使ってるな。全く、抜かずに死んじまうなんて宝の持ち腐れもいいところだ」

そんな事を口にしながらも、リージェスは手馴れた手付きで帝国兵の服を剥いでゆく。ふいに、何かがひっかかったのか、手応えが強くなる。なんのつ、と勢い良くズボンを引っ張ると、下着毎ズボンがずれる。リーシエは何気なくそれを目で追って一瞬固まり、慌てて手で顔を覆う。

「ばっ……リージェスッ、下ろし過ぎっ」

「あ、すまんすまん」

死んだ時にも勃起つてするんだ。リージェスは頭に情報をインプットした数秒後、それが何時役に立つんだよ、と自分に突っ込みを入れると共に、即座に情報を破棄する。

二人は兵士達の懐を満遍なく漁り、取り出した財布から紙幣だけを抜き去って己の革袋に突っ込む。

「うわあ……。リージェス、こいつしけてるよ」

(おいおい、リーシェ……)

そんな酷い言葉遣いをお前に教えた覚えはないぞ、と眉を潜めながら、リージェスはおもむろに立ち上がり、財布をその辺に放り出す。

「あんまり時間かけてもまずい、そろそろ行くぞ」

リージェスはリーシェが立ち上がったのを確認し、今はもうがら空きになった南西門と一緒に潜り抜けていく。

暫くして二人は、街道から少し外れると森の中で上着を着替え始める。もう太陽は昇りかけていたのでいつまでも血塗れの格好をして目立つわけにはいかなかった。

「ちよつと派手に殺り過ぎたかもね」

リージェスが警戒している間、先に着替えを終えたリーシェはリージェスの脱いだ血塗れのコートを見ながらもどこか楽しそうだった。

「自業自得だ。こちとら始めは穏便に済ませるつもりだったのに」
リージェスを女の子と勘違いして絡んだのが運のツキだよ、とリーシェは笑う。

「それにしても、リージェスが跪いた時はちよつとドキドキしちゃった。何を始めるんだろうって」

そういうお前は何を期待していたんだ、とリージェスは顔をしかめながら肩を窄めて新しい服に首と腕を通す。

「最後まで女と勘違いしていやがったからな、その流れに乗った結果あーなった。まあ、運良く逃げ延びた連中もこれで懲りただろう。集団で女を襲うなんて卑劣な手段使ってるからこつこつ目に

遭うんだってな」

リーシエはそれを聞いて俯く。

「あんな奴等に無理矢理やられるなんて、最低だよ」

おそらく、何人もいたであろう被害者を憂いてそう呟いた。

「同感だ」

ヒゲ男が顔を近づけた時の酷い口臭を思い出し、リージエスは同意した。あんなのに唇を奪われたら俺だって婿にいけない。

短時間で着替え終わった二人は街道に戻り、敵影がない事を確認しつつ、小走りでテルネシアとカタルスタとの国境にある関所を目指す。追手が来ないうちに、進めるだけ進んでおかなければならない。もつとも、たかが兵卒が二十人程度殺されたところで追っ手を放つかどうかは疑問だったが。

街道には人通りは全くない。現状を鑑みるに、カタルスタからこちらに来る旅人など皆無に等しいのだろう。こちら側からの旅人にしても、さっきの連中が六時まで門を閉鎖していたのだからいないのは当たり前だ。

カタルスタに続く街道は緩やかな坂道へと変わって行き、疎らにあった民家は姿を消していく。

ある程度登ってからリージエスがちらりと後ろを振り返ると、エリアの城下町が一望できた。立ち止まったリージエスに釣られて後ろを歩いていたリーシエも振り返る。

「わあ、いい眺めー」

城下町の南を流れる川や、北のゴルフレッド方面には登った憶えのある禿げ山が目映った。ここ最近では一番空気が澄んでいたのか、隅々まで見渡せる。ふと、視線を下げると先ほど潜り抜けた南

西門が目映った。

ふいに、リージェスは口を開く。

「あの門の辺りに連中の死体があるんだよな。ちゃんと片付けたかなあ」

「うわ、台無し」

雰囲気プチ壊しの台詞に、リーシェは苦笑する。

釣られて笑ったリージェスだったが、一つ複雑な思いも抱いていた。エアリアはほんの一年前までは本当に過ごしやすい街だった。もしネフェリイがこの惨状を知ったら、どれだけ嘆き悲しむだろうか。

(やっぱり、このままにはしておけないよな)

リージェスはその景色を見て決意を新たに、カタルスタの方へと向き直った。

其の十九 未知なる国へ（裏）

884年 1月29日

徐々に道の周りは大小の花崗岩^{かこう}で埋め尽くされ、その隙間からは様々な色合いの高山植物が顔を覗かせ始める。いつの間にも随分登つて来たのだらう。辺りには薄らと霧が発ち込め、視線の先には滑らかな稜線が姿を現した。山の頂上の方は粉砂糖のような雪がかかっている。

道は頂上の方には通じておらず、峰を横に舐めるように南側の方へと続いている。なだらかな道を踏みしめて山の背の方に回ると、二人は眼前に飛び込んできた光景に思わず感嘆の声を上げた。

敷き詰められた美しい緑色の絨毯には、白くて小さい、可愛らしい花が所狭しと咲き乱れている。吹き下ろしの風が通り過ぎると、葉陰に隠れていた水色や桃色の美しい蝶達がゆらゆらと宙を舞う。遠くには聴いた事もない声で鳴く、黄色い小鳥達が囀^{なみ}っている。

えも言われぬ素晴らしい光景に、二人は声を発することも忘れ、うつとりと見惚れている。花から発せられる仄^{ほの}かな香りがまた心地良い。血生臭い人の世から隔絶された、完全なる安らぎの楽園^{エデン}がただそこにあつた。

テルネシアとカタルスタの国境付近に辿り着くと、大陸最大の流域面積を誇るレヴン川に架かる巨大な橋が姿を現した。カタルスタの関所が橋の向こうに霞んで見える。

「こりやでかい。何ていう川幅だよ」

リージェスは驚きを隠せなかった。その大きさをや向こう岸が辛うじて見えるほどで、川というよりは湖に近い。リーシェもあんぐりと口を開けたままこっくりと頷く。

「うん……。ほら見て、門があんなに遠いよ」

そうしている間にも、何人かの旅人達がカタルスタの方へ向かっていく。しかし、カタルスタ側からこちらに向かってくる者は全くいない。

「戦争中だし、わざわざこっちに来る理由はないか」

リーシェの言葉に、やつぱさうだよなと同意する。

石で作られた巨大な橋の横幅はおおよそ10mくらいだろうか。

かなり大勢でも通れそうだが、ここで魔法の集中砲火に遭ったら一溜まりもないだろうな、とリージェスは想像する。

レヴン川の豊かな水は南側の上流から北側へと緩やかに流れており、橋を進んでいくと西側には関所の裏に薄らと山肌が見えてくる。大分標高が高いせいか、それとも川から発する気化熱のせいか、辺りの空気はひんやりとしているが、長々と歩いて温まっている身体には丁度いい塩梅だった。

小さく見えていた関所の門の目と鼻の先まで来て、二人はポカんと口を開けたまま門を下から見上げる。相当古い建築物なのだろうか、所々は朽ち落ちていたが、侵入者を防ぐ外壁には竜や虎といった彫刻が施されており、その高さは7、8階建ての建築物くらいはありそうだった。

「無駄におつきいね、この門……」

リーシェの感想に、リージェスも同意する。

「ああ。何だつてこんな辺鄙な場所に、こんな立派な門があるんだ

るうな」

やがて、立ち止まっている二人に気づいたのか、門の影から何者かが姿を現す。カタルスタの兵士と思われる男女は、特徴のある黄緑色の曲線美を感じさせる軽鎧を着ている。

「こんにちはっ」

兵士達が朗らかに挨拶し、二人も挨拶を返す。その第一印象の良さたるや、帝国兵達には是非見習って欲しいものだ、とリーシエは思った。

「ようこそ、カタルスタへ。こちら側へ入るのは構いませんが、現在はテルネシア側が戦争中の為、この門を通過した者が一年以内にテルネシア側に戻る事は許されていません。情報統制のため、勝手ながらそういった対策を取らして頂いています但し宜しいですか」
女兵士のその説明を聞き、ふと湧き出た疑問をリーシエは口にする。

「一年以内って事は、一年経ったら出て大丈夫って解釈して良いの？」

「はい、それで合っています」

兵士達は頷いた。

「もう一つ質問だけど、例外ってあるのかな」

兵達はリーシエに向き直る。

「例外、といますと」

今度は男兵士の方が訊き返す。

「例えば、誰かの許可があれば外に出れる、とか」

兵達は顔を見合わせたが、男の方が言った。

「そういった取り決めはされていません。但し、カタルスタに対する貢献度が高い方々に関しては、ある程度の勝手は許されています

が

「貢献度ね……。わかった、ありがとう」

柔軟性はあるわけか、とリージェスは納得した。

関所を通り抜け、小さな渓谷を通り過ぎると、目の前にはただっ広い草原が姿を見せた。少し長めの草が付近一帯を覆い尽くしており、それを分断するように石畳の街道が西側の地平線の先に続いている。そして、北の地平線の先には冠雪を伴った険しい山々が連なっている。

あれが凶悪な魔獣がいるという噂の山脈か、とリージェスは歩きながらも遠くを見据える。なるほど、これほど離れているのに、あの山々から肌に突き刺すような圧力を感じる。おそらく今の自分の実力では、単独で倒す事はとても敵わないだろう。

リージェスは未知の脅威に乾いてきた唇を舐めた。

二時間ほどして分岐路に辿り着くと、二人は建っている標識を確認する。西を向く矢印には首都カタルスタ、南の矢印には溪流の街、レヴングリッジと書いてある。レヴングリッジの街はここから程近い所にあるようだ。そして、リーシェはそちらの方に興味を引かれているご様子だ。

どうしたものかと迷っていると、旅芸人らしき者達がカタルスタの方からこちらにやって来るのが見えた。リージェスは脇を通り過ぎようとした彼等を呼び止める。

「ああ、ちよつと聞きたいんだがいいかな。カタルスタの首都へはここからどれくらいかかるんだ？」

吟遊詩人のような格好をした芸人は、双子が珍しいのか少しの間リージェスとリーシェを見比べていたが、おもむろに言った。

「一日8時間くらい歩いていけば、30日くらいで付くと思つよ」
30日、とリージェスは繰り返す。

「わかった、ありがとう」

リージェスが礼を言つと、旅芸人達は予想通り南の方に去つていった。

「どうせ一年は出られないだし、直ぐ近くなら寄り道していこつ」
リーシェは返答を聞く前にリージェスの手を握ると、強引に南に引張つていく。リージェスは苦笑しながらも、まあいいか、とそれに逆らわずに足を踏み出した。

幸い日が暮れるまでに宿らしき建物見つける事が出来た二人は、並んでその中に入る。カタルスタに至るまでの道のりではあまり宿がなく、二日に一回は野宿というペースだった。

「いらつしやいませ、二名様ですね」

ボーイが人数を確認する。

「ああ、個室を二部屋お願いしたいんだが」

その言葉を聞いてリーシェはちらりとリージェスを見たが、何も言わなかった。

「大変申し訳ございません、個室の部屋はただ今一つしか空いていないので、二人用の部屋で宜しいでしょうか」

リージェスが何か言う前に、ならしょうがない、とリーシェが頷いた。

前金を支払い、二人は部屋に案内される。外壁のペンキが剥げかけていたので、少し不安を抱いていたリージェスだったが、みすぼらしい外観に比べて内装は非常に新しく、階段や絨毯も新品に近かった。二人が案内されたのは二階の一番端の部屋だ。

「こちらでございます、西側に大きな窓があるので、これからの時間、夕日が綺麗にご覧になれますよ」

二人は宿の従業員に鍵を受け取り、差し込んで部屋に足を踏み入れる。中に入つて真つ先に視界に飛び込んできたのは

「あれ、ダブルベッドか」

部屋のほぼ中央にある、真つ白い大きなベッドが存在感を漂わせている。

「良いじゃん、別に」

リーシエはさして気にしていないようだった。

（おかしいな、リーシエも年頃の何とかとネフェリイが言っていたのに）

リージエスは首を傾げる。兄妹というのは大人になっても添い寝するものなのだろうか。

「まあ、お前が良いって言うなら構わないけどさ」

リージエスは肩を竦める。

「それより、リージエス。ほら、夕焼凄いや」

窓際に立っているリーシエが手招きする。

それに従い、リーシエの隣に立って西の方角を見る。太陽が紅に染まり、所々に細い雲を纏いながら山々の狭間にゆっくりと落ちていく。従業員が言ったとおり、その夕日は確かに一見の価値があった。

「ああ、綺麗だ」

「見てて飽きないねー」

窓を開けると、草の匂いを纏った西風が二人の頬に接吻をしつつ部屋に入り込んでいく。二人はそのままテラスに出ると、並んで金属製の手すりに腕を預ける。勿論テルネシア側でだって夕日は見られるのだが、不思議とその歪な夕日は二人に鮮烈な印象を残していた。

「値段の割りには、中々の出来だったな」

二人は宿の食堂で夕食を終え、部屋に戻って一息ついていた。筍のうま煮としじみの味噌汁はそこその出来だった、とリージエスは感心していた。

「そうかなあ？ 味噌汁の方はもう少し、塩気を抜く代わりに出汁ダシが利いている方が私は好きだけど。うーん、リージエスの作った料理を食べていると、変に舌が肥えちゃうのが問題よね」
称賛とも文句ともつかない事をリーシエに言われる。

「そりゃ、不特定多数に作る料理と、家族に作る料理の味は違うだろ。俺の料理がお前の口に合うのは当然だ。お前の好みに合わせて作っているんだしな」

腰に手を当ててリージエスは胸を張った。ちゃんと手をかけて作っているんだぞ、という意も密かに込める。

「え、そうなの？でも屋敷にいた時リージエスが作ったピラフは、皆美味しそうに食べてたと思うけど」

「こついった大勢の客を相手にする場所だと、一人の料理にかける手間も時間も限られるだろ。その分、味が落ちるのは仕方ないと思うぜ。それを差し引けば、さっきの料理はまともだったと思う」

「ふーん、そんなものなのかな」

リーシエは釈然しゃくぜんとしない表情を浮かべていた。

「まあお前に料理を作る時は、塩分を取り過ぎるといけないからって、出汁重視ダシの味付けにしていたから、そのせいもあるかも」

「薄味に慣れてるって事？」

「濃い味に慣れてないって事」

同じじゃない、とリーシエは苦笑する。

「人の味覚っていうのは、皆が思っているより結構個人差あるんだぜ。人間には六覚あるけれど、他の感覚だって相当差が出ているだろ？」

「んー、言われてみれば……」

目の良い人悪い人。耳の良い人悪い人。鼻の良い人悪い人。なるほど、当たり前前の様にいる。触覚に関しても、敏感な人、鈍感な人、確かに全然違う。味覚だけ仲間外れにしていた、と言えない事もないかもしれない。

「濃い味じゃないと納得できない人もいるから、店としてはその中間辺りを狙うわけだ。料理ってというのは宿にとってやっぱり一つのウリだしな。なるべく万人受けする料理を作らないと、商売が成り立たないのさ。つまりだな、宿泊施設としてはどの客が食べても……そうだな、75点を超えれば合格点」

「ふーん、微妙な線ね」

意外と二人は味に煩い。しかし、人に作ってもらった手料理に対しては、幾分甘い点数を付けたくなるのが人情というものである。

自分で作った料理を自分で食べて100点を付けられる人は、まずいない。不思議な事に、その評価は往々にして、他人が評価するより二段階くらい下がる。かくいうリージェスもそれに類する。料理の味には作っている人への感謝だとか、嬉しさだとか、そういったものが深く評価に関わっている気がする。

それを生業にしている人が、どういう評価の仕方をしているのかはわからないけれども。多分、お客の食べている勢いだったり、表情だったり、空になった皿だったり、再来店してくれた人の数だったりするのだろう。

「……逆に訊くけど、俺の料理そんなに美味しい？」

「絶品」

力強い即答が返ってくる。これだから、また作ってやりたくなくなっちゃうんだよな。こいつめ。

カタルスタ入りしたという事で緊張感が解け、三十分ほどぼーっとしていた二人だったが、思い出したようにリーシェが立ち上がる。「リージェス、お風呂行こうよお風呂。ここ温泉あるんだって」
やや興奮気味に捲し立てる。

「あ、ああ、そうだな」

あまり乗り気ではなさそうなリージェスに、その理由が思い当たったリーシェはクスツと笑いを噛み殺す。

「あ、そっかー。大分髪の毛伸びて来たし、また勘違いされるかねー。大変だねー」

のんきな事を言うリーシェに、リージェスは口を尖らせる。

「……こいつ、人事だと思いやがって。別にいいんだけどさ、いちいち同性に顔赤められても反応ってか対処に困るわな」

普段もそうなのだが、髪の毛が濡れると殊更、リージェスはその顔立ちから良く女に見間違われる。湯船に入っているリージェスの顔を見るなり、慌てふためく入浴客に「俺、男っすから」っとリージェスが言うと勝手にシヨックを受ける。

リージェスが黙ってたら黙ってたらでチラチラと見られる羽目になって鬱陶しい。また、例外的に理性を失って襲いかかって来る猪も何人かいた。その後は不思議と、湯船のお湯が赤く染まるのだ。

「静かに入りたいんだよな、俺」

そんな事を呟くリージェスに、リーシェは暫くは無理だね、とでも言いたげにチロツと蛇の様に舌を出す。

一階にある大浴場に入ると、規則正しく並んだ香りの良い檜の床の上に、細い板で仕切られた棚が壁際に設置されていた。他の入浴客の荷物を見る限りでは、二、三人しかいないようだった。少ないに越した事は無い、とリージェスは右の三つ網を束ねている紐を解く。解けた髪の毛の部位はなめらかなウェーブを作っている。リージェスはそれを少し慣らしてから衣服を脱いで棚に置き、タオルを手に浴室の引き戸を開けた。

浴室内は湯の温度が相当に熱いのだろうか、もうもうと湯気が立ち込めていたが、近くの人の気配を感じる事が出来るリージェスは、他の客の位置は掴めていた。

（湯船に二人か）

先に旅の埃を洗い落とそうと洗面器に垂れ流しの湯を汲み、小さな椅子に座り、木綿のタオルで花の香りがする石鹸を泡立ててごしごしと身体を擦り始める。後ろの湯船では、先客がのんきに鼻歌などを歌っていたが、浴室特有の反響音で、歌には残響リバーブがかかり、中々小粋に聴こえた。

リージェスは長い髪を洗い終え、タオルを片手に湯船に向かう。湯の色は僅かに赤みを帯びた墨みみたいに黒い湯だった。視界は奪われているが人影が確認できない程ではなかったため、壁際の端の方に陣取り、ゆっくり足先を湯に浸らせる。

「熱っ」

反射的に声が出てしまう。咄嗟に出た甲高い声が浴室では思いのほか反響し、まるで女性の様な声が辺りに響き渡った。

（つうか、本当にあちい）

このままでは無理だ、と即座に判断し、リージェスは対策を取る。

先人の知恵其の一。手で湯をかき混ぜてから入ると、そんなに熱くない気がする、を実行するべく、腕を入れる。失敗、そもそも熱くてまともに手を入れられない。

先人の知恵其の二。先に熱めのお湯を洗面器で取って、それを身体に浴びてから入る、を実行するべく、先程座っていた場所まで戻る。少しだけ水でうめて湯を浴び、多少身体を慣らしたところで、再び湯船に挑戦。成功、とはいいい切れないが、何とか少しずつ少しずつ足先から浸かっていく。

身体が肩の少し下くらいまで使ったところで、リージェスは大きく息を吐く。心持ちは、ふいふ、堪らんつ、なのだが、切なげに溜息が洩れる様にも聞こえる。

身体の芯まで熱が伝わっていくのがわかる。少しでも動くとかかなりの熱さを感じるので出来るだけじっとして湯を楽しむ。段々と凝り固まった筋肉がほぐれてくる。

ふと気配が動き、湯船の奥の方から誰かが近づいて来るのを感じる。湯を堪能しながらも薄眼で人影を追うと、霧もやの中から青年が姿を現した。年の頃はリージェスより四、五才上だろうか。

「えっ、本当に女の子……？えええっ、ここ……男風呂だよね？」
自分が間違つて女湯に入っているとでも思つたのだろうか。リージェスの顔を見て啞然として固まっている短髪の青年に、リージェスは含み笑いを漏らす。

「何だ。？本当に？と言う事は、少しは期待して来たのか。残念だったね」

「あ、やっぱり？オトコノコ？、かな？」

まだいまいち確証が持てないようだったが、リージェスが頷くと青年は少々がっかりしたものの、その場で湯船の中に腰を下ろし、再び話しかけてきた。

「へえ、本当に？オトコノコ？っているんだねえ。君みたいな美少年初めて見たよ」

本当に男の子がいるって？ 何かの暗喩あんゆなのか、とリージェスは察してみる。

「流石は魔道王国、何でもありだね。昨日もね、巨大な獣が火を吐きながら山の方を飛んでるのを見たんだよ」

青年はさらりと言ったが、人をそんな化け物と同列に扱うなんて失礼じゃないか、とリージェスは心の中で反論してみる。

「残念ながら、俺はカタルスタの人間じゃないよ」

リージェスの答えに青年は目を丸くした。

「え、本当に？ どこ出身なの」

「うーん、どことも言えない。物心付いた時には周りに誰もいなかったからな。生まれた場所がわからないんだ」

あっけらかんと言ったリージェスに、青年は悲痛そうな顔を浮かべる。

「本当かよ……酷いな」

厳密に言えば半分くらいは嘘なのだが、説明するのもややこしかった。

「まあ気にしていたってしょうがないさ。生まれがどうだろうが、今幸せなら何ら問題ない。それより兄さんはどこ出身さ」

「あ、ああ。僕は、アテライデ、って言うてわかるのかな」
リージェスは頷く。

「各地を旅してるからね。大陸で行ってない所は殆どないよ」
青年は目を丸くした。

「へえ、いいなあ。僕なんてしがないサラリーマンだからまとまっ

た休みが取れなくてさ。旅行に行く機会なんて全然ないんだよ」
青年は肩を竦める。

「勤め先もアテライデか？」

「うん」

青年の返事にリージェスは首を傾げる。

「あそこからここまで、大変じゃなかったか？ 戦争中なのに」
青年は太ってはいないが、どうみても武道派ではない。

「まあ、長い旅ではあったねえ。でも危険な目には合わないよう注意してたから」

「ふーん」

「僕の名前はレナード。君の名前は？」

「リージェス」

リージェスは風呂から上がり、窓を開けて火照った身体を冷ましているリーシェを見つけて声を掛けた。

「ああリージェス、遅かったね」

リーシェに歩み寄ると、せっけんのいい香りが窓から吹き込む風にふわりと乗って漂ってきた。

「ああ、旅の人と中で少し話し込んでな。これも旅の醍醐味って奴だ」

リーシェは頷く。

「私もシーナさんって女の人と話していたのよ。私より年上みたいだけど、可愛い人だったな。アテライデから同僚の人とお仕事に来ているんだってさ」

リージェスは話を聞きながら、風呂上がりの体に冷たい牛乳を流し込む。

「ぶはあ、この一杯が堪らん。……ってお前もか。じゃあ俺の話していた人がその同僚なのかもな。こっちもアテライデから来

たつて言っていたぜ」

それを聞いてリーシエは納得する。

「ならきつとそうだね。王都に向かうつて言っていたから、また偶然会うかもね」

再び二階の部屋に戻ると、既にベッドは整えられていた。

「じゃあ寝るか、何だかんだ疲れたし」

「うんうん」

巨大な掛け布団を二人で羽織り、細長い枕に首を預ける。

「ねえ、落ちたら嫌だからもうちょっと近づいても良い？」

リーシエってそんなに寝相悪かったつけ、と思ったりリージエだったが「お好きに」と言った。二人の体が背中同士で触れ合い、ややあつて背中越しに寝息の音が微かに聞こえ始めた。続けて、リージエの視界にもゆっくりと闇が覆いかぶさつて来る。今日は早いな、そう思うや否やその思考毎、音もなく闇に飲み込まれていった。

其の二十 く秘められし力(裏)く

884年 1月30日

ザアアアーツ

何かが流れる様な音が耳に入り、リージェスはゆっくりと目を開く。枕に預けている頭を傾け、窓の方に視線をやると、閉められていたライトグレーのカーテンはまだどこか薄暗い。起きるには少々早いか、とまどろむリージェスだったが、何となしに窓と反対側の壁に掛けられていた時計に視線を転じる。5：45くらいに見えたが、視界がぼんやりと濁っていたため、服の袖でそつと目やんを取ってもう一度見る。

(……9：30か。……えっ)

どうやら短針と長針を取り違えていたらしい。チエックアウトは10時だという事をはたと思い出し、リージェスの頭が一気に活動を始める。反動を付けて勢いよく立ち上がると、閉じられていたカーテンを両側にめいっばい開く。

「やっぱり雨か……」

道理で室内がやたらと暗いわけだ、とリージェスは納得する。灰色の空からは、はっきりと眼で確認できるほど大粒の雨が、大地にひたひたと降り注いでいる。泊まっている宿前の道端には既に大きな水溜りが幾つも視認できる。どこからか、雨音とは少し異なる、ザアアアーツと水が流れている様な音が聞こえるが、おそらくは屋根に降り注いだ雨水が雨どいに流れ落ちていっているのだろう。

突然その身に寒気を感じ、ぶるっと身を震わせる。ぐぐっと両手

を上を翳して思い切り伸びをし、淀んだ空気を吐き出してからダブルベッドの方に視線を移す。一緒に寝ていたリーシエは掛け布団を丸めるようにして、それを腕と脚で抱き挟むようにして眠っている。どうやらいつの間にか占有されていたらしい。なるほど、体が冷えているわけである。リージエスはリーシエの足の方に回り込み、その掛け布団の端を鷲掴みにし、おもむろにスポツと引き抜いた。

「……あう」

しかし、リーシエは眠っている。それでいて、手持無沙汰になった両手が何か抱きつける物を探そうと、不規則にわさわさと動いている。

リージエスは苦笑しながらも、今度は窓の方に近づき、鍵を外して引き戸を開け放った。途端に、冷気を伴った西風が部屋に入り込み、布団を奪われた寝間着姿のリーシエを襲う。

「……あうう、さ、寒い」

ようやくリーシエは薄らと目を開け、のそりとベッドの上に身を起す。

「おはよう、リーシエ。時間がないから急いで着替えな」

「うん？ あ、リージエス。おふあよう」

喋っている最中に欠伸をかましたリーシエは相当に気だるそうだった。やはり久し振りの長旅はそれなりに堪えているらしい。

「俺も寝坊しちゃったから偉そうなことは言えないが、チェックアウトまで30分ないぞ」

「……ええ、うそっ」

やっと状況を察してくれたリーシエは、慌ててベットサイドに置いてあった旅行用の革袋から服と下着を取り出す。リージエスはそれから顔を背けて、自分も着替えるべく窓際に置いてあった洋服を手を取った。

ぎりぎりチェックアウトの時間に間に合った二人は、ロビーで鍵を返して、何となしにガラス張りのロビーから外を眺める。その途端に二人は言葉を失う。

「……え」

二人が驚いたのは、かなりの雨の中、道行く殆どの人が傘をささずに歩いている事だった。雨宿りの場所を求めてこちらに走ってくる人もいない。

「なんぞこれ」

カタルスタでは傘を差さずに雨を享受する習慣でもあるのだろうか。その奇異な光景にリージェスは見入った。

「え、えつ、凄いやリージェス。あれ見てあれ」

どれどれ、と興奮した様子のリーシェが指差した方向を見ると、街道を歩いてきた旅人が宿に近づいてくる。そして、気付いた。身体に当たる10cm程手前で、雨が人を避けるように流れている。宿泊するつもりであろうその旅人はそのまま軒下に入り、宿のガラス扉を開いてボーイに出迎えられた。

「もしかしてこれって」

「おやおや、本降りになってきたのう」

二人が後ろを振り返ると、還暦をとくに過ぎていそうな平帽子を被った老人が杖を付きながら慎重に階段を下りてきた。手には何やら入っっているような布袋を持っている。

老人はロビーに突っ立っていた二人を見遣ると、にこやかに声を掛けた。

「おはよう、お二人さん」

『おはようございます』

二人の声が見事にハモツた。老人は笑みを崩さずに話しかける。
「お二人さんは、もしかしてカタルスタに来るのは初めてかのおう？
良かったらお一つずつどうじゃ、持っておると雨も安心だぞ」

そう言つて、商人と思われる老人は袋にこそごと手を突っ込み、何か取り出したのか、リージェスの方に手の平を上にして差し出した。皺しわの深い四本の指が開くと、手の平には青緑色の小さな楕円形の石が現れる。翡翠にも似ている、500ギラ硬貨よりやや大きいくらいのその石は、あまり透明度はないものの、何やら文字の様なものが刻まれているのがわかる。

「もしかして、これつて魔石か？」

リージェスの問いに商人がゆつくりと頷く。

「そうじゃ。といつても、使い捨て用の安い奴じゃがの。勿論、色々種類はあるんじゃが。これは持っている者の魔力を微弱な風魔法に変換して、自分の周囲に張り巡らせるものじゃ」

「へえー、じゃあこれを持つてると自分の魔力が消費されるんだ」
隣にいたリーシェはリージェスの掌の石を見ながら感心したように頷いている。

「うむ、まあ少々疲れやすくなると思うが、傘を持つよりは余程楽だと思ふぞい。但し、この国以外では使えないがの」

なるほど、カタルスタの民達はこんな便利な物で雨を凌げるのか。これだつたら横から向かつてくる風雨でも濡れずに済む。

「ここでしか使えないのつて何でなの？」

リーシェが質問する。商人はもつともな疑問だと言わんばかりに頷く。

「それはだな。」

「ちよつと外に出ようかの」

三人はガラス扉を押して軒下に出ると、商人が「あれを御覧」と南東の方角を指した。

商人が指差したのは小高い山だった。てっぺんには何やら石碑らしきものが立っている。

「あの石碑が地に流れている魔力をその石と共鳴させる、というわけじゃ。魔術用語では地脈、とも言うものだがの。あれは、カタルスタ国内の至る所にある。あれから発生する魔力が届く範囲でしかその石は使えない、というわけじゃな」

それで外の国に魔石だけを持ちだしても意味がない、というわけか。技術の流出を防ぐためなんだろうけれど、それにしても徹底している。

「一個いくらだ？」

リージェスは尋ねる。脈ありと見たか、商人の目がキラリと光った。

「1000ギラじゃ、少々高いと思うかもしれないが三日分は使えるぞ」

なるほど、それなら安いものだ。

「じゃあ、二個貰おうか」

「毎度ありっ」

商人は人懐っこい笑みを浮かべた。

金をし払ったところで、リージェス達は手でそれを持ってみる。

やはりどこか普通の石と違うのだろうか、暫く握っていても手に籠る熱は移らず、石特有の冷たさを損なわない。

リージェスはそこで肝心な事に気づく。

「……ところでどうやって使った」

「イメージじゃ。掌にある石を自分だと思って、周りに雨を避ける

渦を巻いているように想像すれば良い。初めは少し手間取るかも知れぬが、慣れれば自然に歩けるようになる。何、一時間も練習すれば

「こうかな？」

リージェスは老人の言う事を参考にして、手の平の中央にある魔石を見つめる。石を囲う小さな竜巻をイメージすると、徐々に周りに微弱な風が吹き始める。

「おお、できた。これでいいのかな」

リージェスは自分でやったことながらも、その現象に対して戸惑いと好奇心を抱いていた。

「ばつちりじゃ。……お主、呑み込みが早いのが」

商人は掛けている眼鏡の縁を直して驚嘆の声を上げた。ややあつて宿から出てきた旅人が商人から魔石を買おうと声をかけてきた。

「リージェス〜」

ふいに隣から聞こえた情けない声に反応し、リージェスはリーシェの方を見る。

「ああ、あせらずゆっくりやってくれて　ん？」

何故かリーシェは、非常にばつの悪そうな顔をこちらに向ける。

「どうした？」

「……イメージしたら、なんか石が勝手に壊れちゃったんだけど」

「な、何じゃとっ」

聞き耳を立てていたのか、商人はこちらを見て狼狽ろうたいした。

「ほ、本当ですよ。ほら」

リーシェが差し出した手の平を二人が覗き込むと、なるほど、確かに青緑色の石が跡形もなく砕け散っている。

「……おいおい、爺さん頼むぜ。不良品掴ませるなんて」

二人の後に買おうとしていた客が、はたと商人の方をじと目で見

る。慌てて商人は顔を横に振って抗議する。

「ひ、人聞きの悪い事を言うでない。僕は仕入れる時にちゃんと使えるか確認してから買うんじゃない。不良品などそうそう混じっているはずは……」

商人の慌て振りが嘘とも思えなかったリージェスは十秒程黙考してみる。

それなら、一番シンプルな方法で確かめてみよう。

「リーシエ、俺のでやってみろ」

「えっ。う、うん、わかった」

リーシエはリージェスから既に効果が実証済みの魔石を受け取り、再び石を手の平に乗せてイメージを開始する。すると
「なっ」

一瞬、ジジジ、と青い電撃が石に走った様に見えた。そして、ピシツという音と共にひびが入り、石は見事に粉々に砕け散った。

「な、何だあ？ 今の、俺の時と全然違うな」

「だ、駄目だあ、私……才能がないのかも」

リーシエは肩を落としてがっくりと落ち込んでいる。

「じゃあない。もう一個買って俺と相傘で……爺さん、どうした？」

商人は、リーシエの持っている砕けた石とリーシエの顔を見比べている。

「お嬢ちゃんは、今まで魔法を使った事は？」

「な、ないですけど」

リーシエは慌てて応える。

「……名前は何と言っんじゃない」

「リーシエです……けど」

商人の意味深な表情に、リーシエは戸惑いを隠せない。

「以前、お嬢ちゃんと同じように、この石を壊した者が二人だけおった」

曰くありげな目で、商人は息を吐き出すように言った。

「ふーん、こいつの他にも落ちこぼれ仲間がねえ」

「リージェス……、今さり気なく酷い事言ってるのわかってる？」

リーシェが潤んだ目で何やら訴え、リージェスは素知らぬ振りをする。

しかし、商人は首を振る。

「落ちこぼれなどととんでもない、そのうちの一人は高名な魔法使いじゃ」

「えっ、本当に？」

思いもよらぬ事実、リーシェは顔をぱあっと輝かせる。忙しい奴だ、とリーシェは下唇を突き出す。

「カタルスタの王宮にエステル・シャトルーという若い宮廷魔術師がおるのじゃが、その者に売った時にも同じ事が起きたのじゃ。もう何年も前の事じゃがの」

リーシェはそれを聞いて拳を高々と上げた。

「リージェスっ、私は駄目で救う価値のない落ちこぼれじゃないよっ」

「そ、そこまで酷く罵った覚えはない」

リージェスは慌てて反論した。

「まあまあ。何にせよ、そのお嬢ちゃんが強い魔力を秘めているのは間違いあるまいて」

商人は二人のやり取りを微笑ましそうに眺めてそう言った。

その後二人は、待ちぼうけを食らっていた旅人達が購入を終えた後、リージェスが改めて貰った石で相傘を試してみる。相傘と言っ

ても、リージェスが二人分の渦の大きさをイメージすれば問題なかったわけで、手を繋げる距離なら全く濡れずに済んだ。

「じゃあ爺さん、世話になったな」

「おまけしてくれてありがとっ」

二人に商人はゆつくりと頷いた。

「道中気をつけるんじゃぞ」

背中越しに声をかけて二人を見送った後、商人はふと、石を砕け散らせたもう一人の客を思い出す。

（確か……ウルグとか名乗ったかの）

何十年前も前の事だが、強く印象に残っている。見ただけで萎縮させるような圧力プレッシャーを持つ、深遠を見通すような目をした男だった。エステルといい、リーシェといい、あんな少女達が彼に匹敵する魔力を持つのだろうか。

（世の中何があるかわからんの）

商人は神の悪戯の意図を想像し、薄灰色の空を仰いでほくそ笑んだ。

其の二十一　く風と一つに（裏）

884年2月2日

太陽の位置が一番高くなる頃、二人は溪流の街、レヴングリッジの入り口に到着した。なるほど、こういった形の水の都もあるのだな、とリージェスの目から鱗が落ちる。

東側の切り立った険しい岩山の上部からは水量豊富な湧き水が噴き出し、たくさん小さな滝となって下へと流れ落ちている。地に勢いよく叩きつけられたそれは、目に見えぬ程細やかな水滴となって再び空へと還り、可愛らしい虹を幾つも作っている。

リーシェは先程から周りをキョロキョロ見回しては感嘆の息を吐き出している。リージェスにしても、カタルスタに来てからというもの、見る物全てが珍しく、初めて旅を始めた頃の新鮮な気持ちが胸に蘇っていた。

巨大な滝を横目に、二人は栈橋を静々と渡っていく。ゴウゴウという水音はさながら大地の呻き声のようでもあり、耳のみならず身体全体に響き渡る。岩清水から吐き出されるひんやりとした空気の中を潜り抜けて行くと、ポチャンという水音が耳に入る。二人は、何だろうと首を傾げ、ニスが塗られている木製の手すりに手を置いて下を覗き見る。すると、川底の細かな赤や金色の砂粒までくつきりと見えるほどに透き通った水の中を、大小の川魚が群れなして泳いでいるのが見えた。

橋を渡り切ると、角ばった幾つもの岩で仕切られた細い水路が幾

重にも張り巡らされた街の中心部に到着する。二人はいつものように街巡りを始める。小さい島が連なっている様な作りの街中では、水路に長い簀すいのような橋が至る所に掛けられており、通行人達はそれを渡って行き来している。二人も真似る様にして、その橋を渡り、周囲に視線を巡らせる。

見渡せば普通の街と違い、名前からして異彩を放つ店が多く見受けられる事に気づく。

「ねえねえ、あそこ見てよっ。魔法道具店だつて。どんなもの売っているんだろ。面白そ〜」

リーシエに相槌を打ちつつ、おもむろに視線が一点に集中する。

「ほほう　　ってあっちも見てみるよ。ただの厩舎かと思つたら中にいる白い馬、翼が生えているぜ。あれが天馬ベガサスって奴か」

それに食いついたリーシエは厩舎の奥の方に目を凝らす。普通の馬が手前の柵に囲われており、やや奥まった所に大きくて白い、鳥の様な翼を持つ馬が四頭並んでいるのが見える。

「うわあ……」

リーシエは感激のあまり声を出す。

天翔あまかける聖獣と謡われし天馬ベガサス。文献や挿絵でしか見聞きしたことのない生き物を初めて目前にして二人はただ感動していた。

「ねえねえ、あれって乗れるのかな。聞いてみようよ」

リーシエはやたらと興奮している。

「ええー、流石に無理じゃないか」

「駄目元でいいからさ、ねっ。行ってみよ」

言うが否や、子供のようににはしゃぐリーシエはリージェスの手をむんずと掴むと厩舎の方へ強引に引っ張って行く。

厩舎に近づいて行くと藁独特の匂いが漂って来る。木造の厩舎の外壁に貼り紙が付けられているのに気付き、リージェスはそれを見

て目を丸くする。

？空中散歩三十分、20000ギラ。一生の思い出に天馬ベガサスに乗って、美しい溪流を空から眺めてみませんか　と書いてある紙が貼ってあったのだ。

「20000ギラ……って決して安くはないよな」

僅かに顔をしかめるリージェスにリーシエは言葉を返す。

「帝国兵達から貰ったお金があるじゃない。折角だし乗ろっ。きつと連中も浮かばれるよ」

決して貰ったわけではなく殺して奪ったわけで、しかもこんな使い方したら絶対浮かばれないわけで。そう思ったリージェスだったが、このテンシヨンのリーシエは梃子てこでも動かない事を長い経験から知っていた。まあ、泡銭あぶくぜにだし良いか。文字通り浮かべるのは俺達だけだが。

リーシエは厩舎から家一軒分隔てた隣にあった、二部屋分くらいの建物の窓口に進み、中にいた男に顔をぐいっと近づけて話しかける。小さい窓にすっぽりとリーシエの頭が入ったのが見えた。

「すみませんっ、二人なんですけれど乗れますか？」

突然話しかけられた男は視線を上げ、ずれた眼鏡をくいっと上げ、間近のリーシエを見て顔を真っ赤にしてしどろもどろになる。

「あ、は、はいっ。二名様、ですね」

金を受け取った後、少しして窓口の狭い部屋から出て厩舎の中に入って行った男性係員は、柵の中で天馬ベガサスの身体をブラッシングしていた女性係員と共に、二頭の天馬の手綱を引いて二人の元に戻って来た。

「じゃあ、早速参りしましょうか。っと、その前に、お二人は天馬ベガサスに乗るのは初めてでいらっしやいますか？」

女性係員に尋ねられて、二人はこくこくと頷く。

「では、我々と二人乗りという事に致しましょう」

慣れれば一人でも乗れるのか、と心をくすぐ擦られるも、リージェスは気になった事を一つ尋ねる。

「あのー、重量的にそれは大丈夫なんですか」

女性係員は天馬ベガサスの顔を愛おしそうに撫でながら言った。

「御心配には及びません。この子達は大体三百キロまで載せられても普通に飛ぶ事が出来ます。というのも、浮遊魔法レベテーションを生まれながらにして習得しているのです。確かに馬のような姿をしていますが、別の生物と思つて頂いて結構ですよ」

それでも、天馬ベガサスにかかる負荷おんじきをなるべく均等にしようという事で、男性係員の後ろにリーシェ、女性係員の後ろにリージェスが乗る。女性おんなのうなじから漂うオーデコロンの匂いが微かに鼻をくすぐ擦った。

「それでは、行きますよ。しっかりと腰に掴まつていてください」

男性係員の声と共に二人が手綱てなづなを叩くと、その刹那重さを失う。

二頭ふたごの天馬ベガサスは空へと跳び上がり、徐々に大きく螺旋を描くようにグングンと上昇していく。リージェスは迷わず女性の腰に強くしがみついた。

「す、すっごーいっ」

リーシェはどんどん小さくなる建物の、赤や白の屋根に目を瞠り、ハッと真横へと視線を移す。碧と黄の色鮮やかな渡り鳥が群れをなして飛んでいるのを上に追い越していくところだった。上から見下ろすと、鳥達は綺麗なV字に列を組んで飛んでいるのに気づく。

心臓の鼓動がロールを打っているかのように早まっているのがわかる。見渡せば360度遮るものが一切なく、西へと目を移すと広大な草原の彼方にある地平線が丸みを帯びてくる。白い雲がもう手に届きそうな位置まで上昇を続けていた二頭の天馬ベカサスは、ふいに二枚の大きな翼をはためかせ、風の道を捉えた。一瞬ゆらりと揺れたが、その後は姿勢が安定する。澄みきった大気が皮膚を貫いて体の中に入り込んでくる。耳に風が劈つんざくが決して不快ではない。

レヴングリッジの渓谷が眼下に映った。美しい虹の橋が滝の上にある小さな湖を包み込むように架かっている。煌く陽光を反射する水鏡の端からは、何本か糸の束を垂らすかのように水が大地へと伝っている。頭上には青を通して深い群青色の空があり、その開放感たるや筆舌に尽くし難いものがあつた。まるで夢の中をうつろうような光景に、体全体に痺れのような感動が沸き立つ。刹那、空の只中であつてリージェスは母なる海に身を投じる。得体の知れない恍惚感に包まれ、リージェスの意識が世界から乖離かいりを始める。

「どうですかー」

女性係員が後ろを振り向いて大きく声を張り上げる。至近距離でもこの風音の檻おびの中ではやっと聞こえるくらいだったが、リージェスは負けじと声を張り上げる。

「最っ高ですっ」

偽りなき気持ちちを口にしたリージェスを見て、女性係員は晴れやかに笑った。

耳に響くは風の呼び声、視界に映るは遙かなる大地。それは言うなれば鳥達の日常のひとコマである。それがこんなにも熱く胸を揺

さぶるのは何故だろうか。

ふと、リージェスはリーシェ達の乗っている天馬の方を向く。水色の空間を自由に駆け抜ける天馬は近づき、遠ざかり、また近づく。リーシェがリージェスの視線に気づき、こちらに手を振るのが見える。ふいに前にいた男性係員が慌てて後ろを向いて何やら叫んだ。おそらく、手を離さぬようにと注意されたのだろう。しょうがない奴だ、とリージェスは苦笑する。流石にこの高さから落ちたらひとたまりもない、そんな事を考えながら、リージェスは再び吹き抜ける風に身を預ける。

現実而降り立つと、予定の時間を二十分程オーバーしていた。まあ仕方ないわね、と女性係員は快活に笑う。その素振りからするといつもの事のようにだ。ふと、リージェスが厩舎の方を見ると、もう二頭いたはずの天馬ベガサスがいない。女性係員もそれに気付いて腰に手を当てる。

「あら、お客さんもう一組きていたのね。気付かなかったわ、擦れ違わなかったのかしら」

そう呟きながら、女性係員は二頭の天馬ベガサスの手綱を引いて、厩舎の中に戻しに行く。

「是非是非、またのお越しをお待ちしておりますっ」

男性係員は別れ際、リーシェに向かって力強くそう言った。リージェスとリーシェは係員の二人に大きく手を振ってその場を後にした。

地上にいるのに、まだふわふわと体が浮付いているのを感じる。踏みしめる地面に確かな手ごたえが感じられず、体の感覚がズレて

いるようだ。視点がやたらとうつろうし、心の臓も未だ落ち着きを取り戻していない。体幹を真っ直ぐに戻そうと、リージェスは背伸びをし、深呼吸をする。

「ね、乗って良かったでしょ」

後ろ手を組んだリーシェの得意げな顔に、リージェスは白旗を上げる。

「素晴らしかった。今回ばかりは完敗だ」

確かに、空を飛ぶだけであれほど感情を揺さ振られようとは思ってもよらなかった。得難い体験だったと認めよう。リージェスの敗北宣言に、リーシェは満面の笑みを浮かべた。

晚霞^{ばんか}、ゆつくりと闇が街を舐めていく。慣れない体験で嘗て^{かつ}ないほどに興奮し、疲れたのだろう。宿に入って間もなく、七時頃にはリーシェは眠そうに目を擦って、布団の中に入っていった。リーシェが安らかに寝息を立て始めたのを見届けると、リージェスはそつと窓を開けて屋根の上に飛び上がる。屋根裏の窓のつかかりの部分に足を付けると、寝そべって空を眺める。

目の前には満天に漂^{ただよ}う数多の星があった。空が近く感じるのは、ただ標高が高いせいだけなのだろうか。北方に在^{しる}る導^への青い星、エセルテイスが殊更に大きく感じられる。

その広大な海の底で、リージェスは己の意識を空に投げ出してみる。先程空で感じた、懐かしいような、切ないような、そんな感覚を思い起こそうとする。だが、一向に求める感覚は襲ってこない。リージェスは無意識に母を求める無垢なる赤子のように、空にその手を伸ばしていた。

其の二十二　　〜迷宮の森（裏）〜

884年　2月20日

「ハックシヨンツ」

リージェスは歩きながらも突然盛大なクシャミを放ったリーシェを横目で見ると、

「おいおい風邪か？　頼むから伝染うつさないでくれよ？」

薄情な事を口にするリージェスにリーシェは恨めし気な目を向ける。

何で真つ先に「大丈夫か」の一言も言えないのかなあ。ネフェリイが風邪引いたときにはかなり優しくしてたくせに……。

内心そんな事を呟きながらリーシェはヒップポケットから取り出した薄紙で鼻をかむ。しかめ面が更に内側に寄った。

レヴングリッジの街を後にしてから二週間と少々。旅慣れたリージェス達は、常人よりやや早いペースでカタルスタの手前にある、鬱蒼と木が生い茂った広大な森の前まで辿り着いた。昨晚泊まった宿の話好きの主人によると、この森は地元の間人には迷宮メイヌオプフォレストの森と言われているらしく、手強い魔物も潜んでいるという曰く付きの場所らしい。中に入って還らなかつた人は数知れず、密かに自殺の名所としても名高いとか。そういうのは名高ナカウいって言うのでなくて、悪名高ナカウいって言うのだと思うが。リージェスは店主の話ワザを聞く傍ら、心の中で独白した。

こんなに平和な国で、果たして自殺する奴なんているのかと思

きや、意外や意外、聞いた所だと結構いるらしい。

「そういった客は、大体一目でわかるんです。実際、ここに泊まったお客さんで、私の説得で自殺を思い止まってくれた人もいます。商売が失敗して一文無しになった。親友に裏切られた。恋人に先立たれた。明日をも知れぬ病気になった。まあたまにちょっとこれは……と思う人もいますけれどね。生きている事に飽きたとか、試験に失敗したとか」

「へえ……。幸せな国だなあ」

リージェスは感心とも皮肉ともつかぬ顔をした。

「私もそう思います。ですが、不幸の形なんてそれぞれなんです。大きな不幸をも跳ね返す鋼のような心を持つ人もいれば、小さな不幸で壊れてしまうガラスのような心を持つ人もいる。それは肉体的な個性と一緒だと思うんですよ」

「それは同感。でもさ、小さな不幸で自殺しよう、なんていう奴は世界を知らないからだと思うんだ」

「世界？」

「酷な言い方をするなら、本当の不幸を知らないから自殺する奴が多いんじゃないか」

「……中々辛辣しんらつな意見ですね」

「想像力が足りない、と言ってもいいのかな。世に無数にある不幸の中で、これは自殺するに値する、もつと言うと人を一人殺めるに値する出来事なのか。それを省みようとしてもしない人たちには、同情するのは難しいね」

「なるほど。納得できない部分も少々ありますが、一理あるかもしれません」

そんな話から、メイスオブフォレスト迷宮の森の方に話が及ぶと、やはり宿の主人の口は止まらなくなった。主人は時には身振り手振りを交え、時には溜めを作って話の部分部分を際立たせた。

「メイスオブフォレスト」

「迷宮の森の中にも、街道沿いに休憩や宿泊に使える簡素な丸太小屋が五、六か所程あります。街道を恙無く進んでいけば四、五日程でカタルスタに着きますが、先程も申しました通り、森の中では絶対に道を逸れてはいけません。もしも足を踏み入れたら、まず出て来れなくなりそうですよ。同じような木がたくさんあつて非常に迷いやすい森ですし、先ほども言いましたように、凶悪な魔物がいるという話ですから。事実として、遊び半分、面白半分で森の中に入った人が戻つてこなかった例は数知れません。後から家族の方がきて、「どうして止めてくれなかったのよっ」と詰なられたことすらあります」

顔を引き攣らせて怪談を語らうかのような口調で宿の主人は忠告してきたが、そういう事を言われると、本当に出て来れなくなるかちよつと試してみたくなるのは人の性サガだろうか。

少しばかり好奇心をくすぐられた二人だったが、敢えて火中の栗を拾うような愚を侵すつもりはなかった。こと、旅においては地元の人の忠言は聞くものである、という事を二人は身に沁みていたはずだった。

森に入ると街道の道幅はやや狭くなつたが、土道や砂利道になるといった事はなく、しっかりとした石作りの道がずつと先まで進んでいる。道を進んでいくと、時折カタルスタ側から来る馬車や人とすれ違うこともあるし、逆にカタルスタ方面へ行く馬車に追い抜かれることもある。

少し気になる事と言えば、森の中の街道ではやたらとカーブが多く、直線距離で向かうよりもかなり遠回りであるし、東南西北見渡しても木々しかない、という事だった。その路傍には芝生が横幅3m程、街道を挟むように植えられており、その外側に数多の木が、まるで街道を森から覆い隠すように茂っている。

宿の主人の話では二日ほどで抜けられるという事だったが、あまりにも変わり映えしない景色に暇を持て余したのだろう。リーシエは珍しい動植物がないかと、歩きながらしきりに周囲に視線を巡らせる。

「落ち着きがないぞ、リーシエ。少し辛抱しろ」

リーシエはリージエスに窘められても気にする様子はない。

「そんなのわかってるけどさ。何かしてないとやっぱ退屈じゃない。あ、石碑みつけ」

リージエスは声に釣られてリーシエの視線の先に目を向ける。たくさん太い木の幹の隙間から、高さ3m程の細長い石柱が建っているのがチラッと見えた。距離にして、自分達の所からは20m程離れているだろうか。石の表面は、研かれているわけではなく所々角ばっており、小さな面がいくつも見受けられる、如何にも石材から切り出したまま、といった風合いの石である。おそらくはいつかの商人が言っていた、魔石を発動させる類のものだろう。

「ふーん、森の中にもああいったのがあるって事は
「事は？」

「ちよつとなら入っても大丈夫だって事かしら」

リージエスは顔をやおら険しくする。顔色が変わったのを見て、リーシエは慌てて両手の平をリージエスに差し出すようにして手を振った。

「じよ、冗談よ。怖い顔しないでよ」

どうだか、とリージエスは視線を逸らした。

歩いていて四時間ほども経っただろうか。一つ目の休憩所を過ぎた辺りで突如、二人の前を何かが右から左へと横切った。一瞬野鳥

の類かと思った二人が咄嗟とっさに目で追うと、芝生を隔てた所にある太い木の幹に、やたらに耳の長いハムスターらしきものが短い四本の足を目いっぱい伸ばしてへばり付いていた。体長は見た限りではおそらく10cm前後、パツチリとした大きな黒目と長い耳が忙しく動いている。丸みのある身体全体が金に近い栗色の長い体毛に覆われ、しきりに身を震わせている。

リーシエは声を上擦らせて感激している。

「か、可愛いいいいつ。何これっ、何これっ」

ふわふわの柔らかそうな小動物に目のないリーシエは即座に喰いついた。リージェスの目から見ても、確かにその姿は愛くるしいものがある。

「こんな動物、今まで見た事もないな。モモンガの突然変異か？」

そう言っている間にも、リーシエは目を輝かせながら小動物の方へ歩み寄る。

「捕まえられるかも……」

「おいおい……捕まえてどうするんだ。まさか飼う気じゃないだろうな」

「大丈夫だつてば。これくらいちっちゃかったら、きっとポケットにも入るよ」

そういう問題じゃないだろ、とリージェスが言いかけた時にはリーシエは両手をバツと木の幹に押し付けていた。リーシエの動きは流石に俊敏だったが、野生の勘が働いたか、辛うじてその小動物は難を逃れて少し奥まった木に飛び移った。

「惜しいっ、指先に触ったのに……」

リーシエは舌打ちをした。

「お前なあ。万が一、飼っているうちにでっかくなっちゃったらどうするんだ。って」

リーシエは既に森に足を踏み入れている。芝から10m程奥に入
って、別の木の幹に止まっていた小動物を捕らえようとしていた。
「リーシエッ。森に入るなって言っただろっ。いい加減にしないと
本気で怒るぞ」

リーシエは声を潜めながらも言い返す。

「大声出さないで、逃げちやうでしょ」

リージェスが聞き分けのないリーシエに堪えかねて森に足を踏み
入れたその時

「……っ、わわっ」

突如、リーシエは悲鳴と共にリージェスの目の前から姿を消した。

「……っ、おいっ」

リージェスは躊躇ためらう事なく、リーシエのいた位置に疾走し、足を
止める。そこからはかなり急な下り傾斜になっていた。小動物はリ
ーシエの悲鳴に驚いたのか、既に何処かに姿を消していた。

「……ごめん、足滑らしちゃった」

リーシエがかなり下の方から声を張り上げる。敷きつめられてい
る枯葉の下の地面に緑がかった苔が生えている。どうやら、それに
足を滑らせて下まで転げ落ちたらしい。リージェスは心底呆れなが
らも、短い距離を滑るように下りては止まり、また滑るようにして
慎重に傾斜を下りていく。程なく、木の幹にしがみ付きながらも立
ち上がりかけているリーシエを見つける。

特に怪我をしていないのを確認して安堵すると共に、沸々と怒り
が沸いてくる。口を真一文字に結んだリージェスはリーシエをキッ
と睨む。

「……っ、ごめん、リージェ」

「……とつとと街道に戻るぞ。……説教はそれからだ」

二の句を継がせぬリージェスの？説教？という言葉に反応し、リーシェはぶるりと身を震わせる。

二人は下ってきた坂を引き返す。鞘に収まっている剣を杖代わりにして傾斜に突き立ててから、足を滑らせぬよう慎重に上って行く。鬱陶しくも足に湿った枯葉が纏わりつき、踏み出す度にザツザと音が鳴る。リーシェはかなり落ち込んでいるようで、口を嚙みながら俯いているが、腹に据えかねているリージェスは声をかけようともしない。

異変に気付いたのは、少ししてからだった。滑り落ちたのはせいぜい30m、多く見積もっても50m程だったはずなのに、数分間休みなく傾斜を上っても街道に辿り着かなかった。

「……おかしいな。そんなに距離は離れていなかったはずだが」
リージェスは自分に言い聞かせるように呟く。沈黙が破られた事で少し気を取り直したのか、リーシェが口を開く。

「だ、だよー。思ったより時間が」
リージェスはやおら目を細めてリーシェに視線を送る。
「時間が、うう……」

リーシェはリージェスの冷たい視線であっさりと凋しむ。どうやらリージェスの怒りは一筋縄では治まらぬようだ。

(しかし、未だ稜線すらも見えないのは何故だ?)

リージェスは訝りながらも、リーシェが付いて来ているのを時折確認しながら傾斜を登っていく。ややあって、やっと稜線が見えた。リージェスは安堵して傾斜を登りきったその瞬間、顔色を変える。

(……何)

立ち竦んでいるリージェスを不思議そうに見ながら、リーシエも上りきり、目を瞠る。

「……街道が……なくなってる」

リーシエの驚嘆がはつきり頭に響き、リージェスは宿の主人の言葉を脳裏に反芻はんすうしていた。

自分のしでかした不始末にバツが悪くなったのか、リーシエは俯きながら上目遣いに傍らにいるリージェスの顔を窺うようにして言葉待つ。ものの十数秒間、沈黙が流れ、結局リーシエは堪え切れずに弁解を口にする。

おかしいね、道からそんなには離れてない筈なんだけどね、とか言い訳がましい事を口にするリーシエにリージェスは二、三言。

「……馬うま、……鹿しか、……野郎おとこ」

「……うつつ、一言、馬鹿野郎つてはつきり言ってくれた方が……」
リーシエは目を潤ませながら頂垂うなだれ、落涙した。50m進んで50m戻る、その単純な作業は見事に失敗に終わった。つまるところ、二人は街道に戻れなくなっていた。

下り傾斜から二十歩ほども進んだところで、街道はどっちの方角だろう、とリージェスは辺りを見回してみる。周りの木は栗や団栗どんぐり、それに胡桃くるみの木等、実のなる落葉高木が多かった。秋になればさぞ美味しい実がなるだろうと思いつつも、ほぼ等間隔で並んでいるその木を見れば見るほど、方向感覚がどんどん失われていく。

「こつという時はつと」

リージェスは辺りを見回し、上まで登れそうな程大きく、枝の太い木を探し始める。少しして適当な上りやすそうな木を見つけ、リージェスは背負っていた革袋を地面に置いてから、一番下にあった

太い木の枝に飛び上がった手をかけ、くるりと逆上がりし、枝上に降り立つと下にいるリーシエを見る。

「方角を確認してくる。ちょっとそこで待ってる。戻ってくるまで絶対動くなよ」

先程の事があったからだろう、語調を強めてリージエスは言い放った。

「わ、わかった。リージエス、気を付けてね」

「あいあい」

リーシエの声に生返事しながら、リージエスは腰ほどの高さにある枝を選び、足をかける。枝に負荷を掛け過ぎないように、なるべく幹に身体を預けるようにして、視界に入った太い枝を選びつつ、上へ、上へと登っていく。五階建てくらいの建物の高さまで辿り着くと、リージエスは天井に位置する、葉が茂っている細い枝を両手で掻い潜る様にして上にひょこつと顔を出す。

「おおっ」

辺りは見渡す限りの深緑の絨毯だ。リージエスはもしやカタルスタの街が見えるか、と西の方角に目を移すが、何故か天気は悪くないのに霧とも靄とも付かない物がやたら立ちこめていて、明らかに視界が宜しくない。

リージエスは、近くにあるはずの緑の絨毯の切れ目を探し始める。街道からはちゃんと空が見えたから、必ず切れ目はあるはずだった。暫くして、やっとそれを視界に捉える。

「え」

全身が総毛立った。リーシエの言う通り、せいぜい街道から、多く見積もっても50m以内の距離しか離れてないはずだったのに、その切れ目は遙か先、立ち込める靄の中で辛うじて見える、4、5

00mくらい奥にあったのだ。目の錯覚だろうか、街道がどんどん遠ざかっている気すらした。

リージェスはどうするか迷った。正攻法で進むならば街道があるはずのあの切れ目を目指して突き進めば良いはずなのだが、何やら予感めいたモノが待ったをかける。長年旅して培^{つちか}ってきた勘とも言^うべきものが警鐘を鳴らしているのだ。

— 先ずはリーシェと相談だな、とリージェスは切れ目の方角を一目見て、その方角を頭にインプットすると、するすると木を下りる。

「待たせたな、リーシェ　っ」

ドクンツと大きく心臓が弾けるように脈打った。先程まで木の下にいたはずのリーシェがどこにもいない。リージェスの荷物すらなく、あるのは枯葉と枯れ枝の敷きつめられた大地のみ。覚えたばかりの街道の方角の記憶が即座に手放される。

「……おい、リーシェ。トイレかー？」

その声は森の中に微かな反響を残して吸い込まれていく。やはり返事がない。リージェスは精神を集中し、リーシェがまだ近くにいるか気配を探ってみる。リージェスのこの特異な力は、おおよそ半径50mくらいの距離までなら把握できるはずなのだが、少なくともその圏内にはいないようだ。

(何だこれ……)

いくら脳味噌が御花畑でも、何の理由もなくリーシェが自ら俺と離れるという事は今までの経験からして有り得ない。そもそもこうなったのはあいつ自身の不始末だし、多少責めた所で不貞腐^{ふせく}れていなくなるとも思えない。

もし、俺が木に登っている間、リーシエの奴が全くその場から動かなかつたと仮定して、俺が下りてきたら居なかつた、と言う事が有り得るのだろうか。

(この森、どうなってる)
考える。早い所解答を得なければ

宿の主人が口にした、魔獣の話をはたと思い出す。勿論、リーシエは相当強い。そんな事は嫌というほどわかつている。それでも不安を拭いきれないのは、彼女を信じ切れていないからだろうか。リージエスは自分の血が逆流しているのを感じていた。

一方リーシエはその頃、大人しく座って木の上を見ていた。
(リージエス遅いな)

何やってるんだろ、珍しい物でも見つけたのかな。それとも、よっぽど景色がいいのかな。そんな事を想像しながらも頻繁に上に視線を送る。二、三分して、少し首が疲れてくる。少し横に首を回しながら、再び頭上を見上げる。

(あれ……?)
微かな違和感。見上げている木の幹が先程より若干細くなっているように感じたのだ。だが、自分はその場から一步も動いていないし、座っている位置から一番近くの木にリージエスが登ったのも間違いない。気のせいだろう、と上を向いていた。

更に五分ほども過ぎただろうか。流星に遅すぎる、とリーシエは

少し不安になり、下から呼び掛けてみる。

「リージェスー、何やってるのー」

しかし、呼び掛けた声に返事は来ない。パチパチと瞬きを忙しなく繰り返す、もう一度リーシェはリージェスの名を呼ぶ。不安が声に出たのか、今度は自分でも驚くほど大きい声が出た。

やはり反応なし。こうなれば登ってみるしかない、とリーシェは溜息をついて木を登り始める。木に手をかけるまで、それでもリージェスの質の悪い冗談だろうという淡い期待がリーシェの中にはまだ残っていた。細い枝にロングスカート裾が何度か引つ掛かるが剥がしつっ進んで行く。

ところが、真ん中くらいまで登ったところでとんでもない事実気付く。リージェスは確かに、周りで一番大きい、登りやすそうな木を選んだはず。なのに、その木は周りの木より背丈が低く、枝も細かった。これ以上は足場となる枝が細すぎて登れそうもない。

「……………うそ」

リージェスが登ったのは、この木じゃない。その事実には愕然とし、身体が小刻みにカタカタ震え始め、それを両腕で思わず抑える。周りを見ても、同じような木が一杯あるだけだ。いつの間に、木を取り違えたのか全く分からなかった。

「リージェースッ」

リーシェは大きく息を吸い込み、辺り一帯に届くような力の限り叫んだ。体の震えが伝染していたその声は、むなしく森の奥へと消えていった。

(だ、駄目だ、落ち着かなきゃ)

おもむろにリーシェは自分の頬を両掌でパンと叩く。少し赤みが

差した頬を引き締め、再び慎重に地上に戻る。

だがしかし、リーシエは再び驚愕する羽目になった。木に立てかけておいた革袋がなくなっていたのだ。慌てて辺りを見回すが、それらしきものはどこにもない。そう言えば、と視線を巡らせればリージェスの放り出したはずの革袋もなくなっている。

軽い頭痛がリーシエを襲ったが、ブンブンと頭を振り払う。元々自分の撒いた種だ。これくらい一人で乗り切れなくてどうする。もう、あの時の私とは違うのだ。リーシエはゆっくりと目を閉じる。

大きく何度も深呼吸して、身体の震えを止める。幸い飲み水は手元にあるし、これほど実を付ける木が生えているのだから、じきに雨も降るだろう。

そして、自分に今出来る最善の行動を考え、瞬時に答えが出る。自分の力でこの森を脱出し、カタルスタへ辿り着けばいい。そうすればリージェスにまた会える。単純明快だ。

これから先もリージェスに付いていくためには、もっと遅しくならなければならない。密かな決意を胸に秘めて、リーシエは暗い森の奥へと一步を踏み出した。

其の二十三　　脱出（裏）

884年　2月19日

リージェスは、先程まで自分が登っていた木に寄りかかりながら、今自分に出来る最善の事が何かを考えていた。広大な森の中、単独で一人の人間を探し出す、というのはとても現実的ではない。少なくとも何人か応援が必要になる。いずれにしても、一度この森を抜けなければならぬだろう。

リーシェを一人で放置して大丈夫か、と自問自答すると少々不安は残るが、自然の中での生存術は一通り身に付けさせている。幼い頃の印象が強く、やたらと不安が鎌首をもたげてくるが、普通に考えればリーシェは妙に人懐っこい所を除けば相当に逞しい。十人程度の帝国兵を即、物言わぬ肉塊に変えられるくらいには。

少なくとも帝国領の街に一人でいさせるよりはこの森の方が幾分安全だと思われた。真に恐れるべきは人の心の醜さか、とひとりごちる。

ふと視線を彷徨わせると、やはり先程と景色が違っているように思える。身体の向きは変えていないはずなのに、リージェスから見て正面にある木々の隙間が明らかに狭くなっていた。何かしらの理由で自分か地面かが動いている事はほぼ間違いなく、同時にやはりリーシェは自分から遠ざかったのではなく、遠ざけられたのだと確信する。自分が放りだした革袋までもがなくなっている事から、まず間違いなくないだろう。

視覚を惑わす幻術魔法の類かとも考えたが、それならリージェスが木から下りて気配を探った時に、リーシェの気配に気づいたはず

である。あの数分の間にはリーシェが索敵範囲外にいた事は疑いない。一つだけ気になる点と言えば、僅か数分でそれだけの距離を地面が動いていたなら、自分かリーシェかが、それに気付き得たのではないか、という事だ。しかし、こうして立っていても特に揺れを感じない事はない。

(しょうがない、何はともあれ街道に出ないと)

おそらく、カタルスタに行けばこの森の仕組みについてもわかるだろう。当てもなくこのただっ広い森を彷徨ってリーシェを探すよりは、そちらの方がずっと早いはずだ。リージェスは、もたれ掛かっていた木から「よっ」と身を離し、尻に付いた枯れ葉をパンパンと払って歩き始める。

884年2月23日

四日目、朝日が昇って間もなく辺りは急激に暗くなり、ややあつてしとしとと雨が降ってくる。チビチビと大事に飲んでいた竹筒に入っている飲料水をグビっと一気に飲み干す。近くに生えていた、大きくて葉肉が厚い葉っぱの真ん中に小さな穴を開け、回りを湾曲させて水受けを作り、竹筒を立ててその上に葉を置く。葉に落ちた幾多の雫は中央に寄り集まり、開いた穴から竹筒へと恙無つつがなく流れていく。程なくして満タンになった所でそれをもう一度飲み干す。

「ふい〜」

喉の渴きを潤し、リージェスは再び水を竹筒に溜める。竹筒が水で一杯になると栓をしてポケットにしまう。おもむろに立ち上がり、

コートのポケットから宿で購入した魔石を取り出し、風の膜を発生させて雨を凌ぐ。

未だ森から出ることはできていなかったリージェスだが、今のところは小動物にしか遭遇していなかったので少し安心していた。どうやら魔獣とやらはいたとしても数が少ないらしい。リーシェの方も滅多な事では遭遇するまい。

（リーシェの奴は、大丈夫かな）

リーシェは魔石を持っていないが、雨宿りする場所は探せば見つかる。頭上に視線を走らせれば茂みに覆われて空が断片的にしか見えない所も多く、大きい木の下なら問題なく雨露を凌げるだろう。濡れて風邪をひかないかがちょっと心配だったが、杞憂に終わりそうだ。

二、三日でスパツと森を出れるかと楽観的に考え、闇雲に歩いていたリージェスだったが、正直かなり苦戦していた。木々は2m間隔くらいで、しかし無数に生えていて、どの方角を見ても同じ景色に見える。磁石があれば、とも思ったが、確かリーシェの革袋の中に入っていた。無い袖は振れない。

「早く出ないとな……」

独り言を呟きながらリージェスは剣を抜き、目印を付けようと、木の幹に数字を付けながら歩く事にした。それを見ればどうやって移動しているのか、法則がわかるかもしれないからである。

（悪いな、傷つけちゃって）

心の中で木に詫びつつ、歩いていくごとに印を付け

スカッ

突如、剣が木を素通りする。リージェスはもう一度目の前にあるはずの木に剣を当てようとす。しかし、剣の刃は木に当たること

なくすり抜けた。

(……これは幻術か)

本物の木と偽物の木があるという事に気付き、リージェスは足を止める。徐々にこの森のからくりがわかってきた気がした。初日に木の上に登った時、明らかに狂っていた距離感の事を思い出す。街道から50m程進んだだけで、木の上からは400m相当離れていたように見えた。

(強制的な位置移動と目の錯覚、複合の罠ってわけか)

どうやら、周りにある等間隔の木々には幻術で作られた物も混じっているらしい。不覚にも、リージェスは初日に幻術の可能性を捨ててしまっていた。どちらかに気付くと、もう片方の仕掛けに気付かないまま深みに嵌りこむわけである。質が悪いな、と思いつつも、リージェスは何だか胸がウキウキしてきたのを感じる。

(よし、そうとわかればこんな所からはおさらばだっ)

リージェスは再び剣を持ち、印をつけながら威勢良く森を歩き出した。

884年 2月28日

九日目、何か見えたような気がして近づいたら、見たくない物を見ってしまう。太い木の枝には青い布が輪っかになる様に掛けられていて、骸骨がその下に横たわっている。更にその下には骸骨が来ていたと思われる服の残骸が見て取れた。おそらくは、自殺を計ったのだろう。いつ亡くなったのかはわからないが、かかっていた布が相当汚れていて、骨を覆っているはずの肉が綺麗さっぱりなくなっている所を見ると、結構時は経っているようだ。頭蓋骨の

大きさからすると女性のようだ。

親だつて、何もこんな終わり方をさせるためにあんたを生んだわけじゃないだろうに、と、心の内で言いながら、リージエスはその手を合わせ、目を閉じ、黙祷する。

884年3月4日

十三日目、近くにいた小狸を捕まえ、息の根を止めると火を起こして丸焼きにする。リーシエはちゃんと食事を取っているだろうか、何度となく胸に不安が立ち込める。

(……うつむ)

水分も食料も補給しつつ、休みもすっかり取っているため、殆ど疲れていなかったリージエスだが、未だ森から出られていない事に対しては、やや自信を喪失していた。経過した日数分の線を木に印していたリージエスだったが、今は六日目につけた印の位置に戻っていた。

(歩き方の問題なのか、それとも)

これだけ印を付けていれば、体力に問題がない以上じきに外に出られるだろうが、未だ何か引つかかっているのが癢しやくだった。

(考えていてもしょうがない、今度はこっちの方に行ってみよう)

腹はらごしらえを終えた後、リージエスは六日前の時とは向かう方角を変えてみる。暫く木に印を付けながら歩いていたが、何故か急に空振りが、つまりは幻術の割合が多くなってくる。

(これはもしかすると……)

逸はなる気持ちを抑えながら、リージエスは木の幹の存在を確かめな

がら先へ先へと進む、そして、緩やかな下り傾斜の先に、落ち葉や枯れ枝ではない、鮮やかな芝生が目に入ってくる。

リージェスは思わず駆けだした。真つ直ぐ走っているつもりなのに、何だかズレて来ている気がしないでもないが、それでも芝生はみるみる近づき、数多の木々を追い抜き、段々と視界が開けてくる。やっこのことで、リージェスは森の切れ目となる木々の隙間を通り抜けた。

(あれ、街道じゃないぞ……)

見渡す限りの野原だった。足首が埋まるくらいの長さの、緑鮮やかな芝生の絨毯が、遠くに見える山の麓まで敷かれている。どうやらもう夕方らしく、山々の稜線を舐める様にして、太陽が辺り一帯を茜色に照らしている。薄雲がその光を纏い、いつもより輪郭と影をくつきり浮き立たせている。強い西風が芝生を撫で、こちら側へゆらゆらと傳かすっている。

リージェスは森で迷った初日の記憶を辿る。リーシェが小動物を追って森に入ったのはカタルスタの方に向かって左側、つまり街道の南側である。太陽の沈む方角は西だから、間違いなくこちらはカタルスタ側だ。つまり、北に向かえば街道に、ひいてはカタルスタに辿り着く。

何となく、リージェスは今まで自分のいた森を振り返ってみる。

森の木々はまるで生き物のようにざわめいているように見えた。緑色が目にいいと聞いたことがあるが、あれはきつと嘘だと思った。見ているだけで目がしょぼついてきたので、リージェスは目をパチパチと瞬またたいた。

ともかくにも、森を抜けられた事に変わりはない。リージェスは、カタルスタへ向かうべく北へと走っていく。日が完全に沈む頃

には歩いてきた街道に突き当たり、一息付く事もなく一路カタルスタへ疾走していく。石道を踏みしめる感触がどこか懐かしかった。

884 年3月5日

徹夜で走り通したリージェスは翌朝、魔道王国カタルスタの首都へと辿り着いた。城門の手前には、大きくて深い堀にかかる跳ね橋があったが既に降ろされていた。分厚い木板と鉄の金具で作られた跳ね橋を渡っていくと、大体10m程の高さの白塗りの防護壁の下部には横長の長方形の穴が横一列にあり、その穴からは透きとおった水が堀へと流れ出ている。

リージェスは防護壁に囲まれた門に向かって、息を整えながらゆっくりと歩いていく。飲まず食わずで半日以上走ってきて、流石に体力が限界に近い。まずは少しでも休憩しなければと思い、宿を探そうと思いつく。

橋を半分ほど渡り終えたところで、革袋の中に入れていた金と着替えの事を思い出し、顔が引き攣るが、それと同時にポケットの中に幾ばくの金が入っている財布がある事を思い出して安堵する。

城門の両脇には門番の兵が一人ずついたが、近づいてくるリージェスを見て何故か二人は顔を見合わせ、近寄ってくる。丁度良い、最寄の宿の位置を聞いておかなきゃ、とリージェスは足を止めて待ち構える。

二人の門番はリージェスの二、三メートル手前でウツという顔をして立ち止まり、鼻を摘む。リージェスは怪訝な表情を浮かべ、直ぐになるほど、と納得する。自分は二週間近くも風呂に入っていない

いし着替えもしていない。相当に臭うのは当たり前だ。もしかして浮浪者はお断りか、とリージェスは顔をしかめるが、次の瞬間、予想だにしなければならなかった事を言われる。

「おはようございます。貴方……リージェスさん、でお間違いないありませんか」

何故、俺の名前を知っているんだ。

「……そうだけれど」

目をパチクリさせているリージェスの返答を聞いて門番の二人は若干表情を緩める。しかし鼻を摘まみながらなので少々滑稽な顔になる。

「良かった。尋ね人の人相書きに似ていたので、もしやと思ったんです」

顔の筋肉が強張るのがわかった。

鼻を摘まんだまま、門番はくぐもった声で続ける。

「妹さんが？マーチ亭」という宿に滞在しておられますので」

リージェスは目を見開いたまま、ずいっと門番に顔を近づける。

「リーシェがいるのか。どこだ、無事なのか」

鼻を摘まんだまま、ぎりぎりまで顔を近づけられた門番は半ば息を止めながら言う。

「ええ、そおです。一週間以上前からいらっしやいます」

（何だって）

はたとリージェスの動きが止まり、門番はリージェスより発せられる臭気から逃れるべく、若干後ずさりながらハア、ハア、と呼吸

を整える。

全く失礼な

いや、失礼なのは俺の臭いの方が。

それにしても、先を越された……？ 俺が……あのリーシエに？
しかも一週間も……まさか、俺を出し抜いて直ぐ森を出れたって
事か？

浮かび上がる疑問、疑問、疑問。

「あ、あちらの広場に宿への案内板がございますのでご確認をお願い
します。それから、流石にその状態で街に入られますと、その、
あれですので、屯所で湯浴みしていただくさいね」

呆ぼんけているリージエに、門番はくぐもった声で言った。

其の二十四 く噛み合わぬ双子（裏）く

884年 3月5日

城門に門番を一人残し、もう一人の兵士に屯所へと招かれたリーシエは、玄關に入る前に靴を脱ぎ、続いて靴下を脱ぐ。流石に不潔な足そのままひたままで他人様の御宅にズカズカ上がる事が出来るほど無神経ではない。いつの間に親指に穴のあいていた靴下は、己でも自覚できる程にえもいわれぬかぐわしい匂いを放っている。先に室内に入っていた兵士に水の入った洗面器とタオルを貰い、念入りに足を拭く。

入れ替わりに、室内にいた別の兵士がリージエをちらつと見てから出ていく。おそらく勤務時間外だろうに、少々悪い事をしたなと心の中で詫びながら、リージエはその背中を見送った。

板の間に行くと、奥にある浴室に誘われる。少しでも室内で佇むと爽やかな木造家屋が打ち捨てられた廃屋のようになりかねないので、リージエは早足で浴室に入り、扉を閉めた。

二人入るにはちよつと手狭な浴室で、リージエは蛇口を捻る。久方振りの水の冷たさは、暫しの間身体を委縮させるが、段々と冷たさが和らいで来ると心が解き放たれていく。髪を触ってみると手入れを怠っていたためか頑固な枝毛へと変質しており、リージエは傍らにあった髪用石鹸シャンプーを泡立てて、ゆっくりと、念入りに髪の毛を解き解すほぐ。

タオルを体に何度か擦り付けると、古い皮膚がどんどん剥がされていき、下に新しい皮膚が顔を出す。色が薄くて潤いのある皮膚を見て、リージエはどこか充足感を得ながらも、いつだったか、海

で長時間日焼けした後の地獄の苦しみを思い出した。

足先から頬にいたるまで満遍なく垢を擦り落とし、幾分肌の白くなったリージェスは再び蛇口を捻り、机にへばりつく消しゴムのカスのように、身体にこびりついていた垢をシャワーで流していく。タイルの張られた浴室の床が一瞬黒ずんだ水で覆われ、再び元に戻る。

浴室を出ると、既に足元には足拭き用の布が置いてあった。水滴したたるリージェスは、兵士の気配りに感謝しながらその布へと降り立つ。乾いたタオルで長い蒼髪を挟むようにして水気を取り、身体周りを拭く。傍らに置いてある籠の中を見ると、お古の服に混じって、ご丁寧に新品の下着が置いてある。その至れり尽くせり振りに、大袈裟に言えば感極まつたリージェスは、兵士のいる部屋の方角を拝んでから服を身に纏っていく。それは一般人が普段着に着るような、長袖の白い平凡な服だったが、悪臭を放っていた服に比べれば天女の衣に等しい着心地だった。

脱衣するための仕切り用のベージュのカーテンがシャツと鋭い音を立てて片側に束ねられ、背もたれのある椅子に座っていた兵士は反射的にそちらを見つめ、硬直した。さっぱりとした女性に見紛う美少年の様相を取り戻したリージェスを、兵士はまじまじと見つめている。

「何から何までありがとうございます。洋服のお金は払わせてください」

リージェスの言葉を末尾まで聞き、その姿に見入っていた兵士はおもむろに立ち上がって姿勢を但し、苦笑いを浮かべる。

「いえいえ。そんな大層なものではありませんから受け取れませんよ。洋服にしたって古着ですから」

「しかし……」

申し訳なさそうな表情をしているリージェスを見て、兵士は微笑みを漏らす。言葉遣いはぶっきらぼうだが、若いながらも心根はしっかりしている。こういう気遣いが出来ない人だと、確かに貰いたくもなってしまうのだが。

「これはあくまで仕事の領分ですから。ちゃんとお給料は頂いていますし、お気持ちだけ受け取っておきますよ」

「そうですか、では御言葉に甘えさせていただきます」

リージェスは大仰にならない程度に礼をする。

(このコートは……捨てるのかなさそうだな……)

変わり果てた愛用のグレーのトレンチコートを指で摘まむ。買ってまだ一カ月そこそこしか経ってないのに、あちらこちらに血のシミはあるわ、思わず顔を背けたくなる臭いが漂ってくるわ、よくよく見れば襟元に小さな茸まで生えて

(うああ、見るんじゃなかった)

俺ってあまり良い使用者じゃなかったな、とリージェスは顔をしかめる。如何に素材が良くて高い服とはいえ、手入れもせずに二週間放置していればこうなる。怪しげな茸まで自家栽培しては、もはや洗濯しても手遅れである。

リージェスは仕方なく、コートのポケットに詰め込んでいた財布、その他細々とした物を全て出し、新しい服のポケットに移した。

兵士に使わない大きな包み紙を貰い、太めのペンを借りる。？燃えるゴミ？と大きく書いて、その真ん中に今まで着ていた物を全て押し詰めて口を閉じる。すると、未だ残っていた臭気が徐々に収まってくる。ふと？燃えるゴミ？というより？生ゴミ？の方が適切だ

ったかな、と反省する。

「捨てる場所、ありますか？」

リージェスの問いに兵士は頷き、屯所を出てそう遠くない場所にゴミ捨て場がある事を説明した。遠まわしに言えば、室内では捨てて欲しくないという事である。全くもって当然だが。

「色々ありがとう、お世話になりました」

兵士に礼を言うと、リージェスは屯所を後にし、内側の城壁沿いにあるゴミ捨て場に行く。家庭ゴミの山の麓^{ふもと}あたりに服を捨ててから、広場にあるという宿の案内板に向かう。

再び広場に出てきたリージェスは、暖かな陽光に照らされながら門番達の言っていた宿の案内板を探す。大きな円形の広場には、既然大勢の人が行き交い、街は喧騒を帯びてきている。時計を見るのを失念していたが、太陽の位置からするとどうやら仕事始めの時間帯のようだ。時計回りに流れる人の列を割る様にして、リージェスは中央の方へと移動しながらも視線を巡らす。直ぐにローブを身に纏う魔法使いの姿をした小さなモニュメントの脇に案内板を見つけ、即座に駆け寄っていく。

(マーチ亭、……あつた)

案内板の周りにはそんなに人はいなかったため、遠目からでもリージェスの泊まっている宿の位置を確認できた。広場の中央から見て先程いた屯所とほぼ反対側の位置にその名前を見つけたリージェスは、早速そちらの方へと走り始める。

うねる様な道を進み、途切れ途切れの二、三段の階段を何回か上る。ふいにリージェスは足を止め、この辺りのはずだが、と周囲を

見回すと、正方形の建物に白壁に四角い窓、外観に全く面白みの見受けられない建物に、看板らしきものを発見する。

紛れもなく、二階の高さからぶら下げたある看板にはマーチ亭と書いてある。門前を通り、身体の向きを変えるとガラス扉が視界に入り、その扉の向こうには、玄関で腰を下ろしていそいそと靴を履いている黒髪の女性がいた。

僅かな間、安堵が心を埋め尽くし、その次にはどんな顔をすればいいのやら、と思いつながら、笑いともしかめ面ともつかない表情を浮かべ、リージェスはガラス扉を引いた。微かにキィ、という甲高い音となり、リーシェは顔をゆっくり上げる。

「……リージェス？」

まさかこちらからやってくるとは思わなかったのだろう。リージェスを一目見てポカンとした顔をし、リーシェは靴を片方しか履かないままに立ちつくした。心なしか目が充血している。

「いやー、まいった。まさかお前の方が早く出てくるとはなあ」
ポリポリと頭をかきながら、リージェスは照れ臭そうに笑う。

「……本当、リージェスだね。……良かった」
リーシェの目尻からポロリ、と涙が一滴零れ、石床に小さな水溜りを作る。次の瞬間、リーシェは長い黒髪を振り乱してリージェスの胸に飛び込んで来た。強かに胸を打たれ、リージェスはケホツと咳き込む。

「う……、うううう」

「ああ、ちよつと待った。こんな所で泣くなよ、な」

一目を憚らずに抱き付き、号泣しかけているリーシェを、リージ

エスは何とか宥^{なだ}めすかせる。泣かれる程心配されていた事に対しては幾分複雑な心境だったが、こんな所では宿に迷惑がかかるから、とリーシエの肩を抱く様にして泊まっている部屋へと案内させる。

部屋の扉を閉めて二人が椅子に座り、小さくてやや背の高い、丸い木製のテーブルを隔てて向かい合つと、ベソをかいていたリーシエは、少ししゃくりながらもリージエスを問い詰める。

「今まで……どこで何……やってたのよっ」

やや非難めいた調子を含むリーシエの疑問に、リージエスの頭には逆に疑問が浮かぶ。そりゃあ、あの森にいたに決まっている。

「そりゃあ、あの森にいたに決まっている」

頭に浮かんだ事をそのまま答えたリージエスは、何故そんな当たり前の事を聞くのか、と若干苛立っていた。きっと疲れているせいだろう。

その言葉に泣くのをやめ、袖でゴシゴシと目を擦ったリーシエはじつとこちらを見る。目が真っ赤に充血しているのを見て、心がチクリと痛む。

「……何で？　もしかして私を……探してたの？」

（探してた？）

要領を得ない質問に、リージエスは曖昧に頷く。

「いや、そりゃ森を抜けるついでに運良く見つければいいな、程度には思っていたけど」

リーシエは泣き腫らした赤い目でじつとリージエスを睨^ねめつけていたが、話が噛み合っていないと感じたのか、ふいに首を横に傾げる。

「……………」
「……………」
釣られてリージェスも。

ややあつて首の角度を元に戻し、リーシェは少し落ち着きを取り戻したのか、たどたどしく口を開く。

「今まで……………森で何やってたの？」

エンドレス。……………いや、若干進捗しんちょくしていない事もない。ちやんと？どこで？の部分が埋まっている。しかし、何をやってたかって、判り切っている事を何故聞くのだろう。

ふいに認めたくない事実を思い出し、リージェスはテーブルに頬杖を付いて慥然ぶぜんと言い放つ。

「だから、彷徨さまよっていたんだよ。あの森から出るにすられず」

リーシェは予想外の返答に目を見開き、どこぞの奥様が「あらまあ」とでも言いそうな所作で口に手の平を当てた。リージェスは顔が少しずつ熱を帯びていくのを感じていた。

「ああ、そうだよ。俺はこの……………一週間くらいか。その間ずーっーと森を出られなかったんだ。……………悪かったな」

不貞腐ふてくれた様に、リージェスはプイッとそつぽを向く。

笑いたければ笑うがいい。……………でも、笑わないでくれると少しポイント高いかもしれないぞ、リーシェ。そんな事を心中で独白しつつ、チラッと横目でリーシェの方を見止める。

「……………何だ。……………置いて行かれたんじゃない……………なかったんだ」
呟くようにそう言ったリーシェは、しかし全く笑っていないかった。

代わりに、心底ホツとしたのかスツと身体のを抜いた、ように見えた。

その言葉を聞いて、リージェスは全てを察する。

「馬鹿。置いていくわけないだろ」

間が空いてその言葉をやっと吐き出し、リージェスの全身は虚脱する。

リーシェは、俺が先に森を脱出しているのだ、と今の今まで信じて疑わなかったわけで、泣いていたのも俺の身を心配していたからではなく、あの森で迷ったきっかけを作った事で、置き去りにされたと思い込んでいたのが、自分の下に戻って来てくれた、という安堵の涙だったわけで。つまりは今この瞬間に至るまで、俺はとことんこいつに買い被られていたわけである。

(……何なんだ、このやるせなさ)

リージェスは椅子の背もたれに寄りかかる様にして天を仰いだ。

身体のを抜いた途端、急激に心身ともに疲労が嵩かさんでくる。萎びた青菜のようにぐったりと、背もたれに身を預けていたリージェスだったが、ゆらりと前のめりになり、どうしても気になっていた事をリーシェに訊いてみる。

「で、お前はあの森をいつ頃出たんだ？」

リーシェは顎に指先を当て、うーんうーんと一生懸命考え込んでいる。

「雨が降った日の翌日……かな。そこから一生懸命走って、カタールスタについたのがその次の日の夜、だったと思う」

つまりは六日目の夜には付いていた、という事か。俺は……えー

つと、……十四日目の朝か。

圧倒的過ぎる差に、リージェスはがつくりと頂垂れる。

リーシエは戸惑いがちに訊く。

「リージェス、どうしたの？ ……大丈夫？」

「どうやら具合が悪いのかと心配しているようだ。」

「……大丈夫じゃない」

でも、質問は続けるからな。

「それで……どうやって森を出たんだ」

リーシエの表情には再び疑問の色が過ぎる。

「どうやって……ってリージェスはどうやって出たの？」

質問を質問で返され、少しイラツとするが、不承不承承應える。リ

ージェスの話をふんふん、と相槌を打ちながら聞いていたリーシエは、全てを把握し、感嘆の息を吐く。

「へえー、なるほどー。風潰しにかー。そんな力技でも何とかなるのね」

？力技？という言葉にリージェスはピクリと反応する。その言動から嘲笑の念でも滲んでいれば罵りようもあるのだが、リーシエは本当に感心しているようで、やり場のない苛立ちが消化不良を起す。

「それで、どうやって出た」

なるべく声を荒げないよう、リージェスは抑揚を抑えて再び問うたが、その声と表情には妙な迫力がおまけでついてしまった、と自覚する。

案の定、リーシエはリージェスの様子に眉を顰めたが、それでも

戻って来てくれた嬉しさが勝まさっているのだろう。思いをじんわりと
噛み締めるように、ゆっくり瞬まばたきを二、三回して、リージェスに優
しげな眼差しを投げ掛けながら経緯いきわづらひを語り出す。

其の二十五　く解明（裏）く

四方と天井を白い壁紙で覆われている殺風景な部屋に、二人は小さな椅子に座り、檜のテーブルを隔てて向かい合っている。網戸がはめ込まれている窓から吹き込む風は弱く、カーテンをひるがえ翻す程ではないが、程好く遮られていた薄い陽光がリージェスの眠気を誘う。欠伸をあくび噛み殺しながらも耳を傾けているリージェスに、リーシエは目を細めながら言葉を紡いでゆく。

「えっと。あの森の出方に気付いたのは、雨が降った日がきっかけになったの。……でも、それまでにも色々気づいた事があるから、掻い摘んで話すわね」

視線を投げ掛けるリーシエにリージェスはゆっくりと頷いた。

「これだけは信じて欲しいんだけど……、リージェスと逸れた初日、私はリージェスが木から降りてくるのをちゃんと待っていたの。でも十分くらい待っても全然降りて来る様子がなかったから、リージェスの後を追って木に登ってみたら、目の前にある木が他のものに入れ替わっていたのよ」

884年　2月19日

リージェスと逸れた事を知り、木から降りて荷物までも失った事を知った私は、仕方なく一人で森の奥へと進んで行った。し

かし、行けども行けども目に映る景色は変わる様子がない。周りを
見れば見渡す限りの広葉樹に落ち葉と小枝の絨毯。上に目をやれば
空の大半を覆い隠す枝葉の天井があるため、太陽の位置を確認して
進むことは出来ない。リージェスのやったように大きな木に登ろう
かとも思ったが止めた。立ち止まっているうちにあらぬ方向へと流
されかねない、そう考えたのである。

まだ冬を抜けきらない事もあって夜になると相当冷えたため、周
囲の綺麗な落ち葉を寄せ集めて寝床を作り、落ち葉のなくなった土
の上に小枝を積み、周りを手頃な大きさの石で囲ってから火をつけ
る。落ち葉で作った意外と暖かい布団に腰まで入り、そのようにし
て初日を終えた。

884年 2月22日

森で数日を過ごして自分なりに勘付いた事は、地面が何ら
かの理由で動いている事と、歩いていると目がやたら疲れる事だ。
森の中を歩いているのに目が疲れるなんて、と訝っていた私は当て
もなく歩いている最中、遠くに小さい兎が飛び跳ねているのを見咎
めた。

食料だ、と真つ先にその後を追ったがその途中、有り得ぬ事なの
だが、逃げる兎の体が木の幹をすり抜けたように見えた。私は立ち
止まり、恐る恐るその木を触ってみると、手ごたえを感じるることな
く手が木の幹にめり込んだので慌てて手を引つ込める。その木は本
当にそこに存在しているかのように見えたが、再び触ってみると先
程と同じように手が木の幹を貫通した。もしかこの森には目の錯覚
を引き起こす魔法が施されているのでは、と当然のように考えたが、
お腹の音がなつたため考えるのを中断し、視界で小さくなって行く
兎を再び追い始めた。

私は兎を追いながらも、もしかしたら人間以外の動物には錯覚の効果がないのでは、とも考えた。しかし、それがわかったところで状況が改善されるわけではなかったが。

884年 2月23日

急にお腹が空^すいてきた私は昨日仕留めた兎を食べるべく、細い毛に覆われた兎の皮を剣を使って丁寧に剥ぎ、食べやすい大きさに切り分けてから火を起こす。しかし、急な雨風に見舞われてあっさりと火が消えてしまった。とりあえずはリージェスの教えてくれたようにして飲み水を確保し、さてどうしようかと思っただが、幸い地面の土が柔らかかったので穴を掘って石焼きを試みることにする。木々を燃やして熱した石の上に肉を置く、というシンプルな食べ方だ。これなら雨が少々吹き込んできても問題ない。

鉄串があれば焼き鳥のように突き刺しても良かったが、生憎そんな便利なものはない。肉を焼いている間に、近くにあつた手頃な太さの枝を抜いた剣の刃に当て、少しずつ削りだすようにして形を整えて行き、不恰な箸を作った。

ところが、不思議な事に箸を作り終えて二十分近く待つていたにもかかわらず、兎肉にあまり火が通っていない。火力が甘かったのか、この分では後十分は確実にかかりそうだと思い、不意にリージェスの事が頭に浮かんできた。

初日のリージェスの怒り様は、中途半端なものではなかった。そもそも彼の口から？説教？という言葉聞いた記憶がない。その上わけもわからぬままに彼と逸れてしまふという体たらく。一刻も早く再会したいと思うと同時に、胸の辺りが不安でどうしようもなく

騒がしかった。

(……きつと、怒ってるよね)

謝っても許してくれなかったらどうしよう。もうお前は付いて来るな、と言われたら。鎌首をもたげた不吉な考えを振り払うようにブンブンと首を振り、ややあつて私は焼いている肉の方に視線を戻す。

一瞬呆^{ほう}けた。石の端っこにあるものを除いて、肉だったものは見事に黒炭になっていいる。そんな長い間リージェスの事を考えていたわけではない。二十分近く経つても生焼けにもなつてない肉が、どうしてこんなに早く焦げたのか。私は無事だった肉を急いで頬張りながら頭を捻った。

そして、思い当たった。この森は、もしかしたら時間をも錯覚させるのではないかと。

ただでさえ広大な森の中にいるのだ。周囲が同じ景観ばかりの場所を歩いていればそんな感覚は自然に失ってしまう。それを更に狂わせられたら堪ったものではない。例えば、一分間真つ直ぐに歩いているつもりが、実は十秒しか歩いていなかったとしたら。逆に、十分間近く歩かされていたとしたらどうなるだろうか。迷路を抜けるのにもっとも必要なもの、距離感を当てに出来なくなってしまう。それに、おそらくこの森の地面は何かしらの法則で動いている。

目の錯覚を引き起こすというのも、兎がすり抜けた木を触れてみてほぼ確信している。メインオブフォレスト迷宮の森と呼ばれるのも頷ける話だ。まともな方法で出られるとは到底思えなかった。

どうしようかと考えながらも食事を終えて立ち上がるうとした時、ふと違和感に襲われた。先程、顔に当たっていた雨が当たっていない。いや、と思って私は横を向いた。再び雨粒が顔に当たり始めた。

風向きというものは短時間で変わることは滅多にない。では、風向きが変わっていないのなら何が変わったのか。簡単な事、自分の向いている位置が知らぬうちに変わったのだろう。

一方向に向けてひたすら歩いても出れなかった現状を鑑みるに、この森の地面は真つ直ぐに動いているわけではなく、曲線を描く様に動いているのかも知れない。

そこで一つ気づく。風の向きは短時間で早々変わる事はない。木に登って方角を確認する事は出来なくとも、風を指標にすればおおよその方角は常にわかる。うる覚えだったが、この森に辿り着くまでの暫くの間はずっと向かい風だったはずだ。砂埃が鼻に飛び込んできてくしゃみをした記憶がある。目指していたカタルスタは西側、つまり今は西風が吹いている。このままずっと西を目指せば、いずれカタルスタ側に出ることも出来るかもしれない。

私は直ぐに決心し、風が吹いて来る方角へと歩き出す。顔に容赦なく当たる雨粒は少し鬱陶うっとうしかったが、半分目を瞑りながらも我慢してひたすらに歩いていく。徐々に雨粒の当たる場所が左側にずれてくると、私は向きを修正して雨粒を、風を真正面に捉える。そして再び歩いて行く。ずっと左にずれてくるのを見ると、どうやら地面は時計周りに、円を描くように動いているらしい。

何だか同じところをグルグル回っている気がしなくてもなかったが、目に見える物は全く気にしないように心掛ける。本物が幻かを判断する手段は魔法に関する知識が乏しい私にはないのだから。

方角を知るだけなら昼間は太陽、夜はエセルティスの星の位置を確認しながら移動できれば問題はなかったが、生憎茂みが邪魔で殆ど見えない。もっとも、錯覚を起こす仕掛けが空にまで効果が及んでいる可能性もなくはないから、万全を期すならこれでいい筈だ。やや不安を残しながらも、私は森を休みなく進んで行く。

884年 2月24日

徐々に暗闇が薄まって行き、気がつけばいつの間にも雨は止んでいた。髪と服は当然のようにびしょびしょで気持ち悪かったが、私は我慢しながら少し弱まった風を懸命に探り、確認しては森を進んでいく。濡れた落ち葉が土を巻き上げながら靴にへばりつくが、そんな事を気にしている余裕はなかった。歩みを止めればまたあらぬ場所へと追いやられてしまうと確信していたからだ。

おもむろに木の梢が数を減らし、目の前が白んできた。白い空間が見え、私は思わずそちらに向かって駆け出した。

そして

「そして、やっと森を抜けたの。出た場所は街道じゃなくてだだっ広い草原に出ただけだね。街道から逸それた時はカタルスタに向かつて左側だったから自分がいるのは南でしょ？ 後は森に沿って北へと走って行って、辺りが朝日に照らされる頃には街道に辿り着いたのよ」

なるほど、とリージェスは相槌を入れる。

「それからは街道をひた走って、リージェスが待っているだろうカタルスタへ向かった。勿論、すれ違う人には「青髪の人を見かけませんでした？」って尋ねながら。カタルスタについては夜だった

かな。かなり疲れていたし、正直言っただけで臭ったから、先に宿を探して身綺麗にして、少し休憩してからリージェスを探し回っていたんだけど……。結局、広場の周りの宿を三日くらいかけて訪ね回ったのに見つからなくて。そうしたらね。汗だくで尋ね回っている私を見かねて声をかけてくれた女の人がいたの。人相書きを兵隊の皆さんに渡したらどうですか、って。その頃には、リージェスはもしかしたら勝手に森に迷い込んだ私に呆れてどっかに行っちゃったんじゃないかって、もう気が気じゃなかったんだけどさ」

今までの話からすると、リーシェなりに相当反省していたらしい。もはや説教する気はなかったものの、一応それを聞けただけでも由とするか、とリージェスは納得する。

「その後は宿屋に、つまりこの事だけれど、戻ってきて紙を百枚くらい用意して、その女の人に手伝って貰いながら人相書きを書いたの。名前はリージェスで、年齢は十九歳くらいで、青い髪をしていて、背もそこそこ高く、グレーのコートを着ていて。……ちょっと格好良くて女顔の男の人。それを門番の人に回してもらえないかって頼んだら、快く引き受けてくれた。勿論、その間も私はリージェスを探し回っていたの。絶対そんなことはないって信じたかったけれど、万が一リージェスが本当に私を置き去りにしたとして、カタルスタには絶対来ているはずだと思っていたから。だけど、広場の辺りを重点的に訊き込みをしていたのに、目撃情報は全くなかったの。この辺りの人に青い髪の人っていないらしいから、見かけたら直ぐにわかるはずだって皆言ってる……。正直……。もう諦めかけてた。絶対見捨てられたんだと思って、本当……。勘違いで良かった」

リーシェは深く安堵の息をついて俯くと、再びポツンポツンと涙を零した。

(風と時間……か。なるほどなあ)

確かに、リーシエが直ぐに森を脱出することが出来たのは運も味方したのだろう。だがそれでも、リーシエは気付きにくい違和感を鋭く捉え、見事に論理を構築し、リージエスよりも一足先に森を出たのだ。

海の上ならいざ知らず、陸地で風が来る方角なんて滅多に気にすることは無い。どちらかと言うと普段気になるのは風の強さの方だろう。リーシエの安否ばかり気にかけていた俺じゃ尚更だった。別に、リーシエを心配していた事を言い訳にするつもりは全くないのだけれども。

(……うーん、それにしても悔しいなあ)

何故四日目に、俺は雨風の違和感に気付かなかったのだろう。常日頃から観察力が大切だ、と口をすっぱくして言っている俺の立場がないではないか。

「あ、そっか。だから……」

少しして、リーシエが泣くのを止めて納得したように呟いた。

「ん、どうした？」

不思議そうな顔をするリージエスにリーシエが今日、初めての笑みを見せた。でも、決して不快な笑みではなかった。

「あ、別に大したことじゃないの。……ただ、リージエスが、何でこんなに森が出るのが遅くなったのかわかっただけ。多分だけど」

慌ててそう言うリーシエに、リージエスは首を傾げる。大したことじゃない、とバツサリ斬られた事に内心傷ついたリージエスだったが、それを押し隠して尋ねる。

「何でそんな事がお前にわかるんだ？」

「えっとね。リージエスは、無意識に解答を避けたのよ」
そう言って、リーシエはクスクス笑う。

解答を避けた？ 何それ。眠い頭じゃ混乱するばかりだ。

「はつきり言ってくれ。何が何だかわからない」

リーシエは戸惑っているリージエスに、どこか楽しそうに目を細める。

「リージエスは私と違って、あまり雨に濡れなかったでしょ」

リーシエの言葉にリージエスは眉を潜める。

(雨に濡れる？ 濡れ、……っ)

「……そういうことかよ」

リージエスは啞然とする。欠けていたピースが埋まったのを確信すると共に、無意識に深い息が部屋に漏れ、暫しの間辺りを漂う。

「そう、リージエスは長時間雨に打たれなかったはず。同時に風も殆ど遮っていたから、気付く機会も少なかったはずよ」

リージエスはポケットから、風雨に気付かなかった元凶を取り出す。大分前に商人から買った雨避けの魔石だ。手早く飲み水を確保した後はリーシエの指摘した通り、雨が降っている間これを無意識に使っていた。微弱な風の層で雨風を防ぐこの便利な道具が、違和感に気付く妨げとなったのである。

或いは、魔石の代わりに普通の傘を持っていたら直ぐに風向きの変和感に気付いたんじゃないだろうか。独楽の様にあちらこちらと風に煽られている傘を見て。

喉に^{つか}痞えていた物が取れた途端、睡魔の群れに襲われ、リージェスはふらりと立ち上がった傍らにあったベッドにうつ伏せになって倒れ込む。

「……リ、リージェス？」

不安そうに覗き込むリーシェに、リージェスは一瞥だけくれてやる。

「……ちょっと寝る。自然に目覚めるまで起こさないでくれ」

「あ、うん。わかった」

「……後さ、もう怒ってないから」

「……っ。う、うんっ」

リーシェの顔が情けない位に綻んだのを片目で確認し、リージェスは枕に顔を埋める。ここ二日間、ろくに寝ていなかった。まあ、そんな事は今となってはどうでもいい。結局、リーシェに何事もなかったのだから。

其の二十六 く信頼と懸念(裏)く

884年 3月6日

「ん、んん」

何だか寝苦しい。首周りが特に……マフラーでキュッとされていく……ような。

「ん、んん？……うおうっ」

視界の悪い寝ぼけ眼まなこに映ったのはやたらと近くにある、見慣れた少女の顔。反射的に身を振りよじ、首に絡みついて腕が解ほどかれる。

「んにゃっ……くう」

リーシエが寝言を漏らしながら目と鼻の先ですやすやと寝ていた。顔と顔の距離は手の平ほどもなかったかかも知れない。不本意ながら、どうやら抱き枕の代わりにされていたようだ。

「こいつめ、いつの間に……。あれ、今何時だ」

というか、ここどこだっけ。リージエは霧もやのかかった思考が段々と鮮明になってくるのをじっと待つ。

(ああ、そっか。ベッド奪っちまったんだな)

ようやく事態を把握し、リージエは頭を掻く。リージエがリーシエの腕を振り解いた時に服が乱れたのだろうか、チラリ胸元が覗いている。如何に兄妹とはいえ薄服一枚で抱きつくとは大胆な、とリージエは閉口した。先ほどの拳動で乱れた掛け布団を、リーシエを起こさぬようにそっと体に掛け直してやる。

「……リ……ジェス」

「あれ、起こしちまったか？」

しかしその咳きに反応はなかった。どうやら寝言のようである。睡眠の邪魔をしないように、手でスプリングを押し、なるべく揺らさぬようにバネの反発を殺して立ち上がる。

(う……ぐ……)

立った瞬間に手足に電撃が走る。何だか体中がかなり痛い。長らく蝶番ちよつがひに油を差されていないドアのように、体の動きがまるでぎこちない。森を出てから半日以上、殆ど休まずに走っていたツケである。久方振りの筋肉痛である。寝る前に疲労で凝り固まった筋肉を解ほくして置くべきだったな、とリージェスは反省する。

とりあえず先に着替えておくか、と思ったところで再び記憶さかのぼが遡り始める。

メイスオブフォレスト

迷宮の森で不覚にも迷ってしまった時、リージェスとリーシエは持っていた荷物の殆どを失っていた。紛失した革袋には着替え一式その他、細々とした物が入っている。とりあえず、今日最初にやる事は決まったな、と思い、今一度考え直す。優先的にやって置かなければならない事が一つあったのだ。

「あれ……リージェス、……リージェスはっ？」

リージェスが目覚めて一時間もしただろうか、大声と共に素早く身を起こし、リーシエは巨大な物音にびっくりしている猫よろしく、辺りを忙しく見回している。おもむろに目が一つの方向に釘付けになり、緊張していた身体から力が抜ける。

「よ、おはよう。紅茶飲むか？ ティーバッグだけど」

「……あ。う……うん」

リーシエはベッドに腰掛けるようにして足を伸ばしてスリッパを引き寄せ、リージェスを見てはにかみながらよろよろと立ち上がった。

リーシエはリージェスから視線を外さずに紅茶を一口啜る。味は可もなく不可もなくだったが、林檎のチップの甘酸っぱい、懐かしい香りが心をホッとさせる。

「……夢じゃないよね」

「何が？」

「……リージェスが」

「試しに思いつきり頬を掴^{つね}ってみてもいいか？」

リージェスはティーカップを傾けながら目で笑った。

「……え、遠慮しとく」

間違いなく、これはリージェスだ。

二人は身支度を整えて宿を後にし、宿の近くの土産物屋で買った菓子折りを持って捜索に協力してくれた門番達に改めて礼をしに行った。彼等はリーシエの大袈裟にも見える喜びようを見て少し照れ臭そうだったものの、喜んでそれを受け取ってくれた。地元民の彼ら曰く、地域特産の栗餡^{くりあん}をスポンジ生地^{くしあ}に練り込んだこの菓子は、美味なので有名らしい。

彼らに別れを告げた後、二人はいよいよ本格的にカタルスタを散策することにする。

カタルスタは古い赤レンガ作りの建物が多く、水路も至る所に張

り巡らされている。建物の外壁にはよく見ると、象形文字らしきものが印されている。これも何らかの魔法様式の一つなのだろう。景観を損ねないようにするためか、家々の高さはほぼ統一されており、高くても三階建ての建物がせいぜい、といったところだった。大きな道の両側にはたくさんの木が植えられており、並木道の様相を呈している。

所々、路端に置いてある花壇には紫や黄色の色鮮やかな花がふんだんに植えられており、統一感のある町並みを華やいでいるように見せている。

街の全体図にしても決して曖昧あいまい模糊な作りではなく、理路整然とした規則に基づいて構成されている。それは、広場で地図を見た時にはつきりしていた。水路はまるで一つの巨大な円を描く様に配置されていて、それが所々中央に向かって伸びている。地図全体を通して見ると、水路の形は七方星を象っている事に気づく。それなら街の中央に王宮があるのかと思いきや、地図の中央部には魔法学院と記されていた。中央から見て東にはカタルスタ国立魔法図書館が、西には住宅街とショッピングモールが、そして要の王宮は北に位置している。水路の水は北から中央を経て南へと緩やかに流れ、南門の跳ね橋の下の川に出て西にある海へ向かっているようだ。

「全く、この街を設計した奴は余程の物好きか、さもなければただの莫迦はかだな」

中傷とも中傷とも付かぬ事を言いながら、リージェスは時折立ち止まり、感心しながら統一感のある街を歩いてゆく。

その後ろからひたひたと、リーシェが影のようについてくる。じ

つとこちらを見ているのか、背中に貼りついたままの視線を感じる。

「リーシエ、折角だし少しは街を見た方がいいぜ。ここは本当に凄
い。レヴングリッジが自然そのままの街だとしたらこっちは正反対
理詰めをそのまま体现した街だ」

歩きながらそう言うリージェスに、リーシエは「ああ、うん」と
生返事を返すに留まった。リージェスの一挙一動を監視するかのよ
うに、リーシエは背中に貼りついてた。

起きた時のリーシエの様子を見て薄々わかってたことだが、ど
うやら先日の件に余程のショックを受けているらしい。あれはここ
らとしても相当ショックだったのだが。結局、あの森の中で時間感
覚が狂わされている事には最後まで気付けなかったわけであるし。

リージェスは後ろを向いてリーシエの方に手を差し出す。リーシ
エはその手を見つめてきよんとしている。

「手え出せ。繋いでいけばなくなる心配もないだろうが」

溜息混じりにそう言うリージェスに、リーシエは嬉しそうに手を
伸ばす。二人は手を繋ぎ、並んで魔法都市を歩き始めた。

天気にも恵まれ、雲一つない素晴らしい行楽日和だ。春の日差し
が道行く人々に優しく降り注いでいる。輪郭のはっきりした縹雲が
西から東へと、空の海を群れを成して泳いでいる。そして時折足元
を過ぎていく巨大な影。空を見上げれば天馬や翼獣^{ベガサス}、はたまた魔鳳^{グリフォン}
テルネシアで伝説化されている動物達が何度となく行き交っている。

一羽の魔鳳^{シェリス}がリージェスの頭上を南から北へと通過していく。文

猥によれば、魔鳳^{シエリス}は全身を黒き羽毛に覆われ、銀色に輝く嘴と鉤爪を持ち、その速度は飛翔する獣の中でも指折りの早さらしい。人には決して懐かない、とも書かれてあったが、今北へと飛んで行ったシエリスの背には人影が見て取れた。レヴングリツジ^{ヘガサス}で天馬に乗った時の記憶が、昨日の事のように鮮明に蘇^{よみがえ}る。

「あんなの一頭欲しいなあ……」

思わずそう呟いたリージェスに、聞き捨てならないと言わんばかりに、リーシエは手を繋ぎながらも横に冷ややかな視線を送る。

「リージェスう、……前、猫ダメだって言ったよね。何であんなおっきいのが良くてちっちゃい猫がダメなのっ」

「そ、そんなに睨むなよ。欲しいなあって言ったただけだろ。飼う気なんてないぞ」

「ほんとにいい？」

疑わし気な目で睨まれるも、リージェスは何とか反論する。

「そ、そりゃそうさ。大体、あんなの飼ったら月々の餌代だけでどれくらいかかるか……」

「……なんかやたらと現実的な話をするわね。餌代とかがって」

「だあ、しつこいな。さっ、そんな事より早く洋服店探そうぜ」

「あ、ちよっと」

面倒くさくなつたリージェスは繋いでいた手をぐいっと手を引っ張り、リーシエを強引に引き寄せる。青と黒の長髪がふわりと宙に踊り、リーシエの背を押すようにしてリージェスは再び歩き始めた。

ふと目に付いたのはガラスを隔ててポールハンガーに飾られている色取り取りの洋服。パツと見てどうやら男性用の服もあるようだ。「丁度いい、寄って行くか」

リーシエの了承を経て、二人は石段を上がり、店内に入って行く。

リージェスは早速手頃な値段の物を籠の中に入れてゆく。エアリアで帝国兵から貰った、もとい奪った金は半分以上が革袋の中に入っていたため、懐具合はかなり寒い。リーシェに対してもその点は言い含めてある。リーシェはゆったりとしたロンバースに目をつけ、色は青に絞ってサイズを検討しているようだ。今回は早く終わりそうだ、と思いながら、リージェスは黒のカットソーに目を付け、それに合わせるズボンを選ぶ。

しかし、リーシェは最後の最後でズボンのサイドポケットの形にこだわ拘り

「……一時間半、か」

「ま、前より早かったでしょ？」

リージェスの顔を斜め下から覗き込むように、リーシェは苦笑いをした。

「まあ、そうだな。仕立て直しの間、町を見て回るか」

「賛成っ」

時間潰しのため、二人は水路に架かる立派なアーチ橋を渡ってカタルスタの町のほぼ中央、魔法学院の前までやってくる。高さ3m程の茶褐色のレンガが連なってできた外壁の四つ角は、門からでは遠すぎてその姿を確認する事が出来なかった。てっきり平地かと思っていたのだが、門の外から見える敷地には丘や小さな湖も見える。何より広さが圧倒的で、学び舎というよりも城にずっと近い。門の外から内を伺うと辛うじて、奥の方に小さく校舎がみえる。そちらは霞んでいてよく見えなかったが、近くには青い制服を着た生徒らしき少年少女が、広場の椅子に座って食事を取っているのが見えた。

年齢はバラバラなようで、明らかにリージェス達より年上の人も結構いる。

ふいに湖の方に稲光が走った。次いでゴロゴロと低い音が鳴り、敷地内にいる者達も一瞬そちらに気を取られた。空を見ても積乱雲などどこにも見当たらない。ということは、魔法の教習中なのだろうか。

「凄い……、これが学校だなんて……」

リーシェは感嘆の息を吐きつつ、魔法学院の中を羨望の眼差しで眺めている。二人は八歳くらいの頃からずっと旅を続けている根無し草である。勿論、学校等に通った事は一度たりともない。辺りをしきりに観察していたリージェスは脇にある看板に気付く。

「おいリーシェ。四月からの入学者、大歓迎って書いてあるぜ」

リージェスが示した方には小さい掲示板があった。学校案内や地域行事等について事細かに書いてある。？可愛い幻獣この夏初一般公開予定、直接触れ合えます。乞うご期待？と書いてあるのをチラッと見て、僅かにリージェスの心がぐらついた。

「うーん。入学金、どれくらいするんだろう」

意外にも、リーシェが興味津々なのに少し驚いてリージェスは尋ねる。

「お前、魔法使いたいのか？」

リーシェは少し考える素振りをして、曖昧に頷いた。

「勿論、それもあるけれど……。ほら、カタルスタに入国したばかり」

りの時会った、魔石の商人さんが言っていたじゃない？ 私には非凡な魔法の才能があるかもしれないって」

そういえば確かに、そんな事を言っていた。どうやらあの言葉は、リーシエにとってはそれなりの意味を見出すものだったようだ。

「もしそれが本当なら、私も今まで以上にリージェスの力になれるかもしれない。そう思ったんだけど　　リージェス？」

リーシエの言葉にどこか引つ掛かりを覚える。……俺の力になるか。

俺がこの街を出る時は、ブラーヂウスと戦う手段を得たその時だと決めている。今後の事を考えた場合、果たしてそれはリーシエの為になる事なのだろうか。徒に危険を増やす事にならないだろうか。それに……認めたくはない事だが、リーシエの俺に対する依存が、彼女に何らかの悪影響を及ぼしていないだろうか。

「　　リージェスってばっ」

「おっと」

大きな声にやおら思考を遮られ、リージェスはリーシエに視線を戻す。

「どうしたの？ やっぱりまだ身体の調子が悪いの？」

「ああ、いや、そんな事はないな」

心配そうに縋り付くリーシエに、リージェスは言葉を濁す。

「本当に？」

「ああ、心配いらない」

そう言って微笑みかける。

「そ、それならいいけれど」

彼女は少し赤面して視線を逸らす。

(……………やっぱり、今言っておくべき……………だよな)

リージェスはある事を決断し、それを口にする。

「あの、さ」

「んん？」

「お前はそろそろ、自分の為に何かした方がいいんじゃないか？」

リーシェは首を傾げる。リージェスの言葉の意味を計りかねているのかもしれない。

「つまり……………だな。俺とは切り離れた所で、自分の人生に何かしらの目標を持った方がいいんじゃないかって言っているんだ」

少し気まずそうにそう言ったリージェスに、リーシェは唇を噛む。

「……………リージェスは、そうして欲しいの？」

「欲しい欲しくないじゃない。ただ、それが当たり前なだけだ」

俺達はいつまでも一緒にいられるわけじゃない。出かけたその台詞をリージェスは胸に仕舞い直す。

今俺がそれを言ってしまったら、多分またリーシェを泣かせちゃう。ここ数日、どうもこいつの涙腺弱そうだし。

「一つ断っておくけれど、俺はお前と一緒に旅するのが嫌だと思っただ事は一度もない。いつまでもずっとこうしていらねえばいい、そ

う思う事なら勿論あるけど」

拭い切れぬ不安を宿した目を向けるリーシエに、リージエは一
つ一つ、言葉を選ぶ。

「だけど、カタルスタに来る前に言っただろう？ 俺はブライジウスと戦いたいんだ、って。それは言ってみれば、奴を、帝国の所業を許せないと思うのと同時に、己の能力でどこまで出来るか試してみたい、という俺の我儘だ。……無論、命を落とす可能性だってあるが、それでも、それを成し遂げる事が俺の人生における目標の一つだ。だからさ、それがお前の人生の目標と克ち合う事はないんじゃないかって、そう思ったんだ」

リーシエは俯きながらもリージエスの意図を吟味しているようだった。ふと、握っていたリーシエの手に力が籠るのを感じた。心なしか重なった手は汗ばんでいたが、その汗が果たしてどちらのものだったのか、リージエスは判断がつかなかった。

「とはいうものの、お前の人生は当然お前の物だ。喩え双子の兄貴の言う事であろうと、譲れない部分があるなら譲らなくていい。でも、これだけは覚えておいて欲しい。俺は、お前には危険な目に遭って欲しくない。だから、俺達がこの街にいる間に、これから自分がどうするのかをよく考えてみてくれ」

天上から投げ掛けられたその言葉は、最後に勢いを殺して着地点へと到達する。

リージェスは表情を緩め、リーシェの手を軽く握り返し、さあ行こう、と言った。何やらリーシェがボソボソ呟いたように見えたが、返事は小さ過ぎてよく聞き取れなかった。

其の二十七 く先立つものは(裏)く

884年3月6日

洋服の仕立て直しが終わる時間を見計らって二人は魔法学院を後にし、再び洋裁店へと戻っていく。その間にも、やはり巨大な影が地面を右往左往しているのが見て取れる。先程は気付かなかったが、街の石畳には結構動物の毛や羽らしきものも散らばっている。風に乘って枯葉のようにひらり、ひらりと頼りなく舞っているのは純白の羽。おそらく天馬ヘガサスの翼から落ちた物だろう。

洋服店の少し手前で、何かが視界の片隅に入り、ふと側面の通りを見遣ると、奥の方で旋風つむじかぜが巻き起こっている。一瞬竜巻か、と見紛うたがどうやら違うようだ。二人はそのままそちらの方へと歩みを進める。

近づいてみて初めてわかる、一般家屋の天井ほどもある旋風つむじかぜの後ろには黄緑色を基調としたフード付きのローブを身に纏った女性がいた。旋風つむじかぜを手で押し出すようにしてゆっくりと歩を進めている。

二人が邪魔にならぬよう脇によると、風を操っている女性は少し申し訳なさそうに黙礼をした。

「こんにちは、これは何をやっているんですか？」

リーシエは小さな竜巻を見ながら不思議そうに言った。

「街の清掃です。地面に散らばっているゴミを集めているんです。」

ほら」

そう言って、女性は竜巻の中心部を指差す。リーシェが目を凝らすと

「……うわぁ、ホントだ。ゴミが一杯」

旋風つむじかぜの中心では、地面に落ちていたであろう、紙くずや鳥の羽、枯葉や石材の欠片などのゴミが小さく回転して収まっている。なるほど、確かに近寄ってみると穿いているズボンの裾が引つ張られる様な感じがする。吸引力のある風を展開して道路の清掃をしているのだ。

「これは便利ですねえ。これも魔法なんですか？」

「ええ、風の初歩的な魔法を少し応用したものですよ」

女性は微かな笑みを浮かべて頷く。

「こういう魔法は、どこで教えてもらえるんですか？」

リーシェが興味深そうに訊く。

「私はここの魔法学院で学びましたが、ええと、そうですね」

顎に人差し指を当てて少し考えるようにしてから、女性は答える。「基礎的な魔法だったら書物を読むだけでも習得できる人はいますが、魔法使いの家庭教師みたいな方も結構います。そういう方には付けばこの程度の魔法なら扱う事が出来るようになると思います。ただ、インチキ紛いの方々も相当いますので、師事する人はよくよく調べた方が良いでしょう」

確かに、こういう便利な技術を教える者の中には、詐欺師に近いのも相当いるのが世の常である。狡賢あやかしい者達は、需要過多のある分

野を狙って必ず現れるのだ。不治の病治します、楽して痩せます、幸せになれます、異性にモテます等々。人の弱みに付け込む者達は、喻え戦のない世であろうと後を絶つ事はない。

「なるほど、わかりました。お仕事中どうもすみませんでした」

「いえいえ、では失礼致します」

ローブの女性は二人にゆったりと会釈して、再び前方へと視界を転じた。

「異国情緒溢れるとは言うが、ここは本当に別世界だな」

リージェスは風を操る女性の背を見送りながら感嘆した。

「うん。ああいうのを見ていると、自分も魔法を使いたくなっちゃうね」

「確かに、あれば便利だろうな」

しかし、幾ら便利でも一歩間違えば悪用されかねない能力だ。少なくとも帝国ではひけらかすわけにはいくまい。大昔にあったと言われている魔道士狩りの時のように、自分の身に危害が及びかねない。力を持つ者は、それだけで畏怖の対象となる。

リージェスはふと、キールの事を思い出した。彼も、訓練は別として人前では大っぴらに力をひけらかす事はなかった。力を手にしながらも、それを隠し通して生活する。魔法使い達は皆、そんなジレンマを抱えながら生きているのだろうか。

洋裁店に付くと仕立ては既に終わっていた。試着室を借り、早速新しい洋服を身に纏った二人は外に出て対面する。リージェスの服

装は黒いカットソーにベージュのスラックス。リーシェの方は青いロンパースに白いズボン。それに髪を束ねる白いリボン。

「わぁ、お二人とも良くお似合いですよ」

女性店員達が二人を見て溜息交じりに言った。客に対するただのリップサービスかと思ったが、直ぐに視線を外さぬ所を見るとそうでもなさそうだ。リージェスはありがとう、と軽く会釈する。店員達は恥ずかしそうに笑い、反してリーシェの眉間が僅かに狭まる。

続いて、リージェスは隣に立っているリーシェに向き直る。長い黒髪を束ねてポニーテールにしたリーシェを、リージェスはまじまじと見る。無遠慮な視線を受け止めきれず、リーシェは少し恥ずかしそうに俯いた。

「ほう、髪型だけでも結構雰囲気変わるもんだなあ」

「……リージェスはどっちが好み？」

「俺の好みなんてどうでも」

「　　良くないっ。男性の目から見た時の意見が欲しいの」

そう言っただけリーシェは可愛らしく頬を膨らませる。やっぱり年頃の女の子だけあって、周りに良く見られたい願望があるんだな、とリージェスは得心する。

美人は何を着たって基本的に似合う。しかし、そんな事を言っただけリーシェが納得するとも思えなかったので、当たり障りのない言葉を選んでみる。

「んー、難しいな。正直言っただっちも似合う。でも折角新しい髪型にしたんだから、暫くは今の髪型でいて欲しいかな。目新しいし」

「そ、そう。わかった」

リーシエは何かを納得したのか、何度も小さく頷いている。

新しい服を着て心機一転、と言いたい所だったが、今の二人には一つ深刻な問題が発生していた。リーシエは店を出て歩き出す前にそれを確認する。

「リージエスのお財布どれくらい入ってる？」

「ちよつと待て、えーっと　　70000ギラと小銭が少し。ちよつと厳しいな」

札の入っている隙間を覗きこむようにしてリージエスが言った。

「どうしよう、私20000ギラしかないよ。1週間分の宿代が減っちゃっているし」

それは暗に、メイスオプフォレスト迷宮の森から早く脱出した事を自慢しているのかね、とリージエスは心中で独白する。

森で荷物を無くしたのは相当な痛手だった。二人の財布に入りきらない紙幣は、全て革袋の中に入れてあった鍵付きの木箱に保管していた。おそらく、まだ20万ギラ程は残っていただろう。リーシエの安否と森を脱出する事ばかりに気を取られていたリージエスだったが、今更になって金の紛失がボディーパーのようになじわわと効いてきている。このままでは数日中に宿に泊まる事すら覚束なくなる。

「まあ、とりあえず王宮に行ってみよう。すんなり行けばそれでよし、駄目なら駄目で仕事探しだな」

「うーん……」

眉間にしわを寄せながらも、他に有力な代案が思い浮かばなかったリーシェは曖昧に頷いた。そして、二人は再び手を繋いで、運河に沿って北へと歩いて行く。

夕焼けに赤く染まる道を歩む。腰ほどの高さの鉄柵に囲まれている運河の交差点には、剣と盾を持ち、鎧を身に纏った戦士の石像がまるで水面みなもに立っているかのように設置されている。それが街の至る所にある植栽と共に独特の風情ふうせいを成している。

普通に歩いている分には気付きにくいくらいの緩やかな坂を、二人は街を眺望しながらも北へと進んで行く。

「……この街、やたら広いよね」

「確かに、見て回るなら馬の頭でも欲しい所だ」

「……今の懐具合じゃにべもないわね」

「確かに、でも、一文無しで半年近く生きた事もあったじゃないか」

「……今日の宿、安い所に泊まらなきゃね」

「確かに、今日中には王城に付きそうにない、な」

この美しい街にも一つだけ、利点と表裏一体の欠点があった。カタルスタの街は、とにかく広かったのだ。

街に赤や青の街燈がポツポツと灯り始める頃、リージェス達は目に付いた宿泊施設おほに入ろうとし、入口を一目見てそのまま通り過ぎた。料理人おほと思しき割烹着かっぽぎを着た男が玄関先で葉巻きを吸っていたからだ。喫煙は味覚と嗅覚を鈍らせるため、老舗の料理人は概して煙草を吸わない事が多い。客に出す料理を鈍った味覚で味見されて

も当てにはならないし、しないならしないで、そんな店に泊まるのはこちらから願ひ下げである。

もう一つの宿を見つけたのはそれから十五分も歩いた頃。ちらりと木製の門前から中の様子を窺^{うかが}うと、ガラス戸越しに従業員達が慌しく廊下を行き来しているのが見えた。忙しそうなのはお客が多いからだろう。外観は目新しいところはなかったが、それでもお客を呼べるという事は、それなりに期待できる宿かもしれない。リージェスはリーシェの手を軽く引いて、引き戸を開けた。

引き戸がレールを擦るガラガラ、という音に反応して栗毛の髪を結び上げている、小顔で艶のある若女将と思しき女性がリージェス達に目を向け、朗らかに話しかける。

「いらつしゃいませー。お泊り二名様ですか？」

「はい。出来れば」

「二人部屋で」

リーシェがぴったりと二の句を接ぎ、リージェスはちらりとリーシェを見る。一見息の合った二人に、若女将は微笑みを湛えながらも、少し困ったような素振りをした。

「申し訳ありません。ちよつと団体さんの予約が入って二人部屋は全部埋まってしまいましたので、二階と三階の一人部屋を二つのご案内になってしまふんですが」

「うぐっ」

リーシェが呻くが、構わずリージェスは返答する。

「ああ、ならそれで良いです」

リージェスはぶつぶつ文句を口ずさんでいるリーシェを宥め^{なだ}賺^{すか}しながら、二階と三階どちらが良いか訊く。リーシェは渋々二階の方を選び、鍵を受け取る。二階で一先ず分かれると、リージェスは更に階段を上がり、部屋番号を確認しながら三階の廊下を進んで行く。ちよつど角部屋のところに309の表札を見つけ、リージェスは鍵を開けて部屋の中に入る。

部屋に一步足を踏み入れると、ポツという何かが燃える音と共に暗闇に自然と灯りが灯され、リージェスは思わず身構える。いつの間、天井から吊り下げられているガラスの照明器具に火が灯されている。よく見ると、中には赤い石らしきものが入っている。これも魔石の一種なのだろうか。

リージェスは紙袋を降ろし、腰に下げている剣を外してから椅子に腰かける。座った途端に、まだ抜けきらぬ疲労感が滲み出て来る。全身筋肉痛のままに歩き回ったので、その痛みでそれなりに疲弊していたらしい。さて、どうしたものかと一瞬思案したが、選択肢はなかった事に気づく。もう直ぐ夕食の時間だ。

部屋から廊下に出て鍵を掛け、階段の方へと視線をやると、パタパタと走っていたリーシェがこちらの姿に気付き、立ち止まるのが見えた。

(……元^{タラ}気な奴)

内心苦笑しながらも、リージェスはゆっくりとリーシェの元へ歩いて行く。

其の二十八　く酔っ払い二人（裏）

884年　3月6日

一階に下りてロビーを抜け、廊下を突き進んでいくと食堂と書いてある紺色の暖簾のれんが見えてくる。大部屋の中のざわめきは廊下にまで響いており、従業員や宿泊客が室内外をひっきりなしに出入りしている。廊下の端に寄り、彼らをやり過ごす様にして二人は食堂に入っていく。

存在感のある大きな円卓には真つ白なテーブルクロスが掛けられており、テーブルの端の方には三つ折り三角穴の厚紙で作られた小さい名札が席毎に置いてある。真ん中には三本連結のキャンドルホルドが置いてあり、各々の蝋燭ろうそくに火が灯されている。そして、美しい刺繡ししゅうの施された背もたれ付きの椅子がそれらを取り囲むように配置されている。

見回してみると、窓際にある3つの円卓に空席が目立っている。どうやら一般客の席はあちら側の様だ。がやがやと煩うるい団体客の喧騒から逃れられるように、との宿側のせめてもの配慮なのだろう。そちらへと歩いて行く途中、手前の円卓に乗っている名札をチラリと見て、二人は思わず顔をしかめる。

《？テルネシア帝国軍御一行様？って……》

リージェスにしか聞こえぬよう、囁ささやく様にリーシェは言ったが、リージェスは口に人差し指を持っていく。

《う、うん》

リージェスの意図した事を理解したのだろう、リーシェは軽く頷

いた。

いきなり煮え湯を飲まされたような胃のムカつきを覚えた二人だったが、気を取り直して窓際の円卓に足を運ぶ。見回しているうちに？リージェス様御一行？と書いてある名札を二枚見つけ、二人はその席に座ろうとする。

「あれっ、？オトコノコ？さんっ？」

リージェスが眉を潜めて声の聞こえた斜め前に視線を移すと、見知った顔がそこにあった。

「ああ、確か……レナードさんだったっけ」

その妙な言い回しは印象に残っている。カタルスタに入国した直後の温泉宿で出会った青年だ。記憶が正しければ、アテライデから仕事に来た、とか言っていた気がする。思わぬ場所での再開に、レナードは顔を綻ばせる。

「それで合ってますよ。いやいや、いつぞやはどうもお世話になりました。ああ、流石に浴場までは持ってきていませんでしたが、私こういう者でございます。以後お見知りおきください」

黒のスーツに身を包んだレナードは立ち上がると平身低頭挨拶をし、颯爽と胸ポケットから名刺入れを取り出して中身を一枚差し出した。

「いえいえ、こちらこそ」

リージェスも釣られて挨拶を返し、差し出された名刺を受け取る。お互い世話をしてもされてもないが、こういうのは社交辞令であ

る。突っ込んではいけない。

挨拶を交わし終わると、リージェスは手の中にある紙に視線を移した。

？ドゥブオーニユ社 アテライデ本社 営業課係長 レナード
デスタンス？

(へえ、若いのに本社勤めか)

旅をしている身の上であるからそれほど世情に詳しくはなかったものの、？本社？と？係長？の意味するところくらいは知っている。どうやらリージェスを？オトコノコ？と呼ぶ彼はそれなりに優秀な社員らしい。

「あ、リーシェさんっ。ご無沙汰しています」

レナードの隣の席に座っていた、セミロングの黒髪をした丸顔のリーシェよりも小柄な女性がぺこりと礼をする。鼻は少々小さめだが、黒眼が大きく、小動物を思わせる可愛らしい顔立ちをしている。ワインレッドのスーツに身を包んだ彼女も、おそらく仕事仲間なのだろう。

「ああ、シーナさん。こんな所で会うなんて偶然ですね」

「ええ、本当に」

二人は目を細めて再会を喜び合った。

レナードはリージェスの隣にいたリーシェに視線を移し、大仰に驚いて見せる。

「おお、これはまた美しいお嬢さんだ。リーシェさんというのですか、素敵な名前ですね」

あれ、リーシェの場合は？オンナノコ？さんじゃないのか。リージェスは心中で独白する。

「あ、え、ええ……」

「僕は、ドウブオーニユ社のアテライデ本社営業課係長、レナードと申します。以後お見　ぎえ」

立ち上がってリーシェに畏まっていたレナードが突如、素っ頓狂な声を出す。

「うふふふ、御免なさいね。この犬　じゃなかった、この人躰しっけ社員教育が行き届いていなくて」

口に手を当てて、シーナが目を細めつつコロコロと笑った。もう片方の手は円卓が邪魔になって見えないが、十中八九、レナードの太腿をつねっているのだろう。

「あ、いえいえ」
面食らったリーシェは曖昧な返事を返す。

「ええと、そちらの方は……？オトコノコ？さんでよろしいのですか？　いつぞやは宿で一緒だったとの事ですけど」

そんな名前を付けられたとしたら一生親を恨まざるを得ない。生憎、恨む親の顔は知らないが。

どうやらレナードはリージェスという名の方を失念していたようだ。何故そついう風に呼ばれるのかはこちらとしても気になるところである。

「いえ、俺の名前はリージェスです。どうぞ宜しくお願いします」
軽めに会釈してリージェスは席に着き、リーシェとレナードもそれに倣って腰を降ろす。

料理が次々と運ばれて来る。前菜は蒸かした大根に刻み葱と肉味噌を和えたものが乗っかっているもの。シンプルだが味は上々。隣を見ればリーシエも頷いている。珍しく宿の料理に満足している証拠だ。

「美味しいですね。ここの料理」

「ええ、これだけ客が多いのも頷けます」

リーシエに相槌を打ちながらも、シーナは少し顔をしかめている。決して料理に不満があるわけではない。入口の方から聞こえるどんちゃん騒ぎが五月蠅いおそろのだ。先程まではまだ我慢のできるレベルだったが、酒が入ってきたのか、帝国軍御一行様の喧しさは尚も音量ボリューム上昇中である。

「ぎゃはははは。それ本当かよ、お前酷過ぎ」

「全く悲惨だったよな。こいつ女相手でも遠慮なしに顔殴るからな」

「泣き顔を見ねえと興奮しねえんだよ。それにしてもあの女は具合良かったな」

「お前それ病気だろ。早めに医者いけ医者」

耳を塞ぎたくなるような会話に、女性陣は露骨に顔をしかめている。周りの客を見回しても同様だが、窘めるたしなには至らない。帝国兵はこの場に40人近くいる。会話の内容から察するに、倫理観念モラルがらすれば下の下もいいところ。しかも頭の悪い連中だ。何をやらか

すかわからないから係わり合いになりたくない、といった所だろう。

リージェスにしても、この場が人知れぬ森の奥とかならいくらでも殺り^やようがあるのだが、ここで一悶着起こせば確実に店に迷惑がかかる。一般人に血溜まりと肉塊を掃除させるのは流石に気が引けるし、何よりここは帝国内ではなく他国^{カタルスタ}である。頼み事をする前に揉め事を起こしては己の立つ瀬がない。

ふと周囲からの不快そうな視線に気づいたのが、帝国兵の一人が大声をあげた。

「んだあ？ 手前等何か文句あんのかあ？」

その声と共に、客達は慌てて視線を逸らす。見回している帝国兵達がふいにこちらの席で視線を止める。

「ん、おお、美人さんはっけーん」

「お、どれどれ？」

「おっほー、お持ち帰りけってーい」

酔っ払った帝国兵達が五、六人立ち上がったところへ歩いて来る。隣を見ればそれを苦々しげに睨みつけているリーシエ。意外なことに、大人しそうなシーナも不快そうにそちらに視線を送っている。

揉め事になると察したのか、若女将が慌てて行く手を阻む。

「お客さん。申し訳ないけれど他のお客様のご迷惑になりますので」

男達は一瞬気色ばみながらも、にたりと笑い、色気のある若女将に腕を絡めるように抱き付いた。

「きゃっ。ちよ、ちよっと」

若女将は抗おうとするが、兵士に羽交い締めになされて動けない。

「ああ、あんたも美人だな。あんたでもいいや」

「な、やめてっ。ひっ」

別の男が若女将の正面に回り込み、おもむろに胸元を掴んで両側に思い切り引つ張った。白いブラウスの掛けていたボタンが四方に弾け飛び、服が肌蹴てピンク色の下着を露にされた若女将は悲鳴を上げる。

「きゃー、だつて。かわいいー。もっと聞かせてくれよ」

「お前この間先にやったから、今日は俺からだぞ」

そう言いながらも男たちの手は、頬を赤らめて涙を零す若女将の胸を下着の上から無遠慮に弄まさぐっている。男たちの指が豊かな胸に埋もれてゆき、若女将は泣きながらも何とかその手から逃れようと必死に身を振る。

既に立ち上がっていたリーシエが怒りを露にして帝国兵達へと歩きかけたのを、リージエスが腕を掴んで制する。

「な、リージエ」

「ここは狭いから万一の事もある。俺がやる」

そう言つて、リージェスはゆらりと立ち上がり、男達に近づいて行く。

全身筋肉痛でお世辞にも体調がいいとは言えなかつたが、酔つ払い相手には良いハンデだ。つうか久々にイラつときた。

近づいて来たリージェスを、帝国兵達は一瞬怪訝そうに見つめ、再びニヤリといやらしい笑みを浮かべる。それを見てリーシェは、相変わらず勘違いされてるのね、と独りごちた。

「おお、あんたも持て成してく　　っ」

真つ先に近づいてきた男の顎に、リージェスは遠慮なく真横から掌底打を喰らわせる。男の膝はストンと落ち、地面に突つ伏す。頭を強かに揺らされて脳震盪を起こしたのだ。

「何だあ手前　　」

喋っている男を狙つて、素早く懐に潜り込み、再び一撃。頭を矢で射ぬかれたように、ぐらりと男は倒れ、側頭部を床に打ち付けて痙攣する。

若女将の正面にいた男が殺気立ち、両手で掴みかかつて来る。リージェスはやおら身を屈めて潜り込み、手を避けざまに今度は真下から男の顎目掛けて掌底打を放つ。

「がっ？」

男の体が一瞬宙に浮きかけたが、打ち抜くことまではしない。その方が脳を揺らせるからだ。男はリージェスに体を預けるように前のめりになり、リージェスが脇に寄るとそのまま床に倒れこむ。

あつさりと三人の兵士を無力化したリージェスは歩みを止めず、若女将を拘束している兵士に近づいて行く。

若女将を羽交い締めにしていた男は慌てて彼女を放り出し、剣を抜こうとするが、半分まで抜きかけたところで、まるで水が流れるような足運びで距離を詰めたリージェスに、柄持つ方の手首を掴まれ、その刹那、やはり顎に強烈な衝撃が走り、身体を自由を失う。

「き、貴様っ、女といえど容赦せんぞっ」

テーブルに座っていた帝国兵達は慌てて立ち上がり、剣を抜き始めている。

リージェスが溜め息をついたその途端、今度は後ろから声が聞こえた。

「やれやれ、帝国兵の中にはまともな奴はいないのか。カタルスタでこんな騒ぎを起こして、まさかただで済むと思っていな^っいだろっ
な」

「何っ
」

後ろを振り向くと、食堂の入口には黄緑色のローブを身に纏った男がいた。門にいた兵士達も黄緑色の鎧を纏っていた事から、カタルスタの衛兵だと察せられる。宿の者達が危険を察して助けを呼んだのだらう。

フードを被っているため容貌ははっきりとわからないが、その赤い眼光が意味するところだけははっきりとわかる。帝国兵達に対する強い敵意だ。

「今なら酒の過ちという事で済ましてやる。それ以上を望むなら

容赦せん」

「んだとおっ」

リージェスを囲もつとしていた兵達の半分くらいがそちらへと向き直る。しかし

大気に満みは水 氷の饗宴きやうえんとなりて 彼の者らかのものらを捕らえるべし

凍れる視線を帝国兵達に放っていたローブの男は、既に魔法の詠唱を始めていた。

ジ・フロース
氷結茨

はたと兵士達の四方から水が纏わり付くように立ち上り、次いで根元から上へ瞬時に凍結して白氷の茨と化す。鋭い氷の棘に囲まれた兵士達は目を睜みはり、硬直する。表情を見遣れば殆どの者は酔いが冷めたようだ。下手に動けば氷の茨が容赦なく身体に突き刺さり、血達磨ちたるとまになるのは目に見えている。効果範囲の対象外だったのか、運良く茨を逃れた残りの兵士達も、男に射竦められて全く動けない。ひんやりとした冷気が食堂内に漂い、周りの客の中には身を震わせている者もいる。

階級章を付けている隊長と思しき男が何とか声を絞り出す。

「お、お前こんな事をして」

「私が求めているのはそんな言葉ではない。その者らに謝れと言っている」

ローブの男の威圧的な口調に、隊長は瞬時に口を噤む。

「冷静に考えられた方がいい。今カタルスタとテルネシアが仲違いなかたがひして、果たして困るのはどちらかな」

子供でも分かりそうな答えである。四面楚歌しめんそかになった帝国は、西からカタルスタ、東から諸国連合、南からベール、三方から攻め立てられて嘗てない危機に陥るだろう。そのきっかけを作ったとなれば、上層部の連中が怒り狂う事請け合いだ。部隊員全員が死刑に処されてもおかしくはない。

隊長と思しき男は唇を噛みながらも、渋々頭を下げ謝罪の言葉を口にした。

男が翳していた手を床へと向けると、氷は瞬時に水と化して床に落ちる。床に出来た水溜りは急速に縮まって姿を消していく。

氷の茨から解放された帝国兵達は隊長の命に従い、リージェスに気絶させられた兵達を担いですぐごと部屋に戻って行く。

ローブの男は若女将の方に歩み寄り、フードを取ると、着ているローブを脱いで、彼女にそれを羽織らせる。露になった男の顔は少

々頬がこけているが眉が太く、ふさふさとした豊かな黒髭が生えている。髭に白い物が殆ど混じっていないのを見ると、見た目よりも幾分若いようだ。

「あ、ありがとうございます」

若女将は男とリージェスを見比べる様にして涙ながらに礼を述べた。

「こちらからも礼を言わせて貰おう。我が国の民を守ってくださり、真に感謝する」

男はリージェスに頭を下げる。

「いえ、こちらこそ助かりました。流石にあの人数を相手にするのは面倒だったので」

その言葉を聞き、男の眉がピクリと動くが、ふいに表情が和らぐ。「面倒、と言う事は出来なくなかった、と言う事かな」

「ああ、そうですね。言葉のあやです」

悪びれた様子もなく、リージェスは言った。それを見て男はさも面白そうに微笑む。

「申し遅れた。私はマスクール＝セントレイド。カタルスタの宮廷魔術師だ。貴公の名は」

「リージェスです。しがない旅人です。あと、一応男です」

「ははは、リージェス君か。以後宜しく」

そう言ってマスクールは手を差し出す。リージェスは一瞬きよとんとしたが、直ぐに笑みを浮かべて握手に応じる。

マスクールは若女将を伴って食堂を退出し、再び周囲は活気を帯

びて来る。周りの者たちはスツとした表情を浮かべている者もいたが、どこか後ろめたさを感じる表情を浮かべる者もいる。自らの手で救出できなくてはつが悪かったのかもしれない。

「驚きました。リージェスさんって見かけによらずお強いんですね。格好良かったです」

シーナは手放しの称賛を口にする。

「あれくらいなら、こいつもできますよ」

そう言ってリージェスはリーシェを指差す。

「ええ、リーシェさんってそんなに強いんですかっ」

レナードがやや大きな声を上げる。

「え、ええ。長い間旅をしているので、自衛手段くらいは身に付きました」

「なるほどねえ、うーん。人は見かけに寄らないなあ。こっちのシーナもねえ、可愛い顔して相当　　いだっ」

急に悲鳴を上げたレナードに、リージェスとリーシェは僅かに仰け反る。咄嗟にシーナの方に視線を送るが、彼女の両手はフォークとナイフで塞がっている。おそらくは蹴りでも入れたのだろう。

「口の軽い男の人は嫌われちゃいますよ？」

シーナはそう言って笑みを浮かべる。

ややあつて、談笑していたリージェス達の円卓に三人のウェイター達が現れ、メニューに書かれていない豪華な料理を並べていく。

「あの、これは　　」

戸惑うリージェス達にウェイターが微笑みながら返答する。

「女将さんを助けていただいたお礼です。従業員一同、

本当に感謝しています。我が宿自慢の料理人達も厨房ではりきっていますので、是非ご堪能下さいませ」

四人は顔を見合わせ、やおら破顔した。

メインディッシュ

主菜のハンバーグステーキから取って代わった、舌で蕩ける柔らかさの絶品サーロインステーキを堪能する。ステーキソースがまた素晴らしい味だ。リージェスはその味を記憶に刻むべく、何度もソースだけを口に運ぶ。

その傍ら、段々と酒が廻ってきたのか、女性二人の会話はちよつと危険な方面へと進んでいく。リージェスはキールと飲む機会が多かったため、幾分酒には慣れていたが、リーシェとシーナはグラス一杯飲んだだけで顔が真っ赤になり、二杯、三杯とお互いのグラスに注ぎ入れては飲み干している。早くも二本のビンが空になり、にこやかなウェイターから三本目が振舞われた。

「さささ、もう一杯どうぞお。 ねえ、リーシェさんって恋人いるのぉ？」

「ええ？ そんなのいないですよお。そういうシーナさんこそお、いい人いないんですかぁ？」

リージェスは下唇を突き出す。言葉が間延びしているのはあまり良くない傾向だ。

「そおねえ。ペットなら 」

「 シ、シーナさん。宜しければぐぐつともう一杯。ささっ、ぐぐつと」

レナードがおたおたとシーナのグラスに白葡萄酒を注いでいる。

「あらあ、いつも悪いわねえ」

シーナは8割ほど注がれたグラスを手にとってぐぐつと一気に飲

み干していく。

「ぶはあっ」

ぶはあつて。いや、いいんだけどね。

「わあ、シーナさんいい飲みっぷりい。尊敬しちゃいますう」

あまり煽るな、リーシエ。

「うふ、ありがとお。それにしても、リーシエさんって本当に綺麗ねえ。私、綺麗な女の子も大好きよお」

「えへへえ、そんなに褒めてくれる人お、他にいないですう」

女性陣は、もはやへべれけに近い。

(……これはいかん)

やおら危険を察知したリージェスとレナードの視線がふいに交錯し、同時に頷く。男性陣の心は今一つになる。

「お、おいリーシエ。そろそろ……」

「何よおリージェスう。大体い、俺から離れるなって言ったのリージェスでしょお」

(……え)

唐突に話題が転換し、リージェスは戸惑いを見せる。

「……それなのにい、どうして私を置いて行くのよおっ」

割れるんじゃないかと危惧する程に勢いよく、グラスをテーブルに叩き付けたリーシエの目に、急激に涙が溜まって来る。普段は泣き上戸でもないのだが、どうやら幼い頃と最近の記憶が混濁しているようだ。

「ああ、わかつたつて。俺が悪かつたつて」

絡み酒質悪し、と思いなながらも、リージェスは転んで膝を擦りむいた子供をあやすかのように、リーシェの頭をよしよしと撫でる。ふいに、リーシェはリージェスに寄りかかる様にして抱き付いて来る。リージェスは椅子が倒れそうになるのを慌てて前に重心を掛けて踏みとどまり、胸に顔を埋めてしゃくり上げるリーシェの背をポンポンと叩く。

「す、すいません。ちょっと先に失礼します。こいつを寝かしてきますんで」

「あ、ああ。わかった」

リージェスと、彼に背負われたリーシェが席を外し、退出していく。リージェス達の後ろ姿を見送ったレナードは独りごちる。

(むむう……単なる兄妹愛にしては少し行き過ぎの面が。……もしや、これが禁断の　はっ)

ふいに自分の置かれた状況を思い出すとレナードは思考を中断し、ナプキンで急いで口を拭く。

「じゃ、じゃあ僕達もそろそろ……」

そういつてレナードが席を立とうとするが

「　　待てい」

裾をシーナに引っ張られ、レナードは恐る恐る振り向く。

「シ、シーナさん？」

焦点の定まらない瞳をぐるぐるんと回しながらシーナは一言。

「　　気持ち悪い」

半開きの口に手を当てているシーナを見て、レナードの顔が引き
締った。

其の二十九 く予期せぬ出来事（裏）く

884年 3月8日

翌々日、何とか二日酔いの酩酊状態めいていから立ち直ったリーシェを伴い、リージェスは宿の従業員一同に見送られながら宿を出た。

宿の者達は二日間に亘わたって若女将を救ってくれたリージェスを大層もてなした。朝は兎も角、昼と夕の食事は一人では食べきれぬ程に豪勢だったため、レナードとシーナを同じ席にと誘った。

四人の中で一番飲んでいたにもかかわらず、何故かシーナは翌日にはどこか清々しい顔をしていたが、飲み慣れていないリーシェは相当な頭痛を発症し、うんうん言いながらぼぼ丸一日をベッドの上で過ごす羽目になった。それでもリーシェがどこか嬉しそうだったのは、リージェスが殆ど付きっきりで看病してくれたからに他ならない。

二人は城へ通じる運河沿いの道を歩いていく。見えてきた小高い丘陵の上には、段々になつている落差の低い滝が二つ、静やかに水音を潜めて流れており、蜘蛛の巣を思わせる下街の水路へと繋がっている。

年季を感じさせる所々が黒ずんだ大きな石橋の上で立ち止まってみれば、上流には川岸に沿って薄色を束ねる草花が目にも優しく映り、下流の方を省みれば、背の低い建物が景観を損ねぬように密やかに佇んでいる。そして、街の中央に目を移せば水路で精密に象られた七方星に囲まれている魔法学院の校舎が視界に入ってきて来る。更に、

視線を上方へと傾ければ、薄雲を背景に空を悠然と飛ぶ飛翔動物達の姿がある。

絵心がある者ならず立ち止まるであろう、この素晴らしい展望点を離れるのは聊か心残りだったが、二人は再び歩き出し、王城への道を進む。

リージェスの隣に並んで歩いているリーシエが口を開く。

「そう言えばリージェス、助力を頼むって昨日言っていたけれど、具体的に何か考えているの？」

リージェスはややあつて返答する。

「出来れば帝国に敵対して欲しい所だけれど、何分同盟国だしな。断る大義名分は腐るほどあるから、頭の良い奴に理論武装されたら、うん？と言わせるのは限りなく不可能に近いだろ」

「そうだね。それじゃあ、陰から力を貸して欲しいって頼むの？」

「帝国は今、イアニス教団と敵対しているだろ？　そして、帝国軍の中には相当数のイアニス教信者がいる。そいつらの家族を、カタルスタに匿って貰おうと考えてる」

リーシエは柳眉を潜める。

「さ、流石に無理じゃない？　土地は広いから何とでもなるだろうけれど、食費や住居費にどれだけお金かかるかわからないし」

「勿論、金の事まで工面して貰おうとは思ってないさ」

「え、そんな大金の当て、他にあるの？」

リージェスは胸を張る。

「ないに決まってる」

がつくりと体勢を崩すリーシエに、続けざまに言葉を紡ぐ。

「当たりをつけておかないとスポンサーを探す事も出来ないから、戦争が終わるまで土地を借りられるかを訊きに来たのさ」

丘陵の上に辿り着くと、澄みきった小さな湖が左右に二つ姿を現した。その間を縫うようにして北へと続く道幅の広い並木道が続いている。空から見れば眼鏡のようにも見えるのではないだろうか。

二人は馬車の行き交う道の端を、城の方へと向かう通行人達に混じって歩いて行く。真っ直ぐに続くブナの並木道を歩いて行くと、ついにカタルスタの王城がその姿を現す。道路の外側は短く刈り込まれた芝生に覆われており、その上に様々な形をした植木が植えられている。

「うっはー」

リージェスは思わず叫んだ。

深緑色の幾つもの植木は、見事な等身大の剣と盾を持った兵士の形にされており、道路を中央に見立ててそれを見守る様に、左右に規則正しく配置されている。兵士だけではない。並木道の出口付近では開いた本を片手に持つ魔法使い、長く鋭い槍を天に翳した騎士、そして通路の中央に陣取っている、膝くらいまでの高さがある丸い花壇には、頭に大きな冠を戴く一際大きな男性が、小さな冠を戴く女性の肩を抱く様にして寄り添っている。

「チエスの駒に見立てているのか。どんだけ暇なんだよ」

含み笑いを漏らしながらも、リージェスは植木職人の洒落っ気に脱帽し、目を輝かせている。剣を持っているのはポーン、馬に乗っているのはナイト、本を持つのはビショップ、王冠を戴く男女はキングとクイーン。

「あれ、一つ足りなくない？」

「ああ、キングが最後でない辺りが捻くれているけど、あれでいい

と考えたんだろ」

確信しているかのように、リージェスは悠然と聳え建つ古城を指差し、リーシエはそれを見て得心する。ルーク、つまり城は、わざわざ作らずとも目の前にあったのだ。

城門に近づくとつれて側面の芝を遮る黒塗りの鉄柵が高さを増し、二人の背丈を追い越していく。柵の上方の鉄板にはチューリップの彫刻が施され、その上に鋭利な槍が幾つも連なっている。

段々と視界に幅を利かせて来る、黄土色基調の壁に囲まれた王城は、高さはそれほどないものの、どこか恬然とした雰囲気擁していた。城郭からはカタルスタの国旗が掲げられている。国色、黄緑色を基調とした旗の中心に、白い海豚イルカのシンボルだ。

徐々に聞こえて来る喧騒に二人が上げていた視線を元に戻すと、門前は多くの人でごった返していた。道を引き返してくる人の表情は何故か浮かない。その理由は、城門の前にいた兵士達の言葉を聞いた事によって初めてわかるのだった。

「何度も言っているでしょう。駄目な物は駄目です、居住権は発行できなくなりました。申し訳ないがお引き取りください」

黄緑色の、肩当てのない軽鎧を身に纏った長身の若い兵士が、無機質な口調で喋っている。口調だけではなく、表情にも特に感情が読み取れないので、生来のものなのだろう。

「ええ、そんなっ。つい一週間前までは出来たじゃないかっ。お客さんに何て説明すれば良いんだよっ」

兵士に食い下がる様にして、見た目三十台のスキンヘッド男が苛立ちの声をあげている。しかし、兵士に掴みかかるまではしない。筋肉質且つ長い腕と190近い身長から来る威圧感トランプルは、それだけで兵士を様々な諍いから守る防波堤となっている。

「そちらの事情は知りませんが、国と国の関係などコロコロ変わるもの。そもそもそんな商売を認めてもありません」

「ふざけるなつ。ここまで必死に逃げてきた人達を突き離すつていつのかつ。あの人達には帰る場所がないんだぞつ」

脇にいた別の若い男性からも怒声が飛ぶ。会話の内容から察するに、兵士達を取り巻いている男達は、テルネシアの方面から逃げて来た者達に住まう場所を斡旋している業者の様だ。

怒りが籠る言葉を、兵士は顔色一つ変えずに受け流す。

「無論、気の毒には思っていますが、それとこれとは別です。これは列記とした 仕事ですから」

気の毒と言いながらも感情が一切含まれていなそうなの言葉に、男達は露骨に顔をしかめた。

「……くそつ。絶対諦めないからな」

「智慧の国ゆえに思想は自由です。どうぞお好きに」

「つ」

皮肉とも比喻ともつかないその言葉に数人の男達は舌打ちをし、踵つばきを返す。苛立ちを隠さず、人垣を押し分けるようにしてこちらへ向かってくる。

「どけつ」

八つ当たりか、ドンツとリージェスに肩をぶつけてきたスキンヘッドの男は、他の男たちを伴って大股で街の方へと去っていく。

「ちょ、なんの」

気色ばみ、男達を引き留めかけたリーシエの眼前にリージェスはすかさず手を翳す。

放っておけ。目でそう言うリージェスに、リーシエは渋々頷く。

遮られていたであろう、人の流れは再び緩やかに動き始める。中にはすんなりと王城に入って行く者達もいたが、そういった者達は兵士に何かしらの証明書らしき物を見せる素振りをしている。

リージェス達二人が兵士達の前に立つと、長身の兵士は視線を下に落とす。リージェスも上背はそれなりにあるので、あまり相手を見上げるといふ事には慣れていない。

「何の御用件でしょうか」

リージェスは相手の視線を真つ直ぐに受け止めながら答える。

「テルネシアの戦争の件についてお話したい事があるんだが、誰か偉い人に取り次いでもらえないか」

「お断りします」

無碍なく断られる。想定内の返事だったので、二の句を接ぐ。

「そんなつれない事言わずに」

「規則ですから。大体、私にそんな権限もない」
にべもない。表情を変えずに、兵士は言い切った。

しかし、尚もリージェスは粘り腰で喰い下がる。

「じゃあ、そういう窓口とかない？ 国民が苦情を言う投書箱とか」
兵士はやはり表情を変えない。

「ない事もないですが、そんな事書いても無駄です。基本的に、」

我々カタルスタは他国との関わりを断つ政策方針ですから」
リージェスの耳がピクツと動く。

「……あれ、カタルスタは帝国とは同盟を結んでいますし、ベールとも縁浅からぬと聞いていますけれど？」

リーシェの援護射撃。

しかし兵士は動じることなく、滑らかに舌を動かす。

「何か勘違いなさっているようですが、今の帝国とはもう同盟ではありません。つい先日、ブラージウス皇帝からの使者が来て、同盟は双方の合意によって破棄され、不可侵という風に落ち着きました。お読みになっていないようですが、今朝の新聞にも出ていますよ」

その言葉に二人は目を見開いて驚愕し、同時に、何故カタルスタの宿に帝国兵がいたのかを理解する。多分連中は、その使者とやらの護衛任務についていたのだろう。

（帝国から見て、同盟を不可侵に換えるメリットは何だ……）

普通に考えれば、同盟は取り交わした相手に対して援助を申し出ても問題がない分、不可侵条約よりも利はあるはずである。だが、その分両国間の往来は比較的自由でもある。

（つまり……、テルネシアの方には来て欲しくないって事なのか。何故今になって……）

可能性が二つ思い浮かんだ。一つは、当然何かしらカタルスタに隠したい事があること。おそらくは軍略がらみだろう。それについては確証はないが、心当たりはある。

そしてもう一つは、リージェスの目的と確実に衝突する。

（心有る帝国兵をカタルスタに逃がさないため、か）

カタルスタに国境を塞がせれば、帝国軍にいるイアニス教徒に逃

げ道はない。ベールと戦うか、それとも帝国に弓を引くかの二択を迫られる。不安分子を色付けし、火傷を負わぬうちに駆除してしまおうという考えか。少々深読みし過ぎな感も否めないが、おそらくは当たらずとも遠からずだろう。

「じゃ、じゃあベールとは……」

リーシエの言葉に、兵士は小さく首を振る。

「確かに、イアニス教団の法王グルツセル様と先代の賢王ロディエール様には繋がりがありませんが、兵を貸せ、と言われても丁重にお断りする程度の仲には変わりありません。既に先代も隠居されていますし、現在の関係は言わずもがな、です」

リージエスは一瞬リーシエと顔を見合わせ、再び兵に視線を戻す。「何で関わりを断つんだ？ 他国のドンパチなんかに関わりたくないってのはまあわからないでもないけど、いくら他国とはいえ力無き者が苦しんでいるのを黙って見過ごしていられるほどにカタルスタの重臣達は厚顔無恥こつがんむちなのか？」

遠慮のないリージエスの挑発に、無表情だった城兵の顔が微かに引き曇った。しかし直ぐに元に戻る。

「一介の兵卒である私に、上層部の方針等計りかねます。よって返答も致しかねます」

上手く逃げられた。どうやら、今はこの鉄面皮を説得できる術はないようである。

(……しょうがない、一先ず退散するか)

「わかりました。お忙しい任務の中、色々お答え頂きありがとうございます」

リージェスは、彼にしては馬鹿丁寧な礼を言い、敬礼をして身を翻す。

慌ててそれに続いたリーシェがチラリと後ろを一瞥すると、兵士はリージェスの言動に思う所があったのだらうか、並んでいる者達に対応しながらもずっとこちらの方に視線を送っていた。

淡々と階段を下りていくリージェスに、リーシェは後ろから声をかける。

「あっさり断られちゃったね。このまま黙ってはいないんでしょ。どうする気？」

「どうやら行動パターンも大分読まれてきているな、とリージェスは苦笑する。」

「今出来る事は、お勉強だな」

リージェスの言葉に、リーシェは思案する。

「お勉強って魔法の？」

「魔法も勿論使いたいな。先日セントレイドさんが使っていた様な、応用の利く魔法があれば得意の剣技も活かせるし。でも」

リージェスは振り返り、カタルスタの王城を見上げる。

「今までここに来た事がなかったのも大きいが、正直言つてこの国については不勉強すぎた面がある。納得させるにはそれなりにこの国の事を把握しておかないと難しそうだ。なんでそこまで頑かたくに閉鎖的なのか、どこかに説得できそうな穴はないのか。何よりも、今回帝国の申し出をあっさりと受け入れたのは何故か、その背景を知りたい」

「でもどこで、ああつ、図書館ね」

昨日見た地図を思い出したのか、リーシェが手を叩く。この街の中心部、つまり魔法学院から見て東の方に、魔法図書館があるのだ。「ああ、まずは相手を知らない事には何も出来ないからな。酒場で情報を集めるのも良い。でもその前に」

「ああ、うん。アルバイトだね」

話が途端にせせこましくなり、リーシェのテンションが大分下がる。リーシェさんの財布の中身、残り4000ギラ足らず。ちよつと裕福なご家庭の、子供の小遣いより貧相だ。この経済的苦境は如何^{かん}ともし難い。

其の三十　　（新米魔法講師（裏））

884年　3月10日

カタルスタ国立魔法学院職員寮内

赤、青、緑、けばけばしい柄の、毛足の長い絨毯が敷かれている部屋の中で、まるで呼吸しているかのように、淡く、濃く、白い光を放つ何かが、ゆらゆらと宙に浮かんでいる。10cm程の光球は、一見ではわかりにくいのが、よくよく目を凝らすと光の中に薄っすらと輪郭が見えてくる。それはまるで、羽の生えた人の様であり、服らしき物を着て眼を閉じている。

その下では銀縁の丸いレンズの眼鏡をかけ、薄い水色の法衣を身に纏った理知的な女性が、手前が流線型で奥行きのある書斎机に肘を付きながら椅子に座っている。黒髪をツインテールにしている彼女の目の前には、たくさんの紙が積まれていた。黒字と赤字で構成されているそれは、何らかの試験のようである。

（うーん、駄目っぽい……）

自分の受け持っているクラスの生徒達の点数の低さに、彼女は頭を抱えた。

三日前に行った小テストの成績は、学年に十二クラスある内の中で十番目だった。学院側が彼女の能力に期待している度合いから言

えば、看過出来るものではないかもしれない。

赤ペンを行儀悪く上唇と鼻の間に挟み、再び考え事をする。

（教えるって事がこれ程難しいとは思わなかったわあ……）

そう思いながら、自分の胸元にある名札に視線を移す。そこには？魔法講師・エステルⅡシャトルーと書かれている。並びに、彼女はカタルスタ王宮に仕えている宮廷魔術師の一人だった。

エステルⅡシャトルーは幼少の頃から、所謂勘いわゆるがよかった。何でも感覚を頼りにやっつてのけてしまっ、そんな所が見受けられた。例えば、記述式の問題は不得意だが、選択式の問題なら何故か満点に近い。基本問題は解けないのに不思議と応用問題が解ける。数学の証明問題はプロセスが滅茶苦茶なのに何故か答えだけはあっている。そんな掴み処のない子供だった。

幼い頃、エステルはカタルスタの普通の学校に通っていた。教師達から上の下程度の子供だと思われていた彼女が、魔法の才を開花させたのはかなり遅れての事だったが、十五歳を境に著しく魔力が伸び始め、瞬く間に周囲の注目を集めた。魔法学院へ編入してはどうか、という教師たちの薦めに応じ、エステルは十六歳になる少し前に魔法学院へと転校した。

入学当初こそ悪戦苦闘していたエステルだったが、半年を経て素晴らしき師に巡り合い、徐々に魔法書を使いこなせるようになっていった。感覚に頼り切っていた部分が経験によって裏打ちされ、効率良く己の力を使いこなすコツを得た事によって、眠っていた才能が一気に覚醒したのだ。

今でこそ、エステルはうら若き宮廷魔術師として敬われているが、そんな経緯もあつてか自分の力や立場には無自覚無頓着だった。

宮廷魔術師になつたのは二年前の事。暫くは王宮で、文系政治家の一步手前のそのまた真似事らしき事をしていたのだが、保守的な気運と停滞を由とする老人達、それを取り巻く有象無象うせむせむせうの者達の考えに付いて行けず、苛々を持って余すことも度々あつた。いつそ、こいつらを事故に見せかけて……、とまで思つた事は一度しかなかったが。

そこで退屈な宮仕えを休止すべく、彼女は「将来、国の礎となる魔法使いを育成したい」とか、もつともらしい事を述べ、天の采配か、今年魔法学院に講師として招かれる事に成功した。

だがそこで、エステルは？使える という事と？教える という事の天と地程もある差を思い知らされる羽目になつたのである。

一ヶ月前

出勤初日、即座に職員室に専用の机が宛あてがわれ、エステルのスペースが作られると、周りの教師達からは暖かな拍手で迎えられた。カタルスタにおいて宮廷魔術師とは、？最高峰の魔法使い？の称号を得た者と同じ語であり、その立場にあるエステルが学院に来るとなれば、俄にわかに活気付くのも当然だった。

事前に受けていた注意事項を、ベテランの教師達から今一度口頭

で確認すると、今日使う教科書をいきなり渡され、言われるがまま、傍目には三十前後の、付き添いの女性教師と共に教室へ向かう。もう新学期が近かったため、教えるとしても四月からだろう、と思っていたエステル予想は見事に裏切られた。

エステルが受け持ったのは初等科の教室という事で、生徒の年齢は六歳から九歳までだ。学院側としては、名高い宮廷魔術師に教えて貰えるならば小さい頃からの方が良いと判断したのかもしれない。やるからにはしっかり教えねばと、エステルは腹を括る。

教室に入った途端、自由に授業の準備時間を過ごしていた生徒達の目は女性教諭に、続いて見知らぬ自分に視線を集中する。

「おはようございます」

『おはようございます』

一斉に、とはいかないまでも、おおよそ三十人いる内の大体の生徒達が挨拶を返してきた。その双眸そうまうから発される光が眩し過ぎてエステルは思わずたじろぐ。うーん、果たして自分にもこんな純粋な時期があつたのだろうか。

「昨日もお話ししましたが、今日からモーモ先生は産休で半年間お休みです。新しく変わりの先生が来てくれる事になりましたのでご紹介します」

その言葉に対しては、生徒は肯定的な反応と否定的な反応で真っ二つに分かれた。やはり、万人受けする授業をするのは難しいのだろう。

「今？やったー？、とか言った人。後でモーモ先生に言い付けちゃうからね」

女性教諭のその言葉に、教室のそこかしこから笑いが漏れる。

「じゃあ、シャトルー先生。お願いしますね」

エステルは頷き、女性教諭と入れ替わる様にして一歩進み出る。

「初めまして皆さん。私の名前はエステル〓シャトルー。実は私もこの卒業生なので、こうして久し振りに学び舎に入ってみますと懐かしさも一人ひとりおです。初めて教壇に立つので、色々ご迷惑をかけちゃうこともあるかもしれませんが、皆さん、どうぞ宜しくお願いします」

『よろしくお願いしまーす』

元気の良過ぎる挨拶に気圧されつつ、エステルは会釈して一歩下がる。

子供達に挨拶を終えた後、付き添いの教師がエステルの経歴を掻い摘んで紹介すると、途端に子供達の目がキラキラと、宝石のように輝き出す。

「す、すっげー、キュウテイマジユツってつえーんだろ？」

「あたし達も、そんな風になれるのかなっ」

称賛と憧れの言葉を次々に口にする生徒達を、付き添いの教師がパンパンと手を叩いて宥なだめる。

「はいはい、皆静かにねー。シャトルー先生の言う事をちゃんと聞かないと、先生が喚よび出したドラゴンに食べられちゃうぞー」

(いやいやいや、流石にドラゴンはー……)

そう言おうとしたエステルだったが、この脅しは効果こうか観面くわめんだったようで一瞬にして教室に沈黙が訪れた。口を半開きにしたエステルが視線を水平に泳がすと、目の合った生徒が次々にビクツと仰け反

って小さい身体を震わせる。嫌過ぎるウェーブだ。「無理です」と言える雰囲気はとうに削がれていた。

「宜しい、皆良い子ねー。じゃあシャトルー先生。後はお願いしませぬ」

エステル的心情を察する事無く、生徒達が大人しくなった事に満足そうな顔をして、付き添いの教師は教室を出ていった。

何とか気を取り直したエステルは、事前に見た今日の予定表を再び確認する。

一、二時限目、魔法理論

これについては、一応そつなくこなす事が出来た。基本的に与えられた教科書を順番に読んでもらい、生徒が読めない字はしっかりと教えて恙なく進行させる。

「 というわけで、魔法は徐々に大衆に受け入れられるようになっていった」

「はい、そこまで」

エステルは読んでくれた生徒を着席するように促し、黒板に魔法の定義を記していく。

「皆さんもある程度は知っていると思いますが、魔力とは多かれ少なかれ、どんな物にも宿る力です。動物、植物、岩とか水、人工物、様々な自然現象、そして大気」

時折、生徒達の方向を振り返ると、生徒たちは真剣にノートに書き込んでいる。

な、何て凄いのこの子達。こんな退屈な授業なのに寝ないで勉強

しているわ。等という驚きはおくびにも出さず、エステルは授業を進める。学生の頃、エステルは圧倒的に実技が好きだったのだ。

「さて、魔力には魔法を使う以外にも使い道があります。その主なものはなんでしょうかー？ わかる人いますかー？」

ちらほらと手が挙がり、エステルは最前列の少年を指差す。

「はい、ええつと……マツコム君」

机の位置と座席名簿の名前を一致させ、エステルは指名する。

「フィールですっ」

「おー、正解ですっ。じゃあ、ついでに聞いちゃおうかなー。フィールとはどういった現象ですかー」

「あれ、ええつと」

むむむと、十秒くらい首を傾げた所でマツコムを着席させる。仮に記憶の片隅にあったとして、十秒で思い出せないものはおそらくその授業中には思い出すまい。

「まだ習っていないのに言葉を知っていただけでも立派ですよー。じゃあ覚えておきましょう。フィールとは眠っている魔力を体の一部、もしくは全身に？ 充填？ させる技術の事です。これにより身体の細胞を一時的に活性化させて能力を底上げし、平常時以上の俊敏さ、或いは力を発することが出来ます。魔法を使う時とは少々仕組みが異なりますが、カタルスタでも高位の魔法使いには使える人もいます。まだまだ、一般的には浸透していませんが、生来的に得意としているのは獣人ライカンですねー」

「先生、それって僕達でも使えるようになりますか？」

「勿論。ちゃんと毎日練習すれば、ね」

エステルは片目を瞑る。

わからない事がないか質問を採り、あればそれに答えていく。既に学期末であり、生徒達も基礎的な知識は大体理解していたし、理論についてはつい二年前、エステル自身が宮廷魔術師の試験を受けるために勉強を一からやり直したので説明するのにさほど苦労はしなかった。また、魔法学院は入る前に受ける入学試験もそれなりに難しいので、それを潜り抜けている以上、生徒達にそれなりの才覚はある。気持ち悪い程スムーズに進むので、エステルは拍子抜けした。

一限毎に十分の休憩を挟むのだが、休憩になった途端、教壇に生徒達が押し寄せて来て、エステルは質問攻めにされる。

「ねえねえ、魔法何個くらい使えるの？」

うーん、数えた事ない。百個以上なのは確か。

「シャトルー先生の小さい時ってどんな子だったの？」

ホント、今とあまり変わらないよお。

「キュウティマジユツシの試験って難しいの？」

私でさえ受かるんだから、何とかなるんじゃない。

「どこに住んでるの？」

今日からは学園内の寮ねえ。

「兄弟とかいるの？」

ノーコメント。

「お肌少し荒れてるけど、どんな化粧品使ってるの？」

……ノーコメント。

「カレシいるの？ いないなら俺なんかどう？」

十年早ーい。

「じゃあ、付き合ってる人はいるの？ いないなら

…… 内容が変わってないんだけど。

中には失礼極まりない質問や答えられない質問も混じっていたが、エステルは頭の中で整理しながら何とか答えていく。内心、子供のエネルギー恐るべし、と驚愕しつつ。

そして、三時限目にきてついに問題発生。

ここまで順調に来て気を良くしていたエステルの授業は、魔法実技の科目に入った途端にのっけから躓^{つまず}く事になった。

生徒達を連れ立って、エステルは魔法学院の訓練場に入る。五階建てほどの高い天井を持つ石造りの建物には、魔力が暴走しない様に各所に印が刻まれている。全員付いて来ているのを確認し、エステルは頷いた。

「はい、皆さん。まずは魔力を開放しましょうー」

彼女の開口一言目に、生徒達はまずきよとんとし、気まずそうに出来ている子がいるのかキョロキョロと周りを見回し始める。

「……あ、あの、先生。魔力って……どうやって、その、開放する

んですか」

暫しの沈黙を破って、エステルから一番近い所に座っていた男の子が恥ずかしそうに手を上げた。生徒達は発言した男の子に一瞬注目し、その後エステルに視線を移して続く言葉を期待する。

エステルとしては予想外の質問に戸惑った。何とか上手く説明しようとして、身振り手振りを交えつつ、頭の中でわかりやすそうな言葉を組み立てる。

「え、えつとお。自分の手の周りに、何か薄くぼんやりと光るふわふわーとした物が見えるでしょー？ それを手の中心に集まる様に意識して

下手糞なパントマイムにも似たジェスチャーを交えた、エステルのだたどたどしい説明を聞きながら、子供達は怪訝けげんそうな顔をして自分の手とエステルの顔を交互に見比べている。誰かが「見えないー」と言ったのをきっかけに、周囲からたくさんの「見えないー」が吹き出してくる。

（あれ……、あれー？）

今の今まで、己の魔力を見るという事は誰でも最初から出来るものだと信じて疑わなかったエステルだったが、ここにきて一から認識を改めさせられるのであった。

結局、その授業では魔力を見る事をスパッと諦め、代わりに精神力を高める為の瞑想を行う事にする。この辺の要領の良さはエステルの長所だ。

しかし、子供というのはじっとしている事が何より苦手な生き物。そんな授業が二時限もあつては堪たまったものではない。うずうずそわそわと身体を上下左右に動かす生徒が余りにも多かつたため、エス

テルは見るに見かねて「外へ行って遊ぼうか」と提案する。子供達は待つてました、とばかりに即座に立ち上がり、歓声を上げた。

（私、やっていけるのかなー）

ままならない生き物達に、エステルの胸には微かな不安が発ち込めた。

昼休み、教師達はエステルの体験談をネタにしつつ、笑顔を交えて昼食を取る。彼等は少なくとも、王宮に犇つこめいている魑魅魍魎ちみもつりょう共よりはずっと好感が持てる人達だ。おっと、比べること自体が失礼だった。エステルは内心で猛省する。

「ははは、中々難しいものでしょう?」

男性教師はそう言いながらも、宮廷魔術師といえども教えるのはそう簡単ではない、という事を知って幾分誇らしげでもあった。

「本当に、皆さんを尊敬しますよー。……正直少し舐めてたかも」

肩を落としてしょんぼりするエステルに、先程の付き添いしてくれた女性教師が笑いながらパンツと背中を叩く。エステルはその勢いで飲んでいた麦茶を少し吹き出す。テーブルに散ったそれを、ささっとハンカチで拭き取る。

「気にしない気にしない。大体、初日からいきなり出来ちゃったら私達はおまんま食い上げ、立場ないじゃない。むしろホツとしてる方もこの中には多いんじゃないかしら?」

そう言つて女性教師が周りに意地悪そうな視線を送ると、なるほど、顔を逸らす人が何人かいらつしやる。

「まあ、慣れですなあ」

年配の教頭がそう言いながら湯呑を両手で持ち、緑茶をずずーつと啜る。その物腰は、如何にも教師達の重鎮といった貫禄ある佇まいである。

「はあ、慣れですかあ」

エステルは復唱する。

そんなこんなでやっと一ヶ月が過ぎ、エステルは子供達にほんろう翻弄されつつも充実した日々を送っていた。このまますつと教師でやっていこうかなー、と思っていた矢先の生徒達の小テストの出来に少々へこむ。

（まあ、何とかなるかー）

気合を入れ直し、採点を終えたエステルはぐぐーつと天に向かって伸びをする。視点が天井に向き、頭上をくるくると、規則正しく円を描くように旋回している羽の生えた小人に気付く。纏う光が明滅を繰り返している。

「あれ、お客さん？」

エステルは小人に尋ね、小人は回るのを止めて頷く。

やや遅れて、ドアをノックする音が聞こえた。

「はいはい、今あけますー」

鍵を外してドアを開けるとそこには、お互いの顔が似ている男女

が
い
た。

其の三十一　　〜思惑（裏）〜

二人のうち向かって左側にいた、黒髪をポニーテールにしている女が丁寧^{ていねい}に会釈する。エステルはまず、その体から滲み出る魔力の大きさに目を瞠^{もみ}った。凄い雑味があることから判断するに、小さい頃から学んでいるわけではなさそうだが、間違いなく稀有な魔法使いになれる素養がある。

「私はリーシェと言います。こっちは双子の兄のリージェス。不躰^{ぶしつげ}ですが、貴方がエステル^{エステル}とシャトルーさんでお間違^{まちが}いありませんか？」

青髪男の方は、と。

（　　つ、何……これ）

右側に視線を移したエステルは思わず凝視する。男の魔力は女の方よりは小さいが、今まで見た事もないような現象を起こしていた。全身に纏^{まと}っている魔力が少しずつ霧散し、周囲の微細な魔力と融合している。

暫くそれに見蕩^{みど}れていたエステルは、ずり落ちかけた眼鏡の扶持^{ふち}を元に戻し、やっと肯定の言葉を口にする。

「……え、ええ。私がシャトルーですが、どういったご用件でしょう？」

リーシェと名乗った女の方がやや声のトーンを落として話す。

「えっと、研究助手募集と書いてある貼り紙を見てやってきたので

すが、お時間は大丈夫ですか」

（研究助手？）

はて、とエステルは腕を組んで記憶を辿り、ややあって？しまったっ？と舌を出す。魔法講師になる少し前に、確かにそういった内容の貼り紙を仕事幹旋所の掲示板に貼っていた。報酬は相当奮発していたつもりだったが、何分体力がいる仕事内容だったため応募者は全く現れず、半ば諦めてそのまま放置していたのである。魔法講師になってからは、そんなものを貼っていた事すら失念していた。本来なら不要になった時点で幹旋所に届け出て、依頼書を撤去して貰わなければならなかったのだ。

（あちやー、どーするかな……）

今は講師の仕事がそれなりに忙しく、研究に時間を割いている余裕はあまりない。しかし、わざわざここまで足を運んで貰った手前もう募集は終了しました、と嘘をついて追い返すのは己の信条に反する。そもそも、そういつた事を平然とやっている宮廷の連中を嫌ってここに居るのだし。

（まー、お金に余裕はあるし、研究は後でも出来るし、何より折角来てくれたし）

エステルが何気なく、リージェスと紹介された青髪の男を見ると、リージェスはエステルの頭上を見て視線をゆらゆらと遊ばせている。次の瞬間、エステルは「まさかつ」と驚愕する。

「付かぬ事をお聞きしますが……、貴方ー、さっきから何を
見ているのですかー？」

エステルの質問に、リージェスは首を傾げる。

「何って、そいつを見ているんだけど」

そう言ってリージェスはエステルの上でゆらゆらと飛んでいる光球を指差した。やはり、この男には視^みえている。

(この人……何者?)

エステルの思考が疑問で埋め尽くされそうになったその時、リーシェがリージェスに向かって訊ねる。

「リージェス、そいつってこの季節に蚊でもいるの?」

見当違いの事を言うリーシェにリージェスは目を丸くする。

「仮に蚊がいたとして、蚊よりは断然こっちが気になるだろ」

リーシェは若干言葉に苛立ちを含める。

「だーかーらー、こっちって何の事を言ってるのよ?」

何か言おうとしたリージェスを、エステルの言葉が遮る。

「リーシェさん……って仰いましたね。わからないのも無理はないのです。本来、この子は見えない方が正しいのですから。私の頭上には通常、他の人には見る事ができない、そう……使い魔とでも言うべき存在がいます」

その言葉に、リージェスとリーシェは顔を見合わせる。

「使い魔って、このちっちゃい奴の事か?」

「そうです。術者の魔力が何らかの動物を形作ると、そう呼ばれる事があります」

「ええっ。そんなのいるの? 見たいっ見たいっ」

リーシェがだだを捏ね始めたのを見てリージェスは溜息を付く。

「……お前、今の聞いていたんだろ? 見えない事が正しいんだって」

「そんなあつ。リージェスだけずるいつ、どうやって見てるのっ」

「あ、あのー」

エステルが終わりそうにない会話を割る。

「ここじゃあ何ですから、お上がり下さい。大したもてなしは出来ませんが、この子をリーシェさんにお見せする事くらいはできますよー。お仕事の詳しい説明も兼ねて、どーぞ」

中に招かれた双子は、物珍しそうに部屋の中を見回している。

「そのソファーにかけていてください。今緑茶を淹れてきますのでー」

「ああ、すみません。ありがとうございます」

食器棚からティーカップを三つ取り出して緑色の粉茶を一匙入れ、火の魔石が埋め込まれている金属製のポットを傾ける。常に一定の温度を保っているポットから、沸点より少し低い温度の湯がカップに注ぎこまれる。軽く匙でかき混ぜてからトレイに乗せる。

そう言えばと、エステルは流し台の下にある小さな氷室ひむろを開ける。そこから貰い物の栗羊羹を取り出した後、溶けかけている氷に向かって初級の氷結魔法をかける。溶けて水となった部分がすぐさま氷に戻ったのを確認して、エステルは氷室ひむろを閉じた。

「お待たせしましたー」

「ああ、どうもありがとうございます」

座っていた二人が揃ってぺこりと会釈したのを見て、エステルはほくそ笑んだ。

まるで、本物の双子みたいだ。

エステルはカップを丁寧に客人の前に置き、自分も一口飲んでからカップを背の低いテーブルに置く。時計にちらりと視線を送り、19時過ぎである事を確認する。

「お話の前に一つだけお答え頂きたい事があります。失礼ですが、お二人はカタルスタの方ではありませんねー。一体どちらからいらつしゃったのですかー？」

出自を確かめるのは、万が一にも他国の間諜に潜伏されるのを防ぐためだ。今は講師として働いている身だが、宮廷魔術師の資格を放棄したわけではない。

リーシエはリージェスと視線を交わしてから口を開く。

「私達は小さい頃からテレジア大陸を旅していきまして、つい一年前まではエアリアにいたんですが……」

言葉を濁すリーシエを見て、エステルは少し視線を下げる。隣国だけに現在のエアリアの窮状はカタルスタにいるエステルにも伝わっていた。

「それは、お気の毒に……」

エステルの言葉に、リーシエは小さく首を振る。

「いえ。それで暫くはゴルフレッドに滞在していたんですが、リージェスがカタルスタに行きたいって突然言い出しまして」

「あら、それは何故ですかー？」

エステルは隣にいるリージェスに視線を向けた。

「多分シャトルーさんもご存じでしょうが、あちらではブラージウス率いる帝国軍が各地に侵攻し、力無き民達は苦しみに喘いでいま

す。俺達二人の剣の師も殺され、このままでは他の親しい知人達にも害が及びかねないので、奴等に対抗する術を必要としています」
途端にエステルは眉間に皺しわを寄せる。

実を言えば、カタルスタにこのような男が来るのは初めてではない。戦争が始まってからというもの、力を借りたいと言って助力を願い出る各国の使者や、復讐したい、対抗する力を得たいといった動機で魔法を学びにやって来た者が結構いる。

かくいう魔法学院にもそういう輩がしばしば顔を出しているようである。彼らの多くは腹に一物抱えているか、胸に怨望を抱いているかのどちらかだ。少なくとも、助力を仰ぐ相手に対して配慮しよう等と考えている者は殆どいない。それは彼らの必死さがそうさせるのだ、と言えなくもないのだが。

「それで、一回カタルスタの上層部に掛け合ってみようと王城にも顔を出したんですが、敢え無く断られました」

「それは当然でしょうね」。カタルスタは外の事に関しては一切口を出さない方針ですし」

「勿論、それが間違っているとは言えません。実際、入口の前にいた兵士の言い分は全て筋が通っていた。そこで、ちょっとこの国の事を調べたい、と思っただんです」

エステルは虚を突かれたように首を傾げる。

「この国の事、ですか」

「ぎりぎりこの国に許される範囲での助力を、図書館で下調べして書類に纏めようと思っただけです。ただ、それには当然、この国の法律や歴史についてもある程度触れておかないと無理ですから」

(……ふーん。ただの俗物かと思っただけだけど、それなりに頭は柔らかかそうねー)

だがしかし、今の上層部が揉め事の火種を受け入れるか、と問われたら正直厳しいと言わざるを得ない。喩えそれがどんなに些細な事であつても。

「ところが、その前に切羽詰まった問題が発生しまして」

「あー、もしかして滞在費が尽きちゃったのねー」

リージェスは苦笑いを浮かべながらエステルに頷く。

「図星です。それで、カタルスタの仕事幹旋所にあつた掲示板を見て、実入りの良さそうな仕事を幾つか見つけまして」

「その中の一つを選んで、ここに訪ねて来たつてわけねー。……わかりました。じゃー 形式上だけけど一応雇い主だし、この仕事を選んだ理由を聞かせて頂けるかしらー」

「ああ、それは」

言いかけたリージェスの言葉の続きを、今度は黙々と羊羹を食べていたリーシェが紡ぐ。

「ここにしようつて言ったの、私の方なんです」

「リーシェさんが？ 何でまた」

「実はカタルスタに来たばかりの時、シャトルーさんのお名前を耳にしまして。それ以来、ずっと印象に残っていたんです」

それを聞いてエステルは眉を上げる。

「へー、私の名前？ でも、どうせ碌ろくな噂じゃないでしょー」

こればかりは自信ある。上層部には変わり種扱いされているし。

「噂というのはちょっと違うと思いますが、とある魔石の商人さんから教えて頂きました。売り物の魔石を壊した人の中に、エステルルシャトルーという高名な魔法使いがいるつて。それで私、どん

な方が是非会ってみたかったんです」

はて、と記憶を遡ってみると、引き出しの奥の方に仕舞っていたそれを発見する。ちよつと煤すすけて良く見えないが。

「魔石　　あー、そんな事もあったかもしれないわー。なるほど、そんな話になるという事は貴方も壊したわけねー。で、実際に会ってみて、貴方の想像と比べて私の第一印象はどうかしらー」

リーシエは暫く下を向いて考え込んでいたが、顔を上げて言う。

「うーん。何だか初めて会った気がしない感じです」

「ふむ……。じゃー最後に　　、貴方達、魔法には興味あるのー？」

「あります」

声がハモリ、エステルは笑いを噛み殺す。気を取り直して、二人の顔に、身体に、視線を交互にゆっくりと移す。二人は一見痩せているが、相当鍛えられている身体だ。その顔に邪さも見受けられない。

(それに　　)

エステルはふいに表情を緩める。

「よくわかりましたー。明日から早速やって頂こうと思います」

「本当ですか。ありがとうございます」

二人はエステルに感謝を口にした。

「仕事内容は貼り紙に書いてあった通り、魔法薬を作るための希少な薬草の採取です。これは城下町の西にある山中で取れますが、如何せん数が少ないので、重くて膏かたは張る、といった事態にはならない

と思います。注意点としては、あまり北に行きすぎると凶悪な魔獣が出てきますので迂闊うかつに近寄らない様に。冬が空けて間もないですから、腹ペコの可能性大です。ちよつとやそつと腕が立つくらいでは歯が立ちませんよー」

「はい」

二人は歯切れ良く頷いた。

「それと、契約期間中に限っては、私の元の住まいを使つてくださつて結構ですよー」

「え？」

エステルは、不思議そうに訊き返す二人を無視して立ち上がると壁面に向かい、壁についている幾つかの金属製フックに引っ掛かっている鍵の一つを取り上げる。

「城下町の南東に、私が二年前まで住んでいた住居があります。既に家屋の買い取りは終わっているので、賃料はかかりません。城門から近い方が何かと便利でしょうしそこを使つてください。ちゃんとベッドも客用のを含めて二つあります。二年分の埃ですから、掃除は大変でしょうけれどねー」

はたと笑みを浮かべたエステルは、再び二人の方へ歩み寄るとフックから外したばかりの鍵を差し出した。

「本当ですかつ、助かりますつ。ありがたく使わせて頂きますつ」

「あ、いえ、いえー？」

立ち上がって少し錆びた鍵を受け取ったリーシェは、エステルが驚くほどに喜んでいた。

二人を部屋から送り出し、少ししてからエステルは気づく。

(……忘れてた)

リーシェにこの子を見せる約束を。ま、まあ本人も忘れていたよ
うだしいか。

今度は忘れないようにしよう」と心に誓い、エステルは三人分の食
器を重ね始めた。

其の三十二　　〜家族への憧れ（裏）〜

884年　3月12日

翌日、リージェスとリーシエはエステルに書いてもらった地図を見ながら、カタルスタの南東にあるエステルの家を探していた。時折すれ違つう人に道を尋ねつつ、少しずつ目的地へ近づいて行く。

エステルから仔細しじを聞き届け、二人は魔法学院を出るとその日はなけなしの金で宿に泊まった。二年間、誰も住んでいなかった家のベッドに寝る事をリージェスが由としなかったためである。リーシエは当初、夜でも良いから早く行きたいとこねていたが、果たしてそれは大正解だった、と得心することになる。

目的地付近に着いた二人は地図と周りを交互に見比べてキヨロキヨロと辺りを見回す。この近辺は一戸建ての似たような住居が多く、非常に見分けが付きにくい。

「この辺りのはずだけど……と」

「あつ、ねえリージェス。あれじゃない？」

リーシエが手で指し示した方角を見ると、青い屋根の、二階建ての木造家屋が目に入った。門前に移動すると、確かに囲いの表札にはシャトルーの文字が書かれている。そして、ドアの脇にある手紙受けにはたくさんの、おそらくは何ヶ月分という量の手紙が入っている。間違いなく彼女宛てのものだろう。

もう少し定期的に確認した方が良いのでは、とリージェスは苦笑する。

二人が二、三步ドアの方へと踏み出すと、左手にある庭には長く伸びた雑草が所狭しと生えていて、玄関のドア枠と軒の間には見事な蜘蛛の巣がかかっていた。

「これは、思ったより手強そうだな」

リージェスがそう言い掛けた時には、リーシエは既にドアの鍵穴にエステルから借りた鍵を突っ込んでいた。

中に入ると右側には備え付けの木製靴箱が、正面には二階に通じる横向きの階段が見えた。木床には細かい埃が積もって白っぽくなっていたが、リーシエは構わずに靴を脱ぎ捨て、すぐさま家へと上がる。リーシエの足跡が薄っすらと付き、塵がふわりと舞い上がる。

「む、やっぱり相当埃っぽいわね。リージェス、部屋の窓全部開けようよ」

「あ、ああ。それはいいけど台所と浴室は俺が」

そう言い掛けた時には、リーシエはリージェスの目の前からその姿を消していた。ややあつて

「いやああああああつっっ」

リーシエの只ならぬ悲鳴が聞こえた。しかしリージェスは慌てず騒がず、リーシエの脱ぎ散らかした靴を丁寧に揃え、落ち着いた様子で自分も腰を掛けて靴を脱ぎ始め、のんびりとリーシエの悲鳴が

聞こえた方へ歩いて行く。案の定、リーシエは台所の排水溝に湧いていた不可解な程に長い触角を持つ黒いアレを見て腰を抜かし、泣きべそをかいていた。顔と手にはぷつぷつと鳥肌が立っている。

だから言おうとしたのに、とリージエスは肩を落として独りごちた。

「良かったねリージエスっ。ここキッチンもちゃんとあるよっ。これで毎日リージエスの作った料理が食べられるよっ」

リージエスはショックから立ち直ったリーシエに、ああそうだな、と頷きかけ

誰が誰の作った料理を食べるって？ と訊き返す。油断のならない奴。

「ったく、そういうのは自分が作る時に言う台詞だろ。んなもん当番制に決まってる」

二人は口と鼻を布で覆い、はたきを持って手早く埃を落としていく。その度に、綿のように固まった埃が床へ落ちる。ひたすら照明と窓枠、そしてカーテンレールの埃を払う。床を先に綺麗にしたところで埃が舞えば床に落ちるため、掃除は上から下に向かって順序立ててやって行くのが原則である。

リージエスはリーシエのはしゃぎっぷりを傍から見ていて、何となくこそばゆいものを感じていた。ゴルフレッドの屋敷でネフェリイ達と一緒に住んでいた時の事でも、ここまでの反応ではなかった気がする。

「いいよそれでもつ。それにしてもシャトルーさんってお金持ちだよね。あの年齢で家一軒買っちゃうなんて。流石宮廷魔術師っていうだけあるね」

リーシエの言う通り、この家屋は四人でも住めそうな立派なものだし、魔法学院の寮にあった調度品も高価そうな物が揃っていた。仕事の成功報酬も相当に高いし、彼女がそれなりに裕福なのは間違いない。

間が空いて、リージェスははて、と首を傾げる。

「ん、彼女って宮廷魔術師なのか？ そんな事言ってたっけ」
リーシエは頷く。

「彼女自身は口にしていなかったよ。魔石の商人さんがそう言っていたのを覚えているの」

へえ、とリージェスは素直にリーシエの記憶力に感心した。

「なら、魔法も彼女に教えて貰えれば一石二鳥じゃないか」

宮廷魔術師というくらいだし、相当な使い手のはずだ。師事するにはもってこいに思える。

「そうね。でもお金ないから、先に一気に貯めて置こうよ」

このままじゃ食費も覚束ないしね、とリーシエは二の句を継いだ。

掃除が終わったのは空が紅くなり掛けてからだだった。それなりに急いでやったつもりだったが、流石に二年分の埃は伊達ではなく、二階建てで部屋数も居間を含めて5つあったためそれなりの時間を要した。ベッドのクッション部分を外して虫干しし、窓拭きと雑巾がけを掃除の項目から外さなかった事を鑑みれば、身体能力の高い二人だからこそこんなに早く終わった、と言えるのかもしれない。

どこか心地よい疲れを感じながら、二人は綺麗になった家を見て満足気だった。

既に遅い時間だったため、その日は近くにあった屋台で軽い物を持ち帰り、家で食べる事にした。卵と小麦粉の薄皮に鶏肉と生野菜とチリソースが入っている物を頼み、支払いを済ませる。見た目にはおかず系クレープといった感じである。

家に戻り、小さなテーブルで向かい合ってご飯を食べる。見た目に反して、味は中々の物だった。リーシェの方を見ても、それなりに納得している顔をしている。

「明日から薬草採集だ。頑張つて金を稼がなきゃな」

「うん。ねえ、仕事が一区切りした所で、シャトルーさんに魔法の件話してみようか」

「ああ、そうするか。明日からやる事山積みだなあ」

山で薬草採集、図書館で勉強、そして、交渉が上手く行けば魔法のレッスン。おお、心技体全て鍛えられるではないか、とリージェスは心中で独白する。

「そうね。それと、借りているとはいえ折角持ち家に住んでいるんだし、一回ネフェリイ達に手紙を書かない？」

リーシェにしては良いアイデアだ、とリージェスは頷く。リーシェにしては、は余計だ、とリーシェは口を窄める。

「そうだな。音信不通だと心配するだろうし、時間がある時に書こう。ただ、宛名は念のためミシエルさんかシルドさんにして、ネフ

エリイの名前は出さないようにしないとな」

今は戦時中だし、帝国軍が郵便の検閲をやっているもおかしくない。万が一ネフェリイの名前を見咎められたら、非常に面倒なことになるだろう。石橋を叩いて渡るくらいでなければ、身の保全を図るには厳しい情勢なのだ。

「なるほどー、よく気が付くね。そしたら、ネフェリイの代名詞を考えないと。うーん、……姫様？」

「駄目」

直球過ぎるだろ、と即却下する。

「なら、お嬢様？」

「うーん、まあその辺りかな」

手紙といえば、ポストに山ほど入っていたシャトルーさん宛ての手紙はどうすれば良いのだろうか、とリージェスは思い出した。まあいい、後で紙袋にでも詰めて薬草と一緒に運んでしまおう。

夕食を終えると、リーシェはそそくさとシャワーを浴びにいった。その間にリージェスは一階の寝室に行き、ベッドに白いシーツを被せて整え、それが終わると居間に戻って椅子に座り、背もたれに寄りかかりながら天井を見上げる。住処すみかを容赦なく破壊された小さい蜘蛛が、行き場を失くして天井に張り付いているのを見て、少し申し訳ない気持ちになる。

（自分達の家、か。やっぱりリーシェの奴も落ち着いた生活にどこか憧れを抱いていたのかな）

ふと、幼い頃の事を思い出す。彼女がとある家族の団欒を、身じろぎもせずに見つめていた時のことを。もし、あの時孤児院に入っていたらどんな人生になったのだろう、と栓なき事を考える。

(……全てが終わったなら、また皆で一緒に暮らせるかな)

ウィルに師事したエアリアでの日々。そして、ゴルフレッドでのネフェリイ達とのやり取りを思い出し、次いでカタルスタでの平和な日々が絵となって現れる。しかしてその絵を一枚捲れば、今のエアリアの惨状がありありと浮かび上がる。彼の国だけではない。国境という形なき壁を隔てた向こうでは、人々が今この瞬間も苦渋に喘いでいる。それを見て見ぬ振りをするのは確かに容易い事だ。それでも、強大な帝国には敵わぬと慨嘆^{がいたん}出来るほど自分は大人ではない。自分はウィルの、隊の仲間達の命と引き換えに生かされたのだから。

帝国に恨みがないと言えば嘘になるが、恨みだけでは決してない。それはリージェスの性格であり、正義感というよりは矜持^{きょうじ}にずっと近いものだ。やられたらやり返す、という至^{シンプル}って明快な。

ウィルの仇討ち^{あだう}、ネフェリイ達の安否、カタルスタの平和、テルネシアの戦乱、そして、自分達の行く末。リージェスは胸に次々と去来する感情を持って余しながら、定まらぬ未来に思いを馳せていた。

(二)〜(三)幕間　〜安らぎの日々(裏)〜

884年4月21日

原初の自然を思わせる秀峰を二つの影が疾走する。今は桜の季節柄であり、見目に関して言えば迷宮メイズ・オブ・フォレストの森と比べるべくもない程に楽しませてくれる。若葉芽吹く茂みを掻き分け、丈夫な蔓を掴んでは険しい崖を一足飛びに登り、程なくして蔦と苔に覆われた桜の木幹が連なる場所へと辿り着く。目的物の群生地に足を踏み入れると、二人は視線を交わしてから木の根元にまとまって生えている薬草を丁寧に摘み取ってゆく。

高山に訪れる春は少々遅い。4月を過ぎても尚、強い風が吹く度に、仄かに紅く、それでも白にずっと近い小さなハート型の花弁が軽やかに、一斉に数多の梢から振り解かれる。これを吹雪と称する先人達の感性の妙には、感嘆する他にない。

リージェスとリーシェは時折頭上に在る、満開の桜の木々を眺め見では、地に在る紫色の可愛らしい花が付いた薬草を手早く摘み取り、近くに在る長く丈夫そうな草を使って束ねていく。ある程度の太さになった所で、新たに購入した、少し防腐剤の臭いがする革袋に詰め込む。森の中にまで吹き込む風によって視界を埋め尽くす様に舞った花弁のいくつかが気紛れを起こしては、二人の頭なり、肩なりにそつと舞い降りる。そしてそれらは再び二人の頬を撫でる風に乗って、視界から逃れるように遙か彼方へと遠ざかって行く。

二人が薬草摘みの仕事を始めてから一カ月余りが過ぎていた。図書館で新聞を読む機会が増えたリージェスは、テルネシアの方で起こっている幾多の事件に驚きを禁じ得なかったが、今は目的のため、と日々図書館に通い、黙々と薬草採集の仕事に明け暮れていた。

カタルスタの宮廷魔術師にして魔法学院の講師、エステル・シャトルーは金を出し惜しみなかった。当初の予想を上回る薬草の収集量に感激し、歩合を上げてくれたのである。おかげで、リージェス達は平均して一日7万ギラを荒稼ぎ、懐も相当潤ってきている。

最近のリーシェには、太ってきた己の財布を見るに付けて含み笑いを漏らす、という少々危なげな習慣が身に付いている。リージェスは、彼女が買って来る食材の量が日に日に増えて行くのを眺め見ている。あいつの財布が肥えるのに比例して胴周りまで肥えなければいいのだが、と聊か失礼な思いに囚われていた。

事実として、生活に余裕のない者が太る事など本来有り得ないのである。？肥満を嘆くは富裕層の嗜好たしなみ？とまで貧困層に揶揄されている事は、平穩な日常を送っている者達は露知らないだろう。

リージェスは、カタルスタに来た当初こそ景色の目新しさや魔法の素晴らしさばかりに目を奪われていたが、ごく最近になって気付かされたのは、テルネシア帝国と違って平民達にも太っている者が多いという事だった。勿論、貧しさを垣間見せないわけではないが、おそらく全体的にこの国は豊かである。国の豊かさを顕す指標は、富裕層でも貧困層でもなく、中間層の厚さ加減にあるのだと、リージェスは嘆息を交えつつ知識に加えるのだった。

週末には、二人は魔法図書館に籠って勉強に明け暮れた。リージ

エスと一緒に勉強したい、とリーシェが言い出した時には勉強の邪魔をされないか少々心配ではあったのだが、意外や意外、彼女は今の所は熱心に取り組んでいる。

彼女が読み漁っていたのは細かい文字がびっしりと敷き詰められた魔法の教本が殆どであったが、声一つ発さずに真剣に読み耽っている。今まで想像も出来なかったリーシェの姿を見るに付けて、リージェスは新たな境地に踏み込んだ彼女の成長を心中で歓喜した。

リージェスの方はと言えば、カタルスタの歴史については一月にしてほぼ網羅していたが、この国への理解が進むにつれて真正面から相手を説得するのは難しい、と黙考せざるを得なかった。カタルスタが何故に外交を遮断するのが、はつきりと形を成して見えてきたからである。

カタルスタ王国、旧カナン王国は、古くから大陸各地で疎まれていた魔法使い達の受け皿と成って発展してきた。魔法使い狩りの時代には、疑いを掛けられた幾多の者達を受け入れたカタルスタは、ジキールの件が収束した後、疎まれて来た反動か、技術流出を防ぐためか、閉塞的な外交政策を徹底した。

これには情報統制をする面もあるのだろうが、リージェスにはもう一つ、カタルスタの民にとってはあまり愉快でない仮説を立てた潜在的に彼等が他国民達を見下すようになった、という点に置いてである。

視点を変えれば、カタルスタは魔法使いの聖地であると同時に、テレジア大陸にとっての流刑地なのだ。真偽がどうあれ、歴史的に彼等は逃亡者であり、追いついて来られた事に対する負の情念が心の奥底を濁したであろう事は想像に難くない。

ともすれば、現在巻き起こっているテルネシアでの動乱を冷ややかな目で見つめているのも無理からぬ事なのである。自分達を虐げ^{しいた}た報いである、と冷笑を以って断じる権利が彼らにはあるのだから。

それと同時に、カタルスタの歷程と、テルネシアで起こっている悲劇が目ではなく耳にしか入って来ない現実味のなさが、帝国に対する怒りが喚起^{かんき}されるのを著しく阻害しているのは確実であり、百聞は一見に如かず、の格言を如実に表している。念の入った事に、カタルスタの新聞には絵が殆ど載せられていないし、感情を揺り動かす様な文章も徹底して省かれているのだ。

結局、リージェスは学べば学ぶほどに、自分の目的地が如何に狭い関門によって阻まれているかを自覚させられるのであった。

もつとも、それらを全て鵜呑みにして悲嘆に明け暮れる日々を送る程リージェスは愚かではなく、諦めが良くもない。大体にして、歴史と呼ばれる物は国家が都合の良い様に脚色する事が往々にしてまかり通っているのを知識として得ていたからである。

リージェスは酒場や広場などで町の者達から話を訊く事を欠かさず、それによって価値観や風習などを理解しようと努めた。

カタルスタという国は、大雑把に言えば賢王、四人の大臣、六人の宮廷魔術師、その下に位置する多くの官僚によって成り立っている。但し、他の国々と違って賢王には絶対的な権利があるわけではなく、政治的には四人の大臣達と同格の権限である。

しかし、今カタルスタの大臣に任じられている四人のうち三人は、民達の評判を訊く限りでは正直あまり宜しくない。学究の徒の代表であるはずの彼らが、昨今では学術的発表をするわけでもなく、論文を出すわけでもなく、かといって精力的な政治活動を展開するわけでもないようだ。そもそも、外交を遮断しておきながら外務大臣

と言う椅子がいまだに退けられていないのは如何なものだろうか、とリージェスは失笑を禁じ得なかった。

今の賢王は若く、将来を有望視されているが、実質的な政治は三人の大臣による談合で取り決められているとの事だ。偶たまに花を持たせる意味で賢王の提案した政策を取り上げる事もあるらしいが、基本的には賢王と三人の大臣は対立関係に在るとの事だった。残りの一人は、と言えば病弱を理由に公に姿を現す事は滅多にないらしい。国民がそれで納得しているのか、と言えばそうでもないのだが、少なくとも後二年はこの体制が変わる事はないだろう、と見られている。

ならば宮廷魔術師はどうか、ということであるが、宮廷魔術師は言ってみれば文官と武官の兼任のようなものであり、かなり雑用に近い仕事も任されるといふ事だった。軍事的権限は大臣と同等だが、政治的権限については大臣達よりは低く、意見を言う事は赦されていても、その提案が通る事は滅多にない。大臣達は宮廷魔術師の下にいる官僚達の支持を引っ下げ、税金をそちらに回して代わりにリベート、もしくはキックバックという飴を与えて飼いつつ、癒着の構造を呈しているという事だった。何の事はない、上層部に漂う腐敗臭に関しては、テルネシア上層部のそれと殆ど変わりはないのである。

ここに来た当初は助力を嘆願するにしても誰にして良いものかわからなかったリージェスだったが、ある程度の目星は付いた。今現在、外交遮断を口に行っているのが三人の大臣ならば、もう一人いるという病弱の大臣か、はたまた賢王に直訴する以外に方法はない。

一月ほど前に行われた会見を経て、帝国との同盟が不可侵に取って代わった事はリージェスにとつても予定外であったが、カタルスタのみを守る、という方針を貫くには、帝国側の出した案は打って付けの申し出だったのかもしれない。再び戦乱が始まったのを見て、昔の愚を繰り返さぬ、と判断したのは過去の事象からちゃんと学んでいる証拠ではないか、とも思うのである。

それとは別に、リージェスは穏やかな生活を続けているうちに幾分心境が変化してきているのを自認していた。帝国が許せない、という気持ちは変わらないにしても、優先順位としては、どうしてもリーシェの身の安全が気になってしまっているのである。

人生において何かを諦めなければならぬ事は往々にしてある事だ。もしも自分が帝国に敵対する事によって彼女の身の安全が保障されなくなるのなら、涙を吞んでも唯一人の家族の幸せを優先するべきではないか、との考え方が何度も鎌首を擡もたげる。そして、それはどちらかと言えばカタルスタ的な考え方である事を自得し、感化されている自分に幾許いくばくかの自己嫌悪を生ずると共に、価値観とは意外と変わりやすい物なのだ、と人毎のように呟く日々を送っているのだった。

しかし、事態はリージェスの予想とは全く違う方向へ進んでいく事になる。迫る邂逅の時はリージェス達の、そして時代の奔流から唯一逃れていたカタルスタの者達の運命をも巻き込んでいくのである。

其の三十三 く神学論(裏)く

884年4月25日

ゴルフレッド

華爛漫はなはらみの季節。ネフェリイがリージェス達と共にゴルフレッドに落ち延びて、既に丸一年が経過していた。世界は相変わらずテルネシア帝国を中心にして廻っていて、辛酸を舐めさせられている多くの者が帝国の敗北を望みながら、その可能性が殆どないのをわかっている。

そんな中でも、時は当たり前のように過ぎていく。刻一刻と迫るのは帝国による再統一なのか。それとももっと別の何かなのか。

いつものように客室でネフェリイに講義をしていたシルドだが、今回はいつもと少々勝手が違う。テーブルを隔てての対話形式。椅子に座っている二人の間に置いてあるのは一冊の分厚い社会科学の本。

「　　という事になります。社会秩序の本質を学術的に把握する努力は水面下で行われてきましたが、イアニスの教えはそれに拍車をかけたわけです」

シルドは項目を指揮棒で示しながら説明する。

「そこから、民主制か君主制か、という話になるのね」

ネフェリイが合いの手を入れる。

「歴代の法王が民主制という言葉を口にした公的な記録はありませんが、彼らの唱える平等主義は、民主制に限りなく肉薄しています。命の重さは皆、同じである。この考え方は君主制を敷いてきたテルネシア帝国の思惟と相容れぬ物でしたが、一般大衆への教義は広く浸透していきます。二通りの考え方を提示され、意見を活発に戦わせる機会が増え、そこから更に派生した考え方が出てきたのですよ」

ネフェリイは首を捻る。

「でもシルド。導き手の権力、影響力が高まるのは必然よね？」

「負担に応じて権力が高まるのは、平等主義の観念から見ても自然な考え方ですよ。ただそれを濫用しようとする者が現れるから問題になるだけで」

それを聞き、ネフェリイは何となくブラージウスを思い浮かべる。

「例外は防げない、か」

「防げたら防げたで色々問題が出てきますよ。不確定要素の全てが予測できてしまったら、人の想像力は間違いなく退化しますからね。人は完成された世界を望んではいけないのです」

ネフェリイもその認識には強く同意する。

「では、信仰の項目に移りましょうか。姫様は、神の存在を信じていらっしゃいますか？」

ネフェリイは暫しの間、宙に視線を漂わせる。

「うーん、一概には言えないわ。そもそも絶対的な存在を人の言語で表す事が間違っていると思うのよ。百歩譲って神という言葉を使うにしても、？神が存在するか？はたいして重要ではなくて、？神とは何か、何をするか？の方が重要な気がする」

シルドはその物言いに微かな笑いを誘われる。

「これは手厳しい」

「言い表し辛いけど、何らかの意志みたいな物が存在すると思う」

わ。でも、それには自我が欠けているか、そうでなくとも希薄で

「ふむ……。では、神とは一体何だと思えますか？」

「私は……。神とは？世界を構築する流れ？だと考えているの。例えば、生まれた者は必ず死ぬとか、時は過去から未来へ不可逆的に進むとか、自然界の食物連鎖とか。身近な所でいうと、ある物事に打ち込むと少なからず上達するとか、他人の心を読めないとか、そういうった普遍的な物」

「なるほど、独創的ですね。イアニス教の考えとは大分異なりますが」

「考え方は人それぞれだし、それを否定する気はないわ。ただ、良い事をすれば良い事があり、悪い事をすれば悪い事がある、と断言する気にもなれない。その概念は時に曖昧で、親切心が人を傷つける事だつてあるし、真に悪賢い人には法の手が及ばない事も往々にしてある。はつきり言えば、それは道徳的な人間の、一つの価値観に過ぎないから」

シルドは感心したように頷いている。

「面白いですね。宗教は導く人の価値観に則つて全てを決めるわけで、それに共感する者にとつてのみ有効な物であり、絶対的な存在とは成り得ない。そういうご意見で宜しいですか？」

「うん、そんなところね」

「大変良くわかりました。姫様は意外と、政治家に向いているかもしれませぬ。それも革新的な」

ネフェリイは眉を潜める。

「……それつて褒めてるの？ 貶してるの？」

「勿論褒めてます。私が姫様を貶した事なんて、誓つて一度たりともありませんよ」

そう言つてシルドはにっこり笑う。

「じゃあシルドは、神とは何だと思つ？」

「おっと、反撃ですか。……そうですね。陳腐な言い方になります
が、人の心だと思えます」

「……それだと範囲が広すぎて定義付けが難しすぎない？」

シルドは間をおいて、ミルクティーを一口啜る。

「正に仰る通り。この年まで生きてきて行き着いたのは、？救いを
必要としない者に神は存在しない？という考え方ですね」

「……ああ、そうか。生に充足感を得ている人には神も無用の長物
ですものね」

真似をするように、ネフェリイもカップを持ち上げた。もう八割
方飲んでいるが。

「御明察です。そして、真逆もあり得ます。例えば、エルフや魚人
は自然信仰ですし、ライカン 獣人やバーディアル 翼人は知性、若しくは理性、つまり精神
そのものを信仰している。これは人間がそうさせた節も多分にあり
ます」

「とうとう？」

ネフェリイが二の句を継がせる。

「長年に亘って人間にしいた 虐げられてきた彼らは、いつしかイアニス教
を見放しました。精神の緊急避難と申しますか。真に追い詰められ
た者にも、やはり神は無用の長物です。信じ続ける行為にも、最低
限のエネルギーは必要なのです。彼らが新しい信仰を得るまでに
は様々な葛藤があつたでしょう。苦しみぬいた末に確立された考え
方は、種全体の強い結束力を生み出すのです」

「ふーん。シルドの言い方だと、人間より亜人の方が精神的に先ん
じている存在という風に聞こえるけど」

「そこまでは言いませんが、人間に幼稚な者が多いのは確かですね」
姿勢を正して言い切ったシルドに、ネフェリイは呆気に取られる。

「……わーお、辛辣」

「周知の事実として、凝り固まった価値観を唯一無二のたごころ 珠玉と信じ

て疑われない人間は数多い。大半と言つても過言ではない。精神の脱皮^{つひ}を図るためには、まず疑問を呈^{てい}する事から始まる。それをせずただ享受しているだけというのは、健全な生き方ではないっ」

拳を上下に振るシルドに、ネフェリイはたじたじとなる。

「……シルド、何だかいつになく攻撃的ね」

「……っと、すみません。古巣を思い出したらつい……」

はたと落ち着きを取り戻したシルドは苦笑いする。変わり身の早きこと風の如し。

「古巣つて？」

「それは　　おや？」

おもむろに足音が近づいて来るのが聞こえる。バタバタと、あまり行儀の宜しくない音を立てながら誰かが廊下を駆けている。勿論ミシエルであろう。ネフェリイはシルドと共に、何事だろうとドアに視線を移し、更に二、三秒して二人の注目を浴びたドアが大きな音を立てて開く。

「そんなにお急ぎでどうしました？ ミシエルさん」

「　　姫……様っ。リーシェさんとリージェスさんから……お手紙が届きました」

膝に両手を当て、息を切らしながらもそう言うミシエルを見て、ネフェリイは目を丸くした。三カ月近くも音信不通であった為に、もしや二人に何事があったのではと、中々寝付けぬ夜を過ごしていたのである。

「本当に？ 間違いなくあの二人なの？」

ミシエルが質の悪い冗談を言わないのをネフェリイは知っていたが、それでもついつい、念を押してしまう。

段々と息が整って来たミシエルは、最後に深く息を吐き出してから両手で丁寧に封筒を差し出す。宛名にはシルド・バルソラの文字が、そして裏の差出人の欄にはリーシェの文字が書かれている。

「本当、だ。……全くもう、散々心配かけておいて唐突なんだから」

可愛らしく口を膨らませるネフェリイに、年長者の二人は笑いを誘われる。連絡したのに文句を言われるのではリーシェ達も救われない。

「遅くなったとはいえ無事が確認できたのですから、素直に喜びましょう」

「わ、わかっているわよ」

「姫様。宜しければお読み致しましょうか」

シルドが一歩進み出る。この辺りは、長年染み付いている慣習という物であろう。

「ええ、お願いするわ」

ネフェリイの肯定の返事を聞き、ミシエルはシルドに手紙を手渡した。

「では　ゴホンッ」

一度大きく咳払いをして、シルドは便箋びんせんに目を移した。

拝啓、シルド・バルソラ様。御無沙汰しております。まずは無事カタルスタに着きました事をご報告申し上げます。末まながら文を綴つづらせて頂いた次第です。そちらももう雪は全て溶けている頃合いでしょうか。皆さんが元気にしていらっしゃれば、何よりの幸いです。

カタルスタは、そちらの方々には申し訳なくなってしまうくらい、日々が平穩に満ちております。今はシャトルーさんという人から、カタルスタの一軒家を間借りしてリージェスと二人で生活しています。薬草摘みの仕事をしたり、図書館に通ったり、町を散策したり、忙しい毎日を送っています。

この町を歩いていると本当に、御伽おとぎの国みたいに感じます。一般の人でも魔法を使える人が結構いるし、空には天馬ベカサスや翼獣グリフオン等の生き物も飛び交っています。いつか皆さんと一緒
に町巡りしたいです。その日が来る前に、私も少し観光名所に詳しくなっておこうと思います。

そちらの情報も紙面ですが、ちらほらと入って来ています。マリスノリスの悲劇についての記事は、私達も目にして暗澹あんたんたる気持ちになりました。どちらが勝つにしても、早く平穩な日々が訪れて欲しいものですね。まだ暫くはここに留まるつもりですが、三人と再会出来る日が来る事を心待ちにしています。

追伸。こちらの住所を書き記して置きましたので、お暇な時にも返事ください。ミシエルさんとお嬢様にも宜しくお伝えくださいね。

×××× 16番地 二丁目 東南区 魔道王国カタルスタ

シルドは丁寧綴られた文を破れた封筒に戻し、ネフェリイに差し出した。反帝国のリーシェ達にしては、随分と感情を押し殺して書いてある。他人行儀な言い回しに終始していたのは少し気になるが、おそらくは、帝国の検分に晒される可能性を考慮したためこういう文章になったのだろう。

それでも手紙の内容は、好奇心旺盛なネフェリイの興味を存分に惹き付けたいらしい。

「カタルスタって何だか面白そうね。隣国だし一回くらい行っておけば良かったかな」

そんな事を口にしながら、ネフェリイはシルドから受け取った手紙を封筒に戻し、机の引き出しに仕舞い込む。

「いつか行ける機会がきますよ。それまで我慢しましょう」

シルドの言葉に、ネフェリイは曖昧に頷く。

「いつか……かあ。万が一、ブラージウスが大陸を統治する事になったら、そんな日が来るのかどうかもわからないわよね」

彼が統一を果たし、テルネシア帝国の皇帝になったところで、また何事か起こすような気がするのには私だけではないはずだ。

「彼ほどの悪はいずれ裁かれるでしょう。滅ばぬ者などありません。歴史がそれを物語っています。あのジキールとて倒れたのですから」
シルドが微笑した。

「ジキール、かあ。 あ、それで思い出した。シルド、話に出て来たついでに、聞き逃したままになっていたいつぞやの話、続きを教えてください。」

「いつぞやと言いますと？」

「何故ジキールに勝てたか、よ」

シルドはこめかみに指を当て、ウーンと目を瞑る。

「ああ、思い出しました。って、あれ？ まだ話していませんでしたか？」

ばつが悪そうに頭を掻くシルドを見て、ネフェリイは溜息を吐き、その隙を突く様にしてミシエルが口を挟む。

「何故勝てたかって、多くの者達の犠牲により勝ったわけではないのですか？」

「勿論、それも一因ではありますが、もっと決定的な出来事があったんです。聞きたいですか？」

シルドの数少ない短所。？勿体ぶる？を発動させられ、ネフェリイとミシエルは「これさえなければなあ」と心中に独白を落としつつ、顔に笑みを繕って二度頷いた。

「わかりました。さて、どこから話しますか。御二人は……、カタロフを御存知ですよね」

問われた二人は勿論、と頷く。

カタロフとは、テルネシア帝国の前哨、テレジア帝国が滅びるきっかけを作った邪鬼である。その正体は亜人の突然変異種だとも言われているが、テレジア帝国が解体する少し前にオールド・グレイブの地に封印されたと伝えられている。

「その強さもさることながら、物凄い再生能力を持っていたそうですね。でも……カタロフとジキールに関係が？」

シルドは交互に均等に、二人に視線を配りながら話し始める。

「世の中には説明のつかぬ事が多々ある、と申しますか。よく言う敵の敵は味方、とは限らなかつたようですね」

シルドが咳払いをし、目を煌めかせた。

「実は、ジキールが倒される前年に、何かの拍子でカタロフが封印の地、オールド・グレイブから目覚めてしまったのです。私はこの時こそが、人類が滅亡の淵に立たされた瞬間だと考えています」

間が空いて、ようやく頭がその言葉の意味を認識する。

「ええっ、そんなの初耳ですっ」

ネフェリイに先んじて、あまりに驚いたミシエルが素っ頓狂な声を上げる。

「ところが、ですね。目覚めたカタロフはあろう事か、魔物を率いてジキールに立ち向かったのですよ」

二人は、再び驚きの言葉を発する羽目になり、興奮で頬がやや紅潮してくる。シルドはその反応に満足したのか、ゆっくりと頷く。

「以前姫様にも申し上げた通り、これは運が良いとしか言いようのない出来事でした。カタロフに勝つ事以上に、ジキールに勝つのは不可能に近かった。類稀なる再生能力を誇るカタロフと、彼の使役する多くの魔物達は、284年の秋、山をも割る力を行使するジキールに攻撃を仕掛けます。空前絶後の戦いでした。魔法を行使しては雷が無数に降り注ぎ、拳を交えるたびに衝撃波が飛び、両者の絶大な魔力が反発し合い、巨大な渦と化しては周囲のあらゆる物を呑みこんでゆく。森の木々、川の水、そしてそれらに住まう動物達が無数に宙を舞い、天高く巻き上げられては地に叩き付けれる」

シルドの話聞きながら、その光景を思い浮かべては、二人の聴き手は目を睨り、息を呑む。

「その戦いは大陸中を横断するようにして三カ月にも及んだそうです。年明けて間もなく、ついにカタロフと魔物達はジキールに敗れます。しかし、魔物達の相次ぐ襲撃、カタロフとの激しい戦いを経て、さしものジキールも消耗しきっていました。そんな勝機を逃す

手はありませんよね。衰えを見せたジキールに対して各国は延々と兵を死地に送りこみ、多くの犠牲を払った末に、何とか彼を斃した、という訳ですよ。正に、漁夫の利を得た勝利でしょう」

シルドの語る逸話に呑み込まれていた二人は意識を現実に引き戻し、深々と溜息を吐く。

「じゃあ、カタロフはオルド・グレイブにはもう封印されていないのですか」

ミシエルが首を傾げながらシルドに訊ねた。

「ええ、存在していない筈です」

ネフェリイはふと疑問に思う。

「一つ質問なのだけれど、シルドはそれをどこで知ったの？ 年代史にそんな話が載っているなんて聞いたこともないのだけど」

「カタルスタに魔法図書館という場所がありまして、そこで得た知識です」

「ええ？ シルドさん、カタルスタに行ったことがあるのですか？」

ミシエルがそう言うのを聞いて、シルドはばつが悪そうに笑う。

「行くも何も、あそこは私の故郷ですよ」

三度目の驚嘆が部屋に響く。今日は何だか驚かされっ放しだ。ちよつと悔しい。

「じゃ、じゃあ魔法とか使えるの？」

「まあ、一通りは」

あっさりと言った口にしたシルドに、ミシエルは首を捻る。

「……どうして今まで黙っていたんですか？」

「それは……、訊かれたことがなかったからとしか言いようがないんですが」

シルドはそう言って頭を掻く。ネフェリイは呆れたように口を半

開きにする。

「……自分から言ってくれてもいいんじゃない？」

シルドはゆつくりと首を振る。

「申し訳ありません、姫様。それは禁止されています」

「禁止？ 誰に？」

「……私の師です。力は行使する物ではなく、秘める物なりと口酸っぱく言われたものです。もっとも、カタルスタの賢人には多かれ少なかれそういう傾向があるのですが」

どうやらシルドの師匠は相当厳しい人らしい。でも確かに、のんびり屋のシルドにはスパルタくらいが丁度良いのかもしれないな、とネフェリイは思う。

「それを忠実に守っていらっしやるといっわけですか。シルドさん真面目ですねえ」

「ははは、有難うございます」

ミシエルの言う？真面目？は決して褒め言葉じゃないんだけどな。ネフェリイは何とも言えぬ顔をしてから再び物思いに囚われる。存外、私達の世界って危ない綱渡りの連続で成り立っているのではないだろうか、と。

其の三十四　く天衣無縫（裏）く

カタルスタがテルネシア帝国との同盟を破棄し、不可侵条約を締結してから二ヶ月弱が過ぎた。最初の一月ほどは警戒感を募らせていた警備隊だったが、何かしら仕掛けてくるだろう、という予想に反して、平穩無事に日々が過ぎ去っていく。ついに、そろそろ警戒解除をした方が良いのでは、という案が大臣の一人、ルーモスから持ち上がり、二週間を待たずして警備縮小が伝えられた。

884年　4月26日

再三の反論を悉く突つつぱねられ、警備縮小へと舵を切られたことに対し、セントレイドは己の力不足を嘆いていた。実際のところ、テルネシア帝国の使節団は不可侵条約締結の翌日に、とある旅館で争いさかいを起こしていたのである。その場は何とか収まったものの、いきなり約定を守らぬ意を示されては、彼の心配が募るのも無理からぬことであった。

当初こそ、同盟から不可侵条約への移行の話題は人々の関心が高かったが、二月弱で人々の関心は薄れに薄れ、今は以前と変わらぬ日々を過ごしている。熱しやすく冷めやすい、カタルスタの民の短所である。

王宮の渡り廊下を通り過ぎようとした時、セントレイドは一瞬足を止める。会いたくない人物の顔を見てしまったセントレイドは、己の不運さを嘆きながらも再び歩き出し、すれ違いざまに軽く会釈

して通り過ぎようとする。

「そなたはまだ若いからな。血気に逸るちよのは誰でも出来るという事に気づかぬ」

背中越しに投げ掛けられる、嘲笑の意を含ませたレドネーの言葉に、セントレイドは振り向かず言葉を返す。

「……血気に逸る？ これは異な事を。身に降りかかる火の粉を払うは当然ではありませんか」

「お主がしようとしているのは、火の粉を払うに在らず。火の粉を気にするあまり、元を絶とうと焚き火に手を突っ込もうとしているようなものだ」

セントレイドは振り返り、やれやれと首を振るレドネーを見て不快感を増す。

「貴方の言うその火の粉で、既に民は火傷を被じっているのですぞ。何らかの対策を取るのは当然ではないか」

「……またその話が。助けるのは間に合ったのだらう。終わった事をいつまで引き摺るつもりか」

それは違う。間に合ったのはあの青髪の青年が時間を稼いでいたからであり、そうでなければあの宿の女将が心に一生残る傷を負っていた可能性は低くない。

「どの道、国境は封鎖されているのだ。もう帝国兵が入ってくる機会キカイもなかるう」

そう言うレドネーをセントレイドは冷ややかに眺める。

「そう思っているのは我々だけかも知れない。国民に被害が出てから動くのでは遅いと存じますが」

「個を犠牲にしても国家を守らねばならぬ事は往々にしてある。そんなところに予算を使うのだったらもつと道路の整備とか、公共施設を建てるとか、優先してやらねばならぬことがいくらでもある」「薄ら笑いすら浮かべ、平然とそう言つてのけた目の前の老人に、セントレイドは苛立ちを隠すのをやめる。

「安全な所から見下した者の言い様ですな。いやはや、レドネー様ともあるう御方が、老いとは真に恐ろしい」

ついに言つてしまったか、と思うと同時に、心は清涼な流水で洗われ、透明感を増していく。反して、目の前の老人の心はといえ、どうやらどす黒く濁り始めたようである。いや、元から濁り放題であるからして変わりはないか。苦虫を噛み潰したような顔をこちらに向けている。

「……口の利き方に気を付けろよ小僧。貴様如きを吹き飛ばすのはわけないぞ」

レドネーの言葉は虚勢ではない、とセントレイドにはわかつている。事実として、彼はカタルスタの魔法の使い手としては五指に名を連ねる。曲がりなりにも彼が賢王候補として名を挙げられたのは、その魔法の才故なのだ。性格が歪んでいるために宮廷なかまつち魔術師内でも実力が軽視されがちだが、勢いで喧嘩を吹っ掛けられるほど目の前の老人は甘い相手ではない。

しかして口走つた言葉は、その考えを一向に踏まえていなかった。「貴方如きに吹き飛ばされる程落ちぶれては」

「シャ・ライル瞬雷つ」

有無を言わず、無詠唱魔法を駆使したレドネーのしわがれた手

から蒼い雷が放たれ、セントレイドに集約する。

「ディ・ウオール
封哭呪っ」

間一髪、直撃する寸前にセントレイドは、自分の身を隈なく覆うくらいの矩形の障壁を正面に設置する。雷は透明な壁に当たってジジと耳障りな音を発した。高い天井と石床に静電気が拡散し、周囲にチリチリと青い電撃が迸っている。流石に、城内で上級魔法を使わないくらいの分別は弁えているようだが、彼の魔法の威力は初級とて決して侮りがたい威力だった。

レドネーは一瞬眉を潜め、二瞬には口の両端をあからさまに釣り上げる。

「……ハッ、この程度の魔法に随分と大袈裟な障壁を張ったものだ。若いのに判断力に欠けるとは救えぬ奴。魔法学院で一からやり直してはどうだ」

セントレイドは鼻で笑い飛ばす。

「民の命はどうなるかと構わぬが自分に対しては悪口一つ我慢出来ぬ、というわけですか。狭量ここに極まれり、ですな。……貴方には帝国の水の方が合うのでは？」

売り言葉に買い言葉、二人の発する威に空間が圧迫される。ささくれた空気が辺りを覆い尽くし、風が円を描く様に発生し始めた。

「……次はないぞ。軽口を叩いたことを後悔しながら朽ち果てるが
いい」

右手をこちらに向けるレドネーの殺意をはらんだ言葉に、セント

レイドは宙に魔印を描きながら目を細める。

「貴方は別に後悔しなくていいですよ。……消し炭になっただけは出来ないでしょうから」

(らしくないな、私が理性より感情を優先させるとは)

綱渡りをしているにも関わらず驚くほど酷薄な自分に半ば呆れながらも、セントレイドは目の前で円を象る様に魔印を綴って行く。対するレドネーも、手の平に膨大なる魔力を凝集させ、耳に障る甲高い音を響かせている。

両者共に選択したのは上級魔法。ぶつかり合えばどちらも無事では済まないだろう。賢王を差し置いて私が黒歴史に名を刻むか、とセントレイドは唇を歪ませる。

「何をやっている」

その声の聞こえた方向に二人は構えを解かぬまま同時に視線を移す。レドネーの斜め後方に、錫杖を持ったエルフの少女が立っていた。深淵しんえんまでも見通すような赤い目で二人を睨んでいる。

「……ミズ・ミュール」

「何だ、貴様か」

不敬ふけいな物言いに、セントレイドは再びレドネーに鋭い視線を転じる。

「レドネー。その言い草は看破かんぱ出来ぬぞ」

「様を付けるのを忘れるな、小僧」

ミュールは再びいきり立つ二名の大人に小さく溜息を吐き、次いで錫杖を床に叩きつける。

シャンツ

金属の輪同士が擦れ合い、凜とした音が響く。

「二人揃って死にたいなら、手伝ってやらん事もないぞ?」

いくらかの怒気を籠めたミュールのその言葉は、二人によって圧縮されていた空間にヒビを入れる。

強大な魔力を持つ者の言葉はただの言葉ではない。身体の内芯にまで響く迫力と強制力を伴う。彼の獄将ジキールが「死ね」という言葉を発しただけで相手の心の臓を止めたと伝えられているように。

「ちっ」

レドネーは舌打ちすると右手に溜めていた魔力を発散させ、踵かかとを返す。すれ違いざま、ミュールに視線を落とし、歩みを止めることなくその場を後にする。

セントレイドはレドネーの背が見えなくなるまで見送った後、ようやくミュールに向き直る。

「……すみませんでした」

セントレイドがミュールに頭を下げる。

ミュールはつかつかと歩み寄り、セントレイドの足のつま先をギョツと踏む。

「いつ」

「下らぬ言葉に流されるな、たわけが。心は水鏡のようなもの、波を立てては本懐を正しく映すことはないのだぞ」

セントレイドはその言を噛み締めるかのように目を瞑った。その間もぐりぐりと、靴のヒールを押し付けられている。かなり痛い。「……き、肝に銘じておきます。……ところで今日はどのような御用で？」

堪え切れなくなったセントレイドが口を開くと、ミュールは一步後ろに退く。刺すような痛みからやっと開放され、小さく息をつく。

表情から険しさを取り除き、ミュールは元来の人懐っこい顔を取り戻す。そうしている分には可憐な女の子なのだが、とセントレイドは独白を心中に落とす。

「おお、そうだった。不肖の弟子に会いにきたのだが、どこにもおらんでな。探しておったのだ」

「不肖の？と言われては一瞬自分の事かと思い、次いで彼女の弟子と聞いては心当たりが多すぎる事に気付き、最後に？どこにもいない？という言葉で対象が一気に、一人に絞られた。

「……シャトルーですか？ 王城にはおりませんが」

ミュールは眉をひそめる。

「何と、またか？ どこへ行ったのだ。まさかあ奴、カタルスタを出て行ったのか？」

セントレイドは首を振る。

「いえ……。確か魔法学院の講師になったとか」

聞いた途端、ミュールの柳眉が上へ跳ねた。予想外の反応にセントレイドの身体が一瞬震える。

「何とつ……講師だつ。あんの馬鹿弟子めつ。我に教えられている身で何を戯けた事をつ」

思いも寄らなかつた物凄い剣幕に、セントレイドは狼狽する。か
くいうミュール自身が？言葉に流されるな？と言つたばかりではな
いか、と口を衝いて出そうになるが辛うじて踏み留まった。一日に
二度も懸けられるほど、私の命は安くない筈だ。

「ま、待って下さい。庇うつもりはありませんが、上があの様子で
すから大分嫌気がさしていたみたいで」

「尚更質が悪いわつ。人に物を教えるという事はその者の価
値観を養う事に他ならぬ。その後の人生を変えてしまふ様なものだ。
それをあの小娘、仕事逃れのために教職に就くとは一体どういう了
見だつ」

取り成したつもりが、更なる激昂を産み落とす。ミュールの額に
は青筋までもが薄らと窺えた。

「ええい、もう我慢ならぬ。その腐った性根、叩き直してくれるつ
まずい、逆効果だったか、とセントレイドの顔色が青くなる。威
厳を醸しだす立派な髭も、もはや浮浪者のそれといった佇まいであ
つた。

> 纏は悠久なる風 遮は大地の縛く

「あ、あのですねつ」

詠唱を始めたミュールを何とか宥めようと、セントレイドが口を
開くが

> 我が身を彼方へと誘えく

「ちよ、ちよつとつ」

止めようとしたが既に手遅れだった。詠唱を終えたミュールは不
意に傍らの開いていた窓を乗り越え、錫杖を持ったまま飛び降りる。

パタパタとはためくスカートを抑えながら瞑目する。

「あ、危な

「ディ・スケール
天翔つ」

その言霊に反応し、落下していたミユールの身体が重力から開放される。透明度の高い翼を背負った彼女は鳥のように宙を滑空し、南へ一直線に飛んでいく。窓枠に手を置いて外に身を乗り出したセントレイドは、背中に大量の汗が噴き出すのを感じながら、みるみるうちに小さくなっていく彼女の姿を呆然と見送った。

（わ、私は出来る限りのことをしたからな。シャトルー）

むしろ、いわなくていい事をいつてしまったような気もする。同僚への罪悪感を打ち消すように、セントレイドは大きく首を振るのであった。

其の三十五　く息を潜める獣たち（裏）

884年　4月26日

リーシエはナイフとフォークをテーブルに置き、手を合わせた。
「お腹いっぱいっ。ご馳走様でしたっ」

青いチェック柄のクロスがかかった、テーブルを隔てて向かい側には、すっかり空になった皿を満足そうに眺めているリージェスがいる。幸いにも、リーシエは大量に食べた分、大量に運動するため、財布と一緒に膨らんでゆくのでは、というリージェスの危惧は取り越し苦労となっていた。

「はい。お粗末さまでした。紅茶飲むか？」

「あ、もらっつ。もらっつよっ」

二度言うリーシエに苦笑しつつ、リージェスは立ち上がって台所に向かう。金属製のティーポットを持ち、二つのカップに紅茶を注ぎ込む。コポコポという音と共に、ふんわりとした、いぶ燻した茶葉の香りが仄かに漂う。カップの淵にスライスレモンを引っ掛けてからテーブルに置く。他愛ない日常のページ。リーシエは差し出されたカップを両手で掴み、香りを楽しんでからそっと口を付ける。

シャトルーの家を間借りし、すっかり順応した二人は、ごくごく普通の生活を送っていた。もっとも、二人だけの定住は初めてであ

るため、最初の頃は少しぎくしゃくしていた。

ゴルフフレッドにいたるときは、ミシエルが炊事洗濯家事掃除、全てを網羅せいろしていたのだが、ここではすっかり分担し、掃除洗濯はリーシエが一手に担っていた。必然的に炊事と庭の手入れはリージエスの仕事となり、食事は殆ど彼が作っていたのである。

薬草摘みの仕事を始めてから一カ月と少し。食費や光熱費を差し引いておよそ190万ギラが手元に残っていた。家賃がタダだし、贅沢ぜいたくさえしなければ問題なく暮らしていける。すっかり所帯じみてきた感はあるが、リーシエの幸せそうな顔を見てるとまんざらな気分でもない。それが今のリージエスの心境だった。

けれども今のままでは、この幸せが長く続きそうにないのもまた事実である。ブラージウスが善政を敷くのを期待するのは愚ぐの骨頂こつちようであるし、大陸統一が近づけばネフェリイが発見される可能性が格段に上がってしまう。時間をおいた結果として、ウイルの仇を討つ、という初心が少なからず揺らいでいるのにも焦っている。結局、自分分は問題を先送りしているだけだ、という所に行き着くのであった。

リージエスは意を決し、前進するための言葉を口にする。

「リーシエ。まだ早い時間だし、今夜シャトルーさんに例の件、頼んでみないか？」

リーシエはカップの上から目だけを覗かせる。

「んん？ うん、いいよっ」

ここにくる以前にリージェスが抱いていた目的、つまりはカタルスタに助力を頼む、というものであるが、不可侵条約を結び、カタルスタの内情を知ってしまった今となつては頓挫とんさしたと言わざるを得ない。ならばせめて、ということでも新たな力、つまり魔法を学ぼうと思ひ立つた。

二人は既にシャトルーが魔法学院の講師をしていることを知っている。頼んだところで断られる可能性が高いのも理解している。だが、宮廷魔術師という公的な立場にいる彼女ならば、優れた講師も何人が知っているに違いない、そう考えていた。要は、仲立ちを頼もうと思っていたのである。

「よし、じゃあついでに溜まっている薬草を持っていこう」
「わかった。すぐ準備するねっ」
リーシエは紅茶をぐいっと飲み干すと、椅子を鳴らして立ち上がった。

二人は魔法学院に赴き、寮母さんの許可を得て職員寮に入る。もう場所をしつかりと覚えていた二人は、迷うことなくシャトルーの部屋の前に辿り着く。ドアをノックして十秒ほどすると、カチャツと錠じやが開く音が聞こえ、ゆっくりとドアが開く。隙間が段々と大きくなり、シャトルーの姿を間近で見、二人は固まった。

「……あらー、リージェスさん。リーシエさんも……こんばんわー」
「シャ、シャトルーさん。その頭は一体……」

シャトルーの頭髪は、まるで爆発にでも巻き込まれたかのようにチリチリのもじやもじやになっている。何かに似ているが、何だろう。そうだ、ブロッコリーだ。彼女の頭上を飛んでいる小人さんも今日は見当たらない。もしや、鳥の巣みたいになったあの頭で眠っているのだろうか、リージェスは聊なほか失礼しつれいな思いに囚とらわれる。

「な、何があつたんですか？」

リーシエが恐る恐る訊ねる。

「……私の先生がいらっしやったのですが、……ちよつとご機嫌斜めだったみたいでー」

「ご、ご機嫌斜めつて……、それでそんな風にされちゃったんですか？」

リーシエは多分に同情的な顔を作った。

「はいー。まあ、八割方私が悪いので自業自得なのですが。二時間ほど電気ショックコースですー。あ、でも肩こりもとれたので差し引きゼロですかねー」

シャトルーは無邪気な笑みを浮かべる。どうやら、彼女は見かけに寄らず結構丈夫らしい。

室内に招かれ、リージェスとリーシエは客椅子に座るよう奨められる。リーシエはキョロキョロと室内を見回す。書類は床に散乱し、よく見れば天井や壁の至るところに焦げた跡がある。以前には見受けられなかったし、十中八九シャトルーの受講した？電気ショックコース？の弊害へいがいだろう。

「その先生っていうのは、どちらにいらっしやるんですか？」

「先ほどすつきりした顔して帰られましたー」

あっけらかんとそう言ったシャトルーに、リーシエは曖昧な表情あいまいを返す。

「そ、そうですか」

うーむ、どんな人なんだろう。とりあえずさだっっていうのはわかったけど。少なくとも、宮廷魔術師であるシャトルーの先生であるからして、相当な凄腕なのは確かだろう。

ふと、シャトルーの目がリージェスとリーシエの持ってきたパンの皮袋に向く。

「あ、また薬草持ってきてくださったんですね。助かりますー」

「いえいえ、こちらこそ割りのいい仕事させてもらってますんで」

そういえば、とリーシエが思い出したように身を乗り出す。

「シャトルーさん。一つ訊いてもいいですか？」

「はい、どうぞー」

「こんなにたくさんさんの薬草、一体何に使うんですか？」

シャトルーはすつと傾いていた眼鏡を直す。お、ちょっと理知的っぽい雰囲気だ。でも、頭を見ると台無しだな。

「これはですね。新しい魔法の実験に使うのですー」

『新しい魔法っ』

リージェスとリーシエの声がハモる。ただでさえ進んでいるカタルスタの魔法、そのまた更に最先端とくれば、好奇心をくすぐられても無理はない。

「私と、私の先生とで研究している、その名も……、治癒魔法です

っ

「治癒……ですか？」

シャトルーは深く頷いた。

「簡単に説明しますと、薬草の抽出液と魔力の付与を併用することによって、傷を塞いでしまう魔法です。怪我をすると、人の内在している魔力の流れが著しく乱れます。その流れを元に戻しつつ、本来その人が持っている自己修復の機能を一気に加速させ、傷を塞いでしまうのです。」

おお、聞く限りでは何やら相当凄そうな魔法ではないか。魔法といえば攻撃魔法ばかり頭に浮かぶが、こういう万人向けの魔法はどしどし開発してもらいたいものである。

「うわあ、何だか凄そうですね。」

リーシエの感嘆に、シャトルーは得意げに胸を張る。

「凄いですよ。ただ、一つ解消できない問題点があるんですが」

「へー、一体なんですか？」

興味津々といった様子のリーシエが目を輝かせながら訊く。

「どうやって人に試そうかなーって」

「へー、人に……へー」

リーシエの語気が段々と弱まる。言いたいことは何となく俺にもわかるぞ、リーシエ。

「動物実験は固く禁じられていますし、理論はできているんですが、まだ試せないのが現実で」

「つまり……使うときはぶっつけ本番ってわけですか」

勢いのしぼんだリーシエに代わり、リージェスが相槌を打つ。

「ですねー、誰か致命傷の人とか都合よくいれればいいんですけどねー」

うーん、中々難しそうだ。そもそも致命傷だと処置する前に死んでしまう可能性が高いのであるからして。運良く巡り会うしか方法がないのかもしれない。いや、運良くというと御幣があるか。

「……何で瀕死の人なんですか？」

「えー？ かすり傷を治そうとしてそのまま死んじゃったら、後味悪いじゃないですかー」

……そういう問題か。いや、考え方としてはありなのかもしれないけれども。

「はは、じゃあもしそんな人がいたら直ぐに連絡しますよ」

「ぜひぜひー、お待ちしております」

一生果たせそうもない約束を取り付けるリージェスとシャトルー。

(……ん?)

リーシェが何やら目配せを自分に送っているのに気付いたリージェスは、ああ、と思い当たる。当初の願い事を頼むのを忘れていたのである。

リージェスはさも今思い出したかのように口を開く。

「そうそう。そういうえば一つだけ、お願いがあるんですが」

「はいー、何でしょう？ あー、もしかして賃金が足りませんかでしたかー？ 少しなら上乘せ」

シャトルーの指摘に、リージェスは慌てて首を振る。

「ち、違います。お金は十分過ぎるくらい頂いていますから「ふむう、それでは一体？」

「単刀直入に言いますが、俺たちに魔法の手解きをお願いできませんか」

ピクツ、とシャトルーが反応する。

「お二人に？　ですが私は　」

「知っています。今は魔法学院で教師をなされているのですよね」

「ですー。それを知っているならお分かりでしょうけど、私には時間
間がそれほど　」

「どうしても魔法を習得したいんです。お金は勿論可能な限り払いますので」

シャトルーは少し困惑した表情を作る。その様子を見て、リージエスはこれ以上話を進めるのは難しそうだと感じた。

「……うーん。二人ともよく働いてくれますし、ご協力したいのは山々なのですがー」

「やっぱり無理ですかあ」

「なんと申しますかー。実はつい先ほど、私の先生に釘を刺されてしまいましたー」

「釘？」

リーシエが訊き返した。

「？宮廷魔術師の仕事を放り出して、講師などとは何事だっ？、とお説教を……」

「ああ、なるほど……」

「なので、昨日の今日で怒りを買ったような真似をするわけにもいかずー」

そう言ってシャトルーは俯いた。どうやら心底申し訳ないと思っているようだ。

「いえ、そういう事情でしたら致し方ありません。こちらこそ無理
いってすみませんでした」

リーシエがぺこりと頭を下げる。

「いえー、お力になれず申し訳ないですー」

ならば、とリージェスは検討していた案をぶつけてみる。一度無理そうなお願いをぶつけてから妥協案をさり気なく出す。何年も旅をしてきて学んだ処世術しよせいじゆつの一つである。

「じゃあ……、他に魔法を教えてくれる方、心当たりありませんか？ たとえば、さつき仰っていたシャトルーさんの先生とか」

リージェスの提案に、シャトルーは目を瞠みはった。

「ええ、私の？ うーん……。先生は破天荒はてんこうな方ですから、師事する人を選ぶかも知れませんか？」

リーシェは眉を上げて繰り返す。

「破天荒はてんこう、ですか？」

「ええ。非常に聡明そつめいな方なのですが、頑固で、偏屈で、人見知り、横暴で、我儘なので、たとえ肯定の返事を得られたとしても色々大変だと思えます。それで宜しければ、お話するだけでもしてみますか？」

性格が付け足されていくにつれて、リーシェの顔が引き攣くっつていく。

「……ど、どうする？ リージェス」

師事の是非はともかく、並び連ねた性格だけ聞くと、単純にその人物がどんな人なのか興味が出てくる。リージェスは力強く頷く。

「それだけ揃っていれば反って痛快ですね。是が非でも、会ってみたくまりました。お願いします」

リージェスの言に、女性陣二人は顔を見合わせ、苦笑を交わした。シャトルーに？講師など何事か？、といった手前、意外に教えてくれる見込みはあるかもしれない。そんな打算を胸に秘めつつ、リージェスはまだ見ぬシャトルーの先生の姿形を脳裏に描こうとしていた。

同時刻

カタルスタ王都の西にある、住宅街の一角。何の変哲もない、茶褐色の瓦屋根の一軒家。玄関から血痕が廊下の先にまで点々と続いていった。

変わり果てた姿となっているこの家の主は、一階の押入れの中に放置されていた。そのままではとても入らないので、身体を窮屈に捻じ曲げられている。殺されてから何日も経つのだろう。辺りには腐臭が立ち込めていた。その臭いに惹かれた幾多の蠅が侵入を試みているものの、ぴったり閉じた襖に行く手を阻まれている。

開け放たれている二階の窓から、はたと一羽の大きな梟が舞い込む。その足に括りつけられている紙をのっぽの男が外し、再び梟を夜の空に投げ放つ。忙しなく羽ばたく梟を見送ってから、男は丸められた紙を広げ、ザツと目を通し、輝く歯を見せて笑う。

「……皆サン。連絡がきましたぜイ」

その声に反応して、ベッドの上で胡坐をかいている巨体から、一対の紫色の眼光が放たれる。

「ようやく、か。待ちくたびれた」

「んん、もう少しこうしていたかったのに」

大男の広い背中に寄りかかっていた女が媚びるような声を発する。壁に映し出された僅かな陰影からは、その丰满な肢体のおうとつがはつきりと見て取れた。たわわに実った乳房を大男の背に押しつける様にして、裸の女は切なげな溜息を洩らす。

「……素晴らしい一時でしたわ。ヘッドリイ様」
「……フン」

ヘッドリイは気にも留めず、身を乗り出す様に立ち上がる。支えを失った女の身体がベッドに突っ伏し、スプリングが反発してゆらゆらと揺れる。

「あんつ。……もう、つれない御方」

シーツを掴んで少し恨めし気に口を尖らす妖艶な女にヘッドリイは一瞥を送り、すぐに窓の外へと視線を転じた。空の大半は濃灰色の雲で覆われ、いつもよりも更に闇が深い。

「今宵は月の光もない。……潜入には絶好の夜だ」

「警備網も縮小してから大分立つみたいですし、今なら警戒感も薄いでシヨウ」

ヘッドリイはのっぼの男に同意するように頷く。

「二十分後に出る。打ち合わせ通り、お前たちは陽動と脱出経路の確保、俺は研究所に潜入し、目標物の奪取。邪魔する者は全て排除しろ」

二人はその命を聞き、薄らと笑みを浮かべる。何カ月にも亘って抑えつけられていた破壊衝動は、今にも牙を剥いて解き放たれようとしていた。

其の三十六　　緊急事態（裏）

カタルスタ国立研究所は、王城の敷地内のはずれにある。旧カナン王国の代から幾度もの改築を経て残されてきた、由緒ある建物だ。円筒形のオレンジ色の外壁に、傾斜が緩やかな円錐形の白い屋根、二階建てで入り口は正面と裏側の二箇所あり、機密保持、防犯上の理由により、窓は一つもついていない。

ここでは、日々魔法の心得がある研究者が大勢集まり、様々な魔法道具を研究、開発している。例えば、石に魔力を込めて様々な用途に使う？魔石？は、この研究所で生み出されたものだ。他にも、壁や鎧などに貼り付けて簡易的に耐魔法効果を得る？魔符？と呼ばれる類のもの。或いは、清めた水に魔力を注ぎ込んで作る？聖水？その水で栽培し、効能を著しく高めた特殊な薬草など、数え上げれば枚挙に暇がない。魔法道具の研究所は魔法学院や一部の大企業なども有しているが、規模の大きさでいえば国立研究所に比肩するのは皆無である。

これらの道具は民たちにも日常的に使われ、カタルスタの生活水準を高める一因ともなっている。他国との暮らし振りを比べるにあたって、もっとも明確に優劣を付けている点と言ってよい。カタルスタの豊かさは、こういった便利な道具に支えられ、日々の生活や仕事を効率的に行えるようになった結果として付いてきたものだ。

長年に渡って培ってきた技術を守ることは、他国に対する優位性を保つことでもある。唯一例外として、技術提供が外交手段として用いられることは少なからずあった。しかし、意図せぬ技術の流出はカタルスタがその優位性を失うことを意味する。それこそ、カタルスタの民が潜在的にもっとも恐れているものなのである。

宮廷魔術師の一人、シャブラニールは黒いざんばら髪を靡かせ、窓のない閉鎖的な研究所内を闊歩していた。色白でくびれが見られぬほど首が太く、恰幅の良い御仁であるが、生来の無口さからかその印象には陰が付き纏う。三十六歳で脂が乗り切っているお年頃。しかしながら、これ以上二の腕と腹回りに脂は必要なさそうである。無論、当人に聞かせれば？余計な御世話？と返されるだろう。

その後ろに続くのは、やはり同じ宮廷魔術師のヴィラーである。御歳三十八。シャブラニールとは対照的に頬がこけ、顎が尖っており、いかにも研究者然としている。二週間ごとに髪型が変わる彼がカツラ愛好家であることは周知の事実なのだが、別に薄毛とか脱毛症などに悩まされているわけではない。彼曰く、一種のファッション感覚なのだそうである。ちなみに今は茶褐色のドレッドヘアをしている。南部の方で時々見られる髪型だ。

「……シャブラニール。やはり、このままでは心許ないのではないか」

前をいくシャブラニールにヴィラーが躊躇いがちに声をかけるが、シャブラニールは向かい合おうとはせず、視線だけを斜め後ろに半瞬動かすのみに留まった。

「……くどい。その必要はない」

「だが、警備員も減らされている今、均等に配置しては過誤を招くのではないか？」

「……私はあくまで忠実に、教本に則って配備しているつもりだが？」

「それは……わかっているが。なるべく要所に纏めて配置せねば、不測の事態になったとき対応が……」

シャブラニールは肩で笑う。

「……ほう？ 今いる人数でそれをやろうとすれば大部分ががらんどうになるが、……それでもよいと？」

普段は口数の少ないシャブラニールだが、今夜に至ってはやたらと良く喋る。それでもヴィラーは何とか反論を試みた。

「だから、それを補うために出入り口付近を」

「どうしても言うなら、しかるべき許可を賢王なり大臣なりに貰ってこい。そうでもない限り、お前の提案を呑む筋合いはない。警備草案を変更するには手続きが必須であり、何より 責任者は私だ」

主張は簡潔にして明白。お前が口を出すことではない。無口なはずの彼の、しかし流暢しゅうちやうに語られる正論せいろん尽くしに、ヴィラーは楔くさびを入れる隙すら窺えなかつた。

沈黙のシャボン玉がふわふわと漂い、壁に当たって弾ける。

「わかつた。お前の言うことはもっともだ。後日、許可をもらってから改めて提起しよう」

「……わかつてくれればいい。……取り越し苦労になると思うが、な」

研究所内の事務室の前で立ち止まると、シャブラニールが鍵の束を取り出す。小さな鍵を選び取って鍵口に差し込む。ドアを開き、ヴィラーを先に招き入れる。

シャブラニールは廊下に誰もいないのを、視線を走らせて確認すると、ゆっくりとドアを閉めた。

カタルスタ王城の一角。ドタドタと慌しい物音が行き交い、歯を磨いていたセントレイドが何事かと洗面所から顔を出す。

「ほうヴおう（騒々）しいぞ。何かあったのか？」

口に付いていた、泡立った歯磨き粉が飛ぶ。

廊下を走っていた伝令兵が振り返り、セントレイドを見つけて安堵の顔を見せ、次には思い出したように顔を引き攣ひきつらせる。

「た、大変ですつ。魔法図書館に賊が押し入りましたつ。戦闘は現在も継続中ですが死傷者も多数出ているとのことですつ。至急援軍をお願いします」

それを聞いたセントレイドは一旦洗面所に姿を消し、素早く口を濯ゆすいでから再び飛び出して指示を飛ばす。

「取り急ぎ、上層部の者と王城に連絡を取れつ。我が名において第一種警戒態勢に移行を命じる。警報を鳴らせつ」

「……は、はっ」

慌しく散っていく兵たちを見送り、セントレイドは舌打ちをする。「……腕の立つ衛兵が死傷者多数。……三重トリニティ・フンの頂？ ……だが、それにしては、動きが派手過ぎるな」

呟くようにそう言つと、セントレイドは壁にかけていた外套を掴み取った。

リージェスとリーシェはシャトルに一週間分の給料を貰い、ほ

くほく顔で帰途についていた。

「よかったね、リージェス。手応えありそうじゃない。ようやく一歩前進だね」

魔法の講師の件を指摘しているのだとわかり、リージェスは軽く頷いた。

「まあ、な」

「あ、いつけねっ」

「ん、どうしたの？」

リージェスは空の両手のひらを見せ

「シャトルーさんの家に皮袋置いてきちまった。もう家も近いし、悪いけど先に帰っててくれ。ひとつ走りいって取ってくる」

そう言った。

「リージェスがドジるなんて珍しー。わかった。起きて待ってるからノックしてね」

「了解」

そう言ってリージェスは踵かかとを返した。

十分後

(……うーん。らしくもなく、浮かれてたかな)

普段やかすことのない失態に下唇を出しつつ、リージェスは走る。しかし、魔法学院に通じる橋を渡りかけたその時

ヴァーン、ヴァーン、ヴァーン……

「……………っ?」

おもむろに、甲高い音が点滅するように、一秒間隔で城下町に鳴り響く。

(……何だ？ この音)

リーシェが微かに首を傾げた。一定間隔で聞こえる、不協和音を適当に重ねたようなその音色に、妙に不安を喚起かんきされる。

「……もしかしてこれ、警戒音か？」

リージェスは先ほどまで温かった風が、温度を失いつつあるのを感じた。何かしらの危機感が辺りを渦巻いている。長旅を経て培った、凶兆の前触れだ。

(……胸騒ぎがする)

リージェスは表情を引き締め、魔法学院と家の方角と、視線を往復させる。

国立研究所内

「シャー・エアール
嵐珠つ」

鍵のかかった木製扉を吹き飛ばし、セントレイドとカタルスタの衛兵たちは警戒しながら抜き足で事務室に入りこむ。辺りを見回し、うずたか堆く書類が積み重ねられている書斎機の脇に、人の手らしきものが横たわっているのが目に入り、慌てて駆け寄った。

「……っ。ヴェイラーっ」

「……ぐ、うっ」

呻き声を上げるヴィラーにセントレイドが駆け寄る。

「ヴィラーッ。どうした、何があったっ」

「……だ、誰かに後ろからいきなり頭を……うっ」

殴られた箇所が痛むのか、ヴィラーは顔をしかめた。

セントレイドはヴィラーを気遣いながらも室内を見回す。特に荒らされた様子はなさそうだが、微かに酢のような、錆さびのような、鼻に付く刺激臭がした。

（……この匂いは？）

一瞬物思いに囚われるも、思考を現実に取り戻し、現状を把握するべく再びヴィラーに訊ねる。

「……シャブラニールはどこに？」

「……え、いや、さっきまで……一緒に。……何でお前がここにいるんだ」

どうやら、ヴィラーは初めてセントレイドの存在に気が付いたようであった。セントレイドは開きかけていた口を一旦嚙み、間を置いて再び聞く。

「……研究所に侵入者が入ったようだ。わかっているだけで七名、殺されている」

ヴィラーが目を見開き、次いで息を呑んだ。

「……どうやら、もうここにはおらぬようだな。……その君、

ヴィラーの手当てを頼む。私は急いで賊を追う」

セントレイドは後ろから付いてきていた兵に言う。

「畏まりました。どうぞお気をつけてっ」

気遣いの言葉に頷くと、セントレイドは脱兎のごとく部屋を出ていった。

魔法図書館にはミュールとレドネーが駆けつけていたが既に敵影はない。深夜だったこともあって兵の招集が遅れたため、交戦報告からは既に三十分が経過していた。現場には緊急招集されて駆け付けた兵たちが負傷者の手当てや死体の運び出しにてんやわんやと動きまわっている。見回せば血痕が帯を引き、外壁や階段、柱などにも破損が見受けられる。

「……遅かったかつ」

「……お、おのれい。……儂の退官前にこんな大惨事だいさんじをやらかすとは」

レドネーは忌々しげに頭を抱えた。どうやら、責任の所在追及と大仕事を押し付けられるのを危惧しているらしい。

(全く、この男は……)

ミュールは小さく溜息を付いてから、軽傷で済んでいそうな男に歩み寄る。外壁に寄りかかっていた男は微かに顔を上げる。

「……ミユ、ミュール様。申し訳ありません」

「良い。……それよりも、賊は中に？」

「いえ、何とか侵入は阻止した……はずです」

意外な言葉に、ミュールは柳眉を上げる。

「何。どちらに向かった」

「南西の、門の方です。仲間を殺されて逆上した衛兵たちが追っています……。あの者たち、あまりにも強過ぎる。どうか……、彼らをっ」

連れ戻してほしい。ミュールは言葉に詰まった男の表情から、その気持ちを汲み取り、深く頷く。

「……ちなみに、敵は何人だ」
今度はレドネーが口を開く。

「二人組、です。のっぽの、剣を持った男と、有刺鉄線のような鞭を持った女です。のっぽの男が三重トリニティ・ワンの頂を名乗りました……。女の方は魔法も行使します。……お気をつけください」

「……わかった。あとは任せておけ」
レドネーが珍しく慮おもんばかるような所作を見せる。

二人は立ち上がると周りを見渡し、現場に新たに駆け付けた兵に声を掛け、話を聞いた兵に応急手当てを施すよう命じる。

「……陽動だな」
レドネーが先に口を開く。

「まず、間違いない」
隠密行動を旨とするはずの、三重トリニティ・ワンの頂が自ら名乗っての大立ち回り。なにかしらの目的を意図した行動に違いない。

「南門に向かうか？」
「……奴らが大人しく出口を使うとも思えんが、追っていった兵たちのことが気にかかる。いくぞ」

二人は魔法図書館の方を一瞥してから賊の向かった方角へと駆け出した。

走りながらもレドネーが再び訊く。

「……研究所には？」
「王城にはセントレイドがいるし、研究所にもヴィラーとシャブラニールが詰めているから滅多なことにはならんだろ。レクストとルーモスはそれぞれ国境の方に出向していると聞いている。ログステイオは　　知らん」

ふむ、とレドネーは腕を組む。

「……賢王の周辺に関しては心配なかるうか」

レドネーの意外な言にミュールは眉を上げ、次いで微笑する。この男からアグストウラの身を心配するかのような言葉を聞くとは、明日は雷じゆんが降るかも知れない。

「それは、……盲点だったな。ま、やわな鍛え方はしておらん。近衛もいるし、自分の身くらいは守れるだろう」

一瞬の間、月が微かに光を放ち、再び灰色の雲に呑み込まれる。

結局、リージェスは踵かかとを返し、家に向かっていた。先ほどの妙な音はリーシェも耳にしていただろうし、あまり帰りが遅くなれば彼女が心配して外に出てきてしまつかも知れない。それを危惧していたのである。

そして、走っていたリージェスはその存在にはたと気付く。

(……有り得……ねえ)

感じたことのない狂気。尋常ならざる力。それも、ウィルを遙かに凌駕りようがするほどの。

どれほどの距離かはわからないが、北の方に途轍とてつもなく強い力を持った何かがいる。普段リージェスが感じる気配は今もってせいぜい70mほどだが、持つ者の力が強ければ強いほど距離は伸びる。

「……まさか、……こんな奴がいるのか」

リージェスは、己の感覚を鋭利な針のように研ぎ澄ませます。

(……もの凄い速度で移動している　こっちの方に)

接近してくる。今は絶対に敵わない相手。やり過ぎすしかない。リージェスは東へと走りだす。少し遠回りにはなるが、そちらからでも家にはいける。ところが

おもむろに金属同士が奏でる音が微かに耳に届く。続いて甲高い悲鳴。女性のものだ。

「……まさかつ」
悪寒に襲われ、瞬時にリージェスはそちらの方へと駆け出した。

「ぐ……つつ」

黄緑色の胸当てを着け、ショートカットの髪をした女兵士は、のつぽの男に襟元を片手で締め上げられていた。ゆらゆらと、女の身体が男の腕に合わせて時計の振り子のように揺れる。舗装された街路には彼女が持っていたであろう剣が横たわっている。

「何？ 何？ この程度で俺様を追ってきたんですカイ？」

「……ぐ」

苦しげに呻いていた女が突如、ぶら下がっていた手をポケットに入れる。その瞬間

ボキッ

のつぽの男が女の右腕を大きな左手で握り締めた。

「……いつ　　あああああつ」

長く太い指に握られた部位から下がブランと力無く揺れる。凄ま

じい握力で女の腕の骨を折ったのだ。

「まだ歯向かう気ですかネイ？」

「ああっ……ぐっ、皆のっ……仇っ」

足をバタつかせ、涙目の女は尚も抵抗を試みる。のっぽの男は自分の胸元を見、足跡が付いたのを見て顔をしかめ、拳を振りかぶった。

ドズンッ

「……はっ、　げぼっ」

男の放った拳に胃を容赦なく圧迫された女は、くの字になって悶絶し、胃液を吐き散らす。下向きになったことで零さぬよう堪えていた涙が頬を伝う。

「……俺様の一張羅になんてことしてくれるんデスカ？」

「……おっ……おっ……」

のっぽの男に答えるどころではなく、女は身体を痙攣させながら押し寄せる痛みに耐えていた。

「　聞いていんのかヨッ」

苛立った男は女の腹にめり込んだままの拳を更に押し出す。途端、先ほどよりも一際強烈な吐き気が女を襲った。

「　うぶっ、オエエっ」

涙目の女は一瞬口を膨らまし、次には胸を震わせ、ひゃっくりするようにして胃の中身を一気に地べたに吐き出す。消化不良のパスダや人参やらが酸味のある臭気と微かな湯気を放っている。

もはや戦意をなくし、目が濁り始めた女を見て、のっぽの男は面白くなさそうに舌打ちをしてから、襟を握っていた手を放す。

「……ひ、あ」

のっぽの男が止めを刺すべく、地に落ちている最中の、弛緩した女の身体に蹴りを放とうとした時、側面から明瞭な殺気が放たれた。

「っ」

反射的に逆方向へ側転し、バク転に繋げて距離を取る。滑りこむように疾駆してきたリージェスは、カタルスタの兵と思われる女の身体を片腕で受け止めつつ、のっぽの男に警戒の眼差しを送る。ほぼ同時に、その身体に似合わぬ身軽な動きを披露したのっぽの男は、リージェスを視界に捉えていた。

其の三十七 く届かぬ刃(裏)

リージェスはのつぽの男から一瞬だけ、自分が抱きかかえている女の顔へと視線を向ける。

(リーシェじゃなかったか)

やれやれ、と安堵の溜息を付くも、事態はそれほど樂觀視できないことを知る。垣間見せた身のこなしから察するに、目の前にいる男は足手纏いを抱えて勝てるほど楽な相手ではなさそうであった。

「……………う……………あ、貴方は……………」

濁っていた女兵士の目に微かながら力が戻る。

《悪いけどさ、この場から逃げてくれない？ 足は動くだろ？》

リージェスは女に視線を向けることなく、唇だけを動かした。

「……………そんなわけには……………いかないっ。あいつは、仲間を大勢殺したんだっ」

内緒話をブチ壊す、女のしゃくり声が辺りに響く。

仇討ち、か。女の話聞き、リージェスの心中にやや苦い感情が走るが、それを打ち捨てて言葉を返す。

《……………その意を酌んでいられるほど、お手軽な相手じゃないんだよ》

そう囁くリージェスは女を支えながらゆっくりと立ち上がり、のつぽの男と距離を保ちつつ円を描くようにして西の街路へと歩み寄る。

《万全の状態ですら太刀打ちできなかったアンタが、そんな身体で一体何が出来るか、冷静に考えろ》

暗に？足手纏いだ？と辛辣な言を浴びせ、女の戦意を容赦なく挫く。女の顔がくしゃくしゃになりかけたが、折れてない方の腕でゴ

シゴシと目を擦り、ようやく頷く。無駄死にすることなかれ。足を引く張ることなかれ。兵である最低限の矜持きやうじは弁えているようだ。《……わかった。……待って、直ぐ援軍を呼んでくるから》《そうしてくれ。……ごめんな、遠慮がなくて》その言葉に、女は微かに目を細めた。リージェスは女の腰から腕を解き、背に庇うようにして剣を構える。女は、折られた腕を抑えながら、よたよたと走りだし、やがて闇に姿を消した。

「 ようやく終わりましたか? 」

のっぽの男は笑顔を見せる。

「 一つ聞いていいかな。何でかかってこなかった? 」

リージェスが訊ねる。足手纏いがあるときに攻撃を仕掛けられていれば、既に相当な劣勢に追い込まれていた可能性が高い。当然の疑問であった。

「 それでも良かったんですけれどネ。美味しい物と不味い物を一緒に食べたなら、残念な気持ちになるでショウ? 」

そう言うや否や、のっぽの男の圧力が一気に増加する。

(……こりゃ、まいったな)

多分、自分よりも。どうやら、先ほど感じた力があまりに巨大過ぎて、危険センサーが感度不良を起こしているらしい。普段ならもつと敏感に、目の前の男の力に反応したはずだ。

リージェスは乱れかけていた息を整える。小さく、浅く。相手が持つ剣の、ゆらゆらと揺れる切っ先に呼吸を合わせる。

いきなり、相手の身体が巨大化した。その体格に見合わぬ高速の突進。男の長い腕が上方から鞭のようにしなる。

ギインツ

リージェスはすぐさま剣を抜き払い、辛うじて斬り下ろしを受け止めるも、その衝撃が肩にまで伝わる。のっぽの男はそのまま柄を持つ腕に力を込める。

(………何つつ、力だっ)

鏢迫り合いはリージェスの方が明らかに劣勢だった。体格差による優劣のみでは説明が付かないほどに、のっぽの男の力は半端なものではない。

のっぽの男は上背を活かしてリージェスの身体を地面に押しつけていたが、不意にその力を抜く。

「………とっ」

固定されていた力が解放され、リージェスの身体が前に泳ぎかける。その隙を逃さず、のっぽの男はリージェスの腹部目掛けて膝蹴りを放った。

「ぐうっ」

間一髪、リージェスは腹筋に力をこめて内臓を庇うが、それでも鈍い痛みが走り、顔をしかめた。

5 m程後ろに、滑る様に後退させられる。一瞬片膝をつくも、すぐに立ち上がって剣を構える。摩擦熱が靴底を焼き、ゴムの焦げた不快な臭いを放っていた。

「お見事ー、たいした反射神経ですネ。それに、相当鍛えていらっしやる。今ので大体のやつはー、終わっているはずですぜイ」

男は朗らかな口調でそう言いながら、肩にトントンと剣を遊ばせている。

軽くせき込んだリージェスは苦々しく舌打ちする。恵まれた体格による膂力くわうりきに、その身体を動かすのを苦としない瞬発力。間違いない、師であるウィルに匹敵する力を持っている。エリアア軍に所属していた頃より実力は付けているつもりだったが、それでもこの男

の方が格上だ。

「アンタ……一体何者？」

リージェスの質問に、男は両手を広げて答える。

「よ、く、ぞ、聞いてくれました！。俺様はダイエロ、トリニティ・ワン三重の頂の一人デッス。O型のさそり座、ぴちぴちの31歳、好きなのはバナナデッス」

やたらとハスキーな声がキンキンと耳に響くが、リージェスはそれよりも男の広げた腕の長さに舌を巻いた。リージェスより20cm以上長い。体格以上に、この差は厄介である。

「……トリニティ・ワン三重の頂。……帝国のやつが何故こんな所にいる」

「それは秘密に決まってるじゃナイ。俺様つてば諜報部隊よ？意味わかるー？」

(じゃあ名乗るのもNGだろが)

喉元まで出かけたリージェスだったが、それを堪こらえる。

「あ、ちなみに趣味は戦うことネ。相手が美形であればなおオツケ！。その点で君は合格ダヨ。俺様つてば、男女関わらず綺麗な顔した人が苦しみ悶えるのを見るのが大好きだからサ」

ダイエロはいけしゃあしゃあと言い放った。

矯正不可。性根からして腐ってやがる。流石はブライジウスの側近、トリニティ・ワン三重の頂。大陸中の変態を選びすぎりましたっか。

しかし、実力は決して紛い物ではない。リージェスはゆらりと剣の切っ先をダイエロに向ける。その時

「ダイエロ。何を遊んでいる」

背筋に悪寒が走った。瞬時にダイエロから傍らの住宅の屋根へと

視線を移し、目を見開く。圧倒的な力が悪意と共に、周囲に撒き散らされていた。

(……い、いつの間に)

全身の皮膚という皮膚がざわめいているのがわかる。接近されているのに気付かなかった理由。決して気配を消していたなどという理由ではない。おそらくは、男の動きが速すぎてリージェスの感覚がそれを捉えきれなかったのだ。感じた事のない焦燥感。否、濃い紫色の畏怖を纏ったその男は、死の予感を漂わせていた。

「あー、ヘッドリイサン。お仕事は終わりました？」

「見ての通りだ。……脱出経路を確保しておけと命じたはずだが」

「いやネ？ 運命の出会いってやつが俺様を」

デイエロが片目を媚びるように瞬まはたいた、そう思った時には、屋根の上にいたヘッドリイはデイエロの背後に廻り、大きな拳でその首を握り砕こうとしていた。

「……なっ」

リージェスは大男のあまりの疾さに驚愕きょろする。距離があるにもかかわらず、目で完全に追い切れなかったのである。もし至近距離であれば、瞬間移動したようにしか見えなかっただろう。

まるで壁の如き体軀たてがみ。闇でもはっきりとわかる紫色の鋭い眼光。揺らめく白銀の鬚たてがみ。何よりも、その身体から発される凄まじい威圧感。強敵という言葉が持つ、概念の枠から逸脱している。

「早くいけ。いかないならここで死ぬ」

ヘッドリイの言葉を聞いて、首元に手を付き付けられているデイ

エロが身体をビクンと振るわせる。

「ちよつちよつちよつちよーっと待ったっ。ホラッ、茶目っ気出し
てみたただけだっテ。じゃ、じゃあ、すぐにいつてきマース」

デイエロは早口でそう言うと、脱兎の如く、砂埃を巻き上げなが
ら南へと走り去った。その姿を見てヘッドリイは肩をすくめる。

「全く……イヴァンスの見る目のなさにも」

先手必勝。リージエスは顔を逸らしているヘッドリイの肩目掛け
て斬りかかった。まともに戦ったところで100%勝てないと本能
が告げている。

キンッ

「なっ……」

我が目を疑う。ヘッドリイは渾身の力で振るった剣を、平然と腕
で受け止めていた。それも手甲などを付けているわけではなく、裸
腕で、である。全身凶器。そんな言葉が頭の中に浮かんだ刹那、剣
を受け止めていた男の腕がブレた。

ゴッ

「がっ」

次の瞬間、視界の上下が反転していた。受け身を取る間もなく、
地面に強かに背を打ち付け、水切り石のように二回、三回と跳ねる。

「……ぐっ……うっ」

何とか起き上がったものの、右頬に鋭い痛みを感じ、顔をしかめ
る。ようやく、殴られたのだとわかる。

(な……何だ、そりゃ……)

おもむろに鼻血がツウッと垂れ、リージェスは慌てて袖でそれをゴシゴシと拭^{ぬぐ}う。大男を見ると、剣を受け止めた腕がいつの間にか振り切られていた。察するに剣を受け止めた状態で裏拳を放ったのだろうか、殴られた瞬間がわからない。

「ほう。立ち上がったか」

「て、てめえ……」

視界が揺らぎ、リージェスは何度も瞬きをする。軽い脳震盪^{のうしんとう}を起こしていたのである。膝が笑っていることによつやく気付き、感覚を戻すべく足裏を地面に二度三度と叩き付ける。

「こつちも時間がないんでな。とつとと終わらせてもらつ」

「……」

そつ言い終えるや否や、ヘッドリイの巨体が視界から消える。

(上……)

地面に映る薄い影が高速で迫ってくるのを目で追つたリージェスは反射的に横へと飛ぶ。その刹那、リージェスがさきほどまでいた場所にヘッドリイが落ちてくる。踏みしめた両足から発される衝撃が、正方形の石畳を半径3mほどに亘つて剥がし、宙に浮かせる。

転がるように倒れ込んだリージェスはすぐさま大男に向かって体勢を整えるが

「こつ」

宙に舞っていた石畳の一つを、大男がリージェスに向かって蹴り出すのが見えた。弾かれた様にして、その凶器が眼前に迫ってくる。

ガスッ

「ぐうっ」

咄嗟に躲そうとしたものの、先ほどのダメージの影響で身体が完全には付いていかない。辛うじて目への直撃は避けるも、破片が額を掠め、パツクリと横に赤い割目を作る。頭が横に激しく揺さぶられたリージェスは、めいてい酩酊状態に陥り、そのままぐらりと倒れ伏した。

(や……ば……意識……が……)

血が出るほど強く唇を噛み、倒れかけている身体を辛うじて腕で支える。何とか意識を繋ぎとめるも、ぼんやりとした視界の中に、止めを刺さんとヘッドリイの足が近づいてくるのが映る。身体に動けと幾度となく命令を発するも、微かに震えるのみに留まった。

「よく粘ったものだ。……雑魚にしては、だがな」

雑魚呼ばわり、か。……こん畜生。一太刀も浴びせられないなんて。

ウィルを相手にした時ですら味わったことのない無力感。キールやリーシェと何度となく訓練をし、山地を駆けて身体を鍛え、強くなっていたつもりだった。それがこのザマである。ブラージウスを倒すなどと息巻いていた自分に半ば呆れ、半ば笑ってしまう。今の力量では、一対一の状態トリニティ・ワンで、しかも万全の状態トリニティ・ワンですら倒せないのだ。

(……考えが……甘すぎた)

自分の認識不足を恥じ、リージェスは悔しさに拳を震わせる。ウィルと相対したときですら感じたことがない、生まれて初めての完全なる敗北感に打ちのめされていた。

(せめて……お前だけでも無事に……)
リージェスはリーシェの安否を気遣い、そして、それが自分の最後の思考になるであろうことを理解する。額から流れ出た血が、右眼に朱色の帳たばを下ろしてくると共に、地面を照らす街灯の明かりが、近づいてくる男の巨体で徐々に遮られる。そのときだった。

「リ……リージェスっ」

(……っ)

聞きなれたその声の刺激に、脳が活性化する。
即座に暗い道の先に視線を転じると、膝に手を当てて、息を乱しているリーシェがいた。

リージェスは我が目を疑う。

「な……んで……ここに……」

この馬鹿。何で出てきた。最悪じゃねえか。

図らずも顔を歪めるリージェスは口を開きかけたが、リーシェの怒声こゑに遮られる。

「……貴様っ。リージェスから離れろっ」

ヘッドリイは地に伏せているリージェスから、リーシェに視線を転じる。

「……何だ、小娘。まさか俺にいつているのか」

語気から伝わるその力に、リーシェは一瞬身を竦ませた。

「……馬鹿っ。とつとと逃げろっ。お前が敵う相手じゃねえっ」

リージェスはあるたったけの力を振り絞って叫んだ。

「……そんなのやだよっ。リージェスが殺されるくらいなら死んで

も戦うつ」

横に髪を振り乱すリーシエに、リージェスは一瞬息を詰まらせる。

「……………つ。こ、の分からず屋」

「五月蠅い」

ゴッ

四つん這いになっていた、無防備なリージェスの側頭部に、ヘッドリュイが遠慮なく蹴りを入れ、リージェスの全身が大きく、揺れた。

「……………あ」

蹴られた反動で仰向けになり、再びうつぶせになって、最後にゆつくりと仰向けの格好になる。一回転半。顎あごが天に向き、リーシエが息を呑む音を聞いたのを最後に、リージェスの意識が闇に閉ざされる。その身体は弛緩しかんし、ややあって、耳から一筋の血が、石床に広がった青髪に垂れてくる。光を失ったリージェスの虚ろな目が、リーシエの目と合った。

其の三十八 　　〜 苛烈なる反抗（裏） 　　〜

「……………あ……………ああ」

ヘッドリイの蹴撃に晒され、全く動かなくなったリージエを見て、リーシエの髪が逆立ち、顎あごがガクガクと震える。

（……………リ、リージエス）

誰より大切な人を失う恐怖からか、それとも敵への怒りからか、小刻みに噛み合う歯がカチカチと音を鳴らす。

「やっと死んだか」

ヘッドリイのその眩くらきに反応し、リーシエの恐怖心と自制心が解き放たれた。

「うわああああああっっっ」

激情の咆哮ほろを迸はならせ、リーシエがヘッドリイに疾走する。柄に手をかけて剣を抜くと、鞘走りの音と共に白刃が街灯の光を反射し、キラリと煌きらいた。

「身の程知らずが」

ヘッドリイは拳を腰の辺りにゆっくりと構え、向かってくるリーシエに素早く突き出した。

「っ」

咄嗟にリーシエは地を蹴る角度を変え、横に飛ぶ。何かが見えたわけではないが、何かが迫ってくる。そんな不明瞭な勘。果たしてそれは正解だった。

「くっ」

体を整えた途端、頬と肩とをぐぐつと押される。男の拳が放った衝撃波が空気を押し開き、突風が生じる。リーシエがそれを認識した瞬間、後方で石壁の破壊音が轟く。

風に煽られて体勢を崩しかけたリーシエはヘッドリイから視線を外さず、素早く立ち上がった。

しかし、隙とも言えぬようなその一瞬の空白に、ヘッドリイが一気に間合いを詰めてくる。

「……えっ」

虚を突かれたリーシエは反射的に眼前に剣を差し出すも、ヘッドリイはそれを易々と避け、剣持つリーシエの腕を捉えた。

「しまっ きゃっ」

重心が失われる。ヘッドリイは天に手を翳すようにして軽々とリーシエの身体を持ち上げた。白いホットパンツから剥き出しになった、張りのある瑞々しい脚が、右へ左へと頼りなく揺れる。

「は、放せっ」

腕を掴まれたまま、リーシエは体を捻る様にしてヘッドリイのこめかみに蹴りを放った。避ける素振りも見せずヘッドリイは蹴撃に身を晒す。しかし

ガンッ

「……ぐっ、うっ」

痛みに顔をしかめたのは蹴ったリーシエの方だった。岩石を蹴ったような感触。有り得ないほどに頑丈なヘッドリイは、リーシエを見上げ、そして口の端を吊り上げる。渾身の蹴りが全く通用しなかった以上、剣持つ手を掴まれているリーシエは逃れる術がないことに気が付き、ぶるりと体を戦慄わななさせる。恐怖が心をゆっくりと侵食し

ていく。

(……っ、リージェスっ)

視界の端に倒れているリージェスが映り、抵抗の意志が戻る。

「……っ、このっ」

何とか絶望感を振り切り、諦めることなく、再び足を振り被る。

「鬱陶しい」

リーシェの足が顔に届くよりも早く、ヘッドリイはリーシェの腕を掴んでいる手を素早く動かした。

ゴキユゴキユ

「……っ、ああああああっっっ」

一瞬にして腕を二回転分捻られ、骨と神経とを擦じ切られたリーシェはあまりの激痛に背を弓なりに反らし、天を仰いで絶叫した。

その声に反応するようにして、倒れていたリージェスの意識が覚醒する。次いで遮断されていた痛覚が蘇り、リージェスは痛みを押し殺すかのように歯を食いしばりながら傍に横たわっていた剣を引き寄せると、それを杖代わりにしてよろよろと立ち上がる。

「リ……シエ……」

ヘッドリイは起き上がりかけている満身創痍のリージェスを一瞥だけすると、身体を激しく痙攣させているリーシェに向き直り、リーシェの骨折した腕を掴んだまま振り回す。リーシェの長い黒髪が撓り、パキパキと、骨が無残に碎ける音が断続的に鳴った。

「 やあつ あああつ」
涙をボロボロと流しながら耳を劈つんざく叫び声を上げるリーシェに構うことなく、ヘッドリイは街路樹目掛けて彼女を放り投げた。

ドガッ

「 あ……ふっ」
リーシェの身体が背中から木の幹に叩き付け、衝撃で木が激しく揺さぶられる。木に寄りかかる様に崩れ落ちたリーシェは、一瞬だけ咳き込むように身体を震わせ、そのままうつ伏せになり、ピクリとも動かなくなった。遅れて、木の梢から多くの葉がはらはらと落ちてくる。

「 ……に……」
悪夢のようなその光景を、まざまざと見せつけられたリージェスの目が血走り、噛み締める歯の先端が砕け散った。
それを意に介すこともなく、ヘッドリイは横たわるリーシェの方に一步を踏み出す。それを見て、リージェスの全身の血が沸騰した。

「 何…… やってんだっ、 手前はあっ！」
体中の痛みを大量の怒気が一気に掻き消す。額から流れていた、左目の視界を妨げている血をぐいっと拭い、リージェスは吼えるや否や地面を蹴り上げた。

ヘッドリイはゆっくりとリージェスの方に振り返る。余裕たっぷり行動。それが更に怒りに拍車をかける。

（ 殺すっ ）

憎き敵に対して嘖き上がるような殺意を抱く。次いで先ほどヘッドロイの見た動きが鮮明に脳裏に浮かびあがり、リージェスは無意識の裡うちにそれを追跡する。ぶれていた虚像と己の実像とが段々と重なってゆき、ピタリと合わさった刹那、足運びが一気に速度を増した。その身体は地を這う矢のように、ヘッドロイに猛然と迫る。

「 こいつ、見様見真似でっ 」

ヘッドロイが思わず毒づく。リージェスが見せた動きは、紛れもなく充填フィールのそれであった。先ほどまでの印象と明らかに乖離かいりしたりリージェスの俊足に、ヘッドロイの初動が微かに遅れる。それでも流石に常人離れた動きを見せ、リージェスの手に持つ剣の切っ先が僅かに分厚い胸に埋もれた所で左拳を剣の腹に叩き付けた。剣の刀身が真ん中からポッキリ折られる。柄を失った刃がヘッドロイの胸の表皮を僅かに裂き、二人の間を遮る様にヒュルヒュルと風を切つて回転した。

リージェスは尚も左手に持つ、刀身が半分になった剣で腹を刺そうとした。が、視界に折られた刃が回転しているのがやたらゆっくりと目に映り

リージェスは一切の躊躇（ためら）いを見せることなく、それに手を差し出す。

ザシユッ

刃に貫かれたリージェスの右掌から血飛沫ちしげきが舞い、リージェスの左手の動きに気を取られていたヘッドリイの目を汚す。

「…………ぬっ」

本能的にヘッドリイが顔を腕で庇う。右手に感じる鋭い痛みよりも、リーシェを酷く傷付けられたことへの激しい怒りが勝まさっていた。リージェスは、初めてヘッドリイが見せたその僅かな隙にすぐさま反応した。

「…………らあっ」

リージェスはヘッドリイの懐深く踏み込む。そして空を引つ掻くかのような動きで、右手に折れた刃を刺したままに喉元目掛けて掌底打を放った。

「…………ぬぐっ」

微かにヘッドリイが呻き声を上げる。

刺さった　手に感じる痛みが一気に増す。だが、確かな手応えを認識した刹那、ヘッドリイの右拳がリージェスの胸元を捉えた。

「…………ふうっ」

零距离で放たれた衝撃波によってリージェスが宙を舞う。ヘッドリイの渾身の一撃を無防備のままに受け、呼吸器を酷く痛め、咽むせるように吐血する。

「…………この、青二オがっ」

声帯を傷付けたのか、ヘッドリイはしわがれるような声で唸る。窮鼠きゅうその一噛みを受けて怒り狂う彼は、未だ宙にあるリージェスの身体に再び拳を構え、止めを刺さんと第二撃を放とうとする。

だが、不意にヘッドリイの死角から、振り抜きかけたその腕目掛

けて、鋭利な風の刃が飛んできた。

「ぐっ」

刃が右腕に深く食い込み、リージェスへの追撃が僅かに逸れる。衝撃波が宙に揺らめく青髪を突き抜け、空に消える。ヘッドリイが顔をしかめたまま刃の飛んできた方角を見ると、そこには息を切らしているセントレイドがいた。数瞬遅れて、リージェスが背中から地に叩きつけられる。

邪魔が入った事にヘッドリイは苛立ちを隠さない。喉元と腕から血を滴らせながらも、それを気にする素振りすら見せずにセントレイドを睨んだ。

「……どいつもこいつもっ」

「……これ以上の勝手は許さんっ。この地で永遠の眠りに着くがいつ」

大勢の仲間を殺され、怒りに声を震わすセントレイドは再び詠唱を開始した。

求は力の収束 穿は光の刺鍼 患者の心臓を刺し貫け

「……ぐ……しろ」

もはや意識を失いかけているリージェスが、喉までせり上がってきた血を飲み込みながら、辛うじて放ったその言葉に、セントレイドは後ろを振り向き

「ちいつ」

眼前に迫る炎を間一髪屈んで避けると同時に、手を翳して目の端に映った敵影へと魔法を発動させる。

トウ・ニドワール
「對天針っ」

詠唱と共に地に膝を付いたセントレイドの手から赤い光を纏った巨大な針がいくつも出現し、次の瞬間には残像を残す光の帯と化す。「はやっ ヒッ」

幾重もの赤い閃光は避ける間も与えず、女の身体を情け容赦なく貫いた。串刺しにされた女は体中から血を噴き、微かに断末魔を上げて仰向けに倒れる。

「オルガッ。……つち。馬鹿が、油断したな」
ヘッドリイが呻く。

「すまないっ。助か……っ」
セントレイドが再び振り返り、慄然りっぜんとした。胸からの夥おびただしい出血が、リージェスの周りの地面を赤く染め上げているのに気付き、顔色を蒼白に変える。その血溜まりは今も尚、少しずつ広がっていた。

「き、君っ」

倒れているリージェスに気を取られたセントレイドに向かって、ヘッドリイが猛然と襲いかかる。

「シャ・ライール
瞬雷っ」

「……っ。ちいっ」

側面が一瞬青白く光ったのに気付き、ヘッドリイは瞬時に足を止める。一瞬遅れて行く手を遮ひそるかのようにな何者かの放った雷魔法が右から左へと横切った。雷はそのまま石垣に直撃し、その部分に風穴を空ける。

意表を突かれたセントレイドを救ったのはレドネーだった。難を逃れたセントレイドは、姿を現したレドネーをチラッと見てから慌

ててヘッドリイに向き直る。

ほぼ同時に、ミユールとカタルスタ兵もヘッドリイの後方から姿を現した。四方を取り囲まれたヘッドリイは、しかし焦った様子を全く見せない。

「よりもよって儂の在任中にこのような問題を起こしおって。…絶対に許さんぞつ。この代償は貴様の命で払って貰うつ」

若干ズれているレドネーの言葉には反応せず、ミユールもヘッドリイを睨む。

「……鬼人^{オウガ}、か。まだ生き残っていたのだな」

ヘッドリイは三人に一瞥ずつくれると、傷付いた喉を抑えながら溜息を吐く。

「……流石に分が悪いか。今回は退かせて貰う」

「……逃がすと思うか。貴様の墓標はこの場所だつ」

レドネーが無詠唱の魔法を放たんと手を翳したその時ヘッドリイが身を低くした。

「……つ、網を張れつ」

ミユールの咄嗟の言葉とほぼ同時にヘッドリイは一番広い街路の隙間目掛けて疾走する。

『ジ・ライール
羅雷』

間を置かずして、ミユール、レドネー、セントレイドの三人が魔法を行使する。無詠唱で上空に作り上げた、矩形^{くわい}の雷の網を次々とヘッドリイ目掛けて地に落とす。逃げ切れない。三人が確信しかけたその時、突如ヘッドリイは方向転換して直ぐ近くにあった街路の石垣に突撃した。一瞬遅れて、先程までヘッドリイがいた街路に雷

の網が覆い被さり、地面を網型に焦がす。

「なんだとっ」

レドネーが驚愕の声を上げた。ヘッドリイは街路の側壁を破って辛うじて難を逃れると、そのまま家屋の壁を次々に突き破り、障害物をもともせず一直線に東へ駆けていく。建築物の破壊音がみるみる遠ざかっていくのが三人にもわかった。

「ちっ、出鱈目だな」

ミュールは強かに舌打ちをすると即座に頭を切り替え、倒れているリーシェとリージエスを見遣る。

「くそっ」

カタルスタ兵の何人がヘッドリイを追うべく破壊された石垣に向かうが「行くなっ」とレドネーが大声で制止した。

「で、ですがこのままでは奴を逃がして」

「同じことだ。……あの疾さと猛威……この分では包圍網も意味を成さん。徒に犠牲者を増やすわけにはいかん」

レドネーはそう言いながらも齒噛みする。まさかあれほどの使い手が襲来するとは予想していなかったのである。並の兵ではたとえ千人集まるとヘッドリイを止める材料にはなり得ない。少なくとも街中ではもう戦えない。万が一追い詰めたところで、また住居に逃げ込まれるのがオチだ。相手は住民の建物など気にせず戦うだろうが、こちらはそうはいかない。

「はっ、怪我人はっ」

我に返ったセントレイドが急ぎ周囲を見回す。

既に木の傍で倒れているリーシェの方にはミュールが駆け寄っていた。

「……女の方は、命に別条は無さそうだ。が、腕の骨折は……相当に酷い。接着できなければ元のようにはならぬかもしれん。……そっちは？」

セントレイドは仰向けに倒れている、長髪の男の傍に屈みこむ。

「リ、リージェス君っ？」

薄闇の中であって、その顔まではつきりと確認できていなかった。セントレイドは、倒れている男と面識があったことにまず驚き、次いでその深手にぎよっとする。胸の筋肉がろっ骨の一部ごと抉り取られていく。どう見ても、助かる傷ではない。もはや呼吸も止まりかけていた。

「……駄目、だ。……傷もさることながら、出血があまりにも酷過ぎる。……病院までも……もつとは……」

弱々しく首を振るセントレイドにレドネーが舌打ちをする。

「……馬鹿がつ。出血が酷いなら表面の血液を凍らせて止めればよかるつつ。少しは考えろっ」

「……えっ」

「……それと、氷で頭を冷やすのも忘れるな。脳が死んでしまっっては元も子もないからな」

セントレイドは的確な指示をするレドネーに一瞬面喰らうも、直ぐに頷いた。

「……わ、わかった。直ぐに近くの病院へ搬送するぞっ。お前達っ」
「は、はいっ」

呆気にとられていたカタルスタ兵がようやく動き出す。セントレイドの支持によって、カタルスタの兵にリーシェが背負われた。リージェスはセントレイドの氷結魔法による処置を受けてから、兵士二人に両の手足を担がれる。浮き上がった背中から血がポタポタと

滴り、下にある血溜りに波紋を生じる。慎重に持ち上げられ、揺らさぬように担架に乗せられる。

「私も彼等に付き添ってきます。お二人は」
セントレイドの言葉を遮るようにミュールが言う。

「いや、私も行く。女の治療にはお前が当たれ。お前の手に負えそうでなければシャトルを呼び出せ。少しは役に立つはずだ。男の方は我が家へ運ぶ」

「え、家って」

ミュールの言葉に、セントレイドは首を傾げる。

「その傷だ。少なくとも病院の処置で助かる見込みはない。お前とて、それがわからぬでもなからう」

ミュールが唸る様に言う。

「……で、では」

「我に考えがある。まだ試したことはないが……若い命をこのまま見殺しにするのも忍びないからな」

この言にはカタルスタの兵士たちがどよめく。

「……試すって……じ、人体実験を行うおつもりですか？ 行けませんっ、大問題になりますっ」

「そ、そうですね。動物実験ですら禁止されているのにつ」

ミュールは頭の固い兵士たちを冷やかに見据える。

「人聞きの悪い事を。常識的な治療をしたところでこの男を助けられないのはわかりきっている。ならば非常識に頼るしかなからう」
「……し、しかしですね」

煮え切らない兵士たちに、ミュールは耳を小指でほじりながらあさっての方をプイッと向く。

「あー、もう、面倒くさい連中だな。よし、わかった。もし助から

なかつたら我が責任を取って宮廷魔術師を辞める。それで良からう」
齒切れの良いミュールに、今度はセントレイドが慌てて口を挟む。
「ご、御冗談でしょうっ。もし貴方が退けば」
「大の男どもが、ぴーぴー喧しいわっ」
「……で、ですが」
呻くセントレイドを無視し、ミュールはリージェスの担架を持っている二人の兵を睨む。

「ほれっ、ボケつとするなっ。一刻の猶予もないのがわからんかつ。もし処置前に死ぬようなことがあればお主らの責任を問うぞっ。殺人だぞっ。一生冷や飯食らいだぞっ」

「は、はいいっ」
早口で捲し立てるミュールに半ば追い立てられるようにして、カタルスタの兵たちは慌てて背筋を伸ばし、患者を揺らさぬように気を配りながらも駆け足で運んで行く。ミュールも走りかけ、一旦立ち止まってレドネーに一瞥をくれる。

「と、言うことだ。我も手が放せなくなった。お主はそつちを頼む」

「……承った」
「ではいくぞ。セントレイド」
「は、はい」

ミュールとセントレイドが慌しくその場を後にし、レドネー、それに数人のカタルスタの衛兵が残される。

「……さて」
レドネーは、先ほどセントレイドが倒した、諜報員と見られる女の死体に近寄っていく。鉄と香水の入り混じった匂いを放ちながら、血溜まりの中に倒れ伏している妖艶な女は、光の失われた瞳を天に向けている。破れたタイツからは生足が覗いて見え、傍らで兵の誰

かがゴクリと唾を飲み込む音が聞こえた。

肉感溢れる身体を締め付けている、ほつれた黒い鎖帷子くさりかたびらを見止め、レドネーは眉を潜める。

(やはり三重トリニテの頂イ・ワシ……か。この手際てぎわ、おそらくは内通者も……)

ポツンと、頭髮に水滴が落ちてくる。やおらレドネーは思考を中断し、天を仰いでからその場に残っていた兵たちに命ずる。

「この死体を王城に運んでおけ。何か出てくるかもしれないからな」

ほどなく雷の音が鳴り響き、天が幾度となく、白く明滅を始める。多くの犠牲者を嘆くかのように、勢いを増した涙雨が地に叩き付けられ、紅に染まった床を洗い流していった。

其三十九　く深き爪跡（裏）く

884年　4月30日

「……魔法図書館に配置された警備兵。死者十六名、重軽傷者二十七名、うち重体三名。続きまして」

賢王アグストウラは瞑目しながら被害報告書の内容を聞き取っていた。文官の読み上げる声だけが閑散とした謁見の間に響き、美しいステンドグラスの施された天井へと吸い込まれていく。今この場にいるものは、二人を除いては近衛が僅かに四名。他の者たちは全て、上の者も下の者も例外なく、三重の頂襲撃の後始末のため、城外に出払っていた。

「……国立研究所に配置された警備兵。死者七名、重軽傷者二名、それにヴァラー様も含まれています」

被害報告が研究所の件くんだりに入り、アグストウラの眉が微かに動く。

「その他、一般人の死者二名。重軽傷者八名。うち重体一名以上です」

アグストウラが薄らと目を開ける。

「……一般人にも被害が？」

「はい……。敵に鬼人オウガなる輩やからが混じっていたようで、その者が逃走を図った際に家屋を破壊したとのことです。それで……轢ひかれたり、家を潰されて下敷きになったりしたようでした」

アグストウラは額に手をやる。燦々たる有様。三重の頂トリニティ・ワンがたった三名襲ってきただけでこうまで掻き回されるとは。否、内通者の存

在がなければ警備の薄いところを集中して狙われることはなかったし、ここまでの被害も出なかったはず。何を見逃そうとも獅子身中の虫ばかりは赦し難い。

アグストウラは床に向いていた視線を文官へと転じる。

「……シャブラニールが行方不明って、いつからなのかわかるかい？」

「は、はい。姿を最後に見られたのはヴィラー様です。執務室に一緒にいたということですが、どうやら何者かに後ろから殴られたらしいのです。襲撃の前後という状況から察するに、殴ったのはシャブラニール様ではないかと」

アグストウラは小さく頷きながら、視線を宙へとやる。

「……なるほど、ね。ヴィラーの容体は？」

「病院で検査はしたようですが、幸い異常は見当たらなかったようですね」

「……そうか、ならいい」

次いで、アグストウラは上層部の者たちの動向を訊く。嫌な役回りではあるが、上層部に内通者の存在が疑われる以上、念には念を入れて把握して置かなければならないのである。

「ルーモス様とレクスト様のお二人は出向中ですので除いて宜しいですか？」

「うん。そっちは既に昨日の動向を確認するように封書を送ってある」

「了解いたしました」

見ていた書類を一番下へと持ち替え、薄い冊子を上に持つてくる。「えーっと……まずは、警報を聞き付けて魔法図書館で鉢合わせ

から、ミユール様とレドナー様は殆ど一緒に行動していたようです。衛兵たちの証言も取れています」

凸凹コンビ。少し珍しい取り合わせだ。とはいえ、そもそもこのような緊急事態が珍しいことであるからして、それを加味すれば不思議なことでもないのかも知れない。

「わかった。次は？」

「それから……えーと」

文官の歯切れが悪くなる。

「どうしたんだい？」

「その……ログステイオ様は、お屋敷で爆睡していたようです。家人に金を持たせて確認を取りました」

「……それはそれで問題だなあ」

アグストウラは溜息を付いた。滅多に鳴らない警報音を聞いて駆け付けられないようでは、危機管理がなっていない。明るみに出れば相応叩かれる材料になる。現職の大臣ともあろう者がその体たらくでは、それを容認している上層部としても面目が立たない。

いい機会だし、ご退場願おうかなあ、とアグストウラはほくそ笑む。こういうとき、アグストウラは底意地の悪さを存分に発揮する癖へきがあった。

（後でこっそり新聞社に情報をリークしてみよう。彼がどんな言い訳を披露するか今から楽しみだ）

ひそかに内部粛清の断行を決意しつつ、素知らぬ顔で文官に続きを促す。

「あと、シャトルー様に付きましては、襲撃が起こる直前までお友達二人と一緒に談笑していたそうですね。しかし不思議なことに、そのお友達二人共が襲撃に巻き込まれた被害者らしいのです。少し出来過ぎな気がしませんか？」

ああ、その話が、とセントレイドは軽く請合う。

「セントレイドから聞いている。多分、本当に偶然だ。彼らはセントレイドとも知り合いらしいから」

「ああ、そうなんですか。これは失礼しました」

シャトルーに疑いを向けた文官はバツが悪かったのか、汗をかいているわけでもないのに頬をハンカチで拭う。

「話を聞く限りでは、そのお二人は賊と交戦したと言っていますが、文官の言葉をアグストウラは肯定する。

「セントレイドの部下が殺されかけているときに飛び込んできたらしい。彼の助けがなければ死んでいた、と当人も言っているようだ。シャトルーはその後魔法学院のロビーで教諭たちと待機している。彼女も白だね」

「となると、やはり怪しい人物はシャブラニール様以外には見当たりませんね。あとは国境からの連絡待ちですか。以上で、宜しいですか？」

「うん、下がっていいよ。あ、忘れてた。研究所で盗難された物はもうわかったのかい？」

「あ、はい。えーと」

後ろを振り向きかけた文官は再びアグストウラに向き直ると、ペラペラと書類を捲る。

「あ、ありました。本が一冊なくなっているようです。私もあまり詳しくはないんですが？魔符？の製造方法について書いてあるものだという事です」

それを聞いて、アグストウラは渋い顔をする。

「……………？魔符？か、道理で。……………厄介だなあ、ある意味禁書より質悪いや」

想定内においての最悪の可能性。それにぴったり該当とは皮肉な

ものだ。

「確か、つい最近になって作られ始めたばかりですよ。道具に貼り付けて耐魔法効果を得るものだと言いましたが」

「うん。魔法の威力を軽減することも可能だし、やろうと思えばもっと他のこともできるだろうね」

「他のこと……ですか。例えば？」

「例えば……貼り付けた人に強制的に充填フィールさせるとか。無理やり潜在能力を引き出すわけだから非常に危険を伴うだろうけど、彼らならやりかねない。っていうか、可能なら絶対やるだろうね」

文官が大きく震えたのがわかる。機動力と腕力が強化された、大勢の帝国兵が跋扈はつこする光景を想像したのだろう。

「そ、そんなことまでっ？ ……ま、万が一それが大量生産でもされたら」

「こちらとしても打つ手がなくなるね。史上最悪の軍隊の誕生さ」

アグストウラはそう言っただけで肩を窄める。

帝国には敗戦国の兵士や民という名の、格好の実験材料がある。設備を用意するには多少の時間がかかるだろうが、着手すればかなりの速度で成果を上げる可能性がある。

そこまで考え、アグストウラは次いで己の頭に浮かんだ考えに軽く眩暈めまいを感じた。帝国の制圧の対象には、当初からカタルスタも含まれていたのだとしたら。もっとすれば、カタルスタを滅ぼすことこそが真の目的だとしたらどうだろうか。彼らは、ブラージウスは大陸の八割を支配するだけでは満足が出来ないのかも知れない。テレジア帝国以来の、完全なる大陸統一。

まずは効率よく実験材料を集めるために戦争を起こす。忠誠に疑問のあるものを選別しつつ、敵対する者たちへの恐怖を叩きこむ。戦争が進み、一段落付きそうなところでこちらの技術を奪い、それを利用する。人体実験を繰り返せば、成果は飛躍的に上がるだろう。最終的に、カタルスタの魔法使いたちに対抗しうる軍隊を作り上げたところで、満を持して責め滅ぼす。

（考え過ぎかも知れない……が）

奴らならそれくらいのことにはやりかねない。ふと、アグストウラは先代の賢王ロディエールが言っていた言葉を思い出した。

王たる者、耳を澄ませ。己の吐く息で、周りに潜む声を殺すな。目先のことではなく、まず五十年先のことを考えよ。そして

そのためならば罪を犯すことを躊躇^{ためら}うな。アグストウラは最悪の可能性を忖度^{そんたく}し、最善の未来を生み出すべく黙考を始めた。それに気付いた文官は黙礼し、若き賢王の思考を遮^{かぎ}らぬよう、足音を立てぬよう留意しながら、静々とその場を後にした。

884年 5月2日

薄らと、瞼が開く。そこにあるのは純白。思考に靄がかかっている。以前にも、これに似た経験をしたことがある。記憶の片隅に置かれた小箱。その中にしまっており、大切な宝物。

リーシエは、自分が誰であるのかを思い出すのに少し時間がかった。ゆつくりと瞬きをし、その度に視界から濁りが失われていく。純白に見えた天井には、黒っぽいシミが何箇所もあった。

顔を傾けると窓が見える。麗らかな日差しが室内に降り注いでいる。傍らには水に満たされた長細いガラスの花瓶。中に入っているのは淡い桃色をした芍薬しやくやくの花。

「……ここは」
どこだろう。身体が気だるい。どうしたことが、記憶が曖昧で、しかも断片的だ。

「ん、気が付いたかい？」

その声に反応し、顔を少しだけ傾ける。そこには見知った顔があった。確かどこかで、会ったことがあるはず。

疑問が顔に出ていたのか、ローブの男は柔和な笑みを浮かべる。「覚えているかい？ 大分前に、一度旅館で会ったことがあるんだが」

旅館。そのキーワードに頭の中の情報が寄せ集まり、形を成す。

「……セント……レイド……さん？」

セントレイドは目で肯定する。

リーシエはゆらりと起き上がりかけたが、直ぐに腕に酷い鈍痛を感じて顔をしかめる。

「……うあっ」

セントレイドが慌てて制止する。

「ま、まだ動いては駄目だ。」

腕の骨が粉々に砕かれていたん

だよ。魔力を糊代わりにしてくっつけてはいるが、動かしたらまたバラバラになってしまう」

微かに目尻に涙を滲ませたリーシエは微かに頷き、セントレイドに肩を支えられつつ、ゆっくりと枕に頭を沈める。

「筋肉がズタズタに引き裂かれていたから相当痛むだろうが、幸い腕以外は打撲で済んだみたいだ。大人しく静養することだ」

「そうだ、あの大男が私を

断片的な記憶が繋がっていき、はたとリーシエは顔を引き攣らせる。

「……リージエスは、リージエスはどこっ？」

懇願するような目を見て、セントレイドの表情が曇る。

「彼の怪我は、……あまりに酷過ぎて病院では手に負えなかった」

聞いた途端、リーシエの顔から色が失われる。

「……え。嘘……でしょ……」

目が一気に潤んできたリーシエを見て、セントレイドは慌てて二の句を継ぐ。

「あ、ああすまん。言葉が足りなかった。彼を治せるかも知れない人の所に運んだんだよ」

フォローしたつもりであろうセントレイドの説得は、しかしして不発に終わった。？かも知れない？。それはつまり、助かる見込みが低いという意の裏返し。

半泣きの状態だったリーシエの涙腺がついに決壊する。

「……や……だあつ。……リ……ジエスっ」

頬を伝う涙の川が二つ、白いシートへと吸い込まれていく。顔をぐしゃぐしゃにして咽び泣くリーシエに、セントレイドは自らの気

の利かなさを恥じながらもあたふたするばかりだった。

「……き、きつと大丈夫だからっ。君のお兄さんだろ。君が助かると信じてやらないでどうするんだい」

「……うううっ」

再び起き上がりかけたリーシエを落ち着かせるように、肩をそつと抑えて再び横たわらせようとするが、リーシエは細身の割に力強く、危うく振り解かれそうになる。「非力がっ」と、ミュールの詰なじる声は何故か脳裏に過ぎり、セントレイドは僅かに呻いた。

「……君だつて大怪我しているんだ。まずはそれをじっくり治さなきゃ。万が一後遺症が残ったら、一番悲しむのは他でもないリージエス君だよ。そうだろうっ？」

今度は一応の効果があつたようで、ようやくリーシエは大人しくなる。

「……ぐすっ……ぐすっ」

目を袖で擦りながらしゃくり上げるリーシエに、セントレイドは希望の言葉を投げかける。

「少し容体が落ち着いたら、彼に会いに行こう。そのときは案内する。だから、ね？」

セントレイドはリーシエを慰めるための言葉を紡ぎながらも、それまでにリージエスが死んでしまったら、という不吉な想像が消えず、彼女のぼやけているはずの視界が、自分の顔に出ているだろう不安を見破らないようにと、切に願っていた。リージエスは五日経った今も尚、生死の境を彷徨さまよっていたのである。

其の四十　　王の代行者（裏）

カタルスタが三重の頂^{トリニティ・ワン}による襲撃を受けてから間もない5月1日、アステイスⅡフロイデ元准将によるマリスノリスの奇襲が行われる。それにより、シャンテール討伐に赴いていたブラージウス率いる十万弱の帝国軍は標的の目前でマリスノリスに引き返すことになり、帝国軍と東諸国同盟軍の一大決戦は先送りにされた。この報が遠く離れたカタルスタに届いたのは十日ほども経ってからのことであつた。

世間ではその事件を起こした背景、或いはアステイスの目的に対し、様々な憶測が飛び交つていた。アステイスⅡフロイデが既に東の同盟軍と盟約を結んで敗北濃厚な決戦を先延ばしにした、という説。或いは、帝国内で上層部に批判的な将が彼と密かに連絡を取つていて襲撃を援助した、という説。勿論、ベール、カタルスタ、アテライデといった、各国の謀略という説もあつた。そのどれもがもつともらしく、しかして、いかにもな作り話、という感も拭えなかつた。

或いは、これは聊^{ちやうど}か深読み^{フカヨミ}のし過ぎでは、という説もある。そもそもアステイスの反逆自体がやらせであり、ブラージウスの命を受けてアステイスが不満分子を炙り出すために周辺諸国を煽つている、というものだ。アステイスに協力の名乗りを上げた者を一網打尽にする、という策を、ブラージウスが用いたのでは、と囁^{ささや}かれた。

憶測は更なる憶測を呼び、周辺諸国では暫しの間、話題に事欠かなかつた。それは、帝国領内でも例外ではなかつた。表層には現れぬものの、地層の中では不満や憤りの色合いは多分にあつたのである。

その出来事はカタルスタにおいても何かと話題の種になった。三重の頂の件について、アグストウラは敢えて緘口令を敷かなかったため、襲撃後、カタルスタの民たちは徐々に反帝国の側に意見を傾けていたのである。帝国の旺盛を見守っている余裕は、自分たちに危害を加えないことが前提としてあったのであり、その不文律を破られれば自己防衛の裏返しとして攻撃的になるのは自然なことであった。よって、帝国に一泡吹かせたアステイスⅡフロイデに対して、大半の者が好意的に見ていた。

また、一方でアグストウラはどさくさに紛れ、三重の頂襲撃時に眠りこけていたログステイオに蟄居を命じていた。三大臣のうちで主導権を発揮しているレドネーとしても、この不祥事は流石に庇い切れるものではなかった。そもそも、彼自身が徹夜で必死に奔走していたのであるからして、気持ちよく眠っていたログステイオに同情的な感情を抱くには少し足りなかったのだろう。

そんなわけで、現在実質的に動いている上層部は大臣ではレドネーのみ、宮廷魔術師ではセントレイドとヴィラー。ミュールとシャトルーは、病院にて傷病者の治療に当たっている。大臣のルーモスと宮廷魔術師のレクストは国境付近の町に駐在している。内通者と思われていたシャブラニールは、おそらくは帝国の方に身を寄せたのだろう、という意見が大半であった。

884年 5月11日

ボルジオⅡレドネーは夜も明けきらぬうちに家を出た。公務の前にやらねばならぬことがあったのである。辺りに人通りは全くない。

一般的な登城時刻は午前九時。今はまだ五時前であるから当然だろう。城の堀が見え、それに沿うようにしてレドネーは何故か王城とは逆の方角へと歩きだす。

待ち合わせ相手が要求するであろう内容についてレドネーは黙考し、僅かに口の端を釣り上げる。薄闇の中、レドネーは目的の場所に付くと、人目を憚はばるようにして路地裏に姿を消した。

正午過ぎ、セントレイドとヴィラーは賢王の名で謁見の間呼び出されていた。だが、肝心のアグストウラの姿が玉座に見当たらない。まだ時間までは五分あったものの、彼が呼び出して置きながら遅れてくるといったことは、今までに経験がないことであった。二人は顔を見合わせ、首を傾げつつも彼の到着を待っていた。

数分ほどして、レドネーが入口から入ってくるのを見咎め、二人の宮廷魔術師は不承不承会釈をする。どこかにやけているレドネーは鷹揚おつように礼を返し、立ち止まると開口一番、二人の度肝を抜く台詞を口にした。

「賢王がご病気だとっ？」

動揺からか、セントレイドの声が裏返った。

「声が大きいぞ、セントレイド。どうやら、今回の件で心身をいたく損なわれたらしい。このままでは国王不在になってしまうからと、儂に代行を任された。ログステイオは蟄居中の身であるし、ルーモスは国境にいる。序列からして当然のことではあるな」

レドネーは重々しい口調で言ったが、セントレイドとヴィラーにはどこか芝居めいた印象が感じられた。言葉の端々からは、隠し切れぬ喜びが含まれているようにも感じる。それもそのはずであろう。

彼は今までに二度、賢王に立候補していた。おそらくはその椅子に座ることを最も切望していた人物なのだ。たとえ代行であろうと、賢王には変わりない。あくまで、彼の言うことをそのまま鵜呑みにするのであれば、の話だが。

俄かには信じ難い話を聞かされ、セントレイドは小さく首を振る。「ば、馬鹿な。二日前に見かけたときはそんな様子はなかったぞ」

セントレイドとしても、自分がアグストウラの一番の友人であるという自負があった。自分じゃないにしても、ミュール辺りには話すだろうと確信していた。その頭を通り越して、よりによってあのレドネーにいきなり賢王の代行を任すとは到底考えられなかったのである。だが、少なくともアグストウラの姿がここにいないことだけは事実であった。

「……ア、アグストウラはどこにいらっしやるのだ」

呻くようにそう言うセントレイドに、レドネーは肩をすくめる。

「さあ……。儂にもそこまではわからぬが。大方、自宅で療養中では
「

まさか、レドネー。貴方の策謀ではあるまいなっ」

今日はエアリーショートのカツラを被っている、少し若々しいヴィラーが苦々しげに睨んでくるのを見て、レドネーはせせら笑った。「策謀とは……どういったものかな？ 後学のために聞かせていた
「
「

ヴィラーは一瞬だけ躊躇ためらいを見せたが、二の句を継いだ。

「……襲撃事件は、近衛の数を減らして賢王の護衛を少なくするために、お主が帝国と通じて行った。そして、機に乗じて賢王を
「
「

ヴィラーの言葉に、セントレイドは唇を震わせた。つまりヴィラーは、レドネーがアグストウラを手に掛けた、と言っているのだ

る。考えてみれば、レドネーは以前から賢王の椅子に相当固執していた。そして、アグストウラとの仲が険悪であるのも周知の事実である。明確な証拠はないが、全てはその椅子に座るための策謀だったとすれば合点がいく。

但し、アグストウラは賢王に選ばただけであってレドネーに勝るとも劣らぬ魔法の使い手である。少なくとも、慎重な性格のレドネーがおいそれと手を出せる相手ではないのは確かだ。

レドネーは救えない、と言った様子で首を横に動かす。

「何を証拠にそのような誹謗中傷をするのか。あれは行方をくらませたシャブラニールの犯行として片付いたことではなかったか？ 儂とて賢王が倒れられたのは残念でならぬ。まあもつとも？ こんな緊急事態に倒れられては、軟弱と誹そしられても仕方あるまいが」

その場にいない人物アグストウラに対するレドネーの嘲笑にセントレイドは憎しみの籠った目を投げ付ける。同時に、三重トリニティ・ロンの頂襲撃日に自分を救い、リージェスの処置を指示して命を取り留めたことに、少しでも感謝していた自分を殴りたくもなかった。今にして思えば、あれは自分から疑いの目を逸そらすための演技だったのではないか。そんな考えが脳裏を過ぎる。

「……き、貴様」

「ああ、そうだ。このことはお主たち以外には話しておらぬ。アグストウラは休暇を取っていることになっている。不穏な時期でもあるし、我らが賢王様に一大事があったと知れたら国民が不安に駆られてしまうだろうから、くれぐれも内密に、な」

「待て、レドネー。一回アグストウラと話を」

レドネーが手を翳してヴィラーの言葉を遮せきる。いつもより背筋と胸とを張っているように見えるのは、気のせいではなさそうであった。

「不要、だ。お前たちはこれまで通り、国と賢王のために働いてくれればよい。ああそうそう、アグストウラの容体が快方に向かうまで、儂がWの名を預かることになったのだから、敬意と身の程を弁えろよ」

そう言つて、レドネーはゆるやかな壇上をゆっくりと歩み、玉座の前に立つ。

（賢王の椅子か……ふふん、悪くない）

金の彫刻で縁取られ、赤いクツションで作られた王座を数秒ほど眺めてから、レドネーは振り返り、普段よりも高い目線を楽しむ。目に映るのは唾然として自分を見上げている宮廷魔術師の二人。その顔の滑稽さにほくそ笑みつつ、神話の神の如く悠然と長い白髭を備えた御仁は堂々と腰を下ろした。

結局、アグストウラはその日王城には姿を見せず、彼の行方を知る者は誰もいなかったのである。

カタルスタ国立公園内にある屋敷の地下室。そこに、蓋がガラスでできた、巨大な円筒が地面に横たわっていた。中は少し濁りのある液体で満たされており、そして、その中にはリージェスが服を着たままの状態で入っている。青髪がゆらゆらと、波に身を任せる海草のように揺れている。湯船に肩まで浸かるように、頭の方が若干上の方に傾いているため、彼の首から下までが液体に浸かっており、胸にある傷からはコポコポと泡が立ち上っていた。

部屋の隅にある板の階段を、ライトブルーの髪に寝ぐせが立ったままのミュールがゆっくりと降りてくる。マグロなどの有名な魚を初めとして、タコ、イカ、エイなど、デフォルメされた海の生き物が描かれた、黄緑色の上下のパジャマに身を包んでいる。どうやら今まで昼寝をしていたようだ。眠そうな目をゴシゴシと袖で擦りながら、彼女は小さく欠伸を噛み殺した。

「はふう……さて、今日はどうかの」

ミュールは跳ねた寝ぐせを片手で抑えながらも、リーゼスを見降ろすようにして傷の経過を観察する。

「ふむ」

未だに肋骨と生々しい筋肉が覗いているが、心臓が見えかけていた初日に比べれば傷は大分塞がってきている。傷口だけならあと三日もすれば何とか塞がりそうである。しかし、胸筋の完全再生には更なる時を要すると思われた。

額にあった裂傷はもう塞がっている。痕は少々残ってしまったが前髪を少し伸ばせば目立たなくなるだろう。

「経過良好　と」

ミュールは傷口の側に小さな右手をもっていく。深紅の目を閉じると、淡く光る魔力の糸を、細い指先から少しずつ少しずつ、リーゼスの身体に与えていく。

十五分ほどして、彼女は手を引っ込めると、深呼吸して、ぐぐつと伸びをしてから隣にある回転椅子にちよこんと腰かけた。

「……はふ、眠いの」

気だるげに欠伸を噛み殺しながら、ミュールは机に自分の腕を重ね、その上にゆっくりと顎を乗せる。一時は危篤状態に陥り、三日間殆ど徹夜で寝ずの看病をした。或いは、もう駄目かと諦念に囚われたこともあったが、一回止まりかけた呼吸も何とか持ち直し、今

は寝息が耳に聞こえる程度まで回復している。

(……もう少ししたら、ベッドに移すかの)

そんなことを考えながら、ミユールは再びまどろみの中に身を委ゆたね、長い睫毛まっげを重ねた。

其の四十一　　～進展(裏)～

884年　5月13日

カタルスタ城内

「なるほど……。カタルスタとしても、税はそれなりに見込めると
いうわけか」

応接室の、如何にも高価そうな椅子に座っているレドネーが両手
を組み直す。

「はい。王都で支店を開いた場合ですが、今後半年間の税収がこれ
くらいは見込めるかと」

上下黒のストライプのビジネススーツを身に纏っているレナード
は、黒い鞆から試算表を取りだしてチラリとレドネーに見せた。レ
ドネーの頬が僅かに緩む。

アテライデのドウブオーニユ社に属するレナードとシーナは、社
長のシャナエ「ドウブオーニユに命じられた新規事業の出店計画を
進めるべく、たびたび王城を訪れていた。そして、幾度も折衝を
経てようやく賢王代行のレドネーに面会を許されたのである。

応接室に通された二人は、小さい四足テーブルの向かいにどっし
りと構えているレドネーに身振り手振りを交えて新規事業の魅力を
熱く語っている。

にこやかに話しかけるレナードに、レドネーはあくまで威厳を漂

わせる。代行三日目にして、もう身も心も賢王になりきっている模様であった。

「ゴホン。非常に魅力的な話ではある。……しかし、だ。こちらが国境を封鎖しているということは知っているのだろうか」

レナードが軽く頷く。

「そうですね。我々が入国した後のことでしたから想定範囲外であったのは否めません。ですから、まずはカタルスタ国内だけでやらせて頂くこうと思っています。その結果を見た上で、ご判断頂ければ宜しいかと」

その語尾を追うように、隣にいるシーナが続ける。

「相変わらず向こうの情報は新聞で確認できますし、郵便のやり取りも出来ることから鑑みて、完全な封鎖とは言い難いですから。噂では先日の大騒動にはテルネシアの諜報部隊が絡んでいたという話も聞きます。機が熟せば再び条約が破られる可能性も高い、ですね？」

最後にレドネーの意見を誘導するように、上目遣いで媚びながら同意を求める言葉を持つてくる。

「……まあ確かに、儂とてあの襲撃については憂慮している。民の声を反映させる政治を重んじる我々としては、手を拱こまねいているつもりはない」

話の間に、タイトスカートを穿いているシーナが足を組み替えたのを見て、一瞬レドネーの視線が下に泳ぐ。シーナは心の中で助平すけへい爺と罵りつつも笑みを浮かべる。

「さすがは賢王様。ご立派な志こころざしですわ」

勿論、お世辞も忘れない。しかしながら、レドネーの表情を見る限りでは？賢王様？という言葉は、彼の心に余韻を以って響いているようだ。

ハッと我に返ったレドネーは自分の浮かれっ振りを反省したのか、

少々声のトーンを落とす。

「しかし、少々解せぬな。何もアテライデからここまで離れた町でやるうとしなくとも、南部の町なら同じようなことが出来たのではないか？」

レドネーの口吻から微細な警戒感が窺えたため、レナードは笑みを消して座り直し、キリリと真剣な表情を作る。

「それに付きましては、新たに顧客の開拓をしたいというのが一番の理由です。御存知の通りドウブオーニユ社は貿易業も営んでおります。こちらの生活水準はテルネシア側の三十年、いや、五十年は先をいつているでしょう。カタルスタの商品が世に出回れば」

捲し立てるようなレナードの話しに、レドネーは慌てたのか、仰け反るようにして両手を出す。

「いや、待て。カタルスタは国策の一環として、技術の流出を規制しているのだぞ」

レナードは目を細める。

「勿論知っております。ただ、今までの古びた基準を緩和していただくことは可能かも知れませんが。こちらの国に害を及ぼさない程度にカタルスタの商品を世に流通させることが出来れば、それは莫大な国益となるでしょう」

「……それは、そうなのだろうか」

レナードの大それた話しに、レドネーは曖昧に頷く。いくら賢王代行とはいえ、それを自分の一存で決めるには抵抗がある。

しかして、それはレナードとシーナも理解していることであった。話を受け入れて欲しいときはまず大きい話をするのが原則。二人は女社長、シャナエイドゥブオーニユの教えを忠実に守る。

「とはいえ、ですね。こんな戦争が続いている現状では、それは夢物語に近いものですから、まずは輸送事業の雛型ひながただけでも作らせていただけると助かるのですが。つまりは各町への出店許可ということ

とですが」

シーナがテンポダウンして代替案を呈すると、二人の予想通り、レドネーは少々拍子抜けした表情になり、次いで含み笑いを漏らす。「……なるほど、な。まあ確かに、それくらいなら検討してもいいかも知れん。国内の流通がスムーズになるのは決して悪いことではないからな。わかった、そなたらの申し出を周りの者と協議してみよう」

『あ、ありがとうございます』

レナードとシーナは頭を下げて？してやったり？という表情を隠しつつ目配せし合うのだった。

それなりの手応えを感じた二人は、王城を出てから天に向かって伸びをする。生憎の曇り空だが、風が全くないことから雨が降りそうな気配は感じられない。

「んー、まずは一步前進ですね」

シーナが言う。

「そうだね。少し早いけれどお昼にする？」

レナードが答える。

「それも悪くないですね。午後はリーシェさんのお見舞いに行きましようか。何か美味しい物買って行ってあげましょう」

リーシェたちが三重の頂の襲来に巻き込まれていた、そのことを二人が知ったのは、一週間ほど前であった。人伝に双子が怪我を負ったということを知り、風貌を聞いては間違いないと確信したのだ。

「ああ、そうだね。オトコノ……リージェスさんの回復具合も気になるところだけれど、リーシェさんにも彼の治療施設の場所、知らされていないようだし」

「無理もないですよ。もし知らされたらリーシェさん、病院を飛び出してでも会いにいっちゃいそうですからね」

「違う、とレナードは苦笑いを浮かべる。リーシェは負傷した腕の骨がくつつくまでもう少し時間がかかるということで、未だ医者からは外出を許されていなかった。

「報告書を送ったら、しばらくは暇になりそうだなあ」

「そうだ。ついでに袖の下をいくら使っていていいのかも確認しておきましょう」

そう言いながらもシーナは胸ポケットのポッチを外し、小さな獣笛を取り出す。先端を口に含んで、短く息を押し出す。おもむろに、南の空を飛んでいた翼獣が方向を変え、二人の方へ向かってきた。

(……あら?)

「……どうかしました?」

シーナが不思議そうな顔をしたのを見て、レナードが訊ねる。

「いえ、そういえば最近空が空すいてるなって思いました。……気のせいかしら」

シーナはそう言い、首を傾げる。常日頃飛び交っている動物たちの数が、どうも少ないように思えたのだ。そして、その理由は後日、明かされることとなる。

ミユールがドアを開けると、そこには意外な人物がいた。

「……誰かと思えばシャトルー、か。お主から顔を見せるとは……明日の天気が心配だな」

「こんにちは、先生。私だってやればできるんですよ」

皮肉を交えたミユールの第一声をあつさりと言き飛ばし、シャトルーが朗らかに敬礼する。

悪びれた様子のない弟子に、ミユールは小さく溜息を付く。

「……それで、何用だ？」

「リージェスさんがここに入院されているってセントレイドさんから聞きましたー」

「何だ。あ奴、お主の知り合いなのか」

ミユールは世間の意外な狭さを認識する。

「ええ、ちよつとしたお友達ですー。リージェスさんの妹さん、リーシェさんっていうんですけれど、彼女のお見舞いにいったら、彼の心配をし過ぎてご飯も喉に通らないようなのでー。セントレイドさんは礼の件の後始末でてんでこ舞いだし、彼女も遠出できるほど回復してはいないし。ちゃんと食べないと治りも悪くなりますから、代わりにフットワークの軽い私が様子を　　アイタっ」

ミユールの手に持つ長い錫杖つばへじつちゆうがシャトルーの額に命中した。

「何がフットワークかつ。サボリ魔が口にする台詞ではなかつつ」

「うー、先生は手が出るの早すぎです」

「……だったら殴らせないように努力しろというに」

おでこを両手でさすりながらも涙目で抗弁するシャトルーに、ミユールは肩をすくめた。

「　　で、お加減は如何ですか？」

その言葉に、ミユールの目は一瞬陰を帯びたが、直ぐに元の表情に戻る。

「……フン。ま、いい。蚊が入ってくる前にとつとと上がれ」
「はいー。お邪魔しますー」

ミユールの後に続いて地下室に降りたシャトルーは、ガラスの円筒に入れられているリージェスを見て「おおー」と驚嘆した。幾分反応が薄いようにも思えるが、それは生来の能天気さによるもので彼女にしては精一杯の反応であつた。

「……何これー。いつの間に作つたんですか？」

シャトルーはコンコンとガラスの筒を叩きながら訊ねる。

「ふふん、驚いたか。我が開発した治療器具だ。ちよつとばかしかいのが難点だな」

ミユールは腰に手を当てて胸を張る。

「中に入っている液体はなんですかー？」

「お主が持ってきた薬草を抽出して、その液を人間の疑似体液に混ぜたものだ。この方が回復は早い……はずだ」

あくまで理論上は、の話であるからして、ミユールは語尾に微かな不安を滲にじませる。

それにしても、リージェスたちが取ってきた薬草が回り回って彼を助けることになるとは、シャトルーは運命の悪戯を感じずにはいられなかつた。

リージェスの胸元に視線を移すと、縦に走る裂け目が見受けられる。その隙間からは薄らと肋骨が見え、生々しさに少々顔をしかめる。

「……まだ、完全に傷は塞がっていないんですねー」

「これでも大分塞がったのだぞ。何せ20cm四方に亘えぐって肉が骨ごと抉り取られていたのだからな。あと2cmも傷が深ければ即死

か、そうでなくともここに運ぶ前に息絶えていただろう」

その言葉を聞いてシャトルーは身を震わせる。もしそんな事態になっただらリーシェに何と伝えればよいのかわからない。ただでさえ、その場において何も出来なかつた自分を責めてばかりいるのだ。

おもむろに、シャトルーはリージェスからミュールへと視線を転じる。

「……結論から言いますと、リージェスさんは助かるんですよ？」
ミュールは腕を組み、目を瞑る。

「元々並外れて強い生命力を持っていたのが幸いした。呼吸の機能を回復しているところから見るに、命は取り留めたとみてよい。しかし」

「……しかし？」

「傷を修復させるために、回復能力を無理矢理上げたわけだからな。止むなきことだったとはいえ、身体への負荷を考えれば、何かしらの後遺症が残る可能性は大いにある。寿命にしても……相当縮まったかもしれない。こればかりは経過を見る他ないが」

「そう……ですか」
シャトルーは俯く。

ただでさえ落ち込んでいるリーシェに今すぐその話をするのは少々酷である。

ややあって、ミュールは思い出したように目を開け、リージェスからシャトルーへと視線を走らせる。

「ところで、妹御の方の容体はどうだ？」
シャトルーは顔を上げる。

「何とか院内を歩けるくらいにはなっています。外出までにはまだ時間がかかりそうですが。骨の方はなんとか継ぎ合わせられました

らではの　はぐうつ」

再び錫杖しやくじょうがシャトルーの頭に振り下ろされる。

涙目になったシャトルーの無言の批判に、ミュールは冷やかな視線を返しつつ口を開く。

「……あと一つだけ確認したい。シャブラニールの痕跡は見つかったのか？」

「うー。……あ、そうでした。衛兵が家宅捜索を行ったのですが、一つだけ気になる点がー」

さすっていた頭から手を放し、シャトルーはヒップポケットからメモ用紙を出して確認する。

「家の中には特に帝国との繋がりを思わせるような痕跡はなかったのですが、襲撃日の六日後に届いていた手紙が郵便受けにあったのです。どうやらシャブラニールさんは近々、親戚の方と会う約束をしていたみたいで」

「……何？」

「しかも、文面を見る限り誘ってきたのは相手からのようです。それを了承したのが、少し引っかけられますねー」

裏切るつもりのシャブラニールがそのような約束を受ける意味がない。シャトルーはそれを指摘しているのである。但し、これはあくまで心理的な違和感であり、やらないとは言いい切れぬことでもあるが。

「……なるほど。……それで、か」

暫しの間物思いに耽ふけっていたミュールは、何やら納得したように、そう呟くのだった。

其の四十二　魔法の習得（裏）

884年　5月15日

木立の奥に太陽が昇る中、池に佇む幾多の睡蓮すいれんは薄らと広がる朝あさ靄もやと共に筋状の陽光に晒され、その葉色を白く輝かせている。対岸の緑豊かな木々は水面を境とし、僅かに鮮明さを失いながら幾分光の和らいだ朝日と共にもう一つの世界を逆向きに映し出す。

水の上を、リーシエとシャトルーを乗せたボウトがゆっくりと進んでいく。リーシエは片手を吊るしているので、櫂かいを使っているのはシャトルーだ。水分わかつ船の先端より生じる波紋で睡蓮すいれんの深紅の花がふらふらと揺れる。視線を前に向ければ、芽吹いたばかりの若々しい柳が左手から、アーチ状になっている木橋の上に柔らかく枝垂れている。濃厚な影をはらんでいる橋の下を潜り抜けると、目の前に広がるのは向こう岸一帯に咲き誇る黄金色の花。大きな花弁のクロツカス。その奥には二本のイチイの巨木が、対になるようにして聳そびえている。巨大な新緑の門に迎えられ、岸に着いたリーシエ、シャトルーの二人は白い砂地に降り立った。

シャトルーからリージエスの容体を聞かされるたびに、直ぐにでも病院を飛び出していきたい衝動に駆られていたリーシエだったが、昨日の夕方によくやく退院を許可され、真つ先にミュールの屋敷に案内してくれないかとシャトルーに懇願した。シャトルーは快く了承し、翌朝にリーシエを伴ってシャトルーの屋敷に向かったのである。

白く四角い大理石で縁取られた砂利道を、二人は朝の新鮮な空気を胸に溜めながら進んで行く。エステル曰く、この広大な敷地はミユールの庭らしい。

「この庭、先生が指示して作らせたんですよ。気に入りましたか？」

シャトルーが朗らかに言うと、キョロキョロと視線を動かしていたリーシエはシャトルーに視線を戻した。

「ええ、素敵です」

リーシエはそう答えたものの、浮足立っている感は否めない。あちらこちらに視線を巡らしているのは、真に庭の美しさに見惚れているわけではなく、リージェスの容体が気になって落ち着かないのだ。

確かに、凄く綺麗。改めて周りを見渡したリーシエは納得したように頷く。しかし、最後には、リージェスが一緒にいたら、凄まじい感激しただろうな、となってしまうのである。メイズ・オブ・フォレスト迷宮の森で逸れた時もそうだった。離れてみて初めて、その存在の大きさに気付かされる。出会ってから二週間以上も顔を見なかったことは今までに一度もない。

一刻も早く会いたい。そう思うと、自然と歩む足が速まった。その後ろを、シャトルーが慌てて追う。追いついては少しずつ引き離され、また追いつく。何度もつかえるように付いていく。

数分後に見えてきたのは、つた蔦に囲われている白塗りの木造屋敷。所々、塗装が禿げていたり板が剥き出しになっていることから察するに、それなりに年季のいった建物の様だ。その傍らには形の整え

られた黒い石で囲まれている土壤に、今すぐに？いで食べれそうな
たくさんの熟れたトマトがなっている。家庭菜園として使っている
のだろう。

「ここが……ミユールさんの？」

リーシエが訊ねる。こう言うてはなんだが、あれほど立派な庭に
対して、想像していたよりもみすばらしい家だ。

「ええ、先生のお家です。外はこんななんですけれど、内装はかなり
立派ですのー」

シャトルーの返答にリーシエは、顔に出ていたかしら、と軽く自
分の頬を抓^{つか}ってみる。

予告もなく、シャトルーがドアをノックする音が響き、肩から足
の爪先まで身震いする。期待と不安。思慕と後悔。様々な思いが胸
奥を駆け巡っていた。

リージェスは傷の処置を終えてベッドの上に移されていた。掛け
られたシーツが呼吸の動きに合わせて微かに上下している。長い間、
リーシエは口を開かなかつた。未だ意識を取り戻さぬリージェスを見
つめ、必死に涙を堪^{こら}えていた。ミユールとシャトルーは顔を見合
わせ、どちらからと言うこともなく、物音を立てぬよう留意して地
下室を上がっていった。

リーシエは自己嫌悪に浸っていた。リージェスを足蹴にしたヘッ
ドリュイに、掠り傷すら負わせることが出来なかった己の無力さ。何
よりショックだったのが、その後リージェスが意識を回復し、尚

もヘッドリイに立ち向かい、代償に致命傷を負わされた、と聞かされたこと。おそらくは、自分の身を守るために。満身創痍まんしんそういの状態、リージェスが身を挺して庇ってくれたことに感極まり、対照的に己の不甲斐なさが色を濃くする。

(……ごめん、……ごめんね)

何度も心の中で謝罪の言葉を呟く。口にすれば、想いが溢れ出してしまふ。リージェスの命を死の淵に追いやったのは他でもない、己の弱さ。その事実が、ひたすらに胸を衝く。

階段が軋む音が聞こえ、ミユールが顔をそちらに向けると、リーシュが丁度上ってきたところだった。時間にして十分ほどのはずだったが、リージェスと久方振りの再会を果たしたリーシェにとってそれは何よりも重い時間であつただろう。

「もう、いいのか？」

「……はい、ありがとう……ございました」

リーシェの目が相当に充血しているのを見て、ミユールは気遣いの言葉を紡ぐ。

「……あまり思い詰めぬようにな。お主とてまだ腕は治ってないのだから」

「……はい、……ありがとうございます」

沈黙が下りて数瞬、ミユールは空いている席を指差し、リーシェに目配せした。リーシェは直ぐに意図を察したようで、僅かに頷いて席に付いた。

リーシエが顔を上げたのを確認し、シャトルーはミュールに向き直る。

「リージェスさんの具合はどうなのでしょう？」

「予想よりも早く傷が塞がった。もう間もなく目覚めると思う」

その朗報は、落ち込んでいるリーシエに僅かな活力を与えたようであった。

「お主……リーシエ、で良かったな」

「……あ、はい」

リーシエは頷いた。

「断っておくが、正直に言って此度の件、リージェスは助からない可能性の方が高かった」

ミュールの言葉は、リーシエの身体に明らかな震えを走らせた。

「その点を踏まえて聞いて欲しい。リージェスに行った治療法、治癒魔法というものだが、不確定要素が高い。一応、我の身では試してみたし、リージェスの胸の傷も何とか塞がったことからして今は良い方向に向かつておる。ただ」

ミュールの視線が一瞬リーシエを舐める。

「何かしら、後遺症が残る可能性は極めて高い。寿命が縮まった可能性もあることを覚えておいてくれ」

リーシエは口を嚙みながら頷きかけ、視線を落したまま固まった。

「……私の……せいだ」

「……何？」

「……私が駆けつけたときには、胸に深手なんて……負ってなかった」

黒髪で隠れた顔から、ポツン、ポツンと、涙がテーブルの端に零れる。

「……リーシエさん」

普段は能天気なシャトルーもかける言葉が見つからないようであった。

「……どうして、私は、こんなに……」

リーシエはただとどしく言葉を紡ぎ、最後に掠れた声で呟いた。弱いんだろう、と。

消え入りそうなリーシエの声を聞いていたミュールは、これ見よがしに溜息を付く。

「……いつまでメソメソしててもしょうがあるまい」

「……だって、……だって」

泣きやまぬリーシエに、ミュールはきまり悪そうにこめかみの辺りを掻いている。

「弱いなら力を付ければ良いだけの話ではないのか」

「……え」

リーシエがようやく顔を上げる。

「お主がリージエスを守るくらいに強くなれば良からう。」

シャトルー

「はい？」

「暇を見てリーシエに魔法を教えてやれ。講師の仕事がなければ時間を作るのは容易であるう。我はもう少しリージエスの経過を見なければならぬ」

リーシエがその言葉に目を見開く。

「ま、魔法をつ？ シャトルーさんにつ？」

「え、でも いいんですかー？」

以前相当に怒りを買ったことを思い出し、シャトルーは眉をひそめる。

「人格形成と目的意識がはっきりしておる人間に教える分には構わ

ん

高等教育よりは初等教育の方が遙かに難しい。それは、知識以外に知性、つまりは物の考え方を教えなければならぬからである。ミュールは、きちんと教育学を学んだ経験のないシャトルーが年端もいかない子供たちを教えるのは聊か早計おかしである、と考えていただけで、彼女自身の能力に関して否定したわけではなかった。

「それに、元を辿ればこれは我々の不始末だ。彼女らは巻き添えを食っただけだし、セントレイドに聞くとところによると、リージェスにはそれなりの恩があるようだからな。侘びも兼ねてだ」

「先生がそう仰るなら異存はありませんけどー」

「……ほ、本当ですかっ」

リーシェがようやく本来の明るさを取り戻す。しかし、それも束の間のことであった。

「但し、一つ確認して起きたいことがある」

「……確認？」

リーシェが不安げに首を傾げる。

「シャトルーから聞くとところによると、お主たちは帝国と戦う力を得るがためにカタルスタに赴いた、ということだが」

「……そ、そうです、けど」

「お主はこれからもリージェスについていくつもりなのだな？」

「……ええ」

「そうか。……ならば尚更だな」

ミュールの赤い眼が深みを増す。

「これから半年の間、リージェスに会うことを禁ずる」

その言葉を聞くや否や、リーシェが椅子からガタンと音を鳴らし、立ち上がり、外に漏れるほどの大声を張り上げた。

「ど、どういことですかっ」

「甘えを捨てよ、と言っている。お主のリージェスに対しての依存は少々目に余るようだからな」

途端にリーシェの頬が紅潮する。

「こ、答えになってないよっ。何よ、半年ってっ。……半年っ？

くくく嫌だよっ、そんなのっ」

リーシェは取り乱しながらも何とか反論する。

「わからぬか。ならばもう少しきつい言い方をしようかの。帝国を相手にするならば三重の頂トリニティ・ワシとも必然的に戦うことになる。奴らを相手にしてみても力の差は身に沁みてわかったであろうっ」

「……う……それは」

声が弱々しくなっていくリーシェを見て、ミュールは含み笑いを漏らす。

「……そう、奴らと戦うならばお主はただのお荷物と化す。認めたくはないだろうがな」

「そ、そんなこと……っ」

即座に否定できない言葉を投げかける辺り、ミュールは聊ちよか意地の悪い性格を發揮していた。リーシェがリージェスに幾度となく氣遣われていたのは事実である。

「万が一、赴いた戦場で再びあの鬼人級オツガの敵が出てきたらどうする？ リージェスに任せるのか？ まさか今よりちよっと強くなったくらいで一緒に戦おうなどとは思うまいな？」

「……っ」

ミュールが容赦なく浴びせる質問に、リーシェは一つも答えられなかった。ただ、呻くのが精一杯であった。

「真に己の弱さを憎むなら、それを克服せよ。ましてやお主は女子おなこの身、ただでさえ弱みになりやすいのだぞ。穴が有れば、それは敵

が付け入る隙になる。策を弄する類の敵ならば尚更だ。万一、お主が人質にでもされたらリージェスはどうすればよい？」

ぐうの音も出ぬリーシェは、胸の辺りを苦しそうに抑える。相手によつては、確かにそれくらいのことにはやりかねないことを知っていた。

「それは、わかるけど……何でリージェスに会っちゃいけないのっ」
「……雑念を持ったまま魔法を学べば、大怪我をする元となる。お主は半年も、と考えているかもしれないが、魔法を学ぶことにおいて半年は短すぎる。ましてや、リージェスに甘えてる時間など毛頭ない」

「……でも……でも」

リージェスに対するリーシェの親愛振りには異常と言つてよい。彼は幼い頃から彼女が頼れるような、立派な兄として明るく振舞ってきたのだらう。育ての親もない、学校にもいったことのない彼女が、心のどこかに偏愛^{へんあい}をきたしていても何ら不思議ではない。むしろ、そんな異質な環境でこれだけ活発に育つたことが奇跡とすら言える。

もし仮に、今回の襲撃に際してリージェスが殺されていれば、リーシェが思い余つて後を追うような真似をした可能性すら低くないと考えていた。ミュールはミュールなりに、二人のことを心配していたのである。ただ、攻撃的な口調からそれが伝わるかは、少々疑問の残るところでもあった。

「万が一、だ。また、同じことが起きたらどうする」
「っ」

不意に、リーシエの脳裏に倒れているリージェスの姿が過ぎる。そして、ヘッドリイの足がリージェスの体を揺らす場面が網膜にチラつき、次いで腕を折られたときの激痛が蘇る。リーシエの口周りの筋肉が震えだし、歯をカタカタと鳴らし始める。ヘッドリイとの邂逅は、彼女に心的外傷トラウマを深く刻み込んでいた。

沈黙を守っていたシャトルーが、微かに非難めいた口調で口を挟む。

「せ、先生。ちよつと言い過ぎではー」

「言い過ぎなものか。力無き者を死地に送るわけにはいかぬ。これは教育者としての我の矜持きょうじ。心からリージェスの力になりたいと思うならば、あやつを越えるくらいの力を身に付けねば意味がなかるう」

「そ、それはそうかもしれませんがどー」

ミュールはシャトルーから視線を切り、言葉を続ける。

「リージェスが勝てない敵を相手にお主が無力であるのを由とするなら話は別だが、果たしてそんなことであやつの力になっていると胸を張れるのか？」

何も言い返せないリーシエに、ミュールは尚も続ける。

「……生半可な覚悟で戦場に赴くは愚の骨頂だ。守られるだけの関係を嫌だと申すなら、少なくともリージェスを助けられるくらいの力を身に付けよ。そうでなければ 今度こそお主は、目の前で兄を喪うことになる。お主が真にあやつを想うなら、それくらい受け容れる」

ミュールが最後に放った言葉は、リーシエの心の深層を揺さ振っ

た。

其の四十三　く番の鳥（裏）

ミユールの家を後にし、森を抜けたシャトルーとリーシエは翼獣ケリフオンのレンタルショップに入った。徒歩だと帰りが遅くなりそうだったし、シャトルーが怪我人のリーシエを気づかった面もあったのだろう。手っ取り早く家まで運んでもらうことにしたのだ。ずっと肩を落としていたリーシエもよい気分転換になったのか、家に着くころには大分立ち直ったようであった。

長い入院生活で体が鈍なまっていたこともあってか、リーシエはかなり疲れた様子であった。シャトルーはリーシエに横になるよう勧めたが、リーシエは軽く首を振って「大丈夫」と言い、椅子に座った。

日は正中を過ぎていた。食べ物は何も用意していなかったことに気付いたシャトルーは近くの食料品店に行き、その間にリーシエはヤカンで湯を沸かし、紅茶の用意をする。

程なくして、おにぎりを二つとお惣菜を幾つか買ってきたシャトルーは、手早く食事の支度を整え、リーシエと共に遅い昼食を食べ始めたのだった。

「ごめんねリーシエさん。先生、ちょっと虫の居所が悪かったのかもー」

「……ううん」

リーシエは笑おうとするも、口の端を僅かに持ち上げるに留まった。

「……全部見透かされてた。……私の甘えも。……凄いね、ミユールさんって」

溜息混じりにそう言うリーシエに、シャトルーはおにぎりを食はみ

ながら答える。

「うーん。確かに凄いですけれどー」

色々な意味で、と心の中で付け足しつつ。

まず、あの容姿からして半端なキャラではない。しかもあの年寄り言葉。大陸屈指の魔法の使い手。そして、傲岸不遜にして天衣無縫の性格。コンパクトな身体にしては色々詰め込み過ぎだと思う。

「……凶星過ぎて、最後の方は何も言えなかったな」

リーシエは紅茶を二口三口飲み、カップを下ろして息を吐いた。飲み物で熱せられた吐息が微かな霧もやとなって霧散する。

「でも、ほらー。これから頑張ればいいじゃないですかー。半年なんてあっという間ですよー」

どこまでも前向きなシャトルーに、リーシエは微かに笑みを浮かべる。

「……そうだね。強くなってミユールさんをびっくりさせなきゃ」

「そうそう、その意気ですー」

笑みを返しながら紅茶を飲む。一瞬にして眼鏡が湯気で曇った。

慌ててシャトルーは眼鏡を外す。ポケットからハンカチを取り出し、レンズを拭きつつ口を開く。

「前から聞こうと思っていたんですが、リーシエさんって親御さんは息災ですか？」

「……顔も覚えてないの。私……捨てられたっばいから」

そう言つて、リーシエは俯く。

華麗に落とし穴を踏んだシャトルーはがっくりと頂垂れる。

「うー、変なこと聞いてすみません。じゃあ、リージェスさんの方は？」

「うーん、それが私も知ら　　っ」

ハツとしたリーシエは顔を上げ、シャトルーを凝視した。？リージェスさんの方？

束の間の沈黙の後、口を開きかけたリーシエに対して、半瞬早くシャトルーが先んずる。

「やっぱりでしたかー」

やんわりと目を細めるシャトルーに、リーシエは言葉を失う。

何気ない質問に、警戒感が働かなかつたのだらう。しかしながら、二人を兄妹だとシャトルーが信じていれば、最初にお二人の親御さんは、と訊ねているはずだった。

リーシエがようやく口を開いた時には、三十秒ほどが経過していた。

「……いつ……から？」

知っていたのか、という意味に捉え、シャトルーは淀みなく答える。

「初めて会ったときですよー」

リーシエは目を睜みはった。

「な、何で……どうしてわかったのっ？」

「まず……一般的に黒髪の因子は優性、青髪の因子は劣性です。ここまででは宜しいですかー」

シャトルーは瞬時に講義口調になった。

「え、ええ」

首を傾げるリーシエを見つめ、シャトルーが続ける。

「お二人のご両親が青髪ということは有り得ません。そしたらリーシエさんの髪も青くなりますから。では仮に、ご両親の片方が黒髪、片方が青髪だったとしましょうかー。その場合、リージェスさんが青髪ということは、リージェスさんがお父様とお母様双方の劣性因子を受け継いだことになりますー。その場合、優性である黒髪のリ

「リーシェさんと相当異なる人種的特徴を持つはずなのですが、それにしては顔が酷似しすぎていますー」

リーシェの頭上に、ぼわんぼわんと煙のような疑問符が浮かぶ。学校に行ったことがないので、基礎的な理科の知識すら覚束おぼつかなかったのである。

「ならば逆に、ご両親双方が青の劣性因子を持つ黒髪だったとしますー。その場合、リージェスさんは黒髪か、そうでなくとも黒に近い青髪で生まれてくるはずなのです。あんな鮮やかな青髪になることはまずありませんー」

シャトルーはリーシェが話を聞いているのを確認して説明を続ける。

もし本当に二人が双子ならば、青と黒、それぞれ髪の色が違うため二卵性双生児と推察できる。細かいところまでは意外と知られていないが、一卵性の場合は、髪の色、性別共に統一される。男女で分かれて生まれてくることはゼロに等しい確率だ。過去に数度、そんな例が報告されたこともあるにはあるが、それにしても生まれて直ぐに息を引き取ったという話である。

口には出さなかったものの、リーシェのリージェスに対する接し方が兄妹のそれとは少し違う、と言動の端々から感じていたこともシャトルーが疑いを持った理由の一つであった。

「以上のことから、お二人の髪色を見た時から、少なくとも双子じゃないのでは、と疑っていたのです」

「……そっか。何となくだけど、わかった気がする」

リーシェは椅子を少し引いて座りなおすと、再びシャトルーと向き合った。

シャトルーは手をテーブルの上に置き、リーシェの次の言葉を待っている。

「……もう、十二年、いや、十三年かな。私、死にかけているところをリージェスに拾われたの。……もつとも、その瞬間を見たわけじゃないんだけどね」

「……拾われた、ですか？」

「うん。……それからはずっと一緒にいてくれた。……泣いている時も、……笑っている時も。リージェスはね、私が生きている理由、そのものの」

リーシェは穏やかに、懐かしそうに、語り始めた。

遠い記憶。誰かに手を引かれている記憶。それが途切れたときには、私は見知らぬ森の中で一人だった。今にして思えば、多分手を引いていたのは親で、その親は何かしらの理由で私を置き去りにしたのだろう。

私は、何故か自分の名前を覚えていなかった。もしかしたら名付けられていたかもしれないが、私の名を呼ぶ人がいなければ、わかるはずもなかった。ここで待っていれば、誰かが迎えに来るかも知れない。淡い希望を抱いた私は夜まで待っていたが、ついに寒風に堪えかねてそこを離れた。辺りを歩き回り、ようやく奥行きが5m程の小さな洞穴を見つけ、その中で身を震わせながら一夜を過ごした。

それから二日も経った頃。その頃には、私は自分が捨てられたのだと思わざるを得なかった。何とか街道に出ると、近くに見えた村にいった。汗と泥で汚れた服を着ている幼い私を、村の人達は冷たい目付きで怪訝そうに見るだけだった。お腹がすいていたか

ら、とにかく食べ物欲しかった。でも、お金は持っていなかった。色々な露店が並んでいる場所にいったみると、様々な品物が並んでいて、食べ物もたくさんあった。おもむろに、香ばしい匂いが漂ってきた。私は匂いに釣られるようにして、ふらふらとそちらの方に歩いていった。人混みを掻き分け、目の前にあったのはパンの山だった。喉がごくり、と音を鳴らした。

目の前のトレイに置いてあったパンを、汚れた手ではしつと掴む。直ぐに身を竦ませるほどの怒鳴り声が聞こえた。恐る恐る顔を上げると、店主らしき中年の男が立ち上がり、鬼のような形相で睨んでいる。私は、怖くなってその場から必死に逃げ出したけれど、故意か偶然か、途中で誰かに足を引つ掛けられて、あっさりと捕まった。

髪を引つ張られ、痛くて泣き叫ぶ私を組敷いて、店主は平手で容赦なく殴ってきた。左、右、左、右。頬を強く叩か^{はた}れる度に、頭の中がぐるぐるんと揺れて吐き戻しそうになった。ややあつて鼻血が出てきた、と思つたらまた殴られた。

パン、パン、パン。小気味よい音が規則的に発される。周りの人は、自業自得だと言いたげな顔をして、私が殴られるのをどこか楽しそうに笑つて見ているか、関わり合いになるまいと見て見ぬふりをしていただけだった。数分もしたころ、無残に腫^はれあがつた私の顔を見るに見かねたのか、誰かがパンの代金を店主に渡した。やつとのことで店主から解放された私は、何で自分がこんな目に遭つていいのかわからなかった。顔の痛みに呻きながら、やっと身を起すと、先ほど私が掴んでいた泥まみれのパンが通行人に踏み潰されるのが目に映った。ぐしゃぐしゃだった。それを見て、私の顔もぐしゃぐしゃになった。無性に悔しくて。それでも声が出なくて。ただ唇が震えた。

私は目を擦りながら立ち上がると、お金を払ってくれた人に礼も言わず、泣きながら森の方に走った。もう、村なんかに二度と行かない、と心に誓った。

それからどれくらい経っただろう。私は森の中で倒れていた。

それまでは小川の水を飲み、地面に落ちている木の实や果実、草を食べて飢えを凌いでいた。何度かは食中しょくちゆうりを起こしたのか、酷い腹痛を経て下痢になり、返ってお腹がすぐ羽目になった。どこまでも惨めに思えた。

高い樹に生っている果実が見え、口の中が涎よだれで溢れた。空腹に耐えきれなかった私は、力を振り絞って、必死に樹に登った。そして、果実に指先が触れた瞬間だった。足場の枝が折れ、墜落した。

あと一步で食べ物が入ったのに。悔しさが胸を埋め尽くしたが、それも束の間のことだった。激しく痛む右足に気付いたのだ。恐る恐るそちらに視線を移すと、変なふうに曲がっていた。自分がどうなっているのか、その時はまだわからなかったけれど、ただひたすら顔が強張りこわばり、恐怖が襲ってきた。何度も立ち上がるうとしたけれど、痛すぎて無理だった。

夜になっても、私は樹から落ちた場所から5mと動けずにいた。足の痛みは全然引かなかった。このときばかりは誰かが助けてくれることを願ったけれど、こんな森の奥に人がくるとは思えなかった。人気を嫌って、森の深部を生活圏にしていたのが仇となった。私は、ついに堪え切れず泣きだした。でも、いくら泣いても、誰もこなかった。泣き疲れて、結局その日はそこでそのまま眠りに付いた。

次の日、ポツリと雨が顔に当たって目が覚めた。徐々に雨脚は強くなり、直ぐに身体はびしょ濡れになった。喉が渴いていた

私には恵みの雨だったが、喉が潤うと今度は寒さが気になり始めた。雨はひたすら無慈悲に、背中を丸めて震える私の身体に降り注いだ。私はこの日もずっと泣いた。けれど、泣き声が雨にかき消されていることに気付かなかった。声は段々と掠れてゆき、状況は一向に改善しなかった。

三日目、雨は止んでいた。その代わりに胸と喉がやたらいらがらっぱかった。苦しくて何度も咳き込み、その度に身体が揺れて足が痛んだ。曲がった足は紫に変色し、痛みが鈍さに変わりつつあった。ついには頭までが痛いと言い出して、ようやく私は諦めの境地に至った。全ての感覚が私の敵に回ったのだからしょうがなかった。痛くて、寒くて、熱くて、苦しくて、悲しくて、やっぱり痛かった。

何で、私だけ、こんな目に遭うのだろうと、何度も考えた。世界は、どこまでも私に残酷だった。早く楽になりたい。そう思うと同時に、意識が薄れていった。これが最後になることを望んで、目を閉じた。

何日か目、目が覚めてしまった。世界はまだ私の意識を繋ぎ止めていた。ただ、意識を失う前と違う感覚があった。何だか温かくて、足も前よりは痛くなかったのだ。背中にあるのは硬い土ではなく、柔らかいベッドだった。微かに鼻にツンとくる匂いもした。

自分の上には大きくて真っ白な掛け布団が覆い被さっていた。窓からは薄黄色のカーテンの隙間から一筋の日差しが差し込んでいて、遠くには連なる山々が望める。時折そよ風がカーテンを揺らし、私の頬を撫でていく。

ふと、誰かの気配を感じた。顔の向きを逆にと、傍らには青色の髪をした私が眠っていた。鏡じゃない。有り得ない。ぼーっとしていた頭が一気に覚醒し、その刹那鈍い痛みを放って私は呻き声を上げた。その声に反応するように、青い私はパチツと目を覚まし、ゆっくりと私を見た。私も、もう一度青い私を見た。目が合った。

「せんせーっ」

青い私は隣の部屋の方を向いて呼び掛ける。顔は私にそっくりだけど、声が私よりちょっとだけ低かった。

「おや、気が付いたかね」

白衣を着た男の人がゆっくりと部屋に入ってきた。私は再び頭がぼーっとしてきて、わけがわからぬままに診察を受けた。

「何とか持ち直したようだな、大した生命力だ。肺炎を起こしかけていたから或いは、と心配していたが」

それを聞くと、青い私は心配そうにしていた顔を綻ばせた。

「脚の方は大丈夫そう？」

「うむ、気温が低いのが幸いしたな。神経が壊疽えそするのは免れた。勿論、相当なりハビリは必要になるが」

「だってさ、よかったな。お前、また歩けるようになるってさ」

青い私はそう言って私に笑いかけた。私は何か言おうとしたが、声が出なかった。二人のやり取りがよくわからなかったのだ。

「君、名前はなんというのかね」

白衣の人が私に訊いた。そんなのわからなかった。

「それより、腹減つたる」

青い私が私に訊いた。減つた。こくりと頷く。

「へっへー、そう思つて飯用意してあんだ。ちつと待ってる」

ちよつと口の悪い青い私は、直ぐに奥の部屋へと引つ込んだ。白衣の人は男の子の方を振り向いて目を細め、再び私に向き直つた。

「しかし、よくあんな広い森の中で見つかつたものだ。後であの子にお礼を言つておきなさい。君を背負つて此処こゝまで運んできてくれたのだからね」

私を背負つて

「……あそこから？」

思わず声が出た。私の問いに、医者は頬を緩めた。

「やつと喋つてくれたな。君の言うあそこ、というのがどの辺りなのか儂にはわからんが、ここから君のいたという森までは、子供の足では決して近くない」

程なくして青い私が、御盆を両手で危なっかしく支えながら持つてきた。

「つと、これこれつ、そんなにふらついてたら零れるだろうが」

慌てて、白衣の人が咎とがめた。おつとつと、彼は持つているお盆を私の寝ているベッドの隣にあるテーブルに、乗っている食器が一瞬浮くくらい乱暴に乗せた。青い私はきまり悪そうに頭を掻いた。

「ごつめん、失敗。何だか手足がやつたら重くて」

「ほれ、いわんこつちやない。やつぱり筋肉痛になつたらう。まあ無理もない。後で湿布を作つてやるから取りにおいで」

苦笑してそう言うと、白衣の人はこちらを向いて、御盆に乗っている山菜と魚の切り身の入った粥を奨める。温め直したのか、ほかほかと湯気が出ている。

「さあ、たんとお上がり。この坊主、こう見えて料理の腕は大人顔負けだ。じゃあ、他の患者を見てくるから、この子のこと頼んだぞ」

そう言つて、白衣の人は部屋を出て行つた。大人の顔が負けるつて何か怖いな、と思ひながら、それを見送つた私は、早速食べようと皿を引きよせて手を入れようとした。おもむろに、皿が後ろに遠ざかる。青い私が、慌てて皿の端を持つてから引き寄せたのだ。食べて良いつて言つたのに。私は思はずむつとして、意地悪な彼を睨み付けた。

「そ、そんな目でこつち見んな。そのまま手え突つ込んだら火傷しちゃうだろ。ここにスプーンあるじゃんか」

彼はそういつて、銀色の変な形をした棒を持つて私に手渡した。私は、なんだろう、とその棒をしげしげと見つめ、上下に動かしてみた。それを見て、彼は何やら氣付いたらしい。

「あー、そーいうことね。……しょうがないな、俺が食べさせてやんよ」

彼は、そう言つと変な棒を私から取り上げ、それで粥を掬い取り、ある程度の量を別の皿に移した。そして移した粥を再び掬い、可愛らしく口を窄めてふーふーと息を吹きかけてから、私の口の前に差し出す。

「はい口開けてー、あーん」

「……あーん」

言われるがままに開けると、彼は慎重に、私の口の中に粥を流し込んだ。私は何日かぶりの食べ物をつくりと咀嚼する。程良い温かさと言味、口の中に所狭しと広がった。

「美味しい？」

凄く美味しい。こつくりと頷く。彼はにっこりと笑つた。

「さんきゅつ。んじゃ、どんどんいつてみよう」

彼は何度も手を往復させ、私の口に粥を運ぶ。少し食べたことで、私の身体は食欲というものを思い出したようだった。その粥が美味しかったこともあつて、皿が空になるまで食べ続けた。

「完食だな」

米一粒残さず空になった皿を、青い私は何故か満足そうに眺めていた。

「ちよつとは元気出たか」

「……うん」

こんなに美味しい物を食べたのは、多分生まれて初めてだった。何だか身体も火照ってきた。

「良かった、俺の名前は　　リージェス。お前名前なんていうんだ」

何だろう、今の間は。そう思いながらも、私は首を振った。

「……うん」

「そっか、ウウンって言うのか。　　おわっ」

激しく首を振った。振る度に頭が痛かったけど振った。

「ち、違うってか」

「……うん」

そんな名前は絶対嫌だった。

「つまり違うってことは　　」

リージェスはピタツと固まり、少しして再び喋り出した。

「もしかしてお前、名前ないのか？」

「……うん」

「そっか、そりゃ難儀だな。それにしても　　」

私は首をかしげた。ナンギって何だろう。私と同じ子供なのに、リージェスの話す言葉は良く分からなかった。

「良く見るとお前の顔、俺とそっくりだな」

今頃気づいたらしい。私はちよつとおかしくなった。

「髪が黒っぱいけど、うーん、それ以外は殆ど同じだな」

そう言っ、リージェスはペタペタと、自分と私の顔を交互に、無遠慮に触る。流石に鬱陶うっとうしくなってきたので、ちよつと頬を膨ら

ませる。

「あ、ごめん。あまり珍しくてつい、な」

あっけらかんと笑ってそう言うと、リージェスは俯く。

暫く何やら考えているようだったが、再び私の顔に視線を戻した。

「よし、決まりっ」

私は何が決まったのだらうと、笑っているリージェスを不思議そうに見る。

「お前の名前、今日からリーシェな」

自分の目が見開かれるのがわかった。私の、名前。

「結構良い名前だろ。どことなく、響きが女の子っぽいし。」

ま、俺の名前から捻^{ひね}っただけなんだけど、名前ないと不便だろ？

リーシェ」

「……リーシェ」

その名前を呟く。乾いた砂が水を吸うように、頭の奥底にすつと沁み込んでいった。

「そう、リーシェ。歩けるようになるまで結構かかるだらうし、それまでは俺がお前の家族だ。顔もそっくりだし……そうだなあ、お前の、双子の兄貴ってとこだな」

「……アニキ？」

「そう、お兄ちゃんのこと」

お兄ちゃん。私の。

「ってことは、俺にとってお前は双子の妹だよな。宜しくな、リーシェ」

そう言って、リージェスは手を差し出した。

「……お兄ちゃん」

「何だ？　って、お、お前、どうしたんだ」

「……え、……あ」

言われてから、初めて気づいた。涙が止まらなかった。おたおた

する彼の姿が段々とぼやけていく。私は知らなかった。涙が、嬉しい時にも出るものなのだとということ。

リージェスは、泣き疲れて再びまどろみ始めた私の手をそっと握ってくれた。その手は私と同じくらい小さかったけれど、とても温かくて安心できた。

それからは、いくら貧しくても、傍そばに彼がいるだけで私の心は満たされた。リージェスは、いつでも優しくかった。そして大らかだった。地の奥深くに根を這わした大樹のように、私が寄りかかることを許してくれた。

「リージェスは私の命の恩人で、双子の兄で、誰よりも近い人。リーシェという名前は、彼が贈ってくれた、私の一番の宝物。その名を呼ばれるだけで、幸せな気持ちになれるの。私はリージェスの妹なんだって思い出させてくれるから　　って」

どこか恍惚と話していたリーシェの向かい側で、シャトルーが何やら咽むせび泣いている。

「ぐすんっ……ううー。……辛かったね、頑張ったね。リーシェさんも、リージェスさんも……」

「お、大袈裟じゃない？　も、もう大分昔の話だしさ。今が幸せなら、過去なんてどうだっていいよ」

どこか照れ臭そうに、気丈な物言いをするリーシェは、シャトルーの目にどこまでも健気に、甲斐甲斐しく映った。

（そっかー、リーシェさんにとって　　）

彼女にとつて、リージェスはたった一人の家族。頼れる兄であり、馬鹿を言い合える友人であり、優しく見守ってくれる親のような存在。本来分散されるはずの、想いのベクトルが彼一人に傾倒しているのである。更には幼い頃に垣間見た地獄への恐怖が、そこから救ってくれたリージェスへの一途な想いに反転しているのだろう。

だから、それほどまでに慕っている。だから、彼の死をそれほどまでに恐れている。きつとリーシェにとつて、リージェスは世界の根幹を成している存在。生きていく理由とまで、彼女に言わせてしまっほどこ。

それを理解すると同時に、シャトルーはミュールが、リーシェからリージェスを遠ざけた本当の目的に気付き、心中で賛嘆する。リーシェに自立心を養わせるために、敢えて厳しい態度を取ったのだろう。老獪なミュールは取り乱すリーシェの様子を見聞きして、この話を聞かずとも二人の危うさを察したのだ。

二人は比翼の鳥。片割れを失えば番の鳥は地を這い、じきにこの世界に見切りをつけることを。

其の四十四 く覚醒(裏)く

古い記憶の欠片。意識の砂。

《 お願い、どうか……あの子を》

高速で移動する視界。不可視の粒子が渦巻くように、緩急を付けては流れるように、木々の隙間を通り抜ける。

目の前が開け、溢れる光の中にあの子を見つめる。幾多の意識が融合し、幾多の視界が重なり合い、混沌が生じた。自我の産声が聞こえ始め 突然、それに雑音ノイズが混じる。

(……あれ、さっきの音が、 っ)

前触れもなく視界に映ったのは、うつ伏せになったリーシエに、鬼人の男が馬乗りになっている光景。男は身動きの取れぬリーシエに拳を幾度となく叩き付けている。殴られるたびに、逃がし切れぬ衝撃でリーシエの身体が何度も跳ねた。

やめろっ。

一撃。

おいっ、聞いてんのかっ。

更に一撃。

やめてくれっ、リーシェが死んじゃまっ。

叫んでいるはずなのに、声が発せられない。

殴打されるがままのリーシェに対し、ふいにヘッドリィは両手を握り合わせて頭上に振り被り

彼女の後頭部目掛けて振り下ろした。

「やめろっ！」

リージェスがガバツと起き上がるのとほぼ同時に

「ひゃんっ！」

妙な悲鳴が耳に届いた。

「……ハア……ハア、……ゆ……め？」
顔を蒼白にし、寝汗で背中をじっとり湿らせたリージェスは、
現実に戻るときこちなく辺りを見回し、口周りの筋肉を震わせ
た。

ベッドの横にある机で本を読んでいた、ライトブルーの髪色をし
た女の子が、椅子をゆっくりと回転させて身を起こしたリージェス
の方に向き直る。何故か顔を真っ赤にしてぶるぶると震えている。
しかも、ちよつと涙目だ。

そんなことはお構いなしのリージェス。大きいシャボン玉を作る
かのように、長く細い息を吐き出す。

「……どこだ。……何だか変な声が聞こえ あだっ」

ミュールの手に持つ錫杖がリージェスの頭を直撃した。先端に付
いた金属の輪っかが、シャランと音を響かせる。

「お、脅かすなっ、馬鹿者っ」

甲高い声が起き抜けの耳にキンキン響く。

「ったー、何すんだよ」

リージェスは殴られた箇所を擦りながら非難する。

「そっ、それこそこっちの台詞だっ。誰が変な……いきなり……く
う~~~~」

自らの不覚を思い出しているのか、ミュールは顔を真っ赤にして
手足をバタバタさせている。

一方で、リージェスは再び朦朧せうろうとしかけた頭を抑えていた。

「っ、リーシェはっ、ぐっ」

立ち上がりかけた途端、胸に激痛が走り、思わず驚拵おどろかざりむように抑
える。

その様子に気付き、身体の動きを止めたミュールは渋々といった表情で口を開く。

「……まだ起きてはならぬ。体力が殆ど戻っていないからの」

リージェスは痛みを耐えながらも顔を女の子の方へと向ける。

「……君、誰？」

「我はミュール。カタルスタの宮廷魔術師だ」

宮廷魔術師と聞き、リージェスは一人の女性を連想する。

「ミュールちゃんか。宮廷魔術師ってことは、もしかしてシャトルさんの弟子か何か」

「その逆だっ」

咄嗟に切り返される。

「……へ？」

「我は宮廷魔術師の筆頭っ。あやつは部下っ」

歯切れの良い言葉をポンポン投げ掛けてくる、肩で息巻くミュールにリージェスは気圧された。

「……そ、そうなのか。じゃあシャトルさんの言ってた先生って……うわっ」

ミュールの錫杖が鼻先を掠め、リージェスは慌てて仰け反る。

「はあ……はあ……全く……。命の恩人である私を？ちゃん付け？して置きながら、あの小娘に？さん付け？とは不愉快極まりない」
意外と細かい人みたいだな。

「……ぐっ、余計な御世話だっ」

しまった、思っていたことが声に

「……じゃなかった、リーシェはどこにいるんだっ」

ミュールは起きあがったばかりの患者を少々不満げにねめつける。

「じゃなかったって、これは重要な問題だと思うが……まあ良い。

リーシェならもう家に帰っているはずだ。つい五日前に退院し、お主の見舞いに訪れたばかりだ」

「退院……無事なのか」

「無事とは事無きを得る意であるからして、そうは言えん。重度の右腕粉碎骨折。何とか元通りにはなりそうだが、完治までにはもう一カ月、リハビリには三カ月近くかかるかの」

「……なんだと」

想像以上の重症に、リージェスは額に手を当てて歯軋りする。途端にミュールは露骨に顔をしかめた。

「……そういう音を立てるのはやめよ。どうにも苦手なのでな。大體、お主の怪我の方が余程深刻だったのだ」

「……怪我、……深刻？」

そう言えば、もう一カ月がどうか言っていたような。

「俺……どのくらい眠ってたんだ」

「23と半日。今日は5月20日だ。……胸の肉が肋骨ひよほごと挟まれて心臓が見えかけていたのだぞ。運び込まれた時には既に呼吸も止まっていたし、正直もう手遅れかとも思ったが」

リージェスは自分の胸元に視線を転じ、首を捻っては再びミュールを見る。

「……塞がっているけど？」

ミュールの柳眉が跳ねあがると同時に、血管の切れる音が聞こえた、気がした。

「たわけがっ、勝手に塞がるわけがなかるうっ。我が塞いだのだっ」

「……え。そ、そうなの？」

「それも、一週間ろくに寝ず終いでだぞっ。……お陰でニキビはできるわ、口内炎はできるわ、水をやり忘れて大事な植木を枯らしてしまっわ」

「う……」

言葉を切るたびにミュールが一步步近づいてくる。紡がれる言

霊が矢と化しては、リージェスの頭と胸にブスブスと突き刺さった。「化粧のノリは悪いわ、犬には吼えられるわ、美容院に行ったら二時間も待たされるわ、拳句の果てには見習いに髪を切られるわっ。

とにかくっ、散々な目にあっただっ」

「……そ、それは知らなかった。す、すまん」

目と鼻の先まで接近してきたミュールに、リージェスは恐縮しながら何度も頭を下げる。

治療と関係のなさそうな物も混じっているのは少し気になったが、頑張っけて助けてくれたということだけは何となく伝わってきた。

ミュールも胸の裡に溜まっていた物を大体吐き出したのだろう。

ようやく椅子に腰をかけた。足を交互に上下させる動作がどこか子供っぽい。って、少なくとも容姿は子供なだけだ。

「……全く、研究途中の治療魔法をあのような重症にぶっつけ本番で試す羽目になるとは思わなかったぞ」

リージェスは口を半開きにした。おぼろげにだが、シャトルーがそのようなことを言っていたような気もする。

「……えええ？ それって倫理的に問題あるんじゃないか？」

もっともな突っ込みのリージェスに、ミュールは即反論する。

「そうでもしなければ助からなかったと言っているっ」

「あ、ああ、そういうええそうだったっけ。ごめん、助けてくれてありがとうっ」

「うむ、分かれば良い」

あれ、つい謝っちゃったけれど、そんなこと言っていたっけ。

「……ま、拾った命だと思っけて大事にすることだ。ちよつと失礼するぞ」

そつ言つとミュールは椅子から「んしょっ」と言っけて飛び降り、上半身を起こしているリージェスの額に手を当てた。

「お……う……」

あまり慣れていないのか、リージェスは無意識に身体を強張らせる。

「ふむ、大分熱は下がったみたいだな。……痛みはあるか？」

「……胸がちよっと」

「ふふん、ちよっとか。先ほどの尋常じゆんじゆな痛がり方ではないように見えたか？」

「……だいぶ、痛い」

その返答にミュールはしたり顔をし、次いで目を細める。

「ま、無理もなかるうな。足は動くか？ 手は？」

ミュールに訊ねられたリージェスは、手足を軽く動かしてみる。

足は問題なさそうだが、手の指の動きが少したどたどしい。それに、動かすと連動して胸がやたらズキズキする。穴が空いていたというのも大袈裟ではなく、どうやら本当のことのようだ。

「……大分、握力が落ちたっばいなあ。まともに拳も握れないや」

「仕方なかるう。右手を剣で刺されておったからな。リハビリは必須だ」

そう言われてようやくあの日の状況を思い出す。手に剣をぶっさして大男に掌底打を放ったのだ。怒りに狂うと人間、何するかわかったもんじゃない。リージェスは他人事のようにそう思った。

「……我ながら無茶苦茶やったなあ」

「ん、何がだ？」

「いや、なんでも そうだ、奴はどうなったんだ？」

ミュールは「奴？」と一瞬怪訝そうな顔をし、直ぐに思い当たったのか口を開く。

「……ああ、あの鬼人オウガのことか。残念ながら逃げ果せたが」

「……そうか」

リージェスは齒軋りを

「だからっ、その音はやめいと言っておるっ。……まあ、悔しいのはわからんでもないが」

リージェスはヘッドリイとの戦いを思い浮かべるも、戦いと言えるものではないことに気付いて自嘲する。ただ軽くあしらわれただけ。相手にとっては赤子の手を捻るようなものだっただろう。

「……あいつの動き、嘘みたいに早かったな」

「フィール充填を駆使していたからの。元々、オウガ鬼人という種族は身体能力が並外れておる故、さらにあれを使われては接近戦での太刀打ちは困難を極めよう」

ミュールの発した聞き慣れぬ言葉に、リージェスは興味深げに訊ねる。

「フィール充填、つていつのか。それを使いこなせればあいつにも？」

ミュールは三秒ほど目を瞑り、再び目を開いた。

「……勝てるか、か。著しく低い可能性が少々高くなるかもしれないが、現実的ではないな。フィール生身の人間なら殊更、オウガ充填のみで鬼人に挑むのは自殺行為に近い。オウガ鬼人の十八番は肉弾戦。相手の得意分野で挑むに等しいからの」

じゃあ、それすらなくして挑んだ俺は、愚か者という言葉でも足りないのか。今まで何とかなっていたから、いつの間にか慢心していたんだな。

熱した頭が一気に冷え、リージェスは完全敗北の屈辱を受け入れる。

「奴に勝つ方法、あるのか」

「……あると言ったら？」

「あるなら教えてくれ。シャトルーさんの先生なんだろ？ 頼む、

どうしてもリーシエを守る力が欲しいんだ」

そう言ってリージエスはミュールに頭を下げる。ミュールは僅かな間、目を瞠った。

「今の俺は……弱過ぎる。……目の前でリーシエを傷付けられて、何も出来なかった。あんな思いはもう懲り懲りだ」

リージエスの澄み切った瞳をミュールはしかと見据える。清々しいくらいに潔い考え方を聞き、僅かばかりだが心を打たれたようであった。

「……お主も同じか」

ミュールは呟く。

「……え？」

「リーシエも、お主の危機に無力であったことを恥じていた。お主の力になりたいと、しきりに言っておった。ま、妹御の方は少し甘えが過ぎる節もあるが、お主はその心配もなさそうだな」

「……リーシエが」

リージエスは今にして思う。もし、リーシエがあの時駆け付けなかったら、自分はこの世にいなかったのではないか。彼女が傍にいたからこそ、最後の力を振り絞って立ち上がった。彼女の愚直な行動は、結果として自分を助けることになったのだ。

（後で……御礼言わないと、な）

物思いに耽っていたリージエスが視線を自分に戻すと、ミュールは話を続けた。

「補足しておく、妹御にはシャトルーが魔法を教えることになっている」

「え、ホントに？ シャトルーさんが？」

リージエスは目を丸くした。

「うむ。半年間、お主に会わないことを条件としてだが」
リージェスは仰天する。

「いいっ？ あいつ、それで納得したのか？」

リーシェが、敢えて言えば、メイス・オブ・フォレスト迷宮の森で一週間逸はぐれただけで泣きじゃくっていた、あのリーシェがその要求を呑んだのか。それはリージェスにとって俄にわかには信じ難い話だった。

「かなり葛藤はしていたみたいだがな。お主をそんな状況に追い込んだのが、よっぽど堪こたえたのだろう。どのみち、生半可な覚悟で物事に立ち向かったところで、生半可な結果しか出せぬものだ。一つ心に決めたことあらば、それこそが目標への大いなる助けとなる」
ミユールの言に、リージェスは感じ入ったようであった。リーシェの自立を促す良いきっかけになるかも知れない、と思ったのだ。

「で、お主はどうする？」

「うえっ？」

思考の泡が突如弾ける。唐突に訊ねられたリージェスは返事を逸いっする。

「お主、カタルスタの者を助けたそうではないか。セントレイドから聞いている。まあ、その恩を間接的に返すは吝ちんかではない。鬼人（オウガ）をも屠すくる術、伝授してやらぬでもないぞ」

「あー、そんなこともあったかも　　っていいのっ？」

リージェスは声を裏返す。

「当然のことながら、生半可な覚悟では到底、その前段階にすら辿り着くことは出来ぬぞ。覚悟はできておるか」

「わかってる。何でもやる」

その言葉に、ミユールはにんまりと意地悪そうな笑いを浮かべた。

「……何でも言ったな？」

「あ、ああ」
多分、だけど。

ミュールは口を閉じ、リージェスの目をじっと見つめている。好奇心に満ちた赤い眼。

口ぶりはとつても尊大なのだが、腰に両手を当てる所作は子供の愛らしさを如何なく発揮している。ミュールって、一体いくつなんだろうか。リージェスは興味を覚える。

「……いいだろう。体力が戻ったら稽古を付けてやる」

(稽古を……言い方がどうにも古めかしい)

そんな考えはおくびにも出さず、リージェスは口元を綻ばせた。

「わかった、ありがとう。あ、身体を動かさなくても何か出来ることあるかな」

「んん？ 瞑想でもすれば良からう。今の内に魔力を少しでも底上げしておけ。それが必須になる」

敗北を受け入れる。それすなわち、己の現時点の力量不足をありのままに見つめること。口で言うは易くともそれを実行出来ている者などざらにはいない。仮に、ヘッドリイに復讐したいとか、そういうニュアンスであればミュールは断るつもりだった。

リージェスは何よりも己の弱さを憎んでいる。勿論、リーシエが死に至らなかつたことも幸いしたのだろうが、高まる憎しみの感情に押し潰されることもなく、ごく短時間で最善の解答を得たリージェスに、ミュールは自分に師事する資格があると判断した。

だが

(……こやつ、何が)

ふとした違和感。リーシェと話したときとは明らかに異なる印象。

精神の海を漂いかけたミュールを、リージェスの言葉が現実に取り戻す。

「……瞑想とか、座禅と違って、何か苦手なんだけど」

苦笑いするリージェスに思考を邪魔されたミュールはじと目を投げ掛ける。

「……苦手なことを避けていてどうして克服できる。ちやつちやつやれ」

リージェスは肩を窄めてから胡坐あぐらをかき、手を重ねてからボソツと言っ。

「……ミュールちゃんって意外と厳しいんだな」

「……？ちゃん付け？はやめると言ったであらうっ」

其の四十五　　内通者（裏）

884年　5月21日

山を覆い尽くしている虫たちの絶え間ない鈴鳴り。それに混じって、宵闇の中に目を怪しく光らせる梟ふくろうの鳴き声が断続的に響く。標高が高いためか、外気温は非常に低く、氷点下に近い冷気が肌に突き刺さる。

そんなあまり快適ではない環境の中、山の中腹に佇む一つの人影があつた。黒いローブを羽織っている男は、白い靄もやを定期的に吐き出しながら、しきりに辺りを見回し、聞き耳を立てていた。青の混じった淡い黒と深い黒の梢つばきが強い山風に晒され、漣なみなみのような音を奏でる。

(……遅い)

相手が待ち合わせに指定した時間はとうに過ぎている。あと十分しても来なかつたら、戻った方がよいかもしれない。男は身体に纏わりついた寒さを振るい落すかのように、大きく身震いをした。

別段、男にとって待つことは苦痛ではなかつた。慣れ過ぎていたからだ。内通者というものは常にいつ明るみにされるかも知れぬ、という緊張の中に身を置いている。計画が予定通りにいくことの方が少ない。能動よりは受動に近い。あくまで戻った方がよい、という考えは寒さや待ち疲れによるものではなく、危機回避のためであった。

当初はそれを胃痛に転化してしまうほどに負担に思っていたもの

だが、何年も経つと緊張感の奥深くでそれを楽しんでいる自分がいる。或いは一種のマゾヒズムかも知れぬな、と男は苦笑する。

(……ん)

虫の声音と風の音に、草を掻き分ける音が乱入する。やっと来たか。男は音の発生源の方に目を凝らし、仄かに明るい炎と人影を見止めて口を開く。

「……遅かったな。 なっ」

思わず息が詰まる。橙色に浮かび上がったのは見慣れた容姿。松明まつと思っていた小さな火の玉は、手から相当に離れていた。両の耳に付いている輪のようなイヤリングが、蛍火の光を受けて存在を主張する。

「や。奇遇、だね」

「ア、アグストウラっ？ ……こ、こんな所で何をしているっ」

想定外の事態に、男の声が上擦った。奇遇という言葉では余りある。彼がこんな所にいるはずがない。賢王代行のレドネーの言葉を借りれば、体調を崩して休暇中。或いは、彼によって幽閉、若しくは暗殺されている可能性すら、男は考慮していたのである。

不審げに、しかし動揺を隠せぬ目を向ける男に、アグストウラは平然と応じる。

「こんな所、か。質問を返そう。君は何故此処にいるんだい？」

男は口を噤む。頭の中で様々な可能性を考えているのだろう。だが、それを斟酌しんしゃくする様子もなく、アグストウラは二の句を継ぐ。

「言うことはないか。だが、生憎僕は君に伝言を頼まれていてね」

「……伝言だと？」

いぶが訝しげに自分の表情を窺う男に、アグストウラは息を数秒ほど溜め、呟く。

「待ち人は、こない」

「……シャ・ライール瞬雷っ」

前触れもなく、ロープから男の手がぬつと飛び出した途端に青い雷が放たれた。しかし、一直線に突き進む雷がアグストウラの顔に命中する寸前、雷はぐにやりと折れ曲がる様に軌道を逸れ、彼の斜め後ろにある木の幹を抉る。メキメキと音を立てて、バランスを失った木がアグストウラの後方で傾き、地に横たわった。

「……なるほど。魔符を貼っていたか」

男は自らに言い聞かせるように言った。

「まあね。結構いいやつ使っているから、初級魔法くらいじゃやれないよ」

殺意をあからさまに向けられながら、アグストウラが表情を変えることはない。眼前に迫る雷魔法を、ウラウラ飄々と、怯むことなく、瞬きすらせずに見据えていた。男はアグストウラに対する臆病者、という評価の修正を迫られる。目の前の男は、考え得る限りの危険を一つ一つ丹念にすり潰す求道者だ。戦う準備を怠っていないということとは、不意打ちも想定内だったということ。

「……いつだ。いつわかった」

男は低い声で、唸るように言った。

「帝国の使者が来たときのことを覚えているかい？ 警備隊長の希望を募ったとき、君ら二人が参画したよね。その時点で、どちらかの可能性が高いかな、とは思っていた。内通者自身が、警備網を把

握できた方が都合もいだろうし、ね」

言い終わると共に、アグストウラを照らしていた炎の玉の光量が増す。

「……っ」

男が眩しさに顔をしかめ、視界を奪われぬよう腕で光を遮る。魔法の炎が映しだしたのは赤いカジュアルショートのカツラを被っているヴィラーであった。

アグストウラは炙りだされた鼠を敵かに見据えている。ヴィラーも動揺から立ち直ったのだろう。アグストウラに向けていた手を下ろし、能面のような顔に変わる。

「……その程度の当て推量で疑いを向けたと？」

「無論、根拠はそれだけじゃない。三重の頂に襲撃された日。魔法図書館と国立研究所の被害者数に相当な差異があった。動員した人数はほぼ同じだったのにもかかわらず、だ。これは、警備網が悉く逆手を取られていたことを意味している。襲撃者の力が凄まじかった故に派手に押し入られたようにも見えるが、それにしても研究所側の死者が少な過ぎたからね。情報を漏らしている裏切り者がいたのは確実だ」

「……」

「そうすると、どうも不可解なことがある。シャブラニールの消えたタイミング。頭の切れる彼が襲撃と時を同じくして姿を消す理由が見当たらない。彼が本当に帝国との内通者だったとして、この時点で引き揚げるとは考えにくい。内通者の存在は敵対した後こそ本当に役立つものだからね」

また、もし仮にシャブラニールが裏切ったとしたら、研究所の事

務室でヴィラーを気絶させたあと、そのまま放置しておくと考えるのは聊か無理がある。難敵を容易に排除できるチャンスを見逃すわけがない。少なくとも、アグストウラ自身が帝国に通じていたとしたら絶対に彼を殺している。

ヴィラー自身は後ろから頭を殴られたと主張しているが、頭痛腹痛は昔から仮病の十八番であり、偽ろうと思えばいくらかでも可能だ。骨折でもしているならばまだしも、怪我の程度が軽すぎた故に、ヴィラーは疑いの目を向けられることになったのである。

「……病が偽りだったとは。実はレドネーと手を結んでいたというわけか」

「一時休戦と言った方が正確だ。僕らの仲が悪いのは本当。ただ、お互いを殺し合う程でないというだけさ」

十日前の早朝、レドネーは賢王に呼び出されていた。王城に程近い、とある家屋に彼が入ると、テーブルに着席していたアグストウラは立ち上がり、丁寧に会釈した。レドネーは微かに頷き、警戒の色を滲ませながらも奨められるまま椅子に座った。アグストウラもそれに倣う。

レドネーは何気なく、周りの家具や天井、壁などに視線を走らせた。埃を被った照明。古びたタンス。剥がれ掛けた花柄の壁紙。天井には雨漏りを補修したであろう痕跡が残されている。意識すれば微かに黴の臭いも感じられた。

「このようなあばら家に儂を呼び付けるとは、貴様も随分偉くなったものだな」

レドネーの揶揄やぶを含んだ言葉に、アグストウラは苦笑を返す。

「あばら家って……相変わらず失礼だなあ。ここって僕の生家なんだけど。……まあいいか。貴方の意表を付けたのだったら他の誰も気付かないだろうから、少し安心した」

それはアグストウラなりの贅辞だったのだろうが、レドネーはそれを突っ返す。

「生憎、世辞は聞き飽きておる。……それで、こんな朝早くに一体何用だ。貴重な睡眠時間を泣く泣く削って、わざわざこうして呼び出しに応じてやったのだ。生半可な理由では納得せぬぞ」

馬の合わぬアグストウラに呼び出されることは滅多になかった。

ましてや、公の場ならともかく、プライベートな時間に呼び出されるような経験は一度としてない。そして、些細な用件なら、まずは気の合ったセントレイド辺りに用件を頼むだろうことも承知していた。

「それについては、本当、申し訳なく思っている。貴方の豊富な人脈たのを恃んで、一つお願い事があってね」

「人脈？ ……さては、宮廷魔術師の推挙か」

レドネーは真っ先にシャブライールの抜けた穴のことを思い浮かべた。しかし、アグストウラは首を振る。

「それも、いずれはご相談することになるだろうけれど、今回は別件だ」

「ならばなんだ。気を持たず暇が有ったらとつとと本題を言え」

レドネーは微かに怒気をはらませた表情を賢王に向ける。アグストウラはせつかちな老人に無抵抗の意思を表すかのように、軽く両

手を上げた。

「単刀直入に言うと、飛翔動物を大量に必要とするんだ。一応僕も当たってはいるんだが、まだまだ頭数が足りなくてね。心当たり片片端から掛け合ってくれないかな？」

アグストウラの要請を聞いて、何やらピンと来たらしい。レドネーはにたりと笑った。

「……なるほど、な。随分と強引な手を考えたものだ。だが、連中も動いたばかりだぞ。そうそう馬脚を現すとは思えんが」

「それについては考えているよ。連絡を取らざるを得なくすればいい」

「腹案があるか。どうするつもりだ？ 賢王を代わりにやってくれ、というなら喜んで応じるが」

冗談とも取れぬ冗談を口にするレドネーに、アグストウラは一瞬あんどりと口を開けた後、「いや、待てよ」と言っ腕を組む。

「それは……思い付きもしなかったな。盲点だった。考えようによつては、そつちの方がずつと刺激的だね」

ピクリ、とレドネーの耳周りの筋肉が動く。

「……本気か？」

「ちよつと待つてくれるかい。うーん、そうなると若干細部の修正をしないといけないかな」

アグストウラは「うーん、うーん」と唸りながら立ち上がると、部屋の隅にある年季のいつた本棚に向かう。そこから一冊のノートを取り出し、ペン立てから二本、黒光りする万年筆を掴み取った。

レドネーの向かいに座るとテーブルにノートを広げ、何やら書き始める。レドネーはその様子を黙然と見続ける。

五分ほどして、ノートは既に何枚か捲られていた。アグストウラ

はペンを置き、最初のページに戻すとレドネーの方にノートの向きを変えた。

「こんな感じでどうだろうか」

促されたレドネーはノートに視線を走らせ、ページを捲めくる。その内容は、策謀家を自負するレドネーの心中に寒風を招き入れるほど、大胆かつ重畳ちゆうじゆうなものであった。

全てを見終え、レドネーはノートを閉じて一言、「人の悪い……」と呟いた。もつとも、アグストウラとしては、目の前の御仁にだけは言われたくないのが本音というところだろう。

「僕を嫌っている貴方にしか頼めないのが辛いところだけだね」

アグストウラはきまり悪そうに頭を掻く。はっきりとした言い回しに、流石のレドネーも少々鼻白んだ。

「……フン、お互い様であろう。だが、内容自体は悪くない」

「問題はないかな？」

「大筋は、な。だが、折角だし少々儂の意見も取り入れて貰うか」

時折押し寄せてくる眠気の波を押し殺して、化狐アグストウラが捏ね、古狸レドネーが象かたどつた策謀のパンは焼成される。そして、出来たてはやはやのそれはその日の内に、カタルスタ王城にて振舞われたのだった。

嫌っているはずのレドネーに代行を頼むほどの重病。或いは、レドネーが背信をと、アグストウラは内通者にそう思わせたかった。

更に言うと、アグストウラはレドネーの悪名による世間の風評をも利用している。彼ならば混乱に乗じて賢王を始末しかねない。そう思わせるレドネーが賢王に居座り、アグストウラが実際に姿を消してこそ、信憑性が増すのである。

この策謀を誰にも打ち明けなかったのは、勘の良い内通者に演技であることを悟られぬようにするため。そして、そのことが結果として内通者の動きを早めると確信したからだ。

「敵を欺くにはまず味方から、って格言もあるし。それに、私の疑いが間違っているんじゃないか、という自問……いや、むしろ希望というべきだろうか、それもあつた。しかし、その可能性は潰えてしまった。君が先日、伝書梟を放つたことによって、ね」

その手紙には、賢王の身に由々しき事態が起きたことが三重の頂宛てで書かれていた。大臣しか知り得ぬ内部情報の漏洩。国の大事を逐一報告していた内通者の存在。

だが、用心深いヴィラーは人目が付かぬよう深夜に梟を飛ばしていた。それが何故看破されたのか。彼の目に疑問の色が生じたのを察したのだろう。アグストウラは微かに笑みを浮かべる。

「軍が所持している翼獣、白馬、魔鳳を総動員して夜間だけ王城の外側に展開していた。一月はやる予定だったけど、十日で済んで助かったよ」

ヴィラーは一瞬感心し、次いで齒軋りした。情報網の掌握。それこそがアグストウラの狙いだったわけである。

「……それで、俺だけをここに呼び寄せた、か。少々幻滅したな。セントレイドは親しき仲だから疑わなかった、というわけだ」

アグストウラはゆっくりと首を振る。

「残念ながら外れ。君は知らないだろうけれど、彼は三重の頂トリニテイ・ワシと思しき者を一人殺めている。その時点で疑いは薄くなる」

三重の頂トリニテイ・ワシを殺した人物を公表していない理由は、個人に対する相手の報復を防ぐためであった。上層部の者は知っていたことだが、ヴィラーは負傷を理由に病院にいた。セントレイドが三重の頂トリニテイ・ワシを殺したことを知るチャンスはついぞなかったのである。

「勿論差出人は書かれていなかったが、手紙の内容は明らかに三重トリニテイの頂イ・ワシに向けて書いてあった。逃げたように思わせてまだ一人潜伏していたとは、流石に肝が据わっている。一旦捕まえた鼻ふくろつを放つてからそれを追い、居場所を突き止めた。勿論、彼は丁重に始末させて貰ったよ。……妙に自己主張の激しい男だったから、名前まで教えてもらえた。デイエロ君とかなったかな？」

「……その後、再びその鼻ふくろつを回収し、筆跡を似せた手紙くを括りつけて私の方に返した、というわけか」

「その通り。ここなら人気ひとけもないし、話すには絶好の場だからね」

人気ひとけのある場所を指定したなら警戒心の強いヴィラーのことだ。事態を察して呼び出しには応じなかっただろう。そして、戦うには、という言葉のアグストウラは敢えて伏せた。

「……貴様は最後の詰めが甘いな。不意打ちで私を殺しておけば良かったものを」

ヴィラーが嘲笑したのを見て、アグストウラは軽く肩をすくめる。「……ま、それも考えたけれど。シャブラニールの所在を教えて貰わなきゃいけないからね」

ヴィラーは数瞬、宙に視線を漂わせる。既に彼の名を忘れかけている様な所作であった。

「ああ。奴なら今頃、海水にでも溶け込んでいるんじゃない

かなあ」

穏やかな顔から一転して、ヴァラーは歯茎を剥き出しにして笑う。心からの笑顔。そこから垣間見える狂気は、氷をうなじに擦りつけられるかのような感触をアグストウラに与えた。

「溶け……っ、熔負か。それで……」

禁忌魔法の一つ、熔負^{トウ・イブール}。強酸の霧を発生させ、それに触れた物を溶かす忌まわしき魔法。火の魔法にしる、雷の魔法にしる、殺傷能力の高い攻撃魔法を室内で使われれば何かしらの痕跡が残っているはず。だが、熔負^{トウ・イブール}の酸は骨をも溶かす。それを使われては、戦った後も、血痕が見受けられなかったのも頷ける話であった。

「……見つからないわけだ。遺体を溶かして排水溝に流したのか」
死者を冒流^{ぼうりゅう}するような真似に、怒りを禁じえないアグストウラは微かに声を高める。

「私が警備の配置を何度もチェックしていくのを不審^{ふしん}に思ったらくてなあ。よりもよって実行日当日に警備員の配置を変えようとしやがったんだ。思い留まるように再三忠告してやったのに、奴は聞く耳を持たなかった。私の優しさを無にしたが故の報いだな」

「それだけで殺したのか……」
「自己防衛だよ、十分過ぎる理由さあ。何せ警備網を襲撃の実行者たちに知らせたあとのことだったからなあ。伝書梟^{でんしやう}は家に置いてきていたし、連絡手段がなかった。家に戻れば当然怪しまれるし、かといってそのままでは俺が奴ら^{たばか}を謀ったことになり、裏切ったと思われるってしまう」

アグストウラは得心する。シャブラニールはヴィラーの不審な行動に気付き、おそらくは妨害しようとしたのだ。だが、その時点で

はあくまで疑いに過ぎず、彼を排除するような行動には至らなかつた。そして、客観的に見てその中途半端な行動がシャブラニールに死をもたらしてしまった。

「後ろから殴って気絶させてから喉を溶かしてやった。声が出なくなるのと死ぬのはほぼ同時だったみたいだがなあ。それでも身体を漏れなく溶かすのは難儀な作業だった。シャブラニールの奴、いくらなんでも太り過ぎだろ」

ひつひつと、しゃっくりしたように笑うヴィラーに、アグストウラは侮蔑^{ぶへつ}の目を向ける。

「……あの魔法書は二年ほど前に紛失していたはずだ。禁忌の魔法書を幾つか持ち出したのも君なのか」

表情の一切を失ったアグストウラに、ヴァラーは肩をすくめ、続いて満足げに笑声を立てた。

「クツ、ハハハツ。知らなかったよお、お前もそんなに怖い顔が作れるのかあ。ああ、そうだ。私が持ちだしたんだ」

一息付いて、ヴィラーは言葉を続ける。

「……お前は不思議に思わないか？ 多大な労力と時間をかけて習得した魔法を何故使つてはいけないのだ？ 我々は一体何のために知を探求している？ 知るだけで満足せずにその力を行使してみたいと思うのは、自然なことではないのか？」

アグストウラはその問いに答えない。ただ黙然と、ヴィラーを見据えている。二人の間を、山の頂上から吹き下ろしの風が通り過ぎる。

「お前ほどの識者に判らぬはずがあるまい、アグストウラよ。実証することによって初めて技術は飛躍するのだ。今の戦乱の世は格好の実験場ではないか。穴倉に閉じ籠もって細々と研究する必要は全くない」

「技術革新のために自ら戦いを呼び込むのかい？ ……愚かだとしか言いようがないな」

「技術革新。 ……まあそれもないことはない。しかしそれはあくまで手段だ。魔法使いが虐げられていた歴史に別れを告げるための、な」

アグストウラの片頬が僅かに歪んだ。

「 ……それを君がやると？ 思い上がりも甚だしいね」

「何とでも言うがいい。 断っておくが、野に下ったカタルスタの魔法使いは既に大勢いる。表面上はどう取り繕っていても、心の奥底では皆、持て余した力を試したがっているのだよ。停滞を由とする国などいずれば滅びる運命。その犠牲を糧に我ら魔法使いが再び歴史の表舞台に立つ。 ……長年捻じ曲げられてきた歴史の流れに、終止符を打つ時がやってきたのだ」

ヴィラーは言葉を切り、まるで聴衆に己の存在を主張する教主のように、両手を大きく広げた。

魔道士狩り以来の、魔法使いの台頭。確かに、それはカタルスタの魔法使いたちが潜在的に望んできたことなのかもしれない。しかし、アグストウラはヴィラーの講釈を厳然と斬って捨てた。

「 ……やれやれだ。ごく一部を？ 皆？ と称する奴にはろくなのがない」

処置なしだ、といたげなアグストウラの、両掌を天に向ける所作に、ピクリ、とヴィラーの眉が跳ね上がる。

「それが帝国に尻尾を振った理由か。力を試したいなどとほざくなら、北の山脈にでもいつて魔獣と戯れてくればいいものを。違うだろう？ ……優越感に浸りたいがために他者を傷つけたくなった、それだけだろうか？ 裏を返せば劣等感の表れに他ならないことにも

気付かずに。所詮やっていることは、他人の玩具おもちゃを無理矢理奪い取る悪ガキと同じだ」

「……何……だっ」

表情を歪め、振り絞るようにそう言ったヴィラーに、アグストウラは冷やかな視線で応じた。

「さつき、君は停滞という言葉を使ったな。全くもってお笑い草だ。人生たかだか七十年か八十年。大志を抱き、それに臨そのめばあつという間に過ぎ去ってしまう、儂いほどに短い時間。退屈を感じるは、時間を無為に過ごしている何よりの証拠じゃあないか」

聞き捨てならなかったのか、ヴィラーは声を荒げる。

「……ふざけるな。我らには大望がある。魔法使いの力を世に示すという」

「それだ。力を示す。今言っただけだ。大小の差はあれ、そんなことなら子供でも出来ると。力をひけらかす行為は、自らの弱さを吐露とくろしているに過ぎぬ。宮廷魔術師になつてまで、随分と卑屈ひくつな目標を立てたものだ。自分の価値を徹底的おとしに貶め、拳句の果てには味方殺しに手を染めた。……笑わせるな、クズが」

アグストウラの吐き捨てるようなその口吻、その暴言に反応し、ヴィラーはこれ以上ないというほどに顔を醜く歪める。

「ならば、そのクズに殺される貴様はそれ以下の存在かな？
ヴィラーはそう言い捨てると共に拳を握り、己の手を交差させる。

大海うみに没おぼは泡沫 御手いたでに抱かかは白き睡ねむり

「……やっぱ、こうなるのか」

アグストウラがポツリと、諦めにも似た台詞を呟いた途端、彼に冷徹とした雰囲気おんぎが備わる。それとほぼ同時に、ヴィラーの周囲が

ら風が巻き起こり、アグストウラの柔らかい紫髪を彼の後方に靡なびかせる。至高に限りなく近い魔法使い同士の戦いが、幕を開けようとしていた。

其の四十六　　名を継ぐ者（裏）

「ヴァ・アケール
浪蓋つ」

先手を取ったヴァラーは己の前方に木々を呑みこむ程の巨大な波を出現させる。アグストウラは黒い壁がそのまま迫って来るような錯覚に囚われるも、最小限の対処をすべく、手を下から上に掬い上げる動作を行い

「デイ・ウオール
封哭呪」

荒波をいなすべく、矩形の魔法障壁を真ん中で折り曲げるようにして展開した。波は障壁が象る鋭角の先端から、はさみ 鋏に裂かれてゆく紙のように左右に分かれて川を作る。水飛沫が霧雨となつて広範囲に渡って散る。一方で二つに割れた水の流れはアグストウラの後方で再び合流し、斜面を滑り落ちていった。

我が手に燃は業　　貌を成は球

直撃を避けたアグストウラに対し、ヴァラーは畳み掛けるべく次の詠唱に入っていた。それを防ごうと、アグストウラは木の群生している方に走って距離を取り、茂みを盾にしつつ狙いを定める。両手の上に浮かび上がるようにして、巨大な炎球が姿を現す。燃え盛る炎がチロチロと、細長くも赤い舌を見せた。

地と共に彼の者らを焦がせ

「ヴァ・フレイール
??炎つ」

ヴァラーは掲げている手の平を、視界の端を移動する影に向ける。

放たれた紅蓮の炎球が夜の森を煌々と照らし、次には広範囲に爆ぜた。爆発の瞬間、自然の風を逆戻すほどの熱風が駆け抜ける。闇に慣らされていたヴィラーの目が光を嫌い、糸のように細くなる。

「……………当たったか？」

「シャ・エアール
嵐珠」

ヴィラーの独り言への返答はやはり魔法によって成された。圧縮された球状の空気が側面から彼に向かって打ち出される。

「ちっ」

ヴィラーはのけぞるように風の塊を避けると、太い木の裏に身を隠す。アグストウラはそれを見てもお構いなしに、足を止めることなくヴィラーが身を隠した辺り目掛けて風魔法を乱発する。

「シャ・エアール
嵐珠、嵐珠、……………うーん、やっぱり嵐珠」

無詠唱の初級魔法の連打。単発では威力が知れているとはいえず、これでもかこれでもか、と密集させられると下手に動きが取れない。盾にしている木の幹が抉れる。かと思えば脇にあった小木が爆ぜる。木の棘があらぬ方向から飛んでくる。細かい破片が飛び散り、ヴィラーの顔や腕に掠り傷を負わせていく。

「ぐっ……………。いい加減に？」

続きを言うまでもなく、まるでヴィラーの意が通じたかのように、唐突に攻撃が収まった。ヴィラーは一瞬戸惑うも、続いて腑から悪寒が立ち昇り、それが咄嗟に彼の身体を突き動かした。

トウメイ
悉く彼の者らを奏でよ

いつの間にも上級魔法の詠唱に移っていたアグストウラは、梢こずえの大半を失ったボロボロの木に向けて手を翳かざす。

「フィール 充填つ」
「ヴァ・ライル 鴉雷つ」

異なる詠唱が、しかして重なった。茂みからヴィラーが飛び出すのとほぼ同時に白き閃光が発せられ、雷鳴が轟とどろく。天より降り注いだ雷の雨が周りの木々をも巻き込んで猛威を振るった。凄まじい熱が発されて木々の何箇所かに火が灯り、パチパチと音を立てて燃え始める。辺りは先ほどのヴィラーの炎魔法と合わせて大火災の様相を呈している。反して、昼間のような視界が火の暖かさと共に確保された。

「……お、おのれい」
ヴィラーは充填フィールを使ったまま傾斜の下を目掛けて横っ飛びしていた。転がる様にして辛うじて難を逃れた彼は、賢王の間断ない攻撃に半ば感心し、半ば辟易へきえきした。付け入る隙が殆どない。普段の人の良さからは想像できぬほどの容赦のなさである。厄介なことに、彼を守る魔符が初級魔法による牽制を許さぬことも劣勢の一因であった。

アグストウラはヴィラーを見下ろして傲然しつぜんと胸を張る。これは、聡明な彼にしては少々余計な所作だったかも知れない。ヴィラーへの怒りと、未経験の命のやり取りによる興奮は、彼の冷静な思考を僅かに妨げていたのである。

「随分と必死だな、ヴィラー。大きなことを言った割にはその程度か。それとも、少々買い被り過ぎていたかな？」

「黙れっ。見下ろしていられるのも今のうちだ」
ヴィラーは憎々しげにアグストウラを睨みつけた。

口ではそう言ったものの、一旦退いた方が賢明か、という考えがヴィラーの脳裏を過る。しかし、自分の身体に無数にある擦り傷を見て、即座にその考えを封殺した。やられっばなしでは終われないという強い思いがあったのだ。それは、先ほど賢王に投げ掛けられた罵声の数々にも起因しているかも知れない。アグストウラが並び立てた悪口雑言あしこぞごんごんは、常々優秀と言われ、周りから褒めそやされてきたヴィラーにとって嘗てないほどの屈辱を与えていた。

(……………ん……………見下ろす。……………くく、そうか)

煮詰められた憎しみが瞬間的に冷却されたのか、ヴィラーは一つの対抗手段を思い出す。ヴィラーは魔力を指に籠め、おもむろに魔印を描き出した。

光芒を墮おは欲望 死人しにんが示しは徽章きしょう

詠唱と共に、ヴィラーの足元に大きな六茫星が赤く浮かび上がる。何をしようとしているのかを瞬時に察したアグストウラは詠唱を妨害すべく手を翳かきす。

「………嵐珠サン・エアルっ」

圧縮された空気の球はヴィラーに向かっていくが、彼を囲む六茫星の縁の部分で消滅する。

「……………くそっ、駄目か」

ヴィラーの周囲に展開する膨大な魔力は、アグストウラの魔法をあっさりと遮る。毒づいた敵を一瞥し、ヴィラーは歪んだ笑みを浮かべた。

汝 生きとし生ける者全ての苦痛を糧かてに 我が前まへにて顕現けんげんせよ

「ディ・ケウス
冥騎士メイキ士シ」

ヴィラーの言霊と共に、紅い六芒星より光柱が放たれる。地の底からのそりと巨大な骸骨が、頭先から出現した。ヴィラーが地に立っていると、その足元から肩甲骨が出で、それに乗るような形となる。その次には毒々しい闇を蒸気のように噴出する大剣。そして、それを携えている手が現れた。角ばった足の爪先まで現れると、ようやく光柱が消滅する。

エアリアの攻城時にも用いられた召喚魔法。本来合成魔法の扱いであるそれをたった一人で使役するは流石宮廷魔術師の一角、といったところであろう。ヴィラーは骸骨の肩の上から、豆粒のように小さくなったアグストウラを悠然と見下ろす。余裕が生まれたのか、肩で息をしながらも舌舐めずりをした。

「……………貴様の御託ごたたくは、もう聞き飽きた。……………そろそろ、幕を引こうか」

アグストウラは骸骨の巨大さに顔をしかめ、内心肝を冷やすも、ヴィラーの耳に届くように大声で虚勢を張る。

「今更格好付けるなよ。口喧嘩では勝ち目がないから暴力に頼ります、ってことだろ。本当にガキみたいだな。……………みつともない。ああ、……………みつともない」

間を溜めて、しみじみと首を振る。冷めたはずの頭に、献身的に煮え湯を浴びせかけてくるアグストウラに、ヴィラーの瞳くまが昏く淀む。

「
冥騎士^{ディ・ケウス}つ。そいつを粉々に踏み潰せ」
挑発に乗ったヴィラーの命に反応し、骸骨は片足を浮かす。

月の光を遮る巨大な影に呑み込まれたアグストウラは慌てて反転し、充填^{フィール}を駆使してその場から退く。その刹那、骸骨の振り下ろされた足が先ほどまでアグストウラのいた場所を周辺の木々ごと踏み潰した。

ドスンッ

「
うわっ」

衝撃で地面が震え、辛うじて難を逃れたアグストウラの足が宙に浮いた。ふらふらとよるめきながら何とか着地する。多くの土埃が立ち上り、風圧で木々から乱暴に剥がされた木の葉が乱れ舞う。再び骸骨が足を上げると、足跡の下で倒れた木々が土に埋れていた。

土埃を少し吸い込んだのか、アグストウラは鼻と口とを袖で覆って咳き込んでいる。

「げほっ、げほっ……」

「……ち、外したか。もう一度だっ」

ヴィラーが命じると、骸骨は従順に従う。再びアグストウラ対の足を踏み出す。

「ぐっ……くそっ」

再び濃い影に囲まれ、アグストウラは舌打ちしながらも後ずさる。

ズスンッ

今度は、アグストウラが斜面に身を投げる側となった。坂を転が

り落ちるも手を伸ばし、何とか細い木を掴んで体勢を立て直す。
「調子に乗る、……なっ」

骸骨の大剣が振り下ろされる場面が網膜に焼きつき、目を見開く。剣風が戦慄き、縦の衝撃波が押し寄せてくる。殆ど無意識に、頭から滑りこむようにアグストウラは横つ跳びする。

バキバキバキ

衝撃波は山の斜面の土を、数本の木を押し倒しながら一直線に土壌を抉つていき、山の麓の辺りで爆発した。夜の闇にもうもつと、木の葉の混じった土煙りが立ち込める。砕かれた岩の破片が暫しの間雨となつて周囲に降り注いだ。

(……今は、危なかった)
アグストウラは四つん這いになつたまま、口に紛れ込んだ芝生と砂利をぺっぺと吐き出し、立ち上がると骸骨を見上げながら横に回り込むように走り出した。いつの間にか手に汗を握っていたためか、土がへばり付いている。

(……このままじゃ、捌り殺されるだけか。仕方ない)
アグストウラは充填を駆使して移動しながら次の攻撃を待つ。再び骸骨の剣が振り下ろされるのを視界に捉え、即座に反転する。
衝撃波をやり過ぎた後に土煙が発され、それを後ろ目で確認したアグストウラは再び反転し、土煙の中に躊躇いなく突っ込んだ。巻き上がった土の粒を吸わぬよう、袖で口を覆いつつ、その中に身を置いて充填を解く。目を瞑り、精神を集中し、詠唱を開始する。

> 纏は悠久なる風 遮は大地の縛

<

アグストウラを見失い、重々しい動きで辺りを見回していた骸骨が徐々に晴れてきた視界の中に彼の姿を見つける。

「……そこにいたかあ」

ヴィラーは歪んだ笑みを浮かべ、天に掲げた手を振り下ろす。それと同時に、骸骨の剣が振り下ろされた。その刹那

「
 ディ・スケール
天翔つ」

アグストウラは斜め上空へ飛翔し、衝撃波を辛うじて避けた。高木の枝葉に身を晒し、外套がひっかかり、その何箇所かが破れる。それを気に止める様子もなく、彼は身をひるがえ翻すようにして夜空に舞い上がり、骸骨とヴィラーへ向き直った。

それを目の端で捉えたヴィラーは舌打ちをした。

「……ハイ・エルフが行使するという飛翔魔法か。……ミュールだな、厄介なものを教えやがって」

ディ・ケウス 宙に浮かび上がったアグストウラは50mほどの距離を取って、ディ・ケウス 冥騎士とヴィラーたいじに対峙する。

「残念だ。一人でそれを行使できるほどの才を、この手で潰すことになるとはね」

同じ宮廷魔術師のセントレイドやレクストといえど、ディ・ケウス 冥騎士を一人では使えまい。謀略に時間を費やすことなく、人生の大半を魔法の修練につき込めば、ヴィラーの魔法の才は、或いはミュールに匹敵する輝きを放ったであろう。

「勝ち誇るのはまだ早いぞ。お遊びはここまでだ。本領を發揮させれば、冥騎士ディ・ケウスの魔剣はこんなものではない。威力、速度、射程共に今のを遙かに凌駕する」

闇夜に浮くアグストウラは、ヴィラーの言葉を無視して腕を交差させる。微かに唇を噛むも、手の平を己の方に向けるようにして、詠唱を開始する。

至言 宵闇よいやみに佇たゆたうは魔艇まてい 十指からむに絡そは祖いかりの錨いかりならば

ふと、アグストウラの十指に細い糸が煌めいているのが目に映る。それは彼の5mほど後方で半透明になり、闇に溶け込んでいた。ふいに、闇の中に光が走り、糸に繋がれている得体の知れぬ何かの輪郭かくを一瞬だけ描く。

己の記憶にない詠唱内容に、ヴィラーが訝いぶかる。

「何だ、その魔法は……」

未知に対する好奇心が勝ったのか、冥騎士ディ・ケウスを顧使いししている余裕からか、ヴィラーは骸骨に命令を下す決定的な機会を見逃した。

我 汝の戒めを解き放たん いざ 隔世かくじよより来たれ

「エクス・メテール
星販船つ」

闇に響き渡る言霊と共に、アグストウラの指に絡みついている糸

が解^{ほど}け、張りを失い、垂れては消失する。闇が蠢^蠢き、空間が卵の殻のように割れる。パキパキという音と共に、ヒビを少しずつ大きくして、悠然と姿を現したのは漆黒の船首像。象られているのは艶めかしく、淫靡な女の悪魔。

「これはっ……」

己の記憶にない魔法にヴィラーが慄^{おの}く。以前彼が持ち出した、禁忌の魔法書の中にもこのような魔法は見当たらなかったはずであった。

帆船が横向きに姿を現す。船底からマストまでの長さが軽く30mはありそうだ。時空の裂け目は尻^{しりすほ}窄みに消失していき、船尾まで出たところで闇に埋もれる。

「なるほど、召喚魔法には召喚魔法、か。だが、果たして禁忌の召喚に敵うかな？ ……冥^{ディ・ケウス}騎士っ。そんなもの切り裂いてしまえっ」

ヴィラーの命を受けた骸骨が戦艦に向けて歩き始める。戦艦はゆつくりと、悠々と宙を航行する。接近した骸骨は両手で剣を握り締め、大きく振り被る。続いて、手に持つ巨大な大剣が黒いキャンバスに半円を描いた。凄まじい魔力を伴った斬り下ろしが船体のほぼ中央を捉える。

バチバチバチィッ

「なっ」

ヴィラーの目が驚きで見開かれた。

大剣の刃は船体に届いていない。我に返ったヴィラーが戦艦に視線を凝らすと、戦艦を球状に覆う、透明度の高い魔法障壁が薄らと見えた。艦が展開している大きいシャボン玉のような障壁と、紫煙に覆われている骸骨の大剣とは十秒ほどに渡って凄まじい火花を散らしていたが、ついに剣が強かに弾かれ、反動で骸骨が仰け反った。足場が激しく揺れ、ヴィラーは慌てて骸骨の肩にしがみつく。骸骨の両の手から離れて宙に舞い上がった大剣は、ヒュンヒュンと風を切りながら回転し、遠方の山にズブリと突き刺さった。

その衝撃が一瞬大地を揺らし、触れた木々をパキパキと薙ぎ倒していく。裂け目から土砂崩れを巻き起こしながらも、大剣はゆつくりと、その刃を山肌に納めていく。その鳴動に恐れ戦き、目覚めた鹿や猪、熊などの動物たちが一斉に山を下り始める。それに併せて鳥の群れがバサバサと羽音を鳴らして闇夜に飛び立つ。山鴉の群れの、警戒を促す喧しい鳴き声が、周辺の山々に木霊した。

静寂から解き放たれたその場で、空に浮かぶアグストウラが昂然と言いつつ。

「……仮にもWの名を継いだ者が、後出でて対抗できない魔法を使うと思うのか？ ……舐めるなよ」

「……ぐっ」

その威圧的な声に、ヴィラーは気押される。

おもむろに、戦艦の横腹にある三つの大筒に想像を絶する魔力の収斂が起こる。可視できるほどの魔力の糸が繭状に紡がれ、形を成しては震え、離れているヴィラーに耳鳴りとして届いた。

ヴィラーは己の窮状をようやく悟る。唇が強張り、声に震えが走る。
「……ば、馬鹿なつ。……う、こんなふざけた力が」

エクレ・メテール

星販船は攻撃範囲が広すぎる故に、対召喚専用魔法としてのみ使うことを赦されている魔法。アグストウラが前賢王ロディエールより受け継いだ、師であるミュールすら知らぬ魔法である。桁外れの破壊力であるが故に禁忌きんきの書からも除外され、歴代の賢王が口伝くでんでのみ引き継いでいる秘中の儀。それだけにと、アグストウラは皮肉さを伴う笑みを禁じ得ない。賢王と宮廷魔術師が殺し合ったという記録は、カタルスタ史上を見ても前例がなかった。今日までは。

「まさか……これを向ける初めての相手が、同輩どうはいだとは思ってもよらなかったよ」

敢えて、人気がない広い場所を指定したのはこうこういう事態に備えたためだ。アグストウラは余程納得できる事情でもない限りは、ヴィラーが逃げようが抵抗しようが確実に殺すつもりでいたのである。一方のヴィラーは意表を突かれ、露骨に挑発され、平常心とは少なからず距離をおく精神状態であったのは否めない。初めから用意周到に準備してきたアグストウラに比べては著いしく不利であった。

経験不足と余裕、そしてヴィラーに対する怒りから、彼に冥騎士ディ・ケウスの行使を許した己の甘さを、アグストウラは深く自省する。口元に浮かんでいる笑みを消し、冥騎士ディ・ケウスの肩に乗るヴィラーを穏やかに見据える。

「……ヴィラー、貴様は三つの咎を犯した。禁書を許可なく持ち出し」

「ま、待ってくれ。わ、私はただ」

「がくがくと震えるヴィラーのカツラが少しずつずれていく。剥き出しになった頭皮が三日月のように輝きを放った。

「学友を卑劣な手段で殺し」

「わ、わかった……こ、降参だ。ま、負けを認めよう。……だ、だからあ、……そんな……物騒なものは仕舞ってだなあ」

ヴィラーが万歳をしておどけて見せるが、掠れる声からは恐怖を隠せない。もはやその表情は精彩を欠き、瞳が左右に忙しく動いている。外れかけてフードに引っかかっているカツラがどこか滑稽さを醸しだしているが、その笑気がアグストウラの怒気を上回ることはなかった。

シューウウウウウウー————

魔力の収斂が収まり、続いて大筒から発された吸引音が耳を劈く。風船から空気が抜ける音を万倍に増幅したようなその音は、次第に高音域へ傾いていった。

「あろうことが、国を、カタルスタの民を、売った。その罪

万死に値する」

往生際の悪い元同志に、アグストウラは冷然と言い放った。光を帯びる己の指先を、緩慢に、しかし確実に、ヴィラーへと向ける。

「……冥騎士つ、術者を
撃て」

先んじたアグストウラの言霊が闇夜に響いた刹那、星貶船から爆音が轟く。紅の射光が一瞬にして空を朝焼けのように染め上げ、拳を振り上げかけていた冥騎士の右肩、ヴィラーの立っていた部分に着弾する。その部位からは目も眩むほどの閃光が発生し、周囲に広がる様にして骸骨を塵と化していく。足先の骨まで砕け散った刹那、光柱が轟音を生じて天へ向かって真っ直ぐに伸び、周囲の木々を爆風で一気に吹き飛ばした。木々を燃やしていた炎を瞬時に吹き消すほどの風が眼下を蹂躪する。上空に位置する雲には大きな風穴を空け、最後に柱は細い線と成って消滅する。断末魔すら残す間もなかった、ヴィラーの命と共に。

いつの間にか鳥や虫の鳴き声は聞こえなくなっていた。まるで初夏の森が冬の森に舞い戻ってしまったかのような静寂であった。宙に浮かんでいた戦艦は役目を終えると共に、再び闇に溶け込んでゆく。

ヒュウヒュウと風を切る音だけを耳に刻みながら、アグストウラは地に降り立った。服を着たまま水に浸かっているかのように身体

が重い。強力な魔法を使ったせいだろう。全力疾走した後のように、全身から汗の雫が無数に浮き出では流れ落ちる。

「……………ハア……………ハア。……………やって、しまったな」

アグストウラは自嘲し、次いでヴィラーを指差した己の手の平に視線を移す。初めて人を死に至らしめた、その大罪を掴み取った、微かに震えるその手を黙然と見つめ、不意に嘔吐感に襲われる。木に片手を付き、俯きながら唾を何度も呑みこみ、若き賢王は辛うじて、胃液を胃に押し戻すのだった。

其の四十七　手紙（裏）

884年　5月23日

「　と、言うわけでした。リーシェさんがリージェスさんを
一途に想うのも無理からぬ境遇かと　先生、……どうして後ろ
向いているんですか？」

シャトルーが聞き齧った二人の過去をミュールに伝えていると、
いつの間にか彼女は背を向けていた。スンスンと鼻を嚙り、袖で目
をゴシゴシと擦っている。

「……な、なんでもないつ。……くそつ、今年は……ぐすん、……
何だか……花粉が多いな」

ミュールが花粉症だということを今日初めて聞かされたシャトル
ーは、自分の頭に入っている人物辞典の中にあるミュールの備考欄
に二語を付け加える。

（涙脆くて、意地っ張り、まる）

続いてシャトルーは、三重の頂の襲撃に関連した上層部の動きを
ミュールに報告した。賢王とレドネーが協力して芝居を打ったこと。
ヴィラーが内通者であったこと。そして、シャブラニールが殺され
ていたこと。話が進むたびにどんどん曇っていくミュールの表情を
見て、シャトルーはやるせない気持ちになる。

「ミュールは憂鬱ゆううつの溜息なげ息を吐き出す。

「……そうか。シャブラニールが、な」

「……賢王様も明るく振舞ってはいましたが、相当落ち込んでいらつしやるようです。何とか公務には復帰されましたがー」
シャトルーが慮おももんはかる様な表情を見せる。

「ま、当然だろうな。何よりあやつ、人を殺したのは初めてであるうし」

命を摘み取る行為に対しては、感傷や苦味を伴ってしかるべきだとミュールは考えている。例えば、魚を捌くのは平気でも、鶏を絞めるには躊躇ためらいを感じる。そういった者は意外と多いであろう。それは、知能が高い生物の方が感情を豊かに表現するからだ。剥き出しになった負の感情をまざまざと見せつけられると、残酷だと感じやすいのである。

無論、死んだ方が世のためだ、というような凶悪な人物は存在すると思う。だが、それはあくまで標準的な倫理観に照らし合わせてのことで、手を下す当事者の思慮とは多分に距離を置く。

裏切り者のヴィラーがどういう最後を迎えたかはわからない。死に様を訊ねる気も毛頭ない。しかし、己の死、意識の消失に向かい合って、少なくとも無関心ではいられなかったであろう。死にゆく者の様子を目の当たりにして、何の感情も抱かぬのでは王たる資質に欠ける。

一方で他の思いもある。真に皮肉なことであるが、知能が高く、認識能力が優れている故に、人は差別をする。生き物の扱い一つ取ってもそうである。殺しやすい、殺し難いというランク付けを無意識に行う。生命の選別。これほどに苛烈かれつな差別はそうないだろう。時として子供の無邪気さに恐怖を感じることもあるが、それは子供の認識能力が未熟であるが故のことである。彼らは大人よりも自然に近い存在なのだ。人は成長するほどに自然から遠ざかっていく。

価値観を構築することによって、知らずと差別が渦巻く世界へ足を踏み入れる。このジレンマを克服することは、おそらく未来永劫不可能であるうことをミュールはわかっていた。

「それから、近々ログステイオさんが公務に復帰する予定です。あと、シャブラニールさんが殺害されていたことも発覚したので、遺体はないのですが取り急ぎお通夜を取り行う運びになりました。明日の夕方からなのですが、出られますかー？」

「問題ない。そろそろ自分も王城に出向かねばと思っていたところだ」

「わかりました、では後ほどそう伝えておきますねー。ああそうそう、お知らせすることがもう一つ。当面の方針ですが、国全体としては動かぬようにして、トリニタイ・ワシントン三重の頂に対抗するための私設部隊を作ることになりました。目的はテルネシア帝国への報復、及び情報の収集」

この決定にはミュールも聊ちやうか驚いたようであった。

「……よくそんな大胆な案が短日中に通ったの」

「耳を疑う話ですが、セントレイドさんの提案をレドネーさんが後押ししてくれたらしいです。水と油が混ざり合うこともあるんですねー」

ミュールは反目し合う白髭の男と黒髭の男が握手し合う場面を想像するも、双方の顔は何故かしかめっ面だった。もともと、此度の襲撃事件は一大事である。お互い形振り構なりふっている余裕はないのだろつ。

「ま、これだけ派手に掻き回されれば無理もないな」

「あ、今のは何気に上手い台詞ですねー。90点差し上げま

イタイっ」

不敬な物言いに、口より早く手が、つまりは錫杖が動いた。幾つもの遊輪がシャラシャラと擦れ合う音がする。

「……何様のつもりだ」

「うー……先生。錫杖しやくじやうつて叩くための物じゃないんですよー」

シャトルーは自分の頭を撫でながら、そういえばと室内を見回る。意識を回復したはずのリージェスがいないことによく気付いたのである。その旨を訊ねると、ミュールは肩をすくめた。

「奴ならリハビリも兼ねて食料の買い出しに行っておる」

「えっ、もう歩けるんですかっ？」

「かなり痛みは残っているはずなのだがな。……断っておくが、一度は止めたのだぞ。どうにも、我慢強い性格らしい。お主の先ほどの話を聞いて、俄然納得いったが。過ぎたるはなんとやら、だな」

ミュールの価値観としては、我慢強さや忍耐は必ずしも長所に該当しない。人並み外れた我慢強さが大病の発見を遅らせ、手遅れになることは往々にしてある。我慢できないのは論外だが、何事にも適度と言つものがあるものだ。

「魔法の修業はまだ始めていないのですか？」

「回復具合を見て、ぼちぼち始めようかとは思っておる。リーシェの方はどうだ？」

「順調ですー。腕を吊った状態なので、まだ出来ることは限られませんが。既に充填フィイルの前段階は終了しました」

ミュールは眉を上げる。

「ほっ……予想以上に早いな」

シャトルーは朗らかに笑う。

「リージェスさんが意識を取り戻したと伝えてから、急に澆刺はつざつとしてきました。意気込みも半端じゃありませんよー。私が公務に行っている間は、一人で魔法図書館に行ったり瞑想したりしていますから」

「ふむ。それが半年間継続できればたいしたものだが……」

「それと、彼女からこんなものを預かってきました」

シャトルーは提げていた白いポーチから封筒を取り出した。

「ん、これは手紙か？」

「ゴルフレッドにいる、お二人のご友人から届いたものですね。家を開けている間にポストに入っていたようです」

「ん、……シルド？……はて、……どこかで」

おぼろげな記憶を脳の小箱から引っ張り出し、ミュールはその男の顔を思い出した。

「……もしま、バルソラか。随分と懐かしい名前が出てきたものだ」

「珍しいお名前ですけど、お知り合いなんですか？」

「会ったのは二、三度だけだがな。あやつはお主の兄弟子だ」

「……え、それで二、三度って？　ああ、ロディエール様の方ですかー」

シャトルーは在りし日のロディエールを思い出す。見た目はシャトルーよりも背の低い好々爺だったが、その知は大陸でも比肩する者がいないほどで、魔法は元より様々な学問や考え方を教えてくれた、偉大なる師であった。三年前に病を患ってからは薬を飲みながら騙し騙し公務を行っていた。無理が祟ったのか、二年前に引退し

た時には見る影もないほど痩せ衰えていた。もはや病魔に勝つ体力が残っていなかった。引退から数カ月後、彼は弟子たちに見守られて、満足げに笑って逝った。あの笑顔を思い出すと、未だに胸に込み上げるものがあった。

「如何にも、かなり昔の事だな。……ふふ」

おもむろに、ミユールが思い出し笑いをする。

「何ですか？」

「いやなに。奴も上層部に嫌気が刺していたと、以前ロディエールが愚痴っていたことを思い出してな」

うー、やぶ蛇。シャトルーはきまり悪そうに視線をあさっての方に向ける。

「そういえば、エアリアで教職に付いたとも話していたな。目を掛けていた愛弟子が二人共似た行動を取ってしまうとは、何とも」

「も、もうその話はいいですってばー」

楽しそうに話すミユールにシャトルーは困った顔を向けた。

その時だった。

ガチャッ

ドアのノブが回される音が響き、二人は反射的にそちらへ注目する。

「ん、帰ってきたか」

「ただいまー。あ、シャトルーさん、結構お久し振り。その節は色々のご迷惑をお掛けしました」

そう言いながらにリージェスは、野菜の一杯入った風呂敷を玄関

の隅に置いた。結び目からは泥の付いたネギや大根の頭がはみ出している。

「こんにちは、リージェスさん。思ったよりもお元気そうだなによりですー」

「買い出し御苦労であったな。疲れたであろう。少し休め。つと、その前にこれを渡さねばな」

ミユールは受け取ったばかりの手紙をリージェスに見せる。

「おつ、シルドさんからか。この前の返事かな？ わざわざ届けにきてくれたんですね。ありがとうございます」

「いえいえ、ついですからお気になさらずー」

リージェスはシャトルーに礼を言い、続いてミユールから手紙を手渡される。トントンと封筒の端を叩き、中の便箋びんせんを取り出した。

「リージェス、早速読んでみる」

「え、ここで……?」

「うむ、安心しろ。我らの他には誰も聞いておらぬ」

リージェスは何かを言おうとし、言葉を呑み込んだ。こういう厚かましさに関してはミユールに勝てない。頷いて二人の間の椅子に座ると、折り畳まれている紙を広げた。

拜啓 リーシェ様へ。先日の手紙、ありがとうございます。
無事お二人がそちらに辿り着いたと知って、ミシェルも我が娘も喜んでおりました。

傍らでは「娘？」とミユールが怪訝そうに呟いているのが聞こえた。娘と書いてあるのを見て、リージェスはああ、そういえばと思

い出す。以前手紙を出したとき、確かネフェリイをお嬢様と記したのだ。おそらくは話を合わせてくれたのだろう。

カタルスタでの生活が有意義なものであると聞き、ほっとしております。今回はこちらの近況をお伝えしようと思ひまして、筆を取らせて頂きました。

こちらは平穏な毎日を送っております。とは言っても、変わり映えしない毎日を送れるということは、ある意味幸運な事なのだと思います。戦乱の世ではむしろ少数派に属するでしょう。どうも人というものは、手の届くところにある幸せを蔑ろないがしにしてしまう傾向があるようですが、俯瞰ふかんしてみればその価値は決して低くはないと存じます。

娘の料理の腕はめきめきと上達しております。まだお二人に及ぶほどではありませんが、今度戻って来たときにびっくりさせてやるんだから、と息まいておりました。最近作った中では、ビーフシチューが会心の出来でしたね。ご近所にお裾分けしたら大好評でしたよ。お二人もあれを食べたらその進歩にさぞ驚くことでしょう。

リージェスは思わず口元に笑みが緩む。あのネフェリイがそんなに料理上手になっているとは、こちらもうかうかしていられない。ふと、自分に向く二対の視線に気付くが、何となく気付かぬ振りをする。

娘が率先して家事を手伝うようになり、ミシエルは負担が

軽減されたこともあって、ごく最近、唄を習い始めました。たまに近くのイアニス教会に赴いては、合唱団に混じって祈歌きかを唄っているようです。その関係で、イアニスの孤児院にも顔を出し、雑事をこなしたりもしているようです。本当、彼女の活力には驚かされ、同時に励まされています。

リージエスも同感だった。何せミシエルには？逆らっちゃいけないオーラ？が漂ただよっている。彼女は腕力とかではなく、生きる力に溢れている。近くにいたるだけで、周りを元気にしてしまう、そんな女性だ。

それで、肝心の私なのですが、屋敷からほど近い所にある、学校の教諭を始めました。屋敷の維持費も意外と馬鹿にならないので、出来るだけ貯蓄をしようと三人で決めたのです。

大勢の子供と接していると、その国の情勢というか、傾向が垣間見える節があります。大体教えている年齢は12〜14歳と言ったところでしようが、ゴルフレッドにはエアリアと比べ、どうも優柔不断な子供たちが多い様に思えます。勿論政情不安もあるのでしょうが、将来をしっかりと見据える子供が非常に少ない。会話をしている言葉に詰まりやすい。時間はかかるでしょうが、そういった子供たちをしっかりと導いてやる事が出来れば嬉しいですね。

これは、臆病な領主への皮肉も多分に籠こもっているな、とリージエスは苦笑する。

傍らでは、「こういう視点が何より大切なのだぞ」とミユールが説教口調で話していた。恐らくはシャトルーに言ったものだろうが、やはり聞こえぬ振りをする。

最後に、老婆心ながら申し上げておきます。以前、私の師に当たる人物が「力は行使する物に非ず、秘める物である」という言葉を頻繁に口にしておられました。

私も人物観にはそれなりに自信を持っています。おそらくは近い将来、リーシエさん、リージェスさんは一角の人物になるでしょう。ですが、貴方たちの発する光が増すほどに、それを嫉妬して良からぬ思いを抱く者も必ず現れます。そんな者たちに引き摺られることほど詰まらぬことはありません。努々（ゆめゆめ）この言葉、お忘れなきよう願います。

説教じみた言葉で締めてしまい恐縮ですが、私たち（特に娘）は、お二人との再会を待ち望んでおります。どうぞ日々を健やかにお過ごし下さい。

シルドゥバルソラ

流れるような、それでいて読み易い文字を見て、リージェスはシルドの達筆振りに感心した。次いで、最後の方に書いてある言葉に目を移す。

「秘める物、かあ」

「……リージェス。その手紙に書いてある言葉は、前賢王の口癖だぞ」

リージェスはミュールに振り返る。

「え……じゃあ……」

「シルド＝バルソラはロディエール、前賢王の元弟子だ。ロディエールが賢王になってから間もなくカタルスタを飛び出したと聞いておる」

「……ええっ、シルドさんが？　ってことは、魔法使いなのか？」

そんな話を聞いた覚えは全くないのだが、とリージェスは首を傾げる。

「何よりも当人が、その言葉を実践していると言う証明であるな。

それはともかく、？力は秘める物である？という考えには我も同感だ。過大な力は衆人にとって脅威にしか映らぬ。それに、己の目に映る物が必ずしも正しい形を投影しているとも限らぬ」

「そりゃまあ……確かに」

リージェスはミュールの意見を肯定する。

「よって、魔法を行使する際は、くれぐれも時と場合を選ぶようにな。シャトルーもだぞ」

『はい』

リージェスとシャトルーは素直に返事をした。

其の四十八　　成長への意志（裏）

カタルスタの宮廷魔術師、ヴィラーの裏切りが明るみになってから二週間後、国境の町に赴いていた大臣のルーモス、宮廷魔術師のレクストが王城に帰還する。時を同じくして、エステル・シャトルーが正式に宮廷魔術師に復帰し、穴の空いた上層部を塞ぐ仮処置を滞りなく終えた。

ヴィラーが帝国に通じていたことが明るみになると、カタルスタの世論は開戦論に一気に傾いていった。皮肉にも、ヴィラーが賢王に指摘したこと何割かは当たっており、心の裡に野望にも似た熱き感情を滴^{したた}らせている魔法使いが思いの外^{ほか}多くいるのだという事実を知らされることとなった。

長年に亘^{わた}って事無かれ主義を貫き通していた三人の大臣たちも、僅か一月の間に宮廷魔術師の二人が欠けるような事態に直面しては、ある程度譲歩した対応を迫られることになった。対岸の火事であれば高みの見物を気取れるが、今回の火災はご近所の火事であり、燃え移る可能性も十分に心配せねばならぬ。ルーモスはともかく、ヘツドリの力の一端を目の当たりにしたレドネー、緊急事態に眠りこけるといふ醜態を見せ、首輪の紐を握られているログステイオとしては、己の心算や感情は別にして、賢王の方針に協力的にならざるを得なかった。

賢王を初めとする上層部の彼らはヴィラーの始末を終えたもの、これで安心だ、と驕^{おご}っていたわけではない。カタルスタの王都は多分に広く、未だ諜報員を懐に抱えていると考えて行動した方が賢明であった。彼らは、帝国に軍備を進めていることを悟られぬように^{トリミイ・ワン}三重の頂に対抗しうる部隊を構築すべく、秘密裏に信頼のおける実

力者を集め始めた。それとは別に、反帝国勢力との連携を考え、あらゆる情報網を駆使して情勢の把握に努めていたのである。

884年 6月19日

賢王代行の折に使っていた執務室に呼び出されたレドネーは、ソファーに寄り掛かりながら葉巻を燻くゆらせていた。先端からはゆらゆらと、一筋の煙が天井に向かって立ち昇っている。

「……アステイス、フロイデ、がどういった人物か、か？」

レドネーが質問の内容を再確認すると、アグストウラは頷いた。

「ええ、お会いしたことがあるのですよね。是非お聞きしておきたいのですが」

帝国には腐った卵を、反帝国勢力には仄かな希望を投げ掛ける埋伏の反逆者、アステイス、フロイデは、以前、アルイールの側近としてカタルスタを訪れたことがあった。ただ、その頃のアグストウラは要職には就いておらず、直接的な面識がなかったため、会見に同席したと言うレドネーにその印象を訊ねることにしたのである。

帝国を駆除することを前提として動くならば、その後の予見について考慮すべきことは多い。アグストウラ自身が、あの広大な領土を治める気はさらさらなかった。しかし、帝国が滅亡すれば、或いは、滅亡には至らずともブラージウスが死すれば、当然他の誰かしらの上に居座ることになるだろう。その者がまたも野心に身を焦が

すような人物であれば、首がすぐ替わるだけでブラーヂウスを打ち倒す意味がそもそも薄くなる。荒れ果てた国土の復興に力を振るいつつ、他国と友好関係を築けそうな人物を考えねばならぬ、というわけである。ともすれば目先のことに向かいがちな思考を、指摘されずとも五年後、十年後に向けることができるアグストウラは、やはり凡人の器には収まらぬ存在であろう。

勿論、候補はアステイスⅡフロイデだけではない。例えば、人格者として名高いジルバートⅡミレンヤ、アステイスと同じくアルイールをよく補佐していたガツシュⅡエウゲン。或いはイアニス教団の法王グルツセルⅡイアニス。大穴として我らが大臣ボルジオⅡレドネー。その辺りならば、少なくとも指導者として不足はないと考えていた。

レドネーは眉間に皺を寄せ、ゆっくりと顎を引いた。長い白髭が微かに揺れている。

「会ったと言っても、かなり前のことではあるが。ふん……そうだな。一言で表すなら、優等生。理論より現実を優先し、アルイールの側仕えとして過不足なく働いていた。多分、論客としても食っていけるだろう。ただ、堅実な半面、大胆さに欠ける節もあったな。

……それだけにマリスノリスのニュースには少々驚かされたが」
煙を吐き出すレドネーに、アグストウラも同意を口にする。

「確かに、たつた二人による空からの奇襲。不確定要素があまりに多すぎて堅実とは言い難いね。三重の頂が残っていたら生き残れなかった可能性も高い」

その意味では、ブラーヂウスもまさか前線に一番近い町を狙われるとは思ってもしなかったのだろう。奇襲が前線から遠く離れた場所で行われたのであれば、いつの間にか蚊に刺されていた、程度のことでは済んだであろうが、目先鼻先をブンブン飛び回られたのであ

れば確かに見逃すのも難しい。

「しかも自らの手による同胞殺しだ。それを断行するは生半可な決意ではない。或いは、奴自身の身に变革を促す何かがあったのかも知れんが」

「……怒り、かな？」

もっともらしい意見を挙げた賢王に、レドネーは酷薄こくはくな笑みを浮かべ、身を乗り出すと灰皿に葉巻をギョツギョと押し付けた。

「さて、な。全ては推論に過ぎぬ。確かなのは、奴に帝国軍と同盟軍との戦いを阻止するという意図があった、ということくらいだ」

その部分についてはアグストウラも同意見だが、それだけが目的なら他にもやりようはあつたはずだ。なのに、何故アステイスⅡフロイデはあのような手段を選んだのか。もしかしたら、彼と帝国の確執は相当に根深いのかも知れない。そうだったとしたら、彼は勝利後に帝国の者たちをどう扱うだろうか。肅清しゅくせいの薄刃を躊躇ためらいなく振るうのではないか。

元々そういう気質を持っているのならまだしも、一時の感情であるような行為に至ったのであれば、安定した統治は望めないかもしれない。アグストウラはそう考えざるを得なかった。少なくとも現時点では、の話だ。

「しかし、正直助かった。帝国も東国の平定なしでは攻めて来ないだろうからね。これでいくらか時間が稼げる」

「それは相手も同じことであろう。貴様の考えが現実化される前に、幾許かでも帝国を弱体化せねばこちらの身とて危うくなるぞ」

アグストウラは、テルネシア帝国の目的がカタルスタの殲滅にあ

る、という自らの推論をレドネーに話していた。初めは否定的な見解を示していたレドネーだったが、それを裏付ける根拠の幾つかを列挙され、頷かざるを得なかった。

「わかつているよ。とりあえずはやれることだけでもやっておかないと、ね。あ、そうそう。話は変わるんだけど……」

「ん、まだ何かあるのか？」

レドネーは少々不服そうにアグストウラをねめつける。すると、彼は何故か困惑の表情を浮かべていた。

「……これ、見覚えあるかい？ 執務室を整理していたら本に挟まっていたんだけど」

そう言つてアグストウラが差し出したのは一枚の紙切れであった。レドネーは目を細めてそれを見 己の心中が一瞬にして凍りつくのがわかった。

「……何だ？ 一体、それは」

動揺をあからさまに表さなかったのは流石と言つたところだろう。レドネーは表情を殺して常識的な質問をたどしく返す。

「見たところ、何かしらの経費報告書らしいんだが。ドウブオーニユ社って確かアテライデの会社だよな。僕の記憶にはないんだよな、こんなの」

記憶にないのも当然である、とレドネーは思った。

「ふうむ。もしかしたら経理部署の書類が混じっていたのかも知れんな。戻るついでに、儂が届けておくか？」

あくまで自然に、と自身に言い聞かせ、逸る心を抑えて訊ねる。アグストウラは暫く考えていたが、それで由と判断したようだ。

「……うーん。じゃあ、お願いできるかな」

「わかった。確かに預かったぞ」

上がりそうな口端を噛み締め、レドネーはアグストウラから紙を

回収した。

執務室を後にしたレドネーは、10mほど歩いて周囲を見回す。誰も居ないことを確認してから掴んでいる紙に視線を送り、ホツと胸を撫で下ろす。

(……あ、危なかった。まさか一枚見落としていたとは)

密かに進めていた計画であった。老後の悠々自適な生活に花を添えるべく、レドネーは最後の裏金作りを模索していた。

どうせ自分の任期もあと二、三年がいいところだ。明るみになる頃には公務に付いていないだろう。

レドネーはほくそ笑むと、後々に金の卵に変わるだろうその紙を懐に入れ、そそくさとその場を立ち去るのであった。

目覚めてから一月ほどが経ち、何とか通常生活を不足なく行えるようになったリージェスは、ミュールに魔法の原理についての講座を受けていた。講義と言っても、黒板などはないため、テーブルに本を置いて椅子を並べ、寄り添うように行っていた。座学よりは剣を振るう方が性に合うリージェスであったが、そこは我慢しつつ、ミュールの言葉に耳を傾ける。

ミュールは初心者同然のリージェスに対し、非常に懇切丁寧な説明をしていた。

「魔力。これはすなわち身体の奥底に秘められている器アイルに入っている水のようなものだ。ちなみに、魔力は魔術用語では祈水アイルとも呼ば

れ、同じく器は祈杯コソチヤーンとも言う。魔力は魔法を使わなければ自然に漲みなぎっていくが、容量が少なければ当然直ぐ満杯になってしまふ。器の大きさは生来のものによるところが大きく、特に我みたいなエルフの器は概して大きい。これは修練によつて増やすことも出来る。修練とはすなわち、魔力を何らかの形で使うことだ」

リージェスは話の節目で質問を飛ばす。

「魔力を使うつて、魔法を使うつてことか？」

「実はそれ以外にも使い道がある。最も一般的なのは以前口にした充填フィールという技術だが、それは一先ず置いておこう。見たところ、お主は充填習得フィールにそれほど時間を要することはなさそうだしな。

で、話の続きだが、器に入れられた魔力の使い道を決める。それを使う魔法を選ぶということだ。だが、器に入れたままでは水は使えない。そこで、受け皿を用意する。それが精神力だ。魔術用語では意志力エニール」

「精神力、か。何か曖昧だなあ」

「……黙って聞いておけ。精神力は、一般的な集中力とも置き換えられる。初級魔法くらいなら、常人の精神力でも問題なく使えるが、上級魔法、はたまた無詠唱魔法という類のものになると、ちと事情が違つてくる。上級魔法と言うのは、たくさんの魔力を勢いよく器に注ぐようなもの。初級魔法であれば低位置から。上級魔法はより高位置からだ。注ぐ水が少なすぎればまともに発動しない。かといつて多すぎて容器から魔力が溢れるようだと、発動はするが零れた魔力が強烈な痛みとなつて術者を襲う。コントロールが難しく、魔力の消耗も多い」

「泣きつ面に八チだな」

「ゴホンっ。対して、無詠唱魔法は術式を省く分、それを補うために使用する魔力も多くなる。あまり頻繁に使つていけば、並の術者なら直ぐ枯渇してしまう。そうなるとどうなるか、精神力が一気に疲弊してしまう。具体的に言つと、頭が朦朧もつろつろとしてくる、或いは頭痛をきたす。そんな状態では普通の魔法すらまともに使えな

い

「なるほど」

「さて、もう一つ魔法を使うにあたって重要な作業がある。それが、魔力の純度を高める、ということだ」

ミユールは本のページを捲りながら説明を続ける。

実は、魔力には様々な不純物が含まれている。それは主に人の様々な雑念からくるものだ。勿論、不純物が含まれている状態でも発動できなくはないが、さほどの効果は望めない。そこで、言うなれば濾過ろかをするわけだ。一切の雑念を無くしたときこそ魔法は最高の力を発揮する。究極を言えば、無意識の状態で魔法を行使出来れば完璧らしいのだが、それはほぼ不可能。熟睡している人間に魔法を使え、というようなものだ。

「何も考えないというのは、また違うのか？」

リージェスが常識的な疑問を呈すると、ミユールは首を振る。

「というよりも、何も考えないという行為もまた、不可能に近いのだ。人は五感に訴えかけられている以上、何かしらのことを考える。例えば一生懸命絵を描いているとき。自然と筆の先へ視線は動いている。もし紙面に虫でもいようものならば即座に気付く。描き損じたら即消さなければ、という感情が働く。ぼーっとしている時もそうだ。微細ながら？面倒くさい？、？どうでもいい？、或いは？何も考えたくない？、といった具合にな」

「じゃあ、濾過ろかってというのはどうやるんだ？」

ミユールは説明を続ける。方法は三つ。一つは詠唱、一つは思念、今一つは修練。詠唱はそれだけで魔法を行使する助けとなる。言葉を紡げば聴覚に作用し、意識が明確な方向性を得るのだ。

思念は想いの力。愛憎、憤怒、覚悟など。それも一途な思いなれ

ば、無意識には及ばなくともその他の感情は濾過出来る、というわけだ。具体例を挙げれば、願望、決意などの感情は魔法の行使に相性が良い。逆に、心に雑念を生じる戸惑い、葛藤などの感情は魔法の行使と相性が悪い。優柔不断は思考の湖に波を立たせる、魔法の大敵なのである。

修練は言わずもがな。同じ作業を繰り返すことによって勝手に身体が動く、ということがある。例えば体術、例えば演奏。反復作業によって意志の伝達経路が太くなり、スムーズに行われるようになるのだ。

「その意味では、使用する魔法をある程度絞ると得られる効果は高い。しかし、レパトリーが少ないと、特定の敵の応対に苦勞することももある。要はバランスだ。そして、魔力を大量に使う上級以上の魔法に関しては、消耗が激しくて回数をこなすのが難しい。逆に基礎魔法だと、修練しても上級魔法の効果を上回るのは中々難しい。一長一短だ。まあ、どのみち先の話だが。詠唱、思念、修練が揃った時こそ、真の効果を発揮する。まずはこれだけ覚えておけ」

「……わ、わかった」

曖昧に頷くリージェスを見て、ミュールは可笑しそうな顔をする。

「ふふん、疲れてきたか？」

「い、いや。何と言うか、最近あまり身体を動かしてないから、どうも落ち着かなくて」

ふと、ミュールは壁掛けのカレンダーに目を移す。

「……そうか、お主が目覚めてからもう一月か」

「握力は大分戻ったよ。ただ、胸の痛みがまだ残っているけどね」

「ふむ、じゃあまだ暫くは無理をしてはいかな。あと一週間は座学にしよう」

ミュールの決定を聞いて、リージェスは自分の浅はかさを後悔した。

「ん、あ、あれ？ 痛みが……消えたぞっ。これでいい、何でもないっす」

ミュールの冷やかな横目線を受け、リージエスはあっさりと屈する。

「一つ断っておくが……、この講義、お主の妹御は滞りなく終えておるぞ」

「……うぐ」

リーシエを引き合いに出されては、リージエスも態度を弱める。ミュールは並々ならぬ観察力で、一月ほどの間にそれを見抜いていた。そして再び、競争心、対抗心を煽る言葉を口にする。

「先日もお主に負けぬようと、辞書を片手に難解な本と睨めっこしていたようだ。つい先日、密かに様子を見にいったのだが、格段に進歩しておったの」

「……あう」

呻くことしか出来ぬリージエスに、ミュールは精一杯謹厳な表情を作り、本心を隠して不安を煽る。

「無論、実技は講義よりも重要であり、得る物も多い。しかし、最低の理論を学ばずして実践するのは中々、な。まあ、後の成長に破綻をきたしても良いのであれば話は別だが。もしかしたら、リージエス。お主……本当にリーシエに抜かれて」

「よ、よし、休憩終わりっ」

そそくさと席に付くリージエスを見て、ミュールはしめしめとほくそ笑む。己の守ってきた妹にあっさりと上を行かれるのは、やはり我慢がならぬのであろう。

(……さて、どんな色に染めようかの)

彼女にとつて、純粹な剣士に――から魔法を教えることは初の試みであった。リーシエほどの魔法の才があるならともかく、素人を――から魔法使いとして育てるのは難しい。それでも、しっかりと理論を学び、剣の才を活かせるような魔法を数個でも習得すれば、死の淵から生還した驚異的な生命力と相まって万能的な強さを発揮するだろう。そして、魔法の理論を学べば魔法使いを相手にした時の戦い方も自ずと学べる。相手がされたら嫌なこと自ずとわかる。その知識は、帝国に与くみしたカタルスタの魔法使いたちを相手にする上で、非常に役に立つはずであった。

ヘッドリイとの戦いで完膚なきまでに叩きのめされ、今の己の立ち位置を自覚したリージエスとリーシエは、より貪欲に己の成長を求めようになつていった。エアリアでウィルが見出したリージエスの才は、リーシエの魔法の才と共に、異国の地カタルスタで大きく花開き始めたのである。

第三章 END

(三) (四) 幕間 (垣間見えた心 (裏))

884年 10月2日

何かしらの物音に反応し、目が覚める。寝室のドアは完全には閉められておらず、その隙間からは灯りが帯となって漏れ出ていた。顔を横に向けると、隣に寝ているはずの少女の姿がない。窓の外からは鈴虫の鳴き声が微かに聞こえてくる。

(……こんな遅くに、何やってるんだ?)

リージェスのぼんやりとした頭の中に、疑問が割り込んでくる。そのまま寝てしまおうかとも思ったが、一度起きてしまうと中々寝付けず、ついに好奇心が勝った。ゆっくりと身を起こし、内履きを履く。歩く度に、板張りの床が微かに軋む音を立てる。そっと居間の様子を窺い、目を丸くした。

ミュールは、酒を飲んでいた。タンブラーグラスに大きめの氷を入れ、オンザロックで半透明の酒を、煽るように。

どうしようかと迷ったリージェスであったが、彼女の容姿が子供であることを加味し、躊躇いながらも声を掛けた。

「な、何やってるんだ？」

口に出した後で、リージェスは己の台詞を省みて落第点を付けた。そんなの、見ればわかるじゃないか。案の定、ミュールはグラスから口を放すと、間の抜けた質問を投げかけたリージェスをどこか呆

れた表情で見た。

「……見ればわかるであろう。寝酒だ」
ナイトキャップ

「でも、酒なんて飲んだことあるのか？」

見た目は子供なのに、という言葉は端折はしよったものの、その口調で十分に意図することが読み取れたのだろう。ミュールは不快げな顔を向けた。

「当たり前だ。……飲まなきゃ寝付けぬ夜とて、たまにはあろう」

うーん、その台詞をその声と容姿で言われてもなあ。リージェスは戸惑いの表情を隠せない。ボトルからグラスに酒を注ぐ所作も、しばしば飛沫しぶきが跳ねていてどこか危なっかしい。不意に、とある二人の酒乱を思い出し、背筋に冷たいものが伝っていく。

「もし良かったら、俺が注つごうか？」

「……ん、……お前はいける口か？」

飲むのに付き合えということだろうか。リージェスは少し考えてからこくりと頷き、台所の水切りカゴからコップを一つ拝借した。

幸いなことに、というべきか、ミュールはかなり酒に強かった。既にボトルを二本開けていても少し顔が赤らんだかな、くらいの反応だった。ミュールが空になったグラスを「んっ」と前に差し出す度に、リージェスはトクトクと、グラス半分くらいの酒を注いだ。その度に氷がグラスの中で踊り、カラリと乾いた音を立てる。酒を飲む姿は違和感ありまくりだが、注つがせる姿がすっかり板に付いているのは何故だろうか。リージェスは首を捻る。

「……ふん。久方振りに飲んだが、意外と酔えぬものだ」

そのペースで久方振りつてか。どんだけウワバミなんだ。
リージェスは小さな酒豪に舌を巻く。

「……リージェスは、親はいるのか？」

不意打ちを食らったリージェスは一瞬呆け、続いて顎あごに手を添える。

「……俺がここに存在する以上は、多分いるんだろうけれど。生きて
いるかはわからない」

「そうか。……会いたいと思ったことはないのか？」

「……それも、わからない。小さい頃は生きていくだけで必死だったから、会いたいと思う暇もなかったっていうのが正直なところかな」

「……妹御を養うのに、か」

リージェスが眉を上げる。

「そんなことまで知ってるのか。……そう、だな。どのみち顔も判らないから確認しようがないし、もうスッパリ諦めてるんだ。でも」

「

リージェスは言葉を切って天井を仰ぐ。僅かな間、耳道が外にも開放され、消えていた虫の音が復活する。

「でも、何だ？」

「俺もリーシェに色々な物を与えられているからさ。あいつの嬉しそうな顔を見るだけで、疲れとか吹き飛ばし。だから……、うん。他人がどう見ようと、自分では悪くない人生だと思ってるよ」

健全な生き方だ。ミュールはポツリとそう言ったが、リージェスの耳には届かなかった。

「ん、何か言った？」

「いや、お主のような人間が世の大半ならどんな世になるのか、と思っただけだ」

物憂げな表情を見せるミュールに、リージェスは首を傾げる。

「いやー……流石に成り立たないんじゃないか？」

「自覚しているなら尚よし」

ミュールは微かに笑う。

「ちえっ、結構ミュールって毒舌だよな」

「……そうしないと、舐められるからな」

「何で？」

本気でわからないといった様子のリージェスを見据え、ミュールは少しきまり悪そうに呟く。

「……エルフだからだ」

「だから、何でエルフだと舐められるんだ？ そっぴや、キールも似たようなこと言ってたな」

「キール？」

「とある傭兵ギルドに所属している、俺の親友さ」

そっぴや、あいつともよく飲んだっけなあ。リージェスはエアリアやゴルフレッドでの、キールとのやり取りを鮮明に思い出した。確か、キールも相当に酒に強かった。エルフの特徴なのだろうか。

「親友、か。違う種族に対してそう思えるのは、ある種の才能だな」

「……違う種族、か。そんなに種族の垣根って大きいものなのかなあ」

リージェスの自問に、ミュールは溜息を吐き出した。

「……ん、もしかして気に障ったか？ もしそうなら悪かった」

「……いや、お主のせいではない。そういった疑問を持つ者が現れ

ることは、喜ばしいことだ。ただ、大概の人間が亜人を見下している現状を思うと、な」

そう言いながらも、ミュールは面白くなさそうに、煽るように酒を飲む。

「昔っから、それがわからないんだよな。何で見下すんだろう」

「古くから支配者たちは身分階級を正当化するためにそういった価値観を浸透させてきた。その末路が今の亜人迫害だ。我も人間ではないから、それを抵抗なく受け入れられる者たちの心理まではわからぬ」

ミュールは少しだけ嘘を交えた。その答えは彼女なりに見当を付けていたのだ。

「正当化……。つまり、人間に優劣を付けるために、敢えて亜人をその下に置くってことか？」

「大方、そのようなところだ。支配者の原理は目下のところ、民たちに自分よりまだ下がいる、と思わせるのに腐心ふしんすること。亜人の迫害は、反発を和らげるための呼び水にされているに過ぎぬ。……それが亜人にどれほどの苦しみをもたらしているのかは、どうでもよいことなのだ」

過度の劣等感というものは革命の火種となり得るものである。それを忌避するが故に、支配者階級は、あまり角が立たないように、しかし民を抑えつけるのを目的として、亜人を淘汰とつたするよう仕向ける。詰まる所、亜人を差別するのは、他の人間を差別しやすくするためにに行っているに過ぎぬことであり、殆どの人間はその事実じじつに気付くこともなく、その方策に便乗している。王侯貴族は民を顎あごで使い、民はその不満の捌け口を亜人に向けて不満ストレスを解消する。負の連鎖の出来上がり、というわけだ。少数勢力は、多数派容認の社会に

置いて、支配者階級への敵愾心を逸らすのには、実に都合のよい存在なのである。

リージェスはやや憮然とした様子で、自分のグラスに酒を並々と注ぐと、ぐいっと飲み干した。

「ふう。……何だか面白くないな、それって。何とか覆せないのか？」

「少なくとも、現行のテルネシアの身分制度で亜人の差別をなくするのは不可能だな。幸い、カタルスタでは亜人への差別意識がテルネシア帝国に比べて薄い。それは潜在的に帝国民を差別しているからであり、知性と知識を持つ者を尊ぶ風潮のためだ。だから、今の生活にはそれなりに満足しておる。周りの者たちも我がエルフであるということに殆ど意識させずに接してくれるからの」

亜人であるが故の劣等感。リージェスにはそれが馬鹿馬鹿しいものに思えたが、今までに歩んで来たであろうミュールの道程を想像し、口に出すことは憚られた。何より、尊大に振舞うミュールにも鬱屈した感情があることが意外であった。

「……ふん。少し飲み過ぎたか」

リージェスの心の機微を表情から読み取ったのだろうか。喋り過ぎた、と言い捨て、ミュールは椅子から立ち上がり　　ふらりとよろめいた。

(……っ)

半ば無意識に、リージェスが充填を駆使し、テーブルの脇に滑り込むようにして前のめりに倒れかけたミュールの両肩を下から支える。銀色の柔らかい髪が垂れ下がり、リージェスの頬を撫でた。

(……軽)

ミュールの小さな身体は、片手でも難なく支えられそうだった。次いで、気遣う言葉を口にする。勿論怪我ではなく、酔いの方だ。

「……当たり前だ。我を誰だと思っている」

「……へ？ ……ミュール、だろ？」

果たして、リージェスの返答は彼女を納得させるものだったのだろうか。そのままの姿勢で数秒ほど黙考していたミュールは、僅かに頬を緩ませる。

「……お主は、何かが欠落しておるな。……だが、その不完全さが眩^{まぶ}しくもある」

「……え？」

訊き返すリージェスに、ミュールは赤い目を細める。

「……聞き流せ、……酔っ払いの戯言だ」

ミュールはリージェスの腕を掴みながら、たどたどしくも体勢を立て直す。そして、そのままふらふらと寝室のドアに向かい、ノブに手を掛け、僅かに振り向く。

「……今の充填^{フィイル}は……ほぼ完璧だった」

「……え、ほんとか？」

ミュールは少し考える素振りを見せ、首を振る。

「……違うな。……その前に、庇ってくれてありがとう、だ」

か細い声で、ミュールはほしよほしよと礼を言った。

「……あ、いや、どういたしまして」

何故かリージェスの方が頭を下げる。ミュールはそれを見て、どこか可笑しそうに微笑んだ。

数分後、リージェスが後片付けを終えてから寝室に戻ると、ミュールは既にすやすやと寝息を立てていた。リージェスはそつとタオルケットを掛け、ミュールの乱れた髪を優しく梳とく。こんなことをしたことがバレたらきつと怒られちゃうな、と思いながら。

ややあつて、自分のベッドに身を横たえたリージェスは、先ほどのミュールの言葉を反芻はんすうし、自問自答する。

(……俺が……欠落。……でも、一体何が?)

答えの追及に数分を費やした頃、酒気に呼び寄せられた睡魔まふたが瞼を閉じようとする。リージェスは諦めの溜息を吐き、棚の上の照明に手を伸ばした。

プロローグ く先帝の崩御く（表）

医師は治療室から廊下に出てくると、不安げな顔をしている男たちに白眉を潜め、沈痛な面持ちのまま、力なく首を振る。

「……力及ばず申し訳ない。……午前2時33分　　逝去されました」

その言葉を耳にした将校たちは、ある者は目を真ん丸に見開き、またある者は支えを失ったかのように椅子へ崩れ落ちた。名君と謳われた第三十七代皇帝、テルネシア帝国皇帝、アルイール「テレジア」の崩御が伝えられた瞬間であった。

廊下には重苦しい雰囲気が漂っている。黒い軍服に身を包んだ将校達が、特別治療室の前の廊下にある長椅子にズラリと雁首を並べていた。貧乏揺すりをする者、葉巻を吸う者、大きな身体を小さく振るわせる者、その所作は十人十色だ。

ただ一つ共通しているのは、誰もがその表情に焦りの色を浮かべている事だった。

「……おいたわしい。病気一つしなかった陛下が、よもやこんなに早く……」

ややあつて体格の良い老人が、信じられないといった風体で呟いた。それはおそらく、ここにいる者たち全員の心持ちを代弁したものであった。

大陸中南部の地、コルトパの町にてアルイール皇帝は壇上で演説中、突如倒れた。それから今日まで、僅か数日を跨またいだけである。普段から体調に人一倍気を配っており、勇名高きことでも知られた

彼が、こう言つては何だが、このような陰気で小さい病室の中で生涯を終えようとは、一体誰が予測しえたであろう。

将校達は暫くの間俯いていたが、思い出したかのようにハッと顔を上げる。

「……な、何か言い残されたことはないのか？」

「そ、そうだ……。おい、ご遺言は？」

主君が死んだと聞かされた動揺のせいであろうか。何人かの将校達は地に足が着かぬ様子で初老の医師に詰め寄る。

「いや、それは」

「あるのだな？ あるのであろう？」

言いよどむ医師に対し、将校達は物凄い剣幕で迫る。哀れ、壁際に追い詰められた医師はそのまま潰されかねぬ勢いであつた。

「ですから、その」

「お主等、見苦しいにも程があるぞ」

医者 of 言葉を遮り、治療室内から又ツと現れたのは、やはり同じような軍服を着た男だつた。茶褐色の短髪、鼻の下にのみ生えている色濃い髭、精悍な顔つきをしたその男は、立ち尽くす面々を横に舐めるように一瞥した。

「……エウゲン……将軍」

「仮にも、第一線で軍と政治とを司つてきたお主等がそんなことでは、アルイール様も安心してあの世に旅立てぬぞ。何のための側近であるか？」

「……確かに。……面目ない、気が動転してありました」

ガツシュ＝エウゲン将軍に窘められた将校達は顔を落とし、謝罪の言葉を口にする。それを見届けるとエウゲンは深く息を付き、言葉が続ける。

「……残念ながら、あれから陛下は一度も意識を取り戻すことなく亡くなられた。本来は遺言書があれば一番なのだが……」

俯いていた体格の良い老人が顔を上げる。

「あるとすれば……、フリーユール城の陛下の私室かのう」

「……ああ、なるほど。確かにエルゲート將軍の指摘された通り、その可能性は高そうですね」

他の将校達も一様に、同調するように頷いている。

「あの……、一般どもに対してはどう説明してやりましょうか」

背の低い中年の小男が、面々にお伺いを立てる。エウゲンの太い眉がピクリと上がる。小男の名はブラームスといい、差別観が強すぎて、それを由とせぬアルイルから遠ざけられていた文官である。言動の節々から、周りの者にもそれがはつきりと読み取れるのだが、質の悪い事にブラームス本人がそれに気付いていなかった。

「何を言うのかと思えば……。民たちへの演説中に突如倒れられたのだぞ、今更隠したとて直ぐにバレよう」

エルゲートの言い分に納得しているのかいないのか、ブラームスは額の汗をハンカチで拭いながらも曖昧に頷いた。

「どちらにせよ、明日の紙面が出たら大変なことになりそうだな」

エウゲンの低い咳きに、皆一様に顔を伏せる。国の元首が亡くなったのだから大騒ぎになるのは間違いない。殊更に、アルイルは稀代の名君と謳われてきたのである。テルネシア帝国を支えていた大黒柱が倒れては、大騒ぎ程度で済むはずもなかった。彼には子供が六人おり、その何人かは成人している。遺言が見つかれば問題ないが、もし見つかなければ争いに発展しかねない、というわけで

ある。

「ご子息たちは、既にこちらへ？」

エウゲンの問いにエルゲートが頷く。

「アンドレイ様は間もなく到着されよう。死に目に会えなかったのは無念であるが……」

エルゲートの言葉を最後に、廊下に束の間の静寂が訪れた。会話が滞るのを見計らっていた医師が、ようやくその口を開く。

「この暑さですから、後でのご遺体には防腐処理を施させて頂きます。その前に皆様、どうぞご対面を」

医者顔に一瞬視線が集中し、一同は一斉に重い腰を上げた。

テルネシア帝国がテレジア大陸の平定を成してから三百年余り

882年7月、稀代の名君と謳うたわれた時の皇帝、アルイールⅡテレジアは外遊の最中に突如意識を失い、遺言を残す間もなく四十四歳の若さで急逝きゅうせいする。当初、帝都の私室にあるのでは、と期待されていた遺言書は、結局見つかることはなかった。予期せぬ後継者問題に見舞われた帝国は、側近達の様々な思惑をほらみ、僅か二ヶ月後の882年9月上旬、二十七歳の長男アンドレイⅡテレジアと二十三歳の三男ブラージウスⅡテレジアとの間で内戦が勃発。テレジア大陸を東西二つに割り、帝国の覇権を懸けた戦いが始まる。日和見主義か、或いは野心によるものか。どちらにも与くみさぬと決めた都督達の治める都市は、各々が小国として独立し、皇子達の戦いの行

方を、固唾を呑んで見守っていた。

開戦当初は、長男アンドレイ率いる東軍がその有り余る物量を背景に戦いを優位に進めていた。ところが戦が佳境に入った頃、東軍領土の東端に位置する商業都市アテライデが周辺の都市群と共に突如分離独立を宣言、アテライデ共和国を建国。劣勢に立たされていたブラージウス軍は好機とばかりにアテライデに使者を送り、後方援助の密約を結んで挟撃を画策、一転大攻勢に打って出る。

食料物資の調達の大部分をアテライデに頼っていたアンドレイ軍はその供給を断たれ、大人数が仇となつて食糧不足に陥り、次第にブラージウス軍に押され始めた。打開策を図ろうと、僅かな供を連れて目ぼしい中立国を説得しに出向いていたアンドレイであったが、年が明けた883年1月、大陸東部の中立国の一つ、マリスノリスにて何者かに暗殺されてしまう。アンドレイの死によって東軍は自然瓦解し、一旦は戦乱が収束したかに思えた。

ところが、僅か二カ月後の883年3月、ブラージウスは自軍勢力が治めるテレジア大陸西部の領土一帯を以つて新生テルネシア帝国の建国を宣言、新皇帝を名乗ると同時に独立勢力を全て賊軍と見なして宣戦布告。大陸中西部の大都市マビアビを戦略拠点として、齒向かう者を全て滅ぼさんと、各国への侵攻を宣言する。

そして、3月27日。將軍職に昇格したコステイックブラームスが司令官に任じられ、マビアビに程近い大陸北西部の小国、エアリアを制圧するべく進軍を開始する。

後に？テレジア戦役？と名付けられる、長きに亘る戦乱の幕開けであった。

其の一　　〜先帝の懐刀（表）〜

大陸西部の大都市マビアビ。新生テルネシア帝国は帝都フリューゲルの次に大きなこの街を戦略拠点とし、敵対勢力の制圧に乗り出していた。西は森林と山脈地帯、北を大河に囲まれたこの街は、近くの鉱山から良質な貴金属が、森からは木材が取れ、古くから産業都市として名高い街であった。北の大河を船で北西に下っていけば、クルート、そして帝都フリューゲルに辿り着く。

アルイール皇帝の三男であるブラージュウス皇子は、父よりこの素晴らしき街とその周辺の領地を与えられていたが、この街はアルイールの治めていた帝都フリューゲルから少し離れていた。

対して、長男のアンドレイ皇子は東部のシャンテールという、マビアビには及ばないものの、やはり大きな街とその周辺を領地として与えられていた。そして、彼はここ一年程はアルイール皇帝の命令で帝都フリューゲルに赴き、その下で働いていた。

そういった経緯もあって、アルイールの指名する後継者はアンドレイ皇子だろう、と側近の誰もが噂していた。

ところが、アルイールが突然病に倒れ、遺言を残すこともなく逝去したため、側近達の思惑が錯綜する。今までアルイールに遠ざけられていた者達が自らの権力を強めるために、こぞってブラージュウス皇子に取り入ったのだ。

彼等はブラージュウス皇子を盟主と仰ぎ、長男のアンドレイ皇子を口汚く罵ると共に、ブラージュウス皇子に後継者の名乗りを上げるよう迫る。それがどれだけブラージュウス皇子を喜ばせたかはわからない。

いが、元々兄のアンドレイ皇子を憎んでいたブラージウス皇子は、アルイールの葬儀後、間もなく兵を集め始める。

敵対関係の構図は明確になり、アンドレイ皇子もやむなし、と帝都フリーユゲルを本拠として兵を募り、ブラージウス皇子に相對する。

そんな中、やむにやまれぬ事情があつてどちらかに付いた者もいた。例えば、勇猛名高きジルバート・ミレン將軍は、姉がブラージウスに嫁いでいたためブラージウス側に付いた。他にも、家族を逃がす準備を作る暇がなかつた者、部下達の出自がどちらか寄りだつた者等。

將校達のそんな思惑や葛藤をはらみ、帝国を東西に分けた同士討ちは、アンドレイ皇子の死によつて決着を迎える。

そして、アルイールが死んだ当時、二千の兵を率いて辺境の蛮族討伐を任されていたある將校も、西軍に付いた一人だつた。

883年 3月25日

マビアビでは、敵対勢力への侵攻計画に関する軍議も大詰めを迎えていた。既にブラージウス率いる皇軍以下、二つの軍はクルートへ向けて本日出立している。そして、後方の憂いを無くさんと、北西の中立勢力エアリアの攻略を受け持つ司令官にコステイ・ブラームス將軍が抜擢された。

「では、エアリアへの侵攻はこの面々で行う事とする」
太った身体を揺すりながら、ブラームスは忌々しげにそう言い捨てる。ブラーヂウスから出征に命じられた将校の中には、どうしても気に食わない男が一人いた。

「了解いたしました」

第三軍大隊長、ガツシュ＝エウゲン將軍。ブラームスと同じく貴族出身であり、先帝アルイールの御代から將軍職についていた中々話のわかる男。何かと色々便宜を計らってくれる事もあり、世渡りの上手い奴と位置づけている。

「了解した」

第四軍大隊長、ライエン＝ベルガモット將軍。父親は貴族だが母親は平民の私生児。私生児とは、婚姻の関係にない男女間に生まれた子供の事である。父の血はそれなりの名門だが、やはり平民の血が混じっているせいなのか、どこか野蛮で扱いにくいところがある。

そして

「……」

「何だ、言いたいことでもあるのか？ フロイデ」

沈黙を守っていた赤毛の若い男が、向かいにいるエウゲン將軍に話しかけられる。

そう、名前を口にするのも腹立たしい第六軍大隊長、アステイス
「フロイデ準將軍。両親共に平民の出自のくせに、少年の頃から先
帝アルイールにいたく気に入られ、大した功績もないままに秘書官
に抜擢され、史上二番目の若さで一軍を任され、先帝の懐刀と一目
おかれた。

目上を敬うという事を知らず、役に立たぬ意見を口にしていちい
ちお茶を濁す忌々しい奴。にもかかわらず、帝国での人気は私にも
匹敵する勢いなので尚更納得がいかない。東軍に付いていけば、遠
慮なくその首を引っこ抜けたものを。

と、これがブラームスから見た、この場にいる三将校の人物評だ
った。

アステイスはエウゲンの問いに暫く目を閉じていたが、考えがま
とまったのか、ゆっくりと目を開く。

「では、一つだけ。……エアリアはそこまで大きな街ではありません
ん。それに、かなり入り組んだ街ですから騎兵の運用が難しいかと
出来れば比重を歩兵か弓兵に傾けた方が宜しいかと存じます」

それを聞いて、またか、とブラームスは苦々しげな顔をする。ど
うやら、彼がこの男に提言されるのは日常茶飯事のようだ。

「馬鹿が、騎兵は逃亡した敵を逃がさぬために連れて行くのだ。特
に、エアリアのネフェリイ姫は名の知れた美姫だからな。体よく捕
らえられればブラージウス様もお喜びになられる。お主はそんな事
もわからぬ無能なのか」

(敵を逃がさぬため、か)

少数が相手とはいえ、既に勝った気でいるブラームスにアステイ
スは呆れた。たった一人を捕らえるために一万の騎兵を連れて行く
とは、この男は相当に数学……いや、算数を苦手としているようだ。
つい、一年程前まで先帝に嫌われて遠ざけられていた男が、今や将
軍を拝命しているとは、いやはや世の中先の分からぬものである。

ブラームスを援護するかのようになり、エウゲンが口を添える。

「フロイデ。貴公は、新生テルネシア帝国になってからは、軍を任
されてまだ間もない身であり、この中で最も序列が下だ。わかつた
ら少しは口を慎みたまえ」

エウゲン将軍が鼻で笑いながら^{たしな}窘める。ブラームスはエウゲンに
強く同調し、得意げな顔に戻っている。

（この男もどこか変わってしまったな……）

向かいに座っている、きつちり髭をそっている茶褐色の短髪男を
見て、アステイは悟られぬように溜息を付く。

ガツシュッエウゲン将軍と言えば、数々の功績を挙げて先帝に尽
くしたとして、兵達の信望をそれなりに集めていた男だ。アステイ
スの元上司でもあり、同じ軍にいたこともある。先帝アルイールが
死ぬ前にも將軍職を務めていて、ブラーレジウスの御代になってから
も將軍を務めているのは今やエウゲン一人である。

「……申し訳ありません。以後気をつけます」

仕方なく、アステイは折れる。仮に突っぱねたところで、提言
が聞き入られるとも到底思えなかった。

「ふん、わかれば宜しい。では二日後にエアリアへ向けて出立する。

ゆめゆめ準備を怠らぬようにな、フロイデ」
ブラームスの意味不明な名指しを最後に、軍議が終了する。

宿舎に戻り、自分の部屋の鍵を開ける。將軍クラスには広い居間付きの2LDKが与えられている。20畳程ある殺風景なリビングに入ると、そこには既に一人、先客が客椅子に座っていた。

「おかえりなさいませ。……随分と浮かない顔をしておられますね。どうなされました？」

副官のメリッサ・ウランダーが目を細めて疲れた様子のアステイスを見る。

アステイスの副官を任されて三年目になる彼女は、金髪のショートカットに目鼻立ちの整った顔、面倒見の良い性格で若い軍人達から根強い人気があった。出自は名門の貴族であるのだがどこぞの誰かと違って差別観はなく、平民出であるアステイスの命令にも嫌な顔一つせずに従う優秀な副官だ。

「そうかもな。正直、自分がわからなくなった」
アステイスはそう言って顔を伏せる。

「……自分が、ですか？」
細い眉を少しだけ上げて、メリッサはアステイスが二の句を継ぐのを待つ。

「私は、何故こんな所にいるのだろう。……本当にここは、自分の

いるべき場所なのか」

亡くなったアルイール様は、こんな私を見てどう思っておられるのだろうか。さぞかし嘆いておられるのではないだろうか。アステイスよ、そのざまは何だ、と。

エアリアへの出征を命じられ、また同胞を殺す戦いが始まるのか、と憂鬱になっていたアステイスは顔を伏せる。

「……アステイス様」

普段はあまり笑みを絶やさぬアステイスのその様子に、メリツサは心を締め付けられた。

先帝アルイールが倒れた時、アステイスは大陸南東端のサヴァリという地域にて、二千の軍勢を率いて蛮族の討伐を命じられていた。主君が倒れたと知った時点で、慌てて討伐を切り上げて帰還しようとする準備を進めたアステイスだったが、その三日後の知らせでアルイールが亡くなったと知らせが届く。訃報にショックを受けながらも、サヴァリからコルトパに兵を率いて戻るまでには一月半近くを要し、その一週間後にはアンドレイ皇子とブラージュウス皇子の戦争が始まってしまったのである。

その頃には、東軍と西軍で嘗ての輩達^{トビ}は真つ二つに分かれており、西軍には軍学校で先輩後輩の間柄であるジルバート・ミレン將軍、元上司のガッシュ・エウゲン將軍も付いていた。そして、クルートに帰還しきれていなかったアステイスも二者択一を迫られる事にな

った。

アステイスの心持ちとしては当然、品行方正なアンドレイ皇子に付きたかったのだが、それを簡単には許さぬ問題が一つあった。アステイスの率いていた二千の兵の殆どが、西側の街の出身者だったのだ。

彼等の多くは西軍の支配下にあるクルートの居住区に家族を置いてきていたため、アステイスが東側に付けば、残虐で知られているブラージウス皇子にその家族等がどんな目に合わされるかを危惧せねばならなかった。

皮肉にも、敵対するのがアンドレイ皇子なら、その人の良さから、兵の家族にまでは手を出さないだろう、という甘い算段が出来たのだ。

ならば少数の部下と共に、とも考えたアステイスだが、別の理由でやはり断念した。メリツサの父親が既に東側に付いていたためである。直接戦う事はないにしても、親子同士を敵対関係にさせるのにアステイスは後ろめたさを感じた。

他にも旧知の二將軍を敵に回す心苦しさを、瑣末な理由なども重なり、アステイスは苦渋の決断で西側に付いた。

最終的にアンドレイ皇子はマリスノリスにて暗殺され、東軍が瓦解してしまったのだからこちらについて正解だったのかもしれない。そう思っていたのも束の間、その二カ月後にブラージウス皇子が各国への宣戦布告を口にしたのを耳にし、アステイスはブラージウス皇子についた自分の選択を初めて心から悔いた。意図がどうあれ、大陸を戦乱に巻き込む手伝いをしてしまった事に変わりはないのだから。

落ち込んでいるアステイスに、メリッサは優しく声をかける。

「……人である以上、常に正解を選べるわけではありませんわ。それに正解がない問題だってあるのですし」

アステイスはゆっくりと顔を上げる。

「でも、ご安心くださいな。貴方様がどんな選択をしようと、一人はここに、必ず味方がいますから」

メリッサは自分を掌で示す。

その眼差しは温かく、心強く、掛けられた言葉は心地良い余韻を伴ってアステイスの琴線にそっと触れる。

アステイスはたとえ微笑みを取り戻す。

「はは、頼もしいな。まるで熱烈なラブコールのように聞こえたよ」
その言葉を聞いて、メリッサの顔は熟れた林檎のように赤く染ま
った。

其二　～エアリア陥落（表）～

883年4月12日より開始された新生テルネシア帝国軍によるエアリア攻城戦は、兵数が攻撃側の帝国軍三万に対し、防衛側のエアリア軍は僅か千五百余りと。軍上層部の目算では三日程で片が付くと見られていた。実際に城下町の制圧は一両日中に終わったため、二日目の早朝、帝国軍はそのままの勢いでエアリア城へ攻め入る。

ところが、堅牢で名高きエアリア城に立て籠もったエアリア軍は帝国の将校達の想像を上回るしぶとさを見せ、再三に亘る帝国兵の攻撃を幾度も跳ね返し続けたのである。

883年　4月17日

エアリア城下町、テルネシア帝国軍営

城門付近での戦闘は一層激しさを増していく。前線から少し離れた後陣で見ている敵兵の抵抗は鬼気迫る物を感じさせた。なんとか城への侵入を試みようとする先方軍は、たちまち四方八方から無数の矢で貫かれる。

城門に陣取る敵兵達の総数はこちら側の攻撃兵に対してずっと少数ではあったが、指揮官の用兵が上手いのか、かなりの粘りを見せていた。

「ええい、まだ落ちぬのかっ、もう開戦から六日も経っているのだぞっ。いつまでもこんなところで引っかかっていたら、ブラージュウス様に大目玉を食らってしまうっ」

司令官のブラームス将軍は、かなりたてながら親指の爪を噛んでいる。苛々が募るばかりの太っちょ司令官に、周りの兵達はいつ気まぐれに斬られないかと戦々恐々していた。

「ベルガモット将軍にも困ったものだ。五千もの兵を預けられながらこの体たらくとは。もっと頭を使えばいいものを……ねえ、ブラームス様」

ブラームスの副官ネイラーも同調する。ブラームスに良く似た雰囲気を持つ、顎の割れた中年の男は、将軍が損ねた機嫌を少しでも治すための心づもりのようだ。

「全くその通りだ、良くわかっているじゃないか。……いや、待てよ」

折り畳み椅子に座っていたブラームスは突然立ち上がり、陣の中を落ち着き無く、楯円を描くように歩き回る。

「……どのみち、このままでは埒があかぬ。よし、例の魔道部隊に召喚を要請せよ、合図と共に、城門周辺の建物を破壊するよう伝えるのだ」

ブラームスの命令に、伝令兵は一瞬言葉に詰まる。

「え、し、しかしながらベルガモット軍の帝国兵達もかなりの数が城門付近で戦っておりますが」

「それがどうかしたか」

「……え」

戸惑う伝令兵を前に、ブラームスはわからん奴だ、とでもいいたげに首を振る。

「なればこそ有効であろうが。相手方も大勢の味方を犠牲にするよ

うな戦略をこちらが採るとは思っまい。これぞ必勝の策だ」
そう言っつてブラームスは不敵に笑う。

どうせ前線を任されるような兵士は一般階級、つまり貴族の出自ではない。そのような兵士達がいくら死のうと、またどこからか取り寄せればいい。それがブラームスを始めとした、大半の貴族階級の将校達の考え方だった。

「……ハッ、畏まりました」

伝令兵は逡巡したものの、諦めたようにブラームスの命令内容を兵達へ伝えにいく。兵卒の分際でこの將に意見など物申せば、直ぐに首を斬られ、養っている家族が路頭に迷うのがわかりきっている。私は命令されただけなのだ、そう自分に言い聞かせ、心を鬼にする。

程なく、その旨が伝わったのだろう。左陣の魔法使い50人からなる魔道部隊が意思を一つにし、呪術言語の詠唱を開始する。耳にやたらと残る唱和が進むと共に、鈍い赤色光を放つ六方星の魔法陣が空に浮かび上がる。突発的に光の柱が現れ、瞬時に消滅すると、全長10m以上は悠に悠にあるつかという長剣を持つ、所々に腐肉を纏った巨大な骸骨が姿を現した。

帝国兵達は味方のはずのそれを見上げ、その忌まわしき姿に戦慄する。そんな彼らの視線に見送られて、ズズン、と地響きを立てながら、骸骨はゆっくりと敵城門の方へと歩き始めた。

「さて、お手並み拝見と行くか」

ブラームスは高みの見物といった感じで、椅子に座って二人の部

下に扇子で己の顔を仰がせながらにやにや笑っている。

(例の魔道部隊?)

周りの兵達は怪訝そうな顔を見合わせる。見たこともないあの骸骨を召還したのは、もしかして帝国の者達ではないのだろうか。

その間も、骸骨は城門にどんどん近づいていく。おもむろに、ブラームスが座りながら手を高々と掲げると、骸骨は片手に持っている巨大な剣をゆっくりと右斜めに振りかぶる。そして

ゴゴゴゴゴッ

「……」

ブラームスの陣に戻ってきた伝令兵は、目の前の光景を直視できずに俯いている。

「……す、素晴らしいっ」

ブラームスがそう叫んでパチパチと拍手し、周りにいた兵達も歓声を上げる。骸骨の一振りは一瞬にして、大軍を五日に亘^{わた}って遮っていた城門の両端の塔を切り裂き、僅かな間に城門ごと崩落させた。

いつの間にか、骸骨はその姿を消している。瓦礫が落ちた衝撃で粉塵が舞い上がり、城門付近は黄土色の煙がもうもうと立ち込めている。

「よし、勝ちは見えたぞ。視界が良好になり次第、我が軍で一斉突撃をかけるっ」

ブラームスは高々と宣言した。

エアリア城内

城門の破壊から約一時間後、エアリア城内はその静けさを取り戻していた。帝国兵達は崩れた城門の脇から城の敷地内に侵入して王城内の残党を何とか一掃し、ついにエアリアの城は陥落したのだった。既に城の屋上にはテルネシア帝国の軍旗が風にはためいている。

安全が確保された城内を、一組の男女が闊歩かっほしている。歩く度に赤いマントを羽織ったアステイスの赤いドレスィヘアが微かに揺れる。その三歩後ろほどを、軽鎧に身を包んだメリッサが静々と続いている。

「随分と、時間がかかったものだな」

アステイスは足を止めることなく、後ろから付いて来るメリッサに話しかけた。

「はい。伝令兵の報告によれば城門を制圧したまでは良かったものの、王宮目前で敵兵の尋常ならざる抵抗に遭い、足止めされた模様ですね」

メリッサが淀みなく答えるのを聞いて、アステイスはやれやれと肩を竦める。

「だから言ったのだ。攻城戦の理も知らぬ奴らが。落城寸前の城を、騎兵で攻めて何とする」

大方、軍を動かしたという実感が欲しかったのだらう。これとい

った意図が見えぬブームス擁する騎兵隊の突撃に関して、アステイスはそう推察していた。

貴族上がりのチェスしか知らないにわか連中にとつては、自分の命令通りに多くの者が動く事が何より快感らしい。だから、マスゲーム等という何の意味もない馬鹿げたことを、彼等は見目憚はばからず城の広間で堂々とする。

確かに、数千もの騎兵が一挙に突撃する様は壮観だろうが、兵が乗っている馬は階段を一挙に登れるわけでもないし、狭い道を一気に通り抜けられるわけでもない。即ち、堅牢な城を攻め落とすには下策だ。

結果、馬から降りた多くの騎兵達は慣れていない歩兵戦を余儀なくされ、待ち伏せしていた敵の精兵達を攻めあぐねて無駄死にした。我が軍が王宮を確保したのは、勝負を決めたはずの城門の破壊から実に一時間余りが経過してからだった。

二人が真つ直ぐな長い階段に差し掛かると、徐々に辺りに血の匂いが立ち込め始め、メリツサは僅かに顔をしかめる。ふと見ると、白い石階段の上のほうから、血で出来た小さな川が下へと流れている。

更に進むと、道の妨げになるからであろう、階段の脇にどけられた多くの味方の兵達の遺体に混じって、それよりずっと少ない、身体中が傷だらけの、奮戦したと見られる敵兵の死体が転がっている。

頭部に酷い外傷のある者を除いて、既に敵兵の首は斬り落とされ、頭部は持ち去られている。戦功証明の為だろう。大勢の兵で、寄つてたかつて取つた首を持ち帰っても、周囲の者達の失笑を買うだけ

だと、何故気付かないのだろうか。

アステイスはそう思う傍らで、最後まで見事な抵抗を見せた敵兵達の顔を、一目拝みたかったものだ、とも思うのだった。

階段を最後まで登りきる直前、血の海が何段にも渡って続いていた。どうやらこの辺りで味方が敵兵と激しくやりあったようだ。階段に細かい肉片がたくさん飛び散っている。階段の脇にどけられて放置されている山のような帝国兵の遺体に、アステイスは死者を悼む印を示す。

そしてその傍らに、体中に無数の矢が刺さっている、左腕が二の腕辺りから千切れかかった首のないエアリア兵の死体が、一つだけポツンと横たわっている。大量の血で滲んだ軍服には隊長の階級章が描かれていた。

メリツサはふと周りを見回し、直ぐに顔色を変えた。

「……まさか」

「……おそらくそうだろうな。ここには他に敵兵の死体はないし、彼が一人でやったんだろう」

アステイスの言葉にメリツサは息を呑み、再びその死体に視線を戻す。周りにある帝国兵の遺体の数は、少なく見積もっても二百を超えそうである。

「信じられません。この人数を……」

メリツサの恐怖とも感嘆とも取れる言葉に、アステイスも心から同意する。

「……敵ながら天晴れという他ない、な」

そう言って、アステイスはその名も判らぬ敵の死にも哀悼を示す。驚嘆と、畏敬の念を以って。

階段を上り切り、目の前の建物内に入る。やはり白い敷石で統一された王宮の回廊を少し進むと、見事な馬の銀装飾が施された扉の両脇に、味方の兵が二人ずつ立っているのが見えた。どうやら、ここ先が王の間のようなのだ。

「フロイデ准将っ。お疲れ様ですっ」

ピシッと敬礼する兵達に、アステイスとメリッサは頷いて返す。平民出身のアステイスは、その人柄と思慮深差から帝国の一般兵にはかなり受けが良かった。

「御苦労。ところで、ネフェリイ姫は見つかったのか」

アステイスの言葉に、兵達は声のトーンを落とす。

「それがまだ……、王の間に、人一人やっと通れるくらいの抜け道があったようっで」

「今、搜索兵達が追っているところです。間もなく見つかると思えますが……」

それを聞いてアステイスは溜息をついた。

手抜かりのない事だ。わざと抜け道を狭く作って、大勢の兵の追手から逃れる様にしたのだろう。王宮前の長い階段といい、守りやすく攻め難いあの城門といい、この城の建築を指示した者は、我が国の将軍様より余程知恵が回りそうだ。

それに、帝国軍三万を相手に少数の兵で今日まで持ち堪えた見事な戦い振り。みすみす主君を敵方に捕らえさせる連中には思えない。

「……見つかりそうにないわね」

メリツサがボソツと、そう呟くのが聞こえた。同感だった。

その更に二時間後。日も暮れかけた頃になって、抜け道に入り、ネフェリイ姫を追っていた捜索隊が王の間に肩を落としながら戻って来る。報告を聞き終えた軍の上層部は、ネフェリイ姫の追跡を断念せざるを得なかった。分厚い金属の扉に幾度となく行く手を塞がれ、迅速な追跡がままならないため、このルートから姫を追っても時間を浪費するだけだと判断されたのである。

元敵城の一室を仮の軍議室と位置付け、帝国の中隊長格以上の将校達がそこに集って今後の方策を話し合っている。

ブラームスはネフェリイ姫を逃がしてしまった事に対しては、それ程気にしていないようだった。形ばかりの追手を放つ事を決定し、その問題にはそれ以上言及しなかった。

「所詮、逃げた奴等は少数だ。どうする事も出来まい」

軍議室に集まった諸侯の前で、貴族上がりの司令官、ブラームス将軍は、美食で膨らんだ腹を椅子からせり出し、どうでも良い事を偉そうにのたまわる。

それを見て何人かの者は互いの顔を見合わせ、気づかれぬように失笑する。確かに戦には勝ったが、それは敵方に敗北時にやるべき事の全てを達成された上で、の事だ。決して辛勝ではないが、快勝と言つにも程遠い。

「それよりもブラームス殿、我輩に何か言うことはないのか」

ブラームスの方を無然とした表情で睨んでいる見事な顎鬚を蓄えた白髪の男は、先方軍5千を指揮して城門の攻略に当たっていたライオン＝ベルガモット将軍だ。撤退の命令もないままに、自軍の召還魔法の犠牲になった多数の部下達の無念を考えれば、その怒りももつともである。

「ああ、あの件か」

記憶を辿っていたのか、ブラームスは空に視線を泳がせていたが、暫くしてやっと口を開いた。どうやら本当に忘れていたらしい。

「あー……実際に、そう……、遺憾な事だ。勇敢な貴公の兵士諸君に、私からも哀悼の意を示したい」

見ているものをイラツとさせる口調で、ブラームスはそう言った。

(遺憾、か)

謝意を示すでもなければ反論するわけでもない、ただお茶を濁してその場を切り抜ける為だけに使われる、アステイスが最も嫌いな言葉の一つだ。

ベルガモットは声を荒げてガタンと席から立ち上がる。周りの主な将校達はその険しい顔に息を呑んだ。

「それで済むと思っいかているのか。如何に司令官といえども手を振り翳して憤るベルガモットを遮るようにして、ブラーヅウスは早口で捲し立てる。

「伝令兵の致命的な伝達ミスにより、味方に多くの犠牲が出てしまった。軍法に照らし合わせ、間違った命令を伝えた兵士は死罪に値すると判断してその場で処断したが、貴公はそれ以上にまだ何か望む物でも？」

その言葉に軍議室がざわめき、ベルガモットも眉根を寄せる。

「伝令兵を始末した、と？」

「うむ、あのような不可解な伝達をするとは、もしかしたらエアリア側の諜報兵だったのやも知れんな」

そう言っただけでブライムスは首を捻ったが、その唇の端はつり上がっている。

随分と無理な理屈だ、とアステイスは呆れ顔だった。方法はどうかあれ、あの一撃がきっかけとなって城を落とせたのは間違いない。ベルガモットもそれをわかつてはいるものの、今となってはブライムスが命令したという明らかな証明が出来ない。死人に口無しだ。

歯軋りの音が5m近く離れたアステイスの席にまで聞こえてきそうな程に、ベルガモットは歯を食いしばっていた。

其三　　ゝ厄介払い（表）ゝ

883年　4月25日

帝国軍が接收したエアリア城は、幸い敵方に火を放たれる事もなく、召還された魔物が壊した城門付近以外はほぼ無傷で手に入ったため、上層部は城内の軍議室を利用し、今後の方策を話し合っていた。

今後の予定としては、北の中立都市ゴルフレッドへ兵を進めるか、ブラージウス率いる皇軍が滞在するクルートに合流するかの一択だったが、ゴルフレッド領は東側の戦線からかなり遠く、進軍すると補給線が大幅に伸びてしまう問題点があった。また、彼の国の領主が小心で知られていた男だったので、あちらから攻めては来るまいと見なされ、エアリアにはアステイスⅡフロイデ準將軍率いる第六軍を残し、コステイⅡブラームス、ガツシュⅡエウゲン、ライエンⅡベルガモットはクルートへ合流する方策を取る事が決定した。

ブラームスとしては、自分に軍の裁量が任されている間にアステイスの厄介払いをしたかった意味もあるのだろう。ほぼ勝ちが確定していたエアリアの攻城戦では、アステイスを後衛に置いてあまり戦いに参加できない様にし、エアリアにアステイスを残す事については、殆ど被害を受けていない唯一の軍という事で推挙した。積極的に戦いに参加せず、高みの見物を気取っていた、と嫌味もすっかり忘れなかったが。

言いたい事は腐るほどあったであろうアステイスだが、将校たち

の予想に反して？エアリアに残れ？というブラームスの命には文句一つ言わずに従っていた。

「それで、城下町の統治は如何ように致しましょうか」

三日に亘る会議も終盤に差し掛かった頃、アステイスが諸将候に尋ねる。

アステイスの言葉に、ブラームスはいちいち苦々しげな顔をする。相手が貴族階級ではない、というだけでとことん曇るブラームスの人物観は、一般階級の出自であるアステイスを殊更見下していた。勿論、ブラームスより、彼の顔が幾分良い事もマイナス査定の一つだろう。帝都での彼に対する若い女性達からの人気振りから、それは誰の目にも明らかになっている。

「貴様が口出しする事ではない。そんなものは我々の手で決める」
ブラームスは憤然とそう言い放った。そのあからさまな態度に、エウゲンが苦笑する。齡はブラームスより幾分下だが、その功績は先帝の頃から將軍をしている彼の方が断然上である。

何故彼ほどの人物が、ブラームスのような男と親しくしているのか、アステイスには良く分からなかった。同じ貴族同士だから、という事なのだろうか。

「まあまあ、ブラームス殿。一応、フロイデも一軍を預かる指揮官の一人ですから、今後の方策を聞く権利くらいはあるでしょう。エアリアに残るのは彼ですからね」

一応、という言葉にあらんばかりの力と皮肉を籠めて、エウゲンはそう言った。

それを聞いて、ブラームスは気を取り直したのか表情を緩めて口元を醜く歪める。

「まあ、それもそうですな。末席とはいえ、君も美人の副官を付けられる身となつたわけだからなあ。色々お世話してもらっているのだろう。色々、な」

ブラームスの揶揄に反応して周りからはドツと笑いが起きる。周囲の者達の下品な笑い声と、身体を舐め回すような視線に晒され、傍らに控えていたメリツサの顔が、かあつと赤くなる。

一方のアステイスは、暴言とも侮辱とも取れるその発言をさして気に止める様子でもなく、ただ平然と言葉を返す。

「確かに彼女は優秀ですね。もつとも、優秀過ぎる副官を持つと、やる仕事がなくて反って困りますが」

アステイスがやんわりと口にしたその言葉に、俯いていたメリツサは顔を上げ、今度はエウゲンが噛みついてきた。

「それは、副官に指揮を一任していた私に対する当てこすりのつもりかね？ 言葉に気を付けないと、そう長生きできないぞ」

それを聞いて、アステイスは思わず噴き出しそうになるが、何とか笑いを噛み殺し、素知らぬ風を装う。貴様如きに殺される無能ならこの場に俺はいない、心の中でそう反論しつつ。

「そう聞こえたのなら、詫びなければなりませんまい。無論そんなつもりはありません。適材適所と言う物を考えれば、戦争経験が豊富な副官殿に一任したエウゲン卿の方策、慧眼としか申せませぬ」

エウゲンはアステイスを不快そうに睨んでいたが「まあいい」と短く言つて席に着く。

場の空気が淀んで来たのを察したか、エウゲンの副官セガールが提言する。

「皆様、どうやら長きに亘る会議で大分疲れておられるようですね。大方の事は決まりましたし、あと一時間で終了という運びにした方が宜しいかと」

セガールの意見にとぼつちりを恐れていた殆どの将校が賛同し、最後にエアリア領の税金に関する話に移っていった。

「すみませんでした……」

会議を終えた後、廊下を歩いている途中、背後からメリッサが詫びる声が聞こえた。アステイスを侮辱するためのだしにされ、助け舟まで出されてしまった事を気に病んでいるのだろう。

歩む足を止めずに、アステイスは応える。

「気にするな。君が美人なのも、色々世話をして貰っているのも事実だしな」

アステイスの口から出た美人という言葉に反応し、メリッサの顔が耳まで真っ赤に染まる。会議の時よりも明らかに顕著な反応だった。

「か、からかわないでください」

メリッサは何とかそう言ったが、声が上がっている事に自分で気付いたのか気まずそうに顔を伏せる。

「己の長所は、ある程度理解しておいた方が良い」

「き、恐縮です。そ、それよりも」

メリッサは何とか話題を換えたそうにしている。もう少しからかってやりたい衝動に駆られていたアステイスだが、思い直して言葉を続けさせる。

「何だい？」

「会議の件ですが、あの税率、ブラームス将軍は本気でしょうか」

それを聞いて初めて、アステイスの顔に不快感が滲み出る。敗戦国の民達にブラームスが課すと決めた税率は常軌を逸している、というに相応しい数値だった。

「そうだな、あれは税率というよりも

」

飢えて死ね、ストレートに表現すると、そういうことだ。そして、その悪評の被害を一番被るのは、他ならぬエアリアに残されるアステイスだった。

二人が割り振られた部屋に戻ってくると、アステイスは扉に鍵をかけた後、黒革の椅子にドカッと座り、メリッサは外がもう真っ暗なのを確認して、箆笥の上にある燭台に火を灯し、エメラルドグリーンのカーテンを閉める。

室内の壁や調度品が黒い影を残して橙色に染まった。

(さて、どうするか)

ブラームスが提示した、エアリア領にかけられる税率。明らかに民達の生活費を考えていないその数字に、到底民達は納得がいくまい。悪評を流される事にはまだ我慢できるが、平民出身のアステイスにとって民達を苦しめる事は、己の身を切る事と同じだ。

「少々温いですが、お飲みになりますか？」

そう言つて、メリッサは銀色に光る金属製の水筒を取り出した。

「ああ、ありがとう」

アステイスは、軍議で昼から喋り通しだった。メリッサはテーブルの上にコップを置き、入っていた紅茶を入れていく。

アステイスがカップを手に取り、口に付けると、予想外の味が口に広がった。

「うあ、何だか酸っぱいぞ。これ、腐つて……ないよな」

アステイスがそういうのを聞いて、メリッサは不思議そうな顔をした後「あつ」と口に手を当てて、ばつが悪そうに微笑む。

「言い忘れていました。これ、レモンティーなんです。普段は作らないのですが、新鮮なレモンが入ったので」

ああ、とアステイスは苦笑した。ストレートのつもりで飲んだら裏切られただけの事だった。なるほど、言われてみれば普通にレモンティーの味だ。先入観が味覚を鈍らせていたらしい。

「これは失礼した。やれやれ、思い込みというのは」

何やらアステイスが鼻の下に手を当て、頬杖を付く。メリッサは、その所作がアステイスが何かを閃いた時だと経験から知っていた。口を結び、その考えを邪魔せぬようアステイスの言葉を待つ。

（先入観か……）

あの税率をそのまま鵜呑みにする必要はない。取った後でブラームスにそれとわからぬよう還元してしまえば良いのだ。幸い還元についてまでは言及されていない。少なからず悪評は立つだろうが、民を餓死させるよりはずっとマシだろう。

抜け穴を見つけたアステイスは目を瞑り、どうやってそれを実行に移すかを頭の中でシミュレートし始めた。

其の四　～副官の憂鬱（表）～

883年　5月20日

帝国軍からの初税の徴収に、エアリアの民達はアステイスの予想通りに反発した。アステイスは秘密裏に、エアリアのとあるホテルの一室を借りて街の有力者を集め、自分の微妙な立場を理解して貰った上で、二カ月に一度、集めた税を返還する為、彼らに協力を願った。

有力者達は、初めはアステイスの事を不審の眼差しで見っていたが、アステイスの説明をして段々と納得していった。

「返還する分については、軍兵のここでの滞在費を最大限節約した上で、多少水増し報告するから問題ない。ただ、それだと税金の返還業務に携わる者達の人件費が足りなくなってしまう。兵達を使うと危険手当諸々でいちいち高くつくからね。そこで、先の戦争によって失業した街の者達を貴方達に雇って貰いたい。その者達に、税を返還する業務を行って欲しいのだ」

その申し出に、集まった者達は互いの顔を見合わせる。

「……お話はわかりましたが、それがいつまで続くとは申せませんか。遅かれ早かれ貴方がいなくなれば、エアリアの者達がどういう目に遭うか」

「その保証は正直出来ない。ただ、余程の事が無い限り、私が暫くの間、前線に赴く事はないと確信はしているが」

何しろあの太っちょ司令官様に嫌われているからな、とアステイ

スは顎を引いた。

「誠に心苦しい事だが、その間に他国に引越す事も皆に検討して頂いた方が良いと思う。下手をすれば重税で準備金すら無くなってしまうからな」

エアリアの有力者達は目を丸くする。

「住み慣れた街を捨てよ、と言われるか」

アステイスは突き刺さる複数の視線をしかと受け止める。

「……おやめなさい。フロイデ准将だつて立場を危ぶむ事を覚悟の上でここにいらつしやるんだから」

初老の眼鏡をかけた女性が声を荒げた七三分けの真面目そうな男をそう言つて窺める。

「……」

男は背もたれに寄りかかり、視線を逸らす。

「……それともう一つ」

アステイスは言葉を続ける。

「なんだ、まだ何かあるのか」

男は逸らしていた視線を不快そうにアステイスに戻す。

「……出来れば、私の悪評をあゝの税率とセットにして触れ回つて欲しい」

「……何だつて？」

聞き間違えたか、と男は耳に手を当てる。自分の悪い噂を立てる、等という命令は耳にした事がないのだろう。

（それがクルートに届いている間は、少し安心出来るからな）
怪訝そうな顔をする彼らに、アステイスはにこやかにほほ笑んだ。

彼等が帰途に付くのと入れ違いでメリッサがホテルの部屋に入ってくる。内容が内容だけに、他の兵達に知らせる事も出来ず、メリッサが扉の外で見張りをしていたのだ。

説明に手間取ったため、今日はこのまま泊まりという流れになるだろう。

「……話が漏れる事はないでしょうか」

メリッサはやや不安を滲ませてそう言った。

如何に準将軍といえども、不正に軍用費を水増しした事が明るみになればただでは済むまい。そのようなスキャンダル、ブラームス辺りが放っておかないはずだ。最悪、斬首刑に処されかねない。

「多分、ね。話す相手はきちんを選んだつもりだし、彼等に大きなメリットこそあれど、デメリットは一つもない。逆は言わずもがなだ」

確かに、それは全く持つてその通りなのだが。

「ですが、全てが上手くいくとは……」

尚もアステイスの身を案じるメリッサに、心配させまいとアステイスは明るい表情を作る。

「まあ、それでもバレたら大人しく亡命でも考えるさ」
達観した様子でアステイスは嘯いた。

自分の部屋に戻ってきたメリッサは溜息をつく。アルイール皇帝という防波堤が無くなってからというもの、本当に少しずつだが、アステイスの国内での立場は危うくなってきている。これからこんな綱渡りの状態が延々と続くのかと思うと気が滅入ってしまう。

ふと、メリッサは自分が副官になる前後の事を思い浮かべた。その頃も、色々と考えることが多くて相当まいつっていたのだ。

とある理由から軍人になろうと志していたメリッサは、五年以上に亘って毎日何時間と机に向かい、重い剣を必死に振り回した甲斐あつて、何とか副官の選抜試験に合格した。その後、約三年前に行われた軍の再編成時に、希望していた通り、晴れてアステイスの副官になった。

しかし、その直後からメリッサは、周りの見知らぬ女性士官達に何かと白い目で見られる様になった。有り体に言えば陰口を叩かれたり、露骨な嫌がらせをされた。副官を辞退するように脅すような内容の手紙も数知れず。女の妬み嫉み程恐ろしいものは、世の中にそうはない。

そして、メリッサの実家はウランダー家という名の知れた貴族の家柄であったため、あの女はアステイスの下に付くのに権力を使つたんじゃないか、という根も葉もない噂まで流れた。本当にそんな中で副官という大仕事をやっていけるのかどうか、メリッサには自信が無かった。

その頃のアステイスは、まだ大隊長を拝命したばかりで階級も大佐という位置付けだったが、それでもアルイール皇帝のお気に入りである事は誰もが知っていたため、ゆくゆくは確実に將軍になる、と見込まれていた。そんな彼の副官の座を見事に射止めたメリッサ

は、周りの女性達の羨望と嫉妬を一手に引き受けた、というわけである。

メリッサの配属が決まった五日後、メリッサは三年先輩の女副官グレイスに連れられて、クルートの有名なケーキ屋を訪れていた。昇進祝いも兼ねて、ケーキバイキングで奢って貰う約束をしていたのだ。軍人としての体型を維持するために、暫く甘い物を絶っていたメリッサにはこの上なく嬉しくて、困った申し出だった。

グレイスは目の前のシヨコラにパクついている。スポンジ生地に新鮮な生クリームと高級シャンパン入りの生チョコレートだけで作られた、この店一押しの商品だ。

「メリッサはいいわよねー。いきなりフロイデ様の下で働けるなんてどれだけ幸運なのよ、貴方。私なんてよりによってピッグさんよ
お」

そう言っつて、先輩のグレイスは鼻を押して豚の鳴き真似をしてみせる。絹のように柔らかかそうな長いプラチナブロンドに青い瞳。見た目は淑女である彼女のその様子があまりにおかしくて、メリッサは声を殺して笑う。

ピッグさんとは、第八軍大隊長ノルビッグ將軍の事で、鉤鼻が三角に近い事と、名前の語呂が似ている事から、下の者達からは親しみを込めてピッグさんという愛称で呼ばれている。決して太っているわけではなく悪い人でもないのだが、第一印象で損をしている典型的な人だ。

「でも、ああ見えてフロイデ様って自他共に厳しいって噂されていますから」

そう言いながら、メリッサも目の前のモンブランを口に運ぶ。本物の栗がふんだんに使われていて、上に乗った自家製マロングラッセの甘さが口に広がり、何ともいえず後を引く。

以前から、メリッサはアステイスについてある程度の情報は持っていた。おそらく向こうは覚えていないだろうが、大分前にただ一度だけ面識もある。

「大丈夫、大丈夫。男なんて、ちょっと色目使ったら簡単に優しくしてくれるわ。貴方も若いうちにその容姿を最大限活用した方がいいわよ。折角美人に生まれたんだし」

そう言いながらもグレイスは早くもショコラを平らげて隣のミルフィーユに移っている。バイキングの制限時間は二時間、そんなに急がなくても時間はまだまだたっぷりあるのだが。

彼女はちよくちよくこの店に来ているらしく、見る限り量も相当に食べているのだが、どういうわけか全然太らない。その特異な体質がメリッサには羨ましかった。

グレイスはケーキを頬張りながらも、やや目を細める。

「それより、ウランダール卿……お父上はその事を御存じなのかしら」

メリッサは俯いた。

「ええ、昨日全て話しました。……凄いご立腹のご様子でした」

「あら……、やっぱりねえ」

メリツサの父、ミリックウランダーは身内の目から見ても、あまり褒められた人間ではなかった。誇りと高慢とを同一視し、貴族である事を笠に着ては下の者に威圧的な態度で接するのが常であった。見栄っ張りで、癩癩かんしゃく持ち。自分の意見が聞き入れられない事を何より嫌う、そういう性格だ。そんな父が平民出のアステイスの下に付く事を由とするはずがなかった。

「お前には貴族としての誇りがなかった。儂の反対を押し切って女の身で軍人等になっただけでは飽き足らず、由緒正しきウランダーの名まで貶めおつてつ。お前の顔など二度と見たくないつ。とつと出ていけつ。金輪際、我が家の敷地を跨ぐ事は許さんぞつ」

昨晚、口汚くそうやって罵られ、半ば家出同然で飛び出してメリツサはここにいた。もっとも、これまでに自分で稼いだ分の蓄えはあるし、明日からアステイスの下で泊まり込みで働く事になっていたので、喻え勘当されようが一向に構わなかったが。元々、顔を合わせる事がそう多いわけでもない父親だったし、会ったところで話題に窮きつすだけなので、向こうから嫌ってくれるなら都合良かった。

グレイスには話していなかった、否、話せる内容ではなかったが、メリツサにはそれ以外に父親と仲違いをした決定的な原因があった。副官の試験を受ける一年程前に、彼女の預かり知らぬ所で、ブラージウス皇子に輿入れするという笑えない話がいつの間にか持ち上がっていたのである。

直前になつてそれを知らされた彼女は、冗談じゃない、ときつぱり断り、皇族に自分の名を連ねかけた縁談がご破算になった事で、ウランダーは大激怒した。喋る言葉が、言葉の様相を呈していな

かったくらいに。

幼い頃からその残虐性で悪名高かった皇子に、父親が自分を輿入れさせようと躍起になっていた、と知ったメリッサは、父親にとつて娘とは出世の道具であり、同時に自分が父親に愛されていないかつた事をやっとな理解した。その時を境に、少なからずあつた親子の情は冷め切っていたのだ。いずれこうなる事はメリッサにもわかつていた。

「もう父の事はいいんです。ようやく自分の目標が見えてきましたから」

メリッサはやんわりと微笑む。

「目標……ねえ」

妙な言い回しだな、と思ったのだろうか、グレイスは首を傾げていた。

それから足掛け三年目。目標は近づいているのか、それとも遠ざかっているのか。己の目標が如何に無謀なものだったかを、メリッサは今更ながら実感するが、それに人生を捧げてしまっている以上、もう後には引けない。

（亡命……か）

アステイスがそれをするとして、自分をそれに同行させる事もちやんと検討しているのだろうか。もしもしていないのなら、アステイスの副官を目指した意味がなくなってしまう。メリッサは気が気

でなかった。

「本当、気苦労が多いわね……はげてしまいそう」

メリッサはベッドに仰向けに横たわりながら、鏡台の大きな鏡に映る自分の疲れた顔を見て、そう呟く。

其の五　　普通任務（表）

883年　6月23日

早朝、アステイス率いる帝国兵達はエアリアの街から一路南東の方へ舗装されている街道を進んでいた。この街道をずっと南東に進むと、大きな河を隔ててマビアビに辿り着く。既に日は東の地平線の上に顔を出し、西の森からは蝉の鳴き声による大合唱が聞こえてくる。

帝国がエアリアを陥落させた後、戦線は東側へと集中し、相変わらず西の要として末席のアステイスがエアリアに残されていた。上層部はアステイスにおよそ将校がやるとは思えぬような任務までも請け負わせたが、彼は嫌な顔一つせずに日々の任務を淡々とこなしていた。アステイスにとっては、大勢が少数の敵を追い回して捻り潰すような戦争よりは、普通任務に興じている方が気楽だったのだ。

一週間程前に、新生テルネシア帝国の今後の軍事計画報告書がアステイスの下に届いた。もし何事もなければ6月22日、つまり昨日から、ブラージュウス率いる皇軍がネルガルの攻略に取り掛かっているはずだ。

兵数が二千と目されるネルガルを相手に、皇帝自ら五万の兵を率いて行くのは、圧力で一気に押し潰して周辺諸国に恐怖を与える為か。それとも、血に飢えた男の単なる退屈しのぎの為か。

ネルガル領を守っているのは、アルイール皇帝が亡くなったのを機に引退したモートン・エルゲート元將軍だ。その強さから一騎当千と謳われたモートンは、アルイールの近衛として三十年にも亘ってその腕を振るって来た。もう歳は六十に近いはずだが、テレジア大陸広し、といえども彼を一对一で敗れる者は殆どいまい。勿論、如何な彼とて五万の軍勢には敵うべくもないが。

この日、アステイスはブラーヂウスの要請により、僅かな兵を率いてエアリア南東部にちよくちよく出没するという魔物の討伐に赴いていた。後方10m程後ろに続く兵達を一気に置いていかないよう、ゆつくりと馬を走らせる。

「こんなの、アステイス様じゃなくてもできるのに」

アステイスがチラリと隣を見ると、普段は慎ましさを忘れないメリッサが、今日は珍しく苛立っていた。プリプリしている、という表現はこういう顔の事を差すのだろう。

ここ最近、上層部からアステイスに下される指令は、およそ一軍を預かる有能な将には相応しくない物ばかりだった。前々回は敵対国の罪人の護送任務。前回は壊れたエアリア城の城門修繕の指揮。そして、ここにきてこれ。アステイスに戦功を立てさせない様に、意図的に画策しているとしたか思えない。いくらなんでも露骨すぎる。どうせやるならもう少し、角が立たないよう当たり障りなくおとし貶めて欲しい、と思っていたアステイスだった。

もつとも、前線から遠ざけられているのはアステイスに限った事ではない。どうやらブラーヂウスは自分に対する忠誠に疑問を抱く

者達に対して、ほぼ似たような対処を始めていた。戦線から遠ざけ、徐々に任務の格下げをしていた。

「不服かい。私はむしろ、こういう任務の方が好きだけれどね」

アステイスは苦笑しながら、副官をなだめる。

別に負け惜しみのつもりではなく、心からそう信じている。夜明けと共に馬に乗って散歩するなんて、見ようによってはかなりエレガントな過ごし方ではないか。

「好きとか嫌いとかいう問題ではありません、適材適所という物が

「
アステイスがゆっくりと首を振るのが見え、メリッサは言葉に詰まる。」

「国を支えている根幹は民達だ。その彼等を守るための任務だし、少なくとも人殺しよりはずっとやり甲斐があるさ」

遠くを見据えてそう言うアステイスを、メリッサは副官として少し誇りに思った。

「それに……、君にだから正直に話すけれど、今はあまり戦場にいたくないんだ」

メリッサはアステイスを見て、後ろから付いて来る兵達をチラッと見る。？君にだから？という言葉に若干の優越感を感じながら。

「私が将を目指した理由の一つは、率先して民達を危険から守りたかったからだ。殆どの貴族階級の将は、真っ先に保身に走るからね。一人くらい民を優先して守る将がいても良い、と思った。あ、勿論君は別だよ」

取って付けたようなアステイスの言葉にメリッサは微笑する。

「しかし今は、その信念の為に戦える状況じゃない。前線に赴けば、本来私が守らねばならない者達を、大勢殺さねばならないのだから」
メリッサは首を傾げた。

「しかしながら、早く戦乱に終止符を打つ事が出来れば、それが結果的に民達の犠牲を減らすのでは」

アステイスはゆっくりと首を振る。

「数字の問題じゃない。喩えどんな理由があろうとも、軍人が信念から目を逸らしたらただの人殺しだ。……それに、あの兵力差では私がいてもいなくても変わらないしね」

圧倒的武力があれば、反比例して戦略の価値は下がる。対等以下の勝負でこそ、その重要性をもっとも発揮するといえるだろう。

それに、ブラージュウス皇子は残虐なだけの男ではなかった。奸智に長け、剣技にも相当秀でていたのだ。アルイルの資質がある程度は受け継いだのだろう。性格の問題さえなければ、兄アンドレイの器量を越えていたかも知れない、というのがアステイスの認識だった。そう、性格の問題さえなければ。

「……確かに、アステイス様がいなくとも今の皇軍が止まる事はないでしょうね」

そう言っつて俯くメリッサにアステイスは力なく頷いた。

だからこそ迷っていた。現状、自分が戦いを避けれたところで、他の誰かが自分の代わりに民達を殺す。ブラージュウス側に加担している以上、それは、民達を見殺しにしているのと変わらないのではないか。

アステイスは心の中で自問自答を繰り返す。今の有様を、自分は本当に許せるのか、と。

被害報告のあった村の近辺についたアステイス達は、その場で一旦待機し、斥候を出して報告を待つ。三十分ほどして、伝令兵が報告に来る。

「フロイデ准将、斥候達が戻って参りました」

続いて、斥候達がアステイスの前で馬を止め、馬から下りて片膝を付き、状況報告を始める。

「お待たせしました、西の森の近辺、異常ありません」

「東側の平原を回りましたが、特に異常ありません」

「ここよりやや南西、馬で10分程の森の中ですが、百匹程のオークの集団を発見致しました。北西の方角へ向かっている模様です」
アステイスは斥候達に頷いた。

「わかった、確か北西の森の中にも小さな村があったな。このまま行かせるとまずい。先回りして進路を塞ぐぞ」

「ハッ」

アステイス達は街道を外れて西に一直線の進路を取り、森の中に入ってしまった。

魚が腐ったような、醜悪な匂いを放ちながらオーク達は森の中、人里を目指している。オークは亜人種の中では知能が低い、黄緑色の肌に2m以上の体格、力が非常に強く大きな棍棒を持ち、ある程度まとまった群れで行動する。

他人種とも交わる程に繁殖力旺盛で暴力を好む彼等は、正に森の嫌われ者である。勿論人に対しても危害を加える為、自警団のいない村などでは相当に恐れられている。

「ブフォー？」

「ンヴオー？」

「ンヴオ、オヴオー」

人にはおよそ、理解し得ない唸り声の様な言葉を話しながら、オーク達は森を進んでいく。これが鳥のような可憐な鳴き声だったらまた印象が一味違うのだろうか。

村の方へ向かっているオーク達を見失わぬように、川を隔ててアステイス達は気付かれぬよう木陰に隠れて移動しながら奇襲の機を伺う。

「う　　、酷い匂いだ」

兵達の何人かが息を止め、鼻と口を押さえている。あの不快な匂いだけでも十分武器になり得るな、とアステイスは苦笑する。

川沿いの向かう先に、大きな茂みがあるのに気付いたアステイスは、兵達にそこまで先回りするように指示を出し、移動し終わると、オーク達が再び近づいて来るのを待ち構える。

「奴らの力は馬鹿に出来ないから、どのみち接近するのは得策ではない。弓で出来る限り数を削るぞ。手を翳したら一斉にお見舞いしてやれ」

アステイスの抑えた声に、兵達は頷く。

オーク達が近づいて来る。不快な匂いにぐっと耐え、最前列のオーク達がアステイス達から斜め後ろの位置取りになったのを見てアステイスは手を翳す。

ヒュンヒュン

茂みからたくさん鉄の矢が放たれ、オーク達に向かつて行く。降り注ぐ矢の雨にオーク達は晒され、次々に大きな身体に矢が刺さる。運良く急所に当たったのか、何匹かのオークが地に倒れ伏す。

「ンヴオツホー」

オーク達は異常に気付いて辺りを見回しているが、まだこちらが身を隠している茂みに意識は向いていない。再度矢の雨がオーク達に飛来する。

「ンヴオー……」

再び倒れて行くオーク達。

何匹かのオーク達がこちらに気付いたのか、怒りの声を上げながら川を渡ろうとする。だが、オークが岸に辿り着いたのを見計らって、左右の茂みから予め待ち構えていた十人程の帝国兵達が飛び出し、川を渡ったオークから順に片っ端から斬りつける。ろくろく反撃も出来ぬままオーク達はその場で倒れていく。その間も、弓兵達は次々に矢を放ち、オーク達の数は少しずつ減っていく。

ままならない状況に業を煮やしたのか、何匹かのオークが川辺に転がっていた大きな石を力任せにこちらに投げってきた。

「うわ、やばいっ」

ドスンッ

辛うじて岩の直撃を避けた弓兵達だが、攻撃が一瞬止んだ事を悟ったのか、投擲したオークの周りにいたオーク達も同じ行動を取り始める。

「一先ずはこれで十分だ。一旦撤収するぞ」

旗色が悪くなる前に、アステイスは撤退命令を出す。兵士達は頷き、北の方へアステイスに続いて速やかに走りだした。

「死者0名、重傷者0名、軽傷者2名です」

敵を振り切ったところでアステイスは休憩を挟む。メリツサの報告を聞き終えたアステイスは薬草と包帯を兵達に渡し、負傷した兵の手当てを命じる。

「わ、わかりました」

兵達はその扱いにどこか戸惑いながらも、言われた通りに負傷した兵の治療に当たる。

614

「手当てが終わり次第奴等を追い、再度後方から奇襲を仕掛ける。先程の先制攻撃で連中は負傷者が多い。足並みも遅くなっているはずだ。何回か一撃離脱を繰り返して数を減らすぞ」

アステイスの言葉に、休憩している兵達は皆頷いた。

オークが勢い良く投げた尖った石に運悪く掠った負傷兵は、左腕に擦過傷に似た傷を負っていた。メリツサは血の滲んでいる部位に満遍なく塗り薬を付けてゆく。

「あ、あの……」

一人の負傷兵が、薬を塗り終わった後、己の腕に手馴れた様子で包帯を巻いているメリツサに話しかける。

「何かしら」

メリッサは視線を包帯から逸らさず、手を時折交差させながら訊き返す。

「フロイデ様って、いつもああなんですか？」

「ああっていうと？」

質問を計りかねているメリッサに、兵はばつの悪そうな顔をした。「あ、いえ……私の様な兵卒を相手に、よりにもよって副官殿に治療に当たらせるなんて、何だか申し訳なくて」

負傷兵はそう言った。

「そういう事、アステイス様の前では言わない方が賢明よしー、とメリッサは悪戯っぽい眼差しで口に指を立てる。

「小さな傷が原因で命を失うことだってあるでしょう。あの人、仲間が死ぬのを何より嫌がるから」

負傷兵は目を丸くする。

「仲間って……我々の事ですか？」

包帯を巻き終わって解けぬよう金具で固定し、メリッサはゆつくりと立ち上がる。スカートについた枯れ草を両手でパンパンと払うと、ゆつくり男の方を振り向く。

「他に誰がいるの？ 誰もが命は一つ、その命は、家族とか、友人とか、仲間とか、周りの者の命を互いに支え合っているわ。一人の支えを失えば、いずれ周りが崩れる。その意味で、私と貴方にどのような違いがあるかしら」

諭すようにそう言って微笑むメリッサに、負傷兵は思わず顔を赤らめる。月並みだが、本当に綺麗な人だ。

「そうですね、変な事を聞きました。すみません」

兵の言葉にメリッサは軽く頷くと、アステイスの方へ歩いていく。

(本当に、こんな人達もいるんだな)

手当を施された兵は、己の腕に丁寧に巻かれた包帯を見る。アステイス達に対する一般兵の高い評価は聞いていたが、正直眉唾物だと思っていた。

けれども、実際にアステイス達の下について、初めてわかる事がある。一般兵を敵の飛び道具を防ぐ壁くらいにしか思っていない将達が多い中で、彼等は貴族に接する時と同じように、我々に接している。

(そうだ、どうせ命を懸けるなら……)

彼等なら、ただ殺し、殺されるだけの戦いではなく、己の信念を、存在意義を見出せるような戦いに誘^いってくれるのではないか。そう思わせる何かが、その兵には感じられた。

アステイスは普段何気なくこなしている任務の中でも、その誠実さで一般兵の信望を徐々に勝ち取っていった。それは後に、彼を窮地から救う原動力となるのである。

其の六　　寝耳に水（表）

883年　8月8日

ブラージウス皇子率いる帝国軍は、3日間の攻防の末、6月24日、あっさりとネルガル城を陥落させ、帝国の支配下に置く。

元帝国の将、モートン^{II}エルゲートは殺された家族共々城下町の広場に首を晒され、その中には幼子の姿も混じっていたという。誰もが目を覆いたくなるこの蛮行は、イアニス教団を始め各勢力からの批判の的となった。それと反比例するように、東の諸国に多く見られた帝国に対する徹底抗戦の構えは揺らぎ、休戦、もしくは降伏論が増え始めてきていた。

ブラージウス自ら大軍を率いてネルガルを赤子の手を捻る様に屠り、エルゲート一家を無残な死に至らしめたのは、ブラージウス皇子にとって周辺諸国に対する単なるデモンストレーションではないか、とアステイスは推察していた。

大して有名な将がいるわけでもない、小国のエアリアを制圧するのに六日もかかった帝国軍は周辺諸国に幾分甘く見られていた。今回の件は、それを一気に払拭する形になったわけであり、ブラージウスは残虐な性格だけでなく、機知にも長ける事を帝国内外に示した。

その勢いそのままに各国を攻めると思われた帝国軍だったが、例年のない酷暑が続く、兵達の行軍に支障が出始める。しかも、ネルガ

ルの食料倉庫には、何万もの兵達を飢えさせぬ程の食料がなかった。これについては推論する事しかできなかったが、戦の勝手知ったるエルゲートは初めから死を覚悟し、帝国軍の好きにはさせまいと備蓄していた食料をどこかに隠したか、火にかけたかしたのだろうか、というのが多くの将達の意見だった。

その為、ブラージウス皇子は暑さが和らぐまでの間は、ネルガルにはベルガモット將軍と彼が指揮する第四軍を残し、主要な將校達と共にクルートに兵達を引き返していた。

それに伴い、エアリアにいたアステイス・フロイデに、陛下が戻って来るので挨拶に來い、というブラームスの命令書が届き、仕方なく彼は、四日間の滞在の予定でクルートへ赴くのだった。

エアリアより東南東、クルート

旧テルネシアの王都、フリーユゲルの南に位置する街、クルートは大陸の中央から見るとやや北にある。帝都から近いゆえにそこまですで大きな街ではないが、クルートの城は名城として名高い。冬には大地が白に覆われてしまうフリーユゲルよりも南に位置するため、クルートは季節全般を通して過ごしやすい気候だ。各町を繋ぐ街道の分岐点に当たるこの街の郊外には、帝国の上級軍人達が数多く住まう住宅地がある。

それはアステイスも例外ではなく、クルートの街を南門から出て南東の方角に行けば、先帝アルイルに与えられた、アステイスの屋敷があった。但し、城から大分離れている事に加え、予定が詰まっていたため、今回は立ち寄る暇がなかったのだが。

クルートに到着した諸侯達は、ブラーヂウスとの面会も兼ねて、城の会議室にて各方面からの報告を行っていた。

「どうだ、クルートの方は。変わりはないか」

ブラーヂウスの問いに、ブラームスは大きな声を上げて応える。

「はい陛下。クルートの留守、私コスティ」ブラームスが責任を持つてお預かりしておりました故」

初対面の人が見たら卑屈に感じるかもしれないくらい、ブラームスは深々と礼をする。足から腰を軸に背にかけての角度は90度を超えていそうだ。あの不健康そうな身体で良くあんな真似が出来るものである。腹の贅肉が？助けてくれ？と訴えて、シャツがパンパンに張っているではないか。

アステイスは笑いを堪えながらも平静を装う。視線を周りに送ると、それに気付いている者も何人かいるらしく、こめかみがピクツピクツと動いている。それを見て、また吹き出しそうになってしまふ。貰い笑いの悪循環を耐える方法を模索せねばな、とアステイスは真剣に考える。

「ふむ。では、各街の方はどうか」

「は、秋にかけての税の徴収は滞りなく進んでおります。ただ

「ただ、なんぞ」

ブラームスは、チラツとアステイスに視線を送る。その目は明らかに笑っている。

「いえ。エアリアではフロイデ准将の悪評が後を絶たないと言う事

で、彼に街を任せた身としては少々気に病んでいました。……何しろアルイル様の懐刀とか言われていたフロイデ准将ですから、それくらいの事はそつなくこなす事が出来るであろう、と私は踏んでいたのですが。……どうやら先帝のアルイル様は、幾分彼を買い被っておられたようです。……何分若すぎますし、まだ一つの街を支配するに値する器ではないのか、と危惧している次第です。私の人を見る目が無かった、と言われればそれまでになってしまいました
が、ね」

イントネーションを重視しながら、ブラームスはそう言葉を結ぶ。

(……やはり、連れて来ないで正解だったな)

アステイスは、エアリアに残してきたメリツサの事を思い浮かべていた。彼女がこの場にいたら、勢い余ってブラームスに立て付いたのではないだろうか。そうでなくとも、隣で怒りに震えられながらこの場を過ぎすのもやり切れない。

「それは由々しき事であるな。フロイデ准将、何か言い分はあるか」
ブラージュウスはやや間延びした声でそう言うと、己の目をアステイスに向ける。

ブラージュウスは、アステイスよりやや背が低く、体格も中肉中背といった感じであるが、武技の鍛錬はしているのだろう、手足の筋肉は上級武官並みに引き締まっている。

父よりは母の血を濃く受け付いたのか、栗色の髪にダブルブロックの髪型をしていて、顔立ちは平凡と言えば平凡だが、濠が深い。何より、線のように、とはいわないまでもかなり細い目をしている。そして、その青い瞳には暗さ、というよりも闇を伴う何かが宿って

いる。

一見するとどこにでもいそうな凡夫に見えなくもないのだが、その目だけは、異様なものとアステイスは肌で感じていた。その細く、底の無い目を向けられると、大げさに言うなら首筋に氷を擦り付けられているような気がするのだ。

「はっ、何分高い税率を設定されたため、今のままでは民心の掌握に今しばらく時を要するでしょう。少々引き下げられれば問題ありませんが」

ブラームスは見下す目そのままにアステイスを見る。

「税率を設定されたとはいささか心外であるな。あれは将校達の軍議で決めた事であるぞ。まさかフロイデ准将は、己の不甲斐なさをその場にいた彼等のせいにしようというのか？　そもそも貴公もその場にいたであろう。ちゃんとした考えを持っているならば、その場で案を提出するべきではなかったのか。私は貴公に多少なりとも期待してエアリアを任せたつもりだったが、それが出来なかったからと言って責任転嫁されては困るな」

（エアリアを任せた、ね）

やれやれ、べらべらと良く喋る豚さんだ。なるほど、あの場にいた将校達をも風避けに使うか。もし、こちらがブラームスを批判すれば、同時に彼等を批判することにもなる。しかし、このまま言われるがままにしておくのも少々気に食わない。

（　　）　しょうがない、予定通りこの手で行くか。名づけて？　毒を喰らわばお前の皿まで作戦？　だ）

口を挟んできたブラームスを冷ややかに見ながら、アステイスは

反論しながらも適当な落とし所を探す。

「そう、ですね。そこは確かに、私の不徳の致すところです。言葉が足りなかったようで大変失礼いたしました。若輩故の過ちとお笑いださって結構です。ブラームス將軍には日々ご指導頂いているのですが、そう、何分自他共に厳しい方ですから、中々付いていくのが大変で」

会議室内のそこかしこで笑いが漏れる。反比例してブラームスの顔から笑みが消えていく。

「今回の件に関しましても、その指導者たるブラームス將軍の顔に泥を塗ってしまいそうで大変恐縮なのですが エアリアでは現在の消費税率が48%でして、ブラームス將軍の仰るとおり、民達が怒りを露にしている状態です。流石にこれでは、という事で30%に減税したいと考えているのですが、……出来ればこの場をお借りして、陛下も交えまして皆さまのご意見をお伺いしたいと思います」

瞬間、どよめきが走り、会議室内は喧騒を帯びてくる。各将校や文官が近くの者達と顔を見合わせて談議している。ブラームスはざわざわと騒がしくなってきた周囲を不思議そうに見回している。

「48%……本気か。いや、正気なのか」

「……いや、まさか。フロイデ准将は平民の出自であるし」

「一体どういった経緯でそういう数字を弾き出したのか……」

「いくら中立国だったとはいえ……なあ？」

「……なるほど、悪評が立つのはそういう……」

ざわざわとした中から言葉の断片を聞き取り、自分の適当に決めた数字が如何に愚かしいものだったかを、目の前の豚さんはやっと認識したようだ。顔が一瞬青くなり、段々と元の肌色を通り越して赤色に染まってきた。

「まあ、30%辺りなら無難な落とし処ですな」

「うむ。味方に付いた街より低いのは問題あるし、そこまで取り過ぎと言ふ事もないだろう」

財務官達がそういうのを聞き、ブラーヂウスはさして興味もなさそうに頷く。

「良かるう。フロイデ准将、その税率でやってみるがよい。但し、己が如何に無茶で莫迦げた数字を設定していたか、今回かいた恥を教訓として常々忘れぬように」

「はっ、そのお言葉、肝に銘じておきます」

ブラーヂウスの言葉を聞いて顔を歪ませ、齒を軋ませるブラームスをアステイスは冷やかに一瞥し、ふいつと視線を逸らして席に付いた。

「そうそう、言い忘れる所であった」

特に滞りなく会議が終了し、皆が席に付いたままブラーヂウスが先に立ち上がるのを待っていた所で、ブラーヂウスがかつたるそうに口を開く。

「以前より通知していた通り、労いの意味も込めて三日後にクルート城で舞踏会を開く。中隊長以上の武官、並びに四等以上の文官は必ず出席するように。では解散」

ブラーヂウスはすつと立つと威厳ある態度で部屋を出て行く。俯

いていたブラームスが慌ててその後を追っていく様子が目に映った。金魚の糞、言い得て妙だ。

皇子が出て行った後、会議室は再び騒がしさを取り戻した。将校達は顔を見合せながらも、久し振りに美味いただ飯にあり付ける、と皆一様に喜んでいようだった。

そして、見事に舞踏会の事を通知されていなかったアステイスは一人顔をしかめる。

(……三日後。今からエアリアに連絡を入れたとして……無理か。連絡が届く頃には終わってしまう)

最後の最後に、やはりメリッサを連れて来るべきだった、とアステイスは後悔した。

883年 8月11日

いつもは鉄で出来た無粋な鎧や剣の置物等が置かれているだけの殺風景なクルート城の広大な謁見の間は、シャンテリアと紅の絨毯、白い大理石の丸テーブルと色とりどりの紙飾りでドレスアップされ、美しき舞踏会場へと変身していた。

名だたる紳士淑女たちが招待され、彼等の執事は城に雇われている使用人と共に燕尾服を身に纏い、冷たい飲み物やシャーベット等の冷菓をサービスしている。

何となく身の置き場がなく、熱気渦巻く会場からこっそりバルコニーに出て、一人涼んでいたアステイスは、手にしたシャンパンを

飲みながら夜景を楽しんでいた。ポツポツとした街の明かりが様々な色を放ち、夜の闇に映える。

ふと、後ろのガラス扉が開く気配がしてアステイスは視線だけ後ろに戻る。そこには、肌理細やかなモスリンをふんだんに取り入れた黒のドレスを身に纏った美女がいた。右袖に付けられた水色の基調のコサージュがアクセントとなって上品な風合いを醸し出している。

「あら、フロイデ様。お久しぶりですね、一年振りくらいでしょうか」

ふんわりとしたプラチナブロンドの美しい髪を靡かせて、女は恭しく、スカート裾を持ち上げて礼をする。その所作の一つ一つが、マナー本に載りそうな程の洗練された優雅さを伴っている。生粋の貴族とはこういうものか、とアステイスは感嘆した。

「これは、メルティアーノ様。……いえ、今はミレン様ですね。ご無沙汰しております」

アステイスも胸元に手を添えて礼を返す。

「堅苦しい呼び方は止めましょう。昔みたいにグレイスでいいですわ」

そう言って女は微笑む。

目の前の美しい女は旧姓グレイス＝メルティアーノ。中流貴族の出自ではあるが、一般的な見識も持ち合わせている数少ないまともな貴族の女性だ。今はアステイスの通っていた軍学校の二年先輩であり、友人でもある第七軍大隊長、ジルバート＝ミレン將軍の元に嫁ぎ、グレイス＝ミレンにその名が変わっている。

「畏まりました。そのドレス、良く似合っていますね」

心からの贅辞である。あとは周りに額縁をあつらえれば見事な女神の一枚絵だ。

「ふふ、ありがとうございます。フロイデ様のような素敵なお褒め頂けるのなら、まんざら悪い気分でもありませんね」

口元に上品に手を当てて、グレイスは目を細める。

「ははは。その言葉、そっくりそのままお返しいたしますよ。グレイス嬢は、今日はジルバートと一緒にですか？」

「ええ、そうなの。いつもあちこち飛び回っているみたいだし、こういう機会がないとあの方とゆっくり出来ないから。どうやら、まだ到着していないみたいですけど」

困ったような笑みを浮かべ、ふとグレイスは辺りをキョロキョロと見回す。

「どうかなされましたか？」

グレイスはアステイスを見る。

「フロイデ様。メリッサはどちらにいらっしゃるのかしら？」

ああ、とアステイスは思い出す。グレイスも一年程前まで副官を務めていたのだ。彼女とメリッサが親しい間柄だったのをアステイスはすっかり忘れていた。

「申し訳ありませんが、彼女は連れてきていません」

苦笑しながらアステイスは言った。

「あら、何でまた。さては、他に意中の女性でも？」

意地悪そうに上目遣いを送ってくるグレイスに、アステイスは慌てて首を振る。

「と、とんでもない。つい先日まで私はエアリアにいたので、舞踏会が今日行われる事を三日前に初めて知ったのですよ。それと知っていれば連れて来ていたのですが」

こればかりは、クルートに戻ってきたブラーヂウスに挨拶しに来るようアステイスに命じたブラームスも、嫌がらせではなく本当に忘れていたのだろう。覚えていたらこちらに来い、と呼ぶはずがない。自分がとことん嫌っている平民出のアステイスが、ブラーヂウス皇子主催の舞踏会に来るとなれば、彼は断固阻止するだろう。

グレイスは何事か考えているようだったが、はたと顔を伏せる。

「そう、それならいいわ。久し振りに会えると楽しみにしていたのだけど、本当に残念。もつとも、一番残念がるのは彼女でしょうけれど」

そう言っただけグレイスは細い眉を潜める。

「残念がる……ですか？　そこまで彼女がこういった催しに執着しているようには、とんと思えませんでしたが」

アステイスはそう言いながら酒を口に含む。

これまでも何回か、舞踏会への招待状は届いていたようだが、メリッサはあまり興味を示していなかったようにアステイスは感じていた。

「……フロイデ様も意外と鈍いですねえ。そうじゃなくてよ。自分の意中の男性と素敵な一夜を過ごす事ができなくてがっかりするのではないかしら、という意味です」

(……っ)

驚いた反動で口に含んでいた酒を一気に煽あおつてしまい、アステイスの喉が焼け付く。瞬間、咽むせそうになるが、何とかゴクリと音を立てて飲み干す。

「あら、もしかして心当たりないの？」

そんなアステイスを見て、グレイスは可笑しそうに口に手を添え

る。

「いえ、なくもないです、が」
アステイスはやっとそう答える。でしようね、と言いたげな顔を
してグレイスは夜景に目を移す。

「彼女、昔から一途に貴方の事を想っているみたいだから、もし貴
方に特別な相手がいるというわけじゃないなら、ちゃんと候補に選
んであげてね」

昔から……三年前から、ということだろうか。いや、それよりも

「あ、ジルがやっと来たみたい。女性をこんなに待たせるな
んで、失礼してしまうわ」

窓の外から会場内にジルバートの姿を見つけた彼女は、静々と歩
いて両手を片側のガラス扉の取手とってに添える。

「あ、グレイス嬢。今日の話の事は」

私にしなかつた事にして欲しい、そう言おうとしたアステイスだ
ったが、ガラス扉を開けかけた彼女に遮られる。

「そうですね。クルートの高級菓子店？セイレン？のバイキ
ングチケットで手を打ちますわ」

そう笑って、彼女はガラス扉を閉めると窓の向こうから軽く会釈
し、夫の方へ歩いて行く。

可愛らしい口止め料だな、とアステイスは苦笑するが

（ん……あれ？）

ややあって、アステイスはおかしいぞ、と首を傾げる。

してやられた。向こうから秘密を漏らされたのに、何で私が奢らなければならぬのだ。

あのおやかな微笑に流されてはいけない。あのお堅いジルバートですら彼女に籠絡されたのだ。彼女は決して女神ではなかった、人を煙に巻く魔女だ、とアステイスは渋い顔をする。

其の七　〜重なる掌（表）〜

883年　8月31日

テルネシア帝国上層部に減税を認めさせたアステイスは、舞踏会が終わった翌日に再びエアリアへ出立した。街に到着するや否や、直ぐに街の代表者たちを集めて減税の旨を伝え、彼等は一様に安堵の表情を見せると共に、アステイスに謝罪と感謝を示した。アステイスが戻る頃には城の修復作業もほぼ終わっており、エアリアは徐々にはあるが本来の姿を取り戻し始めていた。

報告と街の視察を終えると、アステイスとメリツサは連れ立って馬に乗り、エアリア城に引き返していた。今日はやたらと元気のない副官に、アステイスは少し首を傾げつつも緩やかな上り坂を進むカポツカポツと、乗っている馬の蹄が石畳をのったりとしたテンポで叩いている。

「ふう、これで懸念の一つが片付いたな」

「……そうですね」

斜め後ろから曖昧に相槌を打つ副官の様子をチラッと伺うと、やはり俯いたまま手綱を握っている。街の代表者達との会合も終始そんな感じであったので、アステイスは少し気がかりだった。

そうか、とアステイスはその理由に一つ思い当たる物があった。よくよく考えれば、代理とはいえメリツサに街を任せた事など今までなかったのだ。きっとアステイスがクルートに出向いている間、

しつかり重責をやり遂げねば、と一人で気を張っていたのだろう。強行軍のスケジュールで動いていたとはいえ、自分だけが疲れていたわけではないのに、とアステイスは己を恥じ入った。

「少し、疲れているようだな。明日から君に休暇を」

「そういえば」

控え目な彼女にしては大きめの声で、アステイスは語尾を打ち消される。

メリッサは微笑みながら二の句を継ぐ。

「クルートで盛大な催し物があったそうですね。……アステイス様は知っていらっしやいました？」

前振りのない話題に呆気に取られたアステイスは、はつと気づく。メリッサは舞踏会の事を言っているのだ。何でもその事を知っているのだろう、と疑問が過ぎるが直ぐにわかった。何の為にかは分からないが、ほぼ間違いなく、グレイス嬢が彼女に手紙で知らせただ。

何と誤魔化そうか、と湧いて出た考えを即座に捨て、アステイスは出来るだけ誠実に、でも今まですっかり忘れていた、という風体で話す。自分からその話題を切り出せなかった後ろめたさがそうさせたのだろう。

「あ……、ああっ、もしかして舞踏会の事か。そういえば、確かにそんなのがあったね。あちらに行ってからいきなり聞かされたから、正に寝耳に水だね。まいったよ本当、まいった」

わざとらしくなかっただろうか、とアステイスは己の言動を省みる。

(よし、大丈夫だ。ほぼ満点に近いはず)

メリッサはアステイスの表情を見返しながら穏やかな口調で続ける。

「それはそれは……、災難でいらっしやいましたね。……ところでアステイス様は、ダンスを嗜まれましたよね。……どなたと踊りになったのですか？」

顔は笑っているが目が笑っていない。さらに言えば声に起伏の一切が感じられない。普段は大人しいメリッサの妙な迫力に、アステイスは思わず唾を飲み込む。

彼女にはグレイスという優れた情報網があるのだから、下手に嘘を言ってもどうせばれてしまう。何より、彼女に嘘偽りを口にする事を己の心が由としない。アステイスは観念し、全て正直に話す事にする。

「……ナイトダンスは、マチュア様と踊った。二年振りに会ったけれど見違えるように大人っぽくなられていた」

メリッサの身体がビクツと震えたのが、アステイスにもわかった。

マチュア＝テレジアは、先帝アルイルの末娘だ。銀色の潤い溢れるさらさらの髪、琥珀色のつぶらな瞳。天真爛漫な彼女は、アルイルが以前、アステイスに嫁がせようという話が出ていた女性でもある。確か、今は15歳。兄を殺したブラージュウスも、実の妹である彼女を殺める利よりは、害が勝ると考えたのだらう。彼女に危害を加える事はなかった。

顔を少し引き攣らせながらも、メリッサは何とか言葉を紡ぐ。

「そ、そうですね。随分お楽しみに」

「メリッサ、明日二人で出掛けられないか」

唐突に話を切られ、メリッサは不満げに顔を上げる。

「話したい事がある。明日の午前十時に南西門の前に、馬に乗って来てくれ」

はつきりした口調でそれだけ言うと、アステイスは前の方に向き直った。

やきもきした感情を消化しきれぬまま城に戻ると逃げようとして自室に駆け込み、メリッサはそのままベッドに倒れ込む。

アステイスが舞踏会があった事を知らなかったというのは、多分本当だろう。ならば、もし知っていたら彼は自分を連れて行ってくれたのだろうか。

アステイスがマチュア・テレジアと踊った、という事もメリッサは気になっていた。先帝アルイールの末娘である彼女とアステイスとは、アステイスが秘書官として王宮に勤めている時に親しくしていたらしい。

メリッサがアステイスの副官になった時に、まず面食らったのがアステイスに届く手紙の量だった。仕事と交友関係のそれに紛れる大半はラブレター、見合い話、さる貴族からの舞踏会の招待状、デートのお誘いなどなど。

風の噂に聞いていたアステイスの人気ぶりは、実は氷山の一角に過ぎなかった事がわかった。

メリッサは副官になってから半年ほどしてその手紙の処理、つまりは分別と廃棄を任されたのだが、初めは淡々とこなしていたものの、開けて行くとたびに段々と苛々が募っていった。

（ちょっと……いくらなんでも多すぎるんじゃないかしら……）
手紙の中には熱烈な愛の告白もあったし、もっと過激な内容もあった。一言？抱いて？という直球ど真ん中も。しかも出したのは既婚者だ。メリッサは頭痛が独りでに増していくのがわかった。

チラツとアステイスの方を窺うと、彼はのんきに新聞を読んでいる。吹き溜まりの感情を発散させるために、メリッサは大きく息を付く。

「あの、フロイデ様。手紙を出されている皆さん、結構真剣に書いておられるようですが、読まなくても宜しいのですか？」

メリッサは疲れた目を瞬かせながら、さり気なく訊いてみる。努めて一年くらいの間は、アステイスの事を呼ぶ時に苗字の方を呼んでいた。

「ん、ああ。君も実際手を付けてみてわかると思うけれど、その手紙を見ているだけで一日が終わってしまうからね。仮に見たところで、そのお誘い全部に応えられるわけでもないし。真剣に書かれているのなら尚更、中途半端に読むのもかえって失礼だろう。最初言った様に、内容は見なくていいよ。用件だけ確認して、仕事と関係なさそうなら捨ててしまってくれ」

アステイスは新聞を読みながらもそう答えた。その言い分はもつともであるのだが、メリッサにはどこか釈然としないものを感じて

いた。

「ですが、いずれはフロイデ様だつてご家族を作られるのでしょうし。もしかしたらこの中に良い人がいらっしやる可能性だつてあるのでは」

そう言いながらも、心のどこかでその言葉を否定しているのがわかる。得にもならぬのに何故そんなことを聞いているのか、と自分が馬鹿らしくなった。

アステイスは肩をすくめる。

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。でも少なくとも、私はその手紙からは選ばない。……というか選べないというのが正しいかな」

「選べない？ 何故ですか？」

メリツサの問いかけに、アステイスはバツが悪そうに頬を掻く。

「……まいったな。……頼むから周りの連中には絶対言わないでくれよ？ ……実は、アルイール様に釘を差されているんだ。適当に選ぶくらいなら俺の娘を嫁に貰え、つてね」

(……なっ)

何秒間か頭にぼっかかりと空白ができ、メリツサの目が点になる。

アルイール皇帝には年頃の娘が二人いる。長女のリス皇女は既に結婚しているから末娘のマチュア皇女の方だろう。今はまだ十二歳くらいだと思つたが、いずれ成長してアステイスに嫁げば、アステイスはテルネシアの血族に名を連ねる、という事か。アステイス「テレジア、語呂も決して悪くない。いや、何で決まってもないのに、語呂とかそんな事を自分は思い浮かべているのか。」

思いもかけぬ心理的な一撃を受けて、メリッサの頬の筋肉がわなわなと震える。メリッサの頭の中には様々な感情がぐるぐると渦巻いていた。

「す、素晴らしいお話じゃありませんか」

声色が裏返り、顔が熱を帯びていくのがはっきりとわかる。

「……ふーん。やっぱり君もそう思うかい？」

アステイスの一見何の変哲もないその言葉を聞いて、しかしメリッサは打ちひしがれる。やっぱりと言う事は、満更でもなかったという事なのか、と勝手に解釈する。

「え、ええ。勿論です。マチュア様は非常に愛らしい御方ですし、家柄も申し分ないし、フロイデ様とお似合いだと思いますよ」

段々と言葉が早口になっていく。自分で言った台詞に勝手に傷つき、目が熱を帯びてきたのを感じたメリッサはアステイスから視線を逸らす。

「あ、私……そう、書類を取って来なくては 失礼しますっ」

メリッサは即座に立ちあがって扉へと向かおうとしたが、椅子の足に躓いて盛大に転ぶ。穿いていたタイトスカートが捲かれてメリッサのストッキングに覆われた足が露になる。

「メリッサッ、大丈夫かっ」

「だ、大丈夫 痛っ」

慌てて立ち上がろうとしたが、変に捻ったようでかなり痛みを感じた。痛みと情けなさで目尻からじんわりと涙が出る。本当、何やってるんだらう、と自分を恥じる。

おもむろに、ふわりとメリッサの体が宙に浮く。

「え」

いつの間にかメリッサの身体はアステイスの両腕に収まっていた。素早く駆けつけたアステイスがメリッサの脇に手を入れて抱き上げていた。やっと脳がそれを認識し、メリッサの身体が再び熱を帯びていく。痩せて見えるアステイスだが、しっかり鍛えられた硬い胸板が腕に辺っていた。

「フ、フロイデ様……」

メリッサの混濁とした感情を知る由もなく、アステイスはゆっくりとソファアーに向かい、メリッサをそつと下ろす。

「見かけに寄らず、意外とそつかしい所もあるんだね」

アステイスが微笑みかける。しかし、メリッサはその顔を直視できずにそつぽを向く。

「ちよつと失礼」

アステイスがメリッサの足首に手を伸ばす。

「うっ」

付け根の部分を押さえられた時、鈍い痛みが走り、メリッサは顔をしかめる。

「……やはり、典型的な捻挫のようだ。ちよつとそのまま置いてくれ。医者を呼んで来る」

「そ、そんなつ。これくらい歩け」

「駄目だ。捻挫つて意外と怖い怪我なんだよ。万が一、一生足を引き摺る羽目になったらどうするつもりだい」

言葉と目で制するアステイスに、メリッサは反論できずに俯く。

「私としても、折角見込みのある副官が来てくれたのにもう退官つて事になったら困るからね。じゃあ少し待っていてくれ」

微笑んでそう言うと、アステイスは立ち上がり、背を向ける。メリッサは、反射的にその背を視線で追う。

「ああ、それと」
扉を開けかけたところで、アステイスが立ち止まり、バツが悪そうに口を噤む。

「何ですか？」

メリッサは不思議そうな顔をして訊き返す。

「あー、その、そのままできてくれて言ったけど、……やっぱりスカートだけ直しておいてくれるかい。じゃあ」

「スカート……？」

首を傾げて自分の足元をもう一度直視する。

「……って、きゃあっ」

スカートが捲れ、ストッキングが伝線して白い下着が顔を覗かせている事に気付いたメリッサは、慌てて足を閉じ、扉が閉じた音と同時に捲れたスカートをバツと引き下ろした。

今思えば、僅か十二、三歳の少女に嫉妬するなんて本当にみっともない事だった。しかし、アステイスとの会話でマチュアの名前が出てきたのはそれが最初で最後だった。そう思っていたら今日その名前が出てきたのだ。

先帝アルイルが逝去した時は勿論驚いたが、メリッサは自分の感情を醜いと思いつつも心はどこかでホッとしていた。マチュアの話がうやむやになるのでは、と淡い期待を抱いたのだ。

「明日の話って……何なのかしら」

もしかしたら、マチュアと婚約しようと思っっている、とか言われるのだろうか。久し振りにあつて、昔抱いていた二人の仄かな感情が熱を生じて蘇ったのだろうか。

降って湧いたその考えに反応して、メリッサは枕を両手で握り締める。これはアルイールの死を少しでも喜んだ自分への罰なのかもしれない、とせんなき事を考えながら。

883年 9月1日

翌日、あまり眠れた様子でないメリッサが南西にある小さな城門へ辿り着くと、アステイスは既に着いて彼女の到着を待っていた。傍らには門番の帝国兵も二人並んでいる。

「お、遅れて申し訳ありません」

「いや、今来たところだ」

「フロイデ准将。職務中にデートですか？」

門番がニヤニヤとそう言い、メリッサの頬が少し赤くなるが

「そんなところだ。少し城を開けるけれど、宜しく頼む」

あっさりと認めて軽くそう言うと、アステイスはメリッサに「行くつか」と告げる。メリッサは呆氣にとられたままコクリと頷く。

門番達はお互いの顔を見合わせてから、去りゆく二人の後ろ姿に視線を転じた。

二人は街道から直ぐに外れてあぜ道に入ると、南西に見える山の方へと馬を走らせる。この辺りは田園が多いようで、収穫の時期が近づいているからなのか、かなり田んぼの中に人が多く見受けられた。美しい田園風景を横目に、二人は一時期より幾分和らいだ日差しの中を駆け抜ける。

「ちょっと前に街の人に教えて貰ったんだ。凄い景色が良いところがあるって聞いてね」

「そ、そうですね」

デートである事を認めてくれたアステイスに嬉しさと戸惑いを隠せなかったメリッサは、やはりアステイスがするであろう話の内容を考えていた。デートで他の女との婚約の話をするかといったら、可能性は著しく低いように思える。

山に近づくに連れて緩やかな傾斜が段々と急になると、馬の脚がややおぼつかなくなってくる。

「ここからは歩いて行った方がよさそうですね」

アステイスは辺りを見回して馬を繋げそうな木を見つけると、そこにロープでしっかり繋ぐ。メリッサもアステイスに従うように、同じようにする。

森の中に続く土道に入り、いきなり急になった坂道を登っていくと、体中から段々と汗をかいてきているのがわかる。まだ9月の頭という事もあり、日が高くなってくると残暑は未だ厳しい。蝉のジージーという鳴き声が、山の至るところから聞こえてくる。

時折立ち止まって息を整えながら、二人は上へと登っていく。登っていく途中で？人食い熊に注意？という看板が地面に刺さってい

たのでメリッサはヒヤツとした。襲われたらどうすればいいのだろうか。噂の死んだ振り？ ……でも、寝た振りとどう違うのかしら。そんな事を考えつつ、アステイスの後に続く。

「……身体、なまっているかな……もう結構きつくなってきた」

「……ハア……ハア……普段から私、身体は動かしている……ハア……つもりなのですが」

平地の運動と山登りとは負担のかかる部位が違うようだ。普段は何キロ走ってもなんて事ない二人だが、その表情は険しい。とくにメリッサの疲労は顕著で額からの大量の汗を拭い、肩で大きく息をしている。アステイスは流石に鍛えているのか、なまっていると言いながら、もう呼吸は普段通りに戻っている。メリッサはアステイスの底なしの体力に脱帽した。

「目的の……ハア……場所は、この先ですか？」

「ん、ああ。もう少しのはずだ」

アステイスはチラッと上の方を見る。ずっと先の方に、鬱蒼と生い茂る木の梢の中、小さく白い空間がぽっかりと空いている。森の出口の様だ。

「ここからは、メリッサが先に行こう」

「……え、何故ですか？」

「急な坂だから、万が一足を滑らしたら大変だろう？」

そう言われて、メリッサは自分の上ってきた道を振り返ると、その高さにくらりとして今度は冷や汗が流れる。下の方を見れば確かに、一度転がり落ちたらずっと下の方に見える木の幹に激突するまで止まらないかもしれない。

「わ、わかりました」

己の身を案じるアステイスの配慮に感謝しつつ、メリッサは森の

出口を目指して、崖に近い急な坂を上っていく。

息も絶え絶えに木の葉で出来たアーチ門を潜り抜けると、そこは見晴らし台になっていた。細い丸太で出来た木の柵が崖の手前にこしらえられており、その場所からはエアリアの城下町が一望できる。圧巻と言っても過言ではないその景色と、吹き抜ける涼やかな風に溜まっていた二人の疲れが吹き飛んでいく。

「凄い、いい眺め……」

エアリア城下町の南を流れる川や、北のゴルフレッド方面には緑萌える山々が目に映る。ここ最近では一番空気が澄んでいたのか、隅々まで見渡せる。

「素晴らしいな……」

アステイスも同意した。幼い頃、自分が母に連れられて行った、未開の山の頂上から見た景色を彷彿とさせた。強い山風が吹き付け、登頂した二人を祝福する。森の霊気を纏ってヒンヤリとしたその風は、汗だくになっていた二人にえも言われぬ爽快感を与える。つい先程までけたたましかった蝉の鳴き声すらも、今はどこか耳に優しい。

風で乱れる髪を掻き上げるメリッサを見て、アステイスは言う。

「髪、随分伸びたね」

メリッサは、何か唐突だな、と感じつつも笑みを返す。確かに、今のメリッサの髪はショートカットというよりもボブヘアに近いだろう。

「そうですね。アステイス様は、長い方がお好みですか？」

アステイスは少し考えた後、ゆっくりと言う。

「今くらいが丁度いいかな。良く似合っている」

ストレートな褒め言葉に、メリッサははにかみながら俯く。

「うん、今ならすんなり言えそうだ」

山登りによる動悸と共に、己の心が収まってきたのを確認すると、アステイスはそんな事を呟き、メリッサから二、三步後退して距離を取って畏まり、言葉を綴る。

「メリッサ＝ウランダー殿。お慕い申し上げます」

アステイスの真つ直ぐなその言葉に、メリッサは呼吸が止まる。全身が甘い痺れを伴い、震えているのがわかる。喉から鎖骨辺りにかけて麻痺してしまっただかのように、言葉を発しようとしても声が出てこない。

「不肖アステイス＝フロイデ、貴方と共にこの先にある景色を見たい。もしも、我が願いを聞き届けてくださるならば、お手を」

アステイスは腰から鞘ごと剣を抜き去り、ひざまず跪いて刀身をさか逆向きにする。メリッサは柄の方を向ける。それは姫が騎士への祝福を象る古の儀式。同時にそれを受ける騎士が示すのは唯一人に対する永遠の忠誠。テルネシア帝国の元となったテレジア帝国の、悪く言えば、い黴の生えた儀式だ。

メリッサは心の中でその言葉をじつくりと噛み締めながら、ゆっくりと一歩一歩、大地を滑るように、アステイスへと近づいて行く。アステイスの手にある差し出された剣の柄が見え、視界が滲む。

アステイスが跪きながらも、厳かに自分に近づいてくるメリツサの足元を確認しているのがわかる。その歩みが風音と共に止まる。

泣き笑いの表情を浮かべるメリツサの両手が、アステイスの剣持つ手に、そつと重なった。

其の八　　法王決起す（表）

イアニス教は、イアニス暦零年、テルネシア帝国の礎となったテレジア帝国が滅ぶ33年前に、アルマダ^{II}イアニスを教主として発足した宗教である。

人ならざる者から啓示を受けたとされるアルマダの教えは、これまで男尊女卑で通されてきたテレジア大陸に一石を投じ、その微細な波紋は、時を経て対岸に辿り着く津波のように大陸を包み込んでいく。

民達の多大な支持を後ろ楯にして、アルマダ率いるイアニス教はその存在感を増していった。そして、イアニス教の台頭は、憤懣^{ふんまん}やるかたない官主導政治を平然と行っていたテレジア帝国が滅んだきっかけの一つとも言われている。

その後、新たに興ったテルネシア帝国は、テレジア帝国の血の流れを汲んでいたが、二代目皇帝カレルヴォ^{II}テレジアは、対立するよりも人心を掴むのに利用しようと考え、イアニス教をテルネシア帝国の国教と認定してしまう。

大陸中央部から見てやや南西にある帝国領ベールには、初代アルマダ^{II}イアニス^{II}が啓示を受けたとされる神殿があり、イアニス教徒達に聖都と呼ばれている、人口二千人程の小さな古代都市だ。聖都と言われるだけあって、その街は古くから魔法の恩恵に肖っており、街を囲う外壁には防壁魔法の魔印^{マジン}が施されているため、少々の攻撃魔法ではびくともしない。

聖都の中に住んでいるのは名だたる修道士、司祭、僧侶等、聖職

者が殆どである。その中でも最高権力者は法王と呼ばれ、別称では教皇とも司祭長とも呼ばれる。世間一般では知られていないが上級修道士は皆、魔法を嗜んでいる。その影響もあって、カタルスタとも交流がある。

外壁の外には聖都を囲うように大きな街があり、イアニス教の信者達が平民達と共に大勢で暮らしている。

本来、イアニス教の戒律は十年に一度、聖都にいる上級修道士達によって議論され、法案が通った物から改定されるのだが、300年振りに大陸を巻き込む戦争が始まってしまったため、883年6月、緊急議案として武力の行使についての法案が法王から提出され、満場一致で可決されていた。

そして、その約三カ月後

帝国の各地での非道に心を痛めていたグルツセル「イアニスは、ブラージウス皇子との会談を経て、ついに重い腰を上げる。

寝巻きを着たままの帝国兵達が慌しく、馬のいる厩舎を目指して走っていく。直面した緊急事態を、一刻も早く他の帝国領へ伝えるために。

「こつちだつ、逃がすなつ」

後ろから幾度となく怒鳴り声が聞こえる。ベールに駐在していた

帝国兵達は複数のイアニス教団の魔法使い達に追われていた。

ベールにある帝国軍の施設で駐在していた兵達が食事を取っている最中、突如なだれ込んできた彼らは真っ先に、入り口から炎の魔法を一斉に放った。一瞬にして大部屋を火が埋め尽くし、部屋の中はさながらかまどのように熱される。突然の奇襲に、食堂にいた兵達の殆どは、抵抗する間もなく焼き尽くされた。

寝室で休んでいた兵達は凄まじい音に飛び起きると部屋の外に飛び出し、脇の階段を降りかけたが、それより先に運良く直撃を免れた、しかし熱風で全身の皮膚が爛れて死にかけている兵が階下から上がってきた。皮が焼けて剥き出しになった脂肪と髪の毛が焦げて妙な匂いを放っていた。

ふらりと前のめりに倒れそうな彼を、軍歴三年目のシロンが両手で支える。

「お、おいつ。しっかりしろっ」

もう目の焦点が合っていない彼を揺するが、彼は口をたどたどしく動かすに留まった。

「こっちは……もう駄目……だ。……窓から……逃げ……る」

彼はそれだけ言うと、シロンに支えられたまま、がっくりと頭を垂れて息絶えた。

ベッドの下に隠していた短剣を手にし、二階の寝室にある窓の手すりに手をかけ、下の芝生に飛び降りた兵達は、頷き合つと真つ暗な道をひた走る。

走りながらもシロンが辺りを隈なく警戒していると、真横の路地

の奥にかがり火が光るのが見えた。おそらく敵の軍勢だろう。間違
いなく、自分達の命を狙っているのだ。後ろから聞こえる声も、段
々と大きくなってきた。

「くそつ、食事中に襲ってくるなんて、なんて汚い奴らだ……」

シロンの横で走っている、相部屋の同僚が毒づいた。

しかし、この場の誰もがわかっていたはずだ。自分達がやって来
たことがそのまま返ってきただけなのだ。その証拠に、彼の言葉
に同意を示す者は一人もいなかった。

「……とりあえず、この場を脱しなければ」

よそ事を考えている暇はないと、シロンがそれだけ自分に言い聞
かせるように呟くと、周りの者達が力強く頷く。

「当然だつ。こちら子供が生まれたばかりだ。そう簡単に死んで
たまるかっ」

その言葉に、シロンは付き合って二年目の恋人の顔を連想した。

目の前が開け、両脇の建物が消える。畦道あぜみちの100m程先に大き
な厩舎が見えた。

だが、もう少しの所で前を走る彼らが急に立ち竦む。訝いぶかるシロン
が闇の中に目を凝らすと馬に乗った一人の男がいた。

(……っ)

>天あめより出は雨 弦ことばに触れるは雷かみなりの調 悉しつじつく彼の者達かたを奏ひびでよく

魔獣殺しとして余りにも有名な上級魔法の詠唱に、帝国兵達は目
を剥く。

「 皆、散らばれっ」

反射的に誰かが叫んだ声がシロンの耳に入った刹那

ヴァ・ライール
「鴉雷」

その言霊と共に無慈悲な白雷が発せられ、さながら昼間のような光を放ちながら辺り一帯を蹂躪した。

883年 9月29日

アステイスの屋敷は、クルートの南門から出て馬に乗っておよそ一時間半の所にある。非常に辺鄙、と言われてしまえば返す言葉もないが、牧歌的な雰囲気を持つ家から南に行くと、そう遠くない場所に鏡を思わせる広く浅い美しい湖がある。湖の中央まで行っても、大人なら水底に立っててしまうのだ。西側は森になっていて殆ど人の手が入っていないため、ここならではの珍しい動植物を見る事が出来る。東に少し行くとやや大きい村があり、しっかりとした市場もあるので一通りの買い物はそこで事足りる。食料品に関しては、街より一段階鮮度の良い品物を味わえる。お土産のお奨めは、断然地域特産の麦酒である。甘さとコク、仄かなバニラのような香りがするこの酒は、大陸でも非常に有名である。

夕方、久方振りに自分の屋敷に帰省していたアステイスは、各省庁からの報告書や議事録に目を通して見ている。非常に見やすくまとめられた書類は、メリッサが一括管理している。一見量が多いが、どうでも良い微細事項は消されていて要点も上手くまとめられているので、読むのにそんなに時間はかからない。ある程度学があれば、子供であっても内容を良く理解できるだろう。文官としての己の能力に自負を持つアステイスも、この文章構成力には舌を巻く。

「メリッサは、何故軍人を目指したんだ？」

記載事項をすらすらと書きつつ、アステイスは尋ねる。

「あら、いけませんか？」

メリッサは、揃えていた書類を持ちながらアステイスに視線を移す。

「いや、それは個人が自由に考えるべき事だが、上官としての意見を言うなら、少なくとも君の資質は、上を目指すならば軍人よりは文官に向いていると、私はそう思う」

「随分、はつきり仰いますね」

メリッサは微笑みながらも、手に持つ書類をトントンと机に当てて揃え、傍らに置いた。

「勿論、聞き流してくれても構わない。ただ、貴族階級の出自であるのに、一般階級の出自の者の下に配属される事に対しては、抵抗感がある者も多いと聞く。君はどうなのかな、と少し気になってね」

メリッサの父親はれっきとした貴族だ。わざわざ軍隊に籍をおいて、青春時代を厳しい訓練に身を躰たくまさずとも、普通の娘としての生活を満喫する事は出来たはずだ。

「……アステイス様は、私の事をどう思っているらっしゃいますか」
その言葉に胸を撫られるアステイスを横目に、小さい声で、？副官としてです？と彼女が付け加える。

「勿論、申し分ないと思っている。君がいなければ毎日がてんてこ舞いになるだろう」

心からそう思っている、とアステイスは自分の言に自信を持つ。

「それならよろしゅうございます。それから、私は階級などに拘ってはおりません。肩書きばかりの愚将が多い中、アステイス様の下で働ける事は、光栄に思っております。たまに会う同期の者にも羨ましがられているくらいですから」

メリッサの真直ぐな賞賛の言葉に、少し照れたアステイスは頬を掻く。その様子をメリッサは愉しげに見つめている。

そのうちに、アステイスはある事に気付く。

「軍人を目指した理由を、まだ聞いていなかったな」

「それは、少し長くなってしまいましたが、宜しいですか？」

アステイスは頷き、書類を片付けた机の上に肘を置く。

「丁度いいから休憩するか。イグニス、紅茶を用意してくれ」

屋敷に勤めて五年の小間使いの少年は、畏まりました、と礼をし、部屋を後にする。

メリッサはやや顎を上げて遠くを見るようにして、ゆっくりと語りだす。

忘れもしない私が十三歳の時、まだこの金色の髪を長く伸ばしていた頃の事でした。朝から雪が驟々（しんしん）と降り続く

その日に、私は家族水入らずで馬車に乗って外遊に出かけていたのです。その日はクルートのとある劇場で、名の知られた劇団の舞台を見に行きました。何度も笑った覚えがある事から劇はかなり面白かったはず……なのですが、その後の出来事が良くも悪くも鮮明に印象に残ったおかげで、実は内容を良く覚えていません。

正午過ぎに幕が降りて、私達が劇場から出ると、母は買い忘れた物がある、と言って姉と弟を連れて買い物に行ったので、その三人は私達と別の馬車で帰ることになった。父はそれについて暫くブツクサと言っていたが、私はいつもの事だと気にしなかった。

帰り道、朝から降り続いて2cm程積もった雪道には馬車の細い轍が何本も引かれていて、その端っこに人の行き来した足跡がたくさんあった。

車輪が滑らないよう、御者は慎重に馬車を走らせて行った。

父と御者と私、三人が馬車に乗って人気のない丁字路に差し掛かった時、左側の角から急に人影が馬車の前に飛び出した。御者は慌てて手綱を引き、馬車を止める。馬車は止まるのにややもたつきながらも、飛び出してきた人の2m程前でやっと止まった。

飛び出してきたのは長い杖らしき物を持った痩せた男だった。

「あ、危ないだろっ。気を付けろっ」

御者はその男に震える声で叫んだ。万が一轢いていたら、前方不注意でこちらの責任になる。一緒に乗っていた父が面倒くさい性格

なのは、その御者も良く知っていたため、下手をすれば人殺しになった上クビにされる所だったのだ。

急に止まったのにびっくりしたのか、父は肩をいからせて馬車の中から外へ出て行った。飛び出して来た痩せた男は馬車の前から動かず、父をニヤニヤと眺めていた。

「何をしているっ。通行の邪魔だ、早くどかんかっ」

父が腹立たしげにそう言うや否や、痩せた男は片手を上に翳した。その途端、前からは男の飛び出した逆側の角から、後ろからは細い路地裏から武器を持った男達が現れ、私達を馬車毎取り囲んだのだ。

「な、何だ貴様等はっ」

父と御者は面喰らっていたが、どういう状況かは察したようだ。

周りに助けを求めようとしたのだろうか、忙しなく目を辺りに動かしていたが、人の気配はなかった。ちゃんとそれをわかっていた上で、襲撃するポイントを絞っていたのだろうか。おそらく、彼等は土地勘のある者達だった。

男達は雪の上でも足元に不自由するような事はなく、慣れた様子で歩いていた。十数人はいたと思うが、皆黒い覆面を付けてちゃんと顔は確認できなかった。

「すまないが、有り金全部渡してもらおうか」

先ほど飛び出して来た、リーダー格と思われる背の高い、痩せた男は、杖の先端を外しながらそう言うと、覆面を付けた男達はへへへと不気味な笑い声を発して馬車の方に視線を突き立てた。馬車の中で様子を伺っていた私は、反射的に奥へ後ずさった。

「な、何を馬鹿な事を

」

言いかけた父の頬を、仕込杖の先端が掠めて父は腰を抜かし、ペたりとその場に座り込んだ。父は、家では良く自身の武勇伝を語っていたのだが、実は武術はからつきだったのだと、私はこの時初めて知った。

「じゃあ、お邪魔させてもらうぜ」

二人の男達が馬車に押し入ってきた。私はヒツと声を上げて身を竦めた。

「おやあ、可愛いお嬢ちゃんじゃないか。ええ？」

ニヤニヤ笑いを浮かべ、私を横目で見ながら男達は馬車の中の荷物を物色し始めた。父に助けを求めようと視線を送ると、尻もちを付いたままの状態で御者と一緒に周りを囲まれ、二、三人の男達に剣を突きつけられて全く動けないでいた。その格好がどこか滑稽で、自分の父ながら情けなくなつた。

それでも盗る物を盗れば、私達は解放されるのだと思つていました。だって、覆面を付けているんだから、私達は彼等の正確な顔が分かりませんし、無闇に殺す必要もないはず。幼い私は怯えながらもそう自分に言い聞かせていました。

ところが、馬車から50m程後ろの角を二人の軍服を着た男達が曲がって来るのが、馬車の中の嵌め殺しの窓から見えました。そして、彼等はこちらの様子を見て、顔を見合わせて頷き合った後、叫んだのです。

「そこで何をしているっ」

おそらくは、街の中を巡回していた帝国兵が、馬車に群がっている覆面の男達を遠めで見咎めて、こちらの異常に気付き、叫ぶと共に警笛を長く2回、短く1回鳴らした。軍に入ってから知った非常事態を周りに伝える警戒音だ。甲高い笛の音は馬車の内幕を震わせ、街中に響き渡る。

その音に馬車の中を漁っていた男は、相当に焦った様子でお互いの顔を見合わせた。このままここにいれば、大勢の帝国兵達が駆けつけて来るのは間違いない。外にいる者達も焦った様子だったが、馬車の中の一人が徐に私の方に顔を向け、目が合った。

「こいつ」

その男が太い腕で私の腕を掴む。恐怖で息を飲む様な掠れた声しか出来ない私を馬車から強引に引つ張り出し、肩に抱きかかえると、座りこんだままの父と御者を置いて、男達は私を連れてその場から逃走を始めた。

「待てっ」

巡回兵のうち、片方は座っていた父達の方に残り、もう片方、笛を鳴らした兵が私達を抜剣して追いかけてきた。彼は相当に足が速かったので、私を担いでいる男は焦ったのだろう。仲間目指示をした。

「来るなっ、それ以上追って来たらこの娘を殺すぞっ」

男達に担がれながら、首に剣を突きつけられた私を見て、巡回兵は息を呑み、その場に立ち止まった。

「へへへ……。く、来るなよ」

男達は引き攣った笑いを浮かべながらも後ずさる様にして、立ち止まって齒軋りしている巡回兵から距離を取り、おもむろに脇道に入って彼の身体を見失い、再び逃走を再開した。

その後も私を連れた男達は何回か兵達に見つかつたが、その度に私を人質にして難を逃れ、街中の路地裏をぐるぐると逃げ回つた。

「はあつ、はあつ……撒いたかつ」

追つて来た衛兵達を何とか振り切つて、冬にもかかわらず滝のような汗を流していた男達は、どこかの業者の倉庫らしき場所に入つた。おそらく、その場は長い間放置されていたのだろう。男達が歩く度に床から細かい埃が舞い上がり、私は目が痒くなつた。私を担いでいた男は、私を床に放り出した。腰を強く打って鈍い痛みが走り、私は悲鳴を上げた。再び舞い上がった埃が鼻と口から侵入し、私は思わず咳き込み、涙が滲んだ。そんな私を押さえつける様にして、のつぽの男は持つていた布で後ろ手になるよう縛り始めた。かなりきつく縛られたが、そんな些細な痛みよりも断然恐怖が勝つていた。

「騒いだら殺すぞ」

肩で深く息をしながらも、剣を突きつけてそう脅す屈強そうな男達に、私は嗚咽おえつを上げ、身を震わせるばかりだった。万が一泣かれたら面倒だと考えたのだろう、男達は念入りに、私の口も布で塞いだ。口でまともな息を吸えなくなつたため、かなり息苦しかった。

「でも、どうすんだよ。碌ろくなもん取れなかつたぜ」

私と同じくらいの背の小男が、甲高い声で床に胡坐をかきながらそう言った。

「へへへ、こいつを奴隷商人に売れば良い金になるだろ。まだ子供ガキだが中々別嬪べっぴんになりそうだしな」

のっぽの男がそう言いながら口の端を歪めた。

（私を、売る？）

どこか現実味のない言葉が耳に響く。こちらがその目を見るのも不快になるような、梅雨のねっとりとした湿気を帯びた、そんな眼差しで、男達は私を舐めるように見ていた。

「なるほどな、んじゃあ夜を待って移動するか。それで良いですかね、リーダー」

小男が痩せた男にお伺いを立て、彼は頷いた。

「な、なあ。俺、ちょっとだけ楽しんでいいか」

少しして、男達が完全に息を落ち着かせてきた頃、太った若い男が、とんと意味の分からない事を言った。

「何だ、こんな子供ガキが趣味なのかよ。救えねえ奴ガキ」
身長が180はありそうな体格の良い男が咎める。

「……ちゃんと口を塞いだままにしておけ。それから、傷物にするなよ。値が下がる」

腕を組んで壁に寄りかかっていたリーダー格の男はそう言った。

とにかく、話の流れから太った男が私に何かをしようとしているのだけはわかった。

「へへ、ありがとよ。流石、話が分かるぜリーダー」

太った男は満面の笑みを浮かべ、ゆっくりとこちらを見た。体中の血が凍りつき、何故か足の親指の先が刺すように痛んだ。

卑猥な揉み手で、その太った男はゆつくりと近寄ってきて私の穿はいていたピンクのフリル付きのスカートに手を伸ばす。涎よだれすら垂らしている男に、私は泣き腫らした目を剥き、足の踵で地面を蹴る様にして必死に後ずさりしたが、直ぐに背中が壁に突き当たった。今更ながら叫び声を上げようとしたが、布にしつかり塞がれた私の口は、いつもの高い声が出ず、くぐもった鈍い音を放つばかりだった。外に聞こえるべくもない、そんな音。

何とか縋れる可能性を探して視線を辺りに彷徨わせたが、私の必死なその様子を見て、ただニヤニヤと笑っている男達がいるだけだった。この場から逃れる望みは全くないのだと、思い知らされた。

嫌だ、という拒絶の感覚だけが、私の頭と心を支配していました。そんな私の気持ちを用意に介さず、太った男はにじり寄って来て私のスカートをついに掴んだのです。男が浮かべた醜悪あひくな笑顔に、不吉な想像が頭に浮かび、私は小刻みに首を振り、涙を流しながら目を瞑つむりました。

其の九 く幼き英雄（表）く

ボタン

男達は咄嗟とつさに扉の開く音に反応し、私から視線を外して入り口の方を睨にらみました。その瞬間、ねめつくような視線から逃れられた事に対する安堵からでしょうか、ふっと身体が軽くなつた気がしました。

いつの間に、雪が止んでいたでしょうか。開いた扉の隙間から差し込む眩い日差しを背に、長く伸びる影を共に、青いマフラーをした赤毛の少年が倉庫の中に入ってきたのです。子供の手には不釣合いな、長く細い剣を手にして、何故か目を瞑つぶりながら、ゆっくりとこちらに歩いてきました。

倉庫に入ってきたのが少年だけだと知って、男達は幾分ホツとしたようだった。

「……何だ、また子供ガキか。とつとと始末しろ」

入口から差し込んで来る光を直視しないよう、腕で遮っているリーダーの声に、何人かが頷いて立ち上がる。その様子を見ていないのだろうか、少年は歩みを止めない。コツ、コツ、と変わらぬテンポで倉庫内に小さな靴音を響かせる。立ち上がった男達は次々に抜刀し、少年の方を向いて薄ら笑いを浮かべている。

鞘走りの音が聞こえて、やっと少年は目を開けた。ずっと後で気づいた事だが、目を瞑っていたのは暗闇に目を慣らす為だったようだ。明るい場所から急に暗い場所へ入ると、または逆の事をする目にある虹彩という器官の作用上、一時的に視界が失われる事を、少年はその齢にして知っていたのだ。

「正義の味方のつもりかい、坊や。随分と落ち着いているじゃねえか」

リーダー格の男が話しかけた。その後には殺すつもりなのは間違いないが。

赤毛の少年は立ち止まって男達を見据え、そして私を見つけて、微笑んだ。

「金髪にピンクのスカート。間違いないなさそうだね」
呟くように少年はそう言い、男達に視線を戻す。多分、兵達に私の人相書きが配られていたのだろう。

「大人しくその子を返してくれるのなら、命だけは何とか助けてあげられるよう掛け合ってあげるけど」

一瞬、男達の太い眉がピクリと跳ね上がったのがわかった。赤毛の少年は丁寧な物の言い様だったが、それが反って男達の感情を逆撫でしたらしい。

「あーあ、怒らせた。怒らせちゃったよ、俺達を」
猫背の小さい男が、鈍く光るナイフを片手に少年を威嚇する。

「折角お楽しみの中だったのに萎えさせやがって、この代償は高くつくぞ」

私を襲おうとした太った男も、そんな事を言って立ち上がり、両

の手を組んで、ゴキ、ゴキ、と音を鳴らしながら少年の前に立ち塞がり、剣を抜いた。その様子を見て、赤毛の少年はクスツと笑う。その笑顔はどうみても、子供のそれだった。場にそぐわない少年の微笑みは、私の心を少し落ち着かせた。

「何がおかしいんだ、手前てまえっ」

太った男が声を荒げる。どうやら笑い方が余程癢しゃくに障ったらしい。少年は、微笑みを浮かべたまま、目を細めて太った男を見る。

「いや、だって。君がいちいち手の音を鳴らすからさ、ああそうか、きつと体術使いなんだね、って納得していたら、剣を抜いただろう？ 僕、そんな奴って初めて見たからさ。大の大人がそんな無意味な行動を取った事の意味を考えてみて、つい笑ってしまったんだ。不快にさせたなら謝るよ」

肩を竦すくめて（本人はそのつもりがないのだろうが）挑発する少年に、わなわなと全身を震わせ、顔を伏せていた太った男は、徐に顔を上げ、激昂げきこうして少年に襲い掛かった。それを皮切りに、周りの男達も次々と少年に斬りかかる。

その光景を目の当たりにし、少年の無残な姿が脳裏に浮かび、私は再びギョツと目を瞑つむる。

「ぎゃあああああっ」

「なっ、……ぐふっ」

数秒後、私の耳に聞こえたのは複数の、それも大人の物と思われる悲鳴だけだった。瞑つむっていた目を恐る恐る開けると、斬りかかった三人の男達は床に倒れ伏し、呻き声を上げている。いつの間にか、

少年の持つ剣の刀身は紅に染まり、下に向けた切つ先から血が滴り落ちていた。先程まで口元に浮かべていた笑みは既に消えていて、代わりにゾツとするような冷たさを放ちながら、表情を変えずに近づいて来る。

「て、てつめえっ」

瞬時に難敵と判断したのか、男達は間合いを取りながらも少年をぐるりと取り囲む。少年は自分を囲む十人近い男達を視線だけ動かして一瞥する。ふと、男達の身体の隙間から、震えながら成り行きを見守っている私と少年の目が合い、彼は、安心して、と言つかのように再び微かな笑みを浮かべた。

次の瞬間、少年は私との間にいた男二人に向かって腰を前に捻じ込むような体勢で深く踏み込む。音もなく男達に接近するや否や、少年は目にも止まらぬ速さで、手に持つ細身の剣で腰の高さから斜め上へと、斬り上げる様に空を薙ぎ、そのまま角度を変えて斬り下げる。刀身に纏わり付いていた血が真横の壁に跳ね、緩やかな曲線を描く。一瞬にして喉元を深く斬りつけられ、ふらりと頼りなく揺れる二人の男の身体を、少年は素早く横に押しつけて私の方へと疾走し、その背で私を庇う様にして、先程まで自分を囲んでいた男達に向きを変える。遅れて、押しのけられた二人の男がドスンと地面に倒れる音が聞こえた。何という早業だろうか。

瞬く間に二人の仲間を殺られた事に、男達はようやく気づき、その目に隠し切れない恐怖を宿しながらもこちらに突進しようとしたその時

「動くなつ、それ以上抵抗するならば遠慮なく蜂の巣にする」
投げ掛けられた声に足を止めた男達は振り返り、入り口に現れた大勢の帝国兵を見て仰天する。兵達の多くは手にボウガンを持ち、男達の身体へ狙いを定めている。男達は一瞬こちらを見たものの、槍を持っていたリーダーの男がチツと舌打ちしてその武器を床に放り投げたのを皮切りに、苦々しげに持っていた武器を次々と床に捨てると、両手を高々と上げた。

少年は、私の猿ぐつわを外し、腕を縛っていた布を外してくれた。久し振りに口が解放され、大きく息を吸い込んだが、まだ胸の動悸が収まっていなかった。細かく震えて座り込んでいた私に、少年は立ち上がって手を差し出すと、心配そうな表情をしながら私を気遣う言葉を口にする。

「大丈夫？ 怪我はない？」

「あ……」

私は返事をしようとした。大丈夫です、と。

ところが、少年の顔から差し出された手に視線を下げ、見てしまった。先程まで剣を持っていたその手は、男達の血で真っ赤に染まっていた。血で濡れていた少年の手から、ポタツ、ポタツと緩慢に血が滴っているのを見て、自分の顔が引き攣るのを感じ

しかし、少年の手は尚も近づいて来た。

「思い出した、あの時の　　本当かい？」

アステイスは目を丸くする。

「ええ、貴方様に助けられた少女が、私にございます」

やや照れくさそうに、メリッサは微笑んだ。

十年以上も前の、モノクロームの記憶が色付き始める。横たわる盗賊達、血塗られた己の剣、差し伸べた手に怯える少女の瞳。そして少女が発した？来ないでっ？という拒絶の言葉。こちらとしても血塗れの手を差し出すという失態を犯したので、後で冷静になって考えれば、当然の反応だ、とアステイスは自己嫌悪した。

「感謝の言葉すら口にせず、事もあるうに窮地を救ってくださったアステイス様に怯え、私は泣き叫んでしまいました。それに戸惑ったアステイス様が、一瞬私に見せた寂しそうな笑顔が、あの後になつて何度も脳裏に過り、堪え難い後悔が押し寄せてきたのです」

アステイスはセピア色の記憶を辿ってみる。そう、それでも無事に助けられたと思つてホッとしていたら、少女の父親とみられる男に突然後ろから弾き飛ばされ、口汚く罵^{ののし}られたのを覚えている。

暴漢達が連行された後、入れ替わりに一人の貴族然とした男が悲鳴を聞きつけ、倉庫にツカヅカと入ってきた。

「貴様、娘に一体何をしたっ。どこの部隊の子供^{ガキ}だっ」

アステイスに唾を飛ばして詰め寄る少女の父親を、帝国兵達が慌てて割つて入り、窘める様に説明する。

「お、落ち着いてください、お父さんっ。この子は暴漢達から娘さんを守ってくれたんですよっ」

「何が守つただっ。なら何故娘はあんなに怯えているっ。大体、こ

の街の警備兵は全くなつとらんつ。だからあんな連中にこのような無法を許したのではないかつ。全くどいつもこいつも弛んどるつ。

……はあ……はあ、こ、この件は軍法会議にかけさせて貰うからなつ。貴様等、覚悟しておけつ」

鼻息荒くそう捲し立てた少女の父親は、少女の腕を引っ張るようにしてその場を立ち去った。

「初めはただ一言、私と父の非礼を謝りたかつた。そして改めて、ちゃんと礼を述べたかつたのです。そう考えた私は、父と親しくしていた調査機関の者に、私を助けてくれた少年の素性を調べてもらえないか、と内密に頼みました。顔の特徴は良く覚えていましたので、あと知りたかつたのは、名前と所属部署くらいだったので、程なく、名前、住所、年齢、経歴、人間関係、健康状態、普段良く食べている物、好んで着ている服の色から、お尻にあるほくろの事まで、それだけでアステイス様の伝記が書けるくらいの資料が送られてきました」

メリッサは、何もそんな事までね、と苦笑しながら言ったが、私は背中を冷や汗が伝うのを感じた。一兵卒の情報を、そこまで詳しく収集できるとは笑い事ではない。

無意識に、尻のほくろの位置に手が伸びている。

「そして、貴方の資料を見ているうちに、別の感情が湧いてきました」

紅茶を一口飲んで、メリッサは一息つく。

「その頃まだ幼かつた私は、お友達と色々なお伽話に付いて、よくお喋りしていました。意外に思われるかもしれませんが、貴族の息

女等という者達には実のところ、それくらいしか楽しみがないのです。勿論、音楽や絵画を嗜む方も中にはいましたけれどね。そしてお伽話で殊更に私が気に入っていたものがありました。おそらくはアステイス様も御存じかも知れませんか。白い馬に乗った名も無き英雄が、窮地に立たされたお姫様を救い、一つの国を作る」

触りを聞いて、アステイスには一つ思い当たるものがあつた。「もしかして、バルンディアの英雄譚か」

昔々、バルンディアという小さな王国は、強大な敵国ゼルネーヴァの侵攻に悩まされていた。王は兵達を率いてゼルネーヴァ軍と必死に戦ったが、重心の裏切りにより敢えない最後を遂げ、帰らぬ人となる。

ゼルネーヴァは、残された美しくも幼い姫君を人質として差し出すようバルンディアに迫り、姫は民を巻き込むまい、とその申し出を受け入れようとする。

そんな折、白馬に乗った若者がその仲間達と共にバルンディアの国を訪れ、あるう事かゼルネーヴァの使者達と街中で争いを起こし、追いつ返してしまう。

傭兵として身を立っていた彼は、その姫君に死んだ自分の妹の面影を重ね、仲間達と共に協力を申し出る。若者は、誠実な人柄で周辺諸国の助力を得てゼルネーヴァに敵対し、身内の裏切りや仲間の死等、数々の試練を乗り越え、やがて姫との間にも愛が芽生えていく。

確か、そんな内容だ。六千頁を超える稀な長編小説だけに、アステイスも完全読破はしていなかったが、話を聞く限り、メリッサは

しているのだろう。

「当たり前です。そして、そんな世に知られた英雄譚とアステイス様の歩みが、私の中ではどこことなく被っていたのです。平たく言えば、多分貴方に憧れてしまったのでしょね」

それを聞かされ、買い被りも良いところだ、とアステイスは溜息をつく。どこをどうすれば、あの英雄と自分が重なるというのだろうか。とてもあの話に描かれている英雄の域には達していない。現状を鑑みれば、私はむしろゼルネーヴァの側ではないか。

不正を許さず、己の信念のみで行動し、苦しんでいる民を、美しき姫を救う。その理想の偶像をおぼろげに思い浮かべ、アステイスは憧れと諦め、二つの感情を抱く。

「なるほどね。中々、興味深い話だった」

「……む。随分と軽い物言いですらっしゃいますね」

メリッサは少々不満げだ。

「今の状態では、受け取り方によっては皮肉にも聞こえてしまうから。話半分に、聞いておくよ」

ちやかすようなアステイスの口振りに、メリッサは少し頬を膨らませるが、再び頬を緩ませた。

「それで、最初の話に戻るのだが」

「わかっていきます。確かに、謝罪するだけなら、会って話せば事足りたのですが」

深く息を吐き、メリッサは言葉を続ける。

「時が経つにつれて、あの時自分が置かれていた状況がどんなものだったのかをちゃんと理解して、出来ればちゃんと自分の手で恩返

しをしたくなつたのです。それが一つ」

もしもあの時アステイスが助けに来なかつたら、そう考えるとメリッサは今でも寒気がする。太った男に辱められて心に一生癒えない傷を負っていたのか、追い詰められた男達が逆上して道連れにしていたのか、それとも男達の当初の目的通り、奴隷として、玩具として売られていたのか。どちらにせよ、未来は真^{dark}つ暗だった。

そこから奇跡的に、無事に自分を救いだしてくれたアステイスに対する恩。それは、一生かかっても返しきれないかもしれない、とメリッサは考えていた。

「軍人を目指そうと腹を決めたのは二年後、十五歳の時です。勿論、アステイス様の件だけではありませんよ。そこは自惚れないくださいね。将来とか、……家族とか、色々思う所があつたのです。そして、何らかの形でアステイス様の力になれるようになって初めてあの時の謝罪と感謝を申し伝えようと、そう決めていたのです」

メリッサはそう言ってニコツと笑い、部屋中に色鮮やかな花が咲いたかのように、その空間が明るくなる。

「ですから、先程アステイス様から副官として？申し分ない？とお褒めの言葉を頂き、それを今、言う事に決めました」

ふいにメリッサは椅子から立ち上がり、姿勢を正して丁寧に礼をする。

「アステイス^{II}フロイデ様。私の過去の非礼をお許してください。そして　幼い私を助け出して下さって、本当にありがとうござい

ます」

感謝の言葉を口ずさんだメリツサは、顔を上げると天使のような微笑みを湛えていた。

その傍ら、無鉄砲な計画を暴露されて、アステイスは開いた口が塞がらなかつた。帝国にいる将校なんてそれこそ大勢いる。自分の副官になれる者なんていないに等しいのだ。そして、三年前の再編成の時は、希望者が殺到した者に対する副官の配属は、第三者による討議で決められたはずであつた。

「……ちよつと待つてくれ。いや、動機がそれだとして、特定の一人の副官になれる可能性なんて、相当低いように思うが？」

偶然だつた、というにはやや厳しい気がする。いや、もし自分に人気がとことんなければそれだけ可能性は上がるのだが。

（もしかや……実は私は嫌われていたのか？ ……まさか、倍率一倍とか？）

自分の副官になりたい、という者は、実はメリツサしかいなかったのではないか。アステイスは少々落ち込んでみる。いや、いないよりは全然いいのだが。

「仰る通りです。あの再編成時、副官候補者は200余名、アステイス様に対して配属希望票を出していた方が少なくとも30名はいましたね」

その殆どがうら若い女性だつたのですけれど、と言いかけてメリツサは口を噤む。そんな事を言つて喜ばせる必要性は毛頭あるまい。

「30……か。まあ、そこそこだな」

平静を装ってそう言いながらも、アステイスは大分気を良くしていた。

「そこそこって事はないです。ミレン様と人気をほぼ分け合っていましたから」

？女性士官の？という言葉を差し引いて、メリッサはアステイスに伝える。

「ジルバート、か。なるほど、納得した」

と同時に、やはり頭に疑問符が浮かぶ。30分の1をメリッサは偶然にも引き当てたと言う事か。

いや、それよりも

「……そもそも、何故そんなに詳しく票の内訳を知っているんだ」
メリッサは素知らぬ顔で視線を逸らす。

「……おいこら、メリッサ」

「……私が貴族階級だった事に、生涯で一番感謝した事がその点です」

首を傾げたアステイスを、メリッサは悪戯っ子のような瞳で見る。

「……あれ、わかりませんか？ コレ、です」

そう言って彼女は親指と人差し指でCの字を作り、片目を瞑る。

「……買収したのか」

「まあ、人聞きの悪い……。せめて交渉と言ってくださいな」
口に手を当てて、メリッサは目を細める。

アステイスは呆れながらも納得し、椅子の背もたれに寄りかかって天井を仰ぎ見る。

「……全く知らなかった」

「ふふ、良かったですね、私が暗殺者とかじゃなくて。アステイス

様は上の者には良いのですが、下の者に対して少し脇が甘いですよ」
先生が生徒を嗜めるように、彼女は腰に手を当てる。その仕草が
愛らしく、どこか憎たらしく、アステイスはスツと立ち上がり

瞬時にメリッサとの間合いを詰める。呆氣にとられた彼女の、細
い腰を抱き寄せる。彼女が微かに息を呑むのが聞こえた。

「脇が甘いのは、お互い様だな」

己の額をメリッサの額にコツンとあて、アステイスはニツと笑う。
互いの顔に互いの吐息がかかる。そして二人は、どちらからという
事も無く、ゆっくりと唇を重ねる。

蒼く淡い月の光が白い布地のカーテンを幻想的に照らす。薄暗い
部屋の中で、二人は屋敷の二階にあるベッドに横たわっている。ア
ステイスは、直ぐ隣に横たわっている一子纏わぬメリッサを愛おし
そうに見つめている。

ふとした悪戯心いたずらから、陶器の様なメリッサの背筋につつつ、と指
を這わせてみる。彼女はくすぐったいのか、くすくす笑いながら身
体を振よじって逃げようとする。

「もうっ、ちよ、ちよっつ、……あんっ、ア、アステイス様っ」

最後にはバシツとその手を叩かれてしまう。膨れっ面をして背を
向けるメリッサにアステイスは笑って詫びる。

「昨晚の話で、君は？それが一つ？と言った。もう一つは？」

ベッドの上で、白い布一枚に包まれたメリッサがこちらを振り向き、視線が絡み合う。

彼女は憂いを帯びた瞳でアステイスを真直ぐに見据えたままに、ゆっくりとその口を近づけると、愛する男性の耳元で囁く。

「貴方の傍で見届けたかったです。本当に英雄が存在するのかを……貴方の歩む道を」

其の十　く災いを纏う者（表）く

883年9月18日、新生テルネシア帝国の皇帝ブラージウスとイアニス教団の法王グルツセルは、大陸中央部のエル・クレスの城にて会談を行った。周辺諸国には仔細しさいを明らかにされなかつたこの会談は、皇帝に同席したブラームスが話し合いの場で法王の側近を斬り殺す、という最悪の形で終焉を迎えてしまう。

捕らえられそうになつた法王は、殺された側近が己の死と同時に発動するよう仕込んでいた転位魔法によつて城外に難を逃れ、供の者達に守られながらベールに引き返す。そして、己を文字通り命と引き換えに守ってくれたルフランという女性を、教団を挙げて追悼したのである。

帝国将校の中にも不信を抱くものが続出する中で起きたこの暴挙は、テルネシア帝国内に大きく影を落とすことになるのだつた。

883年　10月3日

秋も深まる頃、帝国の将校達は再び東への侵攻の検討を始めました。ネルガルの街からそのまま東に進むとミード領、南東に行くともリスノリス領、又はシャンテール領がある。エアリアやネルガルといった小国とは違い、それなりに規模の大きな東の国々を前にして、各将校達も慎重に話し合いを進めている。

バン

そんな折、どこかの伝令兵が血相を変えながら、ノックもせず
会議室に飛び込んで来る。扉の開く大きな音に、その場にいた将達
は不快そうに入ってきた伝令兵に視線を集中させる。

「何事だ、騒々し……お主、その傷はどうしたのだ」

伝令兵の腕や足には火傷の痕が見受けられる。魔法による外傷に
見られる特徴だ。それを見て、何かしらの予感を感じ取った何人か
の者は険しい表情を作っている。

「会議中にご無礼をお許しください。私はベールに駐在していた、
カレルヴォ隊所属シロン・アウニオでございます」

ベールと聞いて、将校達の顔色が変わる。必死に息を整えている
伝令兵の二の句を待つ。

「も、申し上げます。……六日前にイアニス教団法王グルツセル
が南部の都市ベールにて、帝国からの独立を宣言。並びに、我ら
帝国に対して宣戦布告致しました」

伝令兵の報告を聞いて、その場にいた諸将は目を丸くして動揺し
ている者と、目を細めて納得している者と真つ二つに分かれた。

「……帝国軍の施設は軒並みイアニス教団の兵達の奇襲に遭い、ベ
ールに滞在していた我々帝国兵三百人は脱出を試みましたが、敵の
追撃は執拗を極め……仲間の殆どが脱出する事叶わず。……無念で

「ごぞいますっ」

伝令兵は膝を付き、顔を腕で覆う。流石にその報告には皆が眉根を潜める。珍しく軍議に顔を出しているブラーヂウス皇帝、ただ一人を除いて。

「……聖職者ともある者が、こともあるうに虐殺とはな」

伝令兵に肩を貸して部屋の外に連れ出した中隊長は、中に戻って来ると顔をしかめながら言った。

「……間違いなく、先日の件だろう。理想ばかりを口にして大衆を惑わす妄想家が、随分と大それたことをやったものだ」

そう言ってガツシュエウゲンはやれやれ、と首を振る。

続いて、コステイブラームスが机に拳を叩きつける。所作だけのつもりだったのだろうが、思いのほか大きく鈍い音が鳴る。力加減を間違えたのだろう、顔は痛みに堪えているものの、手はプルプルと震えている。

「た、ただちに兵を送れ。ベールのような小さな街など、二万もあれば十分だろう。我々に逆らえばどうなるか、見せしめだ。周辺の街共々建物の原形を留める事無く破壊してしまえ」

将校達は戸惑いながらも、副官や近くにいる別の将校達と囁きあっている。段々とざわめきが増してきた中、静かにアステイスが口を開く。

「ただちに、は無理です」

きっぱりとした口調に、将達の視線はアステイスフロイデに注

がれる。

「……何だと。フロイデ准将は」

何か言いかけたエウゲンを手の平で遮り、隣に座っていた第7軍大隊長ジルバート「ミレンもアステイスに同調する。

肩まで届かぬくらいのウエーブの金髪に、青き瞳を持つ彼は軍学校の二年先輩であり、メリツサの親友グレイスの夫にしてアステイスの友でもある。文武両道にして名門の貴族、アルイールの御代に史上最年少で將軍職についた傑物で、いけ好かない上層部の中で唯一、アステイスが認めている男である。

「我が軍の将や上級兵達には、イアニス教徒はいません。ですが下級兵達の中には、敬虔けいけんなイアニス教徒が大勢います。おそらく、割合にして4分の1近い。そのような状態で法皇に剣を向ければ、その命令を出した我々上層部に対して確実に禍根かこんが残るでしょう」

それに、とアステイスが付け加える。

「今現在、不穏な動きを見せているのはベールだけではありません。未だ東部の都市群は平定されていませんし、今まで沈黙を守っていた隣国のカタルスタも、ベールとは少なからず親交があると聞きます。法王が拳兵されたとあれば、どのような動きを見せるかわかりません。一先ずは傘下に入った都市の安定を」

バシヤツ

将校達が熱心にアステイスの話に耳を傾けている最中、突然ブルームスがアステイスの顔に、飲んでいた果実酒をぶっかける。零れた酒から放たれた強いアルコールの香りが、漂いながら周りに霧散していく。

「アステイス様っ」

隣に座っていたメリツサが、目の前の暴挙に思わず叫ぶ。

「……っ。ブラームス殿、何をされるかっ」

ジルバートが嗜めるが、ブラームスは意に介さずアステイス達を詰る。^な詰る。^じ

「黙れ売国奴共がっ。悠長な事を言っていたら、それこそ今まで抑えていた勢力が付け上がって国が乱立するわっ」

アステイスは、ヒップポケットから白い清潔なハンカチを取り出して顔を軽く拭くと、真っ直ぐにブラームスの瞳を見据える。睨むブラームスと視線が絡み合い、その場にピンと糸が張り詰め、息が詰まる。普段の諍いとは一味違う二人の雰囲気、将校達は固唾を呑む。

「流石は將軍、良く分かっていらっしやる。こうなつては、あれ程広大な領土の維持は、もはや新生テルネシア帝国のみでは不可能です」

「何い」

ブラームスは眉間に皺を寄せる。周りの将校達も、アステイスの言に目を瞪る。ブラージウスのいる席でのその発言は、下手をする^と命取りになりかねない。

それを知つてか知らずか、アステイスは語気を強める。

「来るべき時が今来ただけの事。但しそれを早めてしまったのはブラームス殿、貴方ではないか」

アステイスに指を突き付けられたブラームスの顔が、怒りで激しく歪んだ。

事の始まりは一月ほど前、イアニス教の上層部から戦争を止めるようにとの、再三の嘆願書が届けられていた時期に端を発する。法王グルツセルが直々に、ブラージウス皇帝との会談の場を設けて欲しいと文を送ってきたのだ。

おおよそ、法王側が何を言いたいのかは帝国側にも察しが付いていた。元々、テルネシア帝国ではイアニス教という宗教が国教として広く浸透していた。アルイールの御代が終焉を迎え、程なくアンドレイとブラームスの戦争が始まってからは、今までに類を見ないほど数多くの教徒達が犠牲になっているのが現状である。

慈悲深い法王としては、信者達がただ死んでいくのに心を痛め、アンドレイを討ち取った後も、侵略の手を緩めず、逆らう者に虐殺の限りを尽くすブラージウスを、可能な限り^{たしな}宥めたかったのだろう。

678

意外な事に、大半の者が断るだろうと予見していた会見の申し出を、ブラージウスは快諾した。そして、二週間ほど前に大陸中央の都市、エル・クレスで会談が行われた。

ところが、ブラージウスとブラームスはまともな話も碌々しないうちに、グルツセル達が無礼を働いた、と言いがかりを付けて口汚く罵った。

その場にいた者達に話を聞く限りでは、その無礼の内容は、帝国側が用意した^{ばんさん}晚餐の中に、イニアス教において神格化されている動物の肉が入っていたのを理由に、法王達が食べるのを拒んだ、というものだった。

名の知られた法王に対し、こちらとしても敬意を表して勝手な申

し出を聞き、会談の場まで設けてやったのに、折角こちらが吟味しつくして用意した歓迎の料理に手をつけないとは何事か、といちやもんを付けたわけである。

それだけで終われば、まだ救いはあった。

しかし、異なる文化や風習さえも理解しようとしなない、その傲慢な態度に憤ったのだらう。法皇側近のルフランという女性がブラージウス達に対して、やんわりと批判の言葉を口にしたらしい。

ブラームスは即座に剣を抜いて、その女性をよりによって法王の目の前で手打ちに、つまりは殺してしまったのだ。その女性が法王の幼少からの側近だった事もあり、慈悲深き法皇もついに堪忍袋の緒が切れた、というわけである。己の家族に等しい者を殺されてまで、黙ってはいられなかったのだらう。

「会見の場だというのに帯剣していた肝っ玉の小ささにも呆れるが、それ以上に無抵抗の女性を殺害するは騎士としてあるまじき事、貴公の落ち度としか言い様があるまい」

アステイスの厳しい言葉に応じ、ブラームスは言い返す代わりに剣を抜く。周りで座っていた者達は途端に顔色を変える。メリッサは反射的にアステイスの裾を掴む。

「やめなされブラームス殿っ、陛下の御前ですぞっ」

流石に止めないとまずいと判断したのか、血相を変えながら周りの者達がアステイスとブラームスとの間に割って入るが、ブラームスは彼等の腕を払いのけつつも、鬼のような形相でアステイスに向かおうとする。

「ええい、邪魔だ、どけいっ。……奴隷同然の一般階級がこのよう
な無礼、断じて許すわけにはいかぬっ」

止める将兵達に腕を掴まれながら、ブラームスはアステイスに尚
もにじり寄ろうとする。アステイスは立ち上がりながらも、それを
冷然と見据える。隣にいるメリツサが息を呑む音がアステイスの耳
に入る。

「やめよ、ブラームス」

周りの静止を振り切って、アステイスに斬りかかろうとしていた
ブラームスだったが、間延びしたその声には反応した。ブラーヂウ
スの声だ。座っていたブラーヂウスはアステイスに向き直ると、言
葉を続ける。

「フロイデ。ブラームスとて、何も好んでそのような事をしたわけ
ではない。余が彼奴らに馬鹿にされたのを、どうしても腹に据えか
ねただけだ。それを先程のような侮蔑同然の物言い、流石に如何な
物かと思うが」

ブラーヂウスの言葉を聞き、ブラームスは勝ち誇ったように満面
の笑みを浮かべる。他の者達はブラームスの怒りが収まってきた事
に少し安堵し、躊躇いながらも手を離していく。

アステイスはブラーヂウスに向き直る。交わる事のない緋き瞳と
暗き瞳が克ち合う。ブラーヂウスは微かに眉を上げる。

「馬鹿にされた、でございますか。僭越せんえつながら、イアニス教徒がど
のような戒律を持っているか、陛下とて御存じでありましょう」

「うむ、それで」

ブラージウスは面倒くさそうな顔をしてアステイスに二の句を継がせる。

「少なくとも、晚餐の内容を手配したのは陛下ではありませんまい。それは下の者の落ち度ということで、教団の者達が直接陛下に対して批判されているわけでは」

「フロイデ。貴様もわからぬ奴だな」
ブラージウスは目を瞑りながら首をゆっくりと振る。

「……は」
声が微かに漏れ、アステイスの瞳が揺らぐ。

「皇帝たる者は、全ての上に立つ者だ。少しでも余が見くびられたと感じれば、その者を許すわけにはいかん」
ブラームスを始めとして、何人かの将がその言葉に追従し、頷いている。

(この男は……)

ブラージウスが語るそれは、まるで赤子にのみ許される特権のようだった。少しでも気に入らない事があれば泣き喚く。周りの者達はそれに戸惑いつつも宥め賺す。

それを国の頂点に立つものが本気でやったらどうなるか。それは、今の大陸の混迷が現しているではないか。

「ブラージウス様、貴方は」

或いはこの時、次の言葉を発すれば、アステイス「フロイデはここで呆気なく殺害されたのかもしれない。しかし、幸か不幸か、ブラージウスは二の句を継がせなかった。

「それから、貴様は先程、晩餐ばんさんの手配をしたのは余ではない、と言ったが、それも違う」

ブラージウスの言葉にアステイスは、一瞬眉根を潜め、直ぐに理解する。

「まさか」
「戒律で禁止されていようが、余の命令は絶対なのだ。何故なら余の存在は神に等しい。それを軽視したのだからその罪は重い、わかるな？」

わざわざ用意して出したと言うか。食べれるはずのない物を。

(……災厄)

アステイスの脳裏にその文字だけが過ぎる。

アステイスの心の揺れを察することなく、ブラージウスは話を終つひへと導く。

「今の余の発言、貴公らもゆめゆめ覚えておくように。余に逆らう事は」

絶対に許さんぞ。

ブラージウスは周りにゆったりと視線を動かし、名立たる猛将達が戦慄するほどに醜悪な笑みを浮かべて、そう言った。

会議が終わった後、ブラージウスはブラムスを伴って廊下を闊歩し、寝室へ向かう。

「今夜も楽しめるのであろうな」

ブラーヂウスの問いに、ブラームスは恭しく礼をして答える。

「はは、各都市からの選りすぐりを揃えてございます」

ブラーヂウスが好色家である事を、ブラームスは良く心得ていた。ブラーヂウスの欲求を満たすために、兵達に命じて街で評判の娘をかどわかし、或いは家族を殺すと脅しては、連れて来ていた。

生粋のサディストと言って良い程、ブラーヂウスの内面は歪んでいた。実の父親のアルイールも、残酷な性質を持つブラーヂウスの事を持て余していた。そのため、ブラーヂウスには物心がついたころから、兄のアンドレイが贖罪されてきた記憶しかない。

その嫉妬は余程の物だったのだろう。ブラーヂウスが、マリスノリスから送られてきた兄の首を見た時には、それこそまな板に乗せられた新鮮な活ウナギのように、ベッドに床に、狂喜乱舞したのだ。

もし、コステイ・ブラームスという男がアステイス・フロイデに唯一勝っているものがあるとするならば、それは処世術だ。己がより高い権力を得る為なら、土下座だろうが、人殺しだろうが、やる事を厭わない。兄弟で戦争が始まった時にも、どちらにでも取り入れられるよう、周到に情勢を伺っていたのだ。権力のためには平然と誇りを捨てる事が可能であり、部下の事等一切考えずに済むブラームスの思考は非常に尻が軽く、己の体格に反して精神的な意味でフットワークが軽かった。

「しかし、アステイスという男。どうも気に入らん」

そう言ったブラーヂウスは、どうも、というのは正確ではなかつ

た事に気づく。気に入らない理由は、ブラージウスにははっきりとわかっていた。あの男はアルイール皇帝に、父に似ているのだ、と。

ポツリと呟いたブラージウスの言葉に、我が意を得たりとばかりに、ブラームスは頷いた。

「やはり、陛下もそう思われますか。いずれ、奴は必ずや、陛下に害を及ぼします。今のうちに何らかの手を打った方が良いかと。少なくとも、軍の指揮権は剥奪はくたつした方がよろしいかと存じます」

「わかった、よきに計らえ」

やや間が空いて、ブラージウスはそう言った。ブラームスには、ブラージウスが殆ど上の空で答えたように見えた。もう今は、今夜自分が甚いたぶ振る女の事しか頭にないかのようだった。

ブラージウスが自分の寝室に姿を消すと、ブラームスは軍議で自分をこけにしたアステイスの顔を思い浮かべ、憎しみに拳を震わせる。

(……この屈辱、このままではすまさぬぞっ)

そしてふいに、憎き男の傍らにあった女の顔が、ブラームスの脳裏を過った。

其の十一　く好敵手（表）く

帝国軍はブラージウス皇帝が率いる皇軍を筆頭とし、その下は大きく分けて九つの軍で構成されている。但し、上層部は必ずしも一枚岩というわけではなく、ブラージウスに取り入って出世した者達と、一般の出自ながらも、下積みから頭角を現して出世した叩き上げ、と言われている者達が別々に派閥ははつを作っているような状態だ。そしてその下には、当然の如く多くの一般兵卒がいる。割合、どのような組織でも良くある形だ。

アステイスⅡフロイデは平民の出自ながら、治安維持の施策、盗賊討伐などで実績を上げ、十五歳の時に先帝アルイールの目に留まり、三年前には貴族階級以外の文官で唯一、軍を預かる身となった。そこまで登り詰めたアステイスがわかった事は、表面には出てこない軍上層部の腐敗具合であり、貴族の士官と民兵との決して相容れない性質であり、一見盤石に見えるテルネシア帝国の危うさだった。テルネシアという大木は中から見れば虫食いだらけの朽木であり、頂点にアルイールという、傍若無人且つ深謀遠慮、交わるはずのない二つの性質を持つ稀代のバランス師がいて、辛うじて帝国の均衡が保たれている状態だった。

そのアルイールも今はなく、テルネシア帝国は明らかに悪い方向へと暴走を始めていた。

883年 10月4日

会議の後、再び自宅に戻っていたアステイスは書齋に籠り、自らの取った行動について省みていた。自分としては、と言うよりも一般的な常識に照らし合わせて正当な意見を述べたに過ぎなかったのだが、それがブラームスの敵意を強くしたのはほぼ確実だ。警戒感を強く持たなければ、と唇を舐める。

今まで自分にあの手この手で嫌がらせを仕掛けてきたあの男は、その愚かさゆえに行動を読めないところがある。

それより気がかりなのが、ブラーヂウスとの会話だった。普段、彼は軍議に出る事が滅多に無いため、直接話す機会が殆どなかったが、今日のやり取りではつきりとわかった。あの男には、最早更生の余地は無い。己の愉悦を貪るためだけに、その才能とテルネシア帝国という強大な力を利用し、テレジア大陸に住まう者達に憎しみと言う名の、完治し難い病^{がた}を振りまく病原菌と成り果てている。

いつか、正面きって相対しなければならぬ時が来る、とアステイスは確信していた。

しかしながら、アステイスには帝国に抗い難い二つの理由があった。

一つは、メリッサ以下、部下達の事。

当てもないまま軍を離脱すれば、付いて来ようが来まいが彼等は苦境に立たされる。もしメリッサが付いて来てくれたとして、自惚れではなく、付いて来てくれると確信していたアステイスだが、帝国貴族である彼女の家族は当然敵に回る。直接斬り合うような真似は絶対させないにしても、親子同士で敵対させる事には逡巡^{しゅんじゆん}してし

まう。もっとも、付いてこなければ上官の謀反を見抜けなかった等
と言って、何らかの形で処分される可能性が高いのだが。

他の部下達にしても、給与に関しては最悪の事態に備えて貯蓄を
しているから心配ないが、兵達の家族に対しては、帝国領に残って
いれば人質にされる恐れがあるから、亡命という形を取って貰う事
になる。住み慣れた住居を手放させるのは心苦しい。

そして致命的な事に、テルネシア帝国に反旗を翻したところでブ
ライジウス達に勝てる可能性は、現時点では皆無に等しかった。そ
のような状態で、部下達の命を懸けるに等しい行動に移ってしまう
わけにはいかなかった。部下の無駄死には、アステイスが最も敬遠
する物だった。

そしてもう一つの理由は、先帝アルイールに対する感謝の念だっ
た。

アステイスはフロイデの両親は、ごく普通の一般人だった。父親
は図書館に勤める役人、母親は珍しい動物の保護調査研究員。少々
癖はあるが、そんな両親の下で、クルートの街にある白い屋根の一
戸建てでアステイスは幼少期を過ごした。

アステイスは小さな頃から本を読むのが好きで、父の職場にちょ
くちよく顔を出しては本を読んでいた。その図書館にある蔵書数は、
帝国の管理下に置かれていた事もあって半端ではなかった。絵本か

ら始まり、物語、伝記、統計、世界史、生物学、そして戦術。アステイスはそれらの本に囲まれ、図書館にいる大人達も幼いアステイスを可愛がり、人間性豊かに育っていく。

父は、我が子の並外れた記憶力と成長の早さに常々驚きつつも顔を綻ばせていたが、アステイスが八歳の時に、深夜、帰宅途中に歩道を歩いているところを、暴走して歩道に乗り上げてきた馬車に轢かれ、帰らぬ人となった。

それまでも働いていた母は、アステイスを誰かに預ける事はせず、一人家に残す事もせず、自分の職場に連れていくようになった。母の仕事は、時には野山を隈なく駆け巡るような事もあったが、それでも彼女は躊躇ためらいなく息子を同行させた。獣に襲われた時の為に息子に護身用の剣を持たせ、暇を見て己の習得している剣術を教える様になった。

アステイスは、それまで母親が剣を扱える事すら知らなかったが、教えられるその剣術を貪欲に吸収していった。母は、父と同じくアステイスの成長の速さを喜んでいたが、アステイスもまた、母親の計り知れない強さに驚いていた。はつきり言って、そこらの腕自慢の騎士や傭兵等比較にならない程に、彼女は強かったのである。

何故こんな仕事に甘んじているのかアステイスは不思議だったのだ、一度それについて母に尋ねた事があったが、真っ先に返ってきたのは拳骨だった。

「なーにが？甘んじて？よ。全く、失礼な息子ねえ。当然、動物が好きで好きで堪たまらないからやっているの。他に自然動物に携たづなわれる

仕事なんて、まあね、そのうち増えるのかもしれないけれど、今は殆どないから。もし許されるなら、川辺の木陰で寝そべりながら、ずーっと鳥の声を聴いていたいわ」

ズキズキと痛む頭を押さえながらも、アステイスは反論する。

「……でもお母さん凄く強いじゃん。騎士とかになるうと思わなかったの？」

母は自分の肩くらいまでの長さの、ふわふわの赤い髪をくしゃくしゃと揉む。アステイスの赤い髪は母親譲りだった。

「男だらけの職場に私みたいな綺麗な女が飛び込むってのは、何て言うか、色々問題あるの。それも、男共より強かったら尚更ね。まあ、あなたにはまだわからないだろうけれど」

「……ふーん」

(普通、自分で綺麗って言うかな。……綺麗だけどさ)

アステイスは少し拗ねながら相槌を打った。今思えば、母の？あなたにはまだわからない？って決めつけがちよつと癩じゃくだったのかもしれない。

「……騎士か。まあ確かに、一度や二度はそんな事も考えたかも知れないけれど。あなたのお父さんに出会ってからそんな気は一切吹っ飛んだわ」

「……何で？」

首を傾げるアステイスの頭を、ふいに母は優しく撫でる。

「ふふ、決まってるじゃない。少しでもお父さんと一緒にいたかったからよ。他に理由なんてないわ。仮に軍なんかに入ったら拘束時間が半端ないし、離れ離れになる時間も増えちゃうし。論外だったわけ」

亡くなった父の面影を頭に浮かべている母の表情に、アステイスは父に対する母の深い親愛の情を、強く感じていた。

その後、アステイスは十二歳の時に一般の学校ではなく、テルネシア帝国軍直轄の軍学校に入学した。軍学校とは、その名の通り軍人としての教育や訓練を行う学校である。母は少し渋っていたものの、アステイスの強い決意と、剣の修練に熱心に取り組んでいた事を認めてくれたのか、入学を許してくれた。

教官たちは、アステイスの類稀な才に驚嘆した。年齢十二のアステイスに、剣術をまともに教えられる者は殆どいなかった。同級生であれば尚更であり、曲がりなりにも切り結べる者がいなかったため、練習にならなかった。仕方なく、アステイスは剣の授業の時には上級生達と共に指導を受ける事になった。その際に知り合ったのが後の盟友ジルバート＝ミレンである。

最初の訓練で上級生にもアステイスの相手になる者がいなかったとわかった教官達は、二度目の訓練の折、同じく強すぎて練習にならずに困っていたジルバートをアステイスに宛がった。

或いは、心積もりとしては逆だったのかもしれない。ジルバートはアステイスと違い、れっきとした名門貴族だったからだ。

空は如何にも五月らしく、今にも雨が降りそうな曇り空だった。遠い西の空には黒い積乱雲が見え、しばしば稲光を発している。

軍学校から程近い、芝生の敷かれている広い訓練場で、一通り準備運動が終わると、他の30人強の上級生達と同じように距離を取って、アステイスとジルバートは初めて対峙した。

その時の練習は、後にその場に居合わせた教官達の語り草になった。二人共、相通ずる物があつたのか、まるで旧来の友人のように、目礼を交わして向かい合う。

『よろしくお願いします』

ほぼ重なつた挨拶と共に、二人は構えた。

ジルバートは、剣を相手に向けて真直ぐ正眼に構える上段縦フォーム・タツハの構え。左右の敵どちらにも臨機応変に対応でき、カウンターも繰り出しやすい、両刃剣の利点を最大限に活かす構えである。

対して、体格に劣るアステイスは母の教えに倣い、切っ先を相手に向ける中段突フルークの構えを基本形にしている。俊敏さを活かした連続攻撃を主とする構えであり、技量が優れていれば使う武器を選ばない。

「始めっ」

その合図と共に、上級生達はお互い相手に斬りかかる。木剣同士が奏でる音が乱れ調子で辺りに次々と木霊した。教官たちは、生徒達の様子を見ながら、時には満足そうに頷き、また、時には不満そうに首を振る。

(……ん?)

そんな中、一人の教官がジルバートとアステイスに注目した。教官の合図があつたにもかかわらず、しかし二人は微動だにしていな

い。
勝敗が既に付き、座って周りの決着が付くのを見守っていた上級生達は、何事か、とひそひそ囁き合っている。二人を隔っている3

mくらいの空間を、ただ生温い風がそよいでいる。

「どうした……？」

訝る教官の声に、しかし二人は反応しない。互いが互いの姿を視野の全体像として映るように、一挙一動を見据えている。瞬きすら殆どしてしない。

二分もすると流石に野次が飛び始める。もう周りの決着は殆ど付いてしまっていたようで、二人が終わるのを待っているようだった。

「何だよジル。相手は下級生だぜ？ いつものようにやっちまえよ」「おい小さいの、少しは動けよ。折角来たのに練習にならないぞ」

しかし二人は動かない。肅々と、小さく、浅く息をして、互いに初手を繰り出す瞬間だけを狙っている。二人の持つ木剣の先端は殆ど揺れる事がない。どちらかという小刻みに振動している、といった感じである。

野次を飛ばしていた生徒達は、ややあつて大人しくなる。少しずつ、動ける空間を互いに切り詰め合う二人が発する、尋常ならざる雰囲気は吞まれていく。辛うじて教官だけが、二人の勝敗を判定するべく目を凝らす。

そして、対峙している二人を急かすかのように、突如遠雷が鳴り響いた。

先に動いたのはアステイスだった。左足を前にしていたアステイスはおもむろに身を屈めて素早く地を蹴り、瞬時に間合いを詰める。

ジルバートは己の胸を狙うその突きを見切り、反射的に左足を下げ、横向きになるようにして突きを避けながらも、アステイスの額目掛けて掲げていた剣を振り下ろす。

しかし、アステイスもその突きはフェイントのつもりで繰り出したもの。浅めに突いた剣を即座に引き、ジルバートの剣を向かつて左側にいなしながら、返す刃でジルバートの顔目掛けて薙ぎ払おうとする。

その刹那、アステイスの視界の下端に、ジルバートの右足に体重がかかるのが映り、咄嗟に身を翻す。

アステイスが先程までいた場所に、ジルバートの左足が振り上げられたが、即座に足を元に戻す。それとほぼ同時に、3m程後ろに跳ねていたアステイスが着地する。互いに付け入る隙を与えず、体勢を素早く整える。

周りの者達は一瞬の攻防に唾然としている。二人の手と足が、まともに目に捉えられないのだ。教官達は後にそれを、あの二人は違う時間に生きている、と表現した。

そのまま続くと思われた二人の勝負だったが

「あ……」

生徒達は天を仰いだ。雨がポツン、またポツンとその場にいた者達の頬を濡らしていく。

ややあってジルバートは微笑み、剣を降ろして戦意を消した事をアステイスに知らせると、アステイスから教官に視線を転じる。

「教官」

「ああ、うむ……。よし、訓練は一時中断とする。皆急いで校舎の中へ入れ」

その言葉が終わるや否や、教官達と生徒達は雨から逃れるべく校舎の中へと走っていく。

雨宿りしている間、周りの上級生達からは、どんな師についていたのか、どんな訓練をしていたのか、根掘り葉掘り聞かれる羽目になったアステイスだが、彼は曖昧な返答をする事に終始した。折角入学を認めてくれた母に、余計な迷惑をかけたくなかったためである。

驟雨しゅううと思われたその雨は、ついにそのままやむ事はなかった。

二日後、アステイスは軍学校の学食で同級生達と夕食を食べていた。

たかが学食と侮るなかれ、ホテルのシェフが直々に料理を作る事もあるこの学食は、美味い、安い、量が多いの三拍子揃った、腹ペコ盛りの少年少女達にとって夢のような食堂であった。近隣の住民達がこぞって訪れるほど人気があり、17時から22時にかけて席はほぼ満員となる。

食事中、同級生達と他愛もない話をしていたアステイスの背後から足音が近づいて来る。

「ここ、いいかな？」

ふいに後ろから声をかけられた。向かいにいた同級生達の視線がアステイスの頭上に固まり、アステイスはふいつと後ろを向くと、見覚えのある男が立っていた。

「あ、この間のっ……えーっと」

背の高い男はアステイスに目礼をする。

「ジルバート＝ミレンだ、宜しく。で、ここいいかな？」

ジルバートと名乗った男は、アステイスの左隣の空いている席を指差す。

「はい。勿論です」

アステイスが朗らかに笑うと、ジルバートも笑みを返し、隣に座る。

「あ、申し遅れました。僕はアステイスⅡフロイデです、宜しくお願ひします」

場所が食堂だった事もあって、アステイスは控えめに会釈する。

「ア、アステイス。お前、ミレン様と知り合いか？」

右隣にいたアステイスの友人エイルが、おそろおそろ聞く。エイルの態度からすると、ミレンという人は相当有名なのかもしれないとアステイスは推測してみる。彼の口から上級生の話など、とんと聞いた事がなかったためだ。

「知り合い、って程でもないかな。一昨日先輩達の訓練に混ぜてもらった時、剣術の訓練で相手をしてくれたんだ」

ジルバートもほぼ同意する。

「うん、そんな感じだ。それにしても、大したものだなフロイデ君。同級生でも相手を探すのが難しかった私と互角に切り結ぶとは」

互角、という言葉に反応して、周りの同級生達はアステイスに対してガラス玉のように丸くなった目を向ける。アステイスはややバツが悪くなり、苦笑いする。

「いえ、そんな事は……。正直、あのまま戦っていたら負けていました。あと、アステイスと呼び捨てにして下さって結構です」

心からの言葉だった。あの一合で、ジルバートは身体能力において自分を確実に上回っている、と感じていた。

「いやいや。私の二年前を省みれば、君の域にはとても届いていなかったよ。自信を持ってくれていい」

後輩の謙遜に苦笑しながらも、ジルバートはアステイスを賞賛した。

その事をきっかけに、ジルバートライバルとアステイスフロイデは年齢を超えた友として、良き好敵手として、お互いに切磋琢磨し、自己研鑽していく。この出会いは、お互い力を持って余し気味だったアステイスとジルバートにとって僥倖ともいえる出来事であり、二人の成長をより加速させた。

それから一年が経ち、ジルバートはアステイスに先んじて軍の役に付く事になり、その後二人が再会するのは約三年後、アステイスが16歳になってからの事となる。

其の十二（謁見（表））

十三歳になったアステイスは、クルートでの貴族誘拐事件、今にして思えばメリッサの事件だったのだが、この事件の迅速な解決に寄与したとして、軍属を特別に許可され、上官に様々な任務を任せられるようになる。

正に災い転じて福と成す、助けられたメリッサの父親であるミリック・ウランダーがこの案件を軍法会議にかけようとした事によって、有耶無耶やむやむになっていたアステイスの事件に対する貢献が初めて取り沙汰され、結果的にその名を広める事になった。

その後、アステイスは十五歳になるまでの二年足らずで、第三軍大隊長ガツシュ・エウゲン將軍の下、誰もが唖うなる程の実績を積み、ある日、エウゲン將軍に呼び出されたのである。

執務室に来るよう言われていたアステイスがドアを開けると、葉巻を燻らせながらエウゲン將軍が正面の椅子に座っていた。

「お呼びでしょうか。エウゲン將軍閣下」

アステイスは敬礼しつつ、エウゲンを真直ぐに見る。

エウゲンはアステイスから目線を逸らさず肘を付き、両手を組む。

「フロイデ君。君は六日後の休日、何か予定はあるかね？」

「あ、少々お待ちください。確認します」

アステイスは何の用だろうと思いつつ、素早く手帳を開いて確認する。

（エイルの妹の誕生日会か。流石に断れないな……）

「……あ、すみません。その日は」

「あるのだな。早急にキャンセルしたまえ」
即断、エウゲンが滑らかに命令した。

(……はい?)

いくら將軍と言えども、どんな用事も聞かずに？キャンセルしろ？なんて普通いわないだろ、とアステイスが心の中で毒づいていと、エウゲンははたと胸を張る。

「……光栄に思いたまえ。アルイール様が君と会ってみたいと仰せられている」

アステイスは、その台詞にまず呆気に取られ、続いて曖昧に笑う。

(はは、まさか……)

アルイール皇帝がこんな新米ペーパーに何の用があると言うのだ。エウゲン將軍も全く人が悪い。付くならもつと心臓に良い嘘を付けばいいものを……心臓に良い嘘って何だ？

しかし、エウゲンはアステイスの思考を読み取っているかのように話す。

「そう思つのはわからなくてもないが、本当の事だ。万が一すつぽかしたら私の首が飛んでしまうからそのつもりで、な」

鼻の下の髭を弄りながら、エウゲンは畳みかけた。

ようやく、アステイスの顔が引き攣る。エウゲンは、やっとわかったか、と下唇を出す。

「どうやら、先日君が提出した街における治安維持権のレポートをご覧になって、陛下が興味を持たれたようだな。様々な角度から思索していて、上手く纏められていた、と既にお褒めの言葉を頂いている」

アステイスは喜んだその先で、直ぐに焦り出す。相当失礼な事を

書いていた気がしたのだ。それは暗に、現状における帝国の警備網を痛烈に批判している、と言えなくもない文面だった。それはつまり、現状を認めているアルイールに対する批判とも取られかねない。

(ま、まさかあれを、よりによって陛下が見るなんて……)

背中に嫌な汗を掻きながら、アステイスはエウゲンの顔を窺う。

「……ア、アルイール様は、私のような下々の文章までお読みになるのですか？」

エウゲンは、誇らしげに言う。

「陛下が八面六臂はちめんろくつひと称されているのは伊達ではないぞ。それに、あの方の前では身分は関係ない。ただ才があるかないかで判断される。無論、空ほどの高みにいらっしやる方だから、目通り出来る機会がそう訪れない事は確かだが。……ま、陛下直々の要請を無碍むじに断らねばならぬほどの用事がある、というのなら」

「い、行きますとも。……是非、行かせてください」

ガクガクと、アステイスは首を縦に振り続ける。エイルごめん、と心の中で謝りながら。

執務室での一部始終を休憩室で休んでいたエイルに話すと、やはり残念そうな顔をされる。

「……まあ、しょうがない。しょうがないよな」

そう呟きながらも、肩を落としている。

アステイスはエイルを拝むように謝罪する。

「ごめん。この埋め合わせは……って代わりにはできないけれど、何らかの形で借りは」

エイルはその続きを手で制す。

「いや、いいって。俺だって同じ立場になったら断るしかないしさ。……ただ、妹に何て言い訳しようか、と思っただけ。お前が来るって

言ったら相当楽しみにしてたから」

頭を抱えて弱り切った様子のエイルに、アステイスは俯く。

「俺が直接謝りに行くよ。三日後なら午後は空いてるし」

エイルは顔を上げると、申し訳無さそうに頷く。

「そうか。折角の自由時間だつてのに悪いな」

三日後、アステイスはエイルと共に、エイルの妹に誕生日プレゼントを持って謝りに行った。最初エイルの妹は、行けなくなつた旨を二人から伝えられて相当に怒っていたが、タイミングを見計らつてアステイスが手渡した箱から出てきた美しいブローチを目にして、一気に溜飲を下げてくれた。

学生寮への帰り道、エイルは心配そうに声をかける。

「……あれ、相当高そうだったけど大丈夫か？ まあ、妹は滅茶喜んでたけど」

アステイスは朗らかに答える。

「ああ、ちゃんと一番安い所を選んで買ったから平気だよ」

それは事実であり、一番安くて3万ギラしたのもまた事実。

(今月、ちよつと切り詰めないと……)

顔で笑って心で泣いて、アステイスは三日後の一大イベントを控えていた。

当日、謁見の間の扉の脇にある待合室で、他の面会者たちと共に、アステイスはその身を震わせていた。武者震い、と格好つけたいところだが、恐怖の方が三割増しで勝っている。

面会するのが自分だけでなく良かった、と安堵していたアステ

イスだったが、最初に呼ばれるのが自分だと聞いて、正に胃の縮む思いだった。

軍学校においては、何事にも自分から率先して取り組んでいたアステイスだったが、その時生まれて初めて、呼ばれる順番は真ん中くらいがいいな、と心から願っていた。出来るなら最初から二番目か、最後から三番目、と優先順位まで決めていた。得てしてそういう時に限って、狙いすましたようにはずれくじを引くのが人生というものである。

胆力には自負のあるアステイスといえども、今回ばかりは嘗てない程に緊張していた。帝国で、否、実質的には大陸において一番偉大な人物との直接の目通りに、顔と足が強張って思うように動かない。

(……後五分、四分)

後二分になった所で時計から目を逸らす。心臓の鼓動がいやに煩い。ぶるりと肩から腕まで振るわせた瞬間、周りの者達が反応してビクツと動いたのが見えた。それを見て、僅かに心が落ちつく。

「フロイデ殿、そろそろ扉の前へ」

自分の名前を呼ばれて、背筋にビリツと電気が走る。

ぎこちなく立ち上がり、背中越しに面会者達の視線を感じながら部屋を出て、巨大な扉の前に立つ。

「アステイス＝フロイデ殿、中へ」

扉の内側からの声に促されるようにして、脇にいた近衛達がゆっくりと扉を開く。謁見の間から眩い光が差し込み、アステイスはその光の中へゆっくりと足を踏み入れる。

真ん中にある端だけ黄色い赤の絨毯が、皇帝の座る玉座まで一本

の道を作っている。その道を両側の一糸乱さぬように並んでいる皇帝直属の精兵達が見守る中、アステイスは顔を伏せたままゆっくりと前が出る。

己の心臓が喧しく、耳の後ろ辺りがざわついている。アステイスが最前列の兵達の五歩前くらいに來ると、両側の精兵達は規則正しく、真上に向けて持っていた槍を素早く斜め上に向け、即席のアーチ門を作る。

その厳つい鉄の門の中をアステイスは静々と、万が一にも転ばぬように一歩一歩、足元を確かめる様に進んで行く。

潜り抜けて五歩歩いたところで、アステイスに声がかかる。

「そこで良い、ひざまず跪け」

皇帝の傍らにいた側近の声に即座に反応したアステイスは、片膝を床に付き、膝に手を乗せて首をかたむ傳く。

「よし、名乗れ」

再び促され、アステイスは名乗りを上げる。

「テルネシア帝国第三軍大隊長ガツシュ」エウゲン將軍直属、第三軍魔獸討伐隊副隊長、アステイス」フロイデで御座いますっ」

よし、よし、つつかえずに言えたぞ。

少しばかり声は震えていたが第一声を何とか言い終え、アステイスはほっと胸を撫で下ろす。これなら及第点と

「うむ、楽にして良い」

思考を遮って、おそらくはアルイールがそう言うのが聞こえた。

(楽に……そうだよな……、……ところで、楽って何だっけ)
思い出せないアステイスは途端に焦る。

その直後、エウゲン將軍の咳払いが耳に入ってくる。

「あー、ごほん。立ち上がった良いぞ」

「は、ハッ」

エウゲンに助け船を出され、アステイスは慌てて立ち上がった。

「顔を見せてくれ」

再びアルイールの声が聞こえ、アステイスは伏せていた顔をゆっくりと上げ、アルイールの方に視線を向ける。歴代屈指と言われる偉大なる皇帝と、アステイスとの運命の邂逅かいこうだった。

其の十三 偉大なる主君（表）

アステイスから見たアルイール皇帝の第一印象は？格好の良い大人？だった。その眼光は肉食獣のように鋭く野性的で、その口には不敵な笑みを浮かべている。威風堂々とは、このような男の事を言うのだろう。

頭には小さな王冠を乗せていたが、銀色の短髪は一切乱れていない。身嗜みみだしなに関しては、貴族が普段着ているようなもっさりとした服ではなく、白くピシツとしたシャツにシャコールグレーのズボンとブレザーといった井出達だ。趣味の良い型破り、という言葉がぴったり当て嵌まる。

そして、服の上からでも隠せぬ程の筋肉と、並々ならぬ威圧感。アステイスが今まで一度も会ったことのない種類の人間である事だけは確かだった。

アルイールは肘かけに手を乗せたまま、やや前のめりになる様にしてアステイスを一瞥する。

「なるほど、件の噂くだんに違わぬ美少年だな」

アルイールは王座に鎮座したままニヤツと笑う。件の噂とは何のことだろう、とアステイスは無意識に首を傾げた。

「若干十五歳にして中々どうして、見込みがある。治安維持法の改正案に関するレポートは隅から隅まで読ませてもらった。視点が今までになく斬新で興味深い内容だったよ」

意識が飛んだ自分を引き戻し、アステイスは慌てて応える。

「はっ。身に余るお言葉、誠に光栄の至りでございますっ」

その様子を、アルイールはどこか楽しそうに眺めている。

「ふふふ、そう硬くならずとも良い。それにしても……ふむ、言葉遣いもいっぱいではないか。丁度良いかも知れぬな。よし、決めた」

皇帝の独り言のような呟きに、アステイスは疑問を浮かべる。？決めた？って何をだろつか。

「少年、明日から王宮に来い」

アルイールのその言葉にアステイスは耳を疑い、王の3m程左にいたエウゲン將軍はあんぐりと口を開けた。アルイールはそれを気にすることもなく続ける。

「実は、今私に付いている秘書が最近どうも病気がちだな。若くて体力のある若者に補助役の候補がいれば、と思っていたのだ」
アルイールは平然と言い放った。

それを聞いてエウゲンが恐る恐る口を挟む。

「し、しかしながら陛下、フロイデ君はまだ十五歳にございます。少々若すぎるのでは」

「……不服か？」

アルイールはアステイスから視線を逸らし、笑みを消してエウゲンを見据えた。

「め、滅相もございません。ただ、その……」

慌てて釈明するエウゲンに、アルイールがはたと顔を綻ばせる。

「冗談だ。貴公の言い分もわかるが、私がやらせようと思っているのはあくまで補助役、言ってみればただの秘書見習いだ。そう心配せずとも良い。今のところは、な」

「さ、左様で御座いますか、なれば特に言う事はありません」

エウゲンは一歩下がって軽く一礼する。その様子に満足げに目を細めると、アルイールはアステイスに視線を戻す。

「で、どうだ少年。私の秘書見習い、やってみる気はないか」

完全に置いてきぼりを喰らっていたアステイスだったが、再びアルイールに話しかけられ、正気に戻る。かなり恐れ多い話ではあったが、仮にも皇帝の秘書役の真似事を出来るというのだから断る理由はない。

念のためにエウゲンの方をチラツと窺^{うかが}うと、彼は見慣れた目礼を返す。上官からの了承を賜り、アステイスは意を決す。

「へ、陛下さえ宜しければ、不肖ながらこのアステイス＝フロイデ、その御拝領、謹んで受けさせて頂きますっ」

その言葉と共に、アルイールは立ち上がって会心の笑みを浮かべた。

その次の日から早くも、アルイールはアステイスに対して、秘書として様々な教育を施した。現任の秘書と共に朝早くから夜遅くまで、本や議事録、史書、外国の書物とにらめっこする日が続いた。

如何にも知的なイメージが付きまとう秘書という仕事は、アルイールの言っていた通り、体力がないと相当にきつい仕事であった。現任の四十半ば程の秘書がひいひい言っているのも無理からぬ事だとアステイスは思った。

時にはアルイールの外遊に同行し、指導者としての思想や姿勢、辣腕や胆力をその目と耳でまざまざと見聞きし、学んでいた。もっとも、外遊といってもテレジア大陸の八割は帝国の手中に収まっており、街の視察、といった表現の方が正しい気がした。テルネシア帝国唯一の同盟国、魔道王国カタルスタの方面へ足を伸ばした事

は、アルイールが崩御するまでに二度あった。

カタルスタの訪問を終えた後、フリーユゲル城に戻った二人は、年代記を見ながら語り合う。様々な土地を巡る度に、アルイールはその土地にちなんだ逸話をしばしば取り上げた。

「帝国とカタルスタが、何故同盟を結んでいるか知っているか」
アステイスは記憶を手繰るように天を仰ぐ。

「ええと、当時テレジア大陸の東半分を支配していたボードンと戦う際に連携したのですよね」

「うむ、テルネシアはボードンに攻め立てられて大陸の中央から追い出され、クルートをも一度は奪われていた。残る帝国の領土はマビア周辺と、大陸北西部くらいのもだった。いくら嘗てのテレジア帝国の流れを汲むとはいえ、所詮は出来て44年しか経っていない新興国。軍事力も今とは比べるべくもない。……では問題だ。何故、カタルスタはわざわざそんな帝国と手を組んだのか」

「えっと……？」

そんな、ってというと、弱体化した帝国と、ということか。

「おかしいと思わないか？ だって、カタルスタはその時既に魔法の法式を確立していたんだ。帝国が滅びてからでも、十分ボードンと戦えたはずだろう」

アステイスは曖昧に頷く。

「穿った見方と言われるかも知れんが、私はこう考えている。きっとカタルスタの連中は、安全に魔法を試したかったんだ。味方同士殺しあうわけにもいかなないからな。戦場と言う名の実験室で、窮地に陥ったテルネシア帝国を救うというお題目を楯に、世間からの倫理的批判を躲しつつ、公然と人体実験を行ったんだ」

アステイスは顔色を変える。

「……まさか、いくらなんでも」

「面と向かって大軍と戦う事になれば、いくら魔法使いと言えども大勢の死者が出る。騎兵を大混乱に陥れた、という逸話は残っているが、何もボードンは騎兵だけ運用していたわけではない。歩兵だつて弓兵だつて大勢いたはずだ。特に弓等の飛び道具は、魔法使いの脅威と言つても良い。精神集中と詠唱に時間をかけているのを狙われたらアウトだからな。その盾役を、帝国兵がやったと言つわけだ。……では逆に考えてみよう。帝国側がカタルスタに助けを求めたのに理由があるなら、それは何だ」

「勿論、ボードンに対抗するためと……もしかしたらカタルスタの研究している魔法という名の技術の効果を確かめたかったから、でしょうが」

魔法とは言つてみれば超常現象を人為的に起こす技術だ。噂くらいには聞いていた可能性が高い。

「妥当な意見だ。お互いに利害が一致したわけだ。実際、その後は帝国内にも魔法を使える者達は増えて行つた。少なくとも、生活に密着した使い方をしていた、という記述はいくつも残っているからな」

アステイスは納得すると同時に、字面のみを鵜呑みにしないよう肝に銘じる。あくまでアルイールの意見は、そういう見方もできるという一つの例だ。何より猜疑心が強くなくては、国の頂点に立つことなどおぼつくはずもない。

アルイールは凶悪な魔獣討伐の任務にも進んで赴き、時にはアステイスと共に剣を振るう事もあった。アステイスは母から教わつた剣の腕に対して少なからず自負を持っていたが、上には上がいるこ

とを思い知らされた。アルイールは己の身体を一日も欠かさず鍛えていた。それは、物を食べたら歯を磨くように、帰ってきたら風呂に入る様に、幼い頃からの習性となっていて、とアルイールは言う。技術、つまり剣捌きだけなら或いはアステイスが勝っていたかもしれないが、力、体力、知力、洞察力、判断力、経験。強さという点においては、圧倒的にアルイールが上だった。

天狗になりかけていた鼻は、ここにきてスパツと斬り落とされ、アステイスは初心に戻って一からアルイールに学び、鍛え、精進していった。

どうしても慣れるのに時間がかかったことが一つ。女性の扱い方を学ぶためだと言って、アルイールはアステイスを連れてお忍びでフリーユゲルの色街へ繰り出すことが度々（たびたび）あったのだ。これには、アステイスもまいった。

この時、アルイールはまだ齡三十六だったが妻が二人、息子が四人、娘が二人の計六人いた。ご盛んな皇帝のその様子に、アステイスは、他に御落胤ごらくいんがどれくらいいるのか、と詮無き事に肝を冷やした。

通常、十五歳でそんな場所に踏み込もうとすれば即座に門前で止められるところだが、常連のアルイールと一緒にいれば当然の如く顔パスだった。堂々と歩くアルイールの後ろに隠れて、アステイスは周りにいる露出度の高い服を着た女性達の中を、顔を真っ赤にしながらかそこそそ付いていった。女達は、そんなアステイスに対して、目を細めながら微笑していた。

「お前も、少しは嗜たしなんでおいた方がいいぞ」

「た、嗜たしなむって何をですかっ」

アルイールはアステイスの初心しんこな反応を楽しんでいるかのようだ

った。アステイスはそんなふうにして、主君の気まぐれに振り回され続けた。

最初のうちは、まともに娼婦の女性の顔すら見れなかったアステイスだったが、そのうちに雰囲気にも慣れ、連れて行かれた高級娼館でアステイスは何度か女達と宵を共にした。健全な少年程度には女性との交わりに興味と欲求があったからだ。

アルイールはアステイスに房事を学ばせる一方で、色街で暮らしている女達に娼婦という言葉は一切使わなかった。それどころか、身体を売って身を立っている女達を尊敬している節すらあった。

「ここも一つの戦場だ。彼女達は身体を張って遅しくも涙ぐましく身を立っている。対する帝国軍人は、300年の平安を経て骨抜きになっている。彼女達とは決意の質が違う。動機は同じ？生きるために、家族のために？が含まれていたとしても、どちらの心根が強いかなんて、誰だってわかるだろう」

「んっ、ふっ」

「……耳に痛いお言葉ですね」

アステイスは顔を背けながら言った。但し、顔を背けているのはその言葉だけが理由ではない。

「お前も現実を受け止めた上で知っておけ。信念なき刃はただの凶器。己が手に持つ剣の切っ先に誰がいるのか。一生それを考え続ける」

「あふっ……ああんっ」

室内に嬌声が飛んだ。胡坐を掻いているアルイールの上に女が乗って髪を振り乱しながら、腰を動かしている。

「……格好いい台詞を口にしたのなら、せめて時と場所を選んでくださいよ」

顔を背けて口を尖らせるアステイスの耳に、アルイールの快活な笑い声が響く。

この人には常識が一切通じない。何て奔放なんだ、とアステイスは舌を巻く。

アステイスが十八歳の時、あれほど強かった母は流行病であっさり亡くなった。唯一の身内であり、明朗快活だった母を失ったアステイスは、己の心にぽっかりと穴が空いたように感じていた。

それでも葬儀では喪主を務め、何とか泣かぬように、と始終自分に言い聞かせた。葬儀には母の交友関係の他にも、アステイスの知人友人、そして、驚いた事にエウゲン將軍を伴って、アルイール皇帝自らが、花を手向けに来た。

予期せぬ皇帝の来訪に参列者たちは目を疑ったが、黒い喪服に身を包んだアルイールは威厳を翳す事はなく粛々と、あくまで一個人の参列者として振る舞った。アステイスはそれを見て、自分と母に対する主君の配慮に感極まり、ついに涙を零すも滞りなく葬儀を終えた。

母の納骨が終わった後も何日もの間、アステイスは塞ぎ込んでいた。任務が終わった後、夕暮れ時に城の屋上で一人肩を落としていたアステイスに気付いたアルイールは、暫くは何も言わず見守っていた。

三日目になって初めて、アルイールはアステイスに声をかける。
「やはり辛いか、アステイス」

アルイールの言葉に、アステイスは振り向かず、ただ頷いた。皇帝に対してのそれは無作法とも言うべき態度だったが、アルイールはそれを咎めずに言葉を続ける。

「無理もない。愛する人を失うという事は、人生における最大の試練だからな。……しかしな、アステイス。お前の母の死に顔は本当に安らかだった。若くして亡くなった以上、やり残した事はあつただろうが、お前を残して逝く事に不安はなかつたんじゃないかと、私はそう思っている」

アステイスは、手すりに両腕を寄せながら、僅かに振り向く。

「何故なら、お前の母はお前を、アステイス「フロイデ」という一人の男をここまで立派に育て上げた人物だからだ。だから、お前も母を大いに誇るがいい」

アステイスは呟く。

「誇る、ですか。悲しむ、ではなく」

「悲しむな、とは言わないがね。己の子が成長し、何かを成し遂げる事によって、初めて親は報われ、それこそが最大の親孝行である、と私は信じている。だから、私はどんなに年を重ねようと、死んだ両親が天で胸を張れる子であろう、と思っっているし、私の子供達にも、お前にも、そうあって欲しいと願っている」

それを聞いて、アステイスはアルイールの強さの秘密を垣間見た気がした。自分のため、家族のため、その強い動機は人を大いに揺り動かす。

アルイールはアステイスの方へ、ゆっくりと歩いてくる。

「お前がその輝きを放ち続ければ、亡くなったお前の両親はそれを標に、天からお前を見失わずに済むだろう。だから、辛くとも前へ進め。己の歩みを見せつける様に」

アステイスは目を細める。目の前の男はあまりに遠く、自分には眩し過ぎた。

「……厳しいですね」

アルイールは複雑な笑みを浮かべる。

「よく言われるから、そう、なんだろうな。もともと、私にそんな事を言わせた奴は数えるほどしかない。だから胸を張れ」

アステイスは、手すりから腕を離し、アルイールに向き直った。

アルイールは微笑みの中にも厳しさを湛えながら、アステイスに話しかける。

「人は誰しもが、多くの人間を幸せに出来る力を持っていると同時に、多くの人間を不幸に追い落とす力を持っている。これは私の師が言っていた事だが、わかるだろうか」

「何となくは、わかります」

アステイスの答えに、アルイールは頷く。

「ならば、死ぬ事を恐れよ。そして、徒いたづらに生きる事を死ぬ事以上に恐れよ。その上で、私に付いてこい。私の背中を見て学んで、いつの日か私を追い抜いてみせる」

アルイールの言葉に、アステイスは一瞬ひたひたぶるりと全身が震えた。

武者震いだと気づく。皇帝を追い越すなんて恐れ多い事を、アステイスは考えた事もなかったのである。

「帝国は広い、私一人が頑張ったところでとても統べる事は出来ぬ。だから、お前のような有能な人材が必要だ。アステイス、フロイデよ、どうか俺にその力を貸してくれ。共に、この帝国をより良き国にしようではないか」

言葉を結んだアルイールは、己の大きな右手を差し出してアルイールに握手を求める。アステイスは、手に付いた汗を服で拭い、や

はり右手を差し出す。がしつと力強く握られ、互いの両手がそれに重なる。アステイスはこの偉大な主君に仕えている喜びを、この瞬間、全身で感じ取っていた。

どちらからともなく力を抜き、お互いの手が離れる。

「フツ、あまり身体を冷やすなよ」

アルイールはアステイスの瞳を見て微かに笑うと、振り向いてその場を後にする。

黄昏の中で、アステイスは去りゆく主君の背中に静かに頭を下げた。

其の十四　く招かれざる来訪者（表）く

883年　10月7日

ベッドに横たわっていたメリッサは、両手を付いて身を起こしてから、自分の左手の薬指を見る。その細い指には光り輝くダイヤモンドの指輪が嵌っている。

（……駄目）

どうしてもやついてしまう。興奮して全然眠れない。

アステイスにプロポーズされてから、一ヶ月余り。メリッサは二日前に婚約指輪を手渡されていた。それを見る度に、メリッサは面と向かってアステイスに告白されたあの日の事を何度も思い出していた。その度に、痺れにも似た嬉しさが、喜びが込み上げてくるのだ。

寝室用の照明が放つ仄かな光を、指輪に付いている石に反射させてみる。すると、ダイヤモンドの中に閉じ込められた幾つもの美しい星屑が、照らす角度によって多種多様な輝きを放つ。

「本当、綺麗……」

熱い溜息と共に、メリッサは呟く。この台詞も何度目だろう、と半ば自分に呆れつつ。

これを手渡す時のアステイスは、プロポーズした時より数段照れていて、メリッサはその赤い顔をまともに見る事ができなかった。彼の顔を見てしまうと、こちらに照れが伝染してしまうのがわかり

きっていたからだ。

ほう、と熱い溜息を浮かべて、メリッサは再びベッドに倒れ込む。
「ア、アステイス……」

その言葉を吐いた途端に、メリッサは顔をタオルケットで覆い隠す。

(やっぱり、いきなりは無理っ)

アステイスはメリッサに指輪を渡した時、もう夫婦になるのだから、と自分の名前に？ 様？ を付けない様に言った。

日が経つと共に、まだ輪郭だけだった絵に色が足されていき、結婚という完成図が現実味を帯びてくる。苦しいほどの胸の高鳴りを、メリッサはどこか心地良く感じていた。

もう直ぐあの人と、アステイス「フロイデと一緒にになれる。

いつしか、それをずっと望んでいる自分がいた。街の女や軍属の女から人気のある上官には、はらはらさせられた事もままあったが、やっと一つの夢が叶うのだ。嬉しさ、達成感、気恥ずかしさ、慕情、色々な感情がない交ぜになって、自分の頭の中をぐるぐると巡っている。幼き日に見た小さな英雄は、これから先、一体どのような景色を自分に見せてくれるのだろう。

この二日間、メリッサの胸は嘗てない程に浮かれていた。仕事も碌々(ろくろく)手に付かない程に。それ故に、普段持ち合わせていた警戒感が薄くなっていたのは否めなかった。

チリンリン

唐突に呼び鈴が鳴り、メリッサは飛び起きる。ベッドの脇の小さな時計を見るとまだ4時半だった。

(……? こんな早朝に、一体誰だろう)

メリッサは怪訝な表情を浮かべながらも、ベッドから身を起こして立ち上がり、寝室を出て玄関へと向かった。

アステイスは椅子に座りながら、壁にかけてある時計をちらっと見る。

(9時40分、珍しく遅刻か)

この所、人が話をしている時でも上の空な事が多いから、少しビシッと言って気を引き締めさせねばな。

アステイスがそう思っていると、階下から徐々に足音が聞こえてくる。

音の間隔が短い、必死に階段を駆け上がっているな。む、上がりきったか。向きを変えてあと3、2、1

バタンッ

アステイスは、苦笑しながらも椅子を回転させてドアに向き直る。

「遅いじゃないか、メリッ……ん？」

「た、大へ……です」

現れたのはメリッサではなかった。イグニスという屋敷に勤めて五年目で、茶髪の天然パーマがチャームポイントの小間使いだ。

彼はまだ十四歳ではあるが、アステイスが見込んだだけあって利

発で賢い子供である。方で息をしているところを見ると、碌々息も付かずに走ってきたのだろう。身体が酸素を欲しがっているのか、まともに喋っている言葉が聞き取れない。普段は落ち着いているイグニスの動揺っぷりに、アステイスは僅かな不安を覚えた。

「とりあえず、落ち着け」

そう言いながらアステイスは立ち上がり、水入れを持ってコップに水を注いでから少年に差し出す。

「す……ませ……ん」

手渡された少年は、ゴクリ、と音を立てて一口飲み、立ったままのアステイスに急いで視線を戻す。

「ア、アステイス様っ。ここに来がてらクルートの街で耳にしたのですが、貴方にスパイ容疑が掛かっているそうですっ」

その言葉に反応して、思考が泡のような空白を生み出す。

「……なんだって？」

「それに伴って、嫌疑が晴れるまで第六軍の指揮権剥奪、及び副官の更迭が決まったそうですっ。……早馬を飛ばしてきましたが、おそらく、執行官が来るまでもう時間がありませんっ。どうかご指示をっ」

早口で捲し立てられ、啞然とする。指揮権剥奪？　メリッサが更迭？

だが、イグニスの顔は必死そのもので、残念ながら嘘を言っているようには全く見えない。

「……彼女がまだ来ていない」

瞬時に悪い予感に襲われる。

「それが、ここに来る途中でメリツサ様の家を訪ねたのですが、家人の方は、メリツサ様ならアステイス様の件について事情聴取したいと軍人が来て、今朝方本部へ向かわれたと」

「呼び戻す」

イグニスはたじろぐ。

「え、ですが」

アステイスは語気を強める。

「私が呼び戻す。お前の馬はもう疲れて走れまい。厩舎から早馬を用意しろ、私も直ぐに行く」

「あ、は、はいっ」

イグニスは直ぐ様後ろを向き、扉の取っ手に手をかけようとした。

しかし、それより先に扉が動き、軍服を来た男達がアステイスの執務室に雪崩れ込んで来る。階下から上がって来る足音が全く聞こえなかった事から察するに、アステイスは男達がかなりの手練れである事を理解する。

「な、何ですか、貴方達は。礼状は」

「邪魔だ、どけ」

うるたえるイグニスをグイツと押しつけ、男達は座っているアステイスの前に並ぶ。

「フロイデ殿。申し訳ないが我々と御同行願おう」

その言葉に、アステイスは顔をしかめながらも、余裕を見せるようにゆっくりと椅子に座る。

「……まず礼状を見せてもらおうか」

「そんなものは必要ない。それと、逆らえば即座に処断するように、と命令されている。同胞に手荒な真似はなるべく控えたいのでね」

（取り付く島もない、か）

「……ブルームスの差し金だな」

アステイスが歯軋りしたのを見て、イグニスは恐れ戦く。普段穏やかな主人がここまで感情を激するのを見た事がなかったのだ。

「答える義理はない。さあ、立て」

招かざる来訪者達は、腰に下げた剣の鞘に手を添えている。アステイスは己の椅子に座ったまま、机に立てかけてある己の細剣の柄に、来訪者達に気付かれぬよう肘から先だけを動かして手をかけ、握り締める。

（……6人、か）

アステイスは部屋の中にいる敵の人数を確認する。隙の無さから察するに、リーダーは向かって左から二番目の男だと目星を付ける。念のため外に敵がいる可能性も考慮しておく。

「早く立て。何なら無理やり連れて行っても構わんぞ」

「……わかっている」

男達は、アステイスを急かすような事は言っても、一歩で剣が届く間合いまでは入ってこない。やはり相当場慣れしているらしい。窮鼠が猫を噛む事があるのを知っている。

だが、一つだけ有利と思われる条件があつた。男達は、おそらくアステイスの本当の実力をしらない。もしもそれを知っていたなら、下にいる屋敷内の家人か、入ってきた所で真つ先にイグニスを、アステイスにまともな抵抗をさせないように人質に取っているはずだ。それと同時に、やはりこの男達に命令しているのはブルームスか、

少なくともそれに近しい貴族将校の線が濃い、とアステイスは確信する。軍学校時代の仲間ならアステイスの剣の才を知っているからだ。

(……………どうするか)

素早く頭を働かせ、アステイスは即決する。

「……………イグニス」

アステイスは小間使いに声をかけた。
緊張した面持ちで、イグニスは頷く。

「は、はい」

「執事に、暫く屋敷を留守にすると伝えてきてくれ」
アステイスは諦めたように、溜息を交えて言った。

「で、ですが……………」

アステイスと男達と見比べながら、イグニスはうろたえている。
「早く行け。何、嫌疑が晴れたら直ぐに釈放されるだろう」

アステイスは軽口を叩きながら、イグニスを真直ぐに見つめた。
やる気だ、とイグニスは主人のその目から察する。

「わ、わかりました」

主人の意図を汲み取ったイグニスは、アステイスに一礼して部屋を出て行く。男達は、その様子を傍かたわらから見ながらも警戒を全く怠っていない。

イグニスが出て行ったのを見届けると、アステイスはほんの一瞬、向かって左側、つまり男達から見て右側の窓を見た。大体距離は5m程だ。視線を素早く元に戻すと、剣の柄に触れている男達の指が僅かに揺れるのが見えた。良い反応だ。

「フロイデ殿。待たせるのもいい加減にしてくれないか」

別の男が苛立ちを隠さずに言ったが、アステイスには別の感情も僅かに読み取れた。

今度はあからさまに左側の窓の方を確認する。忙しなく、窓と男達と視線を往復させる。先程まで無表情だった男達の顔に、微かに笑みが浮かんでいるのが見て取れた。

下拵したしごとえは済んだ。

アステイスは左手に剣を持ちながら、己の右足にゆっくりと体重をかけていく。

ダンッ

おもむろに右足で床を蹴り、アステイスは先程まで見ていた外への窓に向かって飛び出す。遅れて、カランと何かが絨毯に落ちる音が聞こえた。落ちたのはアステイスの剣鞘だったが、敵は皆、逃げ出そうとしているアステイスの動きを目で追っていたため、音を気に止める様子は無かった。

「無駄な事をつ」

向かって左側の男達二人は殆ど遅れることなく反応し、アステイスと2m程の距離を空けて並走し、そのままの体勢で素早く剣を抜くと共に距離を一步詰め、逃げるアステイスを遮るかのように首の高さほどから横に薙ぎ払う。

アステイスの首を敵リーダーの剣が刎はねる、男達がそう思っや否や、しかしアステイスは男達の予期せぬ行動を取った。アステイスは体を低くしながら、己の首に迫る敵リーダーの剣を屈んで避ける

と共に反転し、男達に見えぬよう体を盾にし、左手に巧妙に隠し持っていた剣を強く握り締めながら、真つ先に斬り付けて来た敵リーダーの顎目掛けて、死角から左拳を振り抜く。

「がっ……」

咄嗟の切り替えに反応しきれず、アステイスのカウンターアップをまともに喰らった敵リーダーは仰け反り、足が宙に浮く。それに慌てたか、リーダーの後ろにいた男が即座に剣を上から振りかぶるのが見えた。アステイスは、右掌で左手に持つ剣柄の突端部分を押すようにして剣の軌道を変化させ、剣を振り下ろしてきた男に向かって突きに転じる。

ドチュッ

間一髪、敵の剣を避けたアステイスは、それと同時に相手の左胸を的確に貫いていた。心の臓を貫かれた男が吐血し、アステイスは男の胸に刺さった剣を抜くために男の身体を正面に蹴り放す。蹴られた衝撃で男は再び吐血し、そのまま後ろへたたらを踏み、ぐらりと仰向けに床に倒れこんで絶命した。顎にまともに攻撃を喰らったリーダーは、未だ起き上がる事すらできず、ビクンビクンとのたうっている。

「き、貴様っ」

アステイスの実力を目の当たりにした残りの男達は、リーダーを真つ先に倒されたこともあって動揺した。

精神的優位が、命のやり取りにおいては致命的な差に成り得る。それがなければ、如何に優れた使い手とてこの人数の手練れ相手に無傷では済まない。果たしてアステイスの目論見は成功した。初撃に全てを懸ける、それなりにリスクの高い手段だったが、勝敗はこ

の時点で決していた。

次々に振り降ろされる剣を、アステイスはまともに切り結ばず、横に切り払う。寸分違わず剣の腹の部分を強く弾かれて体勢を崩した男達は、アステイスの間髪入れぬ二撃目の切り返しによって次々と倒れていく。

最後に残った男は焦燥に駆られている。

「く、くそつ。こんなに使うなんて聞いてないぞつ」

残った一人を、フェイントを駆使して逃がさぬように壁際に追い込むと、アステイスは血に濡れた剣の切っ先をその男の鼻先に近づけ、鋭い眼差しで射竦める。

「メリツサをどこに連れていった、心当たりを言え」

怯える男は、アステイスのその言葉で幾分余裕を取り戻したようだ。

「ああ、あの美人の副官殿か。助けたかったら俺の言う事を」

ズブツ

「ぎ、があああああつ」

一瞬にして、男の剣持つ右側の肩口にアステイスの剣が突き刺さり、男は苦痛に叫び声を上げ、剣を取り落とす。

「き、貴様自分の立場が　ぐあつ」

唸る男の言動に耳を貸す事無く、アステイスは左手に持っている剣の柄を軽く捻る。ブシュツという音と共に、男の軍服に滲み出た血が広がっていく。アステイスは手に持つ剣で男の体を壁に固定したまま、顔を近づける。その表情はたおやかながら、鬼神の如く凄みがあった。男はぐびつと息を飲み込む。

アステイスの低い声が、男の皮膚を突き抜けて骨にまで響く。
「立場が……何だって？ こう見えても、私はそれ程気が長くない。なんなら、貴様の四肢を寸断してやったって構わないぞ。口さえ残っていれば何とでもなるからな。芋虫になるのがお望みだと言うのならば……そうしてやるう」

アステイスの脅し文句に、嘗てない恐怖が、男の脳を痺れさせる。心臓が早鐘を打ち、顎がガクガクと震えているのがわかる。曲がりなりにも人殺しとして身を立ってきた男だからこそわかった。目の前の赤髪の男が放つ、禍々しいまでの殺意を。

男は震える唇で何とか言葉を紡ごうとする。

「わ、わかった。喋る、喋るから……」

「……5、4」

カウントダウンを始めたアステイスに、男の血の気が一気に引いていく。

「3、2」

「ク、クルートの北にあるブラームス様の別邸だっ、あの女ならそこに」

溜まりかねて叫ぶように男は言ったが

「1」

その声は止まらない。

「ちよ、何で」

ズンッ

短く息を呑むような甲高い音がアステイスの鼓膜を一瞬振動させる。剣持ため右手を、アステイスは男の喉元に突き刺していた。

其の十五　　↳悲壮なる決意（表）↳

地下室に鞭がしなる音が響く。鞭が振るわれるその度に、繋がれている女性の体が微かに揺れる。その両腕は天井から吊るされている赤く錆びた鎖に二本ずつ繋がれ、伸びきった両足が辛うじて床に届いている。誰が見ても、逃げる事が出来ない状態だ、と一目でわかる。

本部に向かう道中で、周りの男達の言動に不審なものがある事に気づき、何とか逃げようとしたメリッサだったが、追っ手の数が多過ぎて敢えなく捕らえられ、誰その屋敷の地下室に連れ込まれ、拘束されていた。

「大分いい格好になったなあ。メリッサさんとやら」
男の一人が、メリッサにねぶるような視線を向け、笑いながら言った。

幾重にも鞭を浴びせられ、メリッサのそれはもはや服装の様相を留めていなかった。着ていた軍のスーツとタイトスカートはボロボロに破れ、ほつれている。その破れた隙間から、薄いピンク色の上下の下着が覗いている。その手足には幾つもの赤い筋が付いていた。

絶望的な状況の中、メリッサは気丈にも三人の男達を睨みつける。
「あ、貴方達……、こんなことしてただで済むと思ってるの？」

メリッサの唸るような低い声に、男達は顔を見合わせ、笑い声を上げる。

「おお、こわーい。睨まれちゃったっ」

「こつという気の強い女には、躡が必要だ、なっ」

ビシッ

「きゃあっ」

男の持つ鞭が地面を這うようにして、下から上へ軌道を描き、メリッサの太腿を直撃する。鎖がギシギシと音を立てると共に、メリッサは皮膚を裂くような痛みに呻き声を上げる。

「くっ……っ」

「あれ、真ん中狙ったんだけどなあ」

そう言っただけで歪んだ笑みを浮かべた男に、メリッサは思わず顔を引き攣らせ、身を震わせる。

その時、地下室の鉄扉が開き、男達が振り返った。

「へへへへ、楽しんでるみたいだね」

暗い地下室に男が一人、ゆっくりと入ってくる。

「デーモン様っ」

(……デーモン)

メリッサには面識がなかったが、そういう名の男がコスティブラームスの息子にいて、という事は聞き及んでいた。夜な夜な街に繰り出しては、女を攫って狼藉を働いている、ともっぱらの噂だった。

見るとその男は、父とは違う中肉中背の体格をしているが、腕だけはやたらがっしりしている。やたらとゴツゴツした顔を見る限り、メリッサより年上に思えた。

デーモンは吊り下げられているメリッサを見て、いやらしい笑いを浮かべる。まるで粘着性を伴うようなその視線が、端正な顔に、形の良い胸に、締まった太腿に、這いずり回るのが視界に入り、あ

まりの気色悪さにメリッサは顔を背ける。

「へー、凄いわっぴんさんだね。しかもあんな貴族なんだって？
平民の将校なんぞには勿体ないや」

「……ご生憎様。私の伴侶は私が決めるわ」

あんななんか眼中にない、といったメリッサの口振りに、デーモンの笑みは暗く歪む。

「この状況でそういう口が利けるんだ。いいね、俺の好みだあ」

低い声ながら、体に似合わない子供のような口調でそう言うと、デーモンは、ゆっくりとメリッサに歩み寄り、立ち止まる。

そして、ふいにメリッサの腰を太い腕で抱き寄せて、目を見開いたメリッサの顎を掴み、その桃色の唇に自分の唇を押し付ける。

「っ。いやっ……ぐっんむっ　　ふーっ」

細い腰をしつかりデーモンの腕に抱きすくめられ、身を振りながらも強引な接吻から逃げられないメリッサは目尻に薄っすらと涙を浮かべる。しかし次の瞬間

ガリッ

「つつつてえええっ」

下唇を思い切り噛み切られたデーモンはメリッサをドンと突き放し、後ろにたたたらを踏む。

「ダ、デーモン様っ」

デーモンは口元を押さえながら呻く。下唇の肉が無残に抉れ、血がポタポタと滴っている。

「くそっ、どけっ」

心配して集まった部下達を押しつけたデーモンは、もの凄い形相をしながら息を切らしているメリッサに近づいていく。

「この……糞アマがあつ」

「　　っ、きゃあああつ」

ふいに鷲掴みにされた己の金髪を上へぐいと引つ張られ、メリッサは堪らず悲鳴を上げる。その斜め上から見下ろすように、ダーモンは唾を飛ばしながら怒鳴る。

「……予定変更っ。痛いのが好きらしいからサンドバッグにしてやるっ」

「何ですっ……ぐっ」

髪の毛を掴まれたままのメリッサの腹に、ダーモンの右拳がめり込む。反動で足が宙に浮き、後ろに飛ばされそうになるが、両腕に絡んだ鎖がそれを許さず、腕に鎖が食い込む痛みと共に緩和する事のできない衝撃がメリッサの下腹部を襲う。

「ふっ……う、　　ごぼっ」

胃液が喉元まで込み上げ、メリッサは思わず嘔吐えずいた。床に垂れた吐瀉物が、酸味のある匂いを撒き散らす。

「げほっ、げほっ、がほっ、……おえ」

吐き気と痛みに涙腺が刺激され、メリッサは咳き込みながらボロボロと涙を零す。ダーモンの開いた左の手の平から、メリッサの頭皮から抜けた金髪がはらはらと舞った。

「そーそー、そういう顔が見たかつたんだよ」

まだ怒りは収まっていない、というばかりにダーモンはメリッサの腹からめり込んだ拳を引いて再び構えた。

(こ……こんな……)

堪えられない、と思う間もなく

再び、今度は左拳がメリッサの脇腹を捉える。その身をビクツビクツと痙攣させて、メリッサは再び吐瀉物を吐き散らした。吐き気と激痛で、メリッサの意識が混濁し始める。

「おいおい、名門貴族のお嬢様がひでえ面してるなあ」

「乳と尻をそんなに揺らしてまあ、とんだあばずれだぜ」

卑猥な笑みを浮かべる男達の野次は、メリッサの心をも容赦なく抉り取っていく。

ガチャンツ

反論する余裕すらなく、三度ダーモンの拳がメリッサを襲った。二本の鎖がたわみ、鉄の輪が擦れる無機質な音が地下室に響く。

「ひっ……はっ……」

辛うじて地面に立っている両足をがくと揺らし、空気がかすれたような音を喉から出して、メリッサはがっくりと項垂れ、血の混じった胃液を開きっぱなしの口からだらしなく垂らす。

ダーモンはその様を見てやっと怒りが晴れたのか、満足そうに笑う。

「……へへ、俺様の力思い知ったか。じゃあ、そろそろ本番と行きますかあっ」

ダーモンの宣言に、待つてましたとばかりに、部下達の歓声が地下室に響いた。

ふと、意識を失いかけたメリッサの頭に、赤髪の少年の姿が、成長したアステイスの姿が蘇る。やおらメリッサは唇を噛み、その痛みで無理やり意識を覚醒させる。虚ろだった目に僅かな火が灯り、薄く目を開けたまま霞む視界で男達を見据える。

男達はニヤニヤと笑みを浮かべて、ボロボロのメリッサを眺めて

いる。そして、一番近い位置にいるデーモンの手が剥き出しになった乳房を掴もうとしたその時

「な……のか……」

微かな声が聞こえ、デーモンと男達は少し驚いた様子で眉を上げる。

「へー、凄いね。まだ意識があるの？ まあ、その方が燃え」

「この体を……貴様等なんかの好きにさせるものかっ」

意を決してメリッサは、最後の力を振り絞って、高らかに言い放つ。自分の、メリッサ＝ウランダーの心と体は、アステイス＝フロイデだけのものである、と。

(……最後に一目……会いたかった。……ごめんなさい、……アステイスッ)

愛しき男の姿を脳裏に浮かべながら、メリッサは尚も抗う事を選び、デーモン達がその剣幕にうろたえている一瞬の隙を突いて、その小さな口を開けた。

やっと住むのに馴染んだ、先帝からの贈り物である屋敷を、アステイスは戦いに必要な物を身に付けながらも見回している。

(……もう、見納めだな)

微かな溜息と共に、すぐさま執務室を出、滑るように階段を下りると、アステイスが屋敷の管理を一任している執事の姿が玄関の前にあった。母の生きていた頃から仕えてきたムスリムという名の背

の低い年老いた執事は、まるで戦場に赴くかのようなアステイスの姿を見ても特に驚かず、ただ皺の深い目を細める。

「……イグニスから詳細は聞きました。……行かれるのですね」
アステイスは曖昧に笑いながら、返事の代わりに丈夫な革でできた小さな鞆を執事に渡す。

「アステイス様、これは……？」
ムスリムは戸惑い、質問する。

「家人達の退職金が入っている、銀行口座の預金証書だ。最悪の事態に備えて用意していた。もはや私は反逆者、このままではお前達まで巻き添えを食うからな」

自嘲気味に笑ったアステイスを見て、ムスリムは暗澹たるあんたん気持ちになった。アステイスほどテルネシア帝国に貢献してきた人間などそうはいないというのに、帝国はアステイスを駆除しようとしている。

「そう、ですか。この国はそこまで落ちてしまいましたか」
俯くムスリムに、アステイスは詫びる。

「すまないムスリム。もはや穏便に済ませる事はできそうにない」
メリツサを攫うという非道なやり口に怒りを禁じ得ず、アステイスは唇を噛む。

足元に落としていた視線を上げ、ムスリムはアステイスを見据える。その眼には強き意志と炎が灯っている。ムスリムはやおら微笑む。

「謝る必要などありません。……貴方のお母様が今際の際に仰っていました。あの子がどのような選択をしようとも止めないでやって欲しい、と。覚悟はできておりましたとも」

ムスリムが穏やかな表情でそう言ってから、懐から包みを取り出し、アステイスの方に大事そうに両手で差し出す。アステイスは首

を傾げながらもそれを受け取り、紐を解く。

「これは、……母上の」

そう言いながら、アステイスは鞘からそれを抜く。

それはまるでソードブレイカーのように、刀身の中ほどに櫛のような小さな鉤が複数付いていて、刃渡りはナイフよりやや長いくらいだった。使われている金属は銀色ではなく黒光りしており、アステイスが刃を翳すと、鈍い輝きを放った。

「お母上、シドーニア様の形見です。天より降ってきた星から作られたという曰く付きの物ですが、非常に硬い金属で出来ていると仰っていました。人殺しの為の道具だから、と貴方に渡す事を最後まで渋っていましたが……唯一、今が渡す時だと思ひまして」

手に吸い付くようなその感触を確かめ、アステイスは鞘にそれを仕舞う。

「……わかった、ありがたく受け取っておく。……家人にはお前が代理で暇を出してくれ。退職金を払うのを忘れぬようにな。そして、私が一言謝っていたと伝えてくれ。……皆の退去が終わったら屋敷に火を放て。離れの厩舎にいる馬達は、お前の裁量に任せる。全て良い馬だから、売ればそれなりの金になるだろう。お前達の痕跡は一切残すなよ」

細かい指示を聞き終え、ムスリムはしかと頷く。

「畏まりました、必ずや」

「では、壮健でな」

アステイスは再び歩き出してムスリムと擦れ違い、マントを靡かせて出口へと向かう。

「アステイス様」

アステイスは開きかけた玄関扉の取っ手を掴んだまま、僅かに振

り返る。

「御武運を。いつの日か必ず、お二人でお戻りください」

背中越しのムスリムの言葉に、アステイスは力強く頷き、扉を開けた。

屋敷から出たアステイスが急ぎ厩舎へ向かうと、道の奥からイグニスと馬を二頭引つ張って来るのが見えた。黒毛と葦毛の駿馬で、普段アステイスが良く乗っていた馬だった。イグニスのその気配りを内心で賞賛すると共に、アステイスは鎧を取る。

イグニスが訊く。

「アステイス様。鞍は如何致しましょう」

「なくていい、そんな余裕は無い」

早口でそう言うと、すぐさまアステイスは葦毛の馬に跨った。何より、一刻も早くメリツサの所に行かなければならない。

駆け出そうとしたアステイスの視線の端に、イグニスが黒毛の馬に乗ろうとしているのが見えた。

「……お前も一緒に来る気か」

アステイスは複雑な表情を浮かべた。これから間違いなく刃傷沙汰になる。剣術は教えているものの、人を殺した経験のないイグニスを連れていくのは気が咎めた。

しかし、イグニスは朗らかに笑った。

「これはメリツサ様の乗る馬ですよ。馬一頭に二人を乗せて追手から逃げ切るのはアステイス様といえども無理でしょう。私は多分連中に顔は知られていませんし、人ごみに紛れてムスリムさんの所に戻ります」

「なるほど、もっともだな」

アステイスは目から鱗が落ちた思いだった。自分はそんな事も見落としていたのか、と己を恥じる。冷静さを欠いては救出はまならない。アステイスは目を瞑つむって深く深呼吸をし、目を開けるや否や、乗っている馬の頭を北へと向けた。

ブラームスの別邸は、アステイスの屋敷から普通の馬を走らせて二時間程の所にあつた。二人は馬に乗って一路北へと向かう。街路樹の銀杏並木は美しい黄金色の絨毯を作っていたが、二人には景観に見とれている余裕は一切無かつた。まだ昼間にもかかわらず、辺りは薄暗い。ふと空を見ると、アステイスの心の内を現すような暗雲が所狭しと広がっている。

屋敷でブラームスの兵達を返り討ちにした事は暫くばれない筈だった。手練れを複数名拘束に向かわせた事で、自分に逃げられる事は無いと高を括っている。アステイスはそう見ていた。それは、自分に対しての部下達の態度や行動が証明していた。

何度も鞭を入れない焦燥に駆られるが、アステイスはぐつと我慢する。長距離では過剰に鞭を入れても馬を疲れさせてしまうだけだった。

土道にドドドドツと鈍い音を奏でながら、二頭の駿馬は北へと駆ける。

「それにしても、何故ブラームスはメリッサを……。ウランダー卿の事を考えればおいそれと手出しは出来ぬはずだが」
アステイスが訝りながら呟く。

メリッサの父親、ミリック・ウランダーは帝国内に影響を持つ名門の貴族だ。彼の目が光っている限り、メリッサは安全であるは

ずだった。だからこそ、アステイスはここまで切迫した事態にはならないと踏んでいた。

イグニスが申し訳無さそうに口を開く。

「すみません。アステイス様には絶対言わない様にと、きつく当人から口止めされていたんですが、メリッサ様はお父様と仲が宜しくないんです」

イグニスが心苦しそうに言った。

「……何だつて？」

アステイスはイグニスの方に振り向く。イグニスは、もしかしたら自分の声が主人に届かなかったのかと思い、馬蹄の立てる音に負けない程度に声を大きくする。

「元々、ウランダール卿には兄弟が十一人もいます。卿は娘のメリッサ様が軍人になる、という事を聞いただけでも大反対されたようです。メリッサ様はあの器量ですから、政略結婚でもさせるつもりだったのかも知れません。まして、平民出のアステイス様の副官になる等と言う事は許し難い事だったんじゃないでしょうか。ほぼ、絶縁状態にあつたのだと思います」

その言葉に、アステイスは幼い頃のメリッサが巻き込まれた事件を思い出す。あの時彼女の父親が見せたふてぶてしい態度は、ブラームス達のそれに近いものが確かにあつた。

「……そういう事が。だがそれでも実の娘を」

アステイスの言葉に、イグニスは力なく笑う。

「アステイス様のご両親は、きつと素晴らしい方だったのですね。でも、世の中には子を憎く思う親もいるのです。だから、僕はあんな齡で奉公に出されたわけですし……」

アステイスは何とも言えない表情をした。それに気付いたイグニ

スは慌てて取り繕う。

「あ、誓ってアステイス様に仕えるのが嫌だったとか、そういう事ではありませんよ。仕えた当初は、そりゃ色々卑屈な事も考えましたけれど、お給料も良かったし、ここにいる皆さんは厳しくも優しい方ばかりで、今思えばここに来て本当に良かったと思っています」

「……そうか。それを聞いて安心した」

やっと、アステイスは微かに笑った。

アステイスの屋敷を出たのが十時ちょっと過ぎ。二人の乗っている馬は選りすぐりだから一時間半もかからずに着くはずだった。

「メリッサは何時頃家を出たのか知っているか」

それほど聞く意味のなかった事だが、それでも質問した。

「はい、家人の話では、呼び鈴が鳴ったのは朝の四時半頃だと言っていました」

イグニスが答えた。

(という事は……)

別邸に連れていかれるのにメリッサの家から一時間半かかるとして、連中が別邸に到着して既に四時間が経過している事になる。それから更に一時間半。アステイスはメリッサの無残な姿を想像し、首を振って湧き出たその想像を振り払う。

(必ず助け出す。 必ず、だ)

アステイスは言い知れぬ不安を心に押し込めると、手綱を持つ手に力を込めた。

其の十六　く血塗られた道へ（表）

クルート城、帝国軍本部

クルート城の一室にいたコステイブラームはいつになく上機嫌だった。高そうな肘かけ椅子にふんぞり返って朝から浴びるように果実酒を飲んでいた。勝利の祝杯だと言わんばかりに。

アステイスの副官メリツサを捕らえた、と部下から既に報告が入っている。奴の元には普段自分の身边警護をさせている精鋭の部下達を送っていた。元々文官だった奴にそれだけの兵を送る必要は無かったかもしれないが、万一に備えての事だ。もし逆らえば、首を取るように言い含めてあった。その場で逃亡しようとした、と言えば周りの者も納得せざるを得まい。逆らわなかったとしても、一旦牢に閉じ込めてしまえば、周りの者に判らぬよう殺す方法はいくらかでもある。毒でも、火でも、病原菌でもだ。

唯一、メリツサに関してウランダー家事は気になっていたのだが、一ヶ月程前に他の貴族との会話の中で、メリツサという女が父親のミリックウランダー卿に絶縁されているのだと知った。

奴には他にも子がたくさんいるし、そんなにも嫌っている娘が行方不明になったとて、さして問題にはするまい、とブラームは判断した。

それに、名門貴族の子女を玩具の様に扱える機会などそうはない。ましてやメリツサは美人で軍の内部でも人気が高かった。暫くは楽しませてもらって、飽きたら殺し、東国との戦場にも適当に放置しておけば、死体が発見されたところで、敵兵に捕らわれた拳銃の

非業の死として処理されるだろう。

ブラームスは、宿敵アステイスの苦痛に喘ぐ顔を想像してほくそ笑む。

「これで奴も反逆者。ブラーヂウス様もお喜びになるであろう」

アルイールが存命だった頃から、ブラームスはアステイスに煮え湯を飲まされ続けていた。アルイールは名門貴族であるブラームスを差し置いて平民ぶぜいのアステイスを殊更に重用した。

アステイスさえいなければ、皇帝の秘書になるのも、本当は自分の方だったのだ、とブラームスは本気で信じ込んでいた。

数々の恨みが今日、報われようとしている。周りの者から見れば、其の八割くらいは逆恨みだと思われるだろうが。

「随分と出来あがっているな」

その声にブラームスが後ろを振り向くと、ガツシュ「エウゲンがいた。

「おお、エウゲン將軍。お主も一杯どうだ」

周囲を伺うとテーブルや床に酒の空き瓶が何本か転がっているのが見えた。ブラームスが少し喋っただけで、酔っ払いが放つ不快なアルコール臭が充満したが、エウゲンは顔をしかめながらも近づけ、声を潜めて訊ねる。

「憎きフロイデ卿の副官を捕らえた、というのは本当か」

その問いに、ブラームスは邪悪な笑みを浮かべる。

「くつくつく、貴公は壁にも耳が付いているのかな。あの女なら今頃は私の別邸で部下達とお楽しみだ。たっぷりと時間をかけてボロ

雑巾のようにしてから、捕らえたフロイデ卿の前に突き出してやるわ。奴がどんな顔をするか今から楽しみだ」

エウゲンは何も言わず、アステイスの傍らにいた副官の顔を思い浮かべる。それに気付いた様子もなく、ブラームスは舌を滑らかに動かす。

「ここだけの話だがな、奴の屋敷にも我が部下を向かわせている。魔獣討伐で名を馳せた強者達ばかりだ。間もなくこちらへ連れてこられるだろう。もっとも、抵抗すれば首が無くなっているかも知れんがな。……それはそれで少し残念だが、致し方あるまい」

ブラームスは息を引っ込めるようにしてヒツヒと笑った。話して良い事と不味い事の判断が付かなくなっているところを見ると、相当に酔いが回っているらしい。

「なるほど、な」

エウゲンは表情を変えずに言った。

相当に酔いが回っているのだろう。顔を紅潮させながら、ブラームスはどこか虚ろな様子で訊く。

「何だあ。どうかしたかあ、エウゲン」

やたらと大きな声で尋ねたブラームスに、エウゲンは小さく首を振る。

「いや何でもなし。それより酒は程々にしておけ。今日も夕方から軍議がある」

曖昧あいまいに笑ってから、エウゲンは酒臭い部屋からそそくさと退散する。ブラームスは少しの間首を傾げていたが、思い直したのか、再びグラスにワインを注ぐ。

「おやあ、もう空っぽかあ。

おいっ、誰かいないかあ。酒

がないぞ酒があつ。ブラームス様にとつと酒を持ってこいっ」
壁を隔てた廊下にまで響く大声を上げて、椅子の前足が浮くほどに、ブラームスは踏ん返り返った。

後ろから響くその喧しい声を振り切るようにエウゲンは廊下を早足で闊歩し、ブラームスのいた部屋から離れてゆく。ややあつて、使用人に扮していたエウゲンの側近達が素早く近寄って来る。彼等を一瞥したエウゲンは険しい顔をしていたが、深い息を吐き出しておもむろに言う。

「……お前達に頼みがある。よく、聞いてくれ」

ブラームス別邸

血塗れの男は、同じく血に濡れた剣を片手に階段を駆け下りていき、最奥の鉄扉の前に立つ。服に傷らしき物が一切ない事から察するに、全て返り血の様だ。

ギイイイ

重厚な扉を開けた瞬間、カビ臭さが鼻を突くが、躊躇せず、一步、また一步と歩を進める。薄暗い地下室の中では、どこからか水が漏れているのだろうか、時折、水滴が落ちる音が反響している。それに重なるのは男の靴が奏でる音。それ以外には何も聞こえない、不完全な沈黙。臭気は益々強まり、それに嗅ぎ慣れた血の匂い、どこ

が酸味のある匂いが混じる。

徐に男は歩を止め、顔を上げて 全てを察し、呟く。

「 遅くなつて、すまない」

錆びて変色した赤褐色の鎖に両腕を繋がれている、見慣れた美しい金髪の女に、男は声をかけた。しかし、返事は返つて来ない。

同じ人間として、否、人間だからこそ、だ。

男は煮え滾る感情に身を糺しながらも、己の考えを改めた。人が、その矮小な想像力で考え得る事は、遅かれ早かれ実現してしまうのだ。それが慈愛の行為であれ、残虐な行為であれ。

ギイン

耳障りな金属音が地下室に木霊す。

鎖を断ち切ると同時に、布切れ同然になった衣服を頼りなさに纏っていた女の身体は、その支えを失つてゆらりと自分の方へ倒れ込む。それを、両腕で倒れぬようにしっかりと抱き止める。カランカランと甲高い音を戦慄かせながら、持っていた、真っ赤な斑に彩られた細剣が石床に横たわる。耳元に彼女の唇があるのに、吐息の音はもう、聞こえなかった。

男の女を抱く手に力が籠り、その体が小さく小刻みに震える。

「 ここまで」
「 ここまで人を貶めるのか。」

男は膝をゆっくりと折り曲げ、怒りか、悲しみか、憎しみからな

のか、小さく震える手で女の身体を支える。その小さな手の薬指には指輪が嵌はまっていた。受け取ってくれた時の嬉しそうな、どこか恥ずかしそうな彼女の笑顔が、男の脳裏に過ぎる。

薄い桃色の唇の端からは一筋の血が流れていた。その血の量から、彼女が舌を噛み切ったのだと気付く。程なく、男の唇の端からも同じように一筋の血が流れ落ちていく。男はその口を開きかけるが思い留まり、己の血の味を確かめると、涙の跡が残った女の虚ろな双そら眸ぼを、その手でゆっくりと閉じる。

メリッサ……………許せ。

アステイス「フロイデは、ただ己が心の中で詫びた。

地下室から一階へ、アステイスはメリッサの亡骸を胸に抱き抱えたまま階段を上がっていく。一階の各所には先程アステイスが一戦交えたブラムスの兵達が横たわっていた。

「うう……………」

居間の絨毯の上にメリッサの亡骸を横たえた時、どこかから呻き声が聴こえ、アステイスの眉がピクリと動く。その瞳は細かく振動し、その齒は軋む。

まだ息絶えていない者がいる。血走ったアステイスの目は声の方向へと向き、鞘に納めていた血塗れの剣を再び抜いた。

アステイスが廊下に出ると、ブラームスの配下と思われる男が、玄関を目指して這うようにして進んでいた。

「……何故、生きている」

彼女を殺しておいて、何故。

顎がわなわなと震える。アステイスの爪が掌に深く食い込み、握りしめている剣の柄から下に向けている剣の先端へと血が滴っている。

男はアステイスの呟きに気づき、蒼白な顔をしながら首だけを後ろに捻る。

「ひっ……、ひいー」

男の視界に入ったのは、先程剣を交えた時とは比べ物にならない程の激情を纏ったアステイスだった。その目は見開き、顔は歪み、そして、その足がゆらりと動き出した。

「ひっ、……助けてパパ、……パパーっ」

男は這いつくばって再び必死に逃げ始める。アステイスはその男の横に立ち、背中を顔色一つ変えず思い切り踏みつける。メキッと何かが折れるような、嫌な音がした。

「ギャアアアアアアッ」

「五月蠅い」

ズンッ

「あきやつ……」

アステイスの剣が首から喉に貫通すると、まるで猿の鳴き真似のような声を出して、直後に男の体は痙攣を始めた。

のたうつ男の身体に、再びアステイスは剣を突き立てる。血飛沫ちしぶきが舞い、アステイスの顔を、服を、紅く染め上げていく。

「……………何故だと訊いてる。……………おい、答える。何故だ、何故だつ、何故なんだつ」

アステイスは現実と、非現実の狭間で問いかけていた。それは、自らの心に刃を突き立てるのと等しい行為だった。関係のないメリッサが殺された原因。それは、他ならぬ自分自身だった。わかっていたのだ。己の甘さが、勇気と決断力のなさが、そして存在そのものが、廻りまわって彼女を殺したのだと。

言葉とともに男の体に穴が増え、その度に男の身体がビクンビクンと痙攣けいれんし、それがついぞ弱々しくなり、やがて動かなくなっても、尚突き立てる。何度も、何度も。

呼吸する事も忘れ、ふらりとアステイスは周囲を見渡す。

(……………万が一にも、生かさぬ)
アステイスは、ただ殺戮という作業を再開する。

運悪く命のあつた者は、アステイスに次々に息の根を止められていく。その死人に鞭打つような行為を、アステイスは一切躊躇ためらわずに実行し、最後の生き残りと思われる、二階で死に掛けていた背の高い男の首を刎ねる。目を見開いたまま横にくるくると回転し、血飛沫を上げ、男の首から上だった部分はゴトツと床に叩き付けられる。

そして、屋敷内に水を打ったような沈黙が訪れた。

ふらつく足取りで居間に戻ってきたアステイスは火の入っている暖炉に目を留めると、虚ろな目で辺りを見回した。部屋の隅に立ってかけてあった大きな帝国軍機に目を移すと、それを手に取り、暖炉に燃えている火を旗に移す。

アステイスはブラームスの屋敷内を回って、よく燃えそうな物を見咎め、次々と火を付けていく。程なくして、アステイスが居間に戻って来る頃には、各所についた火はパチパチと燃えてその勢いを増し、玄関への道を残して煙と炎が舞い上がっていた。

アステイスは絨毯の真ん中に横たわるメリツサの亡骸に視線を移し、返り血に塗れた端正な顔を歪める。火に包まれた明るい部屋で、改めて見た彼女の華奢な身体は、執拗に鞭に打たれたのだろう、帯状の痣が至る所に見受けられた。ボロと化した服の胸元からは乱れた下着が覗いている。どれほど過酷な暴力に晒されたのか、容易に想像が付いた。

舌を嚙んだのは、苦痛から逃れる為か。それとも、アステイス以外の男に辱められる事が堪えられなかったのか。或いはその両方なのか。

湧き出でるとす黒い感情を今は抑え込み、アステイスはそのままゆっくりと彼女の前に跪き、もう冷たくなっていた両の手を、震える手でそつと持ち上げ、胸の上に重ねる。その手に光る婚約指輪が、再びアステイスの心を苛んだ。

その悲しみに歯を食いしばって堪えつつ、アステイスはフロイデは目を瞑り、祈り、メリツサはウランダールへ、愛する女性へ悼詩

を捧げる。

我が心を唯一虜にした君に

今はただ、哀悼の詩を捧げる

この焔は君を悼む送り火であり

愚者を焼きつくす地獄の業火であり

我が意を示す、悪鬼共への戦いの狼煙

喩え我歩むが血塗られた道だとしても

我が心は君の魂と共に寄り添い

天にいる君が見失わぬように

冥くびくとも気高き光を放ち続けよう

この身がこの先どれほどの罪に塗まみれようと

この心がこの先どれほどの狂気に蝕まれようと

この誓いだけが、
真実ほんとうだ

目を開けて初めて、アステイスは自分が涙を流していた事に気づく。メリツサの拗ねた顔が、困った顔が、優しい笑顔が胸を去来し、己の心を狂おしいほどに締め付けていく。

「……ツサ」

愛する人の名を呟くも言葉の体を成さず、口を動かすだけに留まった。アステイスが発したその涙と嗚咽は、周りの炎が発する熱と荒れ狂う音でゆっくりと消えていく。

いつそ消えてしまえばいい。我が良心と共に燃え尽きてしまえ。

メリッサの両手から己の手を離すと、アステイスはゆらりと立ち上がる。蒸す様な熱さの、炎に包まれた部屋の中をゆっくりと、彼女の亡骸を振り返る事無く出口へと歩き出す。その瞳に、心に、漆黒の炎を抱きながら。

窓枠と硝子が熱で拉げ、燃え続けていた柱に亀裂が入る。徐々にその支えを失い、屋敷が崩壊を始める。屋根がガラガラと崩れる音が屋敷中に鳴り響き、吊り下げられていたシャンデリアがひび割れた天井毎落下する。凄まじき衝撃音が奏でる不協和音がひたすらに暴力的に辺りを蹂躪する。

居間のカーテンは全て火に包まれ、上の留め布が溶けて絨毯を舐める。細かい火の粉がまるで埃の様に空を舞い、ついにメリッサの亡骸も炎に抱擁されてゆく。

紅蓮の炎に包まれて倒壊する家屋の中で、目を閉じ炎に包まれた彼女の手にある指輪だけが、残酷なまでに燦爛たる輝きを放っていた。

(一)〜(二)幕間　〜皇帝の近衛達(表)〜

883年　10月8日

アステイス「フロイデがコステイ「ブラームスの別邸に乗り込んだ際、別邸にいた非戦闘員達は急ぎ屋敷を飛び出し、クルートの街を巡回していた帝国兵達に助けを求めた。帝国兵達は異変を聞きつけてすぐさま兵を招集して別邸へと駆けつけたが、既に屋敷には火が付けられ、もはや手の付けられない状態となっていた。直ちにアステイスを捕らえるべく包囲網を敷くよう要請したが、彼の姿はクルートには既になく、辛うじて旅行者の証言から、それらしき男が共の者と馬に乗って北に走っていった、と聞き出せたのみだった。

我が子を殺されたとブラームスが知ったのは日も暮れかけてからのことであり、しかも相当に酔っていたため、その事実を受け入れるのに相当時間がかかった。やっと我に返ったのは夜も更けてからの事で、一頻り泣いたブラームスは、ブラージウス皇帝にアステイス追討への協力を求めるべく足を運んだ。

アステイスと親しかったミレンを初めとする将校たちはそれを聞かされ、一様に信じられない、という面持ちでいたが、翌日には目撃者の証言からほぼ確実に彼がブラームスの別邸を焼き討ちした、ということが判明したため、一様に表情は険しかった。

将校たちはクルート城に集まり、この懸案にどう対処するべきか意見を戦わせていたが、途中からブラージウス、ブラームスが会議に参加すると、バラバラになっていた方策は一方向へと収束していった。

「では、逆賊アステイス」フロイデの首に懸賞金20億ギラをかけることを決定とする」

ブラージウスが軍議室全体を俯瞰しながらそう言い放つたのを聞き、将校達は沈黙する。取り分け、第七軍大隊長、ジルバート」ミレン將軍は、アステイスの苦境に何も出来ずにいる自分が齒痒かった。事件直後にもかかわらずブラージウスの彼に対する処遇は、まるで予め決められていたのかの様な用意周到さを感じていた。何故、彼があのような蛮行に及んだのかは自分にも未だに判らなかつたが、少なくともれっきとした理由なしに焼き打ちを行う様な男ではないと断言できる。出来ることならば、今すぐにもアステイスに会って？何があつたのか？を問い正したかつたが、幸か不幸か行動してしまつた以上、この辺りをうろろしているほど彼は愚鈍ではない。

今日、この場に集うまで、自分を含む殆どの将校達はアステイス」フロイデの第六軍指揮権限が剥奪される予定だつたという事は聞かされていなかった。その理由としては、東国との戦績で芳しいものがない、ブラージウスに対して反抗的な態度が見られる、等といったちもつともらしいものが多かつたが、戦績に関して言えば、彼は前線には一時しかいなかったからまともな戦績が上げられるわけがない。漁船を奪つておきながら、何故お前は漁獲高が少ないんだ、と騒ぎ立てる様なものだつた。

準将を務めていたアステイスの突然の失脚は、ブラージウスがいよいよ己の周りを固め始めた、と将校達に実感させる出来事となつた。

会議が終わつた後、廊下でジルバートは先に出て行つたブラームスの姿を探し、直ぐに太つたその体を見つけて背後から声をかける。「ブラームス殿、一つ訊きたい。アステイスが何故ブラームス殿の

別邸を狙ったのか、心当たりはないか？」

ブラームスは歩みを止め、不快そうな顔をジルバートに向ける。息子の死を悲しみ泣き腫らしたのか、やや赤い目を細めながらジルバートを見る。

「ああ、そういえばお主は奴の友人だったらしいな。名門貴族ともあるう者が平民と親しくしていたとは、嘆かわしい。だが、お主も今回の件を見て判っただろう。結局、平民無勢を取り立てたところで恩を仇で返されるのだ。所詮、奴隷は奴隷でしかない」

いつもの事とはいえ友人を名指しで侮辱され、ジルバートは辟易した。そもそも、お前が一体どんな恩をアステイスに売ったのだ、と大声で反論し、罵りたかったが、曲がりなりにも息子を亡くしたばかりの父親の心中を察すると、それは流石に躊躇われた。もっとも、目の前の男がそういうた常識を持っているかといえば、力一杯Noであるのだが。

「いいから質問に答えて欲しい。陛下や貴方はアステイスが反逆した、と言い放ったが、それが目的と言うならば何故本邸ではなくて別邸を狙ったのだと思う」

ブラームスは怒りを露にする。

「どうでもいい。平民無勢の考えなど知った事かっ」

ジルバートは淡々と言葉を続ける。

「どうでも良くはないだろう。彼が本当に反逆を考えたならまずは陛下か貴方の首を狙うはずだ。それなのに何で関係ないはずの別邸を狙ったのか、重要な問題だと思うがな」

ブラームスは頬をひくつかせる。

「……今のは問題発言だぞ、貴様は暗に陛下や私が狙われた方が良かったと言っているのだからなっ」

本当に反逆をしたのか、というところに論点を置いているのに、

どこをどう聞いたらそうなるのだ。もし、彼の反逆に疑いを抱いている、という意味では叛意ありと見なされても反論の余地はないが。ジルバートは目の前の太った男の暗愚さにらしくなく舌打ちをした。それが聞こえたのか、ブラームスは更に苛々を募らせる。

「……ははあ、なるほど。そういうことだったのかっ」

唇を歪め、何やら勝手に納得しているブラームスに対して、ジルバートは訝る。

「何？」

「さては、貴様が奴の逃亡を手引きしたのだな。だから警備の厳しいクルートからこんなにあっさり逃げられたのだっ」

ジルバートの眉間に皺が寄る。

「貴方は、それを本気で言っているのか」

「言っていたとしたらどうなんだっ」

ジルバートは肩を竦める。

「……やれやれ、貴方はアステイス＝フロイデという男をあれだけ敵視しておきながら良くご存じないようだ」

敵をよく知りもしないで倒そうなどとするから、ひたすらに足元をすくわれ続けるのだ。喉まで出かかった言葉を、ジルバートは飲み込む。

「……何だと？」

ジルバートはブラームスを鋭く見据える。

「アステイスは、帝国屈指の剣の達人だ」

ブラームスは一瞬口をだらしなく開き、次の瞬間顔色を変えた。

「何だっ、奴は文官上がりの」

「やはり知らなかったのだな。彼が軍学校にいた時の事等、気にも留めなかったと見える。もっとも、平民の話などと言って聞く耳もたぬ貴方には届いてないのも無理からぬこと」

ブラームスは忌々しさを振り払うように左手を横に薙いで叫ぶ。

「ぐ、軍学校時代の話くらい知っておるわっ。だが奴はその後実戦

には出てなかるう」

「今となつては隠しても仕方ないから教えて差し上げよう。近年まで、アルイール様の稽古相手をアステイスが努めていたという事はご存じではあるまい？」

「な……」

啞然とするブラームスに構わず、ジルバートは続けた。

「アルイール様は武道派といわれた歴代皇帝の中でも屈指の武量の持ち主。まともに切り結ぶ事が出来る者はそうそういなかった。私が呼び出された時にも何度か立ち合つたし、稽古の仲立ちもした事がある。アステイスがアルイール様に勝つていたとは言わないが、彼の力は今や私とほぼ互角。薄っぺらい包囲網が幾重引いてあつた所で、そうそう捕らえられるものか」

反論のないブラームスを見据え、ジルバートは尚も言う。

「はつきり言つておくが、私は今回の件、全く関係がないし全貌も未だよく理解できていない。それを念頭に置いて頂いた上で、一つだけ貴族の好^{よしみ}で忠告しておこう。もし、これが真に彼の反逆だといふならば問題はなかるうが、万が一、貴方の謀略だとしたら、ゆめゆめ気を付けることだな。復讐に燃えた彼の力は……千の兵に匹敵するやもしれんぞ」

ジルバートは目に怯えの走つたブラームスを睨みつけてそう言う
と、黒衣を翻してその場を颯爽と立ち去つた。

そして、彼はいずれ気付くことになる。その指摘はある意味では正しく、ある意味では大いに間違つていたのだと。

深夜、白いバスローブを纏ったブラーヂウスは30畳ほどの寝室の窓際にある、薄絹のカーテンで囲われた大きなベッドの上に座っていた。その傍らには人影が二つ。一人は優男と言ってもよい白髪の若い男だが、その眼光は鋭く、そして暗い。もう一人の男は銀髪で皮膚が黒ずんでおり、全身が筋肉の鎧に覆われ、身長が2mはありそうな大男だった。二本の角が生えている所から見ると亜人、それも稀少種のようなものである。

「全く、こんな大事おおごとになるとは。やはり我々がやれば良かったですね」

ブラーヂウスの近衛を務めている若い男が言った。隣にいた大男も同意する。

「必ず始末する、とほざいたから傍観してやったのに。この責は重いと思いますが」

ブラーヂウスは、諜報兵として110人の練達な兵達を選りすぐり、同時に近衛として身边を警護させていた。110という数字に深い意味はない。1という数字が好きだった、10人では少なうて心もとなかった、それだけだ。1は己を表す数字でもある。帝国の頂点に立つ権力者。それを合わせて111。トリニティ・ワン三重の頂。

その実力は一人で百兵に匹敵する。それぞれが武術、魔術の達人であり、言ってしまうえば、彼等が集うだけで一万を超える兵がいるようなものだ。用心深いブラーヂウスが考案した己の軍の監視と諜報を一手に担う私設部隊である。

ブラーヂウスはいつものように、どこか間延びした口調で答える。「ブラームスは有能ではないが、何かと便利な男だ。鼠一匹逃した所で差し触りはない。運良く見つけたら殺す、それでよい」

「もし、僕等が殺したら20億くれるんですよ」

「からりと笑う若い男に、ブラージウスは表情を変えず肯定する。

「無論だ。別にそこまで惜しむ金ではない。所詮は税金、廻り回っては余の物だがな」

近衛達はブラームスに頷く。

「ベールの方は如何いたしますか」

ブラージウスは空を仰いでしばし考える。

「そうだな。ミレン將軍とベルガモット將軍をエル・クレス城に置いておけば問題あるまい。イアニス教団等、戦争に関しては素人に毛が生えたほどでしかない。多少個の力があるうと、あの両将には到底太刀打ち出来ぬ」

「ベルガモット將軍はまだしも、ミレン將軍が裏切ったら捨て置けませんよね。もしそうなつたら殺しますか？」

ブラージウスは、今はもう近衛達も見慣れた残酷な笑みを浮かべる。

「お前ほどの者がわからぬか、イヴァンス。あの男は、ジルバート＝ミレンは、絶対に帝国を裏切れぬ。我が妻である姉を愛しているし、余が何をせずとも様々な物が奴を縛り付ける。部下、血統、騎士道精神、そして先帝。手駒と考えて差し触りはない」

イヴァンスと呼ばれた若い男は首を傾げながらも頷いた。

「はあ、わかりました。ところで、愛って何ですか」

その真っ直ぐな視線にブラージウスは硬直し、次の瞬間にはそれでこそだ、と言わんばかりに声を上げて笑った。腹の底から轟くその声を聞きながら、二人の近衛は、何がそんなにおもしろかったのだろう、と顔を見合わせるばかりだった。

其の十七　　円卓會議（表）

アステイス「フロイデが新生テルネシア帝国軍から姿を消して間もなく、帝国の皇帝ブラージウス「テレジアはコスティ「ブラームスを初めとする将校らに命じ、八方手を尽くしてアステイスの搜索を行っていた。

ブラームスは、アステイスによって殺された二男ダーモンの仇を討つべく搜索兵五千を動員し、自ら率先して搜索の指揮を採っていたが、クルート領内のアステイスが所有していた屋敷は既に不審火で跡形もなく燃え尽き、また、エアリア領内においてもその影すら踏む事が出来なかった。

年の瀬に差し掛かつては、イアニス教団法王グルツセル「イアニス率いる南部のベール教団、そして未だ抵抗の姿勢を見せている東部諸国が不穏な動きを見せている事もあり、帝国第一軍を預かる將軍職を放擲してまで当てもなくアステイスを追うわけにもいかず、苦渋の決断で追跡を一時断念するに至った。

アステイスの指揮下に入っていた第六軍の処遇に関しては、六軍を解体した後兵士達を分散させるようにテレジア大陸の僻地へと送りこんだ。万が一にも彼の息がかかった者達を結集させぬためである。そして再編成に当たっては各街にいる駐在兵から抜擢した混成部隊をいくつか作り上げ、一先ずは二千人の軍として序列が空くのを待っていたシュヴァイ「オルトフ准将を第六軍大隊長にあてがった。また、アステイスの抜けた穴を埋めるべく、エアリアの統治にはブラームスが推挙した第九軍大隊長ローラント「ラフォーム准将を向かわせた。

続いて、当面は最大の敵となるであろうベル教国の対応については、最寄のエル・クレス領より斥候の情報が届けられていた。それによると、ベルにいるイアニス教団の軍は約三万。それに呼応するようにベル周辺のいくつかの街ではイアニス教信者達が不穏な動きを見せているとの事で、ベルに程近いエル・クレス、マスチュア、ケルテ等の都市では、十二分に警戒せねばならぬ情勢だった。

東諸国に対してはベルガモットがネルガルにて睨みを利かせているが、あまり時間を与えて団結が強くなってしまつては宜しくない。付け入る隙があるうちに雪崩の如く打つて出て一気に潰してしまう方が良いだろう、とブラージウスは考えていた。

帝国軍の陣容は先代アルイールの頃と殆ど変わらなかったが、大隊長の顔ぶれに関しては殆ど入れ替わっていた。アルイールの代に將軍職に付いていた者達の大半は、アンドレイについた。彼等の半分近くは既にこの世になく、残った者達も未だに東諸国で抵抗の意を見せている。

ブラージウスは方針に対して否定的な意思を見せていた者達を大方左遷し、周囲には信を問わずに裏切らぬ、と確信できる者だけを置いた。自身の親衛隊、三重トリニティ・ワンの頂の存在はあつたにせよ、隙を見せではいらぬ考えを喚起する者も現れるやもしれぬ、という考えからである。

また、ブラージウスはブラームスにアステイスの権限剥奪を持ち掛けられた時から、当初アステイスに哀れな子羊役、裏切り者がどうなるかの見せしめになって貰う心づもりでいたのだが、不本意ながらも彼は追撃を振り切った。

現在の帝国軍はブラージウス率いる皇軍五万+三重の頂を筆頭とし、第一軍にコステイ[＝]ブラームス將軍。第三軍にガツシュ[＝]エウゲン將軍、第四軍にライエン[＝]ベルガモット將軍、第五軍にヤン[＝]レームス准將軍、第七軍にジルバート[＝]ミレン將軍、第九軍にローラント[＝]ラフオム准將軍。

新たに、第二軍にゴードン[＝]ベントリックス准將、第六軍にシュヴァイ[＝]オルトフ將軍。

第八軍は元々空座であつたが、その席に思わぬ人物が名乗りを上げ、ブラームスは冷笑と共にそれを認可した。メリツサの父親であるミリツク[＝]ウランダールの長男、ハンディツク[＝]ウランダール大佐である。

884年 12月1日

ブラージウス皇帝はクルート城にて主だつた將校を招集し、今後の方策を検討するべく軍議を開いた。ただし、ベルガモットはネルガルに、ラフオムはエアリアにいるため今回の軍議には出ていない。

軍議室の巨大な木製の円卓には^{ネツツウ}铮々たる顔触れが並び、ブラージウスが着席したのを合図に揃つて席に着く。ブラージウスは会議が始まる前に、細い眼を糸のようにして口火を切つた。

「今日の議題は新しき年の前という事もあり、要旨は我が軍の一箇

年計画についての会議となるが、その前に一つ余興がある。何分新顔が多くなったのでな。ラフォムには新任早々、裏切者の代わりにエアリアの統治を任せている故この場にはおらぬが、他の者達にこの場を借りて自己紹介をして貰おうと思う」

将校等は一様に頷いた。

「では、私から」

歯切れ良くそう言い、いち早く机に身体を預ける様にして立ち上がったのはオルトフ準將軍だった。かなり細身だが非常に引き締まった体をしている。髪も上を残して殆ど刈り上げている、如何にも軍人らしい軍人といった様相だ。褐色の肌からすると南部出身のものであるう、と察することが出来る。

「僭越ながら第六軍を預かりましたシユヴァイ^{II}オルトフにございます。以前はベルガモット將軍の副官を務めていた事もあります。今回このような話をお持ち掛け下さった陛下に対しては自身の忠節を更に揺るぎなき物と致しまして、粉骨碎身、陛下と帝国の為に尽くす所存でございます。無論、お歴々の将校様に比ぶれば多分に見劣りしてしまうのは否めませぬが、帝国を思うその気持ちだけは誰にも負けぬように頑張りたいと思います。どうぞ宜しくお願い申し上げます」

幾分若いオルトフが丁寧に頭を下げると、ブラージウスから拍手の輪が広がって行く。

先輩の顔を立てる事も忘れず、忠誠を戴く事とも忘れず、丸みを帯びた当たり障りのない挨拶に、将校達は殆ど感情を惹起^{せきおこ}される事無く拍手を送った。

「次は、私わたくしですか」

如何にも貴族然とした、尊大な態度で立ち上がったのはハンディックウランダー大佐だ。年齢は三十前後で見事な金髪だが、前髪がやたら長くて左目がそれに覆われている。ブラームスと比肩する貴族至上主義者のご登場に、レームス、ジルバートあたりが顔をしかめた。

「第八軍を拝命した、ミリックウランダーが第一子。ハンディックであります。ウランダー家と言えば古くからの家柄故、ご存知の方が殆どだと思いますがね。今回は事もあろうに私わたくしと同じ名門貴族のブラームス将軍に対して不忠を働いたアステイスフロイデ及び、元妹メリッサの汚名を雪すすがんと、軍の要職に名乗りを上げさせて頂きました。不遜なる反逆者と共にウランダー家の娘が行方をくまらずとは言語道断と考える方も多いと存じますが、それはウランダー家一同の見解と一致するところでもあります。先程も言いましたように、あれは元妹。既に我が父から勘当された身です。で、勿論、機会があれば反逆者のフロイデ共々、軍学校で名を馳せました私わたくしの剣技で冥府に送ってやりたいと考えておりますが、軍学校と言えば

「ああ、その辺で良い」

ブラージュウスがしつしと手を払うようにして前口上を止めさせる。賢明な処置だと、他の将校も頷いている。あまりブラージュウスとはうまが合わぬと感じているジルバートでさえも頷かざるを得なかった。周りを見渡しても、唯一気を良くしていそうなのはブラームスだけだ。

「は、はあ。では宜しく」

意表を突かれたウランダーは、まだ言い足りないそうに首を傾げながらも席に付いた。ブラームスは拍手しようとして手を叩きかけたが、周りにそんな所作をする者がいない事に気付き、ばつが悪そうにそのまま手を下ろす。

「……では最後になります」
ボソボソとした声を聞き、今度はブラームスが顔をしかめた。立ち上がった初老の男はたどたどしく話し出す。背は取り分け高かったが、かなり苦勞人なのか顔には深いしわが刻まれ、髪も相当に白い。

「……えー、第二軍大隊長を准将職と共に拝命しました、ゴードン
「ベントニックスです。……えー、つい最近まではどこぞの誰かさ
んによつてあらぬ罪を着せられ、……南部の砂漠に追いやられてい
ましたが、……えー、今回中央に舞い戻らせて頂く事になりました。
……えー、今度は足元を掬われないように、気を付けます。どうぞ、
……宜しく願います」

疎^{まは}らな拍手に迎えられたベントニックスは、流暢^{ちゅうちやう}とは言えぬ言葉に反して、鋭い眼光をブラームスに素早く投げ掛けた。ブラームスも不快を隠さず視線を返す。アルイールの御代に冷遇^{れいご}されていた者達の頂^{たか}点を争うという人知れぬ水面下での宿敵同士だったこの二人は、お互いにお互い^{けな}を貶し合^あってアルイールの心証を悪化させていくという悪循環を繰り返していた。

汚職に手を染めていたベントニックスを、同じく汚職に手を染めていたブラームスが告発した形で決着を迎えた二人の争いは、周りの者達からすれば同族嫌悪としか映らなかつたし、我欲の事のみを考えている二人のどちらが消えても加点にこそなれ減点にはならな

かった。

ブラージウスが新たな火種となりそうな男を何故この時期に呼び寄せたのかはジルバートも何となく察しているが、どのみち一悶着あるのは否めないだろう。

まともな自己紹介を成し得たのはオルトフのみ。後の二人は私情を語るのみに留まった。ウランダールはメリツサの恥を帳消しにしたい。ベントニックスはブラームスを嫌っている。その一言ずつで済んだのではないか。

(……これからこの面子で一年を過ごすわけか)

ジルバートは暗澹あんたんたる気持ちになり、悟られぬよう溜息を吐いた。

三者三様の自己紹介を終え、様々な思惑を内包しつつ軍議が開始された。まず真つ先に議題が上がったのがベール教国への対応だった。ここを誤ると、軍にいるイアニス教徒達があたら妙な考えを起こさぬとも限らぬ。9名の大隊長と18名の中隊長達は次々と意見を出し、その中で有力そうな案を絞ってゆく。

「では、ケルテ、マスチュアは現状維持として、エル・クレスを専守防衛するという事で宜しいでしょうか」

エウゲン將軍の副官、セガールが滞らぬように議長として流れを整える。

「それで良いと思います。マスチュアはベールよりマビアビに近いから直ぐに兵を送れる。ですが、交通の要所であるエル・クレスを奪われれば東諸国と領土の行き来が容易になり、連携される。そうすればどこかまとまりのない東諸国も腹を括って連合しかねません」

オルトフの意見は的を射たものだった。かくいうジルバートも、ベールとグリトリー辺りが接触したら面倒な事になると見ていた。新参の中で、唯一彼だけは頭の中身もまともなようだ。

結局、ベール軍は間違いなくエル・クレスを狙って来る、という意見に大多数が賛成し、ベルガモット将軍、ミレン将軍の両名を以って防衛に当たるといふ事になった。

「では、エアリアは如何いたしますか。今現在はラフォム准将が統治していますか」

ベントニックスの問いにブラージウスは宙に細い目をやった。

「カタルスタがよもや攻めてくるとは思わぬが、流石に空にするわけにもいかぬから。ラフォム准将にそのまま残って貰う事にする。

ブラームス、奴に書状を送れ」

「はっ」

ブラームスが頷いたのを確認し、ブラージウスは話を続ける。

「フリーゲルには第五軍率いるレームス准将軍を置き、北の中立国に備える。東諸国が従えば、間違いなく奴等も従うからこちらからは攻めぬように。マビアビはエウゲン将軍、そなたが余の名代として統治せよ。並びに首都の防備と共にマビアビからクルートへ、クルートからネルガルへ三年分の食料物資を速やかに輸送するのだ」

三年は、アテライデを除く東諸国を制圧するのにかかると目されている期間だ。そして、それは戦争の終結を意味している。どうやら徒に長引かせる心積もりはないらしい。

ジルバートから見ても、事態が当初よりも複雑化しているのは否めない。イアニス教団に関しては、或いはわざと反乱を誘発したのかも知れぬ。幾ら不満があろうとも、正面きつて強大な敵に立ちはだかるのは誰だつて避けたい。負の感情を抱きながら屈従している者達の数は、視野の狭いテルネシア貴族共が考えているよりも遙かに多いだろう。或いはブラージュウスは、そのようにして火種を隠している不満分子をイアニス教団に扇動させ、大火を起こした後に大波を以つて呑み込み、纏めて地の底に葬り去る策謀を脳裏に巡らせているのではないか。そんなふうにはジルバートは疑っていた。

「余の軍以下、第一軍、第二軍、第六軍、第八軍はそれに合わせてネルガルへ向かう。今現在ネルガルに駐留しているベルガモット將軍はエル・クレスに向かわせ、ミレン將軍と合流させる。来年の三月を過ぎる頃にミードかマリスノリス辺りを切り取っておけば上出来であろう。どちらかを戦略拠点として奪えれば、シャンテールとグリトリの制圧には半年もかからぬ」

『畏まりました』

同行を求められた將校たちが返事をする。

「では、これにて状況開始とする。諸君らの健闘を祈っておるぞ」
『ははっ』

將校達はブラージュウスが立ち上がると同時に一斉に敬礼した。

將校達が退席していく中、ブラームスがハンディック・ウランダールを呼び止める。ジルバートはちらりとその様子を見たが、構わず部屋を退出した。ブラームスの政敵であったベントニックスがいる以上、まだこちらに毒牙が向く事は無いだろう。そういう意味で

は、ジルバートにとって今回のブラーヂウスの人選はあながち悪い事ばかりでもなかった。

かくして軍議室には貴族至上主義の二人が残り、ブラームスは辺りに人気のない事を確認してハンディックに耳打ちをする。

「……そなたはクルートに残れ。ミレンの奴が出立したのを見届けてから、二万の軍を率いてエル・クレスの隣街、マスチュアに向かわれよ。この件に関してはブラーヂウス様も了承済みであらせられる。防衛線の最中は味方が不利に見えても手を出さずに兵を温存するのだ。あの二人ならまず負ける事はないからな。ベール軍が形勢不利になり、退却する頃合いを見計らって無傷の軍でベール軍に追撃をかけよ。敵軍がベールに逃げ切るまでに殲滅出来ればそれでよし。喻え落とせなくとも良い」

ミレンとベルガモットの名声をこれ以上高めぬ事が肝要。その本音を隠して、ブラームスは言葉を続ける。

「新参ということで貴公も色々気苦労があろう。少々活躍のお膳立てをさせて貰った。ウランダール家とは今後も長く付き合わせていただきたいからな」

「おお、それはお気遣い痛み入りますな。今のお言葉は父の方にも宜しく伝えさせていただきます」

ハンディックは眉を上げてから微笑み、手を差し出した。ブラームスもそれに応じて太い手を出すと、二人はガッチリと硬い握手を交わした。

其の十八　　く明と暗（表）く

ジルバートはクルート城から出ると厩舎へ向かう。正門から50mと離れていないその場所には、自分が屋敷から乗って来た馬を預けてあった。

将校達の馬を預かる厩舎の管理人はジルバートの姿を見止めると直ぐに彼の馬を出しに行く。程なくして、木製の鞍を背負った立派な白馬の手綱をゆつくりと引きながら、厩舎の外に出てきた。

ジルバートは管理人に礼を良い、馬に跨^{またが}ろうとしたが、背後に人の気配を感じて振り向く。ほぼ同時に、褐色の精悍な若者が俯き気味だった顔を上げ、二人の視線が交錯した。

「オルトフ卿。貴公も今から帰られるのですか」

ジルバートが声を掛けると、オルトフは一瞬戸惑ったような表情をしたが、ゆつくりと頷く。

「ええ。……おお、これは見事な毛並みの馬ですね」

艶のある真っ白な毛に覆われたジルバートの白馬を見て、オルトフは感嘆した。

「ははは、光栄です。こいつは一番のお気に入りなもので、褒めて頂けるとありがたい」

ジルバートの笑みに釣られて、オルトフも微笑する。

「いえいえ。……あの、ミレン様。良かったらで構いませんが、もし宜しければ途中まで」

一緒に帰りませんが、という言葉在省いてオルトフはジルバートに話しかけた。

「ああ、それはもう是非。ご一緒させてください」

ジルバートは快諾した。

新たに第六軍大隊長に就任したシュヴァイールと併走する様にして帰り道を行く。

多くの者達が左遷させられ、アステイスも失脚し、今の軍上層部は平民出自の者にとつては居心地の良い環境ではない。少なからず理解を示すのはベルガモット、レームス、そしてジルバートくらいだろう。接触を図ってくるのも不安の裏返しであるかも知れなかった。

己の立場としても、アステイスという理解者がいなくなった以上、気を許す事が出来ぬ者ばかりがいる軍の上層部で立ち回るには、信頼できる味方を一人でも増やしておきたい状況だった。

馬に乗りながら、二人は街燈に照らされた石畳の道をトコトコ進む。今通っている場所は商店街の位置に当たるが、既に殆どの店は閉まっており、昼間の活気は影を潜めていた。それでも、時折擦れ違ふ通行人達がジルバート達に頭を下げているのが見える。ジルバートは帝国においてのみならず近隣諸国でも名声を轟かせていた。

「どうだい、オルトフ卿。一軍を任された気分は」
ジルバートは自分で口走っておきながらそれを、いやらしい質問だ、と断じた。

「……そうですね。正直言って戸惑いはありますが、何分フロイデ卿の抜けた穴を埋めねばならぬわけですから。嬉しさよりは身の引き締まる思いが勝っていますね」

言動から察するに、オルトフは裏切ったはずのアステイスを多少

なりとも好意的に評価しているようだった。アステイスは平民出身にして先帝アルイールの一番近い位置に上り詰めたのだし、同じ出自の者達を随分勇気付けているのではないか、と解する事が出来る。

「なるほど。では貴公から見て、今の將軍達をどう評価する」

ジルバートの質問に、オルトフはやや面食らった顔をし、続いて苦笑する。

「私如きの目から見た評価が、果たしてミレン様程の方の参考になりますのやら」

柔らかくも否定されたか。とジルバートは舌を出す、それも無理からぬことだと思つた。彼とはそれほど面識はないし、仮にもミレンは名門貴族だ。警戒されていたとしてもおかしくはない。

ならば、とジルバートは話題を変える。

「君は今いくつだ？」

オルトフは一瞬首を捻つたが、直ぐに年齢を訊かれているのだと理解したのだらう。小さく頷く。

「26です」

「そうか。では様付けは止めてくれないか。ミレンと呼び捨てにして頂いて構わない」

不思議なものを見るような目で、オルトフはジルバートの顔を見つめる。

相手の名前をどう呼ぶかは、人との親睦を深める上で意外と役に立つ。身分が上の側から持ちかける分には畏まるかしこる必要はないし、呼び捨てにして貰う事によって互いに親近感が生まれ、距離を幾分縮めるのに使える。

ジルバートにとって、全く打算がない歩み寄りとは言い切れない

が、自惚れしゅめぼではなく、自分と信を深める事はオルトフにとっても悪い話ではないはずだ、という確信はあった。

「で、ですが」

「不服かい？」

間を置いて、ジルバートは念を押す様に流し目を送る。

この状況で再び断る事は、目の前の真面目な男には反って不敬な行為だと感じる事だろう。自分はいつからこんなに性格が悪くなつたのか、とジルバートは自嘲する。

「……わ、わかりました。では私もオルトフとお呼びください」

己の望む答えをオルトフから引き出したジルバートは深く頷く。

「わかった、オルトフ。これから宜しく頼む」

二人は馬上で礼を交わし、笑みを浮かべた。

オルトフと別れて自分の屋敷に戻り、靴箱の上にある置時計を見ると時刻は二十二時を過ぎていた。主人の帰宅に女中達と共にグレイスがいそいそと顔を出す。

「おかえりなさい、ジル」

「ああ、ただいま」

笑みを浮かべる伴侶の笑顔を見つめ、長い軍議で煤すすけていた心が洗われていく。自分の帰りを待ち望んでくれる人がいるのは、本当にいいものだな。とジルバートは胸中で独白した。

ジルバートは先に風呂に入ってから、グレイスと共に食事の席に付いた。

新鮮なフォアグラのソテーと付け合わせの野菜をフォークで口に運びながら話を交わす。二人は特に平民達に対する蔑視へっしの目を向ける事は無かったが、食生活に関して言えば幼い頃から染みついていく名門貴族さながらの贅沢をそのまま続けていた。これは特に変える必要もないと思っていたし、第一線で仕事をしている者に対する当然の報酬だとも思っていた。

「四日後にクルートを発つ。第七軍を率いてエル・クレスの街に赴く事になった。表向きはベール軍の牽制という事だが、ほぼ戦いは避けられぬ情勢にある。僻地と言う程遠くはないが、暫くは会えなくなるな」

それを聞いて、グレイスは幾分落胆した表情を見せた。

「そう。……まさかジル一人でいくわけじゃないわよね」

「勿論だ。第四軍大隊長のベルガモット将軍も一緒に一緒だ」

「ああ、良かった。あの方と一緒になら安心だわ」

ジルバートは笑みを浮かべ、少し捻くれた解釈を試みる。

「おや、私って意外と信用がないのかな」

グレイスは表情を変えずに言葉を返す。

「一人よりは二人がいいに決まっていますわ。といっても、ブラームスなんかと一緒にいたら反って心配ですけれどね」

「ははは、それは確かに」

グレイスは一年と少し前まで將軍の副官をしていただけあって、軍の内情にはそれなりに詳しい。第八軍大隊長モントレー「ノルビツクの下についていた彼女だったが、東西戦争の折にノルビツクは

アンドレイ側に付いたため、グレイスは在らぬ疑いを掛けられぬように一旦軍を退かざるを得なかった。その彼女を舞踏会で見染めたのがジルバートだ。

人目を惹く容姿と非凡な才から鑑みて、不思議なほどに浮いた噂一つなかったジルバートだったが、グレイスを一目見た時は胸奥を鷲掴みにされた思いだった。目の前の女の虜になったジルバートは、周囲の見目憚らずにその想いを伝え、グレイスは少し考えさせてほしいと即答を避けた。仕事に身を入れる事も出来ず、眠る事も出来ない。落ち着かぬままに三日経つてようやく返事を貰え、晴れて二人は恋人同士となった。アステイスとメリッサの時のように身分違いの恋というわけではなかったため、両家共に二人の付き合いを祝福し、その三ヶ月後には結婚式を挙げた。

「貴方から見てどうなの。戦いになった時の勝算は」

「君の前では十割、と言いたるところだけだね。十中八九という所だろう」

その返答を聞いて、グレイスはほつと胸を撫で下ろす。彼は幾分確率を口にする時は慎重になる傾向がある。それでもこの数字ということは油断ではなく、勝利をほぼ確信しているのだ。

「別に負けてしまってもよいですから、とにかく無事に帰ってきてくださいね」

せがむ様な声でそう訴えるグレイスに、ジルバートは力強く頷いた。

食事を終えて寝支度を整えたグレイスは、既に女中達に整えられ

たダブルベッドに腰を下ろし、ブラシでプラチナブロンドの美しい髪を梳かしていた。ジルバートは暫くその姿に見惚れていたが、彼女の独白にも似た疑問によって中断される。

「ジル。……フロイデ卿は一体どういっつもりで離反したのかしら」
どうも腑に落ちぬといった表情をしているグレイスを見て、ジルバートも応じる。

「……それはわからんが、あいつは理由もなく裏切る奴じゃない。きつと何かしらの事情があるのだろう」

「それはわかっているのだけれど、メリッサも一緒でしょうから心配だわ。あの娘、頭は良いけれど剣術は並程度だし」

グレイスとメリッサは先輩後輩の間柄だ。名門貴族の子女同士、しかも揃って将の副官に就いていた。互いの心情を深く理解出来る彼女達の絆は太い。それは、日常の些細な会話からその名前が多く上ること容易に察する事が出来た。

「私も正直、アステイスが彼女をウランダー家と敵対させたまま離反するとは夢にも思わなかった。といっても、最近の彼に対する仕打ちは傍から見ていても目に余る物があったし、内には相当な憤りを感じていたのかもしれない。まあ、アステイスが傍にいれば滅多な事にはならぬだろうが」

「……そうね。ふふ、あの娘意外とロマンチストだし、案外二人きりの逃避行を楽しんでいるかもしれないわね」

「ああ、そう願いたいものだ」

少しの間沈黙が居座り、おもむろにグレイスはスススとベッドを滑る様に移動してジルバートの大きな肩に横から寄りかかる。

「グレイス……」

ジルバートはグレイスの首から肩に腕を回し、力強く抱き寄せる。間近に迫ったグレイスの澄みきった空を思わせる蒼い瞳に、自分で引き寄せておきながら息を呑んだ。

「何カ月も会えないのだから、今夜くらいは甘えさせて頂きますからね」

その言葉を終ついに、二人は唇を重ねながら絹の衝立を引くと、お互いの舌を絡ませながらベッドに傾倒した。

同時刻、アステイスⅡフロイデは薄汚れた外套を身に纏い、一人岩場に立って小川にゆらゆらと頼りなく浮かぶ月を見ていた。早い流れに今にも形を失いそうなその蒼月を、アステイスはまるで自分の心のようにだ、と思う。

メリツサを失い、二ヶ月近くもの間激情に身を窺やつしていたアステイスは、現在は極めて伶俐な思考で戦乱の行く末を考えていた。ベールと東諸国の同盟、それだけで帝国軍との兵力差が覆るだろうか。

無理だろう、とアステイスは即断した。帝国にはジルバートⅢミレンを初めとした優れた用兵家が少なからずいる。或いは兵力が同格ならば良い勝負になる可能性もあったが、現状では獅子に鼠が立ち向かうようなものだ。更に、ブラージュウスには優れた近衛兵がいる。面と向かい合ったことがあるのは二、三人に過ぎないが、並々ならぬ力を持っているのは一目でわかっていた。

アステイスの立場からすれば、少なくとも今は東諸国に助力を求めめることは出来なかった。のっぴきならぬ事情があったにせよ、東西戦争では東軍に敵対していたし、つい最近まではブラージウスの非道に手を貸していたのだ。実際の所は戦線から遠ざけられ、僻地のエアリアで細々と過ごしていたのだとしても、周りがそう見てくれるかは別問題である。自分の身が危うくなつてから助けを求めたところで、誰も受け入れてはくれないだろう。

いや、仮に受け入れたとしたら逆に警戒せねばなるまい。マリスノリスで寝首を掻かれたアンドレイ皇子の二の轍を踏み、あっさりと散るわけにはいかないのだから

（力が要る……。現状を打破する国家。或いはそれに準じた戦闘集団が）

未だ在野にて牙を研ぐ者達、ベール教国、或いはカタルスタ、アテライデ等の帝国と同盟を結んでいる国々。そういった者達と手を結んで帝国軍に対抗する。

東諸国との関係にしても、今は無理だとして将来歩み寄れないとは限らない。今は無理でも後一国ないし二国、一瞬にして滅ぼされれば過激派も手の平を返さざるを得ないだろう。無論、それらの国々は見殺しにする事になるのだが。

だからどうしたというのだ、とアステイスは笑殺した。目的の為に手段を選んでいられる状況ではないのだ。帝国をどうにかしようとするのは不可能を可能にしようとしているのと同義であり、どうしたって犠牲は必要になる。

アステイスは己の心境の明らかな変化に半ば戸惑い、半ば納得しながら空にある月に視線を転じる。こちらは絵に描いた様な、くっ

きりとした見事な満月だ。ふと、思案していた事が頭を掠める。

アルイールが死ぬ半年程前、アステイスとその主君アルイールは、フリーゲル城のアルイールの私室でワインをくゆらせながらチェスをしていた。その時も、窓の外の宵闇には満月が浮かんでいた。

「アステイスよ、お前は我が子供達をどう見るか」

相手の黒いナイトの前に自分の白いポーンを前進させた後、アルイールは盤面からアステイスの方に視線を移す。アステイスは視線ではなくその問いに怯んだが、直ぐに思い直す。アルイールは未だ四十三歳という若さだったが、巨大組織のトップという立場には、常に死の香りが付きまとう。早くに後継者を考えるにこしたことはないのだ、とアステイスは理解した。

「現時点で、という事でございますれば、アンドレイ様は順当に後継ぎとしての力を蓄えていらっしゃるか」と

そう言いながら、相手ポーンに剣を突き付けられた自軍のナイトを敢えて逃がさずに放置し、アステイスはその二つ隣の黒いポーンを進める。遮られていた自軍ビショップの道が空いた。

「む……。ふむ、他の者では不足か」

アルイールは長考した後、のち相手ビショップの侵攻に晒された自陣を固めようと自軍ルークを動かす。

言い辛い事を狙い済ましたかのように訊いて来る主君にアステイスは少々困惑した。本音と建前を上手く攪拌しながらアステイスは言葉を返す。

「……恐れながら。まだ他の御子息様はお若いですし、何分ご成長に時間がかかるかと存じます。指導者たる者には何と申しますか、芯棒のような物が求められます故」

アステイスは先程の倒されそうな黒ナイトを一時避難させると同時に、重複攻撃による陣形崩しを試みる。駒から手を放した後、アステイスはアルイールを見る。

その目の色合いは決して虚ろではなく、ただ深い。目の前の男は、少なくとも二つ以上の芯棒を持っている。親が偉大過ぎてその子がその割を食うという話は往々にしてあるものだが、アルイールの場合は殊更その例が当て嵌まる。

次男は既に死去していたため、アルイールに男児の跡継ぎは三人いる。彼らはいずれも優秀な男だが、それでもアルイールに比べれば数段見劣りしてしまう。現時点で言えばアンドレイを薦めざるを得なかった。本音を曝け出せばそういう事になる。

三男のブラージュウスは、能力で言えばアンドレイを超える器となるかも知れぬが性格に少々とは言えぬ難がある。四男のイヴァールとは殆ど面識がなかったが、年齢は確か十二、三だったと記憶している。まだ二人の兄と比肩できるレベルではないだろう。

付け加えるなら、彼等が皇帝の力量に不足するか、と問われればそんな事はない。テルネシアの歴代皇帝を鑑みて、現時点でも中庸よりは能力、人格共に上を行くだろう。但し、アルイールという人物の後継者、オクと言うには聊か物足りない。そういう事だ。

「なるほど、な。ならば、まだ死ぬわけにはいかぬか」
あの時そう呟いたアルイールは、自らの身体の異変に気付いていたのだらうか。

アルイールに対しては未だに恩義を感じている。その彼が守ってきた帝国に弓を引く、それに葛藤がないかと言えば嘘になる。

しかし、とアステイスは考える。あれだけ思慮深かった彼が遺言を残していないなどという事が、果たして本当に有り得るのだろうか、と。アルイールが謀略によつて殺されたならば、もはや刃と化したこの心に鞘を誂える必要はない。愚直に目的を遂行すれば良いだけだ。

テルネシア帝国への叛意は迷いながらも抱いていた。それは事実。そして、全てが後手に回った挙句メリツサを失い、今や自分は逃亡者の身。もう失う物など何も無い。

メリツサは一人、あの暗い地下室で鬪り殺しにされた。鎖に繋がれ、まともな抵抗も出来ず、蹂躪された末に死を選んだ。否、選ばざるを得なかった。伶俐な思考に憤怒の色が交わり、アステイスが歯を強く食いしぼると共に、額に血管が浮き出て来る。

早まって欲しくなかった、そう思う気持ちが無かったわけでは無い。喻え、どのような状態であろうと生きていてさえくれれば、自分はその心癒すべくあらゆる手を尽くしただらう。

だが、彼女はアステイスへの想いの強さ故に死を選んだ。その気

高さがメリツサの命を奪い、それでも彼女の心を幾許か救ったのならば、生きていて欲しかったという望みは傲慢に過ぎぬ。

ならば、彼女があのような死に方をした事を他の者に知られたくはない。その死に様を、決意を万人にとやかく解され、掘り起こされるは彼女の望むところではないだろう。今はせめて静かに眠らせたい。それがアステイスの偽りなき本音であった。

(葛藤など不要)

脳裏に焼き付いたメリツサの変わり果てた姿を思い出し、次いでブラームスの顔が、ブラージウスの顔が色濃く浮かび上がった。万感を籠めた憎しみの前には、己の矜持や理念など瞬時に吹き飛ぶ。

どんな手段をもつてしても、あの塵共に絶望を与え、地の底へと葬ってやる。そして

「 見ているがいいアルイール。貴様が後生守っていたこの下らぬ国を、私がこの手で跡形もなく捻り潰してやる 」

主君を呼び捨てたその言葉は決別を顕し、引き返さぬ覚悟を以つてアステイスの太き芯となる。彼の放つ昏き光は傍目には鮮烈にして力強く、しかして自分自身を照らす事は決して無い。憎しみに打ち震える彼の心は、己の手すらも見通せぬ濃密な闇の中に在った。

其の十九 く将校達の迷い(表)

883年、12月9日、帝国の攻勢一辺倒だった戦局を瓦解させかねない事態が発生する。

大陸中央部の各都市では多くのイアニス教信者がベール教国のエル・クレス出征に呼応し、一斉に反旗を翻した。ひるがえ

軍営本部はマビアビからのエウゲンの輸送を待っていたため未だクルートにあり、その近辺では平穩を保っていたが、そこから離れた町では次々と反乱が勃発したのである。

大半の町では沈静化したものの、ベール領に程近い南部のセクレトバードでは約一万五千人の武装したイアニス教信者が大規模な反乱を勃発させ、町の中心部をもぎ取ってしまう。これらの反乱に寄る帝国兵、町民等の死傷者は五千人を上回った。

これによりベール教国は、ベール領、コルトパ領、セクレトバード領の三領を内包し、領地、兵数共に反帝国を掲げる最も大きな勢力となった。

同年、12月23日、セクレトバードのイアニス教信者達はエストラル溪谷の南端でベール軍と合流し、四万を超す大軍となってエル・クレスを制圧するべく北上を始める。

あたかもそれを予見するかのように、ブラージウスは第四軍大隊長ライエン＝ベルガモット將軍、第七軍大隊長ジルバート＝ミレン將軍の二將軍をエル・クレスに送っていた。

ジルバートは第七軍を伴い、12月19日に先立ってエル・クレスに入城し、その一週間後にはベルガモットも第四軍を引き連れて

到着した。

エル・クレスはほぼ大陸の中央に当たり、古くから各街道を繋ぐ交通の要所として、貿易で栄えた町である。イアニス暦271年、ジキールがこの地に現れた時、古い町並みは一瞬にして灰塵と化した。今では近代建築様式の堅固な城と整った城下町に姿を変えている。

南にはエストラル溪谷を望み、他三方は広い平原に囲まれている。思わぬ災厄に見舞われた過去を持つ町は、今また戦乱の矢面に立たされようとしていた。

884年 12月26日

夕暮れ時、緋色を帯びた枯木立が並ぶ城の中庭にて、ジルバートは到着したベルガモット以下第四軍を出迎える。

「長旅お疲れさまです、ベルガモット殿」

「それはお互い様であろう、ミレン。それよりも、予定より遅れて済まなかった。ネルガルの收拾に少々手こずってしまっただけ」

その謝意にジルバートは軽く頷く。

「あまり御気になさらぬよう。配下の者達も疲れているでしょう。湯浴みの用意をしております故、まずはゆるりとお寛ぎ下さい」

ジルバートの言葉に、ベルガモットの後ろに控えていた兵達の顔が綻んだ。

ベルガモットが入浴を済ませたのを見計らって、城の一室には二人分の料理が届けられる。たまには上官の顔色を窺わずに食事を楽しみたいだろうと、他ならぬベルガモット將軍の粹な計らいで、大食堂は小隊長以下の貸し切りとし、中隊長以上は宛がわれた部屋で気の合った者達と食事をしていた。

「ふいふ、さつぱりしたわい。生き返ったわ」

風呂から戻ったベルガモットは、ジルバートの部屋に赴いていた。既にテーブルには鶏の骨付き腿肉の香草焼き、バターロール、レタスとトマトのサラダ、南瓜のポタージュスープ等が湯気を立てて並んでいる。ベルガモットが向かいの席に腰かけたのを合図に、二人は揃って食事を始めた。

大きな皿の上で二人が操るナイフとフォークがカチャカチャと吃音を奏でている。

「うむ、美味い。久し振りに腰を落ち着けて食べられそうだ」

塩加減の丁度良い腿肉を頬張り、ベルガモットは満足そうに頷いた。

ジルバートはスープを一口啜り、顔を上げる。

「やはり大変ですか？ ネルガルの状況は……」

その言葉に、ベルガモットは少しの間目を瞑る。

「街には盗賊が跋扈し、私財を奪われた民達は暴徒と化して自分達と同じ民を襲う有様だ。東西戦争が終わっても見る事は無いだろう、と思っていた光景を再び見せられる事になるとはなあ。何ともやりきれぬよ。部下達も幾度となく、町の者達に鬼だの悪魔だのと罵られ、意気消沈してしまっている」

「……そうですか」

戦争を始めるのは非常に簡単だが、逆に戦後処理というものは非常に難しく、やりにくい。或いは、当事者であれば割り切ることも可能だろうが、喩え殺戮さつじくに加担していない者であっても、その場にいれば領民達からは同類の目で見られるのだ。

ネルガルの件に関して言えば、領地を蹂躪した当事者のブラージウスは直ぐにクルートへ踵かかとを返し、ネルガルに残されたベルガモット達は、領民達の恨み口を何度も聞かされながら戦災復興に力を尽くす事になった。これでは気が滅入るのも致し方ないだろう。

ジルバートの部下達とて、合戦前だというのに士気は然程上がっていない。イアニス教と面と向かって敵対する事に置いて不安が残っていたからだ。

イアニス教の信者は大陸の至る所にいるし、その数は三百万を超えるとも言われている。仮にこの戦いで勝ったとして、彼等全員から命を狙われる事になったらどうするのか、日常生活の中ですら気の休まる時間がなくなるかもしれない、というのは、ある兵士の談だった。

これは聊いささか大袈裟な解釈の仕方にも思えるが、心的負担が大き、という事だけは容易に察する事が出来る。苛烈かれつなる信仰が時として人の本質を変える事があるのは人の歴史が証明済みであり、イアニス教がそうならぬという絶対の保証はなかった。

「エルゲート一家を見せしめにしたのは東諸国に対する示威の面もあっただろうが、ネルガルを支配する上では決して良くなかった。

奴はあの町で善政を敷いていたから人望も厚かったようだ」

聞き慣れた名前を耳にして、今度はジルバートが暗い顔をする。

「……エルゲート殿は、軍籍を得てからの二年間、私の武芸の師でもありました」

「ほつつ、それは初耳だな」

幾分驚いた様子のベルガモットに、ジルバートは話を続ける。

「一騎当千と謳われたのも領ける程にあの方は強かった。赤子の手を捻る様にあしらわれました。未だ武量に置いては、彼の全盛期には及ばないかもしれませんが」

アルイールの片腕と称されたモートン＝エルゲートは、誰にも手に負えなかった巨大な魔獣を退治した事で名を馳せた兵である。59歳でアルイールの崩御を機に引退するまで、彼と幾度となく荒事を潜り抜けた歴戦の勇士だ。

その後はネルガルに隠居していたが、東西戦争の折にはアンドレイ皇子の側に参戦した。アンドレイの死後は独立を貫き、883年6月24日、ブラージウス率いる帝国軍の侵攻によって帰らぬ人となった。

「ふむ、お主程の豪の者が、か」

「……それだけに、彼の死に様を聞かされた時は慙愧ざんきに堪えぬ思いでした」

モートン＝エルゲートはブラージウスの近衛兵に孫を人質に取られ、無抵抗のまま矢嵐にその身を晒して命を落としたという。絶望の表情を映していたその首は、家族のそれと共に町の広場に晒され、蠅たかが集り、蛆が湧くまで放置された。

広場にはそれと判らぬよう一般人に扮したブラージウスの兵が見張りにつき、せめて埋めてやろうと彼等の首を持ち出そうとする者達はその場で首を刎ねられた。

その醜聞は新聞や実際に目の当たりにした者達の人伝によってあつという間に広がって行き、帝国に対抗しよう、と声を上げていた者達は途端に也を潜める。ブラージウスが企てたであろう周辺諸国への恐怖の伝播は目論見通りに成功したのである。

「その武を最後まで発揮出来ぬままに死んでいった彼の無念を思うと……今でも胸に沁みるものがあります」

ベルガモットは深く頷く。

「……そうであるうな。 ミレン」

「何です?」

「……我々は一体、何をやっているのだろうな」

(……っ)

独白にも似たその問いにジルバートが息を詰まらせたのを見て、ベルガモットは曖昧な笑みを浮かべる。

「……いや、一時の気の迷いだ。忘れてくれ。さあ、冷めぬ内に食ってしまおう」

再び食事を再開するも、ジルバートの頭にはその言葉が幾度となく響いていた。そして、自分なりの答えを出せぬままに食事を終えたのである。

其の二十　く彼方からの祝砲（表）く

883年12月29日

ベール軍は反乱を起こしたセクレトバードの信者達を組み入れてその数四万五千に膨れ上がり、エル・クレスの南方、エストラル渓谷を北へ進軍していた。迎え撃つ帝国軍はエル・クレスに駐在する兵と、ジルバート、ベルガモットの軍を合わせて約二万八千。

イアニス教に帰順した帝国兵の数は思いの外多く、未だ帰順していない帝国兵も葛藤の只中にあるだろうと思われていた。

兵達の信頼をまともにも得ていない將軍では戦闘中に後ろからバツサリ、という事にも成りかねない現状において、その人柄と能力から人望厚く、統率の取れた軍を率いるベルガモットとジルバートの二将をエル・クレスに送ったのは最善策に限りなく近い人事であり、悪名高いブラージュウスの洞察の深さを垣間見せるものだった。

エル・クレスから出した帝国側の斥候の報告では、ベール軍がエル・クレスに至るまで一週間とかからないとの事だった。およそ四万五千の兵の中には元帝国兵も数多く含まれており、有名処がいないにせよ、戦略の幅を少なからず知られているのは不利と見られていた。

元々同じ釜の飯を食っていた者達と戦うのだから味方の士気はあまり上がらない。逆に、相手方には？帝国の非道を誅す？という大義名分があるため士気が高い。このまま戦えば、勝てたとしても被害が大きくなるのは避けられなかった。

20畳ほどの会議室にて壁面に付近の大きな地形図を貼り出し、ベルガモット、ジルバート、それに中隊長六人が席に着き、作戦を検討し合っている。大まかな戦い方は決まったが、詰めの調整が難航している。

二時間続けてフル回転させていた頭を冷やすため、一先ずは休憩を挟む事になり、各々に飲み物が振舞われた。

カップの中で6割程を占める真っ黒な液体に、皆が一樣に顔をしかめている。漂ってくる香りは決して悪くないが、如何せん色合いが何とも不気味だ。煮出しすぎた紅茶の様でもあり、イカの吐き出す墨にも似ている。

「……何だね、これは」

皆の気持ちを代弁するべく、中隊長の一人が怪訝そうな表情を浮かべて飲み物を運んできた使用人に問うた。

「最近、大陸南部で流行り出した飲み物で、珈琲コヒと申します。希少な豆を煮出した汁にございます」

「豆の煮汁だと？ そんなものを飲んでおるのか」

「はい。眠気を吹き飛ばす効果があるとの事で、嗜好品として愛飲されている方も多いようです。ただ、初めての方には味が幾分きついと思いますので、もし苦ければミルクをお入れください。味がまるやかにになります」

そう言って、陶器でできた口の長い、艶のある白いミルクポットを二つテーブルに置いた。

「ふむ、まあ物は試しか」

ジルバートはそう呟き、カップを口に近づける。ふくよかな香りを鼻腔に感じながら一口飲んでみる。

(苦い……が)

不思議と、不味いとは思えない味だ。慣れれば普通に飲めそうである。

「で、では私も」

「う、うむ。頂いてみるか」

ジルバートが先に飲んだのを見て、隊長達も恐る恐るといった感じで、目の前に置かれたコップを次々に持ち上げる。皆微かに顔をしかめるも、吐き出す者はいなかった。

「ふむ、苦いは苦いですが、何と言うか……変わった味ですな」

「確かに。コクもありますし、微かに甘味も感じるような」

隊長達の感想を聞いて、使用人は微かに笑みを浮かべる。

「ミルクを少しずつ入れると味の変化が楽しめます。宜しければお試しください。では、失礼いたします」

説明を添えて、使用人は会議室を後にした。

その後、再開された会議は滞りなく進行し、最後に何人かの中隊長の提案で、戦闘開始前に兵達を鼓舞こほぶするために二将が演説を行う事を決定し、終了した。

中隊長達が退席し、会議室にはベルガモットとジルバートだけが残っている。

(演説、か。簡単に言ってくれるなあ)

確かに士気を上げねばならないのはわかっているが、この状況で何を言えば良いのか。

(帝国の為に……。うーむ。在り来たり過ぎるし、私が口にしてもどうも説得力がないな。……。そう言えば、アステイスの奴はこ^ういうの得意だったなあ)

見ればベルガモットも同じ心持ちのようであり、腕を組みながらあちらこちらに首を捻っている。

「……避けられぬ事とは言え、元同胞と戦うのはあまり気分の良いものではないからな。全く、こういう事こそブラームス辺りにでもやらせておけばいいものを」

ベルガモットは不快そうな顔を隠さずに言った。ジルバートがブラームスを快く思っていないと知っているからこそ言える台詞だ。曲がりなりにもブラームスはブラージュウスの次席に位置しているし、面と向かって逆らえば後で面倒な事になる。

確かに、ブラームスなら敵が元味方であれ躊躇なく戦えそうだが、モラルがないという致命的欠陥もこういう時は強みになるのだな、とジルバートは思った。

「民を惑わす妄想家に天誅を下さんっ?とか普通に言えそうだが、私がそのような台詞を口にしようものなら失笑を買っただけだろう。ああ、何だか奴の厚顔さが少し羨ましい。」

気を取り直して、ジルバートは現状を冷静に振り返る。

「とはいえ、見過ごせば今後も似たような反乱を誘発するでしょう。それに、万が一エル・クレスが取られたら帝都マビアビの喉元に剣を突き付けられる事になる」

ジルバートの指摘にベルガモットは溜息を付く。

「それくらいわかっておる。しかし、亡くなったアルイール様もさぞお嘆きであろうな。あれほど慮^{おもんばか}っていた帝国が、僅か一年強でこの有様になるとは」

「……全くですね。彼がその場にいたら、私達は斬り殺されてもおかしくない」

二人は揃って肩を落とした。

アルイールは不義不道徳には非常に厳しい男だった。仲間殺しなどと聞けば己の剣を持って飛んできかねない。そんな勇猛果敢な嘗ての主君を思い浮かべ、二人は何とも言えない気持ちに囚われる。

有り得ぬことだが、もし生きていてくれていれば、と思う者達は今も数多いだろう。そうすれば、気の進まぬ戦争に巻き込まれることもなく、のんびりと日々を過ごせたのだから。

「何だか、フロイデが羨ましくもあるな」

瞬間、ベルガモットは滑った口を慌てて手で覆う。ジルバートは険しい顔をしている。

「す、すまぬ。つい出てしまった。そなたはあ奴とは友人だったな」
武人然としたベルガモットのらしくない気遣いに、ジルバートは幾分表情を緩めた。

「いや……。アステイスが羨ましい、という部分については否定するべくもないです。何もかも投げ出して思うがままに戦えたなら、そう考える事もなくはない」

ベルガモットはその述懐に顔をしかめる。言葉尻だけを捉えれば反抗の示唆とも取られかねなかった。

「おいおいミレン。儂は何もそこまで意図したわけではないぞ」

「ははは、わかっていますとも。今は割れた帝国を元に戻す、それが先決です」

もし、元に戻ってもブラージウスの凶行が収まらぬなら仕方がない。この身と刺し違えてでも止めてみせる。その覚悟がジルバート

にはあった。

ふと、ジルバートはアステイスの事を考える。未だにあいつが気狂いになったとは信じられない。それでもやるとするならば

品行方正なアステイスが狂うだけの確たる理由があったか、それとも狂った事自体が偽の情報だったか。或いは

納得のいく説明が浮かびかけたが、廊下を走る足音が段々と近づいて来るのに気付き、思考を中断する。ドアの方向に意識が向き、その場にいた二將軍は長年の習慣からか、無意識に劍の柄に手を添える。

ノックもなしに、伝令兵が慌てて飛び込んで来た。二人は一瞬警戒するが、見知った伝令兵を見止めてやや身体の色を抜く。

「……ミ、ミレン……様っ」

「どうしたのだ、ベール軍が動いたか」

鋭い視線を送るジルバートに、息を切らしていた伝令兵は顔を上げ、おもむろにニコツと微笑む。

「ミレン様っ、おめでとございますっ」

(……おめでと?)

一瞬誕生日か、と思ったがそんなわけはない。軍のほぼ最高位にいる以上は、昇進もないだろう。

「何だ? 一体何が」

不思議そうな顔をするジルバートに、伝令兵は声高らかに報告する。

「今しがた、クルートより奥方様のご懐妊との報告が入りました。四カ月だそうですね」

ジルバートとベルガモットは目を丸くし、次には顔を綻ばせた。「それはめでたい。ついに貴公にも待望の跡取りの誕生か」

「い、いや、それは流石に気が早い、な。しかし、グレイスがうつむ、何と言ってやれば良いのか」

ジルバートは、あさつての方向から飛んできた祝砲に半ば戸惑っている。実感がなかった、と言うのが正しいのだろう。

その様子を見て、ベルガモットはニヤニヤ笑いを浮かべる。

「何を言っておるか、今の気持ちをそのまま文に綴れば良からう。

それにしても、四カ月前と言うと、おお、丁度舞踏会のあった頃か。儂はてつきりお主の事を朴念仁だと思っていたのだが、いやいや、忙しい中でもきっちりやる事はやっておるのだなあ」

ベルガモットの無粋な勘繰りにジルバートは顔を紅潮させて反論する。

「い、いちいち逆算しないで頂きたい」

だがその声には答えず、ベルガモットは何やら頷いている。

「ふふん。気の乗らぬ戦だと思っただが、どうしても負けられぬ理由ができたではないか」

「っ。ええ、そうですね。必ず勝ちましょう」

どうやら心情を忖度そんたくされていたか。ジルバートは渋い表情を浮かべながらも、その言葉には同意せざるを得なかった。待つ家族がいるから帰らねばならぬ。その単純明快な論理は、彼を様々な精神的束縛から解き放つに至った。

？我々は何をやっているのか？。到着した日にベルガモットはそう言った。將たる者は兵達の命に責任を持たねばならない。彼らの一人一人にもジルバートと同じように、当たり前のように愛する家族がいるのだ。彼等の命を守る為には勝たなければならぬ。個人的感情に惑わされず、今は目に見える脅威を振り払う事だけを考える事が肝要だ。

ジルバートは、ベール軍にアステイスがいる可能性を少なからず考慮していた。彼にメリツサがいるように、自分にもグレイスがいます。そして、彼女は新たな命までも宿している。お互い斟酌けんさくする余地など毛頭ない。生き延びるために、子供の顔を見るために、今出来る事をやるだけだ。

（万が一、彼が相手にいるならば、尚更手を緩める事は出来ない）
決意を新たにしたジルバートは最悪の状況を想定し、ベルガモットと共に戦略を、演説の内容を、綿密に練り上げていく。

そしてその四日後、年明けて884年1月2日。開戦の時は訪れる。

其の二十一 く士気高揚（表）く

884年 1月2日

エル・クレス城下町

南門に程近い広場にて、帝国兵達が千人ずつに区切られる様にして整列している。縦に四列、横に七列。黒い鎧を身に着けた万を超える兵が立ち並ぶその威容は、並の者なら対峙しただけで戦意を喪失させるのに十分足り得るものだろう。

だが、帝国兵達の表情はどこか暗い。ペール軍が強力な魔道兵を擁している事を理解しているし、敵軍には元同僚も数多くいる。今までの戦いとは全く状況が異なるのを肌で感じているようであった。

午前六時〇分

冬場の早朝であるだけに空気はやたらと冷たかった。藍色を伴う朝靄の中、斥候達がエルトラル渓谷から戻って来るとすぐさま伝令兵に報告し、伝令兵は台座に近寄ってその情報を伝える。

「ベルガモット将軍。敵軍、南に約30kmの距離、後二時間程でエストラル峡谷を抜けるとの事です」

「うむ、了解した」

報告を聞き、ベルガモットが頷くと伝令兵は下がり、列に加わる。

並んでいる兵達の北側には高さ2 m程の鉄の台座が設けられている。どこか覇気のない帝国兵達を一瞥し、黒い外套がいたうを身に纏った二人の男はお互いに頷き合い、台座の階段を登っていく。

壇上にいるベルガモットが一步前に進み出ると、やや乱れていた帝国兵の列が再び揃う。

流石にこの大人数に肉声を伝えることは困難であるため、台座の周りに何人かの魔道兵を配置し、音声を増幅させる魔法を試みている。

ベルガモットは何度か咳払いをし、音量の調子を確かめてから兵士達を見据える。

「皆の者、ベール軍は直ぐそこまで来ている。儂が言うまでもなく気を引き締めねばならんのだが、開戦前に一つ報告がある」

町中に響き渡る拡声に、兵達は怪訝な顔を見合わせ、再び壇上に立っているベルガモットを見る。敵と戦う直前になって報告とは異な事だ、と思っっているようだ。

「実は、ここにいるミレン將軍の奥方が身籠られたとの知らせが入った」

思わぬ朗報に兵達のどよめきが辺りを駆け巡る。ざわざわとした喧騒が治まらぬのを見て、ベルガモットが両手を天に広げて制した。「静粛に」。ゴホン、あー、本当なら儂からミレン將軍にお祝いの言葉の一つでも述べねばならぬ所だが、何しる戦の前だ。万が一その言葉が遺言となつては聊いささかか侘わびしい物がある。儂とて死ぬ時は、後世に残る様な格好良い事を言おう、と決めておるからな」

ベルガモットの冗談に、笑いが漣なみだのように広がっていく。幾分、

ギスギスした感じが薄まったのを見て、ジルバートはベルガモットの口上に感嘆した。

「よってそれは、戦争が終わった後に改めて言う事にした。諸君、儂を心残りの有るままに死なせぬよう存分に働いて欲しい。儂と共にミレン將軍へ祝言を述べようではないか。単に？おめでとう？でもいいし、何なら？この助平^{スケベ}？でも構わん。どうせ浮かれているだろうから無礼を言ったとてそうそう斬られる事もあるまい。以上である」

ジルバートの目が行き届く範囲にいる殆どの兵達の顔にはニヤニヤ笑いが浮かんでいる。緊張感が緩んでいる感があるが、先程の葬式のような雰囲気よりは余程良いか。

ベルガモットが下がったのを見て、今度はジルバートが前に進み出る。

ざわめきが若干収まった所で、ジルバートはゆっくりと口を開く。「ああ、今回は泣く泣くベルガモット將軍が悪役を買って出たので、私の悪口に関しては何馬耳東風を貫く事を約束しよう。但し、妻の悪口だけは宴会の席といえど容赦しないぞ。斬られたくなければ慎むように」

再び笑いが漏れる。

「冗談はさておき。ご紹介に預かったように、我が妻グレイスが子供を授かった。それを聞き、抑えがたい喜びを感じたのは当然として、正直複雑な心境でもある。家族と言う者の存在を自覚したからに他ならぬ」

笑みを消したジルバートに、今度は場が静まり返る。

「今回の戦は決して楽なものではない。相手の士気は高いし、数は

こちらの1・5倍以上。更に大義名分を見てもこちらの方に非があるかも知れぬ。だが」

ジルバートの良く通る声だけが町中に響いている。時たま聞こえる鳥の鳴き声の他には、ジルバートの拡声された声しか耳に入っていない。

「この際、そういつた国と国との背景は一旦頭の中から消し去って欲しい。諸君等にも、国許には帰りを待ち侘びている家族がいる事と思う。まずはその事を考えよ。喩え政治的思惑がどうであれ、命のやり取りをするのは前線にいる我々だ。諸君等には、どのような戦場であろうと生き延びる義務がある」

熱弁を振るいながらもジルバートは兵士一人一人の顔を見回すように、満遍なく視線を送る。

「一瞬の躊躇が命取りになる戦場に、迷いを抱えたまま赴くは愚の骨頂である。友との他愛ない語らい、愛する人との濃密な一時、子供達との心休まる戯れ、そういつた、己と己の家族の生活を、ありきたりな日常を守る。その信念のみを以って此度の戦いに臨んで欲しい。さすれば勝利は自然と付いて来るであろう。諸君つ、我々と共に、生きて故郷の土を踏みしめようではないか」

『オオオオーつつつ』

愛する家族を強く意識させるジルバートの鼓舞に、二万八千の帝国兵は手に持つ武器を天に翳し、地に轟く雄叫びで応える。その動機は些細な葛藤を吹き飛ばし、一つの強固な意志となる。

？生きて故郷の土を踏みしめる？。ジルバートが課した一つの命令を胸に刻む帝国兵達は、沈みかけている己の心を天高くまで押し上げた。

午前八時三十分

エストラル渓谷を抜け、エル・クレスを覆うように広翼の陣を展開したベール軍は進軍を止める。短い草だけが生える見通しの良い平原に横一列に並ぶ軍の威容は、恐らく相手に相当な圧迫感を与えているだろう。

本隊一万五千を指揮する法王グルツセルⅡイアニスは陣を敷くと、用意された折り畳み椅子に腰を掛ける。如何に堅牢を誇るエル・クレスといえども、カタルスタに次ぐ魔道部隊を持つベール軍ならば城壁を撃ち破る事は容易である。籠城してくれば儲けものだ。

しかしてその期待はあっさりと裏切られる。おもむろに南の城門が開き、帝国兵達が慌しく陣形を整えるのが視界に入ってくる。その様子を目の当たりにしてみて、ベールの将達は帝国軍の足並みはどうもあまり揃っていないように感じていた。相手方の兵達の動きはどこかまとまりがなく、精彩さに欠けるように思えたのだ。

昨夜最後に開いた軍議では相手がどのような行動を取ろうとも一切油断をせぬよう、何度も言い含めたつもりだが、果たしてちゃんと徹底されているだろうか。グルツセルは僅かな間、疑心暗鬼に囚われた。

空はやや濁った白色。天候は曇りだが雨が降り出す様子はない。これならどの系統の攻撃魔法も問題なく力を発揮できるだろう。俗に四属性と言われる火、水（氷）、土、風（雷）、の魔法は天候によって効果が増減する。雨の時に火属性の魔法を使っても効果は薄いし、逆に快晴の時に水の魔法を使っても同じである。曇りならば効果の増幅はなくとも、減衰もない。大規模な戦争が初めてであるべール軍にとっては歓迎すべき天候だろう。

北側に位置する帝国軍は雁行の陣を敷いた。南東から北西に斜線を引くように兵を展開している。陣形を素早く組み替える事が出来、臨機応変に戦える半面、優れた戦術理解度が兵達に要求される。

一方で、南側のべール軍は鶴翼の陣を敷く。右翼、左翼共に均等に兵を配置し、それを繋ぐように中央に本陣を構える。敵が少数の場合は有効とされる陣形で、敵を囲むように戦えるが、反面側面からの攻撃には弱い。

お互いの陣形の関係上、べール軍の右翼が一番帝国軍の先陣に近い位置にある。

（……ルフラン。今よりそなたの甲い合戦を始めるぞ）

囁くささやくよりも小さなその独白は風に掻き消され、グルッセルは立ち上がって白い鳥の羽毛で作られた軍扇を天に翳す。

「全軍、前進せよっ」

午前九時三十分、後世の年代史にもその名を残す合戦の火

蓋は切って落とされた。

其の二十二　　温度差（表）

ベール軍の両翼は北へと前進を続け、特に右翼の方は突出している敵方右翼との相対距離を相当に縮めていた。やや小高い丘に陣を張っている敵方右翼との距離は約2kmあったが、未だ敵軍が動き出す様子はない。相手がその場に留まり続けるならば交戦に入るまであと15分といったところだろう。

ベール軍の右翼を預かるガヌーの両親は共にイアニス教の信者であつたが、自身は決して敬虔な信者とは言えなかつた。

元々セクレトバードで帝国軍の小隊長を務めていたガヌーは、貴族然とした上官の態度や方針に不満を抱いていた。ベールのエル・クレス出征を好機と見たガヌーは、イアニス教徒の帝国兵達を扇動したが、帝国のやり方はガヌーの予想以上に水面下での相当な不興を買っていたようで、イアニス教徒以外にも一万近い民兵が反乱に加わつた。反乱軍はそのままの勢いでセクレトバードの中枢を奪い取り、町を我が物顔で支配していた上官達は半ば追い出される形となつた。

セクレトバード領を奪取した功を引つ提げてグルツセルの幕僚へと加わつたガヌーは、反乱の折に率いた軍をほぼそのまま預かる形となつた。但し、武器や防具については心もとなかつたため、ベール軍の予備の武器や防具を譲つて貰っている。

個々の力が平凡だとしても、戦争において数は列記とした力である。小隊長の位置に甘んじていたガヌーが、今は押しも押されもせ

ぬ一万五千を率いる指揮官なのだ。自分の采配に従って、軍が一つの生き物のように動くその様に、彼は心が高揚していくのを抑えられなかった。

ベール軍と合流した際には、更に法王グルツセルから百人の魔道兵を預けられたため、戦略の知識さえあれば色々な作戦を展開できる。多くとも五十の兵しか預かった事のない彼が、今は思いのままに大軍を操れる状況にあった。

敵方右翼との距離が近づくとつれて、ベール兵達は訝^{いぶか}り始める。

斥候の報告によると対峙する帝国軍は、中央には軽装歩兵しか見当たらず、左翼にはそれより少ない騎兵、右翼は主に弓兵と重装兵で編成されており、数も一番多い。比率で見ると、左：中：右＝3：4：5と言ったところだろうか。

この辺りは三方が見通しの良い平原であるから伏兵を配置することとは不可能であり、敵兵が遠くに見えれば直ぐに陣形を組み直せる。

「……………ぶっ、それにしても何だあれは」

右翼に多くの重装兵を確認し、ベール軍右翼の隊長達は独りでに笑みが浮かぶのを我慢できなかった。ベール軍が強力な魔道部隊を擁しているのは周知の事実である。多数の魔法使いを相手にあんな重い装備でどう戦おうと言うのか。騎兵以上に重装兵で魔法使いと相対するのは愚策とされる。鎧を着たところで火に焼かれれば火傷するし、雷ならば金属を通して感電する。弓に対して鎧を着ない事と殆ど変わりはないのである。

「射程圏に入ったら遠距離攻撃を開始するよう伝えよ。連中を火達磨にしてやれ」

「はっ」

油断しているつもりはないが、意外と楽に勝てるかもしれないな。べール軍の隊長達はそう考えていた。対面する敵方右翼との距離はいち早く500m程に縮まった。

(そろそろか……)

ガヌーは攻撃命令を下さんと、伝令兵を呼ぼうとする。しかし、それは予期せぬ報に寄って遮られた。

「申し上げます。右翼の帝国兵が、同士討ちを始めております」
「何っ」

ガヌーは前列の方に出ると遠眼鏡を渡され、その光景を見る。確かに、敵方の右翼の兵達の半数近くが、自陣に向かって次々と矢を射かけている。鎧を着た兵士達は、立っている者の数が段々と減って来ていた。遠目にも明らかに帝国軍の陣形が崩れて行く。

「これは一体……」

「もしや、あの中にイアニス教の信者達が混じっていたのでは……」

自信のなさそうな伝令兵の声に、しかしそうかも知れぬとガヌーは頷いた。ブラージウスの非道に対しては、軍内部でも批判する者

が後を絶たないと言う話がベールにも届いている。かくいう自分はそうして反乱を起こし、セクレトバードを奪取したのだ。こちらの圧倒的多数の軍勢を見て、これなら勝てると思いい、奴等を裏切る指揮官が出たのかもしれない。十分有り得る話だった。

少なくともこれはチャンスだ。ガヌーは元々ベールにいたわけではなく、ベールの動きに呼応してからセクレトバードから帝国兵を追い出した、言わば後発組である。その分、忠誠心に関しては疑問視されている点もあるだろう。人がやったから自分もやる。そういった群集心理で動く者に対しては、幾分人の見る目は厳しくなるものだ。

ガヌーとて、帝国軍のやり方が許せないという気持ちは多分にあった。しかしながら、早い所で手柄を立てて法王グルツセルの信頼を得、より重要なポストに就きたいという功名心もあった。

エル・クレスを制圧する事はベール教国にとって、帝国に対抗する上で最重要視されている目標だ。ここで一番手柄を立てればまず間違いなく、出世は確約される。

敵兵達の陣形が崩れて行くのを見て、自制しきれなくなったガヌーは、任されている一万五千の軍に敵右翼への突撃を命じた。

左翼を任されていたマツシユは、ガヌーの軍勢が突撃するのを見ながら、自分達はどうか動くべきかと考えていた。前方には騎兵が八千ほど。対するマツシユの率いる軍は一万五千。単純計算であれば

攻めれば勝てるのだが、まだ敵は射程圏内には至らない。

敵が少数だけに、法王から突撃命令が出れば直ぐにでも突っ込んで行く所だが、前進を続ける両翼と法王の陣とは距離がどんどん離れているため、迅速に命令が伝わらない。両翼の指揮官は状況を判断して行動せよ、と法王から権限を委託されているものの、いまいちどう動いて良いかわからない。

マツシユはベールの上級司祭であり、学術的知識にも非凡なものがあつたが、大規模な戦争を経験した事は今までに一度もない。ましてや、相手は近隣諸国に名高いベルガモット、ジルバートの両将である。法王にお伺いを立てないままに、自分が犯したミスに付け込まれて敗北となつては、責任追及から逃れる事は出来ないだろう。そうすれば苦心して手に入れた今の地位を失う事にもなりかねぬ。

とりあえずは命令を待ちながら前進し、もし敵から接近してきたら応戦しよう。下手に動いて敵に付けている隙を与えるよりは、そちらの方が幾分マシであるはずだ。

マツシユは慎重論に走つた。右翼の兵達はマツシユの令に従い、攻撃とも防御ともつかない受動的な前進を続ける。

ベール軍は指揮官の立場と考え方の違いから、軍の動きに明らかになズレを生じさせていた。積極と消極、相反する気概の両将を用いた事が、此度の戦では裏目に出たのである。

ガヌーは敵方右翼の陣に近づいて行くも、あらかた重装兵達は片付いているようだった。前方には多数の重装兵達があちらこちらに倒れており、幾多の血溜まりから発せられる血の匂いが充満していた。敵方とはいえ、裏切られてのこの死に様は少々気の毒にも感じたが、ベールの兵達は構わず進んでいく。

「右翼にいる敵の弓兵達には手を出すな。おそらくは味方だ」

ガヌーの指摘した通り、右翼にいた帝国軍の弓兵達はガヌー達に弓を構える事はせず、ベール軍に一礼して堂々と歩きながら東の方に退く構えを見せていた。こちらを敵と思っていれば、あのような余裕のある所作は出来まいと兵士達は警戒心を幾分緩め、敵兵の使っていた右陣を目指す。

敵方の右陣を確保し、残す敵はエル・クレスの南門を塞ぐように展開している本陣と左翼のみ。数でいえば二万にも満たないだろう。こちらは殆ど損害もなく兵を温存できている。

「よし、一斉攻撃を仕掛ける旨を本陣に知らせ」

「た、大変ですっ」

蒼白な顔をした伝令兵が陣の中に駆け込んで来る。

「何だ、騒々しい　ん、これは……」

そう言うってから、ガヌーはやっと周囲に悲鳴が飛び交っている事に気づく。その声は段々と周囲に飛び火していき、音量が大きくな

ってくる。

「た、倒れていた敵兵達が……生き返りましたっ」

「何を馬鹿な……」

寒い冗談にガヌーは失笑を返したが、伝令兵のうるたえ振りを見て、直ぐにその顔から笑みが消える。

「……落ちていた矢を見たのですが、殆ど鏃やじりが付いていません。代わりに黒い土の塊が辺りに散らばっていました。……信じ難い事ですが、同士討ちを装うために先端に土で錘おもりを付けた矢をいくつも用意し、鎧で全身を覆った兵達に射かけていたものと思われそうです」

伝令兵の言葉に、ガヌーはあんどりと口を開けた。

「何だと……。じゃああの血溜まりは……」

「おそらく……偽装する為に家畜の血を代用したのではないかと」

伝え聞いたガヌーの顔から血の気が失せてゆく。それとほぼ同時に、退却すると見せかけて取って返した敵軍の弓兵達が、先程まで自分達がいた場所に向かって弓の弦を引絞っていた。

其の二十三　　精兵对新兵（表）

午後〇時二十分

周到に死んだ振りをしていた重装兵達に背後を取られたガノー軍は、距離を空ける間もなく包圍攻撃に晒された。東からは寝返つて退いたと思われていた右翼の弓兵達が矢を大量に射かけて来る。今度は間違ひなく鉄の矢が飛んできた。

畳み掛けるように、中央の本陣からも軽歩兵達が颯爽と突っ込ん出来る。指揮系統が混乱したままに攻撃を受けたガノー軍は碌な抵抗も出来ずに徒に被害を拡大させていく。そんな中、ガノーは敵味方の入り乱れた陣内で敢え無く敵の槍に胸を貫かれた。

自分の上官達よりも上手く軍を指揮できる。ガノーにはその自負があつたし、事実、彼の上官達は無能であつたかもしれない。

しかして本物の将と相見えた経験がなかつたのもまた事実。今まで彼を取り巻いていたその世界は、海ではなく井戸に過ぎず、新生テルネシア帝国軍の中でも屈指の二將軍を相手にするには荷が勝ち過ぎていたのである。

ガノーが倒される少し前、劣勢に立たされた左翼を見て慌てたマツシュは、右翼の軍を援護するべく左翼の軍を率いて中央に寄っていく。時を同じくして救援するために前進を始めていたグルツセル

「イアニス率いる本隊に、北西から騎兵達が接近して来るのが見えた。本隊は右翼、左翼と分断され、いつの間にか孤立している。しかし向かってきた敵の数はこちらの半数程度だ。グルッセルは応戦を開始すべく命を下す。」

「魔道部隊前へっ」

騎兵の突進を止めるべく、ベール自慢の魔道部隊達が魔法の詠唱を開始するが、帝国の騎兵達は急遽接近するのを止めて、背負っていた弓矢を構えた。

一斉に弓矢を手にした騎兵たちに本隊の隊長達が狼狽する。実のところ、弓騎兵というものは戦場で運用するのが難しい。そもそも馬の数が限られているし、馬上からでは狙いを定めにくい事もある。しかしこれだけ数が揃えば話が違う。弓騎兵達は魔道部隊の上空へと狙いを定めると、引絞っていた弦を一斉に放った。

曇り空に大量の黒い線が描き足されていく。魔道部隊は前列に出たところを雨の様に降って来る鉄の矢に晒され、鎧を身に付けていない者達は逃げ場もなく、次々に倒されていく。運良く難を逃れた魔法使い達は詠唱を終えると、負けじと弓騎兵に攻撃魔法を浴びせかけた。

ゴァ・ライール
> 鴉雷つ <

轟音が響き渡り、白い稲光が空に幾重にも散乱し、戦場に数多の

雷が降り注ぐ。一撃離脱を命じられていた弓騎兵達の多くは魔法の範囲外に退いていたが、突出し過ぎて狙い撃ちに遭った者達は馬毎絶命し、崩れ落ちていく。

ベール軍は歩兵の盾で魔法使い達を守るべく、部隊を入れ替えて前進させるが、弓騎兵達は狙いを定めさせぬように散開、或いは後退して魔法の射程圏から離脱し、次々と矢を射かけて来る。その統率の取れた動きに、急造の兵では陣形を組むのが遅れ、数で勝っているにもかかわらずベール軍の方が被害を拡大させていく。

殆どの馬が雷の音に怯む様子がないのを見て、ベールの兵達は焦燥に駆られていた。実はこの時弓騎兵が乗っていた馬には耳栓が詰められていたのである。

或いはその事をいち早く察して、使う魔法の系統を全て火に変えていけばもう少しまとまと戦えていたかも知れないが、ひたすらに振ってくる敵の矢はベールの兵達が柔軟に思考する事を妨げていた。

「くそつ、何と言う事だ」

次々に倒れて行く同胞たちを見て、グルッセルはその顔を歪めた。陣形が乱れて收拾がつかない。こちらも弓兵達を前列に出して応戦するも、幾分魔法使いの力を過信していた事もあって数に劣り、傾いた戦況を持ち直す決定打にはならなかった。敵の騎兵達は基本的には弓で遠距離攻撃を、時には弓を剣に持ち替えて突撃を仕掛けてくる。装備が限定され、柔軟さに欠けている兵達では、対応がどうしても後手に回ってしまうのだ。

三十分程の攻防を経て、右陣に群がっていた両翼の兵達が本隊の

危機を察知し、救援に引き返してくる頃には、ベール軍の本隊は止むを得ず退却の準備を始めていた。弓騎兵達は右陣から戻ってきたベール軍から逃れるように西へと退き始める。本隊に合流して数を増したベール軍は未だ二万以上の兵を擁していたが、弓騎兵達を追う事はせずに南のエストラル渓谷へと退却していった。

ベール軍の敗因はいくつかあったが、その中で取り分け大きな要因が二つある。一つは、言うまでもなく急造の兵であった事。大規模な兵を統率する事に置いて、命令をスムーズに伝えるのは一朝一夕では出来ぬ事だ。喩え元帝国兵達が加わっていたとしても、それをベール軍の兵士全てに浸透させる事は容易にはいかなかったのである。

そしてもう一つはその大人数故に、装備に余裕を持たせなかった事。魔道部隊が直ぐに鎧を着たり盾を持ったりといった様な対応を取れていれば、矢よりは魔法の方が破壊力、効果範囲共に上であるため、力負けする事はなかっただろう。セクレトバードからの民兵が加わり、当初の予定よりベール軍の兵数が増えたと聞かされた帝国の二将は、ならば装備に余裕がないはずだ、と判断した。その読みは見事の中し、状況が目まぐるしく変わって行くにつれて、ベール軍は準備の甘さを露呈する事になった。

兵達の被害を出来うる限り抑えたかったジルバートは、グルッセ

ル本人が戦場に出てきている事を聞き、そこに活路を見出ししていた。彼等の内、半数近くはベールの反乱に呼応して立ち上がった者達だ。ならば逆に、そのベールの指揮系統が崩れれば、彼等は烏合の衆と化するのではないか、そういう目論見があった。

果たしてその戦略は見事に功を奏した。ベール軍本隊が退却を始める時、周りの兵達もこぞって退却を始め、徒に味方の被害を増やすことなく敵を敗走させることが出来たのだ。

死んだ振りに関しては、あくまで引つかかってくれたらもうけもの、程度に考えていたが、通用した時点で絶大な効果を發揮してくれた。丸二日を泥遊びに費やした苦勞が報われたと言えよう。

予想以上の戦果に、ミレンとベルガモットは納得した様子で頷いている。

「ミレン將軍。敵兵達が退却していきませんが如何致しますか」

「構わん、このまま見逃してやれ。流石に弓騎兵のみで追撃を掛けるわけにもいかんからな」

ミレンの言にベルガモットも同意する。

「うむ、こちらも少なからず被害が出た。右陣を張っていた者達の手当てもせねばならん。むっ？」

突如、西方の草原から馬群が地を蹴る音が聞こえてきた。新たな敵か、と両将は一瞬身構えたが、現れたのは帝国軍の黒い鎧を着ている騎兵達だった。そして彼等が背負う軍旗には八の文字が見える。

(第八軍……ウランダー大佐だと？ 彼はブラーヂウスとネルガルに行っていたはずでは……)

疑問を解する間もなく、ザツと見て二万近い軍勢は立ち止まらずに二将の眼前を横切り、ベール軍を追って行く。追撃を仕掛けようというのだろう。

「奴め……。一体どういつもりだっ」

ジルバートの気持ちをベルガモットが代弁する。二人が憤りを隠せないのも無理からぬ事だった。無傷の二万もの兵があればベール軍との戦はもつと戦略の幅が広がっただろうし、犠牲者も抑えられたはずであった。出来うる限り被害を抑えたとして、三千近くはやられてはいるだろう。こちらが必死に戦っている光景を高めから傍観し、敵が不利になった所で追撃を掛けるとは良識を疑われても不思議ではない。

「……入って早々自分から命令違反を犯すとも思えぬし、おそらくはブラームス辺りの謀か^{はかりごと}」

ミレンにも確証はなかったが、それにしてもこの行為は笑って済ます事の出来る類の物ではない。

「……あたら帝国を腐らせる癌細胞めが。エリアでの部下殺しの件といい、もう一切容赦出来ぬぞ。いつかその首を掻き切ってくれ」

苦々しげな様子の子二将は、それでも今は部下の手当てが先だ、と北東に在るエル・クレスの方へと馬の首を向ける。

それと前後するようにして、ハンディック・ウランダー大佐率いる第八軍の先鋒が、退却するベール軍の末尾を視界に捉えていた。

其の二十四 く埋伏の雄（表）く

エストラル渓谷

エストラル山を真ん中から東西に割る様なこの険しい渓谷は、実は自然由来の物ではないとされている。イアニス歴272年に起きた獄将ジキールとの戦い、第一次アルスフェル聖戦争の折、嘘か真か、ジキールが放った魔法によって山が真つ二つに割られ、渓谷を作ってしまった、という逸話が残っている。標高600mの山の地層が断面になつてはつきりと見て取れるこの渓谷は、谷の幅があまり広くなく、一番狭い所では10mにも満たない。少数で戦うには効率の良い地形であるが、大軍を運用するには難しい地形であつた。

敗走するベール軍には騎兵が少なかつた。魔道部隊を用いる以上、自軍の馬が驚いては何にもならなかつたし、当初は攻城戦になると予想していたため騎兵はそれほど必要ないと判断していた。敗戦を想定していなかつた事もあり、退却する際の配列もおざなりになつたベール軍は、帝国第八軍の追撃を受けて窮地に立たされていた。

午後三時三十五分

第八軍の先鋒隊は殿軍を目視すると、一斉に馬に鞭を入れて速度を上げた。功名心に逸つたハンディックウランダーはベール軍に追いつき次第、帝国兵達に敵を轢き殺すように命じていたのである。

歩みの遅かったべール軍の負傷兵たちは、迫る帝国軍の矢面に立たされた。一気に馬群に潰され、或いは撥ねられて地に叩き付けられ、次々に息絶えてゆく。微かに息のある者には馬上から槍が容赦なく振り下ろされ、体中を串刺しにされていった。

多くの馬蹄が地を叩く音で敵の悲鳴は殆ど聞こえない。体中に響く、心臓の拍動にも似たその低い震動音を聞いて帝国兵達は自然と高揚し、殆ど抵抗のない敵兵達に嬉々として槍を振り下ろした。散発的な敵の抵抗で何人か馬上から倒されるものの、地に落ちた味方に構わず、彼等を踏みつけながら行軍を続ける。

「指揮官を討ち取ったぞおっ」

負傷者を庇うようにして殿軍を指揮していた魔法使いの首級を上げ、騎兵の一人が高らかに宣言する。

「よ、よしっ。俺だつてっ」

帝国兵達は指揮官を失って白旗を上げる敵兵達を、口元に笑みを浮かべながら問答無用に蹴散らしていく。殺した数だけ褒美をやる、と言われていた兵士達には、抵抗の気を無くした敵兵達はただの獲物にしか見えなかっただろう。訓練に使う藁人形の首を刎ねるが如く、帝国兵達は抵抗の意を失ったべール兵達の体を次々と切り裂き、貫いた。

暫くすると、小物には構っていられぬと、殿軍の全滅を確認せずに大物の首を上げんといきり立った騎兵達が独断で先行し始める。渓谷内では縦に長い隊列と成っているため、命令系統はないに等しかった。

殿軍を一人残らず始末した後、再び進軍を続けていた騎兵達が、相当に幅が狭くなっている谷の所に人影を見止める。

「……ぬ？」

谷が狭くなっていた場所に悠然と立ち塞がる大男を見据えて先鋒軍は立ち止まった。男の周りでは既に交戦したと思われる騎兵達が軀と化している。それも一人や二人ではない、何十人という帝国兵が横たわっていた。辺りでは乗り手を無くした馬達が、所在なさにウロウロしている。

服の上からでもわかる鍛え上げられた体躯、短く刈り揃えられたダークブラウンの髪。冬にもかかわらずベージュ色の半袖の服を着ている、修道僧モンクのような井出達をした背の高い男は、大勢の帝国兵達を見据えて言い放つ。

「ここから先は通行止めだ」

大軍を目の前にしても自信に満ちた男のその威容に、帝国兵達は一瞬立ち竦むが、男の後方に退却中のべール軍が小さくなっていくのが見て取れた。先陣を任されていた中隊長は淀んでいた空気を払う。

「たった一人を相手に何をしておるっ。とつとと轢き殺してしまえっ」

その命令を皮切りに、前列にいた騎兵達は我に返ると大男に向かって猛然と駆け出していく。幾多の蹄が土埃を撒き上げて、手に槍持つ帝国兵達はその穂先を段々と近づいて来る大男に向ける。大男

は悠然とそれを見据えてゆつくりと息を吸い込み、片足を僅かに上げると、やおら肩を入れるようにして踏みしめた。

ズズンッ

地鳴りが辺りに響き、大地がグラグラと激しく揺れる。驚いた馬達は大男の眼前で前足を浮かせて戦慄わななくと、騎兵達を振り落とした。勢い良く落馬した兵達は地に叩き付けられ、呻き声を上げている。大男の踏みしめた地面の周りには大きなヒビが入り、その脚力の凄まじさを物語っていた。

「な、なな……」

驚いたのは後方に控えていた帝国兵達である。十騎程の兵達を指一本触れることなく、あっさりと戦闘不能にされたのだから無理もない。突出しかけていた兵達は慌てて馬の手綱を引き、その足を止める。

「ぐぬぬっ……、ならば矢を放ていっ」

馬から降りた弓兵達が騎兵と入れ換わる様にして前列に出、大男に狙いを定める。大男はそれを見据え、今度はゆつくりと帝国兵達に向かつて歩き出す。

フィール
充填

その呟きと共に男の身体が数瞬、薄らと光を帯びる。

「な、舐めるなっ。射ていっ」

台図と共に、何本もの鉄の矢が放たれて大男に迫るが、大男は野生の獣を思わせる速度で帝国兵から向かって左横に低く跳躍した。矢は男に当たることなく、地面に刺さり落つ。

「もつとだつ。射てつ、射ちまくれつ」

射かけられた矢が当たる寸前、躲す^{かわ}ようにして大男は飛び上がると、帝国兵から向かって左側の切り立った急傾斜の崖を上向きに、弧を描く様にして疾走した。男の蹴った部分からは細かな石砂がカラカラと崖を滑り落ちる。男の影を縫うように、弓兵達の放った矢が次々と崖の地肌に突き刺さっていくが、肝心の影の主人には一本として当たらない。

(ひ、人の動きではないつ)

男の動きを捉えられぬ弓兵達は射撃を続けながらも胸に恐怖が湧き上がった。垂直に近い岩壁を大男が平然と駆け抜ける、どこか現実味のない光景が帝国兵達の落ち着きを著しく失わせていく。気付けば大男は弓兵達のほぼ横腹に移動して今度は崖を駆け下りて来る。射線が著しく限定され、逆側にいた兵達には味方が邪魔になって大男に矢を当てる術がない。慌てふためく弓兵達に大男がさながら怒れる牛の如く、猛然と突っ込んで来た。

「らあつ」

大男が拳を下から振り上げ、大きな旋風^{つむじかせ}が巻き起こる。周りにいた兵達は錐揉^{きじも}むようにして天に巻き上げられ、地に叩きつけられていく。その剛拳を幾度となく放ち続ける大男は、正に竜巻の威容を誇っていた。前に突出していた弓兵達は接近されては成す術もなく

打ち崩されてゆく。

隊列が入り乱れながらも、ようやく剣兵、槍兵が数人、大男にかかっていく。大男は疾走しながらも拳を腰の辺りに留め、兵達に向かつて真つ直ぐに撃ち抜いた。ポツという音と共に衝撃波が駆け抜ける。

「ぐがあっ」

明らかに拳の射程外にいたにもかかわらず、重い鎧を着たはずの兵達は弾かれるように、後ろに二転三転しながら10m程吹っ飛ばされる。氣遣った周りの兵達が飛ばされた兵に慌てて駆け寄ると、着ている鉄鎧の胸の辺りに巨大な拳の跡が付き、べっこりとへこんでいる。

「な、何だそりゃ……」

およそ有り得ない化け物振りに、中隊長以下、兵達は男から目を離さずに、しかし息を呑んだ。そうしている間に大男は弓兵達をあらかた片付け、帝国兵達に視線を転じる。おもむろに視線が合い、前の方にいた兵達は後ずさりながらも武器を構えるが、大男は無理には近づいて来なかった。

重苦しい沈黙が立ち込める中、それを破ったのはベールの兵だった。大男の後方から騎兵が近寄って来る。

「ノブリス隊長っ。法王様の軍勢は安全圏に至りましたっ。もう充分です、お引きくださいっ」

「……わかった」

ノブリスと呼ばれた大男は帝国兵達に見せつけるようにその広い背中を向け、歩き出すかと思われたが動きを止める。

「今回は苦杯を舐めたが、貴様等に煮え湯を飲まされ続けている者達の怒りはそう簡単には治まらぬ。追って来るのは自由だが、我々の首を取りたければ……命を捨てるつもりでかかってこい」

背中越しにそう言うや否や、ノブリスはベールの騎兵と共にその足で南へと駆け出した。馬に乗っていないにもかかわらず、その姿は騎兵と共にみるみるうちに遠ざかってゆく。中隊長は追撃命令を発する事も忘れ、ただ茫然とその姿を見送った。

狭い溪谷においては、先陣が足を止めては本隊の行軍もどん詰まりになり、止まってしまふ。ノブリスによつて進軍の勢いを削がれた第八軍は、ベール軍にこれ以上追撃を続けるのを断念した。ブラームスにベール軍を逃がしても構わぬ、と言われていたハンディックウランダーは、下手に追い過ぎて手痛い反撃を蒙るよりは、殆ど被害も出さないまま二千余りの兵を倒したのだからこのままでも良いだろう、と判断した。

この戦いにおけるベール軍の損耗は少なくないと予測されていたが、追撃軍の先鋒を請け負った中隊長はたった一人の男に進軍を食い止められた恥を隠蔽するべく、かなり誇張して敵の反撃を吹聴した。そのため、近隣の町からベールに兵を送るのは時期尚早とされ、

ベール軍は辛うじて難局を乗り切るのだった。

これにて、ベール軍と帝国軍との初戦、後の世に語られる？エル・クレスの戦い？は幕引きとなった。帝国軍の死者3100名余りに対し、ベール軍の死者12000超。数に勝る相手に対して奇策を用い、地力の違いを見せつけた帝国軍の圧勝で幕を閉じたのである。

其の二十五　　自明の理（表）

884年1月7日

ネルガル城の一室にて、ブラージウスはクッション付きのゆつたりとした肘掛椅子に深く腰かけていた。エル・クレスでのミレン、ベルガモット両將軍の、ついでにウランダー大佐の圧勝の報を聞き終えると、ブラージウスは傳かいていた伝令兵を下がらせる。

一流の道具と言う物は、一流の才人なりに愛すべき物である。家具は丹精込めて作られている物ならば、或いは使用者の生涯を支える物であり、その生活を豊かにする。得てして一番近い人以上に、机や椅子、或いは楽器と連れ添う時間は永きに亘る事が往々にしてあるのだ。

ブラージウスは特に座る椅子には気を使っていた。クッションの硬さ柔らかさは勿論の事、背もたれの角度、座高、大きさ、形、ありとあらゆる構成要素を考慮し、一流の職人にオーダーメイドさせた物を採用している。形の悪い椅子を使っていれば、身体のバランスが悪くなり、ストレスまでが溜まり、健康を害するという事を知っているためだ。日用品然り、食生活然り、睡眠時間然り、対人関係然り。得てして、人と言う者は一見何でもない所で、しかし著しく心身を損ねている者が多いのである。

座り心地の良い椅子にもたれかかりながら、ブラージウスは一息

付くとゆっくりと天を仰いだ。放たれた深い溜息は逃げ場なくそこに佇んでいる。

「……ふむ。流石、と言ったところであるな」

ブラージウスは、言葉とは裏腹に特に嬉しそうな様子ではない。その口吻は、想定内の結果にいちいち驚く必要もないだろう、と思っっているかのようでもある。良く切れる剣があったとてそれを扱うのが幼児では、成熟した大人に勝てる可能性は零に限りなく近い。思わぬ怪我を負わされる事はあるかもしれぬが、戦闘の素人であるベール軍がまともに帝国軍とやり合っつて勝てる道理はない。

トリエイ・マン

三重の頂の責任者、イヴァンスは外窓の手すりに座り、退屈そうに腕を頭の後ろで組みながら、主君の一挙一動を観察していた。

「この盛大な負けっぷりじゃあベールも当分動けないでしょうね。東諸国の連中もさぞ落胆している事でしょう」

「誰とて強大な敵に面と向かつて事を構えたくはないからな。敵の敵が味方とは限らぬ。同盟を組んだとて、自己保身と、駆け引きと、損得勘定を無くさぬ限りは一枚岩とは成り得ぬ。そして、そのような日が人類の歴史上に垣間見えた事は一度たりとて」

いや、一度だけ有ったかも知れぬ、とブラージウスは思い返す。

但し、あの出来事は人類の存亡そのものが懸かっていた故に例外中の例外であろうか。

「まあ確かにそうですね。口は出すが手は出さず、常に風避けとなる勢力たてを探している。昔から弱小国家に良くある構図じゃないです

か」

イヴァンスの言葉にブラージウスは片眉を上げる。

「ほう、中々洒落た事を言うではないか。残念ながら、余にその心情を理解できる日が来る事は、おそらく未来永劫ないだろうが」

それを聞いてイヴァンスは、持てる者の強みだな、と唇を歪める。若くして万難を排し、テレジア大陸の頂点に登り詰めては、後はひたすら転げ落ちるだけである。例外はあるだろうが、一度登り切つてしまった山に再度登つても以前ほどの感慨は湧かないものだ。ならば新たな目標^{やま}を打ち立てるが最善であろう。おそらく、ブラージウスは頂点を目指すそれを地位から別の物に転じたのだ。

(持てる者が暴走すると、本当に收拾がつかないな)

心中で独白を漏らすも、不思議と不快さは伴わない。イヴァンスの今の心情が看破されたとして、ブラージウスはせいぜい微かに眉を潜めるだけであろう。勘違いを恐れず言えば、この男は世間一般が悪意と呼んでいる物に対してのみ、実に大らかな男なのだ。その一点に関して言えば、先のアルイール皇帝を超える器の持ち主である。

「それはそれとして　　そろそろ僕達もどこかに行きませんか、ブラージウス様。このままでは僕、暇を持て余して死んでしまうかも」

わざとらしく目を潤ませるイヴァンスの、嘆願とも取れるその提案に、ブラージウスは表情を変えずに応じる。

「十日後にマリスノリスに侵攻する。その頃にはエウゲンからの食料も届いておるだろう」

主君の言葉に反応し、イヴァンスは窓の手すりから下り立った。

「やったー、……って、マリスノリスですか。確かアンドレイ皇子

の首を送ってきた所ですよね」

ブラージウスは宙に目をやる。

「ああ、そう言えばそういった事もあったかもしれないな。ふむ、ならば尚更捨て置けぬなあ。誇り高き皇家を裏切るとは許し難い」

その言動にイヴァンスは口を半開きにする。そもそも敵視していたのはブラージウスであり、少なくともアンドレイ皇子の首が送られて来た時は凄く喜んでいたように思えた。

後日マリスノリスに感謝状まで送ったというのに、この人の頭の構造ってどうなっているんだろう。

その疑問を解すかのように、ブラージウスは首を捻るイヴァンスに視線を送る。

「一度裏切ったものは二度裏切る、それだけだ」

それが当たり前だという顔をして、ブラージウスは平然と言った。

確かにそれは一理どころか、真理に近いものがある。糊付けされていたのを剥がし、再び元に戻しても最初より粘着力は弱まってしまふのだ。現実として、罪を犯して牢獄に入れられた者が再犯する確率は8割を超えており、残りの2割の者にも寿命が来なければ、或いは自身の価値観を変えてしまう程の転機が訪れなければきっと同じ事を繰り返すだろう。

真つ当な人間に戻るといふ希少な可能性を付度して更生と言つ名を隠れ蓑にした再犯機会チャンスを与えるは笑い話に他ならないのではないか。イヴァンスはそう考えているからこそ、ブラージウスの物言いにも納得が行くのだった。

ともあれ、やっと戦が出来ると聞かされ、近頃体が疼いて仕方なかったイヴァンスは一先ず胸を撫で下ろす。

「マリスノリスはそれで良いとしても、ベール教国はどうするんです？ このまま放っておくんですか？」

今は敗北に打ちのめされていたとしても、傷が癒えればまた動き出すだろう。国としての戦力はともかく帝国民への影響力を考えれば、イアニス教団は侮っていい存在では決していない。

「そうさな……。これ以上離反者が出ぬよう一つ手を打っておく。エアリアのラフォームに書状を送らねば、な」

ブラージウスはそう言うと、机の引き出しから便箋を取り出し、筆を走らせ始める。その流れるような達筆振りを横から覗き見るようにしてイヴァンスは、性格と字の歪みは必ずしも一致しないんだな、と独りごちた。

其の二十六　く空飛ぶ商人（表）く

アステイス「フロイデの失脚後、エアリアに第九軍大隊長ローラント」ラフォム准将が来ると直ぐに税率が上げられた。幸いにしてアステイスは書類を見ても税金を緩和していた事がバレないよう、巧妙に改ざんしていた。しかし、ラフォムは私腹を肥やすためだけに税率を上げ、不満を口にしたエアリアの領民達に対しては暴力によって報いた。帝国軍でも質の悪い事で有名だった第九軍の兵士達はエアリアで好き勝手に振る舞い、時には前線に出れぬ鬱憤を晴らすべく近隣の村々を襲っているという有様だったのである。

884年1月15日

朝早くからエアリアの西門は物々しい雰囲気にもまれていた。多くの帝国兵が得体の知れぬ妖女に惨殺された、という騒ぎがあったためだ。落とし処を巡っては、最終的に警備統括者のメツサーがエアリア王城から呼び出される顛末となったが、彼は被害者が兵卒だと聞いてはともやる気が起きないようだった。

第九軍大隊長ローラント「ラフォムの副官、メツサーは、ブツブツと文句を垂れながらもその現場に向かっていた。馬に乗ってたらだと事件現場に向かうメツサーは、先導する警備隊長に特徴のある喋り方で確認する。

「目撃した者はいたのであるか？」

「ええ。……生き延びた兵士達の話では相手は長い髪をした美女だったとか。ただ、……突然一人が二人になったとか、どうも内容が

要領を得ないのです」

警備隊長の話にメッサーは首を捻る。

「一人が二人……何であるかそれは」

「さあ、私も詳しくは……。察するに、不定形生物スライムみたいに分裂したんじゃないでしょうか。とにかく化け物みたいに強かったですですよ。二十人近くが数分も経たずに殺されたと言う事ですから……」

……」

事件発生時刻にはまだ薄暗かった事もあり、犯人の人相を特定する作業は難航していた。実際、生き延びた兵達を見ると尋常ではない怯え方だった。剣の腕に自負がある自分でも、三十人もの兵が碌な抵抗も出来ず、雑草でも刈るかの様にバツサバツサと殺されたと聞くと、背筋の辺りに何やら薄ら寒いものを感じる。

それと同時に、西門の警備を任されていなくて良かったな、と警備隊長は密やかに安堵した。

二人が現場に到着した時には、既に死体には青い薄布が掛けられていた。辺りの石畳には、なるほど、飛散した血が至る所にこびり付いている。漂って来る死の香りに、メッサーは鼻周りを歪ませた。

「……酷い臭いであるな。……む？」

メッサーは血溜まりの中に落ちている財布を見咎め、馬から颯々と下りてそれを拾う。しかし中身は小銭を残して空っぽだった。

「何だ、入ってないのであるか」

チツと舌打ちし、そのままポイッと財布を放り投げるメッサーに、供に付いていた警備隊長は顔をしかめた。そういう問題じゃないだろう、と。

「これはどう見ても物取りの犯行であるな。しかし、何だつて朝からこんな所にこんな大勢の兵達がうるついていたのであるか」

「はっ
」

そういえば、と供の警備隊長には思い当る事があった。最近この辺りで頻繁に若い女性の遺体が発見されている。もしや、この殺された帝国兵達は不届きを働いていた者達ではないのか。

正義感に駆られた警備隊長は意を決してメツサーに進言する。

「あ、あの
」

「まあいいか。所詮は兵卒であるしな」

帝国兵はその言葉にそのまま固まる。貴族の言動というものは全くもって度し難い。

警備隊長はやるせない怒りを覚えたものの口には出さず、帝国兵のこの哀れな死に様を天から見下ろして、殺された女達も幾分報われたのではないかと自分を納得させる。

「では、とつとと片付けてしまつである」

「は、はい。あの、付近に捜査線を張らなくても？」

「手続きが面倒である　ん？」

一瞬辺りが暗くなり、再び明るくなる。ふと空を見ると

「……ななな、何であるかあれはっ」

メツサーは、顎が外れるのでは、と警備隊長に心配させるくらいにその口を開いた。

頭上には東から西へ、大きな黒影を大地に従えながら、空を悠然と飛ぶ獣の腹部が見えた。

頭が鷲、胴が獅子の獣、上半身を白いふさふさの羽毛に覆われている翼獣ケリフオンの手綱を握っているのは、白いブラウスに迷彩色のホットパンツを履いている小柄な女性。セミロングの黒髪が後ろへと優雅に靡いている。そしてその後ろには、やはり白いワイシャツにベージュのスラックスを履いている一人の青年が、女性の細い腰に必死にしがみ付いている。靡いている女性の髪が時折ピシピシと顔に当たっているが、どうやらそれを気にしている余裕もなさそうである。

「うーん、良い天気ですねえ」

小柄で大人しそうな女性は手綱から両手を放してぐぐつと真横に伸びをし、風の声に耳を澄ますかのように目を瞑る。空気はそれなりに冷たいが、風はそよそよ、お日様もポカポカ。空中散歩には頃合いではないか。

「飛んでいる最中に手え放さないでくださいっ。……やっぱり怖い、怖過ぎる。シーナさん、せめてもう少しスピード落としましょうよ」

レナードの情けない声に、シーナは振り向いた。

「でも、レナードさん。あまり遅れると社長にどやされますよ」

「そうかも知れませんが、つてうっはあつ」

進行方向斜め右から飛んできたとんひ鳶が顔に当たりそうになり、慌てて屈む。走る馬の倍近い速さであんなのが顔に直撃したら絶対死ぬ、お互い死ぬ。間一髪、難を逃れたレナートは全身にさぶいほが現れるのを感じた。寄りにもよって鳥と刺し違えて死ぬなんて、どんな天災によるそれよりも遺族がやるせなさに包まれそうである。

「……後生ですから、速度を」

「はいはい」

シーナが手綱を少し緩めると、翼獣は飛行速度を少し落とした。しかし、本当に少しだった。巨体を飛ばすには、どうしても一定以上のスピードが必須になるのだから致し方ない。シーナは決して、レナートの怯える様が面白くてやっているわけではないのだ……と信じたい。

少しでも恐怖を和らげようという心配りか、シーナは話題を転換する。

「社長、怒り狂っていましたね。？怒髪天を衝く？つていう妙な表現が初めてピンと来た、稀有な瞬間でした」

確かにそれには同感せざるを得ない。社長の長い金髪がまるで海に佇むイソギンチャクのようにうねにうねっていたのを思い出し、レナードは顔をやや引き攣らせながらも請け合った。

「無理もないと思いますよ。戦争が始まってからと言うものずっと赤字続きですし。このまま会社が潰れちゃわなければいいんですが」

「んー、濡れ手に粟とか言っているのは軍事産業関係者だけですかね。まあうちは自転車操業ではないし資金もあるから何とかもつでしょうけれど」

アテライデに本社を置くドウブオーニユ社は創業から既に200年近くが経っている。男女関係なく、代々商才に恵まれた社長を輩出し、今は十四代目に当たる若き女社長、シャナエドゥブオーニユが後を継いでいる。

戦争が始まる前まで順調に貿易業で利益を上げていたこの会社は、新事業立ち上げを東西戦争によって木っ端微塵にされ、方向転換を余儀なくされた。

今回二人が任されたのはカタルスタで初の営業所立ち上げである。郵便事業ではなくて輸送事業を行う心積もりらしいが、戦争中のテルネシアでは基盤を作るのが難しいので、先に平和なカタルスタで試作事業を立ち上げる事になった、というわけだ。

但し、戦乱の只中であるが故に、安全面に対しては最大限配慮しなければならぬ。出張に関しての経路は当然の如く問題視された。馬に乗ったとて安全とは言い切れぬし、定期船で行くには相当に時間がかかる。

暗礁に乗り上げかけたこの計画は、シーナの「陸から行けないなら空から行けばいいじゃない」という如何にもお嬢様的な一言によって文字通り活路を見出された。シーナの実家、ヒツキ家はアテライデきつての名家である。

余談だが、シーナが操っている翼獣グリフォンは彼女のペットで、まだ空も飛べぬ、毛も生え揃わぬ小さい頃に屋敷に連れて来られたそうだ。

名前はグリ子、7歳の（一応）雌らしい。可愛らしい名前に反して敵めしい面構えだが、彼女曰くごく偶に見せる仕草がとっても愛らしいとの事だ。ただ放浪癖があり、時折ふらつとどこその山奥に飛んで行って前触れもなく鹿とか捕まえて来るのが玉に瑕、とはやはり彼女の談である。

「でも、鹿の角つてとつても高く売れるんですよ」

だからどうした、と言いたいところであるが、後が怖いのでともとても。こんなのを嚇けられたら全くもって助からないだろう。

鹿が見つからなかったらそのうち人を獲って来るのではないか。レナードがグリ子の存在を知った時から胸奥に秘めている言葉である。口は災いの門である事を、日々やるせない理不尽に揉まれている一介のサラリーマンの彼は重々承知しているつもりだった。

グリフォン
翼獣は、実を言えばテルネシア側では殆ど生息が確認されていない。カタルスタ周辺の山中に群れを作つてひっそりと生息していると伝えられている。本来、人に飼われるような事は滅多にないらしい。尚、険しい崖の上に巢を作つて硬い殻に覆われた卵を産むので一応は鳥類に分類される。列記とした肉食動物であるが、稀に果実を啄む事もあるようだ。

幸いにして、グリ子は赤ちゃんの時から飼われていたために人懐っこくなくなったようだが、本来翼獣という生き物は獰猛で縄張り意識に敏感、言い返るならば繁殖期の獅子に輪を掛けたような恐るべき存在である。その巨体にもかかわらず飛翔能力があり、時速80kmを超えるスピードで獲物を捕らえる機動力、熊や虎をも躊躇なく襲う攻撃性、そして数キロ先の獲物の姿を発見する驚異的な視力。魔獣は危険度を十段階で顕されているが、翼獣は8。相当に危険な部類に属している。

「エアリアを通り過ぎて二時間も経過した所で、おもむろにグリ子の速度が落ちて来る。大分息を切らしている所を見ると、どうやら相当に疲れているようだ。段々と高度も低くなってきている。」

「そろそろ休ませなきゃ駄目みたいですね」

確かに、随分長い間飛んで来たし、二人も乗せていれば疲れるのも無理はない。

レナードは現在いる場所を地図の地形と一致させて確認する。

「カタルスタの国境まではもう少しかかりそうだし、宿を探しましょう」

グリ子に乗つての空の旅は慣れれば優雅にして比較的安全ではあるが、幾つか欠点もある。天候に左右されがちな事、ご機嫌斜めな時は乗せてくれない（シーナだけなら大丈夫らしい）事、疲れていると勿論飛べないので長時間休養を取る必要がある事、高所恐怖症の人には無理な事、等といった制約がある。雨風が強ければ危なくて飛べないし、高い所を飛んでいるだけに雷が落ちてくる可能性も高い。機嫌が悪い時は振り落とされる可能性があるから問題外である。

二人は天気とグリ子の機嫌を窺うかがいつつ、比較的のんびりとカタルスタに向かっていた。

其の二十七 く忌まわしき遊戯(表)く

884年1月17日、ガツシユがマビアビから輸送した多くの兵糧を受け取ると同時に、ブラージウス率いる帝国軍は再び東に侵攻を開始する。目的地はネルガル領の南東、マリスノリス領。ネルガルに第六軍、シュヴァイ^{II}オルトフを残し、第一軍大隊長コステイ^{II}ブラームス、第二軍大隊長ゴードン^{II}ベントニックスを伴ってネルガルを出立した。その軍勢はおよそ十万。対してマリスノリスは一万弱。突然の帝国軍の侵攻に慌てたマリスノリス側は降伏する旨を記した書状を送るが、ブラージウスは嘗てマリスノリスが兄アンドレイ皇子に不義を働いたのを理由にそれをあっさり却下し、書状を持ってきた使者を首だけにして送り返した。

ならばと、今度は周囲の国々に援軍を求めたが、冷やかな視線と共にそれを拒否されてしまう。東西戦争中にアンドレイを謀殺し、首を送りつけて保身を図ったそのやり方は、アンドレイ側に付いていた周辺諸国にとっては許し難いものであり、その怨念は今も消えていなかった。同時にこの戦乱を引き起こす一端を担った責任があるとして、誰も耳を貸す者がいなかったのである。

結局、帝国軍がマリスノリスに辿り着くまであと三日、という頃になって、王族達は私財を掻き集めると民を置き去りにして城から脱出を図り、何処かへと姿を消し、マリスノリスの町は殆ど無防備のまま帝国軍の侵攻に晒されることになった。

884年2月15日、マリスノリスの城下町を取り囲んだ帝国軍率いるブラージウスは、主のいなくなつた城を見据え、攻略戦の開

始を宣言する。

主君に見捨てられ、もはや戦う意思のなかったマリスノリスの者は、易々と帝国軍の侵入を許してしまう。城は僅か半日で陥落するも、戦わずして戦争が終わるのに不満を感じた帝国兵達の一部は無抵抗な領民達と不戦の意を表し武器を捨てていたマリスノリス兵に襲いかかり、大勢の者達が理不尽な死を遂げた。

マリスノリス陥落後、ブラージウスはその日の内に逃亡中の王族達を捕まえるべく私兵、トリニティ・ワンを放った。王族達の何人かは、南方の山中にてトリニティ・ワンの山狩りに遭い、生け捕りにされる。彼等はマリスノリスの街の中心部に引っ立てられ、足に縄を括り付けられ、一人残らず逆さ吊りにされた。自分達を見捨てた王族達にやり処のない怒りをぶつけるべく、町の者達は次々と石を投げ掛けた。王族達は領民達の石の投擲とつてきに晒されながら赤紫に鬱血した醜い顔を晒し、長らく苦痛に喘ぎながら死んでいった。

アンドレイを裏切り、東諸国を裏切り、それが駄目となると裏切った東諸国に和解を申し出、最後に民までも裏切ったマリスノリスの王族達は、結局死よりも辛い苦しみを味わう羽目になったのである。

マリスノリス城の中庭では、地面から人の顔が生えていた。埋められているのは敗戦した国の将校とその家族達だ。最後まで抵抗を試みようとした彼は家族と共に捕らえられ、ブラージウスの部下達の手によって穴に入れられると、這い出る事が出来ぬ様に土を被せ

られた。三角形の形になるように等間隔に6人埋まっている。

「ブラージウス様。新しい遊びを思い付いた、と聞いて駆け付けたのですが」

つい先程まで町で殺戮に興じていたイヴァンスは、幾分興奮した面持ちでブラージウスを見た。ブラージウスは人の顔より少し大きいくらいの、青く塗られた鉄球を持ちながら朗らかに言った。

「ダーツも飽きてきたのでな。たまにはもう少し身体を動かす遊びをせねば、と常々考えていたのだ。まあまずはお手本を見せてやろう。よく見ていよ」

そう言うなり、ブラージウスはおもむろに左手に持っていた鉄球を後ろに振りかぶり、地面に埋まっている者達の顔目にかけて転がした。

「ひっ」

埋められた者達の息を飲む音が、約20m離れたイヴァンスの耳にまで届いた。勢いよく転がる鉄球は、地面の小さな窪みや僅かに出ている木の根っこ等で所々コースを変えながらも埋められた者達に迫り、右端に埋められていた年端もいかない男の子の顔に命中する。グシャッと、何かが拉ひきちぎげられる様な嫌な音を立てた。

「あ……が……」

僅かに呻き声を上げた男の子は、見る影もないほどに潰れた顔を天に向け、ビクンと一度のたうって絶命した。右側の眼球がはみ出

しかけ、両耳からは血がとめどなく溢れ出ている。

『リユークッ』

埋められている家族達の、おそらくは少年の名前を叫ぶ声が辺りに響き、ブラージウスはそれをニヤニヤ笑いながら眺めている。

「おやおや？ 中央の男を狙ったのに、上手くいかぬものよのう」

愉快そうに笑っていたブラージウスは、ふと隣にいるセヴァンスに視線を転じる。

「良かったらやってみるか」

「え、いいんですか？」

ブラージウスが小さく頷いたのを見て、イヴァンスは僅かな躊躇ためらいも見せずにあっさり鉄球を受け取り、ゆっくりと横に舐めるように、地面に埋められた不幸な家族達に視線を移す。よく見れば、死んだ男の子の血と頭の中身の匂いが立ち込めてきたのか、娘二人が嘔吐している。

「何と無礼な。余の愛用の球に貴様等下民の胃液が付いたらどうするつもりぞ」

そう言いながらも、ブラージウスは丹念に磨かれた真っ白な歯を半月形に覗かせる。イヴァンスはそれを横目で見て、良い顔をしているな、と思った。

「では、失礼して よいしょっ」

イヴァンスは軽快に鉄球を放つ。細い腕から放たれたとは思えな

い、凄まじいほどに勢いの付いた剛球は二、三回バウンドして中央から僅かに軌道をずらし、右側に埋められていた、胃液を吐いていた娘の左頬を掠めて後ろの老婆の頭部を突き抜けた。娘の顔の表皮が爆ぜて赤い肉がむき出しになり、娘が獣のように耳を劈つんぱくく声で絶叫した。そして直撃した老婆の方は衝撃で首の根元が折れたのか、ぐらりと顔が上向きになり、血の混じった泡を鼻と口からぶくぶく吹き出している。顔に当たった時に折れた歯が、辺りに何本か飛び散っていた。

「おやおや、あんな顔ではもう嫁にはいけそうにないのう。お気の毒な事だ」

ブラージウスは眉を潜めて首を振った。しかし目は笑っている。「やめる、やめてくれっ」

中央の将校が涙ながらに必死に懇願した。それを聞き、ブラージウスは背中を逸らすように笑いながら脇にあつた鉄球を持ち上げ、頭を元の位置に戻すと兵士を細い目で睨む。

「余に対してやめる、という命令をすることは全くもって許し難い」
埋められた将校は息を飲むが、それでも嘆願を続ける。

「た、頼む。俺はどうなっても良いから、せめて家族だけは」

ゴシヤッ

将校は最後まで言葉を紡ぐ事が出来なかった。ブラージウスの投げた鉄球は今度こそ、寸分違わず男の額に命中する。男の頭はほぼ正中からひび割れ、爆ぜた西瓜の様になっていた。未だ無傷だった

妻と娘は、斜め前にある一家の大黒柱の無残な姿を見て、目を見開いたまま硬直し、呆然としている。悪い夢だとも思っているのだから、赤ん坊がいよいよをするように残された家族達は首を振っていたが、どんな悪夢より質の悪い現実がここにあった。

「おおつ、見たか。ど真ん中ぞ」

ブラージウスの声が弾んだ。イヴァンスと周りの兵士たちは歓声をあげ、パチパチと拍手をした。哀れにも残された家族達は、涙と鼻水と涎で顔を汚し、命を失う寸前までひたすらに助けを求めていた。

驚いた事に、ブラージウスはその声に合わせて足でタップし、リズムを刻んでいた。常人なら聞くに堪えない悲鳴も、ブラージウスにとっては優れた楽団が奏でる上質なオーケストラのように聞こえるのかもしれない。

残り3人が恐怖から解放されるまでには結局6球を要したのである。

良い汗をかいた、と額を拭うブラージウスは出来立ての6つの死体に目を移し、さてどうするかと首を捻る。

「ふむ、遊戯に興じている間はいいが、後片付けがことだな。鉄球をわざわざ取りに行くのも面倒だ。悪くないアイデアだと思ったのだが」

「ああ、じゃあ奴等はそのまま肥やしにしてしましましょう」

イヴァンスはそう言うなり、魔法の詠唱を始める。

> 不浄の者達よ 天の尖兵を封ふうじゅうべく 地獄の蓋を開け放て 腐り
落ちよ

トゥ・イブール
> 熔負く

イヴァンスが詠唱を終えた瞬間、周りの兵士達は目を瞠り、硬直する。埋められていた家族達の周りに黒い霧のような物が発生し、死体を、周囲の土を包み込み、急速に溶かしていく。三十秒もすると、死体は完全に溶け、どす黒い液体となって穴の底に溜まっていた。

そのおどろおどろしい光景に味方であるはずの帝国兵は息を呑んだが、ブラージウスはただただ好奇心をくすぐられた様な顔をしている。「素晴らしい。見た事のない魔法だったが今のは一体？」
「熔負トウ・イブールですか？ 見ての通り、強力な酸を含む黒い霧を一定範囲内に短時間発生させる魔法です。ずっと触れていれば御覧の通り、骨も残らず腐り落ちます。一応禁忌魔法らしいんですが、詠唱にも精神集中にも時間がかかるくせに、動いている敵には殆ど使い道のない、何で禁忌に指定されたのかもわからない、そんな魔法ですよ。まあ僕は剣の方が得意ですからどうでもいいんですけどね」

ブラージウスは納得したように頷いた。

「なるほど、流石は魔道王国カタルスタ出身、といった所か」

「ええ？ あんな奴等と一緒にしないでくださいよ。日がな本ばかり読んでいる退屈な連中です」

心外だ、という風に、イヴァンスは肩を竦めた。

「それが嫌で、魔道部隊あやつらを伴って抜け出して来たのか？」

ブラージウスが問うと、イヴァンスは朗らかに頷く。

「彼等も僕と一緒に遊び場が欲しかったんですよ。折角力を付けたのにそれを持って余していたら勿体ないじゃないですか」

戦場にいると生きていると実感できる。身に付けた力を思う存分に行使できる喜びは何物にも代えがたい。自分の手によって他人が傷つき、失われかけた命が発する咆哮を耳にすると、甘い痺れが全身を駆け抜ける。それがカタルスタの連中には理解できないらしい。

稀にそういった人格破綻者が世に出る事がある。イヴァンスは破壊衝動のままに人を壊す事を喜びとする生粋の殺人者だった。全ての者が眠らずには堪えられぬように、イヴァンスは何かを壊さずには堪えられないのだ。それを悪と断ずるならば戦うまでである。

「やれやれ、救えぬ奴だ」

「お互い様過ぎですよ。ブラージウス様」

人の皮を被った二人の悪鬼は顔を見合わせ、肩を竦めながら失笑を交わすのだった。

其の二十八　く舌戦の果て（表）く

マリスノリス陥落より一月ほど遡り、さかのぼ 884年1月20日にエアリアからカタルスタに向けてテルネシア帝国の使節団が出発した。ブラージウスの密書を受けた第九軍大隊長ローラント＝ラフォーム准将がその命に従って送りだしたのである。そして約一ヶ月半の長旅を経て、帝国の使節団はカタルスタの城下町に辿り着いた。

884年3月3日。

カタルスタ王城の大会議室では帝国の使節団が城下町に入ったという報告を受け、賢王の側近達が、一見すると盛んに意見を交わしている。しかし、その議論の様子は当の賢王の目から見ても相当に生温い物であった。大臣達の意見は戦わせているようで非常に似通っており、その馴れ合いの様は見る者によっては相当に不快に映るのではないかと思われる。

賢王、ユーヴェル＝W＝ウイスアグストウラは、ウイス 齡三十になつたばかりであるが、幼き頃から上級魔法を行使した神童として名を馳せていた。魔法学院を若干十五歳にして卒業し、学業に対しても弛まぬ研鑽を続けて国民の支持を得、二十八歳にして賢王の位置に上り詰めた。

彼は絶世の美男子、というわけではなかったが、形の整つた目鼻立ちに薄紫色の髪、両耳には小さな鎖にぶら下がる様にして大きな輪の付いた銀のイヤリングを付けている。傍目には普通に格好良いのだが、当人は個性のない顔だと気にしていたようで、彼なりに個

性を出そうと差別化を図ったようだ。

Wウイヌの称号は、賢王のみが名乗れる字おたなであり、アグストウラ以外に名乗る者はいない。

そんな若き賢王が中央に座する前で、並んで席に付いているのは実質カタルスタを牛耳っている三人の大臣。無論、知識が豊富で頭の回転も早いのだが、昨今はそれがどうやら間違った方向へ使われている気がしないでもない。徒いたずらに会議を長引かせる事を人生の目的とし、その役職で何かをするわけではなく、その役職に就き続ける事を目的とする。そんな本末転倒さが、前にいる三人からひしひしと感じられるのだ。

「やれやれ、帝国の奴等、何と言ってきますやら」

「まあまあ、話を聞いてから対応を模索しても遅くはないかと」

「とりあえず、戦争に巻き込まれるのだけは避けたいものですね」

何とものんびりとした、井戸端会議よりも程度の低そうな話し合いに、賢王は日々、苛立ちを隠すのに苦慮していた。

大臣に対しては相当の給与を国庫で負担して渡しているが、きちんと貯蓄すればおそらくは三年在任するだけで一生慎ましかに生活出来るだけの金が入っているはずである。それにも関わらず、未だにその椅子に執着するのは、恒久的な贅沢を求めているからだろうか。それとも権力を持つ事そのものが彼等を満たしているのだろうか。

まともな仕事をせぬ以上、もし本当にそんな俗な理由で要職に居

座っているのならば、とつとと退陣して頂きたいという思いをアグストウラは禁じ得ないのである。

「何分、噂が噂であるし、少なくともテルネシア使節団の滞在中は街中に警戒網を敷いた方が良くと心得るが如何か」

お、まともな意見が出たぞ、とアグストウラは寄りかかっていた椅子から身を乗り出す。残念ながら大臣達から出た意見ではなかった。宮廷魔術師の中堅、マスクール、セントレイドだ。年は若いが髭を立派に蓄えているため、風格で言えば三人の大臣達にも劣らない。

本来、大臣は四人、宮廷魔術師は六人いるが、大臣は一人欠席、宮廷魔術師に至ってはこの場に二人しかいない。彼らは大臣達と違って人間的には好感の持てる奴が多いのだが、如何せん会議に対するこの出席率、もとい連帯感の無さはどうしたものか、とアグストウラは頭を抱えざるを得ない。若き新鋭と期待していたエステル「シャトル」に至っては、一時的に職務を放棄するという笑えない事態となっていた。

「警戒網とは大袈裟な。奴等が我々に向かって攻撃を仕掛けて来るとでも？」

大臣の中では最年少、しかし御年五十六のログステイオが鼻で笑う。陽光を眩く反射する頭に攻撃的な口吻が少々鼻に付く御仁だが、元宮廷魔術師でもあり、魔法の才は自他共に認められている。

「貴公等は興味すらなさそうだが、私はテルネシア側でもいくつか情報網を持っている。彼等の民に対する非道振りは頻繁に耳に入る

のでね。万全を期したいのだ」
セントレイドは気にせぬ口振りで言葉を続ける。

「……仮にそれで民達に危害を加えられたらどうするつもりかね？」
御年六十五にして四大臣の筆頭、ボルジオ「レドネー」が穏やかに言った。反射的に眉間が狭くなったのを感じる。先代賢王と其の座を争った男でもあり、魔法の実力はカタルスタ屈指と言えるだろう。豊かな白髪に白眉は物語に在るような神話の神々を思わせるが、内実には激情を忍ばせており、後ろ暗い噂も絶えぬ男だ。

「それは時と場合によりけり、という他ないだろう。貴兄ら程の方には言うまでもない事だと思っていたが」

幾分毒を籠めたセントレイドの物言いに、レドネーは眉を釣り上げる。どうやら、若い者に言われっ放しでは気が済まない気性らしい。

「勇敢な事だ。だがな、喻え一人でも殺せばテルネシア帝国との関係にヒビが入るのだぞ。たかが民が数人危害を加えられたからと言って全面戦争に発展しては笑えんだろう」

その言葉には、セントレイドより先にアグストウラが顔を険しくする。

「？たかが？と言ったか？ 大臣にあるまじき発言は慎んで貰いたいものだな」

レドネーは悪びれた様子も無くそっぽを向く。そんな態度を取れるのは、政治的には賢王が一大臣と同じ権限しか持っていない事わかっているからであろう。

「これはこれは、私とした事が失言でしたな。一人の命と国民全体の命を秤に掛けるまでもない、と言いたかったのです。少数を守るために大多数を淘汰する等と言うことは有ってはならない事ですからな。巻き込まれたら堪ったものではない」

「それは当事者でないからこそ言える台詞であろう。確率が何百万分の一であろうと、当たった本人にとっては一分の一であり、それが真実ではないか」

形ばかりのレドネーの弁明に対し、セントレイドの隣に座っていたヴィラーがさかさず応戦する。年齢がセントレイドよりやや上の彼は、かつら愛好家として名を馳せている。一週間も会わねば髪型が変わっているので面食らう事請け合いだ。ちなみに今日は灰色の長いカーリーヘアを被っている。

「それでしたら、その天文学的な確率に当たった運の悪さこそがその人の運命であり、寿命であると考えるべきですな。何も国家が動く必要はなからう」

ルーモスの言葉に、ヴィラーは怒りを露にする。

「何を戯けた事を……」

「儂には貴様の詭弁の方が鼻に衝くが。多数派の論理が今まで人類社会を構築してきた事をよもや否定する気か」

ヴィラーは平然と反論する。

「否定する気はないが肯定する気もない。少数派あつての多数派だ」

「言葉遊びをする気はない。どっちつかずとは尚更質が悪いな。優柔不断な者が宮廷魔術師の席に座するとは嘆かわしい」

ログステイオの嘲笑に、何を、とヴィラーが鋭く睨むと同時に、セントレイドが援護射撃をする。

「課題に対しての解決策を追い求める事もせずに諦めるは、それこ

そ知識人を嘯く者の寿命ではないか。早々に引退した方が宜しいのでは？」

セントレイドの辛辣な物言いにログステイオは鼻白む。

「貴様、儂を侮辱するつもりか」

「侮辱したのは貴方の方であり、私がいったのは純然たる？事実？だ。悲しい事だがな」

すかさず、ログステイオが手を翳しかけたのを見てアグストウラが咄嗟に制す。

「いい加減にしろ。我々のやる事に我が国の浮沈が懸かっているのを判っていて言っているのか」

ログステイオは挙げた手を下げぬままに賢王を一瞥する。まるでどちらを狙おうか迷っているかのようだ。

「賢王殿はまだお若いですからな。現実と言う物をまだ御存知でない」

薄ら笑いを伴ってレドネーがそう言ったのを聞き、アグストウラは視線を転じる。

「現実なら知っているともし。無能な大臣が踏ん返り返っている質の悪過ぎる現実をな」

それはどちらかといえば悪夢ではないか、というヴィラーの笑えぬ冗談が会議室の空気を一気に圧殺し、重苦しい沈黙に誘う。きな臭さを通り越して、最早一触即発の雰囲気である。

「……聞き捨てならんな。知識は時に敬意を以って遇されるべきものであるが、過剰の厚遇で若造が高飛車へと高じては聊か慙愧に堪えぬ」

「……其の言葉そっくりそのままお返ししよう。国の脳幹が萎びて
いては方向性を見失うからな」

アグストウラの反撃にレドネーは憎しみを込めて睨み返す。

「尻の青い若僧が何を偉そうなことをほざくか」

セントレイドが燻っている火に油を注ぐ。

「その若僧が付いている椅子に座れなかった面汚しは、どこのどなたかな」

レドネーの顔から表情の一切が消える。

三人の大臣達が一斉に立ち上がって手を翳すと同時に、二人の宮
廷魔術師、アグストウラも応じて構え

思い思いの方向に、一斉に無詠唱魔法を放つ。視界が眩い虹色に
染まり、美しき古城の一角からは白い帯状の射光が放たれ、次には
凄まじい爆炎が巻き起こり、入り組んだ廊下を悉く轟炎が舐め尽く
していった。

其の二十九 く 歷程と共に（表）く

884年3月4日

「 という夢だったのさ」

「 ……そ、そうか」

賢王アグストウラの告白に、マスクール「セントレイドは何とか笑おうとしたが表情筋を幾分引き攣らせるに留まった。これが現実とならば間違いなく、興国以来の黒歴史として年代史に深く刻まれ、後の世まで長々と語り継がれたであろう。

割りに齡の近いアグストウラとセントレイドは、城のテラスに設けられた喫茶コーナーに座り、こうして駄弁る機会が多い。今日の議題は？明日のテルネシア帝国との会見について？のはずだったが、少しばかり脱線した所でこういう話を聞かされる件くだりとなった。

テルネシア帝国の使者来訪を明日、3月5日に控えたカタルスタ王城では、普段のゆったりたりとぷりとした雰囲気をいくらか加速させている。いつしかの法王と皇帝の会見では法王の側近が殺されてしまう、というとんでもない事態に陥ったため、多分に気を揉んでいる者も少なくないようだ。

本心を言えば、たかが使者を相手に大袈裟な、と思わないでもないが、何にせよ警戒するに越したことはない、というのは同意見である。喻え税金の無駄遣いと言われようと、万全の準備を敷いて取り越し苦労を積み重ねるが、本来国家運営にとって理想的な形なの

だから。

「台詞の端々がやたらとリアルな夢に、真に現か^{まっ}と勘違いしてしまつてね。結局そこで目覚めてしまったのだが、幾分夢の続きが気になった所ではある。さては日頃の鬱屈が幻想と成つて昇華されたのだろうか。出来れば、レドリーをこの手で始末する所まで見たかったのだが」

アグストウラは頭を掻きながら苦笑いを浮かべた。

昨日の、一見して穏やかに進んでいた会議の方向を一步間違えればそんな事態に陥っていたのか、とセントレイドにしてみれば冷水を浴びせられたような心地である。殊更、終止符を打つたのが自分だと聞かされては複雑な心境にもなるというものだろう。

昨晚執り行われた会議の内容が頭に浮かび、警備兵を配置する提案が妥協案となつて可決された事を思い出す。二言三言夢の内容と食い違つが、目の前にいるアグストウラが思い切つてあの様な事を言つてみれば、彼の夢のような血肉湧き躍る展開になつたのだろうか。

夢で見る内容は、潜在的に望んでいる事が現れると言つが、果たして目の前の、一見して気の弱そうな彼にあのような願望があるのか、と腕を組んで考えてみる。

沈黙考するまでもなく、心当たりが山のように出てきたため、セントレイドは口に現れる苦い笑みを隠せなかった。

「一応、今回の警備については配下の者を何人か君のフォローに回すつもりだから宜しく頼むよ。ただ、なるべく穩便に事を運んでくれると嬉しいけどね」

口と鼻をカップに隠しながら目線だけを向けたアグストウラに対して、セントレイドは深く頷く。

「承知している。徒に刺激するつもりは毛頭ない」

セントレイドの目から見ても、現任の大臣達は揃いも揃って揉め事をひたすらに嫌う。今の己の地位さえ守れば、後はどうなろうと構わないと思っっているようだった。

それもそうであろう。現状でも彼等の地位に与えられる報酬は生半かなものではない。人よりも過分に豊かな暮らしを謳歌しているのだ。

どうせ数十年もすれば自分達は既に世にいないのだから、厄介事は子の世代に押し付けてしまえば良い、と考えていそうな節すらある。多くの者には子や孫が当然いるはずなのだが、彼等には十分に過ぎる財産を残せるからそれで問題ない、と考えているのだろう。豊富な金は、使い方さえ誤らなければ危険から遠ざかるのに有効な手段となる。

周囲に崇められる以外の点において、賢王たる立場は所謂王のそれと相当に異なっている。カタルスタでは王と一大臣の権限が同じなのだ。民主主義をより反映しやすくする為に、と約二百年程前に取り決められたのだが、どのような制度に付けても功と罪は切り離せぬ物である。

今は大臣のうち三人が良く言えば仲良し、悪く言えば談合の関係にあり、どうしても彼ら主導で国の運営が行われている、といった有様なのだ。

齢が多分に離れているせいもあるのだろうが、大臣達と賢王は如何にも水が合わない。殊更、四大臣の筆頭ボルジオ・レドネーには

セントレイドも一言と言わず多々申したい事はあった。

彼は多くの官僚となあなあの関係にあるため、裏工作を以って大勢を作ることを半ば慣習的に行う。その関係を維持するには膨大な資金が必要になるので、彼が大臣の椅子に座り続けることと強^{あなが}ち無関係ではないと思われる。

15年前、アグストウラの前の賢王を決める際に立候補したレドネーは、国民選挙にてロディエールという元宮廷魔術師、つまりは前賢王に敗れた。本当はもう一人大本命と言われた者がいたのだが、彼はとある事件を起こして国から去ることになった。その件については嚴重な緘口令が敷かれており、カタルスタでも知っている者は十に満たない。

それはそれとして、夢敗れた彼は虎視眈々と荣誉ある賢王の椅子を見つめ続け、二年前にロディエールが賢王の座を退いてから嬉々として椅子取りゲームに参加した。それを今度は若き鬼才、アグストウラにまんまと持っていかれた、というわけだ。その心情を察すれば幾らか気の毒に思えそうなものだが、今のところそう思えていないのは、多分にレドネー本人の人徳の有無による処が大きいだろう。

今のところセントレイドは権力に対しての執着はなく、自分はあるるまい、と硬く誓ってはいるものの、ならないという絶対の保証はない。三十を半ばにしても十年後、二十年後の己を明確に想像するのは、中々に至難の業なのである。

「確かに、明日の会議如何^{いかん}によつては、歴史が覆る可能性はあるか」
目を瞑り紅茶を啜るセントレイドに、アグストウラは姿勢を正す。
「法は時として破らなければならぬ事もある。勿論、理不尽な要求は突つ撥ねるつもりさ」

カタルスタ王国、旧カナン王国の歴史は現テルネシア帝国よりも古く、温故知新をモットーとして魔法技術を初めとする文化レベルを現在に至るまで底上げしてきた。その過程では当然のように紆余曲折を伴ったが、殊更、体制を初期より大幅に見直させた出来事がある。魔道士狩りとジキールの降臨だ。

現存する記録によれば魔道士狩りの際、既に幾多の魔法使い達の受け皿となっていたカナン王国は、周辺各国に危険視され、多くの国による諜報員達に入り込まれ、監視されるようになった。逆に言う、その者達に魔法技術を持ち帰られ、未熟な知識で使用される危険度も大幅に増したのである。

そして、イアニス暦271年に起きたジキールの降臨によりその危惧は現実となった。カナン王国が召喚魔法の実験に成功して何年もしないうちに、テルネシア帝国の諜報員がその情報を盗み出し、ジキールに対抗すべく独自に理論を解析してクルートで大規模な召喚実験を行った。その結果、使用者と共に周辺に住んでいた多くの一般人が大型魔方陣に吸い込まれて消失する、という大惨事が引き起こされたのだ。

この事件は当時のカナン王国上層部では相当に問題視され、結果として技術の流出を防ぐ為には、技量と心根に信頼の置ける、選ばれた者にしか危険度の多い魔法技術は学ばせない、という研究者達にとって不本意な方策を採らざるを得なかった。これにより、日進月歩を続けてきた魔法技術の大部分は秘匿ひかくとされ、他国に技術情報を盗まれぬように、水面下で細々と研究を重ねてきた、という顛末に至る。

その後は古き良き国を維持するべく、外部の脅威を増やさぬよう、先代達はカタルスタの魔法様式を盲信的に外へ漏らさぬよう努めてきた。

心無き者の手に有り余る力が渡れば、多大な悲劇を生みだす。そんな当たり前の道義を、耳にタコが出来る程に言われたものだが、真に危惧すべきは過分な力が心有る者の手に渡った時、そのタガが誰とも知れず外れてしまった時なのだ、と我々は既に知っている。

心無き者の権勢は、一時的には激しい光を放つが、いずれは周りの者達に「次は私の番ではないか」と疑心を抱かれて勝手に淘汰されてしまう。周囲に悪臭を撒き散らしたままに暴政を働く者は、その限界を自分で設定してしまっているのだ。腐臭を香水で隠す者の方がそら恐ろしい。

ブライジウスは前者の典型である。体内に侵入してきた身の程知らずの異物が、自浄作用によってぐずぐずに溶かされてしまうのを待っている、そんな状態だ。あれにもしも、アレルギー程の才があったら、この世界にどれほどの被害をもたらしたのか想像もつかない。

揺らがぬ信念を以って、永く小さく、そしてほの昏く燃え続ける火種の方が余程質たちが悪いのだ。真の悪党は、誰にも気づかれる事無く堂々と、さも善行を振る舞うかのように悪事を働くもの。そしてそれは大抵の場合、誰の目にも触れる事は無く、気付いた時には手のつけようがない業火となっている。

「もし、私の一言で戦争という事になったら、やっぱり皆怒るかな……？」

俯き気味にそう訊くアグストウラに、現実を意識を戻したセントレイドは快活に笑い飛ばす。

「ははは、その時は腹を括るさ。責任を一人に押し付けた結果がそ

れなら、お前を選んだ国民全体の責任だ。日常生活をしている最中にお前の事を気遣っている国民が一人もいないように、お前も任務の領域外でそんな事を気遣う必要はない」

元氣付けた心積もりであったが、アグストウラの眉間に皺が寄つたのを見ると、彼は幾分捻くれた解釈をしたようだ。

「えええ？ 私を気遣っている国民って一人もいないのかい？」

「ああ、いや、多分いるんじゃないか。多分、な」

心の中で舌を出しつつ、セントレイドは取り繕った。

彼には臆病さを隠さぬという素晴らしき長所があるから、少なくともレドネーよりはずっと王に向いている。今回の会談も危なげなく切り抜けられるだろう。

（我々が真に警戒するべきはテルネシア帝国が滅ぶその時こそ、だ）

賢王に疑惑の眼差しを向けられながら、セントレイドは遙か彼方を遠い目で見据えていた。

其の三十　　同盟破棄（表）

884年　3月5日

カタルスタ王城の最奥、赤、青、黄といった色鮮やかなステンドグラスで彩られている天蓋の底、謁見の間にセントレイドが赴くと、そこには錚々たる顔触れが揃っていた。賢王アグストウラを筆頭に、三馬……、もとい三大臣のレドネー、ルーモス、ログステイオ、そして宮廷魔術師の四人。

（……四人？）

セントレイドの思考が一瞬空白を生む。自分はちゃんと数えているな、と再確認し、二、三、四、……。まさかと思い、周りを見遣ればエステル「シャトル」の姿がどこにもない。

流石にこの会見には出席するだろう、という己の目論見が見事に外れ、セントレイドは一瞬天を仰ぎ見た。傲然と戦乱の先を見据えているつもりが、ただ一人の人間の行動すら読めていなかったとは。

そこまで考えたところで、再び視線を定位置に戻す。ヴィラー、レクスト、シャブラニール。あれ、あと一人は一体どこに

「何を考えている」

気配無き所から突如声を掛けられ、セントレイドは声の方角を向いたが誰もいない。

「ここだ、ここ」

視線を足元よりやや上にして、ようやく彼女を発見する。カタルスタでは殆ど見かけぬライトブルーのお下げ髪をした可愛らしいエ

ルフの少女がそこにちょこんと立っていた。セントレイドは膝をつき、目線を真横になるように合わせる。

「失礼致しました、ミズ・ミュール。本日は無理を聞いて頂き、ありがとうございます」

「よい」

ミュールは短くそう言って手を翳す。

誰の目から見ても尊大な態度を取っている、薄黄色のロングワンピースに身を包んだ少女は、しかして宮廷魔術師の筆頭であり、つまりところ列記としたセントレイドの上司である。見た目は十前後の子供であるが、彼女はセントレイドが子供の時から変わらぬ姿であったので、少なくともセントレイドよりは年上のはずだ。魔法都市であるが故にカタルスタには伝説の類が多いが、取り分け彼女の正体に関しては憶測と噂とが後を絶たない。

己の結えた髪を細い指先でくるくると玩あそびながら、ミュールは疑問を呈する。

「ところで、シャトルーはどうしたのだ」

先程まで自分が思い囚こわれていた固有名詞を聞き、セントレイドの態度がやや弱まった。

「は……文にて連絡はしたのですが、どうやらすっぱかされたよう
で」

ミュールは一瞬呆れたように口を小さく開け、そして嚙む。

「ふん……お主も何かと気苦労が絶えぬなあ」

「恐縮でございます」

畏まったセントレイドに、ミュールはじと目を返す。冷やかにして燃えるような緋色の瞳を向けられ、彼は困惑の表情に陥る。

「……空気を読め、馬鹿者。ただの皮肉だ」

「……は」

わからないのか、とミュールが若干苛立たしげに首を振る。

「筆頭の我に直談判しておいて、末端のあ奴には文のみで済ます。お主の行動を省みれば我はあ奴より信用がない。そういう風に取りれるのだが如何いかん？」

何かを言おうとしたが反論の余地が全くない。彼女の言うことは真に正論であり、目上の彼女を呼び付ける以上はエステル「シャトル」に対しても同じように直接赴くべきであったのだ。

「も、申し訳ありません。正直を申せば、彼女も今回ばかりは来るであろうと」

どもるセントレイドを一瞥してミュールは細い腕を組み、面白くなさそうにそっぽを向く。

「胡散臭くも淡い期待を無意識に確率に加えたわけ、か。是非もないな。曖昧な予測のみで行動してはそういううち手痛いっぺ返しを喰う事になるぞ」

「……か、返す言葉もございません」

セントレイドは、背の低い彼女の顔よりも下になる位に深々と頭を垂れる。

駄目だ、どうしてもこの少女、かどうかわからぬ女を前にすると委縮してしまう。いつの間にか会話の主導権を握られて防戦一方になってしまふのだ。天敵とはこういうものだろうか。

顔を伏せているセントレイドを、もう見飽きたわ、と言わんばかりに、ミュールはふいと宙そらを見遣る。

「まあ良い。この上は帝国の使者とやらが不愉快な連中でない事を祈るばかりだ」

「と言いますのは？」

ミユールは宙から目を放さず、薄ら笑いを浮かべる。

「決まっております。どこからともなく突然隕石が降って来てこの城を直撃するやも知れぬからだ。この世は真まこと、不条理に満ちておるから」

(グ……)

背筋が凍り付き、己の胸元にささくれた空気が停滞して思わず咳き込む。

「安心せい、冗談半分だ」

笑ってそういう彼女にセントレイドは、それを言うなら半分冗談では、と返すのを辛うじて思い留まった。突っ込まれる隙をわざと作って煙に巻くのが彼女お気に入りの戯れである事を知っているからだ。

十五分後、謁見の間に通じる扉が開き、入口に注目していた一同は、次には思い思いの方角に遠い眼を送る。まるで今すぐにも戦場に出向くかのように、テルネシア帝国の使者が剣に鎧に盾兜、殆ど肌を晒さぬ完全武装した部下をゾロゾロと伴って謁見の間に入ってくる。

ガシャン、ガシャンと黒光りする鎧の連結部がぶつかり合う音に混じって「やっぱ何かしら降ってきそうだな」という誰かの呟く声を、セントレイドは敢えて聞かなかった事にする。

どちらにしてもこの井出達である。相手に友好の意思がない事が

わかつただけでも収穫であろう。周囲の面々を見渡しても、あまり愉しげな顔をしている者はいない。賢王アグストウラだけは一応澄ました外面をしているが、内面では先頃の夢にも勝る新たな黒歴史を作り上げているのかもしれない。

使者達が階段の下にて足を止めるや否や、王座に座っていたアグストウラがゆっくりと立ち上がり、彼らを労う言葉を送る。

「遠路遙々ようこそ。過ごし易いかはわかりませぬが、遠慮なくお寛ぎ下さい」

先頭にいた軽薄そうなひよろい男が二、三步前に進み出る。どうやら彼が使者達の代表なのだろう。ヘアオイルを塗りすぎてテカった茶髪をキザに掻き上げるその男にミュールの口元が一瞬ひくついた。間違っても笑いそうになつたわけでないのはわかる。

「私は第九軍大隊長ローラント＝ラフォーム准将が副官。ダメダ＝メツサーである。今回は我が主君ローラント＝ラフォーム准将の代理として、新生テルネシア帝国皇帝ブラージュウス＝テレジア様のお言葉を届けに参つた次第である」

使者の名乗りを聞いて不覚にも吹き出す者が一人、いや二人。

(……ルーモスとヴィラー、か)

普段はあれほど険悪な二人なのに、笑いのツボが同じとはこれ如何に、とセントレイドは首を傾げた。いがみ合っている者同士が同じ価値観を共有しているとは、人間とはかくも不可解な生き物である。

メッサーは懐から巻物を取り出し、紐を解いて両端を持ってから文を広げた。

「では読み上げるである。貴国の益々の繁栄、同盟国の盟主として真に喜ばしく思う。誠に遺憾ながら我が国は戦乱の渦中にあり、我が国だけに留まらず貴国に対しても害を及ぼし得る輩が跋扈^{はつこ}している。この上は貴国との同盟を一旦破棄させて頂くと同時に不可侵条約を結び、こちら側の治安を回復し得るまで、若しくは戦争が終わるまで両国間の往来を一切禁じる事を願う次第である」

使者が言葉を言い終えるや否や、辺りがざわつき始める。

(往來の禁止……)

つまりは国境を封鎖するという意味だろう。彼らの意図を探る為に、俄かに頭が回転し始める。アグストウラはざわつきが治まるのを暫し待つてからゆっくりと言葉を返す。

「……害を及ぼし得る輩とは、具体的にはどのような？」

「我が国と貴国との同盟を快く思っていない連中がいる、ということである。ブラージウス様は、或いはその不遜な者達が両国に仲違いをさせようと画策しているとお考えである」

同盟を、というよりは帝国を、であろう。もともと、実際にそう考える者が出てきてもおかしくない状況にはある。カタルスタを帝国と敵対させれば包囲網が完成する。帝国は兵力の分散を余儀なくされ、不利だった反帝国軍が持ち直す可能性は高い。

ふいにレドネーは歪んだ笑みを浮かべる。

「……なるほど。つまり戦争が終われば国交を回復すると、そういう事か？」

メッサーは少々間をおいてからレドネーに視線を送る。

「　　そういう事になると思うのである」

「その約束が破られた時は？」

アグストウラが涼しげな顔をしながら訊ね、今度は護衛の帝国兵達が微かに動揺する。訊きにくいが或いは良い質問かも知れぬ。どんな約束事にしても罰則は明確にしておくべきだ。

「それは、　　どちらが破る事を想定しているのであるか？」

質問を質問で返すメッサーの細くなつたその目を、アグストウラは鋭く見咎める。彼の方は自分で言つて気付いていないのかもしれないが、その言い方は両国を対等に見ていない言い方だ。？どちらが？と訊いている時点で、心中で差を付けているのが見え見えなのである。アグストウラもそれをわかっているのだろう、次の言は二、三步踏み込んだものになつた。

「どちらも、に決まっている。どちらかが約を違えた場合は相応の報復を、という趣旨で宜しいのかと訊いているのだが」

報復という言葉に、帝国兵達があからさまに反応した。空気が緊張し始めるのを見て、周りにいたカタルスタの衛兵達も姿勢を正す。勿論、目の前の兵士達が軽拳妄動を起こさぬとも限らぬからである。もつとも、それをすればセントレイドの隣にいる少女が何かを雨のように降らすかもしれないが。

「随分と威勢が良いであるな。カタルスタとはもう少しぬるま湯に浸っている国だと聞いていたのであるが」

メッサーの皮肉を込めた言葉を、アグストウラは微笑みを浮かべながら軽くいなす。

「私も一応は国の代表なのでね。必要以上に舐められては困るのだ。理解してくれる事を祈っているよ」

メッサーは暫くどう言おうかと迷っていたようだったが、やっと口を開く。

「それはそれとして、返答はどうかであるか？」

「受理しよう。国境及び港は近日中に閉鎖し、両国間の往来を禁ずる。ブラージウス皇帝にはそう伝えられよ」

その返答に対する周りの者達の反応は顕著であったが、体裁を踏まえている以上この場で賢王に意見を言う者はいない。この時こそは、紛れもなく賢王は国の最高権力者なのである。

「それが賢明である。流石は賢王と言った所であるな」

そう言いながらも敬意の欠片も見られない口吻くちふんに、アグストウラは言葉を返す。

「お褒めの言葉ありがたく受け取っておく。ああ、最後に一つだけ訊いておきたい」

「何であるか？」

その質問を最後にして、メッサーと帝国兵達は退出していき、三十分程の会見は終わりを告げた。

招かざる客人が帰った後、珍しく沈黙を守っていたレドネーがやっと口を開く。

「……どういづつもりだ？」

どうしてあっさりと帝国の申し出を受けたのか、という意味であるろうと即座に察したアグストウラは淡々と答える。

「問題ないだろう。君等三人とてあの提案は受けたのではないか？」

心を見透かされ、三人の大臣は幾分バツが悪くなったようだ。平和を愛する彼等としては、向こうから遠ざかりたいと言ってくれるのだから断る理由はないといったところか。

「かも知れぬ。しかし、安請け合いをしたのは聊か軽率しんせつだったので
は？」

今度はルーモスが幾分遠慮を交えて訊ねる。

「別に安請け合いはしていない。受けても良い、と判断したのは連中の魂胆があまりに見え見えだったからさ」

ルーモスは眉を上げる。

「魂胆？ 奴等の考えなど、せいぜいイアニス教徒達の逃げ道を無くしてやろうとか、その程度ではないですかな」

「それもあるだろうね。ただ、一言二言余計だった。まず、どちらが破る事を想定しているのか、と彼は問うた。捻くれた捉え方だが、彼らの言葉は初めから向こうに破る意図があるようにも思える」

「なるほど。……それで、国境を封鎖させる意図は？」

無口な宮廷魔術師、レクストの問いにアグストウラは三通りの考えを述べる。

一つ目は、ルーモスの指摘した通り、帝国軍に所属しているイアニス教徒の逃げ道をなくすと同時に、大規模な反乱が行われる可能性を著しく制限する事。これはベールが滅びた時点でイアニス教徒

の結束が緩くなるだろうから、その時点で封鎖する必要は無くなる。

二つ目は、帝国にカタルスタへの敵意があり、戦備を進めているのを悟られぬようこちらからの往来を禁じ、東諸国とベールが片付いてから敵をカタルスタ一本に絞り、名実ともに大陸統一を目指す事。友好を保つ気ならば同盟を破棄する理由はないし、如何にも派手好きのブラーヂウスがやりそうな事でもある。

三つめは、国境を封鎖させる事で王都にあるカタルスタの兵力を少しでも分散させる。同時に、帝国兵が出て行ってから封鎖させる事によって我々の油断を誘い、潜伏している兵達がそれに乗じて王都での工作活動を行う事。これが相手が不可侵条約を破る事を前提にした場合の案件であり、或いはその三つ全ての意図があるかも知れぬ、というのがアグストウラの意見だった。

「一、二については普通にありそうですね。ただ、三つめに関しては……少々考え過ぎの様な気がします」

ヴィラーは釈然とせぬといった面持ちで首を捻る。

「有り得ぬ話でもなからう。ただ、三つめが事実だとすれば少々面倒だが」

ミュールがそう言うのを聞き、ログステイオが問い返す。

「何故だ？」

「決まっておろう。それが狙いだしたらもう既にカタルスタに潜伏されている可能性が高い。計画成功の是非に関わらず、帝国軍が確実にやったという証拠が見つからなければ、不可侵である事を理由に言い掛かりを付けるな、と切り返されるだろう。つまり、不可侵条約は保険のつもりかも知れぬ」

最後の質問、アグストウラはこう訊いた。？国境を封鎖するタイミングはいつにすれば宜しいか？と。メッサーは淀みなくこう答えた。？我々が出て行ったのを最後に、直ぐ閉鎖して頂ければ一番確実である？と。もし侵入者を送り込むつもりだとして、まだ入っていないのなら直ぐに閉鎖しろとは言わないだろう、というわけである。

更に、とミュールは話を続ける。帝国には、もつと言つとブラージウスの傍にはカタルスタの内情を良く知る協力者がいる可能性が高い。以前からカタルスタの者が帝国に協力しているという噂は出ていたし、エアリアの攻城戦で禁忌魔法が使われていたという目撃証言もある。とそこまで言つたところで言葉を切る。

「……ああ、その話か。ディ・ケウス冥騎士を見た者がいるとは耳にしていたが……なるほど、合成召喚の禁忌魔法が使われたという事は、それなりの数が加わっていると見ても良いのかも知れんな」
ヴィラーは合点がいった、という風に頷く。

ディ・ケウス冥騎士とは、大勢の魔法使いの魔力を媒介にして巨大な骸骨を召喚する禁忌魔法である。その破壊力は絶大だが、何分攻撃範囲が大き過ぎる故に大量殺戮を容易に行えるとして禁忌魔法に指定されている。

尚、禁忌魔法とは、原則として攻撃範囲、破壊力が大きすぎる物、或いは扱い次第で非道さ、残虐さを連想させる物に指定されている。「何にせよ、禁忌魔法を戦場で行使する様な不届き者がいるのはほぼ確実とみて良いだろう。そのような思考の者なら更なる力を欲し

ても不思議ではない。魔法図書館と王城に巡回する警備兵を増やすべきだと考えるが意義のある者は？」

アグストウラの隼の如き目が二回、三回と滑空し、その場にいる者達に飛び回る。その提案に誰も異議を挟む者がないのを確認してからアグストウラはゆっくりと目を閉じる。もっとも、この状況で異を唱えるような愚か者はいないだろうが。

更なる力となれば、禁忌を初めとする強力な魔法書の類か、或いは魔石や呪布等の魔法道具の制作方法だろうが、帝国軍全体を強化するならば後者を狙う可能性が断然高い。

禁忌魔法の行使に関しては合成魔法の類は別として、使い手に類稀なる才能と長期間の修練を要する為、即戦力として当てにするには使い勝手が悪過ぎる。また、万一そのような力を得た者が気紛れを起こし、ブラージウスに叛意を抱かぬとも限らぬ。その意味では、慎重で疑り深いブラージウスが部下達にむやみやたらと過大な力を持たせる可能性は低いのでは、と言う意見が大半を占めた。

「では、そのように対応する事にしよう。警備兵の配置は立候補したヴィラーとシャブラニールに任じる。他の仕事に関しては他の者に回しておくから責任を以って当たって欲しい」

二人の宮廷魔術師が頷いた所で話し合いが終わり、その場でアグストウラが解散を宣言すると、大臣と宮廷魔術師達は方々に散って行った。

残された二人、アグストウラとミュールは思慮深げな顔を見合わせる。傍目には親子のようにも見えるが、事情を知らぬものであれ

ばよもや年齢差が逆転しているとは思わぬだろう。

「これで、一先ずは大丈夫ですかね」

「おそらく。但し……此処にいた者達がかような陰謀に関わっていないければの話だが、な」

ミュールの、彼女にしては低い呟きがアグストウラの二の句を阻害する煙となつて辺りに立ち込める。二人は、上層部に内通者がいる可能性が決して低くない事を理解していたのである。

其の三十一　　く捲土重来（表）く

884年3月5日、新生テルネシア帝国は魔道王国カタルスタとの同盟を双方の合意によつて破棄し、代わりに不可侵条約を締結する。それによつて、テルネシア側とカタルスタ側の往来は一切禁止され、カタルスタの手によつて国境を封鎖される事が各地で大々的に報じられた。

未だ帝国軍内で葛藤していたイアニス教徒達は亡命という選択肢を奪われ、現状を省みてはベールに弓を引く事を決断せざるを得なかった。エル・クレスとの戦いでベール軍が帝国軍に大敗した事によつて、最早ベールに付いても先はない、と判断したのである。

保身に走つたと言われてはそれまでなのだが、？勝ち馬乗り？という揶揄を彼らに浴びせるには少々酷な状況であつたかもしれない。己と家族達の安否と宗教への信仰心とを天秤にかけては、自分が同じ立場になれば大半の者が前者を取るであろう事を容易に想像できただためだ。

当のグルツセル本人は？家族を持つ者の心情を慮ればその判断は真に正しい？と彼等を後押しする様な発言をした。敵対した信者に対しても寛容であつた彼に、ベール国内では？生まれ出た世が平時だつたならば真の名君と言われたらう？と暗喩とも付かぬ事を囁かれていた有様だつた。ブラージウスの謀略は確実に実を結び、反帝国勢力を実質的にも精神的にも、崖っぷちへと追い立てていたのである。

884年 3月13日

マリスノリスの攻略に際して兵力を温存出来た帝国軍は、時を置かずして侵攻の準備を着々と進めていた。次に攻略するべきはシャントール、ミード、そしてグリユーンであったが、ブラームスとベントニックスの意見はシャントールかグリユーンかで真つ二つに分かれていた。

東諸国の求心勢力となつているシャントールを攻めれば、同盟を結んでいるミード、グリトリー辺りから相当数の援軍が来るのは必至であり、おそらくは四万近くの軍になる。しかも、敵方には東西戦争で活躍していた将校も多い。一国ずつを相手にしていた今までのようには行かないのは明々白々であった。

「何を馬鹿な事をつ。シャントールさえ抑えてしまえば最早東国の平定はなつたも同然、十万の兵を持つてすればあつさりと倒せるわつ。グリユーン等と、これ以上兵站を伸ばしては反つて危険ではないか。同盟を結んでいるアテライデにグリトリーを威嚇させていれば一気に打ち破れるだろう」

ブラームスが語気を荒げれば、ベントニックスは齒切れの悪い言葉を返す。マリスノリス城の会議室で張り合う二将の横顔を、ブラージュスは頼杖を付きながら眺めていた。犬猿の仲という言葉がこれほどに似合う二人もそうはいるまい。

「……んー、貴公は外堀を埋める、という言葉を知らぬのか。……んー、グリユーンさえ抑えてしまえば、ベール教国、東諸国を完全

に分断し、同時に双方の動きを封じ込める事が出来るであろう。…
…あー、それにより、エル・クレスの負担も減らせるであろう。…
…あーまあ、自分の勲功だけしか考えていないお主には荒唐無稽に
思えるのかも知れんが」

ブラージウスから見れば、二将の意見はどちらも理があり、どちら
も穴がある。選択肢としてはシャンテールかグリユーンかを攻め
ねばならぬのは確かであり、結局のところ最高責任者である己の裁
量に任されるのだ、という事もわかっている。

いつも意見を取り纏めてくれるガツシュ「エウゲンや彼の副官セ
ガール、或いはジルバート」ミレンがいないところも無駄に時間が
過ぎるのだな、とブラージウスはやや渋い顔をしながら一旦流れを
切る。

「意見も出尽くしたし、今日のところはこれくらいで良い。攻め入
る準備が整うまでには後二ヶ月近くはかかるう。それまでに状況が
変わらぬとも限らぬ。今日は来客があるのでな、余は退席させて貰
うぞ」

二将はブラージウスの顔を窺い、納得したように卑屈な笑みを浮
かべ、再びお互いに視線を転じて火花を散らしていた。勝手にやつ
ている、とばかりにさっさと会議室を出ると、ブラージウスは三重
の頂トリニテの護衛三名を伴って客間へと向かった。

ブラージウスが六十畳ほどの大広間に入ると、幾多の強面こわもての護衛
達を引き連れている老人が最奥の椅子に座っていた。先帝アルイー
ルの叔父にしてアテライデ経済流通開発推進機構、通称「経通の十
一人理事が一人、バイロン」テレジアである。身長はやや低めで瘦
せぎす、日に焼けた肉体なのは陽光照りつける港町に住んでいるせ

いだろう。中途半端に前頭部のみが禿げあがっているが、齢75歳にして未だ足腰が真つ直ぐなのは、或いは血の成せる業であるうか。

彼は東西戦争の折、アンドレイ側に味方していたアテライデを独立させてブラージウスに肩入れした人物であり、その後は金銭面に置いても何かと便宜を計らって貰っている。好々爺に見えて相当な腹黒であり、誰彼構わず利用して利益を追求するいけ好かない人物だ。勿論、ブラージウスもその例に漏れることはないのだろうが、それはお互い様なので割り切っている。ブラージウスとて、目の前の老人は金庫か財布くらいにしか思っていない。お互いに利用価値がある人物だからこそ手を組んでいるのであり、それでいて根深い損得勘定が先行する以上はお互いに親愛の情など湧くはずもない。喩え互いが血族同士であろうとも、だ。

「久し振りであるな、大伯父上」

ブラージウスは形式的な挨拶をする。

「ひよっひよ、壮健そうじゃなブラームス。何じゃ、今を時

めく人気者のお主がそんな少ない護衛でうるついでには危険じゃろう」

多少の皮肉を交えつつ、バイロンは辺りに目を配っている。ブラージウスの護衛三名に対して、バイロンは十五名の護衛を引き連れている。その様子を見てブラージウスは、皮肉のお返しとばかりに口を開く。

「何なら本当に余を殺すことができるか、今試してみても良いぞ。もつともその場合、そちらの命の保証は出来かねるが」

にび色に光る目を細めるブラージウスの間延びしたその言葉は、バイロンの耳には十分脅しに聞こえたらしい。バイロンは引き攣った笑みを浮かべながら、そんな気は皆無である、と言葉を返す。そ

れが本心であろうと無かろうと、相手の庭で事を起こす程、目の前の狸爺が愚鈍でない事をブラージウスも理解している。

「まあよい。それで、僕に一体何のようじゃな？」

鼻の下で横に跳ねている白髭を摘みながらバイロンが問う。

「早速だが、軍用費がいくら足りなくなりそうなのでな。少し都合を付けて貰いたい。そうさな、1000億ギラで構わない」

会って早々の大金の無心にバイロンは目を丸くする。

「1000億ギラじゃとっ？　いくら僕でもそんな大金をポンと出す事はできんぞ」

「経通の連中から掻き集めれば良いだろう。それならどうとでもなるはずだ」

経通の十一人理事は、アテライデにおいて多大な貢献、及び投資をしている有力者、企業主等が名を連ねている。その潤沢な資金たるや大貴族をも上回るだろう。

「いや、しかしじゃな……」

「今まで余がそちら側に何かを要求した事はそうなかったはずだ。兵を出さなくて良いと言っているのだからそれくらいは援助して頂きたいのだが？」

ごり押しに近いブラージウスにたじたとったバイロンは、自身を落ち着かせるように懐からゆっくりとハンカチを取り出して額の汗を拭う。

アテライデは一応テルネシア帝国の同盟国という位置付けではあるが国軍が存在するわけではなく、国の有力者達が自警団をそれぞれ

れに持ち、そこで傭兵達を雇って治安維持に当たっているのが現状である。勿論腕の立つ者を雇うにはそれなりに金もかかるのだが、治安がそれで安定している以上は軍隊を配備して毎年大量の軍事費用を失うよりずっと安上がりになる。対外的に脅威が認められないならば最低限、示威出来る程度の軍を持つていけば事欠かないのだ。

実際、戦争を継続するには莫大な金がかかる。兵士達や馬の食料費、薬を含む装備費、勿論人件費、滞在費に移動費用も。勿論味方に犠牲が出れば遺族補償もしなければならぬし、防衛側であれば破壊された建物の修繕費等も考えなければならぬ。十万もの大軍を一ヶ月運用するともなれば喩え戦わずとも莫大な金が吹き飛ぶのである。

所詮、軍隊は戦わなければ国のお荷物であり、不採算部門であるが故に、平和な世の中においては国民に多くの働き場を提供する以上の意義を見出せない。強大な軍を保持する国はその維持費用も嵩むため、戦争をどうにか起こして利益を得ねば大赤字になる。そのため、戦争をどうにか起こして利益を得ねば大赤字になる。脆弱な兵力しか持たぬ国に変わって代行戦争を引き受け、その見返りとして軍の維持費を要求するのは典型的な一例というわけだ。もっとも、東諸国とアテライデの関係がそれほど険悪かと言われれば疑問が残る所であったのだが。

バイロンは暫く俯き気味に考え込んでいたが、ややあつて顔を上げる。

「……わかった、何とかしてみよう。その代わりと言ってはなんじやが、ちよつと個人的に頼み事があるのじゃが」

「個人的に？ 何だ」

「実は、最近儂の命が何者かに狙われておつてな。儂の事を快く思わぬどいつかじゃろうが、中々尻尾を掴ませんのだ。仕方なく護衛を雇つてはいるものの、こつも敵ついで連中をゾロゾロと引き連れていては日常生活にも何かと支障をきたす。少数で良い、腕の立つ者を護衛として送つてくれぬか」

バイロンも裏では相当汚い仕事に手を染めてきた人物である。暗殺、地上げ、恐喝、要人誘拐、人身売買等。犯歴を並び立て、テルネシア帝国の法に照らし合わせれば三十回は死刑に処させるだろう。恨みを持つ者達など星の数ほどいそつだ、とほくそ笑みながらもブラージウスは素早く思考を巡らす。

腕の立つ者、か。三重の頂なら問題はないだろう。今、この男に万が一の事があつて資金を当てに出来なくなつては困る。

「わかつた。少数で良ければ取り計らおう」

「おお、すまぬな。では、近いうちに話を付けて来るからの」

話の付いたバイロンとその護衛達を見送るべく、ブラージウス達は連れ立って廊下に出る。避けて通れぬ戦いを前に資金の都合がついたブラージウスは、いよいよ東諸国との世紀の一戦へと歩を進めようとしていたのである。

(二)〜(三)幕間　〜天よりの襲来(表)〜

884年4月28日。ブラージウスは帝国軍九万五千を率いてマリスノリスを出立し、ついにシャンテールに侵攻を開始する。

シャンテールのヨーゼフⅡヘンケルは出来うる限り領民たちをミードやグリトリーに避難させると共に、ミード、グリトリーから援軍を募った。グリトリーの領主、若干十五歳のイヴァールⅡテレジアはこの戦いに背水の陣の覚悟で臨まんと、自らほぼ全兵と全将校を率いて参軍する。ミードでは若者の志願兵が殺到し、当初の予想を上回る八千の義勇兵が援軍となってシャンテールに駆け付ける。

この時点で帝国の同盟国であったアテライデが動けば勝負はあっさり決しただろうが、バイロンⅡテレジアによって帝国の戦費が徴収された事に対し、経通の十一人理事の多くが反発したため、がら空きになった東国への派兵はやはり見送られていた。

884年5月1日

ブラージウスのシャンテール出兵から三日が経過し、マリスノリス領に残っていた帝国兵達は気が緩みつぱなしであった。

念のためにと五千の兵を残したものの、周りには攻めてきそうな反抗勢力も見当たらない。唯一南東のグリユーンに対してはブラージウス自ら諜報員を放っていたため、何か動きがあれば連絡が来る。シャンテール方面にはブラージウス皇帝率いる大軍が向かっているから、敵が来る心配は殆どない。

巷では雌雄を決する決戦だ、とか声高らかに語られているが、如何に東部の国々が手を組んだところで五万前後が良いところだろう。あと一カ月もしないうちに帝国軍はシャンテールに対して決定的な勝利を収め、他の国々も帝国に齒向かう事を諦める。大多数の者がそう信じて疑わなかった。おそらくは、反帝国の者達でさえも。

マリスノリス城の屋上にて見張りを行っていた兵達は時折欠伸をかましつつも、誰かに咎められる様子も無く、だらだらと任務をこなしている、振りをしている。麗らかな春空の下、屋外での仕事は天国と地獄の境界線。甘美なる眠気に誘われながらもそれに耐えねばならないのだから。飴と鞭は交互に与えられるべきであって、同時に与えられればやはりそれは鞭である。

「ん……」

麗らかな陽光に眠気を触発されつつも、何か辺りの空気が張り詰めている様な違和感があった。否、緊張感と訂正するべきか。見れば周りにいた数人の見張り達もキョロキョロと辺りを見回し始めている。

「何だ？ この音は……」

おもむろにヒュウヒュウと、風を切り裂く様な高い音が聴こえ始める。小さかったその音は段々と大きくなり、ゴウゴウという低い音に変化していく。

「北西だっ」

誰かが叫んだが、その声には見張り達の脳内が即座に待ったをかける。北西に在るのはネルガル、帝国領ではないか。そう思った刹那

「ぎゃあああつつつ」

断末魔とも言つべき悲鳴が聞こえ、眠気を一気に吹き飛ばされた見張り達は反射的にそちらへと駆け出して行く。下に続く階段がある城郭の裏側にいたのは、屋上に倒れた帝国兵と、厳めしい面持ちの巨大な翼獣^{グリフォン}、そして、フードが付いたクリーム色の外套を纏い、細剣と短剣とを手にした賊であった。

帝国兵達は、賊よりもまず巨大な獣の方に注目した。翼獣^{グリフォン}は個体数が少ないため、滅多にお目にかかれる事はない。実際、この場で見たのが初めてという者しかここにはいなかった。一瞬、見張りが翼獣の方に殺られたのかと思っただ、直ぐに間違いだとわかる。ローブの者が手に持つ細剣が赤く濡れ、屋上の敷石に血が滴っていた。四人の見張り達は直ぐに剣を構え、しかしその内二人はそれが人生最後の行動となった。

「じゅっ」

「ひっ、ぐっ」

ローブを纏った賊に5m程あった距離を、地を滑るかのような足運びによって詰められ、距離の近かった二人の帝国兵がほぼ同時に硬直した。その速攻から偶々^{たまたま}免れる事が出来た二人が気付いた時に

は、一人は賊の細剣に鎧の連結部分を縫って腹を刺し貫かれ、もう一人の喉元には、やはり賊の短剣についているいくつもの鉤刃が食い込んでいた。

「な、なな……がっ」

味方がやられて戸惑った兵の隙を見逃してくれるほど、目の前のローブの男は優しくはなかったようだ。初撃の餌食になった見張りの腹から、いつの間にか抜き去られていた細剣が横一閃すると共に、目の前の兵の頭部が首から右肩に転げ落ち、床に叩きつけられて鈍い音が響く。賊自らが発生させた峻烈しゅんれつなる剣風にフードが靡なひき、その顔が露になる。

燃え盛る様な紅き髪をはためかせたその男を見て、唯一人残された見張りは目を剥いた。

「ま、まさかっ……アス　ぐっ」

見知った男の名を言い終える事が出来ぬままに、己の背を貫いて右胸部から剣尖が生えて来た。自分の血に染まる刃を目に映した刹那、先程感じていた眠気にも似た脱力感に襲われ、視界が暗転する。

天より舞い降りた侵入者は、二人いた。

其三十二　一系の綻び（表）

シャンテールに向かっていた帝国兵達は、今回の戦いが一筋縄ではいかぬと気を引き締めている。如何に人数が勝っているとはいえ、相見えるのは東西戦争の際にその名を馳せたヨーゼフあいまみ、ヘンケルと、あのブラーヂウスの弟イヴァール、テレジアである。敵側としても彼らの置かれている状況が進退窮まっているのは十二分に承知しているだろうし、相当な気概で臨んでくるのは確実だ。

兵達にしてみれば、ブラーヂウスはまだ良いとして、コストイ、ブROOMスとゴードン、ベントニックスの下にいる者達はどうにも不安が尽きぬ。ほぼ勝ち戦になるとはわかっていても、自分が死んでしまつては意味がない。そして、三将共通して人を人とも思っていない者達である。彼等の盾と成つて、或いは無茶な作戦の犠牲となつて死ぬのだけはどうしても避けたい。それが大多数の兵達の胸中であつた。

マリスノリスでは幸いにして敵がほぼ無抵抗だつたために被害はなかつたが、今回の敵は覚悟が違う。今在る生活を守るため、或いは殺された家族の、友の、恋人の仇打ちのため、一人一殺いちにんいっさつの気迫で挑んで来る筈だ。シャンテール領に着くまでにこの武者震いとも恐怖のそれとも付かぬ震えが治まるだろうか。帝国兵達の緊張と不安は、嘗てない程に高まつていた。

兵達のそんな心情を知つてか知らずか、ブラーヂウスは対シャンテール戦へと心を砕いていた。想定している戦略、謀略を省みて、正すべき所はないかと自問自答する。実の所、三重トリニティ・ワンの頂の運用方法

さえ間違えなければ比較的的安全に勝てるだろうと踏んでいたし、いつぞやとは違って補給にも抜かりはない。万が一長引く事も予測し、援護に駆け付けられる様シユヴァイ「オルトフをネルガルに駐在させてもいる。彼の計画に万事抜かりはない、はずであった。

884年5月7日

ブラージウス率いる帝国軍はシャンテール領内に入り、城下町まで後三日という所まで来ていた。戦場となりそうな場所を下見にしている斥候の情報では、城下町目の平原にてシャンテール、ミード、グリトリー三ヶ国の連合軍約五万が既に陣形を整え、帝国軍を迎撃せんと待ち構えている、という事であった。

正午過ぎ、行軍を止めてブラージウスとブラームス、それにベントニックスは見通しの良い丘陵に陣を張って休憩していた。

「ついにここまで来ましたなあ。この一戦をモノにすれば大陸統一は成ったも同然。ブラージウス様の辣腕振りは後世まで語り継がれますでしょう」

本心で言っているのか、それとも皮肉なのか。聞き取り様によってはかなり危ういブラームスの発言は、しかしブラージウスの感情を聊かも乱さずに終わる。この男の愚鈍さなど今に始まったことではない。

「ふむ、まあそうなる事を祈らねばなるまいなあ」
或いは、裏工作が成就すればもう一つ敵が増えるやも知れぬが、とブラージウスは唇を歪める。その表情をどう見たか、今度はベントニックスが尋ねる。

「えー……東国の平定が叶ったとして、その後アテライデは如何いたしますかな？ えー……独立してこちらに利を成したとはいえ、元々は帝国領。いずれは、組み入れるべきなのでは？」

「ああ、それは」

ブラージウスがそれについて意見を述べようとした時、入り口の陣幕が戦ぐ。三重の頂の護衛達が一瞬肩をピクリと動かしただが、入ってきたのが伝令兵だとわかると姿勢を正すのみに留まった。伝令兵は陣内の者達の注目を一身に浴びて躊躇を見せたが、何とか一礼をしてから諸将の5m程手前まで歩み寄ると、膝を付いて頭を傳ぐ。

「も、申し上げます。マリスノリス城にて奇襲を受けたとの報告が入りました」

ブラージウスはそれを聞いて一瞬、脳内が空転するように感じた。いや、ブラージウスだけではあるまい。周りの者達の表情は驚きと戸惑いとを如実に表している。

「なんだと？ 何処の兵だ。グリーンか？ まさかベールではあるまい」

ブラームスに詳細を訊かれた伝令兵は、何故かばつの悪そうな顔をする。

「そ、それが……」

「何だ、はつきり言えっ」

煮え切らない伝令兵に、ブラームスが苛立った様子で二の句を継がせる。

「……は。……賊の顔を見た物の話では、……アステイス「フロイデ元准将に非常に似ていたと」

伝令兵が口にした、憎んでも憎みきれぬ男の名に反応してブラームスは勢い良く立ち上がり、その弾みで折り畳み椅子がその足を投げ出すようにして後方に引っくり返る。

「フロイデだどっ、それは本当かっ」

ブラームスの目の色が変わり始める。彼の二男であるデーモンを無残に殺された恨みは未だに晴れていないようであった。溢れ出る負の感情が唇を震わせ、早くも両の目が充血してきていた。

その様子を横目で見てブラーヂウスは、あのような愚息をいつまでも気にかけているとは、愚かなるは親の欲目か、と含み笑いを漏らす。

「か、かなり人相が変わっていたようでまだ本当に当人かはわかりませんが、赤毛であった事だけは間違いないと」

煮え滾った頭で考え纏まらぬブラームスを差し置いて、ゆっくりと立ち上がったベントニックスが訊く。

「えー……それで、マリスノリスはどうなったのだ。あと、敵の数は」

「は、はっ。フロイデに似た男ともう一人獣人らしき者がいたとい

うことですが、再びグリフォンに跨り、共に何処かに行方を暗ましたとの事です」

聞いた途端に、ブラームスが唾と共に怒声を飛ばす。
「逃がしたのかつ。馬鹿者めっ」

放たれた唾から逃れる様にして、二歩ほど横に力二歩きをしたベントニックスは何やら釈然としない表情を浮かべる。

「んー……しかし、たった二人で奇襲などは、いくらなんでも大袈裟ではないか？」

「……それが、犠牲者の数が……少なくとも五百を超えているそう
でして」

在り得ぬその報告に、二将の口が半開きになる。

「……っ。ば、馬鹿を言えっ。たった二人でそんな真似が出るわけがないっ」

「……話を聴く限りでは、城の屋上から翼獣で侵入した模様です。二人とも、常人とは思えぬ動きで同胞たちを屠っていったとか。……まだ昼間という事もあり、城外ならいざ知らず、城内にはそれほど衛兵がいなかったようで、数的優位を全く生かせない状況だったとの事です。空から不意を突かれてはただただ混乱し、兵の召集が遅れに遅れ、城の二階から上は死体で溢れかえっているとか……」

その言葉に、ブラームスは大分前にしたミレンとの会話を思い出す。？彼の力は千の兵に匹敵するやもしれぬ？。確か、奴はそう口走った。

(ば、馬鹿な……)

あれは友であるアステイスを悪く言われたジルバートの、ささやかなる悪意を交えた脅しか、そうでなくとも相当に誇張された物だとブラージウスは今の今まで思っていた。

しかし、彼は現実に五百以上の兵を殺し、何事もなかったかのように行方を暗ましている。自分がかもしそんな化け物に付け狙われたらどうなるのか。首筋から尾骨にかけて悪寒が過った。常に五百以上の護衛を付けて歩く事など出来はしないのだ。

聴く事に徹していたブラージウスが、ようやく口を開く。

「つまり、マリスノリスはもう平穩を取り戻しているのだな？」

「は、はい、表面上は。勿論、同僚を殺された者達は多分に憤っておりますが」

(ふむ……どうにも解せぬな)

ブラージウスの頭がやっと回転を始める。アステイスは何故、このタイミングでマリスノリスを襲ったのだろうか。今の帝国軍にとっては五百少々の兵を倒された所で焼け石に水である。シャンテールを目前にして、どうも何かが引つ掛かる。果たしてこのまま軍を進めて良いものだろうか。

或いは、これは単なる脅迫に類する物だろうか。こんな城一つ、いつでも落とせるのだぞ、という。アステイスはジルバートに並び評された軍略家だ。それなりの兵がいれば容易いことかもしれない。賞金首として追われているこの半年程の間に、よもや兵を募っていたのだろうか。

このブラージウスの考え方は、世俗と掛け離れた金銭感覚が起因している。彼にとっては20億ギラという金額が、平民達にとっては莫大な金である、という以上の意味を持たなかった。

本来、正常な金銭感覚を有していればこの考えは即座に打ち捨てられていたはずである。20億もの大金に釣られる者達の数は、むしろブラージウスの予想を遙かに越えていた、と言っても過言ではない。

もし仮に、本当にアステイス「フロイデが兵を募っていれば、どこの誰とも知れぬ者達にとくに殺されていた可能性が高い。しかしブラージウスはその考えには至らなかった。否、その金銭の価値を、疑心を抱かぬほどには信じ切れなかった、というのが正解であろう。

（だが……どうせなら脅しなどせず、一度で奪うべきであるな）東軍に通じている可能性を考えれば、引き返させるための小細工か、とも思う。しかし、それならもう少し組織だった動きを見せても良いはずである。

再度、ブラージウスは確認すべき事を訊く。

「兵達に、もうこの話は伝わっているのか」

「は、はあ。先程マリスノリスからの兵が来て話を伝え聞いた時に周りにも兵達が結構いましたから、おそらくはもう知られているもの」

「ふむ……」

感情を顔にはおくびにも出さず、しかしブラージウスは内心で舌打ちをする。万が一、シャンテールとの戦争中にマリスノリスが奪われる様な事になれば、帝国軍は北と南から挟みうちに遭う。補給については心配いらぬものの、相当な苦戦を強いられる事は避けられぬかも知れぬ。

（シユヴァイ「オルトフを呼ぶか」）

いや、と考え直す。ネルガルは少々遠いし今からでは三週間近くかかりかねぬ。マリスノリスが乗っ取られてから到着するのでは呼ぶ意味が薄い。

明確な答えを見出せぬ問いに対して、ブラージウスはどこまでも慎重だった。性残忍にして疑り深い性格がそうさせていた。現状では、アステイスに息子を殺されているブラムスを第一軍共々マリスノリスに戻すが上策とも思えたが、ここに来て軍を分ければこれから戦う兵士達が在らぬ動揺を来す^{きた}かも知れないし、そうでなくとも相対する敵兵の数が少なくなれば敵軍の士気は上がってしまうだろう。

しかし、何もしなければ後ろに不安を抱えたままシャンテールと戦う事になる。そうかと言ってトリニティ・ワンの数を減らしては、護衛が心もとない。既に何人かの者をバイロンⅡテレジアに預けてしまっているためだ。

(こつとも裏目に出るとはな……)

いや、とブラージウスは目を瞑る。弱気になる必要など全くない、今までが上手く行き過ぎていたと考えるべきだ。後方にはまだまだ兵に余裕があるし、一旦引き返して体制を整え、改めて大軍を率いてすり潰せば良い。アステイスの狙いが見えぬ以上は、それが安全策だ。

シャンテールも、領民を避難させておいて我々と戦わなかったとなれば、今後の対応にも戸惑うだろう。少なくとも攻めては来るまい。

少々癪な選択だったものの、ブラージウスは細い目を開き、伝令

兵に断を下す。

「万事慎重を期すに越したことはない。シャンテールはマリスノリスから程近いしいつでも攻められる。勝利は目前にあるのだし、先に後方の憂いをなくしておいた方が良好だろう。一旦マリスノリスに引き返し、城の警備も含めて周到に準備をしてから再度シャンテールに侵攻する」

「はっ、畏まりました」

伝令兵は引き下がり、それぞれの陣に目的地変更の報告に行く。

伝令兵が去ると同時に、ブラージウスは二将の方へと向き直った。「と言うわけだ。二人とも陣を引き払う準備をせよ」
「はっ」

ブラームスとベントニックスは主君に揃って敬礼した。

結果として帝国軍はマリスノリスに踵かかとを返し、アステイスⅡフロイデの足跡を追ったが、彼の行方はようとして知れなかった。業を煮やしたブラージウスは、帝国軍の監視に回していたトリニティ・ワンの何人かをアステイスの搜索隊に任じる。

このような行動を取ったアステイスⅡフロイデの真意は推し量るしかなかったが、もしかしたらその影響は彼の深慮の範疇をも超えていたのかも知れない。

既にのたれ死んでいるのでは、という噂すらあつた元第六將軍大隊長アステイスⅡフロイデの豪胆振りは、瞬く間にテレジア大陸全域に広まって行き、僅か二人で帝国軍十万を手玉に取ったエピソードは、ベールが破れて気持ちの萎えかけていた反帝国勢力を奮い立

たせる語り草となっていた。

其の三十三　く時間稼ぎ（表）く

アテライデは、古の時代から商人の集う街として栄えていた。大陸最大の港町を有し、多くの商館と倉庫とが建ち並ぶ。港に程近い市場には目新しい物が数多く並び、時折聞こえるカモメの鳴き声を掻き消すようにして、活気ある競りの声、客寄せの声が飛び交うと言った風合いだ。

そんな町に生まれた少年少女は広大な海を臨んでは冒険心を掻き立てられ、多くの者が未開の地を目指して旅立っていった。「男ならば家を買ってでも船を買え」という上昇志向を如実に顕した格言が流行り、商人達はこぞつて船に乗り大海に出でた。航海術が発達していかなかった初期の頃こそ帰らぬ者も数多かったが、無事に戻れた者は珍奇な交易品を山のように積んで帰ってきた。希少な物を尊ぶ習性は、おそらく人類の祖から変化しておらぬようで、冒険をやり遂げた者には榮譽と莫大な報酬とが与えられた。そうして富を築き、町の有力者となった彼等は、蓄えられた財を幾許か還元する事によって政治的な権限が与えられるようになった。それが、現在のアテライデ経済流通開発推進機構、通称「経通の源泉」と言われている。

テレジア帝国の発足後、彼等の上には新しく都督と言う者が立つようになつたが、少なくとも前期く中期においては両者の関係は陰悪な物ではなかつた。しかし後期ともなると、テレジア帝国の政治的影響力は多分に衰え、中央の目が行き届かぬ地方都市においては賄賂、ツイロ或いは使い道の見えぬ税の臨時徴収が横行するようになっていた。アテライデもその例外ではなく、役人達は私腹を肥やさんと

様々な名目で税を取り立てようとした。特に露骨であったのは酒税、関税、或いは通行税であったが、それらは当然の如く商人達の怒りを買う、中には要人暗殺に発展した例もあった。彼等は何度かの苦杯を舐める事によって、潜在的意識下において自分達の上に立つ者が必要としない、古の体制の復興を待ち望んでいたのである。

884年 5月17日

アテライデ

五階建ての建物の最上階に設けられた二十畳程の部屋には、仄かな香りを発する香木の植木が置かれている。部屋の真ん中には椅子が二つ。そのうちの一つにはショートスタイルの黒髪を逆立て、左目に片眼鏡を付けている男が座り、新聞に目を通していた。北側にある大きなガラス戸からベランダに出れば港に停泊する大きな客船が見え、その奥には白波に陽光煌く海が広がっている。

そんな部屋に新品の外套を被った男が入って来るのを見止め、柔らかなソファに体を沈ませていた男は、手に持つ紙面を少し下にならずし、その上から目だけを覗かせた。

「お、人気モンのお帰りか」

「……人気モン？」

フードを外しながら怪訝そうな顔を見せるアステイス＝フロイデ

に、男は口元に不敵な笑みを浮かべながら身体を起こすと、自分が今まで読んでいた新聞を差し出す。

884年5月1日 アステイスⅡフロイデ元准将 帝国軍
を翻弄す

見出しと日付とを見てアステイスは曖昧に笑い、直ぐに「結構だ」と手の平を翳す。

「何だ、文面見ないのか？」

「何となく察しが付いた。まあこの書き方ならそれなりに肯定的に書いてくれているのだからな」

帝国彙員の新聞だったら、卑劣なる奇襲がどうのこうの、反逆がどうのこうのと書かれていただろう。もっとも、今回ばかりはそちらの側に同意せざるを得ない。自分がやった事は不意打ち以外の何物でもないのである。

「そこまでわかっているんだったら読んだって」

「過分な評価で自惚れられるほど私はお人好しじゃないんだ」

アステイスは興味なさそうにそっぽを向く。その様子を見て、男は紙面をソファアの傍らに置いてから再度アステイスに向き直る。

「過分……ねえ。そう言い捨てるのは結構だが、アンタが今まで誰も出来なかった事をやったのは事実じゃないかい？」

「出来なかった事、か。そういうには余りにもスケールが小さすぎるが。螻蛄の斧と言うが相応しいな」

「何だか卑屈だなあ。そんなんじゃ人生楽しめないぜ？」

その言葉にアステイスは固まり、ヒツキの爛々とした目が僅かに

惑う。どうやら失言であったか、と内心で反省しつつ。

「まあいい、無理聞いてくれて感謝するぜ。そう言えば、グ
リオは怪我しなかったか？」

「……そのネーミングセンスは何かならないのか？」
そう言いながら、アステイスの後ろから男が入ってくる。茶髪か
ら覗く丸い耳にバランス良く筋肉を纏うしなやかな手足。そして、
頬に微かに生えている三本髭。獣人ライカンであるのは一目瞭然だ。不満げ
な顔をしているのは、連れの彼よりも翼獣クリフォンを先に心配したからであ
ろう。

「おう、ルガール。一応、お前さんの事も書いてあるぜ。見るか？」
「遠慮しておく。どうせチヨイ役が良い所だろうしな」

そう言いながらも遠目で新聞の内容を確認したルガールは、殺つ
た数はそう変わらん筈なのだがな、と不満げに溜息を付く。彼の視
力が常人を軽く上回る物である事が窺える。

「ガハハ、大当たりだ。読んでないのに凄えなお前、天才じゃね？」
豪快に笑うヒツキに、ルガールは酸っぱい物を口にしたような顔
になる。

「……心にもないことを良く平然と言えるなアンタ」

「ナハハ、照れるじゃねえか」

「褒めてねえっ」

「で、帝国軍と戦った感想はどうだい？」

人を食ったような物言いをするヒツキに、ルガールは深く諦めの

溜息を吐いてから、所々考えつつも感想を述べる。

「……連中は反撃されているのに慣れていない。楽な戦いばかりし過ぎたツケかな……戦いに際して命を懸けているって意識が明らかになっていた。……後二、三人、俺達と同格の戦士がいれば、本当にあの城を落とせたかも知れないぜ」

「……なるほどね。アンタは？」

ヒヅキは顔の向きを変えぬままアステイスに視線を向ける。

「何も感じなかった。元同胞を殺したのだから、或いは、自己嫌悪に陥るかと思っていたが、将来を見据える上ではきつと、喜ばしい事なのだろうな」

二者の感想は外と内、対照的な物になった。ルガールの事実関係を考察したそれに対し、アステイスの感想は自らの心象を考察したものだ。

(ちつと、危ういな……)

ヒヅキは心中で独白する。アステイスと旧知の仲であった彼は、近日に再会した時には一目見て本人だとわからなかった。勿論それは髪と髭を碌に手入れもせず、殆ど洗った様子のないボロボロの服を纏っていた事もある。

だが何よりも、以前の静かさと澁刺^{はつらつ}さを共有していた彼とは対照的に、瘴気ともつかぬ威を纏い、それでいて幽鬼のように存在感が欠如しているため、以前の面影とどうやっても重ならないのだ。もしかすると、彼の芯を歪める何事かが、あの反逆事件の舞台裏にあったのだろうか。それでも考えねば、この変貌振りは説明が付かなかった。

「まあ、そうだな。殺す度にいちいち自己嫌悪に陥ってたら身が持たないもんな」

沈黙が幅を利かせようとした所で、幸いにもルガールが口を開いたのでヒヅキは幾分ホツとした。

「しかし、あの短時間のうちに？^{フィール}充填？を使いこなせるようになるとは恐れ入ったぜ。一朝一夕に出来る技じゃないはずなんだが」

感嘆したようにそう言うルガールに、アステイスは微かに口の両端を上げる。

「ルガールの教え方が上手かったのさ。これを学べたのは本当に助かった。感謝する」

アステイスが礼を述べ、正面から自分に頭を垂れたのを見て、少しの間呆気を取られていたルガールは、アステイスから視線を逸らして頭を掻く。

「べ、別にそれくらい何でも……。そ、そういえば、ヒヅキの旦那。本当に時間稼ぎだけで良かったのか？」

あまりに不自然なルガールの態度に、それで照れ隠しのつもりかよ、とヒヅキは苦笑したが、顔に真剣さを挿入し、前のめりになつて両手を組む。

「仮にマリスノリスを奪えたとして、維持できなきゃ何もならん。下手に居座れば労力も時間もかかるしなあ。それはフロイデと同じ見解でもあるぜ」

アステイスは協力者なしで帝国に勝てるとはついぞ思っていないかった。しかし自分に二十億の懸賞金が懸かっている以上は相談出来る相手が著しく限られる。考えた末に、アステイスはアテライデの大富豪にして経通の十一人理事が一人、タクロー^{ヒヅキ}を頼る事にした。何度かの面識があり、二十億程度の金には目もくれない男

であり、同時に、自分に何らかの利用価値を見出してくれる人物であると判断したのである。

今現在、アテライデの立場は非常に微妙な、ややもすると危うい立場に立たされていた。東西戦争の折に独立し、テルネシア帝国と同盟を結んだままでは良いものの、派兵を行っていないのを理由に何かしらの名目でブラージュウスに軍資金を要求されている有様だ。アンドレイ皇子を裏切つてまで西軍に付いたのは何のためだったのかと思わざるを得ない。しかも、アテライデに裏切られた形である東国の心証も芳しくない。ヒヅキにしても、どこかで方向転換をせねば、といくらか焦っている所に予期せぬ客人、つまりアステイスが現れた。

帝国の侵攻をもう少し遅らせたい、というヒヅキの依頼に、アステイスは自らの顔を晒すという大胆不敵な策を提案した。この依頼は実の所、アステイスをどの程度信用できるのか確かめる心積もりもあつたため、ヒヅキはアステイスに対して密かに合格点を出した。アステイスの提案を良策であると判断したヒヅキは、自身の護衛でもあるルガールに命じ、アステイスに？^{フィール}充填？を習得させる事にした。襲撃の成功率を上げるためであり、アステイスが捕らわれる確率を下げるためだ。

元々優れた剣士であつたアステイスは直ぐにコツを掴み、短日でそれを習得した後、ルガールと共に襲撃を決行した。

かくして、時間稼ぎの依頼は達成された。副産物に過剰の反響を生じて。

「だけど、このままじゃ八方塞がりだよなあ」

そう口にしたルガルに、ヒヅキはゆっくり首を振る。

「いや、ここで帝国の尻に火をつけた意味は大きいぜ」

ヒヅキは確信しているように言った。

「もう直ぐ夏が来る。それまで粘れば帝国もシャンテールに侵攻し辛くなるはずだ。その間に出来る事を考え」

コンコン

「ヒヅキ社長、少し宜しいでしょうか」

少し慌てた様子のヒヅキは、咄嗟にアステイスへと視線を転じる。

《 フロイデ。悪いがちょっと隠れてくれ》

小声で囁くヒヅキにアステイスは頷き、ガラスの引き戸を開けてベランダに出る。カーテンの裏に身を潜めたのを見計らって、ヒヅキは入る様に命じる。

ドアを開くも、うら若い女秘書はノブに手を添えたまま丁重に礼をし、報告をする。

「失礼します。社長、イグニスという少年が面会を願っているのですが、追い返しても宜しいですか？ ……実はもう三度目なのですが、あまりにしつこいので」

「イグニス？ 知らないなあ。業務に差し支えるようなら、衛兵に引き取ってもらえ」

「畏まりました。失礼致します」

秘書が再び頭を下げ、ドアを閉める。入れ替わりにアステイスがベランダから入って来る。

「ああ、すまなかつたな」

「彼女は何と？」

「ああ、俺に面会を請う少年ガキが来ているらしくてな。確か……イグニスとか言ってたか。持てる者の宿命か、こういった手合いは後を絶たなくてなあ。あまりしつこい様なら」

アステイスはその名を聞いて、自分の屋敷にいた小姓の屈託のない顔を思い出す。

「イグニスが……ここに？」

「なんでい？ アンタの知り合いか」

(……お)

ヒヅキはアステイスの顔に、懐かしさとも戸惑いとも付かぬものが映ったように見えた。アステイスは少しの間、何事かを考えていたが、おもむろに口を開く。

「……ヒヅキ殿、済まないが」

「わかった。ああ、ルガール、悪いけどちよっくらその少年ガキ、ここに連れて来てくれるか」

ルガールは軽く頷くと、秘書の後を追うように急ぎ足で部屋から出て階下に向かった。

其の三十四　く背負いし物（表）く

十数分後、ルガールが茶髪の少年を伴ってアステイス＝フロイデとタクロー＝ヒツキの待つ室内に戻ってくる。アステイスとイグニスとはクルート以来の再会を、思いがけず遠い異国の地で果たす事となった。

嘗ての主人を一見して、イグニスが少々戸惑ったかのようにも見えたが、まずは建物の主であるヒツキに、次にはアステイスに敬礼をする。軍隊式の遠くを望むような所作ではなく、手を胸の前に添える社交界において使われるものである。ヒツキは軽く手を翳し、アステイスも僅かに頷いてそれに応える。

ヒツキから入室の許可を得たイグニスは腰に下げている剣を抜き、ルガールに預けてから座っている二人の傍に歩み寄る。

天然パーマの茶髪がさっぱりと短く刈られているイグニスの姿を見止め、アステイスは軍学校に通っていた頃の、遠い昔の自分を思い起こした。友人達と訓練に明け暮れた日々も、今は記憶の奥底にある。

アステイスはゆっくりと立ち上がってイグニスに向かい合うと、微かに眉を上げる。ふいに、己の向ける視線の傾きが以前のそれと違う事に気付き、イグニスの目の位置が高くなったのだと思い当る。

「随分背が伸びたな」

「……アステイス様は、……大分痩せられましたね」

その顔は以前と比べて頬が痩せこけ、長い逃亡生活であり眠っていないのか、目の下には色の濃い隈が見止められる。整っていたドレッシーヘアは、こう言っては失礼かも知れぬが見るも無残に艶をなくし、枝毛が目立っていた。

お互いに、己の記憶と目の前にいる人物とを照合して明らかに差異を感じたのだろう。第一声は形式的な挨拶よりも先に、そのような台詞を交わす事になった。

「御久し振りです。今度こそ、会えて良かった」

ヒヅキには、イグニスその口吻に主人を発見出来た微かな喜びと、何かしらの決意とが窺えた。アステイスもおそらくは似たような心証を想起させられている事だろう。

「……あれから七カ月余り、か。どうして俺がここにいるとわかった」

「勿論、新聞を見て、です。こここの所、アテライデでアステイス様を探していたんですが、グリフォン翼獣に乗っていたという記述を見てピンと来ました。以前、アステイス様がそんな話をしていたのをおぼろげに覚えていたんです。グリフォン翼獣をペットにしている物……大らかな人がいるって」

「物好き？を？大らか？に変えたとしてそれほどのフォローにはなっていない。機微の違いをまだ十五のイグニスに求めるは無理があっただろうが、それでもアステイスはやや気まずそうな顔をした。ヒヅキの方を横目でチラッと窺うと、彼は冷ややかな目で、しかしどこか愉しそうに二人のやり取りを見つめている。」

「 んんっ。何故アテライデで私を探していた？」
わざとらしく咳払いをしたアステイスに、一瞬身体を上擦らせた
イグニス は、人差し指を頬に当てながら言葉を紡ぐ。

「賞金を掛けられている状態で助力を求めるとしたら誰だろう、と
自分の立場をアステイス様のそれに置き換えて考えてみまして、可
能性が高そうだと思ったからです。初めはジルバート様かな、とも
思い、暫くはエル・クレスにいたのですが、待てども現れなかった
ので」

ヒツキが感心したように眉を上げる。

(なるほど、中々利発そうな坊主だな)

ジルバート「ミレンを頼ると踏んだのは目の付け所が悪くない。
かくいうヒツキ自身も、何故最初に親交のある彼を頼らなかったの
か、当初は少々疑問に思っていたのだ。

後になって、帝国内にはブラージウスの放った諜報員が犇^{ひし}めいて
いるだろうし、発見されるリスクを少しでも減らす為だろう、と自
得していた。

「それで……何しに来た」

イグニスは背筋を伸ばして、決然とその言葉を口にする。

「……僕にも協力させてください。僕だってメリツサ様の」

「イグニスっ」

意表を突かれた形で、アステイスにはここで止めるのが精一杯だ
った。ヒツキは思慮深げに目を細め、面食らったイグニスとアステ
イスとを交互に見据える。

「なるほど、な。ようやく合点がいった。俺もおかしいとは思ってたんだよ。計算高いアンタが何でわざわざブラームスの別邸を襲ったのが、どうにも不可解だったんだが」

アステイスがメリツサの事を口にしていないと露知らなかったイグニスには、ヒツキの言葉を聞いて初めて、自分の軽率な一言がもたらした結果を知って真っ青になる。

「も、申し訳」

「もういい」

アステイスはやや怒りをはらんだ口吻で短く言う。

ずっとそれを、一人で胸奥に秘めていたわけか。ヒツキは表情を引き締め、ゆっくりと呟く。

「さぞ、辛かっただろうな」

「私に慰めの言葉など必要ない。……誰より辛かったのは彼女自身だ」

溢れ出る想いを堪えようとしているのか、アステイスは僅かに唇を噛んでいた。

「……メリツサってのは、アンタの恋人か。殺されたのか」

ルガルは、彼にしては珍しく憂いを帯びた表情で、俯くアステイスの顔色を窺う。

「……妻になるはずだった女性だ。悪いが誰にも言わないでくれ」

声を掛けることも憚られる雰囲気^{はば}が立ち込めた後「すまないが、暫くイグニスと二人だけで話をしたい」というアステイスの申し出を受け入れたヒツキはルガルを伴い、部屋を出た後に鍵を掛ける。

廊下を歩きながら、ヒツキはグリオの様子を見に屋上に向かう。
翼獣を飼っている者は非常に少ないし、いずれ噂を聞き付ければこ
こにも調査の手が及ぶだろう。早めにどこかへ隠さねばならない。
幸いにして一頭を姪っ子に預けている為、何か訊かれたらそちら
に預けているとしらばっくれれば問題ないはずだ。ヒツキがグリフ
オンを二頭飼っている事を知る者は殆どいない。

「さっきの話、忘れる」

突然そう言うヒツキにルガルは一瞬呆けたが、若干非難めいた
口振りで返事をする。

「旦那、無理言わないでくれよ。いくら俺の頭でも、あんな話そう
そう忘れられないぜ」

「……だよなあ」

あっさりとそう口にしたヒツキに対して、ルガルはやや不服そ
うな顔をする。そこは「お前は別に馬鹿じゃないだろ」とか気の利
いた慰めフォローがあっても良かったように感じるが、果たしてこれは贅沢
な事だろうか。

ややあつて、気を取り直したルガルは階段を上っている最中、
一つ気になっていた事を口にする。

「なあ、ヒツキの旦那。何でアイツはその事を黙っていたん
だ？」

ヒツキは歩みを止め、ゆっくりと目を瞑る。

「当事者でないから想像でしか言えないが　　きっと、彼女の死
に様に起因するんじゃないか」

「死に様？」

「フロイデと一悶着あつたブラームスつて奴は、帝国内でも相当に悪名高い。倫理の欠片もないような連中が女を攫つてやる事と言え
ば……わかるだろ？」

どこか苦しげにそう言うヒツキに、意図するところを察したルガ
ールも顔を歪める。

「ましてや己の婚約者ともなれば、衆目に晒すのを憚はばられる気持
ちがあつたとしても何ら不思議じゃない。自分が如何に不利になろう
と、彼女の名誉のために、アイツは沈黙を守り通していた。そして、
これからもきつとそうするだろう」

まだ、アルイール帝の御世の頃、ヒツキはメリツサとも二度ほど
面識がある。アステイスの傍らに慎ましやかに寄り添う、優しげな
微笑を浮かべる彼女の姿を思い出し、若い二人の幸せが、そして未
来が奪われた事に憤りと憂慮とを覚える。

「若くしてアイツは、察するに余りある重たいモンを背負つ
ちまつた。一見すると前向きにも思えるが、そんな事は決してない。
一人で背負うには大きすぎる荷物を何とか前に傾けて騙し騙し進ん
でいるようなもんだ。歩みを止めれば、その重みで直ぐに潰
されちまうのさ。憎悪という名の荷物に、な」

そう言葉を切り、ヒツキは再び階段を上り始めた。

帝国軍の足止めをして欲しい、という自分の依頼に対して、アス
ティスは一步間違えば己の命を失いかねぬ策を平然と呈した。それ
は単に剛毅剛毅さの表れである、とつい先程まで思っていたが、イグニ
スとの会話を聞いた後では、どうもそれだけのようには思えない。

もしかすると、彼は愛する者を失った反動から無意識の内に己の

命を軽視しているのではないか。ヒツキはそう勘繰っていたのである。

其三十五　　ゝ悪夢の萌芽（表）ゝ

884年5月23日

テレジア大陸西部　マビアビ城執務室

ブラージュウスにマビアビの統治を命じられていたガツシュⅡエウゲンは目を通していた書類をマホガニーの机に置き、椅子に座ったまま向かって右側の窓を見遣り、紅に染まる夕日を臨んだ。カタルスタとテルネシアを隔てる山脈の谷間に、夕日は扇の形となって徐々にその姿を隠していく。ゆっくりと　　ゆっくりと。

アステイスⅡフロイデが姿を現したと知り、エウゲンは複雑な胸中だった。発起するにはタイミングが早すぎると思ったのだ。高々半年かそこらでテルネシア帝国に敵う算段が付いたとは考えにくい。或いは、メリツサⅡウランダーを失って自暴自棄になったのだろうか。もしそうならば、帝国にとっては歓迎すべき事なのだろうか。

（　　　間に合わなかったのが全て、か）

消え入りそうな声で独白し、エウゲンは窓の外から目を逸らす。既に紅の扇は閉じられており、入れ替わるようにして夜の帳が下りてきた。

シャンテールに駐在する東諸国の軍とマリスノリスに留まる帝国軍の睨み合いは依然として続いていた。ブラージウスはマリスノリスだけに留まらず、ネルガル、エル・クレスでも警備を強化するよう要請し、空からの奇襲に対しても腕の良い弓兵を配して万全の態勢を整えていた。二人で五百人余りを死に至らしめたという事は、トリミテイ・ワフ三重の頂の力量に匹敵する事疑いなく、喩え少数でも油断出来ぬと考えていたのである。

同時に、也を潜めているベール軍を早めに叩くべく、エアリアから第九軍大隊長ローラント・ラフォム准将をマスチュアに向かわせ、第八軍大隊長ハンディック・ウランダー准将と共にベールを掃討するべく令を発する。

ローラント・ラフォム准将は副官のダメダ・メツサーにエアリアを任せ、5月24日に五千の軍を率いてマスチュアへ向けて出立した。

それから一週間ほど遅れて6月に入り、ブラージウスは北東のシャンテールではなく、まず先に南東のグリーンへ兵を送る事を検討する。トリミテイ・ワフ三重の頂の諜報員からの情報で、今まで煮え切らぬ態度を取っていたグリーンが、シャンテールの同盟軍と合流しようという画策している事が明るみになったためである。

884年 6月8日

ブラージウスは、どこに出掛けるにしても常に四人以上の情婦を

供に付けている。大体はブライムスによって提供された、端正な顔立ちをした若い女達である。

ブライジウスには妻は三人いるが、彼女らはそれなりに地位のある者達であった故に、己の好きなようにすれば必ずや家族達に反抗心を生む、とわかっていた。逆に言うと、妻でない者に対しては遠慮も要らぬと、ブライジウスは嬉々として、加虐的に、女を抱いた。女性達は涙を浮かべながらもひたすらに身体と心を打ちのめされながら、それでも齒を食いしばって堪えなければならなかった。彼の不振を買えば、それは己と己の大切な者達の未来が失われることを意味する。彼女らは必死にブライジウスに奉仕し、その様子を、彼は糸のような目を更に細め、薄ら笑いを浮かべながら見下す。それが彼の、日課の一つだった。

二時間ほど寝室に引き籠もっていたブライジウスが幾分すっきりした面持ちで部屋を出ると、壁に寄りかかるようにしてイヴァンスが立っていた。彼は護衛を担う三重トリニティ・ワンの頂の統括者であるから部屋を見張るのはいつもの事なのだが、珍しく冴えない表情をしている。

さてはシャンテールとの一戦がお預けになって苛々しているのだろうか。マリスノリスでも敵が殆ど無抵抗であったし、消化不良の一戦といって差し支えないだろう。そろそろ何かしらの遊び場をくれてやらねばならぬか。そんな事を考えていると、珍しくもイヴァンスの方から口を開いた。

「絶対に怒らないでくださいね。僕のせいじゃないですから
イヴァンスにしては随分と歯切れが悪い。」

「ふむ、……内容にもよるな」

「グリユーンの情勢を探っていた三重トリニティ・ワンの頂が一名、消息を絶っています。おそらくは殺されたか囚われたと思われれます」

ブラージウスは眉を上げる。

「何と？ 何かの間違いいはないのか。あの者達なら数的不利になつても逃げるくらいのは出来てあらう」

イヴァンスが壁に寄り掛かったまま、やや俯き気味に顎を弄ると、長く白い前髪が彼の目元に覆い被さつた。

「……彼らには定期報告を絶対欠かさぬよう言い含めてありますから。もしも逃げる事すら出来なかつたとしたらやつたのは相当な実力者、若しくは戦闘集団かな。彼等を鍛えた僕だからこそわかるんですよ。グリユーンには何かがあるかもしれないね」

「……ふむ」

元々グリユーンには侵攻する予定だったのだが、よもやトリニティ・ワンに匹敵するような者達がいるとは思わなかつた。ブラージウスは宙にあつた視線を再びイヴァンスに戻し、イヴァンスは直ぐにそれを察して二の句を継ぐ。

「あそこは亜人が多く暮らす町ですから、そういった者の一人や二人いても不思議ではありません。流石に一人だけ、つていうのは高を括つていたみたいです。部下を複数名送つて探らせたいのですが宜しいでしょうか」

「いや待て。アテライデにいる大伯父上に護衛を送つたばかりだ。あまり人数が減るのはまずい」

主君の言い分に、それもそうか、とイヴァンスは腕を組んで考え込む。

「んー、ならどうしようかな」

「俺が行けば問題なからう」

突然発された声の方角に二人が素早く振り向くといつの間にか、肩にかからぬくらいの銀髪に二本の角を覗かせている鬼人の男が目

の前にいた。2 mを越すであるう身長と丸太のように太い腕、袖なしの黒いシャツにグレーの短パンは相当にサイズが大きいものであるうが、それでも隆々とした筋肉のラインが服の上にはつきりと表れ、ややきつそうにも見える。

見知った顔だと確認し、イヴァンスは表情を緩めると朗らかに話しかける。

「ヘッドリイさん、戻っていたんですか。やだなあ、気配消すなんて趣味わ……」

ふと、イヴァンスは喋るのを止め、目の前のヘッドリイを見て目を丸くした。彼の太い首には包帯が巻かれている。彼に傷を付けられる者が錚々いるとも思えないが、と不思議そうに首を傾げるイヴァンスに、ヘッドリイは咎めるような視線を送る。

「……半分はお前のせいだぞ。おかげで一緒に行った者が二名殺された」

「えええ、　　僕の、ですか？　二人も、っていくら下っ端でもそれなりの連中ですよ」

「平和ボケして警戒感が一切ない連中ですよ。ヘッドリイさんなら楽勝でつす、とかほざいていただろうが」

（　　ブフ）

まさか、それで自分に似せたつもりなのだろうか。それにしても変えた声色があまりにも高過ぎる。ツボを衝かれたイヴァンスは段々と頬を膨らませてゆき、最後には堪え切れずに吹き出した。その筋骨逞しい図体でその声は反則だろ、と言わんばかりに。

「何がおかしい」

「あははははははははは、へ……ヘッドリイさんって、あははっ
あは……意外と面白い人だったん……はは、ですね」

「……く……く……不愉快な……く……」

盛大に腹を抱えて足をバタつかせるイヴァンスを見て、どうやら
ブラージウスにも笑いが伝染したようだ。

不愉快なのは故なく笑われているこちらの方だ、と言わんばかり
にヘッドリイは慄然とし、床で笑い転げるイヴァンスと、貰い笑いを
堪えようと口を押さえるブラージウスとを、深い紫色の目で睨む。

一頻り、腹を抱えてひたひた跪きながら笑っていたイヴァンスは何とか顔を
上げる。

「……はひい……はひい……。……ああ、酸素が、足りなひ……」

……あの、もしあれでしたら……ぷふ、アンコール、お願いして良
いですか？」

「……いつそのまま死んでみるか？」

只ならぬ剣幕に、冗談の通じない人だな、とイヴァンスは心中に
独白を落とし、何とか立ち上がると深く息を吐き出した。未だ口の
代わりに腹筋が笑っている。

「……それにしても、その位置はちょっと危なかったですね。刀
傷ですか？」

「ああ、少々手を抜いていただけだ。相手の方には致命傷を負わせ
たし、まず生きてはいまい。それより、これでいいんだな」

ふいにヘッドリイは、西瓜をも易々と掴めそうなほど大きい手に
持っていた、古びた本をイヴァンスに投げて寄こす。

「ちよ、ちよちよっ」

宙に舞いながら頁がパラパラと乱れる本を、イヴァンスが慌てて受け取る。

「……危ないなあ、もう。もっと丁寧に扱って下さいよ。これ、凄く貴重なんですよ」

「……それが例の本、か。本当に作れるのであるうな」

冊子を少しだけ曲げるように、本をパラパラと捲っていたイヴァンスは、納得したように頷くと本をパタンと閉じ、ブラーヂウスに視線を戻した。

「時間は相当かかりそうですけれどね。上手く行けば帝国軍は文字通り無敵になりますよ」

彼は屈託のない笑みを浮かべて、そういった。

其の三十六　～ 亜人達の受難（表）～

アステイスとイグニスが再会してから一月ほどが過ぎていた。その三週間ほど前にイグニスから「？充填^{ファイル}？を伝授して欲しい」と請われ、それを了承したルガールは、手の空いている日にアテライデから程近い自然保護区に彼を連れ出し、早朝から日が暮れるまで特訓を施していた。

剣士として未熟な事もあり、イグニスはアステイスほどには行程がスムーズに進まなかったが、それでも一歩ずつ確実に？充填^{ファイル}？習得へと近づいていった。

弛まぬイグニスの姿勢を見守っているうちに、ルガールは彼の才が肉体的部分よりも精神的な部分を占めるのが大きいのでは、と考えていた。ルガールがイグニスに課した訓練は、下手をすると身体の成長を止めてしまうくらいにきついものであったが、それでも彼は訓練の内容に対して愚痴一つ零さなかったのである。

884年　6月16日

イグニスにある程度の素地が出来つつある、と判断したルガールは、午前中の訓練を終えた後、柔らかい芝生に座りながら彼と向かい合い、？充填^{ファイル}？の原理について語っていた。

「大雑把に説明すると、？充填^{ファイル}？ってのは己の体内に眠る魔力を引

き出し、身体の一部、若しくは全体に行き渡らせる事によって一時的に身体能力を底上げする魔法の一種だ。俺達みたいな近接型の戦士には必須のもので、両足に留めれば普段よりも早く走れるし、片手に集中すれば素手で岩をも砕く事も可能になる」

額から、髪から伝う、訓練によって生じた汗も気にすることなく、イグニスは一心不乱にルガールの声に耳を傾けている。その目を見て聞いていると判断し、ルガールは話を続ける。

「それだけ聞くと万能にも思えるが、当然リスクもある。まず、使っている最中は疲労が一気に蓄積されていく。持続時間は修練によって伸ばす事も出来なくはないが、効果が切れた後は使った部位に対して著しい負荷がかかる。基本的に長時間の使用、過度の使用は禁物だと思っっている。当然、身体が出来ていない状態で使うのは問題外だし、限界以上の力を引き出せるわけでもない。……んん、そうだなあ。例えば、今お前は相当に疲れているだろう？」

急に問われたイグニスは、二秒程呆気にとられてからコクコクと頷く。

「万全を100だとして、今疲れ切っているお前の体調が3割ないし4割だでしょう。そうしたら如何に？充填^{フィール}？を発動してもせいぜい5割程度までの力にしか底上げ出来ないわけだ。一点に集中して使う分には例外もあるけどな」

「つまり、？充填^{フィール}？を使うなら完調に近い状態であればあるほど効果が高いわけですね？」

ルガールは深く頷く。

「その通り。人のように知能の高い生き物は特に、使える力に対して防衛本能^{レミッター}がやつが？闘膜^{レミッター}？を掛けている。それを一時的に外すのが？充填^{フィール}？ってわけさ。完全習得した者が使えば大体3割増しの力が発揮できる。3割って言うとピンと来ないかもしれないけど、

戦つてみれば一目瞭然だぜ。実力が拮抗した相手なら尚更な。も一つ付け加えるなら、元々の身体能力が高くなきゃそれほどの効果は期待できない。強さを正確に数値化するのは難しいけれど、子供が50だとしたら+15、大人が100だとしたら+30加算されるわけだ」

つまり、？^{フィール}充填？の効果をも高めるには、何よりも己の身体能力を底上げする事が急務である、とイグニスには理解する。

「今？完全習得？つて仰いましたけれど、大体どれくらいかかるんですか？」

「個人差はあるけど、そうだなあ。お前は筋も悪くないし五年はかからないと思うけれど」

予想以上の長さにイグニスは仰天する。

「ええっ、五年ですかっ？ もっと早く習得できる方法は」

「ねえよ」

やや非難めいた口調できっぱりと言われる。

「世の中そんなに甘くない。つうか、いいか？^{フィール}？充填？は200年くらい前には仕組みもろくすっぽ解明されてなかったから一生かかっても習得できない奴がごまんといたんだぞ。先人の叡智と、労を惜しまぬ努力が結実して習得時間の短縮を成し遂げたんだ。それを利用して貰つておいて、その言い草は少し失礼じゃないか」

「う……」

何という正論。

「勿論、技術つてのは日進月歩するもんだから、いずれは誰もが使える日が来るかも知れないけれど、今は無理。それってというのはつかい石像みたいに、長い年月をかけて大勢の人に少しずつ研磨されて形作られる物だろ？ ナマ言っちゃいかんぜ」

「よし、そろそろ休憩時間終わり。じゃあ保護区内を走ってこい。二周な」

「はいっ」

イグニス は歯切れ良く返事をしてから勢い良く立ち上がる。

遠ざかるイグニスの背中を見失ってから、ルガールは後ろの木に視線を移す。

「別に出てきてもよかつたんだぜ？ アステイス」

太い木の陰から黒いローブを纏ったアステイスが姿を現し、ルガールにゆっくりと歩み寄る。保護区に来るには街道を通らなければならぬため、一般人の目に触れぬように顔を隠さねばならないのである。

「お前はいい教師にもなれそうだな。説明にそつがないしコツを呑み込ませるのも上手い」

「はは、柄じゃねえよ。まあ、気分転換にもなるから偶にはこういうのもいいさ」

アステイスが芝に腰かけたのを見て、今度はルガールが話しかける。

「お前は今何歳だっけ？」

「25だ。ルガールは？」

「多分26。何だよ、そつちが年上かと思ってたぜ」

軽く舌打ちをしたルガールに、アステイスは思わず苦笑する。

「はは、そんなに老け込んでいるか？」

「というよりは、雰囲気かな。まあ、良くも悪くも色々経験し過ぎたって事なんだろうな」

アステイスは何かを言おうとしたが、咄嗟の言葉が出て来なかった。ルガルも、それ以上の言及は避けた。気を遣われているのだと感じたが、不思議と嫌な気持ちにはならない。会ってからまだ三月と経っていないはずだが、ルガルにはアステイス自身、戸惑う程に気を赦していた。自然体の彼と話していると、ジルバート＝ミレンに相対している時と似たような心地になるのである。

ややあつて、アステイスが訊ねる。

「ルガルは、どこ出身なんだ？」

普段はあまり立ち入った事を訊かぬアステイスだったが、何故か目の前の獣人ライカンには興味と親しみを覚えていた。

「俺？ ……さあな。物心付く頃には既に奴隷だったしな」

「……奴隷？」

勿論、アステイスもその言葉の意味は知っているが、現実味がなかった。視野に映る快活な彼の姿と、「奴隷だった」という、どちらかと言えば真逆のイメージを想起させる言葉とが、明らかに乖離を生じさせていたのである。

ルガルは青いスカーフを付けている首を弄りながら片目を瞑る。

「まあ、意図せぬ事とはいえ、俺もアンタの婚約者の話聞いちまったし話してもいいか。俺はさ、メルトラノスからグリューンの奴隷商人に売られてきた　らしい」

数秒ほどの間が生じ、やっと其の言葉が脳に認識される。

「……何だつてっ」

売られてきた。またもや現実味のない言葉に自分の耳を疑い、アステイスは目を丸くする。人身売買はテルネシア帝国の法で禁止されており、アルイールの御代では例外なく死刑に処されていたはず

である。

「そう驚く事でもないだろ？ 中央の監視の届かない南部じゃ日常茶飯事に起きている事だぜ。おそらくはレジア帝国が滅びる少し前から、今に至るまでずっとな。……ライカン、獣人だけじゃねえ。翼人、エルフ、鬼人、それに魚人。……オウガ、マイメイト、亜人の子供……ガキ、ただで密猟業者に狙われる。……」

ああ、密猟業者ってのは、人攫いの連中が自分達の事をそう呼んでいたただけだよ。……詰まる所、俺達は狩猟動物と同程度の扱いってわけ。大人になれば自らの身を守る術も身に付くから捕まる可能性はぐつと低くなるけど、子供の時に運悪く攫われた奴は貴族の玩具として高く売られたり、その能力に応じて過酷な労働に従事させられる。……勿論死ぬまでだ。万が一それが発覚したら今度は連中の首が飛ぶからな。アステイスは、首を鎖で繋がれた奴見た事あるか？ 南部にはそういう憂き目にあっている亜人の子供……ガキ、が腐るほどいるんだよ」

そう言っつて、ルガールは首に付けていたスカーフを外す。彼の首筋には黒ずんだ痣の様なものがはつきりと見え、アステイスはその痛々しさに思わず顔をしかめた。それはまるで、首を吊った痕のようだった。

「小さい頃からずっと同じ首輪付けられていたからさ。成長して首がきつくなつたのと、不衛生だったのとで何度も腫れ上がったり化膿したりしたんだ。おかげで首輪が外れてからも痕が残っちゃった。ははは、……みつともねえだろ？」

「……」
「そんな事はない、と言っつても何の慰めにもならないだろう。アステイスはただ俯き、歯を軋ませた。先程年齢に？ 多分？ という言葉を付けたのも、自分の正確な年齢がわからなかったからなのだと気づき、やるせない気持ちになる。」

「まあ、こつこつ話しているとこつちの気も滅入っちゃうからそれくらいにして、確か俺が8歳くらいの頃かな。ヒツキの旦那に救われたんだ」

「救われた……」

ルガルはスカーフを巻き直しながら話を続ける。

「あの旦那も今はおちゃらけているけど、昔は相当凄かった。

って本人がその口で言ったら胡散臭い事この上ないんだけどな」
ルガールの口吻が微かにアステイスの笑いを誘い、ほんの少し救われた気分になる。

(……強いな)

彼はどうやって、どれほどの努力を要して、目を背けなくなる現実から立ち直ったのだろう。そう思うと同時に、復讐だけを志している自分が物凄く小さく思えてきた。

「旦那は自ら傭兵団を率いて、奴隷商人達の集うアジトに乗り込んで来た。並み居る敵を千切っては投げ、千切っては投げ、だ。まあその光景の凄まじい事、ホント血祭りって言葉がしっくりきたぜ。多分、今の俺でも敵わないだろうな」

「ヒツキ殿がそれ程の達人だとは……知らなかったな」

言われてみれば、豪放磊落なところはアルイルと近似しているかもしれない。彼が剣を振り回す姿も何となく想像できる気がする。

「人は見かけによらないってやつだな。ま、そんな風にして旦那は奴隷商人達を問答無用で皆殺しにし、俺達は檻から解放されたわけだが、こちらら相当酷い目に遭っていたし「はいそうですか」って簡単に信じる気にはなれなかった。所詮は人間、奴隷商人達に代わって旦那が俺達を売るだけじゃないか、そう思ってた」

「でも、違った……」

「……ああ。旦那はあらゆる手段を駆使して子供達を親元に帰してくれたよ。そして、所在の分からない俺のような子供カキに関しては、

ちゃんとした働き口を見つけ世話してくれたんだ。首輪を取ってもらった後、感極まって嬉し泣きしちまった俺をヒツキの旦那は抱きしめながら何度も謝罪したんだ。獣人ライカンは恨み以上に救ってくれた恩を忘れない。だから、旦那が云うんと言わない限りはアンタの事も絶対漏らさない。アンタは旦那の客人だからな」

「そうか、……ありがとう」

「……旦那もそうだけど、アンタも相当変わってるな」

「ん、何故だ？」

「獣人オレに対して自然体で接している。そんな奴あまりいないんだけどな」

「……すまない」

「あん、何で謝るんだ」

「私は　　今まで見せ掛けの平和を享受しているに過ぎなかったのだな。無知以上に、無関心は罪だ」

「んなもん、別にアンタだけじゃねえよ」

アンタだけじゃない。ルガールは慰めのために言っただけだ。自分が自分から口にすればそれは都合の良い言い訳に過ぎない。自分の卑劣さを隠す、単なる逃げの台詞だ。安易に多数に寄ろうとする行為を今まで平然とやってきた己を省みて、アステイスは心から恥じ入った。メリツサの事とは別にして、それがどうしようもなく許せなかったのである。

（私は……忘れていたのだな）

ただメリツサを殺された憎しみのままに帝国を滅ぼしたとして、その後何をするかをアステイスは全く考えていなかった。語弊はあるかもしれないが、彼らの理不尽を許せないならば、それが起こらない様な国を作って初めて、目的の完遂足り得るのではないか。

「……ヒヅキ殿の下にいるのは、恩を返すためのだな」

「勿論。……それだけじゃないけど。ま、湿っぽい話はそれ

くらいにしようぜ。それよりさ、お前傭兵を探しているって言っていたよな。何だったら一度グリューンに行ってみたらどうだ？」

「グリューン……。ああ、確か一度だけ行った事があるな。おぼろげにしか覚えていないけれど、確か町が三箇所トリニティ・ワンに区切られている所だろ」

ルガルは目で肯定する。

「そうだ。あまり知られていないけど、あそこには屈強な傭兵を大勢擁するギルドがある。アクア・ティ・アラっていつてな。二、三度一緒に仕事をした事があるが、幹部クラスの連中に関しては、相当な実力者揃いだ。三重トリニティ・ワンの頂に勝るとも劣らない化け物の巣窟だよ、あそこは」

(……) アクア・ティ・アラ

現時点でまともに戦えば、ルガルは自分よりも数段強い。そのルガルをして化け物と言わしめるとは一体どんな者達なのだろうか。アステイスは俄然興味が出てくる。

「ああ、でも無理か。やっぱり」

「ん、何故だ？」

氣勢を殺ぐような言葉を発したルガルに、アステイスは不思議そうな顔をする。

「……アンタに賞金が掛かっているのをすっかり忘れてたぜ。傭兵なんて目当てでやってる奴が大概だし、そこにアンタがこのこ出て行ったら鴨がネギしょって「誰か、私を食べてくれる人はいますか」って触れ回るようなもんだろ？ なんてったって二十億だし」

(二十億か。 いや)

もし、本当にその傭兵達がテルネシア帝国と互角以上に戦えるならば、金に煩^{わづ}い者達なら尚更、アステイスには一つだけ納得してもらえそうな方法があった。

当然、彼らが目先の賞金に飛び付いて交渉の席に付いてくれない可能性はあるし、交渉が上手く行かなかった時点で自分の命運は尽きるだろう。けれども、他に打つ手がないのなら一縷の望みに掛けてみるのも悪くない。

何気なく口にしたルガールの些細な一言

だが、この一言はアステイス≡フロイデの停滞していた運命を一気に加速させてゆく。

其の三十七 く以毒制毒(表)く

884年 6月20日

コンコン

二階の客室内にノックの音が響き、座っていた女は「どうぞ」と入室の許可を出す。

音を殆ど立てぬようにゆっくりとドアが開き、男性社員が一人入って来る。

「失礼致します。社長、レナー……っ」と

男性社員はハツとして女の向かい側に座っていた男に身体を向ける。

「ああ、これはこれはヒツキ社長。ご無沙汰しております」

男性社員は丁寧挨拶した。しかし、ヒツキは何故か呆気に取られたような顔をする。

「うん、んんん？ ええっとー、確か君は……あれだよ、あーれー」

記憶を探っているのだろうか、頭を捻る仕草をするヒツキに男性社員は少々ムツとしながらも姿勢を崩さず名乗りを上げる。

「イリンガです。以後お忘れな事を願っております」
ヒツキはわざとらしく掌をポンと叩く。

「ああ、そうだったそうだった。思い出したよ」

本当に思い出しているかはほぼノンタイムで相槌を打ったところからして相当に怪しいが、まあどうでもいいか。建物の主、若き女

社長シャナエドゥブオーニユは、眼にかかる長い金色の前髪を掻き分け、傍目には幾分キツそうな眼でじつくりと二人を見比べている。

そしてふと気づいた。同じようにして、イリングは自分とヒツキを見比べている。そのまま話してよいものか迷っているようだった。

「……悪いけれどヒツキ社長。少々席を外して頂いて宜しい？ さっきの話は夕方にでも」

やんわりと「出ていけ」と言われたヒツキは肩を竦めてからスツと立ち上がった。

「了解。なら、十七時に繁華街の西口で待ってる」

「わかったわ、ごめんなさいね」

女は丁重に謝罪する。

帰り際「じゃあまたな、えーっと……そうだった、マリンバ君」としたり顔で言ったヒツキ社長に、イリングは苦虫を噛み潰した様な顔をする。何が「そうだった」だ、自信満々に言ったくせに二文字しかあってないじゃないか。という心の声が聞こえるようであった。

ヒツキが退席し、イリングは扉に鍵をかけてからドゥブオーニユに向き直る。

「改めましてご報告いたします。レナード達からカタルスタでの交渉に目途が付いたと連絡がありました。各町での交渉には土地や経費等煮詰める必要がありますが、許可を受諾できる手応えはあるようです」

ドゥブオーニユは腕を組んで考えている。

「……あるようです、じゃ困るわね。ある程度資金は上乗せできるから、早めに雛型を作るようにと伝えなさい。あれは私の切り札な

の

彼女の強い口調に、イリンガは穏やかに応える。どうやら、このきつめな口調が彼女の平常時のものらしい。

「はい、畏まりました。では報告書にはそのように。それと、もうひとつの件なのですが」

ドウブオーニユは椅子をクルリと90度回転させ、窓の外を見つめる。

「さつき大まかに聞いたわ。皆無事なんでしょうね？」

「……最悪の事態は免れましたが、相当ショックを受けているようですね。無理もありませんけれど……」

ドウブオーニユはそれを聞いて爪を噛む。その瞳には揺らめく焔が灯っている。もう一つの件とは、マリスノリスで暴徒と化した帝国兵に襲われた女性社員の安否についてだった。

助けがもう少しでも遅れていたら、彼女は殺されていたか、そうでなくとも五体満足ではいらなかっただろう。報告にとりあえず安堵すると共に、シヤナエの頭の中にはやり場のない怒りが渦巻いていた。このタイミングで、身内の不手際を気にも止めた様子のない帝国からの金銭要求。堪忍袋の緒が今にもブチ切れそうである。

（もう、悠長な事は言っていられないわね）

ドウブオーニユの蒼眼には強い意志が見て取れる。この選択には社運が、或いはこの忌々しい戦乱の終着点が懸かっているかも知れない。

面白いじゃない、嵐の中の舵取りくらいこなして見せよう

じゃないの。これ以上不当に搾取されてたまるもんですか。……今に、見てなさいよ。

「あ、じゃ、じゃあ私はこれで……」

凍て付く様なドウブオーニユの殺気に、イリンガは部屋の中に身の置き場がなくなり、そそくさとその場を退散した。

十七時十分前。タクロー「ヒツキとの待ち合わせの時間。羽付き帽子に灰色のミニグラスをかけ、念入りに黒髪のウィッグまで着用したシャナエ「ドウブオーニユはアテライデの有名な繁華街の入り口に赴いていた。

夕飯時という事もあって道は相当に混雑している。大通りには相反する行きかう人の流れが二つ出来ていた。一度この中に入ってしまったら、社長の身分も糞もない。ただ人の波を構成するパーツと成り果てるのみである。

「こんな場所でお話なんて随分大胆ねえ。でも、悪くないわ。こんな所に諜報員がいるとは思えないし、盲点とも言える」

感心したように頷いているドウブオーニユに、ヒツキは曖昧に笑う。

「……その言い草は、アンタの提案そのものが大胆って事だねえ。ちよっと怖いなあ」

傍らには、Tシャツにゆったりとしたズボンを穿いたヒツキが立

っている。他人から見れば、夫婦と言うよりは愛人同士といった感じであろうか。まあ、それをお互いが由とするかは別問題なのだが。

ドウブオーニユとヒツキは示し合わせたように左側一方通行の波へと身を投じる。人垣と言う名の牢獄に入れられた二人の護送がゆっくりと開始された。

辺りには外国の料理屋、有名な風俗店、遊技場などが軒を連ねており、間隔の短い街燈が通りを昼間の様に明るく照らしていた。この繁華街は会社帰りのサラリーマン、恋人同士、家族連れも多く訪れる、アテライデで、否、テレジア大陸で最も活気がある場所の一つである。

二人は人の流れに身を任せながら、蠢く喧騒ごもの中、ゆっくりと歩いて行く。自分のペースで歩けないのは幾分ストレスが貯まるものだが、話しながらならあまり気にならない。

「まずは、確認しておきたいんだけど。……彼は元気かしら」
間が空いて、ヒツキはゆっくりと訊き返す。

「……何の事だ？」

「惚けても無駄。動揺しているでしょ。歩調が少し早まってるわよ」
「……ぼちぼちだ」

ドウブオーニユの鋭い観察力に舌を巻きつつ、ヒツキは無然と答える。

「そっ、ならいいわ。安心して、別に脅しのつもりはないわよ。彼とは顔見知りだから、ただ確認したかっただけ」

そう言っって彼女はにっこり笑う。

(なんだかなあ……)

会話の主導権を相手に握られるのはヒツキの性分に合わなかったが、とりあえずは話だけでも聞かねばなるまい。

二人が人の流れに身を任せる間も、繁華街の通行人達と擦れ違っ
て行く。この喧噪の中では正確な話が漏れる心配もなさそうである。
ここからは商談だ、とドウブオーニユは辺りを窺いつつ、最大限に
注意を払って言葉を選ぶ。

「お爺ちゃん。もうご老体だし、そろそろ休ませてあげた方がいい
んじゃないかしら」

思考が二回三回と空転し、その言葉の意図をやっと察したヒツキ
は絶句する。？休ませる？、或いは？寝かせる？という言葉は、昔
からアテライデの商人同士で使われてきた死を仄めかす暗喩でもあ
る。つまり、彼女は？お爺ちゃん？を暗殺した方がいいのでは、と
提案しているのである。そして、彼女が？お爺ちゃん？と言いそう
な人物には唯一人心当たりがあった。経通の目の上のたんこぶ、ア
テライデの恥部ことバイロン＝テレジアである。

彼は先帝の叔父であり、帝国の文官時代から悪い噂が絶える事は
なかった。定年を過ぎたと思ったら天下りみたいな真似をして経通
の十一人理事の空いていた椅子に滑り込み、東西戦争の折にはアテ
ライデの独立を促した張本人でもある。今にして思えば、あの件は
ブライジウスと何らかの密約があったのだろう。少なくとも、アン
ドレイがあのまま勝っていればこんな莫迦らしい戦争は起こらな
かつたし、この戦争の元凶と言っても過言ではない。

どう返答したらよいか迷っていると、ドウブオーニユは目を細め
てこちらの横顔を伺っている。ヒツキは軽く溜息を付いたつもりだ
ったが、緊張感からやや大きめの音が出る。

「とはいえ、だ。お爺ちゃんは大勢の怖いお兄さん達に囲われているんだぜ？ 気軽に訪ねても門前払いを喰らっちゃう」

暗殺を仄めかすくらいだから、身辺調査も済んでいるはず。彼がブラージウスから三重トリニテイ・ワシの頂を借り受けている事くらい既に把握済みだろう。

「そうかなあ。お爺ちゃん、最近惚け始めているみたいだし、夜な夜な徘徊もしているみたいよ？ そんな状態なのに、必死にお仕事にしがみ付いている姿を見ていたら、私どうにも辛くなってきた」

惚け始めて、というのは十一人理事に対するふざけた臨時徴収の事か。或いは護衛の腕を過信して油断しているという事か。夜な夜な徘徊している、という後文から推察すればおそらくは後者、或いは両方。夜の町を金に任せて遊び歩いている、という事だろうか。

好色で悪名高いあの爺の事だから、ほぼ間違いなく、我々から掻き集めた金の何%かはブラージウスに渡さず、ちゃっかり自分の懐に入れていただろう。俺達の血と汗と涙を湯水のように使い、若い姉ちゃん達と毎日のように愉しげな事をやっているのだ、と考えると確かにムカついてくる。否、殺意も湧くというものである。そう言えば、名君と謳われたアルイルも、相当な好色家と言って差し支えない人物だった。ブラージウスといい、テレジアの家系には大なり小なりそういう傾向があるようだ。

仕事に、つまり経通の十一人理事の椅子に固執している奴を見ると彼女の腸はわたが煮えくり返りそうになる、という事らしい。それも多分に同意する。奴がいて得した事など一度もないと断言できるのだから。

ヒヅキは頭を整理しつつ、答えのわかっている質問を念のため確認する。

「あー、やるなら引退セレモニーの準備をしなきゃいかんわけだが。それ、誰にやらせるつもりだ？」

「そんなの……言わなくてもわかってるでしょ。何のために前振りしたと思ってるのよ」

やはりか、とヒヅキは複雑な表情を浮かべる。

「しかし、アイツはなあ……」

「貴方らしくないわね。今起きている揉め事は少数の人の思惑違いのせいだけど、本来個人的事情を忖度するべきではない。誰かが幹事を務めて音頭を取らなきゃ。以前の彼主催のイベント、凄惨な反響だったでしょ？ 彼なら取り纏め役として適任だと思うし、後で私から個人的に労いもさせてもらうつもりよ」

(ぐう……)

よくもまあ、弁が立つなと、ヒヅキはやや苦い顔をする。若くして大企業の看板を背負っているだけはある。今起きている戦争はごく少数の者達による思惑で動いているが、本来戦争なんて一人二人の利害関係や個人感情で起こすべきではない。

現状、アステイスは燻っているたくさんの蠟燭に一気に火を灯す事が出来る唯一の人物であり、それは以前マリスノリスの一件で起きた周囲の反応で証明されている。勇名を馳せたアステイスはフロイデがバイロンはテレジアの殺害をも成し遂げたとなれば、反帝国勢力に強烈な追い風が吹くだろう。バイロンが帝国軍のパトロンなのは周知の事実なのである。

そして、彼女はバイロン暗殺の先をも見据えている。いつかアス

ティス「フロイデが帝国に対して事を起こした時は、暗殺の見返りとしてドウブオーニユ社も陰からバックアップを惜しまない。ギブアンドテイクというわけだ。

それでも万が一失敗した時は、アステイスに責任を擦り付ける心積もりであるのは明白であるが。詰まる所、彼をアテライデの防壁として利用したのである。

「もう綺麗事を言っている場合ではないと思うの。私一人が心を痛めるだけでアテライデの皆さんが救われるなら、喜んで犠牲になるわ」

最後に少し突っ込んだ台詞が出てきたが、それは中心街に至り、周りの喧騒が増したからであろう。偽善的な台詞と共に目が潤んできたのは瞬きの回数を一気に減らしたからだ。きっとそうだ。

(……さて、どうすっかな)

会話が進むにつれて彼女の目が爛々と輝きを増してきている。勿論、気分が高揚する様な提案をしている事も影響しているのだろう。きっと彼女の脳内では、無数の算盤がパチパチと音を立てながら損得勘定と自分の説得度とを叩き出している事だろう。

だが、確かに彼女の言う事はいちいち理に適っている。バイロンが消えれば抑えつけられていた十一人理事も反帝国の流れに乗りやすくなるだろうし、今までは彼を通じて帝国に脅されていた、という言い訳を東諸国に対して用意できるのも大きい。

一旦帝国との同盟を破棄してしまえば、腰の重い他の理事達も一蓮托生を迫られ、腹を括るしかなくなる。バイロンとブラージウスのせいで被った損失についての記憶も新しいし、同じ愚は繰り返したくないはずだ。

「……一応、相談はしてみる。俺もこのまま手を拱こまねいてはいられないとは思っていたからな。多分アイツも否いやとは言わないだろう」

「了解」

予想していた受け答えなのだろう。ドウブオーニユは先程のわざとらしい目の潤みを一瞬にして消してみせた。全く末恐ろしい女である。

高い確率で、帝国を相手にするならば自分達も手痛い出費を余儀なくされるだろう。だが、この戦争が始まってからというもの、減益という減益を見慣れてしまい、金銭感覚も壊れかけている。今となつては、数十億ギラの二つや二つ惜しくはない

(わけがない)

やはりヒヅキは根っからの商人であつた。

「但し」

ヒヅキは歩きながらも胸の前に人差し指を立てる。見返り無ただしでは動かないのが商人の矜持であり、それを同じ商人である彼女もわかつているはずだ。

「但し……何？」

「一つ頼まれて欲しい事がある。これをやっておくとやっておかないとでは、後の流れ方が随分変わる。勿論、アンタの目論見にとつても、だ」

ドウブオーニユはヒヅキの説明を聴き終え、軽く頷く。

「少し時間をくれるなら、問題はないはずよ」

「いいだろ。あと一つ、最近やって来たお兄さん達は何人いる？」

「増えていなければ、四人」

(四人か。……少し面倒だな)

もしかしたら、もう一人か二人いる可能性も考慮しなければなら
ない。冷静に考えて、実行犯が一人か二人では無理がある。被害を
軽微で済ますには、少なくとも同数以上、達人クラスマスターに近い使い手
が必要である。心当たりがないわけじゃないが、依頼を聞き入れて
くれる保証はない。

「お兄さん達とじゃれ合うには少しばかり準備が要るぜ。最短でこ
れくらいはかかる」
そう言っつて、ヒツキは歩きながら右手の平に左の人差し指を置い
た。

(六……週つて事はないわね。月……半年か)

「いいわ。それくらいは許容範囲よ」
満足そうに頷いた彼女の顔を確認し、ヒツキも表情を崩す。

「あいよ。じゃあ、理事会でな」

ヒツキはそう言つと一瞬にして人混みに紛れ込み、ドウブオーニ
ユの視界から掻き消えた。

其の三十八　く取り扱い注意（表）く

884年　6月24日

「わかった。そういう事情であれば引き受けよう」

タクロー＝ヒツキの邸宅でシャナエ＝ドゥブオーニユとの密談の仔細を知らされたアステイス＝フロイデは、バイロン＝テレジアの暗殺を二つ返事で引き受けた。元々自分を利用して貰う腹積もりであったのであるから断る理由はない。むしろ、渡りに船である。

ヒツキの話の内容を反芻していたルガールが一つ素朴な疑問を呈する。

「……でもさ、ヒツキの旦那。流石にアステイスと俺だけじゃ無理だろ？」

ヒツキは機敏に頷く。

「厳しいだろうな。そこで、お前に一つ頼み事がある。グリオに乗ってグリューンに出向いて欲しい。あいつもずっと倉庫に閉じ込められているもんだから、かなり機嫌が悪いみたいでさ。少し外の空気を吸わせてやらんとな。クロマチ方面に南下してから西の山脈を越えて行けば、帝国兵に見つかる事はまずないだろう」

アテライデの南に位置する港町クロマチはアテライデ領内であり、田舎でもあるため帝国の監視はかなり薄い。距離的に少し遠回りにはなるが、安全な道を進んだ方が旅路は遥かに楽だろう。

「了解。 えっと」

ルガールはアステイスと顔を見合わせる。

「……ヒヅキ殿。 出来れば、私もルガールと一緒にいきたいのだが

……」

「……へ？ いや、そりゃ駄目だ。俺が頼むのは」

「 ああ、旦那。 アクア・ティ・アラの話はアステイスにしてあるぜ」

ヒヅキはルガールに視線を移し、直ぐにアステイスに視線を戻す。

「ならわかるだろ。 連中は列記とした傭兵だぜ。 賞金首のアンタが

ノコノコ出ていけば」

「 わかっている。 ちゃんと顔は隠していくつもりだ。 一度グリーンという町とその成り立ちとをこの目で確認してみたい。 それから、暗殺の話とは別に個人的な依頼を頼みたいとも思っている。 その場合は自分から出向くのが道理というものだろう。 どのみち、ここにいたって彼らと顔を合わせる事になる。 私が実行犯になるのだから」

流暢に説明するアステイスに、ヒヅキは少し考え込む。

(個人的な依頼、ね)

直ぐに内容を察する事はできたものの、深くは追求しない事に決める。 一応、その辺りの分別は弁えているつもりだし、アステイスが無駄な危険を冒さない男だという事も理解している。

「旦那、俺は別に構わないよ。 アステイスにはどこかに隠れて貰っておいて、俺が物分かりのよさそうな幹部に話を付けるから」

ルガールの後押しに、ヒヅキは渋々頷く。

「うーん、そこまで言うなら……。 でも、ホント気を付けてくれよ？ アンタがやられちゃったらかこっこの計画が全ておじゃんになっ

ちまつんだから」

どうやら、想像していたよりも自分の双肩に背負う荷物は重いらしい。アステイスは無意識のうちに乾いた下唇を舐めた。

深夜、筋雲が薄らとかがった三日月の下、早めに就寝していた二人は起床した後、寝室を出て離れの方へと向かう。今の状況で昼間に翼獣グリフォンに乗って移動するのはいくらなんでも悪目立ちするだろうと見越し、夜を待って移動する事にしたのである。

しかし、離れとは言ってもそこは大富豪の邸宅。そんじよそこらの距離ではない。見事な石庭に足を踏み入れ、砂利道を進んで邸宅から遠ざかる。疎らにある背丈の低い枯木と淡い色をした天然石が月明かりに照らされてその色彩を様々に変化させ、渦巻き模様が描かれている砂利の海に漂っている。ザツザツ、という細かい石砂を蹴る音を立てながら、アステイスはその手に大きな布包みを持ち、石庭の美しさに眼を奪われながらルガールの後に付いてゆく。

「そう言えば、物分かりの良さそうな幹部って具体的に心当たりはあるのか？」

アステイスの質問に、ルガールは足を止めずに少しばかり考える素振りを見せる。

「そう……だな。どいつも癖はあるけれど、悪い奴じゃないと思うぜ」

そう言つて、ふとルガールは三年程前に会つた碧髪の若いエルフの事を思い出す。皮肉屋で、人間嫌いで、目上に対しての態度がなつていない、相当に不躰で鷹揚な奴だった。或いは彼だけは、交渉自体が困難かもしれない。もつとも、人間嫌いにのみ言及すれば、亜人としてはごく普通の水準とも言えるのだが。

しかし、若くしてアクア・テイ・アラの幹部に名を連ねているだけあつて腕は良い。魔法の破壊力もさることながら、その使用法について驚嘆すべき応用力を垣間見せた。彼は所謂戦術的才能を裡に秘めていたのである。

「そつえば肝心な事を訊いていないんだけど、説得出来る当てはあるのか？」

「ある」

アステイスは即答したが、その小気味良い返事に反して、交渉が上手くいく確率はせいぜい五分五分、或いは四対六で分が悪いと考へていた。

「へえ、自信満々だな。教えてくれよ」

「ヒヅキ殿にも伏せておいて貰えるなら話してもいいぞ」

「うへ。うーん、いくらなんでも旦那に隠し事はなあ……」

ルガールが少々躊躇うのを横目で見ながら、アステイスは即答できないう質問をそうと知りながら彼に放つた自分に、僅かばかりの罪悪感を喚起される。

「それならそれでいいさ。どうせいずれヒヅキ殿にも話す事になるからな」

救いの言葉を聞くや否や、ルガールの目が闇夜に煌めく。

「いや、まで。いずれ話すなら今訊いておく」

どうやら好奇心に勝てなかつたらしい。アステイスは頬を緩ませ

ながら、要点を手短に、簡潔に説明する。ルガールはふんふんと相槌を打っていたが、ある言葉に敏感に反応する。それもやはり、大体はアステイスの予想した通りの反応であった。

「フリューゲルに……。その話、ホントか？」

「ああ。それを知っていれば、アンドレイも食糧難に陥る事はなかっただろうし、ブラージウスだってわざわざバイロンと協力する必要もないはずだ。アルイール亡きあと、それを知っているのは

」

自分だけだと言いかけ、アステイスは言葉を呑み込む。或いは、ガツシュ!! エウゲンも知っている可能性があるのだと気付いたのだ。彼も、先帝とはそれなりに親しかった人物である。

(だが……)

しかし、もし仮に彼がそれを知っていたとしたら、主君であるブラージウスにとくに進言していても不思議ではない。のだが、今の所そんな様子は皆無である。やはり杞憂だろうか。アステイスはエウゲンの動向について、今一つその意図が読めなかった。

「エウゲンは昔から、誰にも予測をさせぬ動きをする事がまある。思考が固定概念の範疇から少しズレているんだ。ま、そこが面白くもあり、俺がヤツを気に入っている理由でもあるが」

これはアルイールが生前口にした言葉である。しかし、アステイスから見れば、少なくとも大勢に身を寄せる今の彼は俗物にしか思えない。確かに昔は彼の機知にハツとさせられる事もあったが、或いは四十を越えて先帝を唸らせていた思考に靄がかかったのである。アステイスは歩きながら黙考する。

思考を巡らしているうちに、離れの屋敷が二人の視界を席卷してきた。自分の屋敷、もうとつくに焼失しているが、その二倍はありそうである。軽く二十人は住めそうな屋敷を前に、アステイスはヒツキが紛れもなく大富豪である事を再認識させられた。

(ん……?)

屋敷の目と鼻の先にきて、ふいに何かがぶつかるような音が聴き取れた。ルガルに従って屋敷の脇にある、青々とした芝生に囲まれている大きな倉庫に向かうと地鳴りのような音が耳に入ってきた。どうやら、閉じ込められている翼獣^{グリフォン}ことグリオが壁に天井にと体当たりしているらしい。鈍い衝撃音が一定間隔で二人の鼓膜を、ついでに足元を振動させる。よく壊れないな、とアステイスが呟くと、ルガルは既にこの倉庫を二度建て直している事を説明した。どうやら、グリオの飼育料は一般人の生涯収入を易々凌ぐものであるようだ。

942

ドーン、ドーンと地の底から聞こえてくるようなその音に、ルガルは頬を掻きながら空を仰いだ。

「まいった。……こりゃ相当にご機嫌斜めだぜ」

アステイスは、マリスノリス急襲の際にグリオの背を貸して貰った時の事を思い出す。あの時はずっと大人しくしていたのだが。

「……前はすんなりいったけど、本当にこんな状態で乗せてくれるものなのか？」

ルガルは腕を組みながら首を捻る。

「……うーん、いきなりは難しいかもな。シーナの嬢ちゃんだったら余裕だろっけれど」

「シーナの嬢ちゃん？」

聞き慣れぬ固有名詞に、アステイスは反射的に訊き返す。

「ヒヅキの旦那の姪っ子だ。雄雌かわらず、やたらと動物に好かれる特異的な体質の持ち主さ。猛獣を手懐ける天才なんだ」

アステイスは目を丸くする。世の中にはまだまだ知らぬ事が多々あるようだ。

「それは凄いな。一度会ってみたい」

「機会があれば、きつと旦那から紹介するよ。……それより、飯は持っているよな」

「ああ、しかし　こんなに食うのか？」

アステイスは自分の持つている包みに目を移す。ルガール曰く、グリオの機嫌が悪い時の切り札。秘伝の味噌ダレに三日間漬け込んだ鹿の生肉10kg。地味に重いそれを手に持ち、アステイスは少々戸惑い気味であった。

「多分、な。でも扉を開けた直後は気を付けるよ。俺達を餌だと勘違いしかねないから」

サラリと洒落にならぬ事をルガールは口にする。気を付ける、と言われてもどうすればいいのか。どうやら今この中にいるグリオは、以前その背中に文句ひとつ言わずに乗せてくれた温厚なグリオさんとは別人、もとい別翼獣であるらしい。

二人が扉の前に立った時、キョホーン、という世にも恐ろしいげなくしゃみにも似た鳴き声が辺りに木霊す。鋼鉄の扉を介して、振動が肌にビリビリと伝染する。

警戒感を最大限研ぎ澄ますルガールの唾をゴクリと呑む音が聞こ

えた。

「よし、扉を開けたのを見計らって肉を放り込んでくれ。そしてたら一旦閉める」

「わかった」

「じゃあ、いくぞ。いつせーの……」

せつ。

引き戸が開き、タイミングを図ったアステイスが下手投げの構えで肉の包みを後方に振り被り

ビリィッ

刹那、薄い布袋が悲鳴を上げ、引き続いて後方に鹿肉が散らばった。どうやら重量及び容量的に無理があったようだ。

(……ば……馬鹿なっ)

辺りにはかくかわしい味噌じゆの麴こうの香りが

「だあつ、おまつ、何やってんだよっ」

異常に気付き、ルガルは扉の取っ手を掴んだまま非難の目だけをこちらに向けた。その台詞は勝手に破れた脆弱せうじやくな布袋に言っつて欲しかったが、まずは事態の收拾を試みる。謝罪と応急処置だ。

「す、すまん。それより扉を閉め」

直してくれ、と言い終える間もなく、グリオが扉が開いているのを見咎めたのだろう。その鋭利な双眸なつめを赤く光らせ、次の瞬間には巨大な影が猛然とこちらに向かってくるのが開いたドアの隙間から

見え、アステイスは口を半開きにしたまま硬直した。

クアツクアツ

「って、うわわわ
」

グリオの接近に気づいたルガールは慌てて扉を閉め直そうとしたが時既に遅し。凄まじい勢いで滑空してきた白き猛威は、ルガールに閉められかけている鋼鉄扉を、取っ手を握っていた彼ごと強かに弾き飛ばす。大きめの蝶番ちようつがいが耳障りな摩擦音を立てて軋み、ルガールの身体がアステイスの視界を勢い良く横切った。一方のグリオはそのまま低空飛行を維持し、庭木にぶつかると寸前に大きな翼をバサバサとはためかかせて弧を描く様に上空に舞い上がると、闇夜に大きな鳴き声を轟かせる。

クアツクアツクアーン

勝利宣言を連想させる小気味良いグリオの鳴き声を耳にしながら、仰向けと万歳とを足した不本意な格好で倒れている仏頂面のルガールを見て、アステイスは力一杯申し訳ない気持ちになるのだった。

其の三十九　　平凡なる将（表）

884年　6月25日

マリスノリス城

漆黒の帝国軍衣を纏っている初老の男がゆっくりと廊下を歩く。顔には深いしわが刻まれているが、年齢は四十八と定年を迎えるまでにはまだ間がある。ふさふさとした白髪に埋もれた頭皮、反して身体は身長184cmと相当高く、痩せていて浅黒なので、体型のみで判ずるならば彼は間違いなく健康そうに見える。蛇足だが、十年程前までは如何にも文系といった、深層の令嬢にも劣らぬ艶やかな白磁の肌色をしていた。

等間隔に並ぶ嵌め殺しの窓からは太陽からの射光が穏やかに降り注いでいて、床に白く四角い領域を連ねている。温い空気に当てられて微かな眠気を催すも、小さく口を開けて頬の筋肉を突っ張り、^{あくび}欠伸を最小限に抑える。だが、目に滲む涙までは抑えられなかったため、胸ポケットからハンカチーフをそそくさと取り出し、目尻にこびり付いたそれを丁寧に拭き取る。

ブラージウスに出頭を求められた第二軍大隊長ゴードン・ベントニックスは、歩きながらも主君の顔を思い浮かべ、次には大量の疑問符を頭にくつつけていた。この状況で自分に対して、何の要請をするつもりかが皆目見当が付かないためである。

第二軍大隊長ゴードン・ベントニックス准将は一癖も二癖もある帝国軍将の中で、特に異質な存在である。仮に第七軍大隊長ジルバート・ミレン将軍が彼に言及するなら、まずこういう切り口になるだろう。

彼は元々文官出身であるが、表立って軍才を発揮するような事はなかったし、当人の戦闘能力も十人並。第一軍大隊長コステイ・ブラームス将軍のように以前からブラーレジウスに擦り寄っていたわけでもないし、大きな偉業を成し遂げたわけでもない。かといって、人望に厚いかと訊かれたら「うん」と首を捻らざるを得ない。有り体に言えば、彼は平々凡々な人であった。つまり、普通に考えれば凡庸たる彼が軍の最高位に極めて近い准将の位に上り詰めている現状こそが異常事態なのである。

ゴードン・ベントニックスは文官時代にこそ、ブラームスと幾度もやり合った過去を持つが、ある日、ブラームスの陰謀によってあらぬ汚名を着せられ、アルイル帝に遠い南の砂漠地帯にある鉱山町、キキヨウに異動するよう申し付けられた。憎き政敵の顔を思い浮かべながら失意の日々を過ごしていた彼は、持て余した時間を何事かに活用できないかと思い、ある時から砂漠に埋もれている鉱物や宝石等の天然資源を採取し始めた。

年々黒くなっていく己の肌を見ながらベントニックスは、このまま灼熱の日差しを浴びながら干からびて一生を終えるのだろうと半ば諦めていた。

そのうちにアルイーノ帝が病で亡くなり、ふと気づけば自分の預かり知らぬ所で東西戦争なる大仰な兄弟喧嘩が起きていた。わけも判らぬまま大陸は真つ二つに分け隔てられており、コルトパ領が西軍に付いたために、コルトパより西のキキヨウが東軍に付くのは物理的にも精神的にも不可能であつた。つまり、形だけは西軍に付いたわけである。

幸か不幸か、砂漠の奥深くに位置するキキヨウは主な前線から遙かに離れており、馬も活用出来ぬような過酷な環境であつた。そんな僻地に滞在している兵の数などが知れているため、兵力として当てにされる事もなかつたから戦地に呼び出される事もなかつた。特に巻き込まれる要因も見当たらなかつたし、実際に巻き込まれぬまま東西戦争は終結した。

世間の潮流から置いていかれるばかりだつたベントニックスは、このままのんびりと余生を過ごすのも実はそんなに悪くないのではないかと考え始めていた。ところが再び戦争が始まり、アステイス^{II}フロイデの失脚と前後するようにして、殆ど面識のないブラージウスから突如、招集と昇格通知とを受けたのである。

彼が何故ブラージウスに取り立てられたか。それについて第七軍大隊長ジルバート^{II}ミレンは、二つの仮説を立てていた。

一つは、南部の地理に明るい者が少なかつたという点。南部の者達の気骨は概して大らかで喧嘩つぱやく、頑固な者が多い。かくいうネルガルで横死したモートン^{II}エルゲートも南部出身である。そういう将校達は東西戦争の折、殆どが東軍のアンドレイに与くみしたため、南部の事に詳しい人物が殆どいなくなつてしまつたのだ。

ブラージウスがブラームスに謀略を持ちかけられなければ、おそらくアステイス^{II}フロイデとシュヴァイ^{II}オルトフが南部の地を治める事になつていたのだらうが、結果としてアステイスが離反して

しまつたため、急遽代わりの人物を用意せねばならなくなつたのである。長年僻地で暮らしていた人物に白羽の矢が立つのは、ある意味必然とも言えた。

今一つは、確信というよりも邪推により近いかも知れぬ。彼は南部に居る時にいくつもの鉱山を買い漁つており、多くの鉄工場も傘下に行っている。つまり、今後不足するであろう様々な金属製品の大規模生産を可能にする環境を持つていたのである。

平和な時代にはそれほど必要のなかつた武器防具だが、三百年振りの戦争が起きてから爆発的に需要が高まつた。事実、鉱石、石炭等を始めとした原材料の価格はひたすらに高騰し、元から軍事産業に類する会社を営んでいた者は正に濡れ手に粟の状態であつた。ブラージウスは長い戦争で多くの者達の財力が疲弊すると予測した一方、ベントニックスの財力が一気に増大するのを見越し、近い将来にテルネシア屈指の貴族となる可能性を鑑みて、今の内に恩を売つておこうと思つたのでは、というのがジルバートの主たる予想であつた。

事無かれ主義を具現化したような彼にとってはおそらく、退屈を嫌い、平穩を乱したがるブラージウスの人柄をあまり好ましく思つていないのは確かであろう。けれども、大勢に順応するという、如何にも貴族の鑑らしき彼の習性が、自己保身を求めつつも権力から遠ざかる事を由としなかつたのである。或いは、ブラームスへの恨みも多分にあつたのだろう。自分を貶めたブラームスが皇帝の第一の家臣として贅沢を享受している事を許せぬ思いがあるとしても全く不思議ではない。

謁見の間にある金飾が施された王座に深く腰掛けているブラージュウスを見て、呼び出されたベントニックスはゆっくりと屈みこみ、開けているんだか開けていないんだか判り難い細い主君の目を窺う。傍らに控えているブラームスはピクツピクツと頬をひくつかせたものの、嫌悪感を露骨に表に出すのは差し控えているようだ。但し彼なりに。

「……えー、……お呼びでしょうか。陛下」

「ふむ、来たか。まあ楽にせよ」

「……はあ」

一言を交わしてからベントニックスはスツと立ち上がる。言動がゆったりしているせいか、落差でごく普通の動きが相当素早く見えるのは彼のささやかな役得であろう。

「実は、これからお主にグリーンへ赴いてもらいたい」

即答を避け、ベントニックスは数度瞬きをしてから中途半端に握った拳を口元に当てる。

「……んー、……グリーン、でございますか。……何か、動きでもあつたのでしょうか」

それを聞いてブラージュウスはつい先日、ブラームスとベントニックスがシャンテールとマリスノリスとで意見を戦わしていた事を思い出すも、浮かびかけた記憶を叩き潰した。

「実は、グリーン^{くみ}の軍が同盟軍との合流を画策している、と諜報員から報告があった。日和見の勢力が敵に与するのをこのまま捨て置けば、後々厄介な事になるかもしれぬ」

集団的安心感の獲得。皆で戦えば怖くない。きつと誰かがやってくれる。どうやらそれは人の感情を極限まで開放する、又は極限まで抑制する戦争でも同じ事らしい。いつもどこかで誰かが漁夫の利を狙っているのを知らず、自分は利用する側だと、自分だけは大丈夫だと信じて疑わぬ。そしてものの見事に足元を掬われる。狙い済ましたかのようにバナナの皮を踏むのだ。見ている人間は見られている事を忖度そんたくしてない事が往々にしてある。

「……なるほど。……んー、……つまりはそれを阻止すると共に見せしめにせよ、と言う事でございませうか」

ブラージウスは重々しく、悪く言えば尊大に頷いた。

「中々理解が早いな。今回は三重トリニティ・ワンの頂を四名預ける。貴公に何かあつては不味いからな」

ベントニックスは眉を上げる。おそらくはどこまでがブラージウスの本心なのか、判断が付きかねているようだ。実を言えば自身、彼にとつてそれ程の価値があるようには全くもって思えなかつたのである。

とはいえ、彼に逆らうという選択肢は様々な要因、主には皇帝の絶大なる権限により封殺されている。悩みはしても、結局採るべき道は一つしかないのであつた。

「……畏まりました。……では、急ぎ準備いたします」

ベントニックスはおずおずと頭を下げる。

「うむ、良き知らせを期待している。下がってよいぞ」

ベントニックスが退席した後、ブラームスがおずおずと口を出す。「僭越ながらブラージウス様。あ奴如きにグリーンが落とせますでしょうか。出来れば私が行った方が宜しいのではないですか。奴

はまだ戦の素人同然。大幅に被害を出す事も有り得ますぞ」

一件筋の通っているブラームスの意見を聞いて、ブラーヂウスは浮かんだ失笑を咳払いで隠す。

ならば貴様は自分が戦の玄人であると申すつもりか。高々一年少々で、しかもエアリア如きを陥落せしめるに六日間を要し、魔道部隊まで投入した貴様が。

「ブラームス。貴様はいつの間に余の采配にケチを付けられるほど偉くなったのか？」

表情を消したブラーヂウスは、その言葉に全ての悪意を込めてブラームスの胸に突き立てる。ブラームスは何かを言おうとしたが言葉が掠れて出て来なかった。

マリスノリスでは、グリーンに派兵する準備を整えつつあった。七月を迎えようとしている今も気候は穏やかであり、進軍するのに問題も見当たらなかった。

そして来たる884年6月27日。奇しくもアステイスがアテライデを出立してから僅か二日後。帝国軍の第二軍大隊長ゴードンⅡベントニックスはブラーヂウスの命に従い、二万の軍を率いてマリスノリスの南東、グリーンへの進撃を開始したのである。

其の四十　く流人の終着点（表）く

大陸東部と南部の淵にあるグリユーン。南部の大森林に通じる入り口であり、テレジア帝国の御代から亜人達との親交が盛んであったため、彼らが比較的多く住まう町である。この町には城という程の建物がなく、町の北部に位置する貴族街、町の中心部に位置する平民街、そして町の南部に位置する貧民街の三層に分かたれている。

山の手の貴族街には、他の都市に比べれば比較的小じんまりとした、それでも荘厳な王宮の他に、上流階級の者達が住まう煌びやかな色彩の屋敷が立ち並び、治安の維持も衛兵達によってしっかり守られている。

低地の平民街には、所謂集合住宅いわゆるが立ち並び、町の広場には噴水や市場があり、ささやかな娯楽施設等が立ち並びといった風合いである。個人商店や露店も多く、それなりの賑わいを見せている。

最後の貧民街は、前述した二つの街とは一線を画している。平民街との隔壁には有刺鉄線が張り巡らされており、公民が全く立ち入らない地域であるが故に、公園等の公共施設も一切なく、廃棄された資材を持ち寄って作った住宅が秩序なく建てられ、そのおかげで道が相当に入り組んでいる。そして、亜人達の大部分が住んでいるのもこの貧民街である。テルネシア帝国の御代になってからというもの、彼らは半ば押し込められる様にしてこの場所へと追いやられたのだ。

貧民街では国の衛兵達の介入は一切なく、十分歩けば強盗に当たる、と揶揄されるほどに治安も著しく悪いとされている。以前は取り締まりの衛兵が足を踏み入れる事もあつたらしいが、此処では兵士すら強盗の対象になる。むしろ、一時は支給されている鎧や剣な

どを狙つて集団での兵士狩りが横行していたくらいだ。だが、例外を除いて窃盗、或いは強盗の標的にされるのは外部から迂闊うかつにも侵入してきた者達だけである。これは決して義賊を気取っているわけではなく、貧民街に住んでいる住民から奪える様なものが何も無いという非現実的な現実が大前提として存在しているためだ。

此処には亜人達だけでなく、行き場を無くした数多くの者が住まう。刑務所より脱獄した逃亡者、世捨て人や孤児みなしこ。最近では戦乱により家を、或いは家族を失った者達も多く流れてくる。無法者、荒くれ者が多いだけに日々いさか諍いが絶える事はないが、潜在的な仲間意識で言えば、貧民街に住まう者達の結束力は多分に力強い。徒党を組み、力を誇示して暴挙を働くような輩も偶にいるが、最低限の秩序をも乱す愚か者は、例外なく何かしらの形で人知れず追放、若しくは抹殺される事になる。とあるギルドに所属する者達の手によつて。

884年 7月21日

貧民街の高台にある、子供が無秩序に重ねた積み木のような、歪とも革新的とも取れる建物の屋上に、翼人バーディアルの男と獣人ライカンの女が佇んでいる。

「帝国軍がここに辿り着くまで、後四日といったところですね」
偵察から戻つて来るなり、学者肌の翼人バーディアル、ノス・トゥリは獣人ライカンの女にそう告げた。やや背は低めで骨格はしっかりとしており、線の細さは感じさせない。口ゼ色のショートカットが屋上を吹き抜ける

強い風に靡いている。白い翼を背負い、黒縁の眼鏡をかけているが、レンズは入っていない。本人曰くお洒落のつもりらしい。実際、翼人で眼鏡をかけているのは彼くらいのもものだろうからその希少性は高いのかもしれない。何しろ翼人の視力は平均で5.0。これは5km先にある30cmの大きさの物を見つけられるということだ。

「……やれやれ、あの三人が欠けている時に来るとは、な」

インディゴ色のポニーテールと褐色の肌をした、女にしては上背のある獣人は、ゆっくりと天を仰いだ。卵型の小顔に鍛え抜かれたしなやかな身体。筋肉質だが堅そうな印象はあまりない。均整のとれたプロポーションは如何にも画家達の創作意欲を掻き立てそうだが、鋭い眼光としかめ面に近い顔は賛否がわかれそうである。髪の中から覗く三角耳もチャームポイントの一つであろう。

「……泣き言を口にしても始まりませんよ、オルフィ。確かに今のままでは、多くの犠牲が出る事は避けられそうにないですが、ね」
ノス・トゥリは起こりうる悲劇を憂いて瞑目する。

間が空いて、オルフィは視線をノス・トゥリに戻す。

「中級以下の傭兵達はどれくらい残っている？」

「7割と言ったところですよ。まあ、戦う前から尻尾を巻いて逃げる様な連中は初めから戦力として考えるべきではありませんし。久しくふるいにかけていなかったから丁度良かったかも知れませんが」
オルフィは納得したように頷く。

「7割、か。それだけいれば何とかかなりそうだな。兵はどう展開する？」

ノス・トゥリは即座に応える。

「まず、貴族街は不要ですね。どうせ国軍が優先的に配置するのでもあそこでしょうし」

兵士達も生活がかかっている以上、どうせ働くならきちんと御礼が期待できる連中を優先的に守る、というわけである。平民街の、ましてや貧民街の者達など歯牙にもかけぬであろう。優先順位的には持てる者から救われていくのが世の常なのだ。病院であれ、学校であれ、同じことである。

「南の貧民街を中心として防衛戦を張り、余裕があれば平民街も、つてところか」

確認するオルフィに、ノス・トゥリは頷く。

「そうですね、それが賢明です。ただ、多分余裕はありません。相手の数が数です。まあ、貴族街や平民街に住んでいる方々はある程度蓄えもあるでしょうし、かなりの人数がニステイアーノに逃げ込むんじゃないですか。しかし貧民街は」

「この世の終着点にして吹き溜まり。逃げ場はない、か」

率直なオルフィの表現に、ノス・トゥリは苦笑みを浮かべる。

「……そこまで言い切ってしまうのもちよつとあれですが、……ここを追い出されては大勢の者達が行き場を失うのも紛れもない事実」

そうだな、と呟いてオルフィは腕を組み直す。

「あとは、^{トリニティ・ワシ}三重の頂があるのかどうか、だが」

「確実にいます。……見つからないようになり遠くから様子を窺いしましたが、少なくとも明らかにやばそうなのが一人。ブラージウスがきていない以上、数は少ないでしょうけれど、おそらくは先立つての件でしょう」

一ヶ月以上も前に、諜報員らしき者がグリーンリーの貧民街を隈なく駆け巡っているのを上級傭兵達が見咎め、アクア・ティ・アラの所在が割れてはまずいと判断して攻撃を仕掛けた事があった。グリ

ユーンの国軍が同盟軍に歩み寄る姿勢を見せたのを察知し、戦場となる街の地形をチェックするつもりであったのだろう。敵も充填フィールを駆使したと聞き及ぶ事からかなりの使い手であったようだが、三対一となつては地の利がある我々を相手に逃げ切れず、程なく仕留められた。但し、無傷で仕留められたわけではなく、こちらも一人が大腿骨折の重傷を負わされて今も静養中である。死体から発見されたメモから推察するに、帝国の間諜である事は容易に推察できた。

「状況を聞いた限りでは取り逃がすのは下策と考えられましたし、申し分ない判断だったと思います。それはそれとして 軍は二つに分けましようか。私を含む翼人バーディアルの上級傭兵は戦場と敵兵の位置把握に努めるので、独立した隊を組む事にします」

「わかった。一軍は私が引き受けるとして、もう一つの軍はどうする？」

僅かな沈黙の後、ノス・トゥリは口を開く。

「可能であるなら、軍団長を貴方に推挙して頂いていいですか？ つい最近までグリトリーにいたものですから、ちよつと判断材料に乏しくて」

オルフィは暫く瞑目し、心当たりの名を挙げる。

「……では、上級傭兵のヒューリイに任せる」

「ほう。あの子がもう戦場に出られる齡になつたのですか。月日が経つのは早いものですねえ」

ノス・トゥリは、感慨深げに頷いている。ヒューリイはノス・トゥリが十年ほど前に拾った孤児のエルフである。

「まだ二十だが、非凡な魔法の才を持っている。そちらに上級傭兵を多めに配備してやれば、無難にこなせるはず。貴方もそちらを優先してフォローしてやってくれ」

「了解しました。では、マスターにお伺いを立てましようか」

二人はお互いに頷き合い、次の瞬間、屋根の上から姿を消した。

その前日。アステイスとルガールはニステイアーノに辿り着いていた。ニステイアーノは長閑な温泉町と表現するのがしっくりくる。空へと突き出す様な煙突があちらこちらに立っている町中は硫黄の香りに包まれ、そこからは白い煙が立ち上る。水路にはあまった白濁湯が垂れ流しにされて下流へと向かっており、そこら一帯で湯気を立てている。グリオはどうもこの匂いが苦手だった様で、町に接近しすぎる事を嫌ったのである。鳥の中にはそういった化学物質に敏感な種類もいるため、二人は大事をとって町から少し離れた所に降り立った。まあ、どのみち人目に付くわけにもいかなかったのだが。

ただでさえ二人乗り、加えて険しい山脈を越えて来た事も重なり、グリオは相当に疲れた様子だった。アステイスは個人商店の肉屋で半日分の量の豚肉と水とを購入し、1kmほど離れたグリオの所まで運んだ。グリオはそれを美味そうに平らげ、人心地ついたところでルガールに南の森へと放たれた。彼曰く、翼獣グリフォンには帰巢本能があるため、好き勝手に遊んだ後はアテライデへ、つまりはヒヅキの下へ帰っていくらしい。

翌日。朝の静謐な一時。旅の垢を落とすべく温泉宿に泊まっていたアステイスは座布団で胡坐を掻き、のんびりと緑茶を啜っていた。その優雅な一時を撃ち破る様に、突如ドタドタドタ、と廊下を駆け抜ける音が聞こえてくる。襖（ふすま）が勢いよく開き、壁に叩

きつけられた音を聞いて、アステイスは一瞬身を固くする。

朝刊を脇に抱えていたルガールは健康的な小麦色の肌を目一杯蒼白に近付けていた。

「な、何だ。どうしたんだ一体？」

彼とは未だ長い付き合いとは言えないかも知れないが、流石に表情で何かあった事くらいは察する事が出来た。

「まずい……まずすぎる。よりによって最悪なタイミングだ……」
とりあえずは襖ふすまを閉め、アステイスはルガールを中に招き入れる。

座布団に座ったルガールは項垂れながらも、持っていた新聞を差し出した。アステイスはそれを広げ、我が目を疑う。一面には何と第七軍大隊長ジルバート・ミレン將軍の子供が生まれた、と書かれている。男児で体重が三千六百グラムと相当に大きく、名前はグレイスと一緒に決めたようでエミリオという名だという。

(……ジルバートが父親、か)

甘さと苦さの混じり合ったような、複雑な感情を喚起されたアステイスだったが、ふと現実に立ち返る。まずいとかタイミングがどうのと言っていたからルガールが指摘しているのはこれではないだろう。人の出産を最悪だのどうのと断じる彼ではない。

頁を一枚捲つて、やっと理解した。二枚目の見出しには？帝国軍、グリューンに出兵？、そう書かれていた。ここ一週間ほど野宿が続いていたために新聞を読む機会がなかった二人だったが、いくらなんでも状況がここまで変化するのを読み解く事は不可能に近いというものだ。

「……出たのは27日か。……もう一週間あるかどうかだな。これではヒツキ殿の依頼が」

「それもあるけど、それだけじゃねえ」

アステイスはルガールに視線を送り、次の言葉を待つ。

「……グリューンには亜人がたくさん住んでいるんだ。俺が奴隷だった時一緒にいた奴らも何人かいる」

「それは……ルガールと一緒にヒヅキ殿に助けられた者達、ということか」

ルガールは弱々しく頷く。

「……親元に返された奴らだ。今までだって十分苦しんできたのに、何でまた戦争なんか巻き込まれなきゃいけないんだ。……畜生っ」

捕まって家族から引き離され、奴隷として酷い目に合わされ、ようやく手にした自由という糸を今また断ち切られようとしている仲間達を慮り、ルガールは拳を震わせながら苦悶の表情を浮かべる。

「なら、尚更いの方が良いな。ここからグリューンまでどれくらいの距離だ？」

「あ、ああ。おおよそ400kmってとこだったと思うけれど」

そう言うルガールを横目に捉えながら、アステイスは素早く計算を始めた。

大丈夫だ。陸路だと少々面倒な距離だが、急げば十分間に合う。

「……よし、直ぐ行くこう。荷物を纏めるぞ」

「そうだな……って、ちょっと待ってくれ、アステイス。こうなつた以上お前をグリューンに行かせるわけには」

「しかし、ルガールは行くのだろう」

「勿論だ。あいつらを見捨てられるわけがねえ。けれどお前は無関係だし、何よりお前に万が一の事があればヒヅキの旦那が困るだろうが」

アステイスは首を横に振りながらも着替えを纏めて麻袋に詰める。「どのみち、アクア・ティ・アラがやられてしまえば八方塞がりじ

やないか」

真つ当な反論にルガールが呻く。

「……それは、……そうかも知れないけれど、お前が行くには状況が悪過ぎる。帝国兵が大勢いるんだぞ。それに、アクア・ティ・アラだけなら何とかかなると思うし」

「心配してくれているのだな。ありがとう」

「……べ、別に　じゃなくてっ」

少し頬を紅潮させたルガールは声を荒げた。照れ屋さんなのだ、という台詞が喉仏まで出かけたのをアステイスは辛うじて飲み直す。

「それとも、私は足手纏いになるだろうか」

ルガールは虚を突かれた顔をする。

「そりゃ　お前ほどの使い手がいたりゃ百人力だけどさ」

「その返答で十分だ。ならば行く」

アステイスは歯切れ良く言った。

「……何でだ」

ルガールの低い呟きにアステイスは軽く肩を竦め、そして不敵に笑り返す。

「お前に行くから。わかりやすいだろうっ？」

其の四十一　　く聖域にして牢獄（表）く

アステイスはルガールと共に身体に疲れを残さぬギリギリのペースでグリユーンへの街道を疾走する。

その途中では、大きな荷馬車、或いは山盛りの家財道具と家族を積んだ荷車と幾度も擦れ違う。おそらくはその殆どがグリユーンから逃げてきた者達だろう。二人は炉端の窪みに車輪が嵌り込んでいる荷車を見つけては、放置しておくのも忍びないからと協力して道へと戻してやった。

884年　7月24日

ニステイアーノを出て三日目の午後、二人はグリユーンの東口に辿り着いた。まだ帝国軍がやってきている様子はないが、町は不気味なほどに静まり返っている。人の喧騒が感じられず、不意に蹴った小石が風の音に混じってカツカと音を立てながら石畳の道を転がった。クシャクシャに丸められた雑紙が強い風に乗って二人の目の前を横切っていく。ふと空を仰げば、日差しは分厚い黒雲に遮られていた。

アステイスは困惑した表情を隠せない。

「ルガール。確かグリユーンに領主はいるはずだな？」

「ああ、いるぜ。ちよつくら鼻持ちならぬ奴だけだな」

「なら、何故入口に軍を展開していないのだろう」

「ルガールは少し顔をしかめながら、頭を掻く。」

「展開はしていると思う。……おそらくは、貴族街の方にな」

怪訝な顔を浮かべたアステイスに、ルガールは方角を指で示しながら説明する。

彼の話によると、この町は三つの区画に分かれており、北に位置する領主を始めとした富裕層が住む貴族街、中央に位置する中間層が住み、東西に町の入り口がある平民街、そして南に位置する、中間層以上の者達が底辺と揶揄する貧民街がある。貧民街には、ルガールの奴隷仲間も含めて様々な境遇の者が流れ着き、息を潜める様にして暮らしているとの事だった。

「国軍の連中も戦うからには命を張っているわけだから、それに見合った報酬が欲しいんだらう。明確に街の区画が分けられている弊害として、軍は貴族街を中心として守っているってわけだ。一部の正義感の強い奴とか下っ端とかは平民街にも顔を出すらしいけれど、貧民街は徹底的に放置さ。今だけじゃなくて、平時にだって近寄らないぜ」

アステイスは絶句する。何年前か前、アルイールと共にこの領主を訪ねにきた時は、そんな惨状など耳にもしなかったのである。確か、あれから領主は変わっていない筈だ。

おぼろげに覚えているのは、訓練された兵士が町の治安を守るべく定期的に見周りを繰り返し返していた姿に感心した事だ。あれは領主達その場限りの見せ掛けだったのだろうか。町の視察等と嘯うそいて、自分達は今まで何を見ている気になっていたのだろうか。綺麗な所だけを見せつけられ、汚い所には蓋をされ続けていたのだという事実を突き付けられ、胸奥で悔恨の嵐が吹き荒れる。

省みれば、自分がブライジウスと袂を分かとうかと迷っている時も、民達、民達と抽象名詞を連呼しただけで、一人一人の境遇に心を砕く事は一度もなかったのかもしれない。華々しい歴史の裏で、

彼らは暗い海の底に沈んでいた。否、^{いな}今も尚沈んでいる。稀代の名君と言われたアルイールの御代ですらも、彼らに救いの光は一切届かなかったのである。

「誰も救ってくれないなら、自分達が強くなるしかないだろう？」

アクア・ティ・アラは出来るべくして出来たギルドだ。ここまで言えば、頭の回転が速いお前なら何となく判ると思うけれど、説得は……一筋縄じゃいかないと思う」

ルガールの最後の弱々しい語尾は、アステイスの頭にはつきりとした輪郭を以って刻まれた。

二人は平民街を西に進み、三十分ほど進んで見えてきた噴水広場を經由して南へと足を運ぶ。更に進むと段々と家屋が減ってきた。ふと視線を上に向けると有刺鉄線が張り巡らされた、物々しくも高い隔壁が見えてくる。鉄の茨が放つ禍々しさは、先にある危険な雰囲気をあからさまに助長しているようだ。アステイスにはそれがまるで巨大な刑務所の外壁のように見えた。違うところと言えば、世の中の吹き溜まりを象徴する様な荒々しい落書きが、赤、青、黄、様々な色のインクで描かれているところであろうか。巨大な文字や絵がベージュ色のキャンバスを席卷している。ルガールに従い、アステイスは壁面を沿うように歩いて行く。よく見ると、描かれている絵の中には瑞々しい芸術性を感じさせるものも幾つかあった。

「この壁さ、裏の方に100mにも亘って綺麗な壁画がかかっている所があるんだ」

アステイスはほう、と感嘆する。

「裏が一杯になって描き切れなくなったから、こちらにも描いてる

んだな」

「ああ、まあ外観的にはどうなのかな、って思っけれどさ。この住人にとってはこの壁が唯一、自己実現出来る場なのかもしれない」
ルガールはそう言うのと寂しそうに笑った。

彼の言う通り、ここに描かれているのは単なる落書きの範疇には留まらないのだろう。やり場のない感情を持って余し、貧民街の住人達が衝動に駆られて叫びや嘆きを模した、心象風景の一部とも言えるのではないか。

ふと、血のように赤い文字で書かれた一つの文が目飛び込んできた。

「私達は、ここにいる」

存在の証明。アステイスは最初に刑務所のような印象を受けた己の感性が間違っていないかったのだと悟る。ここは彼らの侵されざる聖域であると同時に、世界から忘れ去られた牢獄なのだ。

壁伝いに歩いていくと、視界の先に壁に開いた小さな穴が見えてくる。腰の高さよりも低い、屈んでやっと一人通れるくらいの穴だ。ルガールは穴の近くで立ち止まり、頭をぶつけぬ様に屈み込む。

「……ここが貧民街の入口ってわけか」

扱いの酷さもここまで来れば笑うしかないだろうか。

重々しく言ったアステイスに、しかし潜ろうとしていたルガールは振り向き様呆気にとられ、次には思いっきり吹き出した。

「さ、流石にそれはねえよ、アステイス。ちゃんとした入口はずっと先にある。確かにここは貧民街だけど、正確に言うなら旧市街が移転した跡地だからな」

「え、そ、そうなのか」

「多分正門にはアクア・ティ・アラが傭兵を展開してる。話を付け

る前にお前の顔を見られたら面倒な事になるからここから行くんだ」
その説明に、アステイスは俄然納得させられた。

「しかし、真面目くさった顔して何を言い出すかと思ったら

」

「急がないとまずいだろう」

アステイスは顔を引き締める。

「はははは、誤魔化すなつて。全く照れ屋さんだな、お前は」

その台詞は、お前だけには、言われたくない。

満面の笑みを浮かべるルガールにアステイスは心中で毒づいた。

「よし、作戦は頭に叩きこんだな」

オルフィ率いる傭兵団、便宜上甲軍と名付けられた傭兵達は平民街の中央からやや南寄りの広場に展開していた。オルフィを筆頭として上級傭兵が10人、中級、下級傭兵が合わせて340人。扱う武器がそれぞれ違い、種族もバラバラで統一感はない。それでも、有事の際には彼らは一振りの刃となり、標的を貫くために最善の行動を採る。

もう一人、上級傭兵のヒューリイ率いる乙軍は上級傭兵が15人、中級、下級傭兵が380人。ノス・トゥリの隊5人も、基本的には彼女寄りに展開する事になっている。

「今回は相手の数が数だけに完勝する事が目的ではない。余裕があれば北側に回って帝国兵の迎撃を試みるが、あくまで最優先は貧民

街の防衛だ。住民の避難誘導はほぼ終わっているが、家屋の倒壊、焼失は止むを得ない場合を除いて最小限に食い止める事。それから、今回は敵軍に三重の頂トリニティ・ワンが何名か含まれている事が予想される。中級以下の傭兵達は交戦を避けられぬ場合を除いて彼らには手を出さずなもし発見したら私か、若しくは上級傭兵に伝える事。上級傭兵は、奴等を相手にする時は最低でも三人以上で臨め。尚、定期的にノス・トゥリの隊から戦況の報告が来る手筈になっている。戦闘中は私が受けられない事もあるだろうから、報告を受けた者は必ず連絡してくれ。以上、何か質問は」

上級傭兵からおずおずと手が挙がる。

「一つだけ、いいですか」

「何だ？」

「地下街の方にいる者達は……大丈夫でしょうか？」

オルフィが初めて口元に微笑を浮かべる。普段は見せぬ彼女の優しげな顔に、傭兵達の何人かは胸をときめかせたようだ。幹部の紅一点であり、姉御肌で面倒見の良いオルフィはアクア・ティ・アラの若い傭兵達の憧れでもある。

「下の非戦闘員に関しては心配しなくていい。マスターが防衛を引き受けてくださった。万一侵入者が来た時は一人残らず魚の餌にして下さるそうだ」

「そうですね。それなら良かったです……むっ」

少し和んだ空気を切り払うように、空より翼人ハルディアルが降り立つ。ノス・トゥリの指揮下にある上級傭兵である。

「オルフィさん。西門の西方約1km地点にて帝国軍を視認しました。間もなく攻撃が開始されると思われまっす」

オルフィは頷き、周りにいる傭兵達をざっと見回す。

「では　行くぞ。奴らの心に二度と消えぬ恐怖を刻んでやれ
っ」

『おうっ』

オルフィ以下、傭兵達は高々とその拳を突き上げた。

大通りを暫く歩くと道が分岐し、雑居が立ち並ぶ区域へと辿り着く。向かい合う住居同士を結ぶ黒い紐には吊り下げられた洗濯物が至る所で干されている。その下を潜るようにして、二人は細い路地の階段をゆっくりと登って行き、高台に出た所でルガールが足を止める。

「……あれはっ」

「どうした？」

アステイスはルガールが眼を凝らした西北西の方角へと視線を向けるが、何も変なところは見受けられない。辛うじて、西に門が見えるだけだ。それでも、尋常ではない視力を持つルガールの眼には、何かが映ったらしい。

「……薄らとしか見えないけれど……多分間違いねえ」

その顔色から察するに、発見したものがあまり良くない兆候を示すのは間違いないだろう。

「……まさかっ」

ルガールはアステイスに視線を転じ、神妙な面持ちで頷いた。

「……帝国軍の烽火だ。戦いは、もう始まっている」

其の四十二　　グリューン市街戦（表）

午前11時

組み木に松明たいまつが投じられ、もうもうと煙が上がったのを見計らうようにして、第二軍大隊長ゴードン・ベントニックス准将率いる帝国軍は、素早く攻撃準備に取り掛かる。グリューンの西門は分厚い鉄の門で閉められていたが、町の要塞、つまり外壁は崩せぬほど厚くはない事が諜報員の事前調査でわかっていたため、ベントニックスは投石器を用いて壁を崩す事を試みていた。

投石器には種類がいくつかあるのだが、帝国軍が用いたのは天秤型の物であり、木材、金具、丈夫な縄で組み立てる至ってシンプルな物である。奥の方には頑丈なロープを利用して10トン近い錘おもりを吊るし上げ、上部で固定する。手前側にはそれより軽い岩、若しくは油を染み込ませた藁の塊などを発射台となる大きな受け皿に乗せる。補足すると、藁の塊に関しては火矢と連携して用いられる事が前提となる。

そして、合図に乗じて奥の錘おもりを固定しているロープを外す事により、十トン近い錘おもりは重力に従って地面に猛烈な勢いで落下する。反して、手前側は勢い良く上に跳ね上げられ、皿に乗せていた物体が奥へ向かって飛ばされるといふ仕組みだ。

実に分かりやすい兵器ではあるのだがその破壊力は侮り難く、直撃すれば人の体などは着用している鎧ごと肉片と化す。弱点は射程が200m以上と長すぎる故に接近されると無防備な事だが、守る兵が大勢いるならばこれ以上心強い攻城兵器はないのである。

ベントニックスは城門の左側、約50m辺りの位置を攻撃目標とするよう、中隊長達に伝令を放つ。小隊毎に組み立てられた投石器から次々と平原に約20mの間隔を空けて並んでゆく。攻撃準備が整った部隊は急ぎベントニックスの本隊へと伝令兵を走らせる。殆どの部隊から準備完了報告が届いたのを確認して、ベントニックスは指揮棒を手に持ち、攻撃開始の合図を走らせた。

東の門と違い、マリスノリスに近い西の門には何人かグリユーン軍所属の見張りの兵が配置されていたが、その顔色は総じて悪い。とにかく物量の桁が違いすぎるのだ。こう言ってはなんだが、いくらなんでもグリユーン如きを落とすのにあれだけの軍勢と投石器を揃えるとは度が過ぎていゝ。そうまで力を誇示して徹底的に潰すつもりなのだろうか。見張り達は居並ぶ投石器の数に恐れをなし、大半の者はもう既に心が敗北感で満たされていたのである。

ふと、遠目から望んでいた投石器が一齐にブルリと身震いしたように見えた。その刹那、いくつもの灰褐色の塊が緩やかな弧を描いて宙を舞い、見た目にも塊が大きくなってくる。

ドゴッ

「うわっ」

西門から少しずれた位置に飛来して来た大きな岩が着弾する。グリーン兵達は衝撃で自分達の立っている壁が小刻みに揺れるのを感じた。積み重ねていた石が粉々に砕け散り、パラパラと音を立てて落下する。それに驚き、目を見開いている最中も間断なく、第二射、第三射と岩が連続して飛んでくる。横から吹き付ける岩の雨に晒され、五、六発も直撃すると丈夫な外壁にあっさり大きなひびが入る。土壁ならもう少し耐えられただろうが、石積みの外壁は横からの衝撃に弱い。脆くなった部位を狙うようにして、次々と岩が打ち込まれていく。見張り達は成す術もなく、ただそれを呆然と見ているしかない。投石器は命中精度が低いので人に当てる事は難しいが、外壁は狙うのが広いので飛距離だけ調整すれば良く、しかも相手は数を揃えてきている。僅か数分間の攻撃で先程まで壁のあった場所は、10m幅に亘って跡形もなく崩壊してしまっていた。

(だ、駄目だ……こいつは……)

おそらく、その場に居た者でなければその恐怖は正しく理解出来なかっただろう。百を超す巨大な岩が矢のように降り注ぐその様は滅多にお目にかかれるものではなく、どちらかと言えば非現実的な光景に近い。自分達に当たらなかったとはいえ、頑丈な壁がごく短時間で粉々にされたのを目前にして、見張り達は半ば自分達の行く末を見せ付けられたような心地になり、戦意を喪失していたのである。

結局、その場にいた殆どの者は臆病風に吹かれ、東門に向かって逃げ始めた。それから遅れること五分と少々、ベントニックスの本体五千を除いた帝国軍約一万五千は一つの黒い生き物のように蠢き崩れた外壁へと押し寄せていった。

外壁の破壊後、ベントニックスは市街戦の一切について中隊長の判断に一任するという方策を採っていた。つまりは？好き勝手に戦

え？という命令である。

帝国軍は西門から50m程北の地点、投石器で壁を破壊した部位から市街地への侵入を図る。大半の部隊は事前の調査が済んでいたのか、貴族街のある北を目指した。その理由は、収奪で高価な物を得られる可能性が高いからである。

侵略戦では、敵兵を殺すこと以上に家屋や倉庫などに押し入り、食料や貴金属類を奪う事が一般兵の主な目的になる。或いは、敵の身に付けている剣や鎧も売ればそれなりの金になる。敵将などの首を取れば多大な勲功や褒賞が与えられるが相手の将の数が限られている事もあり、実の所それが出来るのは数人が良い所だ。当然のことながら、敵が偉くなればなるほど護衛の数が多く、その抵抗も激しくなるため、生半可な腕では自分が殺される可能性もかなり高いのである。つまり、並の兵にとつて敵将の首を取るといふ事は命を賭けて宝くじを買う様なもので冷静に考えてみるとどうも現実味がない。それならば、という事で、大半の者は確実に実益が出る方法を選ぶというわけだ。

午前11時30分

北西の高台に在る貴族街には既にグリユーンの兵達が幾重にも防壁を張って陣取っていた。帝国軍が幅5m程の狭い石階段を登ろうとした所で侵入を防がんと領主率いる国軍らが現れ、両軍がここに衝突した。

狭い市街地に投石器を持ち込む事は困難であるため、専ら重装兵

同士の白兵戦と弓矢の応酬と相成った。通路の幅がなく、大軍を展開し辛い環境下にあつたため、緒戦は地の利があつたグリーン軍が優位に戦いを進めていく。当然の事ながら、高い位置から弓矢を射かけた方が遠くに届き、視野も広く確保できるため、攻撃範囲と命中精度に決定的な差が出るのである。逆に、低い位置では前衛として戦っている味方の兵が邪魔になつて敵兵に狙いを定めにくい。しかも、急所である頭を守りつつ攻撃をしなければいけない。つまり、闇雲とまでは言わないながらもある程度の目星を付けて射るしかない。結果として弓兵の攻撃力の差が決定的となり、帝国軍の死傷者が少しずつ増えていった。

前衛はそれとして、どん詰まりで進めなくなつた後衛の帝国兵達は主に二手に分かれ始める。貴族街攻めから焙れた帝国兵達は七千近くいたが、彼らは隊長達の指示に従つて各部隊ごとに行動を取り始めた。他の経路から貴族街を直指そうという者達と、平民街で小金を稼ごうという者達だ。また、事前調査をしていない者達の隊はどこでもいいから、と街を隈なく走り回り、行き当たりばつたりな行動を取る。平民街にはグリーン軍が殆ど敷かれていなかったため、帝国軍達は水を得た魚の様に木槌や斧を用いて民家の扉や窓を叩き壊し、素早く侵入していく。大半の者達はニステイアーノ等の町へ避難し、家や家財が心配で残っていた者達は地下にでも隠れるしかないわけだが、運悪く見つかった者は当然殺され、結局残つた事を後悔することになるのである。

グリーン南西部の平民街付近では、通路をひた走って逃げる平民達をその倍ほどの帝国兵達が追跡していた。周囲に敵兵が全く見当たらなかったのをこれ幸いと、彼らは獲物の狩るのに夢中になっていて、よもや頭上から敵が自分達の命を狙っているとは想像していなかった。

逃げる平民達が三叉路を曲がり、二十人程の帝国兵達がそれを追って曲がるうとした瞬間、突如通路に青く巨大な柱が立ち昇る。

「なっ」

柱の現れる範囲内に入っていた者達は一瞬にして四角い氷柱に呑み込まれて凍り付き、残った兵達もそれに前方の通路を塞がれる。明らかな妨害行為に追跡を断念するのを余儀なくされ、帝国兵達が頭上に注意を払った時にはもう遅かった。屋根の上から狙い澄ました弓兵達に矢を射かけられ、彼らの肩に、腕に、目に食い込んでいく。何とか盾を上に向けて後方へ離脱を図った者達は屋根から下りてきた傭兵達に阻まれ、次々と倒されていく。苛烈なる連携攻撃を受けた帝国小隊は抗う術もなく壊滅した。

一人も生き残りがいない事を確認し、上級傭兵のヒューリイ率いる傭兵達は再び敵影を目指して北へ足を向ける。

「まずは小手調べ、と言ったところね」

「この調子なら楽勝っすよね」

若い傭兵達が軽口を叩くが、ヒューリイがそれを窺める。白い絹のローブを羽織っており、滑らかにして長い金髪に大きな蒼眼が特徴の小柄なエルフだが、魔法の使い手としては上級傭兵の中でも指折りの実力者である。

「早々と気を抜くのはお止めなさい。……敵は二万の大軍だし三重

イ・ツン

トリニテ

の頂も混じっている。オル姉も含めて最小限に疲労を抑えないと厳しいわ」

「そ、そうですね」

それを聞いて若い傭兵達は慌てて言い繕う。

「こちらの役割はあくまで陽動と攪乱。持ち場を守って迷い込んで来た敵を叩くのに徹する事。いいわね？」

『おいつすっ』

何よその返事。オル姉だったら絶対ぶっ飛ばしているわよ。やっぱり私、舐められているのかしら。

ヒューリイは不満げに頬を膨らませながらも再び傭兵を先導し始めた。

午後0時15分

小一時間もすると雨が降り始め、視界が徐々に悪くなってくる。

小競り合いを続けていた北西部の貴族街方面では戦局に変化が現れていた。帝国の軽歩兵部隊がグリーン側の見張りがいなくなった外壁にフック付きのロープを使ってよじ登り、高台から南に向けて応戦していた弓兵に西から奇襲を仕掛けたのである。密集していた弓兵達は敵の不意打ちに隊列を乱し、下方に対しての応射が途絶えたのを見計らって階段下の帝国兵数十人が強引に攻め込んでくる。

グリーン側は階段上の弓兵達に斬り込んで来た歩兵達をまずは排除せんと試みるが、敵は味方弓兵の中上手く身を隠しながら応戦

し、やられていくのはグリーン側の兵ばかりであった。密かに、敵部隊の中に三重トリニティ・ワンの頂が二人混じっていたのである。鎖帷子くさりかたむらと手甲を纏った二人の三重トリニティ・ワンの頂は、必死になって迎撃をしようとする兵達を嘲笑うかのように、舞いを披露するかにように剣を振るい、グリーン兵の死骸を積み重ねていく。十分程も攻防を続け、卓越した剣技に恐れ戦おののいて逃亡する者が現れ始めたのを確認すると、二人の三重トリニティ・ワンの頂はここでの用事が終わったとばかりに包囲網を突破し、階段の手すりを飛び越えて急交配の石坂を駆け下りていく。

猛威を振るった敵兵二人がその場から姿を消し、グリーン兵達がホツとしたのも束の間、視線を転じれば帝国兵達に階段上まで押し込められ、尚も後退を余儀なくされている味方の兵が見えた。国軍と貴族街はもはや風前の灯火であった。

その一方で、平民街を蹂躪しようと画策していた帝国兵達はまさかの苦戦を強いられていた。平民街のやや南寄りに展開していたオルフイ隊と南西部に展開していたヒューリイ隊は狭い街路に効率よく兵を配置し、または屋根の上で待ち伏せをし、少数部隊に狙いを定めて各個撃破していく。それを手際よくサポートしていたのはノース・トゥリの指揮下にある翼人達バードリアルだ。彼らは上空から目を凝らして貧民街方面に向かう敵部隊を見止めては二人の指揮する隊の内、より近い方に素早く戦況を伝えていた。二人の指揮する軍の近くの屋根には常に二、三人の者達が翼人の連絡を待ち、それを指揮官達に伝えるというわけである。

だが、圧倒的優位で戦っていたのも時間にしてせいぜい一時間半余りだった。翼人バードリアルほどの機動力はなかったものの、帝国軍の連絡役に徹していた斥候と諜報兵が町を見回っているうちに、帝国兵達が何者かに各個撃破されている事に気付き、彼らの指示によって帝国兵が数百単位で固まって行動し始めたのである。

その旨を知らされたオルフィ達は嘆息を以って応じるものの、事はほぼノス・トゥリの作戦通りに運んでいたため焦りは見せなかった。貴族街に敵軍の大半が集中しているうちに、どれだけ敵兵を排除出来るかが作戦の是非を決める。貴族街が陥落する前に平民街にいる敵兵達を粗方片付けなければ勝ち目が薄いと考えていたヒューリイ隊とオルフィ隊は当初の予定通りに、数百に纏まった帝国兵達に対して先制攻撃を仕掛けて行く。真つ向勝負に近いその戦い方は中級以下の傭兵達に被害が出てくるものの、それに輪をかけた被害を帝国軍に与えていった。貴族街では既に半数近くのグリューン兵がやられていたものの、アクア・ティ・アラの傭兵達は数に勝る敵を相手に善戦し、三千近い敵兵を死に至らしめていた。グリューンの北側と南側では戦況が真逆になっていたのである。

丁度その頃、グリューン南部の貧民街ではアステイスとルガールは西門を目指して走っていたが、思わぬ事態から方向転換を余儀なくされていた。道行く途中、眼下の貧民街の中に帝国兵が十数人程入ってくるのを見咎めたのである。未だ町の南東にいた二人は僅かな逡巡を経て、その者達を排除する事に決めた。

ルガールは背に下げていた金属棒を手に持ち、路地の切れ目で待ち伏せをする。そして路地裏から通りに走ってくるタイミングを見計らって金属棒を帝国兵達の足元に突っ立てた。その棒は見事に兵達の足元を次々と捉え、バランスを崩した帝国兵達はさながら籠に

持った蜜柑の山のように嵩張っていく。引っくり返ったカブト虫の
様におたおたとしているのを横目で見ながら、二人は凄まじい速度
で容赦なく黒い軍服の山に武器を突き立てた。山からは血があちら
こちらから湧き出で、弱々しく痙攣しながら息絶えていく。

午後0時40分

彼らを難なく始末した後、二人はどうも様子がおかしい、と首を
傾げている。

「……こいつらは、どこからきた連中だ？」

「……わからねえ。さつき戦いが始まったばかりで真っ先にこんな
所に来るとも思えないな」

確かに、敵兵もいないし収奪も出来そうにない貧民街に用がある
とは思えない。

「……或いは伏兵か。予め東門の方にも回り込んでいたのかもしれ
ないな」

「ああ、あそこが空きだったからな。……つてまずいなそりゃ」
「何故だ？」

「南東にもある程度密集した住宅地がある。東門からは少し離れて
いるけど、ここまで敵兵の手が伸びているってことはあっちに行っ
てもおかしくないぞ。アクア・ティ・アラが兵を回してくれてい
れば良いんだけど……」

ルガールはそちらの方角へと不安げに視線を向ける。

「……そうか、念のため一度確認しに戻った方が良さそうだな。一
旦引き返そう」

ルガールは軽く頷き、二人は踵を返して貧民街の南東へ向かって
いった。

とはいえ、わざわざ取るものの無さそうな貧民街を目指す敵など
そう多くはあるまい。もし杞憂であればそれに越したことはないが、
いたらいたで二人一緒ならば逸れ帝国兵の数百人程度何とか迎撃出
来るだろう。アステイスとルガールはそう考えていた。

しかしながら、二人の指摘した考え方は至極まともな者達の思考
であり、まともでない者達の思考までは読み解く事が出来ていなか
ったのである。

其の四十三　　誰がために（表）

かつて、グリューンの貧民街にこれほど多くの者達が侵入した事はなかったかも知れない。もつとも、侵入者のほぼ全てが礼節に欠けた者であつたのは否めないが。

テルネシア帝国軍の中には、グリューンの貧民街の成り立ちについて詳しい者が何人かいた。彼らが何事を画策したのかというと、戦争のどさくさで亜人の子供を攫い、奴隷商人に売り付けるといった、道義として赦されざる事を考えていた。しかしながら、歴史の陰にはそれを温床として財を成す風潮があつたのもまた事実である。種族にもよるが、亜人の子供の相場は十歳以下での相場は八十万〜三百万。見目麗しければ五百万を超える事もある。一部の心無い帝国兵達は貴族街の方は競争率が高いと見込んで、手間はかかるが実入りの良い誘拐を企んだのであつた。

皮肉な事に、辺鄙な場所に見張りの傭兵達が展開されていたため、反つて付近に避難民が立て籠っているのでは、と帝国兵達の邪推を促す結果となつた。彼らは貴族街攻めから爰（あぶ）れた者達を足すとその数は千を軽く上回っていた。避難民の立て籠つた雑居の防衛を任されていた傭兵達や貧民街の戦士達は何とか応戦するも、せいぜいその人数は百五十足らず。数量の差は如何ともし難く、次第に疲労を隠せなくなり、数に勝る帝国兵相手にじりじりと押されていたのである。

午後1時20分

雨が本降りに移行する最中、中肉中背の実直そうな若い男の獣人ライカンが盛んに檄げきを飛ばしている。南東の広場を拠点として、要塞に程近い東側の坂道には防壁バリケードを幾重にも築き、バラバラになって乗り越えてくる帝国兵を弓矢で倒していく。北側は通路が広いので防壁バリケードを築く事はきつぱりと諦め、アクア・ティ・アラの傭兵が貧民街の戦士と共闘して押してくる敵を何とか抑えこんでいた。既にそんな状態が三十分以上も続き、かなりの兵が苦しそうに息を荒げている。雨で衣服が体に張り付くほど濡れている事も少なからず疲労を増す要因となっていた。

「……くそつ、数が多過ぎるつ。翼人達バーディアルに連絡はしたのかつ？」
防衛隊を任されていた（獣人）ライカン、サークレイルは傍らに居た傭兵に訊ねる。

「はいつ。……しかしヒューリイ隊、オルフィ隊共に交戦の真つ最中で、もう少し時間がかかると。片付き次第近いオルフィ隊がこちらに救援してくださるそうですが、距離が離れているためおおよそ一時間は……」

（一時間……？）

気の遠くなるような時間を突き付けられ、サークレイルが絶句する。思考するのを許さぬと言わんばかりに、再び悪い知らせが飛ぶ。

「サークレイルさんつ。東の障壁バリケードが一つ破壊され、それに伴い火災が発生しました。敵兵にはどうやら魔法使いが何人か混じっているようです。このまま避難民をここに居させては火に巻き込まれますつ」

否が応にも絶望的な状況に追い込まれ、サークレイルの脳が更に苛められる。今から避難民達を西へ誘導するか。いや、少しでも誘

導に兵を割けば群がる敵は今すぐにも防衛線を突破してくるだろう。火災の方は雨が降っているから少し時間は稼げるだろうが、それでも放置しておけば半時間もしないうちに煙に巻かれて窒息死する事になる。雑居の素材は殆どが木材であるから火の回りも非常に速い。

「いっちもさつちもいかない状況とはこの事であろう。無論、自分達だけなら逃げ果す事は可能だろうが、ここを任された者としての矜持きよつじがそれを許さぬ。」

サークレイルは周囲の建物に素早く視線を巡らせる。かくなる上は、建物を破壊して道を封鎖してでも食い止めなければならぬ。オルフィ達には損壊を最低限に留めよと言われているが、遅かれ早かれこのままでは、貧民街が粗方燃やしつくされてしまうのは避けられないだろう。

「……仕方ない。北側の路地の周囲の住居を破壊

「ぐあつ」

突如悲鳴が聞こえ、広場に展開していた兵達はそちらに注目する。西側にいた弓兵が背後から敵の剣に貫かれ、突き刺されたままその体を軽く持ち上げられる。心臓に刃を通されたのだろう、弓兵は数秒ほど痙攣してから力を失った。

「き、貴様っ」

「ハハン、こんなところでコソコソと何をやっているのかなあ？」

黒く塗られた鎖帷子に手甲を付けた小柄な諜報員が剣を軽々振り抜くと、刺されていた傭兵は傍らの家屋に強かに叩きつけられ、そのまま背を壁に擦り付けるようにして崩れ落ちた。壁には血糊が縦に一筋の線を引いている。その体格に見合わぬ凄まじい腕力に、サークレイルは苦渋に満ちた顔をする。

(……まさか、三重トリンタイ・ワシの頂か。……くそ、最悪だつ)
サークレイルは心中で毒づきながらも、場を凌ぐ一切の手段を失った事実を突きつけられ、齒軋りするより他になかった。

その心情を悟ってか、諜報員はぞつとするほど冷たい笑声を混じえながら顔を歪めた。如何にも気に障る、鼻に籠ったような笑い方だった。

「ハッハー、君らがここにいた仲間を殺してくれたのかな？ まあどちらでも良いか。折角だからこの場にいる全員の死を以ってせめてもの慰めとさせて貰う事に」

(……っ)

後方からの殺気に一瞬早く気づき、言葉を切った口達者な諜報員は素早く身を反転させる。殆ど間を置かずにフードを被った男が一瞬にして小走りの間を詰め、剣を右から左へ薙ぎ払った。

咄嗟に諜報員は後転バックテンを繰り返して難を逃れるも、ローブの男が片手でフードを抑えながら伏せた瞬間、その後方から剣が矢のように飛来してくる。ルガールの投げた物だ。息の合った連携攻撃を完全に躲す事は出来ず、諜報員が着地するや否や左肩口に深々と剣が突き刺さり、血飛沫を噴霧した。

「ぐうっ」

諜報員が微かによろめいたのを見逃さず、フードの男は身を屈めた体勢のまま地を強く蹴る。雨によって生じた水溜りに小さな波が立ち、水飛沫が跳ね上げられる。フードの男は諜報員に向かって急加速すると共に、斜め下から顔の辺りを目掛けて斬り上げる。諜報員は間一髪、身体を弓なりに逸らし、剣が胸板を浅く捉えるものの致命傷には至らなかつた。諜報員は顔を苦痛と怒りに歪ませながらも俊敏な動きを乱さず、先程の流暢な語り口とは裏腹に捨て台詞一

つ残す事なく、ルガールの剣が突き刺さったままの肩を押さえて家の屋根へと飛び上がり、北へと逃走して行った。この二人を相手に自分一人では形勢不利と見たのだろう。

ルガールはみるみる遠ざかる諜報員の姿を見止め、毒づく。

「ちっ、良い反射神経してやがる。心臓を狙ったのに咄嗟に肩で庇いやがったか。あんの野郎、俺の剣持って行きやがって」

「す、すまん。……本当に命拾いした、感謝する」

「いや……」

アステイスは乱れたフードを再び深く被り直して立ち上がると、ルガールに視線を移す。

それに釣られたサークレイルも剣を投げた獣人の方に視線を移し、もしま、と目を剥く。

「……ん？ お、お前……もしかして、ルガールかっ」

「……え、……ああっ、そう言うお前はさっちゃんじゃないかっ」

「……っ、さっちゃん言うなっ」

顔を綻ばせたルガールに、サークレイルは思わず声を荒げる。

そんな反論は何処吹く風、ルガールは懐かしそうに目を細める。

そんな彼を見て、アステイスは密かにヒツキの性格が彼にもしつかり影響を与えているのだな、としみじみと嘆息した。善し悪しに関わらず、と言った所ではあるが。

「そっいやお前はアクア・ティ・アラ入ったんだっけな。元気にしてたか？」

「……そうだな、積もる話はあるが」

再び響く爆音と怒号。

三人は再び火の手が上がった東の雑居を臨む。

「……どうやら、お取り込み中か」

アステイスの呟きに、サークレイルは顔色を変える。

「そ、そうだった。早く逃がさないと皆が焼け死んじまう」

「……ならば、足止めを代わる。そちらは作業に専念してくれ。少しの間ならもたせられるだろう」

アステイスはそう言って東の路地へと歩を進める。

「え……。し、しかし見知らぬ者に任せるわけには」

「安心しろよ、さっちゃん。こいつは信頼できるし、相当な剣の達人だ。俺が保証するぜ」

サークレイルは少しの間迷っていたが、状況が予断を許さぬと判断したのだろう。二人に向かって深々と頭を下げる。

「……わかった。申し訳ないが誘導が終わるまでここを頼む」

「承った」

二人は力強く頷いた。

サークレイル以下数人が南にある雑居に向かっていくのを見止め、アステイスはルガールに視線を転じる。

「そういえば、ルガール。お前剣なしで大丈夫か？」

「ああ、問題ねえよ。これがあるしな」

そう言っつてルガールは金属棒を右手に持ち、ポンポンと頼もしげに左手の平で弾ませた。

破壊した防壁を撤去している作業に追われているのか、東からはまだ敵は来ない。ふと、サークレイルが三列になった避難民達の先頭に立って雑居から出てくる。

「西の緊急避難所に急げっ。あまり押し合うなよ」

アクア・ティ・アラの傭兵二人と共に、避難民達を先導していく。

再び、東に爆音が鳴り響き、ついに防壁が全て破壊される。

「よし、食い止めるぞっ。ア……ルルンっ」

危うく口に出掛けた名前を仕舞い、しかしてルガールはアステイスに新たな名を贈った。

(……アルルンは……ない)

どちらかという女性の名前ではないか、とアステイスは不満を募らせたが、そんな悠長な事を考えている暇はない。二人は押し寄せる帝国兵達に向かって思い切り地を蹴った。

防戦一方だった敵の突然の拙攻に、帝国兵達は悉く虚を突かれた。アステイスは細剣を撓らせて鎧を着ている敵兵の肌が露出している部分に刃を稲妻の如く滑らせる。一瞬にして二、三人が壊れた玩具の様に手足を^もがれ、断面から血が噴き出した。

「だっしやあっ」

その隣で、ルガールは充填^{フィール}を駆使して勢い良く金属棒を振り回す。その一撃は猛烈な風を巻き起こし、射程外にいたはずの帝国兵達の頭部を一瞬にして跳ね飛ばした。

(……三節棍だったのか)

三節棍とは、三つの短い金属棒が一つの長い金属棒になるよう鎖で連結された武器である。そのままでも十分にリーチは長いが、鎖の接続部分が更にリーチを伸ばすために間合いが取り難く、相手に使われると相当に嫌な武器だ。遠心力で勢いが増した棍に当たれば当然無事では済まない。非常に扱い難い武器であるが、ルガールはそれをあたかも手足の一部であるかのように使いこなしていた。

仲間を無残に殺されて怒り狂う帝国兵達が猪の如く突進してくるが、アステイスとルガルはほぼ一合にして敵兵を葬ってゆく。ところが、何とかいけそうか、と二人が思い始めたその矢先

一瞬視界が白光し、その直後稲妻が直ぐ近くに落ちたのか、何か^{ひしゃ}が拉げるような轟音が轟いた。

北側にも魔法使いがいたのか、防戦一方だった貧民街の戦士達は群がっていた敵と共に雷の魔法に巻き込まれ、ついに防衛線が決壊する。それをきっかけに、北の路地から広場に敵兵達が雪崩れ込んできた。

「……やべえっ」

猛る帝国兵達が嬉々として並んで逃げる亜人の子供達に襲い掛かる。アクア・ティ・アラの傭兵達が事態を察して何とか駆除に向かうも如何せん数が多過ぎた。敵の対処に追われている間、ついに二人の子供達が捕まえられ、脇に抱えられたのが視界の端に映る。

脳裏にルガルが語った奴隷の話が蘇り、帝国兵達が貧民街を訪れた理由を悟るや否や、湧き出た怒りに震えるアステイスは纏わりつく兵達を打ち払いながらも子供達の方へ向かう隙を窺う。しかし、そうはさせまいと東の通路からは帝国兵達が雲霞のごとく湧いて出る。そうしているうちにも子供達を抱えた兵との距離はどんどん開いて行く。

「くそっ、邪魔をするなっ」

近寄ってくる敵兵を切り払うも、状況は一向に改善されない。南側では恐怖に身を竦ませる子供達に迫る帝国兵達を、何とか貧民街の戦士とアクア・ティ・アラの傭兵が食い止めている状態だ。どち

らも余裕はない。

「すまんアルルンっ。ちょっとだけここを頼むぜ」

ルガールはアステイスが視界の横で頷くのを確認すると、即座に踵を返し、助走を付けて広場にいた帝国兵達に突進する。敵兵の構えた槍がルガールの体を捉える寸前、彼は意を決して跳躍し、包囲していた敵兵達の頭を踏み台にして子供達を脇に抱えて離脱を図っていた帝国兵に飛びかかった。

「逃がすかよおっ」

ルガールは右手に持つ三節棍を後ろに撓らせるようにしてから、兜を被っている兵の後頭部に思い切り叩き付けた。その強烈な一撃は鉄兜を破碎し、殴られた敵兵は一瞬で脳の働きを失う。敵が息絶えたのを確認してルガールは帝国兵達の両腕から何とか這い出た子供達に怒号に近い声で呼びかける。

「早くっ、あっちへ逃げろっ」

泣きじゃくっていた子供達はビクツと身を震わせ、小さく頷いてルガールの示した列の方へと戻って行く。その間、数的不利になったアステイスは怪我こそ負わぬものの広場の中央へと後退を余儀なくされ、戻ってきたルガールと肩を重ねる様にして深く息を吐く。

「くそっ、このままじゃ時間の問題だ……」

ルガールの呻く様な声に、彼らの命を救う唯一の方法がアステイスの心眼の先にチラついたが即座にその考えを振り払う。

自分はこんな所で力尽きるわけにはいかない。万が一死んだら帝国を滅ぼす事ができなくなる。ヒツキとの約を違える事にもなるし、何よりメリツサの仇を討てなくなる。今ここで少数の者を救ったとして、更に大勢の者が殺される事態を招いては意味がないのだ。

ところが、意に反してその考えが再び蛇のように鎌首を擡^{もた}げてくる。

(何故……)

アステイスは無心で兵を蹴散らしながらも内在する広大な海をさ迷う。自分の裡から次々と発される無数の声。そのどれに従えば良いのかがわからなくなってくる。

帝国を滅ぼすんじゃないかったのか？ まさか、ここで力尽きて由とする気か？ お前の信念とやらはその程度だったのか？

絶え間なく続くその幻聴は思考を更なる混沌へと誘う。絡みついた糸のようになり、解れるきっかけすら見出せない。

ヒツキ殿の期待を裏切る気か？ どちらが重要な事か一目瞭然じやないか。

約を違えるは正道か、外道か。

仕方がないだろう？ 今だけ我慢すれば、間違いなく状況が良くなるはずさ。

見て見ぬ振りをするは適切な判断なのか、無様な諦観^{ていかん}なのか。

それをやっても助けられるとは限らないぜ？ そしたら無駄死にじゃないか。

悪い可能性を忖度^{そんたく}するは賢明さか、臆病さか。

お前がここで死んだらどうする？ 彼女の死が無駄になってしま
うだろ。

義憤に駆られた愚行は責任の放逐か、信念の遵守か。

考えるな。目的を達する事ができなくなる。

考える。私は、本当はどうしたいのかを。

混戦の中、闇の裡に溶け込んでいた意識に波紋が落ちる。

見届けてみたかったのです。

(……メリツサツ)

刹那、懐かしさと優しさを孕む声が福音と成ってアステイスの
心を揺さ振る。その直後、サークレイルが身を呈して避難民を庇い、
背中に裂傷を負ったのを目視して思考が一点に集束した。

裡に残る余韻は葛藤、逡巡といった難解な作業を一気に飛び越し、
アステイスはフードを取り去り、昂然と顔を上げた。見事な紅の髪
が雨に濡れ、雫を垂らす。勢いよく息を吸い込み、腹の裡に力を籠
め、声帯を思い切り震わせる。

「帝国兵共っ」

全身に充填を駆使して放つその声は絶叫と言うに相応しい物だっ
た。今までに出した事もない様な己の声にアステイス自身驚きなが
らも、呆気を取られて動きを止め、己の姿に注視した敵兵達を鋭く
睨み、唇の端を釣り上げる。

「我が名は元第六軍大隊長アステイス・フロイデ。テルネシア帝国を誅す反逆の使徒。死にたい者から掛かってくるがいい。その身に真の絶望を刻みこんでやろうっ」

その高らかな宣言は、耳に留まり続けていた雑音を忘却の彼方へと追いやり、降り注ぐ雨音をも掻き消し、広場にいる者達の鼓膜を漏れなく震えさせた。

其の四十四 く獅子奮迅(表)

午後1時50分

ルガールは信じられないものを見たという体でアステイスを見据える。金目当ての大勢の敵を前にして、二十億の賞金首が名乗る事は自殺行為にも等しい。

「……ば、馬鹿野郎。……お前。……アステイス」

倒置法を踏まえていないルガールの声に、アステイスは苦笑する。「すまん。……だが、言わせてくれ。……いくらなんでもアルルンは酷過ぎるだろ」

アステイスの減らず口を聞いて、ルガールは思わず笑みを零す。勿論、アステイスがこんな真似をした理由はわかっていた。自分という大きな餌をチラつかせて帝国兵が子供を攫うメリットを相対的に低くしたのだ。名もなき亜人を助けるべく身を投げ出したその行為に感極まり、アステイスを直視する事に堪えられなくなったルガールは慌てて背中を向ける。

「……ちっ、礼は言わないからな。おいつ、さっちゃんっ、無事だろうなっ」

背中に傷を負ったサークレイルはよろめきながらも立ち上がる。不幸中の幸いか、致命傷ではなかったようだ。

「な、何とかな。……じゃなくてさっちゃんは」

二の句を継がせず、ルガールは怒鳴る。

「……だっいたら早く行けっ。ここは俺とアステイスで何とかするっ」

「……わかった。忝かたじけない」

その一方で、アステイスの啖呵たんかに対する帝国兵達の反応は顕著に表れていた。

「フロイデ……だと」

「ま、まさか……」

テルネシア帝国に身を置いている者ならば、否が応でもその名を耳にしている事だろう。今やマリスノリスの件で有名になりすぎた感もあるが。

帝国兵達は一瞬たじろぐものの、続いては薄ら笑いを浮かべた。それを見て、アステイスは己の浮かべていた笑みが冷たいものに取って代わるのを感じる。どうやら彼らの脳内にある理性の天秤では、マリスノリスの一件よりも賞金二十億ギラが尚重かつたらしい。真に欲望とは恐ろしいものだ。殺されるかも知れぬ、という感情より、生涯遊んで暮らせるかも知れぬ、という感情が先行するのだから。

余裕を見せていたアステイスだったが、その実置かれている状況はマリスノリスを襲撃した時よりも明らかに悪い。既に敵が密集していたという事もあるし、周りに遮蔽物しやへいぶつがなかったため、建物内のように地形を活かして戦えぬ、という点も大きかった。それでも、視界の端に子供達が追撃に晒されず消えていくのを見止めたアステイスは僅かな間目を細める。その直後、帝国兵達が一斉に襲いかかつて来た。ルガールとアステイスは背中合わせになるようにして敵を迎え撃つ。

「ぶっ」

ルガードは短く息を吐き出すと共に素早く三節棍を薙ぎ払う。その途端、2 m程離れていた敵数人が弾かれたように仰け反り、そのまま濡れた地面に崩れ落ちる。帝国兵達は左頭部が爆せて脳がはみ出している味方を見て一瞬怯んだが、次の瞬間には怒りの雄叫びを上げて突進してくる。

『はあっ』

声が重なるや否や、二人は申し合わせたように充填フィールを駆使し、横に薙ぎ払うように互いの武器を振るう。二人の武器が一つの軸と化し、回転して円を描いては二人の周囲を覆うようにして旋風つむじかせが巻き起こった。接近してきた十人程の帝国兵達は強烈な力で弾かれたかのように吹っ飛び、地面に倒れ伏した。まともに武器に触れた何人かは今の一撃で死んだのであろう、ピクリとも動かない。

「……マリスノリスでは五百人くらいだったか。今日は千人くらいはいけそうだな」

恫喝どっかつでもするかのような低い声でアステイスがそう口にする、帝国兵達がはたと動きを止めた。無論、アステイスのそれはハッタリに近いものである。或いは、マリスノリスで奇襲した時であったら千の兵を倒せる可能性もあつたかもしれない。しかし、囲まれて動きを著しく阻害されている状況では、数百人倒せるかどうかも怪しいものであった。

だが、その脅しは一定の効果を発揮する。どんな相手であつても戦っているうちに疲れてくればいずれ仕留められるのだろうが、心情的な事を申せば誰だつて自分が殺される五百人の中には入りたくないのである。二人の一フィール（充填）による熾烈しれつな一撃をまざまざと見せつけられ、戦慄している今となつては尚更であつた。

「お、おい、お前行けよ……」
「そ、それを言うならお前こそ……」

肘で小突きあう帝国兵達。「どうぞどうぞ」と譲り合いの精神が二人の目に眩い。これが満遍なく発揮できるようになれば、きつと人類は平穏で健やかに生き永らえるのであるうな、とアステイスは息を整えつつも栓なき事を思い浮かべた。

数十秒程やいのやいのと揉めていた彼らは、ごたついているのに我慢できなくなった中隊長の鶴の一声でやっ動き出す。

「何をやっているかっ、一斉に突撃しろっ。二十億は目の前だぞっ」

一斉についていうならお前もかかってこいよ、とでも言いたげにルガルは渋い顔をしたが、提示された賞金の額に目の色を変えた者達はピクンと身を震わせ、再び二人にいきり立って襲いかかってくる。この調子では二人のどちらかが少し傷を負っただけでも、周りの兵達が勢いづくだろう。一太刀浴びせることに二十億ギラが段々と近づいてくるわけである。

敵を何とか打ち払う中で、誰かが「手足を切り落とせば1億ギラ、目を潰せば3億ギラ」などのたまうのがルガールの良過ぎる耳に入った。

好き勝手な事を言いやがって、ダーツじゃねえんだぞコラ。

余力がある内なら離脱も可能だろうが、せめて避難が完了するまで粘らないと、連中が再び避難民に襲いかかるかも知れない。どちらにせよ、敵に手厚く包囲された今となつては、相手が諦めるか援軍が現れるまで充填^{フィル}を駆使し続けて場を凌ぐ以外には、これといつて有効な方法がなかったのであるが。

「うらっ」

ルガールは三節棍を大きく後ろに振りかぶり、連なる帝国兵の顔目掛けて横一閃した。強烈な一撃に殆どの者が後方へふっ飛ばされるが、運良く攻撃範囲から漏れた背の低い兵がルガールの懐に潜り込むようにして剣を腹に突きたてようとする。その顎をルガールの履いた皮靴のつま先が僅かに早く捉え、顎を砕かれた背の低い兵はそのまま高々と蹴り上げられて仰け反る様に宙を舞い、包囲していた兵達の頭上に墜落した。

背を預けるアステイスも、近づいてきた者達の急所を狙って細剣で片っ端から突く。大体の者は喉を突けば事足りたが、全身を鎧で覆われている者に関しては少し工夫せねばならなかった。視野を確保するために開けられている兜の穴の部分、つまりは相手の目を突く事を心がけたのである。

ひたすら単調な動きを繰り返すだけなら多少疲労も抑えられるものだが、例外が一つでも混じると、その分だけ精神的疲労が増す。^{イレキユラー}瞬間に死体の山が大きさを増していくが、段々とそれが邪魔になつて動ける範囲が狭まっていくな。雨水が目に入る事にも気を配らねばならず、状況は悪化していく一方だった。

午後2時15分

いつの間にか、二人の足元には大きい血溜まりが出来ている。血が淡い色をしているのは降り注ぐ雨水で相当に薄まったからである。先程まで東の家屋を包んでいた炎は今や南東にまで燃え広がっている。火勢があまりに強く、この程度の雨では消すまでは至らな

い様だ。悪い状況なりに二人は必死に、それでもその必死さを顔には出さぬよう心がけて奮闘を続けていたが、暫くすると敵の動きに変化が現れる。

(……飛び道具か)

進展しない状況に、いい加減業を煮やしたのだろう。前列に弓兵が五、六人出てくる。もっと早くに用意してもいい様な気もしたが、そうしない理由が一つアステイスの頭に浮かんだ。自分が賞金首であるが故に、矢を一斉に射かけて倒された場合は誰の矢がトドメを刺したかで揉めるわけだ。出来れば、間違い難い近接武器で仕留めたかったのが本音なのだろう。どうやら、彼らの中では分け合うという考え方はないようである。譲り合いはあるのに分け合いはない。何と矛盾した倫理観であろうか。

弓兵達がこちらに狙いを定めているのを見止め、アステイスは咄嗟に斃れていた敵兵のベルトを充填した足先で引っ掛ける。直後、狙いを絞った弓兵から次々と矢が放たれたが、アステイスはそれほどほぼ同時に足を振り上げ、ふわりと宙に浮いた死体の襟首を片手でムンズと掴んで盾代わりにする。ドスツドスツと、矢が刺さる度とその衝撃が手に感じられるが、幸いにして貫通はしなかったようだ。アステイスは安堵の息を心中に落とした。

「な……」

帝国兵達は同胞の死体を平然と盾に使ったアステイスに絶句する。「ふん、貴様らはどうやら死んだ方が世のために役立つようだな。

他に希望者があれば承るぞ」

アステイスは不敵に笑い、押しだす様にして盾代わりにした死体を手放した。身体が地面に叩きつけられる間際、刺さっていた矢がミシミシと拉げる音が耳に障り、次いで水が強かに跳ねる音が聞こ

えた。

(よくもまあ、そういう言葉がポンポン出てくるなあ)

ルガルはアステイスの胆力に感嘆したが、そうでもして少しでも時間を稼がねば、それだけ自分達の死ぬ確率が上がるだけなのである。既に200人ほどは倒しているだろうが、敵の数は一向に減った様子を見せない。悟られぬように気を配っていたものの、実際の所、二人はかなり消耗していた。

(つて、こつちはちよつとやばそうだな)

おもむろに魔法使いらしき男が人垣を割る様に現れる。おそらくは先程まで好き勝手に撃っていた奴だろう。一瞬笑みを浮かべた後、魔法使いは詠唱を開始する。背中合わせに戦っている以上はこちらが動けないと踏んでいる様だ。ルガルは状況を打破するべく、根を振り回して敵を薙ぎ払いながらも辺りに素早く視線を巡らす。

我が手に燃は業もえる 貌かたちを成なすは球

(お、良い物発見)

帝国兵を弾き飛ばし、魔法使いまでの視野を確保したルガルは傍に落ちていた帝国兵の鉄兜を素早く拾い上げると、視線を合わせぬようにして魔法使いに狙いを定める。

地と共に彼の者らを焦がせ

魔法使いが天に掲げている両手の上に、浮かび上がるようにして巨大な炎が姿を現した。

「うおりゃあつ」

相手の詠唱が終わるのとほぼ同時に、ルガールは渾身の力で鉄兜を放り投げた。

「^{ウァ・フレイ……}？ 炎 グハアッ」

ルガールの一投はものの見事に魔法使いの顔面へと命中し、術者の制御から外れた巨大な火球があさつての方向へ放たれた。

「^ッつて。う、うわわわわっ」

運悪くそちらの方角にいた帝国兵は大慌てで、周りの兵を押しつけて火球から逃れようとする。

カッ

火球は二人の直ぐ脇を通り過ぎ、ルガールから見て斜め後方に展開していた帝国兵達の少し上空で爆発した。発生した熱風がその下にいた者達を一舐めにする。火に包まれた帝国兵達は悲鳴を上げてもがき苦しみ、その身体を徐々に丸めるようにして倒れた者から息絶えていく。辺りには肉の焼ける香ばしい匂いが髪の毛の焼ける醜悪な匂いと混ざり合った。雨が強さを増していたのが幸いか、その火は直ぐに収束に向かう。

目を覆いたくなるような光景を見せつけられて帝国兵達は呆然とし、それを咎める様にルガールは鼻息を荒げて吼える。

「あんな効果範囲の広い魔法を使うなんてどういっつ見だコラっ。確実に味方を巻き込むだろうがっ」

その人柄からか、相手を心配しているようにも聞こえるルガールの物言いに、らしいといえばらしいか、とアステイスは苦笑する。融通の利かぬところは、どこかジルバートにも似ている気がする、

そんな事を思い立った直後

(ぐっ……)

前触れもなく、アステイスは全身に錘おもりを付けられたかのように身体フイールの反応が鈍くなるのを感じた。充填フイールを酷使し過ぎたのである。疲労を顔に出さない様に口を閉じ、歯を食いしばる。心臓の動悸が勢いを増し、まるで裡うちを太鼓の鉢ばちで滅茶苦茶に叩かれているようだ。先程まで軽々と振るっていた剣がやたらと重く感じ、それを持つ手が細かく震える。

熱を帯びた全身に油汗がブワツと吹き出してくるのを感じる。雨で敵兵の目には判別し難いのがせめてもの救いだった。もし晴天であれば尋常でない汗の量を見止められて色濃い疲労を悟られたらう。

せめて武器を落とさぬようと、手にありつただけの力を籠める。万が一落とせば、それを好機と見て帝国兵が雪崩れ込んでくるのは避けられない。

(……ま、よくもった方だな)

後ろをチラリと見て、ルガルもアステイスの異変に気付いた様であった。雨が熱された肌フイールに触れてゆらゆらと白い蒸気が立ち上っている。間違いなく充填フイールの乱用による兆候だ。

ルガルは充填フイールを使い慣れているから今少しの余裕があつたが、アステイスは身に付けてから半年も経っていない。戦う前には、アステイスがもうとつくに力尽きている状況すら想像していたのである。

見れば二人を囲む帝国兵達は同士討ちのショックから立ち直りつつある。再び突撃してくるのは時間の問題であろう。どうやら最悪

の事態をも覚悟せねばならぬ状況にあった。

「……まだやれる、心配するな。私は諦めが悪いんだ」

胸中を察されたルガルは一瞬眉を上げ、次には快活に笑う。

「……へへ、よく知ってるぜ」

疲れた体に鞭を入れ、アステイスは再び足に力を籠める。それを合図にするかのように、再び敵が一斉に突撃してきた。

「自分の言った事に責任持てよつ。背中心配はしないからなつ」

「当然だつ」

猛る二人の戦士は向かってくる帝国兵に力を振り絞る様にして武器を振るう。アステイスは血糊で斬れなくなった細剣を槍の様に投げて敵兵の胸に突き刺すと、周りの兵が怯んだ隙に近くにあった敵の剣を素早く拾い、手にして応戦する。

ルガルも三節棍を両手で振り回して敵を蹴散す。しかし、十合も重ねた頃

ピシッ

「……ちっ」

ルガルは反射的に舌打ちをする。武器を酷使し過ぎたのだろう。知らず知らずのうちに棍を連結していた鎖が傷んでいたのか、運悪く敵の金属製の肩当てを殴ってしまった拍子に先端の棍を繋いでいた鎖が千切れ飛んだ。予期せぬチャンス到来に帝国兵達は雨音を掻き消すほどの歓声を上げる。

アステイスは身体が限界に近く、ルガルは武器を失い、二人の

運命はもはや風前の灯であった。

其の四十五 く比類なき女傑（表）く

午後2時40分

「……これで、賞金は俺の物だっ」

ようやく付け入る隙を見せたアステイスとルガールに向かつて帝國兵達は我先にと駆け出した。まるで大売出しに殺到する中年の主婦達のような、鬼気迫る顔貌かんぼうである。

ルガールは迷うことなく長さリーチの短くなつた三節棍を捨て、自分に対して真つ先に剣の切先を向けた敵兵に狙いを定める。体を半歩右にずらして突きを避けると左の脇で剣持つ腕を挟み込み、がっちり固定したまま敵の右肘を空いている右手で内から外に思いつきり押した。

「ぎっ、ぎゃあああっ」

骨が軋む音と共にその腕があらぬ方向に曲がり、脳の命令を遮断された敵兵の手から剣が零れ落ちる。それを目の端で捉え、もう用はないと言わんばかりに腕を折つた兵を接近してくる敵兵に向かつて力任せに突き飛ばした。勢いを削いだ所で何とか新たな武器を確保し、ルガールは先走つて突っ込んできた兵士に対して僅かな感謝の念を禁じ得なかつた。しかし、それに対する仕打ちが推定全治四ヶ月の上腕骨外課骨折ではあんまりというものであるう。

一方で、アステイスの方はもう少し切羽詰つた事態に陥っていた。全身鎧を着た敵兵達が三方向から彼にぶちかましを試みたのである。

細剣を振るつても顔面を腕の甲で防御されてはまず仕留める事は出来ない。ルガルが少し離れた場所に居る事を確認し、咄嗟に格闘戦を選択したアステイスは敵の体当たりを身を屈めるように避け、そのまま一方の敵の足元を潜ろうと、両腕を交差させて衝撃に備える。

「ぐっつ」

金属製の具足とまともにぶつかった腕が骨の芯まで痺れるが、バランスを崩した兵はつんのめって他の兵達とぶつかり、転倒する。何とか難を逃れる事に成功するも、アステイスは素早く身を起こしたところではたと違和感に気付く。左手に持っている剣が相当に軽くなっていると感じ、そちらを一瞥しては唇を噛む。細剣を持ったまま敵と交錯したため、その拍子に刀身の殆どが折れてしまっていたのである。

「アステイスつ、後ろっ」

ルガルも武器を確保するのに神経を尖らせていたため、声を掛けるタイミングが僅かに遅れた。一瞬の逡巡がアステイスの反応を鈍らせ、背後からの不意打ちに致命的な遅れを取ったのである。

「しまっ」

アステイスが顔を後方に向けた時には、既に頭目掛けて敵兵の剣が真っ直ぐに振り下ろされていた。顔に迫る剣の動きがやたらとゆっくり見えるが、拳動が遅いのは自分も同じ事であった。

避けられない。直感的にアステイスは死を覚悟し、強く瞑目する。

ガイーンッ

激しい打撃音が耳に響き

「なっ、馬鹿なっ」

次いで動揺する敵の声が鼓膜を震わした。雨が皮膚に触れる感覚も未だ消えていない。意識がこの世にある事を確認し、アステイスは薄らと目を開ける。

彼を庇う様に、そこに佇んでいたのは、褐色肌の獣人ライカンの女だった。

「オ、オルフィツ」

ルガールの驚きと喜びの入り混じった声が響く。

「待たせたな」

獣人ライカンの女は短くそう言うと、いつの間にか武器を失っていた帝国兵の顔にも止まらぬ速さで上段回し蹴りを放った。束ねられたインデイゴ色の長髪がまるで文字を描くように宙を揺らめく。

「がひゅっ」

そのあまりの威力に帝国兵の体が蹴られた首を支点にして一回転し、勢い良く地面に叩き付けられる。当然、起き上がってくる様子は全くない。

アステイスが起きた事を把握しきれぬままに、突如、広場の北側の方から悲鳴が乱れ飛ぶ。低空を見れば二つの影がかなりの速度で縦横無尽に飛び回り、下方の帝国兵に向けてしきりに矢を放っている

る。敵兵が邪魔で見る事はできないが、おそらくは下にもいるのだろ。徐々にはあるが包囲網が崩れて行き、遠めには屈強そうな傭兵達がアステイスとルガールを囲んでいた帝国兵達を猛然と蹴散らしていくのが見えた。黒い人垣はみるみる薄くなつてゆき、状況を察した帝国兵達が慄おのき始める。

ルガールの生気と安堵に満ちた顔を見て、アステイスは援軍が来たのだとようやく理解する。

「……へへへ、死ぬにはまだ早そうだぜ」

「……そのようだ、なっ」

話の腰を折る様に横から突っ込んできた兵の振り下ろしを、アステイスは素早く左手で抜いたソードブレイカーで受け止めると共に、手刀を相手の首に叩き付ける。予期せぬ敵の襲来にうろたえながらも帝国兵達は未練がましく三人に襲いかかったが、それも長くは続かなかった。

程なくして包囲網は完全に崩れ、帝国兵が散り散りに敗走を始める。息も絶え絶えになったアステイスとルガールは改めてオルフィと対面した。

アステイスよりやや背が低い、それでも男の軍人としては平均くらしいオルフィは、眼光鋭いツリ目で二人の周りにおびただしい数の死体を一瞥してからアステイスに視線を止める。黒い半袖に紺色のジャケット、そして白のホットパンツ。布地の少ない夏服は褐色の瑞々しい肢体を惜しげもなく見せつけている。その服も雨と汗で濡れているため、着用している下着がはつきりと透けて見え、アステイスは思わず目を横へ逸らした。

「……人間……か」

オルフィは意外そうな顔をしながらポツリと呟いた。

「……オルフィ。俺もいるって」

浅く呼吸を繰り返すルガールが心外そうに手を挙げたのを見止め、オルフィは鼻で笑う。

「ふん、誰かと思えば。久し振りだな、ルガール。少しは腕を上げたか？ まさかこんなシチュエーションで会うとは思わなかったぞ」

まるで男のような言葉遣いをするオルフィの、特徴のあるハスキーボイスが二人の耳に心地よく響く。

「……ああ、いや、まあ、……とりあえず、助けてくれてありがとう」

ルガールは頭を掻きながら照れ笑いを隠すようにしてそっぽを向く。或いは、彼もオルフィのあられもない姿を直視できなかったのだろうか。

「礼を言うのはこちらの方が、な。仔細はサークレイルから連絡員バーティアルの翼人を介して聞いている。避難民を助けてくれたそうじゃないか」

「いやもう、無我夢中で何が何だか。……なあ、アステイス」

「……あ、ああ」

急に話を振られたアステイスは僅かに戸惑いの表情を見せた。

その名を聞いてオルフィは少し驚いたように柳眉を上げ、しげしげとアステイスを上から下まで眺める。その無遠慮な視線に、アステイスは居心地の悪さを微かに感じた。

「アステイス、フロイデ……か。こんな所に極上の生餌いきえがあるとはなるほど、帝国のゴキブリ共がほいほいと群がるわけだ」

黒光りする鎧を着ているだけに、という事であろうか。言い得て妙と評せなくもないが、黒いアレの餌扱いけいされては良い印象を持つ者はいないだろう。少し不服そうなアステイスを尻目に、南の方ではアクア・ティ・アラの魔法使い達が燃え広がった火を食い止めよ

うとしていた。

万物を濡は数多の雫 御手に抱は白き睡 大いなる荒波と化せ

降り注いでいた雨が二人の魔法使いの間に螺旋状に集い、水の渦を生じさせる。

ヴァンアケール
浪蓋

二人の魔法使いが詠唱を終えると渦は弾かれたように消失し、次いで地面から湧き出でるように高さが10m近くもあるうかという巨大な波が出現する。その波は十秒もたたぬ内に火の付いた数多の家屋を一気に呑み込んで行き、急激に高さを失って地に叩きつけられた。弾けるような音が辺りに響き渡り、その後には白煙を幾つも立てている廃墟のみが残る。

火は完全に消失したようだが、その凄まじい水圧は燃えていなかった周囲の建物まで押し流してしまっていた。それをわかっているのであるう、魔法使い達は少しばつの悪そうな表情をこちらに向ける。

「オルフィさん。とりあえずはこれで」

オルフィは瞑目したまま頷く。

「緊急時だ、仕方あるまい。お前達は帝国兵の生き残りを仕留めてこい。……非戦闘員をも笑みを浮かべて手にかけるような連中だ。一切容赦するな。但し、深追いもするなよ」

「了解です」

オルフィの指揮下に入っていた傭兵達は頷くと、西の方へ颯爽と

駆け出し、その姿はみるみる遠ざかっていく。それを見届けてから彼女は再びアステイスに向き直る。

「話題の有名人がどこに雲隠れしていたのかと思えば、まさかこの町に来ていたとはな。燈台下暗しとはよく言ったものだ」

アステイスは何と言って良いのか迷っているようだった。悩むその様子をオルフィは面白そうに見つめている。

「まあいい。二人とも暫く安全な所で休んでいる」

「……いや、まだ戦える」

限界が近そうなアステイスの明らかな痩せ我慢に、オルフィは笑いを触発される。

「フフツ、あまり強がりな　　むっ」

何者かの気配を感じたオルフィが素早く視線を滑らせる。北側から黒装束に身を纏った兵が二人、ゆっくりとこちらに歩いてくる。三人は目を細めながらもその姿を見据える。

「あいつ、さっきの……」

肩に包帯が巻かれている男の方は間違いなく、先程ルガールが投擲で剣を命中させた男だ。一人では敵わぬと見て援軍を呼んで来たのだろう。わざわざここに戻って来るとは、随分と執念深い性格である。

「トリニティ・ワン三重の頂。やはり同行していたか」

呟いたオルフィに、アステイスとルガールは刹那の視線を送り、瞬時に敵影へと戻した。

「道理で、腕が立つわけだな」

ルガールは段々と近づいてくる敵から目を逸らさずに言う。

「貴様ら、さっきはよくもやってくれたな。……楽に死ぬると思う

なよ」

「へん、尻尾を巻いて逃げていりゃ良かったものを。わざわざ死にくるとはご苦労なこつて」

ルガールの挑発に反応して、小柄な方の男が不愉快そうな顔をした。どうやら相当おかんむりのご様子だ。

「……ちつ、あいつらを少し残しておけばよかったな。前言を撤回する。一人は引き受けるからもう一人はお前等で何とかしろ。まだ戦えるんだらう？」

オルフィは意地悪そうに二人へ流し目を送るが、その発言は相手の際立つた実力を見越しての事だらう。

「何とかするさ……」

アステイスの言葉を聞いているかいないのか、不意にオルフィは20mほど手前まで近づいてきた敵二人に対し、空気がひり付く程の凄まじい殺気を放つ。

その威嚇に反応した二人の刺客は石畳が砕けるほど強く地を蹴り、その破砕音が開戦の合図となった。

五分後、出来上がった二つの死体を見止めたオルフィは、衣服がびしょびしょに濡れる事も厭わずに膝と尻とを付き、息を切らしているアステイスとルガールに視線を転じる。密度の濃い一時を思わせる様に、二人の身体には浅い切り傷や痣が無数にある。もはや精も根も尽き果てたようだ。

オルフィの方はと言えば、身体にも所々打ち身の痕や掠り傷はあるものの、それでも二人に比べればずっと少なかった。

「とても満点はやれないが、まあ及第点くらいはくれてやる」

こいつらと戦う前にずっと帝国兵の相手をしていたのに無茶言うな。地にへたばった二人はそう言いたげであったが、長きに亘ってぞんざいに扱われていた肺と心臓は酸素を取り入れる事が急務であるらしく、言葉を発する権限をあっさりと放棄する。だが、どちらにしても偉そうな事を口には出来ない。結局、二人の三重の頂双方トリニティ・ワンに止めを刺したのはオルフィであった。

傍目には、オルフィは充填ファイールを使わず、されどもそれを使う相手に押され気味に戦っていたように見えたが、彼女が体勢を崩し、敵が勝機と判断して突っ込んできた所を、彼女は一瞬だけ充填ファイールを駆使した。彼女の遅い（と言っても相当な速度だったのだが）動きに目が慣らされていたのだろう。敵はオルフィの姿を完全に見失い、その刹那、哀れにも首にリアットを噛まされてしまう。おそらくは、体勢が崩れるように見えたのも彼女の仕掛けだったのである。

カウンターの一撃で首を骨毎持っていかれた男はその場に倒れ伏し、疲弊した二人を相手に奮闘中だった、肩を負傷している方の諜報員が三対一になってしまった事に僅かな動揺を見せ、その隙をルガーが見逃さなかった。掌底打を背中に浴びて吹っ飛ばされた敵を目に捉え、着地点を予測して回り込んできたオルフィは、地面に膝をつく敵の顎目あご掛けて足元から天へと弧を描く渾身の蹴りを放ち、やはり首の骨を折ったのである。いや、折ったと言うのは正確ではない。あまりの破壊力に首の薄い筋肉が堪え切れず、頭部が根元から千切れ飛んでしまったのだ。

「おつかねえ……」というルガーの呟きに強く共感しながらも、あんな戦い方もあるんだな、とアステイスは密かにオルフィを称賛した。彼女は充填ファイールの切り替えによって緩急を付け、速度の急激な落

差によって大陸中で恐れられている三重トビテ・イ・ワシの頂をも手玉に取ったのである。

其の四十六 くその手に掴んだ物は(表)く

午後3時05分

「これで終わり……かな」

ようやく広場に沈黙が訪れ、オルフィは立ち上がりぬ男二人に肩を竦める。

「だらしない。大の男二人が、いつまでそうしてへたりこんでいるつもりだ。……とつとと移動するぞ。ほれ、立て」

短く二回、手を叩いて立ち上がるよう急かすオルフィに、まるで犬扱いだと思いつつも、アステイスとルガールは渋々従う事にした。まだ三重の頂が残っていたら本当にお手上げだと思っていたからである。痙攣する太腿を庇うように膝を抑えながら慎重に立ち上がる。二人がやつと顔を上げた時には、オルフィは既に広場の西側にある路地へ入ろうとしている。二人は顔を見合わせ、次いで弱々しく溜息を吐き、慌てて遠ざかる彼女を追うのであった。

追いついて来た二人を一瞥してから、オルフィはふいつと前方を向く。

「で、二人とも。こんな所で何をしていた」

歩を進めながらも背中越しに質問を飛ばすオルフィに、ルガールが言葉を返す。

「オルフィもヒツキの旦那の事は知っているだろ？ 旦那の代理人としてアクア・ティ・アラに依頼をしてきたんだ」

形式的な挨拶を省いた所から察するに、どうやら二人とも、ある程度は気心の知れた仲の様だ。

「……なるほど？　それで、何でこんな奴がオマケで付いて来たんだ」

餌の次はオマケか。齒に衣着せぬオルフィの物言いに、アステイスは今日何度目かの渋い顔をする。

「……アクア・ティ・アラの事を話したら、コイツが接触を図りたいて言っつてさ。まさかグリューンがこんな事態になっているとは思ってもよらなかったけれど、な」

「……傭兵の前に20億ギラの賞金首がノコノコと、か？　命知らずにも程があるだろう。この男、本当に先帝の懐刀とか言われていたのか？　それとも、懐刀って馬鹿でもなれるものなのか？」

アステイス本人とて、懐刀なんて渾名を付けられて愉快に思っているわけではなかった。自分の預かり知らぬところでいつの間にか広まっていたのだからどうしようもない。いつの世も、どんな権力者も、内容の善し悪しにかかわらず、人の口に戸を建てる事は不可能なのである。

オルフィの並び立てる悪口雑言にアステイスが不機嫌さを隠しきれなくなってくるのを察し、ルガールは居心地が悪くなってきたのか妙にそわそわしている。

「……いや、本当はさ。コイツは顔を隠したまま近くにいて貰って、誰かしら話の分かりそうな人を連れてこようと思っっていたんだ。そうしたら」

「　タイミング良く帝国軍と鉢合わせた、と言う訳か」

客観的に見れば、タイミングは決してよくない。けれどもアステイスは、細部を指摘するのも億劫なほど疲れていたため、敢えて口にはしなかった。

「ま、そういう事なんだけどね」

一から説明するのも面倒だと思ったのだろう。ルガールは肯定の

意を示した。

オルフィは腰に手を当てながら今度は歩を止め、アステイスに向き直る。赤みを帯びた凜々しい双眸に見据えられ、一瞬鼓動が早まるのを感じた。

「……で、何故逃げなかった？」

「……何だつて？」

聞き間違えたか、とアステイスは怪訝な顔をする。

「質問を質問で返すな、間抜け。何故己の命を投げ出すような真似をした。あの程度の実力で助かる算段が高かったとは言わせないぞ」

(……ぐ)

あの程度の実力、と決して恋愛的な意味でなく胸を射抜かれたアステイスは、何か言い返そうとしたが気の利いた言葉が出てこない。「あれは俺の本気じゃない」とか言えば大笑いされそうだし、「疲れていたんだ」とか言えば聞き苦しい言い訳にしか思われないう。考えてみれば、オルフィも長い間傭兵団を率いて帝国軍と戦っていたのだ。

とどのつまり、アステイスが剣士として円熟の域にあると自負していた力は、彼女にとって取るに足らないものである、というだけの事であるが、それをすんなりと認めるのも中々難しい事であった。

「そりゃ、避難民を助けるためだろ……」
ルガールが口を挟む。

「お前はそうだろうさ。ここにはお前の元奴隷仲間も結構いるからな。私は、アステイスとフロイデ、貴様に訊いている」

「……私に？」

「……危険を冒してまで貴様が亜人達を助けたのは何故だ。我々に恩を売って協力を得るためか？」

その言い草には流石にカチンときたのか、ルガールが非難めいた口調で待ったをかける。

「……おい、オルフィ。アステイスは帝国兵の注意を引き付けて避難民を標的から外すために」

「いいんだ、ルガール」

アステイスが手のひらで制する。

「……で、でもよ」

辛辣な事を言われているのはわかっていたが、その部分に関してだけは腹も立っていない。むしろ、我々人間が亜人に憎まれる様な真似を平然とやってきた結果と受け止めるべきだろう。もともと、自分が人間代表であるなどとは露ほども思っていないのだが。

(何故……なんだろうな)

「……自分でもよくわからない。……気が付いたら身体が動いていた。声が出ていた。多分、諦める事に飽きたんだろうな」

「……諦める？」

まるで他人事のように己の心情を語るアステイスに、オルフィは眉をひそめる。

「仕方がない。それは便利で、有り得ない言葉だ。仕方はあ。可能性が低いから、勇気がないから、何かのせいにしてそれから目を逸らしているだけだ。事実、帝国に身を置いている時、私はずっとそうしていた」

アステイスは言葉を切り、天を仰ぐ。メリッサがいるはずの天を。
「私は、自分の手で助けられる可能性から目を逸らしたくなかった。また間に合わなかったら 今度こそ、自分が壊れると思った。自分が無力だと思いき知らされるのが、堪らなく……怖かったんだ。だから結局は自分のため、なのだろうな」

少しでも、救われたかったのかもしれない。安堵したかったのかもしれない。メリッサを救えなかった自分が、それでも誰かを救えると知りたかった。その可能性に縋りたかった。ただ、それだけだ。それはきつと、今までずっと隠してきた己の、心の弱さなのだろう。

アステイスは視線をオルフィへと戻す。

「一応、偽りなき本心を言ったつもりだ。貴方が納得できる答えかどうかは、私にはわかりかねるけれどね」

彼らを救わねば自分が壊れると思った、か。果たしてどこまでが本心かはわからぬが。この男が身を投げ出した結果、大勢が救われたのは事実、か。

オルフィは不意にルガルへと視線を転じた。彼も人間という種に対して快く思っていないのは確かだが、少なくともアステイスに対しては一定の信頼を置いているようだった。弁護しようとした時の口吻が演技でなかった事くらいはオルフィにもわかるのである。

オルフィは腰に手を当て、目を軽く瞑る。

「ま、良いだろう」

「うん？」

「どのみち我々も帝国に弓を引いてしまったからな。今後の方針を伺わねばならん」

雨で顔に貼り付いた前髪を片手で掻き揚げ、オルフィは薄らと目を開ける。

「……何の話だ？」

「よもや忘れてはいまい？ 先程ルガルが口にしていたヒヅキ殿の依頼の話だ。貴様らに相当な覚悟があるなら口添えしてやっても良いと、そう言っている」

「……口添え」

「後でマスターに会わせてやろう。説得できるかはお前次第だが、な」

その意を汲み取り、ルガルは顔を綻ばせる。

「本当かつ。マジで会えるのかつ」

やたらと興奮しているその様子からすると、どうやらルガルもアクア・ティ・アラのマスターにお目にかかった事がない様であった。

「糠喜びするな。あの方の機嫌を損ねればその場で灰にされると思え」

オルフィの言葉にルガルはピタツと動きを止める。アステイスはそのような姿の石像に名を付けるなら、？踏ん張る人？がしつくりくるように思えた。

知らぬ間に雨は止み、一気に夏の蒸し暑さが噴き出してきた。雲の隙間から帯状の陽光が幾つも零れ落ちて町を照らしている。幾分開けた場所に出て、ふとオルフィが視線を北に移し

「虹……」と呟いた。

それに釣られるようにして、アステイスとルガルもそちらの方向を向く。七色の淡くも美しい色彩が空に大きく弧を描いていた。漠然とした何かを、予感させるかのよう。

同時刻

要塞に降り立って戦況を把握していたノス・トゥリは、ゴードン
「ベントニックスを護衛する者達の中に異彩を放つ大男を発見し、
戦慄していた。間違いなく、先日偵察に出ていた時に感じた威容で
あると確信する。

(……アレは……どう考えてもまずいですね)

とうに死に絶えていると思っていた鬼人オーガの男を視界に捉え、ノス・
トゥリは冗談ではなく鳥肌が立った。ちらりと紫色の目がこちらに
向くのを見止め、唇を噛む事によって辛うじて視線を逸らすのを堪
える。距離が1km近く離れているのにも関わらず、肌に突き刺す
かのような視線を感じる。或いは、それはノス・トゥリの視力が良過
ぎるせいでもあったのかもしれないが。

後方から翼人バーディアルが一名、ノス・トゥリの方へ飛んでくる。

「ノス・トゥリさん。オルフィ隊が防衛隊と合流できました。今は
街に散った帝国兵の掃討をしている模様です」

「……わかりました。では、疲れているでしょうがもう一つ、頼ま
れてくれますか。……ベントニックスの本隊が攻めてきても手を出
さぬようヒューリイ隊に伝えてください。もし連中が貧民街に入る
気配を見せたらやらざるを得ませんが、その場合は必ずオルフィ達
と組んで迎撃を試みます」

「……わかりました」

バーディアル 普段はのほほんとしているノス・トゥリの険しい表情を一目見て、
翼人の上級傭兵は直ぐに事の重大さを察したらしい。急いでヒュー
リイの指揮する軍に向かっていく。

(……或いは、二対一でも……)

オルフィと二人掛かりでなら、という考えを、ノス・トゥリは苦々しげに振り払う。言うまでもなく、二人はアクア・ティ・アラ屈指の実力者であり、ノス・トゥリ自身も己の力にそれなりの自負を持っている。事実、戦いを避けたいと思う相手に遭遇した事など皆無に近い。今までは。しかし、自分の頭の中では嘗てないほどの音量で警鐘がガンガン鳴り響いている。「戦うな」というシンプルな命令を重厚な音色に乗せて。

(……なるほど、な)

外壁の上に一人の翼人を見咎めたヘッドリイは口元を歪める。視線を解しただけでも、その力の程は察する事が出来る。或いは、三重の頂を一對一で撃ち破るだけの力を秘めているようだ。三重の頂の攻撃兵が戻らない所を見ると、どうやら彼らに始末されたのだから。

ヘッドリイの闘争本能が湧く。元来鬼人は好戦的な種族であるが、強い相手を叩き潰す事に喜びを感じるその感性は、節操のないイヴァンスとはやや趣向を異とする。

街に入らず、本体を平原に展開したままであったベントニックスは、町の南側で相当な痛手を被っているという伝令兵の報告を聞いて眉を潜めた。

「……んー、グリューンのような地方都市がこれほどの抵抗を見せるとは……少々予想外だったな」

そう口にするベントニックスに、ヘッドリイはのんびりとした口調への苛立ちを感じたが、言葉の内容には同意せざるを得なかった。少し前に三重の頂の一人がやられたのも何か例外的な事があったためと考えていたので、まさかこんな辺鄙な町にこれ程の戦闘集団が身を潜めていたとは思ってもよらなかったのである。

「確かに、想定外の様だな」

ヘッドリイの肯定の言葉に、ベントニックスが伏せていた顔を上げ、伝令兵に向き直る。

「……んー、仕方ない。……各隊に通達せよ。……一旦マリスノリスに帰還する」

伝令兵は困惑の表情を浮かべ、その隣でヘッドリイは密かに感嘆の息を押し殺す。

「え、し、しかし……」

「……あー、国軍の連中は大方倒せたことだし、貴族街の大半を制圧出来たのだからある程度の収奪は済んでいるだろう。……平民街や貧民街を襲ったところでたいして得る物もない。……これ以上此処に留まっても戦意は上がらんし、無駄な消耗戦を強いられるだけだ。……最低限、ブラージウス様の指摘された？国軍のシャンテールへの合流阻止？という目的は達されたのだからここらが潮時であるろう」

「……は、畏まりました」

走っていく伝令兵の後姿を見送りながら、ヘッドリイが口を開く。「司令官自らそのような事を口にするとは、少々問題があるな」

ベントニックスは顎に手を当て、少しだけ伸びた無精髭を指先で摘む。

「……んー、背伸びをした所で実際に背は高くならん。……万が一にも勝ってしまって、ブラージウス様に大きい事を出来ると思われ

るようになってはいずれ儂が困る事になる。……平凡な私に命じられたのだし、不測の事態も予測の範疇に入っておられるだろう。…
…鼻頂目なしに見ればこれは引き分けだ。……今引き返せば兵達の命はこれ以上失われず、遠征分の食料を消費しただけで済む。……
好き好んで虎兇のいない虎穴に入る馬鹿はおらん」

勝ちたくも負けたくもない、自分の評価も他人の評価も中庸であれ。究極の事なかれ主義というわけである。この男は自分というものを誰より理解しているのだ。ベントニックスの際立った長所が一つ垣間見え、ヘッドリイは彼に対して微細ながら好感を覚えた。人間という種その物を毛嫌いしている彼にしてみれば、これは異例の事である。

まあいい。よくよく考えてみれば俺が命じられたのはこの男の護衛のみだ。勝ち負けまでは言及されていない。

再び要塞に視線を向けると、翼人の姿はもうどこにもなかった。

この後、ベントニックス率いる帝国軍は退却の様相を見せ、二時間後には大部分がグリユーンの町から撤収した。結局、この戦いで帝国軍の死者が6000余、三重の頂の死者が2。対して、国軍の死者が7000余、アクア・ティ・アラの死者は上級傭兵が2、中級傭兵以下が186名という結果に終わった。

だが、これほど大規模な戦いになったにもかかわらず、非戦闘員の死者は貴族街を除いては二百を満たぬ数に抑えられた。これはアクア・ティ・アラとアステイス達の手柄だけではなく、貧民街の荒くれ者達が非戦闘員を庇い、最前線で戦った事にも起因している。

そんな中、アステイスが己の身を擲って貧民街の住人達を助ける

姿はその場にいた者達の目に強く焼き付けられ、ひいてはアクア・ティ・アラの傭兵達に良い心象を与える呼び水となった。幾つもの運命の悪戯を経て、彼は当初の予定であった説得という手段ではなく、捨て身の行動で信頼を勝ち取るに至ったのである。

其の四十七　く蒼い太陽（表）く

テルネシアの帝国兵達がグリユーンから完全に撤収したのを見届けると、まだ体力に余裕のあったアクア・テイ・アラの傭兵達は仲間達の遺体を丁重に弔ってから街の方々に散っていく。特に、貴族街は建物の七割近くが全壊、若しくは半壊という壊滅的な被害を被っていた。グリユーンの主だった将校はその殆どが戦死し、国軍の生き残りも三千に満たぬという散々たる有様である。初めは渋い顔をしていた傭兵たちも、家を、家族を失って嘆き悲しむ者を見るに見かねたのか、死体の運搬、生存者の救出作業、街の復旧等に力を貸す事となった。

貴族街の住人に見れば、何でもつと早く助けに来てくれなかったのか、と言いたい所かもしれないが、自分らとて平民街、貧民街に国軍の派遣を怠っていたのだからそこはお互い様であろう。結局のところ、他人の痛みは自分が同じ目に合わないとは理解できないのである。

午後 11 時 00 分

夜通しの復旧作業が続く中で、オルフィ達はマスターに仔細を報告するため、ギルドの地下街に向かっていた。貧民街の路地裏にある酒場の扉を開き、手すりを取り付ける余地もないくらい狭い階段を一行に並んで下りていく。ぽっかりと口を開けた底の見えぬ穴か

らは、どこからか紛れ込んだ気まぐれな風が奥の方で反響し、か細い悲鳴の様な音を立てていた。

「運の良い奴だ」

先頭を歩いていたオルフィが独り言のように呟く。

「んあ？」

その後ろに続いていったルガールが訊き返す。

「アステイス」フロイデの事だ。先立って、帝国軍との戦いを前に金だけが目当てで在籍していた傭兵達は逃げ去っている。今も此処に残っているのは、死の臭いを感じさせる難敵に臆す事無く立ち向かった者達だ。少なからず、理念と道義を弁えているから殺される可能性も低いだろう」

「ああ、なるほどね」

「それに偶然とはいえ、平民街、貧民街の住人達の信頼をも得たのは大きいかも知れん。世間は彼が民達を貧富の差無く守った、と見てくれる可能性があるからな。ま、本心がどうかまではわからぬが」ルガールはそれを聞いて溜息を吐く。

「……疑い深いなあ。まあ、俺もついこの間までそうだったけれどさ」

「何だ、旧知の知り合いというわけではないのか？」

「今年に入ってからの知り合いだよ。いや、もう知り合いではないか。人間の中じゃあ旦那達の次に大切な友人だからな」

「……お前ほどの男が、随分入れ込んだものだな。きっかけはマリスノリスか。差し詰め、一緒にいた獣人というのもお前の事だろうか？」

称賛にも似たオルフィの言葉に、ほんの少し気を良くしたルガールは声を弾ませる。

「へへっ、当たり前。足止めた理由はわかっているだろうから説明しないけれど、アステイスがあの方法を提示した時はそれなりに揉

めたんだぜ。正直言うと、効果のほども半信半疑だったんだけれど。アイツは冷静にブラーヂウスの心理状況を把握していたよ」

マリスノリスの襲撃は、大半の者には幾分大雑把に映った事だろう。その実、アステイスは翼獣グリフォンという強みを最大限活かす策を採り、襲撃の日時においても可能な限り吟味していたのである。

襲撃が鮮やかに成功した理由は幾つかあった。ブラーヂウス自らの出兵によって大陸統一が目前に迫っているのを感じ取り、見張りが気を緩ませていた時機であった事。過去にも殆ど例がない空からの奇襲。数的不利を覆すべく、兵が広く点在する真昼間という時間帯を狙った事。実行日も重要であった。帝国とシャンテールとの戦いが始まる少し前に伝令が届くだろう日を設定したのだ。

何故そんな詳細に決めたかという点、初期の段階で単独の犯行だと気付かれ難くするためであった。仕掛けを早めては出兵していた大軍が早く戻ってきてしまうため、搜索網が広がる。そうした場合、近日の内に数多の兵達の痕跡が見つからなければ、再度の襲撃の信憑性を薄れさせてしまう。？アステイスが兵を率いているかも知れない？と心から思わせるには、仮想の兵が逃げるのに必要な日数をも設定せねばならなかった。日数が経過すればその分だけ風雨に晒されるわけで、痕跡が残らずとも不思議には思わなくなる。そうかと言って遅すぎでは開戦が始まってしまふので論外なのだが。

そして、何より重要であったのがブラーヂウスという人物の、内面の洞察だ。猜疑心の強い彼が聊いささかか腑はらに落ちぬ事態に遭遇すれば最悪の可能性を忖度そんたくする事、そして僅かな綻びを衝かれる事が彼の並々ならぬ自尊心を刺激するであろう事を読んでいたのである。

オルフィはルガールの話に聞き入っていたが、最後には首を傾げた。

「だが、それにしても今回のお前達の行動はやけっぱちと言っても過言ではあるまい」

ルガールは指の先で頬を搔く。

「……それを言うなって。俺だってあんな綱渡りは金輪際御免だ」

「別に責めているのではない。そのような真似をして無事だったのだから、機運を味方に行っている証拠でもある」

「……機運？」

「確証とまでは言わないが、お前達の到着が一日、ないし半日でも遅れていれば、少なくともマスターに合わせる気にはならないような事態になっていたのではないか？ 或いは早くとも同じ事だろう」

ルガールはオルフィの言葉を反芻し、はんすう言われてみればそうかもしれない、と思う。もし到着が遅ければ避難民が大勢殺されるか攫われていたわけで、彼らを守れなかった傭兵達の機嫌は著しく悪いものになっていたであろう。

逆に、いち早く前線に辿り着いていたとしたら。今度はアステイスとルガールが貧民街が襲われているのに気付かなかった可能性が高い。もしかしたら、パルティアル翼人が気付いて援軍が間に合ったかもしれないが、間に合わなかったかもしれない。オルフィの指摘は理に適っているものであった。

もしかしたらアイツ、見守られているのかな。

アステイスの亡くなった婚約者の話が脳裏に過り、ルガールは階段を下りながらそんな思いに捉われる。それは取るに足らない考え

であったものの、一笑に付す気にもならぬのであった。

並行するようにして、オルフィ達の20m程後ろをアステイスと
バードリアル
翼人が階段を下りながら言葉を交わしていた。

「ノス・トウリ」ホルマと申します。以後お見知りおきを」

「アステイス」フロイデだ。貴方が伝令役を指揮していたそうだな
「ええ、一応ね。今回の戦い、貴方とルガールの働きがなければ民
達の被害は甚大だったでしょう。助太刀、誠に感謝いたします」

「いや、正直それほど助けになつたかどうか。私が助けられたのは
あの場にいた者達だけだろうし、戦いそのものにはそれほど貢献し
ていなかったのでは？」

「いえいえ、三重トリニティ・ワンの頂を二人も引き付けて頂けたのは大きかった。

そうでなければ、こちらにも甚大な被害が出ていたはず。ぎりぎり
踏み止まれたおかげで、……あの男あの男の介入を防げましたから」

幾分トーンを落とし、ノス・トウリは言った。

「あの男？」

「帝国軍の本隊にいた鬼人の大男です。おそらくは三重トリニティ・ワンの頂のトッ
プでしょう」

「……っ。そんな大物が来ていたのか」

「いやあ、恥ずかしながら彼の姿を目撃した時には身が竦みました。
もし、彼が戦列に加わっていたら、……認めたくないですが全滅も
有り得たでしょう」

アステイスは慄然りっぜんとした。オルフィや他の傭兵達の実力を目の当
たりにした直後であるだけに、俄かには信じられない台詞である。

「……貴方達を以つてしても……倒せなかつたと？」
「一対多数に持ち込めるなら或いは……、と言うところでしょうか。あれだけの人数に加えて他の三重トリニティ・ワンの頂が混じっていたら、そのような事態にもなりかねなかつた。少なくとも一対一で彼に勝てそうな者は、今はアクア・ティ・アラにもいない。……マスターを除いてね」

それを聞いてアステイスは疑問が浮かぶ。

「……失礼な言い方かも知れないが、貴方達のマスターというのは部下の為に働かない人なのか？」

ノス・トウリは表情を変えずに言葉を返す。

「そんな事はありません。我々は例外なくマスターに何かしらの恩を受けています。直接命を救われた者も少なくありませんよ」

「では、具合が悪いとか」

ノス・トウリは軽く手の平を振る。

「ご心配なく。御年は六十を超えていますますが至って健康体です。た

だ」

「ただ？」

間を置いて、ノス・トウリは言葉を選ぶように、ゆっくりと話す。
「あの方の力は　　そう、我々の理解の範疇を超える所にあります。軽々しく振るような類たぐいの物ではないのですよ。勿論、我々が真の危機に陥る事があれば助けて下さるでしょうが、そうならないうちは出来得る限り、あの方の手を煩わせるような事は避けなければならぬのです」

「避けなければならぬ？という言葉はアステイスの耳に、どこか不可思議に響いた。それでは、今回の戦いは真の危機はんちゆうの範疇にはない、という事だろうか。」

訝るアステイスに、ノス・トウリは僅かに微笑む。

「貴方は、鬪鶏とうけいという遊びをご存知ですか？」

唐突に話が転換し、アステイスは首を傾げながらも記憶の淵を辿る。確か、アルイルと二、三回見に行った事がある。鶏同士を戦わせて勝ち負けを予想する賭け事だ。

アステイスが少し不安げに、首を縦に動かしたのを見て、ノス・トウリは笑みに苦さを混ぜる。それは苦笑とはならず相殺され、言葉を伝える意思だけが残る。

「あれに虎を持ち込む様な物なのです。マスターが力を振るうという事は」

至って真面目な顔でそう言うノス・トウリを見て、アステイスは氷点スレスレの汗が背を伝っていくのを感じた。どうやら、自分は常識を越える存在と相見えようとしているらしい。

午後11時20分

照明もろくにない長い階段を降り切ると、途端に空色の光が差し込み、煌きりびやかな地下街が姿を現した。

「これはっ……」

アステイスは言葉が続かなかった。このような景色を見たことは一度もない。

「この巨大な宝石箱が、アクア・ティ・アラのギルド本部です」
ノス・トウリが穏やかに言った。

高い天井に埋め込まれている大きな球型の魔石が青白く発光し、辺り一帯を照らしている。直視出来ないほどに眩い、蒼い太陽。その幻想的な光が大空洞に作られた地下街に限なく降り注いでいるのだ。その擬似太陽は、照明としての能力だけでなく、ちゃんと植物を育てる力も備わっているのだろう。地下街の至るところには様々な樹木が植わっていた。

ノス・トゥリの後を歩いていくと、通りの両側には裁縫店や飲食等、色々な店が見受けられる。それだけで生計を立てている者も当然いるのだろう。勿論一般の共同住宅らしき建物もあり、その窓からは灯の明かりが零れ出ている。アステイスは辺りを見回しては感嘆するばかりだった。

地下街には普段着を着た通行人が、人間、亜人問わず道を往来している。彼らはノス・トゥリ達に気付くと直ぐに会釈した。傭兵と思しき者は、戦後処理で出払っているためか殆ど見受けられない。

そもそもアステイスは、こんなにも多くの亜人達を一度に見た経験が殆どなかった。唯一あるとすれば、アルイールの生きていた頃、南部の蛮族討伐に出征した時くらいだろうか。南部の町を訪れた際、亜人達はアステイスを初めとする帝国兵に敵意の籠もった視線を送ってきた。思えばその時から、彼らは相容れない存在だと、勝手に決め付けていたのかもしれない。だからこそ、彼らの生い立ちや歴史に関心が向かなかっただろう。

ところが此処はどうだ。規模は小さいながらも人間と亜人の共同体として、ごく自然に成り立っているように見える。或いはこれが、旧テレジア帝国で平凡とされていた町の姿なのかもしれない。

やや足の止まり気味なアステイスに、ノス・トゥリは興味深そうに訊ねる。

「どうですか？ アクア・ティ・アラの地下街は……」

「美しい。世界にこんな場所があるなんて……思いも寄らなかった」
それを聞いて、ノス・トゥリは口元に笑みを浮かべる。どこか寂しげに。

「きっと貴方の目には、さぞ刺激的に映っているのでしょうか」

「……では、貴方の目にはどう映っているんですか？」

「色を失った箱庭ですよ」

淡々とそう言うノス・トゥリに、アステイスは寒々しさを覚えた。

「あの魔石が放つ光は、所詮は紛い物。暖かさは伴わないし、日焼けする事もない。ここには畑もありますが、農作物だって限られた種しか育たない。何より、あの太陽は沈む事がない。時にはそれが原因で体に変調をきたす事もある。それでも幼い亜人の子供達は成長するまでここを出られない。……何故だかわかりますか？」

「……ああ。大体の事は、ルガルから聞いている」

「それならば多くを語る必要ありませんね。付け加えれば、ここに居る者達は八割方、大切な者を理不尽に奪われた人たちです。……貴方のように」

「何の事だ？」

呻く様に言葉を返すも、アステイスは驚きを隠し切れなかった。口振りからして、ノス・トゥリはおそらくメリツサの事を知っている。だが、知る機会はなかったはずなのだ。誰かに話したことはないし、ルガルが話すとも思えない。いや、そもそもルガルと彼とは今日、言葉を殆ど交えていない。

ノス・トゥリはアステイスの疑問を察したのだろう。僅かに目を細めた。

「惚けとほなくてもいいですよ。我々の情報網と洞察力を甘く見られては困ります。帝国内部にも諜報活動をしている仲間がいますから。

……貴方が事件を起こしたあの日、ブラムスの別邸から出てきた焼死体の中に一名だけ女性が含まれていました。世間はそれを逃げ遅れた女中か何かだと思っているようですが、それだとしても辻褄つじつまが合わない」

「……辻褄つじつま？」

「衛兵に助けを求めたのも女中だったと聞いていますし、襲撃から火が出るまでの間、それなりに時間が空いていたから逃げるのは可能だったはず。貴方と言う襲撃者に驚き、隠れていたらいつの間にか放火されて逃げ遅れた、という可能性は完全には否定できませんが。それよりは、別邸を襲った理由が貴方の関係者の救出だと考えると、非常にしっくりくるんです。放火までの時間が空いていたのは、その方の死を確認するまで時間がかったから。……違いますか？」

「……」

「ああ、言い忘れていました。貴方が無抵抗の女性を殺めるような方ではない事は今日はっきりわかりましたよ。鬼畜生が身を挺してまで民を救おうとするとも思え」

「お前達っ、いつまでだらだらと話しているっ」

三十メートル程先からオルフィが叫び声を上げた。距離があるにもかかわらず、耳道にキンキン響く。

「……おっといけない、怒られてしまいましたね。全く、あの子は年長者に対しても遠慮がない」

そう言つてノス・トゥリは苦笑いし、次いでやや申し訳なさそうな顔になる。

「……辛い事を思い出させてしまい、深くお詫びいたします。ただ、覚えておいてください。此処にいる者達は貴方と同じように耐え難い苦しみを味わった。味合わされた。それは私とて、オルフィとて同じです。深くまで根付いた憎しみを全て除去するのは限りなく不可能に近い。……元帝国将校であり、人間である貴方が我々に依頼をするという事は、諸刃の剣を手にする事に他ならないのです」

ノス・トゥリはそう言葉を切り、アステイスに背を向ける。アステイスには目の前にあるはずの羽の生えた背中が、急激に遠ざかるように感じていた。

其の四十八　く焦がれし世界（表）く

午後11時50分

日付が変わる少し前、四人は地下街にある二階建ての住宅に辿り着く。ノス・トゥリの計らいにより12畳の一室を宛がわれたアステイスとルガールは、血と汗と雨水で汚れきつた服を脱いでいた。「オルフィが事後報告のついでに貴方達の依頼の件を言伝してくれるそうです。明後日の正午過ぎにはマスターと面会できるでしょう。それまでゆっくりとお休みください」

「わかった、ありがとう」
アステイスが感謝の意を示すとノス・トゥリは微かに微笑を浮かべ、殺風景な部屋を退出していった。

「……ホント、長い一日だったなあ」

ルガールが嘆息を混じえて呟く。やはり彼も疲れ切っているらしい。

「……ああ」

アステイスも同意する。ここまで身体を酷使した覚えは過去にもない。腕が小刻みに痙攣して殆ど上がらず、服を脱ぐのにも一苦労という有様であった。

言葉少なに着替え終わった二人は、のろのろとベッドへ歩み寄る。二、三步の距離だったはずだが、それすらも億劫だった。ルガールは上半身から倒れこみ、這いずる様にして枕に頭を預ける。五秒ほどして寝息の音が聞こえ始め、アステイスは彼の寝つきの早さに舌を巻いた。

(確かに、ベッドがこんなにも恋しくなった記憶はあまりないな)
アステイスもルガルに倣うようにしてベッドに沈み込んだ。意識が闇へと沈下していくのがわかる。重い瞼を閉じた所で、五感の全てが途絶えた。

884年 7月28日

ノス・トウリ、アステイス、ルガールの三人は会議所のような雰囲気のある建物内に入り、縦列に並んで照明用の魔石が壁に埋め込まれている廊下を進んでいく。最奥から三番目の扉の前でノス・トウリが止まったのを見て、アステイスとルガルも歩みを止める。

乾いたノック音が二度、廊下に響く。

「マスター・ウルグ。ノス・トウリです。ハイメリン殿、フロイデ殿をお連れいたしました」

「 入るが良い」

数秒して、扉の中からやや枯れた声が返ってきた。

部屋の中に入ると空気の色が変わるのを感じた。大部屋の四隅には小さな香炉が置かれており、樹脂の仄かな香りに力強さを合わせ持った重厚な香りが混じって部屋を埋め尽くしている。そして、部屋に至るところに思い思いに陣取っている上級傭兵達の視線が、自分達に集中しているのがわかった。

入り口から二、三步進んだ所でアステイスとルガールは立ち止まる。ノス・トゥリはそのまま歩みを止めず、部屋の真ん中にある黒く柔らかそうなソファアの傍らで立ち止まり、二人の方へと振り向く。

三人がけのソファアには初老の男が一人、足を組んで腰かけていた。金扶持眼鏡の奥に潜む眼光は刃物のように鋭利で、短く刈り揃えられた白髪と白髭が、反って若々しい印象を与える。そして、六十過ぎとは思えぬ張りのある日焼けした肌を持ち、中央に白の魔法陣が描かれている黒い半袖のシャツに、紺色のスラックスという格好だ。先帝アルイルも相当な型破りだったが、目の前の男も負けず劣らずだ、とアステイスは思った。

脇の辺りから胸にかけてざわめくを感じ、アステイスは真つ先に、彼は人間なのだろうか、と疑いを持った。或いは人の皮を被った何かではないか、と。よもや、先帝アルイルが比にならぬ人物がいた事にアステイスは驚きを隠せない。それほどまでに、目の前の老人は筆舌に尽くし難い存在感を放っていたのである。魔法使いと聞いていたが、その体は鍛えられた筋肉で覆われており、穏やかな物腰とのギャップが畏怖の念を深くさせる。

「は、初めまして。ルガール」ハイメリンと申します。お目にかかれて光栄です」

微かに声を震わせながらルガールが言った。

呼吸する事を忘れて見惚れていたアステイスはルガールに肘で小突かれ、我に返ると深く息を吸い込み、音が出ぬように吐き出した。「アステイス」フロイデにございます。……この度は謁見の場を設けて下さり、恐悦至極に存じます」

搾り出すように言葉を紡ぐ。その言葉が今日ほど実感できた日は今までにない。会うだけで相手の価値観を変えてしまうような人物

は、そういらないだろう。

ウルグは二人に視線をゆらゆらと漂わせる。

「ウルグ」ステイードだ。……おおよその話は聞いておる。お主らの助けがなければ多くの者達が死に追いやられていたであろう。儂からも礼を云わせてもらう」

「……身に余るお言葉にございます」

アステイスが敬礼するのを横目で見て、ルガールも慌てて頭を下げる。

畏まっている二人に、意外にもウルグは悪戯っ子のような瞳を向けた。

「さて、用向きがあると耳にしておるが、儂の一存では決めかねる事もある。その場合は、ここにいるオルフィ、ノス・トゥリ双方の賛同が得られなければ申し訳ないが断らせて貰う。二人とも傭兵達の信を一身に受けており、実質的にギルドを動かしておる者たちじや。それでいいか」

「わかりました」

「俺……私わたくしもつ、それで構いません」

アステイスとルガールは揃って頷いた。

「宜しい。具体的な話を聴こうか」

この交渉が己の命運を握っている事を心底実感しているだけに、即答するのは憚はばられた。アステイスは慎重に言葉を選びつつ、絹糸の様に紡いでいく。

「……前置きを申しますと、一つ目は、あくまで依頼の範疇になるか、と存じます。しかして、今一つは私情であり、幾分内容も複雑になります。お歴々の方々に意見を伺わねばならないでしょう」

「……うむ。ではまず、一つ目の依頼を聞こうかの」

「畏まりました。ウルグ殿は、アテライデの経通に所属する十一人理事の存在をご存知でしょうか」

「無論」

「では、単刀直入に申し上げます。その中の一人、バイロン^{II}テレジアの暗殺にご協力頂きたい」

ざわざわと、辺りが騒がしくなるが、アステイスは構わずに続ける。周りの喧騒に負けまいと、やや声を太くして。

「実を申せば、これは私の依頼ではなくてバイロンと同じ十一人理事のタクロー^{II}ヒヅキによるもので、私達は言わば代理人として参った次第にございます。直接依頼人が此処に赴けなかったのは我々の不徳と致すところですが、公的な立場のある彼が行方を暗ましては不審に思われ、実行前に警戒される事を考慮した次第です。その点何卒ご了承願えれば、と」

ウルグは僅かに白眉を上げる。

「ほう、その名なら聞き及んでいる。ここに住む者達も随分と世話になったようだしの」

「はい。現在バイロン^{II}テレジアはブラージュウス^{II}テレジアから三重^{ニテイ・ワシ}の頂を護衛として借り受けております。並大抵の者達では齒が立ちませんので、実行するにはどうしても腕の立つ者が複数名必要ですし、一度目で成功させねば、用心深いバイロンの事です。直ぐに行方を暗ますでしょう。是非にもアクア・テイ・アラの御力添えを願いたく、ここに参った次第にございます」

「ふむ。で、何故ヒヅキ殿は彼の者を消したいのか？」

ガチガチだったルガルもようやく落ち着いてきたのだらう。アステイスに目礼をしてから言葉を紡ぐ。

「依頼人は、アテライデの将来的な立ち位置を危ぶまれております。

どっちつかずのままでは、いずれ彼の国が淘汰される事を理解しておられるのです。端的に言いますと、テルネシア帝国と手を切りたいとお考えです」

「帝国と手を切るために、同胞を斬ると？」

ルガルはそれについても所見を述べる。

バイロン・テレジアは東西戦争の折からブライジウスと好を通じよしみており、己が利する為に経通の理事達を焚き付けてアテライデを独立させた狡猾な人物である。こつかつもしかすると、アンドレイ皇子があの戦争で勝つていればこんな戦争が起こらなかつた可能性は高い。帝国とのパイプが太いバイロン・テレジアを殺せば帝国は資金繰りに苦慮する事になるし、逆にアテライデの理事達は踏ん切りが付き易くなる。東西戦争を引っくり返した元凶である彼を駆逐すれば、帝国側と手を切る大義名分が立つ。すなわち、表立って東側の同盟軍に肩入れする事も可能になる。付け加えると、後々の事を考えれば三重の頂を何人か始末できる事も大きい。そう言つてルガルは話を結ぶ。

「……なるほど。そういう事なら吝かではないな」かたはれ
ウルグが軽く頷いた。

優柔不断な理事達も逃げ道を無くしてしまえば覚悟を決めざるを得なくなるだろう。そうして精神的に追い詰められた者は近くの餌に食いついてしまうものだ。三重の頂にしても固まっていられるよりは人数の少ないうちに個別撃破した方がずっと楽なのである。アテライデで事が起きた場合、東諸国という防壁がある以上、テルネシア帝国は彼等に対して直ぐに手が打てない。これは帝国側の戦力を殺ぐ大きなチャンスでもある。

ウルグが納得したように頷いているのを見て、アステイスとルガルは幾分胸を撫で下ろした。

「もう一つの依頼と言うのは、フロイデ殿の私情と申ししていたな。まあ、貴公の立場を考えれば自ずと察しはつくが」
「御明察です。帝国と戦うのに力をお貸し頂きたい」

少しの間、ウルグは視線を虚空に漂わせる。それはつまり、家族に等しい傭兵達の命をアステイスに預けるという事にもなる。ウルグの一言で看過出来る類の物ではないだろう。

「まず、報酬はどうするつもりだ？ 言うまでもなく、金無くして傭兵は動かぬが」
アステイスは請合う。

「バイロン」テレジアの暗殺に関しては、タクロー「ヒヅキを初めとする経通の心有る理事達が払う手筈になっています。しかし、帝国との戦いに関しては……一応は私にも隠し資産がありますが、それだけではとても賄えないでしょう。但し、勝つ事を前提にしてお話しさせて頂ければ、フリーユゲルを陥落させる事が出来れば先帝アルイールの残した莫大な遺産が手に入ります。私の賞金額等軽く吹き飛ばくらいのもになるでしょう。後は、ここに居る皆様の力量次第、という事になります」

室内をどよめきが駆け抜ける。アルイールの御代では質素儉約の風潮であった故に、今までもそういう噂は確かにあったのである。そしてこれこそが、アステイスが一勢力を立ち上げるための切り札の一つであった。

アクア・テイ・アラの上級傭兵達は甘言と挑発とを駆使したアステイスを値踏みするように見据え、そのうちの一人が口を出す。

「本当だろうな。もし謀っていたとしたら」

「何なら、その手の呪いをかけておいてくれても構いません。ウルグ殿は魔法の扱いに関しては大陸一とオルフィ殿から聞き及んでいます。おそらくはそういった類の魔法も使えるかと」

二の句を継がせず、アステイスは表情を変えずに言い切った。もしもそれが偽りだと示された時はどうぞご遠慮なく、というわけである。それは暗に、嘘ではありませんから私が殺される事もありません、という自信の程を窺わせる言葉でもあった。

上級傭兵達は未だにざわついている。風の噂と彼の態度とを組み合わせれば、それなりの説得力を持つていた。となれば、残る問題は報酬が後払いになるという点だ。だが、アクア・ティ・アラが帝国軍と事を起こした以上はもう後には引けぬ。どうせ戦いが避けられぬなら、この条件を呑んでも支障はない。

「可能だ……が」

今度はウルグとオルフィの視線が交錯する。オルフィは一旦顔を伏せて考える素振りを見せていたが、不意に顔を上げる。

「その必要はないと考えます。もし謀っていたらその時点で私が葬りましょう。勿論、この考え方は依頼を受ける事が前提の話になります」

ウルグは深く頷いた。

「……では、明確な返事を伝える前にもう一つ質問しても良いか」
アステイスは一瞬戸惑う素振りを見せたが、直ぐに頷いた。それを確認すると、ウルグはやおらソファーから身を起こし、姿勢を正してアステイスに問う。

「もし仮にテルネシア帝国を滅ぼせたとして、その後にお主はどうするつもりか」

「……っ」

アステイスは即答に窮する。決して先の展望を考えていなかった

わけでなく、現時点で訊ねられるとは思っていなかったのである。
一口唾を飲み込み、何とか落ち着きを取り戻す。

「 どうした、答えられぬか？ まさか彼奴らを滅ぼして？は
いおしまい？、という答えではあるまいな？」

急かすウルグに、アステイスは長く瞬きを繰り返す。

「 いえ。此処にいる者達の中には、もしかするとそれを聞いて不快に思う方がいらっしやるかも知れない。 そう思いまして」

歯切れの悪いアステイスに、ウルグの眼差しが鋭くなる。

「 不快感を惹起じゃつきするような答、と申すか？」

ウルグから発される圧力が狭い空間に満ち溢れ、周りにいた上級傭兵の猛者達が固唾を呑む音が聞こえた。

アステイスは瞑目する。今までの道程を思い返し、多くの者達の顔が次々に脳裏を過ぎっていく。己の復讐を果たす。ただそれだけを望んでいたはずだった。

長く、重い沈黙を切り裂くようにして、不意にアステイスは瞼を開いて決然とウルグを見据える。

「 誤解を恐れずに申し上げます。帝国を打ち破った暁には、私は世界を白紙に戻そうと思います」

アステイスの決意表明は、その場にいた者全ての記憶に、忘れ得

ぬ刻印として残された。

「世迷言を」

ウルグとオルフィを残して全ての者が退室した後、口を閉ざしていた彼女はアステイスの話をそう断じた。けれども、その笑いには嘲笑以外の感情も浮かんでいる。

彼女の戸惑いを察して、ウルグは目を細める。

「……本当にそう思うならば、どうしてさっき反対しなかった。お主が？否？と口にすれば、この依頼は受けなくても良かったのだぞ。幹部の二人に意義がない事が、依頼を呑む条件だったのだから」

三十分前、アステイスの話全てを聴き終えた上級傭兵達は、揃って複雑な面持ちでいた。或いは、反対の言葉を口にしようとする者もいたのではないか、と思う。しかし、一線を越える者はいなかった。一考してみても物語としか思えぬそれを、彼らはただただ持て余していた。脳裏に響く、甘く苦い、戯言のような彼の理想を。だが、それを心から待ち望んでいる者が多いであろう事もオルフィは知っている。

(……くそつ、ムカつく)

それがオルフィの正直な感想だった。アステイスが、人間がそれを口にする事自体が腹立たしい。否が応にも苦く、昏い感情を惹起させられる。

だが、それを易々と否定してしまう事もまた憚られた。叶わぬ展望を見させられた事に対する二重苦。陽だまりの中、子供達が公園で戯れる声。街行く者との他愛ない挨拶。その笑声までもがはつきりとした輪郭を帯びて聞こえた。油断すれば歪な感情が涙と共に溢れ出てしまいそうになる。実現せぬ夢ほど忌々しく、狂おしいものはない。

結論としては、アステイスの依頼については一時保留扱いになった。バイロン＝テレジアの暗殺を経て、本当にアテライデが独立すれば力添えを考えよう、という事で収まったのである。皆の心の裡を斟酌すれば、落とし処として妥当であった。出足から躓いては、それこそ一睡の夢で終わる。

「……出来るわけない。そう思うか？」

オルフィの心中を看破したかのように、ウルグが的確な疑問を呈する。

「当然ですつ。強大な力を持つ貴方ですら成し得なかった事が、何であんな軟弱そうなヤツに」

ウルグは首を振り、オルフィの言葉を途中で切る。

「それは逆じゃよ、オルフィ」

「……え？」

「例えば……そうさの、エセルティス＝テレジアを知っておるな。テレジア帝国の創始者じゃ。大陸統一を成し遂げた彼は、決して神の如き力を持っていたわけではない。少し剣の腕が立つだけの、一介の若者だったそうじゃ。だが、彼が歩みを止める事は決してなかった。力弱き者が懸命に齒を食いしぱり、茨の道を傷付きながらも一歩一歩進んでいく。ある者はその姿に心打たれ、ある者は危なっかしくて見ていられず、ついつい多くの者が彼の理想に殉じたとい

「うわけだ」

一つ大きく息を吸って、ウルグは言葉を続ける。

「継続した痛みを伴わなければ、結局は一過性のもので終わる。歴史がそれを証明している。人間がカタロフとの戦いを経ても、ジキールとの戦いを経ても全く成長出来なかったようにな。人というもののは他者と触れ合い、共感を得て初めて精神的成長を遂げるのだ」

強大な力、或いは悲劇が人を劇的に成長させた事が果たしてあったか、と問われれば多分ない。ウルグはそれを指摘しているのだ。

歴史的な事件は鮮烈な印象を残すが、それでいてどこか現実味を伴わない。得てして悲劇と言うものは、当事者以外の第三者には変革をもたらさないのである。ジキールの件においては想像の範疇を越えていたために、今や天災扱いだ。

人は、己の理解の域を飛び越える事象には、諦観ていかんするに留まる。過去から現代において、人類は何千年にも亘って戦争と反省の循環サイクルを繰り返しているが、喉元過ぎれば何とやら、恒久的な平和を築いた例は一度足りとてない。

「一過性……か。貴方が行動を起こさなかったのは、そのためなのか」

オルフィが呟く。

仮にウルグがその圧倒的な力を以って大陸の混乱を鎮めたとしても、彼の命が尽きた時点で、再び野望に駆られて反旗を翻す者が現れるのは容易に想像が付く。

ウルグは卑屈さを伴った笑みを作る。

「買い被られるのも困りものだの。儂は亜人のお前達以上に、

人間というものを嫌っておるのだ。あの小僧は、少々自分の命を軽視している節もあるが、少なくとも人生の大半を多くの者達の道標にする覚悟が出来ておる。反して、人の汚さばかりを目にしてきた儂にはどうしてもそれが我慢ならん。……ま、子供っぽいと言われればそれまでだがの」

ウルグの言い放った言葉に、オルフィは沈黙で応える。彼の身上からすれば、その心の裡うちを声高らかに非難出来る者などいないと理解しているのである。

「では何故、あの小僧に力を貸すのか。儂は世捨て人だからのう。人のためだけに働く気は毛頭ない。その意味で、儂はあの小僧と相通じる何かがあった。現状を打破したいという青臭い気概きがいは買いたいし、単に興味をそそられた、というのもあるのう」

「ですが、本当にフロイデにそれが出来ると」

「別に出来ずともよいではないか」

「え……」

思わぬ切り返しにオルフィは面喰らった。

ウルグは穏やかに二の句を継ぐ。

「そもそも、未知の領域に挑む者に対して最良の結果を求めるのが間違っておる。……そう思わんか？ あの小僧がやるうとしていゝ事は、真つ暗闇の中を手探りで歩き回り、目印となる旗を立てていくようなもの。石に躓くかも知れんし、崖から足を踏み外すかも知れん。行動を伴わぬ者達から口々に責め立てられる事もあろう」

「……」

「あの小僧を傍らで支え、叱咤激励してやるような者が大勢いなければ、お主の言ったとおり世迷言で終わる。だが、あ奴の理想をただの夢物語で終わらせるには少々惜しい」

「……そうですね」

石に躓けば転ばぬように支えてやらねばならぬし、崖に落ちそうになれば引つ張り上げねばならぬ。心無き者に糾弾きゆうたんされれば、その雑音を掻き消すような叱咤激励を送ってやらねばならぬと言っわけである。

おもむろにウルグは立ち上がり、ゆつくりと窓に歩み寄って蒼い太陽を望んだ。球状の魔石が普段と変わらぬ光を放っている。

「……これは一つの賭けだ。アクア・ティ・アラが帝国と相對した以上、手を拱こまぬいているわけにもいかぬからな。あの小僧に非凡な將としての器があるならば、帝国を滅ぼすためにそれを利用して貰うとしよう。老い耄ほれて死ぬ前に、子供こどもらが真まことの太陽の下で、元氣一杯遊んでいる姿を、酒の肴にするのも悪くない」

美味しい酒が飲めると良いのう。ウルグの呟きは、香料の匂いをはらみながら暗い部屋の中を当てもなく漂流する。

第三章 END

(三)〜(四)幕間 一周忌(表)〜

グリューンでの激闘を何とか切り抜けたアステイスとルガールであったが、翼獣^{グリフォン}を返してしまつていたため、アテライデに戻るのに徒歩と馬とを利用することになった。ヒツキとの再会を果たし、アクア・ティ・アラの傭兵たちの協力を取り付けたことを報告したのは、九月に入ってからのものであった。二人は多分に長旅の労をねぎらわれ、その一週間後にはアクア・ティ・アラの高級傭兵が数名到着する運びとなつた。バイロン^シ＝テレジアの暗殺計画は水面下で着々と進捗^ししていたのである。

884年 10月7日

岬の突端はさながら天への道を思わせるように、青空に向かつて上り坂になつていた。切り立った崖の三方を囲むのは底の見えぬ群青色の海。小心の者であれば、下を見ただけで足が竦み、動けなくなつてしまうほどの高さ。水面にまともに叩き付けられればそれだけで骨が砕け、内臓破裂を起こすだろう。ただ、その恐怖を塗り潰すほどの開放感があるのも確かだ。水平線に乗つかつてゐるのは綿のような入道雲。潮騒と風の音が耳に心地良い。汽笛の音に気付いて左手を臨むと、白い帆を二つ張つた定期船がすれ違ふ場面が視界に入つてきた。相当な距離があるため、靴くらしいの大きさに収まつている。

アテライデの東端、アビシマの町にある？海馬の角？と呼ばれる岬にて、アステイスは眼下にたゆたう海を前に、右手に白薔薇の花束を、左手に己の指から外した婚約指輪を握り締めていた。

婚約指輪の片割れは、クルートにて既に燃え尽きている。その日を思い出しては握られた手に力が籠もる。出来ればアステイスとしても、今一度その場に赴きたかったが、己を取り巻く状況がそれを許しはしなかった。彼はテレジア帝国の風習に則り、遠い異国の地で略式の一周忌を迎えていた。

婚約者であったメリツサ・ウランダーの死から丁度一年。微かに薄れた記憶の縁をなぞる。途切れ途切れの線がより明確になり、地下室に吊り下げられていた、彼女の痛ましい絵が脳裏に過る。怒りの赤、憎しみの黒、悲しみの青を混合した、どす黒い負の感情が喚起される。その行為は言うまでもなく痛みと苦しみを伴ったが、それ以上に、己の感情が心の襞ひだから剥がれ落ちてしまうのが恐ろしかった。記憶の砂は時の波に少しずつ、しかし確実に押し流されてゆく。既に、好きだった両親たちとの思い出を、殆ど辿ることが出来ないように。

アステイスは何度も思い返す。何度も刻み込む。己が愛した女性との、何物にも代えがたい濃密な一時を。そして、彼女を喪なげった日の、狂おしいほどの慟哭なげを。

今一度、手にある感触を確かめる。ひんやりとした金属の質感がそこにあつた。視線を空へと向ける。一年前の天候とは似ても似つかぬ、海にも負けぬ透明な青。

唇を噛み締め、腕を大きく振り被った。波が碎かれる音と共に、指輪がその手から解き放たれる。宙に緩やかな弧を描き出した。陽

光を受けて明滅する軌跡を目で追う。やがて遙か下の白い波頭に交じり、その輝きを見失う。間違つて魚に呑み込まれなければ、きっと永遠に近い時間、海の底に横たわるだろう。

アステイスは白薔薇の花束を芝の上に横向きに置き、腰に下げていた細剣を抜き払った。

（この剣にも随分と、世話になったな）

その刃身は所々が大きく刃毀れしており、こびり付いた血が錆びて黒く変色している。武器としてはもう使い物にならないだろう。己の手に馴染んだ、何度も命を救ってくれた相棒を、目を細めて眺めやる。彼女が受け入れてくれた、思い出の剣。

アステイスは柄を両手で強く握り締め、その刃を深々と地に突き刺す。一つの十字架が、そこに出現する。そしてゆっくりと目を瞑り、手を組み、ひざまづ跪く。

黙祷。耳道に響いていた潮騒しほざいと風の音が、やがて聞こえなくなる。思考が五感を遮り、暗き闇の中で、アステイスは赤い髪を潮風なびに靡かせ、想いを紡ぐ。

メリッサ。どうか安らかに。

時間にして数分程度であつただろうが、アステイスには殊更長く感じられた。再び薄らと目を開ける。振り返り、視線を落としながら歩み始め、おもむろに誰かの足が視界に入る。顔を上げ、次いで眉を上げる。

「……どうして、ここに？」

「……ルガルから聞いた。ここは自殺の名所らしいから、監視も含めてだ」

やはり肩に百合の花束を乗せているオルフィの視線は、アステイスの後ろにあった。そこにあるのは、たった今作られたばかりの墓標。

わざわざ花を持参したということは、何をしにきたのかも喋ったということであろう。アステイスはお節介なルガルに少々舌打ちしたい気分になった。その微細な表情の動きをどう見たか、オルフィは冷やかにアステイスを見つめる。

「少々いただけぬ行動だな。死を予感させるようなモニュメントを作ってしまったのは、自殺者の背を後押しするようなものだぞ」

反論する言葉が思いつかなかったアステイスは、ばつが悪そうにオルフィから目を逸らす。そして、彼女の言葉に含まれているものを感じ取ったのか、再び視線を戻す。

「……もしかして、心配してくれたのか？」

戸惑い気味のアステイスに、オルフィは薄く笑った。

「自惚れるな、馬鹿が。万が一自殺するようだったら、首を回収しなければならぬだろ」

アステイスは腹を殴られたかのように呻く。自分にかかっている二十億ギラの賞金のことを思い出したのだろう。

「ま、心配とかは別にして、死ぬのが論外だということだけは伝えておこう。大言壮語を吐いたからには、その責任を取って貰わねばならないからな」

そう言い、オルフィはふいっと視線を逸らす。

「……ああ、わかつているよ」

吐き出した言葉はもう呑み込めない。マリスノリスの時と違って、自分だけが乗っているわけではないのだ。多くの者たちの運命をも巻き込んでいる責任は、果たさなければなるまい。

オルフィはアステイスの肩を掠めるように横切る。微かな間、潮の香りに南国の甘い香りが重なった。

背景にこれほど海が似合う女性もいないな。アステイスは束の間、己の作った十字に傅き、祈りを捧げるオルフィの姿に目を奪われた。刀身が陽光に反射しては淡い光に包まれ、どこか神々しくすらある。

おもむろに、オルフィは立ち上がった。強い風に煽られていたインディゴ色の髪が視界を妨げぬよう、褐色の手で頭をしっかりと抑える。

「……しかし、まるで海の上に立っているかのような、素晴らしい景色だな。……あの子たちにも、見せてやりたい」

独り言のようなその呟きを耳にして、アステイスは微かに胸を抉られる。アクア・ティ・アラの地下街での生活を余儀なくされている、亜人の子供たちを憂いた彼女の心情の吐露。それは、復讐のためには如何なる犠牲を厭わぬつもりでいた、己の矮小さを指摘された心地であった。

ルガルルやヒヅキとの出会い。そしてグリーンでの熾烈な戦いを経て、アステイスの意識は確実に変革を遂げつつあった。但し、彼にもたらされたのは必ずしもプラス面だけではない。戦いに赴く

者一人一人が様々な想いを抱えていることに目を向ける行為は、将の心持ちとしてはむしろマイナスであるかもしれない。

多くの者たちとの出会いはアステイスの視野を大きく広げ、それ故に、彼の心の奥底で一つの決断を下させていた。メリツサを殺されたことに対する復讐の念。テルネシア帝国が振りまく暴力への憤り。そして、己に大いなる目標を想起させてくれた者たちへの感謝と憂慮。様々な感情を内包し、昇華しつつ、彼は一つの重大な転換点を迎えようとしていたのである。

史実に新たな一行が書き加えられる日は、間近に迫っていた。

其の四十九　　パイロン暗殺（表）

グリユーンの国軍を無力化することに成功した帝国軍は、続いて各都市にて大々的に徴兵を行っていた。主に大都市から集められた兵たちは東部前線のマリスノリス、ネルガル。或いは南部前線のマスチュアに送られた。

エル・クレスの戦いを経て准将に昇格していた第八軍大隊長ハンディック・ウランダーとエアリアからマスチュアに赴いた第九軍大隊長ローラント・ラフォム准将は、一部でその実力を不安視されていたものの、意外や意外、弱体化したベール軍を相手に連戦連勝を重ねていた。

これを受けて、ブラージウスはマリスノリスに十二万もの兵を召集。近日中にもシャンテールに出兵すると見られていた。前回の轍を踏まぬよう、前線に近い町には伏兵を配し、アステイスを初めとする反帝国勢力に対しても万全の備えであった。

城のように豪華な高級娼館が闇夜の中、桃色の街燈に照らされている。規模は小さいながらも角櫓を備え、外郭塔も幾つか付いている。通常の城と違う点を一つ挙げるならば、それは外敵に向けてではなく、内に入る者に対しての威嚇が目的であることだろう。客の中には、酔って娼婦に不貞を働くような輩も少なくない。外面が無骨な建物であれば、それだけで十分トラブルの抑止力になる。城をモチーフにしているのはそのためであった。付け加えるなら、娼婦が逃亡するのを防ぐための作りでもある。

また、高級娼館にはトラブルを起こす客を丁重に追い出すために、

屈強な荒くれ者が雇われている。客商売であるが故に、商品である娼婦の顔に傷の一つでも付けられたら困る、というわけだ。但し、娼館内の廊下を強面の筋肉達磨が堂々と闊歩していれば、折角来店してくれた客達も色々な意味で萎縮してしまうだろう。なので、普段は雇われた者は角櫓と呼ばれる小部屋に待機している。

「いやあ、今日も楽しんだのう」

齡七十を超えて未だ強精家であったバイロン＝テレジアは、満足そうな顔を浮かべて高級娼館の裏門から出てくると、待機させていた二頭立ての馬車に千鳥足で乗り込んだ。おそらくはかなり酒も入っているであろう。相当な赤ら顔であった。

それを囲むのは三重の頂の護衛三名。バイロンがブラージュウスから借り受けたのは四名であるが、残りの一名は異変が起きた時の緊急要員で、かなり離れた所から周囲を警戒していた。

(ううむ、あの娘は身受けするか)

バイロンは馬車の中で、先ほど自分に奉仕した、美しい亜麻色の髪を持つ娼婦を思い出し、見るに堪えぬ笑みを浮かべた。おそらくあの女は元貴族か、それに準じる家柄の者であろう。育ちの良さが言葉の端々から窺えた。

数多の女を抱いてきた彼は、性技よりもただどしさを楽しむという、最早救えぬ領域に片足ならぬ両足を突っ込んでいたのである。

身受けとは、娼婦の借金や手切れ金を代わりに支払って、勤めから身を引かせることを言う。不遇に手を差し伸べると言えば聞こえは良いが、脱法的な人身売買の一種とも表せるであろう。腐っても人身売買であるから、当然支払う金額も馬鹿にならない。高級娼館の娼婦ともあれば尚更である。

但し、一口に引き取ると言っても色々だ。そのまま故郷に帰れ、という奇特な者もいれば、本当に気に入ってしまった、自分の妻にするという者もいる。この辺りまでなら何かしらの美談として語られるであろうが、自分の欲望を満たすだけの道具として扱う者も勿論いる。

言つまでもないことであるが、バイロン＝テレジアの目的は三番目であった。自分の閨房^{けいぼう}、つまりは性的な意味で寝るための女を囲う部屋であるが、そこに入れる^いと言っただけの話である。見受けされたとて境遇としてはそんなに変わることはない。環境面で言えば、食べ物と寝る部屋が多少豪華になるくらいであろう。

ここ最近、バイロンは実に羽振りが良かった。豪勢な食事をし、高い酒を飲み、娼館を渡り歩いては目を付けた女を抱く毎日であった。気まぐれに気に入った娼婦を身受けすることもあったのだが、抱くのに飽きると部下たちに預けて後は放っておいた。女たちがどのような命運を辿るのかは、彼にとつては瑣事^{さじ}に過ぎず、心を痛めるようなことも終ぞなかったのである。

そんな彼を護衛していた三重^{トリンタイ・ロン}の頂の面々であったが、任務に付いている彼らの内心としては正直言って面白くない。戦闘^{たの}を愉しむために三重^{トリンタイ・ロン}の頂に入り、イヴァンスの劣悪な訓練に堪^たえたのに、やっていることは一癖も二癖もある爺^{おや}の護衛である。守るのが麗しき姫君であれば少しはやる気も出たかもしれないが、恩を恩とも感じない様な老人に対しては、溜息と軽侮を伴うしかなかった。

配属された当初は、バイロンの護衛が一見すると手薄になったと

いうことで、任務に付いてから一週間ほどの間に二度の襲撃があった。襲撃犯はあっさりと返り討ちにされ、或いは捕らえられて精神に破綻を来すほどの拷問にかけられることになった。

一度目はバイロンに陥れられた元会社社長とその残党たち。今一度は、グリトリーから放たれた暗殺者たちであった。元々戦闘員でない社長たちは言うに及ばず、暗殺者の方に関しては女性が一人混じっていたが、編成した者は浅はかだと断じるべきであろう。仲間を全て殺された彼女は失意のままに生け捕りにされ、手足を縛られ、風呂桶一杯に満たされた、毛虫、ムカデ、ゴキブリなどの害虫の海に放り込まれた。身体を這い回る小さな虫たちに血色を失い、声が掠れて出なくなるまで絶叫し続けた。痛み慣らされ、訓練されているはずの暗殺者も、生理的嫌悪から来るおぞましさにはあっさりと屈したのである。

その噂が広まり、更に尾ひれが付いてからというもの、襲撃はびたりと止んだ。半年近くが経つが、正直暇でどうしようもないという状況であった。

娼館を出てから数十分後。バイロンの屋敷まであと200m余りという所で、馬車の前方を張っている護衛二人が異常に気付き、自然と腰に下げている剣柄に手がかかる。舗道ほどうに立ち塞がる二つの人影を見止めたのである。隠しきれぬ殺気を放っている襲撃者に、護衛の彼らは緊張と歓喜とを同時に感じた。久方振りの戦闘は、一時的に喉の渴きを潤す水を彼らに与えるであろう。馬車を囲む三人は周囲を警戒しつつ、薄ら笑いを浮かべて襲撃者に相対した。そして

(……！)

時を同じくして、その場から100mほど離れた木の上にて、バイロンの馬車周りを警戒していた三重トリニティ・ワゴンの頂がもう一つの異変に気付く。停止した馬車の後方から、一頭立ての馬車が迫って来ていたのである。このまま進めば数十秒後に鉢合わせとなるだろうが、前を塞ぐ連中の仲間が乗り込んでいることも考えられる。否、今は深夜であり、人通りも殆どないから、その可能性は多分に高そうであった。彼は馬車の者たちを始末するために木を下りて疾走する。低い方の可能性については目を塞いだ。別段、人違いで誰かを殺したとしても、痛みを感じるような心は持ち合わせていなかったからだ。

さて、馬車の中にいたバイロンは馬車が止まったことに気付いたものの、特に心配はしていなかった。三重トリニティ・ワゴンの頂に護衛される前も何度か襲撃に晒されたことはある。そして、今までそれを全て始末し、切り抜けてきた。今回もその一環となる。ただそれだけのこと。彼は備え付けの上質なクッションに首を預け、まどろみの中を彷徨ウロウロい始める。

いつもと違うことに気付かされたのは、その五、六秒後のことであつた。

(うおっ)

突如、乗っていた馬車が大きく弾み、次いで傾かたむいたのである。

暗闇の中に息を潜めていた襲撃者は、真つ先にバイロンの逃亡を阻止するべく、まず車輪に魔法を放った。思わぬ方向からの奇襲を受け、三重トリニティ・ワゴンの頂の護衛たちは舌打ちをする。どうやら予想よりも敵の人数は多い様であつた。

考える間を与えぬかのように、後方から馬の蹄と車輪の音が聞こ

え始めた。木の上にいる護衛は正体不明の馬車に向けて両手を翳し、魔法の詠唱を開始する。

雲海を刳は龍 突き進は拒絶の意志 汝の領域を侵犯せん

「ヴァ・エアール
烈衝つ」

裂帛と共に、馬車のほぼ真横から放たれた風の龍は、うねりながらも突き進む馬車に向かう。進む速度を考慮して偏差打ちされているため、ほぼ確実に一頭立ての馬車のど真ん中を捉えていた。

(よし、貰ったっ)

風の上級魔法は見事に馬車に命中し、引いていた馬が嘶（いな）なき、続いて馬車の倒れる轟音が辺りに巻き起こった。それが仇（あた）となった。獣人の女が接近していることに気付くのを著しく遅らせたのである。突如後方から湧き出でた殺気に、護衛の男が振り向いた時には遅かった。靡く髪だけがそこにあり、刹那、身を屈めていた女の拳が寸分変わらず男の顎（あご）を捉える。

「ぎっ」

オルフィの一撃で顎（あご）を砕かれ、背を反らすかの様にして男の身体が宙に浮いた。薄れかけた意識の中、男は何とか体勢を立て直そうと手足をバタつかせる。しかし、それは叶わなかった。宙に浮く男を追うように、オルフィは男の更（さら）に上へと跳躍する。男と平行するように宙を移動し、斜め下にある男の腹部目掛けて一瞬拳を溜める。男の両目に恐怖（おそ）が過った。

「 はああああつ 」

ドズンッ

「 ぐぶっ 」

数瞬、血の入り混じった唾液だけが宙に取り残された。オルフィに腹を打ち据えられた男は、地面に勢いよく直行し、背を強かに叩き付けられる。乾燥した土の地面にピシピシと細かなヒビが入った。数秒ほどの痙攣を経て、男は咳き込むように口と鼻から血を吹き、力無く首を垂れた。股間にできた滲みしみが段々と大きくなってくる。

馬車を引いていた馬には真まことに氣の毒であるが、転倒した馬車はあくまで囷であり、中は無人だった。三重トリニテイ・ワシの頂を一人も打ち漏らさぬよう、アステイスが考えた罫である。操縦していたのはルガールであったが、魔法が当たる直前、既に馬車から飛び降りていた。彼は護衛の一人を片付けたオルフィと合流し、前で立ち往生している、標的バイロンの乗る馬車へ走って行った。

884年10月29日、バイロン＝テレジア、自宅付近で何者かに暗殺さる。この一報がブラージュウスの耳に届いたのはその二日後、10月31日の事であった。

彼の側近が馬車の中で発見した時には、床が血と汚物で見えぬほどであった。全身には数十箇所ところの刺し傷があり、強い恨みを持つものの犯行と思われたわけであるが、余りにも容疑者が多過ぎるため、衛兵たちも失笑しては匙さじを投げざるを得なかった。

帝国のパトロンたる彼の死に、様々な立場の者が口々に驚嘆の声を上げたが、その死を心から悼む者はせいぜい直接の肉親に留まったであろう。その人柄を訊けば、誰もが苦い薬を水なしで口にしたかのような顔になる。やってきた大小の悪事を書き綴るだけで、一冊の分厚い伝記が仕上がるような人物だ。

火のない所に煙は立たぬと言うが、バイロンの周囲は既に山火事の様相を呈していた。あちらこちらから黒煙が噴出しては、あの手この手で罪を逃れようと潜在的に恨みを持つ者は増え続けている。一割二割は逆恨みに近いものもあつたかも知れないが、彼の人は疑いを覆す説得材料と成り得なかつた。それを示すかのように、卑劣さと悪辣さで名を馳せた彼の訃報を耳にして、笑みが込み上げた者は数知れなかつたのである。

しかし、それから熱気冷めやらぬ11月5日、世間は数日前にも増して息を呑むこととなる。数日遅れたとある新聞の紙面を借り、アステイス＝フロイデが自ら犯行声明を發したのである。

再度、帝国へ唾を吐きかけた若き英雄に、反帝国の者たちは称賛の拍手を送った。その一方で、憤懣やるかたないブラージュウスは、アステイス＝フロイデの賞金を一気に上げ、五十億ギラとしたが、皮肉にもその額は彼の名声へと転化されるに留まった。法外な金額が更に現実味のないものになったところで、然したる効果は認められなかつたのだ。

その後、世間では帝国とアテライデとの微妙な関係がどう推移するかに注目が集まった。そして事件の波紋は、近日中に具体的な形

となつて決着することになる。

バイロンの死に際し、アテライデの経通の十一人理事は遺憾の意を表したが、その裏では、抑えつけられていた反帝国論争が紛糾し、理事会の大多数がそうした有力者で占められるようになった。

ほどなくして、経通の十一人理事会はシヤナエ「ドウブオーニユ、タクロー」ヒツキの両名が主導権を握り、後日、アテライデはテルネシア帝国との同盟を破棄するに至つた。それに関しては、実に様々な謀略がなされていた。

一つ目には、ドウブオーニユは帝国兵を買収して秘密裏に帝国印章を手に入れ、それを捺した檄文を十一人理事会に送り付けたのである。その内容は「バイロン」テレジアが死んだのは、十一人理事が裏で手を引いたからだ」という憶測をひたすらに書き連ねたものであつた。その紙は二十数枚にも及んだが、初めの三枚だけ見れば内容を把握するには十分であつたかもしれない。平たく言えば「絶対にお前らの仕業だからお前ら死刑」という一文を大量の修飾語と比喩とで飾り立てたものであつた。実際のところ、ドウブオーニユとヒツキが裏で手を引いていたわけで、あながち間違ひでもなかつたのだが、決定的な証拠を残す二人ではない。それでいて実行犯の自分たちにも檄文を送り、拳句の果てにはメソメソと被害者面するのだから質の悪いことこの上ないだろう。

ところで、好意的に解すると慎重、悪意的に解すると疑い深い理事の何人かは、本当にそんな文章を帝国が送つてきたのかを確認しようと考えた。しかしながら、更に考えれば、向こうがそんな文を認めていなかった場合、因縁を付けたことになるわけで、反つて芳しくないことにならぬとも限らない。もしそうなつたら、帝国側は面倒な犯人探しをしてくれるだろうか。理事たちを一掃してしまえば手っ取り早いと思わないだろうか。ブラーヂウスの人柄を考える

と、そう危惧せざるを得なかった。

少なくともバイロンが暗殺された現状、帝国側はアテライデに少なからず不信感を抱いているだろう。そんな時に火種を自分の名で差し出せば、どうなるかが目に見えている。かといって匿名で出せば信憑性が薄れる。結局、確認を実際に取る者は現れなかった。

二つ目には、情報の流布なま。バイロン・テレジアが帝国に援助するためにアテライデに要求していた金額の、正確な数字を流したのである。脚色やくしやくするまでもなく、噂は大量の尾ひれに装飾されつつあったという間に広まっていった。

何千億ギラムの金がテルネシア帝国に流れていたことを知った民たちは多分に憤った。自分たちの手元に還元されるべき（かどうかはともかく）金の行方を憂いた民たちの世論は、反帝国へと傾倒けいとうしていったのである。そして、それこそが巧妙に理事たちを焚き付けることになった。

補足すると、亡きバイロンは十一人理事から集めた金の何割かを自らの懐に入れていたため、帝国に送った金額と収集した金額の数字は見事に乖離かいりしていた。アテライデとしては、帝国に請求されたとする金額をそのまま公おおやけにしているだけのだが、帝国側は当然そんなに貰った覚えがない。何故ならバイロンが金を抜いていたとは露知らないからだ。お互いに、食い違う話を聞かされては苛々いらいらが募り、その仲は日に日に険悪になっていく。最早、破局は時間の問題であった。

一つの事実として、実際に徴収されていた金が、相当な額に上っていたのは確かであった。一年の利益を一瞬で消し飛ばされる様な額を奪われていた理事達が、表面上はどうあれ、内心で腹立たしか

ったのは間違いない。更に、そんなに貰った覚えはないと逆ギレされては、理事たちも温厚な人の仮面を脱ぎ捨てざるを得なかったのだ。

他にも、シャナエドゥブオーニユとタクローヒツキが駆使した策は、大小合わせて両手の指に足りぬほどあったのだが、結果としてアテライデは帝国と手を切り、短日の内に東国同盟への援助を申し入れたのである。

其の五十 東の間の休息（表）

884年 12月3日

テルネシア帝国とアテライデの面々が胃痛に苦しんでいる頃、ド
ウブオーニユとヒヅキはアテライデで一番高い十四階建てのビルの
最上階に入っている高級レストラン、？人生の勝ち組亭？にて祝杯
を交わしていた。通常の店と比べてドレスコードが厳しいため、ド
ウブオーニユはプリンセスラインの黒いパーティドレスを、ヒヅキ
は畏まった燕尾服を纏っている。

二人の周りに客は見当たらない。四角いフロアを十字に区切った、
ブライベートな空間が確保されている。広いスペースに一つだけ、
正方形のテーブルが置かれており、肌理細やかなレースで縁取られ
たクロスに覆われている。足が埋もれるかと錯覚するほどの柔らかい
絨毯には、海の中の様子を克明に表した絵が刺繍で施されている。
窓の外にアテライデの広大な町を望めるのは勿論、天を仰げばガラ
ス張りの天井。天候に恵まれれば星の海が祝福してくれるだろう。

一週間に一度、それも午後の一部屋二組、四部屋で計八組しか入
れないこのレストランは、各財界の大物御用達として名が通ってい
る。或いは、多分にインパクトのある名前も記憶に残る理由の一つ
かと思われる。卓に並ぶのは吟味尽くされた料理。料理を運ぶ使用
人一人見ても軍人以上に訓練されており、一挙一動に隙がない。足
音はおるか皿を置く瞬間も殆ど音を立てない。ステージの上ではア
テライデでも有名な弦楽カルテットの面々が、静謐さを損なわぬ程
度の心地良い音楽を奏でている。

乾杯を終えたドウブオーニユは小さく口を開き、底の浅いパーテイグラスに口を付け、細い喉を小さく二回鳴らした。

「やっ」と先手を打てたわね」

そう言つて怪しげな微笑みを浮かべる。口から離れたグラスには、淡い桃色のラム入りルージュが星の様に輝いている。

向かい合うヒツキの前に置かれているのは、底が深いシャンパン専用のグラスである。ヒツキは頬杖を付きながら無数の細かな泡がゆつくりと立ち上るのを眺めていた。

「おつかない姉ちゃんだ。本当にやっちまった」

「あら、心外。私一人のせいにするつもり？」

テーブルに両腕を乗せ、上目遣いで己の顔を窺おうとするドウブオーニユに、ヒツキは年甲斐もなく鼓動が高鳴るのを感じた。チラツと覗くのぞ白い胸元に目が向かつてしまうのは、男の性さがだ。湧いて出た雑念を吹き消す様に、ヒツキはシャンパンを煽あおるように飲む。あらあら、酷い飲み方ねえ、とドウブオーニユは薄く笑った。安酒ならともかく、一瓶十萬ギルはする代物しろものであるから、その指摘は実に正しい。

グラスをテーブルにコツンと置くと、ヒツキは微かに首を振る。

「いんや。いい加減我慢するのも飽きたからな。それで、同盟軍の返事はどうだつて？」

「好感触よ。もっとも、まだ完全には信用されていないけれど」

「そつかあ。ま、いきなりだから無理もねえさなあ」

シャナエドゥブオーニユの経営するドウブオーニユ社は貿易会社として全国的に有名である。所謂一族経営いっしゆけいの会社であるが、幸運にもその血は商才に恵まれた者を代々輩出し、長きに亘つて滞りなく会社の力を伸ばしてきた。その甲斐あつて主要都市の半分近くに

支店を持ち、幅広い人脈と情報網を持っている。現時点での社員数は関連会社を含めると四千に届く。間違いなく、大陸有数の企業の一つであった。

ドウブオーニュは今回のバイロン・テレジアの暗殺と同盟破棄を受け、グリトリーの有力者に協力を持ち掛けてその返事を待っていたのだが、陰謀の全てを明るみにしたわけではなかった。あくまで此度のバイロン暗殺はアステイス・フロイデが帝国に害するために単独で行った暗殺である、という姿勢は崩していない。それを理解しようとしてない帝国に対しては、渋々ながら反抗するしかない、という体裁を取りつつ、敵の敵であるグリトリーに対して援助を申し出たのだ。自らの手でやった、ということ打ち明けていればグリトリーも即断してくれたかもしれないが、同時に決定的な弱みを握られることにもなる。近年はお互いに疎遠であったため、まずは懐具合を探った方がよいと判断したのである。

そんなわけで、相手の警戒心を完全に払拭することは出来ないでいた。東西戦争においてアテライデの独立は東軍側の勝利を台無しにした主要因であり、裏切りにも等しい前科であった。警戒心を含んだ目で見られるのは致し方ない、といったところであろう。失った信頼を回復するためには、口よりも行動で示さなければならぬだろうということ、ドウブオーニュにも良くわかっていた。

ヒヅキは付いていた頼杖を外し、両手を組む。

「とりあえずは、帝国に一泡吹かせたんだし由でしょう。そ

れから、念のためアンタも護衛雇った方がいいぜ。バイロンはお休みしなされたが、後釜になりそうな奴はごまんという。よりを戻そうと、帝国が暗殺者を睨けてくる可能性も否定できないからな」

「……それもそうね。わかつたわ、気をつける」

ドウブオーニュはガラス張りの透過壁に目を移す。アテライデの

町の淡い灯火が、夜の闇の中に無数に瞬いている。空に目を移せば厚い雲に覆われているが、町明かりを受けてはどこか赤みを帯びていた。空高くに居座る雲にだって、灯火は届く。

「後は、一直線に空を目指すだけ。帝国という暗雲を振り払うために」

「そのまま天に召されたらどうすんだ」

少々ユーモアに欠けるヒヅキの冗談であったが、ドウブオーニユは微かに口の両端を持ち上げた。

「それも悪くないわ。生き方としては、ね」

決意の言葉を紡ぐ唇と、峻烈しゅんれつな眼差し。腹に一物あるうと、いや、一物あるからこそなのか。ヒヅキの目に映る今宵のドウブオーニユは、どこまでも気高かった。

「それで、これからどうするつもりだ？」

バイロン暗殺の陰の功労者。グリューンに引き続いて、またしてトリニティ・フンも三重の頂を二人葬った美しき女傭兵、オルフィがどや顔でアステイスに訊ねた。

アステイスは、アクア・ティ・アラの傭兵たちと共にヒヅキの邸宅の離れに滞在していた。普通に寝泊りするには不自由ないが、隣の倉庫からしばしば煩げな物音が聞こえてくるのが玉に瑕である。だが、それも慣れてしまえばどうということはない。船のけたたましい汽笛を子守唄に寝る者だっているのだから。

バイロン＝テレジアの暗殺を成し遂げたのはアステイス、ルガー

ル。そして、新たに一向に加わったアクア・ティ・アラの幹部オル
フィ、上級傭兵のエルフ、ヒューリイと翼人バーティアルのジョウであった。オ
ルフィの強さは言わずもがな、ヒューリイとジョウについても三重トリニテ
の頂イワシとサシで渡り合える実力者であり、五人全員がグリューンでの
戦いに身を投じていた猛者である。人数で上回り、襲撃場所を吟味
し、策を用いた手前、末端トリニティ・ワンの三重の頂に対して遅れを取る彼らでは
なかった。

アステイスはどこか得意げに胸を張っているオルフィに気難しそ
うな顔を向けた。実の所、アステイスは今回の件では敵を一人も倒
していなかった。バイロンをその手に掛けたのは短剣使いの新鋭、
ジョウであったし、残り二人の三重トリニティ・ワンの頂を倒したのはルガルとも
う一人の上級傭兵、バイロンの乗る馬車を足止めした魔法使い、ヒ
ューリイであった。決して意図した結果ではないので、個人的な見
地で見ると聊ちやうどか不本意な結末である。それでいて、犯行声明はアス
ティス一人でぶち上げるようになっていたので、気まづくもなるこ
うのものである。だが、それはそれとして、ドウブオーニユとの
約定は当然守らなければならぬ。複雑な心境を精一杯険しい表情に
組み替えて、新聞社の取材に答えたのであった。

そんな事情もあってここ数日、ご機嫌ごきげんが麗きれいしくないアステイスで
あったが、最低限、暗殺の成功を経てアクア・ティ・アラの協力を
取り付けることはできていた。そこはオルフィがマスターのウルグ
に協力を進言してくれたという経緯があるので無碍むげには扱えない。
アステイスは心中に溜息を落とし、渋々口を開く。

「帝国の兵数は約三十万。兵力を集中されると手が付けられないか
ら、分散させようと思う」

「分散……。別の場所から攻めるのか。どこからだ？」

「ここ、だ。移動は動きを見てからにはなるが」

アステイスは立ち上がり、壁面に貼つてある大きな全国図の一点を指す。それを見てオルフィは顔をしかめ、唇を震わせた。得意げな笑みが消えたのを確認して、アステイスは密かに満足する。

「……本気……いや、正気か？」

「まあ一応。ここに駐在しているのはベルガモットとジルバ……ミレン將軍だが、今回のアテライデの同盟破棄で、彼らのうちどちらか、或いは両方かな。近いうちに東に招集されることになると思う。そこを叩く」

指で示したのは、大陸の中央部にして交通の要所、エル・クレス領だった。南にはベールが、そして、西には戦略拠点のマビアビがある。ここを抑えてしまえば、テルネシア帝国は喉元に剣を付き付けられることになり、兵の分散を余儀なくされる。

「確かに、エル・クレスが奪えれば反帝国勢力が一行に並び、有利に戦えるようになるのだろうが……」

ちなみに、アクア・ティ・アラのマスター、ウルグ＝ステイードは協力要請を受け入れたものの、同行を許可したのはオルフィを除くと、上級傭兵が5名。中低級傭兵が200名に留まった。もつとも、これはアクア・ティ・アラにとっては最大限の譲歩である。帝国兵が再度グリーンに攻めて来ないとも限らないからだ。

その数でも、一人一人が精兵であるから帝国兵二千程度ならどうとでもなるだろう。だが、たとえ二将が退いたとしてもエル・クレスが帝国にとって要害の地であることには変わらず、おそらく七千から八千の兵が残されると見込んでいた。

「今現在、ベールはマスチュアからの軍に押し込まれている。負担

を軽くせねば滅ぼされてしまう可能性は高い。おそらく、このままでは半年も持たないだろう」

そう言われて、オルフィはベールに赴いている幹部二人のことを思い出す。エルウ＝ノブリスとキール＝ミッドロウ。いずれもオルフィに匹敵するほどの猛者であった。

心優しき武道派、アクア・ティ・アラの幹部エルウ＝ノブリスは戦争が始まる以前からイアニス教の内部で諜報活動を行っていた。しかし、ベールが独立して帝国との戦争が始まって、何故か彼がギルドに引き上げてくることはなかった。おそらく、温厚な性格が災いして、身近な者に情が移ってしまったのだろう、そうオルフィは推測していたのであるが、実際にはこの指摘より斜め上であった。ノブリスはあるう事が任務中にイアニス教の修道女シスターと恋に落ち、よろしくやっていた、ということであった。

よろしく、というのがどれくらいはともかく。それを知らせてきたのは、窮地に立たされているノブリスを救うべく、颯爽さつそうと補佐に向かった友人想いのキールであった。当人曰く、マスターにはチクらないとノブリスに約束したとのことで、代わりにオルフィへ、現状報告のついでにその倍はありそうな長い追伸つこうを綴ったのだ。つまりは、彼女からマスターに伝わる分には約を破っていない、というのがキールの言い分である。オルフィはその捻くれた解釈に苦笑すると共に、その手紙の扱いについてどうしたものか、と迷ったのであるが、結局は己の机の奥深くに眠らせておくことにした。色恋ふけに耽ふけっていたノブリスとそれを密かに漏らしたキール、二人分の弱みを握ったことになるからだ。

そんな経緯をアステイスが知るはずもないが、ベールを助けねばならぬ、という点についてはオルフィも意義なしであった。

「……何か策があるのか？」

「もう少し兵は必要になると思うけれど、こういうのを考えている」
アステイスは部屋の隅に置いてある編み籠から丸められた紙を取り出し、卓上に乗せて広げる。言うまでもなく、エル・クレスの地形図である。

エル・クレスは、南側はエストラル峡谷、他の三方は平原である。アステイスは説明しながらエル・クレスの南門を指揮棒で示し、南になぞり、峡谷の真ん中ほどで止めた。

オルフィは納得したように頷く。

「そういう手か。だが、付いて来なかったらどうする？」

「半分付いてくれば、十分に勝ち目はある。それ以下だったら、諦めるしかない。次の機会を待つよ」

「ふむ」

オルフィがずっと割り込むようにして地図に顔を近づけると、彼女の髪がアステイスの頬に触れた。微かに石鹸の香りが漂ってくる。アステイスは活力溢れる彼女の横顔ひこめに一時目を奪われたが、おもむろに視線が合うと慌てて地図の方に視線を戻した。

「で、でだ。陽動が成功した後のことだが」

「……？ 何をそんなに焦っている」

オルフィはそんなアステイスを見て、軽く首を傾げるのだった。

其の五十一　　く背水の陣（表）く

アテライデの十一人理事、バイロンさかのほ・テレジアの暗殺より遡ること一月前より、大陸中西部マスチュアからの再三の侵攻に相對するベール軍であつたが、必死の奮闘も空しく敗戦を重ねていた。発足の時の勢いはどこへやら、上層部からも逃げ出す者が相次ぐ始末であつた。グルツセルグ・イアニスがエル・クレスで負つた怪我は徐々に快方に向かつていたが、戦意を向上させる材料とまではなりえず、ベール軍はその数を一万近くにまで減らしたのである。

そして884年11月11日、第八軍大隊長ハンディックウ・ランダールと第九軍大隊長ローラントラ・ラフォムの両将が三万五千余りの大軍を率いてマスチュアより出立し、ベールの町を陥落せしめるべく、侵攻を開始したのであつた。

名門貴族ウランダール家の長男、「黙つてさえいればねえ……」とご婦人方に噂される残念な男、金色の前髪をかきあげる癖を持つハンディックウ・ランダール。家柄は名門と没落の間、黒いパンチパーマに揉み上げを伸ばし、見た目はヤクザ、中身はもつとヤクザ、ローラントラ・ラフォム。不安視されていたこの二将のコンビは、蓋を開けてみれば連戦連勝を繰り返し、人徳は別として、次第に勇名は高まつていった。

対するベール軍は、法王のグルツセルが戦線から離脱してからというもの、兵達にはどこか覇気がなく、指揮官達の命令も精彩を欠いていた。戦線はどんどんと押され、11月30日には帝国軍の自領への進入を許してしまう。

ベールの、そしてイアニス教の破滅は、もはや不可避であると誰もが思つていたのである。

884年 12月2日

「ついに私^{わたくし}たちの時代がやって来ますなあ。剣の腕を磨き、雌伏の時を耐え抜き、七難八苦の道を乗り越えてきた甲斐があったというものです。長きに亘って栄華を極めてきた由緒正しきテルネシア帝国に対して、不遜にも鈍牙を突き立てようとした、イアニス教始まつて以来の愚かなる扇動者グルツセルを捕らえてしまえば、大陸各地に点在する教徒達などは烏合の衆もいいところ。これは言うまでもなくブラージウス様の目指す大陸統一という大いなる覇業に置ける第一級の功績になるでしょう」

一息でそう言い、左目にかかる前髪を気障にかきあげるハンディックに、ラフォムは顔の筋肉を僅かに収縮させた。

陣中にてベール軍に対する戦略を練っていた二将であったが、何故か話が一向に進まず、ラフォムは苛々^{いらいら}を募らせていた。

「それより、貴軍と我が軍での戦利品分配についてだが」

「それより」の一言で一蹴されたハンディックの熱弁であったが、それくらいでめげる彼ではない。

「なるほど、戦利品ですな。確かに、ベールの町はイアニスの聖地にしてテルネシア帝国の前身、テレジア帝国の御世の頃から栄えていた古代都市。もしかしたら我々が見たこともないような金銀財宝はたまた骨董品や珍品なども眠っているかも知れませんか。そうそう、珍品と言えは我がウランダー家に代々伝わる家宝に見事な絵画がありました。それは真に見事な……、あ、見事って既に言っておりましな。こりゃ失敬。まあとにかく二度言っても足りぬほ

どに素晴らしい風景画があるのですよ。それを眺めているだけで心が豊かになったような気がします。え……値段ですか？ 値段ですか？ 気になりますか？ なりますよね？ いやあ、値段なんてとても付けられないんじゃないですかね。と言いますのも保存状態は良好ですし、何しろジキールより前の時代の有名な画家ですから。あの過渡期において行方不明になった宝物は数知れませんが、そもそも

話を聞かされている間のラフオムはうんざりした様子でふんぞり返っていただけなので、勿論絵の値段などは訊ねていない。通常なら十分足らずで済む話がこのままでは一時間でも終わりそうにない。無駄に長い議論を重ねたところで画期的な結論を導くことなど出来ず、単なる神経衰弱に終始するのだから避けたいのも当然であろう。

ようやく話が収まったのを見計らって、ラフオムは喋らせぬ様に配慮して簡潔に述べる。

「なるほど。それはそうと、ベールの町には二手に分かれて攻めた方が良さだろう。分けたとてそれぞれの兵数は敵数を上回っているのだからな。財宝の所有権は、奪った者の総取り、戦後分配はなしということです承してもらいたい。宜しいか？」

「ああ、それはもう」

「決定だな。即断かたじけない。では、部下達に説明しなければならぬので失敬する」

「ああ、ええ、ああ」

ハンディックが発音練習のような声を出し終わった時には、ラフオムは陣中から姿を消していた。

「家財は根こそぎ奪え。ベールは古代都市だからお宝が満載だ。捕まえた女は自分の物にして構わん。奴隷として売るなり自分で楽し

むなり好きにせよ」

進軍中に度々耳にするラフォムの悪辣あくらつな言に、ハンディックは眉を潜めながらも否定の言を控えていた。その物言いには興を削がれることもあるが、得る物がなければ士気が鈍るのもまた事実である。防衛戦をしていても、将を倒した者は別として懐が潤う事はない。戦争をするならば、常に侵略戦を仕掛ける側にならねばならない。幾ら勝利しても国土を焦土とされては負けに等しい。？戦争に勝者はいない？という格言は防衛側が勝った場合において、実利的を得ている。

「そういえば……グルツセル法王には娘がいるそうですね」

ハンディックの何気ない一言であったが、ラフォムは歪んだ笑みを浮かべる。

「ああ、アリア・イアニスだな。高貴にして純真無垢な聖女。くく、興奮するではないか。生きて捕らえることが出来たらたつぷり楽しませて頂こう」

まるで山賊か海賊のような言に、ハンディックは心中に溜息を落とす。その横では、彼らを取り巻く衛兵達が「止まらぬ長口上と品のない言葉遣い、果たしてどちらがより深き罪であろうか」と考えていた。

アリア・イアニスは法王グルツセル・イアニスの一人娘だ。年齢は十六と幼いながらも可憐な容姿でイアニス教徒から圧倒的な人気を誇っている。確かに、彼女くらいの高潔めいけつさがあるならば妾めかけくらいにはしてやってもいいかも知れぬ、とハンディックは思うのであった。無論由と言わねば部下への褒美として慰なぐさみ物にするだけであるが。

ハンディック・ウランダーは父親のミリック・ウランダーより幼い頃から偏った教育を受けており、貴族至上主義、とも言うべ

き考え方を既に構築済みである。その点、早々に自立した妹のメリッサとは全く異なるであろう。

対して、ローラント・ラフォムは貴族ではあるものの、腕っ節に絶対の自信があり、座学よりは剣を振り回しているのが性にあっていた。金も暴力もある、正にお山の大将であるが、少なくとも吝嗇けちではないので、付き従う者は多かった。

貴族間のもものとしては、二人の会話内容自体は不自然なものではない。？弱者は強者の畜産物である？。持てる者としての考え方はこれが普通だった。少なくとも彼等の周りでは、の話である。いつの時代も絶えぬ、悪しき習慣の一つであった。

さて、そのような会話を平然と行っている辺り、この時点にして勝った気になつている二人であつたが、その頃ベール軍では、帝国の予期し得ぬ変革が起きていた。変革の中心人物は劣勢のベール軍の中にあつて唯一と言つていい戦功を立てていたエルウ・ノブリス。そしてキール・ミッドロウという素性の知れぬ若者に他ならなかつた。戦いに限らず、数が変わらずとも統率する者が代わつてから別次元パフォーマンスの能力を発揮するようになることはままあるのだ。

勝つて兜の緒を締めよ、とは良く言つた物。二将はそのことを、身を以つて知ることになる。

884年 12月5日

ベールの町は険しい山地にあり、その高さは海拔3000mにも

至る。帝国軍が出立したマスチュアとの標高差はおよそ2800mだ。快進撃を続けていた帝国軍だったが、それはせいぜい1000m以下の場所で行われた戦いであった。過去において、それほどの標高差で戦いが起きた記録は殆ど残っていないなかったのである。

相次ぐ指揮官の死亡、或いは戦線離脱に、急遽司令官に**抜擢**されたエルウ・ノブリスは、既に一部の帝国兵にはその名を知られていた。敗戦を重ねるベール軍の中で唯一、彼の指揮する部隊は奮闘を続けており、ベール軍との戦いにおいて帝国側の死傷者の実に四割近くは、彼の部隊によるものであった。

ベールまであと六日ほど、というところで陣を敷いている最中、それまで一隊長に過ぎなかったノブリスが司令官に任ぜられたという情報が入ってくると、その実力を知る者達は腋に少量の汗をかいた。だが、続いて副官に配されたというキール・ミッドロウの情報が入って来ると、今度は一様に顔をしかめた。

「碧髪のエルフ……。間違いないのか」

ラフォムが伝令兵に再度確認を取る。

「はい。エルフが兵として加わっているのも珍しいと思ったのですが、将としては耳にした事もありませぬね」

「ははん、余程人材に困っているようだな。上層部から離脱者が相次いでいるというのもどうやら事実らしい」

ラフォムは卑下を交えた笑みを浮かべる。

エルフという種族は非常に知能が高いことで知られており、概して宗教を嫌っている。イアニス教に与くみしている、という話は過去にも前例がない。そんな者まで引つ張り出さなくてはならなくなったということは、向こうも余程切羽詰まっている状況なのだろう。帝国の将校達はそう考えていた。

「しかし、ラフォム殿。如何に兵数が少なくとも、ノブリスという男に關してだけは油断できませぬぞ。奴はエストラル渓谷で」
ハンディックが声を高めて中隊長ゲシュターの声を制す。

「その話はウンザリするほど聞いた。全く、あの時ちゃんと突破できていれば、こんな山奥で戦わずとも済んだのかも知れぬのに」

「ぐっ。……め、面目ない」

ハンディックの批判に対し、足止めされた先鋒隊を率いていたゲシュターが齒を軋ませながらも呻くように謝罪した。ラフォムはそのやり取りをにやにやと眺めている。

「まあ、そう苛めてやるな、ウランダー殿。そなたも言っていたようにベールを落とせば第一級の戦功だ。二人とも揃って將軍に昇格できるだろう」

「それは、まあ確かに。ふむ、將軍と言えば長い歴史を持つウランダー家でも任じられた者は一握り。未だ若輩の私が名を連ねれば先祖代々子々孫々まで」

後は、忌々しいジルバート・ミレンや平民出のシュヴァイ・オルトフを追い落とせば言う事はないのだが。再び喋り出したハンディックの聞き役を他の者に押し付け、ラフォムは胸中で独白する。
ハンディックに關しては貴族ではあるが、才能に關しては自分の方が上だと思っていたので競争相手としては見ていなかった。

「ともすれば、ブラーシウス様もきつとお喜びになりましたよ」
「う」

「そうだな、とつととケリを付けてしまおう」
こいつを相手に喋る時は「なるほど」と「そうだな」で十分のようだ。ラフォムは新境地に至った。

帝国軍は陣を引き払うと草も生えぬひび割れた荒地を進んで行く。山道ではあるが傾斜は緩やかであり、幅も相当にあるため行軍には支障ない。左手には進行方向に向かって連なる剣山が、右手には深い谷があるが、右手の崖下から5m近く離れても二十名近くが横に並んで通行できる。ベールの町に着くまでは後三日ほどということであった。

その様子を遥か高み、剣山の山頂付近から見下ろしている者達があった。キール＝ミッドロウは眼下にある黒い働き蟻の行進を悠然と眺めていた。腕を組む所作からは余裕が感じられる。その後ろで、エルウ＝ノブリスは不安と期待をない混ぜにしつつ、自分より二周りは小さいキールの背中と、強い山風に靡く彼の碧髪を黙然と見つめていた。

「敗戦を続けてくれたお蔭で随分とやりやすくなった。礼を言うぞ、エルウ」

いきなりの一撃。一言目からの痛烈な擲掬に、ノブリスは渋い顔を作る。

「……今までは俺が軍全体を指揮していたわけではないんだが？」
実に不快げな表情をするノブリスに、キールは微かに肩を竦める。「このくらいは軽く流せ。指揮官の感情は兵たちに伝染するぞ。お前はベール軍の最後の砦なんだ。いつでも踏ん返り返っているくらいでなければな」

実に正論であるが、その不快を喚起したのも当人の台詞であるの

だからどこか説得力がない。ノブリスは仏頂面を崩さなかった。

「それより、本当に効果があるものなのか？」

「魔道兵には伝えたか？」

質問を無視して平然と問い返すキールに、ノブリスはしかつめらしく己の針山のような短髪をわしゃわしゃと乱した。だが、キールの意図しているのが作戦の事だと判っているので無視するわけにもいかず、不承不承頷く。

「開戦予定日の前日に礼拝堂に集合、だろ？ ちゃんと伝えてある。しかし、本当に大丈夫なのか。ここまで引き込んでしまつて」

「それでこそ意味がある。ベールの兵は高地で生活しているからな。薄い空気での動きに慣れている。この優位を使わない手はない。高低差つていうのはお前が想像している以上に一般人には優しくないからな。まあ、お前にはいまいち影響なさそうだからわからんだろうが」

皮肉とも褒め言葉とも付かない言葉に、ノブリスは再び苛々を募らせる。その顔を見て、キールは何故か嬉しそうに笑う。

「いやあ、皮肉が通じる奴が近くにいてというのは本当にいいもんだ。あの二人にはあつさり反撃されたからなあ」

「お前ね……」

しみじみと言うキールに、エルウはただ呆れるほかない。

どこか含みのあるノブリスの視線を無視して、キールは再び眼下の帝国兵に目を向ける。どうやら、後方から続いている輸送隊を隈なく確認しているようであった。

「流石に、こんなところまで投石器は持つて来なかったようだな。それだけが心配だったんだが、これならいけそうだ」

勝利を確信したかのようなキールの呟きを耳にし、ノブリスは自身に内在していた不安が薄まっていくのがわかった。

「今回ばかりは、お前の悪知恵だけが頼みの綱だな」
「頼まれたが、勝算は多く見積もって八割だ。悪い可能性は常に息を潜めている物だしな」

たとえば、人事を尽くしたとしても天災や不確定要素一つで崩壊することは稀にある。ちなみに、不確定要素でもつとも頻度が高いのは味方の心変わりだ。キールはそれをエアリアの防衛戦において身に沁みていた。約を違え、援軍を寄越さなかったゴルフレッドの領主を思うと、今でも少なからず怒りが込み上げる。

上層部の人間達が逃げ出している現状では、味方の裏切りも発生しやすい状況にある。或いは帝国が密かに内通を仄めかしているとも限らない。そのため、キールは己の作戦の要旨をノブリス以外には明かしていなかった。勿論、その作戦には自信を持っているのだが、それを短時間で納得させ、且つ実行させることができるか、という懸念は残っている。だが、作戦が漏れてしまえばその時点でベール軍の、そして町の住人達の命運は尽きる。その考えに辿り着いた時点で選択肢の一つが自然と消え、背水の陣で臨ませる以外になかったのである。

「安心した。今の所、お前の言う八割が外れた事はないからな」
キールはノブリスの発言を聞いて面白くなさそうに視線を逸らす。
「……ちえっ、少しは不安がれ」
「……さっき堂々としていたと言ったばかりじゃないか」

アクア・ティ・アラ屈指の傭兵二人は、再び帝国兵の列を舐めるかのように伶俐な視線を走らせる。山道にも関わらずその軽快な行進は、彼らの心情を表しているかのようだ。まるでピクニックにいかかのような風体。これから行う略奪行為を想像しているのだろうか

か。それとも、それに伴う褒美や出世の方だろうか。

キールは氷の微笑を口元に湛たたえた。

(……今までさぞかし好き勝手やってきたんだろうな。因果応報、相応の報いは……受けて貰うぜ)

ノブリスは味方のはずのエルフを横目で見て、微かな寒気を惹起じゃっきされる。キールの凍て付く視線は、勇む帝国軍の末路を見据えているかのようであった。

其の五十二　く起死回生（表）く

ベールは北と西とを険しい山々に囲まれた、天険の地に作られた町である。この町の大きな特徴は、聖都と呼ばれている小さな町が大きな町に内包されているところだ。大抵の場合、ベールとはこの二つの町を一緒くたにして指すが、外の町にもパルステイというちやんとした名前がある。歴史的にも神格化されているが故に、厳しさを感じさせる建築物はごく少数であり、丸みを帯びた建築物が多いのも特徴である。

町を囲む外壁には魔法の威力を軽減する術式が随所に使われているが、物理的な攻撃に対しては壁そのものとしての防御能力しかない。ただし、ベールに至るには険しい山道を通らねばならぬため、投石器を組み立てる部品を持ち込むのにもかなりの時間がかかる。利点をしっかりと抑えてさえいれば、非常に強固な防衛力を発揮する町であった。

帝国兵達の進む山道の傍らには、珍奇な高山植物が数多く生育していた。黄色や白、或いは紅紫の、ヤマシロギクやクモイナデシコといった、小さなキクにも似た草丈の低い花々が顔を覗かせている。その背景となっているのは苔生すなだらかな山々であり、手に届きそうな位置にある雲だ。山の頂上には薄らと霞がかかっている。

高山植物は元々寒帯に分布していた植物であるが、異常気象で大陸中が凍土と化した時代、徐々に生息域が南下したとされている。それが再び平常の気候に戻ったため、低地に群生していたものは死に絶え、辛うじて生育環境が似ている気温の低い高山のみに残ったという次第である。

ただ、勿体ない事に、帝国兵の中には美しい景観に見惚れるような者は少なかった。無論、戦争が間近に控えているのだからその心

持ちはある意味では正しい。日々戦いに身を置いている者は自然に目を向ける余裕など忘れていく。

十二月十一日

聖都ベールを囲む外町、パルスティの外壁には門が南と東の計二箇所ある。前々日の軍議により、ハンディックは南門から、ラフオムは東門から侵攻することが決まっていた。これは戦略上に置ける理由と言つよりも、兵たちの略奪において所有権がどちらのものであるか、仲違なかつがいを防ぐためという意味合いが強い。確かに由緒正しい土地柄であるために、収奪品の中には相当な価値を見出せる物も多分にあるであろうと推測できたのである。

実の所、ラフオムが呈したこの案にしても、彼自身が考えた物ではなく、所属する中小隊長たちの要望が一致したために受け容れた措置であった。彼はそれなりの貴族であるため、金銭面の略奪にはそれほど執着はない。だが、決定権があるのは二将であり、認可したのもそうだ。

今までの戦いが非常に容易かつたものであり、彼らは少なからず油断していた。兵数にしても、帝国側は三万五千に対して、ベール側はせいぜい一万強。兵を二手に分けたとしても尚数が勝っている。絶対的に有利な状況が、彼らに慢心を抱かせたとしても不思議ではなかった。

長年に亘って風雪に晒された外壁は、塗料が剥げ落ち、所々ひび割れている。お世辞にも綺麗とは言えない。ベールの南門と東門とは4km近く離れている。先行したのは東門を目指す第九軍、その後第八軍が続く。魔法使いを警戒し、壁からおよそ500m離れ

て、大きく回る様に軍を展開する。攻略の時間は取り決めてあった。二手に分かれて同時に攻め込む方策を取っていた帝国軍は、十三時を以って攻撃を開始するよう取り決めていた。

十三時

彼らは第九軍から狼煙のろしが二本上がると同時に門に殺到した。破城槌はじょうつゐを用い、門をこじ開けようとする。ところが、破城槌が門前まで差し掛かった時、人気のなかつた要塞の上から突然酒樽が投下された。破城槌はそれを押していた者毎、中に入っていた液体を浴びる。間髪入れずに火矢が乱れ飛んだ。

門の周りにいた者達は破城槌と共に一瞬にして紅蓮の炎に包まれ、倒れ伏していく。

もつとも、多少の小細工を弄してくるのは帝国側も承知の上である。数的劣勢の彼らが勝つには奇策を用いるしかないのだ。そうは言っても、このままでは進めないということで、弓兵が前に出る。要塞の上の敵兵を狙うためである。しかし、要塞上には金属盾が並ぶように備え付けられている。上まではそれなりの高さもあるため、そう簡単には狙った所に当てられない。キンキンと、矢が盾に当たる音だけが虚しく響く。

投石器があれば盾ごと吹っ飛ばすのも可能であろうが、生憎と持参していなかった。ベールの町までは険しい山道を進むのだから、重い荷物を加えては進軍の速度がかなり遅れる。それを嫌ったのである。

これは、現在の情勢や季節柄も関係していた。バイロン「テレジアが死に至り、アテライデが独立してからは反帝国の運動も再び活発化している。12月に入り、例年であればそろそろ雪が積もって

もおかしくない。積雪すれば進軍は困難になり、ベールに立て直す時間を与えてしまうことになる。速やかな進軍を行いたい。年内に決着を付けたい。その焦りこそが、嵩張る投石器を持ち込まなかった理由であった。

ともあれ、門前は火で近寄れぬ状況であったわけだが、油とて無限ではない。そのうち収まるのは目に見えている。その時を狙って一斉に突撃すれば良い。大半の者はそう構えていたのであるが、いつまで経つても火が消えることはなかった。ベール軍が用いたのはただの油ではなく、魚油であった。これは一旦火が付くと容易な事では消えない。油よりも沸点が高く、蒸発する速度が速くないので、火勢はそれほど強くないが、代わりに長時間燃え続けるのだ。仕方なしに、虎の子の魔法使いを消火活動に何人か導入する。魔法使い達は火を消すべく水魔法を放つ。ところが、またしても要塞上から何かが飛んできた。

魔法を放った直後の、射程外からの不意打ちに、魔法使い達は反応しきれなかった。細い丸太のような物は、彼らの身体を貫き、そのまま地面に突き刺さった。

それは、要塞上に設置されたバリスタから放たれた、巨大な木矢であった。バリスタは矢のセッティングに複数の人数を要し、標準を合わせるのに時間がかかり、相当に重いために持ち運びも大変、と欠点も幾つもある。代わりに、長距離射程からの攻撃が可能であり、その威力も凄まじい。籠城戦においては著しく力を発揮する兵器である。

そして、魔法使い達がやられた後には門に魚油入りの樽が落とされ、再び火矢が放たれる。明らかに時間稼ぎの策であった。

十三時三十分

足止めされていた二つの軍だったが、戦闘開始から二十分もすると、東門の近辺、つまり第九軍の方では状況が変わってきていた。ローラント・ラフォムが指揮する第九軍の背後から突如伏兵が現れたのである。敵は歩兵と魔法使いの混成部隊であった。

どうせ先に進めないのも、それなら相手をしようということになったのであるが、何故か相手は攻撃を仕掛けてくるどころか、近寄ってくる気配がない。弓の射程圏内にすら入ってこなかった。

怖気づいたか、とせせら笑い、続いては突進しようかという帝国兵達の眼前で、ベールの伏兵達は唐突に奇怪な行動を取り始めた。丸められた反物たんものを地面に置き、風魔法によって一気に押し広げたのである。何かの策いづかと訝り、第九軍はそれに踏み込むことはなかった。

すると今度は、地面に広げられた長い布に火が付き始めた。どうやら油を滲みこませていたようで、辺りは一気に火に包まれる。ただ、お粗末なことにその火は帝国兵までは届いていなかった。完全に包囲したわけでもなく、ただ黒い煙がもうもうと上がり、山風で南へと流されて行くだけであった。風も読めないのか、と嘲笑っていた帝国兵達だったが、その余裕は数分ももたなかった。

突如、帝国兵たちの軍勢の目の前で小規模の爆発が起こった。爆発は連鎖するように立て続けに起こり、段々と帝国兵達の方に近づいて来る。赤黒い土砂を撒き散らし、後には空いた穴から炎が噴出している。地面に何かが埋まっていたのだと気付き、帝国兵は向かってくる爆発から逃れようと慌てふためき、隊列が乱れる。

「う……ん？」

そして、帝国兵達の動きが段々ときこちなくなる。視界が急に霞みだし、朦朧とする者が現れる。

（しつかりせねば、ここは戦場だぞ）

しかし、意に反して身体は言う事を聞かない。煙を吸い込んでいくわけでもない。何故だろうかと、帝国兵達は困惑し、次いで敵兵が直ぐ近くにいることを思い出しては戦慄する。助けを求めようと周りを見渡すも、やはり同じように帝国兵達は武器を杖代わりにしてふらついている。せいぜいまともに動けそうなのは十人に一人か二人であった。喉を抑えて必死に呼吸をしている者もいる。ほどなくして、山登りに慣れている何人かが気付いた。火災で薄まった空気によって高山病が引き起こされたのではないかと、思い当たったのである。

「……くそ、奴ら。まさか毒でも撒いたのか」

当てずっぽうのラフォムの推論は、実のところかなり正解に近いものがあつた。伏兵の指揮をしていたキールは魔道兵達に命じ、そこかしこで油を含んだ布を燃やした。続いては、地面に埋められている油入りの樽に引火させ、ただでさえ薄い山岳地帯の酸素濃度を更に薄めていたのである。3000m級の山であれば海拔200m程の土地と比べ、酸素はおおよそ三分の二にまで減っている。そこに火災を起こしてただでさえ薄い酸素を更に減らしたのだ。

勿論、これはベールの兵としてそれなりにきついものがあつたが、彼らは高地での生活に順応しているため症状が浅く、身体も支障がないくらいには動いていた。対して、帝国兵はその大半が高山病の様相を呈し、動く事すらままならず、呼吸困難に陥る者が続出したのである。

満を持してベールの城門が開く。火の池と化している魚油の上に大量の消火砂が被せられ、鎮火する。霞む目を見開き、帝国兵達は何とか起き上がろうとする。そこにエルウ・ノブリスの指揮する軍勢が津波の様に押し寄せて来た。酸素の供給量が足りておらず、頭を強く締め付けられる様な痛み^に苦しむ帝国兵は、逃げる事すらままならぬ状況でベール軍の襲撃に晒された。

今までの恨みを晴らさんと、ベールの兵達は酸素不足による頭痛を振り切って、我先にと襲いかかった。但し、無駄に酸素を消費するな、という命が出たため、大声を発するような者は殆どいない。彼らは口を真一文字に閉じたまま、半ば無抵抗の帝国兵達に容赦なく、手に携えた武器を振り下ろし、突き立てる。肉でできた畑を耕すかのように。辺りの土壌はみるみる血で染まっていった。ベール兵の沈黙は、数多の雄叫びによるものとは異なる種類の恐怖を帝国兵達に呼び起こしていた。その動揺が、緊張感が、更なる過呼吸を誘い、益々苦しくなる。悪循環を断ち切る事は、もはや不可能であった。

「ま、まずい……」

まともな指示が出ないままに、帝国兵達は成す術なく斃^{たお}されていた。十分もすると、動ける者たちは南の第八軍との合流を目指して逃亡を始めていた。手薄になつた本隊にベール軍が殺到し、他の兵たちと同じように息を荒げていたローラント・ラフォムは少数の護衛達と共にベール兵達の目に晒^{さら}された。階級章を身に付けた憎き帝国将校を見て、血肉が湧き踊つたのか。ベールの者達^はついに沈黙を破り、明確な殺意を声に表した。

コロセ！　コロセ！

情緒と個性に欠ける言葉であつたが、その分相手には十二分に意

図が伝わったであろう。帝国兵達の顔色は蒼白になった。度重なる敗戦で万を超える死者を出していたベール兵達は、大勢の仲間の無念を晴らすべく手に握る武器に力を籠め、咆哮を上げて猛然と斬りかかった。

ローラント「ラフォムは剣の腕に関してそれなりに優れていた。しかし、心身の状態は著しく悪く、加えて敵兵に囲まれていた。それでも彼は何か打ち合った末、六人のベール兵を返り討ちにするものの、深く息をついた直後、背中を衝撃が襲った。

「……ぐ、ぐふっ」

上背のあるラフォムの全身の筋肉が硬直した。厚みのある背が反り返る。強制的に斜め上を向かされたラフォムは、そのままの姿勢で視線を落とす。己の血で濡れた槍の穂先が、眼下にあった。若いベール兵が背後から突き刺したものだ。荒い息遣いが耳に障った。口内にせり上がってきた血が唇の端から漏れる。彼はぎこちない動きで後ろを振り向こうとする。と、再び咆哮が前から聞こえた。振り向きかけた彼の視線だけがそちらに動く。目を大きく剥いた。三人のベール兵たちが右側から順に流れるように、刃を振り下ろすのが見えた。彼らの後ろには雄大な山々があった。

何故か、彼は振り下ろされる剣よりも、そちらの方に気を取られた。大山とその頂上にかかる霞かすみ。それがローラント「ラフォムの視界に映った、最後の景色であった。彼は剣撃を身に浴び、槍に支えられる形で、立ったまま絶命していた。

其の五十三 　　く皮肉なる結末（表）く

十四時三十分

ベール軍に僅か一時間足らずで壊滅に追い込まれた帝国第九軍であったが、逃げ延びた兵士たちは何とか第八軍と合流し、ハンディックに事の仔細を伝えていた。この時点ではラフォームが殺されたとはわからなかったため、ハンディックは南門に五千程の兵を残し、急遽^{きんきゆう}援軍へと向かった。ベール軍は北に布陣し、帝国軍は南から進軍することになる。風下であり、帝国軍に不利な状況であった。

一方、第九軍を殲滅せしめたノブリス達はキールの指揮する伏兵と合流し、兵を南側に向けて展開していた。風上の優位を十分に利用する気であった。それと同時に、キールは五個小隊に第九軍の死体から傷の目立たない鎧を外すように命じていた。

ほどなく、ベールの前衛軍は第八軍の騎馬隊が放つ土煙を目に捉える。その報告を受けて、キールが率いていた魔道部隊に命令を下す。既に第九軍をあつさり^{ほふ}と屠った実績もあり、兵達は先ほどにも増してキールの命に従順に、迅速に従った。

「手筈通り、展開しろ」

「はっ、詠唱始めいっ！」

キールの命を受けた伝令兵の言葉が全軍に隈なく伝わり、魔法使い達は次々に詠唱を開始する。そして

「シャ・フロース
『護氷つ』」

魔法の斉唱と共に前衛兵の前に氷の柱が地から現れる。端から順に流れるように連なってゆき、拒馬柵の形を成す。

「……………なっ」

突進を試みようとしていた帝国騎馬隊が、急に湧いて出た氷の柵を目に止め、慌てて馬の手綱を引く。

「……………撃ていっ」

間髪入れず、ノブリスを始めとする隊長格の指示により、ベールの弓兵達は立ち往生している帝国騎兵達に無数の矢を放つ。多少の距離はあったが強い追い風に乗り、矢は容易に帝国兵の身体に届いた。撃ち抜かれた帝国兵と馬とが折り重なるように、次々に倒れていく。

「ひ、退けっ。退けっ」

焦燥に駆られた騎兵隊の隊長が踵かかとを返すよう命じ、騎兵達は味方の数を減らしただけで、何の成果もなしに引き上げていく。

「……………やった」

安堵の溜息を吐くベール兵に、キールは舌打ちを辛うじて堪こえた。「まだ終わっていない。前衛、魔道兵たちはその位置で待機。手筈通りに地面を熱しておけ。騎兵隊は少し前に出て敵が見えた時点で接近を報告しろ。他の者たちは引き続き帝国兵から装備品を回収しろ。直ぐに、だ」

「……………は、はっ」

ベール兵達はキールの指示に従い、再び慌しく動き始める。

「……これが、戦争なのですな」

儂げな声が発せられ、周囲の兵達がそちらの方へ視線を転じる。聊か場にそぐわぬ台詞を口にしたのは、清潔そうな白い聖衣とフードを纏うアリア・イアニスであった。先月十六歳になったばかりの彼女は、ともすればこれが最後の戦いに成りかねぬ状況の中、療養中の父グルツセルに代わってベール軍に法王代行として同行することを申し出たのである。

アリアは毅然と振舞いながらも、その足は細かく震えていた。その視線は既に息絶えている多数の帝国兵達と、それよりずっと少数のベール兵達に向けられている。そこにあるのは無数の兵達の軀と、帝国兵の死体から鎧を剥ぎ取っているベール兵、そして様々な悲哀をその血毎飲み干した大地だった。彼女とて、このような生々しい光景を間近で見るのは初めての事だろうから無理からぬことであった。むしろ、それを目にして平然としていられるのが異常なのかも知れない。大勢の厳しい鎧を着た兵士達に混じり、血生臭い戦場に立つ彼女の姿は、まさしく一輪の白い花だ。言い換えれば、場にそぐわぬ、という意味でもある。

ノブリスが憂いを帯びたアリアの目を真っ直ぐに見て、穏やかに答える。

「そうです。テルネシア帝国軍はこれを大陸全域に亘って行っています。家財を奪い、女をかどわかし、赤子の首をも刎ねる。我々としてこの戦いに勝たねばベールの町の者達がそういった目に遭わされます。万が一にも、負けるわけにはいきません。……どのような手を使おうとも」

「……はい」

アリアは小さな桃色の唇をかみ締め、瞑目する。死んだ者に祈りを捧げているかのように。

それを見て、キールが口を開く。

「後悔していらっしやいますか？ アリア様」

「……後悔とは？」

アリアが顔を上げ、黒真珠のような輝きを放つ瞳をキールに向ける。キールは淡々と続ける。

「こんな光景を見せ付けられる羽目になって、ということですよ」

アリアは少しの間黙考し、答える。

「……半々です」

そう言つて、僅かに表情を緩めた。

「確かに、二度と見たくない光景には違いありません……。でも、私達を守るために戦い、死んでいった兵士達に目を背けることもしたくない。敵兵とて同じです。彼らにだってその身を案じる家族がいたでしょう。？無事に帰って来るように？と。その願いを断ち切つた罪から、逃げてはいけないのだと思います」

キールは軽くおどけて見せる。

「それにしたつて、帝国兵達が今まで各地で平然とやってきたことですよ。正に自業自得と言つやつです。そこまで考えてやる必要がありませんか？」

「……でも、それを考えなかったら、いつまで経つても争いが終わらないではありませんか？」

キールはニヤリと笑う。

「それを知ることが出来ただけでも、軍に加わつた価値はありましたね、アリア様。戦争がなくなることは、未来永劫ありません。人

の自我が強すぎる限りね」

「　　っ、そんなことはありませんっ。きっと何か道があるはずですよ。私は……人の慈悲の心を信じていますっ」

己の胸に手を当て、挑みかかるように語るアリアに対して、キールは直ぐにその笑みを消し、空に視線を移す。標高が高いせいだろうか、雲が殆どない。青より群青に近い、色濃い空がそこにある。ややあつて、キールはアリアの理想主義を打ち砕く言葉を口にする。

「理屈じゃないんですよ。貴方の言う……慈悲の心、でしたっけ。人が人を愛し、慈しむ。全く素晴らしいことです。でもね、その感情を抱くと同時に、憎しみの芽も出るんですよ。大切な者が傷付けられれば、その芽は遅かれ早かれ毒々しい色の花を咲かせる。聖人君子と名高い、貴方のお父上のように」

「……！」

痛烈な揶揄であった。アリアはキールの言を聞いて、ベール独立のきつかけとなった帝国との会見の件を思い出す。会見中に殺されたルフランは、父グルツセルの、幼少の頃からの側近だ。厳しくて、優しくて、頼り甲斐のある女性だった。様々な防御魔法の使い手でもあり、シスター長として皆に尊敬されていた。彼女を殺された直後の父は、鬼のような形相をしていた。歯を剥き出しにし、眉を吊り上げ、目を大きく見開き、泣いていた。

「法王様が会見を試みたと言うことは、相手が説得に応じてくれる可能性を僅かでも信じたからでしょう。でも、結果はご覧の通り。叶わぬ理想ほど残酷な物は、ない」

「……っ」

「他にも具体例を挙げましょうか。そうですね……例えば子供達の喧嘩。遊具を取り合ったり、玩具を取り合ったり、といったもので

す。貴方はそれをこの世からなくすことが出来ると思います?」

「……」

「ね、無理でしょ? そんな些細な^{いさか}争いですらなくせない。どんな行動においても順番が伴う。それが差別を生み、憎しみを生む。それが真理だ。争いを完全になくすには、人が人であることを忘れるしかない。もつとも、そんな捻くれた考え方をしてしまうのは俺がエルフだからかも知れませんが。ちなみに、アリア様はどう思われます?」

「わ、私は……」

キールの言に口を噤^{つぶ}み、俯くアリアを見て、ノブリスが慌てて口を挟む。

「ア、アリア様。彼は決して、貴方の考え方を否定しているわけではありません。崇高な理想を持つ貴方が危険を承知で戦場に立っているからこそ、それに奮い立たせられる兵達も大勢いるのです」

「……ノブリスさん」

それを聞いてキールが笑みを噛み殺す。あの堅物が随分と柔軟に対応するようになったものだ。

「ま、そういうことでも良いけど。さて、下らない論争はここまでにして仕上げに取り掛かりますか。明日も美味しいご飯を食べられるように、ね」

「何と言つざマだつ」

「ひつ」

先陣を切った騎兵二千が数だけを減らし、すごすご戻ってきたと聞き、ハンディックは怒りを露にした。普段は饒舌なその口上も、激しい怒りからかすっかり影を潜めている。金色の長い前髪で隠れている眉間には皺が幾重にも刻まれていることだろう。

「……全く。……この分ではラフォームも無事ではいまいな。ここま
で使えぬ奴だとは思ひもなかった。どうにかしなければ……」

ハンディックは親指の爪を噛み、或いは忌々しげに舌打ちをする。その様子を見て、周りの者は恐縮するばかりであった。下手な事を言おうものなら、どんな処断が下るかわからない。

そんな中、一人の中隊長が一步前に進み出た。エル・クレスの追撃戦で先陣を切ったゲシュターである。

「……恐れながらウランダー様。逃げてきた者達の報告によれば、
ベル軍の動きは以前と明らかに違うようです。一旦、マスチュア
に戻って体勢を整えた方が」

ゲシュター中隊長の進言に、ハンディックは罵声を以って断じた。
「馬鹿が！　このまま何の成果も上げられず、マスチュアに

戻る様なことがあつてみるつ。ブラージウス様がどれほどお怒りに
なられるかわからんぞ。それくらいのこととも想像出来ぬのか、この
無能が！」

「……は」

部下の忠言に対してのこの態度が、彼の人徳の無さを如実に表し
ていた。ブラームスの策に乗っかり、エル・クレスの追撃で箔はくを付
けて准将になつた彼であつたが、結局のところ箔は箔。剥がれてし
まえば肩書き程の器はないのである。

部下達が非難めいた視線を向け始めたことに気付いているのかい
ないのか、ハンディックは二の句を継いだ。

「退却する必要はない。まだこちらの兵は逃げてきたラフォムの兵
と合わせて二万以上ある。一人一殺いちごんいつきつすればそれだけで勝ちだ。ベー
ルの兵はあくまで素人が殆ど。兵の質は訓練しているこちらが上だ。
臆するなっ」

ハンディックの指示に周りの者は渋々といった感じで従う。程な
く命令が行き届き、第八軍は北上を始めた。

十五時二十分

暫くの間、第八軍が北へ進むと、先鋒軍の兵達が敵騎兵を視界に
捉えた。こちらの接近を確認すると、敵騎兵はすぐさま引き返して
いった。

どうやら、そう遠くない位置で展開しているようだ。大方の兵士
達のその予想通り、それから五分後、ベール軍が布陣を敷いている
所に出くわす。第八軍の隊長達は、逃走してきた第九軍の兵士達か
ら、敵方が恐ろしい策略を行使したことを聞かされているため、そ
う簡単に近づこうとはしない。矢が届かない位置を保持し、接近の
タイミングを窺うかがう。しかし

「……ん？」

先頭の方にいた帝国兵達が、ベール軍の前衛に展開している兵達
を見て驚嘆する。

「……あ、あの鎧は、我が軍の？」

ベール軍の前面に展開していたのは帝国兵の鎧を身に付けた兵達

であった。その数はせいぜい200足らずであったが、それでも帝国軍には動揺を与えた。少なくとも、今あちら側にいる兵達は敵なのだろうが、先ほど第九軍から逃げ延びてきた者達の中に、敵がないかを勘繰ったのである。

考える暇を与えぬかのように、再びベール軍が動いた。先ほどまで炎魔法で熱していた地面に、今度は水魔法を放ったのである。水は熱された地面で一気に蒸発し、温かい水蒸気に変わる。それが北風の運んでくる冷たい空気と混ざって白い霧を発生させた。風は南へと流れているため、瞬く間に帝国軍の周りは濃霧に覆われた。

この辺り、キールの意地悪さが良く表れている。同士討ちを狙うならば、わざわざ前面で帝国軍の鎧を着た兵達を見せ付ける必要はない。それをわざわざ教えてやったのだ。案の定、帝国軍は相手側がこちらの同士討ちを狙っていると気付き、続いては何のためか自分達に教えたのだ、と迷うことになる。狙い通り、指揮官の迷いは団体行動を著しく阻害した。その隙を見逃さなかった。

ベール軍は先ほどの位置より若干距離を詰め、再び氷魔法で拒馬柵を展開しつつ、遠距離攻撃を仕掛ける。霧の中で次々と周りの仲間が倒れていくのを見て、混乱した帝国兵達は相手の攻撃と、同士討ちと、両方の可能性を考えた。畳みかけるように、魔法で拡声された声が戦場に響き渡った。

「仲間が帝国鎧を着た奴に斬られたっ。気をつけろっ、ベールの兵が紛れ込んでいるぞっ」

それに引き続いてこんな声も。

「今の声はベールの謀略だっ。同士討ちはならん、絶対に黒い鎧は味方だっ」

これでは帝国兵達もどちらを信じて良いものかわからなくなる。益々混乱に拍車がかかってくる。よくよく考えれば、魔法で拡声されているのだから双方共ベール軍から発せられた可能性が高いのだが、混乱の中で指揮官達がそれに気付いてくれる可能性はかなり低い。指揮系統が乱れる最中、我を忘れて突出する者も出始めるが、進行方向からは鉄の矢が絶え間なく飛んでくる。それを掻い潜つたとして、濃い霧の中では白氷の拒馬柵に気付き難く、敵の方へ走っていたら、いつの間にか氷が腹に刺さっている。応射しても向かい風であり、殆どの矢は失速して敵に届かない。魔法使いはそもそも初めから人数が少なく、しかもバリスタによつて更に数を減らされたは、その抵抗も局所的なものに留まる。左を見ても右を見ても燦々たる有様であった。混乱を沈めるには一時退却という選択肢以外になかったのだ。

しかし、帝国兵達にとつて運の悪いことに現在の軍の最高責任者はハンディック・ウランダーである。彼は少し前に、？退却は無い？と口走っていた。一度下した命令を覆せば、彼の面子が粉々に砕け散るのだ。概して、大貴族であればあるほど面子は殊更に重んじられる。ウランダー家はテルネシア屈指の名門貴族であった。それでも命と秤にかければ答えは直ぐに出そうなものだが、その案は中隊長のゲシュターから一度出されている。そして、ハンディックは他の兵達の前でゲシュターに罵声を浴びせた上で進言を退けてしまっている。このまま戻れば彼の案を取らなかつた責任を追及され、ブライジウスの激しい怒りを買うのは間違いない。准将職を追われるのは仕方ないとして、下手をすれば厳罰に処されるかも知れない。

まことにせせこましい考えではあるのだが、事実として、彼の脳裏は葛藤で埋め尽くされていた。そして、今の自分の地位を確実に守るためにはベールを撃ち破るしか方法がなかった。兵達の命を無

駄にしないという、将において基本的且つ不可欠な気概きがいが欠落していた。そのことが、彼の運命を予期せぬ方角へと導いた。

「よ、よし。全軍突撃を命じろっ」

「えっ」

「えっ」

「えっ？」

無論、周りの兵達は己の耳を疑った。

何が？よし？だ、この野郎。劣勢は誰の目から見ても明らかではないか。現状での一斉突撃は余りにも無謀だろ。それくらい、多少の分別がある子供にだってわかる。空気が読めぬにも程があるではないか。

彼らの心情を語るとするならばこのような所であっただらう。それは正に、助かるか判らぬ高さの崖から飛び降りろ、というに等しい言葉であった。仮に勝てたとして大損害を被こうむることになる。彼はこの場に留まっているだろうから無事で済むだろうが、戦う兵達はその大半が死、或いは再起不能に見舞われる。

即座に中隊長のゲシュターが上官を諫いさめようとする。

「お、お待ちくださいウランダー様。いくらなんでもそれは

」

「黙れっ。将である私に口答えする気かっ。そもそも貴様がエル・クレスで決着をつけておればこんなことにはならなかったのだっ」

以前の失態を持ち出したハンディックに、しかしゲシュターは怯

「……い、いらないのは貴方の方だ。貴方に……兵を率いる資格はないっ」

ハンディックは土を握り締め、槍の柄を握っている護衛兵を睨む。
「……き、きさ……ま」

槍が腹から抜かれた。ハンディックの腹からドフツと血が溢れ出てくる。彼は周りの兵達に虚ろな目を向けた。裏切り者に対して剣を抜く事も、自分に肩を貸す事もしない。誰一人として。彼は、それにようやく気付く。

「……ウランダル准将は、帝国軍に扮したベール兵によって腹を刺し貫かれた。そうですな」

「……お、お前達」

ゲシュターは唾然として護衛兵達を見回した。彼らはゲシュターを囲んだのではなく、その後ろにいたハンディックを囲んでいたのである。

「貴様……ら、裏切り……者め」

ハンディックは両手で腹を抑え、苦悶の表情をしながら唸った。それに対し、周りの兵達は溜息を吐き、地に這い蹲るハンディックを、憐みを込めて見下ろした。

「我々の、ゲシュター殿の信頼を先に裏切ったのは貴方だ。そうではありませんか？」

「部下の命より己の面子を重んじる将に、身を預けられるわけがないだろう」

果たしてその声は届いているのか、いないのか。ハンディックはぶるぶると全身を震わせている。大量失血によってショック症状が引き起こされていた。

「さ、寒い……。目が……霞む……。い、医者を……」

「……楽しんで差し上げましょう」

そう言い、傍らにいた背の低い護衛兵が剣を抜く。倒れているハンディックに一步一步、ゆっくりと歩み寄る。ザツザツと、具足が地面を擦る音が響く。横たわるハンディックの視界の半分は、黒い具足が割り込む。ハンディックは唇をわなわなと震わせ、目だけを上に向ける。霧の中で、鈍い光を放つ剣だけがやたらと鮮明に見えた。

「……」

「……や、やめ……助」

ザシュ

時が止まる。

振り下ろされた剣がハンディックの首に食い込み、その刃の先端が堅い地面に到達し、チンツと吃音を奏でる。頭部が胸部と寸断され、真っ二つに割られた西瓜の半身はんみのように、ゴロリと転がる。一瞬遅れて、切断面から真っ赤な血が迸はじった。流れ出る血液は段々と広がってゆき、土壌を鮮やかに染め上げていった。今朝にはおそろく誰も想像すらしなかった指揮官の死に様であった。

間が空いて、やっとゲシユターが転がった上官の頭に右手の平を横に向け、歯を食いしばって瞑目する。祈りを捧げている彼を見て、周りの兵達は半ば呆れ、半ば感心した。ハンディックはつい先ほど、

ゲシュターを殺せとその口で命じたのである。その彼に祈りを捧げるとは、聊か戸惑いも覚えようというものであった。

「……ウランダー様は不運にも横死なされた。そして、今の第八軍の最高責任者は中隊長で中佐の貴方だ。ゲシュター殿」

血に濡れた刀を捨てた護衛兵が声をかけた。ゲシュターはその言葉に含まれている意味を理解していた。こうしている間にも兵達の悲鳴が、苦悶の叫びが聞こえてくる。これ以上の無駄な死を防ぐには、新たな指揮官の言葉が必要なのだ。掛ける言葉が一秒遅れれば一人が命を落とすことになるだろう。

彼は膝に手を突いて、ゆっくりと立ち上がる。大きく息を吸って、やっと目を開く。

「……これが正しいこととは思わぬ。が、さりとて間違っているとも思えぬ。……ウランダー様に落ち度が多分にあつたのは事実。……戦場の習いだ、致し方あるまい。全軍に命令を。マスチュアに帰還する」

『はっ』

護衛兵はゲシュターに最敬礼した。

それから程なくして、帝国の部隊全体に全軍退却が伝えられる。帝国兵達は隊列を組み直す事もなく、バラバラに散開しつつ敗走する。周りの兵達が逃げる傍ら、馬上のゲシュターは霧を抜けたところで馬の脚を止めた。ゆっくりと振り返り、ベールの町を臨む。

(将を殺さざるを得なくなるまで追い詰められるとは。……敵ながら鮮やかな手際だった)

称賛の言葉を心中に落とし、ゲシュターは再び南西の方角へと、生き残った帝国兵を率いて退却を始めた。或いはベール軍が追撃を

仕掛けてくるかと予想していたが、幸いにも追って来る事はなかった。

帝国軍が三万五千の兵を以って行われたベールへの遠征。ベール軍に残っていた兵力は一万余り。しかしながらその一万の兵は、どんなに勝ち目が薄くても、上層部に逃亡する者が続出しても、尚信仰を忘れず、何より仲間を見捨てられなかった者達である。その結束が高かったのは言うまでもない。彼らは最後まで勝利を諦めず、キールが前日に打ち明けた策を理解しようと努め、果敢なく実行した。キールの策がこの戦争における柱であったことは相違ないが、その柱を倒れぬように支えたのは心根強き彼らである。

この戦争に置ける死者は、帝国側一万七千余。それに対し、ベール側は負傷者こそ多かったものの死者は千に満たぬ数であった。背水の陣で臨んだベール軍は、帝国軍に対して会心の勝利を^もぎ取ったのである。

其の五十四　　（終局へ向けて（表））

帝国軍がベールを相手に敗北を喫した知らせは、各地に点在するイアニス教徒達を、そして反帝国勢力の者達を大いに勇気付けた。マリスノリスにて第八軍及び第九軍敗北の知らせを聞き、ブラージウスは一つ大きく、溜息を吐き出した。その心の裡で並々ならぬ失望感があったことは否めないだろう。ハンディック・ウランダーとローラント・ラフォムの死を耳にしても、眉一つ動かす事はなかった。報告を終えた文官に彼は沈黙し、ややあつて第一声を放つ。

「彼の者らの所領を全て没収せよ」

東西戦争を除いて、今まで常勝不敗を誇っていた帝国軍に土が付いたのは初めてだった。マリスノリスの件は戦争というには規模が小さいし、グリユーンについては少なからず被害があったものの、目的は達していたため引き分けという見方が大半。だが、今回の件に関してそうはいかない。意気揚々と進軍した兵が半数近くにまで減らされ、指揮官の准将が二人共殺された。誰がどう鼻屑目に見ても大敗北である。これを引き分けと断じれば余程の恥知らずだと後ろ指を指されることになるだろう。敗北を認めた上で、ブラージウスは二将の後始末を命じた。所領の没収、財産の差し押さえ、そして責任所在の追及。敵の策に嵌り、返り討ちにされた二将を徹底的に見せしめにする心積もりであった。死んだなら死んだで、役に立って貰わなければならぬ。敗軍の将となった者とその家族の運命を、帝国内の者に知らしめてやろう。そのような考えに至ったのである。名門であったウランダー家は階級を相当に落とされた。ハンディックの父、ミリック・ウランダーは愛息子の死と共にダブルパンチを食らい、その心労によって処分通知から僅か一年足らずで狂死することになる。それよりも悲惨だったのがラフォム家だ。彼の

家はお家御取り潰しとなった。家族達は死罪や流刑こそ免れたものの、貴族としての位を失い、平民となったのである。

十二月二十五日

文官が置いていった戦後報告書の閲覧を終えたブラージウスは、苦々しげに机に書類を放り投げた。乱れた紙の束がバサツと危なげに乗った。彼がここまで感情を露にすることは滅多にない。イヴァンスは興味深げに皇帝を観察していた。向日葵ひまわりの種が幾つあるか数えているかのように、まじまじと。

「……ベールめ。相当に厄介な知恵者を味方に付けたようだな」
相手に対する褒め言葉にも聞こえる言を、ブラージウスは忌々しげに口にする。たとえ軍を率いるのが愚将であろうと、三万五千の数を一万で破る事は困難だ。数は列記とした力だ。今までテルネシアは圧倒的な物量を以って敵勢力を制圧してきたが、今回それが通じない相手もいることが証明されてしまった。

イヴァンスは遠慮がちに見えるようにと気を払いつつ、口を開く。
「どうします？ 僕かヘッドリイさんが潰してきましょうか？」
「……いや、当面はシャンテールを落とすのが先だ。アテライデが反旗を翻した今、どうあっても奴等の勢いを挫くじかねばならぬ」
「じゃあ、ベール軍には誰を？ ミレン將軍ですか？ それともベルガモット將軍？」

「……軍は送らぬ。だが、手を打っておく必要はある」

「ええと」

イヴァンスの戸惑いを無視し、ブラージウスは傍らにあった平たい小箱を開ける。中には高級葉巻が入っていた。彼はそれを一本、無造作に取りだした。これも相当に珍しいことであった。彼がそれを吸うのは、せいぜい二月に一回あるかないかのことだ。イヴァンスはそれを見るや否や、素早く窓の手すりから降り、スススと前に進み出て指先に炎を灯す。

「どうぞ」

「うむ」

ブラージウスは、さも自然なことであるかのように、人差し指と中指の間に葉巻を挟み、イヴァンスの灯した火を使う。骨の髄から支配者の彼であった。

「トリニティ・ワンだけを十名送り込む。但し、イヴァンスとヘッドリイはここに残す。年が明けたらシャンテールを攻め落とさねばならぬからな」

それを聞いてイヴァンスは眉を上げた。

「ええっ？ 流石にそれだけじゃ勝つのは厳し」

「勝つ必要はない。ただ、身柄を押さえるだけだ。東の連中さえ片付ければ後でどうとでもなる」

「押さえる……。……。ああ、そういう手ですか。で、生死は問いません？」

イヴァンスの言を聞いて、それが正しい事を察したのだろう。ブラージウスは続ける。

「……一応生かしておけ。幾らでも利用価値があるからな。だが、無傷である必要もない」

「りょうかい。直ぐ準備してきます」

全く、手痛い敗北を喰った直後だって言うのにタフだなあ。イヴ

アンスはブラージュウスの精神的な弾力に感心しつつ、部屋を後にするのだった。

「あうー」

「そうらっ、高い高いっ」

ジルバートはリビングにて我が子を天井に付かんばかりに持ち上げる。

「きゃっきゃっ」

小さい手を上下に振って笑う息子のエミリオを見て、ジルバートが顔を綻ばせる。

ジルバートとミレンは育児休暇を取ってクルートの実家に戻っていた。出産の時に顔を見て以来であるから、もう半年以上にもなる産湯を浴びていた小さな命が、今やここまで大きくなっていることにジルバートは感心し、また嬉しくも思っていた。

「はははっ、エミルは高いところが好きみたいだなあ。そら、もう一度」

「……ジル？」

「うぐっ」

持ち上げかけた所でピタリと固まる。ジルバートが咄嗟に振り向くと、グレイスがリビングの入り口からじと目でその様子を見ていた。

「ジル……。私言わなかったかしら。？その年頃の子はまだ脳味噌が柔らかいから揺すっちゃいけません？って、私言わなかったかしら」

その物腰は相も変わらず穏やかだが、目が全然笑っていない。何より大切な事だが二度言った。ジルバートは頭を縦に数回振った。勿論、手に持っているエミリオを揺らさぬように腕を突っ張ったまま。

「じゃあ とつとと下ろしなさいっ」

「は、はっ」

まるで上官に対するような返事をして、ジルバートは慌ててエミリオを揺り籠に戻す。エミリオは突然下ろされた事にキョトンとしていたが、母が正面に顔を出すと再び手を伸ばし、笑顔を浮かべる。

「もう、駄目パパですねー」

グレイスに駄目パパ呼ばわりされたジルバートはがっくりと肩を落とす。

「あうー、うー」

息子の意味を成さない返事が脳内のフィルターを通して肯定の言葉に変換されたような気がしては、更に落ち込む。グレイスはチャリとジルバートの様子を窺い、ほくそ笑む。まるで捨てられたばかりの子犬だ。尻尾まで垂れ下がっている。文武両道の比類なき将、ジルバート＝ミレンが、家ではこんなにも情けない姿をしているとは、誰も夢にも思っまい。

「……次からは気を付けますか？」

「あ、ああ。勿論だ」

「宜しい。なら、誓約の証としてミルクを作って来て貰おうかしら？ エミル、少しお腹がすいているみたいだから」

「ああ、わかったっ。待ってるっ、直ぐ戻って来るからなっ」

汚名返上の機会を与えられ、ジルバートはやたらと張り切っていた。

いちいち大袈裟なのよね。ジルって。まあ、そこが面白くもあるのだけれど。

「ええ、お願いね」

ジルバートが部屋を出て行って暫くすると、彼が台所で悪戦苦闘する音が部屋まで聞こえてきた。

ピユイイイー

あ、お湯沸かしてるのね、よしよし。

ガシャンツ、ガシャンツ

……何の音？ ああ、哺乳瓶を探しているのかしら。ちょっと煩うるさいけど。というか手際が悪くてよ、ジル。普通、食器は料理の前に準備しておくものよ。

ダツダツダツダツ

……ジル？ ちょっと、ジル？ いくらなんでも早

バタンツ

「出来たぞっ」

「嘘おっしやいつ」

絶対冷ましてないわ、これ。当分の間、駄目パパの称号は返上できそつもないわ。

ジルバートが銀のトレイに湯気立つ熱々の哺乳瓶を乗せてきたのを見て、グレイスはやれやれと溜息を付いた。

結局氷水の器を用意し、それに投じてミルクを冷まし終わり、グレイスはエミリオを抱いたまま、彼にガラスの哺乳瓶を啜えさせる。エミリオは小さな拳を握りしめ、ゴキユ、ゴキユと、音を立てて飲んでる。クセ毛のまだ薄くて細い金髪が小さな額の上でくるりと六の字を作っている。

ややあって、エミリオがミルクを飲みながらもウトウトし始める。もう今にも寝そうだが、それでも喉を鳴らしている。グレイスは十秒ほど待って、哺乳瓶を彼の口から離れた。そうしてから柔らかいガーゼでエミリオの口をそっと拭う。

「ジル。これ持っていてくださる？」

「あ、ああ」

ジルバートが哺乳瓶を預かると、グレイスはトントンとエミリオの背中を優しく叩き始めた。十秒ほどすると、大きなゲップが出た。それを終えると、グレイスは囁くような声で子守唄を唄いながら、ゆっくりと左右に揺らす。

ほどなくして首がかくと落ち、エミリオが寝息を立て始めた。月並だが、ジルバートはそれが天使の寝顔に思えた。

我が家の皇子様を柵付きのベビーベッドに横たえたジルバートとグレイスは、それを眺めるようにしてソファアに並んで座っていた。

「……日に日に成長していくなあ。もうそろそろ、パパとか呼んでくれるようになるだろうか」

「流石に気が早いわ、ジル。後半年くらいは見ておいた方が良いでしょう」

お互いに微笑みを交わし、束の間、沈黙が訪れる。ジルバートは身体を起こし、膝の上で手を組む。

「ベールでの大敗の件は、知っているかい？」
「ええ。ある程度は……」

帝国軍初の敗北。その波紋は思いの外大きかった。それ以上に、ブラージウスが下した嚴罰に関しては更なる衝撃を与えていた。帝国内では今暫くの間、その話題で持ちきりとなるだろう。

「将軍が二名殺されたわけだからね。軍の方も何かと慌しくなっている。当分、休暇は取れなくなるだろう」

「……エル・クレスに戻るの？ まさか、今度は貴方がベールと？」
グレイスは不安に駆り立てられたのか、ジルバートをくいるように見つめる。

「いや、ベールに関してはブラージウス様が何かしらの手を打つと仰っていた」

「……それなら」

「私とベルガモット将軍は、揃ってネルガルに赴くことになった。エル・クレスにはシュヴァイ・オルトフが赴任する」

グレイスは少しだけ胸を撫で下ろした。

「ネルガルへ？ じゃあ、ついにシャンテールとの決戦が始まるのね」

「ああ。アテライデが裏切った以上、憂慮している時間はないと思う。彼らには資金が潤沢にあるから、時間をかければかけるほど兵が多く集まってしまう。今なら勝算も高いからね」

「……もしかしたらフロイデ様も、東に助力しているんじゃないかしら」

ジルバートは重々しく頷く。

「……バイロン暗殺の件があるから、その可能性も低くないだろう。大方、アテライデの有力者に助力を頼まれたのだと私は見ているがね。出来れば一度面と向かって話し合いたかったけれど、今となつてはその機会もあるまい」

「……彼が相手でも勝てる？」

「少なくとも、この総力戦は勝たなければならないね。万が一負けようものなら、戦況が一気に引っくり返ってしまう。抑えられていた反帝国運動も紛糾するだろう」

「……」

シャンテールとの一戦を控え、ジルバートは並々ならぬ覚悟で臨むようであった。だが、それは東諸国とて同じことであろう。これで帝国に敗北すれば、ほぼ万策尽きてしまうのだ。決死の覚悟で臨んでくるに違いない。

グレイスが俯き気味になったのを見て、ジルバートは心配させまいと笑みを浮かべる。

「大丈夫だ。アステイスは私の事を良く知っているが、それはお互い様だ。私が彼より上だとは思っていないが、さりとて下とも思っていない。そして、兵力は圧倒的にこちらが優位だ」

「ええ……」

「シャンテールを落とせば、後はグリトリ、そしてアテライデだけだ。戦争が終わる日は、直ぐそこまで来ている」

グレイスはキュツと下唇を噛み、ジルバートを上目遣いで窺う。

「……ジル、油断しないで。負けてもいい、必ず無事に帰って来て」「ははは、心配性だな。エル・クレスの時にも同じような事を言われた気がするが」

「ジル、戦場に赴くのよ。心配し過ぎることはないわ。たとえ帝国に大勝をもたらそうと貴方が流れ矢に運悪く当たって死んでしまつたら終わり。戦争に勝つても人生に負けたら何にもならないの。覚えておいて」

「……手厳しい言葉だな。だが、わかった。肝に銘じておく。君とエミリオのためにも、死にはしないよ」

そう言い、ジルバートはグレイスの肩を無造作に引き寄せる。しかし、彼女は彼の肩に両腕を突っ張った。

「……ちょっと、此処では駄目よ。エミルが起きてしまっわ。ズツドで、ね?」

諭す様にそう言い、自分の唇を指で撫でるグレイスに、はたとジルバートは苦笑いするのだった。

其の五十五　　シヤンテール会戦（表）

年明けて885年1月18日。帝国軍はマリスノリスよりブラー
ジウス、ブラームスが十二万、ネルガルよりジルバート、ベルガモ
ットが三万の軍勢を率いてシヤンテールに侵攻を開始する。

昨年冬、ベール軍が帝国軍を撃退した事を受け、反帝国運動を活
発化させた東部各国のイアニス教徒達はミードにて義勇軍を結成。
国軍と合わせて二万にも膨れ上がり、シヤンテールに援軍として馳
せ参じる。また、シヤンテール及びグリトリーは昨年暮れ、アテ
ライデの援助を受ける事を受諾。後方の憂いがなくなったグリトリ
ーの領主、イヴァールIIテレジアは五万の兵を率いてシヤンテール
に向かう。シヤンテールの領主、ヨーゼフIIヘンケルも新たに徴兵
を行い、三万の兵を参集。これまででも最大規模となる十萬の兵を
以って帝国軍に相對する。

885年2月4日、午後十六時半。帝国軍十五万、同盟軍十萬。
テレジア戦役でも激戦として名高い？シヤンテール会戦？は夕暮れ
時より始まる。ネルガルから送られた援軍と合流した帝国軍はシャ
ンテールの西門を魔道部隊による冥騎士（ディ・ケウス）によつて破壊。それが会戦
の合図となつた。

敵の召喚攻撃にも怯む事無く、民衆を既に退去させていたシヤン
テール軍は地の利を活かし、間断なく兵を配置。少数の兵を囷にし、
街中に誘き寄せた帝国兵達に対して包圍戦を展開。町を火の海にす
る事も厭いとわず、帝国軍に対して各所で火計を仕掛ける。序盤戦では
誘いこまれた帝国兵たちが火達磨になつて路地から逃げてくる光景
がそこかしこで見られた。至る所からもうもうと黒煙が上がり、煤
けた空気が城下町を覆い尽くしていく。

何年にも亘つて兵を育ててきたヨーゼフIIヘンケルは、三重トリニティ・ワンの頂
に勝るとまでは言わぬともその実力に近い少数精銳部隊を統率して

いた。彼らは防壁を突破して暗殺を狙う三重の頂を相手に善戦した。トリエイ・ワシ決死の覚悟で戦う同盟軍は、数で勝る帝国軍に対し、五日間に亘ってほぼ互角の戦いを演じたのである。

膠着状態に陥つたと見るや否や、ジルバートⅡミレン將軍はブラージウスに奇策を立案し、ブラージウスはそれを即座に了承する。何と帝国軍は、シャンテールから兵を引き、放置してグリトリーへ向かう構えを見せたのである。グリトリーには兵は五千ほどしか残っており、しかもシャンテールの民も多数避難している状況であった。

慌てた同盟軍は直ぐにシャンテールを出て追撃を開始する。平原に誘い出された同盟軍は反転して待ちかまえていた帝国軍と再び接触した。数に勝る帝国軍を相手に同盟軍は良く戦ったが、それでもじりじりと押されていく。やや有利な展開となつたところで、ブラージウスは満を持して三重の頂最強の二人、イヴァンスとヘッドリイを前線に投入した。その途端、戦況は一変する。極限にまで張り詰めていた糸はあっさり断ち切れ、同盟軍の陣形は一気に綻びていった。彼らの投入から僅か一時間ほどで、同盟軍は潰走しかねぬ状況に陥つていたのである。

最早終わりと思われたその窮地を救つたのは、グリトリーを経て駆け付けたアテライデからの援軍であった。経通の理事達はアテライデや東部各国に点在する各ギルドの傭兵達を雇い入れ、二万の軍を編成し、シャンテールへの後詰を向かわせていた。兵を率いていたのは経通の理事の一人、タクローⅡヒツキである。彼は槍が並んだかのような陣形を用い、殲滅を狙って包圍網を作り、薄くなつてきた帝国軍の背後を闇に乗じて突いた。それによって血路が開かれた。イヴァールⅡテレジアとヨーゼフⅡヘンケルは息を吹き返した兵士達を取り纏め、辛くもグリトリーに退却した。

だが、敗戦の代償は余りに大きかった。同盟軍の兵士は半数に近い四万人が還らぬ者となつた。ヨーゼフⅡヘンケルは三重の頂の一

人によって片目を奪われ、彼の率いていた精鋭部隊の者たちもヘツドリュイとイヴァンスによってその殆どが始末された。

シャンテールの城下町と城は城壁を残してその八割が焼け野原と化した。それはヨーゼフ・ヘンケルが万が一に備えて用意した大量の油によるものだった。もし敗戦した場合、帝国軍に拠点を与えるわけにはいかないと、自分達の町を焦土として一矢報いたのである。この火災による帝国兵の死者は四千を超えた。

戦争終結時には、帝国軍の死者も合わせて三万近くに上っていた。しかし、未だ帝国軍は十万を超す数を有しており、同盟軍の象徴的存在だったシャンテールの領土をも奪い取っている。先のベール軍の大敗北を帳消しにして余りある戦果であった。同盟軍の敗残兵はグリトリーに落ち延びるも、町の中には避難民が溢れ返っているため、籠城戦はほぼ不可能の状況となっていた。この一戦によって、全てが決したかのように思われていた。

885年 2月23日

アテライデからの援軍によって辛くも？シャンテール会戦？を生き延びた兵士達は、イヴァール・テレジアの治める町、グリトリーに辿り着く。ほどなくしてグリトリーの軍施設を全て開放する令が下り、同盟軍とアテライデ軍に所属する全兵を城下町の中に何とか収容し終えた。

余裕のあった兵士や町の者達は、傷病者の手当てに奔走していた。そして、世紀の一戦から帰らなかつた者の家族達は、縋り付く遺体もないままに、ただ茫然自失としていた。戦争終盤には退却戦の様相を呈していたために、遺体を回収する余裕すらなかつたのだ。

グリトリー城の一室を借りていたタクロー「ヒツキは、深刻そうな表情をして俯いていた。痛々しい眼帯を付けて戻ってきたヨーゼフ「ヘンケルの気配に気付き、椅子に座っていたヒツキは顔を上げる。

「待たせた、ヒツキ殿」

「……大丈夫かい。目の方は」

潰れたのはわかってはいるのだが、ヒツキはそう訊かずにはいられなかった。

「ああ、たいしたことはない。死んでいった兵達の事を思えば、ただが片目を失ったくらいで泣き言など言えぬ。それより、よくぞ駆けつけてくださった。あの挟撃がなければ、我々は全滅を免れなかっただろう」

深々と頭を下げるヘンケルに、ヒツキは軽く手を振った。

「いんや、それこそたいしたことはねえよ。もうちょい早く到着してりゃ、被害はもっと抑えられたんだから」

「……正直、拙者はアテライデを心から信じ切れてはいなかった。我々だけでも何とかしてみせると息巻いていた。その結果がこれだ。皆に申し合わせる顔がない」

「あんまり自分を責めなさんな。何より、まだ負けたわけじゃねえ。反省しているなら、それを次に活かすだけだ」

「……うむ」

「しつつかし、帝国軍も数ばかりじゃないな。まさか城の前を素通りするとはなあ」

「……おそらくはミレン將軍の策であろう。やられるまで気付かぬとは、聊か迂闊うかつであった。あまつさえ連中がシャンテールさえ落とせば勝ちだ、と声高々に言っていたのを鵜呑みにしてしまうとは」「一見すると気付きにくい策ではある。それをあっさりやっちまうのが名将たる由縁ってやつか」

「そうだな、それに」

「ん？」

「戦争終盤で相見えた、あの二つの猛威には何も出来なかった。よもや人間を素手であっさりと引き千切るような化け物がいるとは」「もしかして亜人か？」

「一人は、な。今まで見た事もないような灰色の皮膚をもつ、角の生えた大男だった。巨体にして有り得ぬ程のスピード。何よりその頑強さ。剣も矢もまともに通さぬなど……この目で見なければ到底信じられぬ光景だった」

やっぱり充填ファイル使いだなあ。ヒヅキは指先で頬を搔いた。

「今一人は、やたらとよく笑う銀髪の若い男だ。大男に勝るとも劣らぬスピードで魔法と剣とを駆使して戦場を走り回っていた。私の目を奪ったのもその男だ」

「三重トリニティ・フンの頂だな。それもトップクラスの」

「おそらくは、な。仮にもう一度戦ったとして、あの二人を倒す方法が果たしてあるのか……」

立ったまま考え込むヘンケルに、ヒヅキはテーブルに置いてあった籠から蜜柑を一つ掴み取り、放り投げた。

「……うおっ」

疲労と、慣れてない片目の視界が邪魔したのか、ヘンケルはそれを取り損ねる。

「とりあえず座ったらどうだ。長時間戦って疲れてんだろ。今のも受け取れないようじゃとても戦えないぜ。休む時に休む、戦士の基本だろ」

「……う、む。……その通りだな」

ヘンケルは苦笑いし、蜜柑を拾い直すとテーブルに付いた。

疲れた顔をしている。ヒヅキは思った。まだ老境には至っていないが、眉間に皺が刻まれている。冬場だと言うのに汗を大量にかい

たのか、顔は土気色に変色している。一週間近くの間気を張り、軍を指揮していたわけだから無理もないだろう。髭は治療前の湯浴みの時か、それとも自分と対面するからか、きちんと剃られている。

「あんだ、充填ファイールって知っているか？」

おもむろにヒツキが口を開くと、ヘンケルは眉を上げた。

「充填ファイール……。亜人達の闘法と耳にしているが」

「まあ、概ね正しい。俺の護衛をやっているルガールが何遍か三重トリニテの頂イ・ワンとやり合っているんだが、奴が言うには三重トリニテの頂イ・ワンはほぼ全員、それを身に付けているようだ」

「……その、充填ファイールという闘法を、か？」

「ああ。充填ファイールは簡単に言えば、身体能力を底上げする魔法みたいなもんだ。優れた戦士、或いは魔法使いなら誰でも習得出来る可能性がある。身体を鉄の様に硬くしたり、有り得ないほどの馬鹿力を発揮したり、野生動物に近い跳躍力でジャンプしたり出来る。他にも色々使い道はあるぜ。例えば」

ヒツキは手を翳し、ヘンケルの目の前で右手の人差し指と中指をくっ付ける。少しして、半透明の波紋のようなものが発せられる。

「？」

「こんな風に さっ」

唐突に、ヒツキが指を振るった。ヘンケルは頬にはためく風を感じ、続いてヒツキの視線の方角に気付いて後ろを振り向く。すると、ヘンケルの斜め後ろ、5mほど離れた窓際に置いてある観葉植物の葉が枝ごと外れ、青い絨毯に落下した。

「……これはっ」

「充填ファイールを使っていると、身体が魔力を帯びている状態になる。達人級になると拳や剣を凄まじい速度で振るう際にその一部を圧力とし

て乗せることが出来んのよ。勿論、ここまでやるには膨大な時間が必要だ。完全習得に近い状態じゃないとできない。そして重要な点があるんだが、充填フイールはずっと持続させられるわけじゃない。使っている間は一気に疲労が溜まっていくし、効力が切れたら動く事すらままならなくなる。時間制限があるんだ。あんたの言っていた二人とて同じはずだ」

「……っ。それで帝国も、戦争終盤になってから彼らを投入したのだな」

「そういうことだろうな」

厳密に言えば、もう一つ終盤に差し向けた要因がある、とヒツキは考えていた。お互いの疲労がピークに達したところを狙ったのだ。敵を奈落のどん底に突き落として士気を下げ、味方を勢い付かせるために。序盤から投入して、敵の戦力が余り削れていない内に撤退されては面倒だと考えた。帝国軍は初めから全滅させることを狙っていたのだろう。

ヘンケルは再びヒツキに向き直る。

「……ヒツキ殿はこれをどこで？」

「俺は亜人と、特に獣人ライカンと親交があつてね。若い頃に南部で紆余曲つよきまぐ折あつて、教えて貰ったのさ。腕に覚えのある奴がこれを身に付ければ、少なくとも連中トリニティ・コンの下っ端クラス相手ならそれなりに戦えると思う。だが、話を聞く限りトップクラスの奴等はちよつと桁が違うな。一朝一夕でどうにかなる相手じゃない」

「……確かに。相手が数量で勝っている現状では……。いや、やらぬよりは良いか。何かに打ち込ませた方が兵達も色々考えずに済むだろうし」

ヘンケルは先ほどより、声と目に力を取り戻したようだった。

ヒツキは再び籠から蜜柑を掴み、今度は自分で剥き始める。柑橘系の果物の、独特の香りが部屋に漂う。

「……ちつと失敗したかなあ」

「む？」

ボソリとそう言ったヒツキに、ヘンケルは首を傾げる。

「いや、やはりアイツをここに置いておくべきだったかと思ってよ。そうすりゃミレン將軍の策だっけ見破れたかも知れねえし」

「アイツ……？ ……っ、フロイデ准将か！」

ヒツキは剥いた蜜柑を一房、口に放り込む。うん、甘い。

「当たり前。ただ、まあ、そちらに派遣しても万が一賞金に目が眩んだ奴がいたらヤバイと思って差し控えたんだが」

「……やはり！ ……なるほど。確かに、同盟軍と言えば聞こえはいいが、言い換えれば利害が一致した混成軍に過ぎぬか。そういう可能性も低くないだろうな。彼のバイロン暗殺は貴方が？」

自ら軍を率いちまった以上、隠している意味もないか。ヒツキはそう考え、ゆっくりと頷く。ついでに、蜜柑を口に入れる。うん、やっぱり甘い。

「ああ、俺も一枚噛んでいる」

「そうか。では、マリスノリスの件でも助けられていたということだな。フロイデ殿は今どこにいるのだ？ 後で彼にも礼を述べたいのだが」

ヒツキは声のトーンを一段と低くした。

「バイロン暗殺の後に、エル・クレスを奪いに向かった。ちっと色々あってな。ベール軍を援護しようと思っていたんだが」

「……なんと！ では先の圧勝も」

ヒツキはばつが悪そうに首を振る。

「あれが誤算だった」

「……誤算？」

反帝国勢力が勝つたのにどうしてそのような事を言うのかと、ヘンケルは眉を顰めた。

「ああ、勘違いしないでくれ。今回はかりは後手に回った感が否めなかったんだ。あの勝利は確か十二月の十日前後だったな。フロイデ達がここを出てから二週間も経っていないからあいつ等が関わっ

たわけじゃない。ベールが自分で圧勝しちゃうなら、あつちの援護に向かわせるよりは多少の危険を承知でグリトリーの軍でも指揮させていれば、と思つてさ。そうすりゃ、勝てないまでもシャンテールを奪われる事態にまでは陥らなかつたかも知れん。何より、シュヴァイ「オルトフがエル・クレスに向かつたとまではフロイデも読んでいなかったし。ミレン將軍もそうだが、皇帝本人も決して侮れないぜ。マリスノリスの件からきつちり学んでやがる」

「……………」
ヒツキは最後の一房を口に入れる。……あれ、美味しくない。これだけ味が惚ほけてる。

「……すまん、さつきはまだ負けじゃねえとか言つちまつたけど、アイツがしくじれば……こちらとしても打つ手がない」
「……………祈るしかないか」

ヘンケルはテーブルに手を置いたまま、窓の外に目をやる。枯れ木の梢が映つた。片目になつたその視界は、未だに世界をくつきりと見せていた。

「……………この景色を見る事ができなかった者も大勢いる。意地でも負けられん。僅かな可能性がある限り、絶対に諦めるわけにはいかぬ」
卓上で握り拳を固めるヘンケルを、ヒツキは黙つて見つめていた。
「……………ヒツキ殿。充填フィイルの話をしてくれたということは、我々に教えてくれるという解釈で宜しいのか？」

「……………ああ。ただ、生半可な奴じゃ使いこなせないどころか、覚えるのもままならないぜ。教えられる人数にも限りがあるし、曲がりなりにも使えるようになるには、そうだな、最低で二カ月。今から教えるんだつたら二、三十人くらいがせいぜいだな。ま、どうせ皆くたくただろうし、二、三日経つてからでいい。腕の立つ奴を集めるようイヴァールにも伝えてくれ。選別は俺とルガールでやる」

其の五十六　く聖女誘拐（表）く

885年　2月25日

魔法の炸裂音が絶え間なく廊下に響き渡っている。既に床と天井は煤だらけになっており、嵌め殺しの窓硝子は殆どが割れている有様だ。キールとノブリスは壁に身を隠しつつ反撃を試みるも、相手の容赦ない魔法攻撃に身動きが取れないでいた。

キールはノブリスに向かって言い放つ。

「……このままじゃ埒があかない。ここは俺に任せてお前はアリア様を追えっ。二人くらいなら何とかしてみせるっ」

「し、しかし……」

「このままじゃ全てがおじゃんになる。躊躇うなっ、急げっ」

「……わかった。絶対に死ぬなよっ」

ノブリスはキールを一人その場に残し、相手が破壊した壁から飛び降りた。

突如、侵入者の報が告げられたのは十五分ほど前だった。遠くで爆音が聞こえ、その数十秒後に八人の三重の頂が建物内に侵入したと聞き、キールが咄嗟に考えたのは相手の目的だった。グルッセル法王の命か、策を考えた自分の命。或いはその両方。

すぐさま自室を飛び出したキールは、廊下でばったりと出くわし

たノブリスと一緒にグルツセル法王の寢所に赴いた。幸いグルツセルは無事だったが、今度はアリア「イアニスの姿がそこにないにことに気付く。湯浴みの時間だったのだ。

腕の立つ護衛兵達が寢所に集まったのを確認してから、二人は急いで浴場の方に向かう。段々と、剣撃や魔法による破壊音が大きくなってくるにつれて、やはりアリアが狙いだつたと確信する。人質に取られればベールは身動きが取れなくなる。それどころか下手をすれば東の同盟軍と敵対させられるかも知れない。キールは己の読み甘さにうんざりした。

角を曲がると、イアニスの護衛兵達三人が廊下で三重の頂の二人と切り結んでいる場面に遭遇した。健闘していると言つて良かった。多少の手傷は負っているものの、三重の頂を相手に死者を出していなかった。彼らはグルツセル達の護衛にとノブリスが選りすぐった兵士達だった。しかし、もうその場には彼女の姿がなかった。キールとノブリスは顔を見合わせ、頷き合うと、三人と戦っている二人の三重の頂に後ろから攻撃を仕掛けた。さしもの三重の頂も二対五で囲まれては敵わず、数分の闘いを経て力尽きた。

護衛兵たちに事情を聞くと、やはり彼女は連中に攫われたのだと言う。相手は少なくとも五人近くいたそうだ。追おうとしたところで、三重の頂が三人新たに駆けつけてきた。五分ほど交戦した後、何とか相手を一人始末し、その代償に護衛兵が三人とも深手を負い、戦線離脱した。

いつまでも足止めを食うわけにもいかず、ノブリスを先行させた

キールを見て、三重の頂トリニテイ・ワシの二人は突如接近してきた。キールは後ろに下がりつつ、相手が顔を出しそうなタイミングを狙って無詠唱魔法を放つ。

「シャ・ライール
瞬雷つ」

青い雷が手の平から放たれ、一直線に角へと向かう。しかし、相手は顔を出さず、雷は無意味に壁を焦がすに留まった。それを見計らうようにして、薄ら笑いを浮かべた三重の頂トリニテイ・ワシが二人、姿を現した。

「そんな古典的な手に引つ掛かるかよ」

「古典的な手に引つ掛からなかつたくらいでそんな喜ぶなよ」

キールの物言いに、二人は露骨に不快そうな顔をした。

一人は魔法使い。一人は長剣の剣士。単純にしてこの上なく厄介な組み合わせ。牛肉と玉ネギくらいの好相性だ。つて、リージェスみたいな言い回しが伝染うつちまった。キールは苦い笑みを浮かべる。

「……やれやれ、大所帯で乗りこんで何が目的かと思えば、まさかあんな少女をかどわかすとはねえ。どうも過大評価が過ぎたか。一介の戦士がやることじゃないな」

キールが冷ややかに言うと、三重の頂トリニテイ・ワシの剣士は薄く笑った。

「こちらもそのつもりはない。我々は」

「ああ、みなまで言わなくてもいい。ちゃあんとわかってる、痛いほどな。冬でも元氣一杯。半袖短パンに麦わら帽を被った飼主のブラージウス君にキツイ首輪を付けられながらもパタパタと尻尾を健気に振ってみせる忠犬君だろ？ そんな悲哀に満ちた自己紹介は無用だぜ。貰い泣きしちま」

「シッ」

一瞬にして距離を詰め、剣士が放つ水平斬りを、咄嗟にキールは後ろに跳躍して躲す。碧色の艶やかな前髪が一束、ぱさりと落ちたのを見て、チツと舌打ちをする。

「……人の話の腰を折るとは碌な育ち方してねえなあ」

俺の大事な美しい前髪をよくも。絶対にゆるさね。キールは切られた前髪の長さを確かめるように髪を弄っている。

「……それはこちらの台詞だ。舐めた口を叩く者には御仕置きしてやらなきゃなあ」

「……お前等もおかしな連中だな。こんなリスクの高い任務やらされてよく平気でいられるよ」

十人足らずで嚴重な警備網が敷かれている建物に突っ込むなど、正気の沙汰とは思えない。無事に戻れるのはいいところ半数くらいのものだ。

「フン。我々は平穩を嫌っているだけだ。力を試し、刺激を味わいたいだけなのだよ。その結末が死であろうと構わん」

魔法使いの方が言った。言葉からは恐怖とかそう言った感情が一切読み取れない。キールは肩を竦める。

「なるほど、はた迷惑な連中だな。類は友を呼ぶか」

「……ブライジウス様は我々に選択肢を提示しただけだ。そして、我々はそれを選んだだけだ」

得意げにそう言った魔法使いに、キールはやれやれと首を振る。

「そりゃ、他人の選んだ選択肢に乗った方が楽だしな。結局自分なりの道を見つけられなかったただけだろ？」

「……！」

魔法使いの顔が歪んだ。凶星を指すおまけに意図せず誇りまでも傷つけてしまった様だ。仕方ない。少し傷を埋めておこう。

キールは敵を慰めるべくオウム返しをする。

「我々はそれを選んだだけだ。……あつれ〜？ 意外と格好良いね。」

我々はそれを

「シャ・エアール嵐珠！」

魔法使いが剣士を押しつけるようにして風魔法を放った。キールは慌てて屈み込む。風が頭を撫で、数秒してかなり後ろから衝撃音が聞こえてきた。どうやら埋めるどころか抉ってしまったようだ。顔を真つ赤にして攻撃してくるとは。

いかん。こんなことをしてるんだったら、上級魔法の詠唱でもして置けばよかった。ってか、アリア「エアニス」が攫われている状況でこんな事をしていて良いのか。いや、良くない。

キールは混乱しかけた頭を元に戻し、状況の打開を試みる。相手の後ろに視線を逸らし、片手を上げる。

「……おお、流石ノブリス。見事アリア様を取り戻し」

「白々しい！」

顔をひよいと上げ、騙し討ちを試したキールに、剣士は次々と剣を振るう。白々しさも度を過ぎると返って怒りを買うらしい。直撃はしていないものの、充填フィールを駆使しているのだろう。浅い切り傷がそこかしこに生じる。イツテ、イテーヨこの馬鹿。キールは距離を取り、相手を鋭く睨みつけて言い放つ。

「俺は、お前を怒らせた……」

「その通りだよ！」

「絶対殺すっ」

あ、逆だったか。

「言い間違えたただけだろ。ならこつちもいくぜ！」

シャ・エアール
嵐珠っ」

言霊と同時に風の球が二人に向かって飛んでいくが、間髪入れずに魔法使いの低い声が響いた。

ダイ・ウオール
「封哭呪っ」

「何っ」

魔法使いは一瞬にして矩形の魔法障壁を展開し、あっさりとキールの風魔法を打ち消した。

「うわあ、面倒臭え」

「くくく、貴様如きの魔法は通用せん」

無詠唱魔法じゃ障壁は打ち破れない。かと言って、詠唱する暇をあの剣士が与えてくれるとも思えない。真面目に考えたら八方塞がりだ。

と、そこでキールは気付く。建物はもう既に滅茶苦茶な状態だ。

調度品も照明も破壊されてるし、窓硝子も少なくともこの廊下沿いは全て割れている。

（建物が少々痛むけど、仕方ないか）

考えを遮ろうとするかのように、不意に剣士が間合いを詰めてきた。

シャ・フレイル
「爆裂！」

「……っ」

キールの無詠唱魔法が炸裂すると共に、床にぽっかりと穴が開く。

危険を感じて後ろに跳躍した剣士が着地するのを見据え、キールは肩を竦めた。

「……今更で何だが、この鬪いつて如何にも無意味だと思わないか。だって俺みたいな超大物がお前らみたいな小物未満を片付けたところで称賛されるわけでも金が貰えるわけでもないんだぜ。むしろ、後で弱いもの苛めしていたことを責められかねない位なんだ。

というわけで、このままやっていたら俺が100%勝つだろうけれど、もうどうでも良くなってきたから俺の負けでいい。万に一つの勝利を拾えて良かったな、おめでとうおまいら。んじゃ、そういうことでお達者で」

そう言い残し、床に空いた穴に飛び下りるキールを見て二人の三重ニレイ・ワンの頂は一瞬呆気にとられ、次には髪を逆立てて唸り声を発した。

「あのクソエルフツ。ふざけんじゃねえっ」

「追うぞっ」

二人はキールの空けた穴から飛び降りる。しかし、足が地に着くや否や彼らを待っていたのは

汝の領域を侵犯せん

「……なっ」

「……え？」

「ヴァ・エアール
裂衝」

片目を瞑ったキールが至近距離から放つ、風龍の猛威だった。

まあ、こんなところかねえ、とキールは十秒前にはなかった、ぽっかりと開いた穴と、その周りに散らばる、緩衝材が剥き出しの瓦

礫を見据えた。

どうせ破壊されてるんだから多少壊したところで相手の仕業にすれば良いよね、ということ、キールは遠慮なくその論理に従って行動した。のこのこと後を追ってきた二人は障壁を張る間もなく、キールの魔法に直撃して30m余り先の曲がり角で壁を轟音と共に突き破り、中庭に落下していった。ここは四階だから打ちどころが悪くなければ虫の息で済むだろう。ただ、壁を突き破った時の衝撃で、悪くすると魔法をあんな至近距離で受けた時点で死んでいることとは否定できないが。どのみち、連中の直下した場所は中庭だから生きていたとしてベールの見回りに突っつかれている可能性が大だ。勿論、指ではなく槍で、であるが。

至近距離で撃ったせいだろうか。衝撃が腕に満遍なく伝わり、未だに痺れと痛みを伴っている。今から後を追って行ったところでノブリスの助けにはならないだろう。

「じゃあない、任せるか……あいたた」

見れば、服も身体も傷だらけであった。あちらこちらの傷から血が伝い、衣服を赤く染め上げている。

(とほほ、一張羅が台無しだ)

頭の中身はともかく、腕は紛うことなき一流。相手が挑発に乗ってくれる様なトンマでなければ、相当危なかったかも知れない。キールはノブリスの無事を祈りつつも踵かかとを返し、グルッセルの寝所へと歩き出した。

其の五十七 く呼び起こされた憤怒(表)

一行が新雪で覆われた山道を進んでいる時、オルフィが急に立ち止まった。インディゴ色の髪から覗く三角耳をピクピクと忙しなく動かしている。

「どうした？」

「……気のせいかな？」

いや、まただ」

オルフィは何かを確信しているかのように、北東にある山々を見遣った。この辺りは寒さが厳しいのか、殆ど草が生えておらず、雪化粧が施されている荒涼とした大地には動物も碌に見当たらない。今日は朝から歩いているが、ひと番の野兎つがいを見かけたただけだ。

「何か聞こえたのかな？」

「ああ。ここから相当遠い場所のようだが、どうやら戦闘中の様だな」

「戦闘って、こんなところですか？」

アステイスはオルフィが覗む方角に耳を傾けるも、風の音以外には何も聞き取れなかった。首を傾げる彼を見て、後ろにいたヒューリイは眉を顰めた。

「貴方。まさかオル姉が嘘を付いていると思っっているわけじゃない

わよね

「……いや、そんなことはないが」

「ふん、どうだか。……ジヨウ！」

「……ああ」

バーディアル
翼人のジヨウはヒューリイの求めに応じ、閉じていた翼を大きく広げた。バサツという音と共に、淡い水色の羽が五、六枚はらはらと舞った。

一分ほどして、豆粒ほどの大きさになっていたジヨウが急ぎ降下してくる。

「どっ!?」

ヒューリイは訊ねた。

「……」つ奥の山の峰付近で雪が大きく跳ねた。間違いなくいる

ジヨウの言葉を聞き、オルフィはアステイスに向き直る。

「だ、そつだ。どうする? おそらく戦っているのはベール軍と

」

「 帝国軍か」

一行は、ベールの町まで半日もあれば付くだろうという所まで来ている。劣勢と聞いていたベール軍を援助し、あわよくばエル・ク

レスを奪うための兵を借りようという魂胆だった。

アステイスにとって、この旅路の最中に耳に入ってきた情報は、殆どが苦みを伴うものだった。ベールの勝利に関しては、予想の外ではあったが、嬉しい誤算と言えなくもない。だが、その後にはシャントール会戦の詳細を聞き、自らの企みが破綻しかけていることを知った。シャントール領がこうも早く奪われるのは想定外だったのだ。最早一刻の猶予もないところまで来ている。この上はベールの力を借り、勢力図を少しでも変化させる必要があるだろう。

アステイスは思考を現状の対応へと引き戻す。こんな辺鄙なところで戦っているとしたら、まず彼らと、彼らの敵対する勢力だろう。つまりはベール軍と帝国軍ということだが、何故人里離れた雪山の奥深くで戦っているのか、その理由が分からない。ジョウの指摘した場所は、アステイス達のいる街道からは大きく外れたところにある。深い雪の上ではお互いに戦い辛いだろうし、魔法でも使おうものなら、自分が雪崩に巻き込まれてしまう可能性すらある。

「……そんな場の悪い所で派手に戦えるということは、少なくとも一般兵ではなさそうだな」

「三重トリニティ・フンの頂の可能性も高い、か。ふん、よくよく遭遇することだ。赤い糸が結ばれていないか、一回小指を見てみてはどうだ」

「……あまり愉快的な冗談ではないね。……どっちにしても、何故こんなところにいるのが気になる。向かおう」

黒ずくめの三人が鈍角を作るようにして雪原を併走している。相当な速度で走っている彼らの足跡はどれも浅い。相当の訓練がなければ出来ぬ足運びだった。

「くそつ、もう四時間近く経っているのにまだ追って来やがる。何てしつこいやつだ」

若い男が真後ろを一瞥し、毒づいた。後方では何者かが雪を巻き上げながらこちらを追走していた。

「まあ、向こうも必死になるわよねえ。聖女様を人質に取られれば筋骨隆々の大女は右腕に抱えている少女を見てせせら笑った。身体がぐつたりと弛緩しているところを見ると、どうやら気絶しているようだ。」

「幸い雪も深くなってきた。そろそろ煙に巻く頃合いだな」
若い男が心外だと言う風に首を振った。

「おい、馬鹿言え。たった一人に尻尾を巻いて逃げるってのか？
アイツは確かベールの将だ。奴を消せばベール軍は容易く瓦解するんじゃないか」

褐色肌の、年配の男は諭すように返す。

「奴の始末は任務の範囲外だ。こんなところでもたもたしては我々は平気でも、その小娘が凍死してしまう」

「それは……まあな」

「よしんば倒せたとして、こちらにも確実に犠牲者が出る。ただでさえ五人もやられているんだ。これ以上犠牲者を増やせばイヴァンスに何を言われるかわからんぞ。言われるだけならまだいい。何らかの罰則ペナルティを受ける羽目になったらどうする」

「……うぐ」

「……嫌よねえ。あんな人格破綻者が課す罰則ペナルティなんて。アイツのアレでもう三人仲間が死んでいるわけだし」

沸騰したお湯と氷水を交互にかけ、ただれた皮膚を捲る。身体のいたるところに糸つきの釣り針を引っ掛け、牛に引かせる。一ヶ月外に放置していた羊肉を口に一時間含ませる、などなどなど。イヴァンスの

拷問に近い罰則は枚挙に暇がない。ちなみに、死んだ三人はこれらの罰則によって亡くなった。羊肉を口に含んだ奴だけは数日生き延びたが、寄生虫に内臓を食われて死んでいったため、苦しみが長く続いたと言う意味では他の二人よりずっと悲惨だ。

「と、言うことだ。適当な場所で雪崩を引き起こし、奴の追走を振り切るぞ」

「了解」

「……わかった」

(くそ、このままでは……)

周囲の雪が深くなってきたのを見て、ノブリスはだいぶ焦っていた。何かの拍子で雪崩を起こされれば、よしんば切り抜けたとしても視界が遮られて誘拐犯を見失う可能性が高い。爆発魔法で度々雪を巻き上げられるのもかなりキツイ。ベールの町からずつと追い続けてきたものの、相手の動きには隙がない。逃げに徹されては中々差を縮めることが難しかった。これ以上雪の深いところで爆発を起こされたらお手上げだ。アリアと二度と再会出来なくなる。

先ほどのキールとのやり取りを思う。アイツの判断は実的確だった。グルツセルが未だに復帰できない以上、イアニス教徒を取り纏める象徴になりうるのはもはや彼女しかいない。二人の三重の頂トリニティ・ワゴンを同時に相手させるのは後ろ髪を引かれる思いだったが、アイツなら何とか切り抜けてくれるだろう。伊達に最年少で幹部を張っているわけではない。

ただ、今の状況では正直手の打ちようがない。ここから遠距離攻撃を仕掛けたらアリアに当たってしまうかも知れないし、もし逃走が不可能だと判断されたら、連中は彼女を殺してしまう可能性もある。やるなら不意打ち的な方法で取り返すしかないが、姿を見せて追っている現状ではそんな方法も使えないし、かといって山肌にはまともな遮蔽物すらない。美しい雪も、今だけは恨めしく思える。一面の銀世界に人影は目立ち過ぎるのだ。とはいえ、そのおかげで相手を見失わずに済んでもいるのだが。

と、そこに新たな要素が加わった。傍らに見える山の頂上付近でトリニティ・ワゴン三重の頂に並行するように飛んでいる翼人バーディアルが見えたのだ。

やっと追い付いた、が……三人か。かなり脚も速い。もしかすると追い付けるのはオルフィさんだけか。

ジョウは先ほどアステイスが言っていたことを反芻する。

「もしも、ベール兵が追われているなら話は早い。追われている方と合流し、山の頂上へ向かえと言ってくれ。こちらからも近いから直ぐに合流できる」

「ベール兵が追っていた場合は？」

「こんなところまで出張っているのだから、余程の重大事だ。何かの機密書類や魔法書等を奪われたか、或いは……誘拐だろう」

語尾を引く時、アステイスの顔が僅かに歪んだ。

「……誘拐か。その場合はどうする？」

「相手に気付かれないように真上に移動して欲しい。並行するように、余り近づき過ぎないように追ってくれ。逃げる時に頭上を見る奴はまずいない。太陽がああ位置なら、影も問題ないだろう。敵が一人なら手を出してもらって構わないが、複数なら無理はしないように。私達は君を目印にして連中を追う。もし連中が目暗ましをしたら、その場でこの笛を吹いてくれ。軍令用のものだからかなり大きな音が出せる」

「……これを吹いてどうする？」

ジョウはアステイスに手渡された少し大きめの、黒いホイッスルをしげしげと見遣る。

「動揺を誘う。単に動きを鈍らせるための小細工さ。一流であればあるほどに、有り得ない事態に警戒するはずだ。雪煙の中で散開されては、いくら視力のいい君でも人質を抱えた人間を見失う可能性がある。同時に、連中が君に気付いていなければ、笛の音が聞こえたところで、雪煙の中で君を発見することは不可能だ。雪山では音の指向性を捉えるのは難しいからね」

「……なるほどな」

「もし、万が一発見された場合は、連中から付かず離れず低空を飛んで少しでも西側に追いやってくれ。君が上空から消えた時点で、私達はそちらへ回り込む。その場合は、ベール側の追跡者の実力が高くないと賭けになるけど、並の相手だったらとつくに返り討ちにされているはずだから、分はそんなに悪くない筈だ」

追っている人物をチラリと見て、アステイスの予想が正しかったことを確信する。まさかノブリスさんが追撃しているとは。それなら、いくらでもやりようがある。

ジョウは飛行速度を徐々に上げていった。

「……意外と器用に歩くものだ」

後ろから離されずに付いて来るアステイスを見て、オルフィは微笑かに笑みを浮かべる。

「幼い頃にちよつとね。雪山はそれなりに歩き慣れている」

「結構な事だ。……それに比べて……ヒューリイ！ 急がないとジヨウを見失うぞ！」

二人より遙か後方には、ヒューリイがいた。その差は既に100m以上開いている。カンジキを履いてはいるが、雪道は不慣れなのだろう。足運びが非常にたどたどしい。

「ハア……ハア……。んもうつ、苛々する。何で私ばかり足が埋もれるのよっ。私よりアイツの方が絶対重いのに」

ブツブツと文句を垂れながらもヨタヨタと追って来るヒューリイを見て、オルフィは走るのを止めずに溜息を吐いた。

「……悪いが我々は先に行く。お前は街道に戻れ」

「……えええ、ちょっと待ってよオル姉！」

ヒューリイの懇願を無視し、オルフィはアステイスに視線を向ける。

「アステイス、行くぞ」

「わかった」

オルフィは更に一段階速度を上げる。呼応するように、アステイスの足運びの速度が増す。

「……何であんなに早く走れるのよ。オル姉はともかく、あんな奴が。……あーもう、ぐしょぐしょになっちゃった」

あつという間に二人を見失ったヒューリイは、如何にも面白くなさそうに脚を高く蹴り上げ、靴の上にこびり付いていた雪を振り落としました。

「シャ・フレイル
爆裂！」

トリニティ・ワン
不意に三重の頂の方から言霊が響き、次いで大量の雪が跳ね上がった。ノブリスは雪煙を見て舌打ちをするも、勢いをそのまま殺さず、フィール充填をしたまま突っ込んでいく。

「……ちつ、起きないか！」
どうやら、雪崩を起こすには衝撃が足りなかったようだ。もっとも、人為的に雪崩を起こす練習をしている者などそうそういるはずもないから、一撃で起こせなかったとしても無理はない。

「もう少し強めにしろ！　今ので大分距離を詰められた。今度はしくじるなよ」

「わかってる！　八分でも駄目なら全開だ。今度こそ、いくぜ。
シャ・フレイル
爆裂！」

爆発音に続いて、大量の雪が空に巻き上がった。

「くそっ」

爆風に乗った細かな雪は瞬間的な吹雪となり、ノブリスは視界を遮られる。巻き込まれているのは三重トリニテイ・ワンの頂の三人も同じだが、こちらには密接した状態だから何とか味方の姿が見えている。ただ逃げるだけでいい。

「今だ、いく」

ピュイイイー

『！』

唐突に、収まりつつある轟音に混じって、自然のそれとは違う音が響き渡る。帝国の軍に身を置いた者ならず必ず一度は聞いたことがあるであろう、軍令を伝えるのに使う笛の音だ。長年の習性に反応して彼らは一瞬硬直し、次いで誰が鳴らしているのかと互いを見るが、そんなものを加えている者はいない。なら一体だれが

「！ いかんつ、急いでここを」

時間にしてたった数秒だった。だが、その数秒の躊躇ちゅうしゆが彼らの運命を変えた。舞い上がっていた雪煙が彼らより少しだけ上方に放たれたノブリスの衝撃波で一瞬かき消された。

（いた……！）

雪煙の狭間に十数m先で抱きかかえられているアリアの姿を確認し、ノブリスは突進した。

「くそつ、アルゴツ。その小娘を」

「グウツ!？」

筋骨逞しい女、アルゴが突如呻き声を上げる。一瞬だけ視界が良好になったのをジョウが見逃さず、急降下して太い腕に短剣を突き刺したのだ。アリアが腕から解かれ、ノブリスは崩れ落ちるアリアに手を伸ばしつつ、褐色の男にラリアットを仕掛ける。

『シャ・フレイル
爆裂!』

「なっ!」

「うわっ!？」

意図したわけではない二つの火魔法が、再び雪原を強かに叩いた。アリアをこのまま奪われるわけにはいかないと咄嗟に判断した三重^{トリニテ}の頂二人の行動がたまたま重なったのだ。そして、今度は小事では収まらなかった。彼らのほど近いところにあつた巨大な雪の塊が衝撃で崩れ落ちた。地鳴りと共に、山上から大規模な雪崩が発生し、一気に襲い掛かってきたのである。

雪の冷たさに晒され、水色の聖衣に身を包んだ少女が目を覚ます。
「……う、う、う」

確か、浴室で服を着ている時に

「 そうだ。私、あいつらに……でも」

浴室に突然入ってきた黒服の人達がいた。抱えられた後の事は全然覚えていない。多分気絶させられたのだろう。でも、その後の事が全く思い出せない。ここはどこだろう。こんな山の奥深くに置き去りにされた経験などない。

アリアは両手を雪面に付き、身体を支えながらゆっくりと身を起す。

「……寒……い、うっ、どっ？」

風が吹き、思わず自分の身を両手で抱きすくめる。聖衣にしても、室内にいる時の格好だ。こんな雪山の寒さに耐えられるわけがない。

「おおい！ どこだー！」

瞬間、誰かの声が聞こえた。一瞬あの怪しい黒ずくめの男達かと思ひ、アリアは身震いしながらも身を屈め、山上の斜面の方を見る。直ぐに斜面を下っている人影を発見する。遠くで呼びかけている人は白い衣を纏っていた。だが、どちらにせよ見知らぬ者に違いはない。

（声、出すべきかしら……こんな所にいたら凍死してしまう）

でも、もし浚った連中の仲間だったら。その不吉な考えがアリアを躊躇わせる。仮に帝国の手の者だとしたら、父が、ベールがどのような苦境に立たされるかは目に見えているのだ。

(そうなるくらいなら……いつそこで凍死してしまった方が)

だが、そんなアリアの思考は長く続かなかった。黒づくめの男がいつの間にか後ろから近づいていた。雪が軋む音を僅かに耳にし、アリアは振り返り、顔を引き攣らせた。

「　　キャアアア！」

咄嗟にアリアが悲鳴を上げ、逃げようと反対方向に足を踏み出しかけるが

「つう！」

彼女は浴室で拉致されたため、靴下しか履いていなかった。雪の上をまともに歩けるわけがなかったのである。

「……………！ あそこか！」

悲鳴に気付き、アステイスがその近くまで降りて来た時には、アリアは男の太い腕で華奢な身体を締め付けられていた。

「は、放してください！ いやぁ！」

「つたく、こんな面倒なことになるとは。……手前、暴れるんじゃないよ！」

身を振り、逃げようとするアリアをことなげもなく抱きかかえた男はかなりの体格をしている。グリーンやアテライデで相手した

時とは少し装備が異なるが、黒で統一されていることから察するに、
ほぼ間違いないく三重の頂の者だとわかる。

「やめて！ 私をどうするつもり！？」

「……キーキーうるせえ女だな。そっちがそのつもりなら、
シャ・ライール
瞬雷」

「え キヤアアアアアアッ！」

直接接触られた状態でまともに電撃を浴びせかけられたアリアは、
身体をくねらせながら甲高い悲鳴を上げた。

「やめろ！」

走ってきたアステイスが尚も男に接近を試みるが、その途中で鋭
い視線で射竦められる。二人を交互に見る男からは、アリア対す
る明確な害意を感じた。

（くそ、もう少し近づけていれば）

アステイスとアリア達との距離は10m程というところだったが、
如何せん足場が悪いため一瞬で距離を無にするのは不可能に近い。
男もそれがわかっていいるのだろう。自分の優位な距離で足を止めさ
せた。つまりは、敵に言葉が届き、動作を察することが可能で、攻
撃を加えられる距離だ。尚且つ、こちらの飛び道具に対してアリア
を盾代わりに出来る距離でもある。

「そうそう、この小娘の命が惜しければそれ以上近づくなよ。……」

それにしても、くつくつく、小娘ガキにしちゃあいい声で鳴くじゃねえか。あんたそう思わねえか、なあ？」

「ア！……ひ……は」

やっと電撃から解放されたアリアは腕に抱えられながら息を荒げている。男はその様子をニヤニヤと見下ろし、次いでアステイスの方に向き直った。

「今のはかなり手加減したが、それでもこの小娘には十分利いたよ
うだなあ。もし、これ以上強めれば、どうなるかわかるな？」

「……」

アステイスは手に持っていた剣を横に放り投げる。剣は5mほど遠くに落ちた。その音と同時に、右足で雪を踏み固める。

「へっへ、良い子だ。……ついでにフードも取ってもらおうかなあ」

「……！」

アステイスは僅かに躊躇したものの、男が太腿に付いている革のバンドからナイフを取り出し、アリアの首筋に当てたのを見、観念したようにフードを取った。

「……なあ！……く、くつくつく。まさか、こんな所でお目にかかるとはなあ。フロイデさんよ」

男の言葉には多分に驚きがこもっていたが、言い終える時には喜びすら感じられた。

「……とりあえず、その娘を開放してくれないかな。見ての通り、こちらは抵抗する気はない」

男は歪んだ笑みを浮かべる。

「物分かりが良くて助かる、よ！」

距離を保ったまま、男はアリアの首に突き付けていた投擲用の小さいナイフを投げた。

「……っ」

ナイフはアステイスの左肩にあっさり命中する。

「ほう、声を出すことはおろか避けようとしてもしないか。流石は皇帝の懐刀、と言ったところかな。つまりは、ただの馬鹿だと言いたいんだが。いやあ、良かったよ。計算は相当狂ったが、これで数々の不手際がチャラになりそうだ」

「……私の事は好きにしている。彼女の命は保証しろ」

「……命令出来る立場じゃあ……ねえだろ！」

「ぐっ」

二発目のナイフは、アステイスの右肩に深々と突き刺さった。白い衣が紅に彩られる。

「おお、我ながら良い位置に刺さったな。もう両手は使えねえ。お次は　んあ？」

「……やめ……て」

男の腕に抱えられたまま、アリアが微かに顔を上げた。先ほどの

電撃で髪は乱れ、顔は涙でぐしゃぐしゃだった。しかし、アリアは気丈にも言葉を続けた。

「……私は……どうなっても、構いません。その人を　　げほっ」

(……！)

無防備なアリアの腹に、男は容赦なく空いている拳を叩き込んだ。身体をくの字に曲げたアリアの口から未消化の吐瀉物が流れ出る。雪上に落ちたそれは湯気を立てていたが、直ぐに外気の寒さで凍りついた。

「喋るのを許可した覚えはねえんだよ」

「お……ふ。……げえ」

「おやおや、聖女様の朝食は白米だったようだなあ。ちなみに、俺はパン派だが」

「……げほっ……ごほっ。……っ、お願い……い、逃……げて」

咽^{むせ}るのを堪えようと唇を噛み、涙で頬を濡らしながらも、アリアはアステイスの身を案じる言葉を口にする。

(……何を馬鹿なことを！ 自分の身を心配するところだろ！) 自分の身を省みずにアステイスの身を心配するアリアに、アステイスは僅かに怒りすら感じていた。それ以上に、現状を打破できない自分の無力感が腹立たしかった。

「あらあ、まだ懲りてないのかなあ」

「男はやれやれと首を振る。

「……もう君は喋るな！ 貴様もやめろっ、やるなら私を」

「……手前は黙ってるっ」

再び投げナイフが放たれた。

「……ぐっ」

今度はアステイスの左腿に深々と刺さり、アステイスは僅かによるめくが何とか踏み留まる。

(足場だけでも……)

立っているのがやっつとというようにして、尚も強く雪を踏み固める。既に圧雪された雪は相当な硬さになっていた。

「……やめ、て！ ……私は……どうなっても」

「いいんだな。なら遠慮なく、
シヤ・ライール
瞬雷」

「イツ、ヤアアアアア！」

男は、今度は両腕でアリアの華奢な身体を抱きすくめ、再び電撃を浴びせた。アリアは苦悶の表情で首を上下左右に振り、悲鳴を上げる。

「……ア、……あ」

自分の腕の中で痙攣するアリアを見て、男は満足そうに笑う。

「聞き分けの悪い奴は大嫌いなんだよ。俺に逆らうって事がどうい
シヤ・ライール
うことか、身体にわからせてやる。瞬雷、もういっちょ
シヤ・ライール
瞬雷」

「よせ！」

「 ああ！ うああ！ ひっ！」

アステイスの懇願も虚しく、アリアに雷魔法が浴びせられる。相当に加減しているとはいえ、至近距離からの一撃だ。言霊が紡がれる度に、アリアは浜に打ち上げられた魚のように、男の腕の中で身悶えした。

(……う、の、野郎)

不意に、苦しみ喘ぐアリアの姿が、メリッサの姿と重なった。また、奪おうというのか。また、あの光景を見せるというのか。アステイスの目は一気に充血していき、真紅に染まる。

「……下種^{ゲス}が」

歯を食いしばるように仁王立ちするアステイスに、男は再び視線を移した。

「あん？ ああ、手前まだ立ってたのか。そういやあ、まだ一箇所残ってたなあ。 って、ああ、こいつっ」

突然、男は素っ頓狂な声を上げた。気付けば、露になったアリアの白く細い脚からちよろちよろと水が滴っている。あまりの執拗な電撃責めに失禁してしまったのだ。

「おいおい、聖女様ともあろう御方がトイレの躰もできていないのかよ。最低だな。俺のズボンが濡れちまっただろ。こらっ、聞いて

んのかよっ」

「あ……ひあ……」

男はアリアの黒髪を鷲掴み、上へ持ち上げる。もはやアリアはその意識も、目の焦点も定かではない。涙で頬を濡らし、涎を垂らし、身体を半ば反射的にかくかくと震わせているだけだ。

「高貴なお方ともあるう者がまあ酷え面してやがる。……こりゃあ後でキツイ御仕置きが必要だなあ。ああ、フロイデさんはさっき何て言ってくれたっけ？」

そう言い、男は再びナイフを投げるモーションに入る。

「……前言撤回だ。貴様を表すのに使われるのでは、どんなに汚い言葉も御免被るだろうよ」

「ハッハッハ、最高の褒め言葉だ。手前は楽には死な

さねえ、ぜ！」

男が再びナイフを投じた。

「フッ」

キーンッ

アステイスは素早く左手で懐から取り出したソードブレイカーを用い、右腿に迫るナイフを叩き落とした。抉られた肩が熱をはらんだが、こちらは右肩と違い、動かせない程には痛めていない。思い切り力を籠めていたからこそ声も出なかった。

「 なっ 」

「 くだばれ! 」

無意識にらしくない、一度も吐いたことのないような台詞が出た。
充填を左手と踏ん張る右腿のみに集中し、下手投げで動揺した男に
ソードブレイカーをそのまま投じた。鉤付きの刃が凄まじい勢いで
男の喉元に迫る。反射的に、男の左手が抱えているアリアを盾にし
ようと動いた。

が、それより僅かに早く、ソードブレイカーは男の皮膚に到達し
た。喉の肉を抉り、首から血の滴る黒い刃身を覗かせる。遅れて、
アリアの黒髪がはらりと数本、雪原に舞った。

「 ば……な…… 」

「 ……完璧主義が災いしたな。狙われる場所さえ事前にわかってい
れば、如何に早かろうと対応は出来るんだよ 」

四肢を狙い、自由を奪おうとするのがわかれば、三か所埋まった
ところで狙われる場所は限定される。完璧主義に加え、拷問好きの
性癖が仇となったのだ。

アステイスは表情を殺し、倒れている男の方へ左足を引き摺りな
がら歩いて行く。そして、喉に刺さっているソードブレイカーを、

動かぬ左足で思い切り踏み付けた。雪に濃い紅のシロップがぶちまけられた、ストローで吹いたような男の掠れた呼吸音が響き、顎が天に突き出された。

男が息を引き取ったのを見て、アステイスは雪の上に倒れているアリアを抱き起そうとして、止めた。両腕には血が滴っているから衣服を汚してしまう。メリッサの巻き込まれた事件を、何故か思い出したのだ。それに、痛みでもう腕が上がりそうになかった。

その内にオルフィかジヨウ辺りが見つけてくれるだろう。この場を切り抜けたことに安堵した瞬間、軽く立ち眩みを起こし、次いで猛烈な眠気が襲ってきた。

(……………血を、流し過ぎたか。でも……………良かった)
今度こそ、助けることができたのだ。自分自身の手で。支えを失ったように、雪原に倒れ込む。雪の冷たさが火照った顔に気持ちいい。そして、そこで意識が途絶えた。

其の五十八 くアクア・ティ・アラ（表）

885年 3月1日

「そうですね、ではそのまま雪崩に巻き込まれて……」

「ええ。彼らと合流して搜索していたところ、いち早くフロイデ殿が貴方を発見したようです」

アリアを救出した半日後、一行は再び気絶していたアリアとアステイスを伴ってベールに到着した。幸い二人共に重大な凍傷には至らず、二週間ほどの静養で治るということであった。だが、アステイスに限っては手足共に刺されていた事もあって、幾分完治が遅くなるとも言われていた。

アリアはベッドから身を起こして訊ねる。

「ええと、あの方々はノブリス様のお知り合いなのですか？」

「……はい。この機会に、一つお詫びさせて頂きたいことがございます。実を申しますと、私は一つ目的があってイアニス教団に潜入していたのです」

「潜……入？」

アリアの目が驚きで見開いた。

「私はとある傭兵ギルドに所属しております。フロイデ殿を除いては、いずれも旧知の間柄にございます。私の役目はこの巨大な教団の動向を監視することになりました」

「監視、ですか。何のためです？ それに、いつから？」

「……監視の目的は、世界の流れを把握することにあります。これは我々の身を守るのと同時に、今はお話しできませんが、ある行動を取るタイミングを窺うためです。私だけでなく、他にも何人かの諜報員が各勢力に潜伏しています。あと、教団に入ったのは三年程前になりますか。御覧の通り、私は身体に恵まれておりまして、修道僧としてならば問題なく入団出来ました」

修道僧とは、イアニス教を学ぶ傍ら、人間に敵対する魔獣の襲来、或いは災害などで荒れ果てた町村などを復興するのが役目でもある。当然建物の修繕や道の補修なども行うので力があるに越したことはない。そして、その中でも能力著しい者は要人の護衛などを受け持つことがある。

「では……貴方は心からアルマダ「イアニスの教えを信望して入団したわけではない、ということですね」

アリアは少し悲しそうに顔を伏せた。

「それについては言い訳するつもりもありません。アルマダ「イアニスの教えも解釈する者次第では危険な思想になり得るかと思いません。もつとも、宗教とは全てそう言った物だと思えますが」

「……そうかも知れません」

「付かぬ事をお訊ねしますが、アリア様。貴方は、亜人をどう思われますか？」

「……え？ どうつて、勿論普通の人と一緒にだと思えますけれど。アルマダ・イアニスは、全ての人には機会と権利において平等であれ、と説かれていますし」

ノブリスは微かに頷いた。

「それも聞く者によつては変わるのです。そもそも、世の中には亜人を人と見なさぬ者が大半ですから。イアニス教の上級団員とて同じ事でしょう。もっとも、半分くらいは逃げてしまわれたようですが」

「……それは」

「私は亜人達と長年暮らしていました。彼らは貴方の言われた通り、普通の人と何ら変わりありません。些細な事で喜び、些細な事で悩み苦しむ、ごく普通の」

順を追つてお話ししましょう。私は元々テルネシアの没落貴族の出自です。名君と言われたアルイル帝は、民には非常に人気が高かった反面、才の乏しい者には優しくなかったので煙たがられていました。能力ある者が出世していく一方で、落伍者はそれに倍する数いたのです。勿論、世の中の道理というものから見れば全く正しいのですが、私の父はそれを認められませんでした。権威に頼り切っていた父は伯爵から子爵にまで位を落とされました。何とかして元の位置に戻ろうと手を尽くしていたようですが、その願いは叶いませんでした。失意の裡に梁に縄を結わえ、首を吊つて命を絶つたのです。

その時私は十三歳でしたが、未っ子でしたから後を継ぐのは無理でした。元々机の上で勉強するよりは剣を振るっている方が性に合っていましたから。暫くして、私は腕試しの旅に出ました。棒きれに風呂敷包みを下げて、僅かな路銀を懐に、です。色々な町を巡り、

様々な体験をしました。そうしている内に、私は今まで知らなかった世の中の歪みに気付き始めました。そう、歪みです。

南部では亜人が低賃金で過酷な労働に就かされています。炭坑や鉄工所などに閉じ込められ、殆ど不眠不休で働かされているのです。我々の使っている武器や洋服などにもそういった物は数多く混じっているでしょう。そういうもののかな、で済ましてしまうのは容易い。しかし、私には割り切ることができませんでした。私の使っている道具には、彼らの労働の血と汗が滲みこんでいるのです。そして、彼らは報われるだけの対価を受け取ることが出来ていない。果たしてこれが歪みでないとしたら一体何でしょうか。

その頃から、この世の中の在り方に度々疑問を感じるようになりました。そんな時、南部のメルトラノスという町にてある事件に遭遇したのです。というよりは、半ば巻き込まれたと言う方が正しいでしょうか。その事件とは、一人の男がメルトラノスの城に押し入り、罪人たちと歯向かった兵士を皆殺しにしたというものです。

その男こそが、私達のギルドマスターです。もつとも、実際にそうなるのは数年後のことですが。それに付いては後で詳しくお話します。

あの方は　とある国の重要な役職を担う人物でした。御自身の娘夫婦が旅行中にメルトラノスの森の中で何者かに殺されたのです。犯人は、帝国貴族の子弟に当たる者達でした。夫婦は無数の矢が突き刺さった無残な姿で発見され、唯一人の孫娘も見つかりませんでした。

ノブリスが深く、どこか悔しげに息を付いた。アリアは信じられないという面持ちで唇を噛む。

「……酷い。でも、それなら相応の裁きが下ったのでは……。アルイール帝はそのような悪行を赦す様な御方ではなかったはずですよ」
「確かに。しかし、この話は残念ながらアルイール帝に届くことはありませんでした。彼一人が全てを統括できるというわけでもありませんし。半年後、マスターは自らメルトラノスに赴きました。そこで彼が耳にした話は信じ難い物でした、貴族の子弟達はほとぼりが冷めるまで城に軟禁されてはいたものの、半年もせず釈放されるのがほぼ決まっていたのです。罪もない者を三人殺した上です。その時の彼の気持ちを推し量ることが出来そうですか。娘一家を皆殺しにされた彼の虚無感と憎悪を」

「……」
「先ほど言った通り、マスターは城に乗り込み、邪魔する者を始末し、或いは罪人たちの場所を訊き、城の牢屋にて彼らを追い詰めました。その時彼らが放った言葉はこんな感じだったようです」

こ、殺すつもりなんてなかったんだ。まさかあんな森の奥に人間がいるなんて思わなくて。こ、こいつが亜人と人間を見間違えたんだよ。

い、いつもの狩り場だったからつい確認を怠っちゃったんだ。本当、人間だってわかっていたら手は出さなかった。ま、紛らわしく森の中をうろついているアイツ等にだって非はあるんだぜ。

え、お、女の子？ あ、ああ、いたよ。あの子は……その、現場を見られたからとりあえずとっ捕まえようとしたら逃げちまって、誤って崖から落ちちまったんだ。い、いや、始末するつもりだったなんて、とんでもない。

わ、わかつているって。慰謝料だろ？ た、頼む、たつぷり弾むから見逃してくれ。お、俺はこんな所で人生の予定を狂わせるつもりはなかったんだよ。

アリアは、悲痛な、それでいて万感の怒りを籠めた目で己の掴むシートに視線を落とし、震えている。

「お聞きの通り、謝罪の言葉一つとっても見逃すに値しない連中でした。マスターは彼らをたつぷりと時間をかけて苦しめた上で殺しました。詳細は、おそらく気分を害されると思いますので伏せておきますが」

「……お話はよくわかりました。けれど、その事件が、ノブリス様とどのように関わるのですか？」

「……先ほど、マスターは城の牢屋で彼らを追い詰めたと言いましたね」

「え、ええ」

「それは間違いなのですが、実は彼らは、牢屋の外にいたんです」
「……え？」

「……当時、メルトラノスの牢屋には亜人の子供達が大勢捕らわれていました。その罪人たちは、軟禁されている間、憂さ晴らしに彼らを痛めつけていたのです。城の兵士達もそれを黙認している状態でした」

アリアは言葉も出ず、ただ首を振った。

「マスターは四人の罪人達を殺した後、亜人の子供達を出来る限り解放しました。というのは、衰弱して明らかに助からなかった子が何人かいたそうでした。勿論、動ける子は直ちに解放されました。城の兵士達はこの実態が発覚することを恐れたでしょう。口封じするべく追手を放ちました。眼前で殺されようとする亜人の子供達を見て、私は手を出さずにいられず、彼らが逃亡するのを助けたのです。その際、何人かの兵士をこの手で殺めました。もっとも、私の他にもそういった者は何人かいましたが、人を殺したのは、その時が初めてです。彼らを殺して良かったのかは未だにわかりませんが、ただ命令されて、渋々従っていただけの者もいたかも知れない。それでも、斬りかかってきたら倒すしかありませんでした」

「そんなことが、現実にあつたのですね」

「ええ。今までのお話からわかったと思いますが、当時のメルトラノスは、いえ、メルトラノスだけではありません。南部の主要都市は実の所、亜人の奴隷市場のようなものでした。領主はそれに寄つて莫大な利益を上げていたのです。しかし、その騒ぎが露見し、ついにアルイール帝の知る所となり、関わった者は皆厳正な処分を下されました」

だが、全員が処分されたわけではなかった。その場から逃げおお

せ、今尚悪事を働いている者はごまんといた。

「っと、話が前後して申し訳ない。何とか彼らを解放した我々は森へと逃れました。しかし、子供達の話では既にかなりの者が両親と死別し、行き場がないということでした。そこで、私がある提案をしたのです」

「提案、ですか？」

「私が旅をしていた時に偶然見つけた場所がありました。とある町の地下大空洞です。そこには埋もれた古代都市があり、建物も補修すれば使えそうな物が多くありました。そこに住居を構えて住まわせてみてはどうか、と」

「……まあ！ 地下に町を作ったのですか！」

「ええ。そのような経緯もあり、私もどのみちお訊ね者になるのは避けられませんでしたから案内役を買うことにしました。国境の警備はたいしたことありませんでした。時にはマスターが河を凍らせて渡れるようにしたり、道を塞ぐ岩山を破壊したりして、私達はその町まで辿り着きました」

「マスターさんって、とっても豪快な方なのですね」

「はは、豪快という言葉では言い表せないですね。大空洞に辿りついてからは、一旦マスターと別れました。金や役立ちそうな物を持っていると言う事で、故国に戻ってそれを取ってくるということでした。或いは、家族を失った気持ちを整理する時間が欲しかったのかも知れません。もともと、そのことを知ったのは再開した後のことですけれどね。その間、我々は町の整備を進めました。使えそうな住居の泥を掻き出したり、木材や食料を運び込んだり。幸い、水は質の良い湧水があったので助かりました。そして、何とか子供達が不自由なく住めそうな共同体が出来上がったのです」

「その後、マスターさんが戻ってきたのですか」

「ええ、半ば国を追い出されてきた、と笑っていました。ただ、その後どうするかが問題でした。蓄えには限りがありましたし、何かしらの方法で金を稼がない限り長く暮らせません。そこで、マスターがギルドを作ったのです。国軍が解決してくれない問題を代わりに引き受け、賃金を貰うわけですね。戦う方法は、意欲のある者があの方から学びました。あの方の力は今尚、私も遠く及び」

「 幾らなんでも喋り過ぎだ」

「 つ、キール！」

いつの間にか、寝室にキールが入ってきていた。ドアに寄りかかりながら腕を組んでいる。その全身には包帯が痛々しく巻かれていた。どうやらノブリスも今の今まで侵入者^{キール}の存在に気付かなかったようだ。

「あ、キールさん！ 傷の方は大丈夫ですか？」

「ああ、ご心配なく。……イアニスの看護師さんはどうも大袈裟だねえ。それよりエルウ。幾らアリア様とはいええ、喋っていいことと悪いことがあるぞ」

珍しく、キールの目に厳しさが伴っているのを見て、ノブリスは少々ばつが悪そうだ。

「あ、ああ、すまん」

「……もしかして、キールさんもギルドの一員なのですか？」

「まあね。しかし今回は反省すべき点が多過ぎるな。オルフィたちがいなければ完全にアウトだった。アリア様にも辛い思いをさせたな。すまないことをした。貴女にももう少し護衛を付けておくべきだった。これは衛兵の配置を管理していた俺のミスだ。どんな処分も甘んじて受けるつもりだ。……ああ、どんな処分もってというのは

嘘、死刑以外」

「アリアは慌てて首を振る。

「い、いえ。それは全然」

「すまないな、この教訓は必ず活かす。……ノブリスの話聞いて何となく察しただろうけれど、正直言って俺達を含む亜人は大部分の人間の事を快く思っていない。一部例外はあるけどね」

「……その一部に、私は入れているのでしょうか？」

上目遣いでそう言うアリアに、キールは一瞬呆気に取られ、次には笑いだした。

「そうですね、ギリギリ大丈夫じゃないですか」

「……ギリギリですか。では、もっと努力しなくてはいけませんね」
アリアは白いシーツを両手でキュツと握り締める。

「キール。フロイデ殿の具合は？」

ノブリスの口からフロイデの名前が出た途端、アリアの手がピクツと反応した。キールはそれに気付かぬ振りをする。

「意識はまだ戻ってはいませんが、失血のせいだな。そのうち目覚める」

「そうか、なら良かった」

「それより、マーシャさんがお前の事を探していたぞ。……少し怒っていたみたいだけど」

「……！ いかん、すっかり忘れていた。戻ったら真っ先に報告するつもりだったのに」

すっかり尻に敷かれているようだな、とキールは薄ら笑いを浮かべる。

「時間は怒りを増大させるぜ。とつと謝ってこい」

「あ、ああ。だが護衛が……って今はほぼ鉄壁だったな」

「過信は禁物だが、オルフィとジヨウがいれば鼠一匹入るのも大変だろうよ」

キールは笑ってそう言った。

其の五十九 く仄かな想い（表）

885年 3月3日

アリアが目を覚ました更に二日後、アステイスは意識を回復した。眼が覚めてからは食欲も旺盛で、時折身体の痛みに顔を顰めることはあるものの、至って元気な様子だった。が

「少しは自分の弱さを自覚して欲しいものだな」

「……ぐっ」

オルフィは椅子に座って足を組み、アステイスが言葉に詰まるような台詞をネチネチと続けていた。

「大体、あの娘が敵に捕まった時点で手を変えるべきではなかったのか？ 近くにはジョウもいたんだ。どのみち敵が一人を抱えてあの場を逃げ切る事は不可能に近かったんだぞ」

「わ、わかつてる」

「前にも言ったと思うが、お前が亡くなったら何人の運命が狂わされるかわからんだ。少しはそのことを自覚しろ。そもそも指揮官がこのこと出て行って敵の攻撃に身を晒すとは……少しばかり頭が悪いと思わんか？ 自分で」

オルフィはわざとらしく溜息を吐き、首を横に振った。付ける薬無し、と言いたげであった。馬鹿にされているのがわかっていてアステイスだが、彼女の言い分は全くもって正論だ。反撃できるわけでもなく、仕方なく呻くように言った。

「……ご、ごもつともだ」と。

先ほどからずっとこのような調子であった。周りの者達はお互いに苦い笑みを交わしながらそれを見守っている。

大規模な雪崩が起きた後、アリアを抱えていた大女は逃走中オルフィに斃され、残ったリーダー格の男もノブリスとジヨウに深手を負わされ、谷に落ちていった。その頃、アステイスは残った一人と対峙していた。状況が状況だったとはいえ深手を負わされたのはアステイス一人だった。そしてもう一人、ある意味アステイス以上にオルフィの怒りを買っていた人物がいた。

「それにしても、ヒューリイ。お前は幹部になれる器だと信じていたんだが、な」

オルフィの隣に座っていたヒューリイは、ついに自分へお鉢が廻ってきたか、と膝をギュツと掴む。

「……し、仕方ないじゃない。雪山を歩いた事なんて初めてなんだし」

「……それはまだ許せる。……その後の事だ！」

「お、オル姉、こ、怖いって。そんなに怒らないで……」

ヒューリイは身を震わせ、涙目で懇願した。

雪道をまともに歩くことが出来ず、救出に何ら関わることが出来なかったヒューリイは、一人寂しく街道に戻った。ただ待っているのも寒いし、暇だからと炎魔法で周りの雪を溶かし、無駄に見事な雪彫刻、巨大雪兎を作っていた。それが、戻ってきたオルフィの怒りに触れたのは言うまでもない。後で聞いた話によると、アステイスがルガルと一緒に見たグリユーンの壁画もヒューリイが気紛れに描いた物らしい。彼女には相当な芸術的才能があるようであった。

「……ただ待っていたならともかく、遊ぶ暇があったならべールに向かってソリの手配をすることだって出来たろう！　今回は二人が軽傷で済んだが重傷だったら早急に手当てせねばならなかったのだぞ！」

「……う、ご、ごめんなさい」

「謝って済む問題か！　万が一手当てが間に合わなくて二人の手足が腐り落ちていたらお前はど言い訳するつもりだったんだ！」

額に青筋を作つてがなり立てるオルフィに、ヒューリイはただただ恐縮するばかりだ。流星にいたたまれなくなってきたのか、キールが何とか宥めにかかる。

「ま、まあそれくらいにしておこうぜオルフィ。怪我人の前だからな。勿論、お前の言い分が全く正しいのは判っている。ヒューリイもこの通り反省しているようだし、もうこんなことはやらないよ。」

「……そうだよな？」

ヒューリイががくがくと頭を上下させる。

「……む」

「それにほら、二人の凍傷の程度が軽くて済んだのはヒューリイが町に着くまで炎で温めてくれたからだろ？」

「……むう」

身振り手振りを混じえるキールの言い分にオルフィが納得仕掛けているのを見て、一同は安堵の表情を浮かべた。

と、おもむろにノツクの音が響く。

「誰だ？」

「ノブリスだ。アリア様も一緒にいる」

ノブリスと共に入室してきたアリアは、既に病人用の服でなく、聖衣に着替えていた。ヒューリイが立ち上がり、アリアに椅子を使うよう促すと、アリアは礼を口にしながらも腰を下ろした。

「お身体の具合は宜しいのですか？」

「はい。……その、御蔭さまで」

アステイスの問いに、アリアはもじもじとしながら頷いた。

「……身を挺して助けて頂き、感謝の言葉もありません。フロイデ様、本当にありがとうございます」

「……いや、こちらこそ。もっとスマートに助けられれば良かったのですが。何と言うか、やられっぱなしでちよつと格好悪かったですな」

「そ、そんなことはありません！」

アリアが語気を強めた。思いの外大きい声が出たのか、我に返り、キョトンとする周りの者を見てアリアは顔を紅潮させた。

「あ、い、いえ。その、すみません。ただ、格好悪いなんてことは、決して……」

「そ、そうか」

その様子を見て頬を緩めていたキールはふいに表情を引き締める。

「……ああ、ノブリス。少し外で話したい事がある。オルフィ達も一緒にだ」

「わかった」

「……そうだな。ヒューリイ、行くぞ」

「あ、はい。オル姉」

ぞろぞろとドアの方に向かって行くのを見て、アリアは少し慌てた。

「あ、あの」

「すみません。俺達は少し席を外します。今後の動きのことで色々話したい事がありますので」

キールがそう言くと、アステイスが身を起こしかける。

「あ、それなら私も」

「……悪いが、フロイデ殿にも話せない内容だ。ま、怪我していることだし安静にしててくれ」

キールは険しい表情を崩さなかった。

「……そうか、わかった」

ドアが閉まり、部屋にはアリアとアステイスだけが残された。

「……皆さん、どうしたんでしょうね」

「彼らは同じギルドの出自ですから身内で相談事でもあるのでしよう。私はその、完全に信用されているわけではありませんから」

アステイスは頭を掻いた。

「そうなのですか？」

「おそらく。もっとも、そう言っていられるのも今の内なのですが、アクア・ティ・アラの面々の信頼を勝ち得ずして、帝国を崩すのは不可能に近い。曲がりなりにも今まで一泡吹かすことが出来ていたのは彼らの助力によるところが大きかった。これからは帝国と本腰を入れて戦うことになるから付け入られる隙を残しておくわけにはいかない。」

「……フロイデ様は、どうしてこちらへ？」

「ベール軍に助力を、と思ったのですが、どうやら不要だったようです。数に勝る帝国軍をあっさり返り討ちするとは想定外でした。先ほど使った策を教えて頂きましたが、全くもって見事な物でした。ミレン将軍が軍を率いていたとしても、果たして対応しきれたかどうか」

アステイスがそう言うと、アリアは感嘆の溜息を吐いた。

「そうですか。……やはりミッドロウさんの作戦は凄いものだったのですね」

「地形、用兵、戦略、この三点において隙がなかったです。何より、犠牲者を最小限に食い止めたところが素晴らしい」

キールの指揮はアステイスから見ても驚嘆すべきものだった。自分がこれ以上の策を考えられたかと問われれば正直自信がない。

「フロイデ様は、エル・クレスを落とすつもりだと聞きましたが」

「……ええ。シャンテールが敗れた以上は迅速にそうせねばならないでしょう」

「でも、あの要害の地を本当に落とせるのでしょうか。その、去年私の父もエル・クレスに赴いたのはご存じだと思いますが、その時も……」

アリアが視線を手元に落とす。

魔道部隊を含む四万の大軍を用いてもエル・クレスは落ちなかった。もつとも、それはジルバートとベルガモットという二将が存在していたことが大きい。

ただ、今現在エル・クレスを守るシュヴァイ「オルトフもあの二将にそう劣ってはいない。アステイスが在籍していた当時彼はまだ大佐だったが、ゆくゆくは將軍職へ上りつめると確実視されていた男だ。

「厳しい戦いになるかも知れませんが、彼は准将になってまだ日が浅い。兵達の心を完全に掌握しきれてはいないでしょう。そこに活路が見出せます」

オルトフがジルバート達に劣っているとしたら、付け入る隙があ

るとしたらその点であった。ジルバートやベルガモットは將軍職について既に数年が経過している。長く指揮を取っているだけあつて兵達の忠誠も非常に厚い。だが、オルトフはまだ一年少々。それも准将になつてからはずっとネルガルにいたため、実戦の指揮はまだしていない。第九軍を指揮していたラフオム、第八軍を指揮していたハンディックも、兵達の信頼を完全に得ていればたとえ敗北をしようとも死ぬことまではなかつただろう。

アリアは暫くの間目を瞑っていたが、再び顔を上げる。

「……わかりました。どちらにせよこのままではじり貧です。このままベールを帝国の手に落とすわけには行きません。今現在は私が法王代行を務めていますので、貴方にお力添えをさせて頂こうと思ひます」

「……本当ですか！」

「はい。ただ、お約束は出来ません。今軍を指揮しているのはノブリスさんとキールさんの二人であり、自分でこう言うのも何ですが、私はお飾りに過ぎませんから。私に出来るのはあのお二人に進言することくらいで……きやつ」

「検討してくださるだけで十分です！ アリア様、ありがとうございます！」

アステイスは思わず身を乗り出し、アリアの手を両手で握り締めていた。彼女は眼を見開いて固まっている。彼女が付けているものが、微かな香水の匂いが鼻腔をくすぐった。

「あ、す、すみません。つい興奮してしまつて」

我に返つたアステイスが慌てて手を引っ込める。

「い、いえ」

アリアは解放された手を、頬を赤く染めて見つめている。

アステイスは何だか身体がむず痒かった。同年代か目上の者と話す機会は多かったが、一回り以上離れた娘と向かい合って話す機会はそうなかったのだ。強いて言えばアルイールの末娘、マチュア^{II}。テレビアくらいだろうか。彼女と話すときにはどんなことを話していただけるう。

と、そこまで考えてようやく気付く。先ほどから堅い話ばかりしていたということに。この年頃の娘にそんな話ばかりしても退屈なだけではないか。聊^{ちやうど}か気が利かなかったと反省する。

「ああ、ええと」

「な、何でしょうか？」

アリアは慌てて姿勢を正した。

「アリア様は、日々をどうやって過ごしていられますか？」

「……日々、ですか？」

「ええ。御趣味とかおありなのかな、と」

「そ、そうですね。うーんと……物語とか結構読んでます」

「へえ、差し支えなければどのようなものをお読みになっているのか訊いても宜しいですか？」

「勿論です。例えば？ミノスの泉？とか、？私、彼が戻ってきたら結婚するの？とか、？アルフレイダと密書？もこの間読みましたね。手前味噌になりますがいアニス教に伝わる聖典で？聖女光臨？とか」

？ミノスの泉？は、広大な森を一日毎に移動する泉の話だ。飲めば長寿を得られるが、その代わりにその水を飲み続けなければいけない身体になる、といった話だった。

？私、彼が戻ってきたら結婚するの？は、戦争に行った婚約者の帰還を待ち望む女の話だ。題名は良く知っていたが、何となく先が読めてしまったので未だに手を付けていない。

？アルフレイダと密書？は、自国の姫と敵国の王子の恋文^{ラブレター}を届ける配達人の話。なのだが、そのうちに姫の方が病で死んでしまい、

手紙を待ち続ける王子を不憫に思った配達人が筆跡を似せて手紙を書きくことになる。あっと驚く結末へと導かれる、ということであるが生憎と最終巻までは読んでいない。

「ジャンルが幅広いですね。それに長編ものが多いかな？ 失礼ながら、？聖女光臨？というのは存じ上げませんでしたか？」

「？聖女光臨？はイアニス教の開祖、アルマダ「イアニス様の物語です。農民の生まれであった彼女が紆余曲折を得てイアニス教を興すまでの伝記ですね。彼女の手柄や葛藤にまで触れている読み物として面白いんですよ。イアニス教に興味がなくとも単純に読み物として面白いので、フロイデ様にも是非読んで頂きたいです」

表情豊かに語るの、アステイスも何だか微笑ましくなる。

「はは、わかりました。まだ暫くはベッドにお世話になりそうなので読ませて頂きます」

「本当ですか？ じゃあ私今すぐ持つてきます」

立ち上がるアリアを見てアステイスが慌てて静止する。

「あ、いえ、お手を煩わせるわけには」

「私を庇って負傷したのですから、それくらいさせてください」

語気を強めてそう言われれば、アステイスも引き下がるしかなかった。儂げな印象がある彼女だが、意外と気が強いのかも知れない。

「わかりました、お手数をおかけします」

「とんでもありません。ではまた後ほど……」

アリアはそう言い残し、部屋を後にした。

其の六十　　〱 乾坤一擲（表） 〱

本を抱えて病室に戻ってきたアリアを見て、アステイスは眉を上げた。先ほどとは打って変わってやたらプリプリしているように感じられる。アステイスが口を半開きにしたまま自分の顔を見ていることに気付いたアリアは、慌ててその表情を消した。

「お、お待たせ致しました」

「ありましたか？」

「あ、はい。持ってきたのは一巻だけですけれど、何しろこれだけ分厚いので二、三日ではとても読めないと思ひまして」

アリアは静々とベッドに近づき、アステイスに本を渡す。アステイスは本の重みを感じ取り、なるほどと思う。ちよつとした辞書くらいの厚みはあるし、南瓜くらいの重さもある。

「はは、これは読み応えがありそうですね」

「良かったら感想も後で聞かせてください。……本当なら、もう少しお話をしたかったです。色々雑務もありまして」

「ああ、お気遣いなく。全然気にしていませんよ」

「……全然？」

アリアの表情が微かに曇ったが、アステイスはそれに気付かなかつた。

「ええ、全然。……どうかなさいましたか？」

「……何でもありません。では、ごゆつくりっ」

アリアはそう言い残し、部屋を出ていく。先ほど入ってきたときには気にならなかったドアの開閉音が、やたら大きく耳に残った。

二時間ほど読み耽っていると、ドアが二回ノックされた。アステイスが入るように促すと、ノブリスとキールの二人が部屋に入ってくる。アステイスが立ち上がりかけると、ノブリスが手の平を向け

る。

「そのままでもいい。オルフィ達から貴方の願いは聞いた。それにアリア様からも、な。俺としては、エル・クレスを本当に落とせる見込みがあるなら兵を貸すのも吝かやぶらではないと考えている、が」

ノブリスはちらりとキールを横目で見る。

「現在の状況では、相手もまさかこちら側から攻めて来るとは考えていまい。だが、諜報兵くらいは潜伏しているだろうし、こちらが出兵するタイミングは直ぐバレるからな。何はともあれ、詳細を聞いてからじゃないと判断出来ない」

「あれ、オルフィは作戦の内容を君達に話していないのか？」

「悪いが、あれだけだったらとても兵は送れない。肝心なことが盛り込まれていないからな」

「肝心な事？」

ノブリスが首を傾げると、キールは腕を組む。

「エル・クレスを奪った後のことさ」

「……ああ、そういうことか」

仮にエル・クレスを奪ったところで、それを維持できなければ無駄になる。要害の地を奪えばイアニス教の信者達が大勢味方に付く可能性もあるが、彼らがそのまま戦力として使えるわけではない。べール軍がエル・クレスで敗退したのは兵の訓練不足と統率力の差によるところが大きかったのだ。

「うちの傭兵達が増えれば、アンタの提示したやり方で陥落させることは可能だと思う。しかし、エル・クレスを奪ったところで釘付けにされては意味がない。いくら堅牢名高き町でも、帝国軍の圧倒的物量に堪え切れるほどじゃない。苦労して奪った町が直ぐ後で奪い返されるようじゃお話にならないってことだ」

「……わかつている。正直言つて、その後のことは賭けになる。が、帝国軍に勝つためには貴方達の力がどうしても必要だ。だから、私も貴方達を信用して話す事にする」

「……信用？」

「作戦……とは言えないかも知れない。だが、これが私の覚悟そのものだと思つて聞いて欲しい」

アステイスは両手を組み、ゆっくりと語り始める。

アステイスの話聞き終えたノブリスとキールは揃つて難しい顔をしている。

「……本気か、そんなことをしたら帝国側もただでは」

「いや、悪くはない」

「キール……」

「……悪くはない。が、アンタ、本当にそれをや……」

キールは床からアステイスへと視線を移す。

「……以前から常々考えていたことだ。既にイグニス、私の従者にはそのことを伝えてある。もう私にやり方を選んでいられる余裕はない。オルフィの言うように私は様々な者達の運命の流れに巻き込んでしまっている。その責任を果たす時がやって来た。ただそれだけさ」

アテライデを反帝国へと傾ける手助けをしてしまった以上、東部諸国が敗北するのを指を啜えてみている訳には行かない。アステイスは覚悟を決めていた。

キールとアステイスの視線が絡み合う。ノブリスが再び口を開く。「……だが、そんな真似をすれば批判が紛糾するのは確実じゃないか。反つて帝国軍の結束力を高めてしまう可能性だつてある」

「一時的にはそうなるかも知れない。だが、それを補つて余りあるメリットが得られるのは確かだ。ドライに考えればな」

ノブリスはアステイスを見る。

「フロイデ殿、もう一度だけ聞く。それをすることに對して貴方に葛藤はないのか？」

「もうない」とアステイスは即答する。

「……そうか、ならば何も言つまい」

キールが窓の外へと目をやる。

「もしかしたら、帝国内の不満分子がこぞつてこちらに付いてくれる可能性もある。勿論、その逆パターンもあり得る。不確定な未来に身を投じることになるが、敗色濃厚な今よりは少なからずマシだろう」

「じゃあ、兵を貸してくれるのだな？」

キールは腕を組み、目を閉じる。

「ノブリス。今現在、ベール軍の人数はどれくらいだっけ？」

「前回の大勝利で多少兵が増えたが、戦力として当てにすることはできないだろう。まともに使えるのは残り続けた兵達だけだ。およそ一万というところだな」

「二千ほどで構わない、割けるだろうか」

「そんなケチくさいこと言うな。五千でいいだろう。可能ならシユヴァイ^{II}オルトフも始末しておきたいからな」

戦力の半数を。キールもアステイスの策を保証してくれたということだ。

「……十分だ。感謝する」

「ただ、このことは他の者達には漏らさないでくれ。特に、オルフイが耳にしたら猛反対しそうだからな」

キールの言葉を聞き、アステイスが笑おうとしたが顔の筋肉は上手く動かなかつた。彼女はこのような方法を選んだ自分を軽蔑するだろうか。そんな思いに囚われ、一抹の恐怖に襲われた。

今後の予定を確認し、ようやく二人が席を外した頃には日はどっぷりと暮れていた。入れ替わるようにして、アリアが銀のトレイに夕食を乗せてきたのを見てアステイスは慌てる。

「ア、アリア様。そのようなことまでなさらずとも……」

「いえ、良いのです。今は城も人手不足ですし、私もやれる限りのことをやらせていただきたいので」

責任感と慈愛に溢れる言葉が耳に心地良く響く。アリアは一旦机にトレイを置くと、ベッドの脇に置いてあった軽くて丈夫な木の板を手に取り、ベッドの柵の穴に嵌め込んで即席のテーブルを設置した。

「お、恐れ入ります」

申し訳なさ感謝を含む言葉を口にし、小さく頭を下げる。

ゆったりとした夕食の時間を終えると、アステイスはベッドに、アリアは椅子に座りながら小説談義を始めていた。

「？聖女光臨？、中々面白そうです。まだプロローグを終えたくらいですけど。アルマダリアニスがちよっと想像していた人物像と違いました。相当なお転婆だったのですね」

「本当ですか？ 良かった、自分の面白いと思っている物に駄目出しされると結構ショックですから」

アリアは朗らかに笑った。

「アリア様は、今ほどのような本をお読みになつて居るのですか？」
「つい最近読み終えたのは？ 継続鼓動？ と？ バランディアの英雄譚？ ですね」

「…… バランディア」

アステイスが呟くのを聞き、アリアは細い眉を上げた。

「やはり有名なのですね。アステイス様もご存知でしたか」

「え、ええ。まあそんなところですよ」

この言い方が引つかかったのか、束の間アリアは不思議そうな顔をした。アステイスは僅かに目を伏せ、タオルケットを軽く握る。

「読み終えたということですが、宜しければ感想を聞かせていただいても？」

「ええ、勿論。　　そうですね。全体的には面白かったです。王道と言われているだけあって骨組みもしっかりしていますし、脇役も立っていますよね。ただ、一つだけ疑問を申しますと、あまりす

つきりした終わり方ではないような気がします」

「終わり方？」

「大国を退けた所でおしまいになっていますでしょう。その経過は事細かに書かれているのに、その後のクレージュとエリス姫がどうなったのがどうもあやふやで、この物語はどうも完結していないように思っています」

「そうか、言われてみればそうかも知れない。全く気付かなかったな」

同じ本を読んでも、メリッサとはこうも視点が違うのだな。年齢も離れているし、育ち方も全く違うのだから当然と言えば当然なのかも知れないが。

「何と云うのでしょうか。クレージュは如何にも作られし英雄の様に感じるので。戦争とはただただ悲惨な物です。私も戦場に出てそれをはつきりと感じました。ですが、バランディアの英雄譚からは生々しさが殆ど感じられません。作者が意図的に省いているのかも知れませんが、他の叙事詩や戦記と比べますとそれが殊更顕著に感じられるのです」

「そういえば、あの話はアクション部分がそんなにはなかったですね。むしろ交渉の巧みさと主役の二人の心の動きに注視している」

「ええ。実際、そうやって真っ直ぐに生き抜く事が出来たなら素晴らしいです。けれども、現実には周りもそう簡単には迎合してくれませんし、強い相手を目の前にして一緒に戦おうという人物も殆どいない。清廉潔白な行動を貫くことで道が切り開けるかと言つと、決してそんなことはありません。少なくとも、真に非道な者達の前には……悲しいまでに無力です」

アリアは物語の清々しさと、現実のおどろおどろしさを対比させているのだろう。アステイスはそう感じていた。信じていた周りの人達がどんどん離れてゆき、道が閉ざされかけている現実を見れば、信憑性を疑うのも無理からぬことだ。

「……以前、キールさんが言っていました。戦争は人の世が続く限

り永遠に無くならない、と。それを聞いてから、いえ、それはきつかけに過ぎませんね。戦争が始まった時から私の中で信仰が揺らいでいたんです。人の善性に訴えかけるイア二スの教義は正しくなかったのかな、とそう考えてしまっんです」

「善かれと思つてやったことが悪い結果を招く事は往々にしてあるものです。大切なのはそこから学ぶことでしょう。人はあざとい生き物で、常に物事を天秤に乗せています。それはどんな善人にしてもし悪人にしても変わりありません」

「天秤、ですか？」

「善性に寄る者は、周囲の者達の感謝を得ることに喜び、悪い言い方をすれば優越感を感じています。重要なのは誰かが自分に感謝している、好意を抱いているのを知ることです。それがその人そのものに対してなのか自分に理のある行為に対してなのかはわかりませんけどね」

逆に、悪性に寄る者は悪事を働くことによつて周囲の者達の不興を買う。しかし、人に害を与えることによつて相対的に自分の価値が高まる。詰まる所、自分の価値を人より高めたいという潜在的な目標が共通しているのだ。たとえそれがどのような悪人であっても「悪事で得られるそれは、錯覚ではないのですか」

「周りの者がそう思つても、当の本人がそう思つていなければその錯覚こそが真実です。何が言いたいかと申しますと、人の善も悪も自己愛が発端となつているということですよ」

「……人に尽くしたい、幸せになつて欲しいと願う心も、ですか」
「何かをしたいという気持ち、それは欲とも受け取れます。人の世というものは欲の押し付け合いですから必ずどこかで摩擦が生じます。それらは熱を帯び、やがては争いの火種となる。人が生きている限りその問題から逃れることはできないでしょう。その意味で、キール殿の言つた事は的を射ている」

「……非暴力は、有り得ないのですね」

と言うよりは、貫き通せるほどこの世界が優しくない、と言うの

が正しいか。

「相手の物分かりが悪いのですから致し方ありません。どんな事情があれ、自分か、自分の周りの者に危害を加えた者に対して慈悲を与える必要はないと考えます。譲れない一線を傲然と踏み越えて来る者には相応の報いを以ってしかるべきです」

邪魔立てする者は誰であろうと潰さねばならない。どんな手段も躊躇うな。彼女が殺された怒りを忘れてはならない。自らにそう言い聞かせ、信じ込ませる。

一瞬、アリアの顔に陰が過った。アステイスはそれを見てきよんとし

「あ、す、すみません……」

身を竦ませながら謝罪の言葉を口にしたアリアを見て、今度は申し訳なさそうに顔を伏せた。それっきり、彼女に顔を向けることが出来なかった。

自分は今、一体どのような顔をしていたのか。傍にある鏡を見る勇氣もない自分自身に、アステイスは恐怖していた。

885年 3月10日

アステイス達がベールに到着してから一週間後、アテライデにいたイグニス元には伝書鳩が舞い込んでいた。文面を見て、手紙を持つ手に自然と力が籠り、紙がひしゃげた。

「……やはり、決断されてしまったのか」

アテライデで再会を果たした時に胸の内を聞かされてから一年足らず。選択の時は思いの他早くやってきた。

東部諸国の要であるシャンテールが敗れば、最早手段を選んでいられないことくらいわかっていた。それでも、心のどこかで思い直してくれるのではないかという期待を捨て切れなかった。だが、その儚い希望は潰えた。

「何故アステイス様だけが、こんなに辛い思いをしなくちゃいけないんだ……」

イグニスには悲しそうに目を瞑る。閉じた瞼に押し出されるようにして、涙が一筋頬を伝った。

メリッサを殺されたことで決して癒えない傷を心に負っているというのに、この策はその傷を更に抉り、広げる行為に他ならない。

だが、イグニスはそれがアステイスにしか実行が不可能だということを理解している。そして、それを成し得ることが将来どれほど大きな意味を持つかも。考えを深めるにつれて、これほど決定的に帝国を揺るがす策はないことを思い知らされる。

アステイスの前でやるといった以上はその信頼に応えなければならぬ。彼が負う傷に比べれば自分が負う傷など些細な物であるはずだ。イグニスは目を開き、毅然と立ち上がる。その瞳には決意の輝きと自嘲の陰りが縋い交ぜになっていた。

其の六十一　く待ち人現る（表）く

885年　3月22日

シュヴァアイ「オルトフがネルガルよりエル・クレスへ赴任してから三カ月余りが過ぎていた。彼本人の心持ちとしては何度となく戦場に赴くと思つた目前で異動を命じられ、あまり面白くはなかつただろう。特に、最大の戦いと目されていたシャンテール会戦に参加出来なかつたという事実は彼のプライドを相当に傷付けていた。彼はそんな不満を表面上押し殺しつつ、日々の政務にあたっていた。

だが、抱えている不満を全て隠し通せるわけではなかつた。それは例えば、仕事に取り組む態度の節々に現れることがある。彼が現状の任務に対して没頭できていないのは、周りの者達の目にも何となく察する事が出来ていた。エル・クレスが帝国にとって対ベールの要所であることは疑いないが、やっていることは辺境と何ら変わらない。何しろ相手に攻めて来る余裕がないのだ。

とはいえ、どこか心ここに非ずといった様子^の指揮官を見て、元々エル・クレス防衛を生業にしている者達としては自分達の仕事を馬鹿にされている気がしないでもない。そうと思えば、少し反発してやりたくもなるのだつた。その微細な軋轢^{あつれき}はオルトフが進めるべき現地兵の信頼獲得に遅れを生じさせていた。

シュヴァアイ「オルトフは元々南部の町、キキヨウの鉱山経営者の息子だつた。それなりに裕福な生活を送っていた少年の時分に周囲の者から剣の才を見出され、十三歳の時にはクルートにある帝国の軍学校に留学という形で送り出された。

彼は元々の真面目な性格もあつて教官たちの教えを吸収し、メキ

メキと頭角を現していった。そのうちに、ジルバート、アステイスの後に続く逸材として期待されるようになった。

だが、入学して僅か一年後、鉱山を経営していた父親が何人かの鉱夫と共に他界する。不運にも採掘中に有毒性のガスを掘り当ててしまった上でのことであつた。

それによつて鉱山は閉鎖され、オルトフは家族共々莫大な借金を背負う事になった。安全に関する注意義務を怠つたとして遺族に対する補償をせねばならなかつたからだ。

学校に行く余裕すらもなくした彼を救つたのは、今は亡きモートン・エルゲート元將軍であつた。彼はオルトフの剣の才を惜しみ、同郷の好もあつて一時的に借金を肩代わりしてくれたのである。

以来、前にも増してオルトフは剣技を必死で磨き、勉学に勤しんだ。一刻も早く将として身を立て、エルゲートに対する恩を借金と共に返済したかつたからだ。

そんな傍ら、彼は勇気付けられる話を耳にすることになる。自分と同じ平民出自で、齢も一つ上でしかないアステイス・フロイデという少年が皇帝に見出され、側近として取り立てられたということだつた。

オルトフはアステイスに妬みとも憧れとも付かぬ感情を抱いた。自分が必死に頑張っているからこそ、それを上回る存在に驚かされ、続いて対抗心を燃やし始めた。

先に行く彼に追い付き、いずれは追い越すのだ。オルトフはその一念で出世街道を駆け上がった。いつの間にかアステイスの背中は、オルトフの格好の目標となつていた。皆の尊敬を集めているジルバート・ミレンでさえ、そうはならなかつた。

ベルガモット將軍の副官になつてからはその名も將校の知る所となり、帝国内でも一目おかれる事となつた。エルゲートへの借金を返済し終え、その一年後に晴れて准将に昇格する通知を持った連絡員が目の前に現れた。オルトフはまたとなく喜んだ。自分が憧れていたあのアステイスに、ついに肩を並べる事ができたのだ、と。

だが、同時にオルトフはその場でアステイスの反逆を聞かされることになった。目標としていた男の理由が見えぬ消失はオルトフを戸惑わせ、それ以上に落胆させた。彼が軍を追われたことにより、立場は上に成ったかも知れないが、自分はこんな形で彼を追い越したかったわけではない。正々堂々と、同じ条件で追い越してこそ意味があつた。

彼は心の奥底で叶わぬ再戦を望んでいた。そして、その願望は真に皮肉なことに、敵味方同士として成就することになる。

「では、今後の警備計画はこれで宜しいですか？」

第六軍に所属する副官、今年齡六十五になるベラーシユは書類の束をトントンと机で叩き、紙の両端を纏めている。彼はオルトフが将になってから初めて付いた副官だつた。白くなり始めている顎髭を胸元まで伸ばし、口元も髭に隠れて良く見えない。物腰は非常に柔らかく、反面かなりの几帳面で整理整頓には口煩い。

「ええ、悪いですね。無茶を言いました」

「いやいや、ブラージウス様の命令とあらば致し方なきこと」

オルトフは頷き、背もたれにゆっくりと体を預けて大きく息を付く。

「……お疲れでいらつしゃいますな。気分転換に城下町にでも繰り出してはどうですか？　こちらには賭博場や、色町もございますれば」

殊更に色の部分を強調し、悪戯つばく笑う老人に、オルトフは曖昧に笑いを返す。

「人生を憐むはかなみならばそれも良いかも知れないですけど、今はまだ、束の間の高揚に身を委ねる気分にはなりませんね」

「ふむ、それは聊ちやうどか勿体ない気がしますな。何事も経験してみて損はないですぞ？　ああ、悪事を除けば、の話ですが。……それにしても、オルトフ様は何時まで経つても敬語が抜けませぬなあ。押し

も押されもせぬ準將軍なのですからもつと堂々とされては如何ですか？」

「目上の人には礼を尽くせ、というのがエルゲート様の教えでした。脳にこびりついた考えを今から削ぎ落とすのは、中々。やはり私に将というのは似合わないのかも知れませんか？」

カップを持ち、ブランデー入りのミルクを啜る^{すす}オルトフを見て、ベラーシユは書類を腋に抱えながら口を開く。

「この齡で未だに中佐の私が言うとなげ惜しみに聞こえるかも知れませぬが、将というものは才があれば成れるという者ではないですぞ。強靱な意志、良き出会い、或いは莫大な富、最後に天運」

指を折りながら言葉を紡ぐベラーシユをオルトフは黙然と見る。

「失礼ながら、オルトフ様はエルゲート様との出会いがなければおそらくその若さで将になるのは叶わなかったでしょう。しかしながら、その出会いを活かしたのは貴方の才であり、成長への意志ではありませんか？ 人とは納まるべきところに落ち着くもの。今この場にいれば、好む、好まぬに関わらず、そこが貴方の居場所ですぞ。違いますか？」

柔和な表情を浮かべているが、反して言葉は耳に痛いものがあった。

「それは、確かにその通りかも知れませんか？」

「……信じましたかな？」

「え？」

ベラーシユはにやりと笑みを浮かべる。

「実を申せば、これは現状に不満を持っている者への叱咤の言葉でもありません。本当ならその後、自分が変わるにはどうすれば良いかを真剣に考えた事があるか。それを問い質す^{ただ}文言なのですよ」「現状に不満、ですか？」

「ああ、決してどなたかの様に反乱を、と仄めかしているわけではありませぬぞ。退こうと思えば何時でも退くことが出来てしまう。それ故に敢えて自ら退路を断ち、その場に留まる事も大切だと、そ

う言いたかったのです。人生は泳ぎと一緒に、その場に留まっていたように見えても足を動かさねば沈みます故。そうやって波に巻かれてもがいているうちに、見失った島の代わりに新たな島が見えて来るかも知れませんか」

オルトフの目が見開かれる。ベラーシユはその様子を見てどこか満足そうにドアへと向かう。

「ほっほっほ、こんな老人の戯言に惑わされるとは、いやはやオルトフ様はまだ若いすなあ。大いに悩み、苦しむが宜しい。欲を言えば将に相応しき、将にしか達せぬ島を目指して頂きたいですな。尤も、得てしてそういう島は遙か彼方にあるものですが」

その言葉を最後にベラーシユはゆっくりと一礼し、部屋を後にした。

「……悩み、苦しめか。まるで親か教師みたいなことを言う」

如何にも説教臭いが、年を重ねた彼の言葉には不思議と説得力があった。そして、ふと思いを馳せる。准将でなければ出来ぬ事とは何か。平民出の自分でなければ出来ぬことはあるか。

現状、帝国民は確かに通常以上の暮らしを獲得している。だが、相対的に敵対勢力の国民は苦しくなっていくだろう。それを見過ごすのはあまりにも忍びない。そもそも、国の方策は殆ど民の預かり知らぬところで決められてしまうものなのだ。

シャンテールが敗れた以上、もう戦争は終わる。その後は軍備を縮小して無駄な費用を節制し、それを救済費用に充てる必要があるだろう。小さな一歩かも知れないが、一歩には違いない。自分のやり方で少しでも苦しむ者を減らしてみよう。

思考に耽るオルトフの耳に、慌ただしい足音が近づいて来る。オルトフは、彼にしては珍しく不満を隠さずにドアの方を睨む。遅れてドアが開き、オルトフが窘めようとした刹那。思いもしない言葉が伝令兵の口から発された。

「申し上げます！ 見張りの兵がエストラル溪谷の辺りを巡回中、反逆者アステイス「フロイデを発見したとの事！」

「な、何だと!？」

オルトフが勢い良く立ち上がった。座っていた椅子が四足を投げ出して倒れ、その音が部屋中に響いた。

「それは確かなのか！ まさか、彼はベールと通じているのか？」

「そ、そこまではわかりませんが、その話を聞いた兵の一部が我先にと武器を持ち、城を抜け出しております。おそらくは南に向かっているものと」

「直ぐに引き止める！ 彼が何の策もなしに姿を見せるわけがない！ マリスノリスでもアテライデでもそうだったのだ！」

オルトフの物凄い剣幕に、伝令兵はたじたじとなりながらも弁を述べる。

「で、ですが彼には莫大な賞金がかかっております。第六軍だった者はともかくとして、目が眩んだ現地兵には私如きの命令は……」

「……そうか、そうだったな」

オルトフは後手に回ったことを痛感し、唇を噛んだ。

「……ならば南門を封鎖しろ。直ぐにもだ。わざわざ姿を見せるくらいだ。伏兵が近くに潜んでいる可能性は捨て切れない」

何しろ、あのアステイス「フロイデのやることだ。彼の恐ろしさは誰より自分が一番理解している。オルトフにはその確信があった。「え、しかし抜け出した兵は如何するのですか？」

「待機命令に違反したのだから釈明の余地などないだろう。最早城に入れる必要もない。彼らが敗れたとして、こちらが責を取る必要はない。急ぎ残っている人数を把握しろ。それと共に臨戦態勢を整えさせるのだ。ブラージウス様に早馬を送るのも忘れるなよ」

テキパキと連絡事項を羅列するオルトフに、伝令兵は何度も頷く様に命令を頭に入れてから部屋を飛び出していった。

「……これは運命か。それとも天佑と呼ぶべきか」

口元には自然と笑みが浮かんでいる。それに気付き、何とか消そうと試みるが上手くいかなかった。

こればかりは仕方ない。貴方と面と向かって戦えるのかも知れないのだから。

恋人を待ち侘びるのにも似た心の高揚を確かめるように、オルトフは胸元にゆっくりと手を置き、切なげな溜息を漏らした。

其の六十二　　馬の差（表）

夕暮れ時、大平原を吹き抜ける風音に剣と剣の交錯音が混じる。エストラル峡谷の手前では早くも鋼の調が連続して打ち鳴らされていた。白い外套を身に付け、両の手に長剣と短剣とを握り締めるアステイスの前には、黒い鎧を身に付けた帝国兵の屍がエル・クレスの側から連なる様に横たわっている。

常時戦いに身を置くことにより以前にも増して洗練された剣技は、熟達した戦士をも難なく屠っていく。剣を振るう速度もさることながら足運びの速さ。経験に裏打ちされた位置取りと相手の即時行動に対する洞察力。己に向けられる殺意をさらりと受け流す心胆の剛さ。それらが積み重なることにより、歴然とした速度差が生じる。

三十億の賞金首を前にして、帝国兵たちは何故目の前の男がそれほど賞金をかけられたかをまざまざと思い知らされていた。己の握り締めている剣が、槍が、これほど頼りないものに感じたことはなかった。

隙がないとかそういうレベルではない。相手の動きが早過ぎて間合いが存在しないに等しいのだ。アステイスに猛然と斬りかかった。そう思った次の瞬間には目の前に彼の姿はなく、あらぬ方向から白刃が飛来し、意識を黒く塗り潰されてしまう。

切っ先を向けていても、十分な間合いを取っているつもりでも、次の瞬間には後ろに回りこまれていくかも知れぬという恐怖があった。知恵を持ち、武器を携えた魔獣を相手にしているかのようだ。

躊躇する者が後を絶たぬ中、金欲に目の眩んだ者が再びアステイスに向かつていった。しかし、剣が肌に触れる瞬間、アステイスはするりと横に回り込む。擦れ違いざまに、手に持つ短剣で首を掻き切りながら。兵は一瞬身体を大きく痙攣させ、悲鳴を上げることす

ら叶わず、前のめりに崩れ落ちる。回避行動と攻撃が一体化した剣術はあまりに自然で、それ故に底知れぬ恐ろしさがあった。

アステイスが握る短剣の鉤刃には血肉が固まった油脂のようにこびり付いている。特殊な形状をしているそれはソードブレイカーと呼ばれるものだ。その数本の鉤は攻撃より守備を主眼とし、相手の剣を巧妙に絡め取り、食い千切るために存在する。

盾剣とも呼ばれるその使い手はごくごく僅かである。装飾剣のような形状ゆえにかなり高価であるし、金属加工にも特殊な技術を要するため数が少ないのだ。一般的な剣に比べて刃身が短いためによほどの動体視力が無ければ使いこなすことすら出来ず、またその特殊な用途故に練習用の剣が存在しない。訓練する度に武器を押し折られたのでは金がいくらあっても足りないということだ。

その短剣を、アステイスは実に巧妙に扱っていた。殆どの兵は一合で斬られ、運良く鏢迫り合いに持ち込めた者もあっさりと武器を押し折られてしまう。頭がその後の対応策を巡らせようとしたその一瞬の隙に、対の剣が死角となつている脇から臍腑を抉る。

徐々に渓谷の方に後退してはいるものの、その身体には未だまともな太刀傷を負っていない。その様子を見て、次第に兵たちは焦りと苛立ちを募らせていく。

歩兵たちの数がみるみる内になくなってゆき、残された者たちは、援軍はまだかと後方を見遣る。すると、自分たちと同じく莫大な賞金に目が眩んだ者たちが、エル・クレスの方から大行列を成して近づいて来ていた。空から見れば巨大な黒蛇がうねっているようにも見えるだろう。

これだけいれば、と思わないでもなかったが、今度は逆に賞金の行方が心配になってきた。自分がそれを一部なりとも手に入れられ

なければ全く意味がないのだ。アステイスを囲む兵たちは安堵と不安をないまぜにした視線を、駆け付けた兵たちに向けていた。

押しかけてくる大軍を見て、アステイスは流石に不利と悟ったのか、峡谷の入り口へ退却する動きを見せた。異変に気付き、慌てて追いかける帝国兵たち。だが、追っている最中、アステイスと帝国兵たちを分かつように爆発が生じた。短い草の生えた地面が抉れ、土砂が四方に咲いた。兵たちに直接被害は及ばなかったものの、辺りには生じた土煙がもうもうと立ち込めた。

一体どこから攻撃されたのか。兵たちは伏兵の可能性を考えながらも、アステイスを見失って溜まるものかと視界の悪い中、白い外套を必死に探す。

ややあつて、いたぞ、という叫び声に反応し、兵たちがそちらの方へ慌しく動き出す。晴れていく視界の中、赤毛の男が馬に跨り、南の方へ逃げていく姿が目映った。おそらくは峡谷の入り口近くにある岩陰にでも隠していたのだろう。

先ほどまで足止めしていた歩兵たちが慌てて追おうとするものの、後方からの蹄の音と馬の嘶きに気付く。後ろを振り向いて顔を蒼白にし、慌てて横に飛び退いた。

エル・クレスからの後発組、騎兵隊が歩兵たちを掻き分けるように、颯爽とアステイスの乗る馬を目掛けて追っていく。歩兵たちはその光景を目の当たりにし、億万長者の夢が諸手から零れ落ちたことを悟ったのだった。

エストラル峡谷を駆け抜ける騎兵隊たちは白い外套を視界に捉え、

思わず雄叫びを上げた。三十億の賞金が目の前にある。それが自分の物になれば、家族共々一生遊んで暮らせる。地が振動する音も相俟って興奮の坩堝に誘われていく。

ところが、帝国兵たちが必死に追いつがれども中々距離が縮まらない。どうやら相手は余程の駿馬に乗っているらしい。後を追う帝国兵たちはそう判断する。

それはあながち間違いではなかったが、実はそれ以上に重大な見落としがあった。その見落としとは、相手が軽い外套を着ているのに対し、自分たちが鎧や小手、具足を身に付けていることであつた。

マリスノリスにおけるアステイスの大立ち回りは帝国兵はおるか、そこいらの子供たちも知るところであつた。一人で百を超える帝国兵を斬つた実力者に対し、防具なしでは何とも心許ない。当然のようにそう考えた兵たちはアステイス発見の報を受け、少なからず防具を着込んでいた。中には鎧や胸当てを着ていない者もいたが、それでも金属製の籠手や具足くらいは身に付けていた。

結局のところ、その重さを支えるのは自分たちが跨っている馬である。将が好んで身に付けるような、板金の技術を駆使した軽鎧でさえ20kg近い重さがある。一般的な兵卒の基本装備である比較的安価な鎖帷子くさりかたてひらであればもっと重い。籠手や脛当てを付けただけでも軽く数kgを超えるだろう。

冷静に判断すれば気付きそうなものであるが、そこは目の前に大金をぶら下げられた兵士たちである。殆ど無意識のうちに馬に鞭をいれ、ペース配分を考えずにアステイスを追い立てる。

馬が同じ能力であれば、背負っている重さの分だけ遅れを取るようになるし、当然スタミナの減少幅も大きくなる。大軍で勢いよく攻めているように見えて、その実帝国騎兵たちは不毛な消耗戦を強いられている。

更にいえば、アステイスの乗る馬と違って帝国兵たちの馬はエル・

クレスから峡谷に至るまで、既に数kmの距離を走らされているのだ。岩陰に待機させていた、体力が十全の馬に追い付くのはかなり無理がある。

しかしながら、相手との距離は縮まったり遠ざかったりを繰り返して、あまり差が付いていなかった。いずれは追い付けるのでは、という淡い望みを、帝国兵たち最後まで捨て切れなかった。

追っているうちに、速度差から隊列はかなり細長くなってきている。ここまでくると誘いこまれているのではと疑い、渓谷の両側の崖をしきりに警戒する者も出始めていた。しかし、一向に伏兵の気配はなかった。

追走が始まってからおよそ三十分。帝国兵の乗る馬たちが次第に疲労に喘ぎ始め、足元が覚束なくなってきた頃、追走劇は思わぬ幕切れを見せることになった。

ある程度差が開いたところで、アステイスは白い外套を脱ぎ捨てた。その背中から羽根が生えてきたのを見て、最前列にいた帝国騎兵たちは目を剥いた。

アステイスは走っている馬に乗ったままの状態から白い両翼を大きく広げた。風圧を受け止めると共に馬の背から飛び降り、翼を何度となくはためかせた。その度に身体が1m、2mと空に向かって上昇していく。

馬鹿な、アステイス！ フロイデは空をも飛べたのか、翼人だったのか。そう誰もが勘違いした。手にした武器が相手に届くことはないのだと悟り、愕然とした。

殆ど間を置かずに、ばさりと何かが地に落ちた。それに目を細めた帝国兵たちが置かれた状況を察し、顔色を蒼白に変える。それは、爆煙の中でアステイスと入れ替わった翼人のジヨウが被っていた、

赤毛のウィッグだった。

其の六十三　　く突破口（表）く

ベール軍がハンディックウランダーとローラントラフオムの混成軍を撃ち破った際に獲得した帝国軍の鎧はこの戦いで大いに役立つこととなった。アステイスは、帝国兵に扮したベールの兵を自分に仕向けるといふ大胆な策を採用した。

エル・クレスの帝国軍が警戒のために斥候を展開していることを、アステイスたちは当然の如く予期していた。それを見越した上で、アステイスは彼らにわざと顔を晒すことにした。マリスノリスの策に似ていないこともないが、今回はもつと用意周到なものである。向かってくる斥候を難なく排除し、残った者たちが慌てて逃げていくのを見計らい、峡谷側から帝国兵に扮したベール兵たちがやってきてアステイスを囲む。

やがて、いち早く先んじた帝国兵たちが先着していた帝国兵を見て数的に有利だと思ひ込み、アステイスに向かつていく。が、憐れにも援護を貰えずに沈んでいく。よくよく観察すれば違和感に気付いた者もいただろうが、及び腰な兵など探せばそこら中にいる。ましてや、賞金首を仕留めるのは早い者勝ちである。我先にと逸る帝国兵たちにそんな余裕はなかった。これは卓越した戦闘能力を持つアステイスだからこそ出来る策でもあった。

ややあつて、処理し切れそうにない大軍が遠くから押し寄せてきたの見止め、アステイスはようやくやく退却を始めた。帝国兵に扮したベール軍は追う素振りを見せながらも炎の魔法、爆裂を炸裂させ、シャ・フレイル帝国兵の追撃を一時的に遮断した。つまり、伏兵は帝国歩兵の中に混じっていたのだ。

爆煙の中、アステイスは身に付けていた白い外套と血に濡れた長剣を魔法で生じた火に放り込み、ソードブレイカーを鞘に仕舞った。下に着込んでいた黒服の姿になり、懐に忍ばせておいた黒いウィツグを被った。

時を同じくして、アステイスの後方にある岩陰で待機していたジヨウが馬に乗ってそちらへと近づいていく。変装を終えたアステイスは同じく自分に変装済みのジヨウと視線を交わし、頷き合うと、「いたぞ」と声高らかに叫んだ。これが入れ替わりの真相であった。

午後六時

エストラル峡谷で帝国騎兵隊の追っていたアステイスが偽物だと露見した頃、時を同じくしてエル・クレスの南西にベール軍の本体が現れていた。その数千余り。ベール側からしてみれば全軍の半数近くを投入しているのだから負ければ即滅亡に直結する。背水の陣で臨む兵たちの気概は鬼気迫るものがあつた。

シュヴァイ＝オルトフの指示により既に城門は固く閉ざされていたが、ベール軍は構うことなく北西と南の二手に分かれていく。

この時、南側の城門ではアステイス発見の報を聞き、賞金に目が眩んで先走った兵たちが立ち往生していた。既にオルトフの厳命により門を堅く閉じられ、城の中に戻れなかつたためだ。

無論、この時点で外に出ていた兵たちは将の指示を仰ぐこともなく、勝手な自己判断で行動したのであるから重大な軍規違反を犯している。それでも彼らは何とか入れて貰おうと内側の門兵と押し問答を続けていたのだが、そのような状況下で敵襲の報が舞い込んでくる。それを聞いた兵たちは一挙にパニックに陥り、このままでは犬死する、と散り散りに逃げ始めた。

一方、そこから数kmほど南では本体と分かれたバール軍なけなしの騎兵数百が、丈夫な皮袋を引つ提げてエストラル峡谷の入り口に殺到していた。帝国兵たちの大半は既に賞金を諦めて城の方に向かっていたため、その場には少数しか残っていなかった。伏兵が突撃してきたことに気付き、数的不利を悟った帝国兵たちは慌てて城の方へと引き返していく。

そんな逃亡兵たちを無視し、騎兵たちは指揮を執っているエルウ
「ノブリスの命に従い、馬から降りて袋の中に入った大きめの鉄鋸てつじょうを峡谷の入り口付近にばら撒いていく。平坦だった地面はみるみるうちに針の山と化していき、やがては足の踏み場もないほどになる。アステイスの目論みでは、陽動された騎兵の本隊が引き返すまでにかかる時間は、馬の疲労を考慮して一時間以上かかると予想していた。これはあくまで、断続的に戻ってきた騎兵たちへの足止め策であった。

作業が終わり、全ての兵たちが馬に跨ったのを見届け、ノブリス率いる隊は城への進撃を宣言する。

エル・クレスは交通の要所であり、古くから交易で栄えてきた大きな城下町だ。但し、それ故の弱点も存在した。町の大きさ故に、兵の分散を余儀なくされるのだ。その穴を埋めるべく作られたのが町をすっぽりと囲む強固な防壁である。

石壁の高さはおよそ8m、厚さも悠に6mを越し、投石機や魔法を用いても容易には崩れない。壁の上にはある程度の兵を展開することも可能であり、弓兵が応戦するための厚い木の板や矢狭間などが各所に設けられている。

壁の破壊が不可能となると、梯子をかけたりにして城壁を突破する、城門を撃ち破る、或いは壁の下に穴を掘るなどの方法を取らざるを得ない。どの策にしても防壁への接近を余儀なくされるのだ。

オルトフは赴任して間もないながら、エル・クレスの特徴を良く掴んでいた。陽動に引っかけた兵を除いても、未だ八千近くの兵を有していたし、その指示に淀みはなかった。ベール軍が向かってくるとの報を受け、オルトフは城に千の守備兵を残し、二つの城門手前に三千ずつの守兵、城壁上にも千を越える弓兵を展開し、城下町に近づくベール軍への迎撃態勢を取った。

この時点で、オルトフは相手より自分たちの兵数が上回っているとは思っていなかった。既に日が沈んでおり、闇の中で相手の正確な兵数を知ることが出来なかったことも影響していた。

城を攻め落とすには防衛側の数倍の兵を要する。これは戦術の基本原則である。仮にも準將軍を務めていたアステイスがその原則を知らぬはずはなかった。マリスノリスの一件は考慮していたが、あれは今まで誰も試みたことがなかったから上手くいった奇策であり、二度目が通用する類の物ではない。相手の能力を認めているからこそ、少数の兵で城を攻めるなどしない、という思い込みがあった。

午後六時半

アステイスが密かに帝国兵たちの列から抜け出し、西側のベール軍本体と合流した頃。

破城槌や投石機など、攻城兵器を警戒していた防衛兵たちは、展開しているベール軍にそのようなものが殆ど見受けられないことに気付いていた。どうやって堅固な壁を突破するつもりなのか、防壁上の守備兵たちは戸惑いを隠せなかった。

ややあって、全身鎧に身を包むベール兵たちが車輪付きの木梯子をエル・クレスの城門に向かって押し始めた。前面に取り付けた縦長の分厚い木板に、後ろから梯子を寄りかからせた簡素な物である。

ただ、如何に平地とはいえ起伏はあるし、梯子車の重さも相当あることから動きはかなり緩慢だった。

城壁上に陣取っていた帝国弓兵たちは城門側に密集し、弓を引き絞る。そして、梯子車が射程範囲内に入った途端、一斉に矢を放った。あつという間に梯子は針ねずみのようになり、ベール重装兵たちが慌てて引き返していく。逃げていく様子を見て帝国兵たちはどんなもんだ、と歓声を上げた。

懲りずに、ベール軍が今度は五台、一挙に梯子車を前進させてくる。再び帝国弓兵たちが弓を構える。だが、梯子車のうち一台は、車輪が埋まっていた石に乗り上げたせいで近づく前に横に倒れてしまふ。残った四台も弓兵たちの射程圏内に入ったものから次々に矢を浴びせられていく。地面に刺さった矢が邪魔することもあって梯子車は揃って立ち往生し、ベール兵は梯子車を放置してすこすこと引き返していくのだった。

午後六時五十分

西門前で帝国兵たちがベール軍を退けている頃、その更に北では異変が起きていた。ベールの別働隊が、城壁に接近していたのだ。

城壁の上で見張っていた弓兵たちはおよそ数百の兵を前にして訝った。西門を攻略しようとする躍起になっているベール本隊と違い、その兵たちは梯子車もそれに準じる道具も用意していないようだった。鉄の爪にロープを結わえたようなフックロープでも用いるつもりだろうか。しかし、そういった物を用いて壁を上るにはかなり難儀するはずである。少なくとも、一挙に上るような真似は出来ない。

ともかく、敵が現れたのだから報告はしなければならぬ。北西側を請け持っていた兵隊長は南の防衛軍本隊に伝令兵を向かわせた。それから数分も経たぬうちに、ベールの別働隊は城壁のおよそ1

0m手前まで近づいていた。その間も帝国の弓兵たちが応射しているが、西門の防衛に多くの弓兵が駆り出されていることもあり、如何せん数が少ない。相手方が盾兵を用いていることもあって散発的に何人か倒せる程度だった。そうこうしている間に、ベール軍の魔法道兵たちが揃って魔法の詠唱を開始する。もしや城壁破壊を試みるつもりかと帝国兵たちが警戒した。しかし、予想は覆された。

「シャーフローズ
護氷！」

その詠唱と共に、防壁に密着するように透明な立方体が次々と作成されていく。その様子を見て帝国兵たちが呆気に取られた。

出来た一平方メートルほどの氷ブロックの上にまたブロックが重なっていき、階段状に積み上がっていく。初めの詠唱から一分も経たぬ内に、三階建てほどの高さがある城壁には7段ある氷階段が取り付けられてしまった。

城壁の上でその様子を見ていた帝国兵たちは大いに慌てた。弓兵たちが応射する間に新たな伝令兵を走らせる。

いち早く、アステイス、キール、ヒューリイ、最後にオルフィが水に濡れた目の粗い長布を下に敷きつつ氷の階段を駆け上がる。濡らした布が氷にぴたりと張り付き、即席の滑り止めになる。布に含まれている塩水が氷に冷やされて凍ったためだ。それを見計らうようにして魔法道兵たちも後に続くべく階段を上り始めた。

防壁上に上がってきた敵兵をどうにか排除しようと試みる帝国兵たちだったが、狭い足場では数より質が物をいう。場数を踏んだアステイスやアクア・ティ・アラの面々には敵わず、片っ端から倒されていく。程なくして、北西側の防壁上はベール軍によって完全制圧された。

やや遅れて、伝令兵から知らせを受けた兵たちが応戦に向かうべく西門の両側にある階段を上り、ベール軍の排除に向かっていた。しかし、密集した兵は魔法の格好の餌食だ。防壁を上り終え、既に

隊列を整えていたベールの魔道兵たちはキール、ヒューリイと共に盾兵に守られつつ前方に範囲魔法を展開する。押し寄せる帝国兵たちは全く数的優位を活かすことが出来ず、断続的に吹き飛ばされて城壁から弾き出されていった。

別働隊の獅子奮迅の活躍により帝国軍の動きが段々と慌しくなってくる。それをきっかけに、ベール軍の本隊は戻ってきたエルウノブリスの指揮の下、一斉行動を開始した。

其の六十四　　く決着（表）く

城壁上に陣取っていた帝国の部隊が蹴散らされ、北西部の城壁はベール軍に完全に制圧されていた。側面からの攻撃に帝国弓兵たちの半数近くが北側に向かう。

射撃密度が一段と薄まったのを機に、ベール軍本隊が西門目掛けでどっと押し寄せていく。ノブリスは兵たちに命じて先ほど戦場に放置していた梯子車を回収させ、邪魔になっっていた矢を素早く切り落とさせると、そのまま一気に壁面へ押し込んでいった。

城壁に上ったベール軍の勢いは留まることを知らなかった。個々の能力が高いこと以上に、ベール側はこれで負けたら家族共々終わりだという必死さがある。長く敗戦が続いてはいたが、一年以上に亘って実戦を積み重ねてきた経験はしかと血肉となり、アステイス、キールの二人の指揮に対応し得るだけの下地を備えていた。

狭い場所で隊列が乱れた帝国兵に対して、盾を構えた歩兵たちが前面に展開、ベール軍魔道兵たちが後方支援の形を取る。弓兵は数を揃え、且つ統制が取れば目覚ましい戦果を上げられるが、重装備の兵に対してはすこぶる相性が悪い。先制攻撃や不意打ちにこそ適しているが、相当に熟練している者でなければ動いている相手を狙うのも容易ではない。頭部や足を狙うといった曲芸めいたことは不可能に近い。怪我を負わせることは容易でも命を取るのはいはしい。

また、遠距離攻撃が可能というメリットこそあれ、連射が出来るわけではないのでその性能を活かすためには他の歩兵との連携が必須である。まさか城壁の上ここまで早く上られるとは想定外だったため、予め展開されていた歩兵の数が絶対的に少なかった。

アステイスの命によりベールの歩兵たちは頭を低くし、頭部と胸部を盾でガードしながら帝国兵たちに突撃していく。その様子を見て、帝国兵たちが慌てて弓を構えた。

弓矢で鉄板を貫くことは容易ではない。そのため弓兵は山なりの軌道で軽装備の後列を狙うのが定石だ。しかし、狙いを定める間にも、目の前では敵が猛然と自分らを目掛けて向かってくるのである。落ち着いて狙いを定める余裕などないに等しい。

引き絞られた弓から矢が放たれたが恐怖心が射線を固定し、殆どの矢は突撃してくる歩兵に向かっていった。敢え無く盾に、或いは鎧に弾かれ、箆が折れた矢が石床に散乱する。ベールの歩兵たちは怯むことなく、それをパキパキと踏み潰しながら前進、隊列を崩さずに盾の横から一斉に剣を突き出した。

鉄壁から棘が生えて迫ってくるような異様に、弓兵たちが顔色を蒼白にした。最前列の兵たちがじりじりと後退りを始める。

一人が逃げ出したのを機に臆病風が吹き荒れた。怯えが一気に伝染していく。一人、また一人と武器を放り出して逃げ始める。ある者は突撃してくる兵たちから一刻も早く遠ざかろうと味方を掻き分けるように押しのけていき、またある者は追い付かれると判断して無謀にも城壁から飛び降りる。断続的に悲鳴や苦悶の聲が上がったが、それをベール兵たちの放った咆哮が呑み込んでいった。

暫くして、やっと西門付近に展開していた部隊が到着する。同時にオルトフらは南門からの攻撃がないと判断し、南側に展開していた三千の兵を西門の防衛に向かわせていた。

逃げてくる兵と向かっていく兵が入り乱れる中、一丸となったベール軍が盾と剣を構えながら帝国軍に突っ込んでいった。

最初の一斉突撃で数人を斃し、そのまま盾を掲げて強引に押し込んでいく。帝国兵たちが鮎詰め状態になったのを見計らい、既に詠

唱を開始していた魔道兵数名が鴉雷ヴァ・ライールを発動。上空からうねるような白雷が立て続けに降り注ぎ、密集している帝国兵たちを巻き込んでいく。

落雷の音と同時に、聞くに堪えぬ絶叫が長々と木霊した。それは間近にいた帝国兵たちの鼓膜を破りかねないほどの音量だった。感電してはたばたと倒れていく味方を目の当たりにした後列の兵たちに戦慄が走った。肉や髪が焦げた不快な臭いが漂い始め、堪らず鼻と口を手で覆う兵たちもいる。

弓での攻撃を線と捉えるならば上級魔法は円に等しい。その広い攻撃範囲によって密集しているおよその場所に放てば敵の誰かしらに当たる。魔道兵たちは歩兵に庇われながら、自軍の歩兵を巻き込まぬように帝国軍の中列辺りを狙って雷を落としていく。

止められぬ猛威に帝国兵たちは焦燥に駆られた。己の剣が届く前に、もつという相手を目視する前に殺される。城壁に展開された弓兵隊は瓦解し、まとまった援護射撃は望むべくもない。一方的に殺されていくだけなのは火を見るよりも明らかだ。

兵たちの混乱が陣形を崩し、その隙に乗じてベール軍が攻め入ってくる。帝国軍はいつの間にか、西門手前の階段まで押し遣られていた。

「だ、駄目です！ 敵の勢いが止まりません！」

伝令兵の報告を聞くまでもなかった。オルトフは階段下にまで押された自軍を遠めで見、のっぴきならぬ戦況に歯噛みした。

ベール側の陣形は、明らかに防壁の上で戦うことを予め想定したものだ。兵たちの動きには淀みを感じられず、指示に従って迅速な対応を行っている。対して、こちら側の対応はあくまで応急処置的なものに留まっている。オルトフが鍛えた第六軍は帝国軍の中でもかなり上位の力を有していたが、それでも戦況を覆すまでには至らない。高低差が逆転し、自分たちを守ってきたはずの防壁が自

分たちを苦しめている。

せめてある程度まとまった人数の魔道兵がいれば、そう思わずにはいられなかった。そうすれば押し返せないまでも前線を維持する事は可能だった。しかしながら、オルトフはアステイスと同じく平民の出自であり、上層部に心から信用されていたわけではない。魔道兵の大半がシャンテールでの戦いに駆り出されていたこともあり、地方都市に配置されていた魔道兵の数は微々たるものだった。

加えて言うなら、オルトフ自身は城壁に上られる可能性も忖度していた。自分の頭には思い付かなくともアステイスなら或いは、という思いがあった。だが、そうされた場合、定石通りの布陣では有効な対応策がないことも事実だった。相手がそのような手を使ってこないことを祈りながらの防戦だった。

想定していた中で、しかし最悪の事態。それでもオルトフは劣勢なりに被害を少なくしようと自ら前線に加わって指揮を務めた。負傷した者には無理をさせず、迅速な戦列交替を行い、勢いづいた敵を巧みに押し戻した。

だが、ベール軍本隊が再度接近中との報を聞き、思考に空白が生じた。既に西門より北側は相手の勢力圏内。そこから進入してくることは想像に難くない。少ない兵でこれだけ粘られているのだ。相手の数が増えれば今までは比べ物にならないくらいの犠牲者が出る。

苦悶の表情を隠し切れぬオルトフを、周りの兵たちが継るような目で見つめている。彼らの視線を受け止め、束の間城を捨てるという選択肢が脳裏にチラついた。が、その考えを即座に振り払う。重要拠点を奪われたと知れば、あのブラージウスが黙っているわけがない。挽回の余地すら与えずに処分されることになるだろう。ラフオム家やウランダー家のように。

陽動された騎兵たちが戻ってきてくれれば、まだ活路はある

はずだ。……しかし、間に合わなければ。

オルトフが逡巡している正にその時、階段上にアステイスが姿を現し、オルトフの姿を視界に捉えた。

「オ、オルトフ将軍！ フロイデです！」

近衛の声に反応し、オルトフが素早く視線を階段上に走らせた。赤髪を靡かせたその男は帝国兵の装備に似た黒い革の胸当てを身に付けていたものの、紛れもなくアステイスその人だった。

兵たちが慌ててアステイスに向けて弓を引き絞ったが、オルトフが咄嗟に制止の声を上げた。騒がしかった戦場に台風の目のような沈黙が訪れた。

射撃からアステイスを守るべく、彼の前に数人の歩兵が素早く回り込み、盾を翳した。アステイスが手を下ろすのを見て、歩兵たちは小さく頷き、そのまま膝を付いた。

「最早大勢は決した。もつとも、私に言われるまでもなく君自身が一番理解していると思うけれどね。降伏しろ、シュヴァイ「オルトフ」

「何を！ まだ負けたわけでは」

オルトフの抗弁を遮るようにしてアステイスが声を荒げる。

「これ以上戦うというならば、我々はこの町に火を付けねばならなくなる。君はそれを望むのか？」

オルトフが目を剥き、次いで拳を震わせた。裏切られたという強い思いが胸奥で湧き上がった。

「……卑怯な。よりもよって民たちを人質に取るだと。アステイス「フロイデともあるう者が誇りを捨てたか！ ……私はあなたを心の底から尊敬しているのだぞ。見損なわせるな！」

半ば訴えかけるような叫びだった。剣の切先を己に向けたオルトフに、アステイスは目を細めた。

「人質……か。ならば今一度訊ねる。君は帝国軍が今に至るまで、

「一体いくつの町村で殺戮を働いてきたかご存じか」

この問いにはオルトフが苦しげに呻いた。数えようとしてから数秒もしないうちに、数え切れるはずがないことに気付いていた。

「この城下町にいる者たちは紛うことなき帝国国民。虐げられていた者たちの苦しみを鑑みれば、町の者を皆殺しにしたとて怒りが治まることはあるまい。にもかかわらず、我々は殲滅戦を避ける道を選択肢に付け加えた。最大限、譲歩しているつもりだが？ それを卑怯と取るならば、こちらから掛ける言葉はもう何も無い。君の言う誇りとやらと共にこの町を灰燼と化すまで」

「フロイデ……殿」

鋭い視線に射竦められ、オルトフが僅かにたじろいだ。

「見損なってくれて結構。私はそれだけのことをしている。指揮官の采配一つで大勢の敵、味方が死に追いやられるのだ。味方の被害を最小限に食い止めたところで死した者らの家族にしてみれば一分の一。どれほど恨んでも恨み切れぬし、その怨念が生涯絶えることはないだろう」

アステイスはそれを一身に受ける覚悟をとうに決めていた。強大な敵を相手にして逃げ出したい気持ちとてあるはずなのに、死を覚悟して付いてきてくれた者たちがいる。彼らに報いるためならば。どんなことでもするし何者にでもなる。その迷いのなさにおいてはオルトフの比するところではなかった。

「そして、それはオルトフ、君とて同じことだ。ただ体裁のために戦いを継続するは愚将の選択。僅かな可能性に縋りつき、戦況を見誤って機会を逸するつもりか。判断が遅れるだけ、そちらの犠牲者は雪だるま式に増えていくことになるぞ。君の言葉を借りるなら、シユヴァイ「オルトフがその程度の人物だとは思いたくない。私を見損なわせるな」

オルトフは大きく肩を震わせた。尊敬している人物が己を認めている言葉を口にしたことを受けて、オルトフの胸には嬉しさと悔しさが去来していた。

だが、降伏すれば。ブラーヂウスは決して自分たちを許さないだろう。帝国に戻ることは叶わない。逃亡者として僻地に逃げ延びるしかない。自分だけならばまだしも、家族のいる兵たちにまでそのような過酷な運命を背負わせるなど到底出来なかった。だが

「降伏召されよ、將軍」

後ろから掛けられたその声に、オルトフははたと振り返った。

「べ、ベラーシュ殿？ 貴方まで何を仰っているのだ！」

ベラーシュはそれには応えず、静々とオルトフの隣に並び立つと階段上のアステイスを見上げた。

「フロイデ殿。將軍とて元は平民の出自。決して内心では今の帝国を快く思っているわけではない」

「べ、ベラーシュ殿！ 口が過ぎるぞ！」

アステイスはオルトフに嗜められた老人に視線を滑らせた。

「セルゲイ！ ベラーシュか。オルトフの指揮下に入っていたのだな」

アステイスの言葉にベラーシュは一瞬きよとんとしたが、直ぐに表情を緩めた。

「ほっほっほ。こんな老骨の顔まで覚えてくださっているとは。アール様様が貴方を重用されていた理由が、わかる気がしますな」

老人は柔らかな笑みを浮かべながらオルトフに向き直る。

「もう己の心を偽るのを止めては如何ですか、オルトフ殿。シヤンテールでの決戦に参加できなかったのは、今にして思えば良かったのかも知れませぬ。幸い貴方は反帝国勢力と交戦したことがないに等しい。もっとも、今回を除いてですが。貴方なら彼らに受け入れて貰える可能性も捨て切れませぬ」

造反の示唆にオルトフの目が見開かれた。

「帝国を裏切れと申すか！」

ベラーシュはやんわりと、しかし言い聞かせるように言葉を続けた。

「そうは言っておりませぬ。兵たちの命を、弱き者たちを助けよと申しているだけです」

「お、同じ事では」

そう言いかけたオルトフが、体を強張らせた。己が口走った台詞に打ちのめされていた。弱き者を助けることが帝国に反逆することだと、意識の底で理解していたことに。

「よしんば、帝国が首尾よく統一を果たしたところで貴方を取り巻く状況が良くなりますかな？ 軽んじられることこそあれ、重用されることは有り得ませぬぞ。才気溢れる若者が日の当たらぬ場所であらぬ朽ちていくのはあまりに惜しい。どうせ死ぬならば、高き目標に挑んで死するのが武人の本懐でしょう。フロイデ殿、どうですか？」

ベラーシュに問われたアステイスは暫しの黙考の末に口を開く。

「それは、私の一存で決められることではないな。が、放逐するか否かは別として、降伏するならばこの場にいる者の命は徒に取らぬことを約束する。それでいいか」

アステイスと肩を並べて強大な帝国と。それを意識するや否や、オルトフは先程までの震えが武者震いに变化したのに気付いた。

ややあつて、乾いた金属音がからりと鳴った。その音源にその場にいた皆が注視し、理解した。シュヴァイ「オルトフの褐色の手から、剣が零れ落ちていた。

其の六十五　　友への手紙（表）

885年　　3月28日

エル・クレス陥落す。シャンテールにてその報を聞いたブラージウスは掲げていたシャンパングラスを握り潰した。周りに控えていた者たちは主君の手の平から零れ落ちる鮮血を見て、声一つ発することが出来なかった。

その頃、帝国軍はシャンテールで思わぬ足止めを食らっていた。同盟軍との決戦を終えて尚十二万の軍勢を擁していたが、パトロンの死によってアテライデからの食料供給が途絶えていた。仕方なく、マビアビヤクルートからの輸送隊に頼っていたのだが、その輸送隊がネルガル付近を通過した際、圧政に憤り、暴徒と化した民衆たちに襲われるという事件があった。何とか撃退はしたものの食料のおよそ半分を奪われ、遠征に使用するには足りなくなってしまった。

ベルガモットやオルトフら有能な将によって辛うじて治安の維持が図られていたネルガル領は、後任の統治の甘さもあって無法地帯と化してしまっていた。

また、東部諸国とアテライデの抵抗にも苦しめられていた。決戦を制し、暫くは勝利の美酒に酔いしれていた帝国軍だったが、シャンテールは同盟軍の策により町の四割近くの家屋が消失し、兵の半数以上が野宿を余儀なくされていた。そんな状況下において、同盟軍は町の外から通じる地下道を利用し、度々ゲリラ戦を仕掛けてき

た。帝国兵たちは地の利を活かした作戦に振り回され、徐々に戦意が低下しつつあった。

そんな状況下において、エル・クレスの陥落の報は、ブラージウスを苛立たせるに十分な材料と成り得た。少なくとも側近達は気が気でなかった。

885年 4月4日

シャンテールに兵を收容しきれなかったこともあり、即刻移動を命じられていたジルバートは、マリスノリスの城にてエル・クレス陥落の方を耳にすることとなった。ジルバートはその異動が手柄を立てさせ過ぎぬようにするための手心だとわかっていたが、文句一つ言わずに従うことにした。シャンテールでの策が成功したことを思えば、第一の勲功といって差し支えぬものだし、出過ぎた真似をしてブラージウスの不興を買うこともないと判断していた。

夕食後、ジルバートは城の応接間を改築した部屋で第七軍の近衛二人と一緒にくつろいでいた。

「やれやれ、よくもまあ引つ掻き回してくれるものだな」

ジルバートは苦笑しながらシップポトルに入った桃色の香水を振りかけた。薔薇の仄かな香りが部屋に漂い始める中、近衛の一人が鼻の穴をひくひくと動かしながら口を開く。

「笑い事ではありません。第八軍、九軍が解散し、第六軍まで敗れたのです。帝国はたった半年で三つの軍をベールに破られたのです」

神妙な顔付きの近衛にジルバートは小さく溜息を吐いてから、手前にある小さなテーブルに香水のボトルを置いた。

「言うまでもないが、私も今回の件について快く思っているわけではない。徒に戦争を長引かせて一番苦しむのは、他ならぬ民たちだからな。それで、オルトフ准将は行方知れずのままか。彼がそう簡単に死ぬとも思えないんだが」

「はっ。よしんば生きていたとしてブラージュウス様が此度の敗戦をお許しになるとは思えません。どちらにしても戻って来ることはないでしょう。エル・クレスを落とされたことでイアニス教徒がベールに集う動きを見せておりますし、影響が出るのは避けられませんね」

「どうかな、とジルバートは腕を組む。

「大量の教徒が集うのは今のベールにとっては善し悪しだろう。食料や水の問題もあるし、何より劣勢の時に駆けつけなかった者を簡単に信用できると思うか？」

「は、それはそうですが……」

「これはあくまで私の推測だが、ブラージュウス様ご本人も、エル・クレス陥落についてはそれほど気にしていないのではないかな」

近衛たちが顔を見合わせ、瞬きを繰り返す。

「……まさか。素手でグラスを握り潰したのですよ。相当に憤っておられるのでは？」

「私とてその場にいたわけではないから、突発的になのか意図的なのかはわからないがね。もし意図的にだとしたら中々油断ならぬお人だ。結果として楽勝ムードが払拭され、兵たちの気が一気に引き締まったのは間違いない」

それを聞いて近衛たちが「あっ」と驚きの声を上げた。

「アステイスが局地的な勝利を収めている間にこちらは一大決戦を制して大都市シャンテールを勝ち取っているのだ。あちらの兵力ではエル・クレスの城下町を手中にするのが手一杯。周辺領土を押さえることは不可能だよ。この差はあまりにも大きい」

ベールは奇策を用いることによって辛うじて勝利を繋いでいるようだ、圧倒的な物量差を鑑みればいつまでも続くものではない。アステイスがベールと組む動きを見せたのも、連動することによって兵の分散を狙い、兵力差を少しでも補うためだろう。そうジルバートは読んでいた。

「確かに、見方によつては帝国と正面切つて戦うことを避けているようにも思えますね」

「うむ。今回アステイスはシャンテールの側に姿を見せなかった。今までの戦いの中で唯一と言つて良い、戦力差が少なかった戦だ。撒き返す可能性は大きかつたはず。彼が数万の軍を指揮していれば、シャンテールを落とすのに何ヶ月かかっていたかわからぬし、帝国に取つては彼の不在が優位に働いたと言える。ブラージュウス様もそれをわかっているはずだ。足止めを食らっているのは事実だが、それも時間の問題だろう。ゲリラ戦を仕掛けてきているのは相手にもう余裕がない証拠でもある。まともに戦つては最早勝ち目がないことを、彼ら自身が一番理解しているのだ」

本音を言えば、ジルバートはアステイスと正面きつて戦いたいと思つていた。彼とは軍学校時代からの好敵手であるが剣術ならいざ知らず戦術を競わせたことは一度もない。或いは、シャンテールでの戦いでそうなるのでは、と期待していた部分もあった。しかし、アステイスは最後まで戦場に姿を見せず、聊か肩透かしを食らう羽目になった。意表を突かれたのは確かだが、エル・クレスを落とされたところでまた取り返せば良いだけの話である。お粗末な結果を招いたことに対しては失望にも似た怒りを感じていた。

話が一段落した時、室内にノックの音が響き、ジルバートと近衛二人がドアを注視した。

「報告します。何やらイグニスとか申す少年がミレン將軍へ目通りたいと願ひ出ているそうなのですが、如何致しましょうか」

ドア越しの報告にジルバートが眉を顰めた。

「知らないな。直ぐに追い返し」

言い掛けて、ジルバートはたと口を押さえた。

「……イグニス、どこかで」

ややあつて、ジルバートはアステイスの屋敷で見たことのある小姓の顔を頭に浮かべた。良くある名前ではあるが、あの少年もそのような名だったはずだと思ひ当たった。

「その少年とは、くせ毛の茶髪をした少年か？」

「ええ、聞いた限りではそんな感じですよ。ミレン將軍、御存知なのですか？」

「やはりそうか。ならばここに通して構わん。部屋まで丁寧に案内せよ」

「え、ですが」

「心配せずとも良い。古い知り合いの部下だ」

「か、畏まりました」

暫くして、近衛に剣を預けたイグニスが部屋に入ってきた。イグニスは部屋のソファアに座っているジルバートを、次いで二人の目つき鋭い近衛と視線を合わせてやや顎を下げた。イグニスが室内に入ってくると同時に近衛二人がジルバートの前に出てきた。会うことは許しても近付くことは許さぬと言ったところだろう。それも無理からぬことで、近衛たちはイグニスと面識が一切なかった。以前はアステイスが同輩だったこともあり、ジルバートがアステイスの屋敷に近衛を連れ立っていったことがただの一度もなかったためだ。ジルバートは軽く肩を竦めてから再びイグニスと視線を合わせた。「久し振りだな。随分と背が伸びたじゃないか、見違えたよ」

「お久し振りです、ミレン様。お元気そうでなによりです」

イグニスは頭を一杯下げてからジルバートに向き直り、やや戸惑ったような表情をした。イグニスの心情を察したのか、ジルバ―

トが頭を掻きながら笑った。

「幸せ太りというやつかな。ここ一年足らずで体重が5kg以上も増えてしまったね。鍛錬をサボっているわけではないんだが、エミリオが生まれてからというものの食欲が出て困っている」

イグニス は合点がいったという顔をした。

「ああ、そういえばそうでした。遅ればせながら、ご子息誕生のお祝い申し上げます。その……気が利かなくて申し訳ありません」

恐縮した様子のイグニスに、ジルバートは笑って応じる。

「一向に構わないよ。祝言、有り難く受け取っておこう。それで、君が私に何の用向きなのかな。それとも 君の主人の用向きか？」
目を向けるジルバートにイグニスは一瞬慄いたが、直ぐに気を取り直したのか、懐に忍ばせていた封書をすつと差し出した。

「……手紙、か。他に何か私への言伝はあるかい？」

「いいえ。これをミレン様に渡すように、とだけ仰せつかっています」

ジルバートは東の間イグニスに視線を送ってから再び差し出された封書を見た。

ジルバートは近衛を通して手紙を受け取ると役目を終えたイグニスを入口まで送るよう指示した。イグニスの背中が扉に遮られるのを見届け、再びソファーに腰掛けた。

「……ミレン様。彼は一体？」

「何、君らが気にするようなことではない。さっきの少年は昔世話になった親戚の小間使いでね。大方商いの話だろう」

「……はあ。そうですか」

「そういえば、クルートの実家からエダの果実が届いていたな。折角だし兵たちにも配ってやるよう厨房に言い付けておいてくれ。あまり日持ちするものではないから早めに頼む」

暗に下がるように促され、近衛たちは首を傾げながらも退室する。

ミレンは錠を掛けてからソファアに戻り、封を破って中の紙を取り出した。丁寧に折り畳まれた紙をゆつくりと開き、文面に視線を走らせ始めた。

最後まで読み終えた後、ジルバートは微笑みを浮かべながら紙を片手で握り潰し、くしゃくしゃに丸め込んだ。

今となつては無理な相談だな。最早お互い歩み寄る余地はない、が。

決別を宣言するには格好の場か。ジルバートは立ち上がると薪が燃え盛る暖炉にゆつくりと近づき、紙ボールとなった手紙を投じた。パチパチと音を立てながら、細い黒煙が室内に揺らめき始めた。

其の六十六　く決別（表）く

やれやれ、肝が据わったものだ。ジルバートは心中に溜息を落とした。アステイスが密会場所に指定してきたのは帝国の勢力圏内、マリスノリスの町の程近くにある高級ホテルだった。こちらに警戒感を抱かせないための配慮であり、暗にこちらを信用していることを伝えるメッセージでもあった。

約一年半振りの再会。積もりに積もった話があるが、それ以上に伝えねばならないことがあった。ジルバートは暫しの間地面に映る己の影を見つめてからホテルのガラス戸を押した。

205号室。重厚なドアのノブを回すと、光が差し込んでいる部屋が目に移った。白一色のカーテンが風に吹かれて揺らめいている。その中で、アステイスは向かい合うプライベートソファの片割れに鎮座し、紅茶を口にしていた。ドアの開閉音に気付いたのだろう。アステイスはカップをテーブルに置いて立ち上がり、ジルバートに向き直った。ただそれだけだったが、無駄が取り払われた、流れるような動きだった。アステイスが軽く会釈し、ジルバートも遅れずに返した。そうしながら、ジルバートはアステイスの井出達に視線を走らせた。剣は、腰に提^さげていなかった。

「久し振りだな、アステイス。随分痩せたんじゃないか？」

余程の苦勞をしてきたのだろう。アステイスの目は以前よりも窪み、頬もこけているように見えた。

「……ああ。そちらは、少し太ったかな。どうやら結婚生活が向いているようだ」

そう言いながらアステイスは、手の平で向かいの椅子を示した。

ジルバートは軽く頷き、座りながらも束の間室内に視線を走らせた。

部屋に誰かが潜んでいる様子はない。武器の代わりになるような物も、少なくとも近くにはないようだ。高級ホテルは武器の持ち込みを禁じているところが多いからそのせいかも知れなかった。強いて言えば金属製の燭台しょくたいがあるが、それはジルバートの斜め後ろに位置している。

「一応聞いておくけど、何か飲むかい？」

「いや、結構だ」

ジルバートが手の平を翳しながら、尚も室内に限なく観察しているのを見て、アステイスはばつが悪そうに目を伏せる。

「良く、来る気になったな」

寂しそうに笑うアステイスに、ジルバートは視線を戻す。少しあからさまだったか、と己を窘めつつ。飲み物を断つたのは、万が一にも毒殺されるのを防ぎたかったからだ。

「戦う前に、一度ちゃんと会っておきたかった。色々和讯きたい事もあったからな」

ジルバートはようやくアステイスに視線を戻した。

「早速だが、どうしてあのような手紙を寄越した？」

「念のため、かな」

「念のため？」

「僅かな可能性を忖度そんたくしたのさ」

ジルバートは眉ひとつ動かさなかった。一緒に、帝国に反旗を翻す気はないか。丁寧な字でそう書かれた文面を、明瞭に思い出していた。

「その様子だと、答えはもう出ているのだな」

「無論、了承しかねる」

「　　だろうね」

アステイスは割にあっさりと言った。

「ところでメリツサは、元気かい？」

「ああ、元気だ。流石に今日は連れてこなかったけれどね」

アステイスがはにかみながら答えると、ジルバートは少しだけ表情を緩めた。

「そうか、それなら良かった。何、グレイスが随分と気にしているね」

「はは、相変わらず尻に敷かれているようだな」

ジルバートはきまり悪そうに呻いた。

「相変わらずっていうほど敷かれてはないつもりだが」

「そう思わせるのも彼女の実力かな。っと、……それで思い出した。第一子が生まれたそうだな。祝辞を述べる機会もなかったから今言わせて貰うとしよう。おめでと、ジルバート」

改まってそう言うアステイスに、ジルバートは頭を掻いた。

「はは、ありがとう。全く赤子というのは不思議な生き物だ。夫婦共々、戸惑う事ばかりだよ。数年前まではこんな自分を想像もしていなかったのだがね」

ジルバートは照れ笑いを浮かべながら声を弾ませた。

「そういえばイグニスにも祝辞を述べられたな。どこか頼りなかった印象だったが見違えた。外面だけでなく、内面も随分と成長したようだ」

「そうだな。彼ら若い者たちが幸せに暮らせる国を、作らねばなるまい」

アステイスは再びカップを手にし、口に運んだ。反して、ジルバートの表情は沈んでいった。

「帝国もこの二年ですっかり変わってしまった。私は時に、君が羨ましく思う」

アステイスの目元が露骨に不快そうなものに変わった。それを見て、ジルバートは苦笑いした。

「変な意味で捉えないでくれ。弱き者のために、信念のために、強大な敵と形振り構わず戦う戦士の姿には敵ながら憧れてしまう。ただ、それだけさ」

心からの言葉だった。アステイスの活躍ぶりを見て、ジルバートは英雄譚が今もこよなく愛されている理由が少しわかった気がした。弱き者が強き者を挫く。その姿には誰もが感銘を覚える。現実にはそうそう転がっていない話だからこそ、己を英雄の姿に投影し、共感する。

アステイスは、空になったカップをテーブルに置いた。先程の時よりも乾いた音が鳴った。

「相手が相手だからね。君らの強さは良く知っているつもりだし、手段を選んでいられる余裕なんてないさ」

「強さ、か。案外、帝国なんて砂上の楼閣ろうかくかも知れないぞ。貴族である私とて、最近の帝国のやり方には我慢出来ぬと思わぬでもないからな」

「ならば、何故反逆しない？ 姉君がブラージウスの妻だからか」
ジルバートはどこか遠くを見る様に、視線を上逸らす。

「それも理由の一つだが、それだけではない。……アルイール様にご恩があるというのもあるし、何より部下たちを見捨てるわけにはいかない」

アステイスが帝国に反旗を翻した後、彼の指揮していた第六軍の者たちは様々な処分を受けた。減俸で済めばまだ良い方で、隊長格の中には降格や僻地への異動を命じられた者も多い。そして、彼らとその家族たちは反逆者と繋がっているのではないかと一年以上経った今も尚、白い眼で見られている。

「君が離反した後、君の元部下たちは同情に値する憂き目に遭っている。その苦しみが如何ばかりか想像が付くか？ 私は部下たちをあのような目に遭わせたくはない」

ジルバートはアステイスを真つ直ぐに見据えた。アステイスはその視線をただ受け止めている。

「それに形はどうあれ、一度仕えた主君を裏切るのは騎士にあるまじき行為だ。それは由緒正しき先達の、ひいてはミレン家の名誉を損なうことになるし、私の矜持きょうじに反することでもある。まあこれに關しては、批判の渦中に身を投じるだけの勇気がない、と取つて貰つても構わないがね」

「耳に痛いお言葉だ。ご立派だな、ジルバート」

アステイスは大仰に肩を竦めた。ジルバートは言葉に含む棘を感じたのか僅かに眉根を潜める。

「アステイス。君が何を企んでいるのかは私にもわからない。だが、良く考えてみる。徒いたづらに戦乱が長引けば、一番苦しむのは他でもない民達なのだぞ」

「こちらからも一つ訊いていいかい？」

「何だ」

「戦争が終われば民達は苦しまないで済むと、君は本気でそう思っているのか」

ジルバートの背が揺れた。やはり、同じ考えに至っていたのか。そう思わされた。違いがあるとすれば、ジルバートは聊ちとか楽観的にアステイスは著めいしく悲観的に考えていることだろう。しかして、その隔たりはあまりに大きかった。

アステイスは黙り込んだジルバートに構わず言葉を続ける。

「反帝国の者たちは、彼らなりの信念に従つて動いている。ブラージウスの支配する世では安寧の時は訪れない。彼らはそう考えている。私も同意見だがね」

「その可能性は否定しない。だが、一先ずは戦乱を終結させる事が先決だ。それなのに君は、アテライデが帝国に敵対するきっかけを作ってしまった。戦争を長引かせる手伝いをしてしまったのだぞ。君の方こそ、一体何がしたいんだ」

「私は、元に戻りたいだけだ」

元。つまり、アルイール帝の頃の帝国にと言う事か。ジルバートはそう自得する。

「ならば、尚更矛を収めるべきだ。君さえ舞台から退場すれば、直ぐにでもこの戦いは終結するはずだ」

「戦乱を終結させても、ブラージュウスが収まらなかつたらどうする。恐怖政治を始めるかもしれない。或いは、今度はカタルスタに戦争を仕掛けるかも知れない。悪い可能性に目を瞑ったつて、問題を先送りすることになるだけだ。その連鎖を断つためには」

「その時は私の命に代えても止めて見せる。その覚悟があるからこそ、私は未だ軍籍に身を置いているのだ」

「トリニティ・ワンに守られたブラージュウス相手にどうやって刺し違えるというのだ。君もシャンテールで彼らの実力は見たのだろう」「失敗したならそれで構わん。私の散り様を見て、私の志を継ぐ者が現れるだろう。私は私の信念を、騎士道精神を貫く」

あくまで頑ななジルバートに、アステイスは何かを言いかけたが、思い止まったのか口を噤んだ。

「……歩み寄る余地は、なかったのだな。……判っていたことだが」少しして、アステイスは諦めたようにそう呟いた。

「君は君の信念に従えば良い。私は私の信じる道を行く。もしその先に君が立ち塞がるなら、それも軍人を志した者の宿命だろう」

アステイスは両手の指を組み、目を瞑る。

一分ほども経っただろうか。アステイスはようやく目を開け、重々しく息を吐き出した。

「仕方あるまい。最後に言葉を交わせて良かったよ」

「私も、だ。柵しきさえなければ、私たちが共に肩を並べて戦うこともあったのかもしれない。そうなっていたらどれほど良かったことか、そう思うよ」

「そう、か。その言葉を聞いて、少しだけ救われた気がする」

アステイスは肘掛けに手を付いて立ち上がった。それに続いて、ジルバートも腰を上げる。立ち上がったジルバートを見て、アステイスは微かに微笑みながらゆっくりと右手を差し出した。

「今度会う時は、戦場だな。手加減は無用だ」

「確認するまでもない。誇りにかけて、全力で受けて立つ」

ジルバートもそれに応じ、二人の手が

擦れ違った。

其の六十七（罪（表））

「ア……アス……テイ……ゴフツ」

目を見開き、次いで左胸に激痛を感じた。青い絨毯が吐瀉物の混じった血で汚れていく。

ジルバートは痛みに細まった目でアステイスの姿を追った。アステイスが差し出していた手を強く振り降ろすと、絨毯に赤い点線が現れた。

アステイスの握手を求めた手の指に力が籠るのを見咎めたジルバートは、反射的に身体を逸らし、即死するのだけは辛うじて避けた。だが、死神の鎌から逃れるには不十分だった。目に映る物全ての輪郭が歪み始めていた。

何故。

金属製の胸当てごと己の胸を貫いたアステイスの、紅に染まった右手を見る。視界がぼやけているせいか、ぼんやりとした光を放っていた。

もしもアステイスが帯剣していたならば、ジルバートがこのような不覚を取ることはなかったはずだった。アステイスは完全な丸腰だった。剣も防具すらも付けていなかった。そのことがジルバートの警戒心を薄れさせ、予備動作に対する反応を遅らせた。アステイスが金属板を突き破るほどに体術を研^{みが}いているなどとは予想だにしていなかった。

「今なら痛みを感じる間もなく送ってやれると思ったのだが、避けてしまったか……。流石だな」

たたらを踏みながらも両足を踏ん張って倒れるのを堪え、ジルバ

トは齒を食いしぼりながらアステイスを睨んだ。

「ここで死んでくれ、ジルバート。悪いな」

アステイスは目を細めて淡々と言った。

「……何故……何故なんだ。……お前、が……このような」

友情を踏み躪るような真似をしたのか。ジルバートが知る限り、アステイスという男は罷り間違つても、そういう真似は出来ない類の人間だった。儀礼を重んじ、卑劣な真似を許さない男だった。だからこそ、尊敬の念すら抱いていた。

ややあつて、ジルバートはアステイスの左手を見、気付いた。彼の左手にあるはずのもの、婚約指輪が外されていた。

「ま……まさか……」

脳裏に過つたのは哀悼の意を表する、今は滅びしレジア帝国の風習だった。亡き妻を、夫を悼み、未亡人となった者が片割れの指輪を海に投じるのだ。

「……な、亡くなって……いたのか。……でも……どうし……ゴフッ」

吐いた血が咳と共に飛び散り、テーブルに、椅子に、紅い斑模様を施した。アステイスは、それには目もくれず、死に近づいていくジルバートを穏やかな顔で見据えていた。

「こんな古いしきたりを知っているとは、相も変わらず勉強家だ」

「……殺され……たのか」

先ほど「元氣だ」と言ったのは、偽りだったのか。何故偽ったのか。初めから油断を誘って自分を殺すつもりだったのか。全てが演技だったのか。ジルバートの頭を疑問が埋め尽くしていく。

一つだけ確かなのは、アステイスがどのような問いにも答えるつもりがないということだけだった。

「自分でも、馬鹿な事をしていいると思っっている。許してくれなどは口が裂けても言えない。私を恨め」

アステイスはただ、淡々と言葉を紡いでいた。そのくせ唯一つとして、冥土の土産となりそうな言葉を、語らなかつた。

事情を話せば少なからず同情を引くことになる。己が楽になるための言葉を吐かぬ事が卑劣な手段を用いた自身に対するせめてもの戒めであり、死にゆくジルバートへの、アステイスなりのけじめのつもりだつた。

「お……お前……は」

「苦しいだろう。今、楽にしてやる」

アステイスが再びゆっくりと近づいて来る。表情はあくまで穏やかだつたが、ジルバートは気付いた。足だけは　細かく震えていた。

死を間近に見据えながら、ジルバートはアステイスの心の深層に肉薄していた。愛する女性むすめの、メリッサの仇を討つために。その一念で、屍に象られた道を歩んできた男の凄絶な覚悟に寄り添っていた。

帝国を離れてから今に至るまで、アステイスはあらゆる手段を模索してきた。憎き帝国を滅ぼすためならば、どのような汚名を着る決意を以つて戦い続けていた。そんな彼に騎士の誇りなど無用の長物であつたに違いなかつた。自分の語りかける言葉など、彼の耳にはさぞ空々しく聞こえたことだろう。

自分が子の成長を語る様を、メリッサを失つたアステイスがどのような心持ちで見つめていたのか。死に際にして、ジルバートは己の不明を恥じていた。

愛する妻の顔が思い浮かぶ。プラチナブロンドの美しい髪。深海を思わせる濃い青の瞳。花弁の様な愛らしい唇。人を食った様な所もあるが気立てが良く、誰もが羨む、誰にでも自慢出来る、自分には過ぎた妻。

グレイス。

次いで息子の姿が過ぎる。グレイスに似ている、と皆から言われている。まだ骨ばっていない低い鼻。人形の如く長い睫毛。最近、歩けるようになったのだと、グレイスからの手紙に綴ってあった。

エミリオ、どうか彼を。

アステイスの血染めの右手が再び、先ほどの映像を重ねて見せつけられる様に、ゆっくりと迫る。自分に、止めを刺すべく。

恨まないで……やってくれ

今際の際、己が赦ゆるされた事を知らぬままに、アステイスは目をつむ（瞑る）ジルバートの胸を目掛け 加速した。

「待たせた」

路地裏の壁に寄りかかっていたオルフィは視線を上げ、目を剥いた。体は外套に覆われていたが直ぐにわかった。アステイスの体から隠し切れぬ血の臭いが漂ってきていた。

「お前」

「用件は済んだ。これで、何万もの味方が死なずに済む」

オルフィの言を遮る様にアステイスはそう言った。オルフィは今にも飛び掛かりそうな目でアステイスを睨み付けた。

「どういうことだ。……引き抜きをするという話ではなかったのか！」

「勿論、そのつもりはあった。……応じる可能性はないに等しいと考えていたけれどね。ジルバートは帝国でも一、二を争う將軍だ。私の戦友でもあり、お互い切磋琢磨して勉学に励んだ仲間でもある。そして、これから目的をやり遂げようとする上で最大の障害になるなりえた男だ」

過去形に言い換えそびれたのは、まだ意識がついていけないからか。アステイスは動揺を押し殺すように齒噛みした。

「……シャンテールの戦いで同盟軍を敗北に導いた根源。遅かれ早かれ殺さねばならない男だ。こちらは劣勢に過ぎる。これからの戦いにおいて最大の脅威となる人物を容易く排除出来るチャンス。これを逃す手はない」

「最初から、殺すつもりだったのか。……何故私に黙っていた」

両の拳を震わせるオルフィに、アステイスは眉を上げた。

「話したところで絶対に反対しただろう？」

「当たり前だ！ 良心に付け込むような真似をして恥ずかしいと思わないのか！」

「良心などとうに捨てた。私はどうあっても帝国を滅ぼさなくてはならない。そのために最良の策を選んだ。君に黙っていたのは万が

「一にも策が漏れる可能性を考えてのこと。それだけさ」

オルフィはアステイスが微笑んでいるのに気付いた。氷のように冷たくて、どこか悲しい笑い方だった。それが尚の事腹立たしかった。

「最後に何か恨みごとの一つくらい残していくかと思っていたが、黙って逝くとはあいつらしいな。ははは　ぐあっ」

乾いた笑いを放っていたアステイスの左頬を、オルフィの右拳が捉えた。置かれていたバケツを押しつけるようにアステイスが背中から地面に倒れ込んだ。アステイスは地に手を付いて何とか上半身を起こし、殴られた頬を抑えたまま、しかし立ち上がるうとしなかった。オルフィを見ることもしなかった。

オルフィは束の間アステイスを殴った拳を見てから、尻餅を付いたまま呆然としているアステイスに視線を戻す。

「今回の件はこれでチャラにしてやる。次に黙って何かをやるうとしたら絶対に許さん。馬を連れてくる」

そう吐き捨て、オルフィは殴った方の手をブラブラと振ってその場を後にした。

チャラになるわけがないだろう。アステイスはそう毒づきながら切れた唇を押さえる。先程の作り笑いは解けていた。

ジルバートとグレイスが、顔の見えぬ赤ん坊をあやしている姿が脳裏に浮かんだ。アステイスは両手で頭を鷲掴み、そのまま地に突っ伏した。それから暫しの間、ひきつけを起こしたかのような掠れた嗚咽だけが、黴臭い裏通りに響いていた。

第四章
E
N
D

(四) ～ (五) 幕間 ～ 巨星墮つ (合) ～

885年 4月15日

「ジルバート」ミレン將軍の冥福を祈り、今此処に悼詩を捧げる」
牧師の言葉が、沈黙の参列者たちの耳に虚しく響く。その列の先頭には溢れる悲しみを押し殺し、赤子を抱く女がいた。叛逆者の凶刃に斃れた男の妻、グレイス「ミレン」だった。

ジル、どうしてなの。

「自分と、生まれたばかりのエミリオを置いて、彼はどこへ旅立ったのか。ジルバート「ミレン」の亡骸を前にして、未亡人となったグレイス「ミレン」の思考は一極化していた。今は、彼を死に至らしめた元凶を憎む余裕すらなかった。その手にはすやすやと寝息を立てている彼の忘れ形見を抱き、細い背中をカタカタと細かく震わせていた。そして、そんな彼女の計り知れない悲しみを察してか、声を掛けようとする者はいなかった。どのような言葉とて、僅かな慰めにもならぬことを知っていた。グレイスは押し寄せる虚無を相手に必死に戦っていた。

アステイス「フロイデ」の卑劣なる

彼はテルネシア帝国に多大なる貢献を

途切れ途切れに響く牧師の哀悼の言葉は、グレイスの思考に僅かな波紋も呼び起こさなかった。愛した夫との思い出が心を埋め尽くしては、彼の訃報を聞かされた時の衝撃が蘇り、心が闇に覆われていく。その繰り返しであった。

軍人の妻である以上、夫の死を覚悟したことはある。しかし、ここ一年ほどは、グレイスは安息の日々を送っていた。少なくとも、彼が殺されるような要素はないはずだったのだ。前線からは離れた場所に駐在していたし、その人柄から人望も厚かった。敢えて言えば文武両道の彼をやっかみ、足を引っ張る者たちはそれなりに多かったのだろ^うが、それ以上に彼を守ろうとする者も多かったのである。

ジルバートがアステイスに殺されたと聞いて、グレイスは失意の底に沈んだのは勿論のことだが、それと同時に一つの事実にも気付いた。十中八九、メリッサは亡くなっていたのだということに。

ジルバートとアステイス。二人の学生時代からの友情が非常に強固な物であることを彼女は良く知っていた。そして、アステイスは自分を律することができる人物だった。その二つを揺るがすほどの出来事があるとするならば、それくらいしか考えられなかった。

そしてグレイスは、心のどこかでそれをわかつていた。否、グレイスだけではない。ジルバートも口には出さないながら、アステイスが反逆した理由を薄々と勘付いていたはずだった。マリスノリスの強襲やバイロン・テレジアの暗殺は、慎重な彼の性格から鑑みれば、半ば自暴自棄とも取れる行動であった。思えば、彼を心から愛しているメリッサがそのような行動を黙って許すはずがなかったのだ。二人は自分たちの幸せに目が眩み、故意か、無意識にか、真実から目を逸らし続けていた。

だが、世間一般がどう見ていたにせよ、ジルバートは彼なりの信念を以つて帝国に身を置いていた。戦争を早く終わらせ、一時的にせよ平和な世の中を取り戻す。その後、ブラージウスが平和への障害となるならば、刺し違えてでも彼を葬る。それほどの覚悟をして帝国に身を置いていた者が、ジルバートの他にいないのもまた事実であつた。

そして、グレイスはメリッサの死を間接的に悟りながらも、それが思考の裡に殆ど影響を及ぼしていないことに気付く。愛する夫の死は、瑣末な感情が入り込む余地もないほど、彼女にとってあまりにも大きすぎる波紋をもたらしした。グレイスは、我が子がゆつくりと呼吸しているのを腕に感じ取りながら、ただそこに立ち尽くしていた。

また、彼女に次いで心を乱されている者がこの場にいた。ブラージウス＝テレジアである。

彼女にとつても今回の件は全くもって計算外のことであつたが故に、腸が煮えくり返る思いであつた。此度の騙し討ちはアステイス＝フロイデの名声に著しく傷を付けたことに相違ないが、それとは比較にならぬほどテルネシア帝国にとつて大きな痛手であつた。

周辺諸国にも名声を轟かせているジルバート＝ミレンは、帝国の求心力の根幹を成していた。心情的なことを申せば不満はあれど、彼が帝国に付いているのであれば、と追従する者は相当に多かつた。ジルバート＝ミレン、ライエン＝ベルガモット、ガツシュ＝エウゲンの三将は貴族と平民双方の支持を得ており、表向きの将として扱ふのに実に都合が良い存在であつた。

その一角、しかも能力的に最も信頼のおけるジルバートを、例え

ば同盟軍の大軍を破った上での名誉ある戦死とかいうことであらば多少溜飲も下りただろうが、殆ど労もなく潰されたことは、ブラージウスが心算した結果を破り捨てるに等しい行為だった。その意味では、のこのこと敵の誘いに乗ったジルバート＝ミレンに対しても強い憤りを感じていた。それでも国葬を執り行った、行わざるを得なかったのは、外戚であることと同時に、示威の目的があつたためだ。

またしても、か。

手の平の皮膚を突き破らんとするほどに、ブラージウスは拳を強く握り締める。爪が食い込んだ部分が内出血を起こし、青黒く変色していた。

やられてみて初めて気が付いたことだが、これは戦略的にみても非常に有効な手段であつた。こと軍略において、ブラージウスが自分より上と認めた人物はジルバートくらいしかない。彼に五万ほどの兵を持たせれば、或いは戦争が既に終結していたかもしれない。それほどに彼を高く評価していた。彼が大軍を持てば、それより少数の軍で勝つことは限りなく不可能に近いことであつた。

敢えてそれをさせなかつた理由を言えば、ジルバートの心変わりを心のどこかで恐れていたからである。ブラージウスの猜疑心はとにかく根深かつた。だからこそ短日のうちに大陸統一の目前まで至つたのであり、だからこそこのようなところで足踏みをする羽目になつた。

また、アステイスの動向を看破できなかったのはブラームスの行いにも一因がある。ウランダール家との確執を恐れた彼が誰にもメリッサを攫つた事実を明るみにしなかつたが故に、殆どの者がアステイスの心の裡に意識改革が起きたことを察知できなかったのだ。ブラージウスはトリニティ・ワンの報告を受け、それを薄々知っていたのだが、忠告する、という行動に至ることはなかつた。正義感

の強いジルバートがそれを耳にすれば、帝国に不信を抱き、アステイスに感情移入してしまう可能性が多分にあつたためだ。

だが、愛する者を殺された復讐者が相手と知っていけば、ジルバートもそれなりの警戒感を以ってアステイスと相對したはずであつた。少なくとも、彼がアステイスの会見の申し出にのこのこ赴く^{おもむ}ようなことはなかつたであらう。あくまで結果論であるのだが、もしそれとなく忠告しておけば。若しくはジルバートに全てを伝え、全ての責任を被せてブラームスを処刑しておけば。ブラージュウスはそう思わずにはいらなかつた。

黒い棺桶に入れられたジルバートミレンの周りに花が手向けられ、次いで蓋が被せられる。その光景を見て、ついにグレイスが涙を零した。一度出てしま^{ひとたび}うとそれが止まることはなく、青い双眸から涙の川が生まれた。俯く彼女を慮つた友人の一人がエミリオを受け取り、別の友人が彼女の顔を自分の胸に埋めた。

嘆声^{なげなげ}が式場に寒々しく響く。身体を幾度も震わせ、嗚咽を發するグレイスの姿を見て、参列者達の中に貰い泣きする者も数多くいた。グレイスは友人に肩を支えられるようにして火葬場まで赴き、焼却炉に入れられる棺を、泣き腫らして充血した目で黙然と見つめていた。

テルネシア帝国は、戦争終結の間際まで駒を進めていた。バイロンテレジアが亡くなり、アテライデが反旗を翻したとて、猛將の集う帝国が負ける要因は全くなかつた、はずだつた。ベール軍に大敗してケチがつき、ようやく立ち直りかけた矢先に起きた悲劇。

誰よりも帝国の行く末を憂い、能力、人格共に優れたジルバート

「ミレンの死は、帝国の覇業完遂を目前にして致命的な打撃を与えたのである。」

其の四十九 く偽りの英雄譚（裏）く

884年10月15日

カタルスタ、ミュールの屋敷。

「……うむ。……うむっ」

ミュールはテーブルに置かれた皿を前にしてフォークを持つ手と口を動かしながら頻りに頷いている。

「どうだ？ ミュール」

リージェスが訊ねるとミュールはご満悦な顔を数秒向け、再びテーブルの方へと向き直った。返答は得られなかったがそれで十分に伝わった。

おもむろにミュールは動きを止めると、口に入れた物をむぐむぐと咀嚼しながら傍らにある分厚い本に手を伸ばした。唇の端にクリムを付けたままペラペラとページを捲り、爛々と、赤く輝いている瞳を素早く動かす。少しして、とあるページを向かい側にいるリージェスに開いて見せた。

「よし、明後日はこれっ。間違えるな、これだぞっ」

ミュールがこれ見よがしに細い指をずらした。絵図を見たリージェスの顔がはつきりと曇った。

「こりやまた……随分と難易度の高い物を」

「馬鹿者。困難を乗り越えてこそ踏破できる境地というものがあるのだぞ」

「わ、わかった。明後日、な。覚えとくよ」

ミルフィーユのデコレーションケーキ（焼きチョコ添え）のレシピを見ながら、リージェスは行程の面倒臭さに鼻白むのだった。

三日前

「戻ったぞ」

「お疲れさん、ミュール」

王城の勤めから戻ってきたミュールに、リージェスが背中越しに
「辛い声をかける。」

「……お主、いつまで経ってもタメ口だな。ん、何やら良い匂いがするの」

ミュールは靴を脱ぎながら、香ばしい匂いに鼻を兔の如くひくひくと動かした。

「む、もしかや作ってくれたのか」

エアリアにいるバルトからの手紙でリージェスが料理を作れるということが露呈してから、ミュールはそれとなく催促していた。

「無償で教えてもらっているのも何だしな。ミュールの口に合えば良いんだけど」

屋敷にあるのはミュールのサイズに合わせた小さなキッチンであったが、それでも簡単な料理を作るには事足りた。リージェス本人の心持ちで言えば、恩返しと言うよりも弱音を零したミュールを元気づけてやりたいという気持ちの方が強かったのだが、何分プライドの高い彼女のことである。正直に言えば気分を害すかも知れないので別の理由を作った。

「ふふん。言っておくが我は味には結構うるさいぞ。何せ王城

で出る宮廷料理を頻繁に食しているからの」

ミュールが胸を張りながらほくそ笑むと、リージェスは熱せられていた鉄竈てつかまどから視線を外し、天を仰いだ。

「うーん、実はそれも一回考えたんだよなー。まあ、不味かったら残してくれ。俺が食うし」

「何を罰当たりなことを。お主の真心を籠めた手料理だ、有り難く頂戴するぞ。まあ標準以上の味に越したことはないがの」

「了解。頑張ってみるよ」

といつても、今更味を変えるのは難しいんだけどね。リージェスは笑いながらそう言った。

十五分ほどして、食卓には様々な料理が並んでいた。彩り豊かな三色野菜の炒め物。炒ったゴマが香ばしさを添える辛油蕎麦。デザートにはパッションフルーツのタルト。焼きたてということもあって未だ湯気が立ち上っている。

「むむう。見た目は中々本格的だな」

目をきらきらと輝かせるミュールに、リージェスはども、と相槌を返した。

「しかし、肝心なのは味だ。わかっているな？」

「少なくとも、真心は籠めてるつもりだ」

「では、食すぞ」

リージェスは召し上がれ、と言わんばかりに両手の平を上に向けてた。

食事もさることながら、デザートをいたくお気に召したミュール

は、その日以降「何か甘い物が食べたいなあ」とか「これ、美味しそうなのう」とか、料理本を開きつつリージェスにチラチラと流し目を送るようになった。

これじゃありーシエと暮らしているときとあまり変わらないじゃないか、と思いつつも、つつい世話を焼いてしまいうージェスだった。

夕食を終え、ミュールはリージェスを連れ立って書斎の方へ入っていく。リージェスに座るよう促し、自分も向かい側に座る。

「さて、お主も充填^{ファイル}を完全習得した。これから魔法の習得に入る

」
「おっし、待ってました！」

思わず小さく拍手するリージェスだったが

「前に、教えておくことが一つある」

「……うえー、またかよー。いつになったらありーシエに追いつけるんだ」

ミュールは落胆するリージェスを赤い瞳で見据え、苦笑いを浮かべる。

「そうがっかりするでない。むしろ喜ぶべきことだぞ。そなたは隠された真実に近づくことが出来るのだからな」

「……隠された真実？」

うむ、とミュールは小さく頷きながら目を瞑る。

「魔法とは、万能の力ではない。あくまで自然界と己の身体に眠る魔力、精神力を利用するもの故、自ずと出来ることには限りがある。勿論、極みに近づけば凄烈^{せいれつ}な力行使することも不可能ではないが」

「の」
リージェスはこくりと頷いた。

「しかしながら、その力故に心が曇れば災いを生み出す。それに、たとえ力を使わずとも強大な力を持つと知れば、周りの者たちの

恐れ、不興ふいきようを買い、疎そまれることにもなる。かつては、賢者と謳うたわれた者たちが隠遁生活を余儀なくされるような例も少なからずあった。カタルスタはそういった者たちの受け皿になることによって発展してきた国なのだ」

「魔道士狩りの悲劇を繰り返し返さないためだな」

リージェスは図書館で読んだ歴史書を思い返しながら言った。

「ほう、少しは調べているようだな」

感心した様子ようすのミュールに、リージェスは得意げに笑みを浮かべた。

「へへ。カタルスタの歴史を調べるために図書館で毎日勉強していたからな」

「良い心がけだ。全く、シャトルーに聞かせてやりたいの。左様、それも理由の一つではある」

それだけじゃないのか、と首を傾げるリージェスに構わず、ミュールは椅子からぴよんと飛び降りた。部屋の角に収められている本棚から一冊の薄い本を抜き取ってリージェスに差し出す。その本は保存状態があまり良くなかったのか、冊子の部分が茶に変色し、ブックカバーも所々破けていた。

「これは？」

「ジキールの書だ」

「へえ、懐かしいな。昔、俺も幾つか読んだ事がある。ただ、それにしては随分ページが少ないような？」

リージェスは差し出された本を受け取り、しげしげと眺める。

「おそらくは現存する唯一の本だ。百数十年前、度重なる降雨によってカタルスタの北にあるマダスカルタ山脈の麓で土石流が発生したことがあつてな。剥き出しになった地肌から出土した木箱の中にこの本が一緒に入っていたらしい」

「へえ、そういうこともあるんだ。でもこれが一体何」

両側の頬から腋へ、そして腑へ、ざわりと何かが駆け下りていった。

「バルンディア、って……あのお伽話だよな。……でも、この名前は」

「そちらも知っているのなら説明は短くて済みそうだな。その本に書かれていることこそ、歴史の闇に葬り去られた真実。筆者は人間だった頃のジキールと親しい仲にあった者のようだ。ジキールの苗字を知っている者は極々僅かだろう。世に回っている英雄譚は、唯のお伽話ではない。人々の心の醜さ、後ろめたさが生んだ偽りの忌譚なのだ」

リージエスはもう一度本の裏表紙を見た。ジキール「バルンディア。それが嘗て獄將と擲掬され、世界中に未曾有の被害を齎した殺戮者の名前だった。

其の五十　く獄將ジキール（裏）く

我が友の死に哀悼の意を示してはや十数年、私も床に付き、余命も幾ばくもない。ただ一つの心残りは英雄と謳われた我が友ジキールが何故世を震え上がらせるに至ったのか、顛末を知る者がいなくなるのである。たとえそれが世に広まったところで、獄將と揶揄された彼の名誉が回復する事はあるまいが、それでも、唯一人だけでもいい。真実を、彼の痛みを知る者がいて欲しいのだ。

事の始まりはバルンディアが王制廃止を宣言したことから端を発する。その宣言は民衆の圧倒的な支持を以って迎えられたが、同時に君主制を敷いてきた各国の焦燥を招いた。共和制を求める声が自国に飛び火することを、支配者たちが恐れたのだ。

バルンディアはそれから五年もの間、おそらく世界で一番過ごし易い国であった。関所を取り払って国の往来を自由にした結果、市場は活気に溢れ、人々は平和を謳歌していた。

その一方で、周辺諸国では由々しき事態が起きていた。重税を課す国から、夜逃げして居心地の良さそうなバルンディアに移り住む者が出始めたのだ。当初の予想を越えて、その動きは広がっていった。バルンディアはみるみる内に豊かになっていった。労働人口が増えて国の経済が活発になっていくのだから当然だろう。その一方で人口が減った国々は思うような収入が得られず、政策が立ちゆかなくなっていく。事態を重く見た者たちが裏で動き始めるまで、そう時間はかからなかった。

その頃、大陸中では魔道士狩りが蔓延っていた。疑いを掛けられた者たちは迫害から逃れるために、主にカタルスタとバルンディア

の二カ国に集っていた。テルネシア帝国はそこに着目した。魔法使いの疑いを掛けられている者を大勢集めている、すなわち他国へ侵略する準備を進めているのだ、というもつともらしい噂を流した。カタルスタは数年のうちに国内への転居を禁じたが、バルンディアは各国と陸続きであり、地理的な問題もあつて鎖国するには至らなかった。

269年、居場所を追われた魔法使いたちの最後の砦であつた国、バルンディアはテルネシア帝国に扇動された周辺諸国による侵攻の憂き目に遭つた。城下町を制圧され、山城であつたバルンディア城には多くの非戦闘員が追い立てられるように駆け込んでいた。故なく魔法使いの疑いを掛けられた者、或いはその身内たちもその中に含まれていた。多くの難民を受け入れた城では直ぐに食料が底をつき、餓死するものが出始めた。

せめて民の命だけはと武装を解き、僅かな供を連れて嘆願たんがんに赴いたジキール。バルンディアは、陣中の深くに招き入れられた後、同盟国の兵たちに突如襲われた。供の者は殺され、ジキール自身も深手を負い、崖際に追い詰められて深き谷に身を投げた。

それから間もなく、バルンディア城は一気に攻め立てられ、指導者不在の中でまともな抵抗も出来ずに城門が破られた。城内にいた者たちは老若男女関係なく殺され、或いは自決を余儀なくされた。その中には、ジキールの妻にしてバルンディアの元王女、エリス。バルンディアも含まれていた。彼らの亡骸は弔われることなく野晒しにされ、殺戮に興じた者たちは悪しき魔法使いたちを討伐したと言わんばかりに意気揚々と引き上げていった。

それから暫しの間、バルンディア城は死肉を啄む山鴉たちの巢窟となった。来る日も空が黒一色で覆い尽くされていたという話だ。バルンディアを殲滅した国々はその話すらも利用した。邪悪な魔法使いたちの怨念が鴉を呼び寄せているのだと。

とうに死んだと思われていたジキールは、翌々年の271年、バランディアを裏切った同盟国の一つ、エル・クレスに突如姿を現した。顔にこそ辛うじて面影が残っていたようだが、その皮膚は漆黒、手足には鋭い鉤爪を、頭部には二本の鋭利な角を、頭上には天輪を、その背には六枚の黄金色に輝く翼を浮かべていた。

既に人ならざる者になっていたジキールは、エル・クレスの城門前で大地を戦慄させるほどの咆哮を上げた。それをきっかけに力が暴発し、彼の周囲から凄まじい衝撃が迸ったという。小さな輪から広がるようにして巨大な衝撃波を展開し、大地が膨大な摩擦熱によってぼこぼここと泡立ち、城を含むありとあらゆる建築物を粉碎していった。エル・クレスの街は一瞬にして、多くの人々の命と共に灰塵と化した。

事態を慮おもんばかつた帝国や周辺諸国は、既に焼け野原となっていたエル・クレスの街へ三十万を超える連合軍を送ったものの、僅か三夜にして壊滅させられ、二十二万の未帰還者が出た。その力はつとに凄まじく、エル・クレス南方のエストラル山は、その戦いの際にジキールが放った魔法に寄って真つ二つに割られた。

ジキールは人への凄まじい憎しみを隠さず、テレジア大陸を蹂躪し、ただひたすらに破壊活動を行った。およそ十五年の間に、人間だけでも当時の世界人口の二割、のべ三百万の命が失われたとされる。

このまま世界が滅ぶのかと思われた284年、予期せぬことが起きた。封印されていた邪鬼カタロフが南部の地、オールド・グレイブより目覚め、ジキールと交戦を開始したのだ。

何故あの二体が戦ったのかは私にもわからないが、カタロフはジキールの力を奪い取るうとしたのだと推測している。凄まじい戦闘能力と再生能力を誇ったカタロフは、ついにジキールの手で滅ぼされたが、ジキール自身も長きに渡る激闘で相当に消耗していた。

連合軍はこの時を置いて好機は他にないと判断し、翌年に跨って精鋭たちを死地へと送り続けた。そして、285年の1月。絶え間なき玉砕攻撃によって、ついにジキールは斃れた。

その死に際に居合わせた者から伝え聞いたジキールの残した言葉を、ここに記録する。

どうすればよかったと言うのだ。非道なる行いに目を瞑れ（つむ）
というのか。罪人たちの高笑いに耳を塞げ（ふさい）
と言うのか。正義と嘯き（せいぎとせうき）
死者を貶めるような戯言（たわごと）に、口を閉ざせと言うのか。それを受容（うけよう）
する己を許せというのか。

誇りを忘れた愚かなる生き物たちよ。貴様らは既に壊れた存在だ。
悪意の根が断たれることは二度とない。どんなに無垢に見える赤子
であろうと、どんなに義侠心溢れる騎士（ぎせきしん）であろうと、どんなに慈悲
深い聖女であろうと、それはこびり付いた黴（かび）の様に、脈々と受け継
がれるのだ。

貴様らは、貴様ら自身がもつとも恐れるものによってでしか救われぬ呪われた存在。来たる終末の刻まで、せいぜい破滅の輪舞曲（ロンド）を踊るがいい。私にはわかる。いつか必ず、自らの心を失った者が、私のように檻（おり）を抉（こ）じ開ける日が来る。必ず、だ。

私の知るジキールは、純朴で誠実な男だった。分け隔てなく民の為に尽くし、どんな者たちにも誠意を持って応対した。エリスとい

う素晴らしい伴侶を得て、ようやく彼自身の幸せを掴むはずだったそのときに、彼は奈落の底へ突き落された。その憎しみが如何許りかは、彼の変貌が全てを物語っているのではないか。

無論、バランディアの悲劇に一切関わりのない犠牲者たちには心を痛めるほかないが、一番の犠牲者が彼であったこともまた事実なのだ。私は間もなくこの世を去るが、もしこれを目にする者がいたならば、彼の狂おしき慟哭を、心に留めてやって欲しい、そう願うばかりである。

ーレン

ツイ

「ジキールはその純粹さ故に、心が180°反転した時の憎悪は凄まじかったのだろう。どこでそのような力を得るきっかけを掴んだかは今以ってわからぬが、それより問題なのはどんなに少ない可能性であっても、何百万もの者が死んだ悲劇が起こり得る、ということだ。あれから600年以上も経っているから、天災よりも低い可能性なのは確かだが、少なくとも一度起こったことは確かなのだからな」

本が閉じられた音を聞き、ミュールは伏せていた顔を上げながら言った。

「……でもさ、これっておかしくないか？」

「何がだ？」

「だって、そんなにとんでもない力を誇った奴に、おいそれと近づけたとは思えないぜ。面影が残っていたとか、まるでその場にいたようにかかっているじゃないか」

「……うむ、我もそれについては少し考えた。あくまで推測だが、この著作者は討伐隊に加わっていたのだろう。最期を見送った者の中にこのツイーレンという者が混じっていた可能性は高い」

「相手が陥れられたことがわかっていたのにか？」

「たとえ相手にどんな事情があろうとも、家族や恋人を守るためなら幾らでも己の心を正当化出来るものだ。しかしながら、事が終わった後にバランディアの惨劇がほとんど脚色されていくのを目の当たりにし、自責の念に苛まれたのだろう。それでこのような書物を書き残したのだと思う」

リージェスは重々しい溜息を吐き出した。

「……カタルスタが、魔道士狩りを止められなかった理由は？」

「理由はいくつかある。難民の受け入れ過ぎで国の財政が逼迫し、上層部で対立が生じたのが最たる一因だ。身内の恥を晒すことになるが、派閥争いで凌ぎを削っていたらしい。権力争いで忙しくなつて諸外国に構っている暇がなくなったというわけだ」

「今も昔も、変わらないんだなあ」

全く、人の命より金や権力が大切な者のなんと多いことか。リー

ジェスは権力者の進歩のなさに暗澹たる気持ちになった。

「そして、魔法使い狩りの発端となった、邪悪な魔法使いたちの多くが我が国、旧カナン王国出身であったことも起因している。カナン王国を出奔した彼らは大陸各地でその力を振るっていた。その力を行使するのを目の当たりにして、各国の民は暴れ回る少数の彼らではなく、彼らを生み出した国を責めたのだ。あまり派手な行動を取れば、バランディアのように各国から戦争を仕掛けられることになっていたかも知れん。たとえ戦争に勝てたとしても国が著しく疲弊するのは避けられまい。何も生み出さぬ戦争なら避けるべきだと判断したのだろう」

「そっか。あの本が真実だとすれば魔道士狩りがジキールを生み出したということになるけど、その魔道士狩りの発端は心ない者たちが力を振るつたために起きたんだもんね」

ミュールが深く頷いた。

「そして、ジキールの件が収束したあとも問題は尾を引いた。厚顔なる者らは魔道士狩りに際しての教訓を学ばず、カナン王国を滅ぼす計画を立て始めたのだ。ある所からその話が漏れ、その計画は未遂に終わったものの、時の賢王は当然それに憤った」

「……それで鎖国をしたのか」

「うむ、我はそれが国境の封鎖に繋がった要因だと考えておる。勿論、クルートでの召喚魔法失敗の件も有力だがな。ジキールの爪痕が忘れられぬうちにカナンは国名をカタルスタに改め、他国民はカタルスタに一切入るべからず、と一方的に宣言した。その名残が、カタルスタ国境にある厳めしい巨大な関所と橋にある。あそこを通ろうとした者には、徹底して攻撃を加える旨を通達しており、事実、カタルスタは何度かそれをやり遂げているのだ」

リージェスはリーシェと共にカタルスタに入った日のことを、まるで昨日のことのように思い出す。雄大な景色と巨大な橋、或いは門。それにも血生臭い歴史が滲みこんでいたのだ。

「何で、ミュールはこの話を俺にしたんだ」

「覚悟の再確認だ。過ぎた力を持つ者は日の目を見られぬ。そして私が教授する以上、お主は確実にその領域に足を踏み入れることになる。お主が大切に想う者たちのためにも、努々（ゆめゆめ）忘れてはならぬ」

真つ直ぐに自分を見つめてくるミュールに、リージェスは小さく頷いた。

ジキールは、あまりにも不幸だった。それほどの力をもつてしても、きつと力尽きるそのときまで、彼は孤独だったのだ。大切な者が存在しない世界に、果たしてどれほどの価値があるだろうか。

ふとリージェスは、リーシェがいない世界を想像してみた。色を失った世界。温かみのない世界。無邪気に笑う黒髪の少女が傍にいない世界。

考えるまでもなかった。その中で生きていくなんて、寒過ぎて堪えられないだろう。

其の五十一 く使い魔(裏)く

884年11月3日

カタルスタ郊外にある軍専用の魔法訓練場。土のグラウンドに巨大な影が映っていた。シャトルーの浮遊魔法によって宙に浮かべられた巨大な岩が陽光を遮っているのを頭上に見据え、深呼吸を繰り返していたリーシエはゆっくりと目を閉じた。

「……何時でもいいですよ、シャトルーさん」

「わかりました。じゃあ 行きますよー」

> 佇たたずむは峻厳なる大地 瞋恚しんいを滅すは破断<

両手を天に掲げたシャトルーが言霊を紡いでいく都度に、岩の振動が大きくなっていく。皮膚を貫くその音が全身に行き渡るのを感じながら、リーシエは魔力を迅速に練り上げていく。

> 今ここに 契約の楔くさびを打ち立てん<

「ヴァ・シヤカール
韻震！」

シャトルーが上級魔法の詠唱を終えるや否や、巨大な岩に光が幾重にも走り、鋭い切れ目が生じた。次いで浮遊魔法の効果が消失し、線切りにされた石柱が地面に次々と引き寄せられていく。

巨大な質量に空気が引き裂かれ、凄まじい音が鳴り響いた。音の肥大化に応じてリーシエが開眼する。空から迫る石柱の雨を一瞥すると、練っていた魔力を全身に展開し、大きく息を吸い込んだ。

一つ目の岩が目の前に到達するや否や、呼吸を止めたリーシェが素早く二歩前に踏み出す。生じた風圧が首を撫でるのを感じた。細かい破片くらいなら充填で強化した体には通用しない。

頭上から降ってきた石柱の直撃を避けるのとほぼ同時に、三本目の石柱の突端が砕け、顔に大きな破片が飛来。別段取り乱すことなく、殆ど無造作に、充填フィールした手の甲でそれを横に払いのけて後ろに逸らす。次いでくるりと半回転し、大きく一步後退。視界を上から下へ、石柱が通り抜けた。

踏まれる小刻みなステップの音は、岩の雨の破砕音で全く聞こえない。轟音の中に沈黙が生まれている。リーシェは頭上から迫る質量の動きを明敏に感じ取り、落下する岩を避けられる空白をいち早く予測する。その僅かなスペースに体を誘い、そこから離れることを繰り返す。

やがて岩の雨が止み、濛々と舞う土埃の塊に人影が現れる。土埃から抜け出たリーシェは止めていた息を細く吐き出した。元々優れていた敏捷性が充填フィールによって底上げされ、そこに確かな判断力が加わったことにより、リーシェは大小の岩を無傷で潜り抜けることに成功していた。

「充填フィール、予視サイト、共に完璧に近いですね。想像以上の成長振りですー」
己の教育方針に相当な自信をつけたのだろう。満面の笑みを浮かべたシャトルーは戻ってきたリーシェに小さく拍手した。

「うーん、この後の筋肉痛が怖いけどね」
リーシェは黒い髪を撫で付けながら応じた。細かい石灰が髪に付き、普段は黒い髪が所々灰色になっていた。元々、魔法図書館で理論を学んでいたリーシェは即座に実習に移ったため、初期魔法の習得にそれほど時間はかからなかった。その後は、強者との戦いにお

いて必須である充填^{フィール}、そして物の動き、流れを読み取る予視^{サイト}の修練を行っていた。

「では、ちよつと早いですが次の段階に入りますよ」

「うう、ドキドキするなあ」

岩を落とす修行に関しては小さい物から順にやっていったものの、開始当初は殆ど避けきれず、生傷が絶えなかった。ようやく無傷で切り抜けられるようになったのに、と思わないでもなかった。

「大丈夫ですよ。リーシェさんなら何とかかります」

そう言いながらシャトルーは手で魔法陣を描き出す。

「いきますよーっ。天威附^{ディ・ステイネール}！」

魔法陣の中から光が宙に向かって放射されると、シャトルーの頭上に使い魔が現れた。実の所は、元々見えないだけで使い魔はそこに存在しており、それが可視化されたのだ。シャトルーが使い魔を常に従えていることはリーシェも知っていた。

透明な羽を持つ小人のような使い魔は段々と変形していき、それに準じて大きくなっていく。最後には、リーシェと同じくらいの人型になり、地上に降り立った。

「な、何……これ」

「合成魔法です。魔力を具現化して作った使い魔を更に強化してみました。術者の命に忠実に従う下僕で あだ！」

ポカリ、とシャトルーの頭を殴ったのはその使い魔だった。どうやら下僕という言葉に反応したようだ。

「術者の命に忠実？」

リーシエが頭を押さえながらしゃがんでいるシャトルーを不安げに見る。

「うう、術者の魔力が大き過ぎると自我を持ってしまつのです。気を抜くと反抗したりしますので取り扱いには注意が必要です」

天輪と大きな羽を持つ、薄い光を帯びた女性。それがシャトルーの作り上げた思念体だった。基調はライトイエロー。輪郭がぼやけているが、そんなことが気にならないくらいに神々しい姿だった。

「……この人って無限に呼び出せるの？」

「人ではなく、アイルと意志力エニールの混合体というべきでしょうか。少し説明がややこしくなりますが、私の感覚とその子の感覚はちゃんと繋がっています。つまり、この子がダメージを受ければ、術者である私も少なからずそれを受け負ってしまうのです。勿論、死ぬことまではありませんけれど。集中力を要する魔法なので、どのみち疲弊した状態では詠唱できませんし、そこはあまり問題にはならないと思います」

「なるほど……」

「こんな魔法があつたのか、とリーシエは感嘆した。

「触ってみてもいいですよー」

「え、本当に？ それじゃあ、ちょっと失礼しまーす」

リーシエは恐る恐るといった感じで、突っ立っている使い魔の肌を指先で確かめる。ぷに、と指の腹が二の腕に埋もれた。質感からすると、本当に実在する人間みたいに思えた。

「キヤバシテイ器が元々多ければ相

当に強力な守護者を作ることが出来ますよ」

「…………じゃあ、相当強いつてことね？」

「ふふ、試してみましようか。モーニヤ、ちゃんと手加減するのですよー」

そう言ったシャトルーが手を振り翳した途端、使い魔はリーシエに猛然と走る。

「ちよつと、いきなり!？」

リーシエが咄嗟に後ろに跳躍するが、使い魔も合わせて跳躍する。驚くべきことに相手の方が一段上のスピードだった。

距離を詰めてくる相手に対し、逃げ切れないと察したリーシエは着地すると同時に充填^{フィール}を行使、即座に剣を抜き放つ。

「…………嘘っ」

予想外に、硬質な音が返ってきたことにリーシエの目が見開かれた。充填^{フィール}で強化されたはずの剣撃を、使い魔は腕で易々と受け止めてしまっていた。リーシエがうるたえた一瞬の隙を見逃さず、剣を受け止めていた使い魔の手が横に振るわれた。

「きゃあっ!」

顔を強かに叩かれたリーシエが横に吹っ飛んだ。地面を5mほど擦って細かい砂埃を巻き上げ、ぐったりと横たわる。

流星のシャトルーも顔が蒼白になる。

「あ、あわわわわ。や、やり過ぎですよモーニヤ! 手加減しなきゃ駄目だと言ったでしょう!」

「うう……………いったあ……………」

こ、これで手加減……………してるのかな。

充填フィールを使っていなければ、首の骨が折れていたかも知れないほどの一撃。赤みの差してきた左頬を抑えながら、リーシェはよろよると立ち上がった。

「そ、そのはずなんですけれど。本気なら岩をも砕いてしまっはすですから」

「び、びっくりした。さつきは普通に人間みたいな肌の感触だったのに、剣を受け止めちゃうなんて」

「解明されていないことも多いのですが、使い魔は魔力の硬質化、軟質化が自在に出来るみたいです。それから、自我を持たせることが出来れば、魔法を使うこともできるんですよ。欠点は、使役している間は術者が他の魔法を使えないことです」

そういうシャトルーにリーシェは引き攣つった笑みを浮かべる。こんなに強いのを自在に動かせるなら、その欠点を補って余りある魔法だ。

少なくとも、あの鬼人オーガに近い動きを見せたのは確かだった。この動きについていけるようになれば、おのずと対抗する力も身に付くだろう。

今度は絶対、私の力でリージェスを助けてみせるんだから。

リーシェは腫れてきた頬から手を放し、再び傍らに落ちていた剣を拾いなおして口を開く。

「もう一回、お願い。動きは今くらいでいいから、もうちょっとだけ手加減してくれると嬉しいんだけど」

「わ、わかりましたー。では、いきますよー」

顔は殴らないように制御しなきゃいけませんね。

シャトルーは微細なコントロールに気を配りつつ、再び使い魔を使役した。

其の五十二　く消えた賢人（裏）く

884年11月7日

リージェスはミュールに連れられてカタルスタの北、山間にある盆地に赴いていた。そこは巨大な休火山の火口であり、歴代の賢王が後を継ぐ者に対して魔法を伝授するのに使っていた場所だということだった。辺りには動物の気配はおろか植物もろくに生えていない。見渡す限りが灰色と黒の岩山だ。

ミュールは攻撃魔法の扱い方について一通りの説明を終えると、おもむろに小さな手の平を後方に聳え立つ岩山に向けた。

我　大いなる意志と疎通をはかる者なり　炎を従えし英霊よ　大氣を糧として己が身を焦がし　その胎に埋めよ

その小さな手の前に深紅の小さな炎が螺旋を描きながら中心へと集う。炎球が段々とその身を縮めていき、反して燃え盛る音は大きくなっていく。

「エクス・フレール？ 焔脈！」

打ち出された、というのが適当だろうか。ミュールの手の平に収まりそうなほどに縮んでいた炎球が風圧にたわみながらも一直線に岩山へと迫る。その中心部に触れた途端、球体が爆ぜた。

刹那、全方位に衝撃波が駆け抜け、リージェスが無意識に目を腕で庇った。巨大な岩山が中心から一気にヒビ割れてゆき、その裂け目からは青色の炎が噴出した。次いで青色の炎は白へと変化し、凄まじい轟音と共に大爆発を起こした。砕けた大小の燃え盛る岩が空

へと吹き散らされた。重力に従い、空気を引き裂く音を立てながら続々と地に落ち、溶けてゆく。

パラパラと、細かな砂や灰が雨のように降り注いでいた。リージエスが顔の前から腕をどけると、岩山は跡方もなく吹き飛んでいた。小さな火山が噴火したようなその光景に、思わず頬をひく付かせた。これほどの破壊力なら頑強な城壁をも容易く破壊してしまうだろう。

微動だにしないリージエスを尻目に、ミュールがどんなもんだと言わんばかりに鼻をぴくぴくさせた。

「ま、こんな物だな。これは火の最上級魔法に値する。これより上となると神格級魔法マブスベトラと呼ばれるものがある。ジキールはそれをことも無げに使っていたそうだ。文字通り、神が力を行使するかの如く。興味はあるかの？」

「いや、身に余る」

即座に首を振り、目を瞑ったリージエスに、ミュールが歯を見せて笑う。

「そなたは理解が早くて助かる。あれほどのデザートを作るだけのことはある」

「それは関係ないんじゃない……」

そう言いかけたリージエスを無視し、ミュールは指を立てながら説明を始める。

「さて、魔法習得の難易度を大雑把に10段階で分けるとする。あくまで目安だが基礎魔法が2、上級魔法が5、無詠唱魔法が7、最上級魔法が9ないし10。それに」

「ミュールは僅かに顔をしかめながらも言葉を続ける。

「禁忌魔法と呼ばれるものがある。効果や威力があまりに非人道的なので、カタルスタ王宮の地下室で厳重に保管されており、門外不出となっておるものだ。いずれも難易度は8以上。先ほど触れた神

格級魔法については、難易度で言えば粹の外だな。現在使える者は我を含めておそらく三名」

「三名？ そんなとんでもない魔法を使える人が他に二人も？ もしかして今の賢王が」

「いや、アグストウラには、ああ、これは今の賢王の名だが、伝えではおらぬ。伝授される資格は十二分にあるだろうが、今は大事な時期だしこれ以上余計な考え事を増やすわけにもいかぬのでな」

「でもさ、そんな魔法の存在を俺なんか教えちゃっていいのか？俺が悪用しちゃうかもしれないぜ」

ミュールは軽く鼻で笑う。

「悪用する者はいちいちそんなことを確認すまい。それに安心せい、お主如きに使えるはずもないからの」

リージェスはその物言いに少しムツとしたものの、それが正しいことを理解していた。

「……ちえ。じゃあ、もう二人って言うのは誰なんだ？ ああ、シヤトルーさんか」

「うむ。一人は我の馬鹿弟子だ。あやつは元々ロディエル、前賢王の愛弟子でな。我が教えたわけではなく、奴の意志を継承する形になったというわけだ。ま、あやつは余計なことをあまり考えぬからな」

「なるほど。確かにシヤトルーさん、人畜無害って感じがするな。もう一人は？」

その問いに、ミュールの表情が若干暗くなる。

「……もう一人はウルグースティードという男だ」

聞き覚えのない名前にリージェスが首を捻った。

「前賢王ロディエルの義弟にして元賢王候補。優秀にして快活な男だったが、娘夫婦一家が殺されてから誰に告げることもなく何処かへ姿を消した」

「殺された、だって？ 犯人は？」

「ウルグによって殺された。あらましを掻い摘んで言うと、カタル

スタではなくテルネシアで起きた事件であつた故に、犯人たちは帝国兵に捕まり、メルトラノス城に幽閉された。ところが、その者たちの中に帝国のさる貴族の子弟が混ざっていたようでの。裁判は一向に進まなかつた」

「……そつか、それで」

「うむ、人伝でわかつたことだが、ウルグは延々と続く裁判に業を煮やし、自らそこに押し入つたそうだ。……どうしても自分の手で敵を討ちたかつたのであろうな。娘夫婦は無残な状態で発見され、孫に関しては遺体すら見つからなかつた。察して余りある怒りだろうよ。だが、ウルグはその時までカタルスタの要職に就いておつた。テルネシアの法を無視して私的制裁を加えたことは断じて許し難し、と帝国に咎められた。あやつも全てを理解していたのだろうな。表立つてこの国に戻つてくることはなかつた」

「そんなことが……」

「その後、程なくしてロディエールが賢王の座に就いた。当時はウルグとロディエール、それに今大臣をやつておるレドネーという男が有力候補だつた。レドネーは腕こそ確かだが、何というか少々性格に難のあるやつでな。票を掻き集めようと必死に裏工作していたようだが、元々の評判が評判であつたから徒勞に終わった。まー、辛うじて根っこまでは腐つておらぬのが救いといえれば救いかの。ロディエールもウルグさえいれば、本当は身を引くつもりだつた。そう言つておつた」

「その後、ウルグつて人の消息は……？」

「少なくともカタルスタにはおらぬ。テルネシアの何処かに潜伏しておるのだろう。病氣一つしない男だつたし、まかり間違つても殺されるような奴ではないからな」

「強かつたんですか？」

「……そんなレベルではない。奴は歴代の誰より魔法の才に愛された男だ。世界広しと言えども、こと魔法に関して奴の右に出る者はおらぬよ。やろうと思えばジキールの真似事すら出来かねん。防御

魔法なら私もそうそう負けぬと自負しているが、絶対に戦いたくはないな」

リージェスは背中に伝う冷や汗を感じながら、先ほどまで岩山があつた場所を見た。ミユールより更に上の領域と言われても、とそう言いたげな顔をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4926m/>

英雄達の悼詩

2011年2月21日16時59分発行